俳諧歳時記

秋

俳諧歳時記

秋

松瀬青々
穎原退藏

國富信一
武田祐吉
山本信哉
寺尾新
牧野富太郎

改造社

例言

一、本書は「俳諧歳時記」秋之部とす。

一、秋之部に採用せる季題選定の範圍は、立秋より立冬の前日迄を基準とし、之に陽曆、八月・九月・十月、及び陰曆、七月・八月・九月を割り當て、年により立秋・立冬を前後する季題の採擇は慣例に依れるも、特に異見あるものは他季との重複を意識して秋之部に編入せり。尙、行事或は祭日の日取は、主として陽曆を採用せるも、引用古書中の日附、及び解說中に於ても過去にのみ存在せしもの、又現代に於て主として陰曆にて行はれ居るもの等は、便宜陰曆に依れり。

一、本書に收載せる季題は總數八百餘、新季題及び過去にのみ存せる季題をも殘らず網羅し、地理的にも全土に亙る樣心掛たり。

一、季題の分類は、先づ、時候・天文・地理・人事・宗敎・動物・植物の七部門に大別し、各部門の順序は、實際句作上の便宜を考慮して、慣例による分類法を主とし、之に科學的見解をも參酌して案配せり。

一、傍題中にて、或は獨立せる季題として他部門に分類すべきものにして、特に獨立する必要を認めず、又は同一箇處に一括して說くを便利とするものは、傍題として存せり。例へば、植物の部の季題の傍題の下に（人事）の印あるものは人事の部門に屬すべきものなるを示す。

一、各季題の下にある、初・中・晩・三秋は、それ〴〵其の季題が秋季の中にても特に、初秋（陽曆、八月 陰曆、七月）・中秋（陽、九月 陰、八月）・晩秋（陽、十月 陰、九月）、及び三秋は秋全期に屬するものなることを示す。尙、解說及び實作注意の後端に附せる（古）・（新）は其の季題が現時行はれざる古季題或は近時に至つて採用されたる新季題なるを表す。

一、本書に收載せる例句は、句作上の便宜を考慮し、名句集を兼ねしむるため、古今著名俳家の句集を措摭して、從來の例を遙に凌ぐ多數を收載せり。而して排列は便宜主要傍題每に分類し、各々略年代順に從へり。

一、本書の執筆分擔は左の如し。

季題解說・實作注意・例句	松瀨青々
古書校註・參考	穎原退藏
時候・天文	國富信一
人事	武田祐吉
宗敎	山本信哉
動物	寺尾信
植物	牧野富太郎

昭和八年八月

序

作句は季題より入る、季題の雰圍氣に浸る所に作句して見たいといふ心持が起る。歳時記は辭書の働きをするよりも、これを繙いて居ると作句の心持が慫慂さるゝ所にその用が多い。さういふ風な效果を成るべく有らせたく私は希望してゐたのである。例句を多く載せて諸家を網羅したる全句集たらしめる事が改造社の企圖で有つた。

季題の取扱に關して私見を加へたものも少々はあるが、大體は歳時記栞草をはじめ、近時流布の既成各歳時記より引用し、また雜誌中より轉載させて戴いた部分が多量にある。是はそれ〴〵の編者各位に對して深甚の謝意を表する次第である。歳時記編纂が最初思ふてゐたやうな易々たるもので無い事も、やつて見て知り得た。思はざる遺漏や過失が無いやうにとは努めたが有るかも知れない。兎に角にこの編纂を成し遂げたのは安井小洒、横山蜃樓、戸田鼓竹三子の大なる助力に依つてで有つた。これが作句壇場に何程かの貢獻と成るならば私共四人は本懷の至りである。

昭和八年八月

高師濱　倦鳥社に於て　松瀨青々記す

例言

一、古書校註として引用した書は、ほゞ前篇夏之部と同一であるが、なほ方竟千梅の「篗纑輪」（寶曆三年刊）を引用した事が多い。また必要に應じてその他二三の書も參酌したが、すべて周知のものであるから、一々こゝにあげる事を略する。

一、引用書はすべて原本によつたが、滑稽雜談だけは國書刊行會の活字本によつた。

一、所引の文中假名遣の誤は正し、送假名・濁點等の不備は適宜之を補つた。又漢文は假名交り文に書改め、假名を漢字に直した箇所も多い。要するに專ら通讀に便ならしめようとしただけで、他に私意を加へた點はない。

一、引用文中あまり重要でない部分は適宜省略した。その場合は上略・中略・下略等とことわつたが、通讀上差支のない所はこれも一々ことわらなかつた。

一、滑稽雜談・年浪草等に引用された日次紀事・和漢三才圖會等は、なるべく原本を參照する事にしたが、日次紀事は原版本が得られないので、珍書同好會複製本によつた。

一、註は紙面の制限上すべて簡略に從つた。

昭和八年八月

潁原退藏識す

部類目次

目次

時候

天文

地理

人事

宗教

動物

植物

秋之部

時候

秋（三秋）

秋　少皞　蓐收　白藏　金商　明景　朗景　白帝　素秋　素商　高
秋　商秋　西皎　金秋　爽節　廩秋　西候　商顥　收成　火旻　爽
籟　三秋　九秋

古書校註

【年浪草】〔秋〕漢書律曆志に曰、少陰は西方、西は遷也。陰炁遷つて物を落す、時に於て秋となす（下略）。〔少皞〕月令に曰、その帝は少昊金天氏。註に云、少皞は白精の君。○淮南子に曰、少昊その佐は蓐收、矩を執りて秋を治む。〔蓐收〕月令に曰、その神は蓐收。祠令に曰、蓐（肉）收從祀、蓐收は金神也。註に云、蓐收は金官の臣少皞氏の子該也。〔白藏〕爾雅に曰、秋を白藏となす、一に曰收成。註に云、氣白くして萬物を收藏す。故に白藏と曰ふ。〔金商〕秋は五行に金に屬し、五音に商に屬す。故に金風・素商の稱あり。〔明景〕元帝纂要に曰、秋景を朗景といふ。朗は明と義同じ。〔爽籟〕秋聲をいふ也。

【滑稽雜談】○白藏○白帝、索隱曰、文耀鉤云、西宮は白帝、その精白虎。○三秋、梁の元帝纂要に曰、秋は三秋・素秋・高秋・商秋・九秋と曰ふ。○西皎○金秋○爽節○廩秋○西候○商顥○收成○火旻。

季題解說　陽曆八月の立秋より、十一月立冬までの間をいふ。舊曆にて五日を一候とし、三候を一氣とし、一年を二十四氣七十二候に分ち、其うち、秋に屬するは、六氣、十八候なり。（立秋—參考、參照）而して陰曆七月（文月）・八月（葉月）・九月（長月）を以て秋となす。

實作注意　アキは飽なり、百穀成熟して、人の食物充足飽滿する意にて名づくとせり。又アキを開明の意とし、秋の天は晴明なるが故に明の意にとるとなす。又アキは緋なり、草木すべて紅葉するを以て云ふともあり。秋の異名に

爽籟　謂秋聲也。〔增韻〕爽淸快也。〔爾雅〕吹物有聲曰籟。
素商〔梁元帝纂要〕秋曰素商、亦曰高商、
素秋　抱朴子、素秋厲肅殺之氣。

等（其の他、古書校註、參照）あり。何れも秋の抽象的概念を云ふものなるが、俳句作の對照としての秋は、物に觸れて起る感じ其ものなり。されば俳句の世界は流動的にして、抽象的概念の世界を超越して廣大なり。古來の作例に就て見れば自ら領得あるべし。又次に揭ぐる句は季題の分類としては「秋之雜」

とす。〔[illegible]〕立秋は千秋樂なり、律の調は龍田姫なり。

例句

見渡せば詠れば見れば須磨の秋　芭蕉（[illegible]）
秋十とせ却て江戸を指古郷　同（甲子吟行）
おくられつおくりつ果は木曾の秋　同（曠野）
旅懐
此秋は何で年よる雲に鳥　同（笈日記）
故人にわかるる
木曾路行ていざとしよらん秋ひとり　蕪村（五車反古）
古人移竹をいたむ
去來去り移竹移りぬいく秋ぞ　同（蕪村句集）
須磨寺にて
笛の音に波もより來る須磨の秋　同（同）
身の秋や今宵をしのぶ翌も有　同（秋風六吟歌仙）
打よりて後住ほしがる寺の秋　同（蕪村遺稿）
雲やどる秋の山寺灯ともれり　子規（全集）
禪寺やさぼてん青き庭の秋　同（同）
灯火の興ある秋や葵橋　青々（妻木）
捨人や木間の秋にこちら向く　同（同）

文月（初）

ふづき　文披月　棚機月　七夕月　女郎花月　秋初月　涼月　親月　餞月　餞暑　蘭月　蘭秋　肇秋　孟秋　桐秋　相月　爽則　少皡　蓐收　首秋　上秋

古書校註

【年浪草】滑稽類書に曰、七月は申に建す。孟秋は日月鶉尾に會して斗申に建するの辰。〔文月〕滑稽現假抄に曰、此の月七日たなばたにかすとて文どもをひらく故に文ひろげ月といふを略せりと。○文月を略してふつきともいふ。〔七夕月〕藏玉　鵲のよりはの橋もこゝろせよ七夕月の頃まちえたり　家隆。〔女郎花月〕同　七夕のちぎりの色にたぐへてや名を得し月も女郎花月　顯昭。〔涼月〕禮の月令に曰、孟秋の月涼風至る。〔盆秋〕經に曰、毎年七月十五日父母の爲に盂蘭盆を設けて十方自恣の僧に供す。〔相月〕爾雅に云、七月を相となす。疏に云、七月炭を得るときは則ち窒相と曰ふ。〔桐秋〕淮南子に曰、一葉落ちて天下秋を知る。（）〔蘭月・蘭秋〕纂要に曰、七月を首秋・上秋・肇秋・蘭秋といふ。○月令廣義に提要抄に云、蘭月云々。〔親月〕和爾雅に曰、この月諸人親の墳墓に詣る、故に親月といふ云々。〔餞暑〕暑の去るを送る意なり。〔爽則〕歐陽修が秋聲の賦に曰、夷則は七月の律たり。商は傷也。物既に老いて悲傷す。夷は戮也。物過盛して當に殺すべし。〔肇秋〕纂要に曰、七月を首秋・上秋・肇秋とい

ふ。

【參】○【滑稽雜談】にはこの外否月・大晉・開秋・大陰月・流火・めであひ月・めづら花月・七夜月等の異名をあぐ。（一）淮南子の原文には「見一葉落而知歳之將暮」とあり。

季題解說 陰暦に於て三秋の初めの月をいふ。

實作注意 普通に文月＝ふづき、此月七夕に供すとて文どもを披く故に、文ひろげ月といふを略してかくいふ。又棚機月＝女郎花月ともに同じく七夕に關する月故名づくともいひ、其他に涼月＝親月＝餞月＝餞暑＝蘭月＝蘭秋＝肇秋＝盆秋＝桐秋＝相月＝少緯＝孱收など漢名種々あり。【參照】八月

例句 ふみ月

文月や六日も常の夜には似ず　芭蕉（奥の細道）

文月や陰を感ずる鬮の内　其角（續の原）

三遷の教に慣いて、七ツになりける娃を寺への使せたれば、一月ありて七夕に歌ありけるをいとはしみて

文月や産るゝ文字も母の恩　同（蕉摘）

七月や地獄の釜も秋の風　許六（初便）

七月やまづ粟の穗に秋の風　同（風俗文選犬註解）

須賀川諏訪宮

文月に神慮諫めん硯箱　桃隣（陸奥鵆）

七日朝日

改まる秋も目出度し卷暦　荷兮（柱暦）

文月や空に待たるゝ光あり　千代尼（千代尼句集）

文月の返しに落る一葉かな　同（同）

文月や背無代りの草なぶり　梅室（梅室家集）

立秋（初）

秋立つ　秋來る　來る秋　秋に入る　秋さり　秋を迎ふ　今日の秋

古書校註 【山之井】きのふの空にかはる氣色もあらねど、吹く風もひやりと今朝は身に知られ、よだるかりし手足もたち、おほひきさる臉も昔寢を忘れ、草の朝露も、夕の虫の音も、やう〳〵淋しさのをさなだち（一）と聞きなされ、桐も柳も一樣に、舟用する池の心ばへなども連れ、文月と云ひては、うは書、筆だてなどの詞をも結び、又踏むといふにそへてもいへり。立秋といふ題も、かの立春の心にて知りぬべし。多くは通はしても言ひなせり。【年浪草】節○月令廣義に曰、孝經緯云、大暑十五日斗坤に指すを立秋となす。七月の節。【栞草】秋さり。秋の來し事也。

【註】（一）秋の淋しさの初めといふ程の意。

季題解說 大暑後十五日目にあたり、卽八月六七日頃に當る。此日より秋に

入る

實作注意　秋立つ＝秋来る＝秋に入る＝秋さり等は、秋らしくなることを云ふ。鬼貫の「ひと＝言」に「秋立朝は、山のすがた、雲のたゝずまひ、木草にわたる風のけしきも、きのふには似ず。心よりおもひなせるにはあらで、をのづから情のうごく所なるべし」とあるは味ふべし。**參照**　秋アキ　今朝ケサノ秋アキ

例句

秋立つ

きのふまで水にたてしが葛の葉の　宗因（梅翁宗因發句集）

秋立つやはじかみ漬も澄みきつて　來山（今宮草）

　筥張子を詠む

手なし坊又もや秋のたつか弓　同（同）

　世を千年ととれとは大福長者の言葉

秋立つとゆふべも知らずたはひもの　同（續今宮草）

秋立つと夕暮月やつひ三日　同（同）

　來山元として

立秋や白髮も生えぬ身の古び　同（同）

ひらひらと木の葉動きて秋ぞ立つ　鬼貫（鬼貫句選）

心略ホマ起て秋たつ風の音　同（同）

そよりともせいで秋立つ事かいの　同（同）

　江戸より京に歸りて

秋立つや富士を後ろに旅歸り　同（七車）

秋立つや花の初音の忘れ草　同（同）

　よろこびを述ぶ

秋や今朝立つを眞袖の三ツ柏　同（同）

宮の嗅秋立つ森の陽炎や　同（同）

　出雲民風水、東武に行なんとて、京に上りけるに逢ひて

八雲立つ京に秋立つ富士に立つ　同（同）

秋立つや鷹の﨔毛のさし殘り　浪化（續有磯海）

秋立つと言へばや今朝は瓜の老　同（射水川）

三吉野はいかに秋立つ貝の音　破笠（曠野）

秋立て干瓜辛き雨氣かな　及肩（あめ子）

立つ秋に我帷子の縮みけり　智月尼（前後園集）

秋立つや竹の中にも蟬の聲　素覽（笈日記）

立秋の暗がり出づる寢顔かな　尾頭（鳥の道）

秋立つや朔日汐の星しらみ　卯七（西華集）

荒海あらうみの秋も立けり海月の穗　素行（艸之道）

上弦ゆみはりのちらりと見えて秋立ぬ　許六（正風彦根躰）

虫干の油斷に立つや秋の風　也有（蘿葉集）

朝顔に秋は立けり明借家　同（同）

ひや〳〵と手に秋立つや釣瓶繩　同　（同）
秋立つや嚔迄のはやり風　同　（同）
秋立つや昨日の昔有の儘　千代尼　（千代尼句集）
秋立つやはじめて葛のあちら向　同　（同）
秋立つや風幾たびも聞直し　同　（同）
秋立つや何に驚く陰陽師　蕪村　（蕪村句集）
秋立つや素湯香しき施藥院　同　（同）
照雨や我に秋立つ思ひあり　同　（俳諧發句題叢）

淺草にて
秋立つや店にころびし土人形　闌更　（半化坊發句集）
馬買の小笠に秋の立つ日かな　白雄　（白雄句集）
梅牡丹萩劣らずも秋の立つ　同　（同）
草よ木よ今朝秋立つと人の言ふ　同　（同）
刈草の蘗に秋の立つ菴　同　（同）
秋立つ日雨の降けり萱が軒　同　（同）

病後
つれなしや秋立つ頃の油旱　同　（同）
忘れては秋立つ朝な〳〵かな　蓼太　（蓼太句集）
秋立つや一むら雨の雫より　同　（同）
秋立つや雲は流れて風見ゆる　樗良　（樗良發句集）
秋立つや宵の蚊遣の露じめり　几董　（井華集）
秋立つや更に更行く小田の泡　召波　（春泥發句集）
すゞろ立つ秋や翁が珠數の音　大魯　（蘆陰句選）
秋立つや鯉の脊見ゆる水の面　移竹　（乙御前）
ちゝめくや秋立つ竹の濡雀　士朗　（枇杷園句集）
立秋も誠しからね六日まで　乙二　（松窓乙二發句集）
秋立つや田の草取を呼子鳥　巣兆　（曾波可理）
秋立つや身はならはしの餘所の窓　一茶　（旅日記）
秋立つやあつたら口へ風の吹く　同　（七番日記）
秋立つや隅の小隅の小松島　同　（株番）
立つ秋は風の咎でもなかりけり　同　（九番日記）
秋立つといふ斗りでも足かろし　同　（一茶新集）
秋立つや驚かれぬる我鼾　梅室　（梅室家集）
立秋や涼しかれとて灯も置かず　蒼虬　（蒼虬翁發句集）
秋立や堪忍のなる庵の水　同　（同）
秋の立つ日より芒は水の上　同　（同）
立つ秋やすいと眼に入る鐘の聲　同　（同）
秋立つ日鳥に魚を取られけり　子規　（全集）

秋立つ

砂濱で波をさら／＼と秋立ちぬ　子規（子規句集）
淺間より秋立つ雲の戻りけり　虚子（明治六學全集）

秋來る

來る秋や住吉浦の足の跡　來山（今宮草）
來る秋を帆にふくんだはどこ船ぞ　同（續今宮草）
なんで秋の來たとも見えず心から　鬼貫（鬼貫句選）
秋來にけり耳をたづねて枕の風　芭蕉（六百番發句合）
秋や來る紙捻やまかふ鼻の穴　北枝（加賀[illegible]）
來る秋は風斗りでもなかりけり　同（北枝[illegible]）
秋來ぬと讀風通ふ青田かな　同（[illegible]）
來る秋に並べて見たや柔の丈　同（淺人水[illegible]）
桐の葉に蒸されて蓋は秋も來ず　野坡（小柑子）
夕顔やかい曲るほど秋は來る　同（[illegible]丸[illegible]）
　なにがありとて
來る秋のかつ／＼見ゆる瓜田哉　句空（西の雲）
秋來ぬと老に鳴子や枠（かせ）の音　也有（蘿葉集）
秋來ぬと聞や豆腐の磨の音　同（同）
秋來ぬと合點させたる嚏かな　蕪村（蕪村句集）
蜩の今朝しも鳴きぬ秋は來ぬ　曉臺（曉臺句集）
　獅子佛生あり
秋來ぬと知らぬ狗が佛かな　一茶（一茶發句集）
秋の來て出來たやうなる入江哉　梅室（梅室家集）
來る秋や親しき薩持つ心　蒼虬（蒼虬翁發句集）

秋に入る

初夜と同つ爭ふ秋になりにけり　來山（續今宮草）
先づ秋を知るや流の底の魚　文鳥（句毛序）
是は扨あの松風が秋さうな　梶女（千鳥掛）
秋知るや昔家も樹の枕より　也有（蘿葉集）
○秋なれや木の間／＼の空の色　同（同）
何となく秋も一日過ぎにけり　闌更（半化坊發句集）
目に見えぬ秋に心の弱りかな　樗良（樗良發句集）
華ながら秋と成けり池の蓮　大魯（蘆陰句選）
松の蟬啼／＼秋に移り行く　青蘿（青蘿發句集）
はや秋の柳をすかす朝日かな　成美（成美家集）

今日の秋

　秋の心を
灯ともすも先づ珍しや夜の秋　同（同）
汁好の嬉しき秋に移りけり　同（同）
松の露落て秋知る獨りかな　士朗（枇杷園句集）
草花を畫く日課や秋に入る　子規（子規句集）
[illegible]寒を機に立けり今日の秋　也有（蘿葉集）
折る指も今日から秋ぞ百日紅　同（同）

芝前の節拍子冴えて今日の秋　曉臺（曉臺句集）
今日の秋死とも聞きし人に逢ふ　同（同）
今日と言ひし秋は今宵の五位の聲　同（同）

【參考】支那では冬至を起點として一年を二十四分し、之れを二十四節と稱して夫れに一々名稱を附してある。卽ち之れによつて大抵其の地方の氣候が判る樣に仕組んだものである。而して二十四節は一つ置きに節と中とに分け一ヶ月は節から節迄とした。我國では天保十四年以後に之れを少しく改めて、一年を二十四等分する代りに太陽の軌道を二十四等分したものを用ひて居る。

此の樣な分け方では季節を區分すると云ふ意味からは宜しいが太陽の軌道が楕圓であるために季節間の間隔が不等になる。又支那曆では冬至を曆の起點にして居るが我國の曆では夫れから四十五日后の立春を正月節としてある。故に立秋は立春から十三番目の節に相當する。而して立秋から立冬迄を秋としてある。秋分は丁度此の中間に相當する。

今秋季中の各節季と其の名稱を擧げて見ると左の六節になる。

節氣	名稱	太陽黄經	陽曆日取（概算）
七月節	立秋（涼風至、白露降、寒蟬鳴）	一三五度	八月八日
七月中	處暑（鷹乃祭鳥、天地始肅、禾乃登）	一五〇度	八月二十四日
八月節	白露（鴻雁來、玄鳥歸、群鳥養羞）	一六五度	九月八日
八月中	秋分（雷始收聲、蟄虫坏戶、水始涸）	一八〇度	九月二十三日
九月節	寒露（鴻雁來賓、雀入水爲蛤、菊有黃華）	一九五度	十月九日
九月中	霜降（豺乃祭獸、草木黃落、蟄虫咸俯）	二一〇度	十月二十四日

各節氣の名稱は其處の氣候を表はすものであるが我國の如く樺太から臺灣迄廣緯度に亘つて居る國では其の節氣の名稱に相當する氣候を表はさぬ所があるのは致し方がない。然し東京あたりでは稍此の節氣と氣候が一致して居る。

因に西洋では秋分から冬至迄を秋として居る。然し一般には此の分け方も不便故四季は月によつて分ち、北半球では九、十、十一の三個月を秋とするが、南半球では三、四、五の三個月を秋としてある。

處暑（初）

古書校註

【年浪草】 中○月令廣義に曰、立秋十五日斗中に指すを處暑とす。言ふ心は濟暑將に退伏せんとして潛る處也。處は上聲止也（一）。暑氣止息する也。是七月の中也。

註（一）處の字は上聲にてよめば止の義となるなり。

季題解說 陰曆七月の中、極暑將に退伏せんとする時にして、立秋節より十六日目、陽曆にて八月二十二三日に當る。参照 立秋

八月（初）

季題解說 太陽曆一年十二箇月の第八に當れる月なり。此月は略舊曆の七月に相當するが故に三秋中の初秋に屬す。但し此月七日立秋以後の事にして其以前は夏の季なり。舊曆にて七月の異名文月の季節にほゞ同じ。参照 文月、葉月

例句

八月　八月を風に淡路の船がかり　子規（全集）

八月の太白低し海の上　同（同）

葉月（中）

月見月　秋風月　草津月　木染月　濃染月　紅染月　萩月
竹の春　燕去月　雁來月　仲の秋　仲秋　南呂　壯月　桂月　中律
難月　中商

古書校註

【年浪草】 潜確類書に曰、仲秋は日月壽星に會して、斗酉に建するの辰。○〔葉月〕とは此の月や肅殺の氣生じ、百卉葉を落す、故に葉落月といふ。今略して葉月と稱す。○又一說𣑥月と書く。又八月の事にして月の字に嫌はず。𣑥來と書く、雁の始めて來る心なり。〔南呂〕律○月令廣義に曰、南は任也。呂は助也。言ふ心は陽氣なほ妊む事有りて陰を生じ、陽を助けて功を成す也。〔仲秋〕月令に曰、八月を仲秋となす。〔竹春〕竹譜に曰、竹は八月を以て春となす。〔壯月〕纂要に曰、八月を中商となし又壯月といふ。〔桂月〕纂要に曰、八月また桂月といふ。○桂月といふは桂花の開く月なればなり。今の木犀も亦桂の一つなり。〔中律〕莩環（一）に出でたり。出處未詳。月令に律は南呂に中る。この略か。纂要に八月中秋、亦中商といふ。是にや。〔難月〕莩環に出でたり。○唐類函に曰、八月には乃ち儺して以て秋氣を達す云々。儺はおにやらひ也。儺月の誤りにや。〔秋風月〕藏玉 荻の葉も露吹亂す音なりや身にしみそめし秋風の月 定家。〔月見月〕同 名にしおはゞ秋のなかばの空晴れて光りことなる月

と見るかな　長明。〔雁來月〕月令に曰、仲秋の月鴻雁來る。又八月を燕去月といふ。

註 （一）溝口竹亭の著はせる俳諧の作法書。古來汎く行はれたり。○【滑稽雜談】にはこの外桂秋・柘月・橘春・南鐘・闔戸・四陰・さゝはなさ月・草津月等の異名を、又【滋鹽草】には剝棗・迎寒等の異名を載す。

季題解說 陰曆に於て三秋の仲の月をいふ。

實作注意 葉月此月粛殺の氣を生じ百卉葉を落す故に、葉落月といふを略してかくいふ、月見月＝秋風月＝雁來月ともに此月の風物に關して名づく＝仲秋ともいふ。其他南呂＝中律＝壯月＝桂月＝難月などの漢名あり。

參照 八月ハチグワツ

例句

葉月

八月や矢橋に渡る人とめん　千子（猿蓑）

八九月風はいづこの螺の貝　嵐雪（蓮の實）

先放をふくの浦に訪ふ

八月や潮のさわぎの山かづら　去來（渡鳥集）

橘宿にて廿七夜の吟

八月もうら崩れして啼千鳥　乙二（松窓乙二發句集）

野の宮にいかづち雨の葉月かな　水驛（修鳥）

仲秋

裂破れて持てる扇や中の秋　秋之坊（猿丸宮集）

葉月九日の大風に草庵を吹破られて

我上に牽牛澄めり中の秋　野坡（野坡吟草）

犬山にて

仲秋や菖蒲花さく城の址　春沙（除鳥）

白露はくろ（中）

古書校註 【年浪草】節○月令廣義に曰、孝經緯に云、處暑後十五日斗庚に指すを白露節となす。言ふ心は陰氣漸く重り露凝つて白き也。

季題解說 陰曆八月の節にして、陽曆九月七八日頃に當り、陰氣鬱積し、露凝結して白き時の意といふ。**參照** 處暑シヨショ

秋分しうぶん（中）

古書校註 【年浪草】月令廣義に曰、白露十五日斗酉に指すを秋分となす。陰午に生じ亥に極る。故に酉はその中分なり。仲月の節を秋分となすは、秋は陰たり、中は陰陽中に適ふ。故に晝夜長短亦均し。

季題解說 陰曆八月の中、秋の彼岸の中日に當り、秋分點の當日、晝夜平分の時にして、白露節より十五日目、大抵陽曆九月二十二三日頃に當る。

參照 白露ハクロ

雷聲を收む（中）

【季題解説】七十二候、第四十六にあたる候には、大氣清淨、乾燥して雷も其聲を收むと云ふ。【[illegible]】立秋[illegible]候なり。

九月（中）

【季題解説】太陽曆一年十二箇月の第九にあたれる月なり。此月は略舊曆の八月に相當するが故に、三秋中の仲秋に屬す。即ち舊曆にて八月の異名、葉月の季感にほゞ同じ。【參照】「葉月」「長月」

【例句】
九月　干物の簾の乾かぬ九月哉　螢歩（蕨）

長月（晩）

菊月　菊咲月　菊の秋　紅葉月　木染月　紅葉月　色どる月　梢の秋　寝覺月　小田刈月　無射　季秋　紅樹　玄月

【古書校註】
【年浪草】潜確類書に曰、季秋は日月大火に會して斗戌に建する故。○「長月」は夜漸く長し。故に夜長月といふ。今略して長月と稱す。○「無射」律曆に曰、九月律無射に中る。高誘の註に云、無射は陰氣上升し陽氣下降す、萬物陽に隨つて藏れ、射り出見する事有る無き也。「季秋」月令に曰、九月を季秋となす。「紅樹」通俗志に出づ。疑ふらくは紅樹月たるべし。○（中略）（一）終れば紅樹とばかりは九月の異名にはなるべからず。「玄月」范蠡が曰、王姑く之を待ち、玄月に至る。註に玄月は九月也。「長月」紀事（二）に曰、九月を夜長月といふ。「菊月」又菊秋といふ。○月令に曰、季秋の月菊に黃花有り、故に菊月といふ。「紅葉月」藏玉　立田山まなくしぐるゝ頃とてや紅葉の月のいろを添ふらん　後鳥羽御製。「ね覺月」同　いくたびか同じ枕のねざめ月秋にはたへぬ長き夜すがら　家隆。「小田刈月」同　さびしさは鴫立つくれの露しげく袖打拂ふ小田かりの月　顯昭。
【栞草】色どる月、梢の秋といふに同じ。

【註】（一）こゝに紅樹の語を用ひたる詩句を出せり。いづれも九月の意なし。詩句今略す。（二）黑川道祐著、日次紀事の略。（三）「滑稽雜談」にはこの外になほ[illegible]・剝月・大[illegible]・[illegible]月・玄陰月・詠月・戌月・授衣・いろどり月・[illegible]の異名を載す。

【季題解説】陰暦に於て三秋の末の月をいふ。

【實作注意】長月、夜長月といふ義なり＝菊月＝菊の秋ともに此月菊花盛なるよりいふ梢の秋＝紅葉月＝木染月＝紅葉月＝色どる月、ともに此月紅葉の季なるよりいふ。寝覺月夜の長きよりいふ小田刈月、此月稲を刈るを以ていふ。其他季秋＝無射＝玄月などの漢名あり。【參照】九月（中）　九月盡（晩）

【例句】

長月

有暁亭に到る
琵琶形に歩きて秋も九月かな　支考（梟日記）
壁下地九月の末の野中かな　一笑（西の雲）
暖かに九月日和や藪の照　水魚（韻塞）
霜を待つ菊も暮あふ九月哉　浪化（きれ〲）
菊の香をかゝへて殘る九月哉　李由（[illegible]生）
[illegible]の法師歸にて
すさまじき長月頃の花火かな　蓼太（蓼太句集）
[illegible]の別
長月の秋や小松も荒に就く　道彥（蔦本集）

菊月
菊月や其有明となる日まで　支考（三物拾遺）

寒露（晩）

古書校註 【年浪草】節○月令廣義に曰、孝經緯云、秋分の後十五日斗辛に指すを寒露となす。言は露冷寒して將に凝結せんと欲する也。

季題解說 陰曆九月の節にして、陽曆十月八九日に當り、露、寒冷に會ひて將に凝結せんとする意なり。參照 秋分

霜降（晩）

古書校註 【年浪草】中○月令廣義に曰、寒露の後十五日斗戌に指すを霜降となす。言は氣肅し露凝結して霜となるなり云々。

季題解說 陰曆九月の中、陽曆十月二十三日頃に當り、露凝りて霜となる時をいふ。參照 寒露

十月（晩）

季題解說 太陽曆一年十二箇月の第十にあたれる月なり。此月は略舊曆の九月に相當するが故に、三秋中の晩秋に屬す。但し立冬は十一月七日なれば、晩秋の季は十一月立冬の日までに及ぶ。舊曆九月の異名、長月と稱する季節にほゞ同じ。參照 長月 冬—神無月

例句
十月
十月の海は凪いだり寄柑船　子規（全集）
十月の雀飛びこむほこら哉　同（同）

今朝の秋（初）

季題解說 立秋頃の朝の感じを云ふ。

實作注意　「今朝の秋」は、本來立秋の朝の事なるも、「今朝」の文字により、立秋頃の朝のすが〳〵しき感じを主としたるもの、即ち單に立秋と云へば曆の上による事多く、今朝の秋は感覺的に秋を初めて感するにて、いさゝか差別あるべし。參照　立秋（リツシウ）

例句　今朝の秋

句	作者	出典
柴噂がいへり與は夕暮今朝の秋	宗因	（梅翁宗因發句集）
今朝よりは我々顏の荻薄	來山	（來山句集）
張ぬきの猫も知るべし今朝の秋	芭蕉	（芭蕉句選拾遺）
朝顏をながめて居たり今朝の秋	許六	（風俗文選犬註解）
須田町の初物うれし今朝の秋	同	（同）
芭蕉葉や廣ごり果て今朝の秋	牧童	（柞原）
大根の二葉に立つや今朝の秋	素覽	（[illegible]集）
栗榛や庭に片よる今朝の秋	露川	（續猿蓑）
海山の心くばりや今朝の秋	風國	（小弓誹諧集）
橫雲のちぎれて飛ぶや今朝の秋	北枝	（草[illegible]集）
深爪に風のさはるや今朝の秋	木因	（[illegible]つばめ）
芭蕉葉や小襖を返す今朝の秋	りん女	（[illegible]）
鉈入れる林の音や今朝の秋	怒風	（水琵[illegible]）
颶過して大工來にけり今朝の秋	也有	（蘿葉集）
鱠に打ちし露を野に見て今朝の秋	同	（同）
艀の浪顏に濡るゝや今朝の秋	千代尼	（千代尼句集）
是こそと何も見初めず今朝の秋	同	（同）
荻の葉の物言ひ顏や今朝の秋	同	（同）
琴の音の我に通ふや今朝の秋	同	（同）
貧乏に追付れたり今朝の秋	蕪村	（蕪村句集）
硝子の魚驚きぬ今朝の秋	同	（蕪村遺稿）
團扇して燈消したり今朝の秋	同	（同）
女郎花二もと折りぬ今朝の秋	同	（同）
今朝の秋朝精進のはじめかな	同	（同）
溫泉の底に我足見ゆる今朝の秋	同	（新五子稿）
きぬ〳〵の詞すくなよ今朝の秋	同	（發句題苑集）
艀越しに鬼を答ふつ今朝の秋	同	（五車反古）
虫の音の下萠開くや今朝の秋	蓼太	（蓼太句集）
鶯とめて膩にも立つや今朝の秋	同	（同）
流れゆく茅の輪に知るや今朝の秋	同	（同）
今朝秋の腹に洒なしものゝ味	几董	（井華集）
馬鹿づらに白き髭見ゆ今朝の秋	同	（同）
把々の鏡するどし今朝の秋	同	（同）

曉の神鳴晴れて今朝の秋　同　（同）
水底に青砥が錢や今朝の秋　召波　（春泥發句集）
厭はるゝ身を起されつ今朝の秋　同　（同）

六月閏ありける年

水なしの繼橋越えぬ今朝の秋　同　（同）
荒海に題目見えて今朝の秋　同　（同）
今朝の秋を遊びありくや水すまし　同　（同）
白馬寺に如來うつして今朝の秋　同　（同）
今朝秋と知らで門掃く男かな　存義　（明烏）
水無月のからき目を見て今朝の秋　同　（五車反古）
涼しさの日出度かりけり今朝の秋　太祇　（太祇句選）
鶯の淺茅がくれや今朝の秋　曉臺　（曉臺句集）
とく起て鼻ひる僧や今朝の秋　闌更　（半化坊發句集）
かくこそと分かで今朝より秋の雲　樗良　（樗良發句集）
浪ひとつ岸打越しぬ今朝の秋　大魯　（蘆陰句選）
今朝の秋煙草の烟先づ飛びぬ　移竹　（こ御前）
今朝秋の垣にさはるや蚊帳の裾　月溪　（月溪句集）
手拭の紅もさめたり今朝の秋　諸九尼　（諸九尼句集）
踏脱だ足にて着るや今朝の秋　瓢水　（其雪影）
猫の抓く柱も光れ今朝の秋　巢兆　（曾波可理）
ひとわたり菜のかいわれて今朝の秋　同　（同）

・善光寺客中

何事か信濃振なる今朝の秋　同　（同）
寶家の隣に住みて今朝の秋　成美　（成美家集）
朔日の禮から言ふや今朝の秋　乙二　（松窓乙二發句集）
雨だれや三粒落ちても今朝の秋　一茶　（旅日記）
今朝秋ぞ秋ぞと大の男哉　同　（七番日記）
お目出度存じ候今朝の秋　同　（一茶句帖）
釣て行く松に聲あり今朝の秋　梅室　（梅室家集）
有る上に米を買けり今朝の秋　同　（同）
犬も尾をきりゝと卷て今朝の秋　蒼虬　（蒼虬翁發句集）
吸殼の道に煙るや今朝の秋　同　（同）
うつかりと起て見たれば今朝の秋　同　（同）
一二寸清水も殖えて今朝の秋　同　（同）
山の井の花は咲けり今朝の秋　同　（同）
人ひとり田中に立ちて今朝の秋　同　（同）
早まりて萑引しぞ今朝の秋　同　（同）
何なりと市に買ばや今朝の秋　同　（同）

今朝の秋　物言はぬ柱に寄りて今朝の秋　蒼虬（同〔一〕集　句集）
江の光柱に來たり今朝の秋　同（同）
脇ひらも見ず加茂へ來て今朝の秋　同（同）
今朝〔秋〕榎木の借りに遣る宇治拾遺　同（同）
今朝の秋撞く手に戻る鐘の聲　同（同）
刻みあげし佛に對す今朝の秋　子規（全集）
箱庭の橋落ちこみぬけさの秋　同（同）
土近く朝顏咲くや今朝の秋　虚子（ホトトギス）
あつしとて肌ぬけば又けさの秋　青々（倦鳥）
とんぼうが淡きをとぶやけさの秋　同（同）
千日紅に打水ぬるゝけさの秋　同（同）
起き出でてひとり知る也けさの秋　同（同）

初秋（初）

秋口　秋めく　秋じみる　秋淺し　初秋　新秋　孟秋　早秋

古書校註　【年浪草】幸隆聞書に曰、立秋・早秋初秋・新秋とある題も、立秋は秋立つ日をさし、初秋・早秋に、大やうに秋の初つ方を詠じ、然るべく候哉。題林抄に云、早春にて心得べしと云々。然らば立春の歌、初春・早春にはかなひ、初春・早春の歌、立春にはかなはざる如く、立秋の歌は、早秋　初秋・新秋には相違なく、早秋・初秋・新秋の題には相違なるにや。通茂公〔一〕仰曰、立春は春立つ日を云ふ也。早春は正月六七日迄、初春は正月十四日頃迄を云ふべし。立秋・早秋・新秋是に准へて知るべしと云々。〔肇秋〕說文に曰、肇は始也云々。所謂初秋の事也。

註（一）中院通茂。

季題解說　三秋の初め。大よそ秋になりて間なき頃をいふ。

實作注意　新秋＝孟秋ともいふ。又秋めく、秋口・なども用ふ。II初秋と斷はらずとも其意にて實感を詠するもよし。なほ例句を玩味すべし。

〔參照〕秋され〔[illegible]〕

例句
初秋　初秋のどれが露やら雨の露　鬼貫（鬼貫句選）
初秋や耳かきけづる朝ぼらけ　同（七車）
初秋や疊ながらの蚊帳の夜着　芭蕉（西の雲）
鳴海眺望
初秋や海も青田の一みどり　同（千鳥掛）
今朝見れば團扇敷寐や秋初み　杉風（續山彦）
篠竹の雀秋知る動きかな　同（千鳥掛）

初秋や翌の暑さも苦にならず　桃隣（一の木戸）

白川にかゝりて

初秋にかゝる土用や關知らず　同（伊達衣）

須賀川等躬を訪ふ

初秋や庵覗けば風の音　同（同）

されはこそ秋の初めを今日そつと　北枝（加賀染）

蝿並ぶはや初秋の朝日かな　野童（葛の松原）

山水やまた初秋の香薷散　句空（有磯海）

初秋や帷子越しにかゝる雨　毛紈（韻塞）

初秋の額の哀れや殘る蟬　示蜂（鳥の道）

初秋をもてなす物や燕の羽　惟然（有の香）

初秋や寛ぎかゝる稲の中　路健（續有磯海）

初秋や黍穂は輕き風の道　文鳥（けふの昔）

初秋や親に離れし相撲取　許六（東華集）

初秋を見通す西の御門かな　荊口（小柑子）

初秋や空にからくむ風の音　紫白女（田植諷）

初秋や雀悦ぶ雷のあと　野坡（百曲）

初秋やまだ美しい水の音　千代尼（千代尼句集）

初秋やまだ顯はれぬ庭の色　同（同）

初秋や餘所の灯見ゆる宵の程　蕪村（蕪村句集）

初秋や障子さす夜とさゝぬ夜と　太祇（太祇句選）

初秋や團扇の風をひいた人　同（太祇句選後編）

初秋や片笘かけし舟心　白雄（白雄句集）

初秋や誰が先かけし箱根山　同（同）

初秋や友増して夜の靜なる　曉臺（曉臺句集）

秋もまだそことし分かぬ夜なりけり　闌更（半化坊發句集）

初秋や旭出ぬ間の寺參り　几董（井華集）

初秋や藥に映る星の影　召波（春泥發句集）

初秋や今朝は柱に手の届く　成美（成美家集）

初秋や何の煙も眼にかゝる　同（同）

初秋の川瀬に立てる小笹かな　士朗（枇杷園句集）

初秋や鰯を覗がふ五位の聲　巣兆（曾波可理）

伏見

初秋や蘆の落たやうな空　一茶（一茶句帖）

初秋や爺婆多き上り舟　梅室（梅室家集）

初秋や夜明けて起て口惜しき　蒼虬（蒼虬翁發句集）

初秋や煙草火殘る竈の下　同（同）

初秋やまだ市晴き揩火打　同（同）

初秋や洗うて立てる竹簀　蒼虬（蒼虬翁發句集）

初秋　初秋や合歡の葉ごしの流れ星　子規（全集）
初秋やともる堅田を舟の中　六鹿（俳句）
初秋の横たふ雲に雲の峰　青々（同　）

秋され（初）

季題解説　風物の漸く秋らしく成るをいふ。参照　初秋

例句
秋され　秋されや長押にかけし小長刀　甘湖（小弓誹諧集）
秋されや夜毒落る河原風　何笠（花はさくら）
秋されや人の出て行く西の家　琴米（新深川）

八朔（中）　仲の秋　秋最中

季題解説　陰暦八月朔日の略稱。古來農家にては此の日を厄日とし、二百十日、二百二十日と共に三大厄日として天候の異變あるを恐る。尚詳しくは人事題「八朔」にあり。参照　二百十日　人事—八朔

例句
八朔　八朔やひねもす曇風寒き　个字（草上）

中秋（中）

季題解説　陰曆八月十五日の稱、秋の中央にあたるの意。『新勅撰』「明けば又秋の半も過ぎぬべし傾ぶく月の惜しきのみかは　定家」但し仲秋といへば、初秋・晩秋に對する仲の秋にして陰曆八月の事となるべし　参照　名月　無月

二百十日（中）　二百二十日　前七日　厄日

古書校註
【年浪草】立春の初日より二百十日と云ふ。此の頃秋の最中にて、金氣殺伐の氣變動する時也。故に必ず風雨あり。此の時節凡そ中稲の花盛りとす。農民其の花を害はんことを恐る。又二百二十日は晩稲の花盛とす。この節きはめて大風雨あり。この風雨に當れば稲花枯凋みてみのらず。依つて風雨を忌むなり。

季題解説　立春より二百十日目にして、大抵陽曆九月一・二日頃に當る。又立春より二百二十日目を二百二十日と稱す。之は安井春海といふ人、この頃必ず暴風起ると一漁夫より聞き、自らも多年經驗し、貞享初年に曆に書き入れたるを以て濫觴とすと云ふ。此日頃は大風雨多く、二百十日頃は中稲、二百二十日頃は晩稲の花盛りとて、農家は此雨日を大厄日として恐る。

又陽暦八月二十五六日を二百十日の前七日＝略して單に「前七日」と云ひ、風雨荒るゝ事多く、之を警戒す。〔參照〕八朔（ハツサク） 天文 野分（ノワキ） 颱風（タイフウ）

例句

二百十日　日照年二百十日の風を待つ　素堂（銹　草）

　　　　　　（賀叟を悼む）
此人に二百十日は荒れずして　其角（五元集）
菜大根に二百十日の殘暑かな　李由（韻塞）
市に隱る二百十日は昨日なり　几董（井華集）
こけもせで二百十日の雛頭哉　子規（全集）
内海や二百十日の釣小舟　同（同）

二百二十日　十日過ぎ二百二十日の萩の花　蛩樓（倦鳥）

厄日　胡瓶もんで厄日恙もなかりけり　琅玕（太白）

參考　立春から二百十日目に當る日を指したものである。二百二十日も同じく立春から二百二十日目に當る日を云ふ。元來七月から九月迄は南洋方面に起つた優勢な低氣壓即ち颱風が北進して本邦を襲ふ季節である故之れを颱風季と稱する。颱風はそれが襲來した時に恐る可き被害を與へる。而して九月初旬は颱風季の中間に當り且稻の開花季にも當り、此の頃の颱風は特に大なる被害を與へるため、特に此の日を暦面に記して警むるのである。

徳川五代綱吉の頃幕府の暦編纂係安井春海が或る時釣魚に遊ばんとして品川から舟を出さうと思つた時、一老漁夫が今日は立春から二百十日目に當るからと云つて之れを制した。春海歸宅して見ると果して大暴風雨となつたので之れを庶人に知らしむる爲、我國始めての暦である貞享暦に之れを載せたのが二百十日及二百二十日の始と云ふ。勿論此の日に限つて颱風が襲來するのでは無い。只之れによつて颱風季を警しめたのである。

稻刈時（いねかりどき）（晩）　田刈頃（たかるころ）　稻刈頃（いねかりごろ）

季題解說　秋の稻を刈る頃をいふ。

實作注意　何日と確定せるには非らず、地方によりて多少異るも大體九月下旬より十月上旬頃をいふ。〔參照〕人事—稻刈（イネカリ）

例句

　　　　　（人に米をもらひて）
稻刈時　世の中は稻かる頃か草の庵　芭蕉（續深川）

秋土用（あきどよう）（晩）

季題解說　寒露後十三日目、即ち十月二十日より立冬にいたる迄をいふ。

〔參照〕夏—土用（ドヨウ）

例句

秋土用

秋かけて土用ながしや風の音　　路青（そこの花）

秋深し（晩）

秋闌ける　秋さぶ　深秋

季題解説　秋闌けて深きをいふ。[参照] 長月(二)　暮の秋(二)　行秋(二)

例句

秋深し

秋深き隣は何をする人ぞ　　芭蕉（笈日記）

秋深し晝も剝れたる小夜着哉　　浪化（白扇集）

呂嶋亭

常盤木で秋深うする小庭かな　　同（浪化上人發句集）

秋深し人切り土堤の草の花　　風國（誹諧曾我）

秋深し赤さび川の雁雀　　猿雖（小柑子）

足柄道

秋深し松は昔の具足ずれ　　曉臺（曉臺句集）

朝顏を草と見るまで秋闌けぬ　　成美（成美家集）

暮の秋（晩）

暮秋　晩秋

古書校註　【年浪草】〔晩秋〕早秋に對して晩秋といふ。

季題解説　秋の暮　秋も終りに近き頃をいふ。[参照] 秋深し(一)　行秋(一)　冬隣(一)

例句

暮の秋

傷二を材一

髭風を吹て暮秋歎ずるは誰が子ぞ　　芭蕉（虚栗）

ある方にて

いさゝかな價乞れぬ暮の秋　　蕪村（蕪村句集）

暮の秋有職の人は宿に在す　　同（同）

跡かくす師の行方や暮の秋　　同（同）

孳せし馬の弱りや暮の秋　　太祇（太祇句選）

塵塚に蕣咲きぬ暮の秋　　同（同）

壁つゞる傾城町や暮の秋　　同（同）

落る日や北に雨もつ暮の秋　　同（同）

寒きとて寢る人もあり暮の秋　　同（太祇句選後篇）

氣のつかぬ隣の顏や暮の秋　　同（同）

勾當の身を泣く宿や暮の秋　　几董（井華集）

蕣に鶯見たり暮の秋　　同（同）

枯て立つ草の僅かや暮の秋　　召波（春泥發句集）

四町なる御歌使や暮の秋　　同（同）

梅嫁我あり顏や暮の秋　　同（同）

秋惜む（晩）

季題解説 秋の暮行くを惜むを云ふ。

實作注意 惜しむは意の切なるもの有ればなり。されど春を惜しむと、秋を惜しむとは、風物の相違もありて、その心自から異なり。秋の氣、殊に身に適して人を倦ましめざる物あり。されば其秋に別るゝ心には、自から切なる感も作ふべく、やがて冬の荒涼にも移りゆく、代謝の際に殘れる季物の一つ〳〵に名殘あり。例へば山紅葉なども今暫しの眺めなりと思ひて見る心など、秋を惜しむものなり。**參照** 暮の秋 行秋 冬隣

例句

秋惜む

戸を叩く狸と秋を惜みけり　蕪村（新五子稿）

秋惜む戸に音づるゝ狸かな　同（平安廿歌仙）

錦着て夜行く秋を惜みけり　蓼太（蓼太句集）

石女と暮ゆく秋を惜みけり　召波（春泥發句集）

山に眺望

秋惜しと一聲蟲の鳴音哉　大魯（明鳥）

秋惜め〳〵とか昔松　一茶（木槿集）

行秋（晩）

秋暮るゝ　秋暮れて　秋過て　秋ぞ隔る　秋に後るゝ　秋より後　秋の別　秋の名殘　秋の限　秋の湊　秋の果　秋の行方　殘る秋　かへる秋　秋の末　末の秋　秋の終り

古書校註 【山之井】秋の暮は、野原の蟲けらも聲しわがれ、山の紅葉も枝ばかりと見え、庭の女郎花は霜のしらがをいたゞき、籬に殘る翁草は、いとゞかしらも得もたげず、よろづ衰へたるていたらく、又行く秋の名殘を惜み、歸る方をもしたはまほしき心ばへなどすべし。

【栞草】暮の秋、暮れて行く秋をいふ。秋の暮に混ずべからず。（一）

註（一）秋の暮は秋の夕と同意なり。秋の暮並に晩秋の條參照。

季題解説 秋の盡きんとするをいふ。

實作注意 四季の内、春と秋は最佳適の候なれば、其暮行くを惜むにより古來種々の名目を立てたり。秋暮るゝ＝秋過て＝秋ぞ隔る＝秋に後るゝ＝秋より後＝秋の別＝秋の名殘＝秋の限＝秋の湊＝秋の果＝秋の行方＝殘る秋など其場合に應じて用ふべし。**參照** 秋深し 暮の秋 秋惜む 冬隣 九月盡

例句

行秋

行秋や昔をからで富士ひとり　鬼貫（七車）

行秋

蛤の二見に別れ行く秋ぞ　芭蕉（奥の細道）
行秋や手をひろげたる栗の毬　同（笈日記）
行秋や身に引まとふ三布蒲團　同（[illegible]）
行秋の猶頼母しや青蜜柑　同（浮世の北）
行秋の四五日弱る芒かな　丈草（猿蓑）
行秋や梢にかゝる鉋屑　同（白馬集）

鎌倉

行秋や七里が濱も八里ほど　桃隣（陸奥鵆）
行秋や殼より落る蟬の殼　同（古太白堂句選）
行秋や紅葉の寺に我を客　同（同）
行秋を身にしたがふや夜着蒲團　浪化（霜の光）
行秋に藪ある家の嵐かな　同（白扇集）
行秋のさて〳〵人を泣せたり　越人（卯辰集）
行秋をふらりと蜩の釣手哉　史邦（有磯海）
行秋に着る程もなき袷かな　牡年（同）
行秋や淡路もつふと闇のほど　風國（鳥の道）
行秋を鼓弓の糸の恨みかな　乙州（續猿蓑）
行秋や酒煖めし鉋屑　北枝（草庵集）
行秋や尾を引く雲の雨びたり　牧童（同）
秋の行く山田の原や白髪禰宜　句空（同）
行秋の膝になつくやきり〴〵す　素覽（枕かけ）
行ものは秋の如くか足羽川（アスハ）　支考（東西夜話）

筑前直方にて

行秋や花にふくるゝ旅衣　去來（初便）
行秋をだん〳〵菊の惜み咲　舍羅（駒撰）
行秋や二十日の水に星の照り　園女（菊の塵）
行秋や鮓にも逢はで蓼の花　也有（蘿葉集）
行秋や斯の如しと落し水　同（同）
行秋や尻も結ばぬ糸芒　同（同）
行秋や今日は梢に桐一葉　同（同）
行秋の時雨さうなと急ぎけり　同（同）
行秋や猶今日迄も茄子賣　同（同）
行秋や取落したる月の缺　同（同）
行秋や霜はあちらに境杭　同（同）
行秋や木守の柿に見送らせ　同（同）
行秋や持て來た風は置ながら　千代尼（千代尼句集）
行秋やひとり身をもむ松の聲　同（同）
行秋やよき衣着たるかゝり人　蕪村（蕪村句集）

鹽貝うて山人遠く行秋ぞ　曉臺　（曉臺句集）
あたら夜を男鹿が啼けば秋は行　同　（同　）
灯ちら〳〵秋も行くなり峯の堂　同　（同　）
鐘の聲行春よりも行秋ぞ　白雄　（白雄句集）
行秋や情に落入る方丈記　同　（同　）
隙の駒西へ東へ行秋か　同　（同　）
行秋の草にかくるゝ流かな　同　（同　）
行秋やから板敷に風が吹く　同　（同　）
行秋に鱗（アユ）のしら干哀れなり　同　（同　）

留別

燹で死ねと言へどもきかず行秋や　樗良　（樗良發句集）
行秋やあはれ非情の草も木も　同　（同　）
はる〴〵と來て別るゝや須磨の秋　几董　（井華集）
行秋や五月に糶し今年米　同　（同　）
行秋や抱けば身に添ふ膝頭　太祇　（太祇句選）
行秋や雲はあはれに水は悲し　青蘿　（青蘿發句集）
迫り行く秋や蜚啼く岡の蟲　同　（同　）
秋風と木枯の出帆入帆かな　蓼太　（蓼太句集）
行秋や見歸れば舟の跡もなし　闌更　（半化坊發句集）
長き藻も秋行く筋や水の底　召波　（春泥發句集）
行秋や蹴拔の塔を散る木の葉　麥水　（五車反古）
行秋や門の小草のほつれより　成美　（成美家集）
月をさへ先へ廻して秋の行く　乙二　（松窓乙二發句集）
行秋を鴨は迎に來たさうな　同　（同　）

悼

秋はものゝ人の親さへ連れて行く　士朗　（枇杷園句集）
行秋やどれもへの字の夜の山　一茶　（七番日記）
行秋やいかい御苦勞かけました　同　（一茶句帖）
行秋やつく〴〵をしと蟬の鳴く　同　（九番日記）
行秋や糸瓜の皮のだん袋　同　（一茶句帖）

琴見寄せてふ事を讀めては何せよとあるに

むだことに松葉をかく秋のゆくゑかな　梅室　（梅室家集）
行秋や雀の歩行く草の中　蒼虬　（蒼虬翁發句集）
行秋の鐘つき料を取りに來る　子規　（子規句集）
行く秋や狂女と語る峰の寺　同　（全　集）
ゆく秋や柿のひとつの殘る日に　麥人　（木太刀）

秋暮るゝ

松風や軒をめぐつて秋暮ぬ　芭蕉　（笈日記）
暮れて行く秋や三つ葉の萩の色　凡兆　（三河小町）
嫁達がちやは〳〵言うて秋暮ぬ　野坡　（野坡吟艸）

残暑

蟷螂の虚空を睨む残暑かな　北枝（[illegible]）
草の葉に置くや残暑の上ぼこり　同（北枝發句集）
[illegible]
下帯のあたりに残る暑さ哉　李由（韻塞）
残りとは言はれぬ程の暑さ哉　蒋刀（[illegible]）
はやものに残る暑さやちら〳〵穂　沙明（鳥の道）
冷々と木陰を傳ふ残暑かな　浪化（白扇集）
菜畠に残る暑さや瓜の苗　許六（[illegible]）
荻の葉残る暑さを蹴で居る　千代尼（千代尼句集）
朝の間は片付いて居る残暑哉　同（同）
よい程に夜が暑いぞ荻芒　一茶（七番日記）
茶屋の灯のげそりと暑減りにけり　同（同）
[illegible]
まだ残る暑さを負ふや日笠山　蒼虬（蒼虬翁句集）
岩寒し残暑の空へ五十丈　子規（全集）
居風呂に残暑の垢のたまりけり　同（同）
松苗をかくす残暑の草ののび　古泉（俳鳥）
園原の青田全き残暑かな　青々（同）
涼し過ぎてゐしにうれしき残暑かな　同（同）
朝も秋夕も秋の暑さかな　鬼貫（鬼貫句選）

秋暑し

[illegible]
秋暑しいづれ蘆野の柳陰　桃隣（陸奥衛）
梢まで來て居る秋の暑さ哉　支考（篇突）
秋の部へこぼれてはへる暑さ哉　千代尼（千代尼句集）
秋暑し水鳥鳴く方の潮光　曉臺（曉臺句集）
盆過の都はげしき暑さかな　大魯（蘆陰句選）
秋風の立そゝくれし暑さかな　嘯山（葎亭句集）
越後姫川にて
秋暑き中たち切て水寒し　梅室（梅室家集）

参考　立秋以后尙續く暑さを殘暑と稱する。元來一年中で日射が最も強い時は太陽の高度が最も高い夏至（六月二十二日）頃である。從つて其の頃が最も暑かるべきであるが、氣温が最高になるのはそれよりも遲れるのが常である。卽ち太陽から受ける熱量と地面が外界へ放射する熱量が等しくなつた時が氣温が最高になる時である。温帶地方では氣温が最高になるのは夏至より大體五十日から六十日位遲れる。卽ち温帶地方でも大陸內では七月下旬に氣温の最高が起るが我國の樣な島國では八月初旬頃に起る。それ故立秋が過ぎても尙暑い事が多い。之れが殘暑であるから殘暑と云ふ現象は我國では寧ろ當然な現象である。

實例を見ても滿洲や支那では七月の方が氣溫が高いが我國內では臺灣を除いては何處でも八月の方が高い。又內地三十七個所に於ける平均氣溫を見ても七月は二十二度七であるが八月は二十四度四であつて八月の方が平均として二度近くも高い。卽ち殘暑と云ふ現象は支那の如き大陸では意味があるが我國の樣な島國では寧ろ當然な現象と云はねばならぬ。

新涼（初）　新に涼し　初めて涼し　秋涼し　秋涼

出書校註

【御傘】秋の涼しきに秋の暑さなど句體かはらば同じ面にも苦しかるべからず。似たるやうなる字ならば折無用の事か。

【篗纑輪】初て涼し、新たに涼し、是常の事也。然るに近來はつすゞしとしたる句まゝあり、不ㇾ宜。はつすゞとはすべし。

【年浪草】月令廣義に曰、景風より四十五日涼風至る。坤卦の風を塡となす。

季題解說

秋に入りて涼氣の立つをいふ。

實作注意

秋涼し・初めて涼し—新たに涼しと用ふ。

例句

新涼　新涼に菩薩地獄に入にけり　青々（倦鳥）

秋涼し　或草庵に誘はれて　秋涼し手每にむけや瓜茄子　芭蕉（奧の細道）

秋涼し蘭のもつれの解るほど　野坡（野坡吟艸）

雲裡山の同庵、門上五本松にて　秋涼し月見を契る松がもと　白雄（白雄句集）

涼しさや秋の日南の人通り　大魯（蘆陰句選）

長谷寺へ江上を渡りて　秋涼し小舟で渡る浮藻の江　東方（倦鳥）

爽やか（三秋）　爽氣

出書校註

【連歌新式漢和篇】爽は秋也。

【年浪草】增韻に曰、爽は淸快也。サワヤカは卽ち淸く快きの義也。

季題解說

秋晴れて淸く快く覺ゆる秋氣を云ふなり。【參照】冷やか

例句

爽やか　爽やかに夜雨の殘りし草の上　青々（倦鳥）

冷やか（初）　ひゆる　ひやひや　下冷　秋冷　朝冷　雨ひえ

出書校註

【連歌初心抄】八月。ひやゝか。冷じき。

例句

漸寒

夜嵐に漸く寒し大井川　鬼貫（鬼貫句選）

足早き間戸の音やゝ寒み　楚常（卯辰集）

やゝ寒し早稻の穭の角芽立　野童（有磯海）

やゝ寒く人を覗ふ鼠かな　乙州（砂川）

人顏にやゝ寒すいと移りけり　嘯山（葎亭句集）

やゝ寒きはじめや芋の青目能　故鳳（田毎の日）

麻蒔や虱忘れてやゝ寒き　一茶（發句題叢）

やゝ寒み灯による蟲もなかりけり　子規（子規句集）

やゝ寒みちりけ打たする温泉かな　同（同）

やゝ寒うなりて太るよ砂の蕪　茶煙（倦鳥）

肌寒（はださむ）（晩）

古書校註

【増山の井】肌寒き、九月。（一）

註（一）年浪草には八月、漸寒の條下に其俊の「秋風のやゝ肌寒く」の歌をあげたり

季題解説 秋氣肌に寒く覺ゆるをいふ。【類語】そゞろ寒（ソゾロサム）　秋寒（アキサム）　漸寒（ヤヤサム）　うそ寒（ウソサム）　朝寒（アササム）　夜寒（ヨサム）　冬—寒さ（サム）

例句

肌寒

湯の名殘今宵は肌の寒からむ　芭蕉（柞原）

肌寒きはじめに赤し蕎麥の莖　惟然（續猿蓑）

影見えて肌寒き夜の柱かな　曉臺（曉臺句集）

肌寒や綿に月洩る板庇　素丸（素丸發句集）

肌寒や湯ぬるうして人こぞる　子規（仝集）

女より見す肌寒のけはひかな　青々（倦鳥）

うそ寒（さむ）（晩）

季題解説 秋の冷氣のうつそりと身に感ずるをいふ。【類語】そゞろ寒（ソゾロサム）　薄寒（うすさむ）　秋寒（アキサム）　漸寒（ヤヤサム）　肌寒（ハダサム）　朝寒（アササム）　夜寒（ヨサム）　冬—寒さ（サム）

例句

うそ寒

うそ寒や不斷ふすぼる釜の下　才麿（才麿發句抜萃）

伊勢の蚤の息つく音やうそ寒き　何處（鳶獅子集）

倶梨伽羅の小うそ寒しや雲の脚　路通（去來文）

うそ寒や如意輪様もつくねんと　一茶（七番日記）

うそ寒や只居る罰が今あたり　同（同）

うそ寒や蚯蚓の唄も一夜づつ　同（一茶句帖）

うそ寒をはや合點の蜻蛉哉　同（發句題叢）

うそ寒き暗夜美人に逢着す　　子規（全集）
うそ寒に我も人もが町を行く　　青々（倦鳥）

冷まじ（晩）

季題解説 秋氣凄冷なるをいふ。

實作注意 冷まじといふ感じは「月令博物筌」に一涼し（秋涼しの意）といふよりは重く、寒しといふよりはかろし」とあるを味ふべし。冷やかなる秋の漸く濃くなる頃の感じを詠むべし。［参照］冷か　身に入む

例句

冷まじ

猪は季をこそ持たね冷まじき　　來山（續今宮草）
冷まじや月もる闊の塗靫　　英之（西の雲）
板敷は冷まじく成るはじめ哉　　浪化（名月集）
冷まじの水の心や手取川　　涼菟（山中集）
唐黍に月鳴り止まず冷まじや　　移竹（乙御前）
帷子の身に冷まじき假寢哉　　舞閣（續明烏）
冷まじや紅葉を染る露の音　　道彥（蔦本集）

朝寒（晩）

古書校註 【御傘】秋也。寒き朝・寒きあした・朝氣さむし・今朝さむし等いづれも冬なり。
【増山の井】九月。

季題解説 秋にいたり朝のほど寒さを感ずるをいふ。［参照］そゞろ寒　秋寒　漸寒　肌寒　うそ寒　夜寒　冬—寒さ

例句

朝寒

朝寒の今日の日南や鳥の聲　　鬼貫（鬼貫句選）
朝寒や手を放したる刎釣瓶　　魯九（松濤集）
朝寒や起きて咳く古御達　　太祇（太祇句選）
寺子屋の門打つ子あり朝寒み　　同（太祇句選後篇）
朝寒く蠅のわたるや竈の松　　同（同）
朝寒や旅の宿立つ人の聲　　同（同）
朝寒に鉈の刃鈍き響かな　　几董（井華集）
朝寒や水貰ふ家未だ起きず　　同（同）
二日咲く木槿と成りて朝寒し　　曉臺（曉臺句集）
朝寒や背戸の芋掘る佛の日　　嵐甲（續明烏）
朝寒や弱檜に墨を打てば散る　　乙二（松窓乙二發句集）
朝寒や夜明けし寺の鼠共　　巢兆（曾波可理）

朝寒

闇の灯のとれかぬるなり朝寒み　一茶（享和句帖）
朝寒し／＼と菜賣箕賣かな　同（旅日記）
朝寒や蟻も眼を皿にして　同（同　）
朝寒や菊も少々素湯土瓶　同（一茶句帖）
朝寒や雑巾あてる門の石　同（同　）
朝寒や垣の茶筅の影法師　同（発句題叢）
朝寒や舞臺にのぼる影法師　梅室（梅室家集）
　下谷寺一宿を訪ふ
朝寒やたのもと響く内玄關　子規（子規句集）
朝寒や上野の森に旭のあたる　同（同　）
朝寒に寺百姓の井の流れ　青々（倦鳥）

参考 氣温は我國の様な温帶地方では日出頃最低となりそれから次第に上昇し、午后二時頃最高となり以后漸次低下して夜明の最低に至る様な變化をする。之れを氣温の日變化と云ひ、毎日の最低温度と最高温度との差を較差と稱する。即ち較差の大なる時は寒暑を強く感ずる。較差は所によつても亦種々な原因によつても變るが四季によつても異り、太陽から受ける日射量の變が著しい春と秋には較差は大きい。故に秋には日中は暖かくも夜中、夜明には著しく氣温が下り肌寒きを感ずる。之れが朝寒或は夜寒の現象である。

夜寒（よさむ）（晩）

古書校註【御傘】秋也。夜さむき・寒き夜・よをさむみ・夜のさむき皆冬也。
【増山の井】八月。夜を寒みは冬也。
註 連歌至寶抄には末ノ秋、誹諧初心抄には八月の部に出す。温故日録には九月の部に出し、「秋也」といへり。

季題解説 秋にいたりて夜のほど稍寒さを覺ゆるをいふ。

實作注意 夜寒は夜を寒みと云ひてもよし。やゝ寒、うそ寒、そゞろ寒、朝寒、などと共に俳句獨特の微妙なる感覺なり。〔参照〕そゞろ寒 秋寒 漸寒 肌寒 うそ寒 朝寒 冬 寒さ

例句

夜寒　入麪の下焚立る夜寒かな　芭蕉（己が光）
　其從亭
問せばや夜寒さらでの空寝入　其角（のぼり鶴）
子子等には猫もかまはず夜寒哉　同（類柑子）
　郷の舊友を訪ふ
友ずれの舟に寝つかぬ夜寒かな　丈草（有磯海）
病人と鉦木に寝たる夜寒かな　同（[illegible]）

焼栗も客も飛び行く夜寒かな　同　（後れ馳）
夕顔の汁は秋知る夜寒かな　支考　（炭俵）
ひだるさを兒の言葉の夜寒哉　同　（梟日記）
豆腐にもよろしき魚津の夜寒哉　同　（東西夜話）
丸あきに夜寒覺ゆる戸口かな　浪化　（白扇集）
瀬の音の二三度分かる夜寒哉　同　（風月藻）
客人の夜着押つくる夜寒哉　程己　（韻塞）
きりぎりす案山子にかゞむ夜寒哉　同　（篇突）
あんどんを消してひつ込む夜寒哉　正秀　（有磯海）
生壁に袖を氣遣ふ夜寒かな　李由　（東華集）
念佛の聲に賓の入る夜寒哉　同　（柿表紙）

宗祇の夜寒を思ひやりて

亦一重蓙敷までの夜寒かな　仙化　（華摘）
川づらに栰こふ聲の夜寒哉　同　（雜談集）
狼の身も賴まれぬ夜寒かな　乙州　（薦獅子集）
夜を寒み乾鮭つたふ鼠かな　同　（藤の實）

木曾塚

木曾殿と背中合する夜寒哉　越人　（きさらぎ）
夜寒さやきす子だてなる魚荷宿　嵐竹　（住吉物語）
脊の間をぐつと寐てとる夜寒哉　臥高　（有磯海）
木枕に鼻紙あつる夜寒かな　風麥　（同　）
落雁の聲の重なる夜寒かな　許六　（韻塞）
機響て見事茶になる夜寒哉　桃先　（柱暦）
夜寒さや舟の底する砂の音　北枝　（後れ馳）
荷をつけて馬のイむ夜寒哉　林紅　（續有磯海）
荒鷹の壁に近づく夜寒かな　唯止　（續猿蓑）
庭へ出て馬の米喰ふ夜寒かな　露川　（けふの昔）
茶縮緬借て着て見る夜寒かな　秋之坊　（草庵集）

俊成卿の女の案じたる面影もなつかし

夜寒さを覗ひて見たる笘屋哉　芦本　（砂つばめ）
喑がりに髪すく音の夜寒かな　吾仲　（柿表紙）
木綿を背中につけて夜寒哉　里東　（白馬集）
とち葉うつ豆も一夜の夜寒哉　卯七　（渡鳥集）
我が形は佚こかして夜寒哉　涼菟　（簑荻）
寢返りに簪子のしわる夜寒哉　素覽　（木曾の谷）
夜寒さや木賃枕の杜ぎれ　魚日　（西國曲）

初瀬にて

相宿の山臥あるゝ夜寒かな　野水　（宰陀稿本）

夜寒

残る蚊に袷着て寄る夜寒哉　雪芝（壬生山家）
昔からの鍋にしかける夜寒哉　也有（蘿葉集）
蟲の夜人の機織る夜寒かな　同（同）
行燈の一つ増したる夜寒かな　同（同）
缺々て月もなくなる夜寒哉　蕪村（蕪村句集）
起て居てもう寝たといふ夜寒哉　同（同）

山家

猿どのゝ夜寒訪ゆく兎かな　同（同）
夜を寒み小冠者臥たり北枕　同（同）
壁隣ものごとつかす夜寒哉　同（同）
手燭してよき蒲團出す夜寒哉　同（蕪村遺稿）
巫女に狐戀する夜寒かな　同（同）
書綴る師の鼻赤き夜寒哉　同（同）
涕垂れて獨碁をうつ夜寒かな　同（同）
貧僧の佛を刻む夜寒哉　同（同）
盗人の屋根に消行く夜寒哉　同（新五子稿）
きりぎりす自在をのぼる夜寒哉　同（古今墨跡集）
夜を寒し寐心とはむ呉服町　同（四季文集）
やゝ老て初子育つる夜寒かな　太祇（太祇句選）
舟曳の舟へ來て言ふ夜寒哉　同（同）
旅人や夜寒問合ふねぶた聲　同（同）
水瓶へ鼠の落ちし夜寒かな　同（同）
椎の實の板屋を走る夜寒哉　曉臺（曉臺句集）
海近き雨や夜寒の濡筵　同（同）
しみじみと夜寒き蜘の歩み哉　同（同）
思ひ侘ぶ頃は夜寒の簀垣哉　白雄（白雄句集）
うぶ髪の古郷遠き夜寒かな　同（同）
身一つはかねて夜寒の枕かな　同（同）
半分は青き蘆火の夜寒哉　蓼太（蓼太句集）
竹寶に枝焚く術の夜寒かな　同（同）
四十から酒飲み習ふ夜寒かな　同（同）
咳く人に薬湯參らする夜寒哉　几董（井華集）
めかれたる松茸市の夜寒哉　同（同）
明けはまた夜寒の雨戸繕はん　召波（春泥發句集）
ふきとめす地藏の綿も夜寒哉　同（同）
怪談の夜ろ更行く夜寒哉　同（同）
月の洩る穴も夜寒の一つ哉　同（同）
あとさして夜寒に慮外申さばや　同（同）

題妖物

炭取に早足のつく夜寒哉　同　（同　）
雨風の日和をさまる夜寒哉　大魯　（蘆陰句選）
月影や澄みて夜寒の膝頭　移竹　（乙御前）
𩩲はれし夢よりつのる夜寒哉　青蘿　（青蘿發句集）
燈火に親しくなりし夜寒哉　正白　（續明烏）
新しい綿入着たる夜寒かな　月居　（同　）
罔兩の襟かき合す夜寒かな　魚宦　（五車反古）
稚子の二人親しき夜寒哉　旨原　（同　）
嬉しさや夜寒の陳皮唐辛　成美　（成美家集）
茶を飲めば目鏡はづるゝ夜寒哉　同　（同　）
小判よむ隣を持ちて夜寒かな　同　（同　）
待もせぬ月や夜寒の黍所　乙二　（松窓乙二發句集）
蘆垣の夜寒の鬼よ寐ずおはす　同　（たのゝえ草稿）
針箱が枕に狂ふ夜寒かな　巣兆　（曾波可理）

山家

年寄の椎にもはまる夜寒かな　同　（同　）
やゝ寐よき夜となれば夜の寒さ哉　一茶　（一茶句帖）
殼俵叩いて見たる夜寒哉　同　（享和句帖）
見る程の木さへ山さへ夜寒哉　同　（同　）
先住が愛でし榎も夜寒哉　同　（旅日記）
兄分の門と向き合ふ夜寒哉　同　（同　）
さる程に五兩の松も夜寒哉　同　（同　）
夜寒さへ川さへ住めば住まれけり　同　（同　）
門の木に梯子かゝりて夜寒哉　同　（鳴の井）
さぼてんの鮫肌見れば夜寒哉　同　（七番日記）
肋骨撫でじとすれど夜寒哉　同　（同　）
寐莟しに丁度よい程夜寒哉　同　（同　）
木兎が杭にちよんぼり夜寒哉　同　（同　）
兩國の兩方ともに夜寒哉　同　（同　）
救世觀世音かゝる夜寒を助給へ　同　（同　）
六十に二つ踏込む夜寒哉　同　（同　）
店賃の二百を叱る夜寒哉　同　（同　）
垣外へ屁を捨てに出る夜寒哉　同　（同　）
卅日錢がらつく茱の夜寒哉　同　（同　）
煙草盆足で尋ねる夜寒哉　同　（同　）
咄する一方は寢て夜寒哉　同　（同　）
盆の灰いろはを習ふ夜寒哉　同　（同　）

夜寒

一人と書留らるゝ夜寒哉　一茶（七番日記）

若僧の扇面に
影法師に恥よ夜寒の無駄歩き　同（おらが春）

小便所愛と馬よぶ夜寒哉　同（同）

子供等を心で拜む夜寒哉　同（同）
親といふ字を知てから夜寒哉　同（一茶句帖）
のらくらが遊び加減の夜寒哉　同（おらが春）
一ッ蚊の側に鳴たる夜寒哉　同（一茶句帖）
行燈のしん〳〵として夜寒哉　同（同）
窓際や虫も夜寒の小寄合　同（九番日記）
藪村に豆腐屋出來る夜寒哉　同（同）
草の家は秋も蕭寒夜寒哉　同（同）
親の膳三度頂く夜寒哉　同（一茶新集）
膝がしら木曾の夜寒に古びけり　同（同）
都には加茂川ありて夜寒かな　梅室（梅室家集）
寐るも惜しする事もなき夜寒かな　同（同）
燕の巣に鼠鳴く夜寒かな　同（同）
小海老煮る火は限りある夜寒哉　蒼虬（蒼虬翁句集）
牛に物言うて出て行く夜寒哉　同（同）
芋莖さく音を夜寒のはじめ哉　同（同）

上根岸
樫の木の中に灯ともる夜寒かな　子規（子規句集）
大寺のともし少き夜寒かな　同（全集）
宮様の森黑々と夜寒かな　月斗（同人）
厩の戸納家の戸しめに夜寒かな　月村（同）
次の間のあかりでかしぐ夜寒かな　南朝（倦鳥）
蓮月の歌に嵯峨野は夜寒哉　林泉（同）
有磯海のしぐれが町に夜寒かな　之棗（同）

草菴夜情
綿入に着かへて坐る夜寒かな　青々（同）
月弓の大きく見ゆる夜寒かな　同（同）

身に入む（三秋）

古書校註

【連歌初心抄】八月。身にしむ。

【連歌至寶抄】人毎に暮の秋のやうに心得候へ共初秋にて候。身にしめんといふ言葉も秋になり申候。これらは三月にわたり可申候(一)。

【御傘】秋也。連に二あれば誹には三あり。身の字人倫になる也。溫・涼・ひやゝか・すさまし・ひゆる・かんずる(二)・熱する等に皆二句去也。
【溫故日錄】七月。初秋也。但初中後にも用ふる事もあり。身にしまぬも秋也。
【滑稽雜談】七月、連歌新式秘抄云、衣の香など身に入む、秋にてあるまじきか。されども秋に用ふる也。参照 冷やか(ヒヤヤカ) そゞろ寒(ソゾロサム) 秋寒(アキサム) 漸寒(ヤヤサム) 肌寒(ハダサム) うそ寒(サム) 冷まじ(スサマジ) 朝寒(アササム) 夜寒(ヨサム) 冬—寒さ(サムサ)
註 (一)秋季三ケ月にわたると也 (二)寒ずる。ひえるといふ意。

季題解説 秋冷の氣の身に沁む如きをいふ。

例句

身に入む

貞享甲子秋八月、江上の破屋を出づる程、風の聲そゞろ寒げなり

野ざらしを心に風のしむ身かな　芭蕉（甲子吟行）

両國橋の舟に遊びて

身にしむや宵曉の舟じめり　其角（新始）
化ものゝ草帋身にしむ夕かな十二才つや（桃盜人）
身にしむや横川のきぬをすます時　蕪村（蕪村句集）
身にしむや亡妻の櫛を閨に蹈む　同（同）
學ぶ夜の更けて身に入む昔哉　子規（全集）

秋の日(あきのひ)（三秋）

季題解説 秋の一日を云ふ。参照 天文—秋の日(アキノヒ)

例句

秋の日

秋の日の事たらはしや三ッ盒子　嵐雪（翁草）
秋の日の入相聞て寐よう迄　路通（枕屛風）
秋の日やあなづり過て高半時　万乎（土大根）
秋の日や庇に來啼く蟬一つ　溪聲（草上）

秋曉(しうげう)（三秋）

秋(あき)のあかつき　秋(あき)の夜明(よあけ)

季題解説 秋の夜の明方をいふ。参照 秋の朝(アキノアサ)

秋の朝(あきのあさ)（三秋）

季題解説 秋の一日の朝をいふ。参照 秋曉(シウゲウ)

例句

秋の朝

車庸亭

面白き秋の朝寐や亭主ぶり　芭蕉（笈日記）

父母の肖像を負うて旅に出づるに記す

なき親に拜ますや秋の朝御帳　馬瓢（水薦苅）

秋の朝

砂の如き雲流れ行く朝の秋　子規（子規句集）

著ながらに綻び縫ふや秋の朝　洪久女（愛吟）

秋の晝（三秋）

季題解說　秋の一日の晝をいふ。

例句

秋の晝

さなきだに風もやとはず晝の秋　楚戎（玉まつり）

午の貝おくる衢や三井の秋　探志（山彦）

秋晝や吹かれて青き八重葎　枯雪（雲母）

秋の暮（三秋）　秋の夕　秋のゆふべ　秋の夕暮

古書校註

【旅寢論】問云、春の暮に對して秋の暮を暮秋と心得たる作者多しといへり。尤秋の昏は秋の夕也、春の暮は暮春の事に侍るや。答曰、春の暮は暮春也。又一片に不レ可レ限、一首一句の趣にもよるべし。

【栞草】秋の夕暮といふべきを文字の數も少き句なれば略して秋の暮といふ也。近頃下五文字に秋の夕といへる句まゝあり。秋のゆふべといはねば言葉足らず、作者心得べし。

季題解說　秋の一日の暮をいふ。

實作注意　秋の暮は古くは中秋の部に入れ又明かに暮秋と分ちたり。其例は『篇突』に許六は「春のくれに對して秋の暮を暮秋と心得たる作者多し。秋の暮は古來秋の夕間暮と云事にて、中秋の部には入たり」と說き『青根か峯』に同じく許六は「予が句に

大きなる家ほど秋の夕べかな

といふ句、暮秋の卷頭に入たり。この句暮秋の句にあらず　古來秋の暮は暮秋にあらずと定まれり。たゞ秋の夕間暮といふ事のよし、すなはちあら野集にも中秋の部に入たり。春の暮といふに對して、秋の暮を暮秋と心得たる人稀々に有、秋の暮の哀より猶哀也　秋の暮といふ句二ツ、余は行秋といふ句也、あきの暮と書とも、暮秋のこゝろを兼たる句もあり。予が撰者、予が句に

のび〳〵ておとろふ菊や秋の暮

暮秋をかねて九月の中に入たり。秋の暮はみな八月に入る也」と說けるにて知るべし。故に秋の暮は、秋の夕間暮の感じを詠出すべく、なほ作例を玩味すべし。**參照**　暮の秋（クレノアキ）　秋の夜（アキノヨ）

例句

秋の暮

梓聞く神子に惚けり秋の暮　言水（言水句集）

昔やら今やらうつゝ秋の暮　鬼貫（七車）

愚案ずるに冥途もかくや秋の暮　芭蕉（向之岡）

武藏野を出る時、野ざらしを心に思ひて旅立ければ

死もせぬ旅寢の果よ秋の暮　同（甲子吟行）

枯枝に烏のとまりけり秋の暮　同（曠野）

所思

此道や行く人なしに秋の暮　同（其便）

雲竹自畫像

こちら向け我も淋しき秋の暮　同（笈日記）

雪の旅それらではなし秋の暮　同（眞木柱）

秋の暮客か亭主か中柱　同（隨齋諧話）

木兎の獨笑ひや秋の暮　其角（續虛栗）

コ齋身まかりける後

その人の鼾さへなし秋の暮　同（曠野）

岡釣の後ろ姿や秋の暮　同（五元集）

高雄にて

此秋暮文覺我を殺せかし　同（同）

秋の暮祖父（オホヂ）のふぐり見てのみぞ　同（同）

青海や淺黃になりて秋の暮　同（五元集拾遺）

立出でて後あゆみや秋の暮　嵐雪（四季千句）

秋の暮漸く庭も古びけり　同（柞原）

秋の暮石山寺の鐘のそば　同（宰陀稿本）

もどかしく我面（ツラ）くはす秋の暮　同（玄峰集）

寢て起て又寢て見ても秋の暮　同（同）

のび〳〵て衰ふ菊や秋の暮　許六（韻塞）

食慣をはたけてもるや秋の暮　同（柿表紙）

連に三人在田遊びて

一つ茶壺皿淋し秋の暮　同（正風彥根躰）

虎も居ぬ和田酒盛や秋の暮　支考（誹諧曾我）

阿彌陀寺にて

屛風にも見しか此繪は秋の暮　同（梟日記）

布袋の畫

鐘聞ゆ囊の中の秋の暮　同（東西夜話）

愛宕山

こゝに寢ば鳥とならん秋の暮　同（同）

船越して訪へやどなたも秋の暮　同（同）

一色の病なりけり秋の暮　杉風（土大根）

鐘の音物にまぎれぬ秋の暮　同（杉風句集）

修行者は猶世の中の秋の暮　同（同）

卷盡す枕繪甘し秋の暮　北枝（稻莚）

石切の音も聞けり秋の暮　傘下（曠野）

秋の暮

母におくれける子の哀れを

幼な子や獨り飯食ふ秋の暮　尙白（曠野）

憂き人を又くどきみん秋の暮　去來（其袋）

鹽魚の齒にはさかふや秋の暮　荷兮（猿蓑）

鴫弦に鴫もかゝらず秋の暮　車庸（己が光）

からき世に苦參賣なり秋の暮　游刀（同）

積む木ンの小口ぞ古き秋の暮　旦藁（曠野後集）

此冬の寒さも知らで秋の暮　惟然（笈日記）

秋の暮行先々の笘屋かな　木因（同）

日當りや蠢色づく秋の暮　正秀（續有磯海）

舟ならで見馴ぬ浦や秋の暮　利牛（同）

大きなる嚏一つ秋の暮　角上（篇突）

廣澤や背負うて歸る秋の暮　野水（續猿蓑）

木萱込む池の水際や秋の暮　等躬（伊達衣）

加賀中宮温泉の便りに申つかはしける

問ふものは天目猿か秋の暮　句空（草庵集）

三井寺

楠の珠延淒し秋の暮　舍羅（靑むしろ）

遊ぶなら酒振舞ん秋の暮　野坡（續寒菊）

新米のもたれ心や秋の暮　尙白（忘梅）

知て知らぬ身のほど悲し秋の暮　智月尼（玉藻集）

物言はぬ人揃ふたり秋の暮　乙由（麥林集）

魚賣の野道戻るや秋の暮　也有（蘿葉集）

毛拔さへ食ふ物なくて秋の暮　同（同）

二火三火三里すへけり秋の暮　同（同）

蚊の聲の譜尋ねてか秋の暮　同（同）

猿丸太夫像

我が手に我を招くや秋の暮　蕪村（蕪村句集）

あちらむきに鴫も立たり秋の暮　同（同）

門を出れば我も行人秋の暮　同（同）

老懷

去年より又淋しいぞ秋の暮　同（同）

父母の事のみ思ふ秋の暮　同（同）

弓取に歌とはれけり秋の暮　同（同）

淋し身に杖忘れたり秋の暮　同（同）

秋の暮辻の地藏に油さす　同（同）

門を出て故人に逢ひぬ秋の暮　同（蕪村遺稿）

淋しさの嬉しくもあり秋の暮　同（同）

人は何に化るかもしらじ秋の暮　同（同）

訓讀の經をよすがや秋の暮　同　（同）

一人來て一人を訪ふや秋の暮　同　（同）

限りある命のひまや秋の暮　同　（同）

燈ともせと言ひつゝ出るや秋の暮　同　（同）

鳥さしの西へ過けり秋の暮　同　（同）

秋の暮佛に化る狸かな　同　（新花摘）

泊問ふ船の法度や秋の暮　太祇　（太祇句選）

有佗て酒の稽古や秋の暮　同　（同）

をどり人も減りし芝居や秋の暮　同　（同）

獨居や足の湯湧す秋の暮　同　（同）

何事ぞ座敷をはづす秋の暮　同　（石の月）

人の上に烟かゝれり秋の暮　曉臺　（曉臺句集）

象潟や命うれしき秋の暮　同　（同）

梅干で酒吸うてみん秋の暮　同　（同）

鷹の眼の水に据るや秋の暮　同　（同）

犬蓼の節折したり秋の暮　同　（同）

小菜一把薪盡せし秋の暮　白雄　（白雄句集）

蓬生や人に聲なき秋の暮　同　（同）

大寺や素湯の沸へ立つ秋の暮　同　（同）

わけもなや蟲齒のおこる秋の暮　同　（同）

氣のつけば馬も通らず秋の暮　同　（同）

澤蟹のあゆみさしけり秋の暮　同　（同）

秋の暮髮生て人に問れける　同　（同）

日の色や蓬吹るゝ秋の暮　同　（同）

鶴下りて人に見らるゝ秋の暮　同　（同）

高館毛越寺懷古

礎を數へあまして秋の暮　蓼太　（蓼太句集）

雪颿樓

捨て行く歸帆ならねど秋の暮　同　（同）

我庵を客と立けり秋の暮　同　（同）

眠我と墨水に遊びて

木母寺を力なりけり秋の暮　同　（同）

墓一つ顏見合せて秋の暮　同　（同）

潮見坂

舟碎く海とは見えず秋の暮　同　（同）

鐘つきにのぼるも見えて秋の暮　同　（同）

道問へば一里〳〵と秋の暮　同　（同）

卷

夜べ逢うていとゞなつかし秋の暮　几董　（井華集）

何急ぐ家ぞ灯とぼす秋の暮　几董（井華集）
馬下りて馬夫が別れも秋の暮　同（同）
朱をそゝぐ入日の後は秋の暮　同（同）
衣著よと母の使や秋の暮　同（同）
加茂の町樂も聞えず秋の暮　召波（春泥句集）
婚禮の家を出れば秋の暮　同（同）
寺子屋の寺子去にけり秋の暮　同（同）
短册の屛風を見たり秋の暮　同（同）
秋の暮片枝の梨も落盡す　闌更（半化坊發句集）
なま中に知らでもよきに秋の暮　樗良（樗良發句集）
戶口より人影さしぬ秋の暮　靑蘿（靑蘿發句集）
賑はしや蝙蝠飛ぶ屋の秋の暮　大魯（蘆陰句選）
揚屋出て大門を出て秋の暮　樓川（其雪影）
舟待て背戶もさゝれず秋の暮　一鼠（𧢼＊明＊）
事にふれ日にもよる也秋の暮　雨谷（同）
いつも來る乞食の聲や秋の暮　春坡（五車反古）
喰て寐る身の拙きに秋の暮　成美（成美家集）

閑中日月長といふことを

秋の暮鐘長閑なり人なしに　同（同）
西に見る山の高さよ秋の暮　士朗（枇杷園句集）
よい月が出ようとするぞ秋の暮　同（同）
日の暮れぬ日はなけれども秋の暮　同（同）
柞原薪樵るなり秋の暮　巢兆（曾波可理）
我植ゑし松も老けり秋の暮　一茶（享和句帖）
一つ鳴くは親なし鳥よ秋の暮　同（同）
手招きは人の父なり秋の暮　同（同）
御佛の外の石さへ秋の暮　同（同）
越後節藏に聞えて秋の暮　同（旅日記）

下の關

どの蟹も平家めく也秋の暮　同（同）
中々に人と生れて秋の暮　同（我春集）
象潟やそでない松も秋の暮　同（七番日記）
松島や一こぶしづつ秋の暮　同（同）
小男鹿や片膝立てゝ秋の暮　同（同）
姥の寐たやうな石なり秋の暮　同（同）

松井身まかりぬと聞く

正夢や終にはかゝる秋の暮　同（同）
えいやつと活た所が秋の暮　同（同）
薪ちよぼ〳〵遠山作る秋の暮　同（同）

我拵へし野煙りも秋の暮　同（同）

親といふ字を知てから秋の暮　同（同）

草からも乳は出るぞよ秋の暮　同（同）

江戸〳〵と江戸へ出づれば秋の暮　同（同）

杉で葺く小便桶や秋の暮　同（同）

又今年死損じけり秋の暮　同（同）

親なしや身に添ふ影も秋の暮　同（同）

蘆の穂を蟹が挾んで秋の暮　同（的中集）

連にはぐれて

行くな雁住めばどつちも秋の暮　同（おらが春）

一人通ると壁に書く秋の暮　同（同）

佐渡ケ島

茱も宿なしにて候秋の暮　同（一茶句帖）

留舟や古人箇様の秋の暮　同（同）

古郷は雲の先なり秋の暮　同（同）

錢金を知らぬ島さへ秋の暮　同（九番日記）

善光寺の柱に長崎の舊友昨二日通るとありけるに

知つた名の落書見えて秋の暮　同（同）

小言いふ相手のほしや秋の暮　同（同）

幼な子や笑ふにつけて秋の暮　同（同）

秋の暮松見て立てば人も立つ　梅室（梅室家集）

秋の暮簀覗けば鮠一つ　同（同）

物申に肝つぶれけり秋の暮　同（同）

山臥の山に入けり秋の暮　同（同）

宇都の山にて

俯むいて旅人來たり秋の暮　蒼虬（蒼虬翁發句集）

山一つ越ゆるや岨の秋の暮　同（同）

我立てる煙は人の秋の暮　同（同）

一里を日は打越して秋の暮　同（同）

庭掃けば掃ほど淋し秋の暮　同（同）

見に行けば鐘撞き果てつ秋の暮　花讃女（萩陀羅尼）

山門をぎいと鎖すや秋の暮　子規（子規句集）

留別

十一人一人になりて秋の暮　同（同）

藪寺に磬打つ音や秋の暮　同（全集）

秋の暮東照宮に鳴く鴉　同（同）

人折々嵯峨の徑の秋の暮　月村（同人）

秋の暮どこかに晝の溫みかな　紫金牛（倦鳥）

秋の暮端山を歸る酒使　白雲郷（同）

秋の暮

山本の一むら杉や秋の暮　子規（全集）

雲も里も草木もどこも秋の暮　青々（倦鳥）

見るもの丶無きにも見るや秋の暮　同（同）

こゝに來て住む故おもふ秋の暮　同（同）

しもた屋の打水早し秋の暮　月斗（同人）

馬の子は皆賣られけり秋の暮　虹兒（辛夷）

秋の夕

秋は此法師姿の夕べかな　宗因（梅翁宗因發句集）

定家

舟灸る苫屋の秋の夕哉　嵐雪（虛栗）

大きなる家ほど秋の夕かな　許六（韻塞）

いづくも同じ秋の夕暮と言へるにとりつきて

立出づる秋の夕や風ほろし　凡兆（猿蓑）

我宿へ父歸る秋の夕かな　越人（庭竈集）

山代の溫泉にて

溫泉の山や秋の夕は餘所の事　千代尼（千代尼句集）

語れかし秋の夕の蓑作り　白雄（白雄句集）

悲しさに魚喰ふ秋の夕かな　几董（井華集）

老そめて戀も切なれ秋夕　同（同）

さぼてんやのつぺらぽうの秋の夕　一茶（七番日記）

うか／＼と人に生れて秋の夕　同（發句題叢）

秋の夕暮

分限者に成たくば秋の夕暮をも捨よ　其角（田舍の句合）

秋の夜（三秋）

秋の夜半　夜半の秋　秋の宵　宵の秋

古書校註

【御傘】秋の夜といふ句、長き心あらば永き夜といふ詞、その折にはあるべからず（一）。

【栞草】物哀れなる餘情に作るべし。

註（一）同一懷紙の中にあつてはならぬの意。

季題解說　秋の夜を云ふ。

實作注意　宵の秋・夜半の秋とも用ふ。たゞし宵の秋は單に秋の夜の宵といふのみにあらず、淺き秋の感あり。又夜半の秋は、秋の夜の更けたるを云ふものなれども、深き秋の更けたる夜をいふ感あり。【參照】夜長

例句

秋の夜

出羽なる象潟に旅寢して

夜や秋や海士の痩子や鳴鷗　言水（初心もと柏）

東山が夜の退屈

うつゝなの夜とは秋とは今ぞ無　鬼貫（鬼貫句選）

廿一日二日の夜は雨そぼ降りて靜なれば

秋の夜を打崩したる話かな　芭蕉（笈日記）

秋の夜や山鳥の尾に是の人　支考　（東華集）
秋の夜やあの世の話噓八百　同　（越の名殘）

山居聞琴

秋ひとり琴柱はづれて寐ぬ夜かな　荷兮　（春の日）
秋の夜に寐ならふ旅の宿りかな　千子　（濱虛栗）
秋の夜やする事なくて寐入られず　一笑　（色杉原）
秋の夜や檜垣の水の沸しざめ　使帆　（白川集）
秋の夜や悲しきなりにすむ心　旦藁　（茂此集）

春日四所の宮人達、夜毎に宿直（トノヰ）して戌の刻を限りとして侍るなり

今幾日秋の夜話を春日山　其角　（句兄弟）
秋の夜の夢の餘りの晝寐かな　魯町　（初蟬）
秋の夜に寐足らぬ人の尊さよ　許六　（正風彥根躰）
枕上秋の夜を守る刀かな　蕪村　（蕪村句集）
秋の夜や古き書讀む奈良法師　同　（蕪村遺稿）

閨壺

住む方の秋の夜遠き灯影哉　同　（同）
秋の夜の燈を取る越の寬哉　同　（同）
草の花愁ふる秋の夜と成りぬ　曉臺　（曉臺句集）
秋の夜もそゞろに雲の光かな　同　（同）
秋の夜や心盡しの默りもの　同　（同）
秋の夜は梨の齒冴の寒さ哉　同　（同）
秋の夜や開き協へし笛の孔　同　（同）
心からの雨も降らむ夜の秋　同　（同）
秋の夜や力の灯影後（ド）になる　同　（同）
音に鳴かぬ心だくみや夜の秋　同　（同）
秋の夜や膝越す水は渉られず　同　（同）
秋の夜やそろりと覗く君が門　同　（同）
秋の夜や柞おし削る爐の明り　同　（同）
秋の夜を小鍋の鰷音すなり　白雄　（白雄句集）
秋の夜や秋の哀れは昔よりも　同　（同）
秋の夜や忘れさせては陀羅尼鐘　同　（同）

病中

ちぎれ〳〵物も思はず秋幾夜　同　（同）
畑物に秋の夜を守る焚火哉　召波　（春泥發句集）
秋の夜をあはれ田守の鼓かな　同　（同）
秋の夜に江帥兵を談じけり　同　（同）
秋の夜を何かしろ女が丸行燈　同　（同）
秋の夜や自問自答の氣の弱り　太祇　（太祇句選）

秋の夜

秋の夜や時雨るゝ山の竈の壁　樗良（樗良發句集）
秋の夜や思へば翌は佛の日　月居（新古選）
　長夜の心を
秋の夜は松島の松も數ふべし　成美（成美家集）
秋の夜や壁に懸けたる泣面　士朗（枇杷園句集）
秋の夜は山の奥にも勝りけり　同（同）
秋の夜は明てもしばし月夜哉　同（同）
　枕石山
秋の夜や旅の男の針仕事　一茶（一茶句帖）
秋の夜や障子の穴の笛をふく　同（一茶發句集）
秋の夜や祖師もかやうに石枕　同（一茶句帖）
秋の夜の書齋を照すらんぷ哉　子規（全集）
秋の夜を竹商人に訪はれけり　非文（倦鳥）
秋の夜や新内去んで風迅き　月笠（曲水）

夜半の秋

子鼠のちゝよと啼くや夜半の秋　蕪村（蕪村句集）
　丸山氏が黒き犬を画きたるに賛せよと望みければ
已が身の闇より吼て夜半の秋　同（同）
甲賀衆のしのびの賭や夜半の秋　同（同）
軒に寢る人追聲や夜半の秋　同（新句題苑集）
焚しさる火や細ごころ夜半の秋　白雄（白雄句集）
逢ふの町や針研ぐ夜半の秋　几董（井華集）
　忘られし女の嘆ひ比丘尼の庵に身を寄せけるしに
妓王寺へ六波羅の鐘や夜半の秋　同（同）
くせつきし二度の目ざめや夜半の秋　井宙（懸葵）

宵の秋

夜着の香も嬉しき秋の宵寢哉　支考（梟日記）
淋しさにつけて飯食ふ宵の秋　成美（成美家集）
蟬などや衣ほしからん宵の秋　青々（倦鳥）

夜長（中）　長き夜

古書校註
【俳諧歳時記】八月より九月にわたるなり。
【栞草】八月。夜の短き至りは夏至に過ぎず、夜の長き至りは冬至に過ぎず。然れども秋の夜を以て長夜とする所以は、秋分晝夜等しく、初めて夜の長きを覺ゆ。夏の短夜に對して秋を長夜とするか

季題解説　秋の夜のいと長く覺ゆるをいふ。「月令博物筌」に「夜の至りて長きは冬なるに、永き夜を秋の季とするは、夏の夜の餘りぞみじかきに、此月はたゞちに長く覺ゆる故なるべし。八月より九月に渡るべし」とあり。

參照　秋の夜

例句

夜長

長き夜を疝氣ひねりて旅寐哉　鬼貫（鬼貫句選）

　　下白悼
燈火を嘸長き夜の力草　同（七車）

御遷宮過ぎて大工の夜は長し　許六（正風彥根躰）

長き夜やいろ〳〵に聞く蟲の聲　同（風俗文選犬註解）

　　乙州に別るゝ時
語るにも夜長くなりて別れけり　北枝（猿丸宮集）

梟の來ぬ夜も長し猿の聲　同（小弓誹諧集）

長き夜も旅草臥に寐られけり　去來（續虛栗）

粟稗を夜長に焚かん秋三月　野徑（己か光）

　　孟耶觀の夜話
夜話の長さを行はどこの山　丈草（幽賞）

　　玄梅子撰集のよし聞て
夜は長し奈良の話や南圓堂　智月尼（鳥の道）

　　肥後の國八津の宿に
明兼る夜半を松籠の焚火かな　惟然（後れ馳）

くたまきの此頃長くなる夜かな　素行（同）

長き夜の遠くて近し得方丸　其角（柏崎）

氣短し夜長し老の物狂ひ　支考（文星觀）

長き夜や押つけて鳴く鳥の聲　尙白（忘梅）

燈心で尺とる夜の長さかな　也有（蘿葉集）

長き夜や通夜の連歌のこぼれ月　蕪村（蕪村句集）

山鳥の枝踏かゆる夜長かな　同（同）

常燈の油尊き夜長かな　同（蕪村遺稿）

長き夜や物憂き冠者が北枕　同（新五子稿）

長き夜や餘所に寢覺めし酒の醉　太祇（太祇句選）

長き夜や思ひけし行く老の夢　同（同）

寐て起て長き夜に住むひとり哉　同（同）

長き夜や夢想さらりと忘れける　同（同）

長き夜を半分酒に遣ひけり　同（同）

長き夜を葉ずれにずれる軒の石蕗　白雄（白雄句集）

傘に鼠のつきし長夜かな　同（同）

長き夜や磯の匂ひの物につく　同（同）

長き夜の寐覺語るや父と母　召波（春泥發句集）

長き夜にやゝ讀盡きぬ若菜の下　同（同）

長き夜やあらまし成ぬ翌の業　同（同）

　　亡毋喪中
移り行く日に衰へて夜は長し　曉臺（曉臺句集）

夜長

長き夜や目覺ても我影ばかり　蘭更（半化坊發句集）
長き夜や眠らば顔に墨塗らん　樗良（樗良發句集）
出るかと妖物を待つ夜長哉　几董（井華集）
長き夜や思ひ餘りて後世の事　諸九尼（諸九尼句集）
稚子の灯けちたる夜長かな　士川（續明烏）
長き夜を我に向ふや屛風の繪　成美（成美家集）
骨柴の崩れて後も夜ぞ長き　同（同）
馬鹿長き夜と申したる夜長哉　一茶（享和句帖）
播子木も氣色に並ぶ夜長哉　同（旅日記）
面白き夜長の門の四隅哉　同（七番日記）
蚤共が嘸夜長だろ淋しかろ　同（同）
あいつらも夜長なるべしそゝり唄　同（同）
長いぞや夜が長いぞよ南無阿彌陀　同（同）
十ばかり屁を捨てに出る夜長哉　同（同）
下駄からり〳〵夜長のやつら哉　同（同）
隱家や一かたまりの夜長衆　同（九番日記）

田中

一の湯へ灯貰ひに行く夜長哉　同（一茶新集）
長き夜や人灯を取つて庭を行く　子規（子規句集）

猫に紙袋をかぶせたる畫に

何笑ふ聲ぞ夜長の臺所　同（同）
長き夜や千年の後を考へる　同（全集）
汽車過ぐるあとを根岸の夜ぞ長き　同（同）
つく〴〵と古行燈の夜長かな　鳴雪（鳴雪句集）
田のあとを蓮のしよぼつく夜長哉　素史（倦鳥）
ほこりかと見てし夜長の竈馬なる　之宗（同）
二上の霧が軒ひく夜長かな　同（同）
夜話の火桶出しある夜長かな　青々（同）
慈姑田の葉はくらがりに夜長かな　同（同）

秋高し（あきたかし）（三秋）

季題解説　秋の候には空氣澄みて天も高く感ずるをいふ。爽涼の眺めにもあるべし。［參照］秋麗、秋澄む。

例句

秋高し

秋高き天文臺のともしかな　子規（全集）

滿洲建國

國たちて二年亞細亞の秋高し　青々（倦鳥）

秋麗(あきうらゝ)（三秋） 秋(あき)うらゝか

季題解説 秋殊に晴れて日のうらゝかなるをいふ。参照 秋高し(アキタカシ) 秋澄む(アキスム)

例句

秋うらゝ　澄切て鳶舞ふ空や秋うらゝ　正己（藤の實）

十月十七日初めて飛行機に上る

天上の聲の聞かるゝ秋うらゝ　別天樓（倦鳥）

秋澄む(あきすむ)（三秋） 秋氣(しうき) 秋氣澄む(しうきすむ)

季題解説 秋の大氣の澄めるをいふ。参照 秋高し(アキタカシ) 秋麗む(アキウ…)

例句

秋澄む　月と日の間に澄めり富士の山　士朗（枇杷園句集）

九月十六日遠江の國有玉といふ處にて 一瓢上人のひゆびに招かれ侍りて

炭そゝぐ水も秋澄む苔の上　道彦（蔦本集）

秋乾き(あきかわき)（三秋）

季題解説 秋は風もするどく、日もいら〳〵と、物の乾きの著しきをいふ。又蘭栽培の四戒とて「春不出。夏不日。秋不乾。冬不濕」と云へる事あり。即ち秋は物の乾燥し易きにより此戒もあるなり。参照 秋旱(アキヒデリ)

例句

秋乾き　甃砌の鉢木中々秋乾き　小酒（倦鳥）

千秋樂(せんしうらく)（三秋）

季題解説 盤渉調(バンシキテウ)の曲にて、拍子八、又十六拍子、王子降誕七夜にこれを奏す。秋の野に萩女郎花風に吹しくが如く吹べき也といふ。

實作注意 千秋樂は一つの曲名なり。時を選ばず奏せらるゝものにして、秋に限りて奏するものにはあらず。「秋の野に萩、女郎花、風に吹しくが如く吹べき也」と云ふは、樂師の秘傳として傳ふる妙技を云ふ。参照 秋(アキ)

律の調(りちのしらべ)（三秋）

季題解説 支那に十六律六呂と云ひ、律を陽とし、呂を陰とす。日本の慣はしにては、呂を陽とし、律を陰とす。故に律の調とは秋を意味することなるべし。参照 秋(アキ)

例句

左柳亭にて

律の調　常盤木も律の拍子や雨の庭　乙由（麥林集）

龍田姫（たつたひめ）（三秋）

季題解説　東を春とし、西を秋とす。奈良の都の東に佐保山あり、西に龍田山あり。故に佐保姫を霞立つ春山の神とし、龍田姫を紅葉染むる秋山の神とす。

實作注意　龍田姫は秋を象徴する神なれば、大どかに氣高く、其景情に適ふやうに詠出すべし。なほ作例を玩味すべし。〔參照〕秋――春・佐保姫等

例句

龍田姫

山深み尼が紅さす龍田雲　重仲（住吉物語）

染ものゝ茜手傳へ龍田姫　寄木（枕かけ）

手拭ひは何山姫の温泉に染まん　支考（蓮二吟集）

御名の出ぬ日は無かりけり龍田姫　素檗（素檗句集）

鬼灯の山かせもがな龍田姫　同（同）

　門外より早池峰を望みて

菊を見て年寄り給へ龍田姫　乙二（松窓乙二發句集）

　庵開き

晴きつてお寒からふよ龍田姫　同（同）

摺る墨を覗きにおはせ龍田姫　同（同）

龍田姫四十越えぬと申しけり　子規（全集）

　龍田明神の御神體は一葉の紅葉也とぞ

もみぢ葉の一葉をいつき龍田姫　青々（倦鳥）

龍田姫染めて紅葉のあるじかな　同（同）

葉は染めてしづまりましぬ龍田姫　同（同）

龍田姫業平の歌杜牧の詩　同（同）

天文

秋の空（三秋）　秋の大空　秋天

季題解説 大氣の澄み渡りて高き空をいふ。

實作注意 「秋高し」は感じの上に然か思ふものにして「秋の空」は空の色に秋を見るなり。 **参照** 時候——秋高し

例句

秋の空

にょつぽりと秋の空なる富士の山　鬼貫（鬼貫句選）
昔から穴も明かずよ秋の空　同（同）
旅の日は何處らにやある秋の空　同（同）
富士川や目くるほしさに秋の空　同（同）
誰が身にも一つ二つは秋の空　同（七車）
蝶鳥の知らぬ花あり秋の空　芭蕉（芭蕉句選拾遺）
老父病中
空や秋樹をあくれば七多羅樹　其角（萩の露）
秋の空尾上の杉に離れたり　同（炭俵）
空や秋水ゆり離す山颪　同（五元集拾遺）
秋の空富士をいろいろに撩けり　卜尺（其袋）
上行くと下來る雲や秋の空　凡兆（猿蓑）
樫の木の色もさむるや秋の空　去來（泊船集）
秋空や日和狂はず柿の色　洒堂（續猿蓑）
旦閑の東叡に詣にれて
頸筋も浮雲もなし秋の空　許六（小弓誹諧集）
木犀に曇り捨てたり秋の空　芦文（つばさ）
橙の一日二日や秋の空　紫貞女（田植諷）
秋の空昨日や鶴を放ちたる　蕪村（蕪村遺稿）
行先に都の塔や秋の空　太祇（太祇句選）
浪人の絃音淒し秋の空　移竹（乙御前）
秋の空澄たるまゝに日暮たり　亞滿（續明烏）
耻かしやおれが心と秋の空　一茶（七番日記）
椎の木を伐り倒しけり秋の空　子規（子規句集）
秋の空青菜車のつゞきけり　同（同）

秋の日（三秋）　秋の朝日　秋の夕日　秋の入日　秋の日影

季題解説 此處に秋の日といふ此「日」は太陽を指すものなること、彼の「春

の日」の春の太陽を云ふに同じ。朝日・夕日など、皆秋の日の輝きを詠ずるなり。

【實作注意】 秋の日輪の事を云ふも、秋一日のうちの事に通ふ句にもなることあり。それは敢て妨ずとせども、季題分類の上にも、又作句の上にも、此事一應明瞭に分別し置くべき要あり。卽ち秋の日と云ふ類に二樣あり。一は天文に屬し、英語の sun にあたり、一は時候にして英語の day にあたる。而して此の季題とする本來の意は第一天文に屬するものたるべく、時候の「秋の日」は天文に依つて生じたる現象なれば是れ第二なり。併し乍ら現實に於て此二つは相交錯せり。故に不可分の如くなれども亦分ち得ざるには非らず。此事心得べきものなれば是を玆に云ふ。又近頃世に誤れる事の多し、「日」は日輪の象形文字なれば直覺的なり。然るに太陽を云ふに「日」一字漸く廢れて「陽」一字これに代はらんとする傾きあり。此事其意を得ぬことなれども、滔々として流行す。「陽」は陰陽と續きて相對的の文字なり。「太陽」又は「夕陽」と熟字になりて日輪を現はし、「陽」字は總ての積極性を有するものに附きて其物を現はすものなるを以て、日輪の意無きにはあらざれど、必ず日輪を云ふには限らず卽ち相對的なり。「日」の象形文字にして絕對的なると相違す。好んで世俗に雷同するは愚なり。【參照】時候「秋の日」。

【例句】

秋の日

景により泊るや秋の日高寺　沾德（沾德句集）
秋の日や富士の手變の朝朗　鬼貫（鬼貫句選）
秋の日や浪に浮たる三穗の濱　同（同）
秋の日や愛らは障子張直し　之道（あめ子）
秋の日や南園堂を覗きける　珍碩（四季千句）
鷺鳴て秋の日よわき曇りかな　牧童（卯辰集）

山中蟋蟀橋にて

秋の日や猿一ト連の山の橋　楚常（同）
秋の日の假初ながら亂れけり　去來（嗚野後集）
秋の日や障子かげろふ鱗形　許六（初蟬）
秋の日や足る事なくて飛鳥山　闌更（半化坊發句集）
大根の二葉に秋の日ざし哉　子規（全集）

秋の入日

鷄頭にしみつく秋の入日かな　吾仲（柿表紙）
羽をかへす雎鳩に秋の入日かな　白雄（白雄句集）

象潟と舟を同じうして此長途に遊ぶ

悲しさや秋の日は入る隅田川　成美（成美家集）

月（三秋）

魄（はく）　姮娥（こうが）　嫦娥（じやうが）　玉兎（ぎよくと）　銀兎（ぎんと）　兎魂（とこん）　玄兎（げんと）　銀蟾（ぎんせん）　玉蟾（ぎよくせん）　蟾兎（せんと）　蟾（せん）

蟾盤（せんばん）　皓魄（かうはく）　氷輪（ひようりん）　氷鏡（ひようきやう）　水精（すいせい）　玉魂（ぎよくこん）　玉輪（ぎよくりん）　玉盤（ぎよくばん）　玉鏡（ぎよくきやう）　金（き）

精　金盆　金魄　金丸　月球　月輪　桂男　さゝらえ男　月讀男　月夜見男　月人男　小愛男　秋の月　月の秋　月夜　月代　月影　洩る月　照る月　照る月波　金波　月清し　月澄む　さやけき月　月の光　晴るゝ月　曇る月　月の雲　月の隈　月暗し　月の闇　薄月　月細し　月の出　月渡る　傾く月　更くる月　月の入　月落つ　落つる月　入る月　いるさの月　朔日頃の月　曉月夜　有明月　明の月　曙の月　朝月夜　朝の月　のこる月　殘月　晝の月　夕月　夕月夜　宵の月　宵月夜　夜の月　夜半の月　半月　弦月　弓張月　上弦の月　下弦の月　月の蝕　月のはえ　月蝕　月の暈　月の輪　月の鼠　月の兎　月の蟾　月の霜　月の雪　月の鏡　月宮殿　月光殿　月の都　月の舟　月の弓　月の劍　月の氷　宿の月　庵の月　窓の月　閨の月　松の月　庭の月　葉越の月　山の月　峯の月　岨の月　池の月　海の月　波の月　水の月　田毎の月　哉生明　哉生魄　既生魄　月の雨　雨夜の月　月の出潮　月の宿　心の月　眞如の月　法の月　月の桂　月の桂の花紅葉　月の桂の實

古書校註

【山の井】　三日月のたわめる影を、西方に往生腰とも、勢至腰なども云ひなし、山頭のこゆびゑぼし(一)とも、空の海の鈎とも見たて、宵のまばかりまみゆる心を、晝出て夜はいるまやう、(二)朝晝いねてよひまどひなども云へり。六七日のかたわれの頃は、月の舟と云ひて、水まさ雲に出るとも、烏鵲の橋の下行くとも云ひたて、望月の影に向ひては、天女の養鏡とも、山姫の姿見とも見なし、有明の光りを油つきとそへ、よひの影を盃といひかけ、又丸額丸・裸なども云ひなせり。月蝕は望にあめる事なれば、多くは餅を食するによせ、又桂の葉の虫くひかとも云ひなす。薄らかに曇りて笠など着たるは雨用意・かくれ笠なども云ひ、雲水に棲む蟾かとも、霧の海なるくらげにやとも云ひ侍る。(中略)おほやう月の句は、千夜を一夜と明るを惜み、暮るを遲しと待侘び、雲を悪みて敵とし、雨ばらしを味方と云ひ、影をめでては無價寶珠ともてはやす心をむねといひ侍る。〇月の桂とは、月中に五百丈の木あり、其木のもとに人あり、姓は吳、名は剛、是を月人男とも、桂男とも云ひ侍るとぞ。月の蟾とは、月を則ち玉蟾とも云ひて、かへるの有りと云へば也　月の兎とは、白兎と云ふに付きてなるべし。月の鼠と云ふ事、其の出所宜しからねば所により時に隨ひて、はゞ

かる事などかならん、事は佛書に。

【御傘】　月に彌生・衣更着の類付ても不レ苦。月に月次の月の字、連に五句なれば誹には三句去べし。月次の月に、衣更着・彌生・梢の秋・しはすなどの月の異名、如二連歌一二句去也。此異名も年月・月日などには嫌はず。又五月雨は月の字あれ共月の字に少も不レ嫌。「月に日次の日」日に月次の月、打越を嫌べし。〔月と月〕五句去也。聲に讀ても同し。但、月次の月には三句可レ去。月次の月とは、水無月・文月・は、月・長月・菊月・神無月・霜月等也。夜分に非ず、天象には打越を可レ嫌也。(中略)月次の月に有明・天象なれば打越を嫌べし。日・星は打越をば嫌へども付ては苦からず。有明は月の名なれば打越をも嫌ひ、付事もならず。只二句去にして置べし。〔月・日・星〕如レ此光物三句、誹には二句づゝ嫌べし。〔月の雪・月の霜〕夏の詞人ては不レ可二降物一、是新式の文言也。新式の可レ分二別一物のうちに、花の波・花の瀧等の雨方へ嫌ふ類にあげて置きながら、此月の霜・雪ばかりに、夏の季ならば降物に非ずと筆を加らるゝに付きて知りぬ。秋にても同じ事也。夏秋は雪の降らぬ時なれば、月の影の雪に似たると云ふばかりにて、降物にならずと云へり。然らば夏秋の句にてあらずば、たとひ月の影の霜雪にまがひたる句なりとも、冬になりて又降物に二句嫌ふべき也。夏秋の句ならば降物には不レ嫌。霜の字には三句、雪の字には七句、但、月のうつりたる眞の雪ならば、此の沙汰に不レ及、降物也。又、霜は秋も降物なれば、月の霜は雪にかはりて、句體により秋の句なれば降物に成る也。月の霜とばかりは冬なり。〔月の秋〕夜也。花の春とし、植物になるとおなじ。〔けふの月〕夜をまつ月。入相にむすぶ月。日に結ぶ月。三日月の出る。夕月夜等、皆夜分にあらず。〔月の宿〕露・水などに結ばねば、月を見る宿の事也、居所也。〔月をあるじ〕非二人倫一、月のあるじは人倫也。〔月の友〕人倫也。但句體によるべし。月を友、人倫にあらず。月を玉の兎とも玉兎とも誹には仕候、秋也。眞の月也。〔月影と續きたる詞〕同折には惡し。折をかへては今一もすべし。されども五文字などに續けては目に立ち候。置所を替てすべし。月に影を結びたる句、折をかへ今一句有べし。〔月の出しほ〕鹽に七句去べし。句によつて水邊也。月のみち・かけと、鹽の滿・干と同じ事なれば、月の出る時、さす鹽を月の出しほと云ふ也。是水邊の句也。又、月の出さまを、出しほと云ふ事有り。それは入の字を書く故に、連歌には其の時鹽に面を嫌ふ也。眞の出鹽なれば折を嫌ふ故、誹諧には其の時は面を可レ嫌。又月ならで、舞のでしほ・太夫のでしほなどは、鹽の字に二句可レ嫌。曾水邊にきらはず。〔月の桂の花〕只桂の花としても秋也。以上無言(三)。是新式に見えぬ事也。月の桂の事は聖教より出で、又唐の詩文にも有レ之。「春霞たなびきにけり久方の月の桂の花や咲くらん」と貫之の詠めるうへは、春にこそすべけれ。一切の實のなる木の花は春花の咲く也。秋花咲きては次第不レ叶。詩には月を桂の一字にて持たせ、光を花

と作るとも見えたれど、桂の實とも種とも有りと見えたり。皆寓言めきたる義ながら、桂の字にたよりて詩人の謬にするを、哥仙の詠歌をすておき、詩の法を哥道に用ひむ事はいかゞと思はれ侍る。他の事はともあれ、月の桂ばかりは、花をば貫之の哥を證歌にし、春とし、桂は實のる三五の秋と詩にも侍れば、實をば秋に定めたきもの也。但「秋きても月の桂のみやはなる光を花とちらすばかりに」と云ふ歌もあれば、所レ好に隨ふべし。「月の桂の花紅葉」植物ならず。作レ去植物ニ句續きたる三句目には不レ苦といへどもすべからず。植物にあらざる故、一句隔てたらば憚るべからず。月に、更級姨捨不レ可レ付。花に吉野、紅葉に立田の類也。〔月にいのる〕戀也。神祇に非ず。〔月のさやけき〕秋也。月さえては冬也。月見るに、又月をながむるなどゝ云ふ句は、同折も不レ苦。月のぼるに、舟のぼる、連歌には五句とあり、誹には三句去べし。〔月の氷〕冬也。只さやかなる事也。水邊に非ず。但し、氷にうつりたる月の句體ならば可レ爲ニ水邊一。

【年浪草】 春秋元命苞に曰、太陰の水精月となる。○物理論に曰、月は水の精、潮に大小有り、月に虧盈有り。○月の霜・雪・氷とは杜甫の中秋詩に云、滿月飛ニ明鏡一、歸心折ニ大刀一、轉蓬行レ地遠、攀桂仰天高、水路疑ニ霜雪一、林棲見ニ羽毛一、此時瞻ニ玉兎一、直欲レ數ニ秋毫一。東坡の詩に曰、氷輪橫レ海闊。朗詠の詩に云、秦田之一千餘里凜々鋪レ氷(四)。○月の桂の花・實・紅葉と八月。桂とは酉陽雜俎に曰、月中に桂あり高さ五百丈、下に一人有り、常に之を斫る。樹は創つくに隨つて合す。その人姓は吳、名は剛、仙を學ぶ、過ち有りて謫せられて樹を伐らしむ。春は月の桂も影かすむよしを云ひ、夏は桂の影涼しきよしを云ひ、秋は月の桂も紅葉して照增ると云ひ、冬は月の桂も冬枯れぬるにや、影寒く見ゆるなど詠ずと、八重垣に有り。八雲御抄には月の桂の花は光を云ふとなり。○照月次とは古今に一水の面にてる月なみをかぞふれば今宵ぞ秋の最中なりける　源順一。照る月を月次にかけて云ふと也。○弦月とは釋名に云、弦は月半の名也。其の形一旁は曲り一旁は直にして弓の弦を張るごとき也。律暦志に云、弦の日は日其の側を照す。人其の旁を觀る。故に半明・半魄、是を近一遠三と爲す。上弦は是れ月盈ること一半に及ぶ、弓の上弦のごとき也。下弦は是れ月虧ること一半、弓の下弦のごときなり。云々。凡そ七日八日を上弦と爲し、廿二日廿三日を下弦と爲す。○玉兎は張衡靈憲に云、月は陰精の宗積て獸を成す、陰の精に象る、其數偶なり。五經通義に云、月中兎と蟾と有ること何ぞや。月は陰也。蟾蜍は陽也。而も兎と並び明なり。陰陽に繫る也。(略)○月の暈は漢書に曰、高帝七年、月暈參畢を圍むこと七重、占して云、畢昴の間天の街也。街北は胡、街南は中國、後果して平城の圍有り。七日冒頓乃ち解く。(略)○心の月・胸の月とは十八道行用に曰、觀想スルニ我心月輪ノ上ニ有ニ梵字一云々。しをり萩(五)に云、心の月とは淸き心なり。胸の月も胸の内の曇らで淸きなるべし。猶深意も侍るにや。○盃の影は御傘に曰、盃の光りなど

月によそへたらば秋となすべし。西の月は松を待といへり　○月の鼠とは佛說譬喩經に曰、黒白二鼠有り、互に樹根を齧む、乃至樹根命に喩へ、黒白の二鼠を以て晝夜に喩ふ云々　是は經說の無常の喩に人虎に逐はれて、野中の井に陷らんとして岸の草をひかへて、底を見れば、毒蛇口を開きて飲まんとす。又黒白の鼠がはる〳〵此の草の根を食ふ。せんかたなく猛虎毒蛇に害せらるとなり。是虎は我が平生の造惡の業、黒白の鼠は月日の過ぐる也。毒蛇を地獄に喩へたり。是を月の鼠と云ふ　樓炭經の文也。（奥義抄）○月の劍とは髑髏狀、刀劍の形に似たり。之を月の劍と謂ふ。○月の都とは起世經に曰、日月天子の宮殿縱廣正等にして四十九由旬、四面垣牆七寶所成なり。月天宮殿純ら天の銀天青瑠璃を以て相間錯す。乃至五風攝持せられて行く、月天宮空に依て行く、此の月宮殿に於て大輦有り。青瑠璃にて成す。輦の高さ十六由旬、廣さ八由旬。（下略）

【栞草】拾穗抄　月よみ男・月讀・月夜見・皆月の名也。日本紀に見ゆ月は男神故に男といふ。○月の舟、半月をいふなり。○月のかゞみ、滿月をいふなり。

註（一）小倉百人一首　（二）人間様　物事の普通と反對なるをいふ　（三）木食上人の著はせる連歌の作法書「無言抄」　（四）八月十五夜の詩なり「鋪氷」は「氷鋪」の誤　（五）元祿五年中翔仙庵の著はす所　連俳の詞を集め註せり

季題解說　月を見ること四時隔なし。然れども秋は金氣を得て月いよ〳〵明らけし　よりて月とのみ言へは、詩歌連俳ともに三秋にわたる、

實作注意　月の別名には姮娥＝嫦娥＝玉兎＝銀兎＝玄兎＝銀蟾＝玉蟾＝桂男＝さゝらえ男＝月讀男など多し。又月代は、月の將に出でんとして空の明るくなるをいふ　月の出潮とは、月の出るとき漲くる潮をいふ。朔日頃の月は、三秋共七日以前の月をいつもいふなり　弦月＝弓張月に上弦、下弦の名あり。上弦は七八日頃の月をいひ、下弦は二十二三日頃の月をいふ。月の蝕、月蝕は秋に限らざれども、古人は月といふ文字上より秋の季となせり。月の鼠・月の兎・月の蟾など、之らは支那の神話又佛說より出づ。月の霜＝月の雪ともに月光の皎皎たるを形容せしものにて、月宮殿＝月の都は共に月の清朗より聯想したるもの。照る月波＝金波ともに水波を照らす月影をいふ。月の鏡は滿月のこと。月の舟＝月の弓は共に半月のこと、其形よりかくよぶ。月の劍は三日月の形容にて、月の雨＝雨夜の月雨そぼふりてなほ薄く月影あるをいふ。哉生明は三日、三日の月をいふ。哉は始なり。前の月大なるときは二日に明を生し・前の月小なるときは三日に明を生ず。哉生魄は十六日の月をいひ、既生魄は十七日の月をいふ。月の桂とは昔支那にて云ひ出せし傳說にて、月の世界に桂樹あり、其高さ百丈、人ありて常に其樹を伐ると雖も、樹創隨つて合すと云ひ、杭州の天竺寺に仲秋十五夜常に桂子ありて落つと云へり。これ素より想像の生みたるものなれども、月の淸光にあこがるゝ餘りの事なるべし。【參照】上り月（ノボリヅキ）　降り

月見月　望月　盆の月　星月夜　初月　二日月　三日月
待宵　名月　無月　十六夜　立待月　居待月　臥待月
更待月　眞夜中の月　後の月　人事—月見

例句

月

月は花の眞ッ盛りにや二八月　宗因　（梅翁宗因發句集）
月白き鳥は得かゝじ墨田河　同　（同）
大師の詠水の月かや手がさへられぬ　同　（同）
それは近江これや此月紀三井寺　同　（同）
此上は何か阿漕がうらの月　同　（同）
此月になこその關や入間やう　同　（同）
始終眞丸月に雲もなし　同　（同）
友人や古きを以て月も月　同　（同）
廣澤や禿も底に月の聲　言水　（初心もと柏）
一思案扨も雛なし秋の月　同　（言水句集）
松の月枝に懸たりはづれたり　來山　（續今宮草）
悼二萬海一
片寄つてあれは鴛なり池の月　同　（同）
秋の月相文臺に向ひしも　同　（同）
露に映る月や千草の數目鏡　同　（同）
北殿よ月に問ふべき渡世なし　沾徳　（沾徳句集）
誰提し綱の雫ぞ橋の月　同　（同）
二階から下りたつ田子や雑魚の月　同　（同）
風虎翁七回忌
水の月汲て拾はん梨葡萄　同　（同）
石山秋月
厭ふとは是見る事か寺の月　同　（同）
繪馬も其御影果しや山の月　同　（同）
病後對月
月ゆゑに痩笑はるゝ明日も哉　同　（同）
見て居るか宿がへ好の松の月　同　（同）
行月や淡路あまへる明石潟　同　（同）
海に濡て乾くや月の東山　同　（同）
明なばの俤受ら窓の月　鬼貫　（鬼貫句選）
歌人は居ながら人[illegible]す
見ぬけれど月の爲には外の濱　同　（同）
秋の月人の國まで光りけり　同　（同）
述懐
銀もてば兎角かしこし須磨の月　同　（同）
貞享四の秋長月十七日の夜興行なしゝに庭のけしき人は知らず

月

今の心是こそ秋の秋の月　鬼　貫　（鬼貫句選）

[illegible]十七日夜の身まかりけるを

行く水に憂世の月もきのふ哉　同　（同）

遊女の憂に寄す

どの方を思うてゐるぞ闇の月　同　（同）

幽霊といふ題に

うつゝなや現なの月の袖に〳〵　同　（同）

大津の子お月様とは言はぬかな　同　（同）

石山の石の形もや秋の月　同　（同）

琵琶の音は月の鼠のかぶりけり　同　（同）

珍しと我影さへや窓の月　同　（同）

六文が月を洩らすな田村堂　同　（同）

木も草も世界皆花月の花　同　（同）

あの月やむかし濱名の橋の月　同　（同）

只の夜の夢の枕や月の晝　同　（七　車）

出ていなば影法師もな須磨の月　同　（同）

唐様や月の其空水の月　同　（同）

昆陽池

物いはぬ魚の片目や水の月　同　（同）

六玉川

谷水や風にたゞよふ月の糞　同　（同）

月影や雲居は消えず鳥の跡　同　（同）

武蔵野の月見にまかりて歸るさに

淋しさを裸にしたり須磨の月　素　堂　（素堂家集）

袖土産今朝落しけり野路の月　同　（同）

四季相果といふ心を

椋の木の椋鳥ならし月と我　同　（同）

月一つ柳散り残る木の間より　同　（同）

一木一草、下水下りといふことにすがりて、我身一つの事を問ふ

袖に綾に露分衣月幾つ　同　（同）

芭蕉翁に

此度は月の肥てや歸りなん　同　（同）

月ぞ知るべこなたへ入らせ旅の宿　芭　蕉　（佐夜中山）

影は天の下照る姫が月の顔　同　（續山井）

實（ゲニ）や月間口千金の通り町　同　（江戸通り町）

夜ル窓に蟲は月下の栗を穿つ　同　（東日記）

侘て住め月侘齋が奈良茶歌　同　（武藏曲）

武藏野の月の若ばえや松島種　同　（松島眺望集）

馬に寐て殘夢月遠し茶の煙　同　（甲子吟行）

三十日(ミソカ)月なし千とせの杉を抱く嵐　同　（同　）
芋の葉や月待つ里の焼畠　同　（鹿島詣）
月はやし梢は雨を持ながら　同　（同　）
あの中に蒔絵書たし宿の月　同　（更科紀行）

善光寺

月影や四門四宗も只一つ　同　（同　）

元禄二年、敦賀の湊に月を見て、気比の明神に詣で、遊行上人の古例を聞きて

月清し遊行の持てる砂の上　同　（猿蓑）
九度(コヽノタビ)起ても月の七つ哉　同　（雑談集）
月さびよ明智が妻の咄しせん　同　（同　）
月澄むや狐こはがる児の供　同　（其便）

湯尾

月に名を包みかねてや痘(イモ)の神　同　（[illegible]寝の種）

燧山

義仲の寝覚の山か月悲し　同　（同　）
秋もはやはらつく雨に月の形　同　（笈日記）
其儘に月も頼まじ伊吹山　同　（同　）
鎖明けて月さし入れよ浮見堂　同　（同　）
柴の戸の月や其儘阿弥陀坊　同　（芭蕉庵小文庫）
我宿は四角な影を窓の月　同　（同　）

古将監の古實語りて

月やその鉢の木の日のした面　同　（翁草）

[illegible]の宅にて

詠るや江戸には稀な山の月　同　（芭蕉翁全傳）

移(ス)芭蕉(ヲ)詞

芭蕉葉を柱に懸けむ庵の月　同　（蓬莱島）
月の誘ふ詩の舟か山市(ヤマイチ)か川武(カハタケ)か　其角　（田舎の句合）
さゝで柴の戸泥坊に咎はなし月　同　（同　）
月に成ぬ波に米守る高瀬歌　同　（東日記）
月を語れ越路の小者木曽の下女　同　（虚栗）
宿とりて東を問ふや暮の月　同　（雑談集）
庖丁の片袖くらし月の雲　同　（炭俵）

熱田ノ旅

更々と禰宜の斯や杉の月　同　（句兄弟）
声かれて猿の歯白し峰の月　同　（同　）

湖上の[illegible]望まれて否みけれど許さゞれば引のけて

傘持も月に後るゝ姿かな　同　（韻塞）

[illegible]の記

渡る月は昔の橋の朽目哉　同　（末若葉）

猿道に我とらんとや橋の月　其角（[illegible]）
宇治橋の串海鼠はうすき月の下知　同（雲龍賦）
小ぐらから古郷の月や明石潟　同（五元集）
水相観の絵に
我書こ讀めぬ物あり水の月　同（同）
夢かとよ時宗起て月の色　同（同）
[illegible]の贊
山の端は大衆也けり床の月　同（同）
布袋の月を掬る絵に
有てなき水の月とや爪はじき　同（同）
張良図
胸中の兵出よ千々の月　同（同）
契リテ不ザル逢レ戀
住の江や夜芝居過ニ浦の月　同（同）
[illegible]の君に申送り作る
閨の灯に光る座頭や袖の月　同（同）
遊子
胡沙吹かば大根で消さん秋の月　同（同）
君が言ひけん言の葉と言ひ捨てゝ出たりけんあした
いねぶるな松の嵐も江戸の月　同（同）
物かはと青豆賣が袖の月　同（同）
[illegible]の書贊
月影や舌を帆に巻く三笠山　同（五元集拾遺）
御築地の内を拝み侍りけるに如意が嶽より出る月
南門にかかりて限りなく目出度ければ
から花に月雫こぼす扉かな　嵐雪（[illegible]）
野に寐たる牛の黒さを秋の月　同（杜撰集）
身一人の不破と月洩る破れ笠　同（[illegible]）
とこぶしは宵の小貝や磯の月　同（風の末）
誰々も東向くらん月の暮　去来（續虚栗）
月澄むや室のやだ船是一つ　同（あめ子）
馬の子の駈け違ひけり濱の月　同（北の山）
[illegible]時雨に出でて
寧さを京で語るも諏訪の月　同（渡鳥集）
関東の宿に小鎗のまたぶし唄ふを聞きて
月影に裾を染たよ浦の秋　同（きむしろ）
博多にて
五里の濱月を抱いて旅寐哉　同（富座相）
日和見る窓には近し月の暮　同（續山彦）
満ち缺くる月に涙ぞ須磨の秋　同（去来文附蔵 よとぎの詞）

戸を明けて月のならしや芝の上　同　（渡鳥集）

助然の山彦撰集を賀す
月華やよき荅へある里の山　同　（山彦）
神子呑や寄りて語らん月と花　同　（幻の庵）
笠の緒の跡すさまじや秋の月　同　（はたけぜり）
月花や細工貧乏人だから　許六　（旅舘）
月花に杓一本の分限かな　同　（渡鳥狩）
曇りなき砂の月夜の須磨明石　同　（正風彦根躰）
味噌鹽を離れきつこや秋の月　同　（同）
乞食せん月の爲には外の濱　同　（東海道）
瀬田の月又來る筈に定りぬ　支考　（西の雲）
一は闇二は月影の華表かな　同　（蓼日記）
猿猴の手を離れてや峰の月　同　（西華集）
下り立てや袖に月ちる波の花　同　（東西夜話）
疊束な蘇に月まつ多胡の秋　同　（同）
月を得て又清からむ三國川　同　（同）

保榮寺眺望
盃の見越やあれは瀧の月　同　（國の華）
哀知れ疊に杖を月の影　同　（同）
水を出て松に遊ぶや庭の月　同　（同）

永月庵
湯豆腐の心を照らせ水の月　同　（越の名殘）

有井亭
その男ありとは聞し桂かな　同　（山琴集）

天滿宮月次
梅櫻は御前に秋の月　同　（獅子物狂）

熊野本宮湯泉
普陀落や湯錢にのぼる松の月　同　（蓮二吟集）

山中の温泉にて
子を抱て湯の月のぞくましら哉　北枝　（卯辰集）
月を松にかけたりはづしても見たり　同　（同）
月花も後ろにしてや貝拾ひ　同　（喪の名殘）
行船や笘洩る月に袖の紋　同　（千鳥掛）
月ひとり家婦が情の契り哉　杉風　（虚栗）
ひつそりと月と我が住む廿日かな　同　（記念題）
暈廣し月に宿かる翌日の雨　同　（木曾の谷）
土釜や指入る月に烹る音　同　（三日月日記）
月更て雁は寐言の相手かな　同　（杉風句集）
行燈も灯は泡だたむ暮の月　同　（同）

猿道に我とらんとや橋の月　其角（きれ〴〵）
宇治橋の串海鼠はつすや月の下知　同（鐵龍賦）
小ぐらから古鄕の月や明石潟　同（五元集）
水相觀の繪に
我書て讀めぬ物あり水の月　同（同）
夢かとよ時宗起て月の色　同（同）
雅亭の會
山の端は大衆也けり床の月　同（同）
布袋の月を掬る繪に
有てなき水の月とや爪はじき　同（同）
張良圖
胸中の兵出よ千々の月　同（同）
契リテ不ザル逢戀
住の江や夜芝居過て浦の月　同（同）
松前の君に申送り侍る
閨の灯に光る座頭や袖の月　同（同）
遊子
胡沙吹かば大根で消さん秋の月　同（同）
君が言ひけん言の葉と言ひ捨てゝ出たりけんあした
いねぶるな松の嵐も江戸の月　同（同）
仲秋の書懷
物かはと青豆賣が袖の月　同（同）
月影や舌を帆に巻く三笠山　同（五元集拾遺）
御築地の内を拜み侍りけるに如意が嶽より出る月南門にかかりて限りなく目出度ければ
から花に月雪こぼす扉かな　嵐雪（石籟溈）
野に寐たる牛の黒さを秋の月　同（杜撰集）
身一人の不破と月洩る破れ笠　同（甄望）
とこぶしは宵の小貝や磯の月　同（風の末）
誰々も東向くらん月の暮　去來（續虚栗）
月澄むや室のやだ船是一つ　同（あめ子）
馬の子の駈け違ひけり濱の月　同（北の山）
長崎諏訪の明神に詣でて
凉さを京で語るも諏訪の月　同（泊船集）
閑木の宿にて小鐘のなたらふ眼ふを聞きて
月影に裾を染たよ浦の秋　同（靑むしろ）
博多にて
五里の濱月を抱いて旅寐哉　同（富座拂）
日和見る窓には近し月の暮　同（續山彥）
滿ち缺くる月に淚ぞ須磨の秋　同（去來文附藏よとぎの詞）

戸を明けて月のならしや芝の上　同　（渡鳥集）

助然の山彦撰集を賀す

月華やよき苔へある里の山　同　（山彦）

神子存や寄りて語らん月と花　同　（幻の庵）

笠の緒の跡すさまじや秋の月　同　（はたけぜり）

月花や細工貧乏人だから　許六　（旅袋）

月花に杓一本の分限かな　同　（追鳥狩）

曇りなき砂の月夜の須磨明石　同　（正風彦根躰）

味噌鹽を離れきつてや秋の月　同　（同　）

乞食せん月の爲には外の濱　同　（東海道）

瀨田の月又來る筈に定りぬ　支考　（西の雲）

一は闇二は月影の華表かな　同　（梟日記）

猿猴の手を離れてや峰の月　同　（西華集）

下り立てや袖に月ちる波の花　同　（東西夜話）

疊東な藤に月まつ多胡の秋　同　同

月を得て又淸からむ三國川　同　（同　）

保榮寺眺望

盃の見越やあれは瀧の月　同　（國の華）

哀知れ疊に杖を月の影　同　（同　）

水を出て松に遊ぶや庭の月　同　（同　）

水月塲

湯豆腐の心を照らせ水の月　同　（越の名殘）

有桂菴

その男ありとは聞し桂かな　同　（山琴集）

天龍宮川次

梅櫻松は御前に秋の月　同　（獅子物狂）

熊野本宮温泉

普陀落や湯錢にのぼる松の月　同　（蓮二吟集）

山中の温泉にて

子を抱て湯の月のぞくましら哉　北枝　（卯辰集）

月を松にかけたりはづしても見たり　同　（同　）

月花も後ろにしてや貝拾ひ　同　（喪の名殘）

行船や管洩る月に袖の紋　同　（千鳥掛）

月ひとり家婦が情の契り哉　杉風　（廬栗）

ひつそりと月と我が住む廿日かな　同　（記念題）

暈廣し月に宿かる翌日の雨　同　（木曾の谷）

土釜や指入る月に煮る音　同　（三日月日記）

月更て雁は寐言の相手かな　同　（杉風句集）

行燈も灯は泡だたむ暮の月　同　（同　）

八朔と節句を添て月二夜　浪化（名月集）

雲[illegible]

祝ふ今日七日の月の兒額　同（白扇集）

貸舟や月に主まつ宵の程　同（風雅[illegible]集）

月に行く有磯の小貝奈呉わたり　同（[illegible]維單圖）

松島や月あれ星も飛ぶ　惟然（淡路島）

先あきよ月を互の無事ながら　同（花の雲）

月よ實誰も餘波はなんとなと　同（三河小町）

また爰でその月ならばその月か　同（四山集）

備中の土にも今か秋の月　同（千句塚）

尚白の老父八十有餘にして身まかり給ひしに

されば月花の佛の兒とやら　同（峯陀稿本）

惣に月は節々雲間かな　土芳（小冊子）

闇しばし夜をよくなして月の顔　同（萬句四之富士）

猪のみだるゝ形や月の雲　同（蓑蟲庵集）

おろおろと向へば月の御光かな　智月尼（有磯海）

天水に溜まる月影まーぱい　同（とてしも）

川上で菜を洗ふたぞ月の影　同（同）

雲少したゞよふ月の隣かな　正秀（土大根）

吹降く楠の見込や月の宿　怒風（百曲）

瓦葺く家も面白や秋の月　野水（春の日）

故寺月なし狼客を送りける　北鯤（虞栗）

加茂詣

月影や拍手もるゝ膝の上　史邦（猿蓑）

芭蕉葉や打かへし行く月の影　乙州（同）

かしましき樫の雫や月の隅　楚常（卯辰集）

月は田面海鳴そふる夜頃哉　秋之坊（同）

人汲まぬ野澤の月やありのまゝ　四睡（西の雲）

大雨や皆寐る頃に晴るゝ月　旦藁（曠野後集）

十七夜

月の名もまだ有るうちぞ頼母しき　落梧（笈日記）

豆腐屋やつとめて月の七つ起　牡年（有磯海）

[illegible]會

片庇師の繪を掛て月の秋　桃隣（陸奥鵆）

後ろ手に父叩きけり月の門　萬子（續有磯海）

月影や海の音聞く長廊下　牧童（續猿蓑）

つくづくとものこそうかめ秋の月　芦角（烏むしろ）

寐る人は寐させて月の晴にけり　涼菟（一幅半）

葭垣のくづれかゝるや秋の月　壺中（弓）

照る月の最中やつツと行く烏　荷兮（柱暦）
行衞なき雲も惜むや夜孤輪　諷竹（三河小町）
擣り井に月の居る間のなかりけり　玄梅（枕屛風）
下刈や月の場とりつ小松原　鶯有（浪鳥集）
三井寺や海より月の濡れあがる　風國（菊人形）
滿月になるや眞向の馬の影　卯七（西國曲）
月淸し水より立て五位の聲　野坡（野坡吟艸）
漏り桶に幾つ影見る不破の月　也有（蘿葉集）
庵の月主をとへば芋掘に　蕪村（蕪村句集）
月天心貧しき町を通りけり　同（同）

となみの瀧

水一筋月よりうつす桂河　同（同）
山の端や海を離るゝ月も今　同（同）

琵琶湖

湖の月やよ望に降る雪かとぞ　同（蕪村遺稿）

所思

宗祇我を戀ふ夜眉毛に月の露を貫く　同（新虛栗集）
蚊の有りつ無かりつ月の船路哉　太祇（太祇句選後篇）
あと追うてわめきくる也橋の月　同（同）

獨坐

月と我と物思ふ頃雲起る　曉臺（曉臺句集）
月見えてふり替りけり浪頭　同（同）
狼の吼失せてけり月がしら　同（同）

八幡宮千百年法樂

若巫女や月に影さす男山　同（同）
月滿て芙蓉の花のすわりけり　同（同）
大方は美女なりけらし月の前　同（同）
大空や月は心の上に置く　同（同）
地はものゝ懷せまし秋の月　同（同）
石山や長閑に出づる秋の月　同（同）
小男鹿の角にかけてや峯の月　同（同）
雲早しいろ〳〵に月を過す哉　同（同）
香千里目にやしむらむ秋の月　同（同）
圓（マトカ）にて二夜も三夜も秋の月　同（同）

川原乞食に酒飮ませて

月に酒己れしのぶの亂れ萩　同（同）
人を怒る遊魚あるべし水の月　同（同）

大阪は父に別れ、我は母をうしなふ、と聞く、仲秋[illegible]一盞りて

思ふ處二つなき夜の月暗し　同（同）

風かなし夜々に衰ふ月の形　曉臺（曉臺句集）
星盡る處まどかに出づる月　同（同）
高根晴れて裏行月の光り哉　同（同）
海原や目の及ばぬを月の隅　闌更（半化坊發句集）
月に猶哀れ阿漕か海の底　同（同）

留別

使りせん月に一見の硯石　同（同）

越中馬目井

只ならぬ跡の跡や水の月　同（同）

旅行

草臥て月にも啼かず旅鳥　同（同）
古へも月古へも布施の秋　同（同）

その名だたるを武藏野に徴して

をしかけや武藏鐙や月芒　白雄（白雄句集）

春鴻が信中へ行くを送る

月嫗捨日出度き影を祈るなり　同（同）
月に影杳かむ駒の疲れかな　同（同）
月晴なん雨に乘せで客來けり　同（同）
網引せしあと靜かなり浦の月　同（同）

良夜近き頃蓼旦が溫泉の山に行くを送る

月の時そちら向ふぞこちら向け　蓼太（蓼太句集）

一の谷

ふることゝの寄來る波や須磨の月　同（同）
雲を拂ひ雲にたゞよふ風の月　樗良（樗良發句集）
月のみぞ花の安宅は海の雲　同（同）
異なるや寶石山の秋の月　同（同）

八月十四日新居會

八九分に新酒盛べし菴の月　几董（井華集）
水ばなに月澄わたるひとり哉　同（同）
艸の戸や秋の日落て秋の月　同（同）
淺河や月をよけ行く步行わたり　同（同）

和歌の浦

行く月や國なき方に田鶴の聲　同（同）
欠伸して月響て請る隣かな　同（同）
黑谷の初夜聞く月の野川哉　同（同）
返り照らす有明の月や小便所　同（同）

草庵を立出るとて

歸り來る日も松に見よ月の秋　同（同）
唐秬に駒や繫がん野路の月　召波（春泥發句集）
橋の月課乞食の念佛かな　同（同）

月影や田を遠近の水の音　同　（同）
月かけて砦築くや兵等　同　（同）
ありと聞く筏枝松や月の前　同　（同）
追風や夜すがら月の走舟　大魯　（蘆蔭句選）
旅宿にて
里人の軒のぼりて月の雲　成美　（成美家集）
月清し懐ろにせん鉋屑　同　（同）
陰に居て月に座敷を譲りけり　同　（同）
身のひまや朝寐よきころ月の頃　同　（同）
ふはと脱ぐ羽織も月の光かな　同　（同）
五百にて
住めばこゝ椎の風折月さして　乙二　（松窓乙二発句集）
かけのぼる背戸山あれや秋の月　同　（同）
浪よけの合歓刈分よ秋の月　同　（同）
鳴る音は添水なるべし月の中　同　（同）
さす月の寐所やすき雀かな　同　（同）
旅寐せば月にも逢はじ萑の戸　同　（同）
よんべ寐し頃にもなりぬ軒の月　同　（同）
すり曲げし蹔にも月を待たれけり　同　（同）
松のなき世ならば何と秋の月　同　（同）
山風に別れて幾夜旅の月　同　（ちのへえ草稿）
高蔵寺に泊りて
粥腹の減るとも知らぬ峰の月　同　（同）
月うれし乳房離れし子の心　同　（同）
上野より出、生れ年より七ツ目の東　給の春
旅寐せば月にも逢はじ萑の戸　同　（同）
のぼりては月の中にも住む姿　同　（同）
待せはし月を迎にそこらまで　同　（同）
翌の夜も御宿申さん月さらば　同　（同）
平角が別荘
そこらから出るとは誠山の月　同　（同）
須磨にて
海人が家は袖にも足らず月の雨　士朗　（枇杷園句集）
明石へ行かむとする曉
須磨篠煙るも月の名残哉　同　（同）
明石にて
月高く雁かね低し淡路島　同　（同）
ひやひやと月に聲ある木の間かな　同　（同）
松かげのはや月にてぞ有にける　同　（同）
白雲亭
古里や老の寐疊に出づる月　同　（同）

月

夜もすがら月の傳(もり)する庵かな　士朗（枇杷園句集）

伯先四十の[illegible]に贈る
面白う年よる人よ月の秋　同（同）

[illegible]には蓮疊むか月の雲　同（同）

[illegible]
鳥居出る惜さや杉に秋の月　巣兆（曾波可里）

深川や蠣殼山の秋の月　一茶（一茶句帖）

戸をさして月にもそぶく住居哉　同（享和句帖）

年寄や月を見るにも南無阿彌陀　同（旅日記）

御月様いくつ昔の神の松　同（同）

更科の月をしめ出す庵哉　同（七番日記）

赤い月是は誰のぢや子供達　同（我春集）

明く口へ月がさすなり角田川　同（株番）

月冴えよあの世の親が今ござる　同（七番日記）

月の額年は十三そこらかな　同（一茶句帖）

反古窓も澤山月の明り哉　同（一茶新集）

[illegible]
門の月殊に男松の勇み聲　同（一茶發句集）

人數は月より先へ缺にけり　同（おらが春）

人の世は月も惱ませ給ひけり　同（同）

忽ちに無疵な月と成にけり　同（一茶句帖）

世は斯うと月も煩ひ給ひけり　同（同）

一とせ廣澤のほとりなる寺に宿して
月はやし今戸の煙消えぬうち　梅室（梅室家集）

冥加なや名所の月を在あかし　同（同）

同じ所にて
月の雲吹くや近くに嵐山　同（同）

月の雲鶴放したる氣色かな　同（同）

六作[illegible]の讃
面影や鏡の山の世々の月　同（同）

越中泊橋本[illegible]即事
橋本に入るとき拜む秋の月　同（同）

一とせの色は見えけり秋の月　蒼虬（蒼虬翁發句集）

松風は明る夜に似て秋の月　同（同）

靜かなるものを丸めて秋の月　同（同）

見ては行き見ては行けり秋の月　同（同）

野に居れば野が捨られず秋の月　同（同）

傘返す家はよく寐て秋の月　同（同）

藪山を終に出ぬけて秋の月　同（同）

なか〳〵に首骨たるし月の雲　同（同）

押拭ひ〳〵行く月の雲　同（同　）
人に逢うて歸る氣出たり山の月　同（同　）
藥少しあるを賴みぞ須磨の月　同（同　）
思案して鎖して入りぬ月の門　同（同　）
月の露散るや心に隙のなき　同（同　）
鐘を撞く坊主見えけり杉の月　子規（全集）
武藏野や月大空のたゞ中に　同（同　）
雨後の月するどき雲のかすめけり　同（同　）

心中甚雪心

心のうちの大空にして秋の月　青々（倦鳥）
月は今大顏にして野にあたる　同（同　）
頸振つて嘶はむ馬や秋の月　旬雨（滿亭集）

月の輪

風玉に月の輪きほふ紫野　鬼貫（七車）

月讀男

月よみっ諭むとも盡きじ懷紙神　宗因（梅翁宗因發句集）

月夜

吹かれても風に破れぬ月夜哉　來山（續今宮草）
榖の木のすんと立たる月夜哉　鬼貫（鬼貫句選）
秋はものゝ月夜烏はいつも鳴く　同（同　）
富士の山に小さうもなき月夜哉　同（同　）

寫樂

我舞て我に見せけり月夜影　素堂（素堂家集）
江を渡で唐茶に月の湧夜かな　同（同　）
我をつれて我影かへる月夜かな　同（同　）
燃くひに火の付やすき月夜哉　其角（五元集拾遺）

[illegible]にて

浦人を寐せて海見る月夜かな　去來（誹諧曾我）
馬の子の濱かけ廻る月夜哉　同（柿表紙）
辻堂に梟立て込む月夜哉　丈草（已が光）
豆麩賣る聲は麓の月夜哉　同（庵生）

五十弁題ニ津月祭ニ

芋を煮る鍋の中まで月夜哉　許六（篇突）
誹諧師犬もおどさぬ月夜哉　同（風俗文選大註解）
背戸門にひよろ〳〵と出る月夜哉　支考（浮世の北）
波よする松のこなたに月夜哉　同（記念題）

留別

長崎の秋や是より江の月夜　同（梟日記）
錦襴も緞子も言はず月夜かな　同（同　）
得手に帆をあげて夜鷹の月夜哉　同（そこの花）

[illegible]

極樂は西に月夜や帆掛船　同（遺の名殘）
とり分きて多摩の郡の月夜哉　杉風（杉風句集）

夜の月

隨分と言ひたい事を月夜かな　雅然（千句のあと）

酒買に舟滑もどす月夜かな　正秀（續山逵）

山寺に米つくほどの月夜哉　越人（春の日）

南天の枝にうつろふ月夜哉　五貫 長皿（卯辰集）

忍ぶ犬を人の咎むる月夜哉　也有（蘿葉集）

桐の葉も掃く程落て月夜哉　同（同）

五六升芋煮る坊の月夜哉　蕪村（蕪村遺稿）

杜若又咲く水の月夜かな　曉臺（曉臺句集）

月の隈十圍の杉の匂ふ夜ぞ　同（同）

鳬啼て漁村の松の月夜かな　蓼太（蓼太句集）

更科にて

姥捨やあだに悲しき夜半の月　樗良（樗良發句集）

睫毛にも露置く秋や夜半の月　几董（井華集）

弓取の古妻したふ月夜かな　月溪（月溪句集）

大名を泊めて蘇鐵の月夜哉　田福（五車反古）

思ふにも波をしをりの月夜哉　乙二（をのゝえ草稿）

蟹が家を覗てありく月夜哉　士朗（枇杷園句集）

海山を洗ひあげたる月夜哉　同（同）

畫讃

海老を喰ふ佛の膝も月夜哉　同（同）

更科を離れし其夜月夜哉　一茶（享和句帖）

かばかりの藪も毎晩月夜哉　同（旅日記）

煤臭き疊も月の夜なりけり　同（同）

月も月抑大の月夜哉　同（株番）

さしあたり當も無けれど月夜哉　同（七番日記）

酒盡てしんの座につく月夜哉　同（一茶句帖）

信の月見にはあらねど

有合の臼の上にて月夜哉　同（同）

月代

月代や昔の近き須磨の浦　鬼貫（鬼貫句選）

月代や膝に手を置く宵の宿　芭蕉（笈日記）

月代や山をいたゞく闇の上　土芳（蓑蟲庵集）

月代に磨き立けり鍋の尻　朱拙（柿表紙）

臥待月の夜湖濱の水樓に遊びて

月代に大津支度や膳津船　木導（水の音）

月代や金の波を枕上　几董（井華集）

月代は必吹くよ根なし風　乙二（松窓乙二發句集）

月代やはや人聲の野に響く　蒼虬（蒼虬翁發句集）

月の出

月の出やすは〳〵半時御所の芝　宗因（梅翁宗因發句集）

米山や實（ゲニ）月出て臼に杵　支考（鉛庫集）

神妙や松の中より出る月　浪化（浪化上人發句集）

酒田夜泊

出て見れば雲まで月のけはしさよ　惟然（記念題）

のゝさまと指さした月出たりけり　一茶（九番日記）

月遲く出でたる山のたゝずまひ　虛子（ホトヽギス）

月の出や荒川堤横たはる　菖蒲園（同）

月の出のころは女の忙しや　秋圃（倦鳥）

月ぞ入る千賀の鹽竈力なし　宗因（梅翁宗因發句集）

月の入

東順傳

入月の跡は机の四隅哉　芭蕉（句兄弟）

小野川病後に謁

入月や琵琶を袋に納めけん　其角（五元集）

入月や弊に招けば一しらみ　來山（續今宮艸）

薄壁や月もろともに寒が入る　一茶（九番日記）

月入りて後もたつぷり一夜哉　同（同）

入り方の月に面を合せけり　青々（倦鳥）

有明のつきし松島物がたり　宗因（梅翁宗因發句集）

明の月

蕎百

有明の月に成けり母の影　其角（華摘）

乙州が、鄕に赴く別にのぞみて

猪の寐に行く方や明の月　去來（去來抄）

有明の光しみつく袂かな　成美（成美家集）

夜明ても離れかねたり萩と月　士朗（枇杷園句集）

朝の月

生鯛の透通りけり朝の月　怒風（小弓誹諧集）

夕月

夕月や驢鞍過行く驢鞍橋　召波（春泥發句集）

宵の月

今宵の月磨出せ人見出雲守　芭蕉（六百番句合）

見る影やまだ片なりも宵月夜　同（鳥の道）

池水も七分にあり宵の月　其角（三日月日記）

名月にそろ〳〵似るや宵月夜　木因（誹諧曾我）

弓張月

弓張のつるがにはなす宿りかな　鬼貫（七車）

月の弓

月弓や佳名は秋の半ならず　宗因（梅翁宗因發句集）

月蝕

練絹の色もうるむや月の蝕　汝村（韻塞）

遠流の天宥法師印を悼む

法の月

その魂を羽黑にかへせ法の月　芭蕉（泊船集）

月の桂

月の桂傾けば又あらたまり　曉臺（曉臺發句集）

參考　地球の衛星であつて宇宙間に存在する他の天體に比しては極めて小なるものであるが我が地球に近いため夫れが及ぼす影響は大きい。大いさ地球からの距離平均は三十八萬四千四百粁であつて地球から見た視直徑は平均五十七分二秒七である。從つて月の半徑は千七百三十八粁であつて地球の半徑の二割七三となり表面積及體積は夫々地球の七割四四及二割

〇三となつてゐる。

月の密度は地の密度の〇・六しかない。故に水の三・三三倍である。從つて月面に於ける重力の大きさは、地球の表面に於ける重力の六分の一しか無く、地表面の重力の〇・一六五に當る。故に地表上で六瓩の重さの物體は月面では一瓩の重さしか無いと云ふ事になる。

月には大氣と云ふものが無い。如何となれば月の緣邊は若し大氣が存在するならば、望遠鏡で見た時、或は恒星が月に接した時、日蝕の時などに其の影響で歪むとかぼやけるとかするし、又雲や嵐の現象も地球から觀測されるであらうが、斯かる事は未だ觀測されて居ないからである。之れは月の重力が小であるために瓦斯體が凡て散逸したためである。從つて月面には水蒸氣もなく又水もない故、海・湖・河等も存在しない。

月面には大氣がない爲に日照は强烈であり、然も十四日間は日射が續く故、日射を受けて居る部分の溫度は頗る高くなるが、之れに反して日射を受けない部分は冷却して頗る寒冷となる。測定の結果によると月面の最高溫度は攝氏百二十度となつてゐる。然し此の溫度も日射が無くなると急に下降する。例へば月蝕の際に觀測された所によると、月蝕前攝氏七十度であつたものが、月蝕後には氷點下百二十度に降つた。故に斯様に溫度が激變する月面には生物は生存し得ない。

月面には凸凹が甚しい。月面肉眼で見て黑く見ゆる所は平原であつて、海と稱せられ他は巍々たる峻峯である。然も之等峻峯は環狀をなして居る。其の中央は噴火口或は隕石落下の跡と信ぜられて居るが前記の方が有力である。此の噴火口には大規模なもの多く、總數も地球から見ゆる半面だけで三千三百個に及び中には直徑二百粁に及ぶものさへある。此の外月面には多くの龜裂があり、大なるものは幅十粁乃至百五十粁、長さ千粁に及び月面を半ば切斷せるものさへある。

月は地球の如く自轉及公轉をする。公轉は月の周りを廻りつゝ夫れと共に太陽を中心として一周するもので、其の地球を一周するには二十七日七時四十三分十二秒を要し、公轉面は地球が太陽を廻る公轉面と僅か五度位しか喰違つてゐない。而して月は地球が三百六十五日六時九分九秒の間に太陽を一周する間に地球の周りを十三回半だけ廻轉する。

然し月の形が變化する週期は二十七日七時四十三分ではなく、二十九日十二時四十四分三秒である。支那の暦は月の運動と太陽の運動とを配合して作つたものであつて、月の形の變化に據つて一個月の長さを定めて居る故に一個月は二十九日より長く三十日より短かいから、二十九日の月と三十日の月とを交互に配し、所謂大・小の月を以て之れを補つてゐる。

月は發光體即自明體では無く太陽の光を受けて輝く。故に月と地球と太陽の相互の位置によつて朔から望迄種々な形の變化をする。即ち月が太陽と地球の間へ來た時が朔であつて、太陽と反對側へ來た時が望である。其の

間太陽に向ひ、地球の左側へ來た時は上弦の月又は上の弓張月と稱せられ、右側へ來た時が下弦の月即ち下の弓張月となり、それから再び朔となり新月となるのである。

即ち月の形の變化は朔から新月、三日月を經て上弦の月となり更に十三夜を經て遂に滿月即望の月となる。それから下弦の月を經て再び朔となり、此の變化を繰返すのである。

月は又自轉をしてゐる。然し月は常に同一面を地球に向けて居る由、人々は夫れが自轉せる事を氣付かずに居る。處が實際は月の自轉週期と地球を廻る公轉週期とが一致してゐるのである。然も地球が太陽を廻る公轉面即ち黃道と月が地球を廻る公轉面即ち白道とは僅かに五度しか傾いて居らず又、月の赤道が地球の黃道と一度半しか傾いてゐない。それ故月の自轉は一見氣付かれずに居る。

斯様にして月の公轉週期と自轉週期とは一致してゐるために、月は同一半面しか地球に見せてゐない。只公轉に多少の不等があり、且黃道面と白道面の傾斜があり、更に地球上の人々は地球の中心以外から見るため、我々に見える月の表面は多少移動する。之れは月の秤動と稱せられるものであつて此の爲めに地球から見得る月の表面は、其の全表面の百分の五九となる。即ち月面で我々が全く見得ぬ部分が四割一分だけある。

〔月蝕〕 月が地球に對して太陽と反對側に來た時に地球の陰となつて月面が隱蔽される現象である。若し太陽・地球及月が同一平面上を動いて居るとすれば滿月の時には常に蝕か現はれる筈である。然るに地球と月の軌道は五度程の傾きをしてゐるため常に月蝕は現はれず稀にしか起らない。又日蝕に比して月蝕は多く日蝕の如く部分蝕と云ふものがなく、蝕の時間も長い。之れは地球によつて隱さるゝ範圍が大なるためである。

〔月の暈〕 卷層雲と稱する高い所に現はれ滿天を蔽ふ薄いヴェールの様な雲には、太陽或は月を中心として大きな薄く色付いた暈が現はれる事がある。之れは此の種の雲が氷の結晶體から成るため、其の結晶體に入射した光が屈折して出るとき七色に分れるために起る現象である。

暈は時によると二重に現はれることもあるが、何れも大さは一定してゐて内暈は視半徑二十二度、外暈は四十六度である。而して水平月を貫いて白い光帶が現はれる事もあり、此の水平の光帶と内暈と交つた部分は特に輝いて恰も稍薄い月の如く見える。之れを幻月と稱する。昔月が三體出現したと云ふのは、月暈の際に現はれた左右の幻月を並び稱したものであらう。

上(のほ)り月(つき) （三秋）

季題解說 陰暦朔日より次第に闕く滿月に至る迄の半月を云ふ。 **參照** 月(ツキ)

降り月(クダリヅキ)　初月(ハツヅキ)　二日月(フツカヅキ)　三日月(ミカヅキ)

降り月（三秋）　闇くだり

季題解説 陰暦十六七夜の既望過ぐる月をいふ。即ち居待月の頃より廿一二夜迄の月、次第に魄を生ずるをいふなり。【参照】月、上り月

例句

降り月

簗崩す人群すなり降り月　稲丸（芭蕉袖草紙）

降り月梢に北のふきそめし　鼓竹（倦鳥）

盆の月（初）

季題解説 陰暦七月十五日、盂蘭盆會にあたる夜の月をいふ。【参照】月、望月、宗教―盂蘭盆會

例句

盆の月

踊るべき程には酔うて盆の月　李由（炭俵）

筋違に箱の背中や盆の月　同（正風彦根躰）

おもしろと鰯引けり盆の月　含粘（曠野）

盆の月寐たかと門を叩きけり　野坡（炭俵）

挑けても燈火暗し盆の月　蝶羽（千鳥掛）

極樂も地獄も盆は月夜かな　許六（正風彦根躰）

今日からや芋に馴染めて盆の月　也有（蘿葉集）

盆の月見て老となる茄子かな　同（同）

盆の月市に隠るゝ人は誰　曉臺（曉臺句集）

土べたに辛子さめけり盆の月　白雄（白雄句集）

奥の間に人こそ見えね盆の月　諸九尼（諸九尼續句集）

美濃関庭中
宿とれば先浄土なり盆の月　梅室（梅室家集）

湯盥の功徳池もあり盆の月　同（同）

見心の付けば露けし盆の月　蒼虬（蒼虬翁發句集）

初月（中）　初月夜

古書校註 【栞草】八月、或説に四日・五日・六日迄をさしていふべきに害なかるべし。○青藍（一）曰、仲秋の月に限りて初月と賞するは三五の月を待つ心よりいへるなるべし。

註（一）栞草の撰者。

季題解説 陰暦八月初の月をいふ。【参照】月、上り月

例句

初月

初月や兎に臼の作りかけ　支考（桑[illegible]橋）

初月夜

越中三日市にて
百里來てまだ初月の三日市　梅室（梅室家集）

卜居

宇治山の僧もお出や初月夜　支考（笈日記）
粟稗と日出度なりぬ初月夜　半残（猿蓑）
薪置く二階の窓や初月夜　蘆本（笈日記）
つゝくりて鳶もまた寐ず初月夜　卓袋（初蝉）
竹椽の青き匂ひや初月夜　如竹（東華集）
初月夜木の間出来る座敷かな　浪化（白扇集）
夕暮もまた水くさし初月夜　吾仲（築藻橋）
砂山も道ありけりな初月夜　乙二（松窓乙二発句集）
貝割れの菜畑の奥や初月夜　巣兆（曾波可理）

二日月（中）

季題解説 陰暦八月二日の月をいふ。〔参照〕月　上り月

例句

二日月
もしやとて仰ぐ二日の初月夜　素堂（素堂家集）
二日
見る人もたしなき月の夕かな　荷兮（曠野）
秋もまだ二日月夜や峯の松　支考（梟日記）
月かとも言はん間もなき二日哉　杉風（杉風句集）
雨そゝぐ水草の隙や二日月　蕪村（月並発句帖）
知りつゝも今日聞く名なり二日月　素檗（素檗句集）
灯籠の空映りして二日月　同（同）
あら波や二日の月を捲いて去る　子規（全集）

三日月（中）

三日月　三日の月　新月　繊月　玉鉤　蛾眉　磨鎌

古書校註

【年浪草】新月とは韓退之が詩に云、新月似磨鎌。又白楽天が詩に云、三五夜中新月ノ色、二千里外故人ノ心。朗詠の註に云、新月とは凡そ三日月を云ふ也。然れども三五夜中の詩は十五夜をさして云ふ也。十二月の中、八月は新月也、十五夜は東方より出るによつて新月と云ふ。微月と同じく三日月と云々。

【栞草】兼三秋物。新月・繊月・玉鉤・蛾眉・磨鎌等三日月をいふ。この外種々の譬喩詩句に多し。

季題解説 陰暦八月三日の月をいふ。〔参照〕月　上り月

例句

三日月
須磨の秋三日月からは来ぬ人ぞ　言水（言水句集）
影たのむ三日の月より濡る迄　鬼貫（七車）

三日月

芋もやゝ實の入る程ぞ三日の月　鬼貫（七車）
三日月に必ず近き星一つ　素堂（素堂家集）
三日月や朝顔の夕つぼむらん　芭蕉（虛栗）
明け行くや二十七夜も三日の月　同（孤松集）
何事の見立にも似ず三日の月　同（曠野）
[illegible]
有とある蘭にも似ず三日の月　同（笈日記）
[illegible]
見しやその七日は墓の三日の月　同（同　）
三日月に地は朧なり蕎麥の花　同（浮世の北）
[illegible]
三日月の命あやなし闇の海　其角（新山家）
[illegible]
手束弓矢をつぐ船や三日の月　同（句兄弟）
蜻蛉の狂ひしづまる三日の月　同（國の華）
中嶋の黑いも御意に三日の月　同（五元集拾遺）
牡丹花は牛に乗りてや三日の月　許六（正風彥根躰）
石山は見ずと入りけり三日の月　同（風俗文選犬註解）
三日月や名は有明の草のかげ　支考（そこの花）
三日月の空に咲いたは何の花　同（東西夜話）
三日月を絹と置かばや峯の松　同（柿表紙）
あそこには誰が捨置て三日の月　同（三日歌仙）
蔦の葉にとぼし付たり三日の月　同（東六鳳）
八月三日
名月のはや面白し一鉋　同（俳諧五雑爼）
有黑の晩鐘
三日月のかけて飛ぶ日や晩の鐘　同（三日月日記）
影散るや葛の葉裏の三日の月　杉風（同）
角田川
待かねて三日月見るか屋形舟　同（雪七草）
三日月に鱗のあたまを隠しけり　之道（後の葉）
三日月の絲ほど晴れよ伊吹山　文鳥（俳諧勸進牒）
土龜突や岸に下り立つ三日月　素覽（蘆の屋）
梟の目やこそばゆき三日の月　專吟（句兄弟）
走り穗を分けて出けり三日の月　李由（韻塞）
三日月の秋を運ぶや草の上　風國（續有磯海）
三日月やはや手にさはる草の露　桃隣（三日月日記）
三日月や影ほのかなる抜菜汁　曾良（同　）

三日月や松に結べる初木の實　野坡　（野坡吟艸）
三日月や膝へ影さす舟の中　太祇　（太祇句選）
三日月の船行方や西の海　同　（同）
三日月や形作りてかつ寂し　同　（同）
有とだに形斗りなる三日の月　曉臺　（曉臺句集）
蜀黍の穗首に縣け三日の月　同　（同）
六祖讃
三日月の光さしけり精げ米　同　（同）
衰れとも見るに堪えたり三日の月　樗良　（樗良發句集）
三日月や風に吹かるゝ尾長鳥　乙二　（松窓乙二發句集）
三日月を見にこそ來たれ芒ふく　同　（同）
秋立つ樣子は荻萩の葉にも劣らで
三日月や世捨人等が立騷ぐ　同　（同）
淺草や末は稻葉に三日の月　成美　（成美家集）
反れ鞠の松にかゝりて三日の月　一茶　（七番日記）
豐秋
むだ草も穗に穗が咲いて三日の月　同　（一茶句帖）
窓蓋のつゝ張とれて三日の月　同　（九番日記）
賴母しやまだ薄暑き三日の月　同　（發句題叢）
三日月や土なぶりせし手の乾き　蒼虬　（蒼虬翁發句集）
植木屋の木の間覗くや三日の月　同　（同）
椽先の濡れたやうなり三日の月　同　（同）
山寺や足下雲晴れて三日の月　子規　（全集）
三日月にちらりと物の落ちにけり　同　（同）
城壁の崩れしところ三日の月　同　（同）
大船の帆を落しけり三日の月　同　（同）

新月

三日月や佛戀しき草枕　鳴雪　（鳴雪句集）
今日原氏の沼足、珍らしき顏もて、日馴れぬ茶物を贈り侍るに
新月やいつを昔の男山　其角　（いつを昔）
新月の心ばへなり唐煙筒　嵐雪　（其便）
清涼紫宸の新たにみがかれたる中に
新月や內侍所の棟の草　同　（杜撰集）
新月に蕎麥うつ草の庵かな　几董　（井華集）

待宵（中）

小望月（こもちづき）　十四夜月（じふしやづき）

古書校註
【栞草】八月。待宵とは翌の夜の晴曇りはかりがたければ先づ今宵（八月十四日）月を賞する也。

【山之井】〔小望月〕　こもち月とは十四日を云へり、子をもてるにも云ひかけ、家童子（一）にもよせぬ。

【滑稽雜談】〔同〕。八月。和俗十四夜の月を稱して小望月といへり。望の一分を虧けるを以て小と稱す。

註（一）一家の主婦をいふ。

季題解説　陰曆八月十四日の夜をいふ。翌日名月の夜の晴曇はかり難ければ、先づ今宵の月を賞しつゝ翌日の月を待つ心なり。望とは月の滿る事なれば、此十四日の月を小望月といふ。〔參照〕月　名月〔付〕人事　月見〔付〕

例句

待宵

翌滿ちて翌缺ける月の今日こそな　鬼貫（鬼貫句選）

小望月の雨を

待花や今宵雨月の馬さぐり　同（七車）

待宵や翌は二見へ道者われ　其角（篇突）

待宵や流浪の上の秋の雲　惟然（有磯海）

西国皆がかりの頃

翌の日の日和磬てや宵の月　同（鳥の道）

十四夜

一輪の何處らか何處ら足らぬやう　同（とくしも）

待宵はまだ忙がしき月見哉　支考（笈日記）

待宵の月や向ひに出る雲　正秀（初蟬）

待宵や女あるじに女客　蕪村（蕪村遺稿）

待宵やひとり時雨るゝ蘆屋釜　白雄（白雄句集）

卜者示庫鈴軒翁さに居を移したるを

晴曇月待つ宵のトたてよ　同（同）

待宵や暮るゝに早き家の奥　太祇（太祇句選後篇）

待宵やところ〴〵に女郎花　蓼太（蓼太句集）

待宵をたゞ漕行くや伏見舟　几董（井華集）

待宵の入方うれし木賊原　移竹（乙御前）

酉、十四日

濡れながら月に使に來る月か　乙二（松窓乙二發句集）

翌の夜の月を請合ふ爺哉　一茶（一茶發句集）

江戸川や月待宵の芒船　同（同）

待宵は月見た跡の月夜かな　梅室（梅室家集）

西瓜ほど未だ斜あり小望月　許六（枴表紙）

採み直すつぶりの形や小望月　同（正風彥根躰）

かけ廻り谷へもとめつ小望月　北枝（草庵集）

小望月茄子の針の見ゆるなり　賢廣（鷹獅子集）

薄紙を隔つ心や小望月　吾仲（三河小町）

賑やかな内證客や小望月　諷竹（荒小田）

朝顔に屆かぬ影や小望月　也有（蘿葉集）

十四夜月 十六夜も心盡しや十四日　其角（續虛栗）
良夜雨意
十四夜の道理は知らず月に雲　北枝（東六鳳）

名月（中）

明月　今日の月　月今宵　今宵の月　名高き月　名立たる月　端正の月　滿月　滿つる月　望月　望の月　望月夜　十五夜　三五夜　三五の月　中秋　良夜　芋名月

古書校註

【山の井】望月の影に向ひては、天女の鸞鏡とも山姫の姿見とも見なし、（中略）三五夜の月は秋のもなかなれば光りも常に越えて、海川も黃金をのべ、野山も平らに玉を敷きたらんやうに見ゆる心ばへ、又更級の月に行き、明石の浦にあくがるゝけしきをもつらねて、新月・芋名月ともいふべし。

【御傘】けふの月。夜をまつ月・入相にむすぶ月・日に結ぶ月・三日月の出る・夕月夜等皆夜分にあらず。

【日次紀事】今夜（八月十五夜）地下良賤亦明月を賞す、各芋を煮てこれを食ふ。故に俗に芋明月と稱する也。

【旅寐論】答云（一）されば三五十五夜の月、今おしなべて名月といへり。その中いづれの月か不レ知名月といふ故有りと聞く。然れども今日名月の詩歌を作らんに、强ちその故實に不レ可レ限。尤も故實によらばなほ佳なるべし。又明の字を用ふる事は和漢ともに三五の淸光を賞し來る故に、明と名と通ひたるを以て通用すなるべし。かやうの事はまゝ侍る也。又漢家には名の字は三五兩夜ともに用ふる事なし。我が朝の故實なる故也。尤も十三夜の事は不レ及二沙汰一。

【年浪草】按ずること、大抵李唐の世より盛んにして詩人文人其の詠多し。本朝に於ては、長明四季物語に云、こよひの空を翫ぶ事、孝元のすべらみこと諸の上達部、ふみのつかさ召して歌詠ませおはしませしよし、國史に見えたり。其の後は吳竹の葉に絶えず新桑繭糸の續けるごとすべらきより始め奉り、わらぐつを綴り、かさを手してさゝぐる下うど迄も歌を言ふ事になり、山のましら海の底のはけしきうろくづも今宵の月にあくがれぬる事になりぬ。（二）然れども樂天詩に三五夜中新月ノ色と云ふは中秋也。三日月といへど八月をわけて新月といふ也。○新月とは七月の部に出で、三秋に亙るものとす。○名月・名高き月等は良辰の故に云ふ也。

【栞草】今宵の月・今日の月・以上十五夜の月に限りていふ言葉也。かつけふ・今宵と賞する心、句中にあらざればとゝのはず。

註（一）去來の答なり。（二）三秋に亙るとは陰曆七・八・九の三月に亙る詞の意。年浪草にては便宜七月の部に出せるなり。

季題解説　陰暦八月十五日の夜の月をいふ。

實作注意　明月は名月と同義に用ふれど、古人に諸説あり。『旅寝論』に去來は此れを論じ（[illegible]参照）又許六は『篇突』に「名の字を容易に置ける事は元來未練の至り也。古人名の一字に腸を斷てる事にたやすからず。名月、けふの月・月見・此かはりいさゝか有べし。名の字に近代明の字書く人あり。覺束なし」又『青根が峯』に同じく許六は「明月は名月の字に通ず。明の字を明の字にかく事いかゞ。名月は八月十五日一夜也。明月は四季に通ず。明の字かく事あるや。かゝぬ法とはもつとも聞へ侍りぬ」と否定し、『俳諧袋』に大江丸は「去御かたの御説として承に、名月の文字・史記・月令・傳燈などにも見あたらず。又源氏須磨の巻に、こよひは八月十五夜にてと有。夕がほのまきに、八月十五夜月のあきらか成とあり。詩歌の題にも八月十五夜とあり。たまたま明月とかけるは、たゞ月の清光なるを詠ず。按に八月十五夜は名月といへる、誹かいの家よりいひ得て、本邦の俗称となれるならむか。良夜とはいつにても月のよき夜といふ事也。たゞし中秋の十五夜はうごきのとれぬ良夜なりと仰られき。今更これをあらためかほなるもいかゞ。心にこめてあるべし」と述べたり。去來説穏當なり。拘泥せざるをよしとす。〔[illegible]〕月・待宵・無月・人事―月見・薄

例句　名月

淀にて
名月や汲ぬも寒き水車　言水（初心もと柏）

十五夜
須磨の秋三日月からは來ぬ人ぞ　同（同）

[illegible]
名月や耳の山風目の曇　來山（今宮草）

寐あまつて又見る月や老の膝　同（同）

名月や草とも見えず大根畠　同（續今宮草）

良夜
恥かしや十六夜まで二ところ　同（同）

行月や船で見る／＼橋曇り　同（同）

名月くもりければ
月の名に片枝さしたり衛矛　沾德（沾德句集）

父の喪にこもりける年の名月
春ならば朧月とも詠めふに　鬼貫（鬼貫句選）

蟲も鳴月も更たり草の中　同（同）

夜半の雨後
名月や雨戸を明て飛んで出る　同（同）

更行や花は紙にも押ものを　同（同）

月をとて漸く雲のちぎれ／＼　同（同）

名月や今宵生るゝ子もあらん　信德（還故集）

名月はふたつ過ても瀬田の月　同（有の雲）

名月や門へさしくる潮頭　同　（桃の實）

夏かけて名月あつき涼み哉　同　（荻の露）

伊都山中にありて

名月や花かと見えて綿畠　同　（有磯海）

明月に麓の霧や田の曇り　同　（同　）

八月十五日

今宵誰よし野の月も十六里　同　（笈日記）

名月や兒たち並ぶ堂の椽　同　（初蟬）

名月や座に美しき顔もなし　同　（同　）

名月や海に向へば七小町　同　（同　）

[illegible]

名月の夜やおも／＼と茶臼山　同　（射水川）

明月の出るや五十一ケ條　同　（笈日記）

名月や御堂の鼓かれて聞く　其角　（續虚栗）

名月や居酒飲まんと頬かぶり　同　（いつを昔）

雨のみ[illegible]に成て

名月や竹を定むるむら雀　同　（生駒堂）

名月や疊の上に松の影　同　（雑談集）

名月は十歩に錢を捨りけり　同　（花の露）

名月や金くらひ子の雨の女　同　（陸奥鵆）

名月やかゞやく／＼まゝに紬几帳　同　（末若葉）

名月や八丈島の丘端懸　同　（草の道）

名月や人を抱手に膝ぶしら　同　（[illegible]人水上）

名月やこゝ住吉の佃島　同　（五元集）

柴ふる外荷へる人に

名月や皺ふる人の心世話　同　（同　）

閏十五夜

御番衆は照る月を見て駿河舞　同　（同　）

名月や今年も筆にへらず口　同　（五元集拾遺）

名月や歌人に髭のなきがごと　嵐雪　（其袋）

今月を家隆にゆるす朧かな　同　（きさらぎ）

名月や先蓋とつて蕎麥を嗅ぐ　同　（桃の實）

名月や煙這ひ行く水の上　同　（萩の露）

名月や絶たる瀧のひかり哉　同　（水ひらめ）

名月の園友坊は男かな　同　（皮籠摺）

今年も鎌倉の待宵は大佛にて侍る

明月は南に得たり佛頂珠　同　（伊達衣）

早雲寺名月の雲早きなり　同　（杜撰集）

名月は蜂も及ばぬ梢かな　同　（のぼり鶴）

名月

名月や柳の枝を空へ吹く　嵐雪（錢龍賦）
名月やたしかに渡る鶴の聲　同（玄峰集）
明月や道心の名のおもしろき　同（同　）
名月や海も思はず山も見ず　去來（曠野）
名月や椽とり廻す黍のから　同（桃の實）
明月や向への樹早でかさるゝ　同（有礒海）
名月や誰が身にせまる旅心　同（泊船集）
名月やさすがに夜の姿にて　同（玉まつり）
京筑紫去年の月とふ僧仲間　丈草（猿蓑）
名月や雨にはり合ふ風光　同（青むしろ）
萄り尋ねられしに
名月の前へまはるや旅枕　同（續山彦）
名月や雲より下は酒の照り　同（幻の庵）
名月や鹽津海津の走り船　同（堅田集）
名月や車きしらす辻番屋　同（丈草發句集）
名月のこれもめぐみや菜大根　許六（韻塞）
名月や升の向ひの淡路島　同（篇突）
名月や赤穂（アコ）の汐浚いとまなみ　同（正風彦根躰）
明月や一聲くもる天津雁　同（同　）
名月や淺間が岳も蒔なり　同（木葉刈）
名月の裏や扇の二見潟　同（風俗文選犬註解）
名月や國侍の豆富谷　同（同　）
名月や日本に過ぐる三保の海　同（同　）
名月や鳥羽色に海の上　同（續有磯海）
名月は二つこそあれ一夜川　支考（梟日記）
名月の間に關あり奈呉の浦　同（東西夜話）
名月やぬけば玉ちる砥波山　同（梅盗人）
名月や膳に据ゑたる東山　同（東六鳳）
名月に死なば椎の木陰かな　同（越の名殘）
名月も曉近し娑羅雙樹　同（宰陀稿本）
名月や今日は賑ふ秋の暮　同（文星觀）
明方より流石音なし手樽の月　北枝（加賀染）
名月や布施の礒山布施の奥　同（三物拾遺）
我友は今年も月に明しけり　同（雅文せうそこ）
深川指月菴
名月や愛は朝日もよい所　杉風（陸奥鵆）
名月や人肌になる岸の石　同（木曾の谷）
名月に晝の一倍野は廣し　同（杉丸太）

名月や老を隱すかあらはすか　杉風　（錢龍賦）
名月や梢の鳥は晝の聲　同　（百曲）
名月の空を我めく草木かな　野坡　（續山彦）
名月や艸に撫込む今年松　同　（名の兎）
名月やとらへて過る岡の萩　同　（野坡吟艸）

住吉社參

名月や蔦の手を出すわだつ海　同　（同）
明月やはら〳〵鷄の俄客　浪化　（有磯海）
名月や土手のはづれのなびき藪　同　（旅袋）
名月や晝の拍子に浪の上　同　（青むしろ）
名月や露を蹴させに夜の駒　同　（そこの花）
名月に屋敷隣の嘸かな　同　（壬申日記）
名月や莚を移す簷の牙　同　（風月藻）
名月や袷着て來る中もどり　同　（同）
名月の眼に小さしや草の花　同　（浪化上人發句集）
名月や魚のはたらく水の音　同　（同）
名月や誰が養ひて稻の花　桃隣　（流川集）
名月や雪見んための庭の松　同　（萩の露）
その月も此名月か冠山　同　（其便）
名月や宵の心は相撲取　同　（伊達衣）
名月やあたりの雲もほめらるゝ　同　（きれ〴〵）
名月や舟虫走る石の上　同　（古太白堂句選）
名月や曉近き霧の色　同　（同）

象潟にて

名月や靑み過たるうすみ色　惟然　（菊の香）
何とせう名月なれどなぐれたは　同　（きれ〴〵）

豐前小倉に舟着きて

名月や莚を撫る礒の宿　同　（初蟬）
名月や誰吹起す森の鳩　酒堂　（雜談集）
名月の海より冷る田簑かな　同　（續猿蓑）
名月や海より映る藪の中　同　（けふの昔）
名月や更て人なき臺子の間　同　（錦鏡）
名月や寺の祕藏の茶木原　昌房　（あめ子）
名月や座敷をのぞく勝手方　同　（笈日記）
名月や廣き座敷の二方椽　呂房　（菊の香）
名月や假屋とゝのふ蒲すだれ　正秀　（杉丸太）
名月や川は淺みの底光り　探志　（菊の香）
名月や客を迎ひに里離れ　同　（青むしろ）
明月や志賀の礒田の榎の實色　智月尼　（泊船集）

名月や坐せぬ人も打まじり　園女（住吉物語）
名月や箭瓶かゝる兒の顔　同（陸奥衛）
名月や琴柱にさはる栗の皮　同（菊の塵）
名月や磯邊〳〵の鴫の聲　之道（あめ子）
名月やすらりと高き松の上　木導（水の音）
明月や江はさは〳〵と鶴の聲　同（同）
名月やそよ〳〵風に茶の匂ひ　怒風（きれ〳〵）
名月や木曾の流れの海ざかひ　同（射水川）
名月の前へ廻るや山のつま　林紅（續有磯海）
名月や冷しきつたる海の上　同（旅袋）
名月や軒の葱の染はじめ　句空（柞原）
名月や唐土灘の明すかし　魯町（亡か光）
名月や誰が懐ろに釣の糸　杜若（句兄弟）
名月や客の顔見る西瓜賣　一江（同）
明月や里の匂ひの青手柴　木枝（有磯海）
名月や宵は女の聲ばかり　木節（同）
名月は蕎麥の花にて明にけり　李由（韻塞）
名月や無事に穂を出す竿はづれ　千那（同）
名月やことに虫鳥萩すゝき　羽笠（曠野後集）
名月の思ひ處や萱の雲　路健（續有磯海）
名月に陸より船のけぶりかな　吏全（同）
名月や草の闇みに白き花　左柳（芭蕉庵小文庫）
明月や更科よりの泊り客　涼葉（續猿蓑）
名月や半夜は雨にしてとられ　玄梅（小弓誹諧集）
名月の麓を賣るや茂木肴　卯七（砂川）
名月や畠の小菜の一ト青み　朱拙（同）
名月や門に立れし石佛　除風（荒小田）
名月や萱より高き奈良の釋迦　桃妖（誹諧鳥集）
名月や向ふ田面の次第高　此筋（木曾の谷）

良夜

明らかな影よ田もよし綿もよし　芙雀（錦繍）
明月や揃ひ立たる艸の先　嵐州（田植唄）
名月の萱のけしきや篷屋形　嵐蘭（三日月日記）
名月や年寄來いと鳩の聲　斜嶺（芭蕉門古人眞蹟）
名月やもたれてまはる椽柱　梢風尼（木葉集）
名月に郭巨が鍬も芋畠　也有（蘿葉集）
名月や日に捨てゝある北の山　同（同）
名月や雪にも露の綿畠　同（同）

名月や闇に虫音の明烏　也有（蘿葉集）
名月や人に押合ふ鳥の影　千代尼（千代尼句集）
明月や雲間につもる水の音　同（同）
名月や吉野の葉にも咲あまり　同（同）
名月や行ても〳〵よその空　同（同）
名月やはづかしの森いかばかり　同（同）
明月や白きにも似ず水の音　同（同）
名月や眼に置ながら遠歩行　同（同）
名月や手届きならば何とせむ　同（同）
名月や鳥も寐ぐらの戸をさゝず　同（同）
名月や闇を尋ぬる鳥もあり　同（同）
名月の舟やあそこもこゝもよし　同（同）
名月や明るいものに行あたり　同（同）
名月や何所までのばす富士の裾　同（同）
名月や留主の人にも丸ながら　同（同）
名月や唐崎の雨明てから　同（同）
名月やその裏も見る丸硯　同（同）

石山寺

名月や雪踏分て石の音　同（同）
名月や夜は人住まぬ峰の茶屋　蕪村（蕪村句集）

雨の祈りの昔を思ひて

名月や神泉苑の魚躍る　同（同）
名月や兎のわたる諏訪の海　同（同）
名月や雨を溜たる池の上　同（同）
名月にゑのころ捨る下部哉　同（同）
名月や露に濡れぬは露ばかり　同（蕪村遺稿）
名月や今朝見た人に行違ひ　同（新五子稿）
名月や秋月どのゝ幟　同（同）
名月や花屋寐てゐる門の松　太祇（太祇句選）
名月や君かねてより寝ぬ病　同（同）
名月の晝迄大工遣ひかな　同（太祇句選後篇）
名月や船なき磯の岩傳ひ　同（同）
明月や家にうたてき物の影　同（石の月）
名月や入山までも辿りつく　闌更（半化坊発句集）
明月や座頭の妻のかこち顔　同（同）
名月や影四ッ橋の橋柱　白雄（白雄句集）
名月や蘆の一ト夜を船屋形　同（同）

名月

名月や闇一寸かゝる同南　白雄　（白雄句集）
今むかし月は知らずも澄夜かな　同　（同）
背のほど貸りしかば
月にたふ雲のみわたに嵐かな　同　（同）
名月や降らば降とは常の事　同　（同）
名月や眼ふさげば海と山　同　（同）
名月や建さしてある家の向キ　同　（同）
名月や夜網引かの芝肴　同　（同）
名月や眞空になりて露くだる　同　（同）
月を出て月に野山の入夜かな　蓼太　（蓼太句集）
名月のさがしに照や岩間水　同　（同）
名月や巣を守る鶴も夜もすがら　同　（同）
名月や汐滿來ればさゞれ蟹　同　（同）
名月やねぐらも見えて花に鳥　同　（同）
名月や物うつさじと西へ行　同　（同）
名月や何春く音もさらし臼　同　（同）
名月や生れかはらば峯の松　同　（同）
名月や月より外に隈もなし　同　（同）
名月や燈を消す風も桂より　同　（同）
名月や只美しく澄みわたる　樗良　（樗良發句集）
月前懷古
名月や朱雀の鬼神たえて出ず　几董　（井華集）
湖上
名月や辛崎の松瀬田の橋　同　（同）
青樓田　二句
名月や金で面はるかくや姫　同　（同）
名月や蟹の歩みの目は空に　同　（同）
駿府の旅寐を思ふ
名月に富士見ぬ心奢かな　同　（同）
名月や此松陰の硯水　召波　（春泥發句集）
名月や懷紙拾ひし夜の道　同　（同）
名月に辻の地藏の灯し哉　同　（同）
名月や厠にて詩の案じぐせ　同　（同）
名月や瓶子奪合ふ上達部　同　（同）
名月や金拾はんと立ち出づる　同　（同）
名月や新堰の庭の煙草盆　移竹　（乙御前）
名月の雲に吼ゆるや山の犬　成美　（成美家集）
脚痛一歩をすゝめず
名月を追うてひけ〳〵庭筵　同　（同）

名月を大事に吹くや松の風　同（同）
名月や言葉つゝしむ夜の人　同（同）
名月や忘るゝ頃を風の吹く　同（同）

草[illegible]

名月の光ばかりぞ賑はしき　同（同）
名月や葎の宿にかへりけり　同（同）
名月に逢ふや小庭の一つ瓜　同（同）
名月を人にも見せず隱れ里　同（同）
はや出し我庭松に月は出し　同（同）

松窓獨坐

名月はすゞしき苦の匂ひ哉　乙二（松窓乙二發句集）
名月の夜にも炭やく煙かな　同（同）
名月や親の位牌を松の上　同（同）
名月や病に富る影法師　同（同）
名月や人の白髮の寒かりし　同（同）

六十に四ツをそへたる良夜

名月や鯖野の奥は露どころ　同（をのゝえ草稿）
名月と言ふは日出度き月夜哉　士朗（枇杷園句集）
名を得たる月なればこそ瀧の上　同（同）

姨山良夜

里人や白髮になりに行月夜　巣兆（曾波可理）
明月に都は芹のもやしかな　同（同）
明月や小島の蜑の菜つみ舟　同（同）
名月は翌と成けり夜の雨　一茶（享和句帖）
名月もそなたの空ぞ毛唐人　同（同）
名月や都に居ても年の寄る　同（旅日記）
名月や今日はあなたも御急ぎ　同（七番日記）
名月や門から直にしなの山　同（同）
名月や高觀音の御膝元　同（同）
名月やとばかり立居むづかしき　同（同）
名月や明けて氣の付く芒疵　同（同）
壁穴に我名月の御出哉　同（同）
名月や西に向へば善光寺　同（同）
名月や芒に投げる御賽錢　同（同）
名月を取つてくれろと泣く子哉　一茶（おらが春）

赤閑が關

名月や蟹も平を名乘り出　同（一茶句帖）
名月の御名代かよ白兎　同（同）
名月や當にはせざる壁の穴　同（同）

名月

名月や殊に男松の勇み聲　一茶（未刻稿）
名月や五十七年旅の秋　同（同）
名月や下戸はしん／＼しんの座に　同（同）
缺際の潔よいゝも名月ぞ　同（同）
名月やおれが外にも立地藏　同（同）
名月に任せて置くや家の尻　同（同）
山里は小鍋の中も名月そ　同（同）
名月のさつさと急ぎ給ふ哉　同（同）
名月に尻つんむける草家哉　同（同）
名月や生れた儘の庭の松　同（九番日記）
名月や隅の小隅の小松島　同（同）
名月に來て名月を斬かな　同（同）
名月や山あり川あり寢ながらに　同（同）
名月や八重山吹の歸り花　同（同）
壁穴で名月をする寐樂哉　同（一茶句集）
名月を一つ受取る小部屋哉　同（同）
名月も御覧の通り屑家哉　同（我春集）
名月や先はあなたも御安全　同（一茶發句集）

筑摩　舟留

名月やつい指先の名所山　同（同）

姥捨山登山

今日と言ふ今日名月の御側哉　同（同集）
名月や草木に劣る人の影　梅室（梅室家集）
名月や鶴とも見ゆる白徳利　同（同）
名月やさかなにかざす松の影　同（同）
名月やどの舟からも柴拾ひ　同（同）
名月や揩火こぼるゝ松のかげ　蒼虬（蒼虬翁發句集）
名月や一夜深山に住む心　同（同）
名月や汐に濡るゝや人の裾　同（同）
名月やなつかしとのみ見るばかり　同（同）
年々の名月歩行たらぬなり　同（同）
名月や梅の立枝も久しぶり　同（同）
名月の傍に更けたり水車　同（同）
名月や行燈見ゆる谷の家　同（同）
名月や物なつかしき野の徃來　同（同）
名月や雲一ちぎれ二ちぎれ　子規（全集）
名月の山を離れて山もなし　同（同）
名月や白馬の嶽御野かゝ來る　同（同）

今日の月

名月のこよひ闇かばや鉢叩　同　（全集）
名月や高まに汐ゝ濱社　芳蘭　（雲母）
前夜雨いたくふりてけふの快晴
月を是にひと雲那也今日の山　言水　（初心もと柏）
おもへたゞ今日を桂の太郎月　同　（同）
更け〳〵て鞠垣すゞし今日の月　同　（言水句集）
三符に寝ぬ男なりけり今日の月　同　（同）
酒硯去年にもこりず今日の月　來山　（今宮艸）
今日の月只晴がりが見られけり　同　（續今宮艸）
今日の月小町が歌のうへを行く　同　（同）
熊野から南はどこぞ今日の月　同　（同）
雨の夢嬉しや干さん今日の月　同　（同）
馬方に請なし扨も今日の月　同　（同）
更やうを見定る夜や今日の月　沾德　（沾德句集）
病後
しみ〴〵と立て見にけり今日の月　鬼貫　（鬼貫句選）
月よ今日よ去年の命に花ぞ咲　同　（同）
筆とらぬ人もあらふか今日の月　同　（七車）
三井寺の門叩かばや今日の月　芭蕉　（雜談集）
たんだすめ住めば都ぞ今日の月　同　（續山井）
木を伐て木口見るや今日の月　同　（江戸廣小路）
蒼海の浪酒臭し今日の月　同　（坂東太郎）
命こそ芋種よ又今日の月　同　（千宜理記）
川筋の關屋はいくつ今日の月　其角　（桃の實）
老父病中
信濃にも老か子はあり今日の月　同　（萩の露）
和歌はみつふけゐの月を夜道哉　同　（句兄弟）
木母寺に歌の會あり今日の月　同　（同）
鯛は花は江戸に生れて今日の月　同　（同）
酒臭き鼓うちけり今日の月　同　（類塞）
十五から酒を呑出て今日の月　同　（浮世の北）
富士に入る日を空蟬や今日の月　同　（誹諧曾我）
烏帽子屋も烏帽子着て見よ今日の月　同　（きれ〳〵）
駒とめて釜買ひとり今日の月　同　（三河小町）
納屋に何雨吹晴て今日の月　同　（五元集）
所懷、京にて
言はぬ事三つ心に名あり今日の月　同　（同）
歸宅吟
汐汲をかゝへて見ばや今日の月　同　（同）

今日の月

東寺宮居にて
山吹は社家町に似て今日の月　召波（春泥句集）
ちよぼ〳〵と森の低さや今日の月　移竹（乙御前）
我門を踏出だすより今日の月　青蘿（青蘿發句集）
枯木ほど更くるものなし今日の月　乙二（松窓乙二發句集）
萬代や山の上より今日の月　士朗（枇杷園句集）
姥捨などとは老足むづかしくて
有合の山で濟すや今日の月　一茶（一茶句帖）
小言いふ相手もあらば今日の月　同（九番日記）
松風は大事なりけり今日の月　梅室（梅室家集）
草陰の猫もけしきや今日の月　同（同）
竹一葉二葉さはるや今日の月　蒼虬（蒼虬翁發句集）
物陰は常より晴し今日の月　同（同）

今宵の月

月千金今宵一りんのかけねなし　宗因（梅翁宗因發句集）
秋よ今宵咲く〳〵や此花月一輪　同（同）
月今宵あく七兵衛と名のりけり　同（同）
いかな〳〵花も今宵の月一輪　同（同）
今宵の月小筐へぬけた人とはむ　來山（今宮艸）
良夜
此宵や月人々の氣を彩る　同（今宮艸）
月今宵寐にくき暑さ過し來ぬ　沾徳（沾徳句集）
月は此今宵に明て何ひとつ　鬼貫（鬼貫句選）
見るほどは言はれぬ月の今宵哉　同（同）
待乳山
今宵滿てり棹のふとんにのる鳥　其角（五元集）
嵯峨に小屋ありて折ふしの作佳なれば
月の今宵我里人の藁うたん　去來（續虚栗）
二つなき今宵の月や法の華　支考（東西夜話）
誰がためとなくて素月の今宵哉　北枝（柞原）
酒うつす光も月の今宵かな　同（三河小町）
水草木月の數見る今宵哉　杉風（木曾の谷）
明月曇りければ
指を折て月思ひ出す今宵かな　同（田[illegible]）
月今宵出たる山ぞ名はなき歟　同（杉風句集）
山に月の繪
今宵月出かゝりし山名のけしき　同（同）
あるとある物を今宵の月のため　野坡（杉丸太）
月今宵うかるゝ五位や鳥あがり　正秀（初蟬）
月今宵あるじの翁舞出よ　蕪村（蕪村句集）

北の山増一樹の松に倚れり
月今宵松に代へたる宿り哉　同　（同）

月今宵めくら突當り笑ひけり　同　（蕪村句集拾遺）

北海
月ひとり荒海をすゝむ今宵哉　曉臺　（曉臺句集）

夕顔も地に見えて月の今宵哉　同　（同）

今宵なれや月に向ふも月の上　闌更　（半化坊發句集）

酒折の宮も程あらされば
火ともしの神もめづらん月今宵　同　（同）

枕肱に膝にせんかな月一ト夜　白雄　（白雄句集）

常陸にかならぬ今宵を訪ける、かたに打と
月に凝月にほどけん今宵哉　同　（同）

且を若葉の…に遊ぶ
月今宵爲にとならば竹伐らん　同　（同）

世は八重に捨し主と月今宵　同　（同）

雨星か午明樓に
月一ト夜出汐の森は忘れざる　同　（同）

姨捨や松島や今宵誰の月　同　（同）

うらめしき迄に月澄む今宵哉　樗良　（樗良發句集）

月今宵遣手が唄の昔ぶり　几董　（井華集）

うち曇る秋は多けれ月今宵　同　（同）

分外に待たせて今宵月は西　乙二　（松窓乙二發句集）

死なぬ心今宵の月に見られけり　同　（同）

斧の柄の朽ても明けな月今宵　同　（をのゝえ草稿）

見し友を減らして今宵月の前　同　（同）

新瀧わたりに寝して
芝の鐘聞きはづすまじ月今宵　梅室　（梅室家集）

月今宵明くる氣色はなかりけり　蒼虬　（蒼虬翁發句集）

月今宵風の吹くべき方もなし　同　（同）

十五夜

十五夜の月の闇や前うしろ　去來　（きれぐ）

十五夜の月に打出の濱いづこ　之道　（あめ子）

十五夜や無疵の月はいつのまゝ　一茶　（享和句帖）

十五夜の月やあなたも御安全　同　（一茶句選）

無月（中）

中秋無月　曇る名月　雨名月　雨の月　月の雨

季題解說 陰曆八月十五日の夜、雨降りて月の見えざるをいふ。

實作注意 無月と斷らずとも其意あればよし。〔參照〕月・名月

例句

無月

家々に月の中言雨の音　來山　（續今宮艸）

無月

待宵の車輪は心なき身も老しはたれて
今日こそは月夜も闇に覺えけり　來山（續今宮草）
[illegible]
しよぼしよぼに降なら月をしともとも　鬼貫（鬼貫句選）
どこ更る空のあてども雨の月　同（同）
燈火やおのれ顔なる雨の月　同（同）
十五夜雨ふりければ
何の木と見えて雨ふる今宵哉　同（同）
桂男すまずなりけり雨の月　芭蕉（如意寶珠）
[illegible]
月のみか雨に相撲もなかりけり　同（甍寐の種）
中秋の夜は[illegible]に[illegible]、雨降ければ
月いづこ鐘は沈みて海の底　同（草庵集）
十五日亭主の詞にたがはず雨降
名月や北國日和定なき　同（奥の細道）
名月や廬山の芋に雨の音　許六（正風彦根躰）
蔑遣に薄知あり雨の月　同（獏の花）
名月雨ニ逢ふ
葛の葉のかゝる有礒や雨の月　支考（東西夜話）
傘や澁谷さして雨の月　同（同）
名月を耳に聞く夜ぞ竹の雨　同（國の華）
片壁や急ぐ氣をうつ雨の月　杉風（木曾の谷）
名月や軒もる雨の音淋し　同（杉風句集）
名月は[illegible]にて雨降ければ
傘さして參めきたり寺の月　浪化（白陀羅尼）
名月や夜着に逃こむ雨の音　同（霜の光）
雨の月どこともなしの薄明り　越人（曠野）
降りかねて今宵になりぬ月の雨　尚白（猿蓑）
我も月に雨を侘びけり夜泣貝　北枝（射水川）
から櫓を漏にあてけり月の雨　丈草（松濤集）
[illegible]
蓑人よ笠嶋語れ雨の月　蕪村（蕪村句集）
湖の面雨むら降りて月をうつ　曉臺（曉臺句集）
月の匂ひ滿たり雨の高砂子　同（同）
月や雲あとよりせむる雨の聲　同（同）
恨むまじ月の柱の花の雨　闌更（半化坊發句集）
良夜雨
思へとや月滿雲の底明り　白雄（白雄句集）
舟もよひなど聞へしも、覺束なき空のやがて雨降出けれど[illegible]まうけして
愛を舟と思ひ給へや雨の月　同（同）

月夜蝕の夜雨
蝕に雨に二夜の月を年ぞかし　同　（同　）
見ぬ月の千々に悲しき雨夜哉　几董　（井華集）
仲秋無月
雨の神磯歩行する名月歟　乙二　（松窓乙二發句集）
月やこの芙蓉も持たず曇る庵　同　（同　）
雨の日信濃に行く人を送りて
姨捨を雨にのぼりぬ今日の月　士朗　（枇杷園句集）
降る雨を眺め暮らしつ今日の月　同　（同　）
雨見ゆるそれさへ月の力かな　成美　（成美家集）
雨
ぼんやりとしても流石は名月ぞ　一茶　（七番日記）
鼠を厭ひ雨を祈る田守の翁が心遣ひに、老の身をも守るならむ
雨降れば嬉な月さへ洩る小家　梅室　（梅室家集）
峰だけは流石に見えて雨の月　蒼虬　（蒼虬翁發句集）

十六夜（いざよひ）（中）　十六夜の月（いざよひのつき）　いさよふ月（つき）　既望（きばう）

古書校註

【年浪草】八月。八雲御抄（一）に曰、いざよひの月は十六日也云々。是源氏夕貝の巻の歌故也。但萬葉には不知夜歷（イサヨフ）と書けり。凡上旬の月は不レ可レ謂。十六日に非ずといへども十七八日の月詠じて何の難か有らん哉。但し故人の說皆十六日也、尤可レ然。又いざよひは源氏物語に入方見せぬと云ふは、十六日也。凡十六日以前はいざよひとは云ふべからず。但し十六日に限るよし、定家の說也。此條如何。萬葉にもよひをしらずと書けり、只夜になりて出る月歟。千載集に源仲正が歌は「はかなくもわか夜のふけを知らすしていさよふ月を待わたる哉」と云ふは、題はいざよひの月と云へり。十六日の歌ならば我夜のふけと詠むべからず、尤不審。凡十六日に限るべからざる歟。仲正指南に非ずといへども俊成撰ぶ所也云々。（二）河海抄（二）曰、いざよひの月、十六日の月の山のはに月しろ上りて、出やらぬを云ふ也と云へり。是も十五夜の曉なれば十六日の月と云はんもいたく不レ遠歟。能因歌枕（三）にもいざよふとは、山の端にさし出る月を云ふと云へり。但いざよふは何れも休らふ義也。猶豫と書けり云々。宵曉共にいざよふは、山の端に出かね出かねたるをいざよふと云ふよし。

註　（一）順德院御撰の歌學書　（二）源氏物語の註釋書　貞治年間四辻善成が足利義詮の命によつて撰進せしもの　（三）能因法師が歌語を註したる書

季題解說　陰曆八月十六日の月をいふ。

實作注意　日月相望むを望（バウ）即十五日 といふ故に、既に望むは十六日なりと

參照　月（ツキ）、名月（メイゲツ）　人事―月見（ツキミ）

例句

十六夜

十六夜

一輪や鶏の垂れ尾の山かづら　鬼貫（七車）
十六夜もまだ更科の郡かな　芭蕉（いつを昔）
やすく〳〵と出ていざよふ月の雲　同（笈日記）
十六夜や海老煮る程の宵の闇　同（同）
十六夜は僅に闇のはじめ哉　同（續猿蓑）
十六夜は備者と名乗りし姿なり　其角（のほり鶴）
十六夜や龍眼肉の唐衣　同（五元集）
十六夜や有馬を出でて歸る人　許六（韻塞）
十六夜や遅れて這入る駒迎　同（浮世の北）
十六夜や北に黑みの付き初むる　同（初便）
十六夜は長雪隠の最中かな　同（正風彦根躰）
十六夜に眠らば捻れ鼻こかせ　北枝（猿丸宮集）
十六夜も過て隙なり虫の聲　同（行脚戻）
十六夜も更けて人なし老が友　杉風（杉風句集）

娘身まかりければ

十六夜や我身に知れと月の缺　同（同）
十六夜は座に外れたる人もあり　野坡（艸之道）
十六夜はけにおとなしく曇りけり　同（野坡吟艸）
十六夜や眠る間もなき泪り丘位　同（同）
十六夜や朝顔に螢光る程　土芳（蓑蟲庵集）
十六夜や山の端に出る闇の内　同（同）
十六夜や哀れに森の埋れ蟲　同（同）
十六夜の月や蒔繪のしづみたる　越人（曠野後集）
十六夜の氣色分けたり比良伊吹　汶村（韻塞）
十六夜も猶蟹の眼の夜もすがら　園女（小弓誹諧集）
十六夜や慥に暮る丶空の色　去來（菊の道）
十六夜の名に出て行くやかざめ賣　一波（同）
一雨の間にいざよふて仕舞けり　丈草（幻の庵）
十六夜や遲う出て來る門の人　浪化（風雅戊寅集）
十六夜は美人の圖なり月の色　支考（蓮二吟集）
十六夜の芋や十日の菊の顔　也有（蘿葉集）
十六夜や足して詠むる星一つ　同（同）
芋よりも名は豇豆にぞ十六夜　同（同）
十六夜や缺くに手間とる宵の闇　同（同）
十六夜や今あそこにて見ゆる雁　千代尼（千代尼句集）
十六夜や囁く人の後ろより　同（同）

十六夜やいさよひと言果ぬうち　同（同）
十六夜の闇をこぼすや芋の露　同（同）
十六夜の闇や恥かく人もあり　同（同）
十六夜や鯨來初めし熊野浦　蕪村（蕪村遺稿）
十六夜も落る處や須磨の波　同（夏より）
十六夜や山に向ふて眠るうち　闌更（半化坊發句集）
十六夜も月に阿漕は無かりけり　同（同）
くらぶ夜や氣色斗りに月缺けし　白雄（白雄句集）
雨の聲十六夜の宵寐友あらん　同（同）

紫屋寺にて
十六夜や闇から偸る鹿の聲　蓼太（蓼太句集）
十六夜や今宵は闇の惜まるゝ　同（同）
十六夜や闇より後の月の雲　几董（井華集）
十六夜や蝤蛑を逃す汐頭　同（同）

悼三太郎一
十六夜や一人缺たる月の友　同（同）

待宵は[illegible]り十六夜は雨を帯たり
十六夜は雲一つなき寒さ哉　同（同）
中天を十六夜の月の出かけ哉　曉臺（曉臺句集）
十六夜や闇より出づる木々の影　樗良（樗良發句集）
十六夜やしばし黒谷眞如堂　青雨（續明烏）
十六夜の闇や至極に念の入る　乙二（松窓乙二發句集）
十六夜の明けて聞ゆる鳴子哉　同（同）

山家に宿りて
婆ひとりいざよふ月を見ざりけり　同（同）
十六夜や不斷櫻の影がさす　同（たのゝふ草稿）
十六夜や月に成りゆく荻の聲　士朗（枇杷園句集）

八月十六日瓢合といふ事をして
十六夜の闇に濡れたる瓢かな　同（同）

仲秋無月
十六夜もはづれて松の草鞋哉　巢兆（曾波可理）
十六夜や疵のついたる小盃　梅室（梅室家集）
いざよふか山より運ぶ雨白し　同（同）
いざよふと知れけり傘の下明り　同（同）
十六夜や昨日の雪の富士の山　同（同）
十六夜の闇を乘せたり浪花舟　蒼虬（蒼虬翁發句集）
十六夜や昨日の道の裏通り　同（同）
十六夜に暫く覗く木の間かな　同（同）
十六夜や月におくるゝ迎ひ船　子規（全集）

十六夜　月闇し名は十六夜とかはりけり　子規（全集）
十六夜の軒深くゐる蟇二つ　鬼峰（ホトヽギス）

立待月（中）　十七夜

古書校註
【年浪草】立待月とは藻鹽草に云、立待月、十七夜。立待の月とのゝ字ありても同じ。一説、立待とは七夜まちとて、和俗十七夜より二十三夜迄、七觀音の會日に配當して月待の本地供等を修す。十七夜には立待と稱して月の出る迄、坐せずして拜するより云へるとなり。居待も之に准じて知るべし。

季題解說
陰暦八月十七日の月をいふ。山の端に出づる月を立ちて待つ心なり。

参照　月　名月　人事—月見

例句
立待月
立待や痺直さん臼の上　智月尼（藤の實）
立待や雨かとばかり松の露　庭雅（門清水物語）
辻君の辻に立待月夜哉　子規（全集）

居待月（中）　座待月

古書校註
【年浪草】藻汐草云、十八日也。萬葉に座待月と書けり。

季題解說
陰暦八月十八日の月をいふ。月の出づるを坐し居て待つ心なり。立待よりやゝ月の出の遲るゝ意にてかくいふ。参照　月　名月　人事—月見

例句
居待月
居待月起て守らん枕挽　智月尼（藤の實）
藁灰に炭團うづめて居待月　甫草（浪化上人發句集附錄）

臥待月（中）　寢待月　臥待の月　寢待の月

古書校註
【年浪草】八雲御抄云、ね待・臥待、二十日月也。桂明抄云、一說に永德の頃爲重卿廿日月といふ題にて、「かぞふればはつかの月の臥待もなほよひのまは過ぎて出でにき」。臥待月、八雲(一)に廿日月と遊はされ候へども、望月によりて廿日の夜にもよみ候はんずる事不審なく候へども、月の百首などの題に出し候次第、十九日の月也。又或書に十九夜月也、又曰二寢待月一。

註(一)八雲御抄のこと。

季題解說
陰暦八月十九日の月をいふ。月の出づるまで臥居て待つ心なり。居待よりやゝ月の出のおくるゝ意にてかくいふ。参照　月　名月　人事

―月見

例句 寢待月

寢待月船もしづかに行き次第　智月尼（藤の實）

帆走や水尾の果なる寢待月　雲泉（京鹿子）

更待月（中）

更待の月　亥中の月　二十日亥中　二十日月

古書校註【年浪草】更待の月は二十日月也。藻鹽艸同じ。俗に二十日亥中とは二十日の亥ノ正刻に出る故也。

【栞草】廿日亥中の月、兼三秋物。廿日の亥の正刻に出る故なり。

季題解説 陰暦八月廿日の月をいふ。臥待より更に月の出のおそく、更けて待つといふ意にてかくいふ。

實作注意 亥中の月＝二十日亥中ともに二十日亥の正刻（午後十時）に月出づるを以ていふ。二十日亥中とは俗稱なり。參照 月　名月　人事―月見

宵闇（中）

季題解説 陰暦八月十九日以後にして、月の出づる前の闇をいふ。

實作注意 良夜の後、十九日以後、夜々月の出づる事の遲きを以て、その宵闇を季題とす。月を思ふ心よりしての事なり。只宵の暗きを云ふとばかり思ふべからず。參照 月

例句 宵闇

鶴賀宅にて

宵闇に火袋深き木の間かな　鬼貫（七車）

眞夜中の月（中）

廿三夜

古書校註【栞草】兼三秋物。廿三夜也。子の刻に出て午の二刻に入る。

季題解説 陰暦八月二十三日の月にして、今夜の月は子の刻（十二時）に出づるを以ていふ。普通廿三夜といふ。參照 月

後の月（晩）

十三夜　月の名殘　名殘の月　二夜の月　後の今宵　豆名月　栗名月

古書校註【山の井】九月十三夜は栗名月とも豆名月ともいひ、又二夜の月・後の今宵なども申し侍る。名月のをさめなれば、夜を殘す入り方を恨み、常にも似ず月の名殘を慕ふ心ばへなどもすべし。

【日次紀事】　今夜の月、倭俗豆名月といふ。良賤共、莢豆を煮て之を食ふ。按、今夜月を玩ぶなり。無題詩(一)載する所の藤原忠通公の詩、證と爲すに足る。菅神の作の如き、(二)閑所に在り九月十五日偶々明月を見て之を詠ずる者なり。御後妄りに三字を以て五字に代へ證と爲す者なり。貪好要宿の說(三)の如きは之を信ずべからず。今夜世俗多く倭歌の御會有り、茄子を供へて賦す。

【俳諧水鏡】　豆名月・後の名月・栗名月・ふたよの月・月の名殘。みな十三夜の事なり。

【年浪草】　中右記に曰、保延元年九月十三夜今宵雲淨く月明なり、是寛平法皇(四)明月無雙の由仰出らる、仍て我朝九月十三夜を以て明月の夜と爲す。○栗名月とは栗を以て節物となす、故に名く。中秋を以て芋名月といふ如し。後の月とは八月十五夜・九月十三夜の光後を分つの名也。二夜の月も中秋ありて又十三夜あれば云ふにや。

註　(一)本朝無題詩なり。忠通の九月十三夜翫月詩。(二)菅家後草に載する秋夜詩あり。これは九月十五夜の作なるを十三夜と誤り、これを以て當時既に十三夜を賞する風ありとなす說の妄なるを言へるなり。(三)徒然草に八月十五日・九月十三日は婁宿なりとの說出づ。(四)宇多法皇。○十五夜・十三夜の來由「民間時令」に最も詳しく說けり、ついて見るべし

季題解說　陰暦九月十三日の夜の月をいふ。後の月とは八月十五夜の月に對して云ふなり。

實作注意　七夕・重陽・名月など諸の行事は、多くは支那傳來若くは摸倣したるものなれど、九月十三夜の月を名月として賞するは我國に於てのみ行はるゝ事なり。其起源として傳ふる所によれば「常盤日記」に「萬里小路韶光卿の御說を引て云、十三夜の月を賞せし正しき起りは、天暦七年九月十三夜、始て月の宴を行ひたまひしが遺例となり來りしなり、但此宴は本八月十五夜の御遊びをおくれて行ひ給へるなり、其由は八月十五夜は先帝(朱雀天皇)の御國忌に當り給へば、扨しも後れて此九月に其遊を行ひたまへるか、此月とても十五日は猶其日次も忌はしければとて、十三夜に定て此月の宴を開き行はれしなり」とあり。其他種々の說あるも略之。月の名殘とは最後の明月なればいふ。豆名月・栗名月は枝豆・栗等の熟する頃にてもあり、又之を月に供へもし、食ひもするより云ふ。後の月・二夕夜の月、八月十五夜、九月十三夜と前後を分ち又併せて二夜といふなり。尚俗に八月十五夜の月見をする時は、必ず九月十三夜の月見をなす、一方を缺く時は片月見とて之を忌む風習あり。〔參照〕月　名月　人事―月見

例句

後の月

四時の農業おのづから盡く
木綿も吹くや白きを後の月　　來山（續今宮艸）

十五夜は雨なりしが、十三夜は晴れければ
溫泉歸りの松露配るや後の月　　沾德（[illegible]句集）

又の月も仰のいてこそ甲斐はあれ　鬼貫（鬼貫句選）

後の月雨の降時今日の月　同（同）

後名月

名月や纔の闇を山の端に　同（同）

後の月入て額よし星の空　同（七車）

九月十三日の月を

身は闇に埋もれし後を此光　同（同）

十三夜

春はよし野秋の花とも奥の月　同（同）

唐土に富士あらばけふの月もみよ　素堂（曠野集）

木曾の痩もまだなをらぬに後の月　芭蕉（笈日記）

はらゝ子を千々に砕くや後の月　其角（雜談集）

家こぼつ木立も寒し後の月　同（炭俵）

いづれも古郷を語るに

後の月松やさながら江戸の庭　同（句兄弟）

題十三夜

月影やこゝ住吉の佃島　同（韻塞）

白鷺や蓑脱くやうに後の月　同（陸奥衛）

藥研ではこかしおろすか後の月　同（篇突）

十三夜

白玉に芋を交ぜばや瀧の月　同（焦尾琴）

十三夜を

やよや月夜は物なき木挽町　同（五元集）

後の月躍かけたり日傘　同（同）

後の月上の太子の雨夜哉　同（同）

早稻で見て晩稻で見るや後の月　許六（風俗文選犬註解）

流さるゝ東坡が八處後の月　同（同）

後の月

若やぎて見ゆるや松に蔦の月　支考（東西夜話）

松に藤見上れば高し後の月　同（乍居行脚）

留別辭

面痩を誰が哀れまむ後の月　同（越の名殘）

後の月思ひきつたる今宵哉　杉風（菊の道）

慈にも限りある日や後の月　同（長月集）

後の月名にあふ菊の花盛　同（杉風句集）

後の月星も宿かる菊畠　同（同）

音やめば雨見に出るや後の月　同（同）

雨降り濟水にて風ひき、殘惜しく思ひて

殘多し後其後の月十四日　同（同）

盃に隅とる客や後の月　浪化（白扇集）

後の月

後の月たとへば宇治の卷ならん　越人（笈日記）

九月十三夜

盃もこぼれぬほどの光かな　同（猫の耳）

天寺に詣よし〳〵ける、善光寺の如來を拜して

彌陀頼む今宵になりぬ後の月　諷竹（有磯海）

染つくす百日紅や後の月　同（渉の名殘）

松茸の市の盛りや後の月　風國（初蟬）

等々院に游びて

後の月柚味噌を山の馳走とて　同（後れ馳）

冬瓜の毛深くなるや後の月　曲翠（桃の實）

穗の上に高低もあり後の月　游刀（淄川）

鎌倉へ行かぬが手也後の月　桃隣（陸奥衛）

願ある身のせはしさよ後の月　史邦（猿舞師）

東七條に□を見て

わけて寒う聲ゆる己が後の月　惟然（茶の草子）

又咲ける茨薔薇も後の月　荊口（草刈笛）

浮雲のをりかさなるや後の月　十丈（白扇集）

九月十三夜

後ならぬ青貝照るや今日の月　尙白（孪陀稿本）

額幅に戶を細めけり後の月　紫貞女（門司硯）

寐靜まる小鳥の上や後の月　木導（水の音）

伯技捨てゝ又入れて來て後の月　也有（蘿葉集）

あたら夜の星で明るや後の月　同（同）

夜着干して待つ暮うれし後の月　同（同）

後の月芋が垣根は荒にけり　同（同）

洩る軒に時雨も高し後の月　同（同）

菊畑に殘る星あり後の月　同（同）

不破の荒芭蕉に見るや後の月　同（同）

猿の手も栗に忙がし後の月　同（同）

蚊帳は過ぎ炬燵は未だ後の月　同（同）

そら鞘の闇殘りけり後の月　同（同）

影法師に綿を入れけり後の月　同（同）

丸いのは欠たに懲りて後の月　同（同）

二千里を栗に詠めて後の月　同（同）

秋の尾も兎程あり後の月　同（同）

後の月蟲は減らして雁の聲　同（同）

豆引くや子の日の野にも後の月　同（同）

影坊も出ては隱るゝ後の月　千代尼（千代尼句集）

叱られた畑も踏よし後の月　同（同）

後の月始めて狹き園爐裡かな　同　（同）
取殘す梨のやもめや後の月　同　（同）
立盡す物は案山子ぞ後の月　同　（同）
山彥は宵に戻るや後の月　同　（同）

慶澤

水涸れて池のひづみや後の月　蕪村　（蕪村句集）
山茶花の木の間見せけり後の月　同　（同）
十月の今宵は時雨れ後の月　同　（同）

十三夜の月を賞する事は、我日のもとの風流也けり

唐人よ此花過て後の月　同　（同）
三井寺に緞子の夜着や後の月　同　（蕪村遺稿）
後の月賢き人を訪ふ夜哉　同　（同）
後の月鴫立つあとの水の中　同　（同）
三井寺や月の詩つくる踏落し　同　（同）
かじか煮る宿に泊りつ後の月　同　（新五子稿）
後の月庭に化物作りけり　太祇　（太祇句選）
浮れ女や言葉のはしに後の月　同　（同）
秋の花皆うつゝなし後の月　曉臺　（曉臺句集）
後の月客に呼るゝ病あり　同　（同）
後の月涼むうちより衰ふる　同　（同）
水日夜北に迫りて後の月　同　（同）

古國百里を去て、故歩子のもとに二とせの秋にあふ。しかも九月十三夜なりけり

雲百里今宵ふたゝび月の闇　同　（同）

十三夜戸塚の驛に宿りて

月に行かば鐘に夜明む建長寺　同　（同）

十三夜は亡母六七日に當りて

後の世の月ならば母の影もさせ　同　（同）
我衣に洩る思ひあり後の月　闌更　（半化坊發句集）
後の月水を束ねし如きかな　同　（同）
後の月稻垣低き宿とりぬ　白雄　（白雄句集）
隔たりし人も訪けり後の月　同　（同）
もろこしの書片寄よ後の月　同　（同）
後の月わきて古人を思ふ事　同　（同）
後の月宇陀の昔は幾昔　同　（同）

江戶のならはし、必ず蛼蛤を賣あるくにぞ

蛤は育たぬものよ後の月　同　（同）
不二晴よ山口素堂後の月　同　（同）
老きはる人は誰々後の月　同　（同）

後の月

鰕釣らぬ心に野あり後の月　蓼太（蓼太句集）
稲かけて里靜なり後の月　同（同）
白魚のかいこ動くや後の月　同（同）
見事なり薄雲走る後の月　樗良（樗良發句集）
後の月水よりも青き雲井かな　同（同）
月に堪へぬ今宵一ト夜の寒さかな　几董（井華集）
後シテの面や月の瘦男　同（同）
後の月何か肴に湯氣のもの　召波（春泥發句集）

移竹十三回忌

乙御前や顏見ぬばかり月の前　同（同）
きりぎりす行燈にあり後の月　二柳（左車反古）

白雨居士の一周忌に、人々集なりて、追善の俳諧しける、「舊」の心を

後の月語りあふほど頼みなや　成美（成美家集）
後の月蒲萄に核の曇りかな　同（同）
後の月鴈大聲に飛ぶ夜かな　同（同）
さゞ浪も身にかゝるかと後の月　同（同）

臨海居人の悼

後の月あれよと思ふ人はなし　同（同）
後の月藜は杖に伐られけり　同（同）

老懐

酒俳諧口はさかりて後の月　同（成美句集）
筍の飯も我家ならず後の月　乙二（松窓乙二發句集）
なぎの花蒟蒻の花後の月　同（同）
後の月彌彦に寢しも早や昔　同（をのゝえ草稿）
事繁き人の爲にや月二夜　同（同）
どれからと萩の隣や後の月　巣兆（曾波可理）
象潟の合歡の落葉や後の月　同（同）
御手洗や澄み捨てゝある後の月　一茶（七番日記）
積薪の一ツ二ツや後の月　同（一茶句帖）
落着の黑椀寒し後の月　梅室（梅室家集）
日當りもよい田の上や後の月　同（同）
羹に座敷曇るや後の月　同（同）
灯臺のもとを照らすや後の月　同（同）
一まはり小さく出たり後の月　蒼虬（蒼虬翁發句集）
拘はらぬ杉の木立や後の月　同（同）
上京へ行くほど晴れぬ後の月　同（同）
後の月門のうちらは家のかげ　竹兜（篠鳥）
夜に入りて豆うでさする後の月　青々（同）

豆茄だりて寐人起しつ後の月　同　（同　）
京に住む門徒便りや後の月　琅玕　（懸　葵）
柿に六つ藝盡しあり十三夜　沾德　（沾德句集）
旨過ぎぬ心や月の十三夜　素堂　（素堂家集）
しかぞすむ茶師は旅寢の十三夜　其角　（茶の草子）
うれしさや江尻で三穗の十三夜　同　（五元集）

母と月見けるに

寢られねば雨元政の十三夜　同　（同　）
十三夜は忘れじ菊も其名殘　支考　（獅子物狂）
山の端の月見や岐阜は十三夜　同　（文早觀）
鹿鳴て猫は夜寒の十三夜　嵐雪　（長月集）
泊る氣でひとり來ませり十三夜　蕪村　（蕪村句集）
臺灣を當推量や十三夜　太祇　（太祇句選後篇）
思はずも餘所に更しぬ十三夜　同　（同　）
表から出汐告來つ十三夜　同　（同　）
十三夜月は見るやと隣から　同　（同　）
田舍から柿くれにけり十三夜　同　（同　）
獨り居や思ひまうけし十三夜　同　（同　）
十三夜と見初しもかくの空ならん　闌更　（半化坊發句集）
若返る菊のためしや十三夜　蓼太　（蓼太句集）

金澤にて

隈々は海士の焚火や十三夜　同　（同　）
水張の菅家の像も十三夜　乙二　（松窓乙二發句集）
名月の來ぬに來るにや十三夜　同　（をのゝえ草稿）
奧山で見た月出たり十三夜　梅室　（梅室家集）
橋桁のしのぶは月の名殘哉　芭蕉　（已か光）
漬蓼の穗に出る月の名殘哉　其角　（一の木戶）
月の名殘閨守あらば菰枕　曉臺　（曉臺句集）
閑てひとり見まじきは月の名殘哉　白雄　（白雄句集）

名殘の月

高崎十三夜

名殘見せて月は昔にさし向ひ　乙二　（松窓乙二發句集）
不二筑波二夜の月を一夜哉　素堂　（素堂家集）
樂しさや二夜の月に菊添て　同　（同　）
影二夜足らぬ程見る月夜哉　杉風　（瞻　野）

二夜の月

武藏甲斐が根行脚せしころ

山一重二夜の月や甲斐武藏　白雄　（白雄句集）

棹二移ム空一ヲ

硯箱二夜の月を見納めぬ　召波　（春泥發句集）
洪水多き年を二夜の月晴れたり　子規　（全　集）

豆名月

豆を喰て豆の花とも詠めばや　鬼貫（鬼貫句選）

田家に宿りて

嫁はつらき茄子枯るゝや豆名月　芭蕉（[illegible]の市）

仕おくれて暮夜に煮るなり月の豆　青々（倦鳥）

秋の星（三秋）

季題解説　秋の夜空の星をいふ。

實作注意　別に星月夜を秋季とすること古來の定めなり。星月夜は星斗闌干として月夜の如くなるによりて秋の季とせるなり。秋の星といふは近頃の事に、古人ならば之を「秋の雜」として取扱ひしものなるべし。秋の星と星月夜と感じに差違あり。星月夜は滿天の星斗を思ひ、秋の星は只一部の星空をおもふ。〔參照〕星月夜、天の川、流星

星月夜（三秋）　ほしづくよ

古書校註

【御傘】秋也。月の字に三句去也。日に二句也。但し名所の名ならば句體によつて秋にもあらず、夜分にもあらず。

【復續輪】闇に星の多くて明るき夜を云ふ也。只秋季なり。月のことにはあらず。

季題解説　秋夜晴れて星多くかゞやき月夜のごとく明るきをいふ。ほしづくよとも讀む。〔參照〕秋の星、天の川、流星

例句選句

星月夜

浮れ出て扇しめれり星月夜　言水（言水句集）

あの硝あちら岩瀬か星月夜　支考（越の名殘）

星月夜空の高さよ大きさよ　尙白（忘梅）

天の川（初）　銀河　星河　銀漢　雲漢　天漢　河漢

古書校註

【御傘】〔天河のあふ瀨〕夜分也。戀に非ず。舟を結びても非二水邊一。七夕の事也。又河内の名所に天の川有り、是は水邊也。非二夜分一。句體をよくよく可二聞分一也。銀河と書くとも天の字の嫌ひやう也。若し銀河と聲に讀む句あらば天の字には不レ嫌、銀と云ふ字には可レ嫌也。名所の時は銀の字を書くべからず。

【华浪草】字彙に曰、漢は虛汗の切、喝の去聲。天河は箕斗二星の間にあり。其長きこと天に竟し。○楊泉物理論に曰、漢水の精也。氣發して升り、精華上に浮ぶ。宛轉して流る、名づけて天河と曰ふ。一に雲漢と曰ふ。衆

星焉に出づ。○倭名抄に曰、天河、兪名苑に云、一に天漢と名く。今按に、又河漢と名け、銀河（和名阿萬乃加和）と名く。○枕草子曰、天の川は此の下にもある也。註、此下界、河内國交野の方、枚方の北に在り。○伊勢物語曰、惟高親王の供にまかりける時、天の川といふ河のほとりにおりゐて、（之も河内の天ノ川なり）「狩くらし織女つめに宿からん天の河原に我は來にけり　業平」。○八雲御抄曰、天の川は遠きわたりにあらず、袖ふらば、見もかよはしつべくちかきなど讀めりと云々。

註 ○「をだまき拾遺」七月の條には「あまの川とばかりは雜なり。星合の心あれば秋也」とあり

季題解説 初秋の夜、空澄み渡りて、無數の恒星聚り布き、恰も白き河の如く見ゆるをいふ。

實作注意 銀河＝銀漢＝雲漢＝天漢＝星河＝河漢ともいふ。七夕の夜、天の川に烏鵲翼を延べて橋となり、織女渡りて牽牛と會すとの傳說より、古句には天の川を七夕に關聯して詠じ居れり。單に天體として客觀的に天の川を詠ずるは近代の傾向なり。**參照** 秋の星（アキノホシ）　星月夜（ホシヅキヨ）　人事―七夕（タナバタ）

例句 天の川

水學も乘物貸さん天の川　芭蕉（江戸廣小路）
荒海や佐渡に横たふ天の川　同（奥の細道）
塀梢越ても通へ天の川　其角（續有磯海）
鵲の丸太の先に天の川　同（誹諧曾我）
家鴨の子孚るといなや天の川　同（三河小町）
檜買の一つきかすや天の川　同（花の市）
大切の夜は明にけり天の川　同（五元集拾遺）

梶の葉に小歌書くとて

我や來ぬ一夜よし原天の川　嵐雪（虛栗）
眞夜中やふりかはりたる天の川　同（其便）
上野より道や付らん天の川　同（皮籠摺）
岩蔦のよろりと浮ぶ天の川　同（星會集）
さもあらば有れ句を洗ふ天の川　同（玄・峰集）

數十里を一日に過て

打たゝく駒のかしらや天の川　去來（西の雲）
天の川大事に星も光るかな　同（土大根）
素麪や挽そこなうて天の川　許六（きれ〴〵）
油斷せぬ星の光や天の川　同（風俗文選大註解）
秋もはや蚊屋に筋かふ天の川　同（同）
仰むけに寐て見れや遠し天の川　支考（麻生）
露は今宵より白からん天の川　同（國の華）
夜を竪に引延してや天の川　同（務津之波那）

天の川

父起て見るや七日の天の川　桃隣（陸奥鵆）
澪標難波は礒よ天の川　同（きれ〳〵）

雨星を哀む

一僕を雨に流すな天の川　浪化（風雅戊寅集）
懸針や船引とめん天の川　女 綾戸（續虛栗）
粟の穗の上に見越すや天の川　臥高（己か光）
五位の聲まだらに更ぬ天の川　汶村（韻塞）
西風の南に勝つや天の川　史邦（芭蕉庵小文庫）
更け行くや水田の上の天の川　惟然（續猿蓑）
旅蚊屋の釣手渡すや天の川　卯七（續有磯海）
につこりと宵の日和や天の川　涼菟（皮籠摺）
物音のせぬ一ツ時や天の川　桃先（誹諧曾我）
細う行く石間の水や天の川　舍羅（三河小町）
中ぶとに流れてつらし天の川　千川（渡鳥集）
此界へ裾こそ見ゆれ天の川　木因（桃盜人）
九重に花の降る夜や天の川　秋之坊（布ゆかた）
子持筋引くや湖水の天の川　正秀（百曲）
難波津や芦の葉に置く天の川　野坡（野坡吟艸）
天の川色繪の扇流さまし　杉風（杉風句集）
羽のある橋や涼しき天の川　也有（蘿葉集）
牛牽て戀草かりぬ天の川　同（同）
千鳥啼く寒さ貸さばや天の川　同（同）
うしや今宵天の河原の茶挽草　同（同）
菊川に公家衆泊けり天の川　蕪村（蕪村遺稿）
月入て闇にもなさず天の川　太祇（太祇句選）
龐居士も娘持ちけり天の川　曉臺（曉臺句集）
江にそうて流るゝ影や天の川　同（同）
宵々に馴れしか此夜天の川　白雄（白雄句集）
天の川星より上に見ゆるかな　同（同）
天の川野末の露を見に行かん　同（同）
浪越さぬ鵲の羽や天の川　几董（井華集）
兎角して夜とはなりけり天の川　召波（春泥發句集）
あまさがる鄙を川下天の川　同（同）
日光に朱塗の橋や天の川　移竹（乙御前）
君見よや只一筋に天の川　萬容（續明烏）
見えそめて今宵になれり天の川　鷺喬（同）
我屋根をはづれてゆかし天の川　超波（五車反古）
露更けて淀に落るや天の川　道立（同）

仰ぎ臥すあとも枕も天の川　成美　（成美家集）
天の川豆腐の水に通へかし　同　（同　）
天の川月の兎は早や西す　乙二　（松窓乙二發句集）
天の川田守と咄す眞上かな　同　（同　）

母の喪に籠りける頃

喪の家を早く傾ぶけ天の川　同　（同　）
胡沙吹くも心許なし天の川　同　（をのゝえ草稿）
天の川糺の涼過にけり　士朗　（枇杷園句集）
水あびに鳥も行くか天の川　同　（同　）
一棹に舟漕入れよ天の川　同　（同　）
夜ざらしの二布干なり天の川　巣兆　（曾波可理）
艫舟来に寄る瀬や天の川　同　（同　）
汁鍋も眺められけり天の川　一茶　（享和句帖）
天の川都のうつけ泣やらん　同　（同　）
美しや障子の穴の天の川　同　（七番日記）
寐筵や烟草吹かける天の川　同　（同　）
ぼんのくぼから冷しけり天の川　同　（一茶句帖）
穴の明くほど見たりけり天の川　同　（同　）
木曾山へ流れ込けり天の川　同　（一茶發句集）
天の川見つめて居れば唾に咽せる　梅室　（梅室家集）
蜘の絲見ゆるや闇の天の川　同　（同　）
天の川盥にうつす腑ふくら　同　（同　）
加茂川の上に都の天の川　蒼虬　（蒼虬翁發句集）
古郷の夜は早長し天の川　同　（同　）
事なげに雲のわたるや天の川　鳳朗　（鳳朗發句集）
朝立や馬のかしらの天の川　鳴雪　（鳴雪句集）
天の川灯して人のうまいかな　一見　（倦鳥）

參考 天の川は銀河、天漢などと稱し天空を流るる河に譬へられ、西洋では乳の道卽ち Milky way と稱せられて居た。昔から年に一度此の川の兩岸にある男女の二星が鵲の橋を渡つて相會ふと云ふ傳說がある。其の日は七月七日であつて此の二星は西岸にある織女星（琴星のアルフワ星）と東岸にある牽牛星（鷲座アルフワ星）の兩星とされて居た。今では舊暦七月七日になつても之等二星は南中しないが、七夕祭が始められた頃卽今から三千年程前は今より二時間程早く南中した故、七月七日には太陽が沒する頃となると、之等二星は元より、鵲の橋と稱せらるゝ白鳥座の星も共に南中して天頂に偉觀を呈して居たに違ひない。之れによつて此の傳說と共に七夕祭の風習が生れて來たのであらう。
銀河は天空の大圈に沿うて天を一周して居るから、四季を通じて見られる

が北半球では夏から秋にかけて銀河は殆んど地平線と垂直になつて天頂に來る故特に目立つ。銀河の中心線は判然として居ないが大體赤道と六十三度程傾いて居る。又それは天球の大圏と一致しないで約一度南へずれて居る。

銀河の本體に就ても太古から地球の影であるとか、大氣中の蒸氣によるものであるとか、種々な臆説が唱へられて居た。併し、デモクリトスは恐らく無數の星の集合であらうと想像して居た。其後西暦千六百十年ガリレオ、ガリレイが始めて望遠鏡を考案製作してから此の研究が盛んに進められ、デモクリトスの想像説が眞である事が立證された。さうして宇宙の構造は銀河と密接な關係がある事が判り、我々の見る無數の恒星は無限の距離迄分布されて居るのでは無く、銀河と關聯した一大集團をなす事迄判明したのである。

流星（りうせい）（初秋）　なかれぼし　夜這星（よばいぼし）

季題解説　八月中旬夜頃、突如として星の流れとぶが如きをいふ。〔参照〕秋の星（ホシ）、星月夜（ホシヅキヨ）

例句

流れ星
　稲妻にひようすかさるか流れ星　甘雨（其便）

夜這星
　忙がしや野分の空の夜這星　一笑（曠野）

参考　流星は星が光を發して飛ぶ現象であつて四季を通じて見られるが時によつて多少があり毎年八月十一・二日頃の空に最も多く見られる。之れは小さな塵の様な天體であつて平常星としては見えないが、地球の大氣に觸れると摩擦によつて光を放つて流星となる。而して摩擦によつて生じた熱のため大氣中にて燃焼し盡して消滅して仕舞ふ。併し時には大なるものが地球大氣中へ入り來ることもある。斯様なものは表面のみが摩擦のため非常に熱せられる結果中途で破裂四散するものもあり。又中には燃殘つて地上へ落下するものがある。之れが隕石である。

秋の雲（あきのくも）（三秋）

季題解説　秋の空の一抹の冷やかなる雲、又風に飛ぶ飄々たる雲などをいふ。雲のいろいろ、春、夏よりも變化多し。〔参照〕鰯雲（イワシグモ）

例句

秋の雲
　高野山
　何佛乗せ來る秋の曉雲　吉水（初心もと柏）
　吉野氣のはなれて白し秋の雲　鬼貫（七車）
　伊賀へ越す時おとぎの峠にて
　言ひおとす峠の外も秋の雲　丈草（初蟬）

寄覽亭
枕出せ裏屋に廻る秋の雲　同　（記念題）
ねばりなき空に走るや秋の雲　同　（東華集）
刈株や水田の上の秋の雲　酒堂　（深川集）
松の葉を離はして行くや秋の雲　同　（けふの昔）
宰府にて
松杉も拜めと晴るゝ秋の雲　去來　（韻塞）
金城
山々や一こぶしづつ秋の雲　涼菟　（山中集）
物思ふ人の吐息や秋の雲　兀峰　（朝日川）
靜けしや鶴に定まる秋の雲　曉臺　（曉臺句集）
荒浪や波を離れて秋の雲　同　（同）
亡母喪中
かはる夜や心寄せなき秋の雲　同　（同）
卯山眺望
山もとや櫻にかゝる秋の雲　闌更　（半化坊發句集）
二色の繪具に足るや秋の雲　召波　（春泥發句集）
陽子追悼
知るやいかに我さまぐに秋の雲　成美　（成美家集）
龍兵と共に相生町見に行く、歸るさ兩国茶店にて
橋見えて暮かゝるなり秋の雲　一茶　（旅日記）
夕暮や鬼の出さうな秋の雲　同　（七番日記）
一日も置く氣色して秋の雲　蒼虬　（蒼虬翁發句集）
石山に心の塵や秋の雲　同　（同）
秋の雲湖水の底を渡りけり　子規　（全集）
朝風や鳥飛び盡す秋の雲　同　（同）

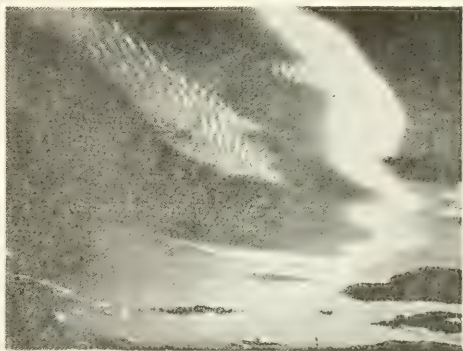
鰯雲（いわしぐも）（三秋）

古書校註【俳諧歲時記】秋天鰯先づよらんとする時、一片の白雲あり、其雲段々として波の如く然り。是を鰯雲と云ふ。

季題解說　秋天に波の如く、鱗の如き雲の多く出づるをいふ。此雲の出づる時、鰯の寄るなりといふ。［參照］秋の雲など。

例句

鰯雲
鰯雲鯛も鮑も盡りけり　北枝　（篤獅子集）
鰯雲立塞ぎけん船の道　嘯山　（律亭句集）
うすぐと今日仰がれつ鰯雲　風生　（ホトヽギス）

參考　小さな白雲の塊が或は濃淡が殆んどない樣な雲の白片が集つて居る雲であつて時には斯樣な團塊や白片が併列して居る。靑空を背景とし

て點々と白斑が並んで居る樣な此の雲は恰も鯖の背にある斑紋の如く、又鰯が群れる如き樣をして居るので鯖雲或は鰯雲と云はれてゐる。古來此の雲が現はれると鰯の大漁があると云はれて居る。學名は卷積雲と稱せられ、高さは地上六粁乃至八粁の高さに現はれ、此の雲が出ると降雨の前兆であるとされて居る。颱風の襲來などに先立つて出現することがある。古歌に「芝浦の漁人もあみをうちわすれ、つきにはいとふ鰯雲かな」とあるは此の雲が暴風雨の前兆として現はるゝ事を歌つたものである。

秋風（三秋）　秋の風　金風　爽籟　風の爽か

古書校註

【御傘】〔秋風〕只一、秋の風一。但、いひかふるに不レ及、近代ニ用レ之。秋の風、風とはあるべからす。誹にはシウ風と聲に讀みて以上三。

【年浪草】〔爽籟・風の爽か〕秋聲を謂ふ也。○殷仲文が詩に云、爽籟幽律を警め、哀壑虚牝を扣く。

季題解説　秋季に吹く風を總べていふ。金風とも云ふ。『月令博物筌』に「秋の風ははげしくあらきものなり、又身にしみてあはれをそふるやうにもよめり」とあるは顛味ふべし。

〔參照〕初嵐　盆東風　送りませ　颱風　秋の嵐　野分　鮭颪　高西風　鯉魚風　色なき風　雁渡し

例句

秋風

印南野や笠の蠅追ふ秋の風　才麿　（才麿發句拔萃）

鬼貫が新宅にはじめて頃

秋風や今年生れの子にも吹　來山　（今宮艸）

我宿は

秋風や男所帶に鳴千鳥　同　（續今宮艸）

獨居

蔦葎みな秋風の道具なり　同　（同　）

秋風を追へば我身に入にけり　同　（同　）

さゆり葉にもし秋風や晝下り　沾徳　（沾徳句集）

書寫、与上遠磨
風の秋履は金屋の河原にも　同　（同　）
闇がりの松の木さへも秋の風　鬼貫　（鬼貫句選）
六牛丸に餞別
そちへ吹かばこちらへ吹かば秋の風　同　（同　）
野徑に遊ぶ
秋風の吹渡りけり人の顔　同　（同　）
哀れげも又ほめく夜の秋の風　同　（同　）
須磨の秋の風のしみたる帆筵か　同　（同　）
ひや〳〵と月も白しや秋の風　同　（同　）
我が身に秋風寒く親ふたり　同　（同　）
菊川
本來の障子は焼けじ秋の風　同　（同　）
其鶴的に箱鑓を書きたる繪に
吹かば吹け櫛を買たに秋の風　同　（同　）
柴の戸や入日をぬすむ秋の風　同　（七　車）
秋風を我物顔や旅袋　同　（同　）
心を文車の文にみせて、優しき數に入ける女の許にて
秋風や窓に枕に須磨の巻　同　（同　）
秋風の鑓戸の口やとがり聲　芭蕉　（續山井）
枝もろし緋唐紙破る秋の風　同　（六百番發句合）
蜘何と音を何と鳴く秋の風　同　（向之岡）
猿を聞く人捨子に秋の風いかに　同　（甲子吟行）
義朝の心に似たり秋の風　同　（同　）
秋風や藪も畠も不破の關　同　（同　）
旅寐して我句を知れや秋の風　同　（野ざらし紀行）
身にしみて大根からし秋の風　同　（更科紀行）
伊勢の國中村といふ所にて
秋の風伊勢の墓原猶すごし　同　（華　摘）
一笑追善
塚も動け我泣聲は秋の風　同　（西の雲）
悼ニ松倉嵐蘭ヲ一
秋風に折て悲しき桑の杖　同　（笈日記）
秋風の吹けども青し栗のいが　同　（木がらし）
座右ノ銘
物言へば唇寒し秋の風　同　（芭蕉庵小文庫）
牛部屋に蚊の聲よわし秋の風　同　（同　）
加賀山中桃妖に名をつけ給ひて
桃の木の其葉ちらすな秋の風　同　（泊船集）
石山の石より白し秋の風　同　（奥の細道）
あか〳〵と日は難面も秋の風　同　（同　）

秋風

伊勢紀行跋
西東哀れさひとつ秋の風　芭蕉（伊勢紀行）
野水が旅行を送りて
見送りの後ろや寂し秋の風　同（三つの顔）
吟ニ芰荷ニ臨ム
風秋の荷葉二扇をくゝる也　其角（虚栗）
秋といふ風は身にしむ薬哉　同（華摘）
背向達磨を畫て
武帝には留守と答へよ秋の風　同（五元集）
秋風の心動きぬ縄すだれ　嵐雪（續の原）
作り木の絲をゆるすや秋の風　同（句兄弟）
俳諧風行脚の歸りを待受けはべりて
秋風をふるふて見せよ墨衣　同（青むしろ）
洛外の辻堂幾つ秋の風　同（同　）
痩る身をさするに似たり秋の風　同（杜撰集）
秋風や白木の弓に弦はらん　去来（曠野）
宇津川にて舩呼ぶ人多かりけれど、向ふに[illegible]て見向かず
秋風に耳の垢とれ渡し守　同（藤の實）
備中國吉備津宮にて
秋風や鬼とりひしぐ吉備の山　同（青むしろ）
筑前の相撲取に優美とらすとて
秋風や西に名を得し金碇（カナイカリ）　同（芭蕉[illegible]）
白川や屋根に石置く秋の風　同（伊勢紀行）
秋風も心まゝなり鳰の海　同（同　）
宇津の山を過ぐ
十團子も小粒になりぬ秋の風　許六（韻塞）
朝顔の裏を見せけり風の秋　同（同　）
相撲場や荒れにし後は秋の風　同（續有磯海）
蚊遣火に團扇當けり秋の風　同（青むしろ）
昏や蓼喰ふあとの秋の風　同（東華集）
夕焼の百姓赤し秋の風　同（藁人形）
西瓜ひと尻をはねるや秋の風　同（正風彦根躰）
題ニ畫ノ風鈴ニ
風鈴に秋風聞くや歐陽子　同（同　）
市中や土用をぬけに秋の風　同（風俗文選犬註解）
何なりとからめかし行く秋の風　支考（浮世の北）
少年を悼む
その親を知りぬ其子は秋の風　同（續猿蓑）
尾張の國津島と言ふ所に假寐して
秋風の吹けばいよいよ旅寐かな　同（砂川）

專明寺
桐の葉に足らでも今宵秋の風　同　（梟日記）
秋風の枕に近し生の松　同　（同　）
水音草庵
葛の葉やどちら向きても秋の風　同　（東西夜話）
行けばこそ行かずば秋も秋の風　同　（草苅笛）
扨は夢嘘には死なじ秋の風　同　（越の名殘）
澤蟹の鋒怒らせて秋の風　同　（蓮二吟集）
餞別
白川で引かせ給ふな秋の風　同　（同　）
多田の社に詣でて、木曾義仲の願書、幷に實盛が錏兜を拜す
秋風に羽織はまくれ小脇指　北枝　（あめ子）
草摺の裏珍らしや秋の風　同　（卯辰集）
秋風や息災過て野人也　同　（同　）
蝸牛目や覺すらん秋の風　同　（笈日記）
がつくりとぬけ初る齒や秋の風　杉風　（猿蓑）
吹よどめ馬乘る舟に秋の風　同　（雪七草）
秋の風有磯へ配る心かな　浪化　（白扇集）
秋風の吹ぬく舟の世帶かな　同　（浪化上人發句集）
又いつと寄（ヨリヘ）占のはたや秋の風　惟然　（初蟬）
月に鳴くあれは千鳥か秋の風　同　（菊の香）
湖邊
八景の中吹きぬくや秋の風　同　（惟然坊句集）
芭蕉葉は何になれとや秋の風　路通　（猿蓑）
淸水成就院にて
千尺の松を力や秋の風　同　（西の雲）
大豆の葉も裏吹ほどや秋の風　同　（同　）
重ね着の老を見せけり秋の風　正秀　（初蟬）
堅田廿亭にて
秋風や萩のり越えて浪の音　千那　（篇突）
澁柹の喉をこするや秋の風　同　（鎌倉海道）
片身分とて送られしが
秋風に着て泣く人の綿子かな　智月尼　（西の雲）
秋風にとんどめいたる小鳥ども　同　（松諧集）
秋風に吹れ顏なり市女笠　汶村　（笈日記）
淋しさや馬屋の蚊屋の秋の風　同　（韻塞）
秋風やまだ四五尺の杉の先　同　（篇突）
朱の丸の入日の中や秋の風　毛紈　（韻塞）
輪藏の廻り心や秋の風　同　（篇突）

秋風

夜もすがら秋風聞くや裏の山　曾良（猿蓑）

加賀の全昌寺に宿す

木の股に落着く鳥や秋の風　同（市の庵）

秋風の夜鷹やつかむ鳥の聲　且藁（曠野後集）

寐たる子の質の請たや秋の風　同（杜撰）

沙走魚（スバシリ）や秋吹く風のねらひ網　四睡（卯辰集）

秋風に吹ほうけたり綿畠　同（北の山）

力なや麻刈あとの秋の風　越人（曠野）

秋風に卷葉折らるゝ芭蕉哉　凡兆（華摘）

叢に飯吹とるや秋の風　琴風（同）

秋風や梢離れぬ蟬の殼　百里（同）

石山や行かで果せし秋の風　羽紅女（猿蓑）

人に似て猿も手を組む秋の風　洒堂（同）

猿の腰掛に昇る

秋風や田上山のくぼみより　尚白（同）

秋風や更け行く軒の釣手桶　昌房（西の雲）

から鴛をつりて戻るや秋の風　壺中（弓）

蜘の圍のたるみ初けり秋の風　素蘗女（藤の實）

秋風に蝶やあぶなき池の上　依々（炭俵）

すか〳〵と西瓜切る也秋の風　陽和（有磯海）

焚立ての飯の匂ひや秋の風　李由（韻塞）

澁（サ）び壁に何をたよりの秋の風　程己（同）

狩人やいつ髮剃りて秋の風　牡年（初蟬）

雀子の髮も黑むや秋の風　式之（芭蕉庵小文庫）

秋風や芒見よせて穗に出づる　荻子（鳥の道）

秋風や殘る燕のひらめかす　野紅（泊船集）

大佛をさがる別れや秋の風　丈草（記念題）

秋風や中戸を這入る柚の匂ひ　風國（同）

秋風や二番煙草のねさせ時　游刀（續猿蓑）

仙人の出さうな雲や秋の風　涼菟（茶の草子）

秋の風蟲の聲々合せけり　乙州（けふの昔）

鷲の子の力づきけり秋の風　句空（草庵集）

秋風や巴が塚の吹き廻し　小春（同）

鈍（フグ）賣に栞り見せばや秋の風　舍羅（三河小町）

蟲もはや蓑ごしらえや秋の風　諷竹（同）

土蜘の袋の口や秋の風　吾仲（柿表紙）

秋風や浪を凌ぎて雲に鳥　素行（渡鳥集）

生垣に矢も通らずや秋の風　除風（番橙集）

ひぞりたる關所の棒や秋の風　木導（正風彥根躰）

三井秋風三回忌追悼

松に聞く芹の琴や秋の風　園女（花林燭）

東國行脚の頃

水むすぶ手ぬくふばかり秋の風　千子（伊勢紀行）

秋風や不破の雀の七つ起　野坡（野坡吟艸）

國府臺

松杉に秋風寒し古戰場　桃隣（古太白堂句選）

木から物のこぼるゝ音や秋の風　千代尼（千代尼句集）

悲しさや釣の糸吹く秋の風　蕪村（蕪村句集）

秋の風書むしばまず成にけり　同（同）

金屏の羅は誰が秋の風　同（同）

秋風や干魚かけたる濱庇　同（同）

秋風や酒肆に詩うたふ漁者樵者　同（同）

思ひ出て酢造る僧よ秋の風　同（蕪村遺稿）

十六夜の雲吹去りぬ秋の風　同（同）

唐黍の驚き易し秋の風　同（同）

秋風に散るや卒都婆の鉋屑　同（同）

秋風の再び倒す障子哉　同（蕪村句集拾遺）

藤の實の鳴出しにけり秋の風　曉臺（曉臺句集）

秋風や寄るかひもなき竹柱　同（同）

市にふる鯛，尾かれて秋の風　同（同）

猪垣の結び目切れて秋の風　同（同）

秋風や鷹に裂るゝ鳥の聲　同（同）

秋風や鷹飼そむる酒の君　同（同）

秋風の吹につけても長等山　同（同）

巢に籠る蟻急ぎや秋の風　同（同）

秋の風三井の鐘より吹き起る　同（同）

广海嘆中

秋風や灯ともしのぼる浦の山　同（同）

なき聲の聲耳にあり秋の風　同（同）

秋風や憂はうつらぬ鸚鵡石　闌更（半化坊發句集）

秋風や蛩の呼聲械の音　同（同）

秋風や酒の過たる顏もなし　同（同）

星多き夜はつよからず秋の風　同（同）

秋風や山邊に動く火の青き　同（同）

松杉の常盤も秋は秋の風　同（同）

鳥羽の浦に到りて

秋風や浮身を波に走りかね　同（同）

秋風

秋風に白波つかむ鶚かな　闌更　（半化坊發句集）

草庵にて

秋風や川邊の庵に老二人　同　（同）

朝六つや誰も通らず秋の風　白雄　（白雄句集）

秋風や蔦も額まず漬庇　同　（同）

吹盡し後は草根に秋の風　同　（同）

こもり江や嵐のあとの秋の風　同　（同）

陸奥行脚の頃、両足山にて

門に入れば僧遙なり秋の風　同　（同）

干てある鎧に來たり秋の風　蓼太　（蓼太句集）

秋浦吟

秋風や碇もなびく花芒　同　（同）

仙臺にて　應別

後先に故郷持ちぬ秋の風　同　（同）

高館懷古

山聳え川流れたり秋の風　同　（同）

秋の風芙蓉に皺を見付たり　同　（同）

秋風や人にかけたる蜘の絲　同　（同）

秋風に片羽煩ふ胡蝶かな　同　（同）

秋風や假初事の一葉より　同　（同）

老が身や假初ならぬ秋の風　樗良　（樗良發句集）

鬼の畫賛

泣け〳〵と我を責めけり秋の風　同　（同）

椰にも竹にもよらず秋の風　同　（同）

朝顏に吹初てより秋の風　同　（同）

燒捨の人のむくろに秋の風　几董　（井華集）

釣鐘に椎の礫や秋の風　同　（同）

秋風や捨ば買うの越後縞　同　（同）

子の顏に秋風白し天瓜粉　召波　（春泥發句集）

物換る壁こ夕日や秋の風　同　（同）

秋風や敷居に刀の鎮置かん　同　（同）

あまさじと藏へも這入る秋の風　移竹　（乙御前）

本ゝ讀めば格子の間を秋の風　同　（同）

牛蠅は牛を頼みつ秋の風　同　（同）

蔓草や蔓の先なる秋の風　太祇　（太祇句選）

網をすく燈火煽つ秋の風　乙總　（續明烏）

市小屋に火伏の札や秋の風　維駒　（五車反古）

柴の戸や明くるよりはや秋の風　成美　（成美家集）

身ひとつにからまで吹くか秋の風　同　（同）

鴛鴦も吹分けられて秋の風　同　（同）
人住めば住むとて吹くや秋の風　同　（同）
病後
棲ふみてころびやすさに秋の風　同　（同）
鎌倉にて
名を問ふや嵓々の秋の風　同　（同）
一つ灯の消えも果たさず秋の風　同　（同）
それまでの命こらへん風の秋　同　（同）
秋風のさても明るき寒さかな　乙二　（松窓乙二発句集）
秋風や白き雀を今朝も見る　同　（同）
秋風や寐よとの鐘はいつもつく　同　（同）
旅の夜はまだ短いに秋の風　同　（をのゝえ草稿）
親持たぬ舟の鼠や秋の風　同　（同）
秋風や舟より舟へ行く鳥　士朗　（枇杷園句集）
須磨寺は戸を閉にけり秋の風　同　（同）
秋風の吹すかしけり藪の月　同　（同）
松兒を悼む
秋風や行空もなき夜の鶴　同　（同）
馬蜩（ママ）に打任せてや秋の風　巣兆　（曾波可理）
かはほりも里のやつれや秋の風　同　（同）
松島やされば琴引く秋の風　同　（同）
秋の風親なき我を吹そぶり　一茶　（享和句帖）
日の暮や人の顔より秋の風　同　（同）
夕月のけば〳〵しさを秋の風　同　（同）
留別
秋の風蟬もぶつ〳〵をしと鳴　同　（旅日記）
姥捨し國に入りけり秋の風　同　（同）
秋風や草より先に人の顔　同　（同）
秋風や家さへ持たぬ大男　同　（同）
秋風の吹けとは植ゑぬ小松哉　同　（同）
焼柱轉げたなりに秋の風　同　（同）
欲捨よ〳〵と吹くか秋の風　同　（同）
草原や豆腐の殼に秋の風　同　（七番日記）
秋風やあれも昔の美少年　同　（同）
秋の風一茶心に思ふよう　同　（同）
秋風や壁のヘマムショ入道　同　（同）
秋風やのらくら者の後ろ吹く　同　（同）
小兒
泣く者を連れて行とや秋の風　同　（同）

秋風や横に車の小役人　一茶（七番日記）
秋風や卒塔婆踏へて啼く鳥　同（同）
秋の風俄にそつとしたりけり　同（同）
江戸立の身構したり秋の風　同（同）
秋風や我後ろにもうそり山　同（同）
秋風の一日散に來る家哉　同（同）
流さるゝ蠶の蝶を秋の風　同（同）
秋風や鷄なく家のてつぺんに　同（同）
秋風や壁を着て寐る坊主宿　同（同）

杉字菴入道

秋風や摘み殘されし桑の葉に　同（同）
秋風に歩いて迯る螢かな　同（おらが春）

高井野の山みにより

秋風や磁石にあてる故郷山　同（同）

さとが廿五ノ墓

秋風やむしりたがりし赤い花　同（同）
秋風や蓮生坊が馬の尻　同（一茶句帖）
秋風にふつと咽せたる峠かな　同（同）
あながちに吹くとなけれど秋の風　同（九番日記）
西方と氣づく空より秋の風　同（同）
でゝ蟲の捨家いくつ秋の風　同（同）
草の葉の釘の尖るや秋の風　同（同）

正（?）寺の上人、十ばかりなる住侶を殘して、遷化ありし哀れさに

秋風や小さい驛のあなかしこ　同（同）
唐紙の引手の穴を秋の風　同（同）
淋しさに飯を喰ふなり秋の風　同（一茶新集）

病後

かな釘のやうな手足を秋の風　同（一茶發句集）
墨染の蝶が飛ぶなり秋の風　同（同）
軒下の田水あかるし秋の風　梅室（梅室家集）
秋風や奥底しれぬ蟻の穴　同（同）
秋風や板繪馬騷ぐ數の神　同（同）
里見えて牛も走るや秋の風　同（同）

湖上夜泊

近過て只秋風の三井の鐘　同（同）
白濱や果は弱りし秋の風　蒼虬（蒼虬翁發句集）
水と日の親しくなりて秋の風　同（同）
竹割れば竹の中より秋の風　同（同）
鹽濱に人の動きて秋の風　同（同）

秋風を綿に吹かせて山の家　同（同）

親しらずを越ゆる：は、秋風殊に烈しくて

秋風や命を走る波のひま　同（同）

椀の香の薄らぐ空や秋の風　同（同）

ひか／＼と干潟を吹くや秋の風　同（同）

秋風に馳せ下りけり暮るゝ山　露月（露月句集）

莖ながき蓮を秋風採みさわぐ　富子（倦鳥）

土手の上畳干してある秋の風　木石（同）

明智光秀ノ墓

土となれば惡む人なし秋の風　瓢人（同）

秋風隊書容と樂み限りなき　小涓（同）

オルガンチノに許されし教會、學林のありし址は畑地となり、今尚六臼なる地名として存す

大臼（テウス）とは字に殘り秋の風　東方（同）

セミナリオの跡

秋風は座家のとばりあほつなり　六鹿（同）

濱口首藩士

この民の望み負ひしが秋の風　青々（同）

子規居士三十年忌

秋風やその後苦吟三十年　同（同）

秋風に住みものこれる蜻蛉かな　同（同）

夏草と見し間に秋の初風や　同（同）

初嵐（はつあらし）（初）　秋の初風（あきのはつかぜ）　はた嵐

古書校註

【御傘】秋也。初風は雜也。

【年浪草】許愼が説文に曰、嵐は山氣也。〇孫愐が切韻に曰、嵐は山下より出る風也。〇徐信曰、今字書を考るに、山下より出る風と爲る訓無し。（略）倭俗皆嵐を以て山風となす。考ふ可し。〇和漢三才圖會に曰、山の氣を嵐と曰ふ、醫書に山嵐不正の氣と謂ふは是也。今初秋以後朝夕山より吹く風を、俗に嵐と名く。云々。初秋初て山より吹く風を俗乂初嵐と名く。〇倭名抄に曰、嵐（和名阿良之）、〇連歌新式秘抄曰、初嵐は七月末より八月中頃迄の風也云々。夏の青風も此處に考へ合すべき也。「秋の初風」初秋風は「秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる」此の意にや。

【栞草】「秋の初風」秋の初めつかたの心によむべし。

註　初嵐は連歌至寶抄には中の秋の部に出し、温故日錄にては月の部に出せり。

季題解說

立秋後初めて吹く風をいふ。又陰暦七月末より八月中旬頃までに吹く風ともいふ。

【實作注意】は大嵐は稲作物を荒らす意と云ふも、又一説には、初秋、初嵐をとツと通じての意味なりとも云へり。秋の初風と云ふも、こゝにては初嵐の事に當る。元來嵐には支那にては霞の如く立ちたる山氣を云ふも、日本にては、嵐は山の風ともアラキ風とも云ふ。秋になりて稍荒き風に秋氣の動きを感ずる場合なるべし。初の字に其心あり。【参照】秋の風、秋の嵐

【例句】

初嵐

低き方へ水のあはづや初嵐　沾徳（沾徳句集）
そよ〳〵や藪の内より初嵐　旦藁（猿蓑）
稲の穂に馬乗掛けて初嵐　車庸（[illegible]の實）
鶏の尾につられけり初嵐　荊口（有磯海）
日を拜む蚕のふるへや初嵐　嵐雪（陸奥衛）
瀬田の橋上り下りや初嵐　許六（[illegible]）
辻賣の鯉一はねや初嵐　野坡（野坡吟艸）
吹かれ散る江湖の僧や初嵐　也有（[illegible]集）
蟬の聲掃てしまふや初嵐　同（同）
駕に居て提灯待つや初嵐　太祇（太祇句選後篇）
昔來ねば油灯薄し初嵐　同（同）
夜半晴て砂利の高さよ初嵐　白雄（白雄句集）
流れ出る墳土水や初嵐　同（同）
花髪背きあふ野邊の初嵐　曉臺（曉臺句集）
僧正の頭より實こぼすや初嵐　大魯（[illegible]句選）
猿の毛のあらくれたつや初嵐　舞閣（石の月）
初嵐橋の足場崩れけり　子規（全集）
初嵐小不二ゆがんで見ゆる哉　同（同）

送りまぜ（初）　おくれまじ

【季題解説】陰暦七月盆過に吹く風をいふ。盆過ぎなれば送りと云ふ名あるにや。又所によりてはおくれまじとも云ふ。【[illegible]】秋風

盆東風（初）

【季題解説】盂蘭盆會の頃吹く東風をいふ。【[illegible]】秋風　宗教—盂蘭盆會

秋の嵐（三秋）　秋の大風

【季題解説】秋風より劲く、野分よりよわき程度の秋季の風をいふ。
【[illegible]】秋風　初嵐　颱風

例句

秋の嵐

忍の岡の麓へ家を移しける頃

塔高し梢の秋の嵐より　素堂（素堂家集）

馬方の帯やしそめて秋嵐　和泉（流川集）（鳥居前）

椽の木の秋を剥るゝ嵐かな　几董（井華集）

颱風（たいふう）（初、中）

季題解説　初秋の頃襲來する極めて猛烈なる風にして、八朔、二百十日、二百二十日は恰度此風の襲來する頃に當り、農家の大に恐れて警戒するところなり。［參照］秋風（アキカゼ）　秋の嵐（アキノアラシ）　野分（ノワキ）　時候―二百十日（ニヒャクトヲカ）

例句

颱風

颱風に傾くまゝや瓢垣　久女（ホトトギス）

颱風や石垣走る濱ねずみ　春太（同）

參考　本邦に襲來する暴風雨の一種であつて南洋の島海に發生して次第に發達しつゝ北進して本邦を襲ふものである。福建誌に「風大而烈者爲颶又甚者爲颱」とあり又清朝康熙三十三年の臺灣府誌に「颶之最甚曰颱、颱無定期必與大雨同至必拔木壞垣」とあり馬琴の弓張月にも「それ大風烈しきを颶といふ又甚しきを颱と稱ふ」とあるが颱風の名稱は之れによつて附せられたものである。

颱風が發生するのはヒィリッピン群島の東に當る島嶼の極めて多い所であつてマリアンナ群島及カロリン群島附近である。此處に發生した低氣壓は大抵北西へ進み臺灣と小笠原島の間を通過し緯度二十度乃至三十度の所で北東方へ向きを變へ本邦を襲うて來る。其の速度は一時間二十五粁位なものであるが徑路は抛物線狀をなし、轉向した後には急に速度を增して本州へ殺到する。

岡田博士が、明治三十年から四十四年迄の十五年間に本邦を襲うた颱風二百四十七個について調査した結果によると、我國を襲ふ颱風は一年平均十六を算し、夏から秋へかけて最も多い。即ち冬季には僅かに八回、春には十四回、夏には九十五回、秋には百三十回となつて居る。然も九月が最も多く、五十六回、次で八月の五十五回、十月の五十二回、七月の二十九回となつてゐる。故に七月下旬から十月初旬迄を颱風期と稱する。二百十日及二百二十日は九月初旬であつて颱風が最も多い時である。

安井春海が漁夫から聞いて、貞享暦に始めて二百十日及二百二十日なる厄日を加へて庶民を警めたのは、全く颱風襲來を豫告するためであつて此の日に限り暴風雨が來ると云ふ語では無く、此の頃は颱風期の中心に當る故夫れを警めたものと見られる。

颱風の徑路は抛物線をなして居るが、春の中は臺灣から支那大陸の方へ進むが、夏になる、轉向する、東京が次第に北東へ偏して來ると共に轉向して

からの方向も北東へ向ひ本邦へ進んで來る樣になる。又其の速度も轉向する處迄は次第に遲くなり、轉向する處では最も遲くなり時には二三日停滯することもある。併し一度轉向すると急に速度を增して殺到して來る。颱風は暴風と共に强雨を伴ふものであつて、其のために船舶の流失其他家屋の倒潰等多大な被害を與へるものであり、又颱風が上陸すると其の後を追うて海水も上陸し、ために暴風津浪の現象を生じ、又多大の損害を與へる。而して津浪は特に颱風が袋狀をなした灣内に入り上陸した時に特に著しい。颱風に伴ふ風は特に烈しく秒速五十米に及ぶものさへある　通常の弱い颱風でも秒速十米以上の暴風が吹く事は珍らしく無い。然も雨を伴ふ故被害も從つて大きくなるのである。斯くの如き颱風或はそれに伴ふ暴風を昔から野分と稱してゐる。淸少納言の枕草子に「野分のあしたこそをかしけれ云々」とあるは颱風一過后の情景を敍したものと思はれる。故に人によつては野分を單に暴風とのみ解する向もあるが、恐らく之れは颱風をも含めての稱であらう。

野分（のわき）（中）

野わけ（のわけ）　夕野分（ゆふのわき）　野分雲（のわきぐも）　野分跡（のわきあと）　野分晴（のわきばれ）

古書校註

【御傘】秋也。七八月に吹く大風也。暴風とも書く故に、野の字・分の字に二句去也。時雨を付けば時節ちがひて惡しし。

【年浪草】月令に曰、仲秋の月、盲風至る。註、盲風は疾風也。〇倭名抄曰、暴風、漢語抄に云、八夜知、又乃知木乃加世。〇源氏物語野分卷曰、野分れいの年より。註云、八月は大風の吹く也と云々。

季題解說

陰曆八月中に吹く大風をいふ。草木を吹わくる故と言ひ傳へたり。のわけともいふ。

實作注意

野分は秋の暴風にはあれど、風雨一過の朗安堵の思ひあり。殘暑一洗して秋涼を覺え、風光一變の駭きと又快感あるものなり。**參照**　秋風（アキカゼ）　颱風（タイフウ）　鮭颪（サケオロシ）　時候—二百十日（ニヒヤクトヲカ）

例句

野分

日枝高く吹かへさるゝ野分かな　言水（言水句集）
曉の雪覗ぐ富士の野分哉　同（同）
行衞なき雲に組して野分かな　來山（今宮草）
　湖白が父の身まかりける時
野分とは人をそこなふ風の名歟　同（續今宮草）
西瓜ひとり野分を知らぬ旦かな　素堂（素堂家集）
吹飛ばす石は淺間の野分哉　芭蕉（更科紀行）
猪もともに吹るゝ野分かな　同（あめ子）
一番に案山子をこかす野分かな　許六（有磯海）
辻君も歸る野分の旦かな　同（玉まつり）

家かへて不得手の屋根へ野分哉　同　（横平樂）
しやあとして西瓜畠の野分かな　同　（風俗文選犬註解）

去來へ返し
柿ぬしの野分かゝへて旅寐哉　支考　（梟日記）
一服に殘暑をさます野分哉　同　（山琴集）
冷々と朝日嬉しき野分かな　同　（同　）
日和能うなるとて夜の野分哉　浪化　（有磯海）
當もなき海へ吹出す野分哉　同　（浪化上人甲戌集）
ふんばりて峠を越ゆる野分哉　同　（浪化上人發句集）
荒れ〳〵て末は海行く野分哉　猿雖　（笈日記）
野分する夜半も達磨の眼哉　同　（初便）
猪の吹かへさるゝ野分かな　正秀　（一字幽蘭集）
鳥さしの素戻りをする野分哉　同　（已か光）
手に足らぬちり〴〵草の野分哉　立志　（其袋）
小原女や野分に向ふ抱へ帶　園女　（同　）
白浪に濱の地藏の野分哉　素覽　（流川集）
舟綱に先づ小屋繋ぐ野分哉　盧牧　（句兄弟）

有磯海集を祝す
鶉の子や野分にふとる有磯海　去來　（有磯海）
蓑蟲の家崩したる野分かな　句空　（同　）
をさまるも安し野分のなぐり吹　舍羅　（荒小田）

田家
片鬢に藁しべ殘る野分哉　千那　（鎌倉海道）
大竹の藪吹きふせる野分かな　木導　（水の音）
いろ〳〵の當事違ふ野分かな　也有　（蘿葉集）
夏を宗と造れば菴に野分かな　同　（同　）
月も見ぬ夜を烏啼く野分かな　同　（同　）
晴て今朝空は汚れぬ野分哉　同　（同　）
鷄頭に牛の刀の野分かな　同　（同　）
雲騷ぎ米買ひ騷ぐ野分哉　同　（同　）
鳥羽殿へ五六騎急ぐ野分かな　蕪村　（蕪村句集）
門前の老婆子薪貪る野分かな　同　（同　）
麁なる我蕎麥存す野分哉　同　（同　）
市人のよべ問かはす野分哉　同　（同　）
客僧の二階下りくる野分哉　同　（同　）
船頭の棹とられたる野分かな　同　（蕪村遺稿）
妻も子も寺で物喰ふ野分哉　同　（同　）
關の灯をともせば滅ゆる野分哉　同　（同　）
先づ二つ瓦ふくもの野分哉　同　（同　）

野分

暁の家根に矢の立つ野分かな　蕪村（蕪村遺稿）
山蔵の隠して過ぐる野分哉　同（蕪村句集拾遺）
岡の家の海より明けて野分哉　同（新五子稿）
恙なき帆柱寐せる野分かな　同（同）
底の無い桶こけありく野分哉　同（同）
棒突て庄屋殿見舞ふ野分哉　同（同）
鴻の巣の網代にかゝる野分かな　同（同）
片店はさして餅賣る野分哉　太祇（太祇句選）
野分して樹々の葉も戸に流れけり　同（同）
淺川の水も吹散る野分かな　同（同）
渡守舟流したる野分哉　同（同）
夕されや軒の烟草に野分吹く　同（太祇句選後篇）
枝裂けてしろりと明ける野分哉　同（同）

角田

塀も立てず野分の朝の都鳥　闌更（半化坊發句集）
海山の中に野分の庵哉　同（同）
戸明れば月赤き夜の野分哉　同（同）
小夜中や野分靜まる夢心　白雄（白雄句集）
岩端の鷲吹放つ野分かな　蓼太（蓼太句集）
企鉀に雨吹入るゝ野分かな　同（同）

源氏物語を讀ける折ふし

物のあやも暮て猶吹く野分哉　几董（井華集）
悲しさもやぶれかぶれの野分哉　同（同）
野分の夕杜子美か襌はづれたり　同（同）
乞食にも臥戸のあれば野分哉　同（同）
ま一息野分吹らん薄月夜　召波（春泥發句集）
子狐を穴へ呼込む野分哉　同（同）
獨居の野分ながらに朝寐哉　同（同）
雪隠のかきかねはづす野分哉　同（同）
宿迄は闇の野分や馬の上　同（同）
折角と野分迫ゐる旅寐哉　暁臺（暁臺句集）

思ふ事ありて

露も散れ雲が上なる野分の日　樗良（樗良發句集）
なかなかへて野分に逢へる胡蝶哉　鹿卜（五車反古）
蛤の息もつきあへず野分吹く　成美（成美家集）
三日月の光を散らす野分哉　同（同）
野分吹く空も迫れり山清水　乙二（松窓乙二發句集）
碑貫の神は何神野分吹く　同（同）
松竹になる氣も失せる野分かな　同（同）

五位鷺の位まけする野分哉　同　（そのゝえ草稿）
泣人の涙吹きる野分哉　同　（同　）
野分にも關屋ヶ蘆の片葉哉　巣兆　（曾波可理）
小籬や蝿よけ草の野分吹く　一茶　（七番日記）
こやし塚そよ〳〵けぶる野分哉　同　（一茶句帖）
簾越や野分に吹かす足の裏　同　（發句題叢）
心細く野分のつのる日暮かな　子規　（子規句集）
野分して上野の鳶の庭に来る　同　（同　）
我聲の吹戻さるゝ野分かな　鳴雪　（鳴雪句集）
鶏の空時つくる野分かな　虚子　（ホトヽギス）
入り水の不毛に汐の野分かな　青々　（倦鳥）
野分雲　野分だつ雲の急ぎや乾きゝみ　探志　（己か光）
野分跡　西須磨を通る野分のあした哉　蕪村　（蕪村遺稿）
野分止んで鼠のわたる流かな　同　（新五子稿）
水寒し野分のあとの捨筏　白雄　（白雄句集）

鮭颪（さけおろし）（中）

季題解説 奥州地方の野分にして、此頃より鮭漁を始むるより此名あり。

参照 秋風（アキカゼ） 野分（ノワキ） 人事 鮭打（サケウチ）

例句 鮭颪　石を置く板屋しらけつ鮭おろし　青々　（妻木）

鯉魚風（りぎよふう）（晩）

季題解説 陰暦九月に吹く風をいふ。李賀詩に「門前流水江陵道、鯉魚風起芙蓉老」とあり。

参照 秋風（アキカゼ） 色なき風（イロナキカゼ）

色なき風（いろなきかぜ）（晩）

季題解説 陰暦九月頃に吹く風をいふ。『新古今和歌集』に「ものおもへばいろなき風もなかりけり、身にしむ秋のこゝろならひに　久我内大臣」とあり。

参照 秋風（アキカゼ） 鯉魚風（リギヨフウ）

高西風（たかにし）（中、晩）

季題解説 九月、十月頃、上空に吹く西風をいふ。此風吹く時は海荒れて浪高く、夏の土用浪より烈しといふ。

参照 秋風

例句 高西風　高西風に[illegible]を[illegible]矢の行方かな　青々　（倦鳥）

雁渡し（晩）　青北風

季題解説　陽暦十月頃に吹く風をいふ。初めは雨を伴ひ、後よく晴れて吹く。この風の吹く頃雁多く渡り來る故に此名あり。青北風ともいふ。〔參照〕秋風（三）　動物—雁（晩）

例句

雁渡し　尼が崎の城の火見ゆれ雁わたし　青々（妻木）

富士の初雪（中）

季題解説　今年になりて初めて富士に雪の降りしをいふ。

實作注意　古來富士の初雪は陰暦六月十五日降るとせられしも、實際には秋に入りて降るなり、實際によむべし。〔參照〕夏—富士の初雪

參考記事　富士山の初雪は明治十七年以來沼津測候所及甲府測候所で觀測して居る。兩者其年々大した差は無いが微雪のあつた時などは年によつて數日の差がある。兩個で觀測した年々の富士山初雪日を平均して見ると沼津のは九月二十六日となり、甲府のは九月二十二日となり甲府の方が少し早くなつてゐる。之れは甲府が北側の日陰であるのが原因で少し早く降るのであらうと思はれる。

秋の雨（三秋）　秋雨　秋微雨　秋黴雨　秋霖　秋濕り

古書校註　【俳諧論語】秋雨（アキサメ）といふ句折々見え侍る。春雨に對して秋さめと心得給ふは大に非也。和歌連歌はいふに及ばず、俳諧にもなき事なり。さるを元文延享の頃より俳道すたれて、あられぬ事どもの出來ることそなげかはしけれ。

註　この說「嵐亭諧話」にも見ゆ。又八雲御抄にはやく「光忠があきさめなどいへるたぐひはをかしき事なり」と非難し給へり。されど「秋さめ」の語も慣用久し、

季題解説　秋に降る蕭條たる雨をいふ。細かくほろ〳〵とこぼるゝ雨。又梅雨の如くに降りつゞくことあり、「秋」といふに他の季には紛れぬもの有るべし。〔參照〕洗車雨　御山洗　秋時雨

例句

秋の雨

松の葉の地に立並ぶ秋の雨　丈草（後れ馳）

稲積に出づる主や秋の雨　同（杉丸太）

立騒ぐ事皆濟みて秋の雨　野坡（艸之道）

秋雨や塀濡渡す杉の杢　同（雪薯集）

松涼し吹綿よごす秋の雨　同（野坡吟艸）

ぬしは誰ゝ木綿なだるゝ秋の雨　尚白（花摘）

蓮葉の裏にも降るや秋の雨　之道（あめ子）

秋よ猶少なき家を敲く雨　嵐白（續虚栗）
秋の雨舞れて瓜よぶ人もなし　野水（曠野）
淋しさや隣へ傳ふ秋の雨　里東（四季千句）
南部の其「尋ね來りて、野田の玉川には西行上人の堀井ありと語りしに
濁る井を名にな語りぞ秋の雨　其角（花摘）
蓑蟲や化けて戸叩く秋の雨　北枝（蕉丸宮集）
菜畠の一うるほひや秋の雨　李由（有磯海）
誰ぞやと見れば袂の折濡れて立てり
茸の笠着て出たり秋の雨　許六（笠の影）
妓王寺の鉦かあらぬか秋の雨　吾仲（落柿舍日記）
秋雨や水底の草を踏渡る　蕪村（蕪村句集）
秋雨や我菅蓑はまだ濡さじ　同（蕪村遺稿）
茄子賣る揚屋が門や秋の雨　太祇（太祇句選）
椽端の濡れて侘しや秋の雨　同（同）
秋の雨懶き顏にかゝるなり　曉臺（曉臺句集）
秋の雨骨までしみし濡れ扇　同（同）
秋の雨胡弓の絲に泣く夜哉　同（同）
秋の雨深草の町に行かゝり　同（同）
山鳩の背中干なり秋の雨　同（同）
唐崎の松に日ざしや秋の雨　同（同）
鮫の尾の遠く沈めり秋の雨　同（同）
秋雨や今日菰槌の鉈作り　闌更（半化坊發句集）
或寺に老僧の佛彫居けるに
秋雨に焚くや佛の削り屑　同（同）
秋雨や追出す晝の濡れ鼠　同（同）
過去りし素然、夢に發句を語りけるに
亡き人の發句聞きけり秋の雨　同（同）
敷藁や草もえ枯るゝ秋の雨　白雄（白雄句集）
藷の葉や馬も喰はず秋の雨　同（同）
秋の雨嵐は宵の事なりし　同（同）
拓蘆老仙の瓢
淺からぬ瓢を命秋の雨　同（同）
野ざらしを見て通りけり秋の雨　同（同）
秋雨や四方椽にも濡るゝ方　召波（春泥發句集）
揚屋から旅乘物や秋の雨　同（同）
秋雨や旅に行逢ふ芝居者　同（同）
秋羅が菴にて
案山子から苗一筋や秋の雨　几董（井華集）

秋の雨

住馴れし里こそよけれ秋の雨　士朗（枇杷園句集）
秋の雨ところ〴〵に日は入りぬ　同（同）
もとあらの萩をしぼるや秋の雨　巣兆（曾波可理）
秋雨や灯火ほる膝頭　一茶（享和句帖）
秋の雨いやがる蚤を飛ばせけり　同（七番日記）
小庇や砂利打つやうな秋の雨　同（同）
秋雨や乳放れ馬の旅に立つ　同（同）
二軒家や二軒餅搗く秋の雨　同（一茶句帖）
草の戸の外は思はず秋の雨　蒼虬（蒼虬翁發句集）
眼の前に暮るゝ斗りぞ秋の雨　同（同）
後低き坐り心や秋の雨　同（同）

秋黴雨

果もなく瀬の鳴る音や秋黴雨　史邦（猿蓑）
米になる早稲の祝や秋黴雨　其縁（有磯海）

参考　春の花曇に對して秋にも曇り勝ちで陰鬱な日が續く時期がある。勿論其の時期は短かいが之れを秋さめと云ふ。此の時期には丁度夏の季節風が止むで冬の季節風に移る時期であるから定風もない、然も氣壓配置狀態も一定して居ない、つまり風の時期であるから内地の所々に小低氣壓が生じ、其のために曇り勝ちであつて小雨の降る樣な日が續くのである。一名を秋黴雨（あきつゆ）とも稱する。

洗車雨（初）　洒涙雨

古書校註

【年浪草】天中記に曰、七月六日の雨を洗車雨と云ひ、七日の雨を洒涙雨と云ふ。今夕雨ふれば二星會はずと俗に云ひならはせり。此の洒涙雨によりて思ひ誤るにや。

季題解說　支那にて陰曆七月六日の雨を洗車雨といひ、七日の雨を洒涙雨といふ。俗に七夕に雨降れば二星相逢はずといふは、此雨の降るより出しものなり。**參照**　秋の雨　人事―七夕

御山洗（初）

季題解說　陰曆七月二十六日、富士山の山閉の頃降る雨にして、山開き中登山人の山を汚せるを此雨にて洗ふといふ意より、富士山麓地方にてこれをお山洗ひの雨といふ。

秋時雨（晩）

季題解說　晩秋に降る時雨をいふ。**參照**　秋の雨　冬―時雨

例句

秋時雨

秋もはやあたま入れたる時雨哉　浪化（風雅戊寅集）

阿彌陀寺の庭に老木の松ありて寓響の名を得たり

薄鬘のやつれや松の秋時雨　支考（梟日記）

木に草に秋を碎けば時雨かな　同（國の華）

茶筌にてちよつちよと是は秋時雨　同（同）

竹賣て酒手に侘む秋時雨　北枝（東西夜話）

きらず汁秋も時雨となりにけり　五明（淺草はうこ）

參考 山地に於ては晝夜の別なく又晴曇に關せず時々急雨が降る事がある。之れが𛀁雨又は液雨と稱するものであつて極めて短時間で止むものである、之れは季節風が山脈に出會ひ、之れに沿うて吹き昇り、上空に昇つて冷却して雲を生じて降らすものである。我國では京都附近が時雨の名所である、元來時雨は冬季に多いものであるが秋季にも氣壓配置が冬の狀態になると時雨を生ずる。之れが秋時雨である。

秋の雷（あきのらい）（初）

季題解說 單に雷は夏季なれども、秋に鳴るをかくいふ。**參照** 夏—雷（かみなり）

稻妻（いなづま）（初）

稻光（いなびかり）　稻の殿（いねのとの）　稻魂（いなだま）　いねつるみ　いなつるみ　いなつるび　もゝかゞり

古書校註

【山之井】稻妻は妻によせてちらと見し宵の俤など言ひ、雲の衣の紋にも言ひなす。

【御傘】「稻妻」秋也、夜分也。天象には嫌はず、植物にも嫌はず（下略）。

〔いなびかり〕雜也。夜分に非ず（下略）。

【年浪草】釋名に曰、電は殄也。乍に見則殄滅也。○左經通義に曰、電之を電光といふ。○和漢三才圖會に曰、秋夜晴れて電有るは常也。俗傳云、此時稻實る故に稻妻・稻交（たゝ）の名有り。○雅章卿口決に曰、稻妻はかならず秋の題也、夏もあるものなれども秋に出す也云々。歌には稻妻のひかりの間もかはる心などよめり。稻𥙡とも書て、いなづまと云ふ、妻は𥙡の義也。稻を成熟せしむる神と云ふ義と也。諱には稻つま・稻のとのなども云ふにや。只電（カリ）は雜とす。

【栞草】もゝかゞり、〔必蔵抄〕に出で、稻妻をいふ。

季題解說 秋の夕方より夜間にかけ、雷鳴はなくしてたゞ電光のみ走るをいふ。

實作注意 稻光＝稻の殿、稻妻に對していふ。いねつるみ＝いなつるみ、ともに此時稻實ると言傳ふる故なり。いなだま・もゝかゞり、ともに其光の

きらきらと激しきより云ふ。〔季題〕夏―雷なり

例句

稲妻

稲妻や淀の與三右が水車　鬼貫（鬼貫句選）
稲妻も日付月は田面かな　清徳（清徳句集）
稲妻を手にとる闇の紙燭哉　芭蕉（續虚栗）
あの雲は稲妻を待つ便り哉　同（曠野）
稲妻に覺らぬ人の尊さよ　同（己か光）
稲妻や顔のところが薄の穂　同（續猿蓑）
稲妻や闇の方行く五位の聲　同（同　）
稲妻や海の面テをひらめかす　同（芭蕉翁發句集）
稲妻やきのふは東今日は西　其角（曠野）
稲妻や思ふも言ふも紛るゝも　同（いつを昔）
稲妻や伜敬したる空に父　同（華摘）
稲妻にゆられて月も一ころび　去來（名月集）
稲妻のかきまぜて行く闇夜かな　同（菊の香）

　　□□□□にて

稲妻やどの傾城とかり枕　同（續有磯海）

　　□□□□堪へ□□頃　夜船より上りあがりて、酒亭に眠る

稲妻や夜明て後も船心　丈草（市の庵）
稲妻のわれて落るや山の上　同（初蟬）

　　六石内藏之介が硯ですけける人より、□句望の時

稲妻の間や大佛の窓の顔　許六（正風彦根躰）
稲妻や走り届かぬ京の上　同（風俗文選犬註解）
稲妻に染てはらりと野山哉　支考（西華集）
稲妻に聲ありそよと花芒　同（桃盗人）

　　風下を吟む

稲妻に筆を投たる便りかな　浪化（そこの花）
稲妻に濡れて走るや砂の上　同（きれ〳〵）
稲妻や手拭掛のはづれより　同（浪化上人發句集）
稲妻やなぐり盡して薄原　史邦（芭蕉庵小文庫）
稲妻は鶺鴒の尾の契り哉　同（猿舞師）
稲妻や蜆殻燒く野の匂ひ　臥高（蔦の松原）
稲妻や池にこぼるゝ宵の闇　同（笈日記）
曙や稲妻戻る雲の端　土芳（續猿蓑）
稲妻に大佛拜む野中かな　荷兮（曠野）

　　うす井峠にて

稲妻にけしからぬ神子が目ざしやな　嵐雪（其袋）

　　船中

稲妻やしば〳〵見ゆる膳所の城　素洗（卯辰集）

稲妻や暗がりにさす酒の論　惟然　（其便）
稲妻の山を出かぬる夜明かな　嵐青　（有磯海）
稲妻や塗た枕を撫て行く　非群　（淡路島）
稲妻をかなぐり捨てつ猿ヶ城　曲翠　（誹諧會我）
稲妻や宿りかねたる鼠壁　吾仲　（青むしろ）
稲妻にいよ〳〵暗し思ふ筋　風竹　（同）
稲妻や稲の花見る氣色あひ　路青　（草庵集）
稲妻にひりゝともせぬ松葉かな　林紅　（菊の道）
稲妻やかぼそき橋の馬とゞめ　如行　（きれ〴〵）
稲妻の落込む稲や眞暗がり　十丈　（射水川）
稲妻やそは〳〵したる夜の客　りん女　（松濤集）
稲妻や星の光も定まらず　魯町　（雪薔集）
稲妻を押へて涼し暮の雲　野坡　（野坡吟艸）
稲妻に亡き魂や影通ふらん　杉風　（杉風句集）
稲妻や二荒山の根なし雲　桃隣　（古太白堂句選）
稲妻や嚏を一つ仕そこなひ　也有　（蘿葉集）
稲妻や賤機山も夜なべ時　同　（同）
稲妻や渡るものならば不破の關　同　（同）
稲妻や間を鐘の一つづつ　同　（同）
稲妻の明りは低し富士の雪　同　（同）
稲妻や坐禪の心引て見る　同　（同）
稲妻も鳥の聲に別れけり　千代尼　（千代尼句集）
稲妻や何にしるしを付けて行く　同　（同）
稲妻の裾を濡らすや水の上　同　（同）
稲妻や堅田泊りの宵の空　蕪村　（蕪村句集）
稲妻の一網打つや伊勢の海　同　（同）

神奈河浦にて

稲妻や八丈かけて菊多摺　同　（同）
稲妻にこぼるゝ音や竹の露　同　（同）
稲妻や波もてゆへる秋津島　同　（蕪村遺稿）
稲妻や秋津島根のかゝり舟　同　（同）
稲妻や佐渡なつかしき舟便り　同　（同）
稲妻や舟幽靈の呼ばふ聲　太祇　（太祇句選）
稲妻や雨雲分かる闇の空　同　（太祇句選後篇）
稲妻や弱り〳〵て雲の果　同　（同）
稲妻や無きと思へば雲間より　同　（同）
稲妻の籠りて見ゆれ草の原　同　（同）
稲妻の無き日は空のなつかしき　同　（同）

稻妻

稻妻や靜ならざる秋の空　闌更（半化坊發句集）
稻妻やよく寐る人の草枕　同（同）
稻妻の衣を透す淺茅かな　白雄（白雄句集）
暮ぬとて稻妻落す古江かな　同（同）
稻妻や曠まぎるゝ宵の門　同（同）
稻妻の闇に限らぬも哀なり　同（同）
稻妻の恐ろしうなる獨かな　同（同）
稻妻や後ろ放せば江に落る　同（同）
稻妻に匂ひをつけし魚藏かな　同（同）
稻妻や障子さしたる虚勞病　同（同）
稻妻や何れ礒家は淺間なる　同（同）
稻妻やとゞまるところ人の上　同（同）
世は果敢な電光石火酒酌まん　同（同）
稻妻や槇の夜雨の乾く迄　蓼太（蓼太句集）
稻妻や闇さへ洩れて不破の關　同（同）
稻妻や隣の藏も修覆時　几董（井華集）
稻妻や壁を逃ざる蜘の足　同（同）
稻妻やみそか法師は老なりき　同（同）

雨後

稻妻や空にも雲の忘れ水　同（同）
稻妻や山城の山河内の河　同（同）
稻妻のをさまる方や月の雲　同（同）
稻妻や其帚木の梢まで　召波（春泥發句集）
稻妻にあやしき舟の訴哉　同（同）
稻妻や雨月の夫婦まだ寐ねず　同（同）
稻妻や夜も折々の横渉し　同（同）
鉦の緒に稻妻つかむ夕哉　曉臺（曉臺句集）
稻妻の顔ひく窓の美人哉　大魯（蘆陰句選）
稻妻やあらぬ所の鳥おどし　月溪（月溪句集）
稻妻やされば夜來る杉の間　百池（明烏）
稻妻を待や侘寐の探し物　成美（成美家集）
稻妻に梨子の接木のいたみけり　同（同）
稻妻と一つになるやくそかづら　同（同）
稻妻や野に立つ人もあればある　同（同）
稻妻や念佛十疊の間に入る　同（同）
稻妻や人の歩みも遲いもの　同（同）
稻妻や翌は旅する人の來る　乙二（松窓乙二發句集）
稻妻や谷の小寺の泊り客　同（おのゝえ草稿）

舟よりまかりて

稲妻につゞまづく淀の堤かな　士朗（枇杷園句集）

山に居れば稲妻見ゆる海の上　同（同）

稲妻や終にすゞしき庭の松　同（同）

水打て稲妻待つや門畠　一茶（旅日記）

稲妻や蚊にあてがひし片足へ　同（七番日記）

稲妻をとらまへたがる子供哉　同（同）

稲妻を浴せかけるや死嫁ひ　同（同）

稲妻やうつかりひよんとした顔へ　同（同）

稲妻につぶり撫けり婆　同（一茶句帖）

石川はくはらり稲妻さらりかな　同（おらが春）

稲妻や一トリづつに世が直る　同（同）

豊年の大稲妻よ稲妻よ　同（一茶句帖）

稲妻や畠の中の風呂の人　同（九番日記）

稲妻や浦の男の供養塚　同（同）

稲妻のしばし流るゝ大河かな　梅室（梅室家集）

稲妻や松の香こぼす青疊　同（同）

稲妻や畠向ふの話聲　同（同）

稲妻や女の端居面憎き　同（同）

八西嵐山の職せし小雷と言へる六斎に題す

稲妻に嗎から落ちな小かみなり　同（同）

稲妻に梁の水波む伏家かな　蒼虬（蒼虬翁發句集）

稲妻や更け行く夜の身のたゆみ　同（同）

蘆陰は早稲妻の小舟かな　同（同）

稲妻や業休みし宵の空　同（同）

稲妻や草に珠數くる僧の顔　鳳朗（鳳朗發句集）

稲妻に稲よき大和河内哉　鳴雪（鳴雪句集）

草の上和泉の南稲妻す　青々（倦鳥）

稲光

世を計ふ石さへあるを稲光　許六（正風彦根躰）

朝顔に野邊の契りや稲光　鴬有（有磯海）

稲の殿

獨居て留守ものすごし稲の殿　少年一東（續猿蓑）

【参考】雲と雲或は雲と地面との間に放電が行はれる時に發する火花を電或は稲妻と稱する。日射が強く其のために熱せられて輕くなつた空氣が上昇してゆくと上昇に從ひ膨脹するために冷却してゆき、遂に空氣中に含まれて居る蒸氣は凝結して微細な水滴となり雲を生ずる。此の水滴は上昇氣流に載せられて尙上昇して行くが夫れにつれて水滴は互に融合して大きな粒になる。併し其の直徑が五粍以上になると自己の重みで落下すると共に分裂して又數多の水滴になる。此の時分裂によつて生じ

た小水滴は陽電氣を帶び、それに接觸してゐた空氣は陰電氣を帶びる。處で陰電氣を帶びた空氣は水滴とは遊び高い所へ上昇してゆくから、此の樣な事を繰返して居る中に、陽電氣を帶びた雲と、陰電氣を帶びたものとは全く分離して仕舞ふ。

斯くして陽電氣を帶びた雲の電氣量が次第に增大して來ると他の陰電氣を帶びた雲、或は地面との間に放電が起る。之れが電の出來る原因である。電がピカリと光る時間は眼には網膜に映じた像が殘るから長い樣に思はれるが實際は一秒の百萬分の一位の極めて短時間である。又電の長さは通常二粁から四粁で十粁も長い電は極めて稀である。

電が通つた跡は空氣が排除され又は熱せられるために一時其處が稀薄となる。然し電が通つて仕舞ふと押し除けられた空氣が急激に凄じい勢で跡へ戻る、其のため空氣の波動が起り音を發する。之れが雷鳴である。雷鳴が殷々といつ迄も鳴り響くのは音波が重り合つて干渉を起すためである。

電の形は不規則な形をなして居るが之れは空氣中で電が通り易い所即ち帶電狀態になつた所を縫うて通るためである。然も同じ雲と雲との間に引續いて飛ぶ電を寫眞に寫して見ると其の形は殆んど同形である。之れは一度電の通つた部分の空氣は帶電するから電が飛び易くなるため、次の電も同じ此の道を選ぶ爲である。

電には種々な種類がある。晴れた夜に空が只光るものは稻光と云ひ之れは遠方に起つた電である。線電と云ふのは通常見る電であつて通常の放電と同じものである。幕電は空一面にハツ〳〵と光る現象で雲の後方に起る電である。珠電は眞珠の玉を連ねた樣な形の電であつて電が通る通路に存在する水滴からの刷毛狀放電によるものと考へられてゐる。球電は極めて珍らしいもので火の玉の如きものがノロ〳〵と飛んで破裂するものである。

秋の虹（あきのにじ）（三秋）

季題解說 秋になりてたつ虹をいふ。

實作注意 從來季題の書中に見えたる虹は、春の「初虹」に限りて季物（舊二月）とせり。それは「初雷」を春季（舊二月）とし、啓蟄等と關聯しての事なるべし。近頃、夏に虹多しとて虹を夏の季とし、又秋の虹をも季と定むるに至れり。〔參照〕春―初虹（天）　夏―虹（天）

例句

秋の虹

山峽の夕照り強し秋の虹　亮月（草上）

秋の霞（あきのかすみ）（三秋）

季題解說 霞は春季の定めなれど、秋のうらゝかなる日の霞める樣もあり、それを云ふ。

【實作注意】 秋の雲、秋霞など總て「秋」字等を冠らしめたるものは、只其文字あるばかりの句になり易し。物を確かに見、感じたるまゝを云ひ出さば、其言葉に秋の意はよく籠るべし。【參照】春―霞

霧（三秋）

朝霧　夕霧　夜霧　霧の笆　霧の帳　霧襖・霧の海　霧の谷　川霧　山霧　野霧　狹霧　薄霧　濃霧　大霧　八重霧　霧の印　霧雨　霧さぶく　霧時雨　霧の雫　霧立つ　霧こむる　霧深し　霧晴る　霧のまぎれ　霧の香　霧匂ふ　霧の聲　霧立ち人　胸の霧　心の霧

【古書校註】

【山の井】 霧はよろづへだつる物なれば、海邊は見えずして波の音のみざざらめくけしき、濱松は梢もかくれて、聲ばかりざゝんざとする有様をつらね、霧の海としては、世界の物は人魚と云ひ(一)、山のみじかもあしかといひなす心ばへ　猶霧の印と云ひては、木の葉天狗を思ひやり、猶夕霧としては雲井の雁のあまえ聲とも、北の方よりわたるなども。

【御傘】 〔霧の海〕降物・聳物(二)なり、・水邊にあらず。〔霧の籬〕降物・聳物・居所いづれも二句去也。垣には同面をきらふ。霧間と一ありて、又霧のひまなどとあるべし。誹には霧間と二ありて霧のひまと今一、以上三なり。霧の香と云ふは霧に匂ひの有る物也。聳物也、降物にも嫌ふ。霧の香と云ひて別にたき物あるには非ず。霧不斷の香をたきと詩にも作るは只秋の霧の事也。

【温故日録】 三月にわたる。蝶を結びても螢をむすびても秋也。柳をむすびても同前。胸の霧、秋也。心の霧、迷ふ心也、秋也。霧の香、秋也。霧の海、霧の笆、たゞ霧の立ち隔てたる體也。霧立人。

【年浪草】 五行志に曰、「霧は百邪の氣陰となり陽を冒す。註に曰、天氣下り地應ぜざるを雺と曰ひ、地氣天に發して應ぜざるを霧と曰ふ。霧之を晦と謂ふ。(略) 和漢三才圖會に曰、雺霧一種皆露の變ずる者、秋月盛にして、其の降るや朝と夕とに有り。甚多ければ則ち菜蔬草木凋枯、霜雪より烈し。○藻鹽艸曰、雺は春夏も詠ずべし、秋に限る可らずと雖ども、連俳に霧とばかりは秋也。八雲御抄の如く、春山の霧にまどへる鶯又は夏霧とも萬葉にありと云々。かやうに他の季を結びてはいつもあるべき也。○霧の笆とは霧の立ち隔てたるを笆と云ふ。歌に「深草や霧の籬に誰住てあれにし里に碪うつらん。」雺海とは、渺々たる海の如く野原に下りたる雺は見ゆるもの也。詩に朝連二霧一水漫々。○雺香とは、しをり萩に曰、香をたく也、不斷香也といへり。甍破れては霧不斷の香を燒、扉落ては月常住の燈火をかゝくと云ふ(三)　○霧立人とは、八雲御抄に隔てたる人を云ふと也　○胸

の霧とは思ひの晴れやらぬ事を云ふ也。〇霧雨とは、霧の深き所は雨の降るやうなるもの也、俗に霧は立つ也、雫は降る也、俳には用ひることも可なり

註（一）「霧の海に世界のものは人魚哉」といふ例句をあげたり。（二）連作にて、□・霞・霧・烟行なといふ（三）平家物語六道御幸の條に見ゆる文句　出典未□。

季題解説　大氣中の水蒸氣凝結液化し、細微なる水滴と成り、集りて地に近き空中を浮游するものをいふ。古くは、春秋共に霧とも霞ともいひしが、後世、春のを霞と云ひ、秋のを霧といふ事となれり。

實作注意　朝霧、夕霧、夜霧は霧のたつ時の別。霧の色、霧の帳はともに霧の立隔たる趣を形容せるもの夫木抄に「七夕のとよとでの姿たちかくす霧のとばりに秋風ぞ吹く」霧の海は霧の深く濃く恰も渺茫たる海の如く見ゆるを云ひ、又霧の立ちこめたる海を云ふ場合もあり。霧の香は、霧の一にほひ」のことゝも云ひ、又霧の立罩めたる様、斷えず立ちのぼる香煙の如く見ゆに擬したるものとも云へり。平家物語に「いらか破れては霧不斷の香を焼き、とぼそ落ちては月常住の燈をかゝぐ」とは、かやうの所をや申すべき。」狭霧の狭は發語にて單に霧の事なるも俳句にては薄霧、濃霧に對しての如くに解せらる。霧雨は小雨の如く降る霧をいひ、霧の雫は霧の立たるあとの木々の葉などの濡れて雫するを云ふ。**參照**　夏　夏の霧ナツノキリ　冬　冬の霧フユノキリ

例句

霧

霧に高し八ツ棟づくり八ツの谷　宗因（梅翁宗因發句集）

各枕に題す

雲霧や佐夜の中山寐惡し　來山（續今宮艸）

霧分けて我馬探る旦かな　同（同）

わせるなら霧のない間に誰も哉　鬼貫（鬼貫句選）

霧の中に何やら見ゆる水車　同（同）

晴るゝ夜の江戸より近し霧の富士　素堂（素堂家集）

箱崎にて古跡に

松なれや霧ゑいさらゑいと引ほどに　芭蕉（翁草）

雲霧の暫時百景をつくしけり　同（芭蕉句選拾遺）

霧汐烟行徳かけて須磨の浦　其角（田舍の句合）

宵闇や霧のけしきに鳴海潟　同（いつを昔）

伊勢近く拜まんと詣へば

日は晴れて古殿は霧の鏡哉　同（句兄弟）

笠束よ富士の霧笠時雨笠　同（五元集）

帆柱の並ぶや霧の向ひ島　北枝（雅文せらそこ）

馬宿にすそ湯沸すや霧も立ち　浪化（續有磯海）

幻住菴の跡

霧わたる京の太鼓や山の奥　曲翠（誹諧曾我）

霧よりはこなたへ廣し鳴の海　千子（伊勢紀行）

霧晴れて棧は目も塞がれず　越人（いつを昔）
霧の中もや〳〵とする舟子哉　牧童（作　原）
人をとる淵はかしこ歟霧の中　蕪村（蕪村遺稿）
霧晴れて高砂の町まのあたり　同（同　）

山中

霧にぬれて我酒は酢し鹽からし　曉臺（曉臺句集）
霧込めて那須野狩野の犬の聲　同（同　）
霧色あり百樹の上に酒吹む　同（同　）

亡母野送り

霧烟今や骨ならむ肉ならむ　同（同　）

石壁

雲霧の袂に入るや雨降山　闌更（半化坊發句集）
傘さして霧分け行や山法師　同（同　）
秋霧や蓑着る斗り降しきる　白雄（白雄句集）
鷺のしの字霧のかからぬ日はあらず　同（同　）
草の原霧晴れて蜘の圍白し　同（同　）
疊束な刎橋一つ霧間より　蓼太（蓼太句集）
霧深し何呼りあふ岡と舟　几董（井華集）
霧こめて途ゆく先や馬の尻　同（同　）
石火矢に出行船や霧のひま　召波（春泥發句集）
入相や霧になり行一つづつ　同（同　）
霧立て遠里小野となりにけり　同（同　）
霧ながら大きな町へ出にけり　移竹（乙御前）
晴てのく霧のはし〴〵鳴の海　一茶（享和句帖）
榓さす手からも霧は立ちにけり　同（旅日記）
牛もう〳〵〳〵と霧から出たりけり　同（七番日記）
狹筵や一文橋も霧の立つ　同（一茶句帖）
翌も〳〵あすも天氣ぞ淺間霧　同（同　）
人の吹く霧も寒いぞ蝦夷が嶋　同（九番日記）
狹筵や三文横も霧の立つ　同（同　）
秋霧に河原撫子見ゆる哉　同（發句題叢）
霧に眠る目付して居る蟇かな　同（嘉永版一茶句帖）

山館

旅人は皆をさまりぬ霧の中　梅室（梅室家集）

越後臨海にて

霧がくれ皆ここもとへ向ふ舟　同（同　）
樵夫二人だまつて霧を現はるる　子規（子規句集）
霧とれて九頭龍に日はあたたかき　柏堂（俳鳥）
霧を告げ妻とく起きて有りにけり　青々（同　）

朝霧

あかし船一夜かぎりか朝霧か　宗因（梅翁宗因發句集）

朝霧に海より出る海邉かな　同（同）

朝霧やさても富士存む長次郎　言水（初心もと柏）

明石

朝霧に歌の元氣や吹かれけん　素堂（素堂家集）

由井ケ濱

朝霧に一の華表や波の音　其角（雜談集）

朝霧や空飛ぶ夢を富士颪　同（句兄弟）

市川

朝霧や處のものに雨問はん　去來（伊勢紀行）

朝霧や川を隔てて闘に人　桃隣（古太白堂句選）

人丸の讃

薄隈はその朝霧の筆の艶ヶ　浪化（浪化上人發句集）

尼崎に人の吟

朝霧の海山こゝむ家居かな　惟然（初蟬）

朝霧や水を離るる鶴の雫　毛紈（鎭塞）

朝霧や廊下をのぼる人の聲　涼莵（小柑子）

朝霧や杭打音丁々たり　蕪村（蕪村句集）

朝霧や村千軒の市の音　同（同）

朝霧や畫に書く夢の人通り　同（蕪村遺稿）

朝霧や濡て起行く野邊の駒　闌更（半化坊發句集）

朝霧や晴るるに間なき山のきれ　白雄（白雄句集）

朝霧やあとより戀の千松島　蓼太（蓼太句集）

朝霧や施米こぼるる小土器　几董（井華集）

朝霧や二人起たる臺所　同（同）

有明や淺間の霧が膳を這ふ　一茶（七番日記）

夕霧

夕霧に船惜しぞ思ふ机かな　支考（山琴集）

藁すぐる人や夕霧吹かゝる　一茶（享和句帖）

一藪は別の夕霧かかるなり　同（旅日記）

夕霧や今賣る槇に霧の立つ　同（七番日記）

夕暮やおばゝが松も霧が立つ　同（同）

夕霧や馬の覺えし橋の穴　同（一茶句帖）

霧の籬

幸湍が霧の籬や昔松　其角（焦尾琴）

魚提けて霧の垣根をめぐりけり　蒼虬（蒼虬翁發句集）

霧の海

有明や比良の高根も霧の海　桃隣（古太白堂句選）

見る〳〵も帆數そひけり霧の海　千子（伊勢紀行）

馬士うたふ方へ舟やれ霧の海　尙白（忘梅）

霧の谷

馬の口よくとれ霧の谷深し　去來（伊勢紀行）

川霧

風にのる川霧輕し高瀨舟　宗因（梅翁宗因發句集）

山霧

宇治の山水

川霧や茶立服紗のし加減　其角（五元集拾遺）

川霧や鳥群れに飛ぶ舟の上　子規（全集）

朝寐する障子の隙も霧の山　北枝（草庵集）

山霧の梢に透る朝日かな　召波（春泥發句集）

山霧や宮を守護なす法螺の貝　太祇（太祇句選）

山霧のさつさと抜ける座敷哉　一茶（七番日記）

山霧や瓦の鬼が明く口へ　同（同）

山寺

山霧の通り抜けたり大座敷　同（同）

山霧の奥も知られず鳥の聲　子規（全集）

薄霧

山中温泉の上[illegible]寺に詣でて

薄霧や白鷺眠る湯の流れ　北枝（續有磯海）

薄霧の籬にしめる割木かな　句空（卯辰集）

おれいの里にて

霧薄き空につづくや原の果　杉風（杉風句集）

舟漕ぐや薄霧洩るる火はいづこ　闌更（半化坊發句集）

薄霧の引からまりし垣根哉　一茶（七番日記）

霧雨に屋根よりおろす茶の木哉　鬼貫（鬼貫句選）

霧雨

玉津島

霧雨に衣通姫の素顔見ん　素堂（素堂家集）

霧時雨富士を見ぬ日ぞ面白き　芭蕉（甲子吟行）

遠江小野の虫聞にまかりて

霧雨は尾花がものよ朝ぼらけ　其角（五元集）

霧雨や貴船の神子と一咄し　曲翠（藤の實）

霧雨の降もしきらず庵の内　之道（あめ子）

霧雨に濡れて芭蕉の雫哉　汶村（篇突）

霧雨の降り崩したり餓鬼灯籠　曉臺（曉臺句集）

人戀し杉の嬬手に霧時雨　白雄（白雄句集）

霧雨の外面に動く曇り哉　召波（春泥發句集）

霧雨や餘りに低き木のうつぼ　乙二（松窓乙二發句集）

霧雨や白き菌の名は知らす　同（同）

古郷をとく降り隱せ霧時雨　一茶（七番日記）

霧の香

霧の香や松明捨る山かづら　白雄（白雄句集）

參考　地面附近の空氣が冷され其の中の水蒸氣が凝結して小さな水滴となり浮遊してゐるものを霧と稱する。氣象學上では霧を出來方によつて輻射霧と混合霧との二種に分けてゐる。風の無い穩かな日に地面が外界へ熱を放射して冷えるため夫れに接してゐる空氣も冷え水蒸氣が凝結して霧となつたり、或は空氣中に存在して居る

細かい塵の層が輻射によつて冷えるため空氣も冷えて霧を生じたりするものを輻射霧と呼んでゐる。
之れに對して暖かい空氣が存在してゐる處へ急に冷たい空氣が襲來し互に混合した結果暖かい空氣が冷えて霧を生じたものを混合霧と呼んでゐる。何れも實質から見ると少しも變らないが只出來方によつて斯樣に名稱を異にするのである。
何れの霧も共に地面近くへ出來るから飛行機で低空飛行をする場合などは可なり邪魔になり危險を伴ふものである。
晩夏から初秋へかけて出來る霧には又特性がある。日中南の風が吹いて空氣が暖められて居る時、夜に入つて附近の土地が著しく冷却し、早朝になると遂ひ弱い北風となつて暖かい空氣のある處へ流れこんで來ると霧が出來る。之れは輻射霧と混合霧との中間物である。
海霧と云ふ霧は暖かい海上を吹いて來た暖氣が寒流上へ來たとき冷されて生じた霧である。故に寒流の存在する處によく出來るものである。我國では北海道の東海岸によく生じ、ガスと稱せられて居る。此の種の霧は航海者を惱ます事が多い。
又嚴寒な土地へ行くと氣温が低いため、水蒸氣は水滴とならず直ぐ氷結して氷の結晶となる。さうして微細な氷の結晶が空氣中に浮遊して殆ど霧の如き狀態となる。之れを氷霧と稱してゐる。氷霧に日光が直射するとキラキラと閃めき實に美觀を呈する。

露（三秋）

白露　上露　下露　朝露　夕露　夜露　初露　露更けて　露の玉　露けし　露じめり　露置く　露結ぶ　露光る　露散る　袖の露　涙の露　露の間　露の世　露の身　露の命

古書校註

【山之井】やくし草に置けるを瑠璃の光かと疑ひ、觀音草に結べるを如意輪と云ひたて、月を宿しては、水とる玉と見なし、闇に光るを、うば玉などもいひなす。又なびきあふ花壇に、露のふり心をとがめ、色なき露の染め分くる千栽（こ）を怪み、宿すゐの露もとの雫に、せんぐりな世を思ひ、無常の風は時を嫌はぬ露の身をはかなむ心ばへなどすべし。
【御傘】〔露更けて〕夜分也。深の字に二句嫌ふ。新式に時分にあらずとは、朝時分・夕時分にあらずといふ事歟　唯夜の更けたる露のさまなり。
【温故日錄】三月に亘る。すべて四季に用ふる物なれども秋は深きなり。露の涼しき、夏也。
波の露・袖の露・涙の露（涙の事也）・心の露・詞の露。
【年浪草】月令章句に曰、露は陰液也。釋して露となり、結て霜となる。五經通義に曰、和氣精液凝て露となる、露は地より生ず。○大戴禮に曰、

露は陽氣勝れば則ち散じて雨露となる。○倭名抄に曰、露、和名豆由。○露けき、瀼々也 詩に云、湛露瀼々。○白露、李白が詩に、秋露如白玉。○伊勢物語に「白玉か何ぞと人の問ひし時露とこたへて消えなまし物を。」○袖の露とは袖の時雨など云ふが如し、袖の瀧津瀬はなみだ也。袖の露は涙にも限る可らず。○上露は嘉元御百首に「風かよふ野原の草の上露は落て下葉に又結びけり。」頓覺「（一）浪の露とは増山の井に波の露と書けり。按ずるになみだの露の誤れるなるべし。

註（一）前裁の誤。

季題解說 秋の夕暮より夜にかけて、水蒸氣の凝縮して微細なる水滴を生ずるものをいふ。

作例注意 白露は、露の白玉の如きを形容していふ。上露は野草などの上に置く露。其他朝露・夕露・夜露・露の玉・露けし・露しめり、など用例あり。袖の露は袖のうるほふ事なるも、涙にも云へり。露の世・露の身も人の世の果敢なきことの意を露になぞらへて古歌などに詠めるもの多し。露は四季共に見るべしと雖も、其の最滋きが秋季なれば秋と定まれり。

參照 露時雨　枯草の露　露寒　春　春露　夏　夏露

例句參考

露

芋の葉の露しばし銀持賤屋哉　言水（言永句集）

此露を待て寐たぞや起たぞや　鬼貫（鬼貫句選）
寐ぬ夜語り里を通りて

踏む足や美濃に近江に草の露　同（同）
深草少將屋敷

牛御亭車に落す草の露　同（同）
發句合、尾張

板かけて更に見するや草の露　同（同）
發句合、三河

板わたる人に見するや草の露　同（同）

我裾は三河の露と交りけり　同（同）

浮島や露に香うつす馬の腹　同（同）
三宅吟東十三回忌に

袖に玉七ツの六ツの鐘に露　同（七車）
文月七日の曇りを

露とりに起て目をする曇りかな　同（同）

露ながく釜に落來る筧かな　素堂（素堂家集）

露とく〳〵試みに浮世すゝがばや　芭蕉（甲子吟行）
同行曾良に別るゝ時

今日よりや書付消さむ笠の露　同（奥の細道）
書養

西行の草鞋もかゝれ松の露　同（笈日記）
二見の浦にて

露

硯かと拾ふやくぼき石の露　同（芭蕉句選）

石露

手に提げし茶瓶やさめて苔の露　其角（雜談集）

船梁を枕ゝ露や闇の外　同（句兄弟）

髭を焼く枕つれなし星の露　同（焦尾琴）

斎院の此戸さしけん露なれや　同（五元集拾遺）

土芳に見ける弟の身まかりけるに

駒とりのもとの雫や末の露　嵐雪（其袋）

逆なき常盤身なかりけるを悼みて、久しく相知れりける人に申侍る

露烟此世の外の身受かな　去來（續虚栗）

嵐蘭追悼

千貫の劔埋けり苔の露　同（芭蕉庵小文庫）

露落て襟こそばゆき木陰哉　同（去來抄）

餞別

別るゝと鉢ひらきなり草の露　丈草（西の雲）

伊賀へ赴く時、芭蕉の墓に詣でて

言傳も此通りかや墓の露　同（續有磯海）

帷子は知らじ草葉に今朝の露　支考（草苅笛）

焼かぬ間は露や厭はむした瓦　杉風（雪七草）

野の露によごれし足を洗ひけり　同（同）

草の葉も八日の露は何とやら　同（杉風句集）

角田川紀行　二句

柴草の露持ちかぬる育ちかな　千子（續虚栗）

大比叡や運ぶ野菜の露しけし　野童（猿蓑）

作者を替ふ頃

草の戸の露持ち通す曇り哉　四睡（柞原）

唐秬の穂にほどくるや今朝の露　杜若（初蟬）

とく〳〵と露果てしなや松の蔦　白雪（砂川）

身ぶるひに露のこぼるゝ靱哉　荻子（續猿蓑）

帆柱に横たふ露や星明り　除風（追鳥狩）

有明に濡れおほせたり芝の露　荻人（杖薺人）

狩倉の露に重たき靫哉　蕪村（蕪村句集）

ものゝふの露拂ひ行く弭かな　同（同）

市人の物うち語る露の中　同（同）

旅人の火を打こぼす秋の露　同（蕪村遺稿）

篠懸や露に辟あるかけはづし　同（同）

鍋釜もゆかしき宿や今朝の露　同（同）

舍利となる身の朝起や草の露　同（同）

殿原のいづち急ぎぞ草の露　同　（新五子稿）
ほろ〳〵と啼く山鳥や露の珠　同　（高野圖會）
山伏をのがれて露の聖かな　同　（發句題苑集）
露を見る我戸や草の中　太祇　（太祇句選）
留守の戸の外や露置く物斗り　同　（同　）
眼覺しに見ゆ背戸ながら今朝の露　同　（太祇句選後篇）
夜の間の露ゆりすうる廣葉哉　同　（同　）

亡母收骨

露肉なし目もくらまりて相狹（アヒバサミ）　曉臺　（曉臺句集）
酒臭き人の寐顔や松の露　同　（同　）

夜前亡人、拙を夢みる

逢ふは嬉し夢絶ニ後露を呵す　同　（同　）
今日は我翌は庵なき露の花　同　（同　）
ころ〳〵と轉がり出たり露の秋　同　（同　）
剃捨る白髮に露の浮く日哉　闌更　（半化坊發句集）
谷陰や草より下の松の露　同　（同　）
椎の葉に露のみ盛りし旅寐哉　同　（同　）
酒汲まむ餘り果敢なみ枝の露　白雄　（白雄句集）
土橋の露踏みこぼす草葉かな　同　（同　）

草庵閑

露かくのごとく窓より傳ふ葎哉　同　（同　）
釣人や聲だに立てず草の露　同　（同　）
むら露に草の本末見ゆるなり　同　（同　）
亡き友は一とせ先の草の露　同　（同　）
夕暮や露に煙れる鴎の海　樗良　（樗良發句集）

潤水眺望

山も岡も芙蓉に露を置がごとし　同　（同　）
野ざらしの露よ時雨よ剃髮（ナギリ）塚　同　（同　）
今貸した提灯の灯や草の露　儿董　（井華集）
庭行くも露に裾とる女哉　召波　（春泥發句集）
露けしや朝草喰ふた馬の鼻　同　（同　）
蜘の巣に露ふりよする罾（コデ）かな　同　（同　）
蓙撫て驚き立ちぬ月の露　同　（同　）
膏藥になる草とはん原の露　同　（同　）
狩入て露打拂ふ靫（ウボ）かな　同　（同　）
舟引の鬢撫でつけよ今朝の露　移竹　（乙御前）

臭の乙二にこたふ

よく見れば露も暫く一トさかり　成美　（成美家集）
草の露葉（ハコベ）見し人を面影に　同　（同　）

我歸る家は見ゆるぞ露の中　成美　（成美家集）
身一つは水汲ずとも草の露　同　（同）
美しや世に譬へたる草の露　同　（同）
家は皆露の中にて打つ火かな　同　（同）
玉川は二つも見たり露の秋　同　（同）

乙二と別るゝ時

露淺茅互ひに眺められにけり　同　（同）
めら〳〵と煙かゝるや露の上　乙二　（松窓乙二發句集）
露馴れて蟲のやうにも寐ざりけり　同　（同）
山にある家のやうなり露の闇　同　（同）
つゝ鳥の木隱れ道も露の秋　同　（をのゝえ草稿）
今日待ちぬ遍路の露を見し日より　同　（同）
旅の日の來だ露置かね句の心　同　（同）

檀　溪

露に音あり誰住なれて茶の煙　士朗　（枇杷園句集）
檐撰る小家のたつきや露の秋　完來　（新雜談集）
活過し腥をたゝくや草の露　一茶　（享和句帖）
土器の施し栗や草の露　同　（旅日記）
今に見よ人とる人も草の露　同　（同）
草の露あはれ今年も踏初る　同　（同）
墓の顔露の氣色になりもせよ　同　（七番日記）
杭の鷺いかにも露を見るやうに　同　（同）
二文菜にかさいの露のまだ干ぬぞ　同　（同）
世の中へ落ちて見せけり草の露　同　（同）
德本の念佛ともなれ石の露　同　（同）
露だぶり世がよい上に又よいぞ　同　（同）

草刈ながら墓参

息災で御目にかゝるぞ草の露　同　（同）
昔からば嘸おらが露人の露　同　（一茶句帖）
上出來の淺黄空なり秋の露　同　（同）

太子堂稲荷

撞鐘は草に咲せて石の露　同　（同）
世話しなの世や下る露上る露　同　（同）
柴の戸や手足洗ふも草の露　同　（一茶新集）
草刈や火を打こぼす露の原　同　（同）
世の中によすぎにけらし草の露　同　（一茶發句集）

男女私に契り一夜ひそかに逃行くを發見して

人間は露と答へよ合點か　同　（同）
灯ともして生おもしろや草の露　同　（同）

白露

御目出度存候今朝の露　同（同）
嬉しさになぶりなくしぬ笹の露　梅室（梅室家集）
跡戻りする人もあり草の露　同（同）
竹の友と言へる銘に題して
君子にして是に醉ふべし竹の露　同（同）
數日雨なく、黑部四十八瀬は只一面の白河原と成りぬ
雨遠し五十瀬の浪も草の露　同（同）
人住まばかくは降まじ山の露　蒼虬（蒼虬翁發句集）
啼く鳥の尾上離れて秋の露　同（同）
草の露馬も夜討の仕度かな　子規（子規句集）
草の戸や菓子も烟草も夜の露　同（全集）
草見えて野武士火を焚く露の中　同（同）
雨晴れて露けき中の煙かな　同（同）
獵人も犬も濡れたり草の露　同（同）
草の露人通りしが知られけり　布免（倦鳥）
草の露無緣拜みて通りけり　巨口（同）
溝口菅山翁去
望み寄せし民が挽歌の草の露　青々（同）
露の上朝日ぼつとり出にけり　同（同）
白露や無分別なる置どころ　宗因（梅翁宗因發句集）
追悼
白露のしらけ仕舞や淀の水　言水（初心もと柏）
どこへ行くどこへ白露の節衣　同（同）
白露も一升入のめぐみ哉　其角（五元集）
周信が鶴の畫に
白露や角に目を持つ蝸牛　嵐雪（其便）
翁に越路の萲を送りて
白露も未だあら萲の行衞かな　北枝（あめ子）
白河
白露の命に關を戻り足　桃隣（陸奥衛）
白露や獵夫（サツチ）の胸毛ぬるゝ程　蕪村（蕪村句集）
白露や茨の刺に一つゞつ　同（同）
白露や家こぼちたる萱の上　同（蕪村遺稿）
白露の身や葛の葉の裏借家　同（蕪村文集）
白露の篠原へ出る檜原哉　同（新五子稿）
白露のしろきは假の光かな　太祇（石の月）
白露や美しき夜と成りしより　闌更（半化坊發句集）
松明に露の白さや夜の道　召波（春泥發句集）
白露の果はありけり六玉川　蓼太（蓼太句集）
白露ののぼる力や草の丈　萬翁（其雪影）

露

白露に取あつめたる思ひかな　士朗　（枇杷園句集）
白露に氣の付ゝ年と成にけり　一茶　（旅日記）
白露のてれん偽なき世哉　同　（七番日記）
白露や茶腹で越る宇都の山　同　（同）
白露やいつもの處に火の見ゆる　同　（一茶發句集）
白露に淨土參りの稽古哉　同　（同）

湯田温泉

白露に家四五軒の小村かな　子規　（子規句集）

朝露

朝露のいざり車や草の上　惟然　（藤の實）
朝露にすゝぎあげたる柳かな　同　（記念題）
朝露のぎぼう折けむつくも髮　舟泉　（曠野）
朝露もまだ眠げなり馬の上　之道　（あめ子）
朝露や鬱金畠の秋の風　凡兆　（猿蓑）
朝露や我鼻ねぶる牛の舌　濵口　（東華集）
朝露や未だ露知らぬ髮の落つ　蕪村　（蕪村句集）
朝露や砂にまみるゝむら小艸　白雄　（白雄句集）
朝露や膝より下の小松原　几董　（井華集）

重き老人に訪はれて

來て御座れ苔の朝露まだ寒し　乙二　（松窓乙二發句集）
朝露の袖からけぶり初めけり　一茶　（享和句帖）
朝露や矢文を拾ふ草の中　鳴雪　（鳴雪句集）

夕露

夕露に蜂這入たる垣根哉　太祇　（太祇句選）

悼

此の夕べ主なき簫の露や照る　同　（同）
夕暮や露に煙れる鴎の海　樗良　（樗良發句集）
草高く露も穗に出る夕かな　召波　（春泥發句集）
夕露の梢揃はず道の隈　乙二　（松窓乙二發句集）

夜露

東路の夜露戀ふたる紙子哉　鬼貫　（鬼貫句選）
大名の笠にもかゝる夜露哉　一茶　（享和句帖）
海音は堺の北也夜の露　同　（同）
渾と小赤い花と夜露哉　同　（蕉句選選）
獺好の其身にかゝる夜露哉　同　（同）

初露

初露や猪の臥す芝の起上り　去來　（猿蓑）

露の玉

草の葉を遊びありけよ露の玉　嵐雪　（誹が家）
死なぬ身に幾度消ゆる露の玉　北枝　（北枝發句集）
武藏野や合羽にふるふ露の玉　召波　（春泥發句集）
望みならいくらも吳れん露の玉　成美　（成美家集）
是が此後ろ暗きよ露の玉　乙二　（松窓乙二發句集）
草の戸や井を取込て露の玉　巣兆　（曾波可理）

見よ〳〵と夕顔つたふ露の玉　同（同）
露の玉一つ〳〵に古郷あり　一茶（旅日記）
丸い露何の苦もなく居直りぬ　同（七番日記）
丸い露いびつな露よ忙がしき　同（同）
露の玉つまんで見たる童哉　同（おらが春）
露の玉十と揃ひはせざりけり　同（一茶句帖）

道具好める人に示す
村雨が露の似せ玉造るぞよ　同（同）
玉となる欲は有るなり草の露　同（九番日記）
美しや目出度さやても露の玉　同（同）
玉になる智慧は露さへ有馬山　同（同）
山住や柴に焚込む露の玉　梅室（梅室家集）
蓬生や我頬はしる露の玉　子規（全集）

露置く

二日三日四日五日露の置きまさる　成美（成美家集）

病中
露置くや我も草木にいつ成りし　乙二（松窓乙二發句集）

母喪中
置露にいつ迄へるぞ暮の上　同（同）
置く露や今年の盆に上總山　一茶（旅日記）
置く露の張合もなき念佛哉　同（七番日記）

草庵
客人の草履に置くや門の露　同（一茶新集）

露散る

露散るや桂の里の臼の音　蘭更（半化坊發句集）
露散るや門の葎の籠づくり　白雄（白雄句集）
露散るや朝の心の紛れ行く　乙二（松窓乙二發句集）
露散るやむさい此世に用なしと　一茶（七番日記）
露散るに彌陀の御苦勞遊ばさる　同（同）
世の中よでかい露から先落つる　同（同）
露散るや是から長き夜の段　同（同）

五十過ては
露散るや五十以上の旅人衆　同（一茶句帖）
露はらり〳〵大事の浮世哉　同（一茶發句集）

金令居士十三回忌に
露散るや地獄の種を今日も蒔く　同（同）
花と降る露も供養の光かな　梅室（梅室家集）
いかゞ申さうことのはゝなむ露の袖　宗因（梅翁宗因發句集）
我も頓てまゐるぞかゝるぞ袖の露　同（同）

露の袖

袖の露も羽二重氣にはゐぬもの也　其角（田舍の句合）

奥の細道の奥書の末に
濡つ干つ旅やつもりて袖の露　去來（奥の細道）

露の袖

朝夕に語らふものを袖の露　同（そこの花）

菊萩にいつ習ひてや袖の露　支考（梟日記）

北枝身まかりし由、母の許より申越したる返しに

來る秋を好ける物を袖の露　北枝（卯辰集）

其頃北に[illegible]ちー[illegible]母の身まかりけるに

逃れ得ぬ理を言ひつめて袖の露　同（西の雲）

亡母十三回忌に

同年の尼くづをれて袖の露　李由（韻塞）

露の間

露の間や淺茅が原へ客草履　其角（焦尾琴）

露の世

露の世や萬事の分別奥の院　宗因（梅翁宗因發句集）

悼

露の世は得心ながらさりながら　一茶（七番日記）

さと女三十五日

露の世は露の世ながらさりながら　同（おらが春）

亡妻が父母の十三回忌に

露の身

露の身の果は五尺の松じや迄　北枝（白根草）

光

露の身と言ふも誠や枕もと　成美（成美宗集）

露の身に明りさしけり堂の内　乙二（松窓乙二發句集）

岩木の山を言かよふ斗に仰ぐ處にて

露程に思はれにけり老が形　同（同　）

露の身の置所なり草の庵　一茶（九番日記）

露の命

篠原にて實盛の魂を祀さむ

命かな露よりさ輕ろく月よりも白し　樗良（樗良發句集）

參考　地面、樹葉或は岩石の様な地物が熱を外界に放射して冷却すると其の周圍に接して居る空氣も共に冷える。さうして此の様な冷却が更に續くと空氣は飽和狀態となり、遂に水蒸氣は凝結して水滴となる。斯くして出來た水滴は前に述べた様な地物に附着する。之れが露と云はれるものである。

露が出來るときは地物に接觸して居る小部分の空氣だけが冷えて其の中の水蒸氣が凝結して水滴となるのであるから、地面附近の空氣全體が冷却するのでは無い。從つて風があつて地物に接して居る空氣を絶えず吹き散らし新らしい空氣とかへる様なときには露は出來難い。

又地物が十分冷却するためには空が晴れて居て外界への熱の放射が盛んなときで無いといけない。雲のある夜には地物からの輻射を遮るから熱の放射が十分で無く、從つて地物も冷える事少く露も出來難い。

同じ地物にしても露が出來易いものと出來難いものとがある。例へば樹葉や木片には露を結び易いが金屬、岩石などには着き難い。何故ならば露が出來るのは地物が外界へ熱を輻射して冷却するためであるから、此の間に

地面から熱が補はれると地物は冷却せず露が出來ない。
卽ち熱を良く傳へる金屬や岩石の樣なものは自分が外界へ熱を放射すると共に、地面から熱を傳へてくるため冷却する事が少く露は出來難い。之れに反して樹葉、木片などは熱を傳へ難い故地面から熱が傳はるより早く冷えて露を結ぶ。
更に地物の形によつても露が出來易いものと出來難いものとがある。面積の廣いもの例へば平な大きい樹葉などは冷え易く露を結び易いから蓮の葉の如きに露を結び易いのも之れがためである。
一度露を結ぶと附近の空氣中の水蒸氣は缺乏するが更に其の周りの空氣から水蒸氣が補給されて來て又冷却して露を結ぶ。かうして一度出來た露は次第次第に增大してゆくものである。
露が出來ることは一般の植物に利益を齎すことが多い。特に雨の少ない土地などでは露が植物の生育を助ける。從つて露は植物には無くてならぬものである。

露時雨（つゆしぐれ）（晩）

季題解說 露滋くこまやかにて、時雨の降りたる如きをいふ。[參照] 露 枯草の露 露寒

例句

露時雨

蜀黍の陰を渡るや露時雨　荷兮（熱田三歌仙）
袖褄にもつれし雲や露時雨　嵐雪（杜撰集）
垣越の山や松竹露時雨　北枝（三日歌仙）
折さして枝見る猿や露時雨　闌更（半化坊發句集）
露時雨しぐれしあとの照る日哉　同（同）
物の音秋は露さへ時雨ろゝか　白雄（白雄句集）
灯ともしの何も冠らで露時雨　同（同）
露時雨しぐれんとすれば日の赤き　同（同）
名月も二つ過たり露時雨　成美（成美家集）
露時雨佛頂面へかゝりけり　一茶（旅日記）
瓦屋に古び付るや露時雨　同（一茶句帖）
夕燒やから紅に露時雨　同（嘉永版一茶發句集）

枯草の露（かれくさのつゆ）（晩）　枯野の露（かれののつゆ）

季題解說 晩秋枯草に置く露をいふ。[參照] 露 露時雨 露寒

例句

枯野の露

有明の落つく露の枯野かな　武陵（花はさくら）

露寒（つゆさむ）（晩）

季題解説 秋も末になりて露將に霜を結ばんとし、寒く覺ゆるをいふ。[参照]
露（つゆ）　露時雨（つゆしぐれ）　枯草の露（つゆ）　露寒し

例句

露寒

鈍秀老人が山居を訪ふ日

露寒し我足跡を又歸る　乙二（たのゝえ草稿）
露寒や榎のもとの塒鳥　桃李（雁風呂）
竹賣の篁過て露寒し　貫志（旅拾遺）
何鳥の待たるゝ罠ぞ露寒み　孔䋣（寂砂子集）

秋の霜（あきのしも）（晩）

秋霜（しうさう）　秋の初霜（あきのはつしも）　露霜（つゆじも）　水霜（みづしも）

古書校註
【御傘】「露霜・露時雨」秋也。但しかやうに云ひ續けねども、霜時に露を結ばば秋也。寒の字入りても露の字あれば秋也。又露の字有りとも雪・氷の文字あれば冬也。露と霜とは二句也、餘の降物には三句也（一）。
【滑稽雑談】「秋の霜」初霜は冬也。秋霜の作意可レ考。
【年浪草】「露霜」九月。〇月令に曰、季秋の月霜始て降る。〇月令章句に曰、露は陰液也。釋して露となり、結て霜となる。〇釋名に曰、時雨はしばしくらき也。ラとレと通ず、時雨降る間はしばし暗しと也。露時雨准らへて知るべし。

註　（一）三句、二句は三句去、二句去の意

季題解説 晩秋に置初る霜をいふ。露霜・水霜、ともに露の氣の凝りて薄き霜を見するをいふ。[参照] 冬—霜

例句

秋の霜

つま白の石の哀れや秋の霜　鬼貫（鬼貫句選）

乙州が袂にして歸る小貝は、翁の拾はれしよりも細かなりければ

手にとらば消ん涙ぞあつき秋の霜　芭蕉（甲子吟行）
老眼にもるゝ小貝や秋の霜　丈草（[illegible]草）
薄あかき鶴の頭や秋の霜　吏明（浮世の北）
石壺の八ツの夜深し秋の霜　木因（皮籠摺）
冬瓜のいたゞき初むる秋の霜　李由（[illegible]表紙）

病後

かつ散るや毘に驚く秋の霜　支考（越の名殘）
秋の霜うちひらめなる石の上　蕪村（蕪村遺稿）
蔦の葉をおさへ付たり秋の霜　曉臺（曉臺句集）

杜山麓子重寶の劍

秋の霜三尺の龍や籠りぬる　同（同）
嚢なるや聖かたしく秋の霜　白雄（白雄句集）

露霜

獣を見るべくなりぬ秋の霜　露月（露月句集）
間引菜に露霜置ける旦かな　雨朝（田毎の日）
露霜をゑいしてなめる御馬哉　一茶（一茶句帖）

參考　地面や地物が夜間外界へ熱を放射して冷えてゆくとき之れに接してゐる空氣も冷される、此の時冷却が長く續いて空氣が氷點下十度以下になつて初めて飽和する樣な場合であると、空氣中の水蒸氣は凝結するが水滴とならず直ちに結晶して地物に附着する。即ち水蒸氣から直ちに固體となるのであつて所謂昇華の現象を生ずる。此の時地物に附着した氷の結晶體が霜である。故に霜を顯微鏡下で觀察すると微細な氷の結晶が澤山集つてゐる事が判る。此の樣な霜は氣温が氷點下十度以下の時に初めて出來るものであつて氣温が氷點附近の時には此の樣な霜は出來ない

即ち氣温があまり低く無いと地物に結んだ露が凍つて霜になる。此の樣な霜は無定形の氷が澤山集つたものである。

霜も露と同じく地面や地物の冷却が盛んな晴夜に多く出來、又風の無い時に出來る。さうして樹木、樹葉、木片の如き熱の不良導體に多く出來、金屬の如き良導體には出來難い。

霜が樹葉などに附着すると葉内の水分が共に氷結するため草木は枯死することがある。之れを霜害と云つて農家に恐れられてゐる。

我國では北部の早い處でも十月にならねば霜は降らない。併し北海道、奥羽北部などでは九月中に霜が降つた記錄もある。此の樣な早霜を秋の霜と云ふ。今我國各地の平均初霜の日と今迄記錄に殘された最も早い初霜の日とを表で示して見ると次表の如くである。

地名	平均初霜日	最早初霜日	
京城	十月十四日	昭和三年	九月二十六日
釜山	十一月七日	大正十一年	十月十一日
臺北	一月四日	大正十一年	十一月二十七日
鹿兒島	十一月二十五日	大正十五年	十月二十日
長崎	十一月二十三日	明治三十四年	十一月三日
高知	十一月二十三日	明治三十八年	十一月六日
廣島	十一月十六日	明治十八年	十一月三日
和歌山	十二月五日	明治二十二年	十一月十三日
神戸	十一月二十七日	明治三十二年	十月二十四日
大阪	十一月十四日	明治二十一年	十月二十三日
京都	十月三十日	明治二十五年	十月二日
福井	十一月十二日	明治三十一年	十月二十二日

名古屋	十一月六日	明治三十二年	十月十三日
長野	十月二十一日	明治二十六年	十月七日
甲府	十月三十一日	大正十一年	十月十二日
東京	十一月十二日	明治四十二年	十月二十一日
新潟	十一月二十日	明治二十三年	十月二十五日
福島	十月二十七日	大正三年	十月十三日
秋田	十月二十二日	明治三十九年	九月二十七日
石巻	十一月一日	明治二十二年	十月十四日
青森	十月二十三日	明治三十八年	十月一日
函館	十月二十三日	明治三十一年	九月二十六日
札幌	十月二日	明治二十一年	九月九日
旭川	十月三日	大正二年	九月十四日
根室	十月十日	明治二十六年	九月二十四日
大泊	九月二十六日	大正[illegible]年	九月十四日
新京	九月二十四日	明治四十三年	九月十二日

秋日和（三秋）

季題解説 秋晴れて穏かに快適なる日和をいふ。

実作注意 秋晴に同じきものなれども、言葉異ればゞ感じも亦些かの相違あり。【参照】秋晴

例句

秋日和

秋日和知るや河豚のつれあそぶ　白雄（白雄句集）

秋日和鳥さしなんど通りけり　同（同）

刈株の後ろの水や秋日和　下泉　一茶（享和句帖）

慰みのぱつちく〳〵や秋日和　同（七番日記）

秋日和とも思はない凡夫哉　同（一茶発句集）

難船の物干す秋の濱日和　鳴雪（鳴雪句集）

秋日和子規の母君来ましけり　虚子（ホトトギス）

秋晴（三秋）秋の晴

季題解説 秋天雲なく晴れ渡りたるをいふ。【参照】秋日和

例句

秋晴

秋晴れたあら鬼貫の夕やな　惟然（七車）

秋晴れてものゝ煙の空に入る　子規（子規句集）

秋晴に足の赴くところかな　虚子（ホトトギス）

秋旱（あきひでり）（三秋）

季題解説 單に旱といへば夏なれども秋にいたりて日照りつゞくをかくいふ。〔參照〕時候—秋乾き（アキワカ）、夏—旱（ヒデリ）

例句

秋旱　葡萄蟲糞まりこぼす秋旱　活天（草上）

秋曇（あきぐもり）（三秋）　秋陰り（あきかげり）

季題解説 秋の日の曇りたるをいふ。

實作注意 秋陰りとも用ふ。男心と秋の空といふ俗諺あり、陰晴變り易き習ひなり。

例句

秋曇　蠅たゞに死ぬ日を見たり秋曇　曉臺（曉臺句集）

小車の花立仲て秋曇り　東壺（續明烏）

秋の聲（あきのこゑ）（三秋）

古書校註【栞草】三秋。歐陽永叔が秋聲の賦あり、略レ之。

季題解説 秋の肅颯たる氣味にして、なんともなく物に觸れてさびしく凄き音をいふ。且草木に渡る風の音などにもいふ。

實作注意 歐陽永叔の秋聲賦に「歐陽子夜に方て書を讀む、聞くに聲の西南より來る者あり、悚然として之を聽て曰、異哉、初め淅瀝として以て蕭颯たり、忽に奔騰して砰湃たり、波濤の夜驚き、風雨の驟に至るが如し、其物に觸るゝや鏦々錚々として金鐵皆鳴る、又敵に赴くの兵の枚を銜て疾く走り、號令を聞かずたゞ人馬の行く聲のみを聞るが如し、予童子に謂らく此れ何の聲ぞや、汝出て之を視よ、童子の曰、星月皎潔にして明河天に在り、四方に人聲無し、聲は樹間に在り、予曰、噫嘻悲び哉、此れ秋の聲也……以下略」とあり。要之只秋爽の氣を想像の上に置きて秋の聲の句を作すべからず。音を聽きて秋なりと思ふ心にて詠ずべし。〔參照〕時候—秋（キバ）

例句

秋の聲　碓屋唄酒屋〱の秋の聲　宗因（梅翁宗因發句集）

コ齋三回忌
三人の聲に答へよ秋の聲　其角（華摘）

念佛の木魚も出るや秋の聲　支考（國の華）

帛を裂く琵琶の流や秋の聲　蕪村（から檜葉）

左中將城破れて、洪鐘此金ケ崎の海に沈みしと言傳ふれば
鐘は深し浪近ければ秋の聲　曉臺（曉臺句集）

秋の聲

大督古寺
水は日の西に落けり秋の聲　曉臺（曉臺句集）

曾谷妙羅寺
雲起て寺門を出づる秋の聲　同（同）

暮行くや鼓が浦も秋の聲　闌更（半化坊發句集）

貧亭の宿をかこ
骨消えて兜に殘る秋の聲　樗良（樗良發句集）

立秋の翌更由なりければ
明けて今朝鍋の尻かく秋の聲　几董（井華集）

探題鍛冶
月山の梢に響く秋の聲　召波（春泥發句集）

梅山居
秋の聲門叩けども應へなし　成美（成美家集）

木の葉やゝたまる木部屋に秋の聲　青々（倦鳥）

秋の色（三秋）　秋光　秋景色

季題解説 秋になりて艸木山川ともに色をあらためたる、其清澄なる感じをいふ。

實作注意 物の清く新しきを求むる心あらば、隨所に秋色の佳なるもの有るを見るべし。〔參照〕時候　秋

例句

秋の色

元政菴にて
庵に掛けたまひて何宗が寄せける宿坊の縁に
箔のない釋迦に深しや秋の色　鬼貫（鬼貫句選）

秋の色糠味噌壺も無かりけり　芭蕉（柞原）

東明亭
裏門に秋の色あり山畠　支考（浮世の北）

山上武家
神の木を猿の染めけむ秋の色　同（東西夜話）

日山
木や草に何を殘して秋の色　園女（三山雅集）

淺井舟
並松の間々や秋の色　荷兮（曠野後集）

無い山の富士に揃ふや秋の色　其角（誹諧曾我）

今朝の日や小半時斗り秋の色　尚白（孤松集）

寢覺の畫讃
木食の分入る方や秋の色　曉臺（曉臺句集）

秋の色野中の杭のによひと立つ　同（同）

下毛黒羽山雲門寺
秋の色隱るゝ竹の葉山かな　諸九尼（名所小鏡）

秋景色

階一歩／＼に秋の景色かな　白雄（白雄句集）

何となや日は暑けれど秋景色　多代女（晴霞句集）

地理

秋の山（三秋）　秋の峯　山粧ふ　秋山家　秋の富士

古書校註

【年浪草】九月。〔山粧ふ〕郭熙論畫山水曰、春山は淡冶笑ふが如く、夏山は蒼翠滴るが如く、秋山は明淨粧ふが如し。

【栞草】篇三秋物ニ圓機活法秋色詩、秋山畫けるが如く更に分明。

季題解説 秋の明淨なる山をいふ。木の葉の紅葉など所謂野山の錦せるを以て山粧ふとは云ふなり。「秋山如畫更分明」と云へり、秋氣澄みて山近く明かに　ゆるをいふなり。

例句

秋の山

秋山や駒もゆるがぬ鞍の上　其角（續虚栗）

狩野桶と言ふ物、其角の餞におくるとて

狩野桶に鹿をなづけよ秋の山　荷兮（曠野）

入相のあとや明にき秋の山　支考（西の雲）

送三五老仲一

毬栗の笑ふも淋し秋の山　李由（韻塞）

馬の目も澄むや日の入る秋の山　左次（誹諧曾我）

妙義山

雨三粒降て人顯はるゝ秋の山　曉臺（曉臺句集）

秋の山ところどころに煙立つ　同（同）

杖向けて先づ哀れなり秋の山　成美（成美家集）

闊守が棒の先なり秋の山　乙二（松窓乙二發句集）

枯て久しき松こそ見ゆれ秋の山　士朗（枇杷園句集）

家二つ戸の口見えて秋の山　道彦（蔦本集）

秋の山活きて居るとて打つ鉦か　一茶（旅日記）

湖をとりまく秋の高嶺哉　子規（全集）

秋の山雲一片飛んで去る　同（同）

薄翠の夕べに見れば秋の山　青々（倦鳥）

家二三藪一反の秋の山　同（同）

天野山一宿

夜食出す障子の口は秋の山　同（同）

秋の峰

妙義山

立去る事一里眉毛に秋の峯寒し　蕪村（蕪村句集）

秋の富士

馬は行けど今朝の富士見る秋路哉　鬼貫（鬼貫句選）

秋の富士　水天に連なるところ秋の富士　華水（俳　鳥）

秋の野（三秋）

季題解説 秋の野原をいふ。〔季題〕秋の野ら　秋郊　秋の原　花野ハ　野山の錦ニ

例句 秋の野

秋の野の花とも咲かで平家蟹　支考（梟日記）
面白い旅寐や秋の野は純子　同（東西夜話）
秋の野に五色の馬の遊びけり　同（三物拾遺）
秋の野の花々しさよ皮肉骨　乙州（鶴獅子集）
夕暮を惜みく て秋の野良　風之（上戸雪）
秋の野や花となる草成らぬ草　千代尼（千代尼句集）
野路の秋我後ろより人や來る　蕪村（發句題苑集）
秋の野や草や荒駒の驅やぶり　曉臺（曉臺句集）
鳥はしは何やらかやら秋の野良　眉山（續明烏）
秋の原知たらなんぞ歌ふべき　一茶（一茶發句集）
秋の野の幾處にも夕日かな　蒼虬（蒼虬翁句集）
日ざしみて畫あがりする秋野かな　布兌（倦鳥）

秋の狩場（三秋）

季題解説 小鷹狩など秋遊猟する場所を云ふ。新葉集「はし鷹のかり場の鳥の落草を吹きな亂りそ野邊の夕風。」〔參照〕小鷹狩

例句 秋の狩場

宿屋出て秋の狩場を通りけり　青々（妻木）

野山の錦（晩秋）　野山の色　野の色　山の色　草の紅葉　草の錦

古書校註【年浪草】九月。「野山の錦、草の色の錦」【栞草】九月。「草の紅葉、草の色、草の錦」野山の錦。草木の紅葉を錦にたとへていふ也

季題解説 秋の野山の草木の紅葉せるを錦に擬していへるなり。〔參照〕秋の野ハ　花野ハ　時候　龍田姫ハ

例句 野山錦

九重を中に野山の錦かな　蓼太（蓼太句集）
繪畫展覽會
野の錦山の錦は繪の錦　子規（全集）
野の錦畫の葬禮通りけり　同（同）

花野（はなの）（三秋）

古書校註

【花火草】 花野に薄附くる事を嫌ふ。

【滑稽雜談】 八月。今按ずるに花野といふ詞連歌新式にも不レ載。御傘にも草花の條に野花の說侍る（一）。然れども連歌に專ら用ふる詞也。連歌隨葉集六、秋部一草枯に花の殘る」とし、下に細字註して、「花野としても草花の事也。秋也」と有り（二）。毛吹草曰、連歌の詞、中秋の部、花野とあり。

註 （一）御傘に草花を秋季とし、「是は野花の事なり」と註せり。而して花野の語は見えざるなり。溫故日錄等には八月の部に草花・野の花等と共に花野の語をかゝげたり。
（二）板本の隨葉集にはこの註なし。

季題解說

千草の花の咲き滿つる野をいふ。参照 秋の野（アキノノ） 野山の錦（ノヤマノニシキ） 花畠（ハナバタケ）

例句

花野

十人が十花に遊ぶ野山かな　宗因（梅翁宗因發句集）
花ならば花野の花に譯がある　來山（續今宮草）
　踏ては花をやぶり、踏ずしては行く道なし
野の花や月夜恨めし闇ならよかろ　鬼貫（鬼貫句選）
　支藩公に參りける日、人形を出させ給へるに
花野とも見ばや舞臺に小人形　支考（柿表紙）
馬からは落ちねど一夜花野哉　同（山琴集）
追剝の行衞も知らぬ花野かな　同（同）
　豐後國日田にて
山臥の火を切こぼす花野かな　野坡（寒菊隨筆）
海士が子の鰶をかへす花野哉　同（野坡吟草）
道筋の細う暮れたる花野かな　風國（初蟬）
息あらくよごるゝ牛も花野哉　野徑（鳥の道）
一筋は花野に近し畠道　烏栗（續猿蓑）
あれこれを思ひはつれる花野哉　丈草（國の華）
から風に片頰寒き花野かな　許六（正風彥根躰）
誰が狩て花野を醋し力草　桃隣（芋の子）
面白く富士に筋違ふ花野哉　嵐雪（風の末）
敷物に案山子を崩す花野哉　也有（蘿葉集）
後で見た座頭追付く花野哉　同（同）
佛への土產出來たる花野かな　同（同）
川音の晝は戾りて花野かな　千代尼（千代尼句集）
見送るに目の離されぬ花野哉　同（同）
蝶々の身の上知らぬ花野哉　同（同）
松明消て海少し見ゆる花野哉　蕪村（蕪村遺稿）

花野

廣道へ出て日の高き花野かな　蕪村（夏より）
二里といひ一里ともいふ花野哉　太祇（太祇句選）
花畑を送りて靈前にさし寄するは、聊其情を慰するにあり
みそなはせ花野も映る月の中　同（同）
追剝に夜はふりかはる花野哉　蓼太（蓼太句集）
あだし野に行當りたる花野哉　同（同）
（挽歌を詩ふ）
面白き庭や花野も中宿り　闌更（半化坊發句集）
折るよりは行くに慰む花野哉　召波（春泥發句集）
紙屋川花野に橋を渡しけり　田福（五車反古）
狼も子に使はるゝ花野かな　一茶（七番日記）
金襴の袈裟吹れ行く花野哉　梅室（梅室家集）
日傘して花野の小女郎誰が小女郎　子規（全集）
手をつたげ出にでゝかん花野かな　柏萃（俳鳥）
花野には花の互ひに深きかな　青々（同）
徑なる木平道も花野かな　同（同）
犂かずに人の住みゐる花野かな　同（同）
長く引きて雲のはすかふ花野かな　同（同）

花畠（はなばたけ）（三秋）　花壇（くわだん）　花園（くわゑん）　花圃（くわほ）　（古）宇治（うぢ）の花園（はなぞの）　（古）滋賀（しが）の花園（はなぞの）

考證

【御傘】〔花畠〕正花也、植物也、春也。こまかに穿鑿すれば種々の理會侍れ共、此分にて置くがよき由。〔花園〕正花也、春也、薗とはかりは居所也。植物に二句去也。花の字そひたれば三句去也。又花薗と云ふ名所もあり。依二句嫌一正花にも植物にもなるべからず。名所の花園は裁花也云。花園院などは釋也、植物にもあらず。春詞いらずは正花になるべからず。非二居所一、非二人倫一。

【滑稽雜談】花畠、毛吹草云、八月部、花壇。△今按に和俗の花壇と稱するもの、庭間に叢壇を築きて四時の草花を植ゑて愛す。何もとこ秋に限ると云ふ。是も草花の多時を以て秋とするならし。花畠は正花にて春也。猶師説を可レ尋。

【年浪草】〔花壇〕李建勳春雨の詩に曰、高低飛濃にして柳郭を藏し、小庭流擁して花壇を沒す。云々。洪覺範の石文字碑に、多く花壇の字を用ふ。（源氏桐壺の巻に曰、お前のつぼせんざいの盛りなるを。）河海抄に曰、壺の前栽清涼殿東の庭、同西庭、前栽を栽ゑらる。延喜元年、左右の衛門草架を栽う。（侍名陪從御遊御壺の内に秋の花どもを栽ゑられたるなるべし。）按に、花壇を秋とするは、秋の草花のとりどり愛すべきある故にや。朗詠集前栽の詩も秋の部に入れられたり。

【栞草】貞享式 御傘に正花なり、春なり。細に穿鑿すれば種々の理窟あれどこの分にて置く方がよきなりと。如何なる秘事にやしらず。今按ずるに花壇も花畠も、決して秋に定むべきなり。○花畠は草花なればなり。

註 (一)正花とは連俳にて花の句と同一に取扱はるべきものをいふ、(二)「併め」の誤か。

季題解説 諸種の秋草の花を栽培する畠をいふ。草の花は多く秋咲く故に季とす。

實作注意 花壇は一個所に土を高く盛り上げ、壇の如く構へ、それに草花を栽培せるものをいふ。或は特に古記にある名園、即ち宇治の花園・滋賀の花園などは花園といふにて秋季とす。

宇治の花園 宇治は應神天皇の離宮なりしを、後に太子の御座となりて、桐原日桁宮と申せし時の御園なり。これを菟道の稚郎子(ワカイラツコ)と申奉る。園は多き中に萩を主とせりといふ。

滋賀の花園 近江大津にあり。天智天皇の御園の舊跡なりといふ。宇治、滋賀の兩花園の趣きは古きを偲びて詠出すべし。 參照 花野(八)

例句

花畠 拓きある野ごしに見たる花畠 青々 (倦鳥)

花壇 くちなはを今年もころす花壇哉 井魚 (石の月)

秋の田(あきのた) (中) 田の色(たのいろ)

季題解説 秋、稲の成熟せる頃の田面をいふ。田の色は稲田の半ば熟して青黄とりどりなるをいふ。參照 刈田(カリタ) 穭田(ヒツヂタ)

刈田(かりた) (晩) 刈田原(かりたはら) 刈田道(かりたみち) 刈田面(かりたづら)

季題解説 稲を刈りたるあとの田をいふ。

實作注意 淋しき中にも、畦の末枯草、蓼、龍膽の花など、亦眺めのあるものなり。參照 秋、田ノ一クキ 穭田(ヒツヂタ) 人事—稲刈(イネカリ)

例句

刈田

筆平塚

筆平が塚渺々と刈田かな 鬼貫 (鬼貫句選)

淨瑠璃よ刈田の番は夜ばかり 同 (同)

さる程に打ひらきたる刈田かな 同 (同)

刈かけし田面ラの鶴や里の秋 芭蕉 (鹿島詣)

佛像繕ひ出來させ給ひ、李東方へ送り奉るとて

佛負ふ檜笠の下や刈田道 秋之坊 (北の山)

のさのさと鶴の踏行く刈田かな 諸九尼 (諸九尼續句集)

大猫の口稼ぎする刈田かな 一茶 (七番日記)

夕陽や刈田に長き鶴の影 子規 (全集)

穭田（晩）

季題解説 稲を刈りたる後の刈株に穭の生えたるをいふ。［季題］秋の田ノアキタ　刈田カリ　植物—穭

例句

穭田

穭田や青みに映る薄氷　一茶（一茶句帖）
穭田や痩せて慈姑の花一つ　子規（子規句集）

落し水（中）

田水を落す

古書校註

【年浪草】九月。亭環拾遺に云。田のおとし水といへり（一）。畿内には所々稲を刈て後田に菜種を植うる也。是を南作所といふ。稲と菜種とを植うる也。それ故田地の水を落し盡して菜種を植うる用意なり。

註（一）をだまき拾遺（寛延二年刊、丈石著）、九月の部に「田の落し水」を季の詞として出せるをいふ。

季題解説 稲の黄熟して将に刈り入れんとする田の水を落して干すをいふ。

實作注意 田水を落すとも用ふ。

例句

落し水

ほと鳴の立行く方や落し水　探志（西の雲）
雨乞の小町が果や落し水　蕪村（蕪村句集）
村々の寝心更けぬ落し水　同（同）
足跡の無き田佗しや落し水　同（蕪村遺稿）
落し水柳に遠く成にけり　同（同）
落し水田毎の闇となりにけり　同（月並發句帖）
小山田の水落す日やしたり顔　太祇（太祇句選）
帆の浮ぶものに成けり落し水　蓼太（蓼太句集）
暫くは北へ流れつ落し水　几董（井華集）
二三尺秋の響や落し水　月溪（月溪句集）

椎谷

一曲り出て荒海や落し水　乙二（松窓乙二發句集）
落し水魚も古郷へ戻る哉　一茶（一茶句帖）
小田守も落した水を見たりけり　同（旅日記）
田の水も小早く落すひとり哉　同（同）
落し水鰷も瀧を上るなり　同（七番日記）
水鶏塚見による徑や落し水　鼓竹（倦鳥）

秋の水（三秋）

秋水しうすゐ　水澄みづすむ

季題解説 すべて清澄なる秋の水をいふ。

實作注意 秋の水は川・沼・澤・湖・渓など、或は小さき湫潦など、おしなべて冷やかに澄めるをいふ心組にて詠出すべし。**參照** 水始めて涸る(ミヅハジメテカルル) 秋の川(アキノカハ) 秋出水(アキデミヅ) 秋の池(アキノイケ) 秋の湖(アキノミヅウミ) 秋の海(アキノウミ)

例句

秋の水

龍ヶ渡し

我祖父も舟橋拜む秋の水　鬼貫（鬼貫句選）
秋の水淡路島根をかこひけり　去來（よとぎの詞）
眠りたる目を洗はゞや秋の水　同（俳儒遺墨）
誰か汲む白山川の秋の水　句空（柞原）
青空や手ざしもならず秋の水　丈草（[illegible]塞）

花王寺

影見せて繪馬に秋の清水かな　支考（東西夜話）
土取よ何程冷ゆる秋の水　杉風（[illegible]七草）

相模洪水、水接ス天

狼の浮木に乘るや秋の水　其角（五元集）
竹の葉に落込む音や秋の水　乙由（麥林集）
田に落ちて田を落行くや秋の水　蕪村（蕪村遺稿）
二股に細る哀れや秋の水　同（夏より）
秋の水竹の根がらみ流るなり　曉臺（曉臺句集）
秋の水心の上に流るなり　同（同）
茫々と芒折れ伏す秋の水　同（同）

黑血川

かくばかり秋の色また秋の水　同（同）

濃八妻郡の山海嘯の時

生はとく死は曆て告げよ秋の水　白雄（白雄句集）
白髭の笠木も見えて秋の水　召波（春泥發句集）
狹筵や秋の戶口の日南水　乙二（松窓乙二發句集）
澄むものゝ限り盡せり秋の水　同（同）
鴛鴨の毛衣染めよ秋の水　士朗（枇杷園句集）
蛇(クチナハ)と鵜おしするや秋の水　一茶（九番日記）
翡翠の來らずなりぬ秋の水　子規（全集）
ゐもり浮いて鯉深く潜む秋の水　同（同）
草中やいでゆにまじる秋の水　竹兜（倦鳥）

律川

音樂のはじめと聞くや秋の水　穿花（同）

水初(みづはじ)めて涸(か)る（中）

季題解說 秋分の節の終り、水瘦せて涸れ始むるをいふ。

實作注意 冬の「水涸」とは些か別なり。これは其初めて涸るゝ氣味を感

ずるもみなり。〔季題〕秋の水(アキノミヅ)　冬—水涸る

秋の川（あきのかは）（三秋）

【季題解説】秋の流れをいふ。

【實作注意】秋の水は其所狭きもあり、又廣きもあり。されど秋の川と云へば其所おほよそ定まる。清く澄める水の流るゝさまの思はるゝなり。〔參照〕秋の水(アキノミヅ)

【例句】

秋の川　澄み過て鳥も影せず秋の川　斗　從（心ひとつ）
　　　　蓼短く秋の小川の溢れたり　子　規（全　集）

秋出水（あきでみづ）（初）

【季題解説】八月頃は風雨の爲め殊に出水多く、時々水害あり。〔季題〕秋の水(アキノミヅ)　出水(でみづ)　洪水(こうずゐ)　水見舞(みづみまひ)

【例句】

秋出水　秋出水水草の穗もおもきころ　小　酒（杉の實）
水見舞　唐黍を流るゝ杏や水見舞　其　角（五元集）
　　　　鶏啼く野を片駒に水見舞　乙　二（松窗乙二發句集）

【參考】颱風が南方の海上から襲來して上陸すると津浪を生ずる。之れは颱風の中心に向つて吹いて居る風が、中心の上陸と共に陸上へ向つて吹くため浪を打揚げるにもよるが、又颱風などの低氣壓の中心は氣壓が特に低いため海水も中心附近に吸寄せられ、中心附近の海面は高くなつてゐるのが中心の上陸と共に海水も陸上へ揚り出水を生ずるのによるものである。

秋は特に颱風期であつて我國では最も多く颱風の襲來を受ける。之れ故津浪即ち出水も秋に多い譯である。

秋の池（あきのいけ）（三秋）

【季題解説】秋季の池をいふ。〔季題〕秋の水(アキノミヅ)

【例句】

秋の池　旅痩を見には寄らぬに秋の池　丈　草（丈草發句集）
　　　　秋や猶崩れし池の濁り水　紅　尒（卯辰集）

秋の湖（あきのみづうみ）（三秋）

【季題解説】秋季の湖をいふ。〔季題〕秋の水(アキノミヅ)

【例句】

秋の湖　湖の秋や竹嶋沖の島　北　枝（杉丸太）

秋の海（三秋）

季題解説 秋季の海をいふ。参照 秋の水　初潮

例句

秋の海

石立にて
石立や石見る斗り秋の海　句空（猿丸宮集）

能州松田にて
橋姫の肝のふとさよ秋の海　路通（草庵集）

ちよつぼりと何やら白し秋の海　曲翠（きれ〴〵）

出羽
夕陽に馬洗ひけり秋の海　子規（子規句集）

鳥を射る蝦夷の男や秋の海　露月（露月句集）

初潮（中）　葉月潮　望の潮

古書校註

【滑稽雑談】五雑俎に云、海潮八月獨大なるは何ぞや。潮月に應ずる者なり、故に月望すれば則ち潮盛んなり。而して八月の望則ち尤も盛ん也。（一）連歌新式抄云、初鹽、むざとはつしほとは不レ可レ仕也　呉子胥といふ者呉王に殺されて、その魂潮となりて八月十五日ごとにさす也（二）。それより秋になる也。△按に當世は子胥の故事ならで、初潮とばかりも秋に用ひ來れり。又秋に據あるべきにや。

【年浪草】或説には初汐の初の字は葉月の汐といふ事也。○無名抄に云、四月にたつをうなみといひ、五月に立つをさなみといふと同じ。秋の潮の大なるは、秋は金氣なれば金生水にて、水を金を得て盛んなる理にて大汐ある時なるべし。

【栞草】十五日（八月）の潮をいふ。

註（一）この事臨安志に見ゆ。

季題解説 陰暦八月十五日の滿潮をいふ。蓋し潮は月に應ずるもの故に、月望とき潮盛にして、八月の望、最盛なる理なり。

例句

初潮

葉ヶ崎船中
初潮や間に吹入るゝ秋の風　北枝（初蟬）

初潮や夜る〳〵募る山颪　同（居維單聞）

初潮や鳴門の浪の飛脚舟　凡兆（猿蓑）

初潮に追れてのぼる小魚かな　蕪村（蕪村句集）

初潮や旭の中に伊豆相模　同（發句題苑集）

初潮や竹の裏行く人の聲　蓼太（蓼太句集）

初潮に松四五本の小島かな　子規（子規句集）

初潮　初潮を汲む青樓の釣瓶かな　鳴雪（鳴雪句集）

初潮の波にふたたまりくらげ哉　竹兜（俳　句）

參考　月と太陽の引力によつて地球の表面にある海水が牽引されるために潮汐の現象が起される。之れは主に月の引力によつて起る。如何となれば月は太陽より遙かに近いために月の引力は太陽のそれに比して二倍四分の一程大きい。之れ故潮汐作用は主に月の運行によつて起るものであるが勿論太陽の引力も大に影響し、月と太陽の位置によつて潮汐の程度の大小が生ずる。即ち月と太陽とが地球と殆んど一直線にある朔と望の時が大潮であつて其の間が小潮になる。

又滿潮干潮は月と地球との關係位置によつて起るのであるから、大體二十四時間五十分を週期として其の間に干滿が二回宛起る。而して滿潮時は月が子午線に南中する時間と一致しないで、滿潮時の方が多少遅れるものである。此の時間の喰違ひを潮候差或は潮候率と云ひ、所によつて違ふものである。

又干滿の差は四季によつても違ふ。即ち春分と秋分に近い時に差が大きく、それを彼岸潮と名付ける。又此の頃は太陽の距離も近い故、陰曆八月十五日大潮は特に著しく之れを初汐とも稱する。初汐は一名葉月の汐の略言であるとも云はれて居る。

不知火（しらぬひ）（初）　龍燈（りうとう）

季題解說　肥後國天草附近に毎年七月末より八月頃に至り、俗に龍燈と稱し提燈ほどの燈火あらはるゝをいふ　これ夜光蟲にして海上にて夏秋の候往往見る現象なり。

例句

不知火　不知火や夜寒ののぼる草の先　怒風（花の市）

薄幸なる人に不知火といふ事を句にせよと乞はれ作りて

しらぬ火や我が湖の螢とも　丈草（續寒菊）

參考　不知火のこと、古く國史に景行天皇巡狩の時の記事を載せてゐる。「肥前國風土記に「纏向日代宮御宇大足彥天皇、誅二球磨贈於一而巡二狩筑紫國一之時、從二葦北火流浦一發船、幸二於火國一度レ海之間日沒、夜冥不レ知レ所レ著、忽有二火光一遙視二行前一。天皇勅二棹人一曰、直指二火處一。應レ勅而往、果得レ著レ崖。天皇下レ詔曰、何謂邑也。國人奏言、此是火國八代郡火邑也。但不レ知二火主一。于レ時天皇詔二群臣一曰、今此燎火、非二是人火一。所以號二火國一、知二其所由一」これよりして筑紫の枕詞ともなるといふ。但し枕詞としては古くは不知火の字を宛てたるものを見ずして白縫と書けるよりして、これが解釋につき異說を立てるものもある。（武田）

新綿(にひわた)の奏(そう)（初）

季題解説 舊暦七月十六日に、宮中へ新産の綿を奉りしことをいふ。（古）

〔参照〕 夏―綿の花(ワタノハナ)　冬―綿(ワタ)

尾花(をばな)の粥(かゆ)（中）　尾花粥(をばながゆ)

古書校註

【俳諧歳時記】 大内記田原康富日記文安五年八月朔日乙卯云々、尾花の粥の事、其由來何事なるや、自然見及ぶかの由問しめ給ふ、未だ見及ず、其子細を知ず候由返答し畢る云々。○八月朔日小花の粥、内裏仙洞以下用ひしめ給ふ。良薬云々、彼の粥調法薄の黒焼を粥に入合する也。海人藻芥、

季題解説 古昔八月朔日、内裏仙洞以下、良薬として用ひしめ給ふ粥にて、薄の黒焼を粥に入れ合するといふ。（古）〔参照〕 八朔の祝(ハッサク)

例句 尾花の粥

尾花粥その名計りもなつかしき　青々（倦鳥）

定考(かうちやう)（中）

古書校註

【俳諧歳時記】 昔六位以上加階する人は藝能行跡をえらみ、榮爵を授け玉ひし也。上卿宮の東の廳に着き事を行ふ。次に朝(アイタトコロ)所に着て三獻の規式あり。次に晏穏の座に着く。又三獻あり、挿頭(カザシ)の花を上卿以下冠にさす。大臣は白菊、納言は黄菊、参議は龍膽、其餘は時の花をさす、二月の列見に同じ。式兵の兩省より諸司の輩の旨を選成するを列見と云ふ。それを書きあつめて奏するを擬階の奏と云ふ。此の人々を擇み出して定めらるるを定考(カウヂヤウ)と申す也。〔公事根源〕。

季題解説 陰暦八月十一日、宮中にて四月の擬階の奏に錄したる人を選び、藝能行跡恪勤を選び位階を進め定めらるるをいふ。「かうぢやう」と逆に讀む例なり　此日挿頭の花を上卿以下の冠にさす。大臣は白菊、納言は黄菊、参議は龍膽、其外は皆時の花を挿す。定考の儀、大かた二月の列見に同じと云ふ。（古）〔参照〕 夏　擬階の奏(ギカイノソウ)

参考 カウヂヤウと逆に讀むは、上皇の音に似るのを忌む故である。毎

年八月十一日、六位以上の官吏の藝能・行跡・恪勤の勝れたるを選出して官爵を定めるのをいふ。上卿・太政官の東廳の庄につきて事を行ふ。插頭の花を上卿以下の冠にさす。大臣は白菊、納言は黃菊、參議は龍膽、其の他は時の花で、皆生花である

司召（中）　秋の除目　京官除目

古書校註

【御傘】　秋也、八月十一日に京官の除目とて、都に御座ある公家衆の官位

【俳諧歲時記】　司召は秋の除目也。京官の除目とも、春の除目は縣召と號す。各拜任の輩之を召す。春は太政官秋は外記の廳に於て召御す。教隆卿記。

季題解說　古昔行はれし地方官の任官にして、春の除目なる縣召に對す。陰曆八月十一日これを行はれたるものなり。（古）〔季題〕春　縣召

例句

司召　挾箱さいかくするや司召　山店（芭蕉翁小文庫）

司召督佐尉の烏帽子見よ　支竹（俳諧漢和）

參考　官吏の任命を古語に除目といふ。除は任命することで、目は目錄に誌すことである。官吏には京官と外官とある。京官は中央政府の役人、外官は地方官である。秋行はれる除目は、京官の任命で、これを司召しといふ。後花園天皇の御代以後廢絕して行はれなくなつた。

秋の駒牽（中）　駒迎　引分使　望月の駒　霧原の駒

古書校註

【年浪草】　江次第に曰、元は八月十五日也。朱雀院の御國忌によりて十六日に改め用ふ。頭書に、信濃勅使の牧十五ヶ所延喜式に載する所の一也。天皇南殿に出御ありて、御馬を分ち取らしむ。出御なき時は建禮門の前の大庭に於て之を牽分けしむ。裏書に云、上野九牧、延喜式廿八日云々。七日甲斐の勅使の牧、十七日甲斐の穗坂の牧、廿三日信濃望月の牧、廿五日武藏勅使の牧、立野の牧、又十五日信濃勅使の牧、廿八日上野九牧、以上六ケ日延喜式に見えたり。此の外承平官府十三日武藏秩父の牧、廿日同小野の牧の御馬之を貢す云々。　公事根源に曰、公卿以下次第に御馬を賜る。馬の差綱をとりて御前に進みて一拜す。取殘したる馬をは、引分使とて次將を以て院・東宮など然るべき所々へまゐると云々。

季題解說　陰曆八月十六日、諸國より馬を貢進す。天子南殿に出御せれらて御覽あり、上卿御馬の解文を奏し、式終つて公卿以下次弟に御馬を賜はる。馬のさし綱をとりて御前にすゝみて一拜す。取のこしの御馬をば引合の使にて次將をもて院東宮など、しかるべき所々へまゐる。駒牽の馬は、

甲斐の敕・旨の牧穂坂の牧・信濃の望月の牧・敕旨の牧・武藏敕旨の牧・立野の牧・秩父の牧・小野の牧、其他上野九牧より貢す。當日は左右馬寮の官人、近江國逢坂まで來り、馬を引取て禁庭に曳く。古歌に‖東路をはるかに出る望月の駒にこよひやあふ坂の關　源仲正。‖あふ坂の關の岩かど踏あらし山たち出るきりはらの駒　馬遠。‖など詠めり。
駒牽の事、もとは八月十五日なりしを、朱雀院の御國忌に依て十六日に改められしと云ふ。又八月十六日以後にも、日を替て駒牽の事ありしも、後は十六日一日の事になりしものなりと云ふ。（古）参照 夏―駒引

例句

秋の駒牽

鶏從東武發句撰別
駒牽の心にかなふ旅出かな　鬼貫（七車）
名所の題にて
駒牽や岩踏み立てゝ元箱根　其角（五元集）
甲斐駒や江戸へ〳〵と柿葡萄　同（同）
駒牽の木曾や出らん三日の月　去來（句兄弟）
霧雨や尾髮も振らず駒の旅　許六（續有磯海）
駒牽の尻撫てゝやる名殘哉　越人（曠野後集）
京笠は皆駒牽の戻りなり　浪化（有磯海）
駒の尾にまた霜夜の嵐かな　支考（草苅笛）
駒牽や日燒けて甲斐の黑男子　蓼太（蓼太句集）
京入の聲を上けり信濃駒　一茶（一茶句帖）

駒迎

町醫師や屋敷方より駒迎　芭蕉（更科紀行）
棧や先づ思ひ出づ駒迎　同（同）
眺め送る函谷や今日驢馬迎　其角（田舍の句合）
一戸や衣も破るゝ駒迎　去來（猿蓑）
提灯に蹴上げの泥や駒迎　許六（篇突）
新蕎麥の信濃話や駒迎　同（藁人形）
平檜の沓籠持や駒迎　同（正風彥根躰）
爪髮も旅の姿や駒迎　荷分（曠野）
駒迎逢坂よりは行義なり　正秀（雜談集）
駒迎ことにゆゝしや額白　蕪村（蕪村句集）
旅人の走り拔けるや駒迎　蓼太（蓼太句集）
貫之の清水にたゞよ駒迎　白雄（白雄句集）
駒迎當時の歌仙誰々ぞ　几董（井華集）
一袋蕎麥も添けり駒迎　一茶（一茶句帖）

参考 八月十六日、信濃國の敕使牧の馬十六疋を奉る。もと八月十五日であつたが、朱雀天皇の御國忌に當つてから十六日に變更した。十七日は甲斐國穂坂の馬、二十日は武藏國小野の牧馬四十疋、その外秩父の馬二十疋

立野の馬十五疋毎年奉る。二十日には信濃國望月の馬二十八疋、二十八日には上野の馬五十疋を奉る。鎌倉時代に入つて諸國の駒引が絶えて信濃の望月の駒ばかりは後醍醐天皇の頃まで引かれてゐた。建武年中行事に「八月十六日、信濃の駒牽、甲斐の穗坂以下様々あれども近比は絶えたり。甲斐の御馬ぞ此の一兩年貢し出でらる。望月ばかりは今迄絶えず」とある。

秋の御燈（晩）

【古書校註】【年浪草】九月三日。公事根源に曰、三月に同し。北斗に灯を奉らせらるるなり。（年中行事　手向する星の光にまがふかな峯にかゝれる秋のともしび　貞世。）

【季題解説】陰暦九月三日北斗に御燈を奉る事にて、昔は京の北山の高き峯に火を燈して北辰に供せられ、近代は御殿の北庭に御座を敷きて御拝ありしといふ。春季三月三日にも御式ありしなり。（古）〔參照〕春―御燈ゴトウ

【參考者】公事根源には、「三月三日御燈、これは天子の北斗に燈明を奉り給ふなり。昔は北山靈嚴寺などにて高き峯に火を燈し供せられたる由」とあるが、禁祕抄には、「二季御燈三、九月三日」とあり、一年二回、此の儀ありしことを示されてゐる。年中行事祕抄には九月三日と記し、今はこの事絶えたりと記してある。後には宮中にてその義あり、御禊ばかりを修したやうである。

相撲の節（初）

相撲の節　相撲の節會　相撲會　部領使

【季題解説】古、朝廷に行はれし公事にして、毎年七月、天皇禁中に諸國の供御人を召集めて相撲を御覧ぜられ、百官に饗饌を賜はる儀式をいふ。式日は初め七月七日、或は同十六日等變化したれど、其の後大體大の月は七月二十八・九日、小の月は七月二十

七・八兩日に定まれる由江家次第に見ゆ。式は左右近衞府分掌し、毎年二三月部領使を諸國に派して膂力あるものを徵せしむ。節日に先立つ二日仁壽殿の東庭に內取あり、これを御前の內取といふ。二十六日大床子の御座にて相撲人の拜閱を許さるゝのことあり、二十八日は卽ち節日にして左右の相撲人をしてすまはしむ。二十九日は拔出又は拔取とて前日の勝者をすまはしめ、又追相撲とて、內丁・陣直等をしてすまはしむ。式終りて饗宴あり。このこと高倉天皇の御代以後廢絕せられたり。(古) 參照 相撲

不堪田の奏 (晩)

季題考證 【[illegible]】 九月七日(一)。諸國田の損亡を記し奏すれば、それ〴〵に租稅を免し給ふ事也。古へ三分の二の貢を免し給ふこと公事根源にのせられたり。不堪田とは作るに堪へざる田といふことゝろなり。

註 (一)或は五日

季題解說 陰曆九月五日、諸國の田圃、風雨蟲害の爲め、損じて耕作に堪へざるを錄し、國司よりこれを奏し、減租救恤の事を定めしをいふ。つくるに堪へざる田と云ふ意なり。(古)

桂の宮相撲 (晩)

季題解說 陰曆九月八日、京六條の北、西洞院の西、桂の宮にて催せし相撲をいふ。(古) 參照 相撲

氷魚を賜ふ (晩)

季題解說 孟冬の旬の外に、陰曆九月九日にも、朝廷より氷魚を給ふ例あり。(古)菊もみぢ折しく氷魚を取そへてけふ給ふなりみきのさかづき　內大臣師長 參照 冬―孟冬の旬

觀菊御宴 (晩)

季題解說 每秋赤坂離宮或は新宿御苑に於て行はせらるゝ觀菊の御宴をいふ。天皇皇后兩陛下親しく臨御、諸盟各國の大使公使、文武の重臣、民間功勞者並にそれ等の家族をも召さる。(新) 參照 植物　菊

陸軍大演習 (晩)

季題解說 晩秋大演習を行はせられ　陸下親しく統監あらせらる。(新)　機動演習　大演習

例句

陸軍大演習　　匂ふばかりの莖青き稻刈にけり　　京　子 (倦　鳥)

正倉院曝涼（しやうさうゐんばくりやう）（說）

季題解說　奈良の正倉院御物の曝涼をいふ。每年十一月一日より同月十四日迄、二週に亙りて行ふ。この期間中にても、雨天の際は勿論、曇天にても濕度の如何によつて開封されざる場合あり。又假令ひ御開扉にならざる日の續くも、それが爲期間を延長さるゝ事無し。

【附記】　正倉院曝涼に就て最古の文書は、桓武天皇延曆六年六月廿六日の曝涼使解、次に同十二年六月十一日の同解、現存ある嵯峨天皇弘仁二年九月二十五日の勘物使解といふものあり。是も曝涼の際の勘物賬。何分日取り一定せず。德川時代にも三月、十一月の事もあり。元祿六年には五月十二日に開封し、天保四年には十月十八日に開封せり。明治十六年曝涼拜觀許可の事定められて後も、秋季ながら日時は一定せず、明治末年より大正にかけても十月より十一月に及び、十月十七日の神嘗祭、十一月三日の天長節を開期中に包含したる事もあり、天候氣象の統計上より近年は十一月一日より二週間といふ事に決定せり。（水木要太郎氏寄）

▽正倉院御物拜觀記抄　野田別天樓

正倉院は日本皇室の特別な一寶庫で、奈良東大寺大佛殿の西北に在る古き建物である。創建の年月は詳でないが、想ふに聖武天皇天平勝寶三年大佛殿落成の頃寺寶を收藏する爲に設けられたものであらう。然らば今に至る既に一千五百六十餘年を經過してゐる。もと南北二倉に別れ雙倉と呼ばれたが、後ち二倉の間を建て續けて三倉一棟となつた。南と北との二倉は所謂校倉で、三稜の木材を疊み重ね、四隅を井樓にして合せてある。この構造は烈日に當つても鬱蒸の患なく、霖雨に遇つても濕氣を含まず、幾百の星霜を經ても魚食の害を受けない。中倉だけは平板を用ゐてある。

王朝時代には諸國郡鄉に正稅の穀を貯藏する倉庫があつて之を正倉と名けた。その正倉數字を連ね垣墻を周らしたものは、之を正倉院と稱した。郡鄉のみならず、寺領莊園を有する大寺院にも往々正倉院あり、東大寺の正倉院もその一である。然るに星移り歲改りて其名を傳ふるもの唯この一院のみとなつた。

此庫中に收藏さるゝ寶物は現に幾千點の多きに注し、其種類は鏡鑑、樂器、遊戲の具、筆墨硯紙、武器、馬具より農具、工具、飲食器に及び、經典、古文書亦頗る多く、物として有らざるなしと謂ふべきである。是等の中主要なるものは聖武天皇の御遺愛の品で、天平勝寶八年五月二日聖武天皇崩御あらせらるゝや、其七々の御忌辰に當れる六月廿一日、孝謙天皇及び光明皇后より先帝の冥福を祈らるゝ爲其御遺物を擧げて東大寺の大佛に奉獻せられた。これが正倉院御物の濫觴である。同年七月廿

六日更に献納あり天平寶字二年又書屏風の献納があつた。その品目は東大寺献物帳と題して現存してゐる。献物帳に記載されず年代不明の諸品も多いが、之を年代明確な他の器物に比較徴證するに、何れも其作風手法等同型にして、皆天平時代に於ける製作たるは疑ふべからざるものである。その中後年勅命にて出藏されたものもあるが、大部分は依然として傳つてゐる。

此寶物は元より官寺たる東大寺へ奉献されたもので、古來官物として扱はれ、南倉のみは東大寺所有の寶物を藏め綱封藏とて同寺の三綱(上座、寺主、都維那)其開閉を掌つたが、北中の二倉は勅封藏にて、扉鑰は天子の勅筆にて御名を記されたる紙もて封じられ、歳時の曝涼臨時の檢閲等の際には必ず勅使が臨監せられる例であつた。されば足利義政、織田信長の如き權門勢家と雖も、勅許を得て寶物を拜觀することが出來たので、何人も暴威を振ふことは出來なかつた。明治に至つて三倉とも勅封となり東大寺との緣が絶えた。此世界無比の靈寶が今日に傳存して、當時の文化が如何に進んでゐたか、藝術が如何に榮えてゐたか、信仰が如何に篤かつたかといふことを眼前に示されるのは、萬世一系の皇室を戴ける我國にのみ見ることの出來る現象である。近年は御曝涼の際拜觀を許されることになつてゐる。私は本年十一月十六日拜觀を許され、一日この藝術淨土ともいふべき寶庫の中に逍遙し、天平美術の粹に接して驚嘆の目を瞠つたので、永き思ひ出にもと此記をものした。(下略)(大正九年一月發行、俳句第九卷第壹號所載)【參照】夏―蟲干(ムシボシ)

例句

正倉院曝涼

蟲干や甥の僧訪ふ東大寺　蕪村　(蕪村句集)

正倉院曝涼拜觀

いてふもみぢを入るに尊き鴨の聲　青々　(倦鳥)

[illegible]絃

殘絃によりて千年の秋を聽く　同　(同)

螺鈿紫檀五絃

秋深く昔人の名をなつかしむ　同　(同)

金銀繪新羅琴

新羅の名あはれや琴に秋千年　同　(同)

呉竹笙

秋や秋芋の吹口の長きかな　同　(同)

鳥毛帖成文書屏風

鳥毛の字秋知る人は父母と書く　同　(同)

黄熟香(ワウジユクカウ)(蘭奢待なり)

誰が獵りし鳥毛のむらも昔かな　同　(同)

御勅の切り目新たに秋久し　同　(同)

箜篌

秋やうらむ廿三絃くづれかな　同　(同)

正倉院嘯咏　廿竹律

いにしへの秋の音きかん十二律　青々（倦鳥）

正倉院御物拝観

阮咸に菊の香鬱とのこりある　別天楼（同）
庫のはえ紅葉のはえも仰ぐなり　なみえ（同）
千年の絁の色か黄落す　來布（同）
御袈裟のこれぞ遠山錦かな　同（同）

楸の葉を戴く（初）

季題解說 唐の時、立秋の日、京師にて楸の葉を賣る。婦女兒童剪て花の樣になして、これを載くといふ。（古）

例句 楸の葉戴く　雀にも戴かせばや花楸　葛三（葛三句集）

硯洗（初）　机洗

古書校註【年浪草】兒童七月六日に机・硯を洗ふ事、北野の神事に習ふなるべし。北野の社に於て、六日に松風の硯に穀の葉を添へて供す。兒童の手跡を學ぶ者專ら北野を崇信す、故に硯・机を洗ひ清め、北野神・梶の葉など、手向くるなるべし。又二星に手向くるものを書く爲とも云へり。初說に依るべし。

季題解說 七夕に梶の葉或は短册に詩歌を書して二星に手向くるは、手跡の上達せんことを祈る意なり。されば手習ふ子等は數日前より、七夕の詩歌を習ひ、或は硯・机を洗ひ淨めなどす。［參照］人事－七夕

例句 硯洗ひ　思へたゞ硯洗ひの後の恥　園女（住吉物語）

七夕（初）

乞巧奠　七夕祭　七日節句　星祭　星祝　星迎へ　星の手向
星の秋　秋七日　星今宵　星七草　星の歌　芋の葉の露

古書校註【山の井】今日はまづ節供にて、世に索餅を用ふる事あり。暮るれば七夕祭とて、香爐に空だきし、箏の琴に柱を立てゝ庭に立て、五色の絲を竿に掛けて、願の糸とて之を手向け、七つの盥に水を入れて、大空の星の光をうつす事などあめると也。猶書生は書をさらし、宮女も、絲針など用ひ、あやしの賤の女、たびし・かはら（一）も、さいで・まはし（二）のはづれをも、身々につけつゝ手向けしふる事擧げて言ふ可からず。されば七夕に七書さらさんとも、ときて手向けんたんなばたなどやうにも云へり。こよひ此の

二つの星の事を、或文(三)に河東の美人天帝のむすめ、よく雲霧の衣を織るに堪へたり、しかあれど常に獨り居て、更に喜べる色なし、帝是を憐み玉ひて、河西の牽牛夫に嫁がしめ給ふ、それより織女けはひけづらひ、髮けづりなど、身もざくり(四)に身をなして、機織る事をも打捨て、父に見えんとも思ひたらず。天帝又是を怒りて、責めて呼返して、常はめをとの恣に會ふ事を許し給はず。偶々文月七日のこよひ、烏鵲來て、銀河に横たはりつゝ橋となり、織女を渡して、あひ見えしむなど侍る。年に一と夜のあふせなれば、寢物語は衆星の數にも餘り、依々の恨は天の川波にも數へば立勝りぬべく云ひなすべし。さらでもたはしき戯れには、仲人なれや宵の月(五)、ま男なれやよばひ星(六)なども云へり、又牽牛織女の名にそへて、牛爪のわれて會ふとも(七)、うききぬ〳〵のてをりなども云ひ侍る。けふ都には、井の水を替へ、硯を洗ひ、花を立てゝ、星に手向け、梶の葉に歌書く事など侍るを、梶の葉にかけせんとう歌(八)、たてよ七夕の屛風草(九)などやうに、それらのことをも聯ねなすべし。今宵は三粒にても雨だに降れば、天の川水みぎは增さりて、星のあふせ空しとかや世俗云ひ習はせり。誠らしき證據は見侍らねど、雲打覆ひて星合の空見えざらんには俳諧の思ひ出に、さ云ひたりとも罪なかるべし。

【御傘】〔七夕〕牽牛・織女などに月日二句去なり。夜分に三句嫌ふべし。天の川のあふせ・年の渡りなども、天象に二句嫌ふかと云へり。七夕に天の川三句嫌也。紅葉橋・鵲の橋・願糸の類折を嫌ふ也。連に一句なれば誹には七夕と聲に讀みて今一有るべし　是れ二あらば、ひこ星・牛引星のたぐひもはや有るべからず。

【年浪草】月令廣義に曰、牽牛織女一年一會、昏宵令節、故に夕といふ。〔星祭、星の手向〕崔氏四民月令に曰、七月初七其の夜、庭を洒掃し、露はに几筵を施し、酒脯時菓を設け、香粉を河鼓・織女に散し、二星神の會するに當りて夜を守る者皆志願を懷く、或は云ふ、天漢中を見るに奕々たる白氣あり、光耀五色有り。之を徵として見る、者便ち拜し願ふ。富を乞ひ、壽を乞ひ、子無きは子を乞ふ。只一を乞ふことを得、兼求むることを得ず。三年にして乃ち之をいふ。頗る其の作を得る者あり。○公事根源に曰、先づ七日なれば、藏人御調度を拭ふ。夜に入りて乞巧奠あり。御殿の庭に机四脚を立てゝ、灯臺九本各々灯あり。机の上には色々の物をすゑたり。○榮雅抄に曰、筑前國大島の星の宮とて、北は彥星をいはひ、南は織女を崇む。二社の間に河あり、天の河と名く。女を得んと思へば彥星の宮に籠る。七月朔日より七日の夜半に至り、河中に棚を結びて盥に上中下三ツに水を入れ双べて、盥上中下に男の名を書いて祭をして、盥にうつりたるに隨ひて其の男女を定むる也。此の祭をせんとて、天の河原に立たぬ日はなしと云へり。○古今「秋風の吹きにし日より久方の天の河原に立たぬ

日はなし　よみ人不知」「芋の葉の露」　藻鹽草に曰、露取草とは七夕の歌を書付くるに芋の葉の露にて書く也と云々。

註　（一）たびし・かはらは瓦礫の事にて、人の中にも數まへられぬ下賤の者をもいふ。（二）さいでは布片、まはしは褌の事　（三）この事奔記に見ゆ　（四）身をいう〳〵と飾り立てること　（五）「七夕の伴人なれや宵の月」の例句あり。（六）「七夕のまつ男なれやよばひ星」の例句あり。（七）「牛爪のわれても會ふや男七夕」の例句あり。（八）旋頭歌。「梶の葉にかけ七夕のせんとうか」の例句あり　（九）秦の始皇帝が七尺の瓜を贈りこえし故事にかく　滑稽雜談」にはこの外七夕の行事として、花瓜・明星酒・梨枝等の事跡を錄せり　又江戸時代にはこの日民家にて井戸を浚ふる事あり、西國の好色五人女卷二に「折節は秋の初めの七日、たなばたにかし小袖とて未だ仕立てて一度もきぬを色々七つ雌鳥羽に重ね梶の葉にありふれたる歌を遊ばし祭り給へば、下々あそれ〳〵に唐瓜枝柿餝る事のたかし。横町裏借屋まで言役にかかつて、お宗主殿の井戸替けふことにて、又仕舞五節句に「亂の在宗には井のもとの水をかへ、のち井のふたの上に燈籠瓜なども神の御輿に入る〳〵をおく事あり」と見ゆ

季題解説　陰暦七月七日の夜、牽牛織女二星の相會ふを祭る行事　タナバタは織女卽ち棚機津女の略にして、又之を祭る七夕祭の略なり。

七夕祭は支那にては晋・唐の世に起り、我國にては奈良朝時代に支那より傳はりしものと云ふ。我が國神代に栲幡千千姫など云ふ神ありしより織女の文字をその神に附會し、天の安河を天の川に擬せしもあり。德川時代には五節句の一と定め、諸侯出仕祝儀を述べ、大奥にても盛大に行はれ、又民間にても、都鄙あまねく盛んに行はれたり。時代に依り又地方に依り其樣式さまざまなれども、今其民間の一般の樣を記せば、笹竹二本を立て、横に竹をわたし、之に五色の絲（願の絲）をかけ、又は笹竹の先に五色の絲を吊し、後には轉じて五色の紙を色紙短册形に切り、古歌を記し笹に吊せり、又庭前に机を置き、香爐・燈明・花瓶・神酒・琴・笛・瓜・梶葉・針・絲卷等を供へ盥に梶葉を浮べ、木に衣服を吊し、梶の葉には歌を書きて川に流したり。文政頃よりは一般に笹に五色の色紙、短册又は竹骨に紙を張りて硯・筆・帳・算盤・西瓜を作り、中に火を點じ、吹流し等を結び、七日過ぎて之を川に流したり。

實作注意　現今東京方面にては七夕祭を新暦の七月七日に行ふ習慣あれど、

初秋の夜空の渺茫たるに銀河を仰ぎてこそ七夕祭の感はあれ、土用前なる眞夏の夜にては、ふさはしからず。又一月後れの八月七日に行ふ地方もあり、之は季節ほど舊暦に近接するを以て稍可なるが如し。そは兎も角として、近時出版の歳時記には、此七夕祭を夏季の部に採錄せるもの往々あり。俳句の歳時記なる事を閑却せるものと云ふべし。初學者は宜しく之を誤ることなく、初秋の行事なりと知るべし。〔參照〕硯洗　七日の御節供　星合　二星　牽牛　織女　七姫　妻迎舟　鵲の橋　七箇の池　七種の舟　二星の屋形　庭の立琴　梶の葉　願の絲　乞巧奠　化生　貸小袖　七夕竹賣　池の坊立花　飛鳥井の鞠　花扇　眞菰の馬　七夕踊　おんごく　天文—洗車雨

例句

七夕

人間の水や井戸替星や空　宗因（梅翁宗因發句集）

嶋一反こや七夕の取落し　來山（續今宮艸）

七夕に願ひやは寐て莊子よむ　沾德（沾德句集）

七夕や力も入れず寐る斗り　同（同）

七草や露の盛りを星の花　鬼貫（七車）

母の七十七の賀

目出度さや星の一夜も蘇も　素堂（素堂家集）

七夕の逢はぬ心や雨中天　芭蕉（續山井）

合歡の木の葉越もいとへ星の影　同（猿蓑）

七夕や秋を定むる初めの夜　同（有磯海）

弔二句秋七日兩星一

高水に星も旅寐や岩の上　同（芭蕉庵小文庫）

七夕や暮露呼び入れて笛を聞く　其角（華摘）

葛花や角豆も星の玉かつら　同（のぼり鶴）

七夕硯蓋などいふ草紙

行く水に數書くよりも鷺に傘　同（五元集）

七夕は降ると思ふが浮世かな　嵐雪（玄峯集）

七夕や加茂川渡る牛車　同（[illegible]つばめ）

七夕は黒崎沙明にて

うちつけに星待顏や浦の宿　同（泊船集）

小倉にて七夕の晝

七夕をよけてやたゝが舟躍り　去來（泊船集）

七夕や平仲が子の寺上り　許六（小弓誹諧集）

七夕や水からくりの絲加減　支考（草刈笛）

七夕や絲の相場も都より　同（節文集）

逢坂のこなたや星の鏡山　浪化（そこの花）

一とせの爪髪するか星の馬　浪化（白扇集）
前の夜に見て置く星の備へ哉　同（風月藻）
雲いきのしまらぬ星の明る朝　同（同）
七夕や先づ寄合ひて踊り初　惟然（藤の實）
七夕やまだ越後路の道入り初　同（菊の香）
稲妻も忍びくらべよ星の宿　野坡（砂つばめ）
玉葛や年に越ゆとも星の門　同（田植諷）
七夕や松風を聞く奥の番　同（雲菊隨筆）
七夕に一色殿の馬を見ん　園女（きれくヽ）
七夕の心鳥に持せばや　紫貞女（菊の道）
七夕や西吹落て上日和　白雪（柱暦）
七夕や船手は遊ぶ茶の畑　風國（泊船集）
七夕や空も定まる雲の塵　怒風（きれくヽ）
七夕に蓋取つて見る西瓜哉　同（同）
若菜より七夕草ぞ覺えよき　荷兮（曠野）
七夕や餘り急かばころぶべし　少年 杜若（猿蓑）
七夕に出でて兎も野を驅けれ　洒堂（藤の實）
七夕の忍びながらも光かな　松吟尼（句兄弟）
素堂の母、七十七の賀
今日星の賀にあふ花や女郎花　杉風（嵐雪）
七夕は七夕立の仕廻かな　李由（菊の香）
七夕や言はん事なし夜半過　猿雖（初蟬）
七夕や戸障子立る夜半過　荊口（[illegible]奥衞）
七夕や稲の初穂の御座れ餅　智月尼（けふの昔）
七夕や庭に水打つ日のあまり　りん女（初便）
七夕の小褄ひらつく光かな　錦江女（駒摘）
七夕や國ほど曇る山の上　望翠（みかんの色）
七夕の里へ這入るや川の音　土芳（蓑蟲庵集）
七夕に御言葉もなき曇り哉　梢風尼（木葉集）
七夕や葛吹く風は夜明から　也有（蘿葉集）
荻も穂に出るや星の遊びより　千代尼（千代尼句集）
七夕や流るゝ星は酒くらひ　曉臺（曉臺句集）
七夕や世に大方はまさな事　同（同）
さゝ枕星に一夜の名なるべし　同（同）
萩桔梗星に貸べく野は成りぬ　同（同）
星の精や八日に咲ける白芙蓉　同（同）
七夕や桂に寄れば月落ちし　白雄（白雄句集）
七夕や蚤に目覺て夜の閑　同（同）

七夕や兒の額に笹の影　樗良（樗良發句集）
七夕や藍屋の女肩に絲　召波（春泥發句集）
七夕やよみ歌聞きに梶が茶屋　同（同）
七夕や家中大かたゝと居す　太祇（太祇句選）
闇となりて猶おもしろや星の空　道立（續明烏）

　旅暑の心を

七夕に願ひの一つ涼しかれ　成美（成美家集）

　雍發した後

七夕や涼しいさへも嬉しきに　同（同）
七夕や拾うて戻す蚕が櫛　乙二（松窓乙二發句集）
七夕の夜も餘所にせず西東　同（同）
星と成りて夜は見え給へ母の影　同（をのゝえ草稿）
星待やさもなき門の糸芒　同（同）

　しのぶ近き山に假寐して

七夕の闇のひろがる名所哉　同（同）

　新潟にて

待星のこゝらや合歡も波の草　同（同）
七夕に星の入たる色紙かな　巣兆（曾波可理）
加茂川や誰やら渡る星の夕　士朗（枇杷園句集）
星待や龜も涼しい後ろつき　一茶（一茶句帖）
七日の夜只の星さへ見られけり　同（同）
七夕は隙で鐘撞く野寺かな　蒼虬（蒼虬翁發句集）
七夕や出でて詠むる我垣根　同（同）
七夕を思うて居るか渡守　同（同）

　加茂川堤

七夕や秋に目出度き此景色　同（同）
夜中にも見つくろひけり星の空　鳳朗（鳳朗發句集）
七夕に草履を貸すや小傾城　子規（全集）
七夕を祭らぬ御代に戀男　同（同）
七夕やそこらに在るは禿星　同（同）
七夕の笹のへりたる都かな　柏亭（寶船）
妹と同じものを供へん星祭　竹兜（倦鳥）
七夕や長生殿の水時計　青々（妻木）
七夕のなごりの朝も下涼み　同（倦鳥）
七夕や端居つゆけき草の宿　冬葉（[illegible]）

星祭

七つ持つ名人號や星祭　許六（正風彥根躰）
縫殿の陣の清めや星祭　同（風俗文選犬註解）
土佐が繪に仰のく人や星祭　支考（笈日記）
隣への藪ゆひわけて星祭　園女（陸奥鵆）

星祭

瀬通りに笹のしるしや星祭　斜嶺（小弓誹諧集）
大内のかざり拜まん星祭　千子（續虚栗）
蝙蝠の虱落すな星祭　曲翠（華摘）
中等子や手を合せつゝ星祭　小春（西の雲）
唐人か風祈る也星祭　泥足（其便）
風の端や蚊帳を押へて星祭　此筋（浮世の花）
あら壁に酒散るばかり星祭　露川（記念題）
兒小姓が降れかし庵の星祭　句空（[illegible]賀の松）
走り穂の一筋ぬきや星祭　木因（千鳥掛）
木津川や日に棚かく星祭　尚白（忘梅）
夕顔も寝る約束ぞ星祭　千代尼（千代尼句集）
病めばたゞ枕の上ぞ星祭　曉臺（曉臺句集）
振袖の憂をはたちや星祭　几董（井華集）
三十にしてよめらぬ人や星祭　子規（全集）

星祝ひ

御祝儀に梶も戰ぐか星祝ひ　一茶（七番日記）

星迎

笹の葉に枕付てや星迎　其角（雑談集）
丸腰の治郎笠ぬげ星迎　同（古むしろ）
酒盛となくて酒飲む星迎　去來（有磯海）
山陰や鳥入來る星迎　同（菊の道）
女子氣に守りつめてや星迎　紫貞女（春鹿集）
蟲共も聲はり上げよ星迎　斜嶺（芭蕉門古人眞蹟）
年々のもたれ柱や星迎　白雪（誹諧曾我）
墨すらば團扇よごさん星迎　風國（續有磯海）
其牛に小車吹きぬ星迎　也有（蘿葉集）
馬はあれど牛や木幡の星迎　同（同）
戯に扇流さむ星迎　曉臺（曉臺句集）
さす汐や玉藻つかねて星迎　同（同）
下り帆に星や迎ふる浮身宿　同（同）
海士が子の乾かぬ袖を星迎　青蘿（青蘿發句集）
星迎大淀かゝらどこよけん　一茶（享和句帖）
褌に笛つきさして星迎　同（七番日記）
女郎花もつとくねれよ星迎　同（一茶句帖）

星の手向

干物を忘れて星の手向哉　也有（蘿葉集）
よみ歌をひそかに星の手向哉　几董（井華集）
妻の母七十七の賀
星に手向けし衣か人に見せるのか　一茶（享和句帖）

星の秋

七株の萩の手本や星の秋　芭蕉（韻塞）

星今宵

星の夜の寐られぬ罪や蚊が這入る　來山（續今宮艸）

星の夜よ花火紐とく藤袴　其角（五元集拾遺）

星今宵夢見て姙む人あらむ　曉臺（曉臺句集）

卄年あとの祭や星今宵　同（同）

雨石老人の悼

星の夜を臨終とや空をうち見たり　白雄（白雄句集）

星一ト夜昔にかへれ伊勢河内　同（同）

仙府の人々にとゞめられて

長居して星の一夜に笑はれん　蓼太（蓼太句集）

明易き蕣摘まん星一ト夜　同（同）

悲しさを重ぬる星の一ト夜哉　樗良（樗良發句集）

笹の葉の露にも星の一ト夜哉　亀文（續明烏）

やがて打つ砧の音も星今宵　乙二（松窓乙二發句集）

秋海棠星七草になど洩れし　白雄（白雄句集）

星七草

七種や葛に根めば萩に露　蓼太（蓼太句集）

今日からは星の草なり野撫子　乙二（松窓乙二發句集）

星の歌

芭蕉葉に覺えし程を星の歌　白雄（白雄句集）

星の歌覺ゆる事にせざりけり　乙二（松窓乙二發句集）

芋の葉の露

芋の葉の露ころばかす袂かな　舎鳴（卞まつり）

芋の葉の露や銀河のこぼれ水　白笑（續明烏）

参考　牽牛織女二星の、年に一度天の川を渡つて會合するといふことは、支那の傳說にもとづく。天帝の子織女、天の川の東に在りて機織を事としてゐたのを、天帝がこれを憐み河西の牽牛に嫁せしめたところ織女が機織を廢したので天帝が怒つて河東に歸らしめ、唯年に一度だけ會ふことを許したといふ。支那で七月七日にこの二星を祭ること、晉の周處の風土記に見えてゐる。本朝では、萬葉集に引くところの柿本人麻呂集に既に七夕の歌があり、爾來この夕に、文雅の士女詩歌を賦したことと代々の文獻に card寄である。タナバタとは古語で機織のことを謂ひ、即織女星の名を以つてひいてこの祭の名とするのである。牽牛はヒコボシといふ。男星の義である。この七夕の夜、婦女、その手技の上達を祈るより乞巧奠ともいふ。

七日(なぬか)の御節供(おんせちく)（初）

古書校註

【日次紀事】　七月七日の條。武家并に地下良賤各々白帷子を着、慶を修す。家々索麪を哭し父互に相贈る。

【年浪草】　日本紀に曰、持統天皇五年秋七月七日公卿を宴し、仍て朝服を賜ふ。〔江次第に云、七日の御節供、内膳司采女に付す、采女女房に付す鬼の間北ノ障子より入りて朝餉を供す。御臺二本盛物十六坏、陪膳女房以

下簾を上げ、夜の帷簾と雖も格子を下さず之を供す。内藏寮酒肴を屋上に居うる事恒の如し。○公事根源に曰、内藏司より是を調進す、けふ索餅を用ふる事故有るにや。

季題解説　古昔陰暦七月七日、武家並に地下の良賤、各白帷子を着、慶を修す。家々索麪を喫び又互に相贈る。(古)［三冊］七夕

星合(初)

星の契　星の戀　星の妹背　星の別　別れ星　星の閨　石枕　七寶枕　星合の濱　年の渡　秋去衣　紅葉の橋　紅葉の帳

古書校註

【御傘】「七夕の衣」衣類に非ずといへども、衣の字には五句去也。「秋去衣」秋也、七夕の具也、朗詠の詩に去衣曳浪とあり、これなるべし。「年のわたり」も七夕の事也。「紅葉の橋」爲天河事、間不可爲植物、依句可二句也、以上新式(一)。此の文を見そこなひて、色々むつかしく沙汰し、之は季をば持てども、植物にはならずと云ふ事也。されども下界の紅葉によそへたるやうの句ならば、植物に二句嫌へと云ふ義也。さるによりて句體によるとは書かれたるもの歟。依句體と云ふ理もなく季を持てば、植物に二句嫌と云ふ説悪しく侍る。

【年浪草】「星の契　星合」(略)(上)「秋去衣」八雲御抄曰、秋さり衣とは七夕の布也。萬葉拾穗抄曰、私去衣は、秋の衣にや、秋さりは秋の來るといふ事也。一説七夕の衣也。別れの衣也。秋さり姫とも云ふ。連歌新式曰、七夕の具に由來もさのみなき也。「紅葉の橋」八雲御抄に曰、紅葉の橋はまことに有るにあらず、實へばあらましに云ふ也。○連歌新式曰、紅葉橋天の川の事となす間植物とせず。○藻鹽草に曰、漢毛傳に云、烏鵲の橋の口には紅羽を敷き、二星の屋形の前に風冷々たり。是は紅葉にあらねども、紅葉と云ふにつけて、羽の字をエフの聲に訓む也。七夕のあかぬ別の涙、鵲の羽に染みて紅になるを云へりとぞ。「年の渡り」とは年に一度天河を渡る意なり。萬葉「玉かつら絶えぬものからさぬらくは年の渡りにたゞ一夜のみ。」

【俳諧歳時記】「秋さり衣」七夕布なり。(中略)馬琴按ずるに秋さり衣は袷をいふなるべし。年山紀聞第五に云、萬葉十に「たなばたの五百機たてて織る布の秋さり衣誰かとりみむ」御釋に云、集中に春は來にけりと云ふことを、春去りにけりと詠めるやうに、秋來ての衣と云ふ意に名づけたり云々。待賢門院堀川の歌に一旅にして秋さり衣さむけきにいたくな吹きそ武庫の浦風」。八雲御抄に七夕布也と遊ばされしは、萬葉の歌にて注させ給へるなるべし。されど後の歌を思へば敢て七夕には限るべからず。「七寶枕」晉の郭翰少うして清標あり、月に乘じて庭中に臥す。織女之に降り

與に俳に伉儷す。而して後七寶枕を以て留め贈り、別を訣して去る「五雜俎」。たなばたのあふ夜の玉の枕とみえたり。

【栞草】〔石枕〕仙覺抄「いそ枕とは眞の石にあらず、玉也。たなばたのあふ所なり。」〔星合の濱〕增山の井「伊勢にあり、星の逢ふ所なり。」〔紅葉の橋〕古今「天の川もみぢをはしに渡せばやたなばたつめの秋をしもまつ。」眞淵翁云、「紅葉を橋と渡せばにや、秋を待ちて渡るといふのみ。紅葉の橋は秋は紅葉を專とすれば、まだ初秋にて紅葉せぬ頃にもかはらで、凡の秋のさまもていふのみ（中略）。此の紅葉を橋にとあるを心得かねたるよしにて今よむには誤りたるが多し。○青藍（二）云、此の古今集の歌より、天の川原にもみぢの橋ある趣に古くよりよめり。又棚機の別れんとする時、紅涙を落すをもみぢの橋といふ說は後に設けたるなるべし。〔紅葉の帳〕藻汐草「紅葉の戸ばりとは錦の戸帳を七夕に言ひよせていへり。夫木 かさゝぎの河風立ちぬたなばたのもみぢの戸ばり波やかくらん 後九條內大臣。」

註 （一）連歌新式。

季題解說 陰曆七月七日の夜牽牛織女兩星の相會ふを云ふ。支那古傳說に天帝の女、織女は天河の東に住み機織を業として天衣を作る。天帝之を河西の牽牛星に嫁せしめしに、織女機を廢す、天帝怒て河東に歸し年に一度の天河を渡つて相會ふ事を許す。此夜雨降り天河の水增せば、烏鵲羽を擴げて橋となり織女を渡すと云ふ。星の契、星の戀、星の別、星の閨、石枕は二星相逢ふをゆかしみ偲びての詞なり。星合の濱は伊勢にありて、星の逢ふ所なりとの古說あり。年の渡牽牛の年に一度、天河を渡ること。秋去衣は「八雲御抄」に棚機の布とあるは、前葉第十の「たなばたの五百はたたておる布の秋去衣たれかとり見む」より詠せられしなるべし。又「御傘」には棚機の具とあり。紅葉の橋とは七夕に牽牛の渡る橋にて「八雲御抄」には「紅葉の橋はまことに有にあらず、譬にあらましに云なり」とあり。「古今集」「天の川もみぢのはしにわたせばやたなはたつめの秋をしもまつ」などありて興ずるにまだ紅葉せぬ初秋なれど牽牛の渡る橋なればかく美しく云ふのみ。以下天上の星合と地上の七夕祭のうち著名の季題を頂を別ちて說くべし。

實作注意 芭蕉が「文月や六日もつねの夜には似ず」と詠じたるは文月を特にゆかしむ心あるによるものにて、文月をゆかしむ心は七夕の事を偲ぶが故なり。古來歌人も俳人も初秋の情趣も七夕によりて催さるゝこと多かりしなり。〔參照〕七夕 二星 牽牛 織女 七姫 鵲の橋 妻迎舟 天文―洗車雨

例句 星合 大空に雲なしどこを逢ひどころ 來山（續今宮草）

星合を思ふ寐覺や蚊帳の空 同（同）

星合

地にあらば浦や星の亂れ髪　鬼貫　（七車）
田の水も湯と成て星の逢夜哉　同　（同）
星も燻禁どこらに此夕　同　（同）
星合や女の手にて歌は見ん　其角　（續虚栗）
（[illegible]）
星合や物たはひける胸の中　同　（華摘）
星合やいかに痩地の瓜作り　同　（其袋）
星合や人の心を爪はじき　同　（末若葉）
星合や曉になる高灯籠　同　（五元集）
（一家にとまりて）
星合や双林塔の鈴の音　同　（同）
星合や山里持たし齋ひま　同　（同）
星合に我妹貸さん待女郎　嵐雪　（其袋）
瀧水のけふりと浮くや星使　同　（虚故集）
星合を透かして見るや揚燈籠　許六　（藥の花）
星合や目ばかりも從女夫　同　（[illegible]選大詳[illegible]）
今宵そも星の連理や七色木　凉菟　（[illegible]路[illegible]）
星合の空泣くやうに曇りけり　同　（一幅半）
星合や捕はで寢たる家の内　りん女　（小柑子）
星合やうらやみ遊ぶ小暗がり　同　（田植曲）
星合や離別の中を佗て見ん　山蜂　（句兄弟）
星合に燃え立つ紅や蜘の絲　孤屋　（炭俵）
星合を水田に映せ[illegible]鶴　臥高　（初蟬）
星も燻明石縮に淺黄裏　北枝　（その花）
星合や小河の中の傳ひ石　斜嶺　（けふの昔）
星合やたゞにはあらぬ水の色　除風　（高むしろ）
星合の頃か眼げの一しきり　芦本　（柿表紙）
星合や坪刈したる水の早稻　里東　（白馬集）
星合や錢とる橋の夕鳥　桃妖　（千網集）
川中や星と〳〵の國境　此筋　（木曾の谷）
きぬ〳〵や光隱るゝ星の影　浪化　（白扇集）
星合を羨む戀の高のぼり　揩風尼　（木葉集）
星合や心して行く雲の脚　千代尼　（千代尼句集）
星合や月入る迄は何の蔭　同　（同）
星合や心の友は伊勢小町　曉臺　（曉臺句集）
星合や物めかしたる富士筑波　同　（同）
星合や我は嬉しき親になび　同　（同）
露の間を世にふる星の逢ふ夜哉　樗良　（樗良發句集）

逢夜とて目出度き星の光かな　同（同　）

星合も山鳥の尾の別れ哉　几董（井華集）

事繫に、をあはれむ

髮とくをせめて願や星逢ふ夜　同（同　）

星合に雪の橋かけよ都鳥　蓼太（蓼太句集）

きぬ〴〵に鵲尻を向けにけり　召波（春泥發句集）

星合や白き袴に更る人　乙二（松窓乙二發句集）

星の逢ふ夜や我がちに草の花　成美（成美家集）

星合に見やる山田の立樹かた　巢兆（曾波可理）

若々し星は今年も妻迎　一茶（九番日記）

藪寺の空まで星の逢ふ夜かな　蒼虬（蒼虬翁發句集）

星の契

露けしや星の逢ふ夜の袖袂　五空（五空句集）

彥星がさ霧に舟をこぐ夜かな　靑々（倦鳥）

露の閒を目出度き星の契哉　龜鄕（續明烏）

星の戀

靜なる戀の姿や星の影　李由（浮世の北）

鶴龜も限りやあらん星の戀　杉風（杉風句集）

星の戀空には老も無きやらん　闌更（半化坊發句集）

待たるれば待たるゝものか星の戀　同（同　）

高き木に花もあれかし星の戀　乙二（松窓乙二發句集）

別れ星今は木隱れて見ゆるなり　曉臺（曉臺句集）

星の別

羅の袖や裂らむ別れ星　同（同　）

年々に思ひ增らん別れ星　闌更（半化坊發句集）

何となく曇りて星の別れ哉　白雄（白雄句集）

朝顏がまじりて星の別かな　二柳（續明烏）

鳴くな蟲飽かぬ別れは星にさへ　一茶（九番日記）

星の閨

殿と寢し夜の手じるしや星の床　許六（風俗文選犬註解）

星の床また仕回すや明の雲　也有（蘿葉集）

玉簪の花に迎へむ星の閨　曉臺（曉臺句集）

長うなる夜とや語らん星の閨　雅因（石の月）

星合の濱

木綿鬘星合の濱にかけてあり　靑女（華摘）

年の渡

年渡り江や隅田川原の橋柱　嵐雪（玄峰集）

二星（初）　牛女　女夫星　乏妻

語彙校註

【年浪草】〔二星・牽牛・織女・犬飼星・河鼓・男七夕・女七夕〕月令廣義に曰、焦林大斗記云、天河の西に星有り、煌々として參と俱に出づ。之を牽牛といふ。天河の東に星あり、微々として氐之下にあり。之を織女とい

ふ。世に双星といふ。(一)倭名抄曰、爾雅注云、牽牛一名河鼓、和名比古保之、又以奴加比保之、織女、太奈八太豆女。(一)〔ともしづま〕萬葉二「八千とせの神の御世より乏し儘人知りにけり告けしと思へば」補拾八丸〔ともしは〕あふ事の稀に乏しき妻なりと云々(二)又ともし火嬬ともいふ。〔牛女〕牽牛之牛、織女之女、所謂二星也

【栞草】〔ともし妻〕ともしは乏の字をよめり、稀少の義也。あふ事の稀にともしき妻也。故に織女年に一度まれにあふを、ともし妻とよみたる歌あり。(三)ここを看山の非　学環すべて活法の書に織女の異名のやうに出せるはわろし。必ず織女のあしらひ有るべし。

【註】(一)萬葉の頃のともしづまは言ひても飽き足らずいとしき妻の義たるを、後世織女が年に一度會ふよりその義とせり。(二)夫木集「天の川くらしかねたるともしづまわたりを急ぐらさ手間くなし」一等

【季題解説】二星は牽牛星と織女星を云ふ。牛女は牛と女郎との二星をさす。又乏妻といふは、會ふことの稀なるより、珍らしくあきたらず、逢ひたらずの意にて、いとし妻といふ如し。(補)博物志に云ふ、人有り槎(筏)に乗じて天河に到る。婦人の織り、丈夫の牛に水かふを見る。還て厳君平(有名なる卜者)に問ふ、君平云ふ、某の年某の月、客星、斗牛を犯すと、即ち其人なり。【參照】七夕(ハ)　星合(アヒ)　牽牛(ケン)　織女(ヒ)　七姫(ヒメ)六　鵲の橋(ハシ)　妻迎舟(ツマムカヘブネ)

【例句】

二星　五百機の窓に草餅や二つ星　沾徳（沾徳句集）

二星私語む隣の娘年十五　其角（雜　談）

夜明まで雨吹く中や二つ星　丈草（旅　袋）

今宵すらどちらや渡る二つ星　梢風尼（木　葉　集）

儕の世に祭られて二つ星　闌更（半化坊發句集）

今宵なくば石ともならん二つ星　同（同　）

戀せぬ夜天下りませ二つ星　乙二（をのゝえ草稿）

夫婦星　てもさても御若い顏や夫婦星　一茶（九番日記）

牽牛(けんぎう)（初）　彦星(ひこぼし)　男星(をぼし)　犬飼星(いぬかひぼし)

【季題解説】銀河の西に燦々として参と倶に出る星(男星)をいふ。之を彦星、犬飼星とも云ふ。倭名抄に牽牛一名河鼓とあるは非なり。又近時出版の類書に之を其儘引用せるもあれど河鼓は牽牛とは別の星なり。【參照】七夕(ハタ)　星合(ヒ)　二星(セイ)　織女(ヒ)　七姫(ヒメ)六　鵲の橋(ハシ)六　妻迎舟(ツマムカヘブネ)

【例句】

牽牛　晴がりを牛引星の急ぎかな　來山（續今宮艸）

牽牛の傘すぼめてや橋の上　支考（梟日記）

彦星　（七夕に雨降りければ）彦星や田畑へおろす宵の雨　北枝（續有磯海）

織女（初）　女星　妻星　絲織姫　織姫　機織姫　棚機姫　女七夕　棚機津女　星の妻

季題解説　銀河の東に微々として氐の下に見ゆる星（女星）をいふ。機織姫・女七夕・棚機津女・星の妻等何れも織女星の異名なり。**参照**　七夕・星合・二星・牽牛・七姫・鵲の橋・妻迎舟

例句

七夕　浮草のうかれありくや女七夕　才麿（才麿發句拔萃）

地にあらば擂木賣呼べ女七夕　其角（星会集）

竹取が由緒なるらむ女七夕　曉臺（曉臺句集）

明方や七夕つめの閨の雲　一茶（一茶發句集）

棚機津女　天にあらばひよこの羽根も星の妻　宗因（梅翁宗因發句集）

星の妻　（素堂の母七十七の賀）蘭の香にはなひ待らん星の妻　其角（韻塞）

妻星よ逢ふに一ト癖ある女か　同（五元集拾遺）

銀屏の夜や七夕の嫁入前　支考（東西夜話）

月に露に道具揃へて嫁入星　也有（蘿葉集）

數星の御顔を隠す榎かな　一茶（一茶發句集）

七姫（初）　秋去姫　薫姫　さゝがに姫　百子姫　糸織姫　朝顔姫　梶の葉姫

古書校註

【年浪草】〔秋さり姫・薫姫・さゝがに姫・百子姫・糸織姫・朝がほ姫・梶の葉姫〕以上七夕七姫の名なり。藻鹽草に出たり。

【栞草】〔糸織姫〕棚機七姫の内也。異名分類　舊事紀に、令天棚機姫神織神衣云々、是によるべし。〔梶の葉姫〕棚機七姫の内なり、異名分類　梶の葉姫は八雲御抄に梶の葉にもの書くも皆由緒あるか云々。溪雲問答に芋の葉の露を硯の水とし梶の葉七枚に歌一首づつ書くよし見えたり。是等によるに皆二星を祭る具、專要の物を以て名付くと見えたり。〔秋さり姫　朝顔姫〕棚機七姫の内也。異名分類　等にも注釋見えず。〔さゝがに姫〕棚機の異名七姫の内也　ささかにとは蜘のこと也。異名分類　開元遺事に蜘蛛を以てこれを小さき金盒の中に納め、曉に至つて開きて蜘蛛の糸の稀密なるを視、以て巧の多少を得たりとす云々。長明四季物語に姫蜘蛛とてささやかなるくもの、その机もと或は願の糸にいを引きぬるを圖として私の願かなへりとすることとなるべし云々。これらによれるなるべし。〔百子姫〕

れども帝釋毎日此の河にて水を浴び給ふ故に、水穢れありて渡ることを許されず。雖レ然七月七日は帝釋善法堂へ御參りの日なれば、水を浴び給はずしてこの渡ることを許さる。年に一度といへども人間の爲には一日一夜也。此の時烏と鵲と羽を双べ、橋として彦星・織女を通す也。之を烏鵲の橋と云ふ也云々。

季題解説 七夕の夜、天の川に烏鵲翼を延べて橋となる。これを鵲の橋といひ、牽牛渡りて織女の許に至ると傳説にいふ。〔參照〕七夕 二星 牽牛 織女 七姫 妻迎舟 星合 冬―鵲始巣

例句

鵲の橋

鵲の橋や銀河のよこ曇り　來山（續今宮草）
露橋や待つとは宇治の星姫も　其角（おくれ雙六）
橋となる鳥はいづれ夕烏　同（[illegible]集）
鵲や石を重りの橋もあり　同（浮世の北）
鵲の橋や給入の百人一首　許六（[illegible]）
鵲や尾上の杉を橋柱　浪化（射水川）
鵲や別れの橋は懸ねども　千代尼（千代尼句集）
鵲や橋にあまりて澪標　蓼太（蓼太句集）
鵲の長柄もかけよ星一夜　大魯（蘆陰句選）

星の橋

一方は稻にかゝるや星の橋　野坡（野坡吟艸）

七箇の池（初）

百箇の池 七遊 七夕の御遊 七種の御遊 七種の御手向

古書校註 【年浪草】事林廣記に曰、戚夫人傳に曰、高祖漢宮七夕百子池に臨み、五縷を以て相覇す。之を相憐愛といふ。

【俳諧歳時記】〔七箇の池・百子の池〕大盥に水を入れ鏡をつけて、星の影をうつすを云ふ。百子の池とは天の河を云ふ。織女を百子姫と云へば也。又百の盥に水を入れて手向くると云ふ説あれど、百の盥はあまりに多かるべし。百子池と名づくること愚按あり、委しくは化生の條下に注す。

季題解説 星を祭るに七個の盥に水を入れ、鏡をつけて、星の影を映すをいふ。又百箇の池は天の川をいふもゝならん。次に七遊とは南北朝頃より始まり、七月七日に因み、公家階級にては七百首の詩・七百首の歌・七調子の管絃・七十韻の連句・七十韻の連歌・七百の鞠・七献の酒といふ如きを行ひ、又武家にては笠懸・犬追物・御歌・御連歌・御鞠・揚弓・御酒といふ如く別に一定され居らず、此風は後漸く衰へたり。（百）〔參照〕七夕

例句

七箇の池　月も借る星の盥や宵の影　也有（[illegible]葉集）

七種の舟（初）

古書校註

【年浪草】○七種の舟は色々の寶を七色舟に積みて手向くるをいふ。七夕には七の數を用ひ七遊など侍り。

季題解説

七夕に種々の寶を七色舟に積みて手向るをいふ。（古）參照 七夕

二星の屋形（初）　星の屋形

古書校註

【年浪草】唐の天寶宮中七夕に錦綵を以て結びて樓殿を成す、高さ百丈、數十人を容るべし。花果炙酒炙を陳ね、座具を設け、以て牛女の二星を祀る。本朝の式は少しく異なり、七ツの棚をかき、花を折り花果を備へ空燒等の事あり。

季題解説

七夕に七ツの棚を設け、花を挿し、瓜菓を供へ、空炷などするをいふ。（古）參照 七夕

庭の立琴（初）　立琴　紅葉の帳　九枝燈　火取香　索餅

古書校註

【年浪草】索餅 先代舊事紀に曰、七月七日、織女神を祭る、又牽牛神あり、其の祭供には素麪を以てす。是絲織の象を表す。並に稗麪を以てす。其是鈎餅の象を表す。○十節記に曰、昔高辛氏の少子、七月七日に死す、其の靈鬼神となりて人に瘧疾を病ましむ。其の存する日、麥餅を好めり。故に其の死せる日に至つて索餅を以てその靈を祭る。後人皆索餅を食へは瘧疾を患へず。［庭の立琴］江次第に曰、乞巧奠に御所より箏一張を申下し、東北西北の机上の妻に置く、注、延喜十五年の例、和琴を用ふ。裏書に曰、柱を立つるに三樣あり、常に半呂・半律を用ふ、秋の調子也。○公事根源頭書に曰、半呂半律とは或樂書に云、黄鐘調・大食調は律呂の調也、半律の調也。

【栞草】［九枝燈］漢武内傳 七月七日帝宮掖の内を掃除し、雲錦の帷を張り九華の燈を燃す。西王母降。公事根源 燈臺九本おの〳〵灯あり云々。［火取香］織機に手向くる也。江次第西北机に香爐一口を居ゑ、納殿の百和香四兩之を盛る。公事根源 机の上に火とりに終夜空燒物あり。

季題解説

七夕の夜、宮中及び公卿の家庭にては莚薦を布き机四臺を置き、北の二臺にかけて中央に箏の調子を合せ柱をたて置き、その兩端に香爐と蓮花・鏡・絲・南の二臺の上には左右各々中央に盃・周りに鯛・鮑・大豆・豆・桃・梨・茄・瓜の八土器を置く。その周圍に九臺の燈臺に火を點じ、

几帳に五色の帳、五色の絲を掛け二星を祭る。江戸時代宮中にては、内侍は芋の葉に水を包み、七ツの御硯に入れ、天皇は梶葉七枚に古歌なれば七首、御製なれば一首を硯一つにて書き給ひ、索餅を入れ、梶木の皮七筋、素麵七筋にて十文字に包み屋根に投げらる。即ち右の箏(コト)を庭の立琴と云ひ、五色の帳を紅葉の帳、九臺の燈臺を九枚燈、終夜空灶物をなす香爐を火取香、素麵を索餅と云ふ。(古)［参照］七夕(秋)

例句

立琴　立琴や物の見事にかざり立て　悠川(砂川)

八日星　立琴も寐せるや星の二日酔　夢太(夢太句集)

星に琴借りて更行く端居哉　同(同)

心ある手向の琴や想夫憐　嘯山(律亭句集)

立琴にト見せ顔や蜘の糸　麥水([illegible])

立琴や家の四隅に風の吹く　乙二(をのゝえ草稿)

梶(かぢ)の葉(は)（秋）　梶(かぢ)の七葉(なゝは)　梶葉(かぢのは)の歌(うた)　梶葉賣(かぢのはうり)

古書校註

【年浪草】和俗七月六日市中に穀の葉を賣る。明夜詩歌を書きて以て二星に供する所也。又或は短册の楸(ひさぎ)の葉を用て詩歌を書く。〇八雲御抄に曰、梶の葉に物を書くも由緒有るかと云々。然れば深意かはるべからず。〇菅章長(高辻家)朗詠抄に曰、昔余吾の海に天人下り、羽衣を獵師に盗まれ、心ならず獵師の妻となり、年月を經て、羽衣を取得て天上し、再び獵師と共に天上す。女は織女となり、男は牽牛となる。その再び天へ上る時、梶の木の上より糸をおろし、之に取附きて上る、故に二星の手向に梶の葉を用ひ、願の糸とて五色の糸を用ふと也。略して爰に記す。此の事淡海志にも見えたり。

季題解説

七夕に七枚の梶の葉に星に手向の歌を書きて供ふ。昔は七夕の前日、之を市中に賣り歩きたり。七夕に梶の葉に歌を書くといふ事は、支那にて楸の葉に詩を書したるに倣ひたるべきも、天の河の渡し舟の梶(舵)といふに縁あるより思ひ付きたりとの説、あながち捨つべきにあらじ。梶の木は桑科に屬する落葉喬木にて高さ二三丈に達す。葉は心臟狀にして卵形鋭尖頭をなし、往々五裂をなす。夏季赤色の花開く。山野に自生し、日本紙製造の原料に供せらる。(古)［参照］七夕(秋)

例句

梶の葉　追風や一葉萬里いまの梶　宗因(梅翁宗因発句集)

梶の葉を朗詠集の栞かな　蕪村(蕪村句集)

梶の葉に配り餘るや女文字　几董(井華集)

梶の葉　梶の葉に硯恥かし墨の[illegible]　[illegible]（[illegible]）
宮人や梶の七葉に七ツ星　乙二（左のゝえ草稿）
子寶の蜑朝のたるそ梶の葉に　一茶（[illegible]）
梶一葉ねてやるより庭涼し　蒼虬（[illegible]句集）
梶一葉提て出るや露屋敷　同（同）
書あまる[illegible]ひや梶の裏表　多代女（晴霞句集）

梶の七葉　星の影梶の七葉に夜更けたり　青々（[illegible]集）

梶売　しほらしや梶を賣る子の繋き錢　嘯山（[illegible]句集）

願の糸（初）

【古書校註】【年浪草】江次第に曰、乞巧奠、西北の机の上に金針七ツ、銀針七ツを挿み、竹の針筒に七孔あり、五色の糸を以て撚合して之を貫く。〔[illegible]〕歳時記に曰、七夕に婦人綵縷を結び、七孔針を穿つ、或は金銀鍮石を以て針とす。○又唐の宮中七夕に、妃嬪各々九孔針五色線を持つて、月に向ひて之を穿つ。過る者は巧を得たりとす。○天寶遺事に曰、明皇貴妃と共に七夕に花清宮に宴し、花菓酒饌を庭につらね、恩を牛女星に求む。又各々蜘蛛を提りて小合の中に閉ぢて暁に至り開き視るに、糸網の稀密なるを巧の候とす。故に民間も亦之に倣ふ。〔[illegible]〕公事根源に曰、巧といふ事もろこしより事起れり。七夕祭とも云ふ也。香花を供へ、供具を調へて庭上に文を置きて竿の端に銀の五色の糸をかけて、一事を祈るに、三年の内に必ず叶ふと云へり。故に乞巧と申すなりと云々。

【季題解説】七夕に竿のはしに五色の絲をかけて、己が願ふ事を祈るに、三年のうちに心叶ふといふ。「朗詠集」「憶得少年長乞巧、竹竿頭上願絲多　白樂天」（古[illegible]）七夕[illegible]　乞巧奠[illegible]

【例句】
願の糸　星合や瞽女も願の糸とらん　嵐雪（[illegible]）
戀さまざま願の糸も白きより　蕪村（蕪村句集）
涼しさや願の糸の吹たまる　乙二（松窓乙二發句集）
五色紙の綱は願絲よ竹の上　青々（倦鳥）

乞巧奠（初）　乞巧針　乞巧瓜　乞巧[illegible]

【古書校註】【年浪草】〔乞巧奠〕潜確類書に曰、唐の宮人七夕に蜘蛛を以て金盒の中に納れ、暁に開いて蜘蛛の糸の稀密を視て、巧の多少を得たりとす。〔[illegible]〕荊楚歳時記に曰、七夕に婦人糸縷を結び、七孔針を穿ち、或は金銀鍮石を以て針とし、瓜果を庭中に陳ね、以て巧を乞ふ。蟢子（一）ありて瓜の上に網する

る時は以て巧を得たりとす。

【栞草】〔乞巧針　乞巧瓜〕荊楚歳時記　七夕に婦女七孔針を穿ち、或は金銀鍮石を針とす。瓜菓を庭中に陳ぬ巧を乞ふ。蟢子ありて瓜の上に細する時は巧を得たりとす。

季題解説

（一）蜘蛛に同じ

七夕に婦女、七孔、針を穿ち、或は金銀鍮石を針とし、瓜菓を庭中に陳ね、裁縫の技の巧みならんことを乞ふなり。蜘ありて瓜の上に網する時は叶へるしるしなりといふ。〔参照〕七夕　願の絲

化生（初）　磨喝樂　水上浮

古書校註

【俳諧歳時記】〔化生〕歳時記に云、七夕に俗蠟を以て嬰兒を作り、水中に浮べ、以て婦人子に宜しきの祥とす。之を化生と云ふ。王建が詩に云、水拍二銀盆一弄二化生一是也。今の人泥塑嬰兒或は銀範を以てする者、化生をなすことを知りて、七夕の戯なることを知らず。五雜組　馬其按ずるに、水銀盤を拍て化生を弄すと云ふ者は、百子の池是なるべし。凡そ七夕の戯は婦人子の多きを願ふより起る。百子は子の多きを云ふ、池は銀盤也、或は百子の池を以て天河とし、百筒の盥とする者は非ならん。○謝肇淛云、牛女の事齊諧より始まり、武丁の妄言に成り、博物乘搓の浪說に成る云々。愚謂七夕牛女の祭はもと女兒の戯也。詩人採つて之を賦す、一時風流の玩とするは可也。是を以て實事と思へる者は男子の見に非ず、謝氏雜組に具さに之を論じたり。

季題解説

支那の古俗塑土或は蠟を以て嬰兒の形を作り、七夕に浮べて玩ぶ。これ婦人の兒を生むことを祈るなり。王建詩に「吳姬。自是ニ下第一名、內家叢裏獨分明、芙蓉殿上中元日、水拍二銀盤一弄二化生一」とあり。之を磨喝樂・水上浮とも云ふ。〔参照〕七夕

例句

化生　七夕や兄弟あそぶ浮人形　青々（妻木）

貸小袖（初）　衣裳を曬す　星のかし物　星の薰物

古書校註

【年浪草】〔星の薰〕公事根源に曰、机の上の火とりに終夜空たき物あり。○織女を薰姬といふもこの謂か。〔星のかし物〕四民月令に曰、七月七日麹を作り藍丸及蜀漆丸を合し、經書及び衣裳を曝す、俗に習ふこと然り。○世說に曰、郝隆七月七日隣人を視れば皆衣物を曝す。隆乃ち仰臥して腹を出す。人其の故を問ふ。曰、腹中の書を晒すのみ。○晉の阮咸、字は仲容。七月七日舊俗の法當に衣を曝すべし。諸阮庭中爛然として綈錦にあらざるはなし。咸時に總角たり、乃ち長竿を立て大布の犢鼻を標し、庭中に曝し

て日、未だ俗を免るゝことと能はず。○公事根源に日、供具を調へて庭上に文をおくと云々。

【俳諧歳時記】〔星のかし物〕七夕に書籍衣服を晒すより、それを星にかすとて星のかし物ともかし小袖ともいふ也

【栞草】〔曝二衣裳一〕星のかし物・かし小袖

季題解説 七夕に小袖の類を曝す、これ婦女裁縫の巧みならんことを祈る意なり。〔參照〕七夕タナバタ

例句

貸小袖

產着貸して星が妹脊のしるし見む　來山（續今宮草）
七夕よ物貸す事もなきむかし　越人（曠野）
七夕に貸さねばうとし絹合羽　杉風（芭蕉庵小文庫）
七夕や大かた出たる今年物　浪化（有磯海）
星に貸す袖には若い小紋かな　北枝（杉丸太）
うたゝ寐の裾に置きけり貸小袖　嵐雪（たはらの口）
麻姫の数なるらん貸小袖　曉臺（曉臺句集）
　佐渡より海岸の佐渡山を望む
小木の間の婆も貸すらめ唐衣　乙二（松窓乙二發句集）
年々や梅干臭き貸小袖　巣兆（曾波可理）

星の貸物

星に貸す心よ明る夜はかへれ　乙二（をのゝえ草稿）

七夕竹賣（たなばたたけうり）（初）

短冊竹賣（たんざくたけうり）　笹賣（さゝうり）　色紙短冊賣（しきしたんざくうり）る

古書校註

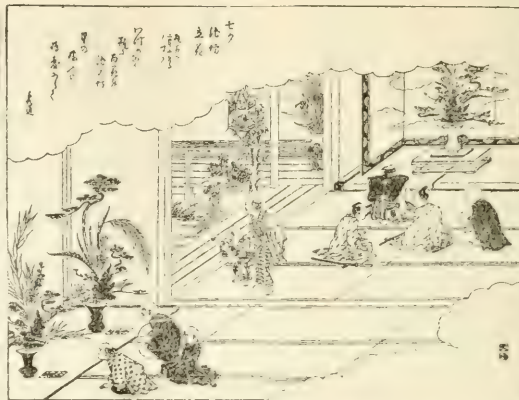
【俳諧歳時記】〔短册竹賣〕昔は七月六日市中穀（かぢ）の葉を賣る。明夜詩哥を書きて二星に供ず　或は短册に楸の葉を用ひて詩哥を書けり。今は民間の兒女、五色の紙を剪りて短册とし、之に古哥を書き篠の葉に結び、高く屋上に出す。是竹竿の五綵糸に換ふるもの歟。昨今市中短尺竹うり多し。又近來五色の短尺紙を賣りありくなり。

季題解説 都會地にては七夕祭の前日、二星を祭る笹竹を賣り歩く。昔は歌を書くための梶の葉なども賣りたりしが、今は多く兒女の遊び事のため五色の短册紙、色紙紙・願の絲に擬したる切紙などを紙屋の店先に鬻ぐを見る。〔參照〕七夕タナバタ

池（いけ）の坊立花（ばうりつくわ）（初）

古書校註

【案內者】七月七日の條。東西本願寺花、東西ともに對面所の簷に立てらる。造物は籠にさす。桔梗・女郎花・男郎花・仙翁花・蓮花・荷葉・百合花・小車・百日紅花・杉の葉・莎荷・射干草等を以てさま〴〵年々に紋盡し、又は鳥

獣をつくり入れ侍る。近年は江戸酸漿子とて七月に色赤きを求め出してよき綵色の物とす。立花・沙の物とりどりにて目を驚かす。又六角堂池の坊にも立花・沙の物數々也。「六角や花さす瓶もきかうでん」

【年浪草】洛の六角堂頂法寺雲林院、三條の南に在り。三十三所順禮の一ケ所なり。近世の僧專光、數品の花枝を一瓶中に山水の景象に摸する事を得たり。和俗之を立花といふ。今に至つて代々之を玩ぶ。僧俗この徒弟となる者多し。例年七月七日立花數瓶砂の物等有り。人爭つて之を見る。之を池の坊の立花といふ。是亦(二)星に供するの意也。

註　東西本願寺の籠花の條參照。

季題解説　昔陰暦七月七日、京都六角堂に於て行はる。二星に供ふる心にて、且其巧を祈る爲の立花會をいふ。

實作注意　現今は陽暦十一月十六日より三日間に改まる。故に昔は秋季の物なりしが、今は冬季になりたり。併し乍ら古人の句有るを以て此處に存置す。

（参照）　七夕（たなばた）　萬年青の前おき（おもとのまへおき）

例句

池の坊立花　秋風の後ろを覗く立花かな　嵐雪（杜撰集）

飛鳥井雅波殿の蹴鞠、池の坊の立花、都の田夫、田舎の風流、立て見るあり、居て見るあり

参考　聖徳太子、六角堂を建立し、前世七世の守り本尊なる如意輪観世音菩薩を安置せられしに當り、小野妹子に其の守護を命ぜられた。妹子、入道して名を專務と改め坊を堂側に建てた。これを今の家元の祖としてゐる。坊を池の坊といふは、太子浴水の池がその邊にあつたからだといふ。

飛鳥井（あすかゐ）の鞠（まり）（初）　梶（かぢ）の鞠（まり）　七夕（たなばた）の鞠（まり）

古書校註

【案内者】　七月七日の條、飛鳥井殿家は歌・鞠・手跡の三職をつとめらる。中にも鞠は他家みなこの印可をうくる。一夏九旬の間暮ごとに鞠ある事、大かた年並也。今晩明八日は名殘の暮なれば一しほの曲節有り。

【年浪草】紀事(一)曰、七夕飛鳥井家並難波家蹴鞠ノ會恒例也。上賀茂松下露拂、并技鞠上足等の儀あり。堂上及び地下ノ門弟、同く聚る。兩家は正二位忠敎卿の孝、忠敎卿は京極攝政師實公五男四條と號す。難波飛鳥井兩家の祖也。

註 (一)日次紀事なり。

季題解説 陰暦七月七日、京の飛鳥井家にて蹴鞠の會を催せし事といふ。鞠の露拂に、梶の枝に鞠をかけて、門人中上足の者、坪の内へ持ちて參ること定められ居り。これ亦二星に手向くる心なり。又當今は、七夕の鞠とて、京都華族會館内、蹴鞠保存會にて、七夕に催さるゝ蹴鞠の事あり。

參照 七夕

例句 (飛鳥井の鞠)
きちからの露にも濡れよ鞠袴　几董(井華集)

參考 蹴鞠の家なる飛鳥井・難波の兩家では、七月七日に鞠會を催す。都林泉名所圖會に「今は七夕の日恒例として飛鳥井・難波の兩家に於て蹴鞠あり。此日は梶の御鞠とて雲上家參入、又地下の門人も參る。書院の縁側には種々の色ある鞠を飾らせ、鞠庭には四本の松着々として許色の水干紫裾濃の袴を著し、雨々三々の高低に身をそはめ、沓の音斜陽の影に響て都の壯觀なり。」

花扇 (初) 花扇の使

季題解説 七夕に近衞家より、七種の草を束ね、檀紙に包み、水引をかけ、扇形に作りて禁裡に獻ぜしものをいふ。この進獻の使者にたつ女房を花扇の使といふ。參照 七夕

眞菰の馬 (初)

季題解説 陰暦七月七日、下總千葉邊にて、小兒眞菰を以て馬を作り、緒を付けて首にかけ、馬を腰に付けて遊ぶをいふ。參照 七夕

七夕踊 (初) 小町踊

古書校註

【日次紀事】今日(七月七日)洛下兒女帶を結んで襷となし、太鼓をうち踊躍を催す、

【栞草】還魂紙料(一)正保の頃の畫卷に七夕踊の圖を載せたるその詞書に云、さても七月七日は(中略)乞巧奠とて人みな今宵は七夕祭するもなまめかし。こゝに七ツ八ツばかりなる小姫たち美しく出立ち、太鼓を手毎に持ちつれ、面白くうたい踊りまはるも、みな是七夕を慰むる事、昔今に息らずとかや云々。七夕踊とて別にあるにあらず、少女の人情に盆をまちか

ねて七夕より踊る故の名なるべし。愚案問答に云(享保十七年著)、七月七夕を祭る(中略)面白く歌をうたひ、大内かた町かた小路々々女達のかたへ行き踊をかけたり。昔より小町といへば人毎に美人のやうに思ひ名づけて小町踊と名付たり云々(一)七夕踊を小町踊ともいひし也(二)。小街踊といへる説はわろし。

註 (一)柳亭種彦の著はせる隨筆。スキガヘシとよむ (二)小町踊は特に七夕の踊をいふ樣にあらず。盆の踊にもあるなり。踊の條參照。

季題解説 七夕の前日、七月六日の夜より七八つの小娘たち、美しくいでたち踊るをいふ。此踊は正保の頃より既にありし如く、踊子七人朱の日傘をさし、太鼓鉦を打ちて踊る。その服裝は緞子の鉢卷、綾綸子の襷、髪は頭の辻に立てかけ、縮珍の着物に緋綸子の下着、毛瑠の帶に紫縮緬の抱帶、紫足袋に尻切、金の太鼓に塗撥、鶴龜を描きし日傘といふ如き扮裝にて、後には花笠を冠ることゝなれり。此踊は七夕を慰むる爲なるが、盆を待ちかねての踊なるべく、又一には音曲、舞踊の技術上達を祈る心なりしといふ。踊る乙女の其樣の美しければ、小町踊とも云へるものなるべし。(古)

參照 七夕

例句
七夕踊　七夕の踊になるや市の跡　涼菟(笠日記)

參考 守貞稿圖あり。小町踊ともいふ。七夕の日、晝間踊つたもの。太鼓にて拍子とり婦女美服して踊る。守貞漫稿に享保の著にありとて次の唄を載す 「二條の馬場に鶉がふける。何とふけるぞ。立寄て聞けば、今年しやさまはんじよ、花の都はなほはんじよ」。

おんごく(初)

季題解説 七夕に行ふ幼女の遊びなり。大阪の町々にて、町内の六七歳より十二三歳迄の少女、行水ののち、よきを着て集りて、縦隊に並び、或は手に提灯を持ち或は多く團扇を持ちて、夕涼みの門邊を「おんごくの歌」をうたひつゝ輕げに涼しげに練り歩くなり。七夕盆より地藏盆頃迄行ひしと故老の話なり。おんごくに「遠國」の字を當てゝ考へもするやうなれど、これは「おん御供」なりと思ふ。是は七夕二星への供物をそなへる意にて七夕の季題たるに相違無かるべし。猶「遠國」にては發音の違ふ事を注意すべし。全く「おん御供」と發音するものなり。歌詞は、「おんごくナハハ　ナハハヤおんごく　ナハよい〳〵　何がやさしや　螢がやさし　くさのオかげエで　灯をともオす　ヤッサ」。**參照** 七夕

例句
おんごく　おんごくの唄きこえ來る涼みかな　青々(倦鳥)
水うちし門おんごくの通るなり　同(同)
おんごくや稚き口に紅つけて　同(同)

おんごく　おんごくや初秋風の暮滿み　青々（倭　鳥）
　　　　　おんごくの子に燈籠の廻りけり　同（同　）

草の市（初）　草市　盆市　手向の市　荷の葉賣　麻殻賣　眞菰賣　燈籠賣　盆太鼓賣

古書校註

【年浪草】紀事に曰、凡そ七月、街市に太鼓・團扇・大小の木刀・如伊良木・三尺手巾・奇特頭巾・作り髭・金銀箔の紋所等を賣る。是盆の踊躍の必用の具也。又盆前截子燈籠・臺燈籠・金燈籠・草挑灯・小行灯を賣る。是皆中元の夜點ずる所也。又索麪・秈米・乾瓢・茄子・角小豆・空閑梨子・木淋柿・鼠尾艸・荷葉・麻柯・大小の土器・供養膳・破子・かんなかけ臺等を賣る。これ民間聖靈會の處用也。

【俳諧歳時記】十三日の未明江戸の巷口便よき所に商人集ひ來り、件の諸品（一）を賣る、之を草市と云ふ諸人競ふて買ふ、巳の刻に至りて始めて市を止む。

註（一）年浪草所引の日次紀事にあげたる品の外、眞菰の莚・同繩・杉の葉・篠竹・茶碗・水鉢・香爐・線香・抹香・草花・榼等あげたり。

季題解説　盆前十二日の夜より十三日の朝まで、夜を徹して草の市たち、蓮の葉、麻から、燈籠など、皆聖靈を迎ふるに必用の物を賣る。猶又太鼓等をも賣りしは、盆踊に用ゐしものなれども、盆太鼓賣は昔ありし事にて、今絶て其沙汰を聞かず。〔參照〕宗教—盂蘭盆會

例句

草市　草賣は雨におされぬ匂ひ哉　華鶏（冬紅葉）
　　　　雨つゞきたる日
　　　先匂ふ眞菰莚や草の市　白雄（白雄句集）

賣れ殘るもの露けしや草の市　子規（全集）
草市や人まばらなる宵の雨　同（同）
草市の立つ夜となりて風多し　鳴雪（鳴雪句集）
草市の草の匂や水を打つ　露月（露月句集）
草市や混みあふ中の老一人　松居（雲母）
盆市に殘りてをかし青ふくべ　桃雪（田毎の日）

盆市

荷の葉賣　親も子も淸き心や蓮賣　其角（華摘）
花は匱に入れ、葉は栁に荷ひ分けてその旁に代らんといふ、誠切なる爭ひを

中元（初）

お中元　盆の廻禮　盆禮　盆見舞　中元贈答　盆の贈物

古書校註

【年浪草】正月十五日を以て上元とし、十月十五日を以て下元とし、七月十五日を以て中元となす。○荊楚歳時記に曰、七月十五日僧尼悉く盆を營みて諸寺院に供す。修行記に云、七月中元は大慶の月。道書に云、七月中元の日地官下降して人間の善惡を定む。諸大聖衆普く宮中に詣し、道士其の日夜に於て經を誦し、十方の大聖齊しく靈篇を詠じ、餓鬼・囚徒共に解脫を得。

季題解說

中元は陰曆七月十五日にして、正月十五日を上元、十月十五日を下元といふに對する稱なり。三元の事は原支那にて道家の說より起り太乙を祀りし事、我國にも傳はり、其事佛家の盂蘭盆會と混ずるに至りしものなり。而して此中元には、和親の家々に物の贈答を爲す恰も年暮に際し「お歳暮」と稱して種々の品を贈答するが如し。また盆の廻禮を爲し、又盆の贈物と稱して召使の者に物を與ふる習慣あり。これ平素の勞を犒ふものにして、かかる風習今なほ地方にも殘れる所あり。〔參照〕宗教　盂蘭盆會

參考

唐の六典に「正月十五日天官爲二上元一、七月十五日地官爲二中元一、十月十五日水官爲二下元一」とある。中元は道教では贖罪の日としたのを、本朝では佛敎の盂蘭盆と結び附いて諸精靈を祭り、また親族故舊に物を贈りて挨拶し祝意を表する風習となつた。

盆の掛乞（初）

盆拂　盆節季

季題解說

陰曆七月十四日の掛乞をいふ。又昔は諸支拂を盆と暮の二期になしたり。卽ち盆季節と云ふ。此風習今も猶殘れる地方稀にあり。〔參照〕宗教　盂蘭盆會

例句

盆の掛乞　轉〳〵と盆の掛乞來りけり　青々（寶船）

燈籠（初）

盆燈籠　盆提灯　高燈籠　掲燈籠　切子燈籠　切籠　折掛燈籠　花燈籠　舞燈籠　繪燈籠　禁裏御燈籠　吉原の燈籠　島原の燈籠　舟燈籠　墓灯籠　流燈

古書校註

【日次紀事】今日（七月一日）より街市燈籠を賣る。今日より十五日に至る、俗に盂蘭盆と稱し、諸寺院門前樹頭或は別に柱を建て以て高く灯籠を懸け、毎夜燈火を點ず。是を上灯籠と稱す。處により廿四日或は晦日に至りて止む。

【年浪草】七月十三日親王家攝關家並に諸家、灯籠を禁裡に獻ぜらる。十四日殿上の燈籠、諸人御庭に入りて之を窺ひ見る事を許さる。○紀事に曰、凡そ中元灯籠を用ふる事寛喜前後に起り、今に至って相承して故事となす。定家卿の明月記(一)に曰、近年民間長竿を建て、其の末梢に灯籠を設け、紙を貼し、灯を擧て遠近共に之を觀る、流星に似たり。五雜俎に曰、宋の初に中元下元皆燈を張ること上元の例の如し。太宗淳和年中始めて之を罷む。○或曰、世に高灯籠と稱するものは寺院に於て光明眞言四十九反唱へ加持して、灯籠にも同眞言を書くなり、この光を得る處は眞言の功德力を以て成佛するなり。眞言の四十九反は土卒(二)の四十九院に象る。この光り冥途の暗を照して亡靈の迷をはらすの意とかや。

【俳諧歲時記】本邦の俗、中元の夜家々燈を張りて、廿四日乃至晦日に至る、或は朔日より三十日に至るもあり、新葬の家には白き挑灯を出すもあり、三年の後、始て又灯籠を張る。〔新吉原灯籠〕一日より晦日迄。享保元年江戸吉原の遊女玉菊が追薦の爲一年七月中の町の揚屋各灯籠を出す。是より例となりて毎年この事あり。その灯籠綾羅を以て禽獸諸物を造る。綺麗壯觀いふべからず。この節男女群集す。これを燈籠見物といふ

【栞草】〔花灯籠〕造花をもて美しく餝りたる灯籠なるべし。「切子灯籠」

【和漢三才圖會】一種岐里古灯籠、聖靈祭等に之を用ふ。飾る所紙繒甚だ華美也。

註（一）この事明月記寛喜二年七月十四日の條に見ゆ。（二）兜率天なり。○なほ灯籠については用捨箱・民間時令・嬉遊笑覽等に詳說あり、參照すべし。

季題解說　中元より二十四日乃至晦日迄用ふる盆燈籠をいふ。燈籠は大文字などと同じく盂蘭盆の佛への供養の意なり。

實作注意　盆提灯は、もと燈籠の起る前に用ひしもの、箱提灯をいふ。高燈籠揚燈籠は高く揭ぐるもの。切子灯籠は、燈籠の枠を切子形に作りしもの。折掛燈籠略して折掛とも云ひ、竹を折りかけて作りしもの。花燈籠は、造り花を以て美しく餝りたるもの。舞燈籠は、京都花園村の嫁婦、盆踊の夜に、頭に戴きて踊るものとの說あ

り。（未考）

繪燈籠、彩色繪をかきたるもの。

舟燈籠は舟にて揚ぐる燈籠。墓燈籠は墓にあぐる燈籠。流燈は水死者の供養の爲に流すもの等、名目頗る多し。

禁裡御燈籠は、徳川幕府の頃、禁裏へ御家門方より獻ぜられし燈籠にして、金銀を鏤め、花鳥人形等美を盡せり。是を南殿に飾らる。十四日には禁門を赦して賤の男女を庭上に入れて是を拜せしめしといふ。

吉原の燈籠、享保十一年三月廿九日、吉原角町中萬字屋の遊女玉菊死して、翌享保十二年の盂蘭盆に其追善のため、中の町の揚屋各燈籠を出す。是より例となりて毎年此事あり。其燈籠綾羅を以て禽獸諸物を造り、綺麗壯觀言ふべからず。男女群集す。これを燈籠見物といふ。（古）

島原燈籠、京、島原にて點じたる盆燈籠、紙又は絹にて細工して、人形に作りたるもの。［參照］廻り燈籠（マハリトウロウ）　西瓜燈籠（スイクワトウロウ）　宗教—盂蘭盆會（ウラボンヱ）

例句

燈籠

人魂は消えて梢の灯籠かな　言水（言水句集）
美女美男灯籠に照らす迷ひ哉　其角（華摘）
馬老ぬ灯籠使の道しるべ　同（類柑子）
長崎にての吟　二句
漁火に通ひて峯の燈籠かな　支考（梟日記）
咲みたす山路の菊を燈籠かな　同（同）
盆迄は秋なき門の灯籠哉　嵐雪（續虛栗）
灯籠の亡き墓人に拜まれむ　一笑（前後園集）
寐た家の灯籠哀れに月夜哉　未陌（句兄弟）
我顏を見られてしさる燈籠哉　猿雖（浮世の北）
餓鬼の物蟲の來てとる灯籠哉　也有（蘿葉集）
夏蟲の秋へ取付く灯籠哉　同（同）
秋夜閑窓の下に指を屈して世に亡き友を算ふ
燈籠を三たび挑げぬ露ながら　蕪村（蕪村句集）
初戀や燈籠に寄する顏と顏　太祇（太祇句選後篇）
里の燈を力に寄れば灯籠哉　同（同）
燈籠みな消て梢の燈籠かな　白雄（白雄句集）
中庭の簾見えすく燈籠かな　同（同）
薄紙の灯籠に照す草葉哉　同（同）
門守の油つぎたせ軒燈籠　同（同）
燈籠や手を盡したる風の前　蓼太（蓼太句集）
宵闇の氣の衰ひや高灯籠　几董（井華集）
長旅の城下へ出れば灯籠哉　召波（春泥發句集）
燈籠や顏見し友は一人なし　成美（成美家集）

燈籠

灯籠が消ても來るや水貰ひ　乙二（松窓乙二發句集）
灯籠の油流るゝ榎かな　士朗（枇杷園句集）
餘所事と思へ〳〵ど灯籠哉　一茶（旅日記）
草原にそよ〳〵赤い灯籠哉　同（七番日記）
灯籠に有象無象の咄かな　同（同）
我宿は灯籠釣さぬあたり哉　同（同）
裏住の二軒もやひの灯籠哉　同（九番日記）
履物の用心がてら灯籠哉　同（同）
灯籠の灯で飯を食ふ裸かな　同（一茶句帖）
燈籠や釣ばえのする竹の奥　蒼虬（蒼虬翁發句集）
雙棲の白き頭や軒燈籠　露月（露月句集）

盆燈籠

盆灯籠二ツ三ツ見て止めにけり　一茶（享和句帖）

高燈籠

高燈籠晝は物憂き柱かな　千那（猿蓑）
七月既望
高燈籠暫くあつて嶺の月　北枝（卯辰集）
高燈籠松の木の間に見ゆる哉　五歳 長皿（同）
入海や泊離れて高燈籠　泥足（其便）
稲妻の行方遠し高燈籠　四睡（東西夜話）
高燈籠消なんとするあまたゝび　蕪村（蕪村句集）
高燈籠總檢校の舟の宿　同（蕪村遺稿）
見かけ行く麓の宿や高灯籠　太祇（太祇句選）
静さや町なき里の高灯籠　曉臺（曉臺句集）
つく〴〵と雨見上るや高灯籠　同（同）
露けしや高燈籠のひかへ綱　白雄（白雄句集）
夜々は松に秋あり高灯籠　蓼太（蓼太句集）
宵闇の氣の衰ひや高灯籠　几董（井華集）
松風に悲しき聲や高灯籠　同（同）
高燈籠寺前の池に映りけり　召波（春泥發句集）
行ほどに上京淋し高燈籠　同（同）
あかい程つく〴〵悲し高灯籠　移竹（乙御前）
高燈籠見まじとすれば目にかゝる　成美（成美家集）
夕風や木の無い門の高燈籠　一茶（旅日記）
土橋を越して夜深し高燈籠　蒼虬（蒼虬翁發句集）

揚燈籠

夕立の晴行く方や揚燈籠　太祇（太祇句選）
灯籠の中から淋し揚燈籠　蓼太（蓼太句集）

切子燈籠

とぼしては風に消さるゝ切籠かな　蟬鼠（有磯海）
白張の久しうともる切籠かな　尙白（小弓誹諧集）
秋もまた切籠の四手の涼み哉　浪化（三物拾遺）

折掛燈籠　しだり尾の切籠懸たり宵の秋　蕪村（同）

露分けて切籠結ぶやうなひ松　闌更（半化坊發句集）

切籠消えてあなめ／＼や草の原　同（同）

夕晴や切籠提げ行く京の町　同（同）

彩らぬ切籠の總に秋の風　几董（井華集）

つと立て油浴びたる切籠哉　召波（春泥發句集）

後家の君います切籠の暗き方　月溪（月溪句集）

淋しさを晝見る寺の切籠かな　同（同）

折かけの灯をとる虫の悲しさよ　探丸（曠野）

七月十二日猶子みか身まかりけるに、少年のいとはしみ深く、やがて魂祭る數とさへなれば

舞灯籠　面影も是や亡き身の舞灯籠　支考（流川集）

墓燈籠　染ぎぬに緑子肩衣や墓灯籠　許六（風俗文選犬註解）

市隅

流燈　西側に灯籠流れや三日の月　其角（華摘）

參考　佛前に燈明を獻ずることは、經にも見えて佛智を現すものとして解せられてゐる。毘奈耶雜事に、夏月、燈明に蟲の寄ることが多かつたので、佛が教へて燈籠を作らしめたとある。本朝にあつては、神佛に燈籠を供ふること平安朝以降殊に盛である。平重盛の如き、持佛堂に多く燈籠を掛けたので燈籠の大臣と稱せられたと傳へてゐる。

廻り燈籠（初）　走馬燈　影燈籠

季題解說　圓筒形の火袋を二重とし、中なるものは、傾斜せる數枚の薄きへぎ板又は紙にて、捩れたる菊形の如き天井をつけ、中に火皿を置きて之に點火すれば、中の空氣熱せられて上昇し、斜面なる天井を押し、その反動にて回轉す。此火袋に人物、鳥獸など飛躍の狀を切り抜きにせるを以て、其影繪、外の火袋に映りて物皆走るが如く見ゆるものなり。

實作注意　廻り燈籠は、今は夏にも軒端に掛けて只納涼の眺め物になし、甚だ古意を失ひたるに似たれども、古歲時記にこれを初秋の季とするは、中元、盂蘭盆の燈籠と同じものとしての事なり。　參照　燈籠　宗教—盂蘭盆會

例句

廻り燈籠　賴朝もせはしき廻り燈籠かな　里東（華摘）

病中　聖靈に薄紙一重影灯籠　許六（正風彥根軆）

見る人も廻り灯籠に廻りけり　其角（五元集）

浪よ船よなほ挑きたてよ影灯籠　巴人（夜半亭發句帖）

廻り燈籠
走馬燈

折節は急いで廻り灯籠かな　雁宕（俳諧古選）
走馬燈故人幾度過りぬる　逸夢（逸夢遺稿）
夜々の灯に古りゆく秋や走馬燈　同（同）
賣に出る草の夕日に走馬燈　青々（倦鳥）
走馬燈ひよ〳〵と薄く假なれや　同（同）

踊（初）

盆踊　辻踊　星踊　小夜踊　盆踊歌　音頭取　踊場　踊子　踊手　踊振　踊浴衣　踊帷子　踊笠　踊太鼓　豐年踊　懸踊（念佛踊）　題目踊　燈籠踊　花園踊　伊勢踊　木曾踊　岡崎踊　佃の踊　おけさ踊　つんつく踊　雀踊　踊見

古書校註

【山の井】　躍はいつと時しわかねど、木曾躍・小町をどりなどやうの類は秋の季にて侍るとぞ。ふるくも小町跳の歌のさまを言ひはやし、木曾躍には義仲の事など聞えし。

【日次紀事】　洛の内外今夜（七月十四日夜）より二十四日或は晦日に至るまで、戸々灯火を點じ、中華の上元の夜の如く少年男女踊躍をなす。〔念佛躍〕川合村一乘寺にて亦念佛躍あり。○修學寺村の村中の老嫗法華題目を唱へ踊躍をなす。これを題目躍といふ。「灯籠躍」洛北岩倉花園の雨村の少女、各々大燈籠を戴き、八幡の社前に聚り、男子太鼓をうち、笛を吹きて踊をすゝむ。之を灯籠躍といふ。「題目踊」今夜（七月十六日夜）北山松ケ崎の男女老少口に法花題目を唱へ踊躍をなす、之を題目躍といふ。今夜川合村亦男女念佛の號を唱へて踊躍をなす。○十四日より晦日に至り、夜に入り大人小兒街頭に踊躍を催し、或は又各々同列を催して、相知る所の家に至り、大に躍をなす。之を〔懸踊〕と云ふ。其懸けらるゝ所の家再び踊を催して之に酬ゆ。之を返しと稱す。

【俳諧五節句】　踊は國々唱歌かはる也。音頭のなき國あり。大方夜踊るなり。男女共に踊る。又晝は女童をどり、是は箔の太鼓・塗撥を手毎にたゝき染絹の鉢卷、帶を肩よりぶらさげ、結びたすきと名け、都の大路を日傘さしかけて、踊をかけに近づきの門にて踊れり。

【年浪草】　伊勢踊・木曾踊・小町踊等各々都鄙所々土地の習ひ得る所に隨つてその名あり。紀州の齊家踊・勢州の松坂踊・洛北幡枝の地藏踊、その外數多枚擧するに遑あらず。

【俳諧歳時記】　〔伊勢踊〕世にいふ松坂音頭也。

【栞草】　「木曾踊」地名によりて名くるか、なほ尋ぬべし。

註　踊については還魂紙料・民間時令・嬉遊笑覽等に詳說あり、ついて見るべし。

季題解說

盂蘭盆の頃、諸國の村里にて催す踊をいふ。

實作注意 懸踊と云ふは、陰暦七月十四日より晦日に至つて夜に入り、大人小兒各同列して相知る處の家に至り大に踊るをいふ。掛らるゝ所の家、再び踊を催してこれに酬ゆるを「返し」と稱す。念佛踊、洛北川合村、一乘寺村にて念佛を唱へて踊るもの。又、題目踊は、洛北修學院村の老媼が法華の題目を唱へて踊るもの。同じく松ケ崎にても此事ありといへり。燈籠踊＝花園踊は、京都岩倉村及び花園村の嫁婦、同所八幡宮の社前にて頭上に種々の飾ある燈籠を點じて踊をなす。男子は太鼓を打ち笛を吹く。其燈籠は春の頃より製作し、互に其模樣を祕し、又踊手の笄は前より其燈籠を張り與るといふ。伊勢踊。木曾踊。岡崎踊。佃の踊。おけさ踊。つんつく踊。是等は各地に於て特色ある盆踊なり。なほ他にも數多あるべし。

參照 宗教—盂蘭盆會（ウラボンヱ）

例句

踊

かけまくもかしこや爰の踊かな　宗因（梅翁宗因發句集）
玉櫛笥親のとり置く踊かな　言水（初心もと柏）
踊聲葎に鎰もあらばこそ　同（同）
　大悲の誓ひに寄す
兒出立老がれし身も踊かな　來山（續今宮草）
乘掛で踊の中を旅出かな　同（同）
　題二老萊子一
世には來て親に背くを馬鹿踊　鬼貫（鬼貫句選）
踊召して番の太郎に洒たうべけり　其角（東日記）
伊勢の鬼見失ひたる踊かな　同（五元集）
一長屋錠をおろして踊かな　同（五元集拾遺）
藪入に戻つて京の踊かな　許六（正風彦根躰）
送り火の痲木踏折る踊かな　同（風俗文選犬註解）
立臼に手杵連立つ踊かな　支考（桃盗人）
明ぬれば近付戻す踊かな　同（蓮二吟集）
踊髮直に抓むや大江山　同（同）
見知りたる背中どやする踊かな　北枝（續有磯海）
寺々の鐘や踊の花に風　同（草苅笛）
一まはり待人遲き踊かな　尙白（いつを昔）
思ふ事紺に染めたる踊かな　同（句兄弟）
食の湯の汗に出たる踊かな　李由（韻塞）
廣庭や踊のあとに藏立てむ　一笑（西の雲）
里踊火打袋をかざり哉　安之（句兄弟）
傾城の汗臭くなる踊かな　木導（韻塞）
寐た顏で居るや踊の明る朝　浪化（篇突）
朝夕に見る子見たがる踊かな　りん女（泊船集）

踊

位見て踊に這入る頭巾かな　雪芝（後れ馳）
我門をうつゝに歸る踊かな　万乎（淡路島）
松山の裾や踊の笠そなへ　牧童（射水川）
月代を見て門開く踊かな　十丈（柿表紙）
重箱を見て崩れたる踊かな　也有（蘿葉集）
長い夜を輪にして明す踊哉　同（同）
秋風に汗の終を踊かな　同（同）
人の子は下手にしたがる踊哉　同（同）
畑主の棒で見て居る踊かな　同（同）
分限者の子に下手のある踊哉　同（同）
見物のあく時揃ふ踊かな　同（同）
あの下手を嫁にと思ふ踊哉　同（同）
ひつそりと跡に秋ある踊哉　同（同）
ひたと犬の鳴く町過て踊かな　蕪村（蕪村句集）
浮草の誘ひ合せて踊かな　同（同）
四五人に月落かゝる踊かな　同（同）
錦木の門をめぐりて踊かな　同（蕪村遺稿）
看病の耳に更行く踊かな　同（同）
明けかゝる踊も秋の哀れ哉　同（同）
細腰の法師すゞろに踊かな　同（新五子稿）
月更て猫も杓子も踊かな　同（夏より）
彼の後家の後ろに踊る狐かな　太祇（太祇句選）
末摘のあちら向ひても踊かな　同（同）
宵闇や門に稚き踊聲　同（太祇句選後篇）
木戸しめて明る夜惜む踊哉　同（同）
思ひきつて出れば出すます踊哉　曉臺（曉臺句集）
まくり手が踊崩して踊りけり　同（同）
踊る夜を月静かなる海手哉　白雄（白雄句集）
或人の紛れて入りし踊かな　同（同）

京にて

飛々に旅人黒き踊かな　蓼太（蓼太句集）
秋風に人先づ靡く踊かた　同（同）
包み合し夫婦出くはす踊哉　几董（井華集）
ふり付の飯喰ひこぼす踊かな　同（同）
又平が晝も抜け出でて踊かな　同（同）
島原や踊に月の昔顔　同（同）
うき人の顔猶深き踊かな　召波（春泥發句集）
霜天に滿ち〳〵明る踊哉　同（同）

らかと出て家路に遠き踊かな　同（同）
母式部闇より闇へ踊かな　同（同）
乙の君或夜ひそかに踊かな　同（同）
横町は闇また闇の踊かな　移竹（乙御前）
むら雨のまだ干ぬ町に踊かな　田福（明烏）
踊見る人の後ろや秋の闇　定雅（續明烏）
一夜づゝ闇に成行く踊かな　李收（同）
踊り來て山もと近くなりにけり　成美（成美家集）

新潟にて
月の晝波の寄るとて皆踊る　乙二（をのゝえ草稿）
老ぬれば西瓜に泣る踊かな　巣兆（曾波可理）

今日神垣に鐺を納む、是は齋降伏の爲とかや
鐺やらんいざ／＼踊れ里童　一茶（旅日記）
赤紐や手を引れつゝ踊り笠　同（七番日記）
世がよいぞはした踊も月がさす　同（同）
御留主でもこんな踊や善光寺　同（一茶句帖）
身の程や踊つて見せる親あらば　同（九番日記）
踊聲母そつくりぞ／＼　同（一茶新集）
踊る夜や小店の中の辻地藏　青々（倦鳥）
去年今年踊の笛の秋を吹く　同（同）
ふけて露手の揃ふたる踊かな　同（同）
松の根をよけ／＼踊る山家哉　梅室（梅室家集）
秋もやゝ西に聞ゆる踊かな　同（同）
白露の中に手を打つ踊かな　蒼虬（蒼虬翁發句集）
月一つ野に捨てゝある踊かな　同（同）

杉風と二人、芭蕉の旅行を偲みて
なまぐさき漁村の月の踊かな　子規（子規句集）

盆踊

見られねば猶羨まし盆踊　桃隣（古太白堂句選）
石太郎此世にあらば盆踊　一茶（一茶句帖）

音頭取

聲聞けば古き男や音頭取　太祇（太祇句選）
人妻の音頭すゞろにさびにけり　青々（倦鳥）
音頭とるは女房と見しに娘かな　同（同）
音頭とるうしろ暗くに桶の水　同（同）

踊子

踊子は必ず秋のならしかな　宗因（梅翁宗因發句集）

妓を送る
踊子や雨町互にかけむかふ　同（同）

青山湯にて
踊子の跡白浪や迎ひ船　沾德（沾德句集）

踊子

踊子を馬でいづくへ星は北　其角（五元集）

踊子　親ならば見よ踊子の袖の鈴　北枝（射水川）
踊子よ翌は畠の草ぬかん　去來（續虚栗）
踊子やひとり／＼の親心　舍羅（砂川）
踊子や志賀の都も汗臭き　千那（鎌倉海道）
踊子や夕間暮して狂はしき　大魯（蘆陰句選）
踊子や乳母が心の何番手　花蕎女（其陀羅尼）
懸踊　小娘の生先しるし懸踊　其角（五元集）
念佛踊　嬉しいか念佛踊の柄杓ぶり　嵐雪（其袋）
題目踊　松が崎にて
手に袖にはね題目の踊かな　斗文（續明烏）

參考　踊はもと、宗教的感激を表出する爲の動作である。後、遊戲娯樂を主とするものと、宗教的意味を保存するものとに分化し、又舞と踊とを區別して考へるやうになつた。盆踊は古來の集團舞踏に佛教的意義の加はつたもので、室町時代に既に行はれたことは、狂言瓜盗人にも「盆になれば若い衆が踊をせらるゝ」とある。江戸中期の盆踊歌を集めたものに『諸國盆踊歌』といふ書があつて四百首程の歌を集めてゐる。その二三を録す。『目出度／＼の若松樣よ、枝も榮える葉もしげる』。『わしは小池の鯉鮒なれど鯰男はいやで候』。『いなしよ／＼と思うた中に太郎が生れて往なされぬ』。『山は焼けるが立たぬか雉子よ、これが立たりよか子をおいて』。

後の藪入（初）

秋の藪入

古書校註

【栞草】後の字斷らずとも秋季に運ねたらば（一）秋たるべし。發句も秋季のあしらひあらば後の字に及ばず。

註（一）これは連句にて前句が秋季たる場合をいへり。

季題解説　陰暦七月十六日。新年の藪入に對していふ。

實作注意　後の藪入、秋の藪入と斷らずとも、藪入に秋季のものを配するか又は秋の季感を含ましめて詠出するも可なり。〔參照〕春―藪入

例句

後の藪入　促織や藪入の子の宵まどひ　鷹仙（三物拾遺）
藪入や在郷の秋の送り膳　颯聲（芭蕉袖草紙）
藪入や皆見覺えの木槿垣　子規（子規句集）
藪入して秋の夕を眺めけり　青々（妻木）

衝突入（初）

山田のつと入

古書校註

【年浪草】雜談抄に曰、昔は諸國にて、つと入とて家々祕藏せる器物、道具

或は其家の嫁娵妻妾に至るまで、常々見たきと思ふ物を客殿居間に限らず、深く入りて狼籍に見る事也。近曾まで勢州の山田に侍りし故に世人山田の衝突入と云ふ。總じて家財從類を蓄ふるは貪欲の道にて侍る故、之を懺悔の爲に見せしむと云ふ。七月十六日也。今絶ゆ。

【篗纑輪】七月十六日。勢州山田にある事也と記せり。諸國年中行事といふ書(一)あり、この事を載せず。昔ありて今絶えたる事か。

註 (一)享保二年刊、操巵子著。

季題解説 陰暦七月十六日。山田のつと入といひ、昔伊勢山田地方にて、家々に祕藏する器具家財又は嫁娵妻妾等、常に見たしと思ふものあらば、此日何處にても恣に入り行きて見るも、其家にては拒むべからざる風習あり。總て家財の類を蓄ふるは貪慾の道なる故、これを懺悔の爲に見せしものといふ。

例句

衝突入

擂木(スリコギ)も見て去(イ)ね伊勢のつゝと入　言水（言水句集）

衝突入や知る人に逢ふ拍子ぬけ　蕪村（蕪村句集）

衝突入や納戸の暖簾ゆかしさよ　同（蕪村遺稿）

二三軒衝突入し行く旅の人　同（同　）

伊勢の衝突入といふ事を

衝突入て望一に誰とさゝれけり　几董（井華集）

衝突入やうき君に逢ふ胸ぶくれ　呂蛤（[illegible]風呂）

つと入らでうき人の門を過ぎにけり　子規（全集）

つと入や蘭の香にみつ一座敷　青々（妻木）

参考 滑稽雜談に「昔は諸國にて、つと入とて家に祕藏せる器物或は其の家の嫁娵妻妾まで、常に見たきと思ふものを、客殿居間に限らず深く入りて恣に見しなり。近頃まで勢州山田にありしゆゑ世人山田のつと入といひ傳ふ。昔は諸國にあることなり」と見ゆ。

八朔(はっさく)の祝(いはひ)（中）

田面(たのも)の節(せつ)　田實(たのむ)の節(せち)　憑節供(たのむのせっく)　繪行器(ゑほかゐ)　綵雀(つくりすゞめ)　造(つく)り雉(きじ)　造(つく)り鷺(さぎ)　造(つく)り松蟲(まつむし)　姫瓜雛(ひめうりびな)　姫瓜(ひめうり)の節句(せっく)　八朔(はっさく)の白小袖(しろこそで)　八朔(はっさく)の白帷子(しろかたびら)

古書校註

【山の井】けふはたのみとて昔は米(ヨネ)など配りかはしけるとかや。今の世も親方などの我が頼む人の許には禮義をなし、八朔錢とてさゝぐる事も侍る。

【案内者】八朔、是は大やけ事にてはなし。されば確かなる本説あらず。建長の頃より祝ひ來れると也。始は田のみとて土器に米を入れて人の許へ送りけるとかや。その後次第々々に世人盛んに今日をもて扱へる事なり。今童の行器(ほかゐ)を玩びの贈物とせるも、今年の米をいるゝ器物にや(一)。ある

説に公事也。田面の節會とてそのかみは早稲の穂米を諸國地頭の許より禁中に上りしと也。中稲・晩稲もこの頃は穂並花咲きて、科戸の風も靜ならん事を上下共に祝ひまつる節なれば、なほ武家には領田地方の満作、西收の祝をなし、主君の拜禮を重くする也ともいへり。

【日次紀事】 凡そ毎月朔、是吉日にして相賀する事中華と同じ。今日（八月一日）特に八朔と稱し、又恃怙節と稱し又憑節供・田實節・田面節といふ。中世農民稲の初穂を禁裡に獻ず、故に田實節といひ又田面節と稱す。武家その訓を借用して憑節供と稱す。蓋し君臣朋友相依賴するの義に取る也。君臣朋友互に贈答の儀あり。今日武家並地下良賤各々白帷子を着して互に慶を修す。公事根源鈔に曰く、八朔の風俗は、後嵯峨院潜龍の時、外戚源ノ通方卿の亭に在せしに近習の男女、密に此の儀をなして、閑素を慰め奉る、後即位し給ひても爾來嘉事とす。或はいふ、後深草院建長年中よりこの事有り。新穀を折敷或は土器に盛りて之を贈り、稱して田の實と云ふ。園太暦に云、光明院康永三年八月朔日今日俗風に倣ひ雜品物流布、闔自以下獻物あり。又一條禪閤兼良公、明應二年の記に云、今日物品を各自の主人に捧ぐること古來未だ之を聞かず。三十年來此事あるを聞く云々禪閤の記によれば康永年中始めて行はれ、爾後中絶して寛正年中より又再興ありしものか。○京の俗今日家々の乳母、其の保養する所の女兒に行器一双を贈る。行器の中に柿井に藤の花を盛る。藤の花は白糸餅に赤小豆を點したる者也。此の粉餅の形、屎る白糸に似たり。故に白糸と稱す。又深更と名づく。（中略）今日童の戲に松笠を以て雛子を造り、或は烏賊の甲を以て鷺鷥を造り、或は糸緊を以て金灯籠を括り、草實にて瓢形を作り、又桃の仁もて松虫を製す。是等の類自ら玩び、或は互に相贈る。是を頼合といふ。今日民間互に葉生姜を贈りて賀儀となす。

【國朝佳節錄】 八朔風俗、今京都荒涼す、難波の風俗、時果・諸餅を器に實て、薏苡の莖葉を綵雀につけ、以て之を覆ひ相投ず、蓋し古風也。

【年浪草】 〔天中節〕 八月朔日を天中の節といふ。拾芥抄に曰、八月朔日の日の出より以前に天中の節、赤口・白舌・隨節滅と書て門に押す云々

【俳諧歳時記】 辨内侍日記寶治元年の下に云、八月朔日中宮の御方より參りたりし御たき物よの常ならずうつくしう侍りしかば「けふは又そらだき物の名をかへてたのめば深き匂とぞなる」。爲章云、この内侍の歌そらだき物とたのめば、深きとにらみ合せたり。さればたのむの節といふことこの歌に見えたり。梅松論に足利尊氏卿の心ひろく物をしみの氣なきをいふ所に八月一日などに諸人の遺物數しらずありしかど、皆人に下し給ひし云々〔年山紀聞〕。〔天中節〕 陰陽祕法に云、昔大國の后天中樓に於て事あり、其人素懷を遂ざるにより、忽チ火神となりて天中樓を燒ク、時に后咒して云、八月乃至隨節滅云々。傳へ云凶惡日也、陰陽家天中の札を以て門戸に貼す、道書に、正月一日を天中の節とすといへり。

註（一）こゝまで「難波鑑」にも同文の說見ゆ。

季題解說 陰曆八月一日、この日農家にて、その年の穀を收め、田實（タノム）の節とて、これを祝ふ。支那にても、古へこの日臘とて、米穀の成熟を祀る祭事を行ひし由なれば、我國のも、之に倣へるなるべし。又德川時代には、幕府の節日の一にて、家康天正十八年の此日に、初めて江戸城に移りしより、關東入國の日と稱し、大小名及び直參の諸臣は、白帷子を着して登城し、祝詞を將軍に奉れり。

實作注意 中世農民此日稻の初穗を禁裏に獻ずる故に田實節といひ、田面の節ともいふ。それより其訓を借用して憑（タノム）の節供、又恃怙（タノム）の節などいふ。繪行器、綵雀（此日京俗、家々の乳母、その保養する所の女子に行器（ホカキ）一雙を贈る。行器は食物を之に盛りて運ぶに用ふる器にて、圓筒形にして蓋（カヾ）あり。外に三脚を有し、脚の形外へ反れたるものなり。その行器の中に生柿并に藤の花を盛る。藤の花は白絲餅に赤小豆を黏したるなり。これを繪行器といふ。又薏苡子を枝を連ねて折り、行器と共に之を贈る。又此日童の戲に松笠を以て雉子を作り、或は烏賊の甲を以て鷺を作り、或は桃仁を刻みて松蟲を製す。綵雀も此類なり。これ等を兒女互に相贈り又自づから之を玩ぶ。姬瓜雛、又此の日京畿地方にては姬瓜に目鼻を畫きて雛の形に作りて玩ぶの俗あり。故に姬瓜の節句ともいふ。此の日貴賤各白帷子を着して互に慶を修せりといふ。**參照** 楸の葉を載く（ヒサギノハヲイタヾク）

例句

八朔の祝

八朔や二日の日は又くれはどり　宗因（梅翁宗因發句集）
八朔に一作祝儀ばかりなり　同（同）
八朔に酢のきゝ過る膾かな　許六（韻塞）
八朔の節句になるや田面（タノモ）汐　同（正風彥根躰）
八朔や淺黃小紋の新らしき　野坡（たね茄子）
八朔や在所は鯖の刻み物　同（野坡吟艸）

甫之亭

八朔や桂の聟の羽織禮　同（同）
八朔や園の初穗の唐辛　同（同）
八朔や脾の臟つよき柿喰ひ　乙州（卯辰集）
八朔に早やゝ寒き草の露　野童（泊船集）

八朔

朝露に酢の實の匂ふ座敷かな　史邦（猿舞師）
八朔や秋をふるはす風の音　千川（東華集）
八朔や禮も麁相に常の帶　りん女（百曲）
八朔や野分の後の紙袋　尙白（忘梅）
八朔や扨翌よりは二日月　蕪村（蕪村句集）
八朔や旅は寐勝に物忘れ　曉臺（曉臺句集）

八朔の祝　八朔の嘸稲雀竹にさへ　白雄　（白雄句集）
食ふて居す世を八朔の日和哉　同　（同　）
八朔や旭の色をたゝへ潮　同　（同　）
八朔や帷子寒し酒酌まむ　樗良　（樗良發句集）
八朔や四座の登城の袖かへす　召波　（春泥發句集）
八朔や狀のしめりの青俵　素丸　（素丸發句集）
八朔や鰯の顔のめづらしき　巢兆　（曾波可理）
八朔や犬の椀にも小豆飯　一茶　（一茶句帖）
八朔や盆に乘せたる福俵　同　（同　）
八朔や昨日植ゑたる堺の松　梅室　（梅室家集）
八朔に正月するや寺男　同　（同　）
八朔や出揃ひし穗に雲もなし　樹園地　（蟹　葵）
田面の節　神佛なほも賴母の節句かな　飄竹　（ぬれ若菜）
田面の日壽ぶく馬醫の家婚哉　曉臺　（曉臺句集）
越中泊にて
又も又秋立つやうな田の面の日　乙二　（松窓乙二發句集）
風絶えて海の面も田面の日　梅室　（梅室家集）
田實の節　栗稗の中にたのむの節句かな　吏明　（けふの昔）
鷹飼も出でしたのむの田面哉　白雄　（白雄句集）
繪行器　上京や繪行器を賣る足埃り　千山　（菊の香）
繪行器や是も日出度きかけ流し　嘯山　（葎亭句集）
繪行器の往來の富や今年藁　素丸　（素丸發句集）
繪行器の使に逢ひぬ古みやこ　嵐山　（石の月）
繪行器や土佐が繪の具のすりはがし　之兮　（雁風呂）
繪行器や老が誠に山べ來し　青々　（妻木）

參考　八月一日の節で、恃怙の節・田實の節・田面の節・憑の節句・天中節・姫瓜節句・葛子節供等いふ。看聞御記に「八朔風俗、千秋嘉兆幸甚幸甚」とあり、室町時代には、朝廷にては公卿より杉原檀紙等種々の物を獻じ、幕府より太刀目錄を獻ず。皆返しを賜ふ。江戸時代には幕府より馬太刀を獻ず。もと武家より起つて朝廷に及んだものといふ。八朔總奉行又は八朔奉行など言ひて、八朔の儀式を司る。又八朔人形など言ひて備後國沼隈郡松永邊にて毎年八朔に米の糝粉で人形を造る風習が行はれてゐる。

後（のち）の二日灸（ふつかきう）（中）　秋（あき）の二日灸（ふつかやいと）

季題解説　陰曆八月二日に點する灸をいふ。春の二日灸に對してかくいふなり。

實作注意　後の二日灸と斷らずとも、二日灸に秋季のものを配して詠出す

るもよし。参照 春—二日灸（フツカキウ）

例句 後の二日灸

秋に泣くふるき病や二日灸　青々（妻木）

後の出代（のちのでがはり）（中）　秋の出代（あきのでがはり）

季題解説 陰暦八月二日、僕婢各交代するをいふ。春の出代に對してかくいふなり。

實作注意 後の出代、秋の出代とことわらずとも、出代に秋季のものを配するか、又は秋の季感を含ましめて詠出するも可なり。参照 春—出代（デガハリ）

例句 後の出代

出代に引はえわたる小鳥かな　吾仲（初便）
出代に葯籠に寒し後の月　芦舟（雪の光）
出代や此季も蘭を知らぬ者　金毛（俳諧家譜）
出代や菜畑の中の薄日和　許六（風俗文選大註解）
出代や浪華はづれの藍の花　小洒（杉の實）
出代や前田の豆の引殘し　青々（妻木）

月見（つきみ）（中）

觀月（くわんげつ）　月の宴（つきのえん）　月の友（つきのとも）　月の客（つきのきやく）　月の主（つきのぬし）　月見酒（つきみざけ）　月見團子（つきみだんご）　月見船（つきみぶね）　月見茶屋（つきみぢゃや）　月見莫蓙（つきみござ）　片月見（かたつきみ）

季題解説 月を觀賞すること、主として名月にいふ。即ち舊暦八月十五夜は所謂名月にして、此の夜、月に、團子・枝豆・柿・芋・酒等の外、秋草を瓶に挿して供へ、月見と稱して月を觀賞すること古より行はる。なほ片月見は十五夜に月を見て十三夜に月を見ざるをいひ、月の宴は觀月の宴、月の友・月の客・月見の主は共に月を見る人をいふ。月見船は月見の船、月見茶屋は月

見客の爲しつらへたる茶屋なり。【參照】薄寶・天文—名月・後の月

例句

月見

口に手をあてゝ心の月見かな　言水（言水句集）

難波津の汐境に、川舟を漕出して

篗の鼻身をちゝによる月見かな　來山（續今宮草）

鐵船に堪忍多き月見かな　沾德（沾德句集）

愚痴〳〵と獨に更る月見かな　鬼貫（鬼貫句選）

此秋は膝に子のない月見哉　同（同　）

野も山も甚かとぞ首のだるくこそ　同（同　）

月見心人の脏も木に今宵　同（七　車）

影法師に心を分る月見かな　同（同　）

去年の翠の心に曇る月見かな　同（同　）

畠中に瓜を待つ瓜あり、試に筆をたてゝ

冬瓜に思ふ事書く月見哉　素堂（素堂家集）

今日の今宵寐る時もなき月見哉　芭蕉（續連珠）

雲折々人を休むる月見哉　同（春の日）

賤の子や稻すりかけて月を見る　同（鹿島詣）

鹿島に詣ける頃、根本寺に宿す

寺に寐て誠顏なる月見かな　同（續虛栗）

草庵の月見

名月や池をめぐりて夜もすがら　同　同

あさむつや月見の旅の明はなれ　同（其袋）

月見せよ玉江の芦を刈らぬ先　同（喪簾の種）

座頭かと人に見られて月見哉　同（木がらし）

人音や月見とあかす伏見草　其角（皮籠摺）

平家也太平記には月も見ず　同（三河小町）

律師沙彌相剃をして月見哉　同（木曾の谷）

娘には丸き柱を月見かな　同（雛賀の松）

蟹を畫て座敷這する月見哉　同（五元集）

平家落足の岸寓に

宿なしのとられて行し月見哉　同（同　）

てつぺんに丸盆置て月見哉　同（五元集拾遺）

僧と咄し明して

小便に起ては月を見ざりけり　同（同　）

鼻とは外より知らぬ月見哉　嵐雪（一の木戶）

高笑ひ月見る人に見下げたり　同（續其袋）

盲より啞のかはゆき月見哉　去來（續虛栗）

仲秋の望、猶子を送葬して

かかる夜の月も見にけり野邊送り　同（猿蓑）

月見せん伏見の城の捨郭　同　（同）

世波にたゞよひて、日暮の頃、岡崎より京に歸るとて

鴨川や月見の客に行當り　同　（芭蕉庵小文庫）

乘ながら秣はませて月見哉　同　（初蟬）

黑い身に照こむ旅の月見哉　同　（そこの花）

淀川のほとりに日を暮らして

舟引の道かたよりて月見哉　丈草　（續猿蓑）

琵琶平家世間に捨る月見かな　許六　（柿表紙）

黃檗は唐の眞似して月見かな　同　（藥人形）

升の市鹽屋長次が月見かな　同　（正風彥根躰）

蚊屋しまふ夜は武藏野の月見哉　同　（同）

此秋は月見の友も替りけり　同　（三日月日記）

渺々と琵琶をかかへて月見哉　同　（風俗文選犬註解）

五器足らで夜食の內の月見哉　支考　（笈日記）

ここ見まで庵地たづぬる月見哉　同　（續猿蓑）

近づきの顏皆うつる月見哉　同　（務津之波那）

娑婆を惜む心や獨り見る月夜　同　（桑藻橋）

更行まゝ醉泣するもおかし

船頭の律義かはゆき月見哉　北枝　（初蟬）

家もたぬ身は家々の月見哉　同　（そこの花）

川ぞひの畠をありく月見哉　杉風　（泊船集）

月見るや庭四五間の空の主　同　（西國曲）

見る影も冷行く月のしまり哉　同　（杉風句集）

白う黑う月見る顏も晴れ曇り　同　（同）

頭に月見るや猶耳遠し　同　（同）

我人とあらそひなくて月見哉　野坡　（續虛栗）

茶處の賣すそ匂ふ月見かな　同　（野坡吟艸）

雲行てちいさき月を詠めかな　同　（同）

見舞人は料理にあつき月見哉　浪化　（白扇集）

麻殼を踏み折る背戶の月見哉　同　（風俗文選犬註解）

西條にとまりて

旅なれば稻を枕に月見哉　田上尼　（初蟬）

見るものと覺えて人の月見哉　野水　（曠野）

向のよき宿も月見る契かな　曾良　（猿蓑）

大名の挑燈多き月見かな　也有　（羅葉集）

雨乞をした顏もせず月見かな　同　（同）

戶を閉てる音を月見の夜明哉　同　（同）

何着ても美しうなる月見哉　千代尼　（千代尼句集）

月見にも陰ほしがるや女子達　同　（同）

月見

人中を潜る欲なき月見哉　千代尼（千代尼句集）

良夜訪ふ方もなくに訪來る人もなければ

中〳〵にひとりあれば月を友　蕪村（蕪村句集）

雁宕が醉るや巍峩として玉山の將に崩れんとするが如し、其俤今猶眼中に在て

月見れば涙に碎く千々の玉　同（同）

身の闇の頭巾も通る月見かな　同（同）

月の宴秋津が聲の高きかな　同（蕪村遺稿）

盃に月を碎くや夜もすがら　同（蕪村句集拾遺）

月見船煙管を落す淺瀨哉　同（新五子稿）

梨の木に寄て侘しき月見哉　同（同）

松島の月見ぬ人やうつせ貝　同（同）

雨に來て泊とりたる月見かな　太祇（太祇句選）

來ると否端居や月のねだり者　同（同）

狂はしやここに月見て亦かしこ　同（同）

降られても行くや月見の泊客　同（太祇句選後篇）

呵る程舳さきへ出たき月見哉　同（同）

月見して餘り悲しき山の上　曉臺（曉臺句集）

折箸に萩垣ほどく月見哉　同（同）

野を竪に野を横さまの月見哉　白雄（白雄句集）

深川舟遊

澪竹に思ひぞとどく江の月見　同（同）

十人の月見の友や松ひとり　蓼太（蓼太句集）

鹿島

苫船を神代の宿に月見かな　同（同）

良夜の雨

月戀ひて雲も百度見る夜哉　闌更（半化坊發句集）

狩くれて馬の上なる月見哉　樗良（樗良發句集）

年々にこりて月見ぬ今年かな　同（同）

見るものにしてや月見の小百姓　召波（春泥發句集）

湖を月見の旅や友二人　同（同）

家二つあれば月見るもやうかな　成美（成美家集）

世にあくと人には言ひて月見かな　同（同）

命なり月見る我を喰ふ蚊まで　乙二（松窓乙二發句集）

鬼子公に扈從して

二人見る月こそ出れ千賀の浦　同（をのゝえ草稿）

月見とて行けば錢とる小橋哉　士朗（枇杷園句集）

松山を枕にあてゝ月見かな　同（同）

病中

抱起せおのれ月見む萩芒　巣兆（曾波可理）

人聲や遲れ月見も所がら　一茶（七番日記）
土でつくねた西行も月見哉　同（同）
古鄕の留主居も一人月見哉　同（おらが春）
借上に月の缺けるを日利かな　同（同）
蕎麥國のたんを切りつゝ月見哉　同（同）

大圓寺

松が枝の上に座取りて月見哉　同（一茶句帖）

旅にありて

雁鳴やあはれ今年も片月見　同（一茶發句集）
今宵しも雨の月見ん水鷄村　乙二（をのゝえ草稿）
雨の月二人見る夜を月の雨　同（同）
炭なんど運ぶ樣子も月見哉　蒼虬（蒼虬翁發句集）
狹筵のはしに鎖置く月見哉　同（同）
鵜一つ相手に池の月見かな　同（同）
出しほ見て心落つく月見哉　同（同）
落殘る土橋の上の月見哉　同（同）
月見ればうつし世でなき世があるよ　白雲鄕（倦鳥）
霧ぬれて小寒くなりし月見かな　一邦（同）
何事もなくて月見る父母の前　積翠（同）
手に薄月見の人と思はるゝ　海門（同）
廣澤を大澤をあるく月見かな　御溝（同）
菅原の風露しげきに月見かな　巨口（同）
滿洲も國たりけふの月見かな　青々（同）

西行法師贊

月見してものつぶやける口元よ　同（同）
月見して人の前途を問ひあへる　同（同）

月の友

越人を供して木曾の月見し頃

俤や姨獨り泣く月の友　芭蕉（いつを昔）

深川の末五本松といふ所に船をさして

川上と此川下や月の友　同（續猿蓑）
岩鼻やこゝにも一人月の客　去來（笈日記）
野山にもつかで晝から月の客　丈草（有磯海）
草むすぶ戸を乘出すや月の客　同（初便）
うかれ來て蚊屋外しけり月の友　太祇（太祇句選）
大かたは逢ふまじと見し月を友　曉臺（曉臺句集）
宵々に來るものなれば月を友　士朗（枇杷園句集）
松葉掻く男も月の主かな　蒼虬（蒼虬翁發句集）
月の友三人を追ふ一人かな　虛子（ホトヽギス）

舟中に布袋を畫きて、袋に添たる杖の樣に似たる扇

月見舟

の讃に

朝妻船に鼓を入れて月を見侍る女の水干に扇かざしたる畫に

月見るも杖につなげる小舟哉　其角（末若葉）

思ふ事なげふしは誰れ月見船　同（蕉尾琴）

己卯のとし良夜野分して大雨洪水夜に入て人家を破る

月出て座頭傾く小舟かな　同（五元集）

月見舟

雷に梶は靡きぞ月見舟　同（其袋）

月見女舟や木の間を棹ぬらん　杉風（虚栗）

舟からは近しと向ふ月見哉　千代尼（千代尼句集）

船頭と月見あかしや肴きれ　几董（井華集）

大雨や月見の舟も見えて降る　一茶（旅日記）

船頭の氣隨なだめて月見かな　梅室（梅室家集）

十六夜月見

十六夜

米くるゝ友を今宵の月の客　芭蕉（笈日記）

井戸田にて

十六夜も過て月見る在所かな　士朗（枇杷園句集）

薄賣（すゝきうり）（中）

季題解説　八月十五夜、名月を賞するに萩・すゝき等、秋草を挿して祭る。都會地にてはその薄・萩の花などを朝賣りに來る者あり。舊暦八月十五日朝の事なれば、季と定めて可なるべし。萩の花、また桔梗、女郎花などをも添へて賣れども、薄はわけて丈高く淸々しく、又月を祭るに薄は缺くべからざる物なれば、薄賣と云ひて季の感動かすべからざるもの有るなり。

作句注意　雛の節句の「桃柳賣」菖蒲の節句の「菖蒲賣」、卯月八日の一てんと花賣一の類ひにて其季節一日の光景なれば常の日に來る花賣とは自ら趣を異にするものあり。【參照】月見（つきみ）　植物―薄（すゝき）

例句

薄賣

名月や花の都へ芒賣　太無（太無句集）

風情あり月かけて戻る芒賣　成美（一陽集）

是をこそ桂男ならめ芒賣　乙巣（心一ツ）

薄賣と成りて出る日の小百姓　青々（倦鳥）

重陽（ちようやう）（晩）

重九（ちようきう）　重陽の宴（ちようやうのえん）　菊の節句（きくのせつく）　菊の日（きくのひ）　菊水（きくすゐ）　菊瓶（きくがめ）　菊花宴（きくくわのえん）　菊の宴（きくのえん）　栗の節句（くりのせつく）

古書校註

【山の井】けふは節日なれば大内には菊花の宴行はれて、みこたち上達部ふみ作り詩歌を連ね給ひ、又南殿の御帳の左右に、茱萸袋をかけ、菊瓶を

置かるゝ儀式など侍るとなん。町方の人まねにも、其方ばかりなぞらへてすゞとくりの口などに、菊をつけて用ひ侍る。菊にめでたき功能あるは、慈童が山路の菊の露に齡を延べし故事、費長房が教より起るとなれば長生に飲む菊の酒下口もちとせよなど祝ふ心を云ひ侍る。又星にも見なし、淵とも云ひ、猶猩々のさきみだれ、ぬれ鷺のむれ立てるけしきをめで、にほひをもてはやす心ばへなど、けふは菊を賞し侍る。〇今日又道祖神とて京童小さき御輿をかき連れて、禁中仙洞其外宮達公家衆にまかりて米鳥目など賜はる事なんあめる。

【俳諧歳時記】 九月九日は節日にて侍れば菊花の宴行はる。之を重陽の宴と申す。昔は天子南殿に出御なりて節會行はる。上達部御子達より始めて其道の者皆探韻を給はり、文作り文臺にのせて講ぜらる。十月の旬のみに非ず今日も氷魚給ふ例あり。又群臣に菊花を賜はる。大かたは五日の節會に同じ。御帳の左右に茱萸の袋をかく。御前に菊瓶を置く。又茱萸の房を折りて頭に挿めば惡氣を避くるといふ本文あり。[公事根源]今按ずるに類聚國史七十五卷に桓武天皇の御製を載せらる。云、延曆十六年十月曲宴。酒酣皇帝歌曰、「己乃己呂乃志具禮乃阿米爾菊乃波奈知利曾之奴倍岐阿多良蘇乃香乎。之をもて思ふに此の時既に十月殘菊の宴行はれしと見えたり。はた菊の歌古きものに見えたるは是初め也。萬葉に菊の歌一首もなし。稱德・光仁の御代などに唐山より菊の渡りたるにや、菊ばかり和訓を言はで音のまゝに唱へ來りしは其の頃迄は和訓なかりしにや。和名抄加波良與毛木、また可波良於波岐と出せり。「菊花の宴」俗說に周の穆王靈鷲山にて法花の祕文を釋尊より受けて慈童に傳へ慈童八百餘歲を保ち貌少年の如し。魏の文帝の時名を彭祖と更へて文帝に此の術を授け奉る。文帝此の術を受けて壽七十歲、今の重陽の宴是也と。此の說妄誕の甚しきと云ふべし。列仙傳に、彭祖は帝顓頊の玄孫、姓は錢、名は鏗、周に至り八百歲にして衰老せず、穆王召して太夫とせんとす、病と稱して與らず。後遂に流砂の西に往くと、彭祖の傳かくの如し。慈童が事を以て附會するものは、元野史小說の綺語より出づ。菊花宴は秦漢以來既にあり、西京雜記卷の三に云、戚夫人の侍兒賈佩蘭後出でて扶風の人段儒が妻となり、宮內に在りし時の事を說く云云。九月九日茱萸を佩び蓬餌を食ひ、菊花酒を飲む、人をして長壽ならしむ。菊花舒く時莖葉を併せ採り、黍米に雜へ、之を釀し、來年九月九日に至りて始めて熟す。就いて之を飲む。之を菊花酒と云ふ。魏より以前既に如レ此。〔菊の節供・栗の節句〕本邦の俗、九月九日親戚朋友互に相贈るに栗を以てし、菊花酒を飲む故に、菊の節句とも又栗の節句とも云ひならはせり。

季題解說 陰曆九月九日を重陽と云ふ。九を陽數として日月竝び應ず、故に

重陽と云ひ、重九と云ひ、其名をよみして長久に宜しからんと希ふ心よりして、節日とはなりしものなり。昔重陽の宴には、天子南殿に出御なりて節會行はれ、上達部、御子達より始て、其道の者みな探韻を給はり、詩を賦す。又群臣に菊の酒を賜はり、此日も氷魚をたまふ例あり。御帳の左右に茱萸の嚢をかけ、御前に菊瓶を置く。茱萸の嚢をかけらるゝ事など、總て支那の故事に出づるものなり。

實作注意　重陽の景物は菊を第一とす。菊花をはなれて重陽の感なきが如くに、古人は此の日の菊を賞して「今日の菊」とは詠めるものなり。又其頃栗あるを以て、重陽に栗飯を焚きて祝ひ、栗の節句とも云ふなり。**參照**　高きに登る　茱萸の酒　紅葉土器　菊の酒　温め酒　菊の着綿　九日小袖　菊襲　後の雛　小重陽　栗の子餅　菊合

例句

重陽
今日翌を千代の一瀬や菊の淵　來山（續今宮草）
游ぎつく今日ぞ菊の瀬花の淵　同（同）
九月九日
照菊や二名月の中とつて　同（同）
重陽
濡れてこそ袖の祝ひと菊の露　同（同）
菊の香の一つを殘す匂ひ哉　鬼貫（鬼貫句選）
久方や朝の夜るから空の菊　同（同）
三島にて旅行の重陽を
門酒や馬屋の脇の菊を析　其角（句兄弟）
九月九日扇を拾ひける人に
菊や名も星に輝く禮扇　同（五元集拾遺）
菊もまたつゆ〳〵苔む九日かな　嵐雪（其袋）
濱菊の眞向に祝ふ朝日かな　浪化（白扇集）
寒菊は咲く顏もせぬ九日かな　同（風雅戊寅集）
紺菊も色に呼出す九日かな　桃隣（炭俵）
重陽
葉生姜の匂ひや添へて菊の露　史邦（猿蓑師）
菊の香に曇り〳〵も九日かな　除風（青むしろ）
九日の菊の雫や持こたへ　芦角（荒小田）
九日洛外にて
賀の菊の露ふり落す障子かな　西吟（同）
牧帝名代に重陽を勤めて
菊の日や旅の寐覺の鶴の聲　舍羅（同）
重陽
肩衣の老を扶けよ菊の露　北枝（北枝發句集）
蟲のつく栗はさもあれ菊の花　野坡（野坡吟艸）

重陽

此時に秋の栞りや菊の花　梢風（木葉集）
馬の尾も暮行く九月九日かな　乙二（松窓乙二發句集）

重陽も柏崎に留められて
初君に今日の菊にも逢はざりし　同（たのゝえ草稿）

病中重陽
菊添へよおろかながらも藥鍋　集兆（曾波可理）

重九
濱菊や御菜の上に横倒し　沾德（沾德句集）
今日の菊に袴着て寐る狐かな　來山（今宮草）
今日の菊小僧で知るや更紗好　其角（焦尾琴）
指に入る風はや寒し今日の菊　嵐雪（菊の塵）
精進の節句は寒し菊の花　許六（正風彥根躰）
首途や暦を見れば今日の菊　支考（三物拾遺）
千代は言はず露の間嬉し今日の菊　同（文星觀）
人數に匂ひを分けよ今日の菊　浪化（白扇集）

去年の師走九日娘身まかりける後は
それ〳〵よ鎌で刈ても今日の菊　桃隣（記念題）
領分が一坪あらば今日の菊　同（きれ〳〵）

住吉奉納
成仲の松の祝ひを今日の菊　園女（菊の塵）
今日の菊朗詠集を御家流　同（玉藻集）
借りかけし庵の噂や今日の菊　丈草（芭蕉庵小文庫）
よい節句で御座るどなたも菊の花　惟然（三河小町）
菊の香に出よ〳〵と今日の醉　乙州（同）
二度の月割る籬や今日の菊　也有（蘿葉集）
丸う咲て月に見せけり今日の菊　同（同）
かざす手の樽にもありて今日の菊　同（同）
菊の日や蝶は綿着ぬ袖ながら　同（同）
菊の日や香は月の名に晦日迄　同（同）
菊の日や白衣の蝶も未だ來ず　同（同）
酒買にやる慈童あり今日の菊　同（同）
咲花をいくらか捨てゝ今日の菊　千代尼（千代尼句集）
菊の香や茶に押合ふも此日より　同（同）
今日斗り見てすむものを菊の花　同（同）
今日に成りて草臥おかし菊作り　同（同）
今日の菊獨咲ではなかりけり　同（同）
朝露や菊の節句は町中も　太祇（太祇句選）
しづめたる菊の節句の匂ひ哉　同（太祇句選後篇）

重陽

朝市や通りかゝりて今日の菊　太祇（太祇句選後篇）

菊の日や盛りは後の事ながら　闌更（半化坊發句集）

殊更に作らぬ菊ぞ九日なる　白雄（白雄句集）

　此日の菊、瓶に溢りけるをよろこびて

草の戸や隣々の運び菊　同（同）

　勢州一身田にありし頃、盛りなる花の一枝をおくられつゝ、今日の花に挿添へて酒酌けるに

桃に菊今日を盧生が現かな　同（同）

　何某の宮、何某の君より給ふ佳節の菊に、紫宸へる蒲衣打ちかけて、中々に隱遁の沙汰には非ず、今日の御遊も思ひやられて

曉や菊の露ちる御幸町　同（同）

　菊の九日、大津舊都に遊ぶ

今日の菊なき世の都めぐり哉　曉臺（曉臺句集）

今日の菊秋の泣顏洗ひけり　几董（井華集）

　柏崎にありて

人心しづかに菊の節句かな　召波（春泥發句集）

九日に逢はゞ黄菊の寺泊　乙二（松窓乙二發句集）

　函館の湖に奕りゐる中に、心憐えの奇雲も見えずなりて

入るな月夜明ぬうちは今日の菊　同（同）

菊の日に逢はで去にけん筑紫船　同（をのゝえ草稿）

　客中九日

旅人に一枝くれよ菊の花　士朗（枇杷園句集）

菊作り九日は菊を貰ひけり　一茶（花實發句集）

菊の日や御嶽烏も出でて啼く　蒼虬（蒼虬翁發句集）

　栗の節句

栗の日や椎も紅葉も乘り越えつ　來山（今宮草）

心から栗に味ある節句かな　鬼貫（七車）

〔参考〕　九は支那で陽數とするので、九月九日を重陽の節とし茱萸を佩び菊花酒を飲みてこれを祝ふ。本朝では、日本書紀天武天皇の卷に「十四年九月甲辰朔壬子天皇宴二于舊宮殿之庭一」とあるを初見とする。この壬子は九日に當る。その後は、天皇しばしば紫宸殿に出御して菊花宴を臣下に賜つた例が多い。下學集上時節に「重陽九月九日也。月令云、九月九日、月與レ日倶應二陽數一、故云二重陽一、此日採レ菊獻二觀音一則壽命長遠也。起二於彭祖古事一也。」とある。

高（たか）きに登（のぼ）る（晩）　茱萸（しゆ）の嚢（ふくろ）

〔古書校註〕【俳諧歳時記】「風土記　續齊諧記。九月九日望郷臺云々。「唐詩」

〔季題解説〕『列仙傳』卷二、費長房の條に「桓景嘗て費長房に學ぶ。一日、景に曰く、九月九日汝の家に大災あり、絳嚢を作り茱萸を盛り、臂上に繫

け高山に登り、菊花の酒を飲めば禍消ゆべし。景、其言の如く家を擧げて登山す。夕還て見れば牛羊雞犬皆暴死す」とあり。これによつて重陽に登高の事行はる。

▽九月九日憶山東兄弟　王維

獨在異郷爲異客　毎逢佳節倍思親
遙知兄弟登高處　遍挿茱萸少一人

此詩は、登高の詠にして眞情流露す。

【實作注意】茱萸を盛るに絳嚢を作りとある。絳は大赤色にて、「爾雅」の註に一染謂之縓、再染謂之赬、三染謂之纁也とあり。以て其色を思ふべし。又、登高の行事、今も心ある者は此日山に遊ぶ。決して廢たれたるに非らざるなり。【參照】重陽

【例句】

高きに登る

菊の香にくらがり登る節句かな　芭蕉（菊の香）　くらがり峠にて
菊の酒醒めて高きに登りけり　闌更（半化坊發句集）　旅中作節
馬の背の高きにのぼり蕎麥の花　移竹（乙御前）　雨中九日病起
試に下駄の高きにのぼりけり　鐵僧（五車反古）
草笛を吹いて高きに登りけり　逸夢（逸夢遺稿）
牀几おき九月九日の山掃きぬ　青々（倦鳥）　重陽山にのぼりて

茱萸の袋

思ひやる茱萸の袋や兄弟　蘭道（荒小田）
山駕に九日の茱萸を挿みけり　青々（妻木）
稚子の肘にくゝるや茱萸嚢　同（同）

茱萸の酒（晩）

【季題解說】重陽の日、茱萸を折つて頭に挿し、以てかざしとするは、邪氣を辟くるが爲めなり。後、人遂に茱萸を酒に泛べ、之を茱萸酒と云ひ、詩家また屢これを詠ず。杜甫、九日の詩に「明年此會知誰健　醉把茱萸子細看」とあり。【參照】重陽

紅葉土器（晩）

【古書校註】

【年浪草】九月。增山井に重陽の下に出す。禁中重陽宴などにも有之こともやと、御厨子所預高橋氏へも問ひ侍れども紅葉土器の名目無しと云へり。按ずるに菊の盃に對したる名なるべし。○貞治百首「つらなれる星の位も

見ゆる哉秋の雲井の菊の盃（少將内侍）是菊花宴の儀にや、菊の盃あれば紅葉土器も有るべし。

【季題解説】未考。增山の井に重陽の下に出だせり。菊の盃に對したる名なるべきか。〔参照〕重陽（チョウヤウ）

菊の酒（きくのさけ）（中）　菊花の酒（きくくわのさけ）　菊酒（きくざけ）

【古書校註】

【俳諧歳時記】〔菊花酒〕汝南の桓景、費長房に隨って遊學す。長房謂ひて曰く、九月九日汝が家に災厄あり、家人をして絳（アカ）き袋を作り、茱萸を盛り、肘に繫がしめ、高き山に登りて菊花酒を飲まば此の禍消すべしと。桓景其の言の如くして家擧りて山に登る。夕に至て還れば雞犬皆暴死す。長房が云、之に代れり。今の人九月九日に至て菊花酒を飲むこと之より始まれり。績齊諧記

【季題解説】菊は延年のものとして、酈縣の甘谷の菊水の故事あり。又桓景が登高の事あり。因って重陽の祝事に、酒盃に菊花を泛べて飲む。これを菊の酒と云ふ。〔参照〕重陽（チョウヤウ）植物—菊花

【例句】菊の酒

酒一升九月九日つかひ菊　宗因（梅翁宗因發句集）

重陽

盃の下ゆく菊や朽木盆　芭蕉（當世男）

旅行

草の戸に日暮てくれし菊の酒　同（きさらぎ）

菊の酒葡萄の殼にしたみけり　其角（句兄弟）

菊酒の加賀に知人音信よ　許六（篠詰庵入日記）

末廣の影を映すや菊の酒　同（正風彦根躰）

琉球も今日を祝ふや菊の酒　同（風俗文選犬註解）

旅人や菊の酒酌む晝休み　太祇（太祇句選）

草の戸の用意をかしや菊の酒　同（太祇句選後篇）

家々や銚子の菊の咲き咲かぬ　同（同）

菊の酒に力ある日の雨寒し　白雄（白雄句集）

舌たらぬ兒にもとらむ菊の酒　蓼太（蓼太句集）

小座敷や袖で拭ひし菊の酒　一茶（一茶句帖）

陶淵明、重陽の日に酒無し、菊花の中に坐す。白衣の人酒を攜ふて至るを見る。すなはち王弘が酒を送れるなり。〔續晋陽秋〕

酒を思ひ菊に坐するがおもしろき　青々（倦鳥）

酒壺に菊の添ひある富貴かな　同（同）

温め酒（あたゝめざけ）（晩）

古書校註

【俳諧歳時記】九月九日は寒温の境、身肉分るゝ時也、此時酒を飲めば病を得ず、今日より酒温め用ふるよし、世諺問答にも載せ玉へり。後光明峯寺殿下の抄にも見えたり。

季題解説 陰暦九月九日は寒温のさかひ、身肉わかるゝ時なりといひ、此温酒を飲めば病を得ずとて、此日より酒を温め用ふるといへり。（古）［参照］重陽（チヨウヤウ）

例句

温め酒

語りつゝ温め酒や火吹竹　嘯山（葎亭句集）

温める酒間遠しく又樂し　同（同　）

菊の着綿（きくのきせわた）（晩）

菊の綿（わた）　菊の染綿（そめわた）　御菊居（おんきくすゑ）

古書校註

【俳諧歳時記】九日夜に入りて御殿の南階に多く菊花を植ゑ、其の菊に赤白黄の綿を丸め、菊花に作りて枝々に付くる也。今日葵を菊花に取替らるるとも云へり「御湯殿記」。九月九日菊に綿着すること何の頃より始まれりとも見侍らず、只菊を玩ぶのあまりに、寒霜を防がんとの志とぞ覺侍る。「世諺問答」。

季題解説 重陽の夜に、御殿の南階に菊を多く植ゑ、その菊に赤白黄の染綿を丸め、菊花に作りて枝々に付く、白きに黄、赤きに白、黄なるに赤を付くると云ふ。菊の露を綿に移しとり、面をぬぐひなどして、齢を延ぶる薬にもせしものなり。「卯花園漫錄石上宣績」に「菊綿は山科家調進也、天子御手づから作り給ふといひし人あり。故實者に尋ねしかどもしらず。山科家より調進也といへり」とあり。［参照］重陽（チヨウヤウ）　植物―菊（キク）

例句

菊の着綿

綿着ても同じ浮世ぞ霜の菊　支考（梯妻紙）

白菊や着せ綿まるゐる指の反り　移竹（乙御前）

綿着せて十ほど若し菊の花　一茶（一茶句帖）

九日小袖（くにちこそで）（晩）

古書校註

【俳諧歳時記】九月朔日より八日に至りて各袷を着す、九日より良賤皆綿入小袖也。

季題解説 重陽の日、地下の良賤、縹色（ハナイロ）の小袖を著し、互に相賀す。因つて是を九日小袖と云ふ。［参照］重陽（チヨウヤウ）　菊襲（キクガサネ）

例句
九日小袖　菊の花に紫ある襟小袖かな　青々（俳　目）

菊襲（晩）

古書校註
【俳諧歳時記】九月衣類菊襲（表白裏紫かさねあるべし）清嚴正徹記。九月節句より二ツ襟御湯殿記。地下の良賤今日綵緋色の小袖を用ひて九日小袖と云ふ。

季題解説
菊襲は昔九月の衣類の襲色目の名なり。表は白、裏は蘇芳にして秋冬の交の用とせし物なり。〔参照〕重陽　九日小袖

例句
菊襲　給心も襟に知れたり菊襲　乙由（麦林集）

後の雛（晩）　秋の雛　菊雛　菊の綸纜

古書校註
【年浪草】雛祭三月三日九月九日也。昔は定れる時節はなきにや、重陽にも雛祭ること侍り。源氏物語には常にも雛遊びはありと見えたり。此雛遊の源を尋るに千早振神の代より傳はれる神業となん、日本紀崇神天皇七年の春二月、大物主の神の告によつて、朝廷の臣下を四方に遣はし給ふ。大彦の命勅命を承り和珥坂と云ふ所に至り給ふに、何處ともなく一人の少女參り逢うて武埴安彦が妻の吾田媛と議りて謀反を企つるよしを告知らす。歌に、比賣那素寐殊望と云ふ事見えたり。比賣那素寐は雛遊のことゝ也と釋日本紀に記されたれば、この時既にひひな遊びといふ事のありて、其の後垂仁帝の廿五年天照大神伊勢國百船度會の五十鈴河の上に御鎭座の時、乙若子命、芻にて偶靈を作りて倭姬の命に御祓解をなさしめ給ふことあり。其の芻靈は小き人形也。人々祓串すの時、其の身にあやまり犯せる罪咎祟りなす惡き神の所爲を此芻偶へ祓ひ負せて、河原へ流し捨て、自ら身もすゞしく心も清く平けくなすべき爲の禊種也。さるに因りて古へより此の天兒を撫物と名づけて、常に小兒の身にそへ玩物とするも諸病の災難を祓ひ除かしむる神事也と云々。
【俳諧歳時記】今は秋の雛祭はなし、近頃まで攝州堺に此遺風ありける故、秋の雛祭を世に堺の雛祭と云ふなり。

季題解説
陰曆九月九日、重陽の節句に飾る雛をいふ。春の雛祭に對してかくいふなり。
菊の綸纜、形圓長にて所謂飯櫃形の木地の櫃なり。蓋は橫長の隅切角にて丸き曲物の冠せ蓋なり。これに菊を畫く。三月の雛祭には、同器に桃柳を

書きしを桃父は柳の縮櫃とよべるに對してかくいふ。此櫃の内に栗、赤飯を入れて御臺、匙、おつぼあり。［參照］重陽 春―雛祭

例句

後の雛　九日の雛を見舞ふや染髪籠　徳七（伊丹發句合）

秋の雛　白に黄に後の雛衣女夫衣　露月（露月句集）

色も香も桃の上に越せ秋の雛　八風（物見塚記）

菊雛　千代紙を菊に着すれば雛かな　青々（倦鳥）

小重陽（晩）　殘菊の宴　十日の菊　後日の菊　殘る菊

古書校註

【御傘】殘る菊、秋也。九月九日以後の菊を云ふ也。歌題には冬殘菊とも出せり。

【年浪草】紀事に曰、九月十日或は十一日禁裏殘菊の宴あり。○月令廣義に曰、歲時記に云、京師の士女十日再會して小重陽となす。

註 年浪草に引ける如く日次紀事九月十日の條には、公事として殘菊宴をあげ、「中古今日或十一日、禁裡殘菊宴あり」と有れども、公事根源等にも見ゆる如く、中古は九月九日菊花の宴に對して十月五日に殘菊の宴を催ししなり。御傘にも「殘菊の宴、十月五日に重陽の如く詩作酒宴あり」と見え、爾後の俳書みな冬部とせり。わくかせわ等には特に殘る菊は九月十日殘菊の宴は十月五日と注意せり。

季題解説 陰曆九月十日、重陽の翌日、京師の士女再び會して祝ふを小重陽といひ、重陽以後の菊を後日の菊といふ。［參照］重陽 植物―殘菊

よなべ（晩）　ゆふなべ　夜業　夜仕事

季題解説 秋の夜長の頃になれば、夜間猶其業をはげむもの多し。［燕石雜志　瀧澤馬琴］に「夜なべ。九月より十二月まで夜長き比、諸職人夜をこえて作事經營するを夜なべといふ。婦女子の燈下に縫刺するも又夜なべといふ。一說によなべは夜鍋なり、京の俗、夜も活業を務むるときは、主人たるもの茶粥を煮てこれをすゝむ故に夜鍋といふ。寒夜の藥餌を小鍋だてといふが如しといへり。或はいふこの說非なり。よなべとは晝の事を夜へ延てするといふ義にて夜のべなるべし。のとなと通ず。又夜並の義とするもあしからず。家持家集に「宵々に天の河原はならせどもよならふとしもあらじとぞ思ふ」よならふは夜並ぶなり。月次を月並と書も月並ぶなり。夜毎にする業なれば夜並ともいふべし。」と見ゆ。［參照］夜學 夜食

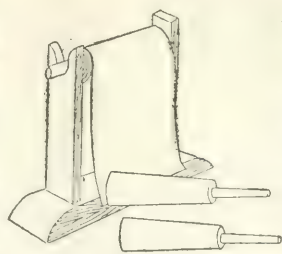
例句

よなべ　漬物に茶出す夜なべのあとうれし　青々（倦鳥）

夜なべする心は母にありにけり　同（同）

砧（中）　碪　砧打つ　衣打つ　擣衣　しで打つ　しころ打つ　槀砧　二丁砧　綾卷　砧盤　砧槌　晝砧　夕砧　小夜砧　宵砧　遠砧　砧拍子

古書校註

【山之井】　風のさそひて碪の音に、遠里の夜寒をも思ひやり、妻まつ閨にうち驚きて、むすびし夢のつちみじかなるを惜み、からころと鳴る唐衣の音をそへ、しら聲にひゞく白絹をいひたて、猶うつと云ふによりて、初雁の渡り拍子、碪の入びやうしなど云ひて(一)、山彦のこたへをも云ひなし侍る。

【御傘】　碪。只一、誹には擣衣今一有るべし。前の碪の句に、音・聲・響・打など云ふ字結びたらば、後の句には其の字を結ぶべからず。擣衣と必ず聲によまずして、衣うつとも碪の外にある也。碪に衣類、二句嫌ふ。きぬの字には三句たるべし。

【滑稽雜談】　八月。○八雲御抄に云、擣衣は八月十五日夜に始めてうつ也。しでうつは靜かとも云へり、しけく打つ也。○仙覺抄云、しでとはしづかに打つ也。神の幣をしでともしづともよむ。共にしづむる義也。△このもの和漢共に秋間の題詠あげて計ふべからず。和俗又綾卷ともいふ。しでうつ・しころ子・しころ打、是ども皆碪のうはさにて、尤秋に賦すべし。

【年浪草】　○綾卷とはその打つ端をまきて打つ故に衣を卷く木なり。○しころ打つとはしころは槌の名(二)。槌にて打つをいふ。

註　(一) 例句に「山彦や砧の音に入拍子　正章。」入拍子は間に入れる拍子。(二) 和漢三才圖會、砧の條に「擣衣杵、和名都知（ツチ）、俗云、之古呂（シコロ）」と見ゆ。

季題解説　きぬたは砧又は碪の字を用ひ、又擣衣とも書く。キヌイタ（衣板）の略。布帛を擣つ木又は石の臺をいふ。即ち布帛の光澤を出すために、又洗濯ものゝ糊を柔らぐる爲に其盤上に於て槌を以て擣つなり。

實作注意　今は都鄙いづこに行くも砧の音を聞く事殆ど全くなくなれるが、今より三四十年前までは、田舍にては夜寒の頃ともなれば、家々に冬の仕度とて夜なべに此擣衣を爲せしものなり。砧の音は李白の「子夜呉歌、長安一片月、萬戸擣衣聲、秋風吹不盡、總是玉關情、何日平胡虜、良人龍遠征」など人口に膾炙し、其他の詩歌にもひろく歌はれて、床しきものとなり、秋思を誘ひ、吟情をそゝるものありて、古來俳人にして砧の句無きは稀なる位なり。砧にも種々變遷あり、〔字林〕に「直に舂くを擣といふ。

古人衣を擣つに、兩女對立して一杵を執り米を搗くが如くせり、今易ふるに臥杵を作つて對座して之を擣つ、其便を取れるなり」後には打盤の上にのせて横槌にて打つやうになれるが如し。しで打つ、と云ふは繁く擣つこと。しころ打つは、しころは槌の名、槌にて打つをいふ。藁砧は繩・草鞋・草履等を作る藁を柔かにするため擣つもの。綾巻とは帛を巻く木をいふ。

例句

砧

つぶりをも打つは隣の砧かな　宗因（梅翁宗因發句集）

思ひ餘り戀ふる名を打つ砧かな　鬼貫（鬼貫句選）

ある坊に一夜をかりて

砧打て我に聞かせよや坊が妻　芭蕉（甲子吟行）

聲澄みて北斗に響く砧かな　同（都曲）

近江路を通り侍る頃、日野山のほとりにて、胡麻といふものに上の衣とられて

猿引は猿の小袖を砧かな　同（續有磯海）

剝れたる身には砧のひゞき哉　同（芭蕉盥）

砧の町妻吼る犬哀れなり　其角（田舍の句合）

芭蕉庵夜

墨染を鉦鼓に隣る砧かな　同（虚栗）

隣の素牛に逢ひて

さぞ砧孫六屋敷志津屋敷　同（曠野）

雪の下の宿りにて

砧うつ宿の庭子や茶の給仕　同（雜談集）

今住む所、涼菟下向より上るべき時迄の日數に、四壁の腰張迄を仕舞へば、冬籠噺と思ひやらせ侍る

さい槌の音をしまへば砧かな　同（皮籠摺）

青流難波行餞別

芦刈の浦を喰せて砧かな　同（五元集）

戰場におこせたる懷紙の奥に

一ヶ巻に日を覺したる砧かな　同（五元集拾遺）

藁たゝく響によわる砧かな　去來（伊勢紀行）

娘より嫁の音よわき砧かな　同（去來抄）

乘掛の眠を覺す砧かな　同（　）

坊主子に夜を寐ぬ尼の砧哉　許六（正風彦根躰）

惣門は鎖のさゝれて砧かな　同（風俗文選犬註解）

燈明の灯をかき立て砧かな　同（　）

亀千新宅

砧にはまだ新らしき家居かな　支考（梟日記）

やかましう國の榮を打つ砧　杉風（杉風句集）

燈を細め寐つけば響く砧かな　同（　）

母の日の明かぬほど打つ砧哉　野坡（野坡吟艸）

旅衆のやすんで居間の砧かな　園女（住吉物語）

曉を

別れても夜のありたけは砧哉　同（陸奥鵆）

[illegible]

いねかしと思ふ咄の砧かな　同（青むしろ）

僧正の妹の小屋の砧かな　尚白（猿蓑）

殿造り慰みに打つ砧かな　一笑（いつを昔）

打しめて歌はぬ里の砧かな　同（前後園集）

寐入かねね蟲齒に響く砧かな　涼菟（皮籠摺）

砧きく程こそよけれ奥座敷　同（千鳥掛）

寐かゝりて遠く成行く砧かな　破笠（續雪の集）

砧ひとりよき染物の匂ひ哉　珍碩（あめ子）

蘆の屋の灯ゆりこむ砧かな　立志（其袋）

我馬に拍子知らする砧かな　巴風（同）

月見れば人の砧に忙はし　羽紅女（猿蓑）

栗柄峠に泊りて

越中に砧うつなり夜中過　四睡（卯辰集）

燈心をゆりこむ夜半の砧かな　雪水（同）

三日月の藪に道ある砧かな　萬聲（同）

淋しさに來れば母屋も砧かな　孤舟（同）

眠りつゝうつゝにつよき砧哉　七里（同）

十斗り早めて仕舞ふ砧かな　李東（北の山）

生柴をちよろ〳〵させて砧かな　千川（有磯海）

纒籬分けて聞よる砧かな　蔬市（初蒐）

煎じ茶の薄くなりたる砧かな　荷兮（杜撰）

兵法もともに更け行く砧哉　林紅（續有磯海）

夜もすがら病馬の伽の砧かな　左次（同）

賀田を過て

獨住む賀田の藥屋の砧かな　舎羅（荒小田）

山寺で聞けばひだるき砧かな　丁丈（柿表紙）

寺からは里へやりたる砧かな　吾仲（同）

山陰の藪うつりして砧哉　素行（渡鳥集）

看經も紛るゝ宵の砧かな　昌房（三千化）

燈火の影さす川の砧かな　百里（のぼり鶴）

雲水の借の取巻く砧かな　木導（水の音）

泊り人を寐せて軒並砧かな　桃隣（古太白堂句選）

孤つ家に二夜續かぬ砧かな　也有（蘿葉集）

糊摺し音を今宵の砧かな　同（同）

仲國が耳に邪魔なる砧かな　同（同）

老の手に伯佘泣せる砧かな　同　（同）
夜なべにも油の減らぬ砧哉　同　（同）
尼寺の鉦から續く砧かな　同　（同）
いさかひの隣もあるに砧哉　同　（同）
子は爺が膝に泣せて砧かな　同　（同）
音添うて雨にしづまる砧かな　千代尼　（千代尼句集）
おちこちおちこちとうつ砧かな　蕪村　（蕪村句集）
憂き我に砧うて今は又止みね　同　（同）
小路行けば近く聞ゆる砧かな　同　（同）
石を打つ狐守る夜の砧かな　同　（同）
憂き人に手を打たれたる砧哉　同　（同）
此二日砧聞えぬ隣かな　同　（蕪村遺稿）
霧深き廣野に千々の砧哉　同　（同）
なつかしき忍の里の砧かな　同　（同）
枕にと砧寄せたるたはれかな　同　（同）
貴人の岡に立ち聞く砧かな　同　（同）
聲深き庄司が許の砧かな　同　（新五子稿）
迷ひ子を呼べば打止む砧哉　同　（同）
旅人に我家知らるゝ砧かな　同　（同）
砧聞きに月の吉野に入る身哉　同　（月並發句帖）
剃て住む法師が母の砧かな　太祇　（太祇句選）
泊り居て砧打つなり尼の友　同　（同）
出女の垣間見らるゝ砧かな　同　（同）
幾浦の砧や聞てかゝり船　同　（太祇句選後篇）
打止まぬ砧たのもし夜の旅　同　（同）
砧打てつれなき人を責るかな　曉臺　（曉臺句集）
うつらうつら月見つゝあれば砧打つ　同　（同）

客中

身の上も人に任せて砧かな　闌更　（半化坊發句集）
松風や砧幽かに谷の里　同　（同）
相撲取も聞居る宿の砧かな　白雄　（白雄句集）

淺茅が原

闇き夜の紙砧さへ秋ぞかし　同　（同）
遠里の都に出來て砧かな　蓼太　（蓼太句集）
堤よりして年波よせる砧かな　同　（同）
轉さうな家に砧の拍子かな　同　（同）

遊子

ひとの國にやゝ馴るゝ夜の砧哉　几董　（井華集）
指うちて暫くとやむ砧かな　同　（同）

比叡に通ふ麓の家の砧かな　几董（井華集）
行舟に遠近かはる砧かな　同（同）
熟柿の落てとばしる砧かな　同（同）
人妻の隣羨む砧かな　同（同）

幾夜か砧打ず止む餘所心　同（同）
いねかしの男うれたき砧かな　召波（春泥發句集）
小ともしの油あやまつ砧かな　同（同）
相住や砧に向ふ比丘比丘尼　同（同）
山姥と顏見合して砧かな　同（同）
燈火に風打付る砧かな　青蘿（青蘿發句集）
よその夜に我夜おくるゝ砧かな　大魯（[illegible]陰句選）
ちぐはぐにつるゝ砧や壁隣　移竹（乙御前）
やがて着るものゝ淋しき砧かな　諸九尼（諸九尼句集）
うき人を心にこめて砧かな　正白（[illegible]明烏）
雨そうて悲しさつるゝ砧かな　鳴鳳（同）
庚申の三絃殘る砧かな　成美（成美家集）
帚木に隱れて打てる砧かな　同（同）
大かたの茄子倒れて打つ砧　同（同）
橋に灯影さす家の砧かな　乙二（松窓乙二發句集）
からころと砧も初夜由利の空　同（同）
小松吹伊賀は砧の夕かな　士朗（枇杷園句集）
日中にどたりばたりと砧哉　一茶（一茶句帖）
梟も役にして來る砧かな　同（旅日記）
古鄕や母の砧の弱りやう　同（七番日記）
どたばたは婆の砧と知られけり　同（同）
行燈を出に置いて砧かな　同（同）
繼ッ子は砧に馴れて寐たりけり　同（一茶新集）
隣には人を泊めたか止む砧　梅室（梅室家集）
漁のなき夜汐と見えて砧哉　同（同）
祇王寺の砧鉦より哀れなり　同（同）
雇ひ女の出直して來て砧かな　同（同）
行ゆけば左右になるや灯と砧　同（同）
置く露の巷に響く砧かな　蒼虬（蒼虬翁發句集）
是ほどの砧は聞かず石部山　同（同）
郎いまだ歸らずと打つ砧かな　子規（子規全集）
手を止めてものうち語る砧かな　虛子（虛子句集）
寐がへりて砧聞く夜や人の家　進夢（進夢遺稿）

衣打つ

（旅泊）衣打つ京へは遠き寐覺かな　鬼貫（鬼貫句選）
（忍戀）打つ衣忍ぶ夜頃の氣が減るぞ　沾徳（沾徳句集）
針立や肩に槌うつ唐衣　芭蕉（江戸新道）
（寄ス隣ノ砧ニ）奥好の殿や打つらん唐衣　其角（五元集）
娘ある隣の衣と打ればや　野坡（菊の道）
狹筵や衣うつ賤の膝がしら　尙白（忘梅）
衣うつ所へ旅の戻りかな　且藁（曠野後集）
異夫の衣打らん小家がち　蕪村（新五子稿）
乙女子が御衣打らし神の石　曉臺（曉臺句集）
西谷の衣うつ夜や焙り芋　同（同）
浪高き夜や衣うつ蜑が軒　闌更（半化坊發句集）
衣うつよ田舍の果の小傾城　几董（井華集）
衣うつ片手に酒の小賣かな　士喬（五車反古）
一ト寐入よくして聞けば衣うつ　成美（成美家集）
御祝儀に打つ眞似したり麻衣　一茶（一茶句帖）
晝一時の日南も暮れて衣擣つ　青々（倦鳥）
どこにやる物とて衣うつ夜かな　同（同）

夕砧

小夜砧

飯煙賑ひにけり夕砧　一茶（嘉永版一茶發句集）
中の間に寐ぬ子幾人小夜砧　其角（類柑子）
俳諧で娘の名なり小夜砧　支考（棒妻紙）
寐よといふ寐覺の夫や小夜砧　太祇（太祇句選）
馴て出る鼠のつらや小夜砧　同（太祇句選後篇）
悲しきは上手なるべし小夜砧　曉臺（曉臺句集）
薄月や水行く末の小夜砧　闌更（半化坊發句集）
吹すれる竹の奥なる小夜砧　同（同）
知る知らぬ里なつかしや小夜砧　白雄（白雄句集）
人や住む桃の林の小夜砧　同（同）
目にかゝる月の裸や小夜砧　蓼太（蓼太句集）
小夜砧闇の東は哀れなり　士朗（枇杷園句集）
小夜砧とばかり寐るも勿體な　一茶（七番日記）
ちとばかりおれに打たせよ小夜砧　同（同）
行灯を松に吊して小夜砧　同（一茶句帖）
梟が拍子取るなり小夜砧　同（同）
草藪や君が代を吹く小夜砧　同（發句題叢）
雨の夜やつい隣なる小夜砧　同（嘉永版一茶發句集）
小夜砧そこらあたりは山斗り　蒼虬（蒼虬翁發句集）

小夜砧　金澤へ越ゆる道にて
鎌倉に泊まらでくやし小夜砧　蒼虬（蒼虬翁發句集）

遠砧
遠砧夜のおとゞに聞ゆべし　曉臺（曉臺句集）
山姥と見し人消えて遠砧　同（同）
柿の澁ぬけける夜冴や遠砧　同（同）
遠砧この川越ん橋もかな　白雄（白雄句集）
仁和寺や門の前なる遠砧　几董（井華集）

參考　上代の衣服は、多く麻・楮・葛等の纖維にて織るので、これを洗濯すると剛くなるので、これを打つて柔げるのである。されば漢詩にも多く夜寒を報ずることを詠ひ、婦人の夜に及んでこれを打つことを詠じてゐる。萬葉集にも『つるばみの衣解き洗ひ亦打山』といひ、舊衣を洗ひ且打つて柔げることを歌つてゐる。後世織物の術が精巧になつて、打つ必要がなくなつてから、砧の聲も聞かれなくなつたのである。

休暇明（中）　新學期始まる　秋の新學期

季題解說　諸學校の暑中休暇を終りて、九月に入りて授業を始むるをいふ。（新）［參照］夏—暑中休暇

例句
秋の新學期
服膺して忘れぬことよ新學期　青々（倦鳥）
海に山に身は養ひつ新學期　同（同）
遊びてしのちのしまりや新學期　同（同）

夜學（三秋）　夜學の子　燈火可レ親

季題解說　秋の夜の靜寂にして長きより、讀書・勉學などに殊に適ふなり。韓愈の詩に「時秋積雨霽、新涼入郊墟、燈火稍可親、簡編可卷舒」とあり。
［參照］よなべ

例句
夜學
うつくしき夜具も出てある夜學哉　巨口（つは蕗）
椎の實をならべて夜學机かな　活石（倦鳥）
春畝公のむかしを思ひ夜學哉　青々（同）
王道の源を問ふ夜學かな　同（同）
君子夜學民を勞らふ事を知る　同（同）

燈下可レ親
艸庵に灯火親しき時となり　同（同）

萬年青の前おき（晩）

季題解說　萬年青の前おき、牡丹の胴・松の洞とて立花に用ふるなり。池の坊三箇の傳受なりといふ。（古）［參照］池の坊立花

後の更衣（晩）・秋去り衣

季題解説 晩秋（大よそ十一月初）より袷を冬衣の綿入に着替るをいふ。夏に入りて綿入を袷に着替るを單に更衣といふに對す。［參照］紅葉衣 秋袷 秋の帷子 夏―更衣

例句
後の更衣　更衣常盤木の風深うきゝ　小酒（倦鳥）

參考 秋去り衣、萬葉集卷十「啣機の五百機立てゝ織る布の秋去り衣誰か取り見む」とあるに出づ、秋になつて著る衣服、即秋服である。

紅葉衣（晩）

紅葉重

季題解説 重ね色目の名なり一桃華蘂葉一に表黃、裏蘇芳九月より十一月迄とあり。一說に面裏靑。又黃紅葉面黃裏丹。靑紅葉表靑裏濃紅。其外櫨紅葉・紅葉重・蝦手紅葉等品々ありといふ。（古）［參照］後の更衣

例句
紅葉衣　照すくや紅葉がさねの美しき　陸史（石を主）

秋袷（中）

秋の袷　後の袷

古書校註
【滑稽雜談】倂にいふ所袷とばかりは夏也。この者夏又は初秋の末より中秋まで兩度用ふれども、初を以て正とする故に夏也。秋又は後の袷ならば秋也。

季題解説 秋冷になりて著る袷をいふ。

實作注意 單に袷といへば初夏なり、秋と冠して區別す。［參照］後の更衣 夏―更衣

例句
秋袷　傾城の昔一時や秋袷　岩翁（其便）
相撲取の紅裏染し秋袷　許六（篇突）
洒しみは花の時にか秋袷　鬼心（名の兎）
花話女悼
露の身に着るとは縫はず秋袷　汶柳（我陀羅尼）
糊のほども母が心の秋袷　節女（倦鳥）
雨の日の客と出でたつ秋袷　石鼎（鹿火屋）

秋の帷子（初）

季題解説 秋になりてなほ着る帷子をいふ。［參照］後の更衣 夏―帷子

例句
秋の帷子　珠數の透く袂も秋の帷子や　成美（成美家集）

新酒（中）　今年酒　早稻酒　新走　利酒　聞酒　古酒　新酒糟

古書校註

【滑稽雜談】　八月△按に中華に酒のある所舊し。和朝もまたその始に神代に於て素盞鳴命の八醞酒を釀し給へるを起りと申とかや。又新酒と爰に記する者にも非ず。酎は和名につくりかへせる酒と云。譬ば和俗の臘寒迄造り、四月に至りて煮酒となす者、酎とや申べけん。新酒の秋月に新穀既に成り、これを釀し旬を經ずして之を酌む。その性淡薄にしてその氣烈しく、たゞ頭面に醉を發す。俗に是を紙子頭巾と稱する者（一）。新酒と云は俳諧に限れる詞也。歌・連歌に沙汰なき也。

【年浪草】　八月○本朝食鑑に曰、新酒は凡そ新擇の白米一斗を用ひて之を釀し、須加利（卽ち酒を濾す布囊也）に塡みて舟に入る。その酒の水半ば滴りて復布囊に入れ、壓すれば則ち酒自ら滴り出づ。酒滴り盡きて後汁を取り滓を去る、此を新酒と號す。○中酌は半淸半濁の稱也。新に造れる濁酒の濃香升り薫ずるを上薫といふ。○醪は汁滓の酒也。和名毛呂美。漢語抄に濁醪也。醪者今俗にも亦濁酒と稱す。○大和本草に曰、酴醾花（二）の條下に云、本邦のは白花千葉菊の如し、よつて筑紫にて菊イバラと云ふ。中華には黃色なるありと農政全書に記せり。故に黃色の醝を酴醾醝と云。日本にて山川酒（三）の色の如くならん。

【俳諧歲時記】　池田伊丹の新酒船、大抵季秋初冬の間に江戶に着す、其初めて入津する物を新走と云ふ。

【栞草】　新酒の尤早きものを新走と云。

註（一）紙子頭巾の眩きに比していへるなり。（二）酴醾花は蔓生の落葉灌木、春の末靑白き花をつく、八重にして大さ二寸程、菊綴（キクトヂ）の狀をなせり。トキンバラ。（三）京都六條洞小路の酒屋にて釀せる白酒の銘。

季題解說

今秋收穫したる米にて釀せる酒をいふ。新走とは新酒の最早く出でしものを云ひ、古酒は新酒に對して季の物とす。又利酒は新酒を舌に味ひ良否を鑑定するを云ふ。

實作注意

昔は農家各々自家の飲料は自家に於て、新米の收穫後直に釀造したれば　新酒は秋季に入りたれども、現今酒造は法律に依り政府の許可を得るに非ざれば製造する事能はざるを以て、自から大規模に集中釀造となり、從て經濟的に之を製造するより、新米をよく乾燥し、寒に入りて釀造に著手す。卽ち「寒造り」か一般に行はるゝに至り、新酒は二月頃ならでは出來ず。されど新米をもて造る新酒といふにて猶且新酒の秋季たる事差支なかるべし。

参照　袋洗ひ　葡萄酒釀す　濁酒　夏—新酒の火入

例句

新酒　新酒の舟をしぞおもふ明石米　宗因（梅翁宗因發句集）

かけ出の貝にもてなす新酒かな　其角（續虛栗）

神功皇后酒を醸し侍りて祝ひ奉りし圖

酒楽の歌

此御酒を醸けん人は其鼓臼に立て哥ひつゝ醸けれかも舞つゝ醸けれかも、この御酒のあやにうたゝ楽しさゝ

古事記

醅おろし

醅おろしの圖

麴醸

麴醸りの圖

にごりすましの圖

新酒

足あぶる亭主に聞けば新酒哉　其角（句兄弟）
松風に新酒を澄す山路かな　支考（笈日記）
神酒なれば濁も澄るも鏡かな　同（獅子物狂）
新酒に醉ふは醉ふ同士五百弟子　同（蓮二吟集）
我盛らじ新酒は人の醒易き　嵐雪（曠野）
新酒や秋風渡る藏の隅　酒堂（鳥籠子集）
夜もすがら津に新酒で泥に成る　乙州（松濤集）
風に名の付て吹くより新酒哉　園女（夢の名殘）

湯見舞

九十九の鼻缺け猿に新酒かな　北枝（山中三笑）
戸を叩く人も案聲や新酒買　野坡（萬句四之富士）
二階から二階へ望る新酒かな　木導（水の音）
鬼貫や新酒の中の貧に處す　蕪村（蕪村句集）
升飲の價は取らぬ新酒かな　同（蕪村遺稿）
戀にせし新酒飲みけりかづら結　太祇（太祇句選）
父が醉家の新酒の嬉しさに　召波（春泥發句集）
買ほどは盡さぬ樽の新酒哉　同（同）
新酒やあたま叩いてまゐる人　同（同）
母衣かけて新酒に醉る祭かな　同（同）

山寺と手前の宿に遊びて

新酒あり鵜に鮓の所望せん　蓼太（蓼太句集）
鞸入に樽提て來る新酒かな　几董（井華集）
藏明けて旅人入るゝ新酒かな　月居（反古衾）
朝顏の哀れを返せ新酒波　乙二（をのゝえ草稿）
杉の葉のぴんと戰ぐや新酒樽　一茶（一茶新集）
小言いひ〳〵底たゝく新酒哉　同（同）
一ト德利別に小さき新酒哉　蒼虬（蒼虬翁句集）
狐啼いて新酒の醉のさめにけり　子規（子規句集）

今年酒

よく飲まば價は取らじ今年酒　太祇（太祇句選）
つけざしの穗に出る君や今年酒　召波（春泥發句集）
山中や別當殿の今年酒　曉臺（曉臺句集）

早稲酒

早稲酒や稲荷よび出す姥がもと　其角（焦尾琴）
早稲酒にものゝ床しき在鄉哉　白雄（白雄句集）
早稲酒に垂打ばかり醉てけり　同（同）

利酒

利酒に醉うてもどるや秋の市　臥央（續明烏）

參考　酒は古代より製せられてゐたが、應神天皇の朝に須々許理といふ者が大陸から歸化してよく酒を醸し、これより醸造法一變するに至つた。現在の如き純良の淸酒を製するに至つたのは江戶時代であるといふ。醸造

の時期により、秋季のを新酒といひ、寒前に於てするを寒前酒といひ、その中間のを間酒といふ。酒を醸むといふはもと穀物果實の類を口に嚙みて吐き出して酒とするよりいふ。古風土記にその文證がある。米をかびさせて酒に作るといふ説もあるが却つてどうかと思はれる。

袋洗ひ（中）

古書校註

【栞草】［山海名産圖會］伊丹にて新酒成就の後猪名川の流に袋を濯ふ。そのころを待ちて近郷の賤民この洗灑を乞ふ。その風味薄き醴の如し。是又他に異なり。「賤の女や袋洗ひの水の汁　鬼貫」（青藍云、鬼貫の先吟もあれば秋季として子細なからんか。

季題解説　攝州伊丹にて新酒成りて後、猪名川の流に袋を洗ふ。その頃を待て近郷の賤民此洗灑を乞ふ。其風味薄き醴の如しといふ。［參照］新酒（秋）

濁酒（中）

だくしゆ　涪　醪　諸味　醪酒　酴醿漉　どぶろく　神代酒　諸白　單白　中汲

季題解説　酒の醱酵したるまゝのもの、其色酴醿に似たるを以て酴醿漉と云ふ。淸酒に對しての名なり。又諸白とは蒸米も麴も共に白舂にせし上品の製を云ひ、單白は蒸米のみ白舂にして麴は粗糲を用ひて製せるものなり。中汲は中汲酒の略にして、醪を酒袋にて濾過し、その渣滓を去りたるもの、猶濁りある酒なり。［參照］新酒（秋）

例句

濁酒　幻住庵のかへりに
石山を樽の仕舞や濁り酒　曲翠（句兄弟）
隈なきをのみ酌む物か濁り酒　蓼太（蓼太句集）
鍋ごてら田におろすなり濁り酒　一茶（九番日記）

酴醿漉
酴醿漉や内輪出合の銚子きり　怒風（木曾の谷）
どびろくの壺たゞ中に草の庵　青々（妻木）

葡萄酒釀す（中）

季題解説　葡萄の熟したるを採り、壓潰して果液を搾り、適宜の温度にて醱酵せしめて釀すなり。［參照］新酒（秋）　植物　葡萄（秋）

例句

葡萄酒釀す
胸乳あらはに採りし葡萄を釀すなり　青々（倦鳥）
バッカスや女ぶだうに狂ほしも　同（同）
醉ひしれて百姓妻よぶだう取り　同（同）

参考 葡萄の實をもて酒を醸すこと、東洋でも古くから知られてゐた。史記大宛傳に、宛左右以二蒲陶一爲レ酒。富人藏レ酒至二萬餘石一久者數十歳不レ敗とある。唐人王翰の詩に、葡萄美酒夜光杯、欲レ飲琵琶馬上催、醉臥二沙場一君莫レ笑、古來征戰幾人回。本邦でも古くから葡萄で酒を製してゐる。

猿酒（三秋） ましら酒

古書校註 【栞草】 兼三秋物。猿菓(コノミ)を取りて山中樹木の虚(ウロ)、或は巖腹の凹(ココ)なる所に貯へ置き、數日の後熟して酒の如く味甚だ甘美也、これを猿酒といふ。獵者往々見て竊み食す。

季題解說 猿の木の實を取て山中樹木の虚(ウロ)、或は岩の窪かなる所に貯へ置きたるものに、雨露の交りて自ら醱酵したる物をいひ、味甘美なりとて、獵者樵夫等索めて之を飲むといふ。ましら酒ともいふ。

【附記】（上略）淸人屈大均の廣東新語に瓊洲多猿、射之輙騰躍樹抄、于四圍伐去竹木、然後張網得之、嘗於石巖深處得猿酒、蓋猿以稻米雜百花所造、一石穴輙有五六升許、味最辣、然絕難得と有之候、本邦でも猿酒といふもの澤山にある由神稻水滸傳などに見えしと記憶するも、たしかなることを知らず、多分件の支那說の敷衍したものと存候（後略）

（南方熊楠翁書翰抄昭和七年二月發行、滴り第八卷第貳號所載）

例句

猿酒　猿酒の去年の道我入山す　青々（寶船）
猿酒や上なるうろに啄木が　同（路馬）

新麹(しんかうぢ)（晩）

季題解說 今年收穫したる米にて作りし麹をいふ。【同】新米（こ）

例句

新麹　一鍬を手向にとるや新糀　其角（五元集）（幸几追悼）

新米(しんまい)（晩） 今年米(ことしごめ) 早稻(わせ)の飯(めし)

古書校註 【滑稽雜談】 七月〇禮記月令、孟秋の月農乃ち穀をすゝむ。天子新を嘗め先づ寢廟（一）に薦む。百官に命じて始めて收斂す。〇唐の孟詵の食療本草に曰、粳米新に熟する者氣を動かし、年を經たる者亦病を發す。江南の人多く火稻を收め倉に貯ふ。燒いて毛を去り春に至り米を舂きて食す。△これらの說、俗に新米或は今年米と云ふたぐひなりし。和俗又五穀の新熟の物

を通じて新米と稱す。米は擴實也と說文にも註せり。只穀粒の名と聞ゆ。然れば新米の麥・粟・又大豆・小豆などいふ、尤害なかるべきか。猶作意心得侍らんかし。

季題解說

注 （一）おまたや、神殿 ○「年浪草」には三秋の部に出し、「栞草」には九月の部に收む。

今年收獲したる米をいふ。〔參照〕新麹（カウジ）、燒米（ヤキゴメ）

例句

新米

新米の坂田は早し最上川　蕪村（蕪村句集）
新米に假居の君の戾りかな　同（新五子稿）
新米にまだ草の實の匂ひ哉　同（同）
新米のもたるゝ腹や穀潰し　太祇（太祇句選）
　農家に八十の老を賀して
どうあろと先づ新米にうまし國　同（同）
米の秋杵振り上げる翁かな　蓼太（蓼太句集）

今年米

千代の秋匂ひにしるし今年米　亀洞（曠野）
熊野路や三日の粮の今年米　蕪村（新五子稿）
大高に君しろしめせ今年米　同（同）
鉢の子に煮立つ粥や今年米　太祇（太祇句選後篇）
今年米西施が胸に痞へけり　几董（井華集）
馬渡す舟にこぼるゝや今年米　同（同）
船頭に乞取る飯や今年米　白波（春泥發句集）
今年米親といふ字を拜みけり　一茶（一茶句帖）
無駄な身も今年の米をへらしけり　同（同）
今年米飯に迄して貰ひけり　同（同）
役なしの身や人先へ今年米　同（同）
今年米我等が小菜も青みけり　同（發句題叢）
今年米の庭する村を寺眺め　青々（倦鳥）

早稻の飯

　田家
早稻の飯はや焚立つる夕烟　乙州（俳諧勸進牒）
山家にて魚喰ふ上に早稻の飯　去來（泊船集）

燒米（やきごめ）（初）　䅘米（やきごめ）　やいごめ

古書校註

【滑稽雜談】七月○唐韻に云、䅘は稻を燒きて米となす也。○順の和名抄に曰、䅘米、今按に俗燒米といふ、和名夜木古女、䅘米二字を用ふべし。○當世和民の製する者、少異なれどもこれらの製より始るならし。春は種米と稱し、秋は燒米といへうならし。
【年浪草】七月○本朝食鑑に曰、今製する所の燒米は青稻を以て稃糠を去り、炒り過して之を舂き䅘米となす。之を燒米と稱す。その味佳、勢州莊野（シヤウノ）

の市上に焼米を造り、青麥稈を以て俵子を作り、之を裹んで、四方に送る云々と

季題解説 青稲の籾殻を去り、よく炒りてこれを搗き、扁平となしたるものをいふ。佳味あり。やいごめは焼米の音便なり。【参照】新米

例句 焼米

焼米に歌こそなけれ近衛殿　史邦（芭蕉庵小文庫）
焼米や鹿聞く菓子に夜もすがら　半残（小柑子）
焼米や其家／＼の伊勢の神　召波（春泥発句集）
焼米に添へし今年の稲穂かな　五調（田毎の日）
焼米や子のない家も御一口　一茶（旅日記）

夜食（やしょく）（三秋）　お夜食（おやしょく）

季題解説 農家又は商估などにて、秋の夜長の從業後に食事をとるをいふ。

【参照】よなべ

例句 夜食

小家の情更けに更けての夜食かな　小酒（倦鳥）

豇豆飯（ささげめし）（初）

季題解説 新豇豆を入れて炊きたる飯。【参照】夏―豇豆、

零餘子飯（ぬかごめし）（晩）　薯子飯（いもごめし）

季題解説 零餘子を入れて炊きたる飯。【参照】植物―零餘子

例句 零餘子飯

垣にさへこぼるゝ頃よむかご飯　青々（倦鳥）

栗飯（くりめし）（晩）　栗の飯（くりのめし）

季題解説 栗の實を入れて炊きたる飯。新栗の皮をむき米に和して炊き、少量の食鹽又は醤油にて味を附けたるもの。【参照】栗の子餅　植物―栗

例句 栗飯

栗飯や根來法師の五器折敷　蕪村（夏より）
栗飯や目黒の茶屋の發句會　子規（子規全集）
栗飯や氷上泊りの二三日　青々（倦鳥）

参考 うつぼ物語に「近う見れば火を山の如くおこして大いなる鼎立てて栗を手ごとにやきて粥に煮させ。」

松茸飯（まつたけめし）（中）

季題解説 酒及び醤油にて味をつけたる飯の炊き上る前に、松茸をきざみて入れて作る。風味ありて美味なり。【参照】植物―松茸

橡の餅（晩）　橡團子　橡麵

季題解説 橡は七葉樹科の落葉喬木なり。秋蒴果熟し、栗に似て大なる光澤ある種子を生ず。此實にて餅・團子・麪等を作り食用とす。［參照］植物—橡の實

例句

橡團子　橡團子疑ふらくは是仙家　一茶（狹　蓑　集）

參考 ［橡の餅］橡の實に糯米を加へ餅に製したもの。又筑前續風土記廿七「橡餅、博多にあり　餅屋九右衛門と言ふ者其の製精し灰の木の葉をやきて灰汁となし米を染めて製す故にその色黄也其味脆寒にして甜美なり（中略）とち餅と雖もとちの木は用ゐず灰の木を誤りてとちといふなるべし。「灰の木は灰の木科の常綠喬木、四國九州等の暖國に生ず。」［橡麵］橡麵を製するに、棒の使用法急ならざれば橡麵の冷えちぢみて延びざるよりあわてることをとちめん棒といふ。姥櫻—あとの路銀の殘掛きを俄かに驚き、これではならぬととちめんぼう旅籠屋どまりを木賃にころび—などみえてゐる。但しとちめく坊の訛だともいふ。

栗の子餅（晩）　栗子餅

季題解説 江戶時代に九月九日の節句に用ひられたる餅といふも、製法不明。［參照］重陽　栗飯　植物—栗

栗羊羹（晩）

季題解説 栗の實を粉にしてねりたるもの、或は栗の實を入れて作れる羊羹。［參照］植物—栗

木の實團子（晩）

季題解説 櫟・抱などの實の落たるを採りあつめて日に干し、臼にて搗き、皮を箕にて去り、更に是を乾すこと十餘日にして磨して粉と爲し、水に浸して苦味を去り、米の粉に和して團子と爲し、諸種の野菜を切て混じて煮て食ふ。大隅の深山の人常にこれを食とすといふ。［參照］植物　木の實

柚餅子（晩）

古書校註 【和漢三才圖會】柚餅。俗云ゆびし。柚乾也。造る法眞柚を用ひ瓣核を穿ち去り味噌汁を用ひて糯粉をこね、胡麻・榧等を合せて空柚に充て、蓋を覆ひ、淡醬油を用ひて煮熟し板にひろげ、板を以て徐々に之を壓して晒し

乾かして之を收む。
【滑稽雑談】九月△柚べしは今製する作意秋なるべし。その外柚びしほと云ふ物有り、柚の核を去り皮も瓣も共に細にきり、酒糟を以て煮爛して膏の如くにして用ふ。是を柚煉とも又は布袋みそとも云、又九年母を以て膏となすを達磨味噌といへり。

季題解説　柚子の汁に味噌・米粉・麪粉・砂糖等を加へ、固く捏ね、蒸して作りしものをいふ。形羊羹の如し。
〔考〕料理物語（寛文四年）ゆべしの仕様。ゆみそのごとく、口をきり、みをすて、みそ、しやうが、こせうなど、よくすりて、かや、ごま、あんにん（杏仁）其まゝ入まぜて、ふたを合せからげ、よくむしてほし、あまにつりてよし。参照 植物—柚（ユズ）

例句
柚餅子
弟子僧と分ち味はふ柚べしかな　小酒（杉の實）
黄金作りの小柄で切りし柚べしかな　青々（倦鳥）

柚醤（ゆびしほ）（晩）

参照 植物　柚（ユ）

季題解説　柚子の皮に味噌・砂糖・醤油を加へて醤につくり、舐物とす。

柚味噌（ゆみそ）（晩）　ゆみそ　柚釜（ゆがま）　柚味噌釜（ゆみそがま）

古書校註　【和漢三才圖會】眞柚を用ひ瓣を穿出して空殼とし、瓣を用ひて核を去り、味噌及び胡麻・胡桃・栗・薑等を和せて復空柚に盛り、炭火の上に置きて之を焼き、煮沸して食ふ。
【滑稽雑談】九月△近世編笠柚味噌といふ物を作る。柚一箇二片となし瓣核（一）を去り熱湯に投じて軟ならしめ、取出し乾かし置きて、柚味噌に用ふる所の味噌をその片に盛り包み、編笠の形になしよく蒸して用ふ。祇園の茶店關東屋何某始めて製する所也。
註（一）中の實をいふ。

季題解説　黄熟したる柚の頂部を切り（釜と蓋の如くなし）中の果肉を刳り去り、その殼に味噌と柚の汁を和したるを入れ、皮のまゝ火にかけ焼きて食ふものをいふ。柚の香移りて風味あるを愛づるなり。其形釜に似たるを以て柚釜と云ふ。参照 植物　柚（ユ）

例句
柚味噌
恥かしや柚味噌に焦す筆の軸　卜宅（或時集）
青き葉をりんと殘して柚味噌哉　涼菟（讃塞）
どの祖師の好み置れて柚味噌かな　正勝（東華集）

亡骸を鳥來て鳴く柚味噌哉　也有（蘿葉集）
追かけの客は木にある柚味噌哉　同（同）

或人の閑居に到りて
夜嵐や翌の柚味噌も梢より　蓼太（蓼太句集）
釜かけて柚味噌の恨み聞夜哉　同（同）
所化寮の二日一釜柚味噌かな　素丸（素丸發句集）
どの祖師の工夫に出來て柚味噌哉　同（同）
燒過た尻を斷わる柚味噌かな　太祇（石の月）

傚フ二七一詩ニ
柚を燒くや味噌は釜中にありて泣く　几董（井華集）
寒ければ顔もて寄する柚味噌哉　成美（成美家集）
侘ぬれば柚味噌の釜を喰ひけり　同（同）
日は西に成りぬ柚味噌の釜の影　乙二（松窓乙二發句集）
老僧や手底に柚味噌の味噌を點す　子規（子規句集）
我ねぶり彼なめる柚味噌一つかな　同（同）
禪寺の柚味噌ねらふや白藏主　同（同）
柚味噌買ふて愚庵がもとに茶を乞はん　同（同）
舌上に會して頷づく柚味噌哉　露月（露月句集）
あみだ佛ぶつ〳〵と泣く柚味噌哉　青々（妻木）

燒味噌（やきみそ）（三秋）

季題解説 味噌を炙りて酒時又は飯の料とするをいふ。普通生姜を搯りて交へ其香味を賞するなり。

例句

燒味噌

燒味噌や火箸を穴に小土器　青々（倦鳥）
燒味噌に朝たつ酒の二三杯　同（同）

搗栗作る（かちぐりつく）（晩）

古書校註 【俳諧歳時記】〔搗栗（カチグリ）〕九月。水煎して其殼（シブカハ）を去る。鞍馬の村婦柴栗と稱する物この類也。甲州の打栗は打平めて煎餅の如くす、大栗は丹波の名産なり。

季題解説 栗を日に干して再び焙爐にかけ、これを臼に搗き殼皮と澁とを去りたるものをいふ。此物勝栗と訓相通ずるを以て新年の祝物とす。ここには作る時を季とす。〔參照〕打栗作る（ウチグリ）　新年―搗栗（カチグリ）

例句

搗栗作る

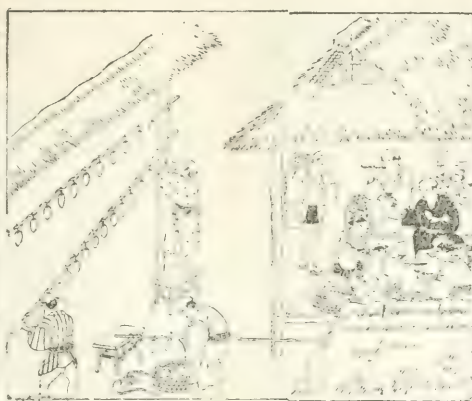
かち栗をつくる深山の草履ばき　青々（倦鳥）

打栗造る（うちぐりつくる）

季題解説　搗栗の大なるものを蒸し、砂糖を加へ、紙に包みてたたきひらため、焙爐にて乾燥せしめたるもの。［參照］搗栗造る（カチグリツクル）

甘干（あまぼし）（晩）

白柿（しろがき）　ころ柿（がき）　干柿（ほしがき）　つるし柿（がき）

季題解説　澁柿の皮を剝き、蔕を繩に挾みて吊し、陰干にするをいふ。かくすれば味頗る甘美なり。中陵漫錄（佐藤成裕）に柿餅（コロガキ）、柿餅の製法種々あれども、甲州山梨子郡下井尻村の製は、八夜（蜂屋）の類、百目以上の柿、霜落て紅葉になるを待て、實の色少し紅色なるを、蔕の落ざるやうに枝より折て、一夜を隔て、蔕のきはより薄くむき、蔕の葉を二寸許付て、二つ宛にて結び付て日乾する事廿四五日過て手にて揉みて、中の心の塊を揉ほごし、又日乾する事七八日にして、四つ手揉とて四方より指の腹にて揉みよせて、又日乾して大抵に心まで水氣の盡たる時に箱に入て置く時は自然と霜を生ず。此霜の生する加減甚だ手練あり、大抵此法にて上々の柿餅出る也。上手なれば一日に二千餘もむく也。しかればさのみむづかしき事にあらず。かくのごとくすれば其價も十倍す。其種類の別にあるにあらず。人の手より出る仕法なり。」と見ゆ。［參照］植物－柿（カキ）

例句

甘干

甘干に窓から覗く目白かな　買小（東華集）
甘干や霜降りせむる軒の内　蟹樓（倦鳥）
甘干に軒も餘さず詩仙堂　青々（妻木）
紫けぶり一串の柿甘みけり　同（倦鳥）

串柿造る（くしがきつくる）（晩）

季題解説　澁柿の皮を剝きて竹串にさし、乾燥さしたる後、室内に貯へ、白き粉を生ぜしめたるもの。晩秋製す。［參照］植物－柿（カキ）

柿餻（晩）

古書校註

【滑稽雑談】 九月。藏器云、柿餻黄柿に米粉を和して粿となし、蒸して小兒に與ふ。食すれば下痢下血を止むるに效有り。○昨珍云、按、李氏食經に云、糯米を用ひて洗淨すること一斗、大乾柿五十箇同じくつきて粉とし、蒸し食す。もし乾くときは棗泥を入れて煮、和して之を攪拌す。○多識篇云、柿餻、今按、可幾豆幾。△和俗また製し食ふ、多く說の如き也。

季題解說 餅米粉に、平柿又は熟柿を搗交ぜて製したる餅をいふ。〔參照〕植物―柿

柿羊羹（晩）

季題解說 柿の果を加へて製したる羊羹。甘味强し。〔參照〕植物―柿

新蕎麥（晩）　走り蕎麥

古書校註

【滑稽雑談】 八月△此者古俳書秋の部に賦する事なし、近世の俳士多く諷す。或は問、古來より蕎麥刈は十月部に賦す、前後いぶかし。或云、蕎麥は七月に種を下して八九月に實のる。然れ共未熟也。此時に於て、關東・北越などにはその莖にある物を振落し、或は焙爐にて乾かして磨いて(一)麪とす、ことの外風味宜し、是を新蕎麥と稱し或は振ひ蕎麥と稱す。武州の諸家殊に之を賞す。その采地の土民に課せて秋月一日も早きを以て賞玩とす。俳諧に近年用ふるも彼の地を始め、都にも七・八月の新穀を出して之を鬻ぎ之を賞す、故に秋に許用す。その莖と共に收刈は冬に及ぶ、故に十月に押す也。毛吹草に一蕎麥蒔一は七月、花は八月に記せり。是を正統とせり。

【篗纑輪】 或人曰、新そばは秋也。然るにそば刈るは十月の季、不審也と云々。是俳諧は其當用を專とする所也。新蕎麥その子未だ熟せずして青みあるものを賞翫す、依つて八月にはや信州より多く之を出す。是秋の景物俳諧の當用也。京畿にはこれなきこと、故にその子の熟するを待ち一刈る時を季とす。依つて十月也。

【俳諧歲時記】 其の早きものは七月收む。其の花未だ終らず、半花半熟する物をえらみ取りて、之を販ぐ、之を新蕎麥といふ。

【栞草】 九月。〔貞享式〕此の式は例の賞翫也。奈何となれば刈るは冬にして食ふは秋なる、前後の働を賞して也。

季題解說 八月頃採收したる蕎麥にて製したる蕎麥切をいふ。信州の名産にて岐蘇蕎麥と云ふもの、其出づること早きを以て珍重し、稍青みあるを喜ばるゝものにて、卽ち走り蕎麥の一つなり。俳句の季は蕎麥刈を冬とし

たるも、走り蕎麥のあるを以て、それを珍重する心にて新蕎麥と呼び、且又これを蕎麥刈に先んじて晩秋の季物とはするものなり。〔參照〕冬—蕎麥刈[illegible]

例句 新蕎麥

あゝ蕎麥ひとり茅屋の雨を白にして　鬼貫（鬼貫句選）
新蕎麥　花も實もある投き落し　許六（正風彦根躰）
新蕎麥や穂ほどとらぬ草の庵　同（同）
新蕎麥や戸ざし忘れて御代の民　同（風俗文選大成）
新蕎麥を知らぬ鄕のうつり哉　同（同）
　孟遊法に赴く餞別
新蕎麥に鴫の草葉忘るゝな　同（同）
新蕎麥や熊野へつゞく吉野山　同（同）
　田園尚子を詠む
あら蕎麥の信濃の武士は韻武士哉　去來（其雪）
堂頭の新蕎麥に出る麓かな　丈草（笈日記）
　松島より立歸りて
新蕎麥や鬼とも組まん病上り　桃隣（末若葉）
　成徹和尚に對す
新蕎麥や夕べ伊吹を夢に見た　支考（白陀羅尼）
蕎麥打や鶉衣に玉襷　其角（五元集）
新蕎麥とこそ三盃の夢の後　蓼太（蓼太句集）
新蕎麥や座敷て借る棒の音　同（同）
江戸店や初蕎麥がきに袴客　一茶（一茶句帖）

參考　蕎麥は、もと、そばきりといふ。漢名、河漏、又河洛。女房言葉に、あをい。その製法、合類日用料理抄に「蕎麥の粉能々吟じ、扨これ申候。いかにも能にえ候湯を少右の粉におとし、はら〳〵仕候程にこれ合、其後水にて能かんにこね候。打樣は常の如くにしてゆで申候。能ゆだり申候時、桶に湯を入ざつと洗、笊へあげ申候。扨桶に右のゆで湯にても又白湯にても入、右のそば切入れ笊を直に直に上に置、又上から能にえ湯をかけ申候。初入候湯と後に上からかけ申候湯とのゆげにてむし申候。ぬめりのき乾出申候時よく御座候」冷泉中納言爲久卿が法皇御所でそばきりを賜はつた時寄蕎麥戀を「呉竹の節の間さへも君のそばきりへだつともえこそ離れね」。

新豆腐（しんどうふ）（晩）

季題解說　今年收穫したる新豆にて作りたる豆腐をいふ。

例句 新豆腐

茶のけしき話しむ頃や新豆腐　其角（東日記）
初旅や岡部の里を新豆腐　彌平（同）

【参考事項】豆腐は淮南王始めてこれを作つたといふ。依つて淮南の名がある。かべといふは、海人藻芥に、内裏仙洞は一切の食物に異名を付けて被召事也一向不存知者當座に迷惑すべき者哉（中略）豆腐はかべ。（中略）如此異名を被付近比は将軍家にも女房達皆異名を付す。」又大上﨟御名之事女房ことば、「一、とうふ　志ろ物ともかべとも。」又親俊日記・言継卿記、天文年間の記事に白壁と見えてゐる。

薯蕷汁（とろゝじる）（晩）、とろろ　薯汁（いもじる）　むぎとろ

【季題解説】薯蕷を擂りおろして、これを擂鉢にて擂りつゝ汁を加へて作る。葱又は在苔其の他を藥味とし、飯にかけて食す。麥飯にかけたるものをむぎとろろといふ。

葡萄膾（ぶだうなます）（中）

【季題解説】葡萄を實のまゝ膾にしたるものにして、精進料理などに用ふ。

【参照】植物―葡萄。

【例句】

葡萄膾　寺の月葡萄膾は菓に盛らん　其角（萩の露）　泉陵院御興

芥子漬製す（からしづけせいす）（晩）

【季題解説】茄子・瓜等の野菜を麹・鹽・芥子を混じたるものに漬けて製す。秋に漬けこみ、貯藏して食用とす。

衣被（きぬかつぎ）（初）

【季題解説】里芋の子を皮のまゝにて茹で、鹽をふりかけて食ふ。これを衣被といふ。主として關東の風習なり。【参照】植物―芋。

鴫の羽盛（しぎのはもり）（中）

【季題解説】料理の名目にて鴫の羽もり、千鳥の羽もりなどあり。切たる頭・翅を以て全體のさまを作り、其背のところへ燒たる肉を盛るなりといふ。（古）【参照】動物―鴫。

氷頭膾（ひづなます）（中）

【季題解説】鹽鮭の頭を二つに切り割けば氷頭あらはる。氷頭とは白色半透明の部分をいふ。此部分を取り、薄く切り、おろし大根に和へ交ぜて膾と

す。酒家の賞翫するところなり。

【例句】

氷頭に　出石川の假寓宵に氷頭膾　青々（倦鳥）

【参考】氷頭は鮭鱒などの頭骨でこれを割つて白色のものを得る。これを食料に供したことは、古く延喜式、信濃・越中等の諸國から鮭の氷頭を貢したことが見えてゐる。

夜蛤（よはまぐり）（中）

【季題解説】通説に仲秋、江戸にて夜々蛤を賣り歩くものあり。十五夜には家家蛤の吸物をつくる。これを夜蛤といふとあり。たゞし吸物に夜蛤といふ感じ、又は古人の例句などより見て、白雄に「江都のならはにし、かならず蚪蛤を賣歩行にぞ」といふ前書にて「はまぐりはそだたぬよのちの月」なる句あり、抱一の句には「雀爲蛤」より以後の季にて作り居り、「雀爲蛤」は九月節にて十三夜よりは少し前なり。九月十三夜にも扱ひしものと見る方穩當と思はる。（古）

【例句】

夜蛤

照月の月や恨みん夜蛤　白雄（白雄句集）
からめくも秋の聲なり夜蛤　大江丸（俳懺悔）
仕切場の妻待受や夜蛤　素丸（素丸發句集）
混町の未だ寐ぬ聲や夜蛤　同（同）
手品にも作の滿干や夜蛤　同（同）
貝の瑞の雀に似たり夜蛤　抱一（屠龍之技）
何所となく聲の時雨るゝ夜蛤　咫堂（俳諧職人盡前集）
杉の葉の淺き焚火や夜蛤　和専（延享廿歌仙）
買ふ音を捨る寒さや夜蛤　貞佐（[illegible]故集）
蛤も栗も夜聲や藥賣　麥仙（俳諧職人盡後集）

鮞（はらゝご）（中）　筋子（すじこ）　すゞこ　甘子（あまこ）

【季題解説】鮞は鮭の卵を云ふ。一尾の卵數三四千顆ありて皮膜に包まる。一顆の大さ三分許、紅黄色透明にして赤點あり。鮭の産卵期に至りて猶ほ海水中にある時は、卵は卵巣内にありて卵粒個々に分離せず。これを取りて鹽漬としたるものを筋子と稱す。即ち鮭の子の卵巣中にありて未熟なるものなり。又一旦河川に溯上すれば、卵粒成熟して皮膜中に於て相分離す。これをはらゝごと云ふ。甘子と云ふははらゝごの事なるべし。鹽漬にして三四日にして食膳に上すことを得。

【例句】

鮞

味噌汁に鮞煮さす旅寐かな　宇角（田毎の日）

鯷漬（ひしこづけ）（中）

古書校註

【滑稽雜談】八月○按に和名抄云、鯷をひしこいわしと訓ずる非未レ詳歟。（中略一）扨この者は秋月に至りて鰮の小きを之を網し、醃魚となすを云ふ也。諸國に産す。殊に津國浦・播磨灘に生ずる者を上品とす。この者鹽藏なれば作者心得べし。

【年浪草】八月○本朝食鑑に曰、鯷は小鰯也、本朝古へより之を稱す、然れども下綱（二）及字書を考ふれば、鮎鮧の別名也。○和漢三才圖會に曰、一二寸許の小鰯を用ひて醢（三）となす。造ㇾ鮮鰯一升、洗はずして鹽三合に和し、三日にして後石を以て之を壓す。或は同じく茄子・生薑・穗蓼・番椒等を漬くるも亦佳也。鯷の字未詳。（鯷漬、攝陽群談に曰、兵庫の鰯漬、漁者大綱を下し鰯を捕へて以て潮に漬け之を製す。之を鰯骨と謂ふ。但し字義均しからず、小鰯を以て、鯷と爲す）

【俳諧歲時記】鯷一說に春とす、未レ詳。故に兩季に出す。

註（一）和名抄に「陶隱居本草の註に云、鯷魚は今の鯷魚也。」四聲字苑に云、鯷、音題、漢語抄云、比之古以和之　小鮎魚、黑くして味少し」なほ動物部鯷の條參照すべし（二）本草綱目の略。（三）カイ。塩漬のこと。

季題解説

鯷は小鰯なり。洗はざる鯷一升に鹽三合和し、三日にして後、石を以て之を壓す。或は同じく茄子・生薑・穗蓼・番椒等を和して漬るも佳なり。

例句

鯷漬

善き酒を育む主や鯷漬　　子規（子規句集）

陶山明登

酒盡きて鯷漬猶少しあり　　露月（露月句集）

日に渉る木履さびたり鯷漬　　青々（妻木）

鱁鮧（うるか）（晩）

わたうるか　にがうるか　しぶうるか　こうるか

季題解説

鮎の腸のみを鹽藏したるをいふ。一種の風味ありて酒客のよろこぶものなり。〔參照〕動物―落鮎（オチアユ）

例句

うるか

秋を見て箸にうるかの黑さかな　　青々（倦鳥）

鰯の黑漬（いわしのくろづけ）（晩）

宇和鰯（うわいわし）

古書校註

【滑稽雜談】九月○今近世の俳書に當月の部に出侍り。右良安遺法の如くば、則ちひしこ漬と同法なり。黑漬ともいふなるべし。然らば製造する節は秋にして只は雜たるべし。八月の部に鯷は出でたり。作者心得べし。

【年浪草】九月○豫州の産也、宇和鰯と稱す。その製雨鰮を切り割いで

鮠となす。鯔の性腸の中に黒汁有り、鹽水に和してその色黒し、之を黒漬といふ

［註］一 寺島良安の和漢三才圖會に載せたる黒漬の法を前に引ける也、但しこれは同書鯔の條下、[illegible]に[illegible]する記事にて前出[illegible]漬と同じなれば、こは滑稽雜談の著者の思ひ誤りなるべし、

［季題解説］伊豫宇和島に産する鯔を宇和鯔といふ、雨鰮を切削て鹽藏す、腸の中に黒汁あり、鹽水に和して魚黒し、これを黒漬といふ。［參照］動物―鯔―

裂膾（さきなます）（三秋）

［古書校註］

【年浪草】三秋。○本朝食鑑に曰、鯔の鮮なる者膾に作る、和漢三才圖會に曰、（一）裂膾とは割刀（二）を以て魚を解くの義也

【俳諧歳時記】裂膾は鯔を裂きて作る、此の魚刀を用ふるに及ばず、指を以て之を解く、故に裂膾といふ。

［註］一 鯔の條下の記事にて、年浪草には前引く・小鯔と共に併せかゝげたれ、今その部分の[illegible]省略す。（二）庖丁なり

［季題解説］新鮮なる鯔を刃物を用ひずして指にて裂き、そのまゝ膾にしたるものをいふ。［參照］動物―鯔―

鱲子（からすみ）（晩秋）

［季題解説］鯔・めなだ・鰆・鱸等の魚卵を胞のまゝ鹽漬にし、後乾し固めたるものにて、其狀蠟の如し。故に蠟の字をあつ。又形唐墨に似たるを以てからすみとは云ふ。淡にして佳味あり。多く西國にて製す、

［例句］

鱲子　鱲子や已一人の茶の煙　青々（妻木）

秋の幮（あきのかや）（初秋）

幮の果（かやのはて）　幮の名殘（かやのなごり）　幮の別れ（かやのわかれ）　九月幮（くがつがや）

［季題解説］蚊帳は夏なり、然れども秋になりてなほ釣ること多し。故に「秋」の字を冠す、九月（陰暦）に至りてなほ釣る幮を九月幮と云ふ、吊りやめて納めかねしものをも秋の幮として詠ず、［參照］蚊帳に雁を畫く（カマニカリヲエガク）

夏―幮―

［例句］

秋の幮　寐る迄の名殘なりけり秋の幮　小春（夢のあと）

翁を一夜とめて

秋の幮主斗りに成りにけり　蕪村（發句題苑集）

押入やふとんの下に秋の幮　なみ（なみ女遺稿）

[illegible]の夜半まで、幻住庵の[illegible]宿かれし一句

九月幮　曉の寐姿寒し九月幮　曉臺（曉臺句集）

吾角と曉臺が湖南の集合に遊ぶ

さす月もあな冷じの九月蟵　几董（井華集）

蟵の別れ

大家に旅して蟵の別れかな　白雄（白雄句集）

蟵の別れ来しくくと老ぞ行く　同（同）

蚊帳に雁を畫く（初）

季題解説 囲九月（陰暦）中蚊帳の中に雁を畫きて貼り、又は四方の釣手に雁の字をかく。これ聲を聞きたる意なりといふ俗說なり。但しこれは蝙蝠を雁と誤りたるものなるべく、桂林漫錄（桂川中良）に「蚊蟵畫レ雁　蚊蟵ニ雁金ヲ染メ或ハ紙ニテ切リテ付クル事、其由來ヲ知ル人無シ。按ニ物理小識。夏月線染二蝙蝠血一。橫縫二帳額一可二蚊不一レ入ト載セタルヲ見レバ、蝙蝠ハ蚊ヲ喰フ物故、厭勝ニ斯ハスルナルベシ、恐ラクハ崎嶴ニ寄寓ノ清人、夏ノ頃此意ニテ帳額ヘ蝙蝠ノ形ヲ草書ニ書キテ蚊ノ避クル呪トセシ事ナド有リシヲ、好事ノ人此邦ノ蚊蟵ヘモ畫ケルガ轉傳シテイツシカ雁金トハ成リケルニヤ。畫箋ナドノ泥畫ニ蝙蝠ヲ寫ス意ニテ、如此書キタルモアレバナリ」と說けるを正しとすべき歟。**参照** 秋の蟵　夏―蟵

扇置く（初）

團扇置く、秋扇　秋團扇　捨扇　捨團扇　忘れ扇　忘れ團扇

扇　團扇捨つる　團扇仕舞ふ

古書校註

【連歌至寶抄】初秋の部、扇をおく。

【御傘】扇を置くは秋也。但句體（一）と新式にあれども、句體を聞きわくる宗匠末代に無レ之故諍論出來安き間、置くと云ふ字さへ句中にあれば、皆秋にするがよき也。團（二）も置くとすれば秋也。

【年浪草】七月。

【俳諧歲時記】扇置く。團扇置く。又忘るゝともいふ、秋也。漸く秋冷になりて扇・うちはを忘るゝ也。

註（一）句體によるとの意。新式は連歌の新式　（二）「うちは」と訓む

季題解説 秋冷になりて扇の用なくなりしをいふ。團扇置も同意義なり。暑を忘れて其用も無く、いつと無く用ゐず、打すて置きたる扇・團扇の事を云ふものにて、「捨」の字あればとて敢て棄擲の意には非らず。「扇置く」と同意義にて只此日頃手にもとらずありしと云ふ迄の意なり。

實作注意 「捨」字に因はれて此事誤るもの多し。又秋扇・秋團扇は秋になりて猶使用するものを云ふなり。**参照** 夏―扇　團扇

例句

扇置く

西風や何ぞ自力の扇づれ　宗因（梅翁宗因發句集）

扇置く

閉書も忘るゝばかりや扇かな　宗因（[illegible]）

北枝に別るゝ時

物書て扇引さく名殘かな　芭蕉（奥の細道）

しらゝ迄心をやりて扇置　乙二（松窓乙二發句集）

一杯の茶もほの〴〵し扇置く　同（同）

秋扇

つく〴〵と繪を見る秋の扇哉　小春（鷹野）

秋風の間に殘せし要かな　召波（春泥發句集）

秋團扇

淺ましや骨出す秋の澁團扇　支考（柿表紙）

忘れては目にもかゝらぬ團扇哉　多代女（晴霞句集）

捨扇

塵書して捨られし扇かな　也有（蘿葉集）

狩衣の袖より捨つる扇かな　蕪村（蕪村遺稿）

捨團扇

捨初むる團扇や一夜晴の外　也有（蘿葉集）

白頭の吟を書きけり捨團扇　子規（子規全集）

簾名殘（すだれなごり）（中）　簾納む（すだれをさむ）　簾はづす

季題解説　秋冷になり一軒の簾を外し納むるをいふ。大よそ名月前後にするなりと。

參照　夏―青簾（あをすだれ）

例句

簾名殘

簾なごり二度の月見も過にけり　青々（倦鳥）

朝寒に日のさし簾名殘かな　同（同）

壁の蟲も淋しむ簾名殘かな　同（同）

簟名殘（たかむしろなごり）（中）　簟（たかむしろ）の別れ

季題解説　秋冷になり一簟を取去るをいふ。

參照　夏―簟（たかむしろ）

例句

簟名殘

枕簟の秋いよ〳〵と名殘かな　青々（倦鳥）

簟名殘におきし銀煙管　同（同）

行水名殘（ぎやうずゐなごり）（中）

季題解説　秋の半になりて行水を廢するをいふ。

參照　夏―行水（ぎやうずゐ）

例句

行水名殘

山寺の木の間浴みも名殘かな　小酒（杉の實）

行水の寒くて枸杞湯わかしけり　鼓竹（寶船）

障子洗ふ（しやうじあらふ）（中）　障子貼る（しやうじはる）　障子の貼替（しやうじのはりかへ）

季題解説　冬近くなるまゝ、障子を洗ひ、張り替へて入るゝをいふ。

參照

【例句】
障子貼る　歌會の日近う障子貼られけり　小酒（杉の實）

障子襖を入れる

障子襖を入れる（中）

【季題解說】夏季取外したる襖障子を秋になりて簀戸・葭戸などと入れかゆるをいふ。【参照】障子洗ふ（初秋）　障子入るゝ　襖入るゝ

【例句】
障子入るゝ　荻しづまり障子を入るゝ艸の宿　青々（倦鳥）

庭木刈る（初）

【季題解說】秋になりて庭園の樹木を刈り透かすをいふ。　秋手入れ

【例句】
庭木刈る　庭木刈る暑さに水をうちにけり　青々（倦鳥）
　庭木刈る中に桔梗のよろ／＼す　同（同）
秋手入れ　住むとして手入るゝ秋の端山庭　小酒（同）

秋の大掃除（三秋）

【季題解說】役所・牧場より其管轄町村の家々に、日を割當てゝ行はしむる大掃除をいふ。春秋二季にあり。（新）【参照】春　春の大掃除

菊の枕（晩）

【季題解說】秋日菊の花葉を採りてつくる枕をいふ。「雅遊漫錄大枝流芳」に菊枕。花史曰。（原本缺）［　］英當柿二菊數斛一秋日採二花葉一枕、日二幽人枕一。菊枕は目を明にし、頭痛を治と云ふ。芬芳千夜夢、風雨一囊秋。と笠翁が詩に作りしごとく、其香枕邊に薫し、清雅に堪たり。羅仙神隱藥枕之方あり。然ども幽人枕のよきにはしかじ。「遵生八牋」に秋采二甘菊花一、貯以二布囊一、作レ枕用、能清二頭目一、去二邪穢一と見ゆ。【参照】植物　菊　幽人枕　菊枕

【例句】
菊の枕　幽人にあらねど菊の枕かな　青々（倦鳥）
　妹が宿菊の枕をつくりけり　同（同）

風爐の名殘（晩）

【季題解說】風爐は茶室に用ふる夏季の爐なり。陰暦九月、茶家にて此風爐を納むる時、茶會を行ふをいふ。【参照】夏　風爐茶。

例句　風爐の名殘
小蕪の汁も出されて風爐名殘　青々（倦鳥）

朝茶の湯（初）

季題解説　茶家にて夏より殘暑の頃まで、日中の暑を避けて朝の内に催す茶會をいふ。

例句　朝茶の湯
月代に月こそ殘れ朝茶の湯　土休（皮籠摺）
臨濟の蓋置も出し朝茶の湯　青々（倦鳥）
秋風も後段になりぬ朝茶の湯　同（同）

冬支度（晩）

季題解説　冬の近づくにつれ、何くれとなく冬の支度を調ふるをいふ。

例句　冬支度
餅にする青刈り束ね冬仕度　貞女（倦鳥）
綿の値も女のむねに冬仕度　青々（同）

べつたら市（晩）　べつたら市　淺漬市

季題解説　十月十九日、東京市日本橋區旅籠町・人形町・小傳馬町・通油町へかけて、淺漬大根を賣る市の立つをいふ。此日人出多く、糀のつきたる大根を手に持ちつゝ、人込の中を縱横に驅け廻り、婦女子等の逃ぐるを興ずる者ありしが、たゞし現今は昔ほど客を呼ぶ賑ひなきやうに成れり。

例句　べつたら市
新漬の大根の山やべたら市　一蓑（寶船）
べたら市新漬の麴花と飛ぶ　同（同）
べたら市の神棚買ふて神迎　同（同）

松前歸る（中）

季題解説　南部津輕等の奥羽行商人が、夏を利用して蝦夷松前の地卽ち北海道へ渡りたるものが、陰暦九月を期して歸國するをいふ。〔参照〕夏—松前歸る

鹿の角切（中）　角切　鹿寄せ　鹿釣り

季題解説　奈良春日神社の神鹿の角長じ、往々人畜を害する事あるを以て、毎年秋の彼岸に、人を役して柵を作りて鹿を追ひ集め、輪に繩をつけたるものを鹿の角に投げかけ、鹿の之を取除かんとする時、數人して之を押へ、

鋸を以て角を切り取るをいふ。奈良にて神鹿の角を切ること、寛文十一年に始まると云ふ。〔參照〕動物—鹿(カン)

【例句】

角切

角切をたゞ人ごとに見てゐたり　谷衣（倦鳥）

角切に遊ぶ鹿あり草の花　蛩樓（同）

【參考】 市中に、春日神社の神鹿出でゝ、人畜に危害を加へしため、寛文十一年始めて此の事を行ふ。その後維新前迄は毎年一度行ひしも、その後廢絕の形で、この間明治二十四年に一度行つただけであつた。然るに近年又これを復興して年中行事の一となつた。

初獵(はつれふ)（晩）　銃獵期(じうれふき)に入(い)る

【季題解說】 毎年十月十五日より鳥獸の銃獵期に入る。この日より獵を好む人々初獵に出づるなり。〔參照〕春—銃獵停止(ジウレフテイシ)

【例句】

初獵

初獵や木の葉こざさの露しめり　蛩樓（倦鳥）

初獵や水に霜置く一口(イモアラヒ)　鼓竹（同）

鷹打(たかうち)（初）　鷹打所(たかうちどころ)　鳥屋(とや)　待網掛(まちあみかけ)　荒鷹(あらたか)

【古書校註】 【年浪草】凡そ七八月媒を以て鷹を取る、呼んで鳥屋待といふ。鷹雛巢を離れて飛翔して自ら食を求むる時、常に絕崖斷巖の喬樹を度る、その岩窟の邊に小茅を結びて居り、鷹の至るを窺ひ、羅を樹間に張りて死鳥を以て媒となし、之を捕ふ、之をあみかけ（網掛）といふ。是を鷹打といふ。○一說に禮記に曰、立秋之日鷹隼乃擊云々、是は鷹の諸鳥を擊つなり。荒鷹の羽つくろひして鳥を捕へんとする氣色の出來たるをいへり。然れども芭蕉翁筱の小文に云、伊良古

崎骨山といふは鷹打つ所なり、南海の果にて鷹のはじめて渡る所といへり。いらこ崎歌にもよみけりと思へば哀なる折柳（鷹一つ見わけて嬉しいらこ崎と吟ず）。蕉翁鷹打つ所とかゝれたるは鷹取る所といふ事なり。〔荒鷹―鷹雛巳〕、巣を離れ自ら食る時網を以て捕へ来る、之を網掛といひ又荒鷹といふ。荒鷹とは新に捕へて来た人に馴れざる者也。

【[illegible]】八九月頃鷹の雛、巣を離れて自ら餌を求むる時、絶壁断崖の喬木を渡るを、其巖窟の邊に小屋を設け網を張り、死鳥を囮としてこれを捕ふるをいふ。

鷹打所といふは、鷹を捕ふる所にして〔笈の小文〕に「伊良胡崎骨山といふは鷹打所なり、南海の果にて鷹のはじめて渡る所といへり。」〔参照〕小鷹狩、鷹狩（別集ニ有）、動物、鷹渡る、冬・鷹狩。

【[illegible]】

鷹打　鷹ひとつ見つけてうれしいらこ崎　芭蕉（笈の小文）
荒鷹　荒鷹の影怒るらん碓氷川　溪石（瓜作）
　　　荒鷹の山を離れて家に斬　呂竹（砂川）
　　　荒鷹の睫や雲の行く處　青々（妻木）
　　　あら鷹や眼に大空の雲を蹴る　同（森鳥）

小鷹狩（秋）

初鳥狩　初鷹狩　初鷹　初鷹野　小鷹野

【古書校註】

【御傘】小鷹狩、鶉狩ともいふ。然れ共鶉に小鷹付けても苦しからず。其のいはれは鶉ばかりを取るにあらず、別の鳥をも取る故也。秋也。つみ・ゑつさい・さしば・くち、是等皆小鷹の名なり。○大鷹かりは冬也。鷹とは、はい鷹・つみ・悦哉・ばかりも鷹とばかりも皆冬也。小鷹は秋也。小鷹狩と、鷹狩とくちさし・はこのり等を云ふ也。皆秋也。朝鷹狩は春也。狩場の事、とさけび・小田の狩・つめぬ・巣立つ鳥・をしへ草・おち草・狩杖・セコ網・如此の狩詞皆冬也。鷹のりやごめは夏也。とや出しは秋也。秋のすこのり共よめり、小鷹の事なと、鷹に狩付句不レ嫌レ之。但聞すへ鳥・つかれの鳥などはきらふ。○初鳥狩、初鷹も秋也。鳥屋出の鷹を始めてつかふ事也。鳥屋出の鷹とは夏より羽のぬけたるが鳥屋にこめてかひ羽の出揃ひたるを盆の聖靈の箸をともして、夜鳥屋より出すによりはし鷹と申すといへり。

【滑稽雜談】「初鳥狩」七月。○連歌新式抄云、初鳥狩は秋也。然れども大鷹の事也。始めて秋よりつかひ初むる也。△或抄云、小たか狩も秋なれど初鷹狩・初鳥狩などいふは少しかはりめ侍る也。作者心得べし。〔小鷹狩〕鷹の抄に云、總じて小だか狩とは鶉・雲雀、その外秋の小鳥を狩る事也。小鷹犬といふ事も秋也。

【年浪草】「初鷹狩」雜談抄に初鳥狩・小鷹狩少しかはりめあれども、萬葉新點によらば差別なし。小鷹を秋とするは鶉・雲雀、其の外秋の小鳥狩也。

【季題解説】 大鷹は冬として、鶴・雁・鴨の類を狩る也。大やう此の心得にて置くべし。

【季題解説】 大鷹は冬として、鶴・雁・鴨の類を狩れども、小鷹は鶉・雲雀その他秋の小鳥を狩るに用ふる故に秋季とす。（古）

【實作注意[?]】 初鳥狩―初鷹ともに鳥屋出の鷹を初めてつかふをいふ。鳥屋出の鷹とは夏の羽の脱けたるを鳥屋に籠めて、羽の出揃ひたるを云ふにて、藻鹽草には七月十六日とあり。又、はし鷹は攸鷹と云ひ、盆の聖靈の箸を松明として夜鳥屋より出すにより箸鷹ともいふ。 參照 鷹の塒出（タカノトヤデ） 鷹打（タカウチ） 駈鶉・ 地理―秋の狩場（カリバ） 動物―小鷹（コタカ） 冬―鷹狩（タカガリ）

【例句】

小鷹狩

淺生津
あさむつの橋に揃ふや小鷹狩　涼菟（山中集）

畷路にて
半頂に小田の殘りや小鷹狩　同（行脚尼）

御客分の浪人衆や小鷹狩　嘯山（葎亭句集）

七ツ子の野袴ゆゝし小鷹狩　同（同　）

井伊殿の御拳見ばや小鷹狩　几董（井華集）

萩折りつ尾花しごきつ小鷹狩　道彦（蔦本集）

【參考】 小鷹狩　春の鷹狩を朝鷹狩といひ、秋を小鷹狩また初鳥狩といひ、冬を單に鷹狩また大鷹狩といふ。秋の狩は小鳥を獲るのである　萬葉集大伴家持の歌「岩瀬野に秋萩しぬき馬並めて初鳥狩だにせずや別れむ。」紀貫之集には既に小鷹狩・大鷹狩の語が見えてゐる。

駈鶉（かけうづら）（三秋） 鶉鷹野（うづらたかの）

【季題解説】 馬上にて鷹を居ゑて狩立て、鳥に合する鷹狩をいふ。（古） 參照 小鷹狩（コタカガリ）

【例句】

鶉鷹
かげろふが野を駈けぬくや鶉鷹　青々（倦鳥）

刈集（かりづめ）（晩）

刈詰（かりづめ）　小田（をだ）の刈集（かりづめ）

【季題解説】 鶉鷹野にいふ語にして、稲を刈り集め、又は刈り殘したる所をいひ、ここに集まる鶉を鷹によりて捕ふるなり。 參照 鶉鷹（ウヅラタカ）

小鳥狩（ことりがり）（中）

小鳥網（ことりあみ）　霞網（かすみあみ）　かすみ　ひるてん　囮（をとり）　媒鳥（はいてう）　囮番（をとりばん）　囮（をとり）守（もり）

【季題出典[?]】 【俳諧歳時記】 八月。「囮」或は媒鳥に作る、媒鳥を以て小鳥を取る。

【季題解説】秋渡りくる小鳥のいろ〳〵を網して捕ふるをいふ。

【實作注意】小鳥網は高き山の頂、或は山中の小高みに張る網にて、霞網かすみ・ひるてんは、共に絹・苧等の絲にて編みたる、長さ三四間、高さ二三間の半圓形に張る網をいふ。鳥屋とは、囮を掛けたる後方の高き所に掛けて、小鳥を捕ふ小屋をいふ。小鳥群れ渡る時、囮頻りに鳴いて、これを呼ぶに、小鳥誘はれて網上に下る。其時長き竿の先に厚紙・切布等を付けたる追竿にて追へば、誘はれたる小鳥は驚き四散して、終に網にかゝるなり。又鳥屋師は十月十五日の頃期始めより、十一月下旬まで、山の小屋に寐泊りして狩を行ふもの。引鳥とは、既に捕へし小鳥の鼻孔に長き絲をつけ、それを引きて渡鳥をよぶをいふ。【參照】高擶[illegible]　動物・渡り鳥・色鳥[illegible]

【例句】

小鳥狩

畠踏む似せ侍や小鳥狩　太祇（太祇句選）

弓張も空にかゝるや小鳥狩　嘯山（律亭句集）

日は竹に落て人なし小鳥網　太祇（太祇句選後篇）

小鳥網

川上や黄昏かゝる小鳥網　召波（春泥発句集）

椋の木に囮掛たり家の北　子規（子規句集）

眞直なる木々の林や囮籠　虚子（虚子句集）

三日の月家に入るゝや木の囮　葵葉（倦鳥）

池の端の盛り上げ土に囮かな　朱石（同）

杉垣に實のつく頃の囮かな　小酒（杉の實）

嘴枯の見ゆる鶫の囮かな　青々（倦鳥）

【參考】囮鳥を懸けて鳥を捕ることは、古くから行はれた。萬葉集卷十三、作者未詳の歌、「淡海の海泊八十あり、八十島の島の埼にあり立てる花橘を、上枝に黐ひきかけ中つ枝に斑鳩懸け下枝に比米を懸け、」云々とある歌は、近江朝時代の歌だと云はれ、囮鳥を懸けて鳥を捕ることを叙してゐる。

鳩吹（三秋）

【古書校註】

【御傘】秋也。鳩の字には折を嫌ふ。生類に二句、吹くの字に三句、風體に二句去る也。鳩吹くと云ふ事説々有之。

【年浪草】七月○奥儀抄に曰、鳩吹とは何事ぞ。答曰、獵師の鹿待つには人を呼ばんとても、又人に鹿ありと知らせんと思ふにも、手を合せて吹くを鳩吹とはいふ也。鳩といふ鳥の鳴くに似たる故也。又秋としも詠めるは、鹿の秋は妻を戀ふる心なれば、笛鹿とて笛にて鹿の聲をまねびて、我は隱れて待つことのある也。○八雲御抄に曰、鳩吹く秋、是仲實が歌也。狩をするに、手にて鳩のまねをする也。○歌林良材に狩人の鳩を捕へんとて、

鳩吹　鳩吹くや家より高き栗畠　器水（續拾遺）

高擌（はご）（中）　高擌籠（たかはご）

[出典備考]【俳諧歳時記】八月。媒鳥の羽籠也。高く竿頭に著けて木の末に繋く、故に高はごと云ふ。

[季題解説]　木の枝を適宜に切り、これに黐をつけ、高き竿の先に結びつけ、或は又高き樹の梢に出して囮を置き、渡る小鳥の擌にかゝると見れば、手早く引き下ろす裝置をなして小鳥を捕ふるをいふ。［大野政治隨筆］に「高擌。おのれいとけなき比の遊びに、高はごといふ物を木にかけて、小鳥を取てあそべり。其製木の枝に黐でぬりて、高くしげりたる梢に出し、其木に囮「和名天々毘」を籠に入て、是を木の半に絲もて引あげおけば、おのがさまぐねになくを、渡り來る秋の色鳥、おのれが友とやおもふらん。其木におり立んとして、もちぬりたる枝にかゝる也。凡八月半より十一月半迄の事也。鳥は鵯（ヒ）・かはらひは・目白・獦子鳥（アトリ）・ぬかひは・連雀・鵤（イカルガ）・山がら・四十から・小がらの類なり。（下略）」と見ゆ。［參照］小鳥狩（コトリガリ）　木ゝ引（ヒキヒク）

[例句]

高擌　高擌に雲のゆきゝのしづかなり　小酒（杉の實）
高擌に鳥のさとさも誘はるゝ　青々（同）
高はごにつかで空ゆく鳥の數　蜃樓（倦鳥）
高擌のうすぐ見えて霧の中　落葉（鹿笛）

吹雲雀（ふきひばり）（晩）

[季題解説]　秋の土用の頃野にカスミを張り、囮をおきて、附近にかくれて雲雀笛を吹き、集り來る雲雀を網にてとること。［參照］春—雲雀笛（ヒバリブエ）

木菟引（づくひき）（中）

[季題解説]　木菟の眼を縫ひたるを架上に繫ぎ絲をつけ、側に擌（ハゴ）を設けて時々絲を引き動せば、諸鳥來り噪ぎて木菟を嘲弄し、近づきて擌にかゝる。これを木菟引といふ。

[實作注意]　木菟を冬季とするより、歳時記によりては木菟引も冬季に採錄せるものあれども古人の集にも秋季に見え、且種々の小鳥を捕ふるといふことの渡鳥を聯想さるゝ上に於て、これを仲秋に入るゝを妥當とすべきか。

［參照］高擌（タカハゴ）

[例句]

木ゝ引　木菟引の頭巾は藪の隱者かな　青々（倦鳥）

秋の鵜飼（中） 秋の鵜

【季題解説】秋になりても行ふ鵜飼を云ふ。

【實作注意】單に鵜飼と云へば夏季なり。秋と冠して之を別つ 【類題】夏—
鵜飼

【例句】

秋の鵜飼 秋の暮鵜川〳〵の火ふり哉 合咕（曠野）
火を焚いて秋もなげなる鵜舟かな 汶水（俳諧發句題叢）

鮭打（中）

【季題解説】秋、出水後にて鮭を漁るに、河の曲りたるところに簗杭を透間なく打ち、鮭の流を上るとき、これに當りて河原に躍りたるを、竿にて打ち取るをいふ。【類題】天文—鮭颪 動物—鮭

鯊釣（中）

【實作注意】鯊は川の下流、海の近き處にて釣る。綸の端、鈎を去ること二三寸ばかりの所に鉛の錘をつけ、鈎を地に附かしめ、鯊の餌に來る微動を待ちて竿を揚ぐるに巧拙ありと雖も、々巧拙となく釣れ易きを以て、人遠近より集り來りて秋日の興とす。【類題】動物—鯊

【例句】

鯊釣 鯊釣るや水村山郭酒旗風 嵐雪（玄峰集）
鯊釣の小舟漕ぐなる窓の前 蕪村（蕪村句集）
沙魚釣や鼻おこめきて百とよむ 太祇（太祇全集）
鯊釣の日和になりぬ葉鶏頭 子規（子規句集）
鯊舟 門前に鯊舟よぶや竹林寺 青々（妻木）
鯊釣や何御一日水に雲 同（同）
鯊釣るやたま〳〵鷺のしたしめる 草月（さつき）

鰯引く（三秋） 鰯網

【季題解説】鰯の群をなして來る時、海の色變ず。漁人かねて之を知つて網して捕る。漁村の男女・小兒に至るまで濱に出でゝ網を引く。鰯網引くは、晝夜を擇ばず。因つて夜半に曉に網引の聲を聞くことあり。【類題】動物—鰯

【例句】

鰯引 月代に小鰯光る網引かな 知道（田毎の日）

鯊引く　引上げて平砂を照らす鯊かな　白扇（巴莉拾草集）

根釣（ねづり）（三）

【季題解説】晩秋に至れば魚多く岩石の根方に潜む、これを釣るを根釣といふ。

【例句】

根釣

ほのぼのと朝飯包む根釣かな　其角（類柑子）

夕まけて根釣ほうけし一人哉　王春（天の川）

根釣すや蝶のせて来るふくれ潮　草衣（草上）

下り簗（くだりやな）（中）

【古書校註】

【御傘】崩れ簗・下り簗、皆秋也。

【滑稽雑談】八月。歌には上り・下りの簗に春秋の差別なし　但連歌・俳諧には差別ありて季に配す。

【年浪草】八月。○和漢三才圖會に曰、（上略）その下り落つる者（一）を待ちて、簗を構へて以て捕ふる、名けて下り簗といふ。

註（一）落鮎をいへるなり。○落鮎・鯊詣の條參照

【季題解説】鮎の秋になりて流れに随ひ海へ下るを落鮎といふ。此時簗を仕掛けて捕るを下り簗といふ。【[illegible]】崩れ簗（秋）、春—上り簗（春）

下り簗

しかじかと主訪来ず下り簗　蕪村（新五子稿）

行秋のところどころや下り簗　同（同）

ものゝ葉に魚のまとふや下り簗　太祇（太祇句選）

又しては狐見舞ぬ下り簗　召波（春泥發句集）

崩れ簗（くづれやな）（中）

【古書校註】

【御傘】崩れ簗・下り簗、皆秋也。

【年浪草】九月。崩魚梁とは下簗の後用ひずして破壊せる者也。

【季題解説】晩秋放棄されたる下り簗の、水流又は風雨のために崩れたるをいふ。【[illegible]】下り簗（秋）、春—上り簗（春）

【例句】

崩れ簗

歸り来る魚の栖や崩れ簗　丈草（[illegible]集）

獺の月に啼音や崩れ簗　蕪村（蕪村遺稿）

洪水に崩るゝ簗やそれ仕舞　移竹（乙御前）

手叩て皆戻りけり崩れ簗　嘯山（葎亭句集）

川添や雨の崩れ家崩れ簗　一茶（九番日記）

親の簗崩れ仕舞もせざりけり　同（同）
焚ほどに干るや瀬落の崩簗　梅室（梅室家集）

網代打（あじろうち）（中）　網代木打つ（あじろぎうつ）

古書校註

【御傘】網代。冬也、水邊也、生類に打越を嫌ふ。網代うつは、網代木を拵ふる事也、冬氷魚を取るべき用意也、秋に成る也。

【滑稽雑談】九月。○延喜式、内膳式曰、山城國・近江國、氷魚の網代各一ケ處、その氷魚九月に始めて十二月三十日までこれを貢す。○藻鹽草に云、網代は冬也。しかれども九月九日の前に打初めて宇治の網代人は供御に奉るにや。又網代は宇治に限らず、田上にもよめるか。

季題解説　網代は川瀬に多くの竹木を編み列ね、その果に簀をあてゝ冬季魚をとる裝置にして、晩秋此網代を設くる木を打つを網代打といふ。〔参照〕冬—網代アジロ

例句

網代打つ　濡て出る簑哀れなり網代打　山鳥（田毎の日）

参考　網代の爲の木を打つ。萬葉集柿本人麻呂の歌に、「もののふの八十宇治川の網代木にいさよふ波の行く方知らずも。」

八月大名（はちぐわつだいみやう）（初）

季題解説　八月田家農閑の時をいふ。其時期の開放的氣分を大名に譬へて言へるなり。

秋耕（しうかう）（三秋）

季題解説　耕すは春なれども、秋耕すに秋字を冠して云ふ。〔参照〕春—耕タガヘシ

例句

秋耕　端山なる秋日に人の畑うちぬ　青々（倦鳥）

豊年（ほうねん）（中）　出來秋（できあき）

季題解説　五穀豐饒の年をいふ。〔参照〕稲刈イネカリ

例句

豊年　豊年は色染む雲のはたてにも　青々（倦鳥）

出來秋　出來秋の名ばかりあゆむ法の筆　　貞佐一周忌　諸 債（諸 の 身）

蟲送（むしおくり）（初）　田蟲送（たむしおくり）　稻蟲送る（いなむしおくる）　田螟蟲送（たばったむしおくり）

【古書校註】一【清涼耕記】七月〇これらの説（一）によればその法和漢共に舊し。當代も邊道に田の蟲を送る事侍る。夜中炬火を乘りて鉦鼓をならし、[畔]にて馬を作り野外の清き所、又は河邊などに送り捨つる也。是また蝗を攘ふの法也。

【年浪草】七月、紀事に曰、年に依り田蝗害を爲すときは、則ち民人鐘鼓をうちて野外に送る。之を蟲を送るといふ。

[註]（一）古語拾遺・三代實錄・日本紀等に見ゆる田の害虫を攘へる記事を引けり。

【季題解說】七八月頃、稻田に害蟲のつくを驅除せんが爲め村人群集して氏神に詣で、鉦太鼓を打鳴らし、松明を連ね、田野を巡り二蟲を拂ふをいふ。

【同類】稻蟲ー蝗ー。　夏ー土佐の蟲送りなれば

【例句】

蟲送
船岡や蟲を送るに渉（わたり）なし　古 水（瓜 作）
蟲送る夜や先に立つ鳴子引　白 雄（白 雄 句 集）
蟲送る松明森にかくれけり　子 規（子 規 句 集）

【參考書】日次紀事六月〇田蝗爲害則民人擊鐘鼓送野外。是謂送蟲。

と見える。

添水（そふづ）（三秋）　僧都（そうづ）　はじき　兎鼓（をどしつゞみ）　添水唐臼（そうづからうす）

【古書校註】

【御傘】そふづ。田を守る物也、秋也、植物に二句嫌ふ。人倫に非ず。山田もるそうづの身こそ悲しけれ、と云ふ古今の歌をよく相傳なき人はかかしをそうづと云ふと思へり。（　）夜にて水を田に入るる物也。そふづは添水也。大事の秘説なれ共爰に記す。水邊になる也。それを玄賓僧都の我が身になぞらへて讀み給ひし也。本僧都の僧都とは各別の事也。付けても苦からず。作も夫田の（　）僧都によそへて、田を守るやうにしたてたる句ならば、もはや眞の僧都とは有る可からず。

【増山の井】八月。そうづは添水と書きて水邊にしかけて水の力を添へて音を出す鹿おどし也。かゝしとそうづは別の物なれども、玄賓の山田もるそうづと僧都にそへてよみ給へる故に鳥おどしの人形と心得て古歌にもよめる事多し。しかれば實は別の物也。先年石川丈山老人門外にそうづを作りてその文字その故事を小檮堂にもて予に問起し給へり。予師説に任せて答へ侍りし、そのやう此の如し。

【滑稽雜談】 八月。△これら添水の說兩義也(一)。丈山詩に出るは(二)、竹筒を以て流水に從ひて我互々の聲をなすもの也。奥儀抄等の說は古今の歌「足引の山田のそほづ己れさへ我をほしといふうれはしき事」、新撰六帖「人しれぬ山田のそをづさのみやは立ちすくみても世をばつくさん 行家」の歌は、皆人形の體と聞えて、鳴るの心見えず、俗にいふかゝしといふ者にや、猶其者に明らむべし。「山田もるそほづの身こそ悲しけれ秋はてぬればとふ人もなし 玄賓」。(三)

【年浪草】 和漢三才圖會曰、備中國湯川寺の玄賓僧都迹を民間の奴にくらまし田に入りて稻を守り、鳥雀を驚かすを以て業とす。今に至て鳥雀を驚かす翁靈を僧都と云ふ。

註 (一)奥儀抄に人がたといへる說、古今集雜歌に同じく人がたにして稻葉の露にぬれそほつが故にそほづといふ事、及び竹筒となす兩義 (二)丈山の從高集に見ゆ。(三)この歌續古今集に出づ。○千蔭の「わくかせわ」には添水はたゞ田に水を添ふる具にて鳥獸を驚すものに非ずといひ、「糸切齒」にはこれを譏して、竹を以てからくり、谷川の水を引き但の如くして鳥を發せしむるもの、といへり。

季題解說 添水は添水唐臼を略して云ふ。其法種々あり。尺餘の竹の扁平なるを踏臼の如くにし、山川又は田の水落等に仕掛け、水流によりてその一端、石或は金屬類を打ち、その音によりて田畑など荒らす鳥獸を嚇し防ぐをいふ。

實作注意 案山子と添水は共に田畑の鳥獸を嚇す爲めのものなれども、添水は水の力に依りて音を發するもの、案山子は人の形したる物にて別物なり。彼の玄賓の歌に「山田守るそほづ……」と詠めるは、古は曾富騰と云ひ、後の歌には曾富良とよめるものにして、兩露にそぼちて立てる意にて案山子を云ふものなるを、「そほづ」「そうづ」音の通へるを以て、玄賓の歌の「そほづ」を添水なりとするものあるは誤りなり。〔參照〕 案山子、鳴子、田守。

例句

添水

月細うこぼし減して添水かな	蓼太	(蓼太句集)
秋風の水を切るかと添水かな	同	(同　)
同じ事を添水の繩や人の上	白雄	(白雄句集)
立去れば五歩に聲ある添水哉	几董	(井華集)
鳴る音は添水なるべし月の中	乙二	(をのゝえ草稿)
通夜の窓ことり〳〵と添水かな	鳴雪	(鳴雪句集)
寶の入らぬ山田いつまで添水かな	月村	(同　人)
百姓は索の帶して添水見る	蜃樓	(倦鳥)
縣居の淋しさ守る添水哉	青々	(妻木)
裾山の嵐かくれに添水哉	同	(同　)
入り來れば添水からびて聞えけり	同	(倦鳥)
痩稻ののこりてあるや添水畑	同	(同　)

[illegible]　僧都と書くに蒐字である。案山子に同じ。古事記に、少名彦名の神を知つてゐた久延毘古を説明して、これは今に山田の曾富騰といふ者で、此の神は足は行かねども天の下の事を盡に知れる神であると説明してゐる。古今集に讀人知らず「あしひきの山田のそほづおのれさへ我をほしといふうれはしきこと」。續古今集に僧都玄賓の歌「山田もるそほづの身こそ哀なれ秋はてぬればとふ人もなし」とある。いづれもかやうな偶人の意である。しかるに後に添水の字を宛てるよりして板にて作り田に水を添へる具である、又かくして鹿をおどすのであるとなすは、皆字面に拘泥したる解である。

案山子（かゞし）（三秋）　捨案山子（すてかゞし）　遠案山子（とほかゞし）　鳥威し（とりおどし）　おどろかし

[illegible]

【増山の井】　八月。かゝしは鳥おどしの人形也。

【滑稽雜談】　八月。和俗田を守るため秋に至りて鹿を驚かす爲藁人形の如くなるものを作り、弓箭を帶させ、田間毎に立つる。これ鹿驚（かゝし）といふ。又案山子の字を用ふ。

【年浪草】　藝文類聚に云、古へ三皇の世、人死して未だ棺槨殯葬あらず。包むに白茅を以てし、之を中野に投つ。孝子其の禽獸の食ふを見るに忍びず、彈を作りて、之を守り、禽獸の害を絶つ。按ずるに彈は俗に云ふ案山子也。今田圃の中草偶をして弓を持たしめ、以て鳥獸を防ぐ也。

[illegible]　人形に蓑笠を着せ、弓矢を持たしめ、これを田畑に立てゝ鳥獸を威す人形をいふ。　[illegible]　添水（ソウヅ）　鳴子（ナルコ）　田守（タモリ）

[illegible]

案山子

春日野に釋迦の案山子は笑止也　　來山（今宮草）
[illegible]にすかしこを[illegible]の御[illegible]を受けて

棒の手の同じさまなる案山子哉　　丈草（北の山）

水風呂の下や案山子の身の終り　　同（[illegible]集）

[illegible]別

跡に居る我を山田の案山子哉　　支考（射水川）

笠ぬぎて見せばや我は其案山子　　同（東西夜話）

一俵も取らで案山子の矢弓哉　　同（桃盜人）

僧官僧都

僧都ともないに案山子の歸洛哉　　同（山[illegible]集）

道くだり拾ひ集めて案山子かな　　桃隣（[illegible]集）

川流れやつと上れば案山子哉　　同（一の木戸）

粟稗は刈られて古き案山子哉　　同（古今白室句選）

薪ともならで朽ぬる案山子哉　　正秀（有[illegible]道）

退屈に見ゆる案山子の小弓かな　　同（初[illegible]）

こゝかしこ世に出顔の案山子哉　同（荒小田）
こけなりに人待顔の案山子哉　同（波島集）

亡夫の七回忌を弔ふに、我と同じ道なる人々の集りければ

何某と言ひたさうなる案山子哉　智月尼（柞原）
案山子にも哀れさ負けじ尼仲間　同（一字幽蘭集）
田の中に住むか案山子の今長者　同（駒掃）
笠脱げて面白もなき案山子哉　舎羅（初便）
山賤が案山子作りて笑ひけり　重五（曠野）

一鳥不鳴山更幽

物の音ひとり倒るゝ案山子哉　凡兆（猿蓑）
近付に成りて別るゝ案山子かな　惟然（其便）
一ト夜とも許して寐せぬ案山子哉　卯七（有磯海）
山を出て案山子も道の便り哉　探志（初蝉）
間まいと言ふか案山子の腰刀　去來（鳥の道）
仕て退けて成るが可笑しき案山子哉　杜若（旅袋）
立寄りて案山子に座組む日南ぼこ　十丈（草庵集）
忠度と名乘もあへぬ案山子哉　野坡（荒小田）
山風に笠取られたる案山子かな　鼠彈（枕かけ）
鹿の來ぬ日は淋しがる案山子哉　吾仲（[illegible]）
立ながら往生申す案山子かな　北枝（草苅笛）

案内より仕したるものを、山端に置にすとて

六兵衛は案山子と何を申すやら　乙州（土大根）
捨ものを拵へにしたる案山子哉　りん女（田植諷）
蓑蟲の父よと呼ぶは案山子哉　也有（蘿葉集）
夜の笠月も着ると〻案山子哉　同（同）
花野には人を立せて案山子哉　同（同）
足許の豆盗まるゝ案山子かな　同（同）
待て案山子とても頼ばゝ雪見迄　同（同）
畑主の我脱哉を案山子哉　同（同）
寐て居るは乞食立たは案山子哉　同（同）
鳥追も秋の來ぬとて案山子哉　同（同）
三文もせぬ矢を雁に案山子哉　同（同）
弓落ていづれ案山子の前後ろ　同（同）
良遲の相手にひとり案山子哉　同（同）
月に寐ぬ事は覺えて案山子哉　同（同）
冬瓜の枕定むる案山子かな　千代尼（千代尼句集）
水落て細脛高き案山子哉　蕪村（蕪村句集）
我脚に寅ぬかるゝ案山子哉　同（同）

案山子

雲裡房つくしへ旅たつとて我に同行をすゝめけるに
えゆかざりければ

秋風の動かして行く案山子哉　蕪村　（蕪村句集）
姓名は何子か號は案山子哉　同　（同）
三輪の田に頭巾着て居る案山子哉　同　（同）
[illegible]繪に
御所柿に賴まれ顏の案山子哉　同　（同）
折れ盡す秋にイむ案山子かな　同　（蕪村遺稿）
笠とれて面目もなき案山子哉　同　（同）
花鳥の彩色殘す案山子かな　同　（同）
錦する野にことゝゝと案山子哉　同　（同）
稻刈れは化をあらはす案山子哉　同　（同）
錦する秋の野末の案山子かな　同　（新五子稿）
人に似よと老の作れる案山子哉　同　（同）
木曾殿の田に依然たる案山子哉　同　（同）
畠主の案山子見舞て戻りけり　同　（同）
蓑笠の助殿の田の案山子かな　同　（夏より）
夜嵐に吹細りたる案山子哉　太祇　（太祇句選）
吹倒す起す吹るゝ案山子かな　同　（太祇句選後編）
今朝見ればこちら向たる案山子哉　同　（石の月）
河路を過るに
落る日に影さへ薄き案山子哉　白雄　（白雄句集）
楠の鎧着せたる案山子かな　蓼太　（蓼太句集）
人先にやもめの立る案山子哉　同　（同）
立されば形成したる案山子哉　召波　（春泥發句集）
夕日影道まで出づる案山子哉　同　（同）
をちこちのたづき無き身の案山子哉　同　（同）
編笠の殊に侘しき案山子哉　同　（同）
二つある案山子容カテこ遣へけり　同　（同）
腰を折る五斗の脆けの案山子哉　同　（同）
朝風に弓返りしたる案山子哉　同　（同）
草取りし笠の辛苦を案山子哉　几董　（井華集）
稻荷に詣づる道のほと
稻の葉の青かりしより案山子哉　月溪　（月溪句集）
雨に濡れ風に吹るゝ案山子哉　野菊　（續明烏）
矢に羽をほしげもなくて立つ案山子　乙二　（松窓乙二發句集）
案山子より日のさし初めて滌へ水　同　（同）
仿蕪川
それとなく案山子立テたし向ふ山　同　（同）
山里は是を人目に案山子哉　成美　（成美家集）

面白き人には成りて案山子哉　士朗（枇杷園句集）
案山子立つ餅なき家は無かりけり　一茶（一茶句帖）
朝顔のちよいと咲たる案山子哉　同（七番日記）
どちらから寒くなるぞよ案山子殿　同（同）
うかと来て我を案山子の代りかな　同（同）
古飯をぶらさげて居る案山子哉　同（同）
姨捨はあれに候と案山子哉　同（同）
乳呑子の風よけに立つ案山子哉　同（おらが春）
紋處に蝶々のつく案山子哉　同（一茶句帖）
菅頭の模様にからむ案山子哉　同（同）
道問ひにはる／＼来れば案山子哉　同（一茶新集）
日々度ょ案山子も終のけぶりかな　同（同）
老の身も案山子の前も恥かしき　同（[illegible]集）
吹荒れて勇みのつきし案山子哉　梅室（梅室家集）
立てに行く案山子大勢送りけり　同（同）
高みから見て置直す案山子哉　同（同）
麓田の夕日に多き案山子かな　子規（子規句集）
こけもせでやつれ行く身の案山子哉　同（子規全集）
あるが中に最も愚なる案山子哉　同（同）
村會や背戸の案山子もまかり出よ　同（同）
案山子ばかり道とふべくもあらぬかな　虚子（虚子句集）

鳥威し

くえ彦と申せば神よかゞし荒る　青々（倦鳥）
日もなげに威し作るや月明り　白雄（白雄句集）
おぞましや鳥の威しに女もの　無妻子（倦鳥）
おもむきや行手／＼の鳥おどし　草鳴（愛吟）

おどろかし

矢は盡きて今は專なしおどろかし　合羅（三河小町）
山畑や茶も莚もおどろかし　白雄（白雄句集）

参考　案山子の字を宛てる事、梅園日記に考證がある。その要を掲ぐれば、これはもと禪家の語で、多くの山の中に北に當つて一番高く見事な山を主山と定め、主山の南に當つて離れ山があつて机の如くなるを案山とし、主山の左右に在つて主山を受ける形の山を輔山といふ。即、案山とは大山に對して小山といふ義で、禪僧が他の僧を罵倒して案山子と云つたのがもとで、鳥おどしの如きを案山子と言したといふ。傳燈錄卷十七道膺禪師傳に「僧問、孤廻々峭巍々時如何。師曰、孤廻々峭巍々。僧曰、不會。師曰、面前案山子、也不會」とある。物類稱呼に「西國にてはとりおどし、加賀にては雁おどし、肥前ではそほづといふ、關西北越ではとりかゞしといふ」と説明してゐる。陰暦十月十五日信濃國で案山子揚げといふ事をやつた。從つてその日に風雨霜雪のある事をかゞしあれと言うて居る。

鳴子（三秋）

鳴竿　鳴子縄　鳴子綱　鳴子守　鳴子引　鳴子番　引板　ひきいた　ひきた　鳴子田

古書校註

【御傘】〔なるこ〕誹には田の鳴子ならで別の鳴子今一有る也。鳴子と申すは、田による猪鹿等鳥を驚かす物也。さるに因つて秋に成る也。稲を守る故に植物に二句也。別の鳴子と申すは田の鳴子を似せて、民家の繩簾などにかけ置く也。句體に依りて之は雜也。うちまかせては、鳴子とばかりしても田の鳴子のことなれば秋也。花の枝などに付くる鳴子は、鳥を驚さん爲也。然れば花の鳴子には鳥を付く可らず。田の鳴子には猪鹿鳥等を付く可らず。鳴子に鳴の字は三句去也。〔ひた〕秋也、稲の爲に鳴らす故に植物に二句也。一座一句の物なれども、俳諧には二句あり。引の字に三句、板の字にも同前。無言抄に田を結びては植物に二句とあり、誤也。鳴子と變りて秋の田ならでは、ひたといふ事無レ之。

【増山の井】八月。引板は板に木をそへて繩引きて鳴らすもの也。鳴子はよのつねの事也。

【年浪草】按にもし鳥雀來る時に繩を以て之を引けば則ち鳴りて鳥驚き去る。故に引板と名け、鳴子と名く。○引板は萬葉拾穗抄に云、板に木を添へて綱をつけて引鳴らし、鹿を驚すもの也。○鳴竿、躬恒祕藏抄に云、棹の先に鳴子をつけて片山里に栗といふ物を造りて猿を追ふ也と云々。○枝折萩に曰、鳴竿は鳴子竿也。竿の先に鳴子を付けて引鳴らすもの也。

季題解説　板の方尺許なるに、竹を短く伐りたるを絲にて貫き吊したるものにして、竹棹の先につけて田畑に立て、それより長く繩を家又は樹木などに引渡し、折々その繩を引けば、竹管と板と相觸れて鳴る。其音からからと遠くにも響きて鳥獸を劫かし追ふことを得るものなり。鳴竿は棹の先に鳴子をつけたるをいひ、引板は板を並べ重ねて繩を引けば鳴やうに仕掛けたるもの、是亦鹿などを驚かすなり。〔季題〕添水、案山子、子田守。

例句

鳴子

鳴子引く二日の月も力かな　言水（初心もと柏）

阿呆とは鹿も見るらん鳴子引　其角（句兄弟）

七十の腰も反する鳴子かな　同（陸奥衛）

此村の阿呆隙なき鳴子哉　古梵（西の雲）

寐返りに鹿驚かす鳴子かな　一酌（古選俳小文庫）

露濡れて鳴子の繩や一たぐり　陽和（初蟬）

稲妻の拍子にかゝる鳴子かな　玄梅（砂川）

あれ聞けと鳴子ならして子守哉　諷竹（皮籠摺）

襤褸さす片手に窓の鳴子哉　素行（西華集）

東城寺に旅寝せし頃

晝酒の顔や門田の鳴子引　野坡（百曲）

谷越しに鳴子の綱や窓の中　丈草（丈草発句集）

風の日は餘所の仕事を鳴子哉　千代女（千々尼句集）

秋されや我身ひとつの鳴子引　蕪村（蕪村遺稿）

近付の鳴子ならして通りけり　同（発句題苑集）

家ありや煙の傳ふ鳴子縄　同（同）

新らしき板もまじりて鳴子哉　太祇（石の月）

活て居る身のからくりや鳴子引　蓼太（蓼太句集）

引上げて松の月夜や鳴子縄　同（同）

足早き雲の蹴て行く鳴子かな　几董（井華集）

野鼠の迯るも見ゆる鳴子かな　召波（春泥発句集）

引く甲斐もなきや鳴子のばらゝ黍　青蘿（青蘿発句集）

朝戸出に露引落す鳴子哉　大魯（蘆陰句選）

から〱と刈田に残る鳴子かな　松宗（五車反古）

一トしきり鳴す音して日は入りぬ　大江丸（俳懺悔）

世の中や鳴子引ても渡らるゝ　成美（成美家集）

鳴子から先へ濡れけり窓の雨　一茶（旅日記）

一つ宛寒い風吹く鳴子哉　同（同）

狗（いぬころ）の通るたんびに鳴子かな　同（九番日記）

寐語の足で折々鳴子哉　同（同）

里々の晝寐さめたか鳴子引く　梅室（梅室家集）

鳴子引いづくも見えぬ數の中　同（同）

竿立てゝ引くや西日の鳴子守　蒼虬（蒼虬翁発句集）

鳴子守夜は父母も有ぬべし　同（同）

古繪馬に竹結びつけし鳴子かな　盧子（盧子句集）

柴の戸を入れば畑の鳴子かな　同（同）

雁立て鳴子にふるゝ風淋し　青々（妻木）

水盡て引とゞる息や引板の音　召波（春泥発句集）

引板

暁を引板屋に代る妻もがな　秋色女（句兄弟）

東山をめぐりて一乘寺に出る

丈山の庵はいづこ引板の音　史邦（芭蕉庵小文庫）

哀れさや鹿のあなづる引板の音　土芳（蓑蟲庵集）

山陰や誰呼子鳥引板の音　蕪村（蕪村句集）

あな苦し水盡きんとす引板の音　同（新五子稿）

早乙女も引板曳く秋と成にけり　几董（井華集）

田守（たもり）（三秋）

小田守（をだもり）　山田守る（やまだもる）　晩稲守（おしねもり）　稲番（いねばん）　田の庵（たのいほ）　田番小屋（たばんごや）　稲（いね）

小屋

古書校註
【御傘】〔田の庵〕田を守る時ばかり作りて居る庵なれば秋になる也、
【〃浪草】〔田の庵〕貞徳曰、田の庵は田を守る爲に假に作りたる庵なり、秋の田の御製の如く假初にむすびたる笘もまばらなる庵に、夜は露衣ぬす間なき農民の辛苦を思召したる御心のよし、この御製をたゞ〳〵田の庵とは秋季なるべきよしいへり。
【栞草】〔小田守・晩稲守〕俳諧秋部に、凡そ田を守り稲を守るは人畜の傷殘はん事を防ぐためなり。

季題解説　秋になりて鹿の類ひの田で來るを防ぐ爲に、稲田を守るをいふ。田に庵とは、稲田を守る時にのみ假に作れる小屋をいふなり。〔一〕添水(ソウズ)　案山子(カガシ)　鳴子(ナルコ)　威銃打つ(オドシヅツウツ)　鹿垣(シシガキ)　鹿火屋(カビヤ)　鎌留(カマドメ)　焼留　稲刈(イネカリ)

例句
田守　稲塚の戸塚につゞく田守かな　其角（雑談集）
引狼の田守を覗む庵根かな　曉臺（曉臺句集）
人ありと見せる草履や田番小屋　一茶（一茶句帖）

參考　鳥獣の爲に田を荒されぬやうに守る。山田守るといふは特に鹿猪の害をたくること多きに由る。假廬を作つて番をすること、古歌に多く詠まれてゐる。萬葉集卷十二、「靈合へばあひ寢るものを小山田の鹿猪田守る如母し守らすも。」

威銃打つ（三秋）

季題解説　秋稲につく雀又は獣類の害を防ぐために、空彈銃を打鳴らして威すをいふ。〔一〕田守り

例句
威銃打つ　おどし筒丘は山家を成して有り　青々（倦鳥）

鹿垣（三秋）　鹿小屋

古書校註
【俳諧歳時記】鹿を田圃へ入れじとて垣をする也。

季題解説　鹿の田圃に來り作物を荒すより、これを防ぐ爲に造れる垣をいふ。又鹿小屋は鹿を追ふ爲めの番小屋なり。〔一〕田守り　鹿火屋など　動物ー鹿

例句
鹿小屋　鹿小屋の火にさし向くや庵の窓　丈草（續有磯海）
鹿小屋の聲は聾ぞ庵の客　同（射水川）

鹿火屋（かびや）（三秋）

古書校註

【俳諧歳時記】説々あれど(一)山田に猪鹿のつく所に小き屋作りて、塵埃何くれの嗅き物に火をくゆらし烟を立てゝ、鹿をやらひやると心得べし。或は香火屋、又蚊遣屋など字をかりて書ける所もあるによりまどふ人もあれど用ふべからず。又火の字濁りて訓みて顕昭が飼屋の説(二)に迷ふ可らずと御釋にあり。【中山紀聞】

註 (一)萬葉集に見ゆる鹿火屋につきては古来諸説あり。(二)顕昭は蠶を養ふ室、即ち飼屋の義と説けり。芭蕉の「這出でよかひやが下の蟇の聲」の句はこの説によれるならん。なほ蚊遣火をたく室の義といふ説もあり。但し俳諧にいふ鹿火屋はもとより鹿の害を防ぐ焚火なり。

季題解説

山田に猪鹿のつく所に小き家を作りて、塵埃何くれの嗅きものに火を燻らし、烟を立てゝそれ等の害を防ぐをいふ。【参照】田守（タモリ）　鹿垣（シシガキ）　動物—鹿（カ）

例句

鹿火屋
折曲げの柴新らしき鹿火屋哉　瑤草（倦鳥）
端山田の霧にぶす〳〵鹿火屋哉　翠寒（同）
淋しさにものゝ戀しき鹿火屋かな　青々（同）

参考

萬葉集巻十に、詠人知らず、「朝がすみ鹿火屋が下に鳴くかはづ聲だにきかば我戀ひめやも」とある。この鹿火屋に就いては、煙を立てて鹿を逐ふのであるとなす説と、魚を餌など與へて飼ひ付けん爲水岸などに造りかけたる庵の意味で飼屋であると説明する説とがあるが、鹿火屋の義が正説であらう。

鎌帛（かましめ）（三秋）

古書校註

【滑稽雑談】八月。○かましめとは家中に鎌といふ物を立てて、又それに鍬といふ物を立てゝ菅笠をきせて立つれば鹿の田をはまぬ也。

季題解説

山家にて鹿の田を害するを防ぐためとて、鎌と鍬とを立て、それに菅笠を著せて、家の中に立つるをいふ。【参照】田守（タモリ）　焼帛（ヤキシメ）　動物—鹿（カ）

例句

鎌帛
鎌帛を趣にして深山里　青々（倦鳥）

焼帛（やきしめ）（三秋）

古書校註

【しをり萩】馬の尾を焼きて田に立つればその香（か）をかぎて鹿その田をはまぬなり。

【滑稽雜談】八月〇射恒總叢抄曰、やきしめとは馬などの尾髪をきりて挿みて、そのあまりを焼きて田に立つる也。その髪をかぎて鹿のはまぬなり。

【季語解説】馬の尾髪を剪りて、その先を焼き、田の中に立つれは、其臭氣により鹿の近づかず、田を害はずといふ。〔季題〕田守り　焼帛持　動物—鹿

【例句】

焼帛　焼帛のけぶりの末に野菊哉　几董（井華集）

田畑ノ図

其臭氣、甚白といふ虫に入る

焼帛にしめ〱とふる時雨かな　乙二（松窓乙二発句集）

やきうは悪苦の焼を入れじとてするなり。小さき箱の蓋やうの板を串の頭にさして、そこ爰に立置く。山畑にと詠める焼帛が有り

焼帛は残る菊にもひかぬ哉　道彦（蔦本集）

焼帛や山里かくもたよりなき　小測（杉の實）

焼帛や風のまにまに霧しるき　青々（妻木）

毛見（中）　検見　毛見の衆　毛見の前　毛見の日　毛見果　毛見の賄　ひ　坪刈

【考證】

【俳諧歳時記】八月、農民秋に至て、年貢を収納する初め、縣吏田地の善悪を巡見す、之を毛見と云ふ。毛は猶草と云ふが如し、稲の未だ刈らざる者を立毛と云ふ。凡そ百石の田地にして百石あるを納取と云ふ、悉く納して得るの義也。其次、百石の内、或は八分・七分の收納を幾ッ成りと云ふ。其の收納を定めるを免と云ふ。言ふ心は免多くして少しく取るの義也。百石を收と云ひ、五十石を半納と云ふ。是中の上也。皆年の豐凶による。農民其の免の内を又乞うて或は一分、或は二分を減ずるを免を請ふと云ふ。收納多きを免るゝの義也。

注　右の説はほゞ眼前に引の百姓の事によれるなり

【季語解説】農民より年貢を納むるに先立ち、縣吏各地を巡檢し、其田の稲の立毛の良否を調査して、其納むべき石高を定めし事をいふ。坪刈は稲の收穫量を推算するため、一坪の地積の稲を刈りとり、その收穫量を基準として全面積の收穫高を算出するをいふ。〔季題〕稲刈等　植物—稲

【例句】

毛見　毛見ありと夙に起きたり三家村　露月（露月句集）

毛見の日をおしろいぬりし娘かな　虚子（虚子句集）

箸すてゝ毛見を迎へに走るなり　青々（妻木）

毛見が權芥の如く人を言ふ　同（同）

毛見の衆　毛見の衆の舟さし下ダせ最上川　蕪村（蕪村句集）

毛見の衆に機を下らぬ寡哉　　露月（露月句集）

坪刈　坪刈の咄や駄荷のかる運び　　種文（猿舞師）

【参考】検見ともいふ。検見は文明、永正頃の古文書にも見え、室町時代にその事のあつたことを證する。長曾我部元親百箇條に「一國中知行方之儀以二毛見之上一三分二地頭三分一者百姓可レ取レ之」と見えてゐる。

稲刈（中）

稲　田刈　小田刈　夜田刈　夜刈　陸穂刈　收穫　秋入り　稲束　稲把　稲舟　稲馬　稲車　稲干す　刈干　架稲　稲木　稲城　稲機　稲架　稲塚　稲叢　稲村　稲堆　稲垣　いなたはり　稲小屋　稲扱　稲打　稲打筵

【季題の解説】稲の實の成熟したるを刈り取るをいふ。

【實作注意】夜田刈＝夜、月明り又は灯明りにて稲を刈ること。秋收＝秋入は稲を刈りて收むること、稲舟は刈りたる稲を積み運ぶ舟、稲馬は刈りたる稲を積み運ぶ馬のこと。稲木＝稲掛ともに刈りたる稲を掛て乾す爲に設けたる組立て木、掛稲、掛けて干されある稲、稲叢＝稲塚ともに刈たる稲を高く積たるもの、稲小屋刈りたる稲を入るゝ小屋。〔参照〕田守　毛見　籾摺　夜庭　新藁　豊年　鎌祝ひ　秋收め　地理―刈田　植物―稲

【例句】

稲刈

人に米を貫ひて

世の中は稲刈る頃か草の庵　　芭蕉（續深川）

稲刈の其田の端や扱き所　　許六（韻塞）

稲刈に鶏頭見せん藪一重　　支考（しるしの竿）

見る内に畔道塞ぐ刈穗かな　　杉風（句兄弟）

刈ながら話は稲の實入かな　　同（雪七草）

稲刈りて小草に秋の日の當る　　蕪村（新五子稿）

稲刈や上れば下だる舟よばひ　　白雄（白雄句集）

何かせん稲刈る頃のかゝり人　　召波（春泥發句集）

西津邑獲守に於て確要

稲刈て麥に田かへす我世かな　　几董（井華集）

鎌鳴らす秋はどこでも稲葉山　　乙二（松窓乙二發句集）

晩稲刈れ赤そぼ水を踏むあたり　　同（をのゝえ草稿）

田刈

落日が一時赤し稲を刈る　　月斗（同人）

柿買と日和くらぶる田刈かな　　支考（國の華）

里々の田刈祝ふや猿廻し　　杉風（杉風句集）

西近にて

神の田や升つき見たる纔手刈　　智月尼（淡路島）

今ならば落はなされし田刈時　　惟然（惟然坊句集）

田刈

草刈の大人に成りて田刈哉　也有　（蘿葉集）
去年のは蓑にして着て田刈哉　同　（同）
案山子殿世話であつたと田刈哉　同　（同）
植た手は穂を織らせて田刈哉　同　（同）
壺折りて院の田刈や思ひ人　嘯山　（葎亭句集）
刈かゝる田面も嬉し五器一具　蓼太　（蓼太句集）
息ふきに鎌の曇れり朝田刈　青苑　（卷島）

夜田刈

夜田刈や明けて休らふ身でもなし　闌更　（半化坊發句集）
見る人もなき月の田毎を刈る身哉　同　（同）
わりなしや法師夜田刈る月の前　暁臺　（暁臺句集）

收穫

重たさや笑ふて力む稲荷ひ　素行　（句鏡）
したゝかに稲荷ひ行く法師哉　蕪村　（蕪村遺稿）
稲の香やゆりもて運ぶ行違ひ　召波　（春泥發句集）
秋入に乙女の噂はなかりけり　嘯山　（葎亭句集）
暮の雨庭せまき迄稲入るゝ　月村　（同人）

稲舟

稲舟も引くや野菊の溝傳ひ　許六　（風俗文選犬註解）
最上川のほとりに住む龜井が許にて
稲舟のいねとも言はぬ主かな　乙二　（松窓乙二發句集）

稲馬

首出して稲つけ馬の通りけり　一茶　（一茶句帖）
長月の末、[illegible]をはりに
稲たんとつけて短し馬の首　乙二　（松窓乙二發句集）

稲干す

いつしかに稲を干瀬や大井川　其角　（有磯海）
敷臺に稲干す窗は手織哉　同　（五元集）
今は借屋住ありた
借りますと言ふて稲干す鳥居哉　北枝　（北枝會）
今ぞ知る稲を手干しの袖の恩　同　（風月[illegible]）
早稲干すや人見え初る山のあし　去來　（有磯海）
夕陰や膝に稲置く大佛　凉莵　（草庵集）

稲木

象潟や稲木も綱の助杭　言水　（初心もと柏）
居所を稲木に移す野鳥かな　正秀　（[illegible]）

掛稲

斗文老の八十の賀をきくに申し贈る
稲掛けて風もひかさじ老の松　蕪村　（蕪村句集）
掛稲に鼠啼なる門田かな　同　（蕪村遺稿）
掛稲のそらどけしたり草の露　同　（新五子稿）
掛稲や洗ひ上げたる鍬の數　白雄　（白雄句集）
掛稲や大門深き並木松　太祇　（太祇句選後篇）
稲掛けて菊の日遠し垣隣　乙二　（松窓乙二發句集）
掛稲の下に水づきし徑かな　虚子　（虚子句集）

稲扱

更る夜や稲扱く家の笑ひ聲　萬乎　（續猿蓑）

稲扱　稲扱も木陰つくるや松の下　野坡（野坡吟艸）
稲扱くや刈るや田に焚く夕煙　士朗（枇杷園句集）
稲摺　泊り〳〵稲すり歌も變りけり　千子（曠野）

籾摺（もみすり）（中）

籾磨（もみすり）　籾摺臼（もみすりうす）　籾臼（もみうす）　磨臼（すりうす）　臼挽（うすひき）　籾摺歌（もみすりうた）　籾囲ひ（もみかこひ）　籾筵（もみむしろ）　籾干す（もみほす）　籾殻焼く（もみがらやく）　籾殻（もみがら）

季題解説　稲の籾の皮殻を去り、篇臼にて摺るをいふ。〔季題〕稲刈（イネカリ）　夜庭（ヨニハ）

例句

籾摺　松風の里は籾摺る時雨かな　嵐雪（虚栗）
賣切の鯡の價や大唐籾　楼良（楼良発句集）
夜の家内はほがらに籾を摺る　青々（倦鳥）
籾臼の音のつゞきて小夜過る　同（同）
籾殻焼く　霜はれて籾焼く畑のけぶり哉　岩翁（句兄弟）

夜庭（よには）（中）

朝庭（あさには）　大庭（おほには）　小庭（こには）　庭揚げ（にはあげ）

季題解説　夜庭とは夜、籾摺りをする事、朝庭とは夜明る迄の曉にそれをする事にて「一ト庭済んだ」とか、或は「三庭もつゞいてからだがメキ〳〵いふ」など云ふ言葉の使はるゝ程、秋の農家の人は夜を日についで休みもなく働き續ける。一庭は普通三石位、小庭と云ふは一石、大庭と云へば三石も摺るなり。大庭と云へば日暮より取掛りて眞夜中の一時にもなると云ふ。かゝる籾摺の濟みし事を庭揚げと云ふ。但しこれは丹波國にての事なり。〔季題〕稲刈（イネ）　籾摺（スリ）　新藁（ワラ）

例句

夜庭　夜庭するあたりの月のしづか也　青々（倦鳥）
妻も居り骨めき〳〵と夜庭かな　同（同）
朝庭　朝庭に月とあけゆく案山子（かがし）形　同（同）
朝庭があけて田滿つ一舌赤紅　同（同）
小庭　うれしさは勞れし骨に小庭かな　同（同）

鎌祝ひ（かまいはひ）（中）

季題解説　但馬國城崎郡清瀧村邊の農家にて、秋季稲刈・蕎麥刈等、農作物を無事に刈り終へたる祝言に鎌を祝ふ行事をいふ。各農家にて其祝ふ日に遲速ありて一定せず。その日は鎌全部を洗ひ清め、箕又は三寶に載せて神棚に祭り、燈明をあげて祝ひ、豆腐飯又はおはぎ等を作りて其勞を休むるなり。〔季題〕稲刈（イネカリ）

秋收め（晩）　秋揚

季題解説　秋農家に亡て農作物の收穫を終りたること。〔[illegible]〕稲刈

例句

秋納　女夫々々増す手日出たし秋納　也有（[illegible]葉集）

新藁（中）　今年藁

季題解説　今年收穫せし稲稈の干したるものをいふ。〔[illegible]〕稲刈　籾摺

夜庭　藁塚

例句

新藁　蟬の音や桃干す藁の日の弱り　汶村（[illegible]）

甲午の秋、[illegible]に下だるを人々に送られて

新藁やどこで休もと盡なとし　蒼虬（[illegible]句集）

夫婦して新藁高く積上げつ　露月（露月句集）

新藁を焚く火にのこる匂ひかな　草門（[illegible]）

今年藁　欒々と姥か屋根葺くや今年藁　鬼貫（鬼貫句選）

茂秋法師の十方庵

山陰や敷物とても今年藁　乙由（麦林集）

藁塚（晩）　藁堆

季題解説　刈田の跡空地等に新藁を圓形或は四角形に積重ねて保存する藁の堆をいふ。〔[illegible]〕新藁

綿取（三秋）　綿の桃　桃吹く　綿吹く　綿ざね　綿摘む　綿干す　綿初穂　綿買　綿打　綿車　綿繰　新真綿　新綿　にひわた　今年綿　綿弓　番綿　番船

古書校註

【滑稽雑談】「新綿」七月。二或云、新綿とは蠶綿の事也。蠶繭夏月に熟して秋初綿絮を出す。故に新綿を秋季におす。又木綿も秋月に摘ひて綿を吐く、又通じて新綿といはむに害あるべからず。又新綿と申すは、昔七月十六日には諸國より禁裡へ綿を奉りけるを新綿の調と申せしと也、いかゞ。内裏の諸書の公事にも未だ見侍らず。藻鹽草に、にひ綿は七月十六日也。みつぎの綿也と記す。なほ考ふべし。

【年浪草】「番綿・番船」九月。攝州大阪にあり。江戸へ積出す綿也。其廻船に一番・二番・三番ありて、江戸へ着岸の遲速を以て損益を定む。商賈専ら勝負を爭ふ。

季題解説 綿は錦葵科の一年生草本にして、廣く暖地に栽培せらる。晩夏の頃、黄蜀葵に似たる淡黄色の花を開く。花後球狀の蒴果を結ぶ。俗にこれを綿の桃といふ。秋成熟すれば裂開して白色の毛狀纖維を吐く。これを桃吹くといふ。これを摘み採りて綿を製し、その種子より燈用油を搾る。綿弓＝綿打弓、綿をはじき打ちて打綿とする具。形恰も弓の如く、弦はもと牛の筋を用ひしが今は鯨の筋を用ふ。因みに古昔は蠶より採りたる綿、即ち眞綿を新綿ともにひわたとも云ひしなり。七月十六日、内裏への貢に奉りし故に初秋の季とせり。大阪地方より此眞綿を積出す船のことを番綿＝番船といひ、一番・二番・三番等稱へしより、單に番船といへば新綿積みの船のことを云へり。新眞綿として便宜こゝに小註す。〔參照〕植物―木綿（夏―綿の花）冬―綿

例句

綿取

生綿とる袖のふくれのちらし哉　泥足（初蟬）

生綿取る雨雲立ちぬ生駒山　其角（陸奥衛）

罪深き我や彼岸の生綿取　支考（記念題）

山の端の日の嬉しさや木綿取　浪化（草苅笛）

綿取や門に待つ子の丸裸　野坡（野坡吟艸）

雪と見て小春も近し綿畠　也有（蘿葉集）

綿取の笠や蜻蛉の一つづゝ　同（同）

綿取や犬を家路に追返し　蕪村（新五子稿）

青き葉の吹かれ殘るや綿畠　太祇（太祇句選）

何となき綿の匂ひや宿通　召波（春泥發句集）

綿の盆本ンの間へ迯げ入りぬ　一茶（一茶句帖）

綿取りの畠も少しばかりかな　青々（倦鳥）

綿の桃

箕に干して窓にとちふく綿の桃　孤屋（炭俵）

箕の中にふゝみ出だしつ綿の桃　青々（倦鳥）

綿吹く

綿吹くや河内も見ゆる男山　凡兆（柞原）

山陰やこゝ住む人の綿も吹く　乙二（松窓乙二發句集）

綿ざね

旅にさまよひて

綿ざねの猶吹殻や旅乞食　句空（北の山）

綿摘む

鉢の子に木綿を受くる法師哉　卜枝（曠野）

綿摘や煙草の花を見て休む　蕪村（蕪村句集）

綿初穂

國富や藥師の前の綿初尾　鬼貫（鬼貫句選）

佛にも初穂といふか綿所　乙二（松窓乙二發句集）

綿打

綿打や案山子は弓を捨る頃　同（同）

綿繰

日當りや綿繰ならぶ簾際　宮定（芭蕉袖草紙）

新眞綿

國波山も程なく過て、猶山添ひ丹波の麓に知るべ有るを尋ね入りて

眞綿むく匂ひや里の這入口　惟然（續有磯海）

新綿　里は今綿新らしき日和かな　夢太（夢太句集）
新綿や悲しき秋の畠より　移竹（己節前）
新綿や難波を出る舟じるし　一呼（古今選[illegible]句集）
綿弓　綿弓や琵琶に慰さむ竹の奥　芭蕉（甲子吟行）

【季題解説】綿は外来植物で、本邦上代にこれを栽培して漸く普及するに至つたが、萬葉集沙彌滿誓の歌に「しらぬひ筑紫の綿は身につけていまだは着ねどあたゝけく見ゆ」とあるは、九州産の綿を詠じたもので、當時から既に産地として知られたことを示してゐる。

澁取（中）

柿澁取る　澁搗く　澁溜　新澁　今年澁　生澁　木澁桶　一番澁　二番澁

【古書校註】【年浪草】「澁取る」和漢三才圖會に曰、柿漆造法、柿一斗蒂を去り水二升五合に和ぜ、碓にて搗き槶に盛り、宿を經て（一）之を搾り、滓も亦水に和ぜ二日を經て再び之を搾る。その用甚だ多し。「新澁」紀事に曰、山州山科の澁柿、人家之を買うて糸を以てその蒂を縛り取り、水に浸して臼つき、布嚢に入れて搾り、その油を取り澁紙并に紙衣を製す。又紙にぬり諸品器物を張る。この時市中刷毛を賣る。之を以て新柿油をぬる。

註（一）一晩を經る也。○年浪草・栞草共に澁取を七月、新澁を兼三秋季とせり。

【季題解説】澁柿の青きものを取り、蒂を去り石臼にて搗き碎き、少しばかりの水を混じて一宿せしめ、布の袋、又は簀にて壓搾「濾過」して新澁を取る。新澁は乳白色にして些か青味を帶びたる混濁液なるが、日を經れば徐々に褐色となる。

【實作注意】澁を取るには未熟の青柿を用ふ、若し些かにても熟しかけたるもの混すれば其澁は腐る。因て二百十日迄の澁柿を採るを良しと云へり。

【例句】
澁取　[illegible]
古寺や澁紙貼まん所たに　其角（五元集）
新澁　湖水夕照
新澁の網ふて映ゆる夕日哉　路通（玉來文）
山家より新澁とゞく德利かな　斜川（俳[illegible]）
澁糟　澁糟や鳥も喰はず荒畠　正秀（[illegible]）
澁糟や鳥の番るゝ[illegible]屋敷　朱拙（[illegible]）
木澁桶　[illegible]
たが上に賤機ごろも木澁桶　其角（五元集）

若煙草（三秋）

今年煙草　新煙草　煙草干す　懸煙草

古書校註

【年浪草】三才圖會に曰、煙草、相思草、淡婆姑、淡苞菰、烟酒。（中略）羅山文集に佗波古・希施婁、皆蕃語也。云々　按ずるに天正年中南蠻の商舶始めて此種を貢す。以て長崎の東の土山に植う。二月種を下す。五月移し栽ゑ、新芽を摘み去り蟲を除くこと、毎且怠るべからず。高さ三四尺、葉商陸に似て長大、七八月葉を採り、藁莚を覆ひてこれをねさし、一宿して取出し、一葉ごとに繩にはさみ、編み成すが如くにして晒し乾し、一夜露宿して、後晒し乾す時は、黄赤色となる。叢を擴げこれを收む　云々。之を若煙草といふ。是れ即ち新製の謂なり。

季題解說　若煙草は新煙草なり。秋日、煙草の葉の熟したるものより次第に摘み採り、これを繩に挿みて乾燥せしむるに、簷下に吊ることあり、屋内に懸けて乾かすことあり、これ懸煙草なり。又乾燥室に入れ、火氣を以て乾かすことあり。乾燥と同時に漂白し、葉に光澤を與へ、また葉を醱酵せしむるなどの事ありて、新煙草として喫煙に用ゐらるゝ物となるなり。

實際注意　煙草といふ名は、西印度にて土人の吸煙に用ゐる烟管の名より出づと云ひ、又、北米の北海中の小島の名「タバコ」より出づとも云へり。煙草の我國に渡りしは、天正の初年なるべく、慶長十年には長崎櫻馬場春德寺下の畑に植ゑし事記錄にあり。然るに慶長十四年に至りて喫煙を禁ずるの令出でしを見れば喫煙の流行忽ちに擴りし事知らるゝなり。若煙草は葉のまゝなるを詠みて季の感あり、今日包裝して賣るもの、秋採取の新製品なりとも、心して詠まずば季の感は薄きものなり。昔時喫煙の者、煙草の葉を家にて刻みしなどにこそ若煙草の感は切にありしなるべし。かけ煙草は景としての眺めなり。（參照　植物　煙草の花（夏））

例句

若煙草

煙にも腹ふくらかせ若煙草　乙州（己か光）
屋根裏を包んで寒し若煙草　露川（記念題）
わさ藁に婢の炙ぶや若煙草　野坡（百曲）
蝕みて下葉ゆかしき煙草かな　蕪村（蕪村句集）
孤ッ家に年あるさまや若煙草　太祇（太祇句選）
夜の香や煙草寐せ置く庭の隅　同（同）
煙草とりて菜に就きたる畠哉　召波（春泥發句集）
半ば葉はかゝれて吹ける煙草哉　一士（田舍の日）
長崎にはじめて干しゝ若煙草　青々（倦鳥）

煙草干す

煙草干す山田の畔の夕日かな　其角（五元集）
煙草干すどしても纏の中だるみ　召波（春泥發句集）
煙草干す寺の座敷に旅寐かな　几董（井華集）

懸煙草

取る日よりかけて詠むる煙草哉　其角（己か光）
事繁く、門踏む軒や掛煙草　太祇（太祇句選）

絲瓜の水取る（中）　絲瓜の水　絲瓜水

季題解說　絲瓜の水は陰曆八月十五日に採るをよしとす。去痰に效あり。又化粧水にも用ふ。此水を採るには其根元より一二尺の所にて莖を切り、根の方の切口を瓶の口に插し入れ置く時は、切口より滴々としたゝりて、莖の太きものなれば一晝夜に五合以上を得べし。參照 植物ー絲瓜

例句

絲瓜の水　絶筆三句
をとゝひの絲瓜の水も取らざりき　子規（子規句集）
痰一斗絲瓜の水も間にあはず　同（同）

牡丹の根分（中）　牡丹の株分　牡丹の接木

古書校註
【滑稽雜談】八月。和朝に牡丹を愛する人、この月に至りて根芽を分ち植ゑ、或は接ぎて移す。壤土を加ふるなど皆その節也。すべて牡丹を栽うる・根芽を分つ・芽を接ぐなど、皆秋に許用す。
【年浪草】三秋○和漢三才圖會に曰、夏月川地を採り晒し乾し、古き圃の土と細砂と以上三品篩ひ和ぜ、八九月紅芽を出す後移し栽うべし。之を培ふに糞滴（一）を用ふべからず。冬月油滓を用ひて少し根の傍に入る。或は鮮魚の洗汁を灌ぐも亦佳なり。
註（一）大便・小便。

季題解說　牡丹は秋の彼岸前後に根分、又は接木をなす。參照 夏ー牡丹

例句

牡丹の根分　見付て這る牡丹の分根かな　女哥爺（田舍の日）
意の如く根分出來つや牡丹守　青々（妻木）
牡丹根をわけて卜居の身は安し　同（同）

芍藥の根分（中）　芍藥の株分

季題解說　芍藥は秋の彼岸前後に根を分くるなり。參照 夏ー芍藥

苺の根分（中）　苺植る

季題解說　西洋苺の蔓莖の節々より新芽を出し成長して自ら氣根を生じたるものを、秋の彼岸頃二本三本宛とり集めて寄せて畠に列植し、明年の採果に充つるべく仕立つるなり。苺の親株は大抵三年目には拔捨てゝ新株に代ゆるなり。參照 夏ー苺

例句

苺の根分　此里のマリヤも苺根分かな　青々（倦鳥）

草花秋蒔く（中）

季題解説 春季に開花すべき各種の草花の種子を秋に蒔くをいふ。これらは大抵秋の彼岸頃、鉢又は木箱に蒔き、冬季は温室、床室などに入れて培養し、寒を避くるなり。

實作注意 あながち題に則せずとも、秋季のものを配し適宜其場合を感得して詠出するがよろし。参照 春—草花種蒔

例句
草花秋蒔　草花の種まく秋やむろの口　小酒（倦鳥）

球根植る（晩）　球根埋る

季題解説 風信子・鬱金香・香雪蘭、其他概ね春季開花すべき觀賞植物の球根類を、花畑若くは鉢などに埋むるをいふ。十月初旬頃をよしとす。参照 春—風信子等。

例句
球根植る　香雪蘭の球や少婦が土覆ふ　小酒（倦鳥）

菜種蒔く（初）

季題解説 大凡八月中に油菜の種を下す。参照 春—菜の花　夏—菜種刈

例句
菜種蒔　菜種蒔く手にやるせなき小鳥哉　一露（東潮獨吟技寫集）
逢もせぬ今日も日和ぞ菜種蒔　種文（猿舞師）

大根蒔く（初）

古書校註 【滑稽雜談】八月。時珍云、圃人菜菔〔一〕を種うる、六月種を下す △凡そこれらの種皆秋分の節を旬とす、俗に彼岸蒔と云、亦相當れり。時珍が六月に種を下すと云ふは、和に於て節蒔、或は夏大根、又夏秋論なく夏月蒔て秋の比根ごとに大也。菜は調ずれども味甘からざる者ならんか、猶考ふべし。
【年浪草】和漢三才圖會に曰、蘿蔔大抵八月種を下し、彼岸に苗を生ず。
註 〔一〕ダイコン。

季題解説 大根は八月二十日より二百十日迄に蒔くを常とす。参照 春 大根の花　冬 大根引

例句
大根蒔　大根種蒔くを小鳥の知りにけり　一川（倦鳥）

畑少しあるに大根蒔きにけり　青々（倦鳥）

芥菜蒔く（中）

〔古書校註〕【滑稽雑談】八月。〇時珍云、芥に数種有り、皆八・九月を以て種を下す。〇大和本草に曰、白芥尤も佳也。春不老は他芥より薹遅し。是味亦佳なり。凡そ芥子は菜菔より遅く蒔くべし。

〔季題解説〕芥菜は秋の彼岸後に種を下すなり。〔参照〕春—芥菜

〔例句〕芥子菜蒔く

芥子菜を蒔きし新居の土の色　青々（倦鳥）

罌粟蒔く（中）

〔古書校註〕【滑稽雑談】八月。〇月令廣義に曰、仲秋の夜罌粟を種うれば則ち花盛に下子必ず満つ。〇蘇頌曰、罌粟九月子を布く、〇救荒本草に云、罌粟隔年に種うれば則ち佳。〇和俗多く所説にならへり。

〔季題解説〕俗に仲秋十五夜に扇の要の穴を通して罌粟を下種する時は變種を得、且花盛にして繁かるべしといふ。〔参照〕夏—罌粟の花

〔例句〕罌粟蒔く

きらめくや月に芥子蒔く金扇　林鳥（新題林句集）
風に手をあてゝ芥子蒔月夜哉　五峰（同　）
けし蒔や此月の夜にあやかれと　流水（新類題發句集）

紫雲英蒔く（中）

〔季題解説〕紫雲英の種は秋蒔き、冬を越して春萌芽す。〔参照〕春—紫雲英

秋の牛蒡蒔く（中）

〔季題解説〕牛蒡は春秋二期に播種す。秋蒔は彼岸過を好期とす。〔参照〕春—牛蒡蒔く

蠶豆植る（晩）

〔季題解説〕普通十月上旬を播種期とす。〔参照〕夏—蠶豆

豌豆植る（晩）

〔季題解説〕蠶豆と同じく十月上旬を播種期とす。〔参照〕夏—豌豆引く

石竹挿す（晩）

【季題解説】 麝香撫子（カーネーション）の花苗を含まぬ穂先のみを、二タ節三節目位より爪剪りにつめて、淺き床室又は木箱、播鉢などにやゝ密に挿す。十月中旬頃より十一月上旬頃まで尤よく根付くものなり。花圃の重要なる行事の一なり。〔參照〕 夏—麝香撫子

【例句】

石竹挿す　石竹挿し母と棲みにし秋遠き　小酒（倦鳥）
　　　　　石竹さす土に野山の日和かな　青々（同）

菅植る（初）

【季題解説】 八月頃菅の苗を田に植うるなり。〔參照〕 夏—菅刈る

藥掘る（中）

藥採る　藥草採る　柴胡掘る　茯苓突き

【古書校註】

【年浪草】 八月。陶弘景曰、凡そ藥を採る時月、皆是寅に建つ。歳首則ち漢の太初より後に記す所也。その根の物多く二月・八月を以て採るは謂へらく春初は津潤始めて萌して未だ枝葉に充たず、勢力淳濃也。秋に至れば枝葉乾枯して津潤下に歸流する也。大抵春は寧ろ早きに宜しく、秋は寧ろ晩きに宜し。

【俳諧歳事記】 秋野山に出て藥草を採る也。茯苓突くなど句によりて秋也。

【季題解釈】 仲秋、山野に出でて藥草をたつね、其根を掘る。之を藥掘と云ふ。

【實作注意】 端午の日に藥狩あり。同じく藥草を採るものなれども、夏は草の茂りさかんにして、秋は草の衰ふる時なれば、藥草を採るにも、風物自づから別なるものあり。古來藥掘と云へば秋季の定めなれば、茯苓など季の定め無きものも、藥掘に云ひて秋季のものとなるべし。茯苓を突きて取るは何時にても得るものなれども、下草の茂らぬ時突くに便宜多く、今、又は秋を選びて採取するものなり。茜掘、苦參引、千振引などは皆秋の藥掘りなり。〔參照〕 苦參引く　千振引く　茜掘る

【例句】

藥掘　湯の山や大婦白髪の藥掘　白笑（返鳥集）
　　　德本の門も過たり藥ほり　蕪村（蕪村遺稿）
　　　藥掘今日は蛇骨を得たりけり　同（同）
　　　藥掘蝮も提げて戻りけり　太祇（太祇句選）

藥掘　鹿どもが藥採らんと行けば鳴く　露月（露月句集）
藥草にまじり引かれつ實生松　雪翁（倦鳥）
藥掘り松下童子とうたふめり　青々（妻木）
柴胡掘　分ゆくや鎰いたはる柴胡掘　正秀（駒掃）

苦參引く（くらゝひ）（中）

季題解說 苦參を煎じ用ふれば、寄生蟲による皮膚病に效ありと云ふ。莖・葉・根共に皆效あり、故に根を連ねてこれを採る。根は最も苦味なり。苦參引は藥掘の一つなり。〔參照〕藥掘（人事）植物—苦參（秋）

例句 苦參引　魚くはず吝かにして苦參引　青々（妻木）

千振引く（せんぶりひ）（中）　當藥引く（たうやくひ）

古書校註 【年浪草】八月。和漢三才圖會に曰、苗の高さ五六寸、一根に數莖、其莖細くして淡紫色、葉は地膚草に似て小さく、七月花をひらく。形桔梗の花に似て小く、黃色。○大和本草に曰、胡黃連は、黃連に似て大也。黃ならず、味苦し。此草日本にありや未詳。千振とて秋白花をひらき、葉細かに味甚だ苦き小草山野にあり、又たうやくといふ、云々。和漢三才圖會の黃花といへるも形狀千振なり。白花・淡紫花・黃花のものあり。

季題解說 千振は龍膽科の一年生草本にして、又當藥とも呼べり。高さ七八寸に達す。莖葉共に甚しく苦味を有し、秋成熟せざるを採りて乾し藥用とす。〔參照〕藥掘（人事）植物—千振（秋）

例句 千振引く　千振の一把を母へ山戾り　老谷（倦鳥）

茜掘る（あかねほ）（中）

季題解說 茜は山野に生ず。根は太き鬚狀にして細條多く簇出し、赤黃色を呈す。根を掘りて紅色の染料とし、又子實と共に藥用とす。「行レ血止レ血消レ痰通レ經」の效ありと云ふ。〔參照〕藥掘（人事）植物—茜草（秋）

例句 茜掘る　美しき石拾ひけり茜掘　素丸（素丸發句集）
染色の山の麓や茜掘　同（同）

葛掘る（くずほ）（三秋）

古書校註 【増山井】〔葛〕八月。青葛・眞葛原・玉眞葛・葛の花・葛の根を掘（俳）

【滑稽雜談】〔葛〕八月。△近來俳書に「葛の花」を六月に載せたり、改むべし。又、葛根ほる」を秋用ふ。是冬より春に至りて根を採るといふ、秋月にも然るや考ふべし。

【栞草】〔葛・同根を掘〕兼三秋物。〔大和本草〕根を冬月或は春未だ苗を生せざる時掘りて用ふ。長きは數尺乾し用ふ。葛根是也云々。古式八月の季とす、不審。

季題解説 葛は山野に多し。其根は澱粉に富めるを以て掘りて葛粉を製す。

參照 植物―葛ノ

例句

葛掘る

葛掘るや蹴拔の堂の夕日影　志用（藤の實）
掘あぐる土や四方に葛根掘り　助童（初蟬）
葛掘りのわりなく枯らす櫻かな　自笑（喪の名殘）
葛掘るや深山持ぬる寺の所務　嘯山（葎亭句集）
葛掘るや櫻に染まる吉野山　同（同）

豆引く（晩）

大豆引く　小豆引く　綠豆引く　豇豆引く

古書校註

【年浪草】〔豆を引〕九月。和漢三才圖會に曰（中略）、大豆に黑白黃褐靑斑數色。按ずるに大豆大抵夏至十日以前に種を下し、七月花を開き、九月莢を結ぶ、十月之を收む。之を秋大豆といふ。又立秋に收め刈る。之を夏大豆といふ云々。秋大豆は九月亦之を收むべし。〔小豆を引〕九月。赤小豆・赤豆・紅豆、葉を藿と名け、花を腐婢と名く、和名阿豆木。按ずるに早・晩有り、大抵土用の中種を撒き、九月之を收む。その粒大にして深紅色なる者俗に大納言と稱す。〔綠豆を引〕九月、綠豆、時珍が曰、色を以て名くる也。三月・四月種を下す、苗の高さ尺許、葉小にして毛有り、秋に至りて小花を開く。莢は赤豆の莢の如し。粒粗にして色鮮なるを官綠とし、粒小にして色深きを油綠とす、以て飩飫を作るべし。〇大和本草に曰、綠豆、一年の内二度實る、故に八重生といふ。

季題解説 豆類を秋收穫して後引くをいふ。**參照** 春―豆蒔く

例句

豆引く

豆もまやこなすと見れば驚かれ　菅然（[illegible]の香）
羽黒山に[illegible]の名ありけるに、人々[illegible]せられ
豆引や夫婦吹るゝ日枝颪　怒風（[illegible]集）
豆引に田舟あけおく家腰かな　湖山（銀花に入[illegible]句集）
豆引きにこほろぎの巢をこはしけり　芳江（倦鳥）
豆ひきの母ゝ後より姉弟　紫紘（高[illegible]）

赤小豆引く　禪道堂の前の小家や小豆引　青々（妻木）

牛蒡引く（三秋）　牛蒡掘る

古書校註

【滑稽雑談】〔牛蒡引〕九月（二）、俳書に之を秋に許用す。闘人は說の如し（一）。十月・霜月に到りて根を引く也。

【年浪草】三秋（時珍曰、牛蒡（中略）七月子（二）を采り、十月根を采る。（和漢三才圖會に曰、凡そ菜蔬・胡蘿蔔（三）牛蒡の類これを掘出すを引くといふ。本草に牛蒡、十月根を采ると云々、本邦七月根を采るといふは未だ詳かならず、老圃に問ふべき也。

註（一）年浪草・滑稽雑談には三秋物とせり、（二）本草に「七月子を採り、十月根を採る」と言へる說をさせり。（三）ニンジン。

季題解說 牛蒡は菊科の越年生草本にして高さ四五尺に達す。地下に多肉なる長根を有し食用に供す。

例句

牛蒡引く　朝夕に引く〳〵や菴の牛蒡畑　蓑立（蓑の實）

堀川　牛蒡引く擺女や夕月夜　宋屋（瓢簞集）

油濁らす露の夕や牛蒡引　冬英（田毎の日）

牛蒡引堀河の水も濁るべし　鶯水（類題發句集）

牛の尾に引てくらべる牛蒡哉　素牛（續類題發句集）

胡麻刈る（三秋）　胡麻干す　胡麻叩く　新胡麻

季題解說 胡麻は胡麻科の一年生草本にして、夏季花を開き、花後蒴果を結び、中に黒色又は白色の種子を結ぶ。八月中旬頃より採取す。〔季題〕夏、胡麻の花

例句

胡麻干す　樂々浦を霜と思ひぬ胡麻莚　青々（倦鳥）

木賊刈る（中）

古書校註

【年浪草】八月。禹錫曰、木賊苗は長さ尺ばかり、叢生す。根毎に一幹花も葉もなし。寸々に節あり、色青く冬を凌ぎて凋まず。四月これを採る。（時珍曰、木骨を治る者、これを用ひて礎擦するときは光淨なり。木の賊といふが如し。和漢三才圖會に曰、物を磋くこと砥の如し、故に砥草と稱す。（木艸に禹錫曰、四月之を採ると云々。蘇頌曰、採るに時無しと云々。本邦秋月これを採る。

季題解説 木賊は木賊科の常緑草本にして、山野に自生し、又觀賞用として庭園の陰濕地に栽培せらる。莖は一根より叢生し、中空管狀にして高さ一二尺、枝を生ぜずして寸每每に結節あり。其表面に多く硅酸を有し、粗糙なるを以て刈り乾して物を磨りみがくに用ふ。

例句

木賊 木賊刈

鎌の刃の減る心なり木賊刈　桃　賀（田鶴の日）

木賊刈る心の外の寒さかな　一　鼠（はたけせり）

美しき夫婦中なり木賊刈　如　雪（萩陀羅尼）

楫臭き人の刈りゐる木賊かな　草丘子（倦鳥）

その色のたぐふものなし木賊刈　靑　々（同　）

名どころに爲なる暮しの木賊刈　同　（同　）

萱刈る（中）　萱葺く　萱の軒端

古書解註 【御傘】萱ぶき・かやが軒は植物に非ず、秋にもなるまじき道理ながら、かやうの名草は秋の季大切なる故、秋に用ふるがよき也。然れば植物にも二句嫌ふべし。材木・薪に成て植物にならず、季を持たぬ物あり、又かやうに季を持ちて植物になすものあり、是よき宗匠の計らひに有る也。無相傳の人の合點ゆかぬ事也。かるかや、秋也　萱と折を去るべし。（一）

【年浪草】「萱刈る・萱葺・萱軒端」八月（　）時珍日、白茅葉矛の如し、故に之を茅といふ。（　）大和本草に曰、芒□、長短二種あり、短き者をかやといふ。（　）連歌新式（　）俳諧活法の書萱を秋とし、刈るも亦秋とす。刈りて以て屋上を葺き民家雨露を凌ぐが故に、民家をすべて茅屋といふ。

註（一）萱葺輪巻五蕉門大鑑にはカヤブキの條に御傘のこの說を駁し、「凡て御傘編述の時事甚だ無數によつて此の如き丁箇多し　屋根に葺きて何十年にもなるもの、秋季植物には用ひ難し外物に準じて却つて宜しからざる式なりとぞ。（中略）誹偕はともあれ蕉門の徒は之を用ひず」といへり。

季題解説 萱は禾本科に屬する芒、茅萱、菅等の總稱にして、秋日成熟したるを刈り採り、屋根を葺く料とす。

例句

萱刈る

萱刈てより武藏野の猶廣き　仙　哥（田鶴の日）

竹伐る（中）

季題解説 竹は秋氣漸く深きとき伐るを尤よしとす。古今要覽稿当代弘督草木部、竹の條に「（月令廣義）六月戢レ竹不蛀事。（林廣記）三伏日、臘月伐レ竹不レ蛀。今國俗ハ八月ニ伐ル」とあり。

例句

竹伐　墨つけし覺えの竹を伐りにけり　青衿（倦鳥）

竹伐るや故郷の水を渡る日に　青々（寒木）

竹伐るや二本杖乞ふ母媪　同（同）

椎柴（しひしば）（晩）　椎の小枝（こえだ）

季題解説　椎は至つて小枝多きもの故、撓りて柴にす。因みに椎柴を秋季と定めたるは、椎の實の聯想もあるべきか。【參照】植物―椎の實。

例句

椎柴　せき留よ市の椎柴師のかへさ（すれ違ひ）　猶存（椎の葉）

椎柴を燒けば音して走るなり　晴山（雀亭句集）

椎柴の月刈こぼす雫かな　二柳（芭蕉袖草紙）

椎柴や一廬つたへし國分山　小酒（杉の實）

草泊（くさどまり）（初）　草山　八月山（はちぐわつやま）

季題解説　熊本縣阿蘇郡に行はるゝ草刈に秋彼岸の終りの日より十日間行はれ、各村民は民有原野に總出動し、假小屋に泊りつゝ草を刈るなり。草は乾して冬期の馬の秣とす。

秋蠶（あきご）（初）　秋の蠶（かひこ）

季題解説　秋に飼ふ蠶、又は其繭、普通蠶は春季、繭は夏季に屬するより秋といひて以て分つ。飼育は春蠶よりも簡易にして、日子も短くして上蔟すれども、繭絲は春蠶よりも劣れり。【參照】新絹（シンケン）　春―蠶飼（コガヒ）　夏―蠶の上蔟（カヒコノジヤウゾク）　繭（マユ）

例句

秋蠶　夜霧深く蠶飼障子のしめてある　有儘（倦鳥）

桑どこゝさりお蠶の安さを踊見に　青々（同）

新絹（しんぎぬ）（三秋）　新機（しんばた）　今年絹（ことしぎぬ）

季題解説　今年の繭より取りたる絲にて織たる絹をいふ。【參照】秋蠶（アキゴ）　夏―繭（マユ）　絲取（イトトリ）

例句

新絹　新絹や一二里づゝの在の町　晴山（雀亭句集）

今年絹　引はへて波寄見るや今年絹　同（同）

盆狂言（初）　盆芝居　盆替り

【季題解説】陰暦七月十五日を以て初日とする芝居狂言をいふ。【參照】名殘狂言・宗教―盂蘭盆會

【例句】盆芝居

漁夫たちの人氣をかしや盆芝居　橙黄子（ホトトギス）

名殘狂言（中）　九月狂言　九月芝居

【季題解説】九月は各座役者の入替りの前なれば名殘を出す。已れ〳〵の手覺の當り狂言なり。これを名殘狂言とす。九日より始む。【參照】盆狂言

地芝居（中）　村芝居　地歌舞伎

【季題解説】秋の收穫後に、土地の素人の寄合うて行ふ芝居をいふ。又芝居を雇ひ來るもあり。

【例句】地芝居

悠紀の秋里に芝居の幟立つ　八葉子（倦鳥）

地芝居や田代りし子の鏡立　青々（寶船）

地芝居や下部がなりし七兵衞　同（同）

豐年踊（晩）

【季題解説】秋の收穫後、豐年を祝ふ意味にて行ふ踊をいふ。【參照】踊

花火（初）　煙火　玉火　線香花火　鼠花火　揚花火　打上花火　仕掛花火　飛花火　南京花火　癇癪花火　金魚花火　流星花火　遠花火　晝花火　花火船　花火見

【古書校註】

【御傘】正花を持つ也、春に非ず、秋の由也、夜分也、植物に嫌はず。

【花火草】夜分也、正花也。

【俳諧新式】七月の詞寄の條に出せり。

【年浪草】七月。○和漢三才圖會に曰、花火は以て熢燧に代ふべき者也。又夏月以て河邊の遊興となす。○花火線香は稗心を用て焇硝を和し、之を煮て曬しかわかし、これに亦前四味藥末（一）を用ひて飯糊に和ぜて稗心に塗る。但抹香を以て鐵粉に代ふるのみ。鼠花火あり、葦管三寸許の者を用ひて藥末を盛り之を作る。火を口藥につくれば忽ち唧々の音を出して走る、小兒以て戲となす。（花火夏月以て河邊の遊興となす。俳諧に秋となす、そ

の詮未だ詳かならず）、

註（一）和漢三才圖會にあげたる硝石・硫黄・麻がらの灰・鐵粉の四種をいへり。

季題解説　花火は火藥を種々に配合して、紙子の球匣の内に詰め、これを木筒、或は竹筒に入れ、火藥に火を點じて空中に打上ぐるものにして、紅焔、青焔の光鋩天に走り、また種々の形象を現はすなど、此火技の壯觀眼を奪ふもの多し。鼠花火は葦の管の中に火藥を入れ、口火を像ふればハチ〳〵と音して地を走り廻るものにして、小兒の玩ぶものなり。仕掛花火は種々の仕掛をなして、風車を廻轉し、或は導火線を用ゐて一時に千變萬化の奇觀を呈するもの。遠花火は、遠くにあがる花火で、音のみ聞ゆるにもいふ。

實作注意　盂蘭盆に高燈籠などして燈火を揭ぐるは佛に供養の爲にするものにして、彼の京の大文字はこれの最特異なるものなり。花火を打揚ぐること、同じく魂祭に供養のこゝろよりして爲せしものなるべく、因つて秋季には定めあるなり。花火はもと砲術家の行ひしものにて奉行これを管轄し、武術のものなるを、煙火を高く打ち揚ぐること花やかにして衆人に賞玩せらるゝより、後種々に工夫を凝らすに至りしものなり。――宗教　盂蘭盆會（秋）　夏―川開（夏）

例句

花火

扇的花火たてたる扈從かな　其角（皮籠摺）
小屋涼し花火の筒の割るゝ音　同（五元集）
鵜攔きも逆櫓もやるや花火賣　同（同）
舟中
一雨が花火間もなき光かな　同（同）
（[illegible]山樓ノ隅田川ニ[illegible]）
月代と雲にぬかりし花火かな　浪化（續有磯海）
物焚て花火に遠きかゝり舟　蕪村（蕪村句集）
花火せよ淀の御茶屋の夕月夜　同（同）
花火見えて湊がましき家百戸　同（蕪村遺稿）
夜は秋のけしき全き花火かな　白雄（白雄句集）
川面や花火のあとの梶の音　同（同）
洲の松の外れを越ゆる玉火哉　同（同）
稻妻に花火はしばしたもつ哉　同（同）
智恵もなく艫照らす花火かな　同（同）
花火盡きて美人は酒に身投けむ　几董（井華集）
舟梁の露にかげろふ花火かな　大江丸（俳懺悔）
べそ〳〵と花火過けり隅田川　一茶（一茶句帖）
とをんとんどんとしくじり花火哉　同（同）
舟々や花火の夜にも花火賣　同（同）
世に連れて花火の玉も大きいぞ　同（七番日記）
椽端や二文花火も夜の體　同（一茶發句集）

花火舟

伏見にて

草も木も皆人顏よ花火の夜　蒼虬（蒼虬翁句集）

屋根越しに僅に見ゆる花火かな　鳴雪（鳴雪句集）

目の前の芒明るき花火かな　虛子（虛子句集）

宵くらき程を火入に花火かな　青々（倦鳥）

魚臭き小家の草に花火ちる　同（同）

ぼんぼりの相圖を待つや花火舟　支考（蓮二吟集）

花火舟遊人去つて秋の水　召波（春泥舍句集）

花火舟家老ながらも叔父の殿　同（同）

相撲（初）

角觝　角力　すまひ　相撲取　力士　關取　部頭使　辻相撲　宮相撲　草相撲　草刈相撲　地取　勸進相撲　神事相撲　寄相撲　江戸相撲　上方相撲　大阪相撲　京相撲　四季相撲　素人相撲　大相撲　小相撲　若相撲　童相撲　老相撲　お相撲　抱相撲　晴相撲　花相撲　勝相撲　負相撲　夜相撲　相撲場　土俵　相撲社　相撲觸れ　相撲札　相撲番附　相撲びら

古書校註

【御傘】秋也。ことり使と云ふ。つかひの字、使也。番の字に非ず。かな字濁る可らず。内裏にて七月の下旬に有る事也。

【年浪草】扶桑略記に曰、相撲の事柏原天皇の時より代々の天子皆悉く相撲を好む。貞觀以後寂然として無事也。今聖主之を捨てず。久欒しからずや。○雲圖抄に曰、先づ二三月の頃大將以下陣の座に於て相撲使のことを定む。諸國七道に遣はして相撲人を召す。之を部領使と云ふ。○公事根源に云、（江次第に仁壽殿東庭の相撲とあり、裏書に云、南殿出御の時仁壽殿に於て召合の拔出の儀これ有り）是は諸國の供御人（供御人は相撲を奉行する人即ち諸國の防人也）を召集めて、七月に相撲の節と云ひて天子の御覽ずる事也。先づ十六七日の間に召仰あり、上卿勅を奉りて左右の次將に相撲あるべきよしを召仰せらる。左右の近衞方を分ちて、國々へ使を下して相撲を召す、之を　葉にことり使と云へり。廿六日に内取と云ふ事あり、主上仁壽殿（江次第裏書に云、大の月は廿六日小の月は廿五日仁壽殿の東庭に於て之を行ふ。近年御物忌を申す時の義と云々。内とりは習禮也。故に左と左、右と右との角力也）に出御なる、左右の角力人は東庭にて角力十五番、もし故障ある時は仰に隨て之を止む）犢鼻の上に狩衣袴を着て（延久三年江記に云、角力人三十人次第行列その裝束烏帽子狩衣犢鼻褌也、差細狩衣の上に帶を着、下袴を着せず、徒跣左右各三十人也）一度に角力とりて勝負あり。廿八日（大の月廿八九日、小の月廿七八日）召合あり（裏書

に云、召合抜出は左右相撲相合也。江次第に云、勝方亂聲負による、左勝は抜頭右勝は納曾利均共に奏す。往年最手時を決す、左負勝右負勝の時は、右先づ納曾利を奏し、左陵王を奏す。又餘景ある者は他の舞を奏す）天子南殿に出御、王卿參上す。大將相撲の奏を執る。十七番取りて勝の方亂聲あり。又廿九日に抜手とて角力をすぐりて御覽ぜらるゝ也。神龜三年に始めて諸國より召上せらる。寛平七年には童相撲を御覽あり、總て角力の起りを申すに日本紀垂仁天皇七年七月に當麻の邑に勇士あり、云々。○童相撲は扶桑略記に曰、延喜元年七月廿八日丁丑童相撲二十番を御覽、綾綺殿に於て此の事あり。○古今著聞集に曰、延長六年潤七月童相撲廿番給りて舞を奏す。○辻相撲は公事にはあらず、何方にもあるを云ふ。譬へば禁裡御神樂について民間等にあるを里神樂といふが如し。辻相撲とは神社等にある常の相撲なれども禁庭の相撲に准じて秋とする也。凡そ相撲の勝負を定むる者、是を行事といふ、その法三流あり、播洲・東坂本・西岡是也。（近世洛内下に止る）相撲は手を以て相撲つわざなれば相撲と名く。

【俳諧歳時記】兩々相當りて力を技藝射騎に觝戲とす、故に角觝と云ふ（漢書註・角觝は相撲也指南・壯士裸裎相搏ちて勝負を角す。毎群戲既に畢れば、左右軍大鼓を雷らして之を引く、豈角力伎の遺耶文獻通考。史記秦の二世甘泉宮に在て樂を角力戲・俳優戲をなす。漢ノ武帝此戲を好む、即ち今の相撲也事原。○垂仁天皇紀に大和國當麻蹶速と出雲國野見宿禰と力を撲ましむ、蹶速野見に勝つこと能はず　其の腰を踏折られて死せり。野見は菅家の祖也。

季題解説　古昔七月、宮中にて相撲の節會を行はせられしより、俗間にても秋季に多く行はれたり。故に相撲を秋季とせり。

實作注意　古　部頭使先づ二三月の頃、大將以下陣の座に於て相撲使の事を定む。諸國七道に遣して相撲人を召す。これをいふ。古　童相撲　古へ宮中にて童子をして相撲をとらせ御覽ありしをいふ。辻相撲　宮相撲　古昔禁中にて行はれし以外の相撲をいひしが、後に神社等の祭禮に行はるゝを、辻相撲、宮相撲といふ。草相撲。草刈相撲ともに田舍の若者などの村祭に行ふをいふ。勸進相撲木戸錢を徴する相撲興行。寄相撲　飛入力士、即寄手の望みに應じ、勸進元の取手が相手となりて相撲するをいふ。現代にては宮中の相撲節會廢せられ初場所（一月場所とも正月場所とも云ひ一月に之を行ふ）と五月場所（夏場所とも云ひ五月に之を行ふ）の二回東京兩國國技館に於て大相撲興行せらるゝ事となりたれば、本來ならば新年又は夏季に此題を編入し、秋季には、夜角力、草角力などを置きて然るべしと思はるゝも、古人の詠もあり暫く古來の定めに從ひ、茲に其儘存置せり。

【參照】桂の宮相撲　新年—初場所　夏—五月場所

例句

相撲

大腰に懸て投けり石地藏　許六（篇突）

相撲取

若菜わる座敷相撲や從弟同志　同（同）
あの人の嘘と相撲は親ゆづり　同（同）
褌の串下に手間取る相撲かな　同（[illegible]人形）
力相撲溜の出る時負けにけり　同（山中集）
三男の三郎出たり無理相撲　同（正風彥根躰）
撫子の内股くゞる相撲かな　木導（篇突）
小櫻とわろびず名乘る相撲哉　秋之坊（卯辰集）
田を刈りて相撲の聲や村雀　智月尼（三河小町）
飛入の力者あやしき角力かな　蕪村（蕪村句集）
日頃中よくて恥あるすまひかな　同（同）
負まじき角力を寐物語かな　同（同）
夕露や伏見の角力ちり〴〵に　同（同）
訪ひ寄りし角力うれしき端居哉　同（同）
脱捨てゝ相撲になりぬ草の上　太祇（太祇句選後篇）
嵐雪が其唐錦相撲見ん　白雄（白雄句集）
西東合はぬ相撲ぞ哀れなる　同（同）
相撲取る男幾たり庭の秋　蓼太（蓼太句集）
今年父きやつに勝れな腹くじり　几董（井華集）
賭の御馬曳出す相撲かな　召波（春泥發句集）
額に日のさして猶豫ふ相撲哉　梅室（梅室家集）
露と霧とのものと角力を思ひけり　青々（倦鳥）
終の世は土山櫛を相撲取　沾德（沾德句集）
むかしきけちゝぶ殿さへすまふとり　芭蕉（芭蕉庵小文庫）
よき衣の殊に賤しや相撲取　其角（續の原）
上手ほど名も優美なり相撲取　同（句兄弟）
相撲氣を髮月代の夕かな　同（同）
裸身に麻の匂ひや相撲取　許六（韻塞）
雨降は夜着きて寐たり相撲取　同（篇突）
稻妻の格子に勝や相撲取　木導（同）
都にも住み交りけり相撲取　去來（猿蓑）
相撲取並ぶや秋の唐錦　嵐雪（炭俵）
古鄕の座頭に逢ひぬすまふ取　蕪村（蕪村遺稿）
角力取黃楊の小櫛をかりの宿　同（同）
ふたつ三つよき名望まるすまひ取　同（同）
ちかつきの角力に逢ひぬ繡師　同（蕪村遺稿）
あたま打つ家に歸るや角力取　同（蕪句題苑集）
引組んで猶分別や相撲取　太祇（太祇句選）
家土產の京知顏や相撲取　同（同）

相撲取

寒ければ衣着にけり相撲取　暁台（暁台句集）
神妙に古き代慕へ相撲取　同（同）
相撲取死なで帰れり伊達の木戸　同（同）
大内の砂を土産や相撲取　蓼太（蓼太句集）
しをらしや灸すゑたる相撲取　同（同）
女ほど櫛笥持けり相撲取　同（同）
みどり子や見る目の前に相撲取　同（同）
胸あはぬ衣かつぎけり相撲取　几董（井華集）
相撲取扇遣ひの見事かな　樗良（樗良発句集）
物言はゞ叱りやすらん相撲取　諸九尼（諸九尼句集）
乗掛の相撲に逢ひぬ宇津の山　大江丸（俳懺悔）
相撲取露の妻子もありと聞く　成美（成美家集）
露の身と思ひもかけず相撲取　同（同）
秋の暮立出にけり相撲取　同（同）
相撲取の宿は浅茅と答へけり　乙二（松窓乙二発句集）
痩馬にふんまたがりし相撲哉　一茶（七番日記）
見ず知らぬ相撲にさへも贔屓哉　同（同）
撫子のおされ顔あり相撲取　梅室（梅室家集）
相撲取小さき妻を持ちてけり　子規（子規句集）
古里に捨いほ持ちぬすまひとり　道夢（道夢遺稿）
櫛をさす世も有りしなり角力取　青々（倦鳥）

関取
辻相撲

関取や妻は都の人をみなへし　几董（井華集）
投られて坊主なりけり辻相撲　其角（[illegible]）
卜仁やしこゞにぬれて辻相撲　同（同）
見物の鼻血おかしや辻相撲　許六（篇突）
勝逃の旅人怪しや辻相撲　太祇（太祇句集）
裸身に夜半の鐘や辻相撲　同（同）
著物の失せてわめくや辻相撲　同（太祇句選後篇）

宮相撲
草相撲

べつたりと人の生る木や宮相撲　一茶（七番日記）
月代に勇み立けり草相撲　木導（篇突）
小手袖の昔に擬へ草相撲　白雄（白雄句集）

地取
京相撲
小相撲
老角力

組あふて物打語る地とりかな　蕪村（新五子稿）
下帯は見事なれども京相撲　許六（篇突）
小相撲のきたなく勝や鼓刀　尚白（忘梅）
よき角力出て来ぬ老の恨かな　蕪村（蕪村遺稿）
老にきと妻定めけり相撲取　召波（春泥発句集）
相撲取の頤長く老にけり　鬼城（鬼城句集）

お相撲

お相撲と名のらば是も三所ケ関　宗因（梅翁宗因発句集）

勝相撲

お相撲や五年前見し差少年　几董（井華集）
勝相撲泥鳥羽迄も見えたりや　宗因（宗因発句帳）
亂れ髪風情なるかな勝相撲　曉臺（曉臺句集）
やはらかに人分け行くや勝相撲　几董（井華集）
女郎花もつとくねれよ勝角力　一茶（旅日記）
草花を腮でなぶるや勝相撲　同（九番日記）
勝相撲蟲も踏まずに戻りけり　同（同）
脇向いて富士を見るなり勝相撲　同（同）

負相撲

甲斐なしや後ろ見らるゝ負相撲　白雄（白雄句集）
負相撲其子の親も見て居るか　一茶（一茶句帖）
負相撲板行にして賣られけり　同（九番日記）

夜相撲

夜相撲に又來て例の虫めかな　千川（けふの昔）
夜角力の草にすだくや裸蟲　蕪村（蕪村遺稿）

相撲の場

山吏に崩れて來るや相撲の場　涼菟（一幅半）

相撲柱

弓張に暮行く相撲柱かな　召波（春泥發句集）

相撲觸

水汲の曉起や相撲觸　其角（類柑子）

相撲札

神のため女も賣るや相撲札　其角（五元集）

参考

相撲の節の史上の初見は、續日本紀、聖武天皇の卷、「天平十年七月癸酉天皇御二大藏省一覽二相撲一」とある記事である。相撲は雄略天皇紀に「十三年九月喚二集采女一使下脫二衣裙一而著中犢鼻上露所相撲。」又垂仁天皇紀に「七年七月乙亥、當麻蹶速與二野見宿禰一令二捔力一」ともある。スマウは、スマヒの音便で、スマヒは抵抗すること、後拾遺集にも「秋風に折れじとすまふ女郎花いく度野邊に起臥しぬらむ」とある。相撲の節は、每年諸國に部領使を出して力士を召す。節會は初は七月七日、後に淳和天皇の天長三年に七月十六日とし、又後に大の月は七月二十八九日、小の月は二十七八日に定まつた。左方の力士は葵の造花を、右方の力士は瓠の造花を頭に著けて出で、相撲して勝つた力士は、次番の力士をして再びその花を著けしめて退く。

蟲選（中）

蟲狩　蟲探り　蟲吹く　蟲合

古書校註

【山之井】蟲を選ぶとは、上人たち嵯峨野わたりに逍遙しつゝ、蟲を取て籠に入れて、大内にまゐらせ侍りし事とぞ。今の世も賀茂侍など、此處彼處より求めに奉り侍る。されば蟲ふく嵐の山のべのけしき、とぼしありく行燈の影に、小倉の里もたど〳〵しからぬ有樣、又さ吐もが露を命にて云々。（下略）（一）

【滑稽雜談】七月、公事根源云、選レ蟲、是はあなかち式ある事にはあら

ず。殿上の逍遙とて殿上人ども遊びて嵯峨野などに向ひて、蟲を籠に選び入れて奉る、是は堀川院の御時より始まる。凡そ松蟲・鈴蟲などは誰人も內裏に奉る。又賀茂の社司などに仰せられてめされけるとなん。ᅳ是は公事根源年中行事にも九月の所に記す。然れども俗間又初秋より賞す。故に俳諧七月部に押す、今又爰に記せり。蟲合・蟲狩同ㇾ之。

【年浪草】　世諺問答に云、賀茂籠りとて蟲入れ侍るは、何の故に賀茂より出侍るにや。答是は殿上の逍遙とて昔殿上人共の嵯峨野などへ向ひて、蟲を籠に撰み入て奉りしは堀川院の御時よりぞ始りける。蟲選びとも申す也。昔は賀茂の社司などに仰せて鈴蟲・松蟲などを召されけるよし、故禪閤の仰せられしとかや。されば昔は賀茂より出侍ると思ひ合せられ侍る。

【俳諧歳時記】　九月。增山の井等嵯峨野の蟲選、九月の部に出すこと勿論也。只蟲選と云ふ時は七八月の間をも云ふべし。今舊きによりて再び此處(二)に出す。

註　(一)以下蟲の條參照。(二)同書には「蟲選」を七月と九月と兩所に出せるなり。

季題解說　古、殿上人の嵯峨野などの京都郊外に逍遙して鳴く蟲を採り、籠に入れて宮中に奉りしをいふ。

蟲狩り、蟲吹く、野に出でて蟲をさがし捕ふること。蟲吹くともいふ。〔記事〕「此月夜に入り火を叢間に點じ松蟲・鈴蟲を捕る、之を蟲を吹くといふ、とり得て後、紗囊、竹籠の內に養ふ」又貞德の文に「晚景蟲吹に罷出るべく候、黑月闇にて無用心に候へども盆前は墓參り仕る者しげく候而路路賑しく候行燈提燈案置候へば促織・松蟲・鈴蟲・螢いくらも寄り來り候、古は公卿殿上人撰蟲とて嵯峨の邊へ御出候由年中行事公事根源と申す書に見え申候」。參照　動物—蟲

例句

蟲撰　我籠落夜人來ませり蟲撰　青々(倦鳥)

嵯峨にて

蟲狩　淺ましや蟲吹中に尼一人　言水(初心もと柏)

蟲とりや提灯あくる山の池　北枝(初蟬)

參考　年中行事歌合に、これを加へて、「撰蟲といへる事は、あながち式ある事にてはなけれども、殿上の逍遙とて殿上人どもの遊びて嵯峨野など へ向ひて蟲籠に蟲を選び入れて奉りけり。おもしろき事にて侍れば秋の題の中に加へ侍るなり」とある。

茸狩(たけがり)　(晩)

茸とり(きのこ)　菌狩(きのこがり)　茸筵(きのこむしろ)　茸籠(きのこかご)

季題解說　山野に出で、食用の茸を探し取るなり。茸筵は茸狩に持ち行き布く筵、茸籠は採りたる茸を入るゝ籠なり。參照　植物—茸(コキノ)

例句

茸狩　茸狩や見付ぬ先の面白さ　素堂(素堂家集)

茸狩やあぶなき事に夕時雨　芭蕉（芭蕉句選拾遺）

女中の茸狩を見て

茸狩や鼻の先なる歌がるた　其角（炭俵）

茸狩や山のあなたに虚勞病　同（皮籠摺）

五老井茸狩

松茸や山よりわめく臺所　許六（風俗文選犬註解）

茸狩や野は侍に萩芒　同（同）

茸狩に抜駈せばや龍安寺　正秀（初蟬）

茸狩や寺の印の俄か傘　野坡（野坡吟艸）

茸狩やうつぶきたがる野風呂持　也有（蘿葉集）

几董と中瀧に遊ぶ

茸狩や頭を舉れば峰の月　蕪村（蕪村句集）

茸狩や似雲か鍋の煮るうち　同（蕪村遺稿）

茸狩を羨む旅の勞れかな　白雄（白雄句集）

茸狩の柴に焚るゝ櫻かな　几董（井華集）

竹径庵にて

白露の百歩に茸を拾ひけり　同（同）

降出して茸狩殘す遺恨哉　召波（春泥發句集）

茸とりや老もちと行きちよつと行き　土芳（蓑蟲庵集）

三味線に松のかづらや菌狩　白雄（白雄句集）

さし上げて獲物見せけり菌狩　召波（春泥發句集）

中入に見舞ふ和尙や菌狩　太祇（太祇句選後篇）

茸とり
菌狩

紅葉狩（もみぢがり）（晩）

紅葉見（もみぢみ）　紅葉酒（もみぢざけ）　紅葉茶屋（もみぢぢやや）　紅葉の舟（もみぢのふね）　紅葉の小舟（もみぢのをぶね）　紅葉の御舟（もみぢのみふね）

季題解說 晩秋、山野の紅葉を探りて觀賞することゝ。紅葉は楓のみならず一般落葉木の葉の黄紅變せるもの。紅葉茶屋は紅葉ー客のためしつらへたる茶屋。紅葉の舟は紅葉を葺ける舟なり。

例句

紅葉狩

諸無常に寄す

目を覺ませ後知らぬ世の紅葉狩　鬼貫（鬼貫句選）

谷へ付け鹿のまだきの紅葉狩　其角（俳諧曾我）

遊二仁和寺一

君知るや花の林を紅葉狩　几董（井華集）

紅葉見

紅葉見る公家の子達ぞ初瀬山　其角（句兄弟）

紅葉見や打火をうつす染火繩　野坡（水僊傳）

紅葉見や猿つくばひの御所女中　同（[illegible]）

紅葉見や顏ひや〳〵と風渡る　闌更（半化坊發句集）

枕して紅葉見初る寒の山　同（同　）

紅葉酒
紅葉には誰が教へける酒の燗　其角（曠野）

紅葉の賀（晩）

【季題解説】紅葉の頃、即ち晩秋に行ふ賀の祝をいふ。（對）春の花の賀（春）

菊合（晩）　菊くらべ　闘菊　勝菊　負菊

【古書摘註】【年浪草】古今著聞集に曰、延喜十三年十月十三日御記に云、侍臣に仰て新菊花をして十本宛を分たしめて、勝負を相爭ふ。［甲］時を以て、各方花を領して參入（一番は仙華より入り、二番は瀧口より入る）次第に進て花を庭中に立つ（一番種花各洲形を以てす、二番栽火桶各々人附二人取りて御前に立つ）左衛門督藤原朝臣、御前に候し、傳へて勝負を作す。十番勝方簾中拜舞、進て菊中各一本を進む、兩方小庭に栽ふ。云々

【實作注意】菊の花を持ち寄り、その花の優劣を合せて歌、負を定むるを菊合といふ。昔、寛平の菊合は、各地の名所の菊を題にして歌に詠みたるにて、菊の花は折からの興に持ち出しなりと云ふ。又後世諸大名などの重陽に催したる菊合は、菊花一輪を摘み、一枚の葉を添へて催主に送り、催主は九の數をとり、其數三十六に滿つれば、箱の中に一輪づつ花を挿し並べて蓋を覆ひ席に出して判者の評を請ふ。選みに預りたる一種を勝菊と呼び、猶其盆栽をも席に持出して、是れに賞を贈る定めなりしと云ふ。又九々八十一輪を集めて判をなせし事もありしと云ふ。享保の頃菊合ひ又流行し、競うて新花をつくり出せしこと古書に見ゆ。今日菊花品評會の催ありて花を競ふと雖も、其趣菊合とは異るものなり。（季題）重陽（晩）植物　菊（晩）

【例句】

菊合せ
財布から小判の耳や菊合せ　支考（蓮二吟集）
一葉ふら油や菊合せ　蓼太（蓼太句集）
白きにも浮世の善悪や菊合せ　同（同　）
御園生に男なぶらん菊合　巴風（續虚栗）
南山にうしろ向くや菊合　蓼太（蓼太句集）
白かちに持て出でつゝ菊合　可群（新一選句集）
煩さしや菊の上にも負勝は　一茶（七番日記）

菊くらべ
蓬生に持あはせけり菊くらべ　迅櫻（卯辰集）

勝菊
勝菊や力み返つて持つ奴　一茶（七番日記）
勝菊は大名小路戻りけり　同（同　）

負菊
負け菊をひとり見直す夕かな　同（一茶發句集）

【参考】菊合は支那の闘草より出で、もと菊を愛するよりこれを比べて華を競ふのである。寛平菊合に「左方占手の菊は殿上童に立君を女に作りて花に面をかざさせてもたせたり。九本をば洲濱を作りてぞしたる。その洲濱のさまは思ひやるべし。面白き所を付けつつ菊には結ひつけたり。」古今著聞集十九、草木の部に、「延喜十三年十月十三日御記云。仰二侍臣一令下新菊花各十本分中三番上云々」の記事がある。

菊人形（晩）

【季題解説】菊の花にて細工を施したる人形にして、東京兩國國技館、淺草花屋敷、名古屋萬松寺等、十月より十一月へかけて菊人形を飾る。【参照】植物―菊

海嬴廻（晩）　ばい　べいごま　海嬴打　強海嬴　勝海嬴　負海嬴

【古書校註】【年浪草】和漢三才圖會に曰、何れの時より始まるを知らず。田夫野人の玩ぶ所也。海螺の空殻を用て頭の尖りを研ぎ平げ、尻の尖りを摩り圓め、糸繩を卷きて引いて之を席盆の中に舞はす。二三の螺を以て勝負をなす。撃出さるゝものを負とす。其の先に入るものを伊加と云ひ、後に入るものを乃字と云ふ。もし撃合ひて同じく出ることあれば張と云ふ。張るときは伊加を勝とす。凡そ熊野より出る海螺厚く堅し。○紀事に曰、此の月（九月）九日兒童小石を以　海螺の殻を穿ち鉛を鎔して殻の内に入れ、或は沙濱餡を殻の内に充てゝ其の力を助け、各々緒を以て海螺を纏ひ勢に乘じて臺内に投入れ運轉せしむ。其の力強きものは弱きものを盆外に出す、互に勝負を爭ふ。之を海嬴撃と稱す。席の兩端を卷いて之を盆といふ。

【季題解説】海嬴の殻へ鉛又は蠟などを塡めて獨樂の如くにし、緒を卷き引きこれを席盆の中に舞はし、相搏たしめて勝負を決す。二三の海嬴を以て勝負をなし、打出さるゝものを負とす。その先に入るものを伊加といひ、後に入るものを乃字といふ。若し打合て同じく出つることあれば張といふ。張の時は伊加を勝とす。もと九月九日節句の小兒の遊戲なり。【参照】重陽

【例句】
海嬴廻
強海嬴は毛利が家の子なりけり　青々（妻木）

美術展覧會（三秋）　帝展（帝國美術院展覧會の畧）　院展（日本美術院展覧會の畧）　南畫展（日本南畫院展覧會の畧）　二科會　美術の秋

【季題解説】毎年秋に至れば、東京上野に於て各種の美術の展覧が開催さる。著名なるものは凡そ掲記の如きなれど其他にも獨立展など新進を網羅せる

ありこ（新）

例句 美術展覽會 帝展

信實も啓書記も出る日を待たん　青々（倦鳥）

金魚品評會（中）

季題解説 毎年九月の初め、金魚の子の一寸六七分に生長したる時、親魚と兒魚とを出品し、審査し、番附をつくる。會は東京に開かれ、全國より出品す。（新）〔参照〕夏―金魚

神宮競技（晩）

季題解説 明治大帝の御威徳を記念する意味に於て、隔年十月三十日より五日間、明治神宮外苑にて諸種の體育運動競技あり。（新）〔参照〕體育デー

體育デー（晩）

季題解説 體育の普及發達を促し、全國民をして運動に親ましめ、それを日常の習慣たらしめ、よりて身體と精神と兩々健全ならしむる本旨にて、大正十三年十一月三日、明治節を體育奬勵紀念日として「體育デー」を公定し、毎年同日東京の明治神宮外苑に於て各種の體育競技を催し、地方の各學校に於ても運動會を催し各種競技を行ふ。（新）〔参照〕神宮競技

秋の野球リーグ戰（晩）

季題解説 秋季十月、明治神宮球場にて行はるゝ、帝國大學、明治大學、早稻田大學、慶應大學、立教大學、法政大學の六大學の野球リーグ戰をいふ。春秋二季に行ふ。春の野球リーグ戰に對してかくいふなり。（新）〔参照〕春―春の野球リーグ戰

秋の運動會（三秋）

季題解説 運動會を春季に催す事もあれど、秋は清朗の好季なれば、諸學校にては多く運動會を催し、各種競技をなす。（新）

實作注意 運動會を秋季結びとして詠すればよろし。遠足など云ふと同じく運動會と云ふばかりにては無季なり。〔参照〕秋の遠足　春―運動會

秋の遠足（三秋）　秋のピクニック　秋のハイキング

季題解説 單に遠足は春季に定むるが如くなれども、秋は中和にして清朗な

れば、また郊外へ遠足を試むるもの多し。（約）

實作注意 遠足を秋季結びにして其感味を詠出すべし。**參照** 秋の運動會（アキノウンドウクワイ）　春―遠足（エンソク）

例句

遠足　遠足歸り貝殻に又灯す秋　露月（露月句集）

秋の野遊（あきののあそび）（三秋）

季題解說 秋は氣候清朗にして郊外散策によし、秋の字を冠して季とす。

參照 春―野遊

秋の宿（あきのやど）（三秋）

季題解說 秋の庵（あきのいほり）　秋の家（あきのいへ）　秋の戸（あきのと）

靜かに又さびしと感じたる秋季の自他の住家をいふ。

例句

[illegible]、召波が旅寝りし時

何もなし夫婦訪來し宿の秋　太祇（太祇句選）

[illegible]昔たゞ[illegible]給ふ古足の里を過るに、こゝに年師と共に一夜を明かしゝる宿の其、家構わざと昔の儘なれ作りて

宿の秋我泣く涙あやしみぞ　白雄（白雄句集）

秋の戸に倚る袖乞の鼓かな　鐵僧（續明烏）

四ツ谷の里を過ぐ

麥蒔て冬にしてあり小家の秋　乙二（松窓乙二發句集）

只一つ見る俵かよ秋の家　一茶（享和句帖）

秋の宿淋しきながら佳有り　青々（妻木）

ことりともせいである日の秋の宿　小酒（倦鳥）

蜘の巣の是も散行く秋の庵　路通（曠野）

一笑悼

佛にもならられら秋の庵ずき　北枝（西の雲）

十丈の何がし草庵を尋ね中されしに我が旅歸りの同じ心に侘びて

秋の庵歌よむ程に荒にけり　支考（續有磯海）

秋の燈（あきのひ）

季題解說 秋夜の灯は靜けくして、しみ〴〵と懷かしく親しむべき趣あり。

例句

秋の燈

[illegible]

雨戸越す秋の姿や燈の狂ひ　來山（今宮草）

秋の燈やゆかしき奈良の道具市　蕪村（蕪村句集）

秋の灯や端居になれて草の色　露月（露月句集）

秋の煙（三秋）

季題解説 秋の野山の住居にて夕餉などの煙、又は何となく淡き煙の立つを秋と冠して其趣を得ん歟。

例句

秋の煙　夕餉たく嵯峨野の秋や薄煙　車庸（きさらぎ）

秋篠や秋の煙の村一つ　青々（妻木）

秋興（三秋）　秋の遊

季題解説 秋に興じて遊ぶをいふ、野に出て秋を感じて遊ぶは皆秋興となるべし「朗詠集」林間煖酒焼紅葉、石上題詩掃緑苔「白楽天」秋の遊は秋興と似たれども又いさゝか異りたる趣あるが如し「白氏集」下馬閑行伊水頭、涼風清景勝春遊、何事古今詩句裏、不多説著洛陽秋。「秋遊、白楽天」

例句

秋興　秋興に暑さはいつか忘れたり　青々（倦鳥）

秋の遊　半日を端山に秋の遊びかな　同（同）

秋思（三秋）

季題解説 秋思は秋を感ずる思ひなり、秋を感ぜしむる自然物は数多あるべし、秋風の音も秋思を誘ひ、虫の声、砧の響も秋思を誘ふ、その他にも何とはなくて秋を感ぜしめらるゝ場合あるべし、この情は是れ秋思なり、「白氏集」信意閑弾秋思時、調清声直韻疎遅、近来漸喜無人聴、琴格高低心自知「弾秋思、白楽天」

例句

秋思　きぬ〴〵に木艸の觸れて秋思かな　青々（倦鳥）

雁の使（三秋）　雁の書　雁の便　雁の玉章

季題解説 支那前漢の代に、匈奴に捕はれた蘇武が雁に思を託した故事より出で、音信のことをいふ。【参照】動物「雁」

雁瘡（三秋）　がんがさ

季題解説 一種の發疹性皮膚病の俗稱にして、又がんがさとも稱す。多く下肢に發生し、甚しき瘙痒あり、雁の来る頃發し、雁の去る頃に至りて癒ゆ。故に此の名あり。【参照】動物「雁」

秋祭（三秋）在祭

季題解説 秋は諸所の鎭守神の祭禮あり、九月は最多し。

實作注意 祭といへば古來京都賀茂神社の祭をいひしものなるが、現今は諸神社の祭禮、夏季最旺んなるより、賀茂祭以外をも單に祭といひて夏季に含ましむ、故に秋の文字を冠らしめ又は秋の季感を配して夏祭と分つ。

參照 夏祭

例句

秋祭

かいどりや木綿鹿子の秋祭　之道（あめ子）

御穗とつて髮あるまねのかざし哉　九月御祭　其角（皮籠摺）

皆まめで豆引く夜半や月祭　蝶羽（若俵）

祝り子の柿かぶり居る祭かな　嘯山（葎亭句集）

綱干さぬ門とてはなし秋祭　多代女（晴霞句集）

山中の家の少しに秋祭　舫子（倦鳥）

里の子の金柑にぎる祭かな　小酒（杉の實）

攝待（初）門茶

古書校註 【年浪草】佛祖統記十八宗曉傳に曰、義井を城南の檪社に鑿り法華水といふ、以て行者に飮ましむ。亭をその上に作り施すに湯茗を以てす。屋を結ぶこと數楹、創めて接待となす。○今佛寺或は四衢道中に店を開きて往來の人に茶を施す。之を名けて接待といふ。接待の名、漢既にあり、日本の俗稱にはあらず。

【栞草】往來の人に茶を施すなり。門茶ともいふ。

季題解説 陰暦七月中、佛寺めぐりをなす者に、湯茶の攝待をなす。門にて往來の人々に茶を施すゆゑに門茶とも云ふ。

例句

攝待

攝待の茶碗盜人泪かな　來山（續今宮草）

攝待の道かたづけよ黑木賣　蚊市（くやみ艸）

攝待に煙管忘れて西へ行く　蕪村（蕪村句集）

攝待や菩提樹陰の片庇　同（蕪村遺稿）

攝待へ寄らで過行く狂女哉　同（同）

攝待

攝待の茶にかき立る藥かな　几董（井華集）
攝待や猫が受取る茶釜番　一茶（九番日記）
攝待の名ぬしは石の佛かな　同（花實發句集）
攝待に雁はれ給ふ佛かな　梅室（梅室家集）
折からの攝待うくる涙かな　子規（全集）

門茶

僧と我芙蓉を隔つ門茶かな　小酒（杉の實）

逆(ぎやく)の峯入(みねいり)（初）　秋(あき)の峯入(みねいり)

古書校註

【年浪草】紀事に曰、七月の初、大峯修驗道山伏の客僧大峯より京師に出づ、大なる法螺を吹き、自ら金剛杖を拏り戸々を遍歷し、齋料を乞ふ。或は前(セン)鬼不鉢或は奈良硫黃等の物を檀那の家に贈る。凡そ入峯の法本山派(一)は熊野より大峯に入る、之を順の峯入と云ふ。當山派(二)は大峯より熊野に出づ、之を逆の峯入と云ふ。

註 (一)本山派は京都聖護院流なり。春部、順の峯入に照。(二)當山派は醍醐三寶院流

季題解説

昔、七月上旬、京都醍醐三寶院より徒歩にて法螺を吹き行列を整へ、吉野大峯の山中深く分入り、灌頂を受け護摩を焼き、歸途は葛川神宮より葛城を經て歸るをいふ。春季三月熊野より大峯に入るを順の峯入といふに對するなり。

現今にては毎年六月七日三寶院を出で、管長に隨從し、汽車にて大阪梅田に下車、爰より行列を整へ、管長は大僧正格にて轅の輿に乗り湊町驛へ緋步、爰に大阪信者を加へ、汽車にて吉野口を經、吉野驛にて下車、徒步にて大峯に入る。たゞし小篠限りにて輿へは入らず、一行は爰にて解散して歸路は隨意の行動を取ることゝなり居れり。服裝は凡て昔に準じ、修驗道の特殊風俗を扮するなり。

[illegible]

只峯入と云ひては春の峯入になるなり。故に秋なることを斷る必要あり。

〔參照〕春—順の峯入

例句

逆の峯入

峯入の笠もとらるゝ野分かな　許六（笈日記）
峯入や笠にさしたる楢かしは　荷兮（杜撰）
峯入や明け行く月を笈の端　定克（宰陀稿本）
峯入は皆柿道心とや申す　露月（露月句集）
峯入は釋迦檀特の萩の花　青々（倦鳥）

北野御手水(きたのおてうづ)（初）　御手洗祭(みたらしまつり)

古書校註

【日次紀事】今曉（七日の朝）北野の松梅院、御手水を神前に獻ず。松風の

硯に穀の葉をそへて之を供ふ。松梅院もし幼年なるか或は故障あれば則ちこの儀なし。

季題解說 古昔陰曆七月六日、山城國葛野郡北野天滿宮の松梅院御手洗を神前に供するをいふ。神寶の松風の硯筥の上に梶の葉を置てこれを供す。これ七夕に御歌を詠ぜられんが爲なり。

現今は御手洗祭となり、七月七日に行はれ、松風の硯筥・御水差・角盥の上に簀を置き、その上に梶の葉七枚宛を左右に置きて獻ずるなり。

北野煤拂（きたのすゝはらひ） (初)

古書校註 【雍州府志】 每歲七月六日、北野社內外の陣に在る所の神寶を西の間並に幣殿及び會所に出して之を曝す。その間宮仕內外陣の煤塵を掃ふ。

季題解說 陰曆七月六日、山城國の葛野郡、北野天滿宮內外の陣にある所の神寶を、西の間及び幣殿會所に出し、これを曝す、其間に宮仕內外の陣の煤を拂ふなり。 **參照** 冬―煤拂（スヽハラヒ）

本願寺の籠花（ほんぐわんじのかごばな） (初)

古書校註 【日次紀事】 西東本願寺立花、昨晚（七月六日の晚）東西本願寺末派並に家禮（一）花數種を以て船の形を作り、又槽の形を造り、中に草花數品を立て、門主に獻じ、堂上に並べおく。今日（七日）諸人これを窺ひ見る。

註 （一）家來に同じ

季題解說 陰曆七月七日、京都の東西兩本願寺にて、門末の寺より種々の草花にて鳥獸草木人形の作り物を籠に挿して獻上す。これを對面所の緣に並べて貴賤に一見せしむるをいふ。これ七夕に供ふる意なりと。たゞし今は此事全く絕えたり。（古） **參照** 重陽（チヨウヤウ）

文殊會（もんじゆゑ） (初)

古書校註 【年浪草】 公事根源に曰、是は東寺・西寺にて行はる。仁明天皇天長十年七月八日大法師泰善始て文殊會を修す。（一）太政官符其略に曰、文殊會は畿內の都邑廣く件の會を設け、餘食等を辨して貧者に施し給ふ。是則ち文殊涅槃經に依る也。云く若し衆生ありて文殊師利の名を聞んに、十二億劫生死の罪を除却せん。若し禮拜供養する者は生々の處恒に諸佛の家に生れん。

季題解說 文殊會は、京都東寺・西寺にて文殊を本尊として文殊涅槃經を講讚せし法會なり。天長十年七月八日始めて修せらる 翌日貧民に施與の事あり。これまた文殊涅槃經の文に依るなり。此法會後世廢絕せり。（古）

盂蘭盆會（初）　盂蘭盆　盆會　盆供　盆　新盆　盂蘭盆經　盆前（時候）　盆過（時候）

古書校註

【山の井】　なき魂の來ますといふ事一年に數多度あなるとなれど、ことに七月はうらぼんにて、久方の雲の上にも御盆供を供へ給ひ、あまざかる鄙人までもあたり〳〵の持佛の前にわさ米・枝豆・根芋など所せきまで奉り、檜破子・くきやう（一）やうの物調へて、身寄々々の眷族はさらなり、聞きふれ見なれし無緣法界（二）に至るまで殘りなく祭り侍る。されば水施餓鬼して、火の車の猛さも打消す心ばへ、送火の光りに暗闇の地獄の迷ひなからんを思ひやり、麻がらの枝つくらむよろぼひ姿を悲しみ、燈籠木の如き餓鬼ばらをあはれみ、又蓮葉にぶりめく露をのるらん人玉になぞへ、ほえみそはぎの露けさを我が袖の涙によそへて、古きを思ふ心などすべし。

【御傘】　うら盆、玉祭也。盂蘭は梵語なり。藤袴とは付けても苦しからず、若し蘭の花など聲によむ句あらば三句去るべし。

【年浪草】［盂蘭盆・盂蘭盆會・盆供］日本紀曰、齋明天皇三年始七月設二盂蘭盆會一、同五年勅下二盂蘭盆經於諸國一令レ講レ之云々。事文類聚曰、盂蘭盆經云、目蓮比丘其の亡母の餓鬼中に生ずるを見て、卽ち鉢を以て飯を盛り、往いて其の母に餉す、食未だ口に入らず化して火炭となる。終に食ふことを得ず。目蓮大に叫び馳せ還り、佛に白す。佛のたまはく、汝が母罪重し、汝一人の力如何ともする所に非ず、當に十方の衆僧の威神力を求むべし。七月十五日に至り、當に七代の父母、現在の父母、厄難中の者の爲に、百味五菓を具へて、以て盆中に着きて十方の大德を供養すべし。佛衆僧に勅して皆施主の爲に七代の父母を咒願し、禪定の意を行はしめ、然して後食を受けよと。此の時目蓮の母一劫餓鬼の苦を脫することを得たり。目蓮佛に白す、永く來世の佛弟子孝順を行ふ者、亦盂蘭盆會を奉じて爾することをなさしむべし、可ならんや。佛曰く、大に善しと。故に後代の人之に因て廣く華飾をなし、乃至木を刻み竹を割り飴錫煎絲・花果の形を摸し、工巧の妙を極む。翻譯名義集曰、盆是貯レ食之器也、以羅二百味一式貢二三尊一、仰二大衆之恩光一救二倒懸之窘急一。

註（一）くきやう・公饗臺は三方の事　（二）全く關係のなき者の意。

季題解説　陰曆七月十五日に祖先の亡靈を供養し、倒懸の苦を救ふ法要をいふ。其の起源に就いては盂蘭盆經及び六十三套報恩奉盆經に、佛弟子目蓮その亡母を供養せしに始る由を載せたり。爾來支那にては梁の武帝の大同四年に初めて修せられ、我國にても早くより盂蘭盆供養の禁中にて行はれし事、日本紀を初めとして、公事根源・江家次第・延喜式等に見ゆ。而してこれが民間に傳り、年々此の日、亡父母乃至七世の父母、並びに有緣無緣

三界萬靈のため、祭壇を設け、百味の飯食・五菓を供へ、燈籠、提灯をともし、十方の佛僧に施して供養を行ふこととなれり。方今都市にては陽曆を以てするところ多し。新盆は新に佛籍に入りたるものの初めて迎へる盆
盂蘭盆經は盂蘭盆會に讀誦するための經文なり。

實作注意 陰曆七月十五日は安居終りて僧の自恣を得るの日なり。盂蘭盆は倒懸と譯す、亡者鬼處に在りて倒懸の苦を受くるもの丶爲に、祭儀を設け、三寶に供養し、苦を免れしむることにて、元來印度の習俗なりしを、釋尊の用ゐ給ひしものならんと云ふ。我國にては齋明天皇の三年に始めて盂蘭盆會を修せらる。今陽曆七月十五日又は陽曆八月十五日に盂蘭盆會を爲すところ多く、因つて新編の歲時記には盂蘭盆會を夏の部に編入せるものあれど、元來初秋の行事なれば、新曆を用ふると舊曆を用ふるとに不拘秋季のものたるべし。七夕も亦同じ。〔參照〕生身魂、迎火、草の市、燈籠流し、施餓鬼、水燈會、經木流、魂祭、人事、墓參、燈中元、盆の掛乞、燈籠

例句

盂蘭盆會

盆なりと捲りけるかな塚の草　句空（西の雲）

一笑悼

盆に死ぬ佛の中の佛かな　智月尼（己か光）

七月朔日贊波津に縮符して

盆頃に直るや今日の雲ちぎれ　去來（きれ〳〵）

辻番は盆に燃すも行燈かな　也有（蘿葉集）

美しや月の中なる盆の人　曉臺（曉臺句集）

蟹の子や何は無くとも盆扇　同（同）

盆心夕顏汁に定りぬ　同（同）

草枕故鄕の人の盆會かな　同（同）

おしなべて月なき盆となしにけり　同（同）

身に覆ふ齡につるゝ盆心　白雄（白雄句集）

友なる贊白が小庵に訪へて先師を悼りしなどに

盆心憂忘れ草得しかども　同（同）

思へたゞ盆の佛も越す山路　乙二（松窓乙二發句集）

盂蘭盆やたまに呼込む鏡賣　巢兆（曾波可理）

山里やあゝのからのと日延盆　一茶（九番日記）

不甲斐ない家とおぼしぞ盆佛　同（一茶新集）

越後、田中に盆して

御佛は淋しき盆とおぼすらん　同（一茶句帖）

嚴島にて

取分けて盆は目出度し嚴島　蒼虬（蒼虬翁發句集）

盂蘭盆や無緣の墓に鳴く蛙　子規（全集）

新盆　かたみ子や母が來るとて手をたゝく　一茶

盆前　盆前を逃れし山の二人かな　其角（五元集）

魂祭（初）

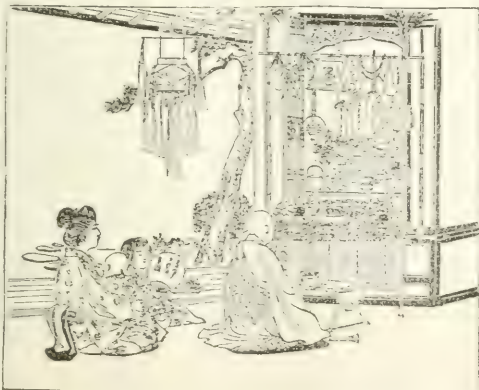
靈祭　玉祭　聖靈祭　聖靈　魂棚　靈棚　聖靈棚　棚經　棚經僧　掛索麪　麻柯の箸　瓜の馬　茄子の牛　茄子の馬　手向け　水向け

古書校註

【年浪草】「聖靈祭・靈棚・靈祭・聖靈棚・棚經」十四日より十六日に至り人家棚を設け各位の牌を安んず、之を靈棚といひ或は之を聖靈棚といふ。その靈を祭るを之を靈祭といひ又之を聖靈祭といふ。その式飯器を公卿臺(一)・破子・加伞奈加計に載せ、幷に茶菓香華を供して之を祭る。又鼠尾草を以て水を灌ぎて之を拜す。是を水を向くるといふ。その家の宗門僧徒來て牌前に誦經す、之を棚經といふ。盂蘭盆會中俗に三方臺をいひて公卿臺といふ。倍木是を加伞奈加計といふ。これ京畿の方言也。(二)「掛索麪・麻柯箸・枝豆・枝頭豆・根芋・青蕎麥・稲米・水米・瓜・茄子」增山井に曰、この類聖靈を祭るの意有らば秋たるべし云々と。「鼠尾草」韓保昇が曰、鼠尾は葉蒿の如し、莖端に夏四五穗を生ず、穗車前（オホバコ）の如し、花は赤白の種あり。○藻鹽艸に曰、水掛艸、これはみそはぎの異名也。七月十五日の忌水の儀也。

註（一）くきやう・公卿臺は三方の事。（二）聖靈棚以下の記事は、すべて日次紀事から引用せるなり。

季題解説　陰曆七月十四日より十六日迄の間、佛前に棚を設け、眞菰筵を敷き、種々の供物を供へ、祖先の靈を祀るをいふ。

實作注意　昔は年の暮にも靈祭せしを、後世一般には盂蘭盆にのみ限りてすることゝなれり。掛索麪・麻柯の箸・枝豆・枝頭豆・根芋・青蕎麥・秈米・瓜・茄子など、皆聖靈を祭るに供ふる

こと、魂棚の奥なつかしと思ひ、在すが如く思ふ心ざしなり。瓜の馬・茄子の牛とて、苧殼の足をつけて其形に作りなどするは、聖靈を迎へ又送るにつけての設けなり。又、寺僧の來りて魂棚に對して誦經するを棚經と云ふ。〔參照〕盂蘭盆會（ウラボンエ）

例句

魂祭

人の親の來ると斗りや魂祭　鬼貫（鬼貫句選）
心にて額に向ふや魂祭　同（同）
靈に玉消えぬ佛に萩の露　同（七車）
魂々とて姿なけれど瓜茄子　同（同）
鼠尾草の餘所も御名よぶ夕かな　同（同）
　聞通勢りなれば、何を向ふ事と可笑しなれば
魂祭身は養生に籠りけり　來山（續今宮草）
　熊坂坂といふ所にて
熊坂が其名やいつの魂祭　芭蕉（卯辰集）
　鳥部山
魂祭今日も燒場の煙かな　同（笈日記）
　尼壽貞が身まかりけると聞きて
數ならぬ身となな思ひそ魂祭　同（有磯海）
蓮池や折らで其まゝ魂祭　同（千鳥掛）
魂祭門の乞食の親問はん　其角（續虛栗）
きのふ見し人や隣の魂祭　同（同）
鼠尾草や分限に見ゆる髑髏（ドクロ）　同（華摘）
　棚の前に廻れる時、門外にて衣の中より何を出されたり、から拾遺品に、一骨の灰壁、首掛、笛珠一個つけ給ふと呼び返して
衣なる錢ともいざや魂祭　同（末若葉）
返らずにかの亡き魂ゝ夕かな　同（類柑子）
魂祭母屋の妻戸の音に何　嵐雪（桃の實）
喰物も皆水臭し魂祭　同（其便）
　十名の句の内
魂祭妾が願ひの棚なり　同（杜撰集）
寐道具のはしばしや憂き魂祭　去來（菊の小文庫）
　故翁の靈を祭りて
里人も一門並みの魂祭　同（有磯海）
酒買て膝商ひの魂祭　許六（[illegible]）
金くれる祖父も有けり魂祭　同（同）
　長崎にて
地子ゆるす京や明智が魂祭　同（同）
　長崎一会
仲麿の面影や見ゝ魂祭　支考（笈の草子）

魂祭持佛に殘す阿彌陀かな　同（太祇句選後篇）
鼠尾草や身にかゝらざる露もなし　曉臺（曉臺發句集）
腹立る顏でも見たし魂祭　闌更（半化坊發句集）

[illegible]

息災な我も來にけり魂祭　同（同）
魂祭貧家の情ぞ誠なる　白雄（白雄句集）

旅中二句

山陰や麻ぬを心の魂祭　同（同）
從弟どち月に語るや魂祭　同（同）
暫しもと亡き魂宿せ草の露　同（同）
世の中や鯛も腐らず魂祭　蓼太（蓼太句集）
月見れば人の顏なり魂祭　同（同）
人の置く露と知りつゝ魂祭　同（同）
此客に樹釣らば嘸魂祭　同（同）

懷舊

魂祭雪も時雨の袖の露　樗良（樗良發句集）
奈良初瀨めぐりて旅の魂祭　同（同）
魂祭茄子に見ゆる母の顏　同（同）
亡き父の膝元うれし魂祭　同（同）
死なで我レ昔の戀を魂祭　几董（井華集）
侘しさや寐所近き魂祭　召波（春泥發句集）
横買て方士戻りぬ魂祭　同（同）
鬧るゝ間のなきも果敢なし魂祭　青蘿（青蘿發句集）
誰爲ぞ西瓜場をとる魂祭　移竹（乙御前）
假初や壁に釘うつ魂祭　成美（成美家集）
鼠尾草や水につければ風の吹　一茶（旅日記）
鼠尾草や緣もゆかりも無い塚へ　同（九番日記）
桃栗の三とせは夢や魂祭　梅室（梅室家集）

病中

病んで父を思ふ心や魂祭　子規（全集）
魂祭我は親より老いにけり　鳴雪（鳴雪句集）

聖靈

聖靈や同じ旅寢の枕元　丈草（[illegible]獅子集）
聖靈も出て假の世の旅寢哉　同（有磯海）
聖靈の隣ありきや山の上　同（初蟬）
聖靈の好かれし人を集めけり　同（同）

[illegible]に戻りて

聖靈に戻り合せつ十年ぶり　同（そこの花）
聖靈となりで越けり大井川　許六（韻塞）
聖靈のふぐり落すな棚茄子　同（[illegible]表紙）

聖靈

聖靈に足をかられて旅寐哉　許六（篇庵日記）

羽根のあと聖靈達や飯の上　支考（越の名残）

聖靈にはぐれてひとり旅寐哉　同（山琴集）

聖靈は清水に見えし影しや送　北枝（加賀絵巻）

聖靈を出して鼠尾草の花見哉　浪化（夜話狂）

聖靈の出て遊ぶにや萩の風　風國（初蟬）

聖靈と落ちかれけん朝鳥　同（けふの昔）

宮中

聖靈と紛れ遊ぶや盆三日　吾仲（舟むしろ）

聖靈や今日こよろぎの濱の波　句空（卯辰集）

聖靈の御立をはやす川原哉　一茶（七番日記）

聖靈の立振舞の月夜哉　同（一茶發句集）

聖靈のさとや蓮花の瓜の皮　也有（蘿葉集）

魂棚

魂棚や蚊は血ぶくれて飛あるく　鬼貫（七車）

魂棚は露も泪も油かな　嵐雪（其袋）

魂棚の栗に先立ついの字哉　同（陸奥衛）

魂棚や皆ごま〳〵と茄子あへ　同（風の上）

魂棚の奥なつかしや親の顏　去來（窗窠）

魂棚や藪木を洩るゝ月の影　丈草（旅袋）

魂棚にさらさら向く日を待身かな　支考（ながら川）

魂棚に油火細し我如く　同（文星觀）

魂棚や不順も順に置直し　也有（蘿葉集）

魂棚をほどけばもとの座敷かな　蕪村（蕪村句集）

魂棚や牡丹餅さめる秋の風　太祇（太祇句選）

貧家

魂棚に草の夕の蟬かな　曉臺（曉臺句集）

夢に見るも魂棚近く寐し夜哉　闌更（半化坊發句集）

魂棚や腰拔殿の居はからひ　几董（井華集）

魂棚の緒に見せけり錢五貫　同（同）

魂棚や上座して鳴くきり〳〵す　一茶（七番日記）

魂棚に掛け奉る襷かな　同（同）

魂棚や終の馴染の臺所　梅室（梅室家集）

棚經

棚經や此曉の閼伽の水　其角（五元集）

棚經や夕顏の馬は耳もなし　也有（蘿葉集）

棚經にとられて減るや蟬の聲　同（同）

棚經を手前で誦んで置きにけり　一茶（七番日記）

棚經を迯尻でよむ法師かな　同（一茶句帖）

苧殼の箸　我箸も苧殼に數へ紛れけり　乙二（松窓乙二發句集）

瓜の馬　瓜の馬くれろ〳〵と泣く子哉　一茶（七番日記）

茄子の馬　戰死が魂を祭る
我作る茄子の馬に乘て來よ　乙二（松窓乙二發句集）

さし汐や茄子の馬の流れ寄る　一茶（享和句帖）

蛙のふいと乘けり茄子馬　同（七番日記）

すね茄子馬役を相勤めけり　同（同　）

生身魂（いきみたま）（初）　生盆（いきぼん）　蓮の飯（はすのいひ）　刺鯖（さしさば）

古書校註

【日次紀事】この月（七月）公武兩家各々尊親を饗せらる。これを生身魂といふ。或は生盆と稱す。地下良賤も亦然り。○此の月十五日前地下良賤各々荷葉を以て糯米飯を裹み、鯖魚をその上に戴せ、親戚の間互に相贈りて祝ふ。これを荷飯といふ。この月專ら鯖魚を賞し、一雙を一挿と稱す。一箇首を以て一箇首の內に挿す。依つて一挿と稱す。

【年浪草】和漢三才圖會に曰、刺鯖中元の日の祝用となす。但し春より脊に傍うて割開き鹽物にし、二枚を一重と作し、之を一刺といふ。その色青紫の者を上となす。能登の產を上とし越中これに次ぐ。○同書曰、蓮飯考妣の靈前に供し、又以て親戚に贈るを禮式と爲し、之を稱して生靈祭（イキミタマ）といふ。荷葉を用て蒸せる糯飯を包み、觀音草を用て之を縛す。佛名を以て好しとするか。

【俳諧歲時記】文明八年七月十一日に云、參內若宮方公卿方以下有ニ御祝之儀一いきみたま云々。親長卿日記○生御靈と云ふこと、文明の前の頃より始まりたると見ゆ、七月の盆に亡者の靈魂を祭るよりして現在の父母兄姉などの生御靈を祝ふ心也。○本朝の俗、七月になれば生ける二親を供養して生身魂と名く。是も盂蘭盆會の修行也。盆經に云、願くは現在の父母をして壽命百年病なく、一切苦惱の患なからしめん云々。是七月十五日僧自恣の日、現在の父母壽命長久を祈る發願の文也。閑窓倭筆

季題解說　我國の世俗、七月に至りて、生ける二親を供養す。八日より十三日までの內にて、吉日を撰びて行ひ、其壽長久ならんことを祈る。即ち生御靈に饗するなり。「盂蘭盆經」に「願レ使ニ現存父母、壽命百年（ヲシテ）、無レ病無ニ一切苦惱之患一」とあり、此の發願の文によつて起りし事なりと云ふ。

實作注意　これは祝ひて爲す事なり。盂蘭盆の事とは全く性質を異にす。
蓮の飯とは、蓮の葉に糯米の飯、又は赤飯を包み、觀音草を以てこれを縛る。刺鯖は、鯖を背より骨にそひて切開き、鹽ものにし、二枚を一重ねとなして之を一刺と云ふ。蓮の飯・刺鯖共に親戚にも贈る禮なり。

例句

生身魂

生身魂酒のさからぬ親父かな　其角（華摘）
淵明が隣集めや生身魂　同（五元集）
[illegible]
燈籠にならで目出度し生身魂　支考（梟日記）
生身魂疊の上に杖つかん　鶴潤（曠野）
鹽引も[illegible]目出度しや生身魂　句空（柞原）
山伏の貝すさまじや生身魂　米迪（[illegible]日記）
みどり子に竹筒負せこ生身魂　太祇（太祇句選）
憂き我に譜々祭る生魂そ　白雄（白雄句集）
角力取の交に一歩や生身魂　移竹（[illegible]前）
わざゝれて蓮の葉かぶる生身魂　梅室（梅室家集）
生身魂七十と申し達者なり　子規（[illegible]集）
くづをれぬ老に仕へて生身魂　青々（倦鳥）

蓮の飯

芭蕉翁[illegible]魂
松の葉に包む心を蓮の飯　支考（[illegible]日記）
鹽魚の鹽こぼれけり蓮の飯　白雄（白雄句集）
死なで歸る此夕暮に蓮の飯　闌更（半化坊発句集）

刺鯖

いとしみの秋、[illegible]に離れける魂祭に
去年に似た今日ならばこそ鯖食はめ　鬼貫（七車）
刺鯖に羽を並べん臺所　其角（きれ〳〵）
父[illegible]をかねて[illegible]の人[illegible]て事とすと
鯖切のかくても經けり大赦まで　同（類柑子）
刺鯖も廣間に羽をかはしけり　同（五元集）
刺鯖や袖と覺しき振合せ　太祇（太祇句選）
刺鯖や俳數多ふる子福人　嘯山（葎亭句集）
刺鯖や澁き男の酒機嫌　同（同）
大名に高い刺鯖貫ひけり　同（同）
刺鯖や重ねはいつもはたら鹽　曉臺（曉臺句集）
刺鯖や隣へやるも表向き　蒼虬（蒼虬翁句集）
刺鯖に添けり伯母[illegible]ひねり文　同（同）

迎火（初）

魂迎　魂待つ　魂送　送火　門火　送燈籠　送提灯

古書校註

【年浪草】七月十三日黄昏に及んで、都鄙共に聖靈を迎ふるの儀あり、此の時門前に必ず麻柯を折り焚き之を迎火といふ。十六日、送火に對して之を言ふか。（報恩經に曰、七月十四日卯時に來て（一）、次の日十六日午

時歸る。

【俳諧歲時記】 閩人最も中元を重んず、家々猪陌冥衣の具を設け、先人の號位を列ね祭て之を導く、女家則ち父母の冠服袍笏の類を具し、皆綫に爲る者之を籠るに紗を以てす。之を紗箱と云ふ。父母の家に送る。女死ぬれば壻亦代りて送る。前中に至る時は則ち淸晨陳ね設くること甚だ嚴也。子孫冠服を具し、揖讓磬折して神を導き以て入る。祭り畢りて復送りて之を出す云々。

註（一）亡き魂の來る也。 五雜俎

季題解說 陰曆七月十三日黃昏に及びて精靈を迎ふ。此時門前に於て必ず苧殼を焚く、之を迎火と云ふ。卽ち魂迎なり。十六日の夜、又これを行ふを送火と云ふ。卽ち魂送なり。これら皆門にて焚くゆゑに門火と稱す。又送燈籠・送提灯とて、十六日の夜、佛前に供へたる灯籠又は提灯を、山上墓地等に携へ行きて樹木の枝にこれを吊す地方あり。 參照 盂蘭盆會

例句

迎火

迎火や鳥の立舞ふ下河原　仙化（小弓誹諧集）
迎火は取わけ婆婆の煙かな　白雄（白雄句集）
袖や覆ふ雨の迎火見えざるは　同（同）
迎火や父の面影母の顏　同（同）
迎火や今宵踏まれぬ物の影　蓼太（蓼太句集）
亡靈の還るを迎へて
迎火やどちへも向かぬ平家蟹　一茶（七番日記）
迎火は草の外れのはづれ哉　同（發句題叢）
迎火や榾風たてゝ人通り　梅室（梅室家集）
迎火や父に似た子の頰の明り　子規（全集）

魂迎

亡き母に手向ふ
忘れめや世にありのみの魂迎　鬼貫（七車）
遊山火を芦の葉分や魂迎　其角（五元集）

魂送り

[illegible]
魂返れ初裏の月のあるじなら　蕪村（發句題苑集）
簑笠や我魂迎ふ宿は是　白雄（白雄句集）
魂迎待得顏なる我人や　同（同）
魂迎心碓氷を越る夜ぞ　同（同）
張り換へて行燈白し魂迎　五空（五空句集）

魂待つ

魂まつや橋の見付の挑灯屋　野坡（田植諷）
皆子なり魂待の門に草箒　白雄（白雄句集）
魂待つや柱定めぬ宵の宿　同（同）
魂待や石町の鐘の暮さへ　同（同）
魂送り身に添ふ草の夕かな　曉臺（曉臺句集）

送火

送火や定家の烟十文字　其角（虛栗）

送火

送火や後ろ下りの袴腰　史邦（芭蕉庵小文庫）
送火や大小さして川の中　風國（後れ馳）
送火の山へのぼるや家の數　丈草（草苅笛）
送火や消行くあとは水の月　尙白（[illegible]）
送火の消たるあとや松に風　木導（水の音）
送火のあと哀れなり蟲の聲　桃隣（古太白堂句選）
送火や別れた人に別れけり　也有（蘿葉集）
送火のあとは此世の蚊遣哉　同（同）
送火やどちらで逢はむ又の秋　同（同）
送火や無きは誠の[illegible]敷　曉臺（曉臺句集）
送火や預置きあふ川向ひ　太祇（太祇句選）
送火や埋れぬ石のまだ煙る　闌更（半化坊發句集）
送火やばたりと消てなつかしき　一茶（七番日記）
送火や焚眞似しても秋の露　同（同）
送火や今に我等もあの通り　同（一茶句帖）

墓參（はかまゐり）（初）　墓參（ぼさん）　墓詣（はかまうで）　展墓（てんぼ）

古書校註

【俳諧歳時記】七月朔日より十五日に至て、各祖考の墳墓に詣る也。是唐山の人清明の日、上墳祭掃の禮に同じ。（源の頼家集に七月十五日盆持たせて山寺に詣づる所、「けふの爲折れる蓮の葉をひろみ露ぞ〻山に我は來にけり」。是盆の墓參也。

季題解說

盂蘭盆會の時、祖先の墳墓に詣でて、香華を手向くるを季とす。

〔參照〕盂蘭盆會（ぼんゑ）

例句

墓參
　故里に歸りて盆會を營むとて
家は皆杖に白髮の墓參　芭蕉（續猿蓑）
傘も片手に泣くや墓參　支考（射水川）
　[illegible]
さゝ波や非波にかはる墓參　同（そこの花）
　陀羅尼品
銀（シロガネ）を罪の秤や墓參　其角（華摘）
　奈良の片鄙に宿りて
盂蘭盆や家の裏とふ墓參　卓袋（有磯海）
月洩るや樗の下の墓參　卯七（[illegible]）
　[illegible]
見し人も今は孫子や墓參　去來（[illegible]集）
　[illegible]
夢によく似たる夢かな墓參　嵐雪（杜撰集）

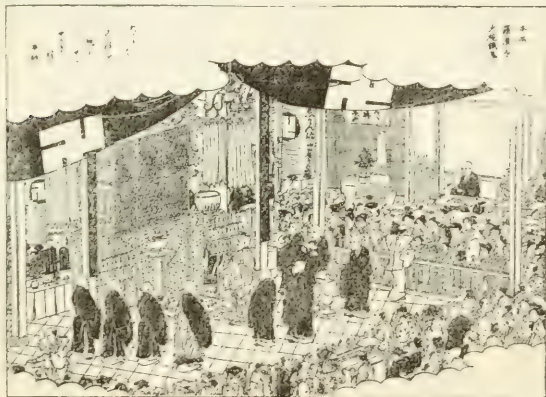
夕食も盆の急ぎや墓參　許六（正風彦根躰）
殿達に袖すりあふや墓參　りん女（木槿傳）
船頭の帷子着たり墓參　斗唫（續明烏）
月さして歸るもありぬ墓參　乙二（松窓乙二發句集）
家族從者十人許り墓參　子規（子規句集）
墓拜む後ろに高き芒かな　鳴雪（鳴雪句集）
みづうみを遠きけしきや墓參り　素史（俳[illegible]）
父の名はこゝのみにあり墓參　青々（同）
もの音はぬ父に逢ふなり墓參　同（同）

燈籠流し（初）　流燈

季題解説 七月十六日燈籠に火を點じて河海などに流すことをいふ、長崎・丹後宮津等名高し。（[illegible]「盂蘭盆會」に）

例句 流燈
みなぎれる石狩川や流燈會　駄々子（阿[illegible]）
水に影引いて流燈つゞきけり　立葵子（筑波）

施餓鬼（初）　水陸會　施餓鬼棚　施餓鬼幡　川施餓鬼　船施餓鬼　施餓鬼寺

古書摘註【年浪草】紀事に曰、此の月（七月）朔日より十五日に至つて、寺院の意に任せて之を修す。各々日を異にす。方丈或は門前に四隅に高く壇を構へこれを須彌の四州に比し、僧各々その上に坐し、經咒を誦し、中央に件々の供物を備ふ。是は鬼子母神人の子を取喰ふ故に、佛戒めて自今汝が食物は別に與へんと誓ひ給ふ也。その故に末世の佛弟子に敕して毎日淨飯七粒づつ與へて飢渴を救はしむ。○施餓鬼通覽

に曰、廣大施餓鬼の法、淨處を點定し、地を掃き棚を作る。長さ三尺に過ぐべからず。但桃樹・柘榴の下を用ふる事莫れ。鬼神惶怕れて之を食ふ事を得ず。或は淨地の上大石の上、或は泉池江海長流水中之を用ふ。東に向つて施す。人時（戌時）を定めて之を行ふ。大幡二本同咒を書きて曰く、唵嚩呢噠喇吽吒娑婆訶、是寶樓閣經の咒也。七如來の幡を掲ぐ。別に焦百鬼主を用ふるものは施食の法面然鬼に始まる故也。

【滑稽雜談】　これらの説（一）によらば施餓鬼の法は阿難の緣に起り、七月十五日の修會は目連の救母に始まるにや。又中華の初會は七月にてもあらず。故に一説に施餓鬼は雜とす。和朝また臨時に行ふ故也。然れども盆經（二）の義によつて多くはこの月（七月）專ら行ひ、ことに十五日諸刹に於て大施餓鬼・我山門施餓鬼など行はる、是廣大施餓鬼の法なるべし。爰を以て初秋の季と用ふるも勿論なる事なるべし。

註（一）盂蘭盆經に見ゆる目蓮がその母の餓鬼となれるを救ひし事、救拔焰口餓鬼陀羅尼經に見ゆる阿難が餓鬼となるを免るゝ爲供養せし話、施食通覽・佛祖統紀等の說を引けり（二）盂蘭盆經の略

【季題解說】　陰曆七月、各宗寺院にて之を修す。中央に壇を設け種々の供物を供へ五色或は白色の幡に五如來又は七如來の名號を書きて立つ。寺僧壇上に於て讀經し、無緣の亡者の靈を弔ひ施食の法を行ふ。水死の人を弔ふため河岸又は水上に船を泛べて修するを川施餓鬼・船施餓鬼と云ふ。『佛說救拔焰口餓鬼陀羅尼經』に曰く「阿難獨り靜處に居る、夜三更餓鬼あり前に現ず、焰口と名く。形醜陋口中火を吐く。阿難に白して曰く、却後三日汝が命盡て餓鬼の中に生ぜんと、阿難畏れて之を免るる方便を問ふ。餓鬼曰く汝明日無數の餓鬼と無數の婆羅門仙等に對して摩伽陀國の一斛を施し、並に我が爲に三寶に供養せば此功力を以て汝か壽を延し且つ我が餓鬼の苦を免ぜんと。阿難以て佛に言す、佛爲に陀羅尼を說て曰く、此陀羅尼を誦して食を施さば一々の餓鬼に摩伽陀國の七斛の食を得しむべし、汝今此法を受持せば福德壽命皆增長せん」と。施餓鬼は七月盆會に限れるものにあらざれども何時の頃よりか盂蘭盆會と混じ、此月に行ふもの多きに至れり。施餓鬼一に水陸會とも云ふ。〔參照〕盂蘭盆會（秋）・水燈會（秋）

【例句】

施餓鬼

唐音の施餓鬼身にしむ夕かな　百里（其袋）
餓鬼の飯雲もかゝるな清水寺　許六（篇突）
淺ましや鶴匠が門の施餓鬼札　桃隣（古太白堂句選）
竹林の深き處に施餓鬼かな　青々（妻木）

施餓鬼棚

驚くや門もにありく施餓鬼棚　荷兮（曠野）
殘る蚊の瘦せてあはれや施餓鬼棚　子規（全集）

水燈會（すゐとうゑ）（初）

流燈會（りうとうゑ）　黃檗山川施餓鬼（わうばくさんかはせがき）

古書校註

【年浪草】城州宇治郡太和田黄檗山萬福寺に在り、當寺は華人黄檗隱元琦禪師明暦中建立す。○紀事に曰、今夜（七月十六日）宇治川の船中にて之を修す。水中施食の法事也。其の式船二艘を双べ申の刻ばかりに岡屋の前に出で、先づ流に泝りて宇治橋の下に至り、暮に及んで船中數ヶの灯臺を點し、僧左右に座を列ね、七如來の牌を安んじ、供物を備へ經卷を誦し、音磬を撃ちて流に隨ひて下る。而して後三百六十ヶの燈を宇治川に浮べ、流に隨ひ風を逐うて散亂せしむ、恰も螢火の如し。其の灯白紙を以て小蓮花を造り、內に艾心（ガイシン）を堅つ。其の熟艾は焔硝を以て煮る。火を其の末に點ず。或は流に隨ひ、伏見豐後橋の下に至るものあり、僧徒亥の刻ばかりに岡屋の前に歸る。その間遊覽の船數千前後に相連り、又宇治川の東西堤の上に見る者堵の如し。○月令廣義に曰、南國の風俗、中元の夜家戶各蔬飯を具へ齋供を門前に羅ね、或は川瀆の所傷亡の野鬼を祝祀し、舉りて隨つて水燈三十六を捧げ、流水に向ひて浮め去る、名づけて度孤と云ふ。燈は紙灯也。

季題解說 往昔陰暦七月十六日、山城國宇治黄檗山萬福寺に於て行はるゝ川施餓鬼にして、宇治川に船を泛べてこれを修す。僧徒供物を備へ經卷を誦し、音磬をうちて流に隨ひて下る。此時蓮華形に作りし小さき紙灯籠三百六十個を點火して水上に流す。現今は八月十六日に大船二隻を泛べ、船中にて施食會を修すれども、燈籠は流すことなし。これを黄檗山の川施餓鬼と稱す。〔參照〕盂蘭盆會（ウラボンヱ）　施餓鬼（セガキ）

例句

水燈會　水灯會ふけゆくほどに雨となる　岳澄（雲母）

經木流（きやうきながし）（初）

古書校註

【栞草】攝州四天王寺の東僧坊の前に龜井の水あり。白石玉手の水と號す。昔白川法皇の上東門院當寺に詣でし時、その水盤に龜の形あるを見て白石玉手の水を以て龜井の水と詠ず。これその號の起る所なり。新古今　濁りなき龜井の水をむすびあげて心のちりをすゝぎつるかな。○七月十六日世俗經書堂に於て經木の表に法名を記し、この水を手向けて靈魂を吊ふと攝陽群俗にも見えたり。昔は月每に六齋の日講堂に於て經を誦し、參詣の戒名を名帳に記し回向せしといふ。和泉式部參詣の時名を名簿に記して詠ずる歌、「梓弓はづるべしとは思はねどかれてなき身の數に入りぬる」。今の經木はこの名簿の遺意にや。

季題解說 陰暦七月十六日、大阪四天王寺にて行はれし行事なり。同寺東僧坊の前に龜井の水あり。此日經書堂にて經木の表に法名を記し、龜井の水を手向け供養す。現今は陽暦にて行はるゝといふ。〔參照〕盂蘭盆會（ウラボンヱ）

七墓參（初）　七墓巡り

【季題解說】陰曆七月十六日大阪の俗夕より夜明へかけて七ヶ寺の墓に廻り詣づることあり。寺は何處の寺にてもよし、たゞ終りの一寺は必ず天王寺の墓に詣るが定めなりといふ。

三井寺女詣（初）　三井詣

【古書校註】【俳諧歲時記】十五日。江州長等山崇福寺又（蓮福寺）地福院は大津の側に在り。園城寺又三井寺と稱す。園城寺は御園に隣るを以て名とし、三井寺は西嚴に靈泉あり。天智・天武・持統三帝即位の時、此の井の水を掬みて浴湯に獻る。因て御井と云ひ、後に改め三井に作る。是三皇の浴井・龍華三會の義也。此の寺平日女人結界の山也。只七月十五日女人の參詣を許し、登山せしむ　之を女詣と云ふ。當山は智證大師圓珍の開基也。

【季題解說】近江國大津三井寺は、智證大師圓珍の開基にして、平日女人結界の山なり。たゞ陰曆七月十五日のみ、女人の參詣を許し登山せしむ。之を女詣と云ふ。（古）

【例句】三井寺女詣

一日は女に醉ひぬ三井の鐘　楓江（都能茂之）

善福寺童相撲（初）

【季題解說】江戸麻布雜色町の麻布山善福寺の開山了海上人は、親鸞上人の弟子なり。陰曆七月十五日、了海上人の忌日なるが故に、寺內に祭る所の麻布權現の社前にて童相撲あり。報恩の心なるべし。（古）

祐天寺千部（初）

【季題解說】明顯山祐天寺は江戸目黑にあり。開山は祐天大僧正にして、例年陰曆七月十五日より廿五日まで阿彌陀經千部修行す。

解夏（初）　夏明き　夏の果　夏書納　解夏草　送行　僧自恣日　僧歡喜日

【古書校註】【年浪草】「夏書納」佛者四月十六日より七月十六日に至り夏行に入る。この一夏九旬の間、他の化益の爲に、聖經及び名號題目を書寫し、夏終るの後、之を堂塔伽藍に納め三界萬靈に回向す。之を夏書納と云ふ。在家も亦之に效ふ。「解夏草」釋氏要覽に曰、今浙右の僧解夏の日、綵を以て茆

(一)を束ねて檣越に遣る。之を解夏草といふ。今この草を詳にするに已に五分法身の座となす、故に吉祥草と名く。○根本百一羯磨に云、受隨意苾蒭(二)まさに生茆と僧伽と座となす事を行ずべし。諸苾蒭並に草上に於て坐す、隨意といふ。卽ち自恣也、僧伽といふ、卽ち衆也 草を以て地に藉いて坐する也。

註 (一)イン。薫染なりと。(二)ヒツスウ。比丘卽ち僧侶をいふ。

季題解説 一夏(ゲ)の安居を解き、僧の自恣を許す。これを解夏と云ふ。陰暦七月十六日なり。夏終るの後、夏書の聖經を堂塔伽藍に納め、三界萬靈に回向す、是を夏書納と云ふ。又僧解夏の日、縲を以て茆を束ねて檣越に遣る、これを夏解草と云ふ。又、安居終りて各東西に相去るを送行と云ふ。**參照** 夏—安居(アンゴ)

例句

解夏　眼前に芭蕉全き夏解かな　小洒　(杉の實)
夏書納　母ともに夏書納や長等山　青々　(妻木)
送行や見知りになりし寺子共　同　(同)
送行や松窓竹几名を題す　同　(同)
僧自恣日　秋もやは江湖の僧の暇乞　正秀　(鷹獅子集)

吉田淺間祭(よしだせんげんまつり) (初) 芒祭(すゝきまつり)

季題解説 陰暦七月二十一日、甲州吉田、淺間神社祭禮にして、前夜各家の前に松薪を積み、或は筒形に組みて一齊に點火す、これを火祭といふ。當日神輿、其の外に富士山の形したる神輿を出す。翌二十二日神輿假宮を出で裾野を渡御す。神官・丁・參詣人まで悉く青芒を手にして從ふ。故に芒祭と云ふ。

愛宕火(あたごび) (初)

古書校註

【年浪草】攝陽群談に曰、攝州豐島郡池田村に此の事有り。愛宕山、この山歌名所に出づる五月(さつき)山也といへり。山頭に愛宕權現の社あり。每年七月廿四日夜種々の燈籠に火を燃(エイ)して愛宕火と號し祭る。大阪北の町終(ハテ)より見る人星光を疑ふ。又愛宕神社有馬郡道場川原新町口にあり、祭る所火産靈尊每歲七月廿四日の夜祭あり。世俗愛宕火と稱すとなり。

季題解説 攝津國豐島郡池田村にある愛宕山は、古歌に所謂五月(サツキ)山にして、山上に愛宕權現の社あり。陰暦七月廿四日の夜、種々の燈籠に火を點じて愛宕火と名づく。大阪北の町外れより望めば星の如しと云ふ。

例句

愛宕火　天も映りげにや伊丹の大燈籠　宗因　(生駒堂)

愛宕火

愛宕火やおびたゞしきみ作り花　宗因

伊丹愛宕火

愛宕火に稲妻光るとひやうし哉　鬼貫（鬼貫句選）
愛宕火や群れつゝ暮を花さかし　同（七車）
愛宕火や光の月見の夜の思ひ　文丸（生駒堂）
愛宕火に里は砧もなかりけり　燈外（同）

清水星下り（きよみづほしくだり）（初）

陰暦七月二十四日、攝州中山寺の觀音、星と化して京の清水寺に入ると言ひ傳へあり。一山の僧衆莊重なる會式を執行し、參詣の人々徹宵舞樂に踊躍し、鉦を打ち、詠歌を唄ひ、境内には露店櫛比して頗る賑ふ。境内に此事は由來不明にて明治少し前頃より起りしかの疑あり。現今は八月二十四日に行はる。

廿六夜待（にじふろくやまち）（初）　六夜待（ろくやまち）

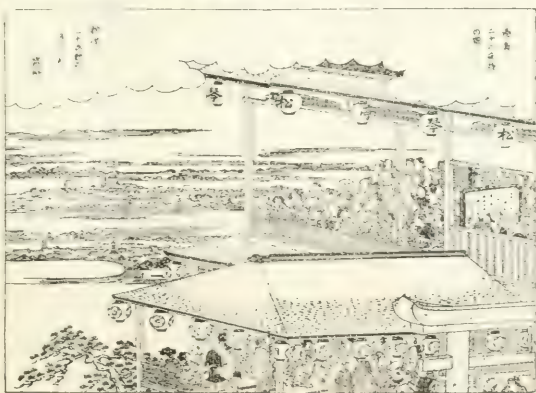
【諸國年中行事】七月廿六日、江戸鐵砲洲・高輪にて老若群をなし月を拜す。

【俳諧歲時記】江戸の俗、今月廿六日の夜、月の出に、三尊佛の影向を拜むとて、田安の臺・神田湯島の社地・江戸見坂・品川・高輪等に群集す。蟲賣果餡餅色々の商人來りて賑へり。俗傳に、此の夜の月中に三尊佛の影向ありと云ふ。實は月華なり、三尊にはあらず。

陰暦七月廿六日、今夜の月の出には三尊の影現とる、て東京にては芝高輪、麹町九段等の高き所に上り、又は海邊等にて月の出を待つ。二十六日は愛染明王の縁日なれば、二十六夜の待つは明王を祭る意ならんといふ。

二十六夜待

天籟の爽かさ二十六夜待　六浦（曲水）

氷川祭（ひかはまつり）（中）

季題解説 陰暦八月一日、武藏國官幣大社氷川神社の祭禮にして、例祭毎に勅使を差遣せられ勅祭せらるゝを例とす。祭神は須佐之男命・大己貴命・稲田姫命の三座、延喜式内の名神大社にして月次、新嘗の幣に預り武藏國一の宮なり。明治天皇帝都を東京に定め給ひ、十月十三日御着京、越えて二十七日勅して當社を以て帝都所在の鎭守として二十八日車駕臨幸親祭あらせらる。明治四年官幣大社に列す。古來特殊神事多く十二月十・十一當日の大湯祭は直會式とも稱し、古例祭として最も珍らしきものなりと稱せらる。

堺天神祭（さかひてんじんまつり）（中）

古書校註

【滑稽雜談】 八月三日・四日△當社今の北庄の地は攝州朴津（となつ）村也。舊名により鹽穴の天神と申奉るならし。例祭今日也。

【年浪草】 例祭六月十三日を夏神樂となし、八月三日を秋樂となす。この日參詣群集す云々。神輿堺七道濱同じく戎島へ渡御即日還幸といへり。誹書に四日とあり、今三日にや。

北野祭（きたのまつり）（中）

古書校註

【御傘】 八月四日なり。

【案内者】 八月四日、北野天神祭、居祭にして祭禮なし、一條院の御時始めて祭禮行はれしに、御こしまつる道々布をしき敕使を立てられ、舞樂ありければ、大造の事(一)にて今は祭禮なしと言傳へし。

【滑稽雜談】 八月四日〇二十二社註式云、北野祭、一條院永延元年八月五日始めて祭る、官幣を預く。第七十代後冷泉院永承元年八月四日に定めらる。五日は國忌(母后)によつて也云々。〇拾芥抄云、北野祭今は四日、元五日。(下略)近世に至て此祭絶えてなし。九月四日に當世ある北野祭は各別也。混雜すべからず。(二)

註 (一) タイサウの事。あまり大がゝりなる義。(二) 日次紀事・諸國年中行事等にはいづれも九月四日の條に北野祭をかゝげたり。

季題解説 八月四日、京都北野神社の祭禮をいふ。祭神は菅原道眞、後世中將殿及び北方吉祥女を併祀す。社は俗に北野の天神といひ、天慶五年七月西京七條の女文子、託宣により假に地を劃してこれを祀りしに創り、同九年六月今の地に鎭座せられたりといふ。又一說に天曆元年或は同九年とす。明治四年官幣中社に例せらる。祭日は往古は陰曆八月五日にして、爾來數度

の變更を經て、明治三年現今の日取に定まれり。〔參照〕北野瑞饋祭（ずゐきまつり）

【參考】 毎年八月四日京都府（山城國）京都市上京區馬喰町官幣中社北野神社に於いて行ふ祭なり。古くは陰暦八月五日に行へり。祭禮の當日、神輿一條西の大宮より右近の馬場を渡りて本社に向ふ。神殿に近つく頃、日は西山に傾きて、神木のこずゑ蒼味渡り、莊嚴目前に輝きて、參觀の老弱男女をして崇敬の念に堪へざらしめ、自然と拍手拜禮するに至る。やがて拜殿に入らせ給へば社僧錫杖を持して神威を飾れりと云ふ。後冷泉天皇の永承元年、母后の御國忌に當るに依りて四日に改め給ひ後ち慶長元年再び五日に復せられしが、明治三年に至り四日を官祭執行の日と定められてより以て今日に至れり。此祭の起原は或は一條天皇の御世に始まると云ひ、又村上天皇の御時とも云ひて詳かならず。又臨時祭ありて伏見天皇の正應三年七月十八日始めて東遊・走馬十列・神樂等を進めらる。其後中絶し、元治元年十一月十四日に至り、東遊・走馬を再興せり。神樂は應仁の亂後中絶せしを、萬延元年六月十日再興せられしが、今共に廢絶せり。

敦賀祭（つるがまつり）（中）

【古書抜註】

【年浪草】氣比大明神越前國敦賀郡に在り、祭神仲哀天皇。（中略）□例祭八月十日と云々。先づ二日より始めて十日の間近國廿里四方より諸商人放下師（一）狂言師等來り集り、三日神輿洗あり、敦賀紙屋町といふ所より例年紙漉工の家繪燈籠（二）を出し、京師祇園囃子を換す。三日神事四日を後宴と稱し、町々氏子東番・西番と分れ、引山を出す。地車にて町中を引廻る。山の上に一丈許の松を立て、四方錦繡の縵幕水引等洛の祇園祭の山の如し。上に武者木偶を飾る、山數或は五つ或は六つ祭禮當日之を出す。天神の森と云ふ所御旅所にて神輿渡行の間十日許參詣群集すと云々。

註 （一）放下は手品師等をいふか。（二）は繪燈籠ならん。

清水千日詣（きよみづせんにちまゐり）（中） 慾日（よくび） 四萬六千日（しまんろくせんにち）

【古書抜註】

【日次紀事】清水寺千日詣、俗に傳ふ、今日（七月十日）參詣すれば平日の千度に當ると。或はいふ四萬六千日に當ると。

【諸國年中行事】七月の祭、十日（京）清水寺千日まゐり。（大阪）天王寺千日まゐり。（江）觀音千日まゐり。

【滑稽雜談】觀音欲參記曰、七月十日向ニ四萬六千日一、今毎年今日（七月十日）千日詣と稱して貴賤踵をつぎぬ。按に觀音欲日とて正月より十二月迄一月一日の日取侍る。その内に七月十日を以て最上の欲日とす、故に參詣するならし。

【年浪草】 江戸淺草の觀音も同日にして、之を四萬六千日と云ひ、或は六萬六百四十日にあたると云ふ。此の事更に本說なし、たゞ西行の撰集抄七の十六に所謂悲華經を引く。然れども今の謂悲華經に此の文なしと。

季題解說 八月十日（舊は陰曆七月十日）を觀世音の四萬六千日と稱して、京都淸水の觀音にては、同日諸人參詣す。夜に入りて參詣殊に多し。（東京淺草にては現今七月十日行はる。今日の參詣平日の千度若くは四萬六千日に當るといふ。欲日此日の參詣四萬六千日に向ふといふより、觀音欲日と稱するを略してかくいふ。［參照］夏 四萬六千日（シマンロクセンニチ）

六道參（ろくだうまゐり）（初） 迎鐘（むかへがね） 槇賣（まきうり）

古書校註

【年浪草】 山城名勝志に曰、六道は五條の末北、建仁寺巽の角に在り。今の建仁大昌院管領す。是珍篁寺の本尊と云々。（山）雍州府志に曰、珍篁寺は弘法大師の開基にして、元葬場たり。小堂に地藏を安置す。世に六道と稱す。傳へ云ふ此所冥途に通ふ路あり。故に小野篁此所より親ら六道に行きて歸れりと。之に依つて每年七月盂蘭盆前九日に男女參詣す。（紀事に曰、今日諸人六道地藏に詣で、男女鐘を撞きて聖靈（しやうりやう）を迎ふ。各槇の枝を買ひて携へ歸る。又新穀を買ひて精靈に供す。これを秈といふ。（槇賣）今九日諸人六道に詣で、槇の枝を買ひ家に歸り、靈前に置く。俗聖靈槇の葉に乘りて來ると傳ふ。是草に依り木に付くの謂か。之を聖靈を迎ふといふ。此所桓武天皇延曆十三年長岡より此の京に遷らせ給ふ時、諸人の葬所と定め給ふよし遷都記に見へたり。源氏桐壺の更衣を葬るをたぎと云ふ所に、其のさまいかめしうと書けるも、此所のよし。本尊藥師如來は傳教大師の御作、七佛藥師の其の一といふ。

季題解說 八月九日、十日（舊は陰曆七月九日・十日）京都五條松原建仁寺の傍に珍皇寺あり。弘法大師の開基にして元葬場なり。小堂に地藏を多く安置す。昔小野篁この所より親ら冥土に行て歸れりといへる傳說により、六道の辻と稱せりといふ。此日茲に詣で鐘を撞くは聖靈を迎ふる意なり。之を迎鐘と云ふ。槇賣此日沿道には槇の枝、早稻を賣る店多し。參詣の人此槇の枝と早稻を買ひて歸り、各自家の魂棚に置く。俗に聖靈槇の葉に乘りて來るといふ。［參照］盂蘭盆會（ウラボンヱ）

例句

六道參 目とく篁堂はあきにけり 青々（妻木）

九日の六道參、小野の篁の冥途に通へる道なりとて、洛中の貴賤こゝに[illegible]、槇の葉を[illegible]て魂を迎ふ[illegible]し侍る

迎鐘 打てば響く物と知りつゝ迎へ鐘 嵐雪（杜撰集）

迎鐘

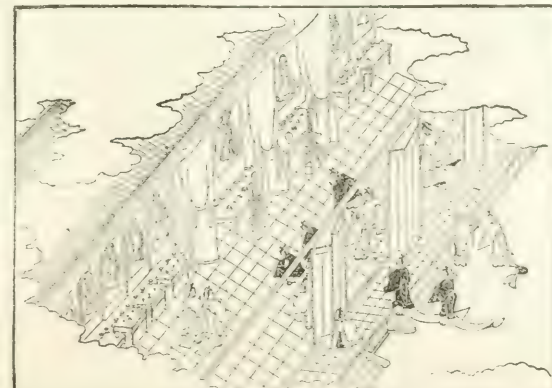
老が手に誰から呼ん迎ひ鐘　宋屋（[illegible]集）
迎ひ鐘それ程撞かば湯に酒む　麥水（[illegible]）
迎ひ鐘落る露にも鳴りにけり　一茶（七番日記）
あの月は太郎がのだぞ迎鐘　同（同）
負た子が手で屆くなり迎鐘　同（同）
慰みに打つと知りつゝ迎鐘　同（同）
旅人の鳴らして行くや迎ひ鐘　同（一茶新集）

擇賞

槇の葉にかゝる埃や夕月夜　嘯山（葎亭句集）

秋の釋奠（中）　秋のおきまつり（古）　胙を獻ず

古書校註　【年浪草】續日本紀に曰、聖武天皇天平二十年八月癸卯、釋奠服器及儀式を改め定む。○公事根源に曰、春二月に同じと云々。○新葉「から人の昔の影をうつし來て仰げは高き秋の夜の月」妙覺寺内大臣。年中行事歌合「唐人のかしこき影をうつしとめて聖の時とけふ祭るなり」二位中將。

季題解説　陰曆八月上の丁の日、支那及日本に於て孔子を祭る式典をいふ。陰曆二月八日に行ふ同祭典を單に釋奠といへるに對してかくいふ。又胙を獻ずとは釋奠の翌日藏人胙を持て朝餉の前にすゝむ。ふんやのつかさ（大學寮）の奉れる昨日の釋奠の胙と文字をながく言ひて高く擎け持て簾の中に入る事なり。胙とは「ひもろぎ」の事にて、胙を獻ずは八月に限るといふ。〔圖〕春—釋奠

例句

秋の釋奠

村塾の簾篠月や釋奠　青々（倦鳥）
村塾に夫子をまつる秋茶かな　同（同）
惟みれば忠恕身にしむ釋奠　同（同）
釋奠して村塾の夜學かな　同（同）

野口念佛（のぐちねんぶつ）（中）

【季題解説】 播摩國加古郡野口村なる念佛山敎信寺に於て、陰暦八月九日より十五日迄、一七日の大法會あり。是を野口念佛と云ふ。此事、敎信沙彌の德業を追慕するより起る。敎信沙彌の事は、「元亨釋書」卷九、勝尾寺の證如上人の傳中に次の如く云へり。「或時別構二草庵一。絶二言語一。謝二人事一專精二練行一。一夕天樂響レ空。如怪聞レ之。忽有レ人叩レ戸。如忘レ言、故嗚レ磬令レ思。戸外人曰。我是播州賀古郡驛北居民沙彌敎信也。今往二極樂一。明年今日。上人又可レ如レ我。故共二聖衆一來告耳。語已而去。微光入レ廬。斯須便滅。如明日出レ廬語二弟子勝鑑一。令下レ其往二播州一決中眞僞上。鑑至二彼驛北一。果有二竹扉一。庭下一屍群犬已狼二籍之一。茅舍有二一嫗一一童兒一。相對而哭。鑑曰。何爲哭。嫗曰。死人是我夫也。名敎信。常念二彌陀一。我老而別。不レ能無レ懷。又貧而不レ擧レ喪。已爲二烏犬一所レ得。我欲レ不レ哭而可レ得乎。便指レ兒曰。此童乃信之子也。鑑歸語二此事一。如曰。我絶二言語一。勤二修練一。不レ如二信之念佛一也。自レ此巡二聚落一。讃二説佛乘一。勸二誘念佛一。」とあるばかりにて他に正確なる傳なし。又、「往生十因」を引用して云へるものに一勝鑑、晝夜を論せず彼の國に發向す、途すがら往還の人に對する毎に敎信が往生の事を問ふ。敢て答ふるものなし。かくて、賀古の驛の北にあたり、遙かに一小廬のあるありて、屋上鴉烏の群り集るを見る。漸く近づき見れば野犬競ふて死人を食ふ。傍らに大石ありて、その上に新なる髑髏あり、容顏損せずして眼口又咲めるに似たり。香氣薰馥す」とあり、又「是に於てか、村里の男女往還の道俗、具に勝鑑の來由をきゝ、茲に初めてその唯人にあらざる事を感じつゝ、乃ち彼の髑髏をめぐりて佛名を稱しぬ」とあり。敎信は常に身を人にまかせて日を送るの計をなし、耕耘の時、間斷なく念佛するを以て、雇ひ仕ふ所の人、阿彌陀丸とは呼びゐたりしが、勝鑑の來り問ふにより、こゝに其唯人に非らざる事を初めて感じ、里人の集りて稱名念佛せしは實に尊きことにて、是れこそ野口念佛の眞の濫觴なるべくも思はるゝなり。敎信寺は始め觀念寺と號し、淸和天皇の勅によりて造立成りしものと傳ふ。後、今の寺號に改めて融通念佛の道場となる。今開山堂に安置する敎信の像は御首ばかりなりと云へば、彼の『栞草』に「貞觀八年八月十五日宍粟の鄕において、盜賊のために殺されぬ、首は敎信が庵に贈りぬ」とあるに符合するものあれど、此事詳くは知り難し。敎信寺内に「敎信上人御廟所」と標して五輪石塔あり。現在の寺域を見るも、舊時大伽藍なりし事思はる。野口念佛は今も陰暦八月に修行せられて退轉せず。

【例句】

野口念佛　野路を來て敎信沙彌に草の花　蜃樓（漁火）

鵙鳴や野口念佛に人急げ　同（同）

野口念佛　教信がありし昔生たゞ念佛かな　青々（俳　鳥）
鳥犬に喰はれし跡の念佛かな　同（同）
詣で來てけさ滿願や野の薄　同（同）
よべ迄は念佛に照りしけふの月　同（同）
野口念佛果にし里の月見かな　同（同）

安房祭（あはまつり）（初）

季題解説　八月十日、安房國官幣大社安房神社の大祭にして、祭神は天太玉命、齋部氏の祖にして、大井明神又安東明神ともいふ。延喜式に安房坐神社（あはにますかみのやしろ）とあり。名神大社にして四度の官幣に預り當國一の宮なり。十一月二十六日より十日間神狩祭とて、祭神の當國開拓の際、惡獸を退治せられたるを記念する祭事あり。

秋思祭（しうしさい）（中）

季題解説　秋思祭は大阪天滿の天神にて行はる。菅原道眞公、延喜元年九州太宰府に流謫せられ、その仲秋遙かに都の空を望まれて詠詩ありし心を追憶し、其靈を慰むる神事なり。陰暦八月十三日の夜に行はる。

▽秋思祭　松瀬詠子

天滿の天神樣で催される秋思祭と申すのは、この秋の夜に天神樣をお慰めするお祭りなのでございまして、延喜元年菅公が流謫の身となられ最初の中秋の月を拜されてはるかに太宰府から都の空を望まれ、思ひあまりてかの有名な御詩

去年今夜侍清涼　秋思詩篇獨斷腸
恩賜御衣尙在此　捧持每日拜餘香

とおしのび遊ばされたのでございますが、その誠忠悲愴なる御心、都の空をお慕ひに成つた御心を永久に追憶申上げようと云ふのださうでございます。この御神事は遠く昔から元治元年の秋迄本殿の前庭で「觀月宴」として祭儀を行はれましたさうで、それ以來はたゞ祭典のみが午前中に行はれて最近まで絕えてゐたのを、昭和五年に復興されたのでございます。私は今年はじめて拜觀する事が出來ましたが例年より盛大に行はれたと云ふ事でございました。いつも中秋十三日にお天氣の時はお庭で、雨なれば屋內で行はれる由でございます。今年は生憎と朝から雨で午後はどしやぶりになりますし、とてもお庭で拜觀することはむづかしいだらうと案じてをりました處、午後五時すぎ私共が高師の濱を出る頃は雨も思ひの外にすつきりと晴れました。

天神樣の御社に參りますと廣い御庭はまだ月はなくうすぼんやりと、御社殿のひさしの電燈が光つてをりました。大雨に洗ひ清められた砂のお

庭は歩るくたびにサック〳〵と音がして清淨な感じで心がひきしまるやうに思はれました。はじまるまでのしばらくを參集所で休息いたしました。午後七時頃から始またのですが、本殿廣前の御庭を中心として南北へ六七間ほどの間兩側に棒が七八本立てられ、その中間は莚が敷きつめられて黑と白の縦に縞になつた幕がしぼつてありました。そこが伶人の着坐になるところで、私共はその東側の少し後ろに寄つて並べてある椅子にかけました。けふは書間の雨の爲か拜觀する場所にはずつと拜觀人が少く、よく拜することが出來ました。それでも西側の一般拜觀場所なるそこはかなり多くお子達も數多く見えてをりました。廣庭の南に庭燎が二つたかれてありました。

伶人や舞人童子の方々は南の幄舍らしい所から出てこられるのです。祭員六七人でお供物を數々なさるのですが、その中には、薄・萩など、秋の七艸を束ねた大きな一束は、さすがに今夜の御祭りの捧げ物らしく心を打たれしんみりといたしました。私は思はず天神様をお祈りいたしました。

お供へがすむと拜殿の階段のすぐ下にみあかりのついた小さき燈籠が兩方に一つづゝおかれました。燈籠の紙のはつた格子戸からあまり輝かない光がさしてふさはしゆうございました。やがて神主様ののりとがあげられるのでした。私にはよく聞取る事は出來ませんでしたけれど「大和うたに秋艸そへてなぐさめ奉る」といふ言葉がございました。本殿の庇に數多く電燈がついてゐますので明るかつたのでございますがこの時ばかりはまつ暗なお庭に庭燎とこの二つの燈籠だけの明りだつたらどんなによろしいかと思ひました。

のりとが終るとこの燈籠はおさげになりました。つぎは水干烏帽子の童子が鈴蟲の籠をさしあげられました。小さいものでよくは見えなかつたのですがその籠は赤い紐で美しく結ばれ十何匹かの鈴蟲ださうでございます。これは七草の束に近く据ゑられました。

やがて本殿近くの正面にも一つの庭燎がたき始められ、舞人・伶人達がそれぞれ位置につかれました。舞人と伶人はお冠りに白萩をかざしに挿され美しゆうございました。

樂の拍板やら、すみ渡る笛の聲、それから和琴のさびたやはらかな音にあはせて神樂歌が奏せられ一人の舞人がそれにあはせて舞はれるのでした。なんとも云へない優雅な樂の音と舞、それに合はせるかのやうに鈴蟲がリーン〳〵〳〵と鳴いてゐました。三つの庭燎には衛士姿の一人が傍に付いてゐて時々薪を添へますとメラ〳〵と火屑が舞ひ上ります。だれもシーンとしてこれを眺めました。まことに崇高な中に一種のさびしい心が遠き世界に在るやうな氣がいたしました。

時間はよほどかゝつたやうでしたが、何時間位だつたでせうか、二時間

位だつたでせうか、承りますとこのつぎに献詠和歌の朗詠がありましたさうですがこの日はありませんでした。お世話をいただいた八尾禰女さんや村井千夜女さんに御挨拶をしたりしてゐる間に私共四五人になつて廣いお庭は又シーンとしてをりました。よく晴れて來た空には舊八月十三夜の月が高く出てをりました。

×

お供への御菓子の小箱を頂きました。家に歸つて拜見いたしますると、それは長方形の紅白落雁に秋思の御詩が現はしてございました。

×

數日後村井千夜女さんからお手紙で御神樂歌をお知らせ下さいました。〔庭燎（ニハビ）〕「みやまにはあられふるらしとやまなる」そしてあとへ「おゝゝ」と申され「とやまなる」の後へ「まさきのかつらいろづきにけり」といふ句があるのを端折つたのださうで御座居ます。〔早韓神（カラカミ）〕「かたにとりかけ、われからかみのからをぎせんやからをぎ」二度目からは「こにとりもちてわれからかみのからをぎせんやからをぎ」といふのださうでございます。（昭和七年十一月發行倦鳥第十號所載）

例句

秋思祭

小忌衣萩をかざしに並居たり　青々（倦鳥）
秋思祭萩をかざしのみやびかな　同（同）
膝元の灯籠に讀む祝詞かな　同（同）
蟲籠や配所のむかしこさに　同（同）
蟲籠供し次ぎて笛人仕へけり　同（同）
けふの夜の秋思を吹ける笛一つ　同（同）
七草にちかく置かれて蟲の聲　同（同）
神樂歌に鈴蟲聲を合せけり　同（同）
七草に夜の薄の見ゆるなり　同（同）
衞士の火の落ち方蟲のしきる也　同（同）
今は更けぬ蟲籠もおろし奉る　同（同）

王子神社祭（わうじじんじやまつり）（初）　王子權現祭（わうじごんげんまつり）　王子祭（わうじまつり）　槍祭（やりまつり）　田樂踊（でんがくをどり）

季題解說　東京市王子區にある神社、もと王子權現と稱ふ。伊邪那岐ノ神・伊邪那美ノ神・速玉男ノ神・事解男ノ神・天照大神の五神を祭る。毎年八月十三日（もと七月十三日）を例祭日とし、此の日參詣の群集神前に小さき槍を納め、先に他人の納めしものと取りかへて家に納め、火災・盜難除の護符となす、故に槍祭とも稱す。午刻に至れば、花やかに打裝ひたる氏子十數人、彩色せる竹槍を手にして、喧騷して拜殿の前に至り、南北に別れて戰鬪の狀をなし、遂に竹槍を捨てて去る、群集爭うて其槍を拾ふ、

暫くして物具したる僧先驅し金襴の袈裟に立襟の法衣着たる僧、水干に大口着たる稚兒二人、素袍・烏帽子のものを從へて出づ、主僧拜殿により神前に拜して椽上に坐するや、白張着て立傘持てるもの寺より駈け來りて社頭に向ひて拜して又寺に歸る。かく數度くりかへす、これを七度半の使といふ。又其後甲冑したる僧一人は白幣、一人は半月に薄の指物して各太刀を佩くことあとより、長刀を脇挾みて出づる七口、水干大口の裝束に瓔珞の冠を着けさゝらを手にせる舞人八人、殿上に上りて舞樂を奏す、これを田樂踊といふ。

大鳥祭（おほとりまつり）（初）

季題解說 八月十三日。和泉國官幣大社大鳥神社の大祭にして、大鳥連の祖神を祀る。延喜式内の名神大社にして、官幣に預ること四度に及び、當國一の宮なり。國内神名帳には古來正一位と記し、明治四年官幣大社に列す。本殿は所謂大鳥造と稱する一種の樣式にて大社造に酷似す。

戸隱祭（とがくしまつり）（初）

季題解說 八月十五日。長野縣上水内郡戸隱山麓に在る戸隱神社の祭禮なり。祭神は天手力男命、昔、天照大神天岩戸に隱れたまひし時、天手力男命岩戸を取りて投げ棄て、大神の御手を執りて出し奉る。時に岩戸の落ちたる所卽ち當社の地なりといはる。中世大養氏祭事を執る、又役行者當山に九頭龍を封ずといはれ、後世地主の神となす。祭事は後佛者に歸し、別當を勸修院といひて、天台宗に屬せり。維新後神佛分離となり、國幣小社に列せらる。然れどもまた昔日の盛事なし。

參考 每年八月十五日長野縣（信濃國）上水内郡戸隱村戸隱、國幣小社戸隱神社に於いて行ふ祭なり。本社には奧の院（手力雄命）・中院（思兼命）・寶光院（表春命）の三社ありて、祭祀は中院は八日・寶光院は十日・奧の院は

十五日の三日に執行す。以上三社とも火祭あり。その儀、先づ境内に高さ八九尺の木柱三本を立並ぶ、之を柱松と稱す。坊中より一人づゝ當番を定む、之を先達と云ふ。さて三谷の坊中各々襷をかけ裝束をなして境内に參集す。此の時先達の僧等三本を一手に持ちて、三人へ一度に渡す。三人之を受取ると同時に神前へ向ひて走る。是に遲速の勝劣あり。速に神前に到りて立並べ、先達の唱へ聲終るや又以前の三人へ之を渡す。受取る者直ちに柱松へ近きて投上ぐ。柱松の上に居る者之を受取るや速に立て火を燃て燒く。其遲方に勝負あり、之に乘りて一年中の豐凶を定むると云ふ。尚ほ奧院を除く他の二社にては、長刀の試合とて、坊中の弟子、衣に長刀を掛て戰ふ儀あり。是れ即ち惟茂將軍鬼退治の故事に傚ふと云ふ。

宇佐祭(うさまつり)（中）

古書校註

【年浪草】一説に曰、欽明天皇三十二年豐前國宇佐郡廐峯菱潟の池の畔の民家の兒甫めて三歳、託して曰、我は是第十六主譽田天皇廣幡八幡也。我を護國靈驗威身大自在王菩薩と名く、諸州に迹を神明に垂る。今顯すに此の地に坐すと。因つて勅定して祠を建つ。八方に八色の幡を建つ、故に託宣して八幡といふ。○當社の禰宜奏して曰、頃日大神宮の託に曰、我無量劫より以來三有に化生して、善巧方便を修し、諸の衆生を濟度す。我名を大自在王菩薩と申せと也。帝叡聞ありて、之を許し給ふ。元正天皇養老四年託宣によつて始めて放生會を行はる云々。○公事根源に云、八幡は垂跡の跡、後ち豐前國宇佐に顯れ給ひしが、聖武天皇東大寺建立の後、巡禮し給ふべきよし託宣あり、因つて彼の寺に勸請申されき。されど勅使などは猶宇佐に參りきと云々。是諸國八幡宮祭禮放生會等八月十五日執行の事宇佐の宮を始として往古は放會なりと見ゆ。然れば古への祭禮も亦嚴重なる事察すべし。今の祭禮等は略して之を記さず。

[illegible]　毎年陰曆八月十五日、大分縣（豐前國）宇佐郡宇佐町南宇佐、官幣大社宇佐神宮に於いて行ふ祭なり。八月十四日神輿和間ノ濱に遷行し、頓宮に入御す。時に廿五菩薩の舞樂あり。夜に入りて六根懺悔の行法及び傳戒乞戒の儀式を行ふ。翌十五日に至り、潮の半ば滿つるを期して、神輿浮殿に出御す。和尚・導師以下の人々之に從ひて、放生陀羅尼を唱へ、此の間に生魚を海中に放つ。終りて神輿頓宮に還行し祭祀を終る。此の時海濱には警固の騎馬隊二百四十人・徒隊百二十人、具を帶して列立す、之れ即ち惡事を防かしめんが爲なりと云ふ。

是の宇佐神宮放生會は、社傳に元正天皇養老四年九月隼人征伐の時に、當社の祭神朝廷の軍兵に冥助して大に敵を殺戮せしめ給ひしが、聖武天皇の神龜元年に、其の冥福を祈らん爲め、放生會執行の託宣をなし給ひしに據り、天平十六年初めて行はれたりと傳ふ。爾來嚴として絶えざりしが、德

治二年に執行してより應永廿七年迄中絶し、此の年足利將軍の命に據りて再興せしが又中絶せり。後ち元和三年に至り、細川忠興之を復興して兩三度行ひしが、やがて廢絶し、現在にては全く行はれざるに至る。

鶴岡祭（つるがをかまつり）

[古書校註]

【俳諧歳時記】 八月十五日。相州鎌倉に在り、一名は雲井ケ峯、上の宮三座、中は應神、東は神功、西は妃大神也（姉神）。下の宮四座、中は仁德天皇、東は久禮宇豊（クレウ）の二神、西は妹比咩也。後冷泉帝の御宇、伊豫守源賴義朝臣安倍貞任を討つ時、丹祈の旨ありて、康平六年八月、石清水の神を相州鎌倉郡今の下若宮の地に勸請す、永保元年二月成就、義家朝臣修營を加ふ、治承四年十月、右大將賴朝卿小林の郷に遷し給ふ、是今の鶴ケ岡也、每年八月十五日、放生會並に祭禮奉幣流鏑馬円力等あり。

[參考] 每年九月十五日神奈川縣、相模國〈鎌倉郡鎌倉町雪ノ下、國幣中社鶴岡八幡宮に於いて行ふ祭なり。古くは陰曆八月十五日に放生會を行ひ、三座の神輿を舁ぎ赤橋に至り、舞樂の儀あり。其の行列警固二人、鉾棒を持つ者二人先驅をなし、次に獅子頭二人、假面を掛ける者十人之に續き、次に東大大薙刀・幟・大鉾・弓等を持つ者及び干珠滿珠を捧ぐる者從ひ、次に騎袋、八乙女等續き、伶人樂を奏して進むなり。又流鏑馬・相撲等を行ひたり。鶴岡祭は、元來男山八幡宮の男山祭に倣ひしものにして、文治三年八月十五日に初めて放生會を行ひ、爾來明治の維新に及びしが、放生會廢止せられて以來全く行はれず、僅かに流鏑馬・相撲の古例を存するのみとなれり。

薪寺蟲干（たきゞでらむしぼし）（初）

[參考] 八月十五日（舊は陰曆七月七日）、山城國綴喜郡田邊村に在る一休寺にて蟲干を行ふ。同寺は靈瑞山妙勝寺と云ひ、文永年間大應國師の創建にして、元弘の兵火に焼頽せるを、康正年中一休禪師これを再興して、こゝに入寂せられし靈地なり。俗に薪大寺、又薪寺と呼ぶ。正しき寺號は酬恩庵といふ。[參照] 夏—蟲干（ムシボシ）

[例句]

薪寺蟲干　蟲干や裏の竹きる薪寺　青々（妻木）

筥崎祭（はこざきまつり）（初）　筥崎放生會（はこざきはうじやうゑ）

[古書校註]

【滑稽雜談】 八月十五日（神社考に曰、筑前國那珂郡、此社嘗田帝之祠也、古老云、昔此松原に戒定慧（カイヂヤウヱ）三字の筥を埋む、故に筥崎と號く、松を其所に植ゑて標とす、今に至りて猶存す。縁起に云、昔日幡四流赤幡四流空より

降る、其所に松を栽ゑて標となす、故に八幡の號ありと。

[illegible] 八月十五日。筑前國官幣大社筥崎宮の祭禮にして、宮は醍醐天皇を祀り、相殿に神功皇后・玉依姫命を配祀す。宮の創始は延長三年醍醐帝の時にして、當時新羅の外寇頻々として到り、太宰府の官人防禦に苦しみ、依りて八幡大神を奉齋し、その稜威によりてこれを鎭壓せんとしたまふに基く。備來敵國降伏の神として朝廷の崇敬最も厚く、西海の鎭護、士氣鼓舞等神德遍ねかりしは史乘に明なり。

[illegible] 毎年八月十五日福岡縣（筑前國）糟屋郡箱崎町の官幣大社筥崎宮に於いて行ふ祭なり。往昔は五月に行ふ騎射と共に古來より重要なるものとせられたり。禮祭執行に先ちて八月十二日の夜子の刻、箱崎海濱の御旅宮に三社（筥崎・宗像・香椎）の神輿遷行す。翌十四日は御滯座、十五日の夜亥刻に及びて還幸し給ふ。先づ猿田彦の面を著けたるもの先驅をなし、次に淸道旗を立て、金鼓を鳴して進行す。座主並に上官社僧は輿に乘り、其他の社僧は徒歩にて之に從ふ。各自長刀・立傘・從僕等を隨ふ。その後に足輕數十人行列を作り、練の白幡八流を押し立てゝ進む。次に神人御鉾・金幣・白丹手・眞榊・神寶等を携へ、甲冑の兵士、弓を持ち長劍を帶びて之を警護す。次に第一番の八幡神輿、次に第二番聖母大菩薩、第三番寶滿大菩薩の兩神輿、各々に駕輿丁數十人及び神職衣冠或は布衣を著け、前後左右に連りて供奉す。次に神馬を牽く。僚官社僧衣冠を著け騎馬にて從ひ、警固の武士兵具を荘りて殿す。遷行の道筋は一鳥居の前の馬場を北へ向ひ、宿を通りて海門戸に出で、網屋町の濱を過ぎて御旅宮に至る。その程凡そ十五町餘あり。是日其の盛儀を見んと欲して集る者數千に及び、その携る提燈は星の如くに輝きて、壯觀言語に絶すと云ふ。十三日は放生會・神輿御旅宮に御滯座、十四日亥時に及びて還行し給ふ。十五日は三社の流鏑馬等を行ふ。但し以上の如き神輿遷行の儀は、隔年に執行するものにして遷行なき年は、十五日の放生會・流鏑馬の外に、猿樂能・相撲等あり、是亦見物の群集するを以て殷盛を極めたり

筥崎祭放生會は、年來久しく中絶せしを、靈元天皇延寶三年正月十五日に、座主坊盛範之を再興してより以來、毎月十五日に行ひしものにして、就中八月十五日を以て大祭としたり。又神輿遷行の儀は古くより行はれ、現在の濱口湊（舊と夷町）に殘存せる夷の宮は昔の御旅所にして、當時神輿は此處に渡御ありしが中絶せり。その後元祿十四年に至りて社司等之を歎き、國主黑田綱政に訴へて再興し今の濱の鳥居より南凡そ三町餘の所に御旅宮を造營したるなりといふ。

鹿兒島祭（かごしままつり）（初）　十五夜祭（じふごやさい）

[illegible] 八月十五日、大隅國官幣大社鹿兒島神宮の祭禮にして、天津日高

彦火々出見命を祀り、大隅正八幡又は國分八幡宮と稱し、當國一の宮にして、欽明天皇の御宇五年、仲哀天皇・神功皇后・應神・仁德帝を合祀す。皇室始め庶民の崇敬厚き社なりしが、屢々火災に罹り、明治七年宮號の宣下ありて神宮と稱し、二十八年官幣大社に列す。祭日には鳳輦渡御、行列里餘に亙り偉觀を極む。以前は陰曆八月十五日に行はれ十五夜祭とも稱せらる。

【[illegible]】 毎年八月十五日、鹿兒島縣(大隅國)姶良郡隼人町、官幣大社鹿兒島神宮に於いて行ふ祭なり。一に十五夜祭とも稱す。蓋し、もと陰曆八月十五日に行はれたるを以てかく唱へしなるべし。祭の當日神輿濱殿へ神幸あり。是れ即ち本社の祭神彦火火出見尊、海宮に游行し給ひし故事に據るものなりと云ふ。古へはその行列に前驅・隼人・神馬・撿非違使・錦旗・大榊・楯・鉾・神寶等參列せり。室町初期に記せる社務記に、騎馬武者二百六十人神輿に供奉するの例なりと見えたるに據れば、當時の祭典の如何に壯觀なりしかを察するに足るべし。

三島祭(みしままつり)(初)

【[illegible]】 八月十六日、伊豆國官幣大社三島神社の祭禮にして、祭神は原と大山祇神なりしが明治維新の際十籤八彦叢之事代主神に改む。始め大神この國土を天孫に獻ることを進言して當國三宅島に住み給ひ、後賀茂郡白濱に鎭り給ひ、更に國府たる今の地に遷座したまふといふ。延喜式内の名神大社にして、四度の官幣に預り當國一の宮なり。源賴朝深く崇信し、社領を奉り神馬劍幣を奉れり。爾來東國の武將この神を崇敬す。明治四年官幣大社に列し、當時は年中の祭祀七十五度に及べり。

大文字の火(だいもんじのひ)(初)　妙法の火(みやうほふのひ)　船形の火(ふなかたのひ)　鳥居形の火(とりゐかたのひ)　施火燒く(せびたく)　聖靈送火(しやうりやうおくりび)

【古書拔萃】
【日次紀事】 今夜(七月十六日夜)東山淨土寺の山上、薪を以て大字を點ず。此字畫凡筆の及ぶ所に非ず、傳へ言ふ、室町家繁榮の日、遠望の觀の爲め之を點ぜしむ、故に一條通を當面とすと。之に依て言ふ、相國寺橫川景三の筆する所也と。又言ふ弘法大師の書する所也と。この說是に近し。凡そ此の月六日薪を伐るより點火するに至るまで其の事に預るもの數十家あり。今日申の刻各々代り乾かす所の薪木を擔ひ山上に登る。凡そ大文字一畫長さ百五十間餘、その中間五尺許を隔て薪木を積むこと一堆、其の數四百八十餘所、各薪を積み終りて後、日の沒するを待ちて、同時に火を點ず。是亦洛陽の壯觀也。此外北山松ケ崎に妙法の二字を點じ或は船岡山には船形の火を點じ、或は愛宕山には鳥居形の火を點す。洛外所々の山岳幷に原野諸人競ひ集りて枯麻の條・蕎の枝・破子・公卿臺の類を燒く。之を聖靈の送り火、又施火と云ふ。

【大文字の火】送り火・施火 活法の昔に(一)鹿ケ谷の大文字・松ヶ崎妙法と記せるは、是上古より毎七月十六日の夜洛外の山寺にて盆會の施火を焚き行ふをいふ也。山の半腹を文字の形或は船なんどの形に穿ち、その縁には石垣を構へ、火の外へ分散せざるやうに拵へ置きて、その穿の穴へ薪を詰込み、暮前火を燃し付くれば、暮れて後穴中に火滿つる時その文字その物の形皓然と鮮に京中に見ゆ。その所々は即ち鹿が谷の大文字・松が崎の妙法・市原山のいの字・加茂山の[illegible]・釣[illegible]・西山の鳥居・鳴瀧山の一の字、凡そ洛外東西北方の山々皆之を焼く。その中に鹿が谷の大文字甚だ夥しく、大の一字横の一畫長さ四十間、左點の一畫八十間、右點六十八間也と古記にしるせり。

註 (一)俳諧の作法書をさせり

季題解説 八月十六日(舊は陰暦七月十六日)、京都東山如意嶽の半腹に於て、日沒より薪を以て大の字形を作り火を點ず。其大字の大さ一劃の長さ三十八間、左竪の一劃八十五間、右の一劃六十八間の偉大なる文字を現はし甚壯觀なり。是を大文字の火といふ。

参考 大文字の外、其規模の小さきものに、妙法の火(松ヶ崎にて妙法の文字に點火せらるゝ、)船形の火(西賀茂正傳寺の上に船形に點火せらるゝ、)鳥居形の火(愛宕山に一鳥居の形に點火せらるゝ)などあり。此夜洛外所々の山岳、並に小原野に於いて、松明の枝・樒の枝の類を焼く、之を聖靈の送火、とも施火とも云ふ。〔參照〕盂蘭盆會(上)、迎火(

例句

大文字の火

東山を見て

山の端の雪あはれなり大文字　嵐雪　(雪むしろ)

十六日は山々の送り火、如意嶽の大文字、松が崎の妙法、[illegible]に火をともして魂送りし侍りぬ

經を焼く火や尊さや秋の風　同　(杜撰集)

相阿彌の宵寝起すや大文字　蕪村　(蕪村句集)

大文字や近江の空もたゞならね　同　(同)

銀閣に浪花の人や大文字　蕪村（蕪村遺稿）
天津風桂やこぼす大文字　嘯山（葎亭句集）
大文字や初めにほつと一ト燃り　蒼虬（蒼虬翁發句集）
大文字に片頰まばゆき往來哉　子規（仝集）
大文字のうつりて白き草屋哉　青々（妻木）
山も雲も大文字の火にかげもなし　白文地（ホトトギス）

妙法の火　いざ急げ火も妙法を拵へる　一茶（七番日記）

豐國神社祭（中）

季題解說　陰曆八月十八日、京都大佛なる豐國神社の祭禮をいふ。本社は豐臣秀吉を祀り別格官幣社なり。慶長四年後陽成天皇の勅により行はれ頗る盛大華麗なりしが、德川氏政權を握りて祭禮をも全く廢絶せり。然るに明治初年明治天皇豐公の偉勳を追錄せられ給ひ、特に神社を再興し、祭儀を再興せられたり。
現今は十月十八日、八乙女舞を奏し、鳳輦出御の居祭となれり　〔參照〕太閤忌

御靈祭（初）

古書校註【山の井】八所御靈祭、八月十八日は御靈祭にて御鉾などあまた渡り侍る。中にも上御靈には猿田彦のおどろ〳〵しき顏して、鼻高なるが先立ち侍るを、京のわらはべの王の鼻といひて恐れ侍る。
【増山の井】俳。八月十八日。（略）此の祭いつより始まる事知らざるよし、世諺問答に有り。此の祭に王の鼻（一）といふ物の渡れるは猿田彦なるべし
註（一）王の鼻は祭の行列中の一人にて、日次紀事に「一人竿頭に道祖神の假面を掛けて神輿に先だつ　この假面鼻長大なり。是を俗に王の鼻と稱す」とあり　なほ詳しくは同書、並に滑稽雜談・年浪草等について見るべし

季題解說　御靈神社は京都寺町通に上下二社あり。祭神は八所御靈にして、古へは毎年七月十八日神輿御出、八月十八日神輿還御の事あり、神輿は二基なり。御靈八所の内四所は桓武天皇の御時これを勸請す、下の四所は仁明天皇の御宇これを勸請すと傳ふ。上出雲寺を上御靈の神宮寺とし、下出雲寺を下の御靈の神宮寺とす。傳教大師の草創にして今兩寺ともに絶たるを寛文年中惠眼大師の遺誡によりて久遠壽院の准后、山城國宇治郡山科の郷に於て出雲寺を再興し給ひ、毘沙門天を安置し給ふ。上御靈の御旅所は京極通り中御靈にあり。下御靈の御旅所は年々その所を定めず。その年神事頭屋の家内に安置す。御旅所に在すの間を以て御旅と稱す。（古）〔參照〕夏―御靈祭ゴリヤウマツリ

玉取祭（たまとりまつり）（八月）　嚴島延年祭（いつくしまえんねんまつり）

【季題解説】八月の滿月より四日目、安藝國嚴島神社に於て行ふ嚴島延年祭をいふ。正午より大鳥居内の海中に豫め四本の柱を立て、その中央に地磐を吊り、木製の寶珠を置く。これを定刻に至れば數百千人の男子悉く裸體となりて海中に入り、爭うて寶珠を取る。これを取り得たるものは其年必ず幸福ありといふ。

萬燈會（まんとうゑ）（八月）　萬燈會（まんとうゑ）　宥弘法（よひこうほふ）

【季題解説】八月廿日夜、京都嵯峨大覺寺（往古は嵯峨離宮にて淳和の御宇寺となる）にて奉修せらるゝ法要をいふ。起源は明かならざれども、後宇多法皇以後か、或は嵯峨離宮は弘法大師練行の地なる故、離宮の大覺寺として草創せられしよりの事か。同夜萬灯の燈明を灯して弘法大師を迎へ、法樂を捧ぐるなり。此日大師は當寺より高野山へ歸還せられ、翌日は東寺へ歸らるゝと傳へらる。同日晝間は太神樂を奉納し、夜は活動寫眞・奉獻生花大會・踊などありて大に賑ふ。又參拜の道々には篝火を焚き、特に勅使門を開きて一般に參詣を許す。勅使門を開くは大師が舊棲の地へ歸還せらるゝ道順なるより、それを奉迎の意なりと古來より言ひ傳ふ。

【例句】

萬燈會　萬燈の灯能うつる水の秋　蒼海龍（漁火）
嵯峨の秋しめやかにして萬燈會　同（同）

菩薩祭（ぼさつまつり）（中）　菩薩踊（ぼさつをどり）　媽祖會（まそゑ）　媽祖勝會（まそしようゑ）　媽祖降生會（まそかうしやうゑ）　船玉祭（ふなだままつり）

【[illegible]】【年浪草】八月廿二日、肥前國長崎に於て、船神を祭る、之を菩薩祭と云ふ。和漢三才圖會に云、舟の神を媽祖娘々と名く 俗之を船菩薩と云ふ。唐船長崎に來り、往々祭る所の神是也。○或人曰、長崎に唐人寺とて四ヶ寺あり、福州は石灰町崇福寺、漳州は下筑後町福濟寺、南京は寺町興福寺、此の三ヶ寺、昔は唐僧住す。今は唐僧來らざる故鑵子持（一）也。外に日付寺といふ、是筑後町の聖福寺なり。昔より和僧持也。菩薩祭の日は和僧も唐裝束にて法事修行あり。本尊は觀世音菩薩也。此の日唐人も向々の寺へ參詣する也。其の異體を見んとて群集す。四ヶ寺皆黄檗派也。

註　（一）日付寺の寺宇　住職に代りて寺務を監督する役の僧

【季題解説】今は唐八月二十三日、長崎在留の支那人、同所の唐人寺なる崇福寺・福濟寺・興福寺の三所にて老媽神（天后聖母又は天妃ともいひ、海上を守る神）を祭り、諸僧唐裝をなして法會を修する式をいふ。又菩薩踊は式後酒宴を催し、參詣の唐人等黑き棒を使ひて踊るをいふ。

【附記】媽祖勝會は菩薩祭として崎人間に識られたものである。また媽祖會・媽祖降生會など、稱せられた。三月廿三日・七月廿三日・九月廿三

日卽年に三度大祭があつた。もとは唐寺銘々に媽祖勝會の際に媽口供大法會を行ふたのであるが、後に輪番にて之をなすことゝなつた。（鏡〔二〕）

（上略）舊來菩薩祭を修し居候所謂唐三ケ寺に就て相糺し候に、三ケ寺共舊三月二十三日をその日と致し、年一度之修會に有之候由、隨て右抄錄之中に散見致候七・九月之小祭は目下已に廢絶して、いづれの寺もその事あるを知らざるやの樣子に有之候（下略）（鏡〔二〕）（長崎、野崎比古氏報）

例句

菩薩祭　枸杞さげて歸船を呼ぶや菩薩祭　青々（妻木）

樺太祭（かばふとまつり）（初）

季題解說　八月二十三日、樺太豐原町官幣大社樺太神社の祭禮にして、祭神一座、大國魂命・大巳貴命・少彥名命を祀る。創建は明治三十七八年戰後の結果として本島南半我が領有に歸せしより、帝國極北の鎭護として勅して國土經營の靈神を奉祀せしめられしに基く。同四十三年官幣大社に列す。境內二萬一千七百餘坪、附屬山林十一萬三千餘坪、附屬畑地七萬七千餘坪、規模雄大を極む。祭祀の八月二十三日は、樺太廳始政記念日に大祭を執行せしより恆例の祭日となれり。當日は同島に於ける一年中の最大祝日として、老若男女豐原に集ひ來り參拜す。

六齋念佛（ろくさいねんぶつ）（初）　六齋（ろくさい）　六（ろく）

齋踊（さいをどり）　六齋大鼓（ろくさいだいこ）

季題解說　八月二十三、二十四兩日（舊は陰曆七月十七日）京都壬生寺に於て六齋念佛を修す。この念佛は空也上人の踊念佛に初まるといふ。又京都空也堂にては方今八月十三日より二十四日まで、六齋念佛の巡行あり。略して六齋ともいふ。京都壬生寺近在の若者、盆の頃六齋念佛を催し、笛、鉦又は六齋太鼓の曲をなし、市中の家々を廻る。現今は鳥羽吉祥院の村人等集りて之をなすと云ふ。

例句

六齋　六齋や大前髮の繪帷子　鈍來（墨風居）

六　齋　六齋の一人は鳥羽の狐かな　青　々（倦鳥）
六齋太鼓　六齋の太鼓濡るゝや萩の露　尺　角（同）

地藏盆（初）　地藏會　地藏參　六地藏詣

【古書校註】【年浪草】紀事に曰、洛外六所の地藏詣は、所謂加茂御泥池（みぞろ）、或は云御菩薩池・山科・伏見・鳥羽・桂・太秦・是也。凡そ一日六所の行程十里餘也。六地藏はもと文德天皇仁壽二年小野篁地藏の像六體を造り、木幡の法雲山大善寺に安置す。故に此所を六地藏村と云ふ。其の後保元二年平の清盛公六ケ所に堂を造り右の地藏を分ち置く、七月廿四日供養、西光法師この事を司る云々　今に於て毎年七月廿四日六所に詣づ、之を地藏祭と云ふ、洛下の兒童も亦各香花を街衢の石地藏に供して、之を祭る　蓋し道祖祭の遺風か。又今日六齋念佛の徒も亦六所の堂に詣で、太鼓を撃ち鉦を鳴らし、以て踊躍念佛をなす　俗に之を六齋太鼓と稱す。洛東光福寺（千菜寺）の一派也。

【季題解説】八月二十四日は地藏の緣日なるを以て、各所の地藏に祭をなす。地藏菩薩は子供を守る佛なりとて、果物・菓子等を供へ、香華を獻じ、町町にては地口行燈などを懸けてこれを祭り、境を設けて兒女の踊を爲す。昔は七月二十四日これを行ひたり。六地藏詣とは京都にて御泥池・山科・伏見・鳥羽・桂・太秦の六所の地藏に詣るをいふ。

【例句】地藏盆
地藏會や近道を行く祭り客　蕪　村（蕪村遺稿）
脊の子は夢路を廻る地藏かな　嘯　山（葎亭句集）
夜汐こむ佐比江逆瀬や地藏盆　鼓　竹（倦鳥）
露の夜の地藏ぼさちを假屋哉　青　々（妻木）

太宰府祭（初）

【季題解説】八月二十五日。福岡縣筑紫郡にある官幣中社太宰府神社の祭禮なり。祭神は菅原道眞。昔、醍醐天皇延喜三年二月二十五日道眞謫所に薨ずるや、御笠郡四堂邊に葬らんとせしに、柩車安樂寺の地に至り止りて動かず、即其所を以て廟所となせしといふ。

【參考】毎年八月二十五日、福岡縣（筑前國）筑紫郡太宰府町太宰府、官幣中社太宰府神社に於いて行ふ祭なり　古くは陰曆八月廿三日に行へり。是日未明に神輿を榎木寺（菅公左遷の時の御座所と云ふ）の御旅所に奉遷す。その儀先づ宮司豫め齋戒し、内陣に入りて神體を守り奉る。此時内外の燈火を消して越殿樂を奏す、了つて神輿に移し奉り社を出づ　神輿の前後に雨燈二十八を點じ、文人三人、衣冠騎馬にて先驅す。次に童子二人、烏帽子素袍を著け、木製の駒形を抱き、騎馬にて先驅し、その後に童子二人、同じ服裝にて手に梅の枝を持ち、口に喝道を唱へて從ふ。神輿は駕輿

丁十二人にて擔ぎ、その左右に六人翳(サンバ)を持ちて之に翳(カザ)す、次に樂人等笛・三鋼太鼓を鳴して神輿の跡につゞく。次に神馬三疋を牽く。次に左別當・三綱等騎馬にて供奉し、其他多數の神人之に從ふ。かくて道中樂人音樂を奏して進む、やがて榎木寺に到れば、先着の宮司三人之を迎へて、御旅所に遷し奉る。未の時に及び榎木寺を出で、天滿宮の鳥居の傍なる浮殿に入りて式を終る　翌廿四日は戌の時に本社に遷し奉るなり。此の時舞樂・竹之舞を行ふ。此祭は堀河天皇の康和三年に、中納言大江匡房が夢想に據りて、始め行ふ所なりと云ふ。

土佐志那禰祭(としなねまつり)（初）　土佐祭(とさまつり)

季題解説　陰暦七月三日（現今は八月二十五日）、土佐高知の一宮村土佐神社の祭禮にして、「シナネ」は新稻の訛ならんといふ。祭式甚古式にて夜松明を燃し、一本松の御旅所へ神幸あり參詣者神輿に供奉し頗る盛觀なり

御射山祭(みさやままつり)（初）　穗屋祭(ほやまつり)　穗屋(ほや)　御狹山狩(みさやまがり)　穗屋(ほや)の芒(すゝき)

古書校註

【御傘】　ほや作る、秋也。信濃のみさ山祭、七月廿日（一）薄にて作る假屋の事也、居所也、神事也。いくつも作る也、植物也。

【篗纑輪】　七月廿七日、信州諏訪郡御射山、この祭に芒の穗にて假屋をいくつも作る、卽ち小社也。是を穗屋といふ。信濃へ旅立ちぬる人に、「旅に寢ば穗屋の芒や足なでん」、これ千律師（二）の句也。又みさ山狩といふは、此の祭に小鳥を狩りて神贄に備ふるをいふ。

註（一）芒にて作れる所謂穗屋は、廿日より廿七日まで構ふる也。（二）千那（蕉門）

季題解説　八月二十七日　舊時は七月二十七日）信濃の諏訪上下兩社にて行はるゝ祭、祭神健御名方・八阪刀自の二神なり。上社は東方三里餘八ケ岳の麓に御射山社あり、古へは五十丁四方の原野にて祭神狩獵の地なりといふ。廿六七八の三日三夜に亙り青萱・薄にて小屋を葺き穗屋といひ、神官氏子此に泊りて遠笠懸を射る神事あり、古へ田村將軍安倍高麿を討たんとする時此神に祈りしに、梶の葉の紋（此社の紋なり）つきし直垂著たる人湖上に馬を走らせ笠懸を射、將軍の願叶ひしより起るといへり。當日は一般民家も、赤薄を葺き薄を箸として物を食する風習あり。下社も東北里餘に御射山社あり、上社と同じく祭事を行ふ。現今は昔時の盛儀に及ばずと雖尚盛んなる祭なり。「猿蓑」に芭蕉の句あり。「信濃路を過るに、雪ちるや穗屋の薄の刈殘し、芭蕉」之は云ふまでもなく、祭も過ぎて冬の光景なるが此御射山祭を思ひての句なり。

例句

御射山祭　御射山や昨日は芒今日は里　闌更（半化坊發句集）

穗屋の祭に到りて

穂屋祭 しなくと吹くや穂屋野の飾鑓 素檗（素檗句集）
柱までますほになるや穂屋の宮 同（同）
諏訪川やすべた芒を祭らるゝ 一茶（七番日記）
ちぐはぐの芒の箸も祝かな 同（同）
清者としゃりと言ふも今日なりけり
御射山や見ても涼しき芒箸 同（一茶句帖）
御射山や今日一日の花芒 同（同）
御射山は今日一日の名所哉 同（九番日記）
萩の末芒のもとや噴祭 同（發句題叢）

大覺寺大日會（初）

季題解説 八月廿八日、京都嵯峨大覺寺にて行はるゝ大日如來の祭をいふ。同夜大澤池畔は露店を以て埋められ、嵯峨野一帶にかけて賑ふ。なほ此大日會は同日京の所々に於て修せらるれども、大覺寺は最盛なり。

死活杖祭（中） 死杖祭

古書校註【年浪草】この祭は猪熊三條の南褐速（カチハヤ）の神社にあり。〔〕雍州府志に曰、昔刑部省この邊にあり、獄を斷じて以て死罪を行ふ。故に刑死人の爲に、この社を建て祭祀を修して之を薦む。毎年八月神事有り、死活杖祭といふ。

季題解説 陰暦八月、京都猪熊三條にある、褐速神社の祭禮をいふ。此地古昔刑部省ありて、獄を斷じて死刑を行ひし故に、死刑囚の追善の爲に此社を建て祭祀を修するなり。今は社さへも失はる。（古）

例句 死活杖祭 町内が祭り良なり死活杖 青々（妻木）

秋社（中）

古書校註【日次紀事】立秋後第五の戊を社日となす。【滑稽雜談】夢花錄に曰、京師八月秋社。各社糕・社酒を相饋る。貴戚宮院多く、諸肉雜物を調和し、飯上に鋪く。之を社飯といふ。人家婦女皆外家（一）に歸る。既に歸れば外舅姨舅（二）皆新葫芦兒（三）を贈る。俗に宜良外甥といふ。○是もふるこしには社日とて春秋に二度土神を祭る也。春は農事のよからん事を祈り、秋はその恩德を報ずる意となん。和朝に社日の事なしといへど新年穀の奉幣また二・八月に行はると也。

註（一）妻の實家。（二）妻の父・妻の姉妹兄弟。（三）ふくべ。春の社日をも見よ

季題解説 秋の社日にして、立秋の後、五戊の日をいふ。春の社日を社日

又は春社と言へるに對す。社は后土なり。民をしてこれを祀らしむ。以て農を祈るなり。〔季寄〕春―社日ニシヤニチ

例句

秋社　唐黍の風や秋社の戻り人　露月（露月句集）

參考　秋の社日を云ふ。月令廣義に、立秋の後ち第五の戊の日を秋社と云ひ、立春の後第五の戊の日を春社と云ふと見えたり。社日の社は社稷の社と同じく地の神の意にして、土はよく萬物を養ひ五穀を生ずるが故に、此の神を祭り、又春は農作物の豐饒を祈り、秋はその恩惠を報ず。而して春の社日には種を蒔き、秋の社日には刈り入るゝに吉なりと云ふ。又社日に戊の日を用ふるは、戊が土性なるを以てなり。支那にては此日村民互に相集りて酒を飲む。社日の酒は聾を治すに効ありと稱し、之を聾酒と號けて珍重す。又燕春社の時に來りて秋社の時に歸ると云ふ、韓偓の詩に「此身願作二君家燕一、秋社歸時也不レ歸」と云へるは、蓋し此の事を詈へたる一例なり。

穗懸ほかけ（中）

季題解說　仲秋、稻の刈り初めに初穗を組合せて門戶口等にかけ、神に奉ることなり。

震災記念日しんさいきねんび（中）　震災忌しんさいき

季題解說　大正十二年九月一日午前十一時五十八分、關東一帶に大地震あり、死者數萬人を超ゆ。每年東京各所に於て此日此時刻に追悼會・慰靈祭・祈禱會などあり。又施餓鬼等行はる。（新）

例句

震災七週年にあたり「朝貌も人も燒かれて火の中に」の青々先生の句を想ひ出て

震災記念日　九月一日朝顏と人の忌日かな　野船（倦鳥）
方丈記にもまして魔風でありにけり　青々（同）
過ぎし日の慰め難き人あらん　同（同）

鹿島祭かしままつり（中）

季題解說　九月一日、常陸國官幣大社鹿島神宮の大祭にして、武甕槌命をまつり、經津主命・天兒屋根命を配祀す。延喜式內の名神大社にして四度の官幣に預り當國一の宮なり。神武天皇卽位の年本官を創始し給ふといふ。明治四年官幣大社に列す。年中祭祀多く就中白馬祭（一月七日）春季祭（三月九日）御軍祭（九月一日）御船祭（九月二日）等最も顯著なり。

參考　每年九月一日、茨城縣（常陸國）鹿島郡鹿島町宮中、官幣大社鹿

島神宮に於いて行ふ祭祀なり。古くは陰曆七月十・十一の兩日に行ひ、十日を御船祭と稱せり。其儀、十日の夜、禰宜神主樓門の前に立て並びて列を作る。是の時町家の者共群集し、手に／＼青竹の葉に火を點じたる無數の小挑燈を結び付けたるを持ち、鯨波の聲をあげて押寄せ來り、社前に於いてみな節となして一時に之を燒く。大宮司・大禰宜大小の神劍を捧ぐ、同時に神官より群衆に至る迄男は大刀・劍を拔き放ち、女は鎌・長刀の鞘をはづして節の火影に翳す。此の祭儀は神功皇后三韓征伐の故事に基くものと傳へられ、俗に三韓退治の節ともいへり。現在にては此の日神劍の鋒に、彼國王の頭と稱するものを貫き、神官以下甲冑を帶し、兵杖を持ちて神輿に供奉す。又家々にては稻を以て人形を作り、竹刀を佩帶させ、その腹中に團子を入れて兵粮となし、門前に置くなり。十一日の御船祭は、午歲十三年目に行ひ、祭禮の當日神官以下武裝をなし、數艘の船に乘り、鯨波を作りて津々浦々を漕ぎ廻るなり。

松尾神事相撲（中）

[illegible]　九月一日（舊は陰曆八月一日）、洛西松尾神社にて行はるゝ神事相撲をいふ。太秦廣隆寺の僧一老・二老來り、酒店の若者等角力を取る、又氏子六齋念佛を神前に興行す。これ農作祈願の心なるべし。

氣比祭（中）　敦賀祭

[illegible]　九月四日、越前國官幣大社氣比神宮の祭禮にして、伊奢沙別命・日本武尊・武內宿禰等祭神七座、古くより氣比大神としてこゝに鎭り給へるは伊奢沙別神にして他は合祀されたるものなり。本宮の神職はもと國司に准じ解由を與へ季祿を賜ひ、易を把らしめたることあり。また社僧ありて神宮寺に任せり。氣比神宮寺の名は既に靈龜二年に見え、宮寺中最古のものに屬すといふ。本殿は特別保護建造物にして、明治二十八年官幣大社に列し宮號に改む。例祭の外七月十七日海上神幸の式あり。

醍醐祭（晩）

[illegible]　陰曆九月九日、山城國宇治郡小野の南、深雪山醍醐寺なる長尾天神・清瀧權現・勝間明神、三神の祭禮にして、祭神清瀧權現は沙迦羅龍王の第一女なり。長尾天神は延喜帝の御願によりて御願寺となる、故に勸請あり。勝間明神は神緣社說詳ならず。當時の伽藍は山上山下にあり、上醍醐下醍醐と云ふ。土人長尾天神を以て本居と崇む。明治以後は十月三十一日長尾天滿宮の前にて藝能を行ひしが、同二十一年より廢せられ、十一月一日早天に長尾社より神輿渡御、同時に翁の能あり。

御香宮祭（晩）　伏見祭

古書摘註

【滑稽雜談】 神社啓蒙に曰、御香神社、山城國伏見驛京町の東に在り、祭神一座か。神功皇后。里諺（一）に云、鎭座年紀分明ならず、昔よりこの地に垂跡せし也（秀吉城柵を築くの日、神籬を東の岳に移し奉る。雖ども今の古御香宮是也）、神の祟り數々起れり。之に依つて又舊地に遷し奉ると云ふ。卽ち今の神地也。

【年浪草】 一書に云、この地紀伊郡に屬す、例祭九月九日、朔日を御出といふ。十日神事能有り。初め祭る所の神九座、神輿も亦九基あり、土人産沙神となす。今神輿一基造り山二基ねり物等出づ。

註 （一）その土地の俗傳。

季題解說 陰曆九月九日、山城國伏見京町の東、御香の宮祭禮あり、宮は神功皇后・仲哀天皇・應神天皇を祀る。神輿一基、造り山二基、ねり物等を出せり。現今は十月九日に行はれ、十一月十一日に神事能ありて賑ふ。

例句

御香宮祭

もし降らば千珠投ませ祭の日　嘯山（律亭句集）

九日や高に登る伏水人　青々（妻木）

參考

毎年陰曆九月九日、京都府（山城國）紀伊郡伏見町、縣社御香宮神社に於いて行ふ祭なり。一に伏見祭と稱す。古くは九月朔日を御出と稱し、九基の神輿、大龜谷八科嶺に神幸ありき。是れ社傳に、文祿年中、豐臣秀吉伏見城を築くに當りて、社を大龜谷八島嶺に移す、然るに後ち廢城となりたるを以つて、慶長十年に德川家康更に社を舊地に復し、伏見城の遺物を遷せりと云ふに據るものなるべし。次いで九日に神輿の還御ありて、十日に神事能を行ひたり。當時は邌物・風流傘・山・鉾等ありて盛大なりしが、今は纔かに行列の巡行を執行するのみとなれり。

生國魂祭（中）　生玉祭

古書摘註

【案内者】 九月九日、攝津生玉祭。生玉明神祭禮、引馬・屋鉾・母衣武者もあり、またときにより粗相なり。御こし一社をまつる。

【滑稽雜談】 九月九日。土當世九月九日神事侍る。神輿一基、させる祭禮なし。當社にも六月廿七・八日御祓の儀有り、天滿に並びて座摩（一）に同じ。道頓堀邊より踊者・風流數多侍る也。古俳書けふの神祭を載せてまた六月祓の沙汰なし。爰に記する所之に准ずべきなり。

註 （一）大阪座摩（ヰカスリ、又はザマ）神社

季題解說 九月九日、大阪市官幣大社生國魂神社（一生玉神社とも書す）の大祭にして、生島・足島の二神を祀り、相殿神を大物主神とす。延喜式內の

大社にして月次・相嘗・新嘗の三祭に預り、明治四年官幣大社に列す。九月九日の例祭の外、七月九日神輿渡御の夏祭あり殷賑を極む。

【参考資料】毎年九月九日、大阪府（攝津國）大阪市天王寺區生玉町、官幣大社生國魂神社に於いて行ふ祭なり。古くは陰曆の九月九日に行ひ、引續き、巫女・神官・陸衣武者などの行列ありしが、後世廢絶し、神前・松原にて流鏑馬を行ふのみとなれり。即ち腹巻陣羽織を著し、午の刻社前の門外より鳥居の方へ逸散に驅るなり。此所を馬場前と云ふ。又此の外に神輿一基を出す。

貴船の狹小神輿（中）

【古書校註】【滑稽雜談】神社啓蒙云、貴布禰社、山城國愛宕郡鞍馬の北一里ばかり、祭る所の神二座、高龗神（註一）。延喜式に曰、貴布禰社は磐長命と高龗となり。改曆雜事記曰、人皇百六代後奈良院御宇小兒咳逆疫して死亡甚だ衆し。仍つて相者をして卜せしむるに即ち貴船神の祟る所なりと。是に於て乃ち同じ御宇弘治二年重九日、疫を避はしむと云々。蓋し是か。中世九月九日京師兒童相集りて、小さき御輿を造りて貴船の御輿と稱し市中を振りける、之を狹小輿祭といへり。これ弘治二年の例にてや有るべき。當世その沙汰絶えて聞く事なし。又貴船の本社にもさしたる神祭もなきにや。

註（一）タカヲカミノカミ。原註に「水德の神也、別雷宮第二の攝社」とあり。

【季題解説】陰曆九月九日、山城國愛宕郡鞍馬の北一里斗り、貴船神社の祭禮をいふ。祭神高龗神は龍德の垂跡にして雨を祈り雨を止むる事を祈る御神なり。例祭には洛中の小兒小さき神輿を作り市中に振る。これを貴船の狹小神輿といふ。此狹小神輿といふは、御奈良院の時洛中小兒咳逆、疫時にて多く死せるより、天皇哀れに思召して卜せしめ給ひし所、貴船の神の祟りなりとありしより、弘治二年九月九日に宣下ありて除疫を祈られ、これより洛中の童兒此日九日まで神輿を舁く事に成りしといふ。（下）【參照】夏　貴船祭。

【参考資料】毎年陰曆九月九日、洛中の小兒相集りて、小さき神輿を作り、貴船祭と稱して市中を舁き歩く。此の神輿を狹小輿と云ふ。此の行事に就きては、俳諧歳時記の貴船祭の條に、廿二社註式を引きて、九月九日小兒咳逆疫して死亡すること多し、仍て相者をして卜せしむ。云く貴船の神の祟をなす所なりと、こゝに於いて弘仁（治カ）二年（百六代後奈良天皇）秋九月九日疫を避はしむ。今貴船の神輿と稱して洛中を振るもの、是この遺意歟、」と記せるに據りて知るべし。

稻爪神社牛乘（中）

【季題解説】九月九日、播磨國明石大藏谷（舊は大倉谷と書す）稻爪神社に祭

禮あり。同社は推古天皇の御宇越智益躬の勸請する所と云ふ。當時靺鞨より數萬人の來寇せしを越智益躬撃て之を殺す。其時異賊の大將鐵人牛に乘り來るを、鐵人撃殺せられしより此牛を太寺村にて飼養せりと傳ふ。祭禮當日に大藏谷平池の上バリバリ谷の山番人、太寺村より牛を借り來り、鐵人に扮裝し牛に跨り神社に賽す。之を牛乘りといふ。其時牛の口を取り鐵人に隨從する者は四九村の者にて、鐵人が家來の子孫なりと見做すものなり。太寺村より牛乘を出すは稻爪神社への接待なりと。」播州名所巡覽圖繪に「例祭九月九日、神輿一基並に神寶等を守り奉る。又牛乘りとも、八十、おのこの面に白粉をほどこし、額に大の字を書き、異形の笠を被り素袍を着し、弓矢を持、牛に乘りて神輿に供奉す。牛の口取又異形の尉姥なり」と見ゆ。

□牛乘り(摘錄)　　横山[illegible]櫻

□紫の角卷に赤の首輪をかけた飾牛を、二人の男が曳いて來る。鞍の上から鶴の丸を染めぬいた茶色の覆ひが被せてある。これはけふの神事に出る牛で、これから宿へ化粧に行くところである。獅子舞を見て居た娘さんが、あとで大藏谷中、化粧錢を取りに廻つてのやと云ふて居る。

□牛乘りの宿には注連繩をめぐらし、古びた幕が掛つて居る。幕の紋は隅切角に三木と鶴の丸とで、端しに大統中と記してある。幕の裾をかかげて宿の内を見る。床に煤けた三社託宣がかゝつて、御燈明が二つ淋しうともつてゐる。長い尾のついた五色の笠と、矢をつがへた弓と、尾花を三本さして杓子をくゝりつけた炮烙とが、床の前の疊に並べてある。障子を明け放した中の間の簞笥の前に、顏一面べた〱と白粉をなすりつけた人が裃をつけて居る。これが牛に乘る人である。

□牛は毎年太寺といふ人丸山のうしろの村から順番に出ることに定まつて居るので、番があたつた家では、酒を買ふて祝ひをする。昔は庄屋どんが化粧して乘つたものだが、あんまり姿が奇體なので、皆嫌ふてなる者が無い。それで近年は山番を雇うて行ふことゝなつたといふやうな事も云うて居る。

□「千年と萬年と、大藏谷の浦に於て、千斗も萬斗も、大鰯小鰯とれくさつて候」(牛乘が最後に八幡社の鳥居前で今も言ふ詞)

□牛乘りが鳥居(大藏町東端にある八幡宮)を出ると、見物はわいわい云うて四方から押し寄せる　牛乘が扇をひろげると一同ワワと鬨の聲が起る。「大鰯小鰯とれくさつて候」と、いふやら云はぬやら、わからぬうちにすんで仕舞ふた。(明治四十一年十二月發行[illegible]第八卷第五號所載)

例句

稻爪神社牛乘

牛乘やけふ浦人の網引かず　[illegible]櫻(鄕土)

牛乘の祭にとりしもとかな　同(同)

下鳥羽祭（晩）

季題解說　陰曆九月十日、山城國宇治郡下鳥羽なる下鳥羽神社の祭禮をいふ。祭神は牛頭天王なり。下鳥羽及び橫大路の人本居神とす。神輿一基あり。神社は法傳寺の巽二町ばかり森の中にあり。

芝神明祭（中）

だらだら祭　生姜市　目くされ市　千木箱

【俳諧歳時記】十一日より廿一日迄。○神社江戸日比谷御門外に在り。（神領十五石）別當金剛院、神主西東氏、社說に云、當社飯倉神明宮は人皇六十六代一條帝寛弘二年九月十六日、伊勢兩宮を勸請す。後鳥羽院建久四年四月、源賴朝卿下野國那須野發向の時、祈願の旨ありて寶劔を納め、一千三百餘貫を寄附せらる。百四代土御門院明應三年伊勢新九郞氏茂、小田原の城主大森實賴を亡し、關東に威を振ふの刻、當社の神領を掠め取る。それより神殿大破に及びしを、正親町天皇天正年中官より神領御寄附有り、寛永十一年修造を加へ給ふ。當社の舊地は增上寺の山際に在り、故に飯倉神明と號す。祭禮九月十一日より同廿一日迄（神幸はなし）。此の節時として秋雨多し、是を以て世俗神明のめくされ祭と云ふ。祭禮の間社內に於て生姜市あり。（一）本朝俗方傳に云、昔は去穢土通神明。土俗かやうの事を誤り傳へて生姜を賣るもの歟。此の外檜割籠に藤の花を畫き內に飴を盛り、之をちけ（二）と云ふ。參詣の人、必ず生姜と此のちけを買うて歸る。又當社の氏子祭禮の間、醴を釀して自家之を食し、人にも飮ましむるなり。

注（一）栞草にはなほこの生姜を根勝（ネツカチ）生姜といふを誤りて一盲（メツカチ）生姜といふ由を記せり。（二）栞草には風木箱（チキバコ）とあり。「但し風木（チキ）の餘りにて作れるといへる謂なるべし」と說明せり。なほ生姜市の事は貞享の「江戸鹿子」にも九月十六日芝神明祭にて飴・生姜・目その外諸色の市立つ事見え、久しき以前よりの風習なりしなり。江戸名所圖繪にも詳しく見ゆ。

季題解說　東京市芝區宮本町なる芝大神宮の祭は、九月十一日より二十一日まであり。其期間の長きを以て、俗にだらだら祭と云ふ。祭神は豐受姫神を祭る。寛弘二年伊勢大神宮を江戸飯倉に勸請し、天正中、社殿を今の地に移したるものなり。此祭に境內にて土生姜を賣る者多し故に生姜祭とも云ひ、其生姜を商ふ者、片目しひたる者を擇んで商はするより、

俗に又目くされ市とも云ふなり。又ちぎ箱とて小判形の曲物に、丹・綠靑・胡粉などにて藤の花を描きたるに飴を入れて賣る。飯倉はもと屯倉のありし所なれば、其所の住民、飯を扱ふ器を專に製す。臼・杵・木鉢・餅器等なり。千器は昔藤蔓を編みて器としたるものにて、餅を盛るによつて餅器の上略なりと云ふ。生姜又千器を賣るは供御に供へしより起ると云へり。

【例[illegible]圖】

生姜市　傘ともにかつぐや生姜市の人　晩　得　（哲阿彌句藻）
　　　　生姜市千早振着の店迄も　　同　（同　　）

【參考】 毎年九月十一日より二十一日に至る十一日間、東京府東京市芝區神明町府社芝大神宮に於いて行ふ祭なり。俗間是をだら〳〵祭と稱す、蓋し祭の期間長時日に渉るより起れる俗稱なるべし。十六日に奉幣・御神樂を執行す。又祭の期間中、境内に於いて商人等生姜を賣る。是を生姜市（ガイチ）、或はめくされ市と稱す。卽ち昔時、目のただれたる者、又は片目の者、之を賣りしに基くと云ひ、或は芽缺き生姜とて芽を切り去りて賣るより云ふともいへれど、目くされ祭より出づるものの如し。又境内に井水あり。是稀代の靈水にて、眼病者之を掬みて洗ふ時は忽ち平癒すと云ひ、祭日に此種の病者多數參詣するを以て、一に目くされ祭と稱すと云ふ。又境内にてちげと稱し、檜割籠（ヒワリゴ）に藤の花を畫き、中に飴を盛りたるものを賣る。參詣の人々必ず生姜とちげとを購ひて歸る。昔は氏子の家々にて醴を釀造し、各自之を飲み、來客にも之を勸むるを以て禮とせしが、惜い哉今は其跡を絕てり。

御難（ごなん）の餅（もち）（晩）

【古書校註】 【年浪草】 九月十二日日蓮上人事有るの日にして、宗門の徒餈を作りて像前に供す、これを御難の餅といふ。

【季題解說】 陰曆九月十二日、日蓮宗の僧俗、胡麻の牡丹餅を作りて開祖日蓮上人の像前に供ふ。これ文永八年九月十二日上人北條氏のために罪せられ、相州龍ノ口に於て斬られんとし、白刃の下僅に一命を全うす。此時路傍の一老婆が餅を供養せしより起るといふ。

【例句】

御難の餅　初雪や御難の餅の過し今朝　乙　二　（松窓乙二發句集）
　　　　　　貞佐一周忌　御難の客は九月のけふ客の先駈を待たで
　　　　　めぐり來ぬ兄し其人も御難の日　撰　居　（梓　の　駒）
　　　　　　九月十二日貞佐一周忌に
　　　　　芳しき祖師のもちゐや惣連衆　沾　洲　（同　　）

三村祭（中）　水村祭　大寺祭　八朔祭

古書校註

【滑稽雜談】八月一日・二日△此社は泉州堺南庄大島郡舳穴の下條に有り、大寺と號す。開口大明神は當寺の鎭守也とも言傳ふ。故にこの祭を大寺祭と云ひ、又三村祭ともいへり。

參照解說　九月十一・十二・十三の三日（舊は陰曆八月一日・二日）泉州堺市甲斐町府社開口神社の祭禮をいふ。又水村祭、大寺祭、八朔祭とも稱す。祭神は伊弉諾尊の御子事勝國勝長狹にして、後に生土牛頭天王を併せ祭る。乃ち住吉の外宮とす。俗に三村大明神と稱す。十一日宵宮、十二日は神輿南旅籠町北芦原の濱へ神幸、午後は神龍川鉾を曳いて氏子の各町を巡行す。十三日田實神事あり。附近の農家より稻のお初穗を獻供す。境內に紹鷗の建てし有名なる茶室あり、現今も田實神事の後獻茶式あるを例とす。

白川祭（晩）

參照解說　陰曆九月十三日、洛北白川の里、南山の上にある天滿天神の祭禮をいふ。祭神は天滿宮少彥名命。神輿一基、鉾五本あり。御旅所は本社鳥居の前二町ばかり西にあり。

竈山祭（中）

參照解說　九月十三日、紀伊國官幣大社竈山神社の大祭にして、宮は五瀨彥命を祀り、延喜式內の神社なり。祭神は神武天皇の皇兄に在しまし、孔舍衞坂の戰に流矢に當りて薨去せられしかば、こゝに葬り奉る。古事記にその薨去を崗と記し、その御墓を陵と書す。延喜式また竈山墓を揭げてこれを遠墓に列す。以て古來特別の待遇なりしを知るべし。始め村社なりしが明治十八年官幣中社となり、大正四年又大社に昇格す。

寶の市（中）　升市　取鉢　住吉相撲會（古）

古書校註

【滑稽雜談】拾芥抄に曰、九月十三日、住吉相撲會、△社家者流の說に云、往昔は神前へ黃金の升を造りて新穀の稻を奉りけるに依つて、農事に用ふる桝を此處に持來りて賣りけり。是によつて種々の市人群集する故に、寶の市と申すにや。只當社の新嘗會と知るべし。近世は只神輿を別殿に移し奉りて、五穀新嘗の神饌など奉る。桝を賣買する事も今に絕えず侍る。拾芥抄にいふ相撲會などは昔はありけるにて、今は沙汰侍らず。又「住吉市」といふも秋也。

【年浪草】攝陽群談に九月十三日寶の市の神升ありと云々。住吉社地に市姬

の社あり、津守の遠祖田蓑の宿禰夫婦を祭ると也。これ市を守る神なり。をもとの社と云ふ。諸國の市の始といへり。升を賣り買ふ故に、升の市とも云ふ。又銀を入るゝ器を取鉢と云ひ升と同じく賣買す。

【季題解説】元は陰暦九月十三日、現今十月十七日攝津住吉神社にて寶の市の神事あり。昔は黄金の桝を作りて今年の新穀を奉り又農家にて使用する桝をも境内にて賣りし故升市とも稱す。此日神輿玉出島頓宮へ渡御あり、神官勅使宣命を讀み終つて相撲十番あり、犢鼻褌の上に注連を纏ひて力を角す。之を住吉相撲會とも稱せり。現今は神嘗祭の日、寶の市神事を執行すれども相撲の事は傳らず。尚此日大阪南地五花街の妓、市女笠を冠り古風なる美裝を凝し神事に詣り、其翌日同じ扮裝にて花街を練り歩く事あり。

【例句】

寶の市　住吉の市太夫殿へさらば〳〵　宗因（梅翁宗因發句集）

手作りの簑着て戻れ寶市　春蝶（田毎の日）

桝の市　（住吉にて）升買て分別かはる月見かな　芭蕉（芭蕉翁行狀記）

住吉の小升で量る俳諧師　支考（鳥の道）

十字架祭（中）

【季題解説】九月十四日。基督磔刑記念祭をいふ。（新）

【例句】

十字架祭　十字架のとはの血土に人む日かな　青々（倦鳥）

天王寺一乘會（晩）

【季題解説】陰暦九月十四日、或は十五日、大阪四天王寺六時堂に於て修する會式をいふ。此堂は傳教大師の草創にして、本尊は藥師如來・日光・月光の三尊、大師手造なりといふ。十五日未ノ刻樂僧三綱堂の司・樂人・沙汰人・堂仕・公人出仕す。先づ時刻を三綱及び和尚に告て、出仕の鐘一番二番を撞く、諸役人太子堂へ出仕す。太子の像を鳳輦に遷す。廻廊の下より六時堂へ渡御あり、諸儀悉く終りて酉の刻還御せらるゝといふ。

【例句】

天王寺一乘會　未來記のこれも一つや一乘會　淡々（[illegible]名集）

八幡放生會（中）　八幡祭　男山祭　石清水　八幡祭　南祭八幡放生會

放ち鳥　放ち龜

【[illegible]】［甸不］放生は、命祇也、八月十五夜の八幡の祭也、紀也。放生川にて有る

敎に本く也（一）

【年浪草】八幡祭、八月十五日處々に行有り。されども山城國男山の神事を以て京師の人八幡祭或は放生會といふ者是なり。社頭美豆の南八九町に在り、京を去ること四里許、男山石淸水と稱し、或は雄德山或は鳩の峯といふ。欽明天皇三十一年冬、肥後國菱形の池の邊、民家の兒三歳の時神託して曰、我は是人皇十六代譽田天皇也と。こゝに於て豐前宇佐宮に鎭座し、八幡と稱す。傳へ云ふ、貞觀元年秋七月、八幡太神鳩の峯に移る、初め紀行敎南都大安寺に住る、此の僧俗種武内大臣の裔也、曾て貞觀元年宇佐の神前に詣づ。一夏九旬晝は大乘經を讀き夜は密呪を誦す。一夕夢中に天神告げて云、師王城に歸らば我も又隨ひ行き、王城に居して當に皇祚を護るべしと。敎漸く山城國山崎に至る、其の夜又夢中に大神告げて曰、師我が居る所を見よと。覺めて之を見れば、則ち東南男山鳩の峯の上光を現す。敎之を奏して宮殿成ると。正殿三座中は八幡宮（應神）、東は氣長足姫尊（神功）、西は比咩大神（玉依）。後嵯峨天皇源氏を諸皇子に賜ふ時、八幡宮を以て氏神とし、此の社を以つて本朝第二の宗廟とし給ふ。每年八月十五日放生會あり、養老四年九月、征夷のことあり、大隅日向の兩國亂逆す。依て宇佐の宮に祈請せしめ給ふ。其の禰宜辛島勝婆豆米、神軍を率ゐて、彼國を征し、その敵を討つて利あり。大神託して曰、合戰の間、多く殺生を致す、宜く放生會を修すべしと、諸國の放生會爰に始まる。（世諺問答に曰、放生のいみじき事は、最勝王經長者子流水品の池魚の事より起るにや、誠に生けるを放つ御誓ひ難有かりし事共也。早日に猪の鼻を神輿下向せ給ふ時は、行幸の儀式に一音樂の雲を動かし、衣冠の裝ひ日に輝けり。それに引かへ、還幸の有樣は[illegible]人法師原に至る迄、白杖をつきて返らぬ道に從り來る儀式也。これぞこの朝に紅顏ありて、世路に誇れども、夕に白骨と成つて郊原に朽ちぬる事、世の有樣を示し給ふ御意の程測り難く、難有事ども也。是にて神佛の隔てなきを思ふべしと云々。

〔注〕（一）以下は[illegible]に於ける[illegible]なれば悉く下略したり、

【季題解説】 九月十五日（舊は陰暦八月十五日）山城國八幡町官幣大社石清水八幡宮の祭禮にして、養老四年九月異國襲來の時、大隅日向の兩國叛逆し、朝廷宇佐神宮に祈禱する所あり。其社の禰宜辛島勝代豆米、神軍を率ゐて敵を討ちて利あり。宇治大神託宣して曰く、合戰の間殺生すること多し、宜しく放生會を修すべしと、諸國の放生會は此託宣に起原す。現今は放生會の儀なしと雖、盛儀往古に劣らず。

【例句】

八幡放生會

日明しや生るを放つ神の庭　言水（言水句集）

海老稻も實入頃とや放生會　史邦（猿　舞　師）

松高し月夜烏も放生會　白雄（白雄句集）

山崎へ餘れる鳩や放生會　召波（春泥發句集）

耳無くも經聞く鳥や放生會　嘯山（葎亭句集）

放ち鳥

とくとく霞めとくとく霞め放ち鳥　一茶（七番日記）

放ち龜

されはとて脇へも行かず放し龜　同（同　）

【参考】 毎年九月十五日京都府（山城國）綴喜郡八幡町八幡莊、官幣大社石淸水八幡宮に於いて行ふ祭祀なり。一に八幡祭と云ひ、古くは放生會と稱せしが、明治元年神佛の混淆を嚴禁し、七月十九日以後、八幡宮の放生會を廢止せらるゝに及んで、稱呼を改めて、中秋祭と稱するに至る。放生會の儀は、毎年陰暦八月十五日に御神體を輦中に遷し奉り、神幸あり、左右の馬祭御馬に走を率、召使・官掌・外記・史・左右兵衞の府・弁・參議・上卿・左右衞府・上﨟・前駈等の人々、列を作りて絹屋敷に向ふ。神輿猪の鼻（坂）出崎を下りて宿院頓宮に到る間は、音樂を行ひて行幸の儀式に準じたり。石淸水の放生會は元と豐前宇佐郡の宇佐八幡より傳はるものにして、淸和天皇貞觀五年八月十五日に行はれたるをその初見とす。後ち村上天皇天曆二年に勅會となり、圓融天皇天延二年に朝廷の諸節會に準じ、後ち三條天皇延久二年に神幸を行幸の儀に準ぜられたり。然れども應仁亂後は久しく中絶し、靈元天皇の延寶七年に至りて再興したり。

神田明神祭（かんだみやうじんまつり）（中）

神田祭（かんだまつり）

【古書校註】

【諸國年中行事】 九月十五日、江戶神田明神まつり。二年に一度、子・寅・辰・午・申・戌の年なり。社領三十石、平の將門の靈をあがめし神なり。

【滑稽雜談】（上略二）社家者流の說に曰、神田社は大己貴命の鎭座とす、將門の社は本殿を去る事百步許。△或說云、神功皇后の廟ともいへり。當地の大祀なれば六月十五日の山王祭ある年は今日の祭禮なし。當社の神祭を行はるゝ年は六月の山王祭なし。凡そ子・寅・辰・午・申・戌の年は當社の祭侍る也。祭禮の規式多く山王祭に似たり。少し事そぎたり。神輿二基まします也。同十八日には神事能有り、四座の太夫の巡番にて之を勤む。

雨天には延引侍る。諸大名並町奉行等の棧敷を構ふ。町人百姓等は傳手を以て拜見す。猿樂に三公儀より下行を給ふと也。なほ尋ぬべし。

【俳諧歳時記】大巳貴命は人王四十五代聖武天皇天平二年鎭座也。將門の靈は六十一代朱雀帝天慶三年庚子年二月十四日將門滅亡す、其後怨靈屢々祟り有るに依つて、延久の頃、一遍上人三世眞敎坊、將門の靈を以て神田の神社に合せ祀る。當社初は今の神田橋の邊に在り、此所古の芝崎村也。今に至つて祭禮の日神輿を暫らく此所に留めて奉幣有り。祭禮九月十五日、糀町山王と隔年也。神輿二基、引山三十六本、踊屋臺・大神樂等之に從ふ。此の祭の練物に賴光大江山入の形狀を摸して二間餘の鬼神の頭を造り、臺にのせて、數人是を荷ふ(引山の外今は此等の事を止らる)。神事に預るの町、内神田・外神田・大傳馬町・濱町邊・日本橋・通り町、前後都合三十六町也。神幸の町々は夜宮より棧敷を構へ、種々の挑灯を出して、甚だ賑へり。神輿還御の町は本社より鎌倉町通り飯田町より田安御門に入り、上覽所前常盤橋・數寄屋橋より日本橋十軒店通筋違御門を過ぎて、本社へ還御也。大抵祭式山王祭に同じ。昔は神事能あり、今は無し。神主芝崎大隅守、社家五人巫女等あり。

【季題解説】

註 (一)平將門を祭れる由緒を記せり、今略す

九月十五日、東京神田明神の祭。これは隔年に大祭禮あり、昔時は甚盛んなりしものにて、産子の町數六十町、各出し、邌物に善美を盡す。例年出すものに、一番の鷄・二番の猿・三番の翁人形・四番の和藤内・六番の花籠・八番の關羽・九番の熊坂長範・十番の僧正坊牛若・十三番の二見浦・十六番の素盞嗚尊・十八番の稻穗に蝶・廿番の龍神・廿三番の大國神・廿四番の鶴ヶ岡放生會・廿七番の三條小鍛冶小狐・卅番の雉子・卅一番の武内宿禰・卅二番の仁田四郎・卅五番の惠比壽神等の出しありて壯麗人の目を驚せり。出しは何れも牛車にて曳く。此他、邌物・曳物の數多し。かゝる祭禮のありし翌年は「かげ祭」と稱し、飾物等あり。東都の

祭は六月十五日山王の祭を首とし、神田明神の祭之に亞ぐものなりしが、後年此事次第に衰微し、殊に大正の震災に灰燼に歸し、東都祭禮の花たりし神田祭の復舊難きに至れり。祭神は大貴巳尊と平將門の靈とを合せて二座とせしが、明治七年、大貴巳尊を本社の祭神とし、將門は反逆の臣なる故を以て、斥けて攝社に遷き、別に少彦名命を上總より迎へて之を祀る。

【例句】

神田祭

花すゝき大名衆を祭りかな　嵐雪（猿蓑）

花山車や動き出たる秋の山　成美（成美家集）

【參考】

神田明神祭　毎年九月十五日、東京府東京市神田區宮本町、府社神田明神に於いて行ふ祭なり。又神田祭とも稱す。官幣大社日枝神社の山王祭と隔年に執行するものにして、その規模の雄大、催し物の壯麗は、山王祭に亞ぎて關東屈指の祭禮たり。祭の前日十四日を宵祭と云ふ。是日ねりと稱して祭禮の勢揃あり。卽ち花車三十六番、行列を作りて近邊をねり歩き、櫻の馬場に集まるなり。商人は商を休みて店頭を飾り、棧敷を設け、賓客を迎へて饗應し、各町々には軒提燈を出し、神酒所を設く。又家臺踊・大神樂・住吉踊等の催物ありて、その賑ひ筆紙に盡し難し。十五日に至れば花車の道筋に於ける人馬の通行を禁じ、道の左右に竹矢來を廻らし、脇小路に柵を結ひ、未明に神輿・旗・榊及び花車一番より順を追うてねり出す。之を練込と云ふ。その道順は櫻の馬場を出發し、明神坂より筋違御門を入り、須田町通り鍋町より三河町、神田橋壕端を護持院原へ出で、九段坂を登り、田安御門より御曲輪内へ入るなり。此處より神輿・旗・榊等は行列を整へて、本町通りより京橋に至り、須田町に出で、昌平橋を渡り、明神坂を登りて本社へ還御あり、又花車等は大手前にかゝり常磐橋を出で群を亂して各町内へ歸るを例とす。

此の祭禮は、昔時本社が神田橋御門内（今の麹町區大手町大藏省内）にありし頃は、毎年竹橋より神輿を船に乘せ、小舟町神田屋庄右衞門といふ者の家の前にて下船し、それより陸地を通行せしが、元祿元年頃より城内を通御することゝなれり。又祭禮執行に就ても正德三年には、山王・根津・神田の三祭を三年に一度づゝ交替に行はしめしが、天和以後之を改めて、山王祭と隔年に行ふ事となれり。

岩倉祭（晩）　尻たゝき祭

【古書校註】

【年浪草】八所明神社洛北岩倉にあり。○雜談抄に曰、俗に岩倉の尻たゝき祭といひ、夜に入り神供を獻するに、一村の內新婦の女を選びて、婚禮の表衣を着して神供の器を頭に戴きて、神前に進み行き、一村の老若小き枝木をもて新婦の尻をうつ。新婦はうたれじとて走るを立廻りて打つ也。

故に尻たゝきといふ。

季題解説 陰暦九月十五日、京都の北長谷村の西岩倉の石座神社の祭禮をいふ。尻たゝき祭といふは、祭の夜に入り神供を奉るに、一村の内新婦を選みて婚禮の服を着せしめ、神供の器を頭に戴き、神前に進み行かしむ。一村の老若小さき枝木を持ち新婦の尻を打つに、新婦打れまじと走るを立廻りて打つなり。俗に岩倉の尻たゝき祭、又略して尻たゝきといふ。頗奇抜なる祭なりしが明治初年に廢絶せり。(古)

石上祭（いそのかみまつり）（中）

季題解説 九月十五日、大和國官幣大社石上神宮の祭禮にして、宮は布都御魂劒を祀り、延喜式内の名神大社にして官幣に預ること四度、相嘗・新嘗の祭に預り二十二社の一に列す。創始は神武天皇都を大和國橿原に定め給ふに當り、畿内に奉齋し給ひしに基き、崇神天皇の御宇、物部氏の祖伊香色雄ノ命勅を奉じて社を石上邑に遷し國家の鎭護とし給ふ。更に氏神として齋き祀りしに起原す。歴朝多く兵杖を納め、神庫を以て武庫とし、國に變亂あれば車駕を神宮に奉したる例もありき。蓋し國家の非常に備へ給ひしなりといふ。明治四年官幣大社に列したり。

勸學會（くわんがくゑ）（晩）

季題解説 陰暦三月及九月の各十五日、天臺の學徒、大學寮の諸生等法華經を誦し、又經中の一句を以て題とし詩歌を作りし會をいふ。村上帝の應和四年（康保元年甲子）江州比叡山西坂本の寺院に行はれ、後、京都三條雀の森に勸學院（後に四條大宮西に移る）を設けこゝに開かる。(古) 參照 春―勸學會（はるのくわんがくゑ）

例句

勸學會

秋更し聲共聞けし勸學會　麥水（樗庵麥水發句集）
諸着離れて霧をもみぢを勸學會　青々（倦鳥）
秋風きゝ月を見諸法實相義　同（同）
宮に藥居に誦する法華を勸學會　同（同）

伊勢御遷宮（いせごせんぐう）（晩）　御遷宮（ごせんぐう）

古書校註

【年浪草】九月。紀事に曰、凡そ大社造替毎に陣の義ありて日時を定める。勅使あり。伊勢太神宮・春日の社ともに廿一年を經る時は必ず造替あり。遷宮の時納むる所の神寶、行事官調進す。此の月伊勢參宮の人多く京師を出て十六日の御祭會併に御遷宮に會はんとす。凡そ參宮の人、先づ靈山の國阿の像に詣でて其の杖履を拜戴す。相傳ふ、國阿甚だ太神宮を信じ

時々木履を着け、桂杖を携へて參詣をなす。終に行路の難なし。故にこれに倣はんと欲して平安を祈る也云々。廿一年毎に遷宮あるが故に十五年に至る時、木引の事あり、三年にして木引成つて又三年木揃の事有り。材木は木曾山併に紀州大杉山より出す。（）内宮御鎭座は垂仁天皇二十五年三月、外宮は内宮御鎭座の後四百八十四年を經て雄略天皇の御宇垂跡なり。

季題解説　伊勢太神宮、春日の社、廿一年を經るときは必造替の御儀あり（二十一年毎に遷宮あるが故に、十五年目に至るとき木引の事あり。三年にして木引成て、又三年木揃へのことあり。材木は木曾山並に紀州大杉山より出づ）遷宮の時納むるところの神寶行事官調進す。此月伊勢參宮の人多く京師を出でゝ九月十六日の御祭會並に御遷宮に會はんとするなり。

實作注意　遷宮の日は昔は内宮は九月十五日、外宮は同月十四日なりしも、近古以來此日に限らず、豫め卜して日を定めたり。芭蕉は元祿二年奧の細道の旅を終り此遷宮を拜せんと伊勢に赴きたり。奧の細道の末文に「旅のものうさもいまだやまざるに、長月六日になれば、伊勢の遷宮拜まんと、又舟にのりて、蛤のふたみにわかれゆく秋ぞ」とあり。此年の遷宮は、内宮は九月十日外宮は九月十三日なりしが芭蕉は内宮の御遷宮には間に合はざりしが如し、即ち芭蕉翁發句集に「内宮はことをさまりて、外宮の遷宮拜み奉りて、――尊さに皆押し合ひぬ御遷宮　芭蕉」とあり。

例句

伊勢御遷宮
尊さに皆押あひぬ御遷宮　芭蕉（雜談集）

九月朔日伊勢御遷宮
今朝の廻はつ日に似たる御遷宮　白雄（白雄句集）

同四日
奏運ぶ神寶さぞ御遷宮　同（同）

文政午年九月神寶の伊勢に下りし　二句
御遷宮たゞ〳〵青き深空かな　鳳朗（鳳朗發句集）
太々や蒼人草を唐錦　同（同）

參考　遷宮とは宮又は社の神座を遷し奉る事にして、或は之を遷座とも云ふ。凡そ遷宮には正遷宮と權殿遷宮との二種あり。正遷宮とは新に神殿を造替して、舊殿又は權殿より之に移るを云ひ、權殿遷宮とは造宮の間假殿に遷座するを云ふ。權殿遷宮は一に假遷宮と稱し、又外遷宮とも書せり。古來各神社の遷宮は、其の社例に據りて之を行へり。而して諸社中其の儀式の盛大且つ完備せるものは、伊勢大神宮なり。伊勢大神宮の遷宮は、二十箇年目に一度、正殿を改造して行はれ、之を式年遷宮と云ひ、或は火災等の異變に據りて式年以前に行はるるを臨時遷宮と云ふ。又式日と稱して月日にも一定の期限あり。即ち宮殿を裝束するには、皇太神宮は九月十五日を用ひ、豐受大神宮は同十四日を用ひ、御靈代を遷し奉るには各々其の翌日を用ふるが如し。遷宮以前に諸種の祭式あり。

即ち遷宮前三年に山口(ヤマグチ)・木本(コノモト)の二祭あり。山口祭は御杣(ミソマ)の山口の神を祭り、木本祭は心御柱を造るために、木本の神を祭るなり。前一年、地曳・心御柱・杵築等の祭あり。地曳祭・心御柱祭は宮地を鎮祭し、心御柱を樹立し、杵築祭は宮地を築き堅むる祭なり。當年には御船代・後鎮等の祭あり。御船代祭は御船代の材料を採り、後鎮祭は造宮竣功の祭なり。其他なほ諸祭あり。凡そ工事を起さんとするには、まづ造宮使を命じて造宮の庶事を管せしめ、又神寶使を命じて神寶裝束を調備せしめ、奉遷使を命じて御體遷御の事を掌らしむ。而して神寶使發遣の日は、古來朝廷にて多く廢務と稱して、天皇以下一般官吏は謹愼の意を表して政務を執行せざりき。此の御遷宮は、初め豐受大神宮を、皇大神宮の二年後に執行する例なりしが、永祿・天正の比より同年に式を擧行せり。又寛正以後は式日に一定の期限なく、豫め日時を卜することゝなり、漸次に正遷宮の擧式も不能となりて、遂には假殿遷宮のみを行ひしが天正十三年に至り漸く復舊したり。

岡崎祭(をかざきまつり)（晩）

季題解説 陰暦九月十六日、京都の東、岡崎神社の祭禮をいふ。此社は一に東天王の社といひ、吉田山の麓にあるを西天王の社といふ。神輿一基、鉾七本あり。神輿に先だつて行く。是を鉾をまつるといふ。其内一本の鉾劍・鐔の上に泥塑にて鷹・連・獵犬一疋を造り、彩色を施す。これを犬鷹鉾といふ。村人神寶と稱してこれを崇む。現今は十月十六日に神輿一基動座、鉾八本にて、犬鷹鉾も其中にあり。大太鼓を牛に牽かせて先驅するが奇拔なり。

例句
岡崎祭　岡崎の祭を語れ月の友　東以（狂舞師）

惠比須祭(ゑびすまつり)（晩）

季題解説 陰暦九月十六日、京都の建仁寺の門前なる惠美須神社の祭禮あり。昔建仁寺の榮西禪師宋より歸國の途船中暴風の難あり。たまたま蛭子の像波濤に隨つて漂ふものあり。榮西これを收めて祭るに風止み波靜まりて恙なきことを得たり。榮西寺に歸りて社を建つ。今の夷の宮是なりといふ。今に至りて西海に赴く人此社に詣で風波の難無からん事を祈るなり。現今は五月十六日例祭にして、鳳輦神幸あるなり。

伏見三栖祭(ふしみみすまつり)（晩）　炬火祭(たいまつまつり)

季題解説 陰暦九月十六日、京都府伏見三栖神社の祭禮をいふ。此祭は大炬火を出す事と、印地とにより有名なり。現今は十月十二日御出、十六日還幸祭とて神輿一基動座あり。氏子直徑三

尺乃至四尺の大炬火一對を作りて點火し、附近を二町半ばかり舁き行き次に神輿を舁く事は今昔同じなり。俗に炬火祭とも云ふ。

野の宮の別（晩）　桂川の御祓　別の御櫛　齋宮群行

古書校註

【御傘】野の宮。嵯峨に在り、賀茂にも在り。皆神祇也、名所也。何れにても出がちに一座に一句也。野の宮の別、秋也。御祓も秋也。（下略二）

【年浪草】九月。野の宮、山城國葛野郡小倉山の下椿原に在り。古伊勢の齋宮初め先づ此所に栖み給ふ。故に伊勢太神宮を勸請す。此の地嵯峨野也、故に野の宮と稱す。○神祇式に曰、凡そ齋宮の親王定め畢りて宮城の内便りよき所を卜して初齋院とし祓禊して則ち入る。明年七月に至って、此の院に齋す。更に城外の淨野を卜し、野宮を造り、八月上旬吉日を卜定して、河に臨みて祓禊し、即ち野宮に入る。○野の宮の別と申すは齋宮爰に籠らせ給ひて三年目の九月、伊勢へ御越しある時に、時の天子へ御暇乞に參内し給ふ也。此の時天子御手づから由豆の爪櫛を齋宮の御頭へさし給ふと也。之を別れの櫛と申すとかや。是よりして伊勢齋宮に移り給ふ也。故に野の宮の別と申す也。

註（一）以下專ら去嫌に關することのみなれば今略す。

季題解説　京都嵯峨小倉山の下椿原に、古へ伊勢の齋宮始めて棲み給ふにより伊勢太神宮を勸請す。即ち嵯峨野にして野の宮と稱す。齋宮玆に籠らせ給ひて三年目の秋九月十七日伊勢へ參らせ給ふ時、天子、御暇乞に參内し給ふなり。此時天子御手づから由豆の爪櫛を齋宮の御頭へ挿し給ふ。これを別の櫛といふ。故に野の宮の別と申すなりといふ。又其前日桂川に於て祓禊を修するを桂川の御祓といふ。（古）

例句

野の宮に別れの君の寢覺哉　青々（妻木）

參考　齋宮野宮を出で丶參内あらせられ、別れを天皇に告げ給ひて、伊勢神宮に向はせらる丶御儀を云ふ。齋宮とは、伊勢大神宮に御奉仕あらせらる丶皇女、又は女王の稱にして、之をイツキノミヤと訓ず。又齋内親王と稱し、略して齋王と云ひ、古くは天照大神の御杖代とも云へり。凡そ齋宮には未婚の皇女を卜定し、その由を大神宮に告げて宮城内便宜の御所に移す、之を初齋院と云ふ其の後ち城外の淨地を卜して新宮を造る、之を野宮と云ふ、明年八月、初齋院より野宮に移り給ふに當りて、先づ鴨川又は桂河に臨みて祓禊の儀を行はる。野宮に移り給ひてよりは、朔日毎に齋殿に入り、大神宮を遙拜し、禊齋すること三年の後其の九月上旬、吉日を擇びて初めて伊勢大神宮に向ひ給ふ、之を齋宮群行と云ふ。是日天皇大極殿に出御あり、中臣を召して宣命を賜ひ、齋宮を侍らしめて例幣を奉る由を

大神宮に由告せしめ、齋宮を召して親ら櫛を額に加へ給ふ、之を別の御櫛と云ふ。尋いで輿を裝ひてその途に就かしむ。是より先き齋宮寮の官人を補任し、裝束使・監送使等の臨時諸官を補して旅裝を整へしめ、又五畿七道に使を遣はして大祓を行はしめ、近江・伊勢の兩國司をして頓宮を造らしむ、九月一日より三十日迄一ケ月を齋月とし、近畿諸國をして擧哀し・改葬することを禁ぜしむ。齋宮、群行の途に就かせ給ふや百官京城外まで之を奉送す。その路次は禊を修し、樂を奏す、その行裝最も壯嚴を極めたり。

齋宮は、崇神天皇六年に、皇女豐鍬入姬命をして天照大神を倭の笠縫邑に祭らしめ給ひしより始まり、爾來屢々間斷ありしも、未だ絕ゆるに至らざりき。然るに建武三年八月、後醍醐天皇の皇女祥子內親王の御退下以後全く廢絕したり。

穴織祭（晩）　吳服祭　神衣祭

古書校註

【年浪草】「穴織祭」穴織神社、攝州豐島郡池田村民家の山上に在り、綾羽大明神と號す。○攝陽群談に穴織・吳服の兩社、其の間僅に十町許と云々。○日本紀に曰、應神天皇十四年春二月百濟王縫女二人を貢す、眞毛津といふ。是今來目の衣縫の始祖也。○同三十七年春二月戊午朔、阿知の使主・都賀の使主を吳に遣はして縫工女を求めしむ。爰に阿知の使主等高麗國に渡り吳に達せんと欲し則ち高麗に至りて更に道路を知らず道を知る者を高麗に乞ふ。高麗王乃ち久禮波・久禮志二人を副へて導者とす。之によつて吳に通ずる事を得たり。吳の王・工女兄媛・弟媛・吳織・穴織の四婦女を與ふ。○又四十一年春二月甲午朔、阿知の使主等、吳より筑紫に至るの時、胸形大神工女等を乞ふ。故に兄媛を以て胸形大神に奉る、是今筑紫の國に在る御使君の祖也。既にして其三女婦を率ゐて津國に至る。武庫に及んで天皇崩ず。行くに及はず、即ち大鷦鷯の尊に獻る。此の女人等の後、今吳の衣縫・蚊屋の衣縫是也云々。本邦是より裁縫の道を知れり。仁德天皇七十六年戊子九月十七日に至りて、縫媛二人共去り給ひて、終に之をいはひ祭り、縫殿寮の神となす。每年九月十七日・十八日を穴織・吳織兩社の祭事とし、和衣荒布の神供を備へ神衣祭と稱す。「吳服祭」吳服神社、攝州豐島郡池田村の田圃の中に在り、吳服大明神と號す。例祭九月十八日。○社家の略說に曰、神功皇后三韓征伐し給ひて、萬國我が朝に隨ひて國民豐饒也。應神天皇三年春二月皇后悔い給ひて曰、吾が朝神代の始より蠶の絲採り、麻を植ゑて苧を求め、絹布と成すといへども、裁縫服を作るの始を知らず人をして吳國より衣縫媛を求めんと也。即ち阿知の使主・都加使主を遣はすと云々。

季題解說　陰曆九月十七、十八兩日、攝津國池田町、穴織社、吳服社の祭

典にして、呉服祭とも、神衣祭とも云ふ。高麗より來朝したる織女・漢織(アヤハトリ)・呉織(クレハトリ)を祀る。仁德天皇七十六年、これを祝ひ祭りたまひしものなりと云ふ。

例句

穴織祭　秋もはやくれはあやはの祭かな　寫　涼　(發　書)

呉服祭　きりはたりてうさやようさや呉服祭　太　祇　(太祇句選)

媳連て呉服祭を示しけり　嘯　山　(葎亭句集)

霧島祭(きりしままつり)（中）

季題解説　九月十九日、大隅國官幣大社霧島神宮の大祭にして、祭神は瓊瓊杵尊なり。延喜式内の名神大社にして明治七年官幣大社に列す。天孫降臨の際山嶺霧深くして晝夜を辨せず、土民の教へに從ひ稻千穗を拔き取り籾となして打撒き給ひしかば忽晴れ日輝く故に高千穗峰の名あり。十一月十一日特殊神事として撒籾の事あるも由來をこゝに發すといふ。

八幡花の頭(やはたはなのとう)（晩）

季題解説　陰曆九月廿日、山城國八幡山の社僧、花の頭を修す。先づ六月より撰みはじめて花臺を造る。これを地盤剝といふ。我俗板を割るを片(ヘグ)といひ、又剝といふ。是板を剝て臺を製するの義なり。花の頭とは社僧の弟子髮を剃り衆僧の列に加はるのとき、彩箋(色紙)を以て草花を製し、臺を神前の廻廊に飾り、山の僧徒を饗應し、當年の頭人より盃を捧ぐ、僧は抱頭巾を着し、花の頭をかけ、早歌、踊を爲す故にいふ。後世は九月下旬日不定に行ひしが現今は廢絶せり。（古）

城南祭(じやうなんまつり)（晩）　城南神祭(じやうなんじんまつり)・城南寺祭(じやうなんじまつり)

古書校註

【滑稽雜談】九月二十日。△兩說(一)未だ是非を決し難し。古來より鳥羽院の靈を合せ祀るならし。疑ふらくは外に侍る八幡宮と稱する社、鳥羽院の靈社にて有るべきにや。當所の神事には殊の外餅・飯等强く饗する也。昔は客に手杵を腰に三本五本乃至七八本も帶させて、一本つゝ之を拔かしめけるとなん。故に尋常飽食せるを城南神祭と俗にいへり。

註（一）祭神を鳥羽院とする說と、二十二社の内の七社とする說とをさせり。

季題解説　陰曆九月廿日、山城國鳥羽の城南神社の祭禮をいふ。此地人皇七十四代鳥羽上皇の離宮にして、王城の南たる故に城南の離宮といへり。祭神は天皇なり。祭る所二十二社の内七社なり。伊勢・石淸水・松尾・稻荷・賀茂上下・平野・春日以上城南神と號す。祭には村の家々皆餅を搗き客に强ひて食せしむ。昔は客に手杵を腰に三本五本乃至七八本も帶させ、餅飯の腹に充滿するに隨つて一本宛拔かせしと

いふ。腹に饂食するを俗に城南祭といふは是より出づ。現今は、十月二十日、神輿上鳥羽・竹田村の若中の手に渡御あり。荒々しき祭にて、俗に血祭と言はる。

例句

城南祭

腹あしき僧も餅食へ城南神　蕪村（遺林集）

菊の句を柱にかくや城南神　青々（妻木）

繁昌祭（はんじやうまつり）

古書校註

【山之井】半女祭。下京に一町此のまつりを勤め侍る。半女桃とて名を得たる桃もこゝより出で侍る事とぞ。

【滑稽雑談】九月廿日（雍州府志に曰、繁昌宮五條の北高辻にあり。元針才女を祭る所にして實は辨財天也。針才女と繁昌と倭語相近し。よつて謬り傳ふる者也。然れども今却つて繁昌の字について男女參詣し、子孫の繁榮を祈る。故に社司の米錢を取ること針才女を祭る時に倍す。）ム昔は七月廿日なりしを中比より九月とせり。當町を限つて神事をなす。

季題解説

此祭事はもと陰暦九月二十日、京都高辻室町西入る婆利女祭を言へり。宇治拾遺物語に昔其地に長門前司といへる人住まひ、其女二十七八歳にして死し、これを鳥邊野に葬らんとするとき車上の棺なし。驚きて家に歸るに其女の戸口に打臥すを見、再び棺に入れ車に上すに又棺なくして元の戸口に居り、更に舁き入れんとするも屍體動かざれば、遂に戸口の床板を取つて埋めんとするに、まことに輕く成りしを以て遂に其所を塚とせしが、其塚の上にいつしか社の出來し由を傳へ記しあり。然るに此社は辨才天、或は針才女（婆利女ともいふ、婆利女とは牛頭天王の娶り給へる婆竭羅龍王の三女の名なり）の社と誤解せられ、此針才女は後又繁昌と轉訛して今は繁昌社と稱せられ、これが爲め子孫繁昌を祈る男女參詣者多くなりしといふ。

現今は五月二十日夜半此祭を行ふ。然れども古來秋に用ひられしものなればここに再出す。【參照】夏　婆利女祭

秋彼岸（あきひがん）（中）

秋彼岸會（あきひがんゑ）　後の彼岸（のちのひがん）　中日（ちうにち）

古書校註

【年浪草】春秋の彼岸はこの節晝夜等分にして長短なし。佛法は中道を崇ぶ。此の時節誠に中道の時也、故に佛事を修す。又提謂經並に淨土三昧經に、八王日に善を修すること出でたり。八王日は即ち彼岸の節に當る、所謂八王日とは立春・春分・立夏・夏至・立秋・秋分・立冬・冬至是也。天地の諸神陰陽交代する時也。此の日梵天・帝釋・鎭臣三十二人、司命・司祿・閻魔大

王全使者悉く出でて四方を巡り見、人民の善惡を校へ錄すと云へり。故に善事を修すべき也。又善導大師の觀經疏に云、念佛して西方往生の願行をなすには冬夏の兩時を取らず、春秋の二節をとる、其の故は仲春（二月）仲秋（八月）の兩時は正東より日出でて眞西に沒す。彌陀の國眞西日沒の所に當る、故に彌陀の在所を衆生に正しく指示して往生を遂げしむる也。

季題解說 秋分前後七日間をいふ。大抵九月二十一・二日に入り、二十六・七日に明く。春の彼岸に對してかくいふなり。**參照** 春―彼岸ヒガン

例句

秋彼岸

彼岸櫻秋は月こそ西にあれ　宗因（梅翁宗因發句集）

風もなき秋の彼岸の綿帽子　鬼貫（鬼貫句選）

傘をかたげて秋の彼岸かな　青流（住吉物語）

きら〳〵と秋の彼岸の椿かな　木導（韻塞）

比丘鉢の蠅に紛るゝ彼岸かな　游刀（初蟬）

唐秬を擔げて通る彼岸かな　春亭（西華集）

彼岸とて笑むやお寺の木綿畑　也有（蘿葉集）

藪寺の鳩に豆蒔く彼岸かな　士朗（枇杷園句集）

山吹の歸花見る彼岸かな　子規（子規句集）

淀祭（晩）

季題解說 淀祭は二所あり。一は大荒木祭にして、一は淀姫明神祭なり。大荒木祭は陰曆九月廿二日、山城國紀伊郡淀の厝、淀小橋の東河中にある伊勢向の神社の祭禮をいふ。祭神は天逆向津姫尊なり。現今は移轉して其祭も衰微に歸せりといふ。淀姫明神祭は同じく陰曆九月二十二日、淀小橋乾水垂にある淀姫社の祭禮をいふ。淀姫神は神功皇后の御妹にして、千觀法師肥前國佐賀郡淀姫の神を爰に勸請せしと傳ふ。今淀姫といひ實は豐玉姫、高皇產靈神、速秋津姫を祀れり。村人は淀姫明神祭を淀姫とよぶ。昔は神輿一基淀堤を神幸し、還御の時道狹きを以て行列を立替難く、後を先へ振かはりて同じ堤を歸るなり。故に後が先になる淀祭といふ諺もあり。此淀姫社は明治後に淀城址に移轉せられ、現今は十月二十三日に神輿三基、淀堤を乙訓郡大下津村旅所へ動座せられ、還幸は今も後が先に振かはる例なりといふ。

秋季皇靈祭（中）

季題解說 九月二十三日。又は二十四日、即ち秋分の日に行はるゝ大祭にして、春季皇靈祭と同主旨によりて執行せらる。**參照** 春―春季皇靈祭シュンキクワウレイサイ

【例句】 秋季皇靈祭

仲村の晴るゝ國旗や皇靈祭　曉翠

【參考】 毎年九月秋分の日（二十三日若くは二十四日）宮中皇靈殿に於いて天皇親ら行はせ給ふ御祭典なり。皇靈祭とは言ふまでもなく、神武天皇以下歷代天皇の皇靈を祀り給ふ御祭儀なり。御祭典の執行に當りて先づ御殿の裝飾を爲し、大眞賢木を御門の左右に建つ。宮內の官員等着席し、次に御殿の御扉を開く。此の間奏樂あり。次に神饌御幣物を供ふ。畢りて御內陣に御座を設く。時刻到りて天皇出御あらせらる。親王・內大臣・宮內大臣以下等供奉す。天皇御束帶を着御、御手水の後ち、皇靈殿に進ませ給ひ、御帳の內に入御あらせらる。先づ御玉串を奉りて御拜あらせられ、御告文を奏せさせ給ふ。畢りて入御あらせらる。次に皇后・皇太子・皇太子妃の御拜あり、次に親王以下宮內官員の拜禮あり。畢りて神饌・御幣物を撤し、御扉を閉めて御祭典を畢る。

皇靈祭は、明治二年六月二十八日、明治天皇百官群臣を率ゐて神祇官に行幸ましまし、天神・地祇及び歷代の皇靈を御親祭ありて、遂に神祇官中に神殿を建て給ひてより十二月十七日に、八神及び天神地祇と共に歷代の皇靈を此神殿に鎭祭し給ひしを以つて初とす。明治四年九月十四日、皇靈を賢所に移して御同殿となし給ふ。當時賢所は宮中山里の內庭に在りしが、明治六年皇居炎上の後ち、赤坂の假皇居に遷らせ給ひし時共に御遷座あり、後ち明治十年に至り、歷代天皇の皇靈の外に、新に皇后・皇親の神靈をも皇靈殿に合祀せしめ給ひ、又十八年後に尊號を上れる天皇の皇靈をも合祀せしめ給ふ。二十二年皇居を今の宮城に遷させ給ふにより、皇靈殿も亦今の賢所の地に鎭座し給へり。

逆髪祭（一）　關明神祭　關祭

【古書校註】【年浪草】社說に云、江州滋賀郡琵琶湖の南相坂、關の清水大明神は延喜第四の皇子蟬丸の宮也。然るに双眼閉目なる故に、勅宣によつて延喜廿二年壬午春三月、公卿太夫蟬丸を供奉して相坂山に在遷し奉り、各淚雨を滴てゝ歸る。殘り留る人は白川の紀の則長・共綱・吉屋の美女・師輔なり。宮室を草創して漫春秋を送り給ふ。造次顚沛にも口には和歌唐詩を吟詠し、行住座臥にも手には琵琶金石を清弄す。爰に於て姉の宮深く蟬丸を慕ひ、密かに禁裏を出でて、相坂山を訪ね、蟬丸と共に花晨月夕を清賞し、姉宮は旅羇の山岸川陸を彷徨して雲鬢霧鬟に浴し風に梳り綠髮顚倒す。國人御名を號して逆髮といふ。あゝ命なる哉、蟬丸天慶九年丙午九月廿四日寶壽齡三十一にして聖容覽に東岱の雲に隱れ給ふ。故に例年九月廿四日の祭禮今に於て怠ることとなし。姉宮薨去の後蟬丸と共に同一社に祭祀して二に兩般なし。

【俳諧歲時記】　馬琴云、此の說（一）妄誕甚しと云ふべし。蟬丸を延喜帝の皇子と云ふこと更に證據なきこと也。縱令延喜の皇子たりとも罪なくして爭でか逢坂山に捨て給ふことやある。殊更盲ひ給へる皇子ならばわきて愛しみ給ふべき事なるを、謂れなく追亡し給はんや。世俗の諺にも延喜の聖代とて、めでたき例にも云ふなるを、斯かる不仁の行は田夫野人といへども爲すに忍びざる所也。又蟬丸を盲人と云ふ說も覺束なし。如何にとなれば相坂山の歌の詞書に、往來の人を見てよめるとあるをも思ふべし。盲人の詞書に見ると云ふことは書く可らず。蟬丸は延喜の皇子にも非ず、相坂山の邊りに庵を引結びたる淸雅の世捨人にこそあらめ。又逆髮の女王の事益々跡なし事也。愚按ずるに、逆上は坂上の誤なるべし。寺門の說に云、（二）江州逢坂山關の明神二所、一所は坂上に在り、一所は坂下に在りと。もと坂上の社など云ひしを、誤りて種々の說を設けたるならん。又云、二所共に道祖神を祭り以て關所の鎭守とす。朱雀院の御宇蟬丸の靈を當社に合せ祭る。依つて土俗蟬丸の社と稱す。下の社の前に井あり、關の淸水と名く、淸水明神と號す、祭禮九月廿四日、上下の社同日也。神輿二基。此の說先づおだやか也。

【栞草】　水戶學士の一說に、唐の南朝元帝の諱を延基といへり。延基の三男纔維の時より瘂にてその上聲ひたれば、逢に是を相關といふ所に捨給ふ。この子の名を彈兒といふはいかんとなれば、幼年より瑟をよく彈ぜり。故にかくつけし也。今この事より日本の蟬丸の事を考ふるに、延喜と延基とキの音同じ。彈と蟬と字の形相似たり。又相關と相坂の關も相似たり。又延喜の御子を捨給ふと彼是同意也。彈兒の事は古史考卷の三十一にみえたりと云々。（三）

註　（一）年浪草に載する社說。（二）寺門の說も亦年浪草に見ゆ。（三）此說出所を知らず、附會の說ならざるか、疑ふべし。蟬丸は宇多天皇の皇子敦實親王の雜色なりと云ふ正說なり。

季題解說　陰曆九月二十四日、近江國逢坂山、關明神の祭禮をいふ。此明神は有名なる關の淸水あるを以て淸水明神ともいひ、延喜帝の御子蟬丸宮及その姉宮逆髮宮を合祀すとも傳ふ。土俗これを蟬丸宮といふ。

天滿流鏑馬（晩）

古書校註

【難波鑑】　天滿流鏑矢馬、九月廿五日。この日天神の御神事也。則ちやぶさめあり。是は天滿天神の門の前に茶屋あり。茶屋のあるじの式として年每之を勤む。まづ七日以前より拜殿に荒薦を敷きて通夜致し、精進潔齋してその日に至れば新しき直衣・袴に袖括り、赤き鉢卷して飾りたる馬に乘り、弓と鏑矢を左右の手にとり、社壇を乘りめぐる事三度、それより逸散に馳出し、宮の前濱手九町を三反乘返す間に、六所に角の的を立て、是を射る也。手綱をもとらず、手を放ちて、弓射る間逸足かくる馬を、遂に落

ちざる事はこの天神の御はからひといと鎮し。

【季題解説】陰暦九月廿五日、大阪天満宮に於て流鏑馬あり。社家これを勤む。昔は鳥居の邊より天満橋にいたり、馬を馳て的を射たりしが、現今は市街發展して當時の如くには行はれず。僅かに其遺風の一端を存するのみとなれり。

【例句】天満宮流鏑馬　流鏑馬に貝並べたる茶店哉　來山（高名集）

松風會（晩）

【季題解説】陰暦九月廿六日、「清水の茶店に遊ぶ。松風の軒をめぐりて秋くれぬ」芭蕉」を記念する會にて、清水の浮瀬にて年々つとめたるもの。今は浮瀬の廃絶と共に絶えたり。（古）

【例句】松風會　浮瀬のあと人とはず松風會　青々（[illegible]）

日前國懸祭（中）

【季題解説】九月二十六日、紀伊國海草郡、日前・國懸兩神宮の祭あり。日前の宮は三種の神器の御鏡に先だちて作らしめたまひし神鏡を御靈代となし、石凝姥命・思兼命を相殿とす。國懸の宮は天日矛を御靈代とし、玉祖命を相殿とす。初め毛見郷に鎭まりましましを、垂仁天皇十六年、今の地に遷し奉れり。共に官幣大社にして、日前・國懸の二殿一所にあり、日前國懸宮と併稱す。紀伊國一の宮なり。

吉野祭（中）

【季題解説】九月二十七日、大和國吉野山官幣大社吉野神宮の例祭にして、後醍醐天皇を奉祀す。始め天皇吉野に崩じ給ふや、藏王堂の東北塔尾陵に葬り奉り、後尊影を吉水院に奉安し、春秋祭祀の禮を行へり。明治七年吉水神社（村社）と改む。同二十五年吉野山に社殿を創建し吉野宮と稱し、官幣中社に列し、三十四年大社に昇格、大正七年吉野神宮と改稱せらる。

鳴瀧祭（晩）　福王子祭　哭器洗ひ祭

【季題解説】陰暦九月廿八日、京都仁和寺の西北鳴瀧なる福王子社の祭禮をいふ。宮は光孝天皇の皇后班子女王（仁和寺第一世宇多天皇の御實母）を祀る。されば仁和寺の鎭守の神にて附近の地主の神なれば、此祭と仁和寺との關係は可成り密接のものあり。又昔は京中祭禮の最終なりしより哭器洗ひ祭といはれたり。

現今は十月十八日祭禮あり。神輿一基、鉾六本ありて、此神輿は仁和寺より賜はりしものにて普通の神輿とは其形式を異にす。鉾六本の内一本は毎年仁和寺より出る幸の鉾にて世に尊ぶべき珍寶なり。又獅子も今より二十年前迄は列に加はりしが仁和寺の國寶となりしより其事なし。

住吉の神送（晩） 御菅の祓 北祭

古書校註

【年浪草】九月晦日、住吉の神輿玉手島假宮へ渡御禊事を修す。是を御菅の祓といふ。祝詞あり、稱して北祭といふ。出雲石といふ所にて禰宜出雲を遙拜す。是を俗に神送といふ。今日四天王寺石鳥居にも亦神送あり、大坂神社處々今日神送の神事有り。

季語解説

陰曆九月晦日、攝津住吉の神輿、玉出島の假殿へ渡御、祓を修す。これを住吉の御菅の祓といふ。又北祭と稱す。出雲石といふ所にて禰宜出雲の方を遙に拜む。これを神送といふ。此日四天王寺石の鳥居の邊にもまた神送りあり。大阪所々の神社も又神送りの神事あり。

例句

住吉の神送
神送り海の果見て戻りけり　盧錐（生駒堂）
鰻釣て住吉祭る人もなし　燈外（同）
松原や神も名殘のきり〴〵す　之道（島の松原）

例幣（晩）

古書校註

【滑稽雑談】延喜式（太政官式）に曰、凡そ九月十一日、八省院に行幸せられ、幣を伊勢大神宮に奉らる。其の使者は、太政官豫め五位已上の王四人を點し卜定す。（古食者一人を用う）大臣奏聞し、宣命を使王に授けらる。（略）○後醍醐年中行事に云、十一日、例幣行幸、出御ある、常のごとし、幣使・神祇官（異本にあり）東門を出で、二條の大宮に至る程に御座を立せ給ふ。（略）□按に例幣は朱雀院の天慶年中より始る。當代に至つて行幸の儀式も絕えて、日より禁中も神事行はれて、當時神祇官なれば、十一日吉田齋場所へ勅使を立てられて幣物の祓など侍り、祭主某伊勢に發遣して事を行はるゝよし。

【年浪草】凡そ九月朔日より今十一日に至りて伊勢例幣の諸家、門前の閾に注連を引き、門外に標木を建て、僧尼幷に輕重服の輩門內へ入る事を許さざるの字を記す。之を前齋と云ふ。今十一日の朝幣使發遣の儀式ほど諸書に載す、之を略す。○公事根源に曰、例幣とは伊勢太神宮へ御幣を奉らせ給ふ。每年の御事なるによりて例幣と申す也。○續日本紀、孝德天皇天

平中始めて伊勢太神宮へ幣帛使を制せらる。詔して、今より以後中臣朝臣をさして、他姓の人を用ふることを得されと命じ給ふ。依つて大中臣（藤浪家）祭主として之を掌る。吉田最上所を神祇官代とする也。

季題解説 毎年神嘗祭の前に伊勢太神宮へ、朝廷より恒例の奉幣使を發遣さるゝ御儀をいふ。毎年の恒例なるより神嘗祭の奉幣を特に例幣といへり。十月四日勅使出發の日と定まり、當日發遣の御傳を宮中鳳凰の間にて行はる。古へは九月十一日御儀あり。使者は諸王を以て之に充てられ、伊勢の使ともいへり。現今は昔時より御儀簡單になりて例幣の稱呼は行はれず。

北野瑞饋祭（中）　豐年祭　瑞饋神輿

季題解説 十月四日、京都北野神社の祭典をいふ。古昔は毎年九月四日、西の京に住まへる神社の社家、各自作れる新穀菜蔬果實を盛りて、これに草花を挿し神社に獻じ以て五穀成就の報賽とせるを始めとす、これを瑞饋祭と稱せり。後幾多の變遷あり、慶長十二年には葱花輦形を造り、瑞饋の音に縁ありとて芋莖を以て屋根を葺き、これを瑞饋御輿と稱せしが後廢せられ、明治二十三年に再興せられて毎年十月四日神幸御旅の後より巡行することに成れり。因に瑞饋御輿は所々の町にて奉造せられしが、元祿十五年居るは西の京のみなり。形も始めは八角の葱花輦形なりしが、現今行はれ六角の鳳輦形となり、後享和二年に現今の如き四方千木形に改まれり。其構造も瑞饋祭の御供より起りし事とて、轅・骨子もへぎ胴臺・框は木製なるが、屋蓋は元より柱より瓔珞まで菜果にて豆穀を貼接し、人物鳥花獸介を摸造してこれを楣間などに掛裝し、其色を加ふるに湯婆・麩・海苔の類を用ひ、一も色を塗る事をせず、凡て天然の色を用ひ清潔を旨とし技術の精巧と外觀の華麗は實に祭禮中の奇觀にして、毎年其意匠を改め、一切の裝飾物は翌日これを神輿關係の產土各戶へ配布するなり。**參照** 北野祭

十夜（晩）

季題解説 淨土宗に於ける法要なり。陰曆十月五日より十四日まで、引聲の誦經念佛を修するをいふ。無量壽經に「於此修善十日十夜、勝於他方諸佛國土爲善千歲」とあるに基き、十夜は卽十日十夜の略なるべし。起源は永享年中平貞國、菩提を願ふ志深く洛北眞如堂に十日十夜の參籠念佛を修したるに始り、後、明應四年三月淨土宗鎭西派鎌倉光明寺方丈世源譽、勅命により宮中に阿彌陀經を講じ、且眞如堂の衆僧引聲の阿彌陀經及び念佛を修す。勸修の後叡擧奏して引聲の誦經念佛及び十日十夜の法要を請受け、爾來淨土宗にて營むこととなれり。今日眞如堂にては十一月、東京にては十月行はる。此の季題は冬季なり、唯所により新曆を用うるあれば、便宜の爲假にかかぐるのみ。

泉涌寺舍利會（晩）

季題解説 十月八日（舊は陰曆二月九日より十五日まで）京都泉涌寺に於て佛牙の舍利を開帳するをいふ。此舍利は釋迦入滅の折、羅刹掠めんとせしを韋馱天の守る所となり、後千六百年唐白蓮寺道湛海師これを韋馱天より授かり、泉涌寺湛海入宋の時同寺寶函より授かりしものと傳ふ。

四の宮祭（晩） 大津祭

古書校註
【滑稽雜談】 神社啓蒙に曰、四宮神社、近江國滋賀郡大津の驛に在り。祭る所四座。大比叡・大巳貴尊）・小比叡（國常立尊）・氣比（仲哀天皇）・小禪師（火々出見尊）也。按ずるに當社は日吉の榊殿也、故に四座を以て此地に遷すか。里諺相傳へて云ふ、此の神鎭座の日、官幣使四位某也。故に四位の宮と號すと。予惟ふにこの說甚だ非也。是四神鎭座の故にこの號有る也。△これ俗に大津祭と稱してこの驛中の大祀也。引山數戶、跏者美を盡す。中比常憲院殿の命日とて朔日に祭禮侍りしが、又年過ぎて舊きにかへる。神輿洗とて祭前七日に行ふ、輿有る祭禮也。
【年浪草】 例祭九月十日、大津浦中の大祭也。神輿二基・引山十一・邌物・拍子・造花等神輿の前後に從つて、その行粧善盡し美盡せり。夜に入り相撲有り。

季題解説 十月十日（舊は陰曆九月十日）、滋賀縣滋賀郡大津市に在る、天孫神社（縣社）の祭禮をいふ。祭神は彥火火出見尊・國常立尊・大穴牟遲尊・仲哀天皇の四座なり。古來天孫四の宮神社と稱せしを明治初年今の社號に改む。例祭は德川時代には恒例として大溝城主分部侯より槍二本を出して神輿渡御の後に附し、又各町山車十三臺を出し、皆錦繡の帷幕を垂れ、上に人形を飾り機關仕掛をもて之を動かし、鼓笛鉦を鳴らして市中を曳き廻る。之を見んとて遠近より人集り市中頗雜沓す。現今も曳山等舊に變らず。

金刀比羅祭（晩） 金毘羅祭

季題解説 十月十日、讚岐金刀比羅宮の祭禮をいふ。宮は象頭山の中腹にありて、大物主命を主神とし、相殿に崇德天皇を祀る。明治十八年國幣中社に列せられ、神域甚だ廣く社殿宏壯。古來航海の神として崇敬せられ、船舶に關係ある者の參拜絕えず

太秦の牛祭（晩） 牛祭 摩多羅神

古書校註
【案内者】 九月十二日。日くれて也。牛に乘りてとなへ事あり、あとに相

撲あり。

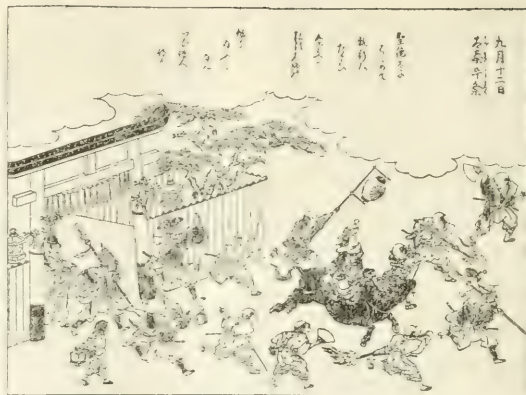
【日次紀事】 九月十二日。太秦廣隆寺牛祭。上宮王院の庭に於て之を修す。寺僧各々集會す、相傳ふ、慈覺大師歸朝の日、順風を摩多羅神に祈る、歸山後此の神を叡山の麓赤山に勸請す。太秦も亦この社有り。故に寺中今夜の神事、亦摩多羅神を祭る者也。寺中行者紙衣を着牛に乘りて上宮王院の前に出で、高聲に祭文を讀誦す。悉く懺悔の詞なり。古へ寺僧交々之を勤む。然れどもその辭戯々に近きを以て、近世行者をして之を修せしむ。法會終りて後、門前にて相撲有り。

【滑稽雜談】 當寺の僧説に云、この會は大念佛事と稱す。十一日曉開闔、十三日曉に至りて結願也。牛祭と申すは中日(一)この夜行ふ也。(中略)(二) 誦し終つてその儘面冠を取捨て堂内へ走り込む。この面は人畜一切の疫疾除災の守と成る故に諸人是を大に奪ひ合ふ。故に俗大念佛會をいはず、只十二日夜の祭祀のみ世に弘まりて、太秦牛祭と稱す。古俳書廿日太秦と侍るは誤也。

【年浪草】 紀事に曰、牛祭九月十五日(三)。〇寺説に曰、この會は大念佛會と稱す。十一日曉開闔、十三日曉に至て結願也。抑此の會は天臺山首楞嚴院源信僧都彌陀を念じ、往生の望み專ら也。或夜夢に、汝安養の生身佛を拜せんと思はゞ廣隆寺繪堂の丈六の像を拜すべしと。夢後此所に至り彼の尊像を拜するに夢想の如し。則ち彼の像前にて常行三昧を始行し、此の念佛會退轉なからしめん爲に摩多羅神を勸請して守護せしむ。常行の中日此の神を催し給へる也 祭文も則源信僧都の作と云々。祭文之を略す。(四)

注 (一)十二日なり (二)[illegible]化法師等五人が每年紙衣・木冠を新調し、祭文を誦する事をここに記せり。(三)十二日の誤なるべし。俳諧歳事記・栞草も亦十五日と誤れり。(四)この祭文は今もなほ傳はれり、文中解し難き古語訛語多し。

季題解説 十月十二日(舊に陰暦九月十二日) 京都嵯峨太秦の廣隆寺にて摩多羅神を祭る。當夜深更、寺僧及町民集り、白衣白袴を著け、摩多羅の假面をつけ、牛に乘り、青鬼赤鬼の行裝したる四天王之に隨ひ、古雅なる囃につれて祖師堂の前に來り、摩多羅神のみ拜殿を三度半にて廻り、正面の堂前にて摩多羅神祭文を讀み上ぐ。その祭文の曲節頗る奇なり。京阪の人々の見物夥し。

此祭の由來は、三條天皇の長和元年、一代の高僧、天臺山(比叡山)の惠心僧都、日夜信心を凝らして極樂淨土の阿彌陀如來を拜せんことを欣求せられしに、或夜の夢に安養界の眞の無量壽佛を拜み奉らんと思はゞ、廣隆寺繪堂(今の講堂)の本尊を拜すべしとの告を受け、僧都大に歡喜し直に廣隆寺に詣で此の尊像を拜し靈夢の空しからざるを喜び、一刀三禮して彌陀の三尊の像を手刻し、常行念佛堂を建立し、同年九月十一日より三日間唱名念佛を修し、摩吒羅神を念佛守護の神に勸請して、國家安全、五穀豐穰、魔障退散の御祈禱法會を修行せしに起れり。

明治維新後暫らく中絶せしが、富岡鐵齋畫伯は這の九百餘年の歴史をもてる古典的なる有名の祭事の廢絶せんことを深く慨き、明治二十年自ら筆を執りて復興趣意書を綴り「世に神事祭禮多しと雖も古雅奇異なるは此祭を第一とす」と爲し、大に斡旋して此牛祭を再興し、陰曆を陽曆に改め、十月十二日夜（午後八時）祭事を行ふことになれり。

牛祭の儀式は簡單なれど頗る古雅の趣致に富めり。其行列は

一棒持（今は二人）　一各町神燈十三
一囃方六人　一箱提燈二人
一神事奉行（上下着用のもの四人）　一若黨（今はなし）
一松明二　四天王四人
一松明一　一幣持（今はなし）　一摩吒羅神乘方
一牛方（摩吒羅神の周圍に場燈松明を持して從ふもの數は時に増減あり）　一牛肝煎一人　一箱提燈二人

右の順序にて摩吒羅神は寺の客殿の庭にて牛に乘る。其時寺僧は牛に對して灑水加持し祈禱の後、徐々と西門を出で山門の前を過ぎり、東門より假金堂前の式場に入り、祭壇を三周したる後、牛を下りて壇に上り、摩吒羅神は正面に腰をかけ、四天王は其後方に鎗を持ちたるまゝ直立し、さて後、摩吒羅神の發聲にて祭文を一種特別の節付にて朗讀す。此祭文は惠心僧都の作と傳へられ頗る長く、各段毎に息を入れ徐讀するにより約一時間を要す。斯くて祭文を讀み終るや否や、摩吒羅神は祭文を、四天王は鎗を持ちたるまゝ急遽堂内に突入す。是れにて祭事は終りを告ぐるなり。

例句

太秦の牛祭

角文字のいざ月もよし牛祭　蕪村（蕪村句集）
空晴し月や最一つ牛祭　几董（井華集）
（時雨の頃に二夜の月見る時なれば）
油斷して京へ連なし牛祭　召波（春泥發句集）
所化達の笑壺の會や牛祭　嘯山（律亭句集）
糊こはな我影ぼしや牛祭　青々（妻木）
太秦の萩も實になり牛祭　蜃樓（倦鳥）

參考

毎年陰曆九月十二日、京都府葛野郡太秦村廣隆寺に於いて行ふ

祭なり。祭の當夜戌の刻に當寺の僧侶五人、五大尊に扮し、異様の面を被る。うち一人の僧侶は風流の冠を着け、太刀を佩き、幣を捧げ、牛に乘る。他はその前後を圍み、松明をかざして行列を爲し、本堂の傍より後へ還り、又西の方より祖師堂の前なる壇上に登りて祭文を讀むなり。此の祭文は弘法大師の作と云ひ傳へられ、應永九年版の祭文に、摩吒羅神を崇敬し、天下安穩、寺家安泰の爲めに、牛祭を行ふものにして、罪を犯す人、又は害を初め、諸種の疾病に至る迄、あらゆる宇宙の曲事を根の國、底の國へ驅逐し攘除するものなりとの意味を記載せり。此の祭は谷川士清の著和訓栞に「是は列異傳に曰、子泰文公の立てられたる陣寶祠の事に據りたるなるべし」と見ゆ、或は慈覺大師入唐の時傳來すとも稱せられ又一説には此祭は聖德太子の始めらるゝ所なりともいへど、固より浮說信ずるに足らず。

靈山招魂祭（晩）

季題解說　十月十四日、京都東山靈山に於て幕末勤王の士の靈を祭るをいふ。明治初年有志者謀りて養正社を設立し、幕末勤王の士の靈を祭らんため招魂場を建て、此日莊嚴なる祭典を行ひ、玉雲院などにては勤王諸士の遺墨を展觀し、其他附近の寺院にては狂言・琴曲、又は挿花などの會を催し、社員外一般人士の參拜を許す。

粟田神社祭（晩）　粟田口祭

古書校註　【增山の井】俳。九月十五日、これ白川橋の東八大天王の祭也。祇園牛頭天王の婆竭羅龍王のむすめ頗梨女をめとりて生み給へる八王子なり。これ曆にいへる八將神なり。

季題解說　十月十四日（舊は陰曆九月十五日）京都の北、白川橋青蓮院の東、山腹にある粟田神社の祭禮をいふ。祭神は大巳貴命なり。神寶の鉾は瓜鉾とも阿古陀御鉾ともいひ此鉾に供奉して十七本の各種の鉾は青蓮院宸殿前、白川に架せる細き石橋の上にて曲差をなす。これを祭の呼物とな

す。又神輿一基は神樂殿に奉安、鳳輦は氏子町を巡幸せらる。

例句

粟田口祭　橋わたす鉾さしはやせ粟田口　太祇（題林集）

西院祭（晩）　さゐまつり

季題解説　京都葛野郡西院村の春日神社（村社）の祭禮をいふ。舊は陰暦八月廿八日なりしが、後九月九日に改め、現在は十月十五日に官祭を行ひ、同二十三日神幸祭、二十五日還幸祭を行ふ。西院の號は中頃此所の西に齋院居給へる故に此邊の名として齋院と書せしを後誤りて西院に作りしならんといふ。神輿二基のうち一基は同村住吉神社のものなり。現今は春日神社の末社に合併せしも今なほ八月二十八日住吉祭を執行す。因に二十三日の神幸祭には太鼓鉾五本、手鉾等行列し、此鉾の中の一に住吉の紋ありといふ。

阿濃津八幡祭（晩）

季題解説　十月十五日（舊は陰暦九月十五日）、伊勢の津市八幡町、阿濃津八幡宮の祭禮をいふ。此宮は建武中足利家に於て男山八幡を勸請し、後津藩主藤堂高次厚くこれを崇敬し家祖高虎の神靈を合祀し社を造營す。これ現今の社殿にして境内四千餘坪、阿濃が浦の景勝に對す。祭は維新前までは津藩主の鎭守神として善美を極めたり。現今はこれに及ばずと雖なほ山車・練物等夥しく、此地方一の祭なりといふ。

鹿王院舍利開帳（晩）

季題解説　十月十五日、洛西嵯峨鹿王院にて舍利の開帳あるをいふ。此舍利は律宗の祖道宣律師、張瓊太子より受けられたりしを、源實朝夢に奇瑞を得、使を遣はして宋の能仁寺より贈與を受け、大慈寺を建立し、佛舍利博多に到着の日の十月十五日を舍利會とし、萬人に拜せしめたり。後、後醍醐天皇所望し給ひしが、北條氏これを辭し、大慈寺より圓覺寺舍利殿に移し、國家安全を祈りしに靈驗頗る顯著なりしと云ふ。光嚴院、夢窓國師に勅定ありて舍利を所望し給ひしにより都へ進獻せられ、後光嚴院より、夢窓國師の弟子、即ち鹿王院の開山へ傳へられしものなりと云ふ。此舍利は水晶中に安置せられ、拜觀の人の面、水晶に倒に相映ず。俗に鹿王院の水晶、人影をして逆に見するも、若し正しく映りしならば短命なりと言傳ふ。

丹生川上祭（晩）

季題解説　十月十六日、大和國官幣大社大丹生川上神社の祭にして、吉野

郡川上村なるを上社、小川村なるを中社、丹生村長谷なるを下社といふ。延喜式内の大社にして、四度官幣及び祈雨祭に預り、二十二社の一に班す。天武天皇の御宇三年祠を建てゝ祭る。「人境を隔てたる深山に我を祭らは天下に甘雨を降らせ霖雨を止めん」との神宣に依り、大和神社の別社として雨止の神と稱す。祈雨には黑馬、止雨には白馬を奉るを例とせり。明治四年官幣大社に列したり。例祭上社は十月八日、中社は同月十六日、下社は六月一日なり。

神嘗祭（かんなめまつり）（晩）　じんじやうさい　御祭（ごさい）　大祭（おほまつり）

季題解說 十月十七日、天皇新穀を以て作れる御酒と神饌とを伊勢大神宮に奉らせ給ふ大祭をいふ。音讀して「しんしやうさい」ともいふ。古へは「度會新嘗會（ワタラヘノニヒナメ）」ともいひ、又伊勢地方の民間にて俗に「御祭（ゴサイ）」と稱し（現今御祭といふ名稱は廢れて山田邊の人は普通に「大祭（オホマツリ）」と稱せり）外宮は陰曆九月十六日、內宮は翌十七日に御儀ありしが、明治以後は十月十六、十七兩日となれり。

例句

神嘗祭

神ゝ嘗の供進使仕ふまつりけり　伊小星（天の川）

今年米きこしめす日と祭る哉　黃人（木太刀）

神ゝ嘗や豐秋津洲の民となり　吃牛（赤壁）

御卜に晴れて輿上御卜哉　龍花（同）

參考 每年十月十七日、伊勢大神宮に於いて行はるゝ祭祀なり。神嘗とはカミツヘの轉語にて、ツは之、へは火食の義なり。卽ち新穀の大御饌を伊勢神宮に供へ奉る御祭儀をいふ。古くは九月十一日京都より公卿勅使を差遣せらる、之を伊勢例幣と稱す（其條參照）現今勅使は、十六日豐受宮（外宮）に、十七日皇大神宮（內宮）に幣帛及び生絹を奉獻し、神宮司廳よりは新穀を選びて奉るなり。又宮中に於かせられては、十七日の午前中に、神嘉殿の正南の庇下に御屛風を廻らし、內に簀薦を敷き、その上に御座を設く。宮內の官員等庭上の便宜の所に候す。時刻到りて陛下出御あらせらる。先づ賢所の綾綺殿に於いて御束帶を着せられ、掌典長の御先導にて御座に着かせ給ふ。爰にて皇大神宮及び豐受宮御遙拜の儀ありて入御あらせらる。後ち直ちに賢所に進ませ給ひて御拜あらせられ、次に皇后陛下・皇太子・皇太子妃兩殿下の御拜あり、次いで親王以下の拜禮ありて祭典を終るなり。

神嘗祭は、その由來を考ふるに、元正天皇の養老五年九月十一日、天皇內安殿に御し、使を遣はして幣帛を伊勢大神宮に奉らしめ給ひて以來、每年此日に例幣使と稱して勅使を發遣せらるゝ恆例となれり。神祇令及び延喜式に、此の祭の詳細なる次第を載せたり。卽ち例幣使には、諸王を充て、

中臣・忌部之に從ふ。中世には更に卜部を加へられ、之を四姓の使と稱したり。其の發遣の日には、天皇大極殿後方の小安殿に出御して御拜あり。事故ありて出御なき時は、紫宸殿の南庇にて御拜あり、幼帝の時は多くは攝政をして御代拜の儀を行はしむ。是より先き八月晦、齋王伊勢の尾野湊に臨みて御禊あり。神官等又度會河にて大祓を修す。九月十日、離宮院にて祭に從事する神官等を卜定し、十六日、まづ豐受宮を祭る。其儀、前日朝夕の御饌及び黑酒・白酒の神酒を供じ、祭日更に拔穗の稻を供じ、懸稅の稻を内外の玉垣に懸く。拔穗の稻とは、神職の自ら種ゑて自ら穗を拔きたるものにして、懸稅の稻とは、神郡神戸より獻れるものなり。此の日齋王木綿鬘を着け、太玉串を執りて拜禮あり。其後忌部幣帛を捧ぐ。中臣宣命を讀み、宮司恒例の祝詞を讀み、次に幣帛を寶殿に納め、勅使以下退出、直會殿にて大直會を賜はり、朝使及神官等倭舞を奏し、祿を賜ふ。十七日皇太神宮を祭る。其儀豐受宮に同じ。抑神嘗祭は、御鳥羽天皇の元曆元年例幣の時、天下大亂に據りて、諸國の幣料制の如くならず、それ以後古禮廢れて祭典行はれず、遂に數百年を經たり。後光明天皇の正保四年に詔して之を再興し給ひ、孝明天皇の元治四年、更に荷前の調絹及び幣馬を奉獻することを再興し給ひ、明治維新以後現制となれり。

朝鮮神宮祭（てうせんじんぐうまつり）（晩）

季題解說 十月十七日、朝鮮京城府南山にある官幣大社朝鮮神宮の祭典にして、祭神は天照大神と明治大帝の英靈なり。大正十四年十月十五日神殿竣成、正遷宮祭式を行ひ、爾來十月十七日に例祭を執行せらる。

惠比須講（ゑびすかう）（晩）　夷子講（えびすかう）　夷子祭（えびすまつり）　えびすこ　夷子切（えびすぎれ）

季題解說 十月二十日（古は正月十日（江戸のみ正月二十日）、及び十月二十日）に行ふ惠比須神を祭る祭事をいふ。此の日商家にては、蛭子神の像前に酒宴をはり、時に座敷の盃盤・器具等を賣買する眞似をなし、千兩・萬兩などいひ、價出來たる時は拍手して祝す。東京にては前夜べつたら市ありて供物を商ひ、當日は吳服店にて、夷子切の賣出しあり。惠比須講は冬季なれども、所により新曆を用うるあれば假に揭ぐ。〔參照〕誓文拂（せいもんばらひ）

例句
惠比須講　ふり賣の雁あはれなりえびす講　芭蕉（一葉集）
夷講やことに難波の肴市　闌更（半化坊發句集）

誓文拂（せいもんばらひ）（晩）　誓文祓（せいもんばらひ）

季題解說 十月二十日（もと陰曆）、京都にて商賈、遊女等四條京極の官者

殿に參詣し、常に人を欺きて賣るの罪を拂ふをいふ。官者殿は俗に誓文返しの神と稱し、祭神詳ならず。此の日京都の呉服店にては、十五日より誓文拂の賣出しを始め、二十日に終る。又大阪にも此の風あり。誓文拂は冬季なれども、惠比須講と同じく便宜の爲、假に掲ぐ。【同】惠比須講

【參考】京都では毎年十月二十日に四條京極殿の官者殿に參詣する。一年中の商賣の懸引に虚言を使つたのを謝する意であるといふ。この祠は祭神は審でない。一説に土佐坊昌俊だといふ。誓文拂とは、立てた誓紙を一掃する義である。好色二代男に「十月二十日は誓文拂ひ、唯だ商ひ大事にして何の事も無う買うて遊ぶべし」とある。

鞍馬(くらま)の火祭(ひまつり)（晩）　火祭(ひまつり)

【季題解説】十月二十二日。山城國鞍馬山靫(ゆき)神社の祭禮にして、此祭は殊に汚れを忌むといふ。同夜鞍馬街道十王堂より松樅等の根を束ね、松樹を覆ひたるを羅列し、軒毎に篝火を焚き、屋根には水を注ぐ。十一時頃には婦人小兒に至るまで、大小の柴を束ねたる松明を點火し、火を後方にして肩に擔ぎ、サイレヤ、サイリヨーと謠ひて、上下行違ひ、夜更くるに從ひて彌々その數を增し、遂には二三人にて焜々火を點じたる大松明を撒出するものあり。火光滿天に映じ、火焔全山を包繞し、壯觀名狀すべくもあらず。かくて老少各登山して靫神社へ參詣す。

一鞍馬の火祭　田中寒樓

火祭と聞いただけで好奇心をそゝられるには十分であつた。岡田鱗洲言ふ。火祭にはこれまで三度ゆきたが句を得ない。あの壯觀を一つ句にしたいものだ。火祭にはよい句が見えぬやうだ。山梔子の、火祭やしゝむら動く男達。位なもので、更に全觀の壯烈さうたひたい。こんなことを鱗洲が話す。是非行つて見たいやうになつた。

○

十月二十二日の鞍馬の溪はよい月夜で、水の音が故郷の山中をしのばした。なるほどこれはたいしたものだ。山と山との間に川と道とがあつてその道の兩側に家があつて、あまり廣くない道の中に、大きな柵が積み立てられて、人の背丈より高い。數々積み寄せた柵の頂に青松が立てゝある。この形式の柵山。これがやがて一齊に篝火となるのであらう。家並軒並に二三間の間隔をおき〳〵十とも二十とも何んぼといふ數も數へきれぬ。

○

端近に立てゝある屏風に衣裳が掛つてをる。衣裳を飾つてをると菜刀がいふ。いや一寸と掛けてゐるのだらう。次の家も次の家も屏風を立てゝ子供の練り著とでもいふか其の晴れ衣裳を屏風に掛けてゐる。矢張り掛

けてゐるのではない。飾つてゐるのである。

○

屏風を飾つて燈明をかゝげ、葉つきの大根を神饌にしてあらたまつた家もある。祭壇を設け、甲冑を飾つた家もある。祭壇の傍らに生花や菊花の鉢を配した家もある。これらの家々は何の家の軒にも、松明がそれぞれ皆用意してある。

○

手に持つて振りまはせるほどの長さ三四尺のものから、長いのは一間、一間半も二間もあらうと思へる大松明もある。短い松明は松の小割を束ねただけであるが、大松明はなか〳〵念入りに出來てゐる。杉材を薄く細長く剝いでそれでもつて一つの長い籠を編んで一方は大きく口がひらき、一方は段々細めてきて丁度人が肩で荷ひまはすに都合のよいやうに仕立てたもので、その一方の籠の開いた口には焚きつけにつかふやうな細木の柴木が詰め込んであつて詰木の口は整然と奇麗に截つてある。そしてまたその詰口から籠の手が十方に出て花の恰好、丁度曼珠沙華のやうになつてゐる。この籠の手といふは松明籠の編みあまりを長く殘してはら〳〵と天を拂ふやうに仕立てあるのである。

○

この松明の大きいのにも二通りあつて中位い大きいのは二十二日の夜の祭りに燈もす。大松明は二十三日の黎明にともすので、松明といはず神樂松明といふ。あまり大きい嵩をしてゐる松明ゆへ試に一つ提げで見たが、とても小力では地が切れぬ。この松明、掛目どれ位ありますかと聞いて見たら、二十貫はあるといふ。米一俵位の重さかと思つたらなかなか重い。

○

鞍馬寺の樓門の直ぐ下に軒を並べた兩側の家は軒先きまで掛出しの舞臺をつくつて火祭見物の京客を迎へてをる。早く宿をとらねば夜が更けたら困まる。祭りは夜の十時頃からはじまる。今は宵の口であるが何處かに陣をとらねばならぬやうに伴れの友等がいふ。そんなところに這入らずに夜露に濡れても自由なところで見たいのであるが、さてさうもゆかぬので、樓門見つけの二階に陣取つた。下は御一人さま五拾錢。二階は六拾錢。僕は四拾錢の低い家から見たかつた。往來の眞中から火の手が上つて山の溪は一齊に火の海となつた。軒並に水桶の用意がしてある。道の警邏の人の提灯が目立つ。柄杓で戸袋に水をかけてゐるのがある。火の子のたち舞ふ篝り火の間々を千篝りは家の屋根口より高うに上る。火の子のたち舞ふ篝り火の間々を千鳥がけにあるいて見物してありく。どこまでも〳〵篝りの火がさきへさきへつゞいてをる。大學生らしいのが「なんと長いことな。來てえゝことした」。僞らぬところ來て見てえゝことしたわけだ。

火のついた松明を持つた子供は、さいれい／＼と呼んで觸れてゆく。祭事に出て來いといふのである、その態度としたものが、たゞ祭禮に携はるといふ簡單なこゝろ許では無く、何かもつと大切な事に參加したもののやうに家にも人にも篝火にも町筋一帶に一つの莊嚴の氣がうち籠つてゐる。

○

ぶら／＼歩いてゐる中にふと伴れの人にはぐれたまゝ、村の果てまで行きつめて見た。これから先きにゆけば若狹の國になるといふ。月が冴えきつて名月のやうに明く、溪の水が音を立てゝ、村の外れの山家の軒にも今日の祭りの篝火が燃えて、しづかに蟬が鳴いてをる。ほんに鞍馬の火祭。鞍馬の月。鞍馬の蟲。鞍馬の水の音。

○

大人が「神事に參らされ」。「神事に參らされ」と手に松明を振りかざして觸れて行く。屏風の衣裳をとつて著せてゐる端近の光景。はや五六人手松明をともし立てゝ並んでゆく子供がある。これから子供の松明が出揃ふ。それから少年の松明が出揃ふ。それから大人の松明が出揃うていよいよ樓門の奧の神輿迎にゆくといふのであるがまだ／＼とても長いことらしい。

○

獨り由岐神社に參つた。深山の森の中に、けふのお祭の神輿が眞暗がりのなかに置かれてあつた。月影がさしてゐた。鞍馬寺までのぼつて行つた。途中に楓林に明月がさいて奇麗であつた。遍路笠を著たたゞ一人の女が鉦をたゝいてゐた。石段の下に、鞍馬寺から更に山の中／＼と這入りすゝんで、大杉さんといふを拜んだ。大木の四周を繞らす木柵の一方に十人ばかりの信者らしい姿の人がしめやかに拜跪してゐた。夜半だけにもの凄かつた。これが奧の院かと思つたら、奧の院は違つた處にあるのだといふ。木の根が網の目のやうに路に出てなか／＼歩き惡い。月は明く照り立てゝゐるが茂りが深いで路へはとゞかぬ。奧の院に籠つてゐる者が拜み了た末に、「イ、」と氣合をかけた。參り合せた市の若衆が、「あれは何の爲か。」「あれは言ふたことが後返りせぬやうに籠めておくのだ」はよかつた。

○

元の町にもどると篝火はやゝ下火になつて人の持つ松明の世にかはつてゐる。小さい子まで鉢卷して松明をかざして「さいれい」「さいれい」。さいれら。さいれら。何だか、ものにつまゝれた者のやうに囃したてゝ浮いてをる。大きな松明の二十貫もあらうといふ奴を引かついで、かゞり緒の藤蔦を捕へて、さいれい／＼とあちらによろ／＼、こちらにたよ

たよ何十人といふ大人が大松明の炎々たるを肩にしていりちがひ行きちがふ火の海。その中をうごめく祭人。醉顏の壯夫が赤裸の身に腰飾一つしめて、燃え盛かる炬火をかざしてめら〳〵と練つてあるく。舞臺から見る人、外で見るもの、見物の群衆と火祭の火人と、焰と、煙と、紅蓮の渦と燃えあがる火の子の中に巍々とそびゆる朱門樓閣。祭りといふよりは軍さ。戰場といつた方が實際の氣分が出るであらう。

今しも火祭の火人は手に〳〵炬火をかざして由岐神社の神輿のお迎に勢揃をしてをる、村中の人といふ人は殘らずこの祭典に參加して、家の内に殘るものは足腰たゝぬ者許りらしい。女は女で背に子を負うてまで、娘は娘で隊伍をなして、さいれい〳〵、さいれう〳〵とそれは〳〵氣狂はしきまで叫び立て囃し立てる。側で見てゐると人間が始て火を發明した歡びの記念祭とでもいひたいやうで、歡喜と舞踏の猛火の音樂祭である。

○

山山のけしき月の出た深山の深夜、霧ごもつた梢と溪間、火のほのほに埋まる如き家と人と火明大火聚の炬火世界に狂喜してゐるこの物凄い且つ親たしい莊嚴な原始氣分の祭禮が、たゞ一つの暗號、さいれい〳〵、さいれう〳〵。といふ合ひ言葉によつて統一された綿々密々たる民族性の流露に新らしいゆかしい興味をそゝられた。

一睡して眼を覺ますと、あいもかはらず、さいれう〳〵とやつてゐる。夜はほか〳〵と明けかゝつてゐる。靄の中に朝の氣の籠つた神樂大松明の行列は又格別の神聖である。御旅所の前で練りあるいた神樂松明の手をば、今日の火祭りの記念の淨火として家々の加護として其の松明籠の花手をむさぼり採らうと爭ふ群衆。鞍馬の人達は一睡もせずに徹宵して神事に熱狂してゐるのである。

夜が明けてしまうたら宵からの火祭は噓のやうである。歸りは淋しい。

（大正十五年十二月發行 懸葵第貳拾參卷第拾貳號所載）

例句

鞍馬の火祭

火祭や焰の中に鉾進む　虛子（虛子句集）
火祭やあか〳〵灯す鉾の宿　鱶洲（懸葵）
火祭や月落ち方の神樂觸れ　三味（同）
火祭や閉りし家もあちこちに　巴潮（辛夷）
火祭の焰をよろこべる匹夫哉　鴉汀（京鹿子）

法隆寺壁畫拜觀（ほふりうじへきぐわはいくわん）（晩）

季題解説　大和國生駒郡法隆寺村の法隆寺金堂の壁畫を、十月廿二日より

十一月廿日迄、三十日の期間中、其覆ひを取除きて拜觀せしむるをいふ。此壁畫は千三百年を經たる世界的寶物にして、金堂の內壁にあり、寺傳曇徵の筆と稱す。西壁は阿彌陀の淨土、東壁は寶生佛の淨土、北東東端は藥師の淨土、西端は釋迦の淨土を畫けり。佛菩薩の像は、各一丈七尺內外の大作なり。今剝落甚しと雖も、色彩尙ほ燦然たり。これは春期にも拜觀せしむることにて、春期は四月一日より五月十五日に至る四十五日を期間とす。

【例句】

くろみたる壁のひびれに佛達　青々（倦鳥）
剝落の線も尊とし身に入みぬ　同（同）
冬近き日さしもうとし壁の僧　同（同）
露霜に朽ちせぬ壁の繪筆かな　同（同）
畫は千年つくづく人の尊さよ　同（同）

法隆寺夢殿秘佛開扉（晩）

【季題解説】大和國生駒郡法隆寺村の法隆寺東院夢殿の聖德太子等身の救世觀音は太子作と傳へ、秘佛として有名なる尊像なり。十月廿二日より十一月廿日迄、三十日の期間に申出れば特に厨子を開扉せらるるなり。これは春期にも開扉せられ、春期は四月十一日より五月十五日に至る三十五日を期間とす。

【例句】

黃金なるみ肌に濕る御の露　青々（倦鳥）
生身の太子拜むと思ひけり　同（同）
夢殿の救世に値遇を秋尊と　同（同）
黃雞頭のけふもさされて救世開扉　同（同）

平安祭（晩）　時代祭　じだいさい

【季題解説】十月二十二日、京都官幣大社平安神宮の秋祭をいふ。平安神宮は人皇五十代桓武天皇を奉祀す。天皇は延曆十三年都を現今の京都の地に奠められ、一千年の都城の基礎を作られし英主なり。奠都後一千一百年に相當して明治二十八年、京都の官民、桓武大帝の雄圖を欽仰し、大京都創始の鴻恩に報いんが爲に、岡崎の地を開いて大內裏の朝堂院の制を模し、平安神宮を建築し、神を勸請したりしなり。此祭は時代風俗の變遷を面のあたり見せしむる好古趣味豐かなるものにして、明治初年より溯りて德川・天正・鎌倉・藤原・延曆の各時代の文武官に扮裝して市中を練り歩く。行列の長さ十數丁に及び壯觀比なし。之を時代祭とも云ふ。

【參考】毎年十月二十二日京都市上京區岡崎町、官幣大社平安神宮に於

いて行ふ祭なり。一に時代祭とも稱す。祭禮の當日午前八時神前にて神幸の行列を整ふ。即ち雜色・伽陵頻伽・蝴蝶・樂人・御賢木・神饌・唐櫃・神職・楯矛・弓矢・御劍・禰宜・隨身二人・神職・紫翳・鳳輦・菅翳・雨皮唐櫃・神馬・宮司・主典・雜色等の順位にて應天門前通より冷泉橋を渡りて、疏水西岸に出で、二條通・河原町を通りて市議事堂に鳳輦の入御あり。

是より先き、本祭に有名なる時代祭の行列、此の神幸に從はんが爲に、既に議事堂に參集して鳳輦の着御を待つ。午前九時に至り列を整へて出發す。先づ時代祭の行列の先驅を山國隊と云ひ、英式銃を擔ひ、陣太鼓・笛・大太鼓等を打鳴して、拍子面白く進行す。是即ち明治維新の際東征に從ひたる丹波の鄕士に擬したるものにて、北桑田郡より出づ。次は弓箭組なり、即ち源三位賴政に從ひて弓箭を執りたる者の子孫と云ひ、船井郡・北桑田郡より出づ。次は大名行列なり、即ち德川時代の大名の上洛式に擬す。次は織田信長の上洛式なり、即ち永祿十一年に、正親町天皇の密勅を奉じて擧兵し、近江を平げて上洛したる時の行裝に擬したるものにて、信長を初めとし、羽柴秀吉・柴田勝家等に扮したる騎馬武者之に連れり。次は流鏑馬式なり。是は後鳥羽天皇が武門の跋扈を惡みて、流鏑馬に託して近國の武士を召集し給ひし故事に擬す。次は藤原時代の文官參朝式、次は延曆武官出陣式の行列、次は延曆文官參朝式なり。即ち延曆十五年、平安遷都に關係せし人々の、賀正に參朝せし行裝に擬したるものなり。

以上の如き時代祭の行列ありて次に神幸の行列之に續く。道順は議事堂より寺町通・二條通・烏丸通・四條通を經て休憩所に着御し、午後一時に此所を發して神宮に還御す。

平安祭は明治廿八年京都市に於いて、一千百年の記念祭擧行の節、初めて行はれたるものにて、就中此の時代祭の行列は平安遷都以來の文物制度の變遷を、各時代別に明示せるものとして、風俗史研究上頗る特色ある儀式にして、最も尊重すべきものなり。

靖國神社秋季大祭（晩）　秋の招魂祭

季題解說 十月二十二・三・四日、東京九段靖國神社の祭禮にして、維新の際王事に殉ぜし諸藩士の靈を祀り、爾來國難に殉ぜる戰死歿者の靈を祀る。春秋二季大祭を行ふ。春季四月三十日の例祭に對してかくいふなり。

【參照】春―靖國神社春季大祭

宮崎祭（晩）

季題解說 十月廿六日、日向國官幣大社宮崎神宮の大祭にして、祭神は神日本磐餘彥尊なり。往古は神武天皇宮と稱せり。明治十一年宮崎宮と改め、同十八年官幣大社に列し、大正二年宮崎神宮と改む、地は元高千穗宮の宮

跡なり。現社殿は明治四十年竣成、遷宮式を行ふ、例祭の翌日には神輿渡御の儀あり、供奉の行列儀式莊嚴を極む。

臺灣祭（たいわんまつり）（晩）

季題解說　十月二十八日、臺灣臺北官幣大社臺灣神社の大祭にして、祭神二座、大國魂命・大已貴命・少彥名命の三神を一座とし、北白川宮能久親王を一座とす。臺灣は日清戰爭の結果我領有に歸したりしが、その討平に際し、近衞師團長陸軍大將大勳位能久親王は御出征中適々瘴毒のおかす所となり薨去し給ふ。依りて親王を臺灣に鎭祀し、以て永へに新版圖の鎭護と齋き祭る、明治三十四年十月神殿竣成例祭を行ふ　境內廣袤十萬餘坪、創建日尙淺しと雖も、社頭の森嚴、神域の殷盛年と共にその度を加ふ

香椎祭（かしひまつり）（晩）

季題解說　十月二十九日、筑前國官幣大社香椎宮の大祭にして、仲哀天皇・神功皇后を祭る。古くは香椎廟と稱し、朝廷の崇敬厚く、奉幣祈請等一に宇佐神宮に準じ、卽位、大嘗及び變災外寇等國家の大事には必ず勅使を遣はし給ふ例なり　明治十八年官幣大社に昇格。神木に綾杉あり。神功皇后御鎧の袖にさゝせ給ひしものなりと傳へらる。古來勅使參向の節、宮司この杉の葉を勅使の冠に挿し歌の贈答をなす例あり。

木幡祭（こはたまつり）（晩）

季題解說　京都府下宇治郡木幡なる木幡神社の祭禮をいふ。祭神は天忍穗耳尊なり。是地神第二の神にして、父は素盞嗚尊なり。後に天照大神取て御子とし給ふ。この神下土に降り給はず。故に山陵なくして其御靈を祭りて社號とす。例祭は陰曆九月廿四日なりしも、現今は居祭にて十一月朔日に行はる。神輿二基あり。內一基は田中神社のものにして、田中の社は同所地主の神なりと傳ふれども現今は社の所在明かならず。

支倉忌（はせくらき）（初）

季題解說　陰曆七月一日。常長は支倉氏、六右衞門と稱す。伊達政宗の臣なり　政宗大志あり南蠻を討たんと欲す。適々西班牙の宣教師ソテロ江戶淺草に會堂を建つ、秀忠之を毀ちソテロを殺さんとす、政宗乞うて之を赦し仙臺に伴ひ常長をして彼の弟子となし、其國情を聞かしめ又其實際を探らしめんと欲し隨行者六十八人を付し、慶長十八年九月十五日陸奧北鹿郡月の浦を船出し翌年九月三十日羅馬に至り上客の禮を以て法王ポール五世に謁し政宗の書と贈品とを呈す。是に於て日本奧州王の名彼邦に聞ゆ。既に

して使を了へ法王の返書及び種々珍異の贈品と王の畫像幷に常長畫像とを携へ往復淹留凡そ八年を經て歸朝せり。常長備さに復命し南蠻の伐つ可きを陳ぶ。政宗大に喜び其準備を爲すの際耶蘇敎の禁頗る嚴にして外國に通ずるもの皆斬に處せらる、常長亦危し。光明寺の住職の氣轉にて辛じて免ると雖も遂に其初志を果さずして止む。當時にありて此通使の偉蹟を遺し外交史上に燦爛たる光輝を放つに至ては政宗の遠謀偉略と常長の膽豪大志とに據るものにして誠に此君ありて此臣ありと云ふべし。常長元和八年七月朔日歿す、年五十二。仙臺光明寺に葬る。

例句

支倉忌

油繪の侍ぶりよ支倉忌　青々（倦鳥）
雄心に孤負の歎きや支倉忌　同（同）
世や移し雄圖はかなし支倉忌　同（同）
墨士哥に艸の枕や支倉忌　同（同）
法皇と何を語りし支倉忌　同（同）

蘆庵忌（ろあんき）（初）

季題解說　陰曆七月十一日。蘆庵は小澤氏。通稱帶刀。名は玄仲。別に觀荷堂と號す。尾張の人。京に住し冷泉爲村卿の門に入り歌學を受く。其詠歌の自由なること多く比を見ず。世人稱して平安中興の良師といふ。享和元年七月十一日歿。年七十九。北白川心性寺に葬る。

了以忌（りょういき）（初）

季題解說　陰曆七月十二日。了以は本姓吉田氏、後角倉（すみのくら）氏と改む。名は延實。工役に巧にして、慶長八年德川家康の命により巨船を造り安南に通商して利あり。嘗て洛西大堰川より丹波の保津に至る迄の巖石を碎き土砂を除き、後又駿州富士川をも浚へて舟行を便にし運輸の利をなせり。慶長十九年七月十二日歿す。年六十一。

例句

了以忌

了意忌や水音通ず京丹波　青々（倦鳥）
大悲閣に佛を見に忌日かな　同（同）

應擧忌（おうきょき）（初）

季題解說　陰曆七月十七日。應擧は圓山氏。通稱主水。字は仲選、又仲均といふ。丹波國桑田郡穴太村の農家の產。京の畫家石田幽汀の門に入り、遂に一機軸を出す。圓山派、又四條風といふ。僊齋・僲齋・一嘯・夏雲・雪亭・懷雲・仙嶺・星聚館・洛陽山人・鴨水漁夫等の數號あり。寛政七年七月十七日歿す。年六十三。四條大宮の西悟眞寺に葬る。

文覺忌（初）

【季題解説】陰暦七月十八日。文覺は俗稱遠藤盛遠。上西門院の北面となり文院の武者所となる。年十八にして誤つて左衞門尉源渡の妻袈裟を殺し髮を削つて僧となり文覺と稱す。後また故ありて伊豆に流されしが時に賴朝も流されて伊豆に在り。文覺賴朝に說いて兵を舉けしめ鎌倉幕府の成るや文覺漸く寵を恃み權威を弄し賴朝の政を批義す。時に後鳥羽天皇佚遊を好みて政を怠り、皇兄守貞親王時望あり。文覺これを見て竊に廢立を謀らんとし、正治元年賴朝の薨ずるや不軌を計り事現れて佐渡に流さる。文覺怒罵食せずして遂に死す。歿年月日を詳にせず。一本には七月十八日とあり依て暫く之に從て忌日とす。

【例句】

文覺忌　すきもの丶汝もこぼて文覺忌　青々（妻木）

（前書：人にたはむれて）

鬼貫忌（中）　權花翁忌

【季題解説】陰暦八月二日。鬼貫は上島氏。本姓平泉。名は治房。始め藤九郞、後に半藏・源五右衞門・與總兵衞・與三兵衞・三郞兵衞・利左衞門などいふ。攝州伊丹の人。家は釀酒を業とせしが、晩年落魄して導引を業とす。俳諧を松江維舟に學び、後に西山宗因に從ひ、中頃卓然として一家の見を樹て丶伊丹風の一體を興せり。享保十八年七十三歲にて剃髮し卽翁と號す。外に囉々哩居士・馬樂堂・佛兄・自休庵・權花居士・權花翁等の諸號あり。元文三年八月二日難波鐵谷に歿す。年七十八。伊丹墨染寺に葬る。撰著に「大悟物狂」「犬居士」「佛の兄」「獨言」「七車」等あり。句集に「鬼貫句選」あり。

【例句】

鬼貫忌

我庵は蠹みにけり鬼貫忌　青々（妻木）

六七句一氣に成るや鬼貫忌　同（同）

庭牡丹に枯れの音しつ鬼貫忌　同（俗鳥）

朝顏はあれて實のあり鬼貫忌　同（同）

修忌の事

松瀨青々

大抵高僧の正忌はその因緣のある本寺に於て營まるのが一般的習はしである。

知恩院の御忌（法然上人忌）、本願寺の報恩講（親鸞聖人忌）、東福寺開山忌（聖一國師忌）、大德寺開山忌（大燈國師忌）等がそれである。

蓮如上人の正忌はひろく彼方此方に於て營まる丶もの丶やうに思うてゐるが、開いて見ると「蓮如忌」は越前吉崎と山科とに於て行はれる位だとい

ふ事である。以上のやうな高僧達の正忌は大抵特定の場所に於て營まるゝのであるが、親鸞聖人忌だけは特定の場所にも行はれるし、又ひろく一般的にも行はれてゐる。

扨、俳人の正忌はどうかといふと、特定の場所で行はれる事は有つてもそれは微々たるもので有つて、それよりもひろく全國忌的に行はれてゐる。「芭蕉忌」とか「子規忌」とかいふのがそれである。恐らく幾所で行はれてゐる歟、その數も數へられぬ程であらう。これは感化がひろく及ぼしてゐるから一般的に行はれる譯である。

次に「鬼貫忌」と成ると、墓のある伊丹墨染寺に於て行はれてゐるやうである。また墓の存在も分らず、生前の住所も不明で、さういふ由縁の見出せない人も隨分多く有らう。斯ういふ人の忌日は、たゞ「何々忌」と文字の上で稱するだけで、何處で勤めるといふ場所も無いのである。

要するに修忌は一は高僧系のもの、卽ち本寺に於てその法統を繼ぐ弟子達に依つて堂々と勤修せられるものと、一は俳人系（これには學者其他を含む）の修忌の場所をも定めず任意の所で、隔世の知友に依つて營まれるものとの二種ある譯である。

俳人系には墓所も分らぬといふのがあるのみならず、墓は分つてゐても遠隔の地だとわざ〳〵尋ねる事も出來ない。たゞその人の人と成りを思慕し、又はその作物に憧憬して、その正忌の日に、ホシの一人二人が思ひ出して、その遺像を、又はその筆蹟を掛けるとか、又はその著作の書物の一二册をそこに飾つて、それに一莖の花を挿し、一炷の香を手向ける。斯ういふ風にする事も矢張り修忌の一つである。それが大業で無いだけに、親しみは一入であると思ふ。俳人系の修忌の多くは、先づこんな風に行はれて行くべきもので無い歟と思ふ。

それから正當忌日を變更して行はれてゐるものがある。それはその本寺の一種上からの事であらう。例せば大阪天王寺の聖德太子忌卽ち「聖靈會」は舊二月が正當である。大阪の諺に「寒さの果は於聖靈」とよく言はれたもので、それ程顯著な舊二月の餘寒の修忌が、今日では花の咲く新曆四月に勸められる事に成つてゐる。是は舊二月は寒くて人出の少い事が時日變更の理由に成つてゐるやうである。

俳句季題の上から見ると、今日花咲く頃に「聖靈會」が行はれたからとて、直ちに「聖靈會」を新曆四月の部に組み込む事は餘りに取り扱ひ方が粗雜だと思ふ。矢張り舊二月の正忌を存し、古人の句が有るならばそれを連ね、更に註を加へて現今にては四月に行はれてゐる事を記したいと思ふ。是は修忌變更に屬する記載上の私見を述べたのである。

師宣忌（もろのぶき）（中）

季題解説 陰曆八月二日。師宣は菱川氏。吉左衛門道茂の男にして、通稱

吉兵衞（久兵衞に作る）晩年剃髮して友竹と號す。安房國平群郡保田の產。家世々縫箔刺繡を業とし、上繪を描く必要上より繪畫を學びしが、天性畫事に巧なりしを以て業を改めて江戶に來り、土佐の畫風を修め、更に岩佐又兵衞の筆意に倣ひて浮世繪の一派を開き、尤も美人畫に長じ又祕戲の圖に巧なり。繪畫に關する著書數種あり。正德四年八月二日歿。年七十七。江戶谷中の某寺に葬る。

例句

師宣忌

舁紙畫とたゞには言はじ師宣忌　青々（倦鳥）

蟲ばめる中の其繪よ師宣忌　同（同）

寂巖忌（じゃくごんき）（中）

季題解說　陰曆八月三日。寂巖は俗姓富永氏にして、字は諦乘。世々備中の足守侯に仕ふ。年甫めて九歲、郡の普賢院超染律師に師事し、爾後笈を負ひて南巡し諸肆に遊び、宗匠を訪ひ、學問密性相に涉りて研覈せざるはなし。兼て梵學を善くす。元文改元の歲、曼寂阿闍梨に京西九智山に謁し親しく提撕を蒙り、六年泉州家原寺に於て重ねて具支灌頂を寂師に受く。嚴性頭陀を好み江湖に萍行する二十餘年、儕輩推重す。是歲請に應じ、都羅島寶島寺に視篆し、宗乘を學揚し道聲藹著す、人稱して法窟と爲す。明和四年弟子文敬を擧げ、之を補處に充て、自ら倉敷玉泉寺に退隱し逍遙自適す。嚴元より翰墨を善くす。時人其片楮尺縑を得るも珍藏す。八年八月三日寂す。年七十。著書數部あり。

例句

寂巖忌

字を見てより瀟洒なつかし寂巖忌　青々（倦鳥）

長養の筆に見らるれ寂巖忌　同（同）

守武忌（もりたけき）（中）

季題解說　陰曆八月八日。守武は荒木田氏。通稱中川平太夫。伊勢內宮の神官なり。當時宗鑑・宗長・宗牧など屈指の連歌師等と交遊し、俳諧體の語を以て連歌を行ひ、在來の連歌の煩はしき拘束を破りて俳諧の新天地を開拓し俳諧式を定む。天文十八年八月八日歿。年七十七。墓は伊勢國宇治山田市浦田町今北山麓にあり。著書に「守武千句」あり。

例句

守武忌

飛梅の千句のぬしよ守武忌　青々（倦鳥）

太祇忌（たいぎき）（中）　不夜庵忌（ふやあんき）

季題解說　陰曆八月九日。太祇は炭氏。一說に坂上氏。江戶の人にして初め雲津水國の門に入りて水語と稱し、後に慶紀逸の門に遊び太祇と號す。

別に不夜庵・宮商洞・三亭等の號あり。寶暦の初め京に上りて住し、明和八年八月九日歿す。年六十三。京都綾小路通大宮西入光林寺に葬る。撰著に「一都の裏」あり。句集に「太祇句選前後篇」あり。

例句

太祇忌　太祇忌やたゞ島原と聞く計り　青々（倦鳥）

太祇忌を太夫と共に香炷べん　同（同）

不夜庵忌　島原に誰そ跡知るや不夜庵忌　同（同）

西鶴忌（さいかくき）（中）

季題解説　陰暦八月十日。西鶴は井原氏。通稱を平山藤五といひしと傳ふ。浪華の產にして西山宗因の門に入りて俳諧を學び、初めは鶴永と號し、別に西鵬・松壽軒・松濤軒・二萬翁・二萬堂等の諸號あり。師の歿後大阪俳壇の牛耳を握る。談林の驍將なり。一日住吉の社頭に於て二萬三千句を吟ず、之より二萬翁と稱す。又文才超絕、著す所、好色一代男・二代男・男色大鑑・五人女・永代藏・武道傳來記・本朝二十不孝、其他あり。小說界に一新氣運を開きたるは周く人の知る所なり。元祿六年八月十日歿す。年五十二。

辭世　浮世の月見過しにけり末二年

大阪上本町四丁目誓願寺に葬る。俳諧の編著に「生玉萬句」「虎溪の橋」「大矢數」等其他數種あり。

例句

西鶴忌　朝皃に俤見ばや西鶴忌　青々（倦鳥）

毛氈に浮世艸紙や西鶴忌　同（同）

浪花人の誰レ彼レ寄りて西鶴忌　同（同）

夢の世を繪もやうにしつ西鶴忌　同（同）

西鶴も石にて訪へば哀れなり　同（同）

太閤忌（たいかふき）（中）　秀吉忌（ひでよしき）

季題解説　陰暦八月十三日。豐臣秀吉の忌日をいふ。秀吉は幼名日吉丸。通稱藤吉。初め氏を木下といひ、後に羽柴、更に豐臣と改む。天文五年正月朔日尾張愛知郡中村に生る。群雄割據の世に出でゝ蒼々海内を統一し、更に兵を朝鮮に派し諸道を征服したる覇業は世人周知の事なれば今玆に詳述せず。其征韓に際し關白職を甥の秀次に讓りて自ら太閤と稱す。慶長三年八月十三日伏見城に薨ず。年六十三。京都阿彌陀峰に葬る。朝廷詔して正一位を贈らる。

例句

太閤忌　桃山の棟に風落つ十三夜　青々（倦鳥）

太閤記　唐冠のあと着る人も無りけり　青々（倦鳥）

支那の圖を扇にせしが忌日かな　同（同）

諸大名のまことに泣きし此夜かな　同（同）

大坂の艸の恨ぞ思はるゝ　同（同）

素堂忌（そだうき）（中）

季題解説　陰暦八月十五日。素堂は山口氏。名は信章。通稱官兵衞。字は子晋。甲斐北巨摩郡教來石村字山口に生れ、江戸に出でゝ經學を林春齋に學び、洛に遊びて連歌俳諧を北村季吟に問ひ、江戸に歸りて東叡山下にト居し、後葛飾に移居して葛飾隱士と號せり。別に來雪、今日菴等の號あり。芭蕉と志を同うして正風の大旆を樹し別に葛飾風なる一派を開けり。享保元年八月十五日歿す。年七十五。東京谷中感應寺に墓あり。句集に「素堂家集」あり。

例句

素堂忌　葛飾の隱士の風よ艸の月　青々（倦鳥）

素堂忌やその句類せず頼もしき　同（同）

義經忌（よしつねき）（初）　判官忌（はうぐわんき）　義經會式（よしつねゑしき）

季題解説　八月十五日、洛北鞍馬寺にて行はるゝものにして、此行事は昭和五年より起り、新たに組織されたる鞍馬山義經公頌讃會の事業の一つなり。八月十五日を何故其忌としたるかは不明なり。たゞ鞍馬山と義經と密なる關係あるにより此一會式の起れるものにして、式は一切本堂にて執行され、正面に義經公の畫像を揭げ、勸請・讃歌合唱・獻供花・慰靈文供養・誦經等の法樂あり、後主貫以下一山の僧侶に依つて灑淨式あり、合圖の太鼓にて十人の諸太夫圓座に着き、次いで冠者卽ち牛若丸に扮するもの中央に、その上手に父なるもの着席、更に理髮、烏帽子親（尊者）たるもの厚帖に着き元服式あり、次に更衣の式あり、後に饗宴の式ありて元服の式全く了り、最後に社參の式ありて義經忌を終る。全所要時間約二時間なりといふ。（昭和五年九月發行、雲母第二十八卷第九號所載佐々木三味抄稿「鞍馬寺の義經忌」に據る。）

例句

判官忌　みちのくの高館あはれ判官忌　青々（倦鳥）

蕃山忌（ばんざんき）（中）

季題解説　陰暦八月十七日。蕃山は元和五年己未京都五條に生る。熊澤氏。諱は伯繼。字は了介。蕃山と號し又息遊軒といふ。大儒なり。元祿四年辛未八月十七日歿す。享年七十三。下總國古河の大堤村鮭延寺に葬る。明治四十三年十一月三日朝廷特旨を以て正四位を追贈せらる。

例句 蕃山忌

志野にも優游蕃山忌　青々（倦鳥）

定家忌（中）

季題解説 陰暦八月二十日。藤原定家は俊成の子にして和歌を以て聞ゆ。御鳥羽上皇勅して源通具・藤原家隆・雅經と共に新古今和歌集を撰ばしむ。後堀河天皇勅して新勅撰和歌集を撰せしむ。仁治元年八月二十日薨ず。年八十。

例句 定家忌

定家忌や芒に欠けし月一ツ　青々（妻木）

定家忌や雪白妙に峰の上　石羊（京鹿子）

藤樹忌（中）　近江聖人忌

季題解説 陰暦八月二十五日。藤樹は慶長十三年戊申三月七日近江國高島郡小川村に生る。中江氏。諱は原。字は惟命。與右衛門と稱す。嘿軒又は顧軒と號せり。嘗て學を藤樹の下に講ぜしを以て人呼んで藤樹先生と云ひ、又推尊して近江聖人と稱す。慶安元年戊子八月二十五日歿。享年四十一。鄕地小川村玉林寺の側に葬る。明治四十年十月二十三日朝廷特旨を以て正四位を追贈せらる。

例句 藤樹忌

藤樹忌に遺愛の藤の夜寒かな　青々（寶船）

水よりす藤樹の藤の夜寒頃　同（倦鳥）

吉野太夫忌（中）　吉野忌

季題解説 陰暦八月廿五日。吉野は京の六條三筋町の遊女にして、名を德子と云ひ、和歌に巧みに、佐野紹益（通稱灰屋三郎右衛門、豪富にして風雅を好み文思あり）の妾となり、深く鷹ヶ峰常照寺日乾上人に歸依し、同寺の爲め總門を建て之を寄進す。寛永八年八月廿五日歿。年三十一。常照寺に葬る。

例句 吉野忌

吉野忌やあたりゆかしき鷹か峰　青々（倦鳥）

吉野忌や蟹杯は伊勢に見し　同（同）

下り月遊女吉野の忌日かな　同（同）

許六忌（中）　五老井忌

季題解説 陰暦八月廿六日。許六は森川氏。名は百仲。字は羽官。近江彦

根の藩士にして、初め談林の田中常矩に學び後蕉門に入る。又畫に巧みに文を能くし、同地に於ける蕉門の巨擘なり。五老井・菊阿佛・琢々庵・無無庵・横斜庵・如石斎其他數號あり。正德五年八月廿六日癩疾を病て歿す。年六十。辭世

一時打破屎糞壺　芬々臭氣供二梵天一

下手ばかり死ぬる事ぞと思ひしに
　上手も死ればくそ上手なり

同地驛が原の別墅五老井に葬り、長純寺に供養塔を建つ。撰著に「韻塞」「篇突」「宇陀法師」「風俗文選」「十三歌仙」「正風彥根躰」「和訓三體詩」「歴代滑稽傳」等あり。句集を「五老井發句集」といふ。

例句

許六忌　許六忌に湖東の俊をあつめけり　小酒（倦鳥）

竹田忌（中）

季題解説 陰暦八月廿九日。竹田は田能村氏。名は孝憲・字は君彝・行藏と稱す。豐後岡の人。家世々藩醫なり。江戸の古屋昔陽、居東海に從ひて專ら經藝を攻め傍ら書法を谷文晁に學ぶ。畫は明淸人の遺蹟を研究して一家の畫風を作し、又詩文を能くし喫茶香道の技に至るまで究得せざるなし。別に雪月書堂・補拙廬等の號あり。後致仕して數々京阪に往來し諸名士と交遊す。天保六年八月廿九日大阪に病死す。享年五十九。南寺町淨春寺に葬る。

高臺寺殿忌（晩）　高臺院忌　高臺忌

季題解説 陰暦九月六日。豐臣秀吉の夫人高臺院の忌日をいふ。高臺院は尾張の人、木下肥後守定利（初名杉原助左衞門）の女にして、淺野彌兵衞の養女となる。幼名ねゝ、後に寧子と云ひ、又吉子と名づく。豐公の北政所として秀才賢婦を以て著はれ、常に秀吉を戒めて昔日の苦境を忘れしめざりしといふ。後に准三后從一位に叙せらる。秀吉の薨後薙髮して高臺院湖月尼といひ、京都三本木に住し秀吉の冥福を祈る。德川家康厚く優遇して養老の料一萬六千石を賜ひ、且つ高臺寺を建てゝ之を授く。寛永元年九月六日薨ず。年七十六（一説八十三歳）高臺寺に葬る。

例句

高臺寺殿忌　高臺寺蒔繪の壇に忌日かな　青々（倦鳥）

高臺忌　大阪の落つ火むかしや高臺忌　同（同）

廣重忌（晩）

季題解説 陰暦九月六日。廣重は安藤氏。通稱德兵衞。江戸の人にして、

歌川豐廣の門に入り、浮世繪を能くし、就中風景畫に長ぜり。一立齋・又立齋と號す。安政五年九月六日歿す。享年六十二。淺草新寺町東岳寺に葬る。

例句 廣重忌　五十三驛舊路の霧や廣重忌　青々（倦鳥）

蓼太忌（晩）

季題解説 陰曆九月七日。蓼太は大島氏。名は陽喬。信濃下伊那郡大島の産にして、少壯江戸に出で藤屋平助と稱し、幕府の御縫物師をつとむ。俳諧に志してより雪中庵二世吏登の門に入り、遂に雪中庵の名蹟を繼ぎて其三世となる。稀世の才人にして松平不昧・松平天府・安藤婆心等の諸侯をはじめ門人三千に餘り、其生活眞に豪奢を極め業俳として海内無雙の名を得たり。天明七年九月七日歿。年七十。深川要津寺に葬る。撰著に「一無門關」「續其袋」「雪颪」「芭蕉句解」「七部搜」「七柏」「天狗問答」「住吉千句」「百羽搔」等あり。句集に「蓼太句集」あり。

千代尼忌（晩）

季題解説 陰曆九月八日。千代尼は加賀國松任の表具師福增屋六左衞門の女にして、金澤藩の足輕福岡某に嫁せしが數年にして夫に死別して剃髮し、俳諧に精進し、初め支考に就き、支考歿後其高弟盧元坊に師事せり。又畫を京都の彭百川及び越後の吳俊明に學びて妙趣あり。晩年素園と號し、安永四年九月八日歿す。年七十三。金澤專光寺に葬る。「千代尼句集」あり、世に行はる。

例句 千代尼忌　松任の尼の忌にあふ野菊かな　小酒（倦鳥）

勾當内侍祭（晩）

季題解説 陰曆九月八日夜、江州堅田の田中にて行はる。勾當内侍は新田義貞の妻なり。實名詳ならず。義貞屢忠を南朝に致す。因りて帝その鍾愛する所の勾當内侍を賜ひて妻と爲さしむ。義貞の越前金ケ崎に出陣するや、勾當内侍安否を憤ひ、愛慕の情に禁へず、單身以て越前に赴く。堅田に於て義貞の戰死するを聞き、悲痛の餘遂に近江の湖に投じて死す。土人竹内某等之を湖中の一小島に葬れりと云ふ。或は曰く、嵯峨に庵を結びて尼となると。

例句 勾當内侍祭　八日月入り方早し堅田の田　青々（倦鳥）
堅田の田水の夜寒に忌日かな　同（同）

勾當内侍祭

藤島のあとは湖水の藻屑かな　青々（倦鳥）
堅田の田見やる計りも手向かな　同（同）
崑織るに塚は尋ねし内侍の忌　同（同）

桃水忌（晩）

季題解説 陰暦九月九日。桃水は肥後の人。攝州法巖寺の住僧なり。洞水・雲渓ともいふ。外貌意の如くにして内甚だ聰敏なり。流長院の闇嚴鐵公に師事し、偏く宗匠に參ず。初め島原の向東寺に住せしが意に適はず、退て肥後の河尻に盧すること八年、後法巖寺に棲む。四方の禪侶風を聞て來り赴く、一朝潜に逃れて如く所を知らず。其後京都に至り、或は傭奴となり或は乞兒となる。一日雲山白公第五橋上を過ぎ、渓の簑を荷て菜を賣り去るを見る。白乃ち後を追ひて其の家に到る。渓老嫗と斧を同くして飯を喫す。白を見て喜び共に往時を談じて去るといふ。天和三年九月九日寂。享年不詳。

例句　桃水忌

逢坂のどこに住みしぞ桃水忌　青々（倦鳥）
身を土芥にして怪しまず桃水忌　同（同）
たゞ輕し住むは捨つるよ桃水忌　同（同）

去來忌（晩）

季題解説 陰暦九月十日。去來は向井氏。名は元淵。諱は兼時。通稱平次郎、又治郎太夫。肥前長崎の人。世々儒家にして聖堂の祭酒（今の大學總長の如きもの）なり。萬治元年父に從て京に出で武を業とし、嵯峨の小倉山の麓に別墅を結びて落柿舍と號す。後此舍を毀ち、鴨東聖護院村に家を營み、爰に妾を置きて一女を生めりと傳ふ。其性篤實。其句溫籍にして實に關西に於ける蕉門の重鎭なりき。寶永元年九月十日歿。享年五十三。洛東眞如堂後山の墓地に葬る。撰著に「猿蓑」「渡鳥集」あり。遺稿として後年の刊行に係るものに「伊勢紀行」「湖東問答」「去來抄」「花實集」「旅寐論」「去來文」「去來三部集」等あり。

例句　去來忌

去來忌や蝕み古き弓の弦　露月（露月句集）
去來忌や昨日の雛の小盃　同（同）
丈草にいたみし人の忌日かな　虛子（虛子句會）
去來忌や少ヤ芳醇をあたゝむる　小酒（杉の實）
去來忌や實に十日の菊の主　青々（妻木）
嵯峨山や去來の忌日人知らず　同（倦鳥）

若冲忌（晩）

季題解説 陰暦九月十日。若冲は伊藤氏。初名春教、後に汝鈞、字は景和、別に斗米庵と號す。京の人。初め狩野家を學び、後に元明の古蹟を摹修し、又光琳の筆意を混じて一流の畫風を出せり。人物山水草花鳥獸等を能くし殊に鷄畫に巧みなり。寛政十二年九月十日歿。享年八十五。深草石峰寺に葬る。

例句

若冲忌

深艸に忌あり若狭屋忠兵衞　青々（倦鳥）
若冲忌頑石を見に山に行く　同（同）

保己一忌（晩）

季題解説 陰暦九月十二日。保己一は本姓荻野氏。後に師雨富須賀一の本姓なる塙を冒す。幼名辰之助、後千彌、保木野一と稱し、更に保己一と改む。武藏國兒玉郡保木野村の産。五歳より肝を病み、七歳明を失ふ。寶暦十年江戸に出で、雨富撿挍須賀一の門に入り、又國書を萩原宗固に學び、後賀茂眞淵に從ふ。水母子と號す。天明三年撿挍に進み、文政四年總撿挍となる。群書類從編纂の大業を完成せる外編著頗る多し。文政四年九月十二日歿。年七十六。四谷南寺町醫王山安樂寺に葬る。同寺後ち廢頽に歸せるを以て明治三十一年隣地愛染院に改葬せり。

白雄忌（晩）

季題解説 陰暦九月十三日。白雄は加舍氏。名は吉春。通稱五郎、又五郎吉といふ。信濃上田藩加舍六右衞門の次男と傳ふ。少壯松露庵烏明に學び昨烏と號し、後烏醉の直門となれり。江戸に住し別に春秋庵の號あり。門人非常に多く同地中興俳壇の雄なり。寛政三年九月十三日歿。享年五十三（又五十七）と傳ふ。品川海晏寺に墓あり。撰著に「俳諧寂栞」「春秋稿」「文車集」「白雄夜話」等あり。句集に「白雄句集」あり。

乃木祭（中）　乃木忌

季題解説 九月十三日、明治天皇御大葬の日殉死せし、乃木希典夫妻の忌なるを以て、其忠烈義節を弔するため、東京赤坂乃木神社をはじめ其他の乃木神社にて祭典を行ふ。（新）

例句

乃木祭

その時はたゞ愕きよ乃木祭　青々（倦鳥）
伏見山に心小ム日なり乃木祭　同（同）
すめらぎの日の本なれや乃木祭　同（同）

乃木祭　子作りの畑かしとや乃木祭　菩絆（きつき）
乃木祭の兵士にもまれ出でけり　鐵洲（若竹）

雲濱忌（うんぴんき）（晩）

季題解説　陰暦九月十四日。雲濱は梅田氏、名は定明。源次郎と稱す。若狭の人。安政四年勤王攘夷論を唱へて捕へられ小笠原左京太夫殿御預中、安政六年九月十四日病死す。年四十四。

鳥羽僧正忌（とばそうじやうき）（晩）　覺猷忌（かくいうき）

季題解説　陰暦九月十五日。鳥羽僧正は醍醐天皇第六の皇子、西宮左大臣高明公四世の孫、宇治大納言源隆國の九子にして名を覺猷といふ。天台座主又は三井寺の長吏となり、後山城國鳥羽に住せしを以て鳥羽僧正とよぶ。專ら倭畫を能くし自ら一家を作す。方今世俗に戲畫を呼んで鳥羽繪といふ、畫風より出でたるなり。保延六年九月十五日寂す。歳八十八。

覺猷忌　痛世の畫弟子數多や覺猷忌　青々（倦鳥）
蛙等も兎も出でよ覺猷忌　同（同）

松花堂忌（しようくわだうき）（晩）　昭乘忌（せうじようき）

季題解説　陰暦九月十八日。松花堂は南都一乘院の坊官中沼左京の弟にして、城州男山の僧、瀧本坊に居り昭乘といふ。初め惺々翁と號し晩に松花堂と號す。幼にして書を青蓮院尊朝法親王に學びて御家流を能くし、中頃大師の流を習ふ。畫は狩野山樂・同山雪に學び、中頃因陀羅の風に移る。後ち共に其範圍を透脱して別に一家をなし出藍の譽あり。書の如き松花堂流と稱せられ、寛永三筆の一に列せり。晩に男山の南阜に方丈室を構へ逍遙自適す。寛永十六年九月十八日寂す。年五十六。

例句　昭乘忌　閑談の繪も世に見ゆれ昭乘忌　青々（倦鳥）

露月忌（ろげつき）（中）　南瓜忌（かぼちやき）　山人忌（さんじんき）

季題解説　九月十八日。姓は石井氏。名を祐治といひ、秋田縣河邊郡戸米川村女米木に生る。上京して子規の知遇を得、新聞記者となり、京都東山病院の醫員たりしが、一度歸郷す。後再び出京醫を志し、新聞小日本の記者となりしが病を得て歸郷す。後再び出京醫を志し、京都東山病院の醫員たりしが、辭して郷里に歸り醫術を開業、傍ら俳誌俳星を發行して其主筆たりしが後あらためて雲蹤を刊行し、子規派の正調を唱導し俳壇の重鎭たり。自ら露月山人と稱し、又南瓜の愚鈍に似たるを好み

南瓜道人とも稱せり。昭和三年九月十八日歿。享年五十六。歿後「露月句集」刊行せらる。（新）

例句

露月忌　露月忌に寰ふ時雨の浪花の夜　鼓竹（倦鳥）

子規忌前一日秋や露月の忌　同（同）

（二十一は九月十八日なり）

露月忌に種まじりなる桔梗挿す　同（同）

露月忌や吉野時雨をまのあたり　露木（懸葵）

露月忌や塵もとゞめぬ玉龍寺　千嶽（芝蘭）

露月忌に參る道なる芒かな　汀波（俳星）

山人忌　門前の柳時雨れよ山人忌　疎竹（芝蘭）

子規忌（しきき）（中）　糸瓜忌（へちまき）　獺祭忌（だつさいき）

季題解説　九月十九日。子規は正岡氏。幼名は虎之助、又昇といふ。父は伊豫松山藩士、隼人といひ、母は大原氏の出なり。明治五年（六歳）父を亡ひ、七歳にして寺小屋に入り習字漢籍を學び、十三歳にて松山中學に入り、後退學、十七年（十八歳）大學豫備門に入る。二十年七月歸省し、三津濱に大原其戎を訪ひ俳諧を問へり。此年常盤會寄宿舍成りて入舍し、二十二年五月九日の夜初めて喀血し、爾來子規と號せり、二十四年冬より俳句分類の大業に着手し、二十五年二月上根岸に移居す。（因に現に子規庵のある八十二番地に居を定めしは是より後の二十七年二月一日なり）此年學年試驗に落第せしが、十二月一日日本新聞に入社す。其日本新聞入社は實に明治俳壇構成の第一歩なりき。二十八年三月三日日清戰役に從軍記者として東京を發し、金州等に馳驅し、五月十七日歸國の船上に於て發病し喀血やまず、二十三日神戸和田岬に歸着、神戸病院に入院、七月二十三日須磨保養院に移り、病勢漸次鎭靖し、八月二十日須磨出發、松山へ歸郷、十月三十日東京に歸着せり。三十年一月郷の同人柳原極堂により雜誌ホトヽギスの刊行を見たりしが翌年十月發行所を東京に移し其主幹たり。子規は專ら俳句界の革新に力を注ぎ、特に天明中興の俳豪蕪村の句を唱導して蕪村句集講義を輪講し、ホトヽギス誌上に續載し、又病臥執筆指導を怠らず終に天下の俳壇を風靡したり。また轉じて和歌革新をも志せしが病勢漸次に進み、明治三十五年九月十九日歿す。歿する前日

糸瓜咲て痰のつまりし佛かな

をとゝひの糸瓜の水も取らざりき

痰一斗糸瓜の水も間に合はず

の三句を揮灑し終に絶筆となれり。享年三十六。廿一日田端の大龍寺に葬る。著書として行はるゝものに「俳諧大要」「獺祭書屋俳話」「子規隨筆」「續子規隨筆」等其他數種あり。生前に自選句集「獺祭書屋俳句帖抄上卷」の

刊行を見しが、下卷は終に出でず。歿後高弟虚子・碧梧桐共選の「子規句集」出で、返く「子規全集」出でゝ完全に其作品の結集を見たり。子規忌の例句は子規の明治俳壇復興を援けて直接之に參與したる功勞者即鳴雪、虚子、碧梧桐、四方太、牛伴、紅綠、鼠骨、飄亭、露月、露石、別天樓、青々

其他の諸氏の句を掲出すべく「ホトヽギス」其他の諸書を捗獵し、漸く左記の數句を得たるも其盡くを得難きを遺憾とす。

實作注意　獺祭忌獺祭書屋主人とも號したる故にいふ。糸瓜忌糸瓜三句を絶筆として逝きし故にいふ。

例句

子規忌

下手な句を作れば叱る聲も秋　鳴雪（ホトヽギス）

子規三回忌

このあたりの草花折り來糸瓜佛　露月（露月句集）

天下の句見まもりおはす忌日かな　碧梧桐（續春夏秋冬）

三十年この道遠き子規忌かな　月斗（同人）

三回忌（以下三句）

蘭二年さびしさなるゝ几　青々（寶船）

栗飯の趣向古りたり三回忌　墨水（同）

さびしさや魂祭る日の思ひ草　露石（同）

南無絲瓜われに悲しき十九日　同（ホトヽギス）

落語など致さうか鷄頭の花のもとに　墨水（同）

獺祭忌

門葉の亂れもすこし獺祭忌　虚子（虚子句集）

十八年感あらたなり獺祭忌　別天樓（生來紅）

糸瓜忌

糸瓜忌や叱られし聲の耳にあり　八重櫻（續春夏秋冬）

子規忌ひと日竹の里歌よみにけり　鬣樓（倦鳥）

舊人舊の如く新人多き子規忌かな　青々（同）

子規忌三十年

秋風の三十年はたゞ過ぎぬ　同（同）

秋風やその後苦吟三十年　同（同）

三十年けふも同じく柿青き　同（同）

遊行忌（ゆぎやうき）（中）　一遍忌（いつぺんき）

季題解說　九月二十二日（もと八月二十二日）。時宗の開祖一遍上人の忌日をいふ。一遍又遊行上人ともいふ、名は智眞、姓は越智氏、伊豫の人、河野通廣の第二子なり。七歳出家し、同國天台宗繼教寺に入り、十五歳緣教律師に就きて得度し、法名を隨緣と稱す。後淨土宗の僧聖達筑紫太宰府に在るに就きて學ぶこと十二年、轉じて善光寺に參籠すること三年、建治三年熊野に參籠し、遂に融通念佛を唱道す。これより弘法のため諸國を遍歷

することと十六年、其の足跡全國に遍し。正應二年八月兵庫西月山眞光寺に寂す、年五十一。後年上人をしのびて忌日を營むなり。

言水忌（ごんすいき）（晩）

季題解説 陰暦九月二十四日。言水は池西氏。名は則好。通稱八郎兵衛。奈良の産にして始め江戸に出で、後京都に移る。松江重頼の門人にして談林風に移り、晩年は蕉風に近づけり。嘗て「木枯の果はありけり海の音」の句を吐きてより木枯の言水とよばる。別に紫藤軒・風下堂の號あり。享保七年九月二十四日歿す。年七十三。墓は京都新京極六角下の誠心院に在り。撰著に「東日記」「京日記」「初心もと柏」其他數種あり。句集に「言水句集」あり。

南洲忌（なんしうき）（中）　西郷忌（さいがうき）

季題解説 九月廿四日。西郷隆盛の忌日をいふ。隆盛は薩摩國鹿兒島の人。幼名吉之助。南洲と號す。幼にして豪放不羈人を凌ぐの概あり。早くより藩主島津齋彬の近侍となりて其知遇を受け、後江戸に出で、諸名士の間を往來す。明治維新三傑の一人。官は近衛都督を兼ね陸軍大將に至り威望天下に重し。明治六年征韓論に關して岩倉具視、木戸孝允と諧はず、冠を挂けて故山に歸り、同十年子弟の擁する所となり新政厚德の幟を飜へし、總軍一萬五千に將として東上の途に就きしが軍利なくして九月廿四日鄕里城山に自盡す。年五十。同二十二年二月十一日朝廷特赦して其賊名を除き、正三位を贈る。

例句

南洲忌　勳業はただ人知るや南洲忌　青々（倭　鳥）
　　　　その大を國に忘れじ南洲忌　同（同　）
西郷忌　赤心の斯くや成りゆく西郷忌　同（同　）

光起忌（みつおきき）（晩）

季題解説 陰暦九月廿五日。光起は土佐宗家の畫家なり。土佐光則の男にして、宮中畫所預となり從五位下左近將監に任ぜらる。貞享二年剃髮して法眼に叙せられ常照といふ。春可軒の號あり。元祿四年九月廿五日歿。年七十五。京北百万遍に葬る。

素行忌（そかうき）（晩）　甚五右衛忌（じんごゑきき）

季題解説 陰暦九月廿六日。素行は山鹿氏。名は高祐、字は子敬、甚五右衛門と稱す。陸奧の人。林羅山の門に入りて儒學を修め、又北條氏長に就きて韜略を學び一派の兵學を唱へ山鹿流と稱す。著書數部あり。貞享二年

九月廿六日歿す。年六十四。江戸牛込榎町宗參寺に葬る。明治四十年十月朝廷特旨を以て正四位を贈らる。

例句

甚五右衛忌　一人の弟子に名は足る甚五右衛忌　青々（倦鳥）

宣長忌（晩）　鈴の屋忌

季題解説　陰曆九月二十九日。宣長は本居氏。通稱彌四郎、後健藏・春庵・中衛等と改む。伊勢松阪の人。家業は醫なり。賀茂眞淵に道を問ひ、家に三十六の鈴を懸て往々之を鳴らし以て悶を遣る。故に號を鈴の屋といふ。國學の大家にして著書甚多く特に古事記傳は畢生の大著述なり。享和元年九月廿九日歿。年七十二。同地妙樂寺の山室山に葬る。

例句

宣長忌　宣長忌きゝしみくにの手ぶり哉　青々（倦鳥）

夢窓忌（晩）

季題解説　陰曆九月三十日。夢窓國師は伊勢の人。名は疎石。木訥叟また夢窓と號す。宇多天皇九世の孫裔なり。諸國に流浪して修行し、曆應三年足利尊氏京の嵯峨に天龍寺を建立するに方り入りて開山となり叢林の淸規を行ふ。國師は林泉を作るに妙を得、天龍寺の庭、西芳寺の庭等は遺作の尤なるものなり。觀應二年九月三十日、京の三會院（臨川寺）に於て遷化す。年七十七。

例句

夢窓忌
夢窓忌や林泉に冬來てありぬ　青々（倦鳥）
夢窓忌や萩の落葉に川風が　同（同）
夢窓忌に彼の亮座主の墓はしき　同（同）

道詮忌（晩）

季題解説　陰曆十月二日。福貴の道詮和尚は武州の人。初法隆寺に居り、三論を學ぶ。かの眞如法親王は道詮に歸依して三論を受け給へり。道詮夢殿の荒廢を嘆き、修覆をかふ。今夢殿北壇に其像を安置す。道詮又法隆寺に近き福貴村に福貴寺を草建して之に居る。貞觀十八年十月二日寂。

例句

道詮忌
（道詮）を修して
秋雨や歸依に寄ゝ老の冠りもの　千曆（倦鳥）
實を結ぶ萩の山見て道詮忌　同（同）
斑鳩の月をひがしに道詮忌　同（同）
この道をしたひて今日の道詮忌　玉水（同）

ことし梅の花に訪ひしが道詮忌　青々（倦鳥）

御命講（晩）　御會式　會式　日蓮忌

おめいかう　おゑしき　ゑしき　にちれんき

［季題解說］法華宗の開祖日蓮の忌日を修する法會。又御會式・會式・御影供等ともいふ。式は十月（もと陰暦）八日より始まり十三日の日蓮正忌日を以て終る。此の間日蓮宗の信徒はこぞつて同宗の諸寺に參詣するもの多く、中にも日蓮終焉の地たる池上本門寺、堀ノ内妙法寺は、信徒花を飾りたる萬燈をおし立て、太鼓を叩き題目を唱へつつ群集し、夜を徹して止まず。日蓮は安房小湊の人、十六歳薙髪して蓮長と稱し、後日蓮と改む。比叡山に入り天臺眞言の奧義を極め、又南都・高野・天王寺等を巡りて研學十二年、遂に法華のみ眞に釋尊の教なることを覺る。建長五年叡嶽を下りて以後此の教を說く。當時立正安國論を草して北條時頼に呈したれども省みられず、爾後益々諸宗を誹謗せるため、時宗の命により鎌倉に斬られんとせしも、減刑せられて佐渡に流さる。後ゆるされて身延に住し、弘安五年十月十三日東北に向ふ途次池上に病を得て寂す。年六十一。御命講は冬季なり、唯所により新暦を採用するあれば便宜の爲かかぐるのみ。

［例句］御命講

瓔珞の紙のさくらやお命講　蓬丈（ホトトギス）

御取越（晩）

おとりこし

［季題解說］十月二十八日（もと陰暦）。一向眞宗の開祖親鸞上人の忌日は十一月二十八日にして、同日法要を營むべき報恩講と抵觸するため、特に繰り上げ又は繰り下げ、十月、或は十二月に法會を行ふこととせり、これを御取越といふ。本寺にては三晝夜これを修し、在家にては檀那寺の僧を招きて之を營む。親鸞名は善信、愚禿と號す、日野有範の長子にして承安三年四月生る。九歳慈圓の門に入り、薙髪して範宴といひ北嶺に上りて受戒す。爾來叡山にありて天臺の奧義を極め、後二十九歳の春源空に遇ひて、其教を受く。三十五歳の時師源空其の教の驕激の故を以て土佐に流され、親鸞亦高足の故を以て越後國府に配せらる。建暦元年赦免に逢ひてより、關東を化導すること二十年、後京に歸り、弘長二年十一月二十八日入寂す。御取越は冬季なり、御命講と同理由にて揭ぐ。［參照］冬―報恩講（ハウオンカウ）

紅葉忌（晩）

こうえふき

［季題解說］十月三十日。紅葉は尾崎氏。名は德太郎。江戸芝區に生る。明治十八年大學豫備門在學中、同志と共に硯友社を創始し、これより多くの小說を作る。硯友社は二十八九年に至るまで我文學界の一大勢力にして、就中嶄然頭角を抽んでたるものに紅葉なりき。晩年には「多情多恨」、「金

色夜叉」等を出して世間の賞讃を博せり。俳諧は談林風を愛好し、紫吟社を興し、後秋聲會にも列し、俳號を十千萬堂と稱す。明治三十六年十月三十日歿す。享年三十七。青山共同墓地に葬る。小説の外俳諧に關する編著數種あり。句集に「紅葉句帖」其他二三種あり。

例句

紅葉忌　萩の葉の埃になるや紅葉忌　智佳太（倦鳥）

官幣社例祭表（秋季）

官幣大社例祭

神社	祭日	祭神	鎭座地
氷川神社	八月一日	素盞嗚尊・稻田姫命・大己貴命	埼玉縣北足立郡大宮町
諏訪神社（下社）	八月一日	八坂刀賣命	長野縣諏訪郡下諏訪町
安房神社	八月十日	天太玉命	千葉縣安房郡神戸村
大鳥神社	八月十三日	大鳥連祖神	大阪府泉北郡鳳町
鹿兒島神宮	八月十五日	彦火火出見命	鹿兒島縣始良郡隼人町
筥崎宮	八月十五日	應神天皇	福岡縣糟屋郡箱崎町
三島神社	八月十六日	事代主命	靜岡縣田方郡三島町
樺太神社	八月廿三日	大國魂神・大己貴命・少彦名神	樺太廳豐原町旭ケ岡
鹿島神宮	九月一日	武甕槌命	茨城縣鹿島郡鹿島町
氣比神宮	九月四日	神功皇后外六神	福井縣敦賀郡敦賀町
生國魂神社	九月九日	生島神・足島神	大阪市天王寺區生玉町
竈山神社	九月十三日	彦五瀨命	和歌山縣海草郡三田村
石淸水八幡宮	九月十五日	譽田別尊・神功皇后・比賣神	京都府綴喜郡八幡町
石上神宮	九月十五日	布都御魂劍	奈良縣山邊郡丹波市町
霧島神宮	九月十九日	彦火瓊々杵尊	鹿兒島縣始良郡東襲山村
日前神宮	九日廿六日	日前大神	和歌山縣海草郡宮村

官幣中社例祭

神社	祭日	祭神	鎮座地
國懸神宮	九月廿六日	國懸大神	同
吉野神宮	九月廿七日	後醍醐天皇	奈良縣吉野郡吉野村
丹生川上神社（上社）	十月八日	高龗神	奈良縣吉野郡川上村
熊野速玉神社	十月十五日	熊野速玉神	和歌山縣東牟婁郡新宮町
丹生川上神社（中社）	十月十六日	罔象女神	奈良縣吉野郡小川村
丹生都比賣神社	十月十六日	丹生都比賣神	和歌山縣伊都郡天野村
朝鮮神宮	十月十七日	天照大神・明治天皇	朝鮮京城府南山
宮崎神宮	十月廿六日	神武天皇	宮崎市神宮町
臺灣神社	十月廿八日	大國魂命・大巳貴命・少彦名神・能久親王	臺北市大宮町
香椎宮	十月廿九日	仲哀天皇・神功皇后	福岡縣糟屋郡香椎村
八代宮	八月三日	懷良親王	熊本縣八代郡八代町
北野神社	八月四日	菅原道眞	京都市上京區馬喰町
鎌倉宮	八月廿日	護良親王	神奈川縣鎌倉郡鎌倉町
太宰府神社	八月廿五日	菅原道眞	福岡縣筑紫郡太宰府町
白峰宮	九月廿一日	崇德天皇・淳仁天皇	京都市上京區飛鳥井町
井伊谷宮	九月廿二日	宗良親王	靜岡縣引佐郡井伊谷村
英彦山神社	九月廿八日	天忍骨命	福岡縣田川郡彦山村
赤間宮	十月七日	安德天皇	下關市阿彌陀寺町
海神社	十月十一日	底津綿津見命・中津綿津見命・上津綿津見命	兵庫縣明石郡垂水村
伊太祁曾神社	十月十五日	大屋毘古神	和歌山縣海草郡西山東村
長田神社	十月十八日	事代主命	神戸市長田町

神社	祭日	祭神	鎭座地
吉備津神社	十月十八日	大吉備津彦命	岡山縣吉備郡眞金村
臺南神社	十月廿八日	能久親王	臺南市南門町

官幣小社例祭

神社	祭日	祭神	鎭座地
志賀海神社	九月九日	上津綿津見・中津綿津見・底津綿津見	福岡縣糟屋郡志賀島村
住吉神社	九月十三日	表筒男命・中筒男命・底筒男命	福岡市大字住吉

別格官幣社例祭

神社	祭日	祭神	鎭座地
藤島神社	八月廿五日	新田義貞	福井市岩堀町
豐國神社	九月十八日	豐臣秀吉	京都市東山區大和大路正面茶屋町
豐榮神社	十月一日	毛利元就	山口市野田
梨木神社	十月十日	三條實萬・實美	京都市上京區染殿町
北畠神社	十月十三日	北畠顯能	三重縣一志郡多氣村
靖國神社	十月廿三日	明治維新前及以來殉國者	東京市麴町區富士見町
唐澤山神社	十月廿五日	藤原秀鄉	栃木縣安蘇郡田沼町
照國神社	十月廿八日	島津齋彬	鹿兒島市山下町

動物

鹿（三秋）

か　かせき　すずか　すがる　紅葉鳥　小鹿　牡鹿　小男鹿
狹男鹿　牝鹿　女鹿　鹿の聲　鹿鳴く　妻戀ふ鹿　鹿の妻　友鹿
霜踏鹿　鹿の胸分　夢野の鹿（古）　鹿笛（事人）　鹿狩（事人）　鹿占（事人）　鹿聞く（事人）

古書校註

【山之井】鹿笛と云ひては、狸の腹鼓はやさせ、猿の舞をもまはせ、かいらうと鳴く聲に、萩の花づまの契りをやさしみ（一）、紅葉の錦着て、古郷を思ふかと憐み、又山田の引板のひたと追ふひゞき（二）、鹿は鳴子になれこにて驚かぬけしき（三）、弓射る獵師は山も見ぬ有樣、妻とふ鹿は命をもいとはぬ心ばへなどすべし。

【御傘】鹿一、かのこ一、すゞか一、誹にはロクと聲に讀みて今一、以上四也（四）。鹿角、雜也　鹿野園、雜也、尺敎也、居所也。但し鹿の園とすれば句體に依り、秋にも、生類にもなり、鹿四の内也。又鷲の山・鶴の林、名所にあらざる山の說を用ふる例ならば、鹿野園も佛所なれば名所にあらざるべし。鹿頭外道、人倫也、尺敎に非ず。鹿毛の馬・鹿の皮・鹿の毛筆皆雜なり、生類に非ず。かせぎ、鹿の異名也、秋也、又山のかせぎと枯木を云ふ事もあり、是は雜也。すがる、秋也。かのこ、夏也、聲としても夏也。かをさして、雜也。趙高が故事也。干鹿・藥くひの鹿、此こも雜也、或はしかすかの聲、或はいつしか鳴く、などゝ隱しても秋也。生類には二句、鹿四の内也。鈴鹿・鹿嶋等の名所の名は四の外也、生類にも非ず。乍去鹿の字には面を嫌ふ可きか。霜踏鹿などと秋なり。

【年浪草】詩に曰、呦呦鹿鳴、食二野之苹一。○スガル。カセギ。淸輔奥儀抄に曰、スガルとは、鹿を云ふ也、或物には若き鹿と申し、又サソカと云ふ蟲をスガルと云ふ。萬葉に「春さればすかるなく野のほとゝぎすほとほと妹にあはす來にけり」。是れ蜂也。○八雲御抄に曰、蜂をもスガルと云ふといへば鹿を以て正說となす。○躬恒祕藏抄に曰、スゞカとは雌鹿を云ふ。スガルとは牡鹿を云ふなり。○紅葉鳥は鹿の異名。藏玉「時雨ふる龍田の山の紅葉鳥もみちの衣着てや鳴くらん」順德院。○錦馬は異名也。又斑龍と云ふ。○鹿笛とは獵人鹿角の根及び胎鹿の皮或は蝦蟇の皮を以て笛を作り、吹いて牝鹿之音に僞る。牡鹿匍匐して來り竟に弶にかゝり、或は陷穽に入る云々。徒然草に曰、女のはける足駄にて作る笛には秋の鹿必ず寄ると云々。

○鹿垣(シヽガキ)は此の獸田圃に出でて穀菽を食ふ、農人之を防ぐ爲に垣籬を設く、之を鹿墻を云ふ。

註（一）例句「鹿の音も妻にかいらうの哀れ哉」をあぐ　（二）例句「ひたと逃はゞ薄の中なる鹿の聲」をあぐ　（三）「鹿かも鹿は鳴子になれし哉　正武」をあぐ。（四）これらの數はすべて百韻一卷中にあるゝを句數を示すなり

季題解說　反芻偶蹄類に屬する獸。四肢長く痩せ、頭部割合に小さく、毛は夏は赤褐色にして白斑あれど冬季は一般に灰褐色なり。牡は頭上に枝ある角を有す。春生じ、夏長じ、秋堅く、冬脫落す。牡鹿は鳴き、牝鹿は鳴かず。

實作注意　鹿の交尾期は秋にして此時期に至れば、牡は牝を呼ぶ爲めにピーッと長く強く、高き聲にて啼く、遠く聞く時は哀調を帶ぶ。古來妻戀ふ鹿の聲として詩歌に詠ぜらるゝもの多し。古は「しか」と云へば牡の事にて牝は「めが」と云ひ區別したり。又猪、鹿を共に「しゝ」といひ前者を「ゐのしゝ」鹿を「かのしゝ」と云ひたり。現今は、鹿垣、鹿狩の如き固有名詞となれるものゝ他は單に「しか」とのみ云ふ。

鹿笛　獵人の鹿を狩る時用ゆ。鹿角の根又は胎みたる鹿の皮等にて作ると云ふ。之を吹きて牝鹿の聲に倣せ牡鹿の寄り來るを陷穽　弶等に一一捕獲す。『徒然草』「女のはける足駄にてつくる笛には秋の鹿かならずよるとぞ言ひ傳へ侍る」などあり。蕪村の句に

秋の佛と云ふ題に
鹿の寄る下駄のあまりの佛かな　蕪村

狹牡鹿　小男鹿とも書す。牡鹿の事なり。サは發語にて狹莚・狹山に同じ。

夢野の鹿　「攝津風土記」「雄伴郡に夢野あり、父老傳へていふ、昔刀我野に牡鹿あり、その嫡と此野に居る、その妾の牝鹿淡路國野島に居る、彼牡鹿屢野島に往て妾と相愛す、いくほどなくして牡鹿來りて嫡の所に宿す。明旦牡鹿その嫡に語りて云、今夜吾背に雪ふりおけりと見き、又すゝき草生たりとみき、此夢何の祥ぞ、その嫡また夫の妾の所に向往べきを惡み乃ち詐り相して云、背の上に草生るは矢、背の上に射るの祥、又雪ふるは白鹽宍に塗の祥、汝淡路に渡らば必船人に射られて海中に死ん、謹て復往事なかれ、その牡鹿感戀に勝ず、復野島に渡る、海中行船にあひて終に射殺さる、故に此野を名づけて夢野といふ、俗說に刀我野に立る眞牡鹿も夢相のまゝに云々。

霜蹐鹿　「千首」「かりのこすいなは一むら霜置て岡べの道はさをしかの聲　稱名院」

かせぎ・すがる・すゞか・錄馬・斑龍は何れも鹿の異名なり。

〔參考〕人事—鹿の角伐(ツノキリ)　鹿火屋(カヒヤ)　鹿垣(シヽガキ)　春—孕鹿(ハラミジカ)、落し角(オトシヅノ)
夏—夏野の鹿(ナツノシカ)　鹿の子(カノコ)　鹿の袋角(シカノフクロヅノ)

例句

鹿　女夫鹿や毛に毛が揃うて毛むづかし　芭蕉（貝おほひ）

暮の山遠きを鹿の姿かな　其角（續虛栗）
臥處かや小萩に洩るゝ鹿の角　去來（有磯海）
鹿ずれの松の光や夕月夜　丈草（土大根）
朝鹿の身振ひ高し堂の椽　許六（篇突）
きら〳〵と濡れたる鹿に夕日哉　同（白扇集）
血をこぼす手負の鹿や薄原　同（正風彥根躰）
動かすは鹿や角磨ぐ松の下　杉風（杉風句集）
飛ぶ鹿も寐てゐる鹿も思ひ哉　桃隣（一の木戶）
夜嵐よ尻吹送れ峯の鹿　惟然（鳥の道）

嚴島に詣

鹿共や礒に吹るゝ角の跡　同（八景集）
尻斗り照られて立つや秋の鹿　野坡（山柑子）
月代に吃と向ふや鹿の胸　木導（讀畫）
鹿の目の朝日に向ふ高根かな　同（蝶姿）
淋しさは尻から見たる鹿の形（なり）　同（去來抄）
旅枕鹿の突合ふ軒の下　千里（壤蕢）
吹からに鹿ぞうつむく山颪　句空（卯辰集）
富士の野や鹿臥す床の片下り　凡兆（柞原）
近江路やすかひに立る鹿の丈　土芳（炭俵）

人の需によりて

鹿の踏む跡や硯の躬恒形　素竜（炭俵）

奈良の鹿

番の灯を便りに寐るや鹿の形（なり）　探志（有磯海）
振上げて芒に立つや鹿の角　野明（同）
明ぬとて鹿や伏せ行く角がしら　野紅（きれ〴〵）
鹿の目の朝日に向ふ高根かな　李由（白扇集）
起ざまにまそつと長し鹿の足　杜若（去來抄）

嵯峨の晩望

鹿ながら山影門に入日哉　蕪村（蕪村句集）
雨の鹿戀に朽ぬは角ばかり　同（同）
鹿寒し角も身に添ふ枯木哉　同（同）
鹿の寄る下駄のあまりの佛かな　同（發句題苑集）
山鳥の騷ぐは鹿の渡るかも　曉臺（曉臺句集）
あなう〳〵射よげに見ゆる萩の鹿　同（同）
濡鹿に有明の月の光かな　同（同）
岩端にいとゞ憔（やつ）れて雨の鹿　闌更（半化坊發句集）
數十疋峰越ゆくや鹿の聲　同（同）
行鹿の萩にうたるゝ野風かな　白雄（白雄句集）
鹿の跡見よや葛葉の裏表　同（同）

鹿

牛の子の鹿見て逃る月夜かな　白雄（白雄句集）
絶ずしも濱へ下りし月の鹿　同（同）
鹿寒く月の輪殿の寐覺かな　召波（春泥發句集）
鳴川の戸に寄る鹿や下駄の音　同（同）
濡色に起行く鹿や草の雨　同（同）
身は痩せて草嚙む鹿の思ひかな　同（同）
おろ〳〵と人に見えけり曉の鹿　成美（成美家集）
水音と鹿に又逢ふ山路かな　乙二（松窓乙二發句集）

松前の磯ありきして

指さして寒がらせうぞ岩の鹿　同（をのゝえ草稿）
住む鹿の菅は秣に刈られけり　同（同）
足枕手枕鹿の睦ましや　一茶（七番日記）
數島や深山の鹿も色好む　同（一茶發句集）
道もなき茅原に立てり明の鹿　梅室（梅室家集）
山端へ出ては戻るや雨の鹿　同（同）
霧あたりの人臥してをり鹿の宿　盧子（盧子句集）

男鹿

食堂の鐘を聞知る男鹿かな　許六（渡鳥集）

小鹿

十辻に宿りて

門立の袂くはゆる小鹿かな　其角（有磯海）
凧筋を角に受たる小鹿かな　木導（韻塞）
岩石に四足揃ゆる小鹿かな　汶村（有磯海）
里を見に出ては小萩に小鹿かな　りん女（西華集）

小男鹿

小男鹿や細き聲より此流れ　其角（雜談集）

白雲齋

小男鹿や芭蕉に夢の待合せ　同（五元集拾遺）
小男鹿や岩に踏張る雲の透　去來（白馬集）
小男鹿やころびうつたる蕎麥畑　許六（韻塞）
小男鹿のきつとねぢむく峠哉　涼菟（初蟬）
小男鹿や僧都が軒も細柱　蕪村（蕪村遺稿）
小男鹿の呼び下る月の尾上かな　闌更（半化坊發句集）
小男鹿や里へ屆かぬ聲を持つ　乙二（松窓乙二發句集）
笹山や小男鹿急ぐ夕間暮　巢兆（曾波可理）
小男鹿の片膝立て雲や思ふ　一茶（旅日記）
小男鹿は萩に糞して別れけり　同（七番日記）

鹿の聲

鳴門にて

鹿の音や渦に卷込む山颪　來山（續今宮草）

嚴島

回廊に潮滿ち來れば鹿ぞ啼く　素堂（素堂家集）
ひいと啼尻聲悲し夜の鹿　芭蕉（笈日記）

ふけかたを誰か御意得て鹿の聲　其角（焦尾琴）
啼鹿を椎の木の間に見付けたり　去來（笈日記）
夜嵐や空に吹とる鹿の聲　同（初蟬）

嚴島にて
滿潮の巖に立つや鹿の聲　同（青むしろ）
奥山や五聲續く鹿の聲　同（旅寐論）
北嵯峨や町を打越す鹿の聲　丈草（笈日記）
啼腫れて目ざしもうとし鹿の形（なり）　同（有礒海）
小雨たる絲より細し鹿の聲　許六（漢の花）

芭蕉翁追悼
鹿の音も入て悲しき野山哉　支考（枯尾花）
鹿の音の絲引はえて月夜哉　同（笈日記）

逸竹亭
鹿の音や竹を隔てゝ川傳ひ　同（國の華）
追上げて尾上に聞かむ鹿の聲　北枝（白陀羅尼）
あの松に細り退てや鹿の聲　同（桃盜人）
柴の戸に持て參るや鹿の聲　同（東六鳳）
いかにしても寐耳に鹿の不便なり　杉風（花見車）
淋しさや山は猶更鹿の聲　桃隣（古太白堂句選）
所々淋しうするや鹿の聲　野坡（田植鳥）
杉と杉木傳ふ聲や夜の鹿　木導（水の音）
嵯峨小倉落合うて鳴く小鹿かな　同（同　）
鹿の音の呼出す杉の嵐かな　涼菟（青むしろ）
南大門たて込まれてや鹿の聲　正秀（笈日記）
聲合す築地の内の女鹿かな　同（ねなし草）
道もなく横筋違に鹿の聲　諷竹（淡路島）
松風にふはと乘せたり鹿の聲　同（佛の兄）
いざ起て酒飲み給へ鹿の聲　羽笠（曠野後集）
友鹿の啼くを見返る小鹿かな　東來（炭俵）

西塔に宿して
明星や尾上に消ゆる鹿の聲　曲翠（有礒海）
尻すぼに啼くや夜明の鹿の聲　風睡（芭蕉庵小文庫）
哀れさや日の照る山に鹿の聲　萬平（鳥の道）
或僧の細き迷ひや鹿の聲　牧童（草苅笛）
寐もせいで我はなぜ啼く夜の鹿　智月尼（庵詰庵入日記）
藻屑掃く水も奇麗や鹿の聲　釣壺（田植鳥）
狀箱を胸に抱く夜や鹿の聲　怒風（雪薺集）
弓捨る案山子もあらん鹿の聲　也有（蘿葉集）
水の色赤うなりてや鹿の聲　千代尼（千代尼句集）

鹿の聲

夕暮を引あつめてぞ鹿の聲　千代尼　（千代尼句集）
茱萸の霜夜は早し鹿の聲　蕪村　（蕪村句集）
鹿啼て柞の梢荒れにけり　同　（同）
折あしく門こそ叩け鹿の聲　同　（同）
三度啼て聞えずなりぬ鹿の聲　同　（同）

ある山寺へ□聞に詣りけるに、茶を汲む沙彌の夜すがら眠らで有ければ、晋子が狂句を思ひ出でゝ

鹿の聲小坊主に角なかりけり　同　（同）
櫻さへ紅葉しにけり鹿の聲　同　（蕪村遺稿）
立聞の心地こそすれ鹿の聲　同　（同）
山守の月夜野守の霜夜鹿の聲　同　（同）
鹿啼や宵の雨曉の月　同　（同）
卯の花の夕にも似よ鹿の聲　同　（同）
戀風はどこを吹たぞ鹿の聲　同　（同）
窓の灯を山へな見せぞ鹿の聲　同　（俳諧新選）

岩倉にて雨に逢ひ、金藏寺大德の情に一夜の宿り免され、嬉しさに思上りて

笠脱げば鹿の聞きたき夜とぞなる　太祇　（太祇句選）
聞はづす聲に續くや鹿の聲　同　（太祇句選後篇）
鹿の聲尾花の末にかゝる哉　曉臺　（曉臺句集）
こけ猿も夜たゞ佗らむ鹿の聲　同　（同）
鹿の鳴音引結ぶ夢のたどり哉　同　（同）
病鹿や霜に狭りし明の聲　同　（同）
或夜獨り鹿の鳴音もむづかしや　同　（同）
鹿追ふや曉聲に雲を裂く　同　（同）
耳立て啼音に向ふ男鹿かな　闌更　（半化坊發句集）
啼止て鹿二つ行く谷間かな　同　（同）
山里や軒に來て啼く夜半の鹿　同　（同）
聲絕て足音近き小鹿かな　同　（同）
見廻して又啼にけり月の鹿　同　（同）
山ばなや立返りつゝ鹿の鳴く　同　（同）
啼絕て鹿のつくばふ夜明哉　同　（同）
聲晴し晝は別れて鳴鹿か　白雄　（白雄句集）
閑に堪えて酒酌めば月鹿も啼く　同　（同）
追るゝは知りつも啼か畑の鹿　同　（同）

山家に宿りて

鹿啼て誠がましき旅寐かな　同　（同）
里の女の木履をかしや鹿の啼く　同　（同）
花紅葉江戸に鹿啼く山もがな　同　（同）

曉方に聞し鹿かも蹄（ツメ）のあと　同（同　）

くれなゐの絲とこそ聞け鹿の聲　蓼太（蓼太句集）

鹿の音や千尋におろすみなの川　同（同　）

夜もすがら啼かで夜明の鹿の聲　樗良（樗良發句集）

己れのみと悲しく鹿の啼音哉　同（同　）

朝鹿や樫の林を出る聲　同（同　）

午背の靈風爐に或人を訪ひて

養生の夫婦別在り鹿の聲　几董（井華集）

柴の戶に卑しくもあらず鹿の聲　同（同　）

賓主鹿聞かぬ夜をかこちぬる　召波（春泥發句集）

寐時分や戶に吹付る鹿の聲　青蘿（靑蘿發句集）

客僧よ宵に申せし鹿の聲　明五（明　烏）

聲かれて松に背を摺る小鹿哉　守一（獱　明　烏）

痩せ〳〵や身を爪立てゝ男鹿鳴く　成美（成美家集）

三夜さ聞く同じ所や鹿の聲　同（同　）

鹿聞けば木の葉のやうな我身なり　同（同　）

平潟にて

鹿の聲潮臭くも成りにけり　乙二（松窓乙二發句集）

鹿の聲風より月の出るなり　同（同　）

イめばけもなし行けば鹿の聲　士朗（枇杷園句集）

鹿老て妻無しと啼く夜もあらん　同（同　）

音聞山孚江が菴に遊びて

門たてに行く人もなし鹿の聲　同（同　）

馬尾より下に來て啼く小鹿かな　巣兆（曾波可理）

一の湯は錠の下りけり鹿の鳴く　一茶（旅　日　記）

丘の邊や人に賴りて鹿の鳴く　同（同　）

おれが方へ尻つんむけて鹿の鳴く　同（七番日記）

山寺や椽の上なる鹿の聲　同（おらが春）

下手笛によつく聞けとや鹿の聲　同（同　）

不性鹿聞放しにて寐たりけり　同（一茶句帖）

有明や鹿十ばかり對に啼く　同（同　）

夜嵐や窗に吹込む鹿の聲　同（同　）

鹿鳴くや今二三町遠からば　同（嘉永板一茶發句集）

鳴く鹿や森の一つ灯立ふさぎ　梅室（梅室家集）

伊勢朝熊にて

윷かしこ渡る聲なり月の鹿　同（同　）

夕山を下に並べて鹿の聲　蒼虬（蒼虬翁發句集）

江を隔つ心も付かず鹿の聲　同（同　）

日のさして一聲啼くや谷の鹿　同（同　）

鹿の聲　苫屋〳〵に配る行燈や鹿の聲　虚子（ホト、ギス）

妻戀ふ鹿　（題を三ッ集めて一句せよと云へるに）猪の狸寐入や鹿の戀　蕪村（蕪村遺稿）

戀渡る鹿や伏猪の枕元　同（発句題叢集）

こがれ來て水にも入るや谷の鹿　闌月（半化坊句集）

月と成り闇となりつゝ鹿の戀　几董（井華集）

やさしさや鹿も戀路に迷ふ山　一茶（一茶發句集）

鹿の妻　山川やたゆまず渡る鹿の妻　北枝（猿丸宮集）

寐てかくる角のしなへや鹿の妻　同（風月藻）

誰を見る背さがりぞ鹿の妻　木導（去來抄）

こがれてや淺瀬見てゐる鹿の妻　曉臺（曉臺句集）

霜踏鹿　別れ鹿霜の笹山渡るなり　同（同）

鹿笛　鹿笛と知らで旅寐の涙かな　巴人（夜半亭發句帖）

鹿聞く　鹿きゝの竹筒料紙にみ山訪ふ　青々（倦鳥）

猪（ゐのしゝ）（晩）

ゐ　しし　こぶりこ　瓜坊（うりばう）　野猪（やちよ）　猪道（しゝみち）　手負猪（ておひしゝ）　猪狩（しゝがり）（人事）　山鯨（やまくぢら）　猪肉（しゝにく）

古書校註

【御傘】只一、誹には二。此の外に名所の猪名野（ヰナノ）、人の名の猪、ひよみの亥、方角の乾（イヌヰ）、亥の子などは、折（一）さへかはらば、今一有るべし。連歌の一座一句の猪と文字は同じけれども生類にも嫌はず、各別の物に思ひなさるれば更に苦しからず。連歌のやさしきを本とする故に、ふす猪としてもいかり猪としても、けやけき物（二）に聞ゆるによりて、一座一句の物とす。誹諧の時はゐのしゝと云ひても、けやけき物と思はねば更に制すべき事に非ず。連歌に使はぬ詞を宗と（三）取出して持て扱ふ道なれば、さし合の嫌ひやう連歌と大きにかはるなり。此の旨をわきまへざる宗匠は、連歌に一座一句の物を二句の外にせよと許すは、曲事など笑ふ人々も侍るべけれども、それは愚なる事にて侍り。

註（一）懐紙一枚をいふ　（二）特に目立ち耳立つもの　（三）主として。

季題解説　偶蹄類に屬する獸。全身黑褐色の粗毛を生じ、怒る時は逆立す。上顎の犬齒逆向して口外に突出し頗る鋭利なり。大なるは重量數十貫に至る。山中に在て蛇類・蚯蚓・木の芽等を常食とす。往々人里に出でゝ農作物を荒すことあり。猪の往來する道ほゞ一定せり、之を猪道と稱し、獵人は豫め之を知り、犬をして逐はしめ其衝に當れる物蔭に待ち受けて之を射撃す。彈丸急所を外れ手負ひとなれる猪は時として人に當らんとし、危險なり。猪肉は脂肪に富み美味なり、俗呼で山鯨と云ふ。冬月此肉を賞味するより猪を冬季に入れたる書もあれど晩秋の季たるべし。

例句

猪　猪におとし穴して住ふなり　一川（倦鳥）
猪棚の下大根をつくりけり　青々（同）
稻刈りて猪まつ小屋は荒にけり　同（同）
猪棚に山田落ち水しぐれふり　同（同）
黄落の土田に入れし猪の足　同（同）

參考　ゐのしゝ、野猪科 Sus leucomystax Temminck. 大なるものは百五十キログラムに達す。本州・四國・九州に産するが北海道には全く居ない。琉球及び臺灣に棲むものは形態に些少の差がある。晝間はほゞ一定の日當りのよい窪地の藪、卽ち獵師の所謂「寐坪」で眠り、夜間出でゝ、サハガニ・野鼠・ミミズ・椎・樫等の實、ヤマイモ等の外、田畑の穀物蔬菜を食ひ荒らす。一月頃が交尾期で四五月頃、四頭乃至六頭を分娩する。興奮すれば背部の毛、卽ち「怒り毛」を逆立てて猪進する。子供は、體の地色が黄色、黑條が數本縱走して居り、恰も瓜の如きが故に「うりぼう」又は「うりんぼう」と稱へる。猪の齒は甚だよく發達し、上下兩顎共に門齒三、犬齒一、前臼齒四、臼齒三、合計四十四個を有し、犬齒から牙が出てゐる。

熊栗架を掻く（晩）　熊館

季題解說　熊、石巖枯木に在るを山中の人之を熊館といふ。性よく木に上り好て栗を食ふ、故に栗の梢に枝を折り敷き並べて居所を設く、之を熊の架と云ふ、熊館の類なり。〔參照〕冬―熊

例句

栗架を熊は見ねども深山かな　青々（倦鳥）
熊館を樵夫道者と尋ねよる　同（同）
熊館の百歩に山花路を成す　同（同）

豺祭獸（晩）　狼の祭

古書校註　【年浪草】九月ノ月令に曰、此れは戌月の候を記す、獸を祭るとは之を天に祭る。禽を戮するは之を殺して以て食ふ也。禽は鳥獸の總名、鳥は獸と曰ふべからず、獸は禽といふべし、故に鸚鵡獸といはず、而して猩々通じて禽といふ。禮記に豺乃ち獸を祭るは禽を戮すと云々。九月の中也。

季題解說　七十二候の一、九月（寒露）中の第一候、狼獸贄として天を祀ることあり。〔參照〕冬―狼

例句

狼の祭　狼の祭か狂ふ牧の駒　太祇（太祇句選後篇）

豺祭獸 狼の祭や猛き心にも 嘯山(律亭句集)
烏來て豺の祭を覗きけり 同(同)
狼の跡を喰んと祭るめり 之房(俳諧新選)
狼の祭や曉の稲妻す 露月(露月句集)

別烏(初)

七月の別烏

[季題解説] 烏は春繁殖して、夏季に生長し、後反哺して、七月には必ず他所に別れ去る。[参照] 夏—烏の子

鷹の塒出(初)

塒出の鷹 鳥屋勝 片鳥屋 兩鳥屋 兩片鵠

[古書校註]【年浪草】漢鷹卿に曰、鳥屋出の鷹七月十六日云々〇和漢三才圖會に曰、四月羽毛將に易らんとする時、革緒を解き去り鳥屋の内に放つ。日を逐うて脱落してまた新毛を生じ、七月中旬に舊の如し。之を片鳥屋といふ。二歳毛を易ふるを兩鳥屋といふ。三歳を兩片鵠といふ。「鳥屋勝」鷹新毛を生じ羽翼全く備はり鳥屋を出る時、逸勢特に稱すべし。これを鳥屋勝といふ。

【滑稽雜談】すべて夏より羽の拔けたるを鳥屋に籠めて七月に出すを鳥屋出の鷹と申すならし。

[季題解説] 羽毛の變るため初夏塒入したる鷹の、陰曆七月中旬、羽毛變り終りて塒を出づるをいふ。鳥屋勝は此の時勢特にまされるをいひ、一歳なるもの毛を變ふるを片鳥屋、二歳を兩鳥屋、三歳を兩片鵠といふ。(古) [参照] 人事—小鷹狩 冬—鷹狩

[例句] 鷹の塒出 鳥の威を塒出の鷹に見たりけり 青々(倦鳥)

荒鷹(初)

網掛の鷹

[季題解説] 鷹の巣立ちたるを網を以て捕獲す。捕へて未だ人に馴れざるを荒鷹と云ふ。[参照] 鷹の山別 人事—鷹打

[例句] 荒鷹 あら鷹の瞳や雲の行く處 青々(妻木)

鷹の山別(初)

山別 別れ鳥

[古書校註]【年浪草】或傳書に鷹の山別は、七月二十五日也、鷹の巣を立ちて父母に別

るゝを云ふ。○下學集に曰、鷹は猛惡の鳥也、子を生みて巣にあり、その子成長する時は親を食ふの意あり。父母之を恐れて居るに巣より一尺枝を去て子を養ふ。故に一尺ばかりを呼んで鷹秤といひ傳ふる也。○二條基房公曰、鷹飼の山とは足高山也。鷹是より始まる也。足高明神は諏訪明神也。飛鳥の別も此の山より始まる也。○按ずるに富士縁起に曰、昔大綱の里に老翁嫗共に住めり。翁は鷹を愛し嫗は犬を飼ふ。所謂翁は愛鷹明神也。嫗は飼犬明神也。二神共に新山の宮に住み給ふ云々。凡そ鷹を飼ふ事は諏訪明神始めさせ給ふ故に廿七日の御狭山祭に明神へ鷹も詣る因縁によりて廿五日に巣を辭すと云々。○連俳に鷹とばかりは冬とす。小鷹の類は秋とす。

季題解説 陰暦七月末、鷹の子の巣立して、親鳥に別るゝを云ふ。参照 荒鷹(アラタカ)

例句 鷹の山別れ

正行が思ひを鷹の山別れ　史邦　(芭蕉庵小文庫)

鷹祭レ鳥(たかとりをまつる)　(初)

古書校註

【年浪草】七月○月令に曰、鷹乃祭レ鳥、處暑候七月之中也。註に云、鷹鳥を食はんと欲する時、まづ鳥を殺して食はず、人の食はんとして先代食を爲る人を祭るに似たり。

季題解説 七十二候の一、陰暦七月處暑の候、鷹鳥を祭るといふこと禮記月令に見ゆ。

小鷹(こたか)　(三秋)　鷂(はいたか)　兄鷂(このり)　刺羽(さしば)　小隼(こはやぶさ)　雀鷂(つみ)　雀鷁(えつさい)

季題解説 鷹の種類多けれども、季題としては、大別して、大鷹を冬とし小鷹を秋とす。之れ冬季に於て鶴・雁・鴨・鷺等を狩る「鷹狩」には大鷹(ハイタカ)を用ひ、秋季の鶉・雲雀等の「小鷹狩」には小鷹を用うるに依りてなり。鷂兄鷂(コノリ)、小形の鷹なり、鷹の雌は雄よりも體大なるを常とす。又雌雄名を異にする事多し。鷂(ハシタカとも云ふ、ハシは敏の意か)は雌にして兄鷂(コノリ)は雄なり。刺羽は小隼とも云ひ中形の鷹なり、朝鮮產多し。雀鷂(ツミ)・雀鷁(エツサイ)、最小の鷹なり、翼長五寸五分乃至七寸二分凡そ大鷹の半に近し。ツミは雄にして、エツサイは雌なり。参照 人事—小鷹狩(コタカガリ)　冬—鷹(タカ)

例句

刺羽　牢人して住所を去る頃親疎の面々に對して

似た物や馬糞つかみに赤さしば　史邦　(猿舞師)

鷹渡る(たかわたる)　(三秋)

季題解説 亞細亞北部地方に蕃殖したる兄鷹(コノリ)・刺羽(サシハ)その他の鷹が仲秋以後冬

にかけて南方に渡るを云ふ。鹿兒島縣南端、沖繩諸島にては極めて多數群集渡りを營むと云ふ。〔參照〕冬―鷹。

例句

鷹渡る　珍らしき鷹渡らぬか對馬船　其角（其袋）

鵙（もず）（三秋）　百舌鳥（もず）　伯勞鳥（もず）　赤鵙（あかもず）　雉兒鵙（ちごもず）　縞鵙（しまもず）　大鵙（おほもず）　八丁鵙（はつちやうもず）　鵙啼く（もずなく）

鵙の聲（もずのこゑ）　鵙の草莖（もずのくさぐき）　鵙の早贄（もずのはやにへ）　鵙の磔（もずのはりつけ）　鵙落し（もずおとし）（人事）

古書校註

【山之井】鵙は目をぬひて囮にかけて、同じ鵙を取るものにあめれば、目なしどちの聲につくとも（一）、鵙と組みて落つるなども言ひなし侍りし（二）。

【御傘】鵙、秋也。鵙の草莖も秋也。連に鵙一あれば、誹には二有るべし。鵙の草ぐきもしげるといへる夏なり。

【年浪草】三秋〇和漢三才圖會に曰、鵙（鶪音）、兼名苑に又鶪字を用ふ。日本紀に百舌鳥を用ふ。未だ詳ならず。鵙形鳩に似て頭小さく、背より尾まで黄褐色、眼及び背・頷の容は小さき鶻（三）に似て眼邊黒く、眼上の白條頬に引き、背黒くして末は曲る。頬臆（四）白く腹黄赤、黒横彪あり、翮白羽黒脛掌黒し。爪利くして常に小鳥をとりて食ふ。その聲高く喧しく奇異と言ふが如し云々。本草に載する所の諸說紛々として未だ詳ならず。本邦鵙といへる鳥の形、狀三才圖會にいへるが如し。秋に至りてよく鳴く。夫木集の歌に曰、「風渡る尾花が末にもず鳴きて秋のさかりと見ゆる野邊かな　爲家」。〇鵙草莖・鵙早贄は說々多し。奥儀抄に曰、昔或男野を行きて女に會ひぬ。とかく語らひつきて其の家を問ふに、女鵙の居たる草ぐきを指して曰く、わが家は彼の草ぐきのすぢに當りたる里に在るなりと教ふ。男後に必ず尋ぬべき由を契りて去りぬ。其の後心には思ひながらおほやけに仕うまつり、私を顧みるに暇なくて行かずなりぬ。次の年の春、偶々ありし野に行きて教へし草を見るに、霞盡く聳きてすべて見えず、終日ながめ空しく歸りぬと云へり。〇袖中抄に鵙の草ぐきとは、鵙の草潜ると云ふ也。萬葉に、「足引の山べにをれば時鳥木の間たちくき鳴かぬ日はなし」。「山吹のしげみたちくし鶯の聲を聞くらん君はともしも」。今案に木の間たちくきといふ詞に、具吉と書けり。草具吉と同じ文字也。彼は時鳥の木の間潜ると云ひ、是は鵙の草潜ると聞えたり、今按に此の歌の心は、鵙は春はいとも鳴かざれば春の鵙の草潜る事見えずとも、我は君があたりを見やらんと詠めるは、「只見えず」と言はんばかりを採ると也。古歌の體皆此の如きか。〇仙覺抄に曰、鵙は秋冬などは木草の末に居て鳴けるが、春になりぬれば草の下に潜りて見えぬが如く、君が教へし栖も霞がくれに見えずとも我は見やらんと詠めると聞えたり。〇萬葉「春されば伯勞鳥の草ぐき見えずとも我は見やらん君があたりは」。和歌草莖春にもよめれど、所詮秋見たる草

莖の霞がくれに見えぬなれば秋季たる事知るべし。春季にも見えぬ意は用ふべき也。○早贄とは八雲御抄に曰、鵙のくつて(五)は我が身代りにかへるやうの物をさしておく也。是郭公くつてをせむるといへり。歌林良材に曰、鵙の草莖は鵙は時鳥の沓縫にて有りけるが、沓手を取りて返さゞりしによつて、其の代りに替へんやうの物を草の莖に挾めるを云ふと云へり。是を鵙の早贄とも云へり。此の如き諸説はたしかなる本説なしと雖も、後人採り用ひて讀める哥も有るにや。藻鹽草に曰、鵙の早贄といふ事をして、萬づの草莖に生きたる蟲もしくは蛙などを取りて差して、時鳥の爲にとて我が身は隱るゝと云へり。八雲の御説に説々あり。此説に過ぐべからずと云々。鵙は時鳥の沓手を取りて今四五月の程に奉らんとてすかして(六)隱れ、其の料とて草莖はすると也。郭公はそれを尋ぬとて、よびありくによりて時鳥の名を得たる也。このよびありく時鳥は本の鵙也。彼の隱れてありく鵙は本の時鳥也云々。○鵙落とは、紀事に曰、山林の間囮鵙の目を縫ひ、架頭に据ゑ傍に黐竿を設けて鵙鳥をとる、是を鵙を落すといふ。

【篗纑輪】　八月　鵙の艸莖・同早贄。もずの草莖といふこと説々あり。即ち早贄の事也といふ説も有り。八雲御抄にしるしの草と判せられて、只鵙の住む野邊の草也、鵙の隱るゝほどの草莖也とぞ。野邊に艸茂りてしるべなきあたりに、目印しの草ありしも、一日二日過ぎて行見れば所知らず成行くを、鵙の草莖あと絶えてなど詠めりと云々。淸輔袋草紙の説もこれに同じ。さて早贄といふは、鵙の性として必ず蛙或はとかげなどをとりて、艸木の立枝に刺し貫きさらしおくなり。これを鵙の早贄といふ。人氣疎き別莊などにまゝあり。予まのあたり之を見たり。

註　(一)古へ小兒の隱れん坊をするに、「目なしどちどち聲についてましませ」等といへり。(二)例句に「百舌と組んで落つる二匹はをとり哉　正式」。(三)ハシダカ。(四)胸なり。(五)沓の代の意。(六)だます。

季題解說　燕雀類の鳴禽。頭上栗色、背より尾に至るまで灰色。翼は黑褐色にて、中央に小さき白斑あり。顏は黑く、之に長き白色の眉あり。下面腮、喉と腹は白色、その他胸及體の側面は黃褐色なり。嘴大にして先端鉤狀に尖り、其側緣に齒狀の缺刻あり。尾長く、爪また銳し。夏季山中にありて營巢、蕃殖し、秋に至り平原村落に出づ。性勇悍、擧動敏捷、高き木の頂に他を瞰下しつゝ鳴く習性あり。蛙・蟷螂・蝗、などを捕へ食ふ。又此鳥の特性として、之等捕へたる小動物を灌木の立枝に刺して晒し置く。之を鵙の草莖又は鵙の早贄と云ふ。鵙落とは眼を縫ひたる鵙を囮として、止り木にとまらせ、傍に黐竿を設け、他の鵙を誘ひ寄せて捕ふるを云ふ。

實作注意　鵙は百舌鳥とも伯勞鳥とも書く。種類には赤鵙・稚兒鵙・縞鵙・大鵙等あり。

例句

鵙　汐風の中より鵙の高音かな　惟然（渡鳥集）

鵙

戻りにも賣れずに鵙の草鞋かな　嵐雪（玄峰集）
此森も兎角過けり鵙おどし　蕪村（蕪村句集）
己れのみ食る鵙の眼ざしかな　曉臺（曉臺句集）
風に猶跡なき鵙の印かな　闌更（半化坊發句集）
鵙の來て一トく荒れ見ゆる野山かな　蓼太（蓼太句集）
鵙一羽來て播まはす麓かな　巣兆（曾波可理）
鵙よ鵙びんちやんするなかゝる代に　一茶（七番日記）
鵙が裂く空かと見れば淺みどり　來布（己巳句鈔）

鵙鳴く

鵙たける大木はなにぞ藪の中　和雅音（早春）
百舌鳥鳴や入日さし込女松原　凡兆（猿蓑）
鵙なくや僅赤らむ柚の頭　野水（雜談集）
鵙啼くや八丈島の女子共　許六（篇突）
鵙啼て一霜を待つ晩田哉　浪化（柿表紙）
鵙啼くや夕日の殘る杉の末ウラ　也有（蘿葉集）
鵙啼て風曜き木の間かな　闌更（半化坊發句集）
藪陰や卵の殻に鵙の啼く　白雄（白雄句集）
鵙啼くや黍より低き小松原　同（同）
鵙鳴くや敦盛返せ〳〵迚　一茶（九番日記）
鵙啼くや一番高い木のさきに　子規（子規句集）
百舌鳴いて村會散す三時過　子規（全集）
百舌鳥なくや浦の菜場の高みより　鼓竹（俳馬）

鵙の聲

帷子は日々にすさまじ鵙の聲　史邦（芭蕉庵小文庫）
どか降のあと晴切るや鵙の聲　同（猿舞師）
順捻に問ず語りや鵙の聲　其角（一の木戸）
駕籠の戸に山先づ嬉し鵙の聲　支考（梟日記）
新田の路の疎らや鵙の聲　涼菟（旅日記）
踏はづす枝の戻りや鵙の聲　野紅（柿表紙）
芋黑く竹黃になりて鵙の聲　曉臺（曉臺句集）
漆掻くあたまの上や鵙の聲　白雄（白雄句集）
鵙の聲勘忍袋切れたりな　一茶（おらが春）
頬桁を切さげられな鵙の聲　同（一茶句帖）
紅葉吹く風の中なる鵙の聲　河芙蓉（丙寅句鈔）

鵙の草莖

草莖に鵙の心は知られけり　野坡（菊の道）
草莖を失ふ鵙の高音かな　蕪村（新五子稿）
日のさして鵙の贄見る葉裏哉　闌更（半化坊發句集）
鵰れて見る鵙の贄鵙が見てゐさう　白雲郷（丁卯句鈔）

鵙落し

鬼貫も歌よみにけり鵙落し　召波（春泥發句集）
野に近き根岸の庭や鵙落し　子規（子規句集）

【参考】もずは、嘴が強大で、その先端が鋭く、鉤狀に曲り、太い黑條が眼を橫切つて居り、幼鳥や雌の成鳥では、腹面に波形の斑紋があることなどが特徵となつてゐる。左に重な種類を擧げる。

もず Lanius bucephalus Temminck & Schlegel. 樺太から琉球まで廣く産する種類で、普通もずといふのはこれである。多少の渡りをなすもので、冬期には南日本及び南支那に移り、夏期には北日本北支那等で蕃殖する。頭上並に後頸部は栗樣の赤褐色を呈する。

あかもず Lanius cristatus superciliosus Latham. 樺太から九州までの山地で夏期蕃殖し、南支那、馬來地方で越冬する。頭上から尾まで、體の背面が栗色で、額と眉部とが純白色なので他と容易に區別される。

ちごもず Lanius tigrinus Drapiez. 棲息地は、ほゞあかもずに同じである。頭上から背の上半まで青灰色で、それ以下は赤褐色の地に黑斑がある。種名はこの點に基づいて「虎のやうな」の意である。

啄木鳥（きつつき）（仲）

木突（きつゝき）　てらつゝき　けらつゝき　けら　番匠鳥（たくみどり）　赤（あか）げら　小大赤げら　大赤げら　爽小（こ）げら　青（あを）げら　山（やま）げら　熊（くま）げら　きたたき　みゆびげら　蟻吸鳥（ありすひどり）

【[illegible]】【年浪草】八月に時珍曰、この鳥樹木を劉裂きて蟲をとり食ふ、故に名く。○和漢三才圖會に云、狀大小有り、頭黃白に赤を帶ぶ。面紅にして黃なり。ともに黑斑あり、背翅尾黑白に橫彪を成し、或は青色なるもあり云々。昔初めて玉造に天王寺を建てし時、この鳥群來して寺の軒を啄き損ず。故に寺啄と名く。守屋が怨靈鳥となるといふ。

【[illegible]】叢木類に屬する鳥。多數の種類あり。大なるは鳩の如く、小なるは雀の如し。いづれも嘴鋭く、舌は嘴より長くして、その先に逆鉤あり。嘴にて立木の皮をつゝき破り、舌にて木の中にある蟲をさして喰ふ。脚は短く、趾は前後に一對を有し、鋭き爪有りて、樹木を攀昇するに適す。多く森林中に棲み、樹洞中に産卵す。

【[illegible]】寺啄（てらつゝき）は、昔大阪玉造に天王寺を建てし時、守屋の怨靈啄木鳥に化して來り、寺を啄きて損ぜしといふ俗諺より出づ。けら・けらつゝき・きたゝき、何れも啄木鳥の異名。蟻吸は啄木鳥の一種にして體小さし。大部分灰色にして黑・灰等の狹き斑點あり、舌長くして、よく蟻の如き小蟲を食ふ。赤けら・青けら・小けら・山けら・熊けら・野にげら何れも羽毛の文彩及び體の大小により名を異にす。

【例句】

啄木鳥の入まはりけり藪の松　丈草（有磯海）

啄木鳥の夜遊びがてら渡りけり　同（誹諧古選）

啄木鳥

啄木鳥のたちはに近き楢かな　丈草（小弓俳諧集）

幻住庵山上

啄木鳥の杜をつゝく住居かな　曲翠（[illegible]）

啄木鳥の啄きからすや蝸牛　桃隣（[illegible]時集）

啄木鳥の啄き登るや蔦の間　浪化（柿表紙）

啄木鳥の音や銀杏の散かてら　支考（草苅笛）

啄木鳥や隣の松へ猿すべり　北枝（同　）

啄木鳥や應と言はせる蔦の門　也有（蘿葉集）

手斧打つ音も木深し啄木鳥　蕪村（蕪村句題発句集）

啄木鳥や何の味ある山木原　闌更（半化坊発句集）

錦岡寺にて

啄木鳥のながめて通る鳥鐵かな　諸九尼（諸九尼句集）

啄木鳥の死ねとて敲く柱かな　一茶（旅日記）

啄木鳥が目利して居る菴哉　同（おらが春）

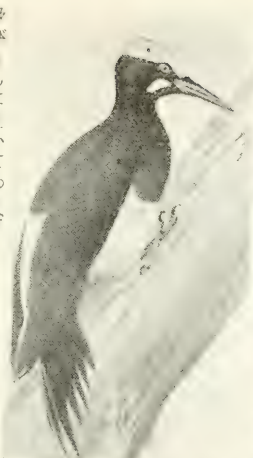
啄木鳥の止めて聞くかよ夕木魚　同（同　）

啄木鳥の稽古に叩く柱かな　同（一茶句帖）

いかなれは鴫より肥し啄木鳥　梅室（梅室家集）

啄木は秋に赤みのなつかしく　青々（倦鳥）

啄木をものゝふの紐に打ちにけり　同（同　）

参考　きつゝきは餌食をあさり又は巣を造るため、樹幹を穿孔するかため、甚だ硬く強き嘴を有し、體を樹幹に支ふる必要上、尾羽の中軸が極めて強い。頭部に鮮かな赤斑が雄にあることが特徴となつてゐるが、其他の色彩や、體の大きさ等で、數多の種類に分ける　左に掲げる主な種類中、みゆびげらを除いて他は皆四趾を有し、二趾づゝ前方及び後方に向いてゐる。

あかげら Dryobates major hondoensis Kuroda. 本州の中部以外に廣く分布する甚だ普通の種類、雄では後頭部が鮮紅色であるが、雌ではこの赤斑がない。體の背面は概ね黒く前額は白い。下面は概ね淡黄褐色であるが、下腹部に著しい赤色部が見られる。翼は黒色で白色の横縞がある。

えぞおほあかげら Dryobates leucotos subcirris Stejneger. 北海道に産す。同じく北海道に産する「えぞあかげら」は「あかげら」に類似し、

腹面の白いこと等が「あかげら」と違ふ點であるが、「えぞおほあかげら」はこれより著しく大きく、翼長百四十八ミリに達する。頭上及び後頭が雄では鮮紅色であるが、雌では黒い。これ以下の背面は黒く背部下半に至つて白い。

おほあかげら Dryobates leucotos stejnegeri, Kuroda. 前者に類してゐるが、一般に暗色部を増してをり、背及び腹面の白色部は淡黄褐色を帯びてゐる。本州の中部以北に産する。

えぞこげら Yungipicus kizuki seebohmi, Hargitt 翼長一〇〇ミリに達せざる、本邦最小の啄木鳥、北海道及びその以北に産す。體の上面は概ね黒いが、雄では後頭の兩側に鮮紅色の縱條が一本づゝある

あをげら Picus awokera awokera Temminck. 體色が主として綠。頭上が雄では紅色であるが雌では暗灰色である。尙雌雄共に後頭及び頰が紅色を呈してゐる。本州に多産す。

やまげら Picus canus jessoensis, Stejneger. あをげらに似て綠色を帯びてゐるが、その色淡い。頭上は雄では紅いが雌では紅くない。後頭及び頰は雌雄共に紅色でない。北海道に多産し、滿蒙・東シベリア等に分布す。

くまげら Dryocopus martius silvifragus, Riley. 體の上面も下面も概ね黒褐色。雄では頭上及び後頭が鮮紅色で、恰も冠をいたゞきたるが如き樣子であるが、雌では後頭部だけ紅い。北海道及び樺太に産する。

きたたき（一名あまのじやく） Triponax richardsi (Tristram). 朝鮮及び對馬に産するが、稀である。本邦啄木鳥中最大で、翼長百八十七ミリに達する。體は概ね黒く、頭より後頭が、雄では紅色で甚だ美しいが、雌では一樣に黒い

みゆびげら Picoides tridactylus sakhalinensis, Buturlin. 趾が三本で、その内二趾が前方に向いてゐる。體の上面が黒色で白斑がある。頭上は雄では黃色であるが、雌では黒色である。樺太に産する。

燕歸る（中）

去ぬ燕　巢を去る燕　秋燕　殘る燕　歸る燕

古書校註

【溫故日錄】八月。燕歸、燕巢を去るも秋也。燕は春社の頃來りて秋社を知りて巢を去り歸ると也。

【滑稽雜談】八月。玄鳥歸。禮の月令に云、仲秋之月玄鳥歸。註、仲春に玄鳥至るといふ。此に歸るといふは春來りて秋去るを明にす。

【栞草】八月。格物總論燕春社に來り秋社に去る。故に是を社燕といふ。

季題解說

春暖に南國より我國へ渡り來り、夏季人家に巢を營みて雛を育て秋に復た南國に歸り去る。

實作注意

單に燕と云へば春季なり。去ぬ燕・燕歸ると云ふか、又は其心あ

稚堅を踏こぼしてや渡り鳥　吾仲（旅袋）
竹伐の村の戰ぎや渡り鳥　同（續山彦）
山降りに濡れてぞ出る渡り鳥　木導（水の音）
朝燒の空こそあかき渡り鳥　同（同）
小鳥さへ渡らぬ程の深山かな　千子（伊勢紀行）
一つづゝ名乘て渡れ秋の鳥　乙州（流川集）
時を今渡るや鳥の羽黑山　惟然（菊の香）
吹息の見ゆる時分や渡り鳥　游刀（鳥の道）
少あとに養して遲し秋の鳥　杜若（けふの昔）
渡り來る鳥の嵐や海の上　野紅（きれぐ）
雲の根を押し出るや渡り鳥　浪化（渡鳥集）
御林や日高に泊る渡り鳥　正秀（同）
地につゞく沖の夜明や渡り鳥　野明（同）
一羽にかはすや峯の渡り鳥　卯七（同）
唐鳥の渡る目當や富士の山　魯町（同）
黃昏や雀も連れて渡り鳥　牡年（同）
僅かなる藪に結ぶや渡り鳥　紫白女（續山彦）
どのやうに濡れて渡るぞ秋の鳥　素見（心ひとつ）
日は西に雨の梢や渡り鳥　野坡（野坡吟艸）
栗稗に跡のまつりや渡り鳥　也有（蘿葉集）
渡り鳥雲の機手の錦かな　蕪村（蕪村句集）
渡り鳥こゝを瀬にせん寺林　同（同）
京近き山にかゝるや渡り鳥　曉臺（曉臺句集）
武庫山の眠覺すな渡り鳥　蓼太（蓼太句集）
殿原の吹矢はじめぬ渡り鳥　月溪（月溪句集）
渡り鳥鳥の海には灯のとぼる　乙二（松窓乙二發句集）
どう追れても人里を渡り鳥　一茶（おらが春）
雀らも眞似して飛ぶや渡り鳥　同（九番日記）
渡り鳥一嚢なきはなかりけり　同（同）
眞白に又眞黑に渡り鳥　梅室（梅室家集）
世並よき秋に連れてや渡り鳥　蒼虬（蒼虬翁發句集）

花合宿泉

北海は雫なりと暮の渡り鳥　華水（倦鳥）
渡り鳥光りの果に國のある　別天樓（丙寅句鈔）

手賀沼

渡り鳥あるべき日なり蕎麥は實に　虛明（同）
水の日の中にかするゝ渡り鳥　靜堂（同）
渡り鳥を綺嚴の上に見たりけり　巨口（倦鳥）

渡り鳥　鳥渡る山のあはいに暮の海　曇竹（[illegible]）
我も住むこの空を来し渡り鳥　青々（同）
巣に妻と寐し日いつぞも渡り鳥　同（同）

小鳥渡る　毛見衆に付て渡るや小鳥共　許六（正風彦根躰）
鉢ひらき彼岸に渡る小鳥かな　支考（[illegible]日記）
小鳥さへ渡らぬ程の深山かな　千子（伊勢紀行）
鶺鴒の鞘見えて色めく小鳥かな　萩童（[illegible]）
粟の穂に遊べ小鳥の渡りかけ　北枝（渡鳥集）
小鳥来る音うれしさよ板庇　蕪村（蕪村句集）
空遠く聲あはせ行く小鳥哉　太祇（太祇句選）

鳥風　風の名をたてゝ渡るや小鳥共　路青（[illegible]）

坂鳥（中）

季題解説 渡り鳥の朝塒を出でて山を越えて飛び行くをいふ。〔参照〕渡り鳥ワタリ　色鳥イロ

色鳥（中）　秋小鳥

古書校註

【山之井】秋の野山に渡りて、むく鳥の、榎のみを争ひ、かし鳥の椎栗落す心ばへ、稗を拾ふひえ鳥をおどし、豆畠荒すまめ鳥を追ひ佗ぶる態、又山雀は姫胡桃を付けてまはし、めじろは熟柿になしすひすなどをつらね、なほ餌を食まざる、ひすい心（一）を感じ、鳥差見知らぬひおからを憐み、肴にしてはつぐみ悦ぶとも（二）あつ鳥の火にくばるなども（三）云ひなし侍る。

【御傘】いろ鳥、秋也、色々渡る小鳥を云ふ。

【篗纑輪】色々の鳥渡るといふ事也。近来の書に渡り鳥の内、鶫（春）、川せみ（夏）など言へるもの有り。蕉門之を用ひず。古法の通りやはり秋也。みそさゞいは秋にあらず冬也。是蕉門の活法也

【年浪草】（朝鳥渡・小鳥渡・色鳥）八月小鳥群来して山林江湖に来る、是を渡るといふ也。

註（一）[illegible]に一致せる心　（二）[illegible]　（三）諺に「あつ鳥火にくばる」。あわてふためくさまの形容にいふ。

季題解説 秋、渡り来る、いろ／＼の美しき小鳥をいふ。〔参照〕渡り鳥ワタリ
坂鳥サカ

例句

色鳥　紋がらや或は色鳥あやはどり　宗因（[illegible]）
色鳥の空に渡るや大鳴門　志用（鳥の道）
色鳥の渡る力や富士の山　同（[illegible]川）
色鳥の額の誠や楠の秋　車庸（[illegible]）

色鳥のすり出さるゝや鷲の聲　遊刀（浮世の北）
色鳥の渡りあふたり旅宿り　園女（小弓誹諧集）
色鳥の先づ落付や澤みづき　勝定（車路）
色鳥や皆くすく〳〵と藪の内　晩翠（二葉集）
鳥に先づ色を添へたる野山哉　浪化（白扇集）
色鳥や嗔こぼす物皆赤し　白芝（芭蕉袖草紙）

稲雀（三秋）

季題解説 秋、稲の熟する頃、或は刈りて掛け干す頃、稲田のほとりに群集する雀に（季題）春　孕雀〔〕、雀の子〔〕　冬　寒雀〔〕

例句 稲雀

稲雀茶の木畠や逃どころ　芭蕉（西の雲）
吹く風に何度立しや稲雀　木枝（同　）
嵐蘭子を悼みて
鳴出して米こぼしけり稲雀　智月尼（有磯海）
蛤の姿も見えず稲雀　李由（韻塞）
静なる鷺にも恥よ稲雀　許六（射・水川）
足羽川八幡宮
弓取て額烏帽子や稲雀　涼菟（山中集）
稲雀散行く藪や月の雲　土芳（蓑蟲庵集）
君が代の千代の數かも稲雀　乙二（松窓乙二發句集）
稲雀稲を追はれて唐稲へ　子規（子規句集）
五色山を越えて行きけり稲雀　鼓竹（倭昌）
祭店をたゝむ日暮や稲雀　同（同　）
稲雀穂につく時のふためきや　内雲郷（戊辰句鈔）
雲の如くわきし田面の稲雀　青々（倭昌）

鶫（中）

つむぎ　てうま　かごめ　つぎめ　鳥馬　反舌　虎鶫　黒鶫　白腹　赤腹　眉茶鶎　鶫網（事人）

古書校註 【年浪草】八月〇和漢三才圖會に曰、百舌鳥・反舌・鶍鶸・馬鳥、俗に云具豆久見。狀鵯鴒ノ如くにして灰黒色、京師除夜毎に之を炙り食ふを祝例となす。〇鸜鵒・鴝欲・八哥・哵々鳥・寒皐・俗に云、黒豆久見。大さ伯勞(一)の如し。その頭背正黒色、胸腹白くして黒斑有り、嘴黒く、脚黒く、その吻黄色。

註　(一) もずなり。

季題解説 燕雀類に属する鳥。鵯に似て大きく背面は暗褐色にして、（黒鶫

は黒）腹は黄白に紫黄の斑點あり。秋群をなして來る最も普通の渡り鳥なり。種類に黒鶫（ツグミ）・眉茶鶫（マミチヤジナヒ）・白腹（シロハラ）・赤腹（アカハラ）・虎鶫等あり。東北地方は鶫の渡り來る道筋に、かすみ網を張りて、之を捕ふを云ふ。群飛するを以て多く獲され其味佳良なるは一般によく知る處なり。〔同〕鶇。

例句

鶫　　鶫啼く尾上の松は明にけり　　万　子（白陀羅尼）
　　　竹の荷に鶫くゝりて山の人　　白雲郷（倦　鳥）

參考　つぐみ　種類が甚だ多いが、大抵は東シベリヤ地方等で蕃殖し、秋期に我國に渡來する。左に主なる種類を擧げる。

つぐみ Merula eunomus (TEMMINCK).
背面の地色は茶褐色、赤褐色及び黒色の斑點があり、胸及び側の羽毛は黒褐色で白縁がある。

とらつぐみ Oreocincla dauma aurea (HOLANDRE). 地色は黄色、三日月形の黒斑が體全體にあるが、下面では疎在してゐる。

くろつぐみ Merula cardis (TEMMINCK).
上面は雄では概ね黒色、雌では深綠色。胸部以下の地色は白色で黒斑がある。

しろはら Merula pallida (GMELIN). 胸及び腹側は褐色、腹部中央は白色、背面はほゞ茶褐色。

あかはら Merula chrysolaus (TEMMINCK). 胸及び腹側は狐色、腹部中央は白色。背面は褐色を帶びた深綠色。

まみちやじない Merula obscura (GMELIN). あかはらに似てゐるが、眉部白色。

鶫（したひ）（中）

季題解說　鶫の一種、背面橄欖色にして、腹赤し。〔參照〕鶫（つぐみ）

鵯（ひよどり）（中）　白頭鳥（ひよどり）　ひよ　ひえとり　島鵯（しまひよ）

古書校註

【年浪草】八月○和漢三才圖會に曰、俗に云比與土里。狀鵙鴰（クヨフ）に似て尾長く蒼灰色、頭の上毛亂れ起り、眼の邊微赤色を帶ぶ。胸臆灰青腹の下灰白、倶に黒斑有りて觜利く脚脛短し、掌彦蒼黒色。常に群をなして飛び啼き、

好んで草木の實を食ふ。或はいふ山茶花(ツバキ)を食ふと(一)。一種鳥鶇、近年異國より來る。

註 (一) これは花を食ふに非ずして實は山茶花の蜜を吸ふなり。

季題解說 燕雀類に屬する鳥。形態に似て小さく、體長六七寸、尾長く、頭上は灰青色にして、その羽毛亂れ立ち、背部は黑褐色にして、灰青色を帶び、翼と尾とは黑褐色、腹部は灰褐色にして、黑色の斑點あり。嘴も尾も黑く、眼瞼赤く、脚細し。山地にて蕃殖し、秋平原の村落に出でゝ越冬す。好みて群棲して、木の實等を啄ふ。

鵯の字は支那にては鶉の類なる一種の鳥の名なるを、我國にては此鳥の義に用ひ來れり。

例句

鵯

最上山縣にて

鵯もとまり戀ふか風の色　惟然（後れ馳）
鵯の雲や渡りて日和山　支考（東西夜話）
鵯や赤子の頰を吸ふ時に　其角（三河小町）
鵯の遊び仕事の山路かな　浪化（上中日記）
鵯のこぼし去りぬる實の赤き　蕪村（蕪村遺稿）
鵯や甍の朝顏花細し　子規（子規句集）
裏住のうら淋しさよ鵯の聲　青々（妻木）

參考 ひよどり Microscelis amaurotis amaurotis (TEMMINCK). ひよどりと稱せらるゝ鳥は、本邦に廣く分布してゐるが、北海道・小笠原・琉球・臺灣等に産するものは、些少ながら相違する點あるを以て、それぞれ異亞種を設けてある。本亞種に屬するものは、本州・四國・九州等に分布し、冬期には、琉球其他の地方へ渡來する。頭部は灰色、耳から頸部にかけて栗色、背部暗灰色、頭部及び胸部は灰褐色の地に白斑を散布してゐる。

鶸(ひは)（中）

金雀(きんじやく)　金翅雀(きんしじやく)　眞鶸(まひは)　唐鶸(からひは)　大唐鶸(おほからひは)　紅鶸(べにひは)　河原鶸(かはらひは)　小河原鶸(こかはらひは)　蓼鶸(たでひは)

古書校註 【年浪草】八月。○鶸、正字未詳。○和漢三才圖會に曰、俗に云ふ比和止利、雀より小さく全體黄色、青を帶ぶ。頭・背・項、翅黑を交へ、尾黑し、腹黄白、嘴灰白、脚黑し。其の聲滑滑能く囀る。又河原鶸は状鶸に似て稍大、頭背灰白、眼の後微黑、背に黑斑有り、翅蒼黑にして黄を交ふ。○大和本草に曰、唐鶸・紅鶸・蓼鶸等の名有り、形狀之を略す。

季題解說 燕雀類に屬する鳥。雀より稍小さく、全身黄ばみたる暗緑色にて、之に黑き斑點あり。頭、胸、上尾筒、雨覆の先、風切の緣、尾の基部は黄色、頭の上、眼先、喉、翼、尾の先は黑く、腹は白くして、之に黑き斑點あり。秋群をなして渡り來り、翌年晩春まで平地に之を見る。籠鳥と

して、甚だ人に馴れ易し、染色に鶸色又は鶸茶と稱するは此鳥の羽色より付したる名なり、種類に眞鶸・唐鶸・紅鶸・河原鶸・蓼鶸等あり。

例句

鶸

高土手に鶸の鳴く日や雲ちぎれ　珍碩（猿蓑）
空の哀れ一口づゝや鶸小雀　・笑（西の雲）
水潤るゝ堤小晴らし朝の鶸　助然（蝶姿）
町中や往來覺えて鶸小雀　野坡（初便）
鶸渡る空や寺子の起時分　浪化（風月藻）
明方の茬畑に鶸の嵐かな　丘情（田毎の日）
篠竹の鶸に挑むや水の淀　沾葉（芭蕉袖草紙）
柚の枝をとつくと見れば鶸の飛ぶ　秀泉（世美宗）
筆結が障子にかけつ鶸の籠　青々（妻木）
鶸啼いて秋ひは〳〵や草の庵　同（同）

河原鶸

居りよさに河原鶸來る小菜畠　支考（續猿蓑）

參考　多少の渡りをなす小鳥、雀科、主なる種類は左の如し。

まひわ Spinus spinus (LINNÉ). 樺太より琉球まで分布す。雄では頭頂黑色、喉に黑褐色の斑紋があるが、雌ではかやうな特異な色どりがない。背面の地色は暗黄綠色、腰部に至れば褐色となる。眼先黑いが其他の顏部は黄綠色、胸部は黄色、腹部は白色。

おほかはらひわ Chloris sinica kawarahiba (TEMMINCK). 夏期、千島北海道で蕃殖し秋期、本州及び其以南に群つて渡來す。頭上及び後頭が灰褐色であるが、雌では雄よりも頭上の褐色濃し。背面上半暗褐色、腰部黄色を帶ぶ。下面は上部綠色を帶びたる黄色、中部淡褐色、下部黄色。

こかはらひわ Chloris sinica minor (TEMMINCK & SCHLEGEL). 棲息地も前者と略同じく、形態も甚だ似てゐるが小形で色が淡い。

額鳥（中）　照額鳥

古書校註

【年浪草】八月。○額鳥。名義未詳、俗に云ふ奴加止利、○和漢三才圖會に曰、狀鶸に似て小さく、灰白色に青を帶ぶ、其の聲壽圖にして多く囀る、又照額鳥は項に小紫點有り。

季題解説 形鶸に似て小く、色は稍青ばみたる灰色にて、よく囀る。其聲清圓なり。

連雀（中） 寄生鳥 緋連雀 黄連雀

古書校註

【栞草】 八月。和漢三才圖會、今處々にあり、形雀の大さの如し。頭背胸赤色、翅黒し、黄白の圓文あり、羽尾の端ほど紅し、その尾短くして黒し、項の上に毛冠有り、眼・頷の邊り黒く常に林に棲むに群を成す、形美しきを以て人之を樊中に畜ふ。或は尾を披きて舞ふが如し、略々孔雀の形勢に似たり。たゞし聲よからず、比伊比伊といふが如し。蓋し練鵲と字同音にして物異なり。

季題解説 燕雀類に屬する鳥。大さ椋鳥位。葡萄色めきたる褐色にて、頭に長き羽毛あり。嘴廣く短し、脚は比較的短く、翼は强く直線飛行をなす。通常緋連雀を連雀と呼び、黄連雀は日本に飛來すること稀なり。いづれも棲息地は東部西比利亞地方にして、秋より冬にかけ、多數群をなして本邦に渡來す。東北地方にては寄生の樹に集まりてその實を食するより寄生鳥の稱あり。

例句

連雀

連雀の尾はむつかしゝ鳥の形　土芳（蓑蟲庵集）

連雀や獨しだるゝ松の中　蓼太（蓼太句集）

連雀の名は唐鳥に似たる哉　三成（田舍の日）

連雀の尾をしだるゝや谷の水　一晴（新類題發句集）

懸巣鳥（中） 橿鳥 樫鳥

古書校註

【御傘】 秋と云ふ説あれども秋里へ渡る小鳥の類ににあらず、山中はいつも鳴くと云へば、雑にして置くべし。樫に嫁はずと云ふ説あり。正字未だ知らず。鶻の字を書くとも云へり。能く知りたる人に尋ね、指合をば定め給ふべし。

【年浪草】 八月。○和漢三才圖會に曰、好んで橿樹に棲む、故に俗呼んで橿鳥と曰ふ。又懸巣鳥と名く、形鳩より小さし、頭背腹共に灰赤色、眼の邊に白色有り、翮灰黒、其の小羽に青黄斑有り、啄二寸許り、稜有り。黒色、脛赤黒く、能く鳴きて諸鳥の聲を爲す。又人言を爲す。商家除夜元旦炙食し以て借して取るの義を祝ふ。

季題解説 燕雀類に屬する鳥。秋渡り來る候鳥の一種。形鳩より小さく、頭背腹共に灰赤色、眼のあたりに白色あり。翅灰黒、其小羽に青黄の斑あり。啄二寸許り、稜ありて黒色、脛赤黒し。能く鳴て諸鳥の眞似を爲す。

好んで樫の類に棲み、其實を喰ふ。依て其名あり。馴致せば人語をも眞似るといふ。

例句

懸巣　かけす鳴けさ山越す頃と思はれよ　乙二（松窓乙二發句集）
月のなき暮を樫のわやく哉　壽香（的中集）

樫鳥　樫鳥に枝を投たる麓かな　其角（句兄弟）
かし鳥が軒鳴きすぐる霧の中　竹兜（倦鳥）

參考　かしどり、かけす（Garrulus glandarius japonicus SCHLEGEL）鴉に似て強大なる嘴を有してゐる。頭上部は白色の地に黑條縱走し、眼の前下部に顯著な黑斑がある。背面は葡萄褐色で灰色を帶び、翼には黑色・白色及び藍色の相混じた美しい横縞がある。本州・四國・九州に廣く分布し、巧に物眞似をなすを以て飼鳥として愛玩されることがある。北海道・對島等に分布するものは少しく異なるが故に異亞種にしてある。

山雀（やまがら）（中）

山連（やまがらめ）　やまがらめ　山陵鳥（さんりようてう）　山雀芝居（やまがらしばゐ）（人事）

古書校註

【年浪草】八月。○山陵鳥。（正字未詳、俗に山雀と云ふ）○和漢三才圖會に曰、狀畫眉鳥に似て、頭黃白、赤色を帶ぶ。眼頷邊に黑條有り、背灰赤色、嘴胸尾共に黑く、腹淡赤。性慧巧、能く囀る、好て胡桃を食ふ。紙撚の輪を作り、籠中に設くるときは、則ち飛んで其輪を潜る、別に箱を籠隅に安じ宿處と爲し、又瓢簞を用ひて宿處と爲す。○山雀を執り籠中に入れて、茂牟登利を打たしむ、中華の俗語に、茂牟登利を打つて筋斗を打つと曰ふ、往々禪錄に見えたり。

季題解說

燕雀類に屬する鳥。大さ雀ほどにて、頭部は帶赤黃色にして、眼邊に黑條あり、背部は灰赤色、腹部は淡赤色他は嘴と共に、すべて黑色。四時我國にあり。性怜悧にして、敎ふれば種々の藝を爲す、此の鳥の藝の見世物を山雀芝居といふ。

例句

山雀　山雀の我棚吊るか釘の音　支考（草苅笛）

誘水亭

山雀の啼くとき庭を山路かな　同　（國の華）

山雀や細谷川の丸木橋　北枝　（草苅笛）

山雀に胡桃や鞠に葛袴　同　（國の華）

山雀の家はいつ出た日和山　同　（日和山）

山雀の寐た形(ナリ)見せよ夕日影　野水　（袋北集）

山雀や朝寐して出る竹椽(タルキ)　游刀　（藤の實）

山雀の戸にも窗にも楢梢　其角　（五元集拾遺）

山雀や空しき庭にをちかへり　移竹　（乙御前）

山雀や梶の老木に寐に戻る　蕪村　（蕪村句集）

文殊奉納

山雀や文殊の智恵のむき胡桃　蓼太　（蓼太句集）

しづかさや山雀時の八瀬小原　素嶺　（田植謌）

山雀の輪抜しながら渡りけり　一茶　（おらが春）

【參考】山雀 Sittiparus varius varius (Temminck & Schlegel). しじふからに似てゐるが、腹面栗色であり、頭上部、後頸部等は黑色ではあるが、額部、上脊部が褐色を帶び、下脊部が灰色がゝつた色彩となつてゐる點等で識別される。本州及び北海道に分布す。伊豆七島・四國・九州・琉球には異亞種を產する。

四十雀(しじふから)（中）　しじふからめ

【古書校註】【年浪草】八月。〇名義未詳。〇和漢三才圖會に曰、小雀に似て大なり、頭黑く、兩頰白くして白き圓紋黑き圈頰に至る、胸背灰青、翅尾蒼黑にして灰白の竪縫有り、腹白色にして、胸より尾に至るまで黑雲紋有り、其聲清滑多囀、四十加羅と曰ふ如し、故に之を名く。其の老たる者毛を換へ、色稍ゝ異にして形も亦大なるは俗呼んで五十雀と曰ふ。雌は腹の雲紋幽微なり。

【季題解說】燕雀類に屬する鳥。大さ雀位。頭上と喉とは黑く、頰白く、背上肩の邊は黃綠なれども、後方に至るに從ひて灰蒼色となる。腹は白くして、中央に黑條通じ、尾羽は黑くして多少灰蒼色を帶び、翼羽も黑けれども、一條の白色帶これを横斷し、なほ白色乃至灰青色の緣邊を有す。我國到る處に見らる。春季樹木の空洞に巢を作り、秋季群をなして人家近く來る。

【例句】

四十雀

老の名のありとも知らで四十雀　芭蕉　（[illegible]　塞）

寺門に閑寂を愛して　東紅亭

先づ來たと竹に知らせて四十雀　浪化　（白扇集）

柊は冬待つ花ぞ四十雀　同　（同　）

四十雀

そぼぬれて菊の匂ひや四十雀　木因（柏原集）
何事にさはぎくつくぞ四十雀　朱拙（泊船集）
木にちらり竹にもちらり四十雀　使帆（小柑子）
沙汰なしに渡りて居るか四十雀　田上尼（[illegible]）
四十雀小夜の中山五十から　其角（花の市）
崩しては數へ直すや四十雀　蓼太（蓼太句集）
むつかしやどれが四十雀五十雀　一茶（一茶句帖）

【參考】しじふから Parus major minor (TEMMINCK & SCHLEGEL).
翼長七十四ミリ、尾長六十七ミリの小さな鳥。頰及び下胸部腹部は白色であるが他は概ね黑く又は綠色。頭部、頸部、上胸部は著しく光澤に富んだ黑色を呈してゐる。四國・本州及び以外に産し、北支那・滿洲にも分布す。伊豆七島・九州・琉球等には、異亞種が棲んでゐる。

五十雀（ごじふから）（中）　きまはり　きめぐり

【季題解說】燕雀類に屬する鳥。背は灰青色、喉より胸部にかけて白色なれども、腹部に至るに從ひ、薄き茶色を帶ぶ。嘴より目角に亙りて、黑き條あり。よく樹幹の周圍を旋回しつゝ上下する習性あるにより、きまはり又はきめぐりと云ふ。

【例句】
五十雀　天命を知りてや籠に五十雀　春情（新類題發句集）

【參考】ごじふから Sitta europea hondoensis, BUTURLIN. しじふからに似てゐるが、俳優の眼張りの如く一本の黑線が眼を横切つて走つてゐること、體の背面が概ね灰青色、腹面が白色なことで區別される。翼長は四十雀よりも大で八十三ミリに達するが、尾長は短く四十五ミリに過ぎない。本亞種は本州及び四國に分布して居り、北海道及び樺太にはそれぞ〵異亞種を産する。

小雀（こがら）（中）　こがらめ　じふにから　小陵鳥

【季題解說】燕雀類に屬する鳥。狀山雀（やまがら）に似て、小さし。故に俗よんで小雀と云ふ。色は頭より後頸部にかけては黑色、頤と喉とは灰黑色、頰より頸側にかけては白色、背は灰褐色、腹は白ばみ、翼と尾とは主として黑色乃至褐色なり。夏季は山地にありて繁殖し、秋季平原に來りて越年し、往々群飛漂泊す。

【例句】
小雀　朝風や小雀のとまる標澪（ミヲツクシ）（下總[illegible]）　蓼太（蓼太句集）
朝夕や峯の小雀の門馴るゝ　一茶（旅日記）

小雀さへ渡るや海は鳥の道　　梅室（梅室家集）

こがらめや茶の花つぼむころ　　柳城（はたけせり）

【参考】　こがら　Poecile atricapilla restrictus (HELLMAYR). 四十雀科。四十雀に似たれど小、胸部中央を走る黒條なく、頭部、後頭部は黒色なれど光澤がない。體の背面灰色、翼及び尾は概ね淡褐色。本亞種は本州に分布し、北海道・樺太・朝鮮に産するものは、稍〻異なる點あるを以て異亞種に屬せしむ。

日雀（中）　鵯鶋　鵯鳰

【古書校註】【年浪草】八月○名義未詳。○和漢三才圖會に曰、俗云比加羅。狀四十雀に似て小さく、頭背赤色、頰の邊白黑相交り、腹白翅尾黑その根澤はず

【季題解説】燕雀類に屬する鳥　四十雀に似て小く、頭上は黑くして青き色澤を呈し、咽喉は黑色、頰より頸の側面にかけて純白、頸の後部には黑色にて圍まれたる白斑あり。背は灰蒼色、腰部は少しく綠色を帶び胸部より腹部にかけて帶褐白色、尾羽は黑褐色にして、その緣邊は灰蒼色又は帶白色をなす。夏季は山地に巢を營み、秋平原に出でゝ、其まゝ越冬すること小雀に同じく、習性もこれに類す。樹木の害蟲を食し益鳥の一なり。

【例句】日雀　松笠にしがみつきたる日雀哉　鵯鳰（葛の松原）

【参考】ひがら　Periparus ater insularis (HELLMAYR). しじふからと同科に屬する小鳥。後頭の羽毛が少し延びて冠狀となり、この冠狀部から後頸部に向つて幅の廣い白色帶が縱走してゐること、胸部の中央を縱走する黑條がないことなどで、四十雀と區別される。北海道から四國まで廣く分布し、冬期には琉球にも渡來する。樺太及び對馬には異亞種が棲んでゐる。

眼白（中）　繡眼兒　大眼白　琉球眼白　朝鮮眼白　眼白押　眼白籠（人事）

【古書校註】【年浪草】八月。○眼白鳥、正字未詳。○和漢三才圖會に曰、小鳥也。狀鷦鷯に似て、頭背翅尾黃青鮮明なり、俗に淡萌黃色と謂ふは是也。眼の匝白圈あり、嘴臆白くして柿色を帶ぶ、腹白し。性能く囀をなし、友を好て巢

中にあるも亦一樹に集り、相依て互に押合ひ、其の中一隻衆出群を抜く、則ち餘又相推す、又中より抜去て外に附し、毎に群を好む。

【[illegible]】 [illegible]雀に似て、目白雀よりやゝ小くして、容姿愛すべく、羽色黄緑にして、喉は黄色、腹部灰白色、嘴は青黒色、脚は茶色に淡黒色を帯び、眼の周圍に白輪あり。依て名付く。群棲を好み、一枝に集り押し合ふ習性あり。俗に眼白押しと稱するは之なり。種類に、大眼白・琉球眼白・朝鮮眼白等あり。

【例句】

目白 押合うて目白の啼く〳〵も妹春かな　六鉋（猿舞師）

押合うて熟柿を落す目白哉　凍郷（正風下野蛙）

目白鳴く明るき雑木林かな　秋雨（赤壁）

【解説】 めじろ *Zosterops palpebrosa japonicus* Temminck & Schlegel. 我國に廣く分布してゐるが、小笠原・琉球等に産するものは異亜種にしてある。眼の周圍が白く絹絲様の光澤があることは人のよく知る特徴であり、尚、背面が黄黄色、尾が概ね黒褐色、下面中央は黄白色なのを普通としてゐるが、籠鳥として飼育してゐるものの中には、黒化、黄化、白化してゐるものが往々ある。蟲を食ふ外に、椿などの花蜜を吸ひ、その授精を助ける。

頰白（中）

蒿雀鳥　黄道眉　片鈴　諸鈴

【[illegible]】

【年浪草】 八月に（蒿雀鳥。和漢三才圖會に曰、俗に云ふ頰白鳥也、狀鶯より大にして灰赤色、眉白く畫くが如し、頰も亦白くして間黒、背上黒斑有り、翅尾略黒く、尾の兩端に白毛有り、腹微赤黄色、臆下に赤斑有り、其の足赤黒黄の聲圓滑多囀、小鈴の音有るは、其の聲を謂て片鈴諸鈴の名有る也

【[illegible]】 燕雀類に屬する鳥　形鶯より大く、灰赤色、眉白く、書くが如し、依て畫眉鳥の名あり　頰白く、背上に黒點あり　翅と尾黒く、尾の兩端に白毛あり。腹やゝ赤黄を帯び、胸下に赤斑あり。脚は赤黄色なり。よく囀る。「チリリ」と鳴を片鈴と云ひ「チリリコロロチチリ」と鳴くを諸鈴と云ふ。播州方面にては「一筆啓上仕候」と鳴くといひ、遠州にては「ツンと五粒二

朱まけた」と聞き、薩摩にては「おらがとゝ三八二十四」と囀ると云ふ。

【例句】
頰白　頰白なくや垂水の里の小松山　蜃樓（朝日句鈔）

【参考】
ほゝじろ、雀科。ほゝじろと稱せらるゝものゝ中、主なるもの次の如し。
ほゝじろ Emberiza cioides ciopsis BONAPARTE. 北海道から臺灣まで廣く分布す。雄では眉部白色で、眼下に白條があるが雌にはない。頭上は褐色、背面は赤褐色で黑斑がある。下面は概ね赤褐色又は淡黃褐色。
みやまほゝじろ Emberiza elegans elegans TEMMINCK. 頭上及び顏は黑色で、初部白色末部黃色の眉斑がある。上胸純黑色、以下は白色。但し雌は胸の黑色部なきこと等で雄と少し違つてゐる。

頰赤（中）

【古書校註】
【年浪草】八月。○頰赤鳥、正字未詳。○和漢三才圖會に曰、狀雀より小さくして、背色赤雀の如し、其の頰赤し、胸白く雌鷄文あり、聲青鵐に似て細高、常に蒿間に棲む。

【季題解説】
燕雀類に屬する鳥。形頰白に似て、其頰赤く、胸白くして、鶉に似たる斑紋あり。鳴聲「あをじ」に似て細く高し。五六尺の灌木又は叢の間に栖む。

【例句】
頰赤　夕日さす松や頰赤のとまり鳥　柏樓（類題發句集）
朝の間にいきせきわたる頰赤哉　丁水（新類題發句集）

【参考】
ほゝあか Emberiza fucata fucata, PALLAS. 雀科。耳羽が栗色なので、ほゝあかの名出づ。ほゝじろによく似てゐるが、下面の地色白色で黑斑があること等容易に區別される。北海道から臺灣まで分布し、東シベリア地方にまで產する。本種に似て小形の、こほゝあか Emberiza pusilla PALLAS. は極めて少い。

菊戴鳥（中）　戴勝鳥

【古書校註】
【年浪草】八月○菊戴鳥。正字未詳。○和漢三才圖會に曰、俗に云、菊以太々木。狀眼白鳥に似て背翅青綠色、項の上に黃毛花の如き者を戴く。故に名づく云々。

【季題解説】
燕雀類に屬する鳥。形めじろに似て、背と翅とは綠色にして、翅には白點を交ふ。翅の端と眉の邊と尾とは黑く、嘴は少し黑く、頭の上に形やゝ菊花に似たる黃色の毛あり。秋に至り柄長等と共に人里近く渡り來

り、好みて杉の實を食ふ。

【例句】

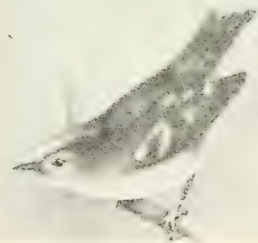
菊戴鳥　菅笠の菊いたゞきや旅姿　乙由（麥林集）

越の工面にとはれて

枯木にも菊戴の鳴日かな　故鳳（田毎の日）

むれ來るや菊いたゞきのかつき染　柳居（[illegible]）

渡り來る菊いたゞきも節句哉　頂[illegible]（[illegible]）

【參考】きくいたゞき Regulus. regulus japonensis BLAKISTON. 鶯科。翼長五十八ミリ、尾長四十五ミリの小さき鳥。頭頂に黄色部があり、雄ではその中央に橙黄色の羽毛がある。この黄色部は黒線を以て、これより以下の、深綠色の體背部と區劃されてゐる。翼には顯著な白斑がある。體の下面は概ね淡黃褐色を呈してゐる。本邦では臺灣から樺太まで産し、尙、東亞北部に廣く分布してゐる。

獦子鳥（中）　あつどり

【古書校註】【年浪草】八月○獦子鳥。胡雀・腸背鳥、名義未詳。○和漢三才圖會に曰、倭名阿止里。此の鳥常に山林に棲み、不時に群飛して寺院之叢林に出るあり、百千群をなして天を蔽ふ。狀雀に似て大、嘴太く圓し。頭頸灰蒼柿斑あり、頷黃赤、嘴白し、背蒼黑に赤を帶び黑斑あり。

【季題解說】燕雀類に屬する鳥。形雀に似てやゝ大きく、頭と頸とは灰青色にて黑斑あり、背は蒼黑、胸と腹とは赤黑く、翅と尾とは黑く、脚は黃赤なり。歐羅巴・亞細亞の北部に栖み、冬は南部に移る。我國にては、秋大群をなして飛來す。あとりに種々の文字を用ふ。鵼・獦子鳥・臘子鳥・蠟子鳥・蠟背鳥・花雞等。

【例句】

獦子鳥　小苦きもあはれに木曾の獦子鳥かな　青々（倦鳥）

斯くも來て斯くもとらるゝ獦子鳥かな　同（同）

皆ながら食はるゝものかあとりの斑　同（同）

【參考】あとり Fringilla montifringilla LINNÉ. 雀科。かはらひわに似てゐるが、雄では頭上から春まで黑色。但し雌では灰褐色。顏及び頸側は頭上と同色、下面は上部橙褐色、下部白色。歐洲・亞細亞に廣く分布し、夏期その北部で蕃殖し、冬期には南方へ移動する。我國では樺太から琉球まで各地で見られる。

猿子鳥（中）　増子鳥　猿子　紅猿子　大猿子　照猿子

古書校註

【年浪草】八月○猿子鳥、藏器拾遺に曰、突厥雀狀雀の如くにして身赤し。○和漢三才圖會に曰、正字未詳。狀大さ雀の如し、全體灰黑、胸腹淡赤色、羽灰黑色にして黑彪あり。尾下兩端に白き者二つ。その嘴短くして赤黑く、脚黑く頂灰黑、頭より胸まで淡赤にして白圈あり、千葉菊花の紋の如し。猿麻之古・照麻之古・大麻之古あり云々。

季題解說　燕雀類に屬する鳥。大さ雀位、東亞細亞の溫帶に產し、秋季我國に渡り來る。種類に依り羽色を異にす。大猿子の雄は全身美しき紅色にて翼及び尾は暗褐色なり。額及び喉の羽は稍細く、銀白色をなし、翼に二條の白帶あり。腹の中央部は白色なり。雌は殆んど褐色にて體の下部に暗褐色の斑點を有す。種類に萩猿子・大猿子・菊猿子・紅猿子・銀山猿子・小笠原猿子等あり。

參考　ましこ。雀科。主なる種類左の如し。

べにましこ、一名さるましこ、Uragus sibiricus. sanguinolentus (TEMMINCK & SCHLEGEL). 普通ましこと稱せられるものはこれで、樺太・北海道・本州・四國等に產し、北支・滿洲・東シベリアにも分布す。前額及び眼先は深紅色、頭上と顏とは銀白色で赤味を帶びてゐる。脊は地色が淡紅色で褐色の斑がある。翼は黑褐色で二條の太い白條が橫走してゐる。喉は赤味を帶びた銀白色、胸部は紅色腹部は淡紅色。

おほましこ Carpodacus roseus (PALLAS). 東シベリア・樺太で、夏期蕃殖し、南方に渡來して越冬する。本邦では、時としては九州まで、これを見ることがある。雌雄著しく色彩を異にし、雄は概ね赤く、額と頭上・腮・喉は赤味を帶びた銀白色。脊には黑褐色の斑がある。雌では脊面が稍々赤味を帶びた灰褐色をして居り、胸部は淡灰褐色で、褐色の斑がある。

鵐（中）　蒿雀　縞蒿雀　野鵐

古書校註

【年浪草】八月○和漢三才圖會に曰、巫鳥漢語抄に云、和名之止々。今鵐青鵐一物となすは非也。鵐は山林にありて原野に出でず。形雀に似て黃赤色、翅黑縱斑あり、脚掌黑し云々。

【枝折草】しとゞ。鵐の字を用ゆ。

【季題解説】燕雀類の雀科に屬する鳥。體長五寸位。上部はオリーブ色。眉・頰・背・翼・尾は褐色にて、背と翼には暗褐色の幅廣き縱斑あり。下部は黄色を帶び、咽喉より胸脇には濃き褐色の斑點あり、雌雄共に同色なり。本邦到る處に見るも、夏季は涼しき山林に棲み、秋に至り人里近く來る。あをじ・のじこ・くろじ・しまあをじ・しまのじこ及び頰白・頰赤を總稱してしとゞと云ふ。又頰白の異名なりとも云ふ。種類に蒿雀・野鵐・黑鵐・島青鵐・島野鵐等あり。

【參考】あをじ、一名あをしとど。雀科。Emberiza spodocephala personata TEMMINCK. 頭部は概ね暗深綠色、以下の背面は深綠褐色、黑褐色の斑がある。胸部以下の地色は黃色、上胸部には褐斑がある。千島から琉球まで、各地に普通な種類で、飼鳥として愛せらる。

しまあをじ Emberiza aureola PALLAS. シベリア、本邦等で蕃殖し、印度・馬來地方等で越冬す。頭上から喉まで黑色、以下の下面は黃色であるが、前胸部を横走する濃き栗色の縞がある。

のじこ Emberiza sulphulata TEMMINCK & SCHLEGEL. 腮以下の下面黃色を呈する點を以て種名にしてある。背面は深綠灰色で、頭上は黃綠色脊に黑斑がある。九州から北海道に至る各地で蕃殖し、臺灣・南支那で越冬する。

交喙鳥（いすか）（中）　鶍（いすか）　しろはらいすか　なきいすか

【古書校註】

【年浪草】八月。○伊須加鳥、正字未詳、俗に伊須加止利と云ふ。○和漢三才圖會に曰、狀鸜鵒の如にして頭背蒼赤、腹臆最も赤紫、嘴蒼くして齟齬を作す、故に事故齟齬する者を伊須加の嘴に譬ふ。

【季題解説】燕雀類に屬する鳥。大さ五寸六分、全身稍黃味を帶びたる赤色にて、翼及び尾は黑く、暗褐色の緣有り。腰及び下尾筒は白色なり。鳴聲は無きも、色美しければ見鳥として養はる。上嘴は下に、下嘴は上に曲りて互に交叉するも、よく木の實などを拾ひ食ふ。昔より物事の齟齬するを、いすかの嘴のくひちがひと云ひて、その名をよく知らる。好んで松柏科の樹林に棲み、鸚鵡の如く其嘴と足とを用ひて容易に上下す。

【例句】

交喙鳥　何せんにいすかの嘴は與へける　青々（篠鳥）

【參考】いすか　褐色の嘴が上下交叉してゐるのを、いすかの最も顯著な特徴としてゐるが、本邦の北半に棲むものと、南半に多いものとでは、少し異なるを以て、それ〴〵別の亞種に屬せしめてある。北半のものは、單に、いすか（Loxia curvirostris caucasia BUTURLIN）と云ひ、體は概ね暗紅色で、腹面の方が色が淡いのが雄の特徴であるが、雌の老いたものにもかやらなのがある。帶綠黃色が雌の羽色であるが、雄も若い時は同様で

あり、時としては成熟後もこのまゝのことがある。南半に多いのは、しろはらいすか L. Curvirostris japonica Ridgway. で、前亞種より稍々小である。なきいすか Loxia leucoptera elegans Homeyer. は、普通のいすかに似てゐるが、翼に顯著な白帶が二つあり、北半球に廣く分布してゐるもので、本州の北部に渡來する。

鴲（しめ）（中）　蠟嘴（しめ）

季題解説　燕雀類に屬する鳥。形桑鳲（イカル）に似て全身褐色頸に淡灰色の帶あり。嘴太く、短く淡肉にして、脚は淡黃色なり。

参考　しめ。雀科。北海道から臺灣まで產し、東シベリア地方にまで分布す。嘴が甚だ太く、夏期は鉛色であるが冬期になれば肉色となる。嘴より眼にかけて黑色、また喉部も黑色であるが、他には顯著な斑がない、體は概ね褐色、翼は、黑色で、著しい白斑がある。學名を Coccothraustes coccothraustes verticalis Tugarinow & Buturlin. といふ。樺太には異亞種に屬する、からふとしめが產する。

桑鳲（いかる）（中）　鵤（いかるが）　いかる　三光鳥（さんくわうてう）　豆廻（まめまはし）　豆鳥（まめどり）　豆甘美（まめうまし）　豆割り（まめわり）　青雀（あをすゞめ）

古書校註　【年浪草】八月。○和漢三才圖會に曰、鴷脂・靑雀・蠟嘴雀、狀鳩より小さく、頂黑く腹灰靑色、羽の末黑く白斑有り。嘴微に曲て厚く、淺黃白、尾短く、好で豆粟を食ふ、故に豆甘美（マメウマシ）と名づく、俗以て豆廻と爲す、常に鳴て春月能く囀る、比志利古木利と言ふが如し。倭名抄に云、鵤（伊加流加）斑鳩（マメイハン）同じ、共に誤り也。○大和本に草曰、桑鳲、一名鴷脂。

季題解説　鳩鴿類に屬する鳥。大さ鵙（モズ）の如く、全身灰色にして頂は深黑なり。翅の端黑くして黃褐を帶び、尾は茶褐にして、脚は赤く、嘴大くして短く、深黃なり。穀を食とす。豆を含めば嘴にて旋轉す、故に豆廻しの名あり。山林の奥深く栖み、高き木の上に巢を營む。秋、人家近く渡り來り、早春よりよく囀る。其鳴音微妙にして愛らし。〔和漢三才圖會〕には「比志利古木利（ヒシリコキリ）」と啼くとあり。籠に飼ひ、敎ふれば、五つ通り位の音を覺え、殊に「月日星（ツキヒホシ）」と呼ぶ如く聞ゆるより「三光鳥」の名あり。但し

現今鳥學上三光鳥と呼ぶは、別種のものなり。いかるがに一斑鳩一の字を充つるは非なり、斑鳩はじゆずかけ鳩のことなりとの說あり。說の當否は知らず、『倭名抄』には「鵤、和名伊加流加」とあり。大和の法隆寺の附近を斑鳩の里と云ふは、昔彼地一帶に、いかるが群り棲みし故なるべし。推古帝の時、聖德太子、一寺を建立して斑鳩寺と呼ぶ。更に其の近くに斑鳩の宮を建てらる、今の夢殿のある所即ちその址なりと云ふ。別名、三光鳥・豆廻・豆鳥・豆甘美・いかる・まめわり・まめつぼう等あり。

例句

鵤　豆栗に來て鵤や隣畑　　青々（倦鳥）

豆廻し　豆廻し廻しに出たる日向かな　　支考（蓑塞）

こぼれしを拾ひ上げてや斑鳩　　二松（新類題發句集）

參考　いかる　雀科。Eophona personata personata（TEMMINCK & SCHLEGEL）。甚だ太き黃色の嘴を有し、頭上より喉に至るまで、凡て黑色、それ以下の體色は、概ね淡灰褐色、翼はほゞ黑色で、中央に白斑がある。北海道から九州まで分布する本邦特有の鳥。飼鳥として愛玩される。

鶲（晩）　火焚鳥　黃鶲　瑠璃鶲　上鶲　野鶲　鮫鶲

古書校註

【年浪草】八月。

註　右の古くは渡鳥の一とし、年浪草には八月の部に出せり、されど栞草に載する貞享式の說は冬季とす。

季題解說　鳴く聲カチ／＼と聞えて、恰も燧石を打つ如くなるより、其名あり、或は背翅赤ければ云ふともあり。燕雀類に屬する小禽にて、種類多し。通常多く見るは上鶲と稱する種類にて、雀より稍大きく、雄は頭蒼灰色額より喉、胸の上部は黑く、腹の下方は褐色なり。

實作注意　種類に黃鶲・瑠璃鶲・上鶲・野鶲・鮫鶲等數種あるも、上鶲最も多し。樹木の害蟲を捕食する益鳥にして、保護鳥の一なり。晩秋より初冬に、清亮能く囀る。但し囀るは雄なり。此鳥を冬季に編入せる書もあれど、別に據る所あるに非ず。只「火焚き鳥」なる名に因みたるのみ。

例句

鶲　餘の鳥の先へ渡して鶲かな　　乙由（麥林集）

菊あれてまれ／＼下りる鶲かな　　小酒（杉の實）

數珠懸鳩（三秋）　白子鳩　八幡鳩

季題解說　鳩鴿類の一種。頭頂及び下面は一體に灰白色にして、少し赤味を帶び、背は尾に至るまで灰褐色に近し。後頭に黑の半輪環あり、故に數珠

掛鳩の名あり。

【實作注意】 一名白子鳩とも又八幡鳩とも云ふ。山に棲み、夏より秋にかけて、最もよく鳴く。其聲トシヨリコイと聞ゆと云ふ。桑鳩(イカルガ)に斑鳩の字を充つるも斑鳩は本鳥を指すものなりと。

蟲喰鳥(むしくひどり)（中）

【季題解說】 ホトヽギスの類 頭背は黑灰色、腹部黃色にて、翅と尾に柿色の斑あり。渡り鳥なれば秋とす。

鶉(うづら)（三秋）

こはなどり　片鶉(かたうづら)　諸鶉(もろうづら)　鶉(うづら)の床(とこ)　鶉駈(うづらかけ)る駈鶉(かけうづら)　鶉籠(うづらかご)（人事）

【古書校註】

【山之井】 鶉は尾のこ短き鳥なれば、一聲は侘りおもなしとも(一)、尾はなくて尻聲長しとも云ひ(二)、ちゝくわいと鳴く聲を、父にも乳にもそへ又欲にふける(三)、夜も更けるなども云ひかけ、鶉草と云ひては、鷹人のふみたつる心ばへを云ひ、鶉まきとしては、勢子(せこ)のたちつけなどに寄す。

【御傘】 鶉の床、夜分に非ず(四)、新式を見るに夜分に非ざる物の所に、鶉の床とばかり出せり。此の道理を了簡するに、餘の鳥とかはりて更に空を飛び翔けらず、晝も草の中にのみあるにより、此の鳥ばかりを床としても夜分に非ずと定めたると見えたり。然れば諸鳥の床は皆夜分と知るべし。又無言抄を見れば、鶉の床、夜分に非ずと云ふ下に、獸の床同前と侍り。是は新式に見えぬさし合なれば皆夜分と定め度侍る。鶉衣。動物に非ずと新式に筆を加へて、しかも秋の部に入れたり。只侘人の短き着物を云ふ。然れども秋の季持つ故に生類に三句去る也。

【滑稽雜談】 八月二今按ずるに和俗の鶉の子或は鶉を捕へて、鶡籠に養ひて初秋の頃ほひより、その鳴聲の好惡を選んで愛す。これらの人相集りて七八月の間鬪鶉といふを催し、その好聲のものは金銀數多に之を賣買せり。又その發とする時は風味美にして貴戚なほ之を賞す。

【和漢三才圖會】 按に鶉は處々の原野多くこれあり。甲州・信州・下野最も多し。畿內の產亦勝れり。色黃赤にして黑白の斑彪(マダラ)あり。もし珍彪有れば人甚だ之を賞す。その聲知知快(チチクワイ)といふが如し。數品有り、嘩々快(クワクワイ)を上となす。每早旦・日午・夕暮鳴く。凡そ春二三月始めて鳴き芒種(五)に至りて聲を止む。六月又更に聲を發して中秋に至り聲を止む。人之を養ふ。その雌は小さく足卑く囀らず、呼んで阿以布(アイフ)といふ。もし雄鶉未だ聲を發せずして雌の籠の側に置く時は則ち聲を發す。

【年浪草】 片鶉(かた)とは夫婦相添はず、離れて居るをいふ。〇駈鶉(かけ)とは藻鹽艸に曰、鷹狩也。これは馬上にて鷹を据ゑてかり立て、鳥にあはするをいふ也。かける、かくる也。〇鶉籠とは凡そ鳥を愛する人これを樊中に養ふ。

奘と稱する物即ち籠也。その飾最も美麗也。鷸と鶉と相並びて之を弄ぶ。（六）鶉衣とは、荀子に曰、子夏之衣懸結如レ鶉、八雲御抄に曰、是法文にあり薄くやさしき心也。又異説に衣のすその破れて鶉の毛の似たるを云ふ也。又短き衣也。或書にてゝら、鶉衣・襤褸とも書きてゝらと云ふ。つづれの事也。[illegible]州の人は[illegible]袢をてゝらと云ふとなん。貞德說も佗人の短き着物を云ふといへ[illegible]。

注（一）例句に「ひとこゑは[illegible]おもなき鶉哉」。（二）例句に「おもなくに[illegible]はなおき鶉かな」。（三）鶉の鳴くたふけるといふ。（四）床といふ語あれば普通は夜分の詞なれども、鶉の床は例外なりとなり。（五）季節の名、二十四氣の一、陽暦六月五日頃。（六）江戸時代に鶉の聲を喜び[illegible]せしこと、[illegible]色音[illegible]等の書に多く見ゆ。

【季題関連】　鶉雉類に屬する鳥。多くは原野に棲み、或は人家に飼はる。形鷄の雛に似て肥え、尾短く、全身褐色にして黑白の斑あり。肉甚だ美味なり。每に早朝・日午・夕暮に鳴く。其聲知地快と云ふ如く聞ゆ。片鶉は雌雄相添はず離れ居るを云ひ。諸鶉とは相添ふを云ふ。鶉の床は鶉の臥す處。新千載集「風拂ふうづらのとこは夜寒にて月影さびし深草の里」。鶉籠は鶉を飼ひ置く籠、丈低く方形なり。異名にいとら・こばなどり等あり。【[illegible]】夏—麥鶉、冬—雪鳥[illegible]。

【例句】

麥深き徑橫ぎる鶉かな　　沾德　（沾德句集）

注
今は昔の秋もなくて
伏見には町屋の裏に鳴鶉　　鬼貫　（鬼貫句選）

鶉啼く吉田通れば二階から　　同　（同　）

作[illegible]にて
鶉啼く田も見えたりな鼠丸堂　　同　（七車）

桐の木に鶉鳴なる塀の內　　芭蕉　（猿蓑）

鷹の目の今や暮れぬと啼く鶉　　同　（流川集）

花鳥も鶉とならん願ひかな　　其角　（俳諧勸進牒）

平家の哀を語るに
歸り來て福原淋し鶉立　　同　（五元集）

粟刈れば野菊が下に啼鶉　　許六　（正風彥根體）

鷹匠に箸止めさせて啼鶉　　同　（同　）

瓦燒く烟にむせて啼鶉　　同　（橫平樂）

粟の穗を見上る時や啼鶉　　支考　（續猿蓑）

我數寄の粟津が原や鳴く鶉　　同　（草苅笛）

起ちかねて老の鶉の鳴音哉　　惟然　（藤鞆子集）

粟の穗のひくに入りたる鶉哉　　同　（有磯海）

粟の穗をこぼしてこゝら啼鶉　　同　（浮世の北）

夕暮を思ふまゝにも鳴く鶉　　同　（泊船集）

夕風の引捨を啼く鶉かた　浪化（旅袋）
駒の口ひかへ〱て鶉かな　同（射水川）
寐所に日のさす粟の鶉かな　同（白扇集）
唐網に袖濡れて聞く鶉かな　正秀（流川集）
日當りにせゝくり啼かす鶉哉　同（有磯海）
ひゝ啼に夜を待明かす鶉かな　山店（芭蕉庵小文庫）
張聲や籠の鶉の力足　同（初便）
馬方に踏み立られて啼く鶉　臥高（有磯海）
野はかれて砂にすり込む鶉かな　荻子（同）
初鶉時計の六ツもうたせけり　史邦（芭蕉庵小文庫）
馬捨てゝ歸れば秋の鶉かな　旦藁（杜國）
一聲を浪に打込む鶉かな　紫道（砂川）
深草も隣ありきや鶉好き　牧童（そこの花）
出合たる心は何と啼く鶉　北枝（中やどり）
金の間を淋しがらする鶉かな　乙由（麥林集）
聞く人の日の色狂ふ鶉かな　千代尼（千代尼句集）
賣られても秋を忘れぬ鶉かな　同（同）
縫物に針のこぼるゝ鶉かな　同（同）
小百姓鶉を取る老となりにけり　蕪村（蕪村句集）
鶉野や聖の笈も草隱れ　同（夏より）
鶉日に嬉しさこぼす毳かな　白雄（白雄句集）
網の目や憂き曉を鳴く鶉　同（同）
おもはゆく鶉啼くなり樹の外　太祇（太祇句選）
鶉啼く野を走りけり赤鼠　闌更（半化坊發句集）
粟の穗や一ト穗しづみて啼鶉　青蘿（青蘿發句集）
啼くたびに草の露散る鶉かな　魯文（濃明鳥）
眼の前に蝶死んで啼く鶉かな　成美（成美家集）
古沓や荻にかゝりて啼く鶉　同（同）
我聲に押されてひさる鶉かな　士朗（枇杷園句集）
鳴け鶉邪魔なら庵もたゝむべき　一茶（旅日記）
小庇やけむい〱と啼く鶉　同（七番日記）
人相の鐘なき里や鶉鳴く　梅室（梅室家集）
押水や人は騷ぐに鳴く鶉　同（同）
百姓のふたつ捕へしうづらかな　なみ女（なみ女遺稿）
飼馴らす埴生の宿の鶉哉　雨丁（庚午句鈔）

片鶉

知らず我番ひて見ぬを片鶉　白雄（白雄句集）

諸鶉

秋航に餞す
諸鶉駒は任せぬ脇目かな　其角（五元集）

鶉籠　鶉籠欄の鼓に並びけり　召波（春泥發句集）

日の澄みてしづかに音す鶉籠　青々（[illegible]）

参考 うづら　雉科。（Coturnix coturnix japonica TEMMINCK & SCHLEGEL.）滿洲・シベリア・北日本等で蕃殖し、秋期南日本に多數渡來し、越冬す。廣濶な平地に棲むを常とし、主として動物性餌食をあさる。雄では夏羽は喉が赤栗色を呈してゐるが、冬羽は、この部分が白くなる。雌では常にこの部分が黄白色である。尾羽は甚だ短く、その地色は黒色・黄色及び褐色で斑がある。頭部は黒色である一條の白斑縱走す。背部は概ね赤褐色で白斑がある。

鷓鴣（中）

古書校註 【年浪草】八月（和漢三才圖會に曰、字彙に云、鷓鴣はその飛ぶ數月に隨ふ。正月の如きは一たび飛んで止む。蓋し未だ然るや否やをしらず。近年また中華より來るあり、最も珍しとす。狀矮雞の雌に似て頭は鶉の如し。（鷓鴣秋の小鳥の部に入る非、藻鹽草に云、この鳥は寒がりをする鳥也。仍つて秋の末なれば紅葉の散るを脊中に負ひかねて、霜雪の寒を防ぐ也。故に歌にも鳥の上毛の紅とよめりと云々。藏玉「鷓鴣といふ鳥のうは毛の紅にちりし紅葉ののこるなりけり」の意にて秋とするか。

参考 鶉雞類に屬する鳥。支那南方に産す。形數珠懸鳩に似て、頭は鶉の如く、腹部に白き紋あり。常に南に向て飛ぶと云ふ。漢詩に多く詠まる。

例句

鷓鴣　書生來て鳥屋に鷓鴣を尋ねけり　嘯山（俳諧古選）

鵲（三秋）　高麗鴉　朝鮮鴉　唐鴉　筑後鴉　肥前鴉　烏鵲

参考 鳴禽類に屬する鳥。大さ烏の如く、頭背黒くして褐色を帶び、肩に白き羽あり。翅は黒くして碧に光る。尾は身より長く黒く綠にして光り其端は紫に光る。胸腹は白くして褐色を帶ぶ。擧鵲に似て低し。朝鮮に多く産す。我國にては、福岡縣・佐賀縣にこの棲息地ありて、大正十二年天然紀念物に指定されたり。此九州の鵲は天正の昔、加藤清正が朝鮮より將來せしものなりとの傳說あり。七夕に牽牛と織女が相逢ふ時、天の川に鵲が其翼を張りて橋とし之を渡すと云ふ古說は人のよく知る處。又「本草綱目」に曰く、鵲は乃ち烏の屬なり。大さ鴉の如くにして長く、尾尖り、嘴黒く、爪綠に、背白く、腹、尾、翮黒白駁雜す。上下に飛鳴き、音を以て感じ而して孚む、視を以て抱へ十二月始めて巣ふ、戶を開くに太歲を背にして大乙に向ふ、來歲風多きを知つて巣は必らず卑下くす、故に鵲は來るを知り、猩々は往くを知ると。又曰

く、鵲に隱巢あり、木を梁の如くし、他より見えざらしむ、人若しこれを見れば、富貴となるなり。鵲は秋に至れば則ち毛脫し、頭禿、其性最も濕を强む、靈能ありて能く喜びを報す故に喜鵲と名づく。」とよく其習性を盡せり。和漢の繪に、松に鵲を配して「萬年報喜」などあるは卽ち此靈能ありて能く喜びを報ずと云ふに依れるなり。

別名多し。高麗鴉・朝鮮鴉・唐鴉・筑後・肥前に多ければ筑後鴉又は肥前鴉。烏鵲とも云ふ。〔參照〕鵲の橋 冬—鵲の巢

椋鳥（中） むく 白頭翁 むら鶫 小椋鳥

古書校註

【年浪草】八月。〇漢名未詳 〇和漢三才圖會に曰、椋樹に棲む、故に俗呼んで椋鳥と曰ふ。形小鳩の如にして項白く、背灰黑、背の下黑白層々、眉淡黃に頷以下腹に至て倶に白し、翮上灰黑、斑翅あり、本微に白く、羽黑白交り、嘴黃色、鼻邊微黑を帶ぶ、脚脛黃、其の聲鴝に似て喧しく、好んで群をなす。又小椋鳥あり、狀相似て小なり。〇椋鳥處々に多し。洛北賀茂の產都人之を賞す、其の味佳なり。

季題解說 鳴禽類に屬する鳥、椋の實の熟するころ群り來り、又黑く熟したる椋の實を好んで食するより其名あり。形小鳩位ゐ、尾はやゝ短く、嘴は眞直にて尖り、脚は强壯にして地上を輕快に步行す。羽毛は一般に灰黑色にて多少白味を帶ぶ。頭上に白羽を混ず。白頭翁と呼ぶ異名は之より起る。大樹の洞穴などに巢を營み、好んで群をなして往來す。

例句

椋鳥　專福寺

椋鳥や梢に寄する波の音　支考（國の華）
鶫百羽命拾ひし羽音かな　太祇（太祇句選）
鶫渡る桂の且加茂の暮　几董（井華集）
遁れ飛ぶ鶫一群や森の月　召波（春泥發句集）
椋鳥の森吹越ゆる羽風かな　桃處（田毎の日）
椋鳥や夜も白川の闇の上　花讃女（藤陀羅尼）

【參考】　椋鳥　椋鳥科、細長き嘴と強大な脚と有し、群居して蝦蟲其他の昆蟲・穀類等を食ふ。黑色又は褐色を主とせる見榮えのせぬ羽毛を有してゐる。主なる種類を左に掲げる。

むくどり Spodiopsar cineraceus (TEMMINCK)・北海道から九州まで甚だ普通の鳥類、東シベリア地方にも分布す。冬季には臺灣にまで渡る。頭上及び後頸には柳葉狀の黑羽毛を生じて居り、額及び顏は白色の地に黑羽を混じてゐる。

こむくどり（一名しまむくどり）Sturnia violacea (BODDERT.)　樺太から琉球まで廣く分布し、前種より小。頭上及び後頸は灰色がゝつた黃白色・以下の脊は黑色。

瑠璃鳥（中）

竹林鳥　翠雀　小瑠璃　大瑠璃

【古書校註】

【年浪草】　八月。（和漢三才圖會に曰、碧鳥俗に云ふ留里、大さ雀の如にして頭背翮上翠色、頬頷臆下に至て純黑、胸腹白、嘴脚尾倶に蒼色、其の聲圓滑清囀すと云々。

【季題解説】　鳴禽類に屬する鳥。大瑠璃は鶲の一種にて、一名竹林鳥と呼ぶ。大さ文鳥位、羽色は上面一帶は美しき瑠璃色にして、頬より胸にかけて黑く、腹は白し。嘴は扁平にして、先少しく曲る。小瑠璃は大瑠璃より稍小さく、雌は上部オリーブ色にて、下部淡黃色を帶ぶ。羽毛美しく且つ鳴聲もよきを以て、古來籠鳥として尊まる。

【例句】

瑠璃鳥

心そめつるりひわ目白青しとど　　廣寧（俳諧師手鑑後集）
何の木の花を吸ふてやるりほあか　　路青（續ゝ物狂）
青雲にまぎれてるりの渡りけり　　蔵水（類題發句集）
瑠璃來鳴く畑一境のきよき哉　　青々（俳　目）

鶺鴒（中）

庭たゝき　石たゝき　嫁ぎをしへ鳥　嫁ぎまなび鳥　嫁ぎ鳥　妹背鳥　戀をしへ鳥　にはくなぶり　河原雀　濱雀　麥蒔鳥　黃鶺鴒　背黑鶺鴒　白鶺鴒　つめなが鶺鴒

【古書校註】

【滑稽雜談】　八月。

【季題解説】　燕雀類の一屬。山野の水邊に棲む。燕に似て色は灰色に稍橄欖綠色を帶び、腰以下は綠黃色なり。尾長く常に上下に動かせり。夏季雄はよく囀る。四季を通じて本邦にあるも、夏季は山地に居り、秋より冬は人里近く出で來る。

［實作注意］ 鶺鴒は秋より冬にかけて到る處に見かくる鳥にて、谷川の石より石へ小刻みに尾を搖り動かし乍ら歩む痩せ形の優しき姿勢の又なく愛らしく、薄氷張る池の水の面、敗荷のかげより素速く走り出る風情など實に可憐なるものなり。斷えず尾を上下に動かす習性あるより、之を庭たゝきとも石たゝきとも云ひ、日本紀の伊弉諾・伊弉冊二神の小話により、嫁ぎまなび鳥とも嫁ぎ教へ鳥とも又妹背鳥とも云へり。其他の異名にかはらすゞめ（播州方言）はますゞめ（伊勢方言）等あり。種類に黄鶺鴒・白鶺鴒＝淡墨鶺鴒・脊黒鶺鴒・石見鶺鴒＝横振鶺鴒、等あり。何れも尾羽の色など小異ありて、それ〴〵に別つも我國に最も普通に見受くるは右の内白鶺鴒と脊黒鶺鴒なり。鶺鴒を冬季に篇入せる類書あれど山地より出でて平原村落に來るは仲秋の頃なるを以て、秋季に入るゝを妥當なりとす。［參照］稻負鳥

［例句］

鶺鴒

世の中は鶺鴒の尾の隙もなし　凡兆（猿蓑）
鶺鴒や垢離場へ下る岩傳ひ　横几（句兄弟）
鶺鴒や走り失せたる白川原　氷固（芭蕉庵小文庫）
鶺鴒や壁土こぬる畔の上　麐盤（同）
下總浦傳ひ
鶺鴒や潮來数へて岩傳ひ　蓼太（蓼太句集）
鶺鴒の寒さもて來や藏の陰　道彦（蔦木集）
筍類の葉に汁をさしげて
鶺鴒よこの笠叩くことなかれ　子規（子規句集）

庭たゝき
いさなぎ山
昔哉いざなぎ石の庭たゝき　覽水（三山雅集）

石たゝき
菊の花見に來て居るか石叩き　可南女（有磯海）

［參考］ せきれい　水邊を高く低く波狀をなして飛び、食物をあさる。嘴は甚だ細長く、尾もまた甚だ長し。左に重なる種類を掲ぐ。
きせきれい (Calobates cinereus caspicus (S. G. GMELIN). 千島より琉球まで、極めて普通な鶺鴒はこれである。下面は腮及び喉が白色で、其以下は美しい黄色を呈してゐるが、夏期になれば、雄は腮と喉とが黒色に變はる。背面は深綠色を帶びた灰色で、眉部に黄白條がある。
せぐろせきれい　Motacilla alba grandis SHARPE. 北海道から琉球まで廣く分布する普通な種類、背面は概ね黒色であるが、冬期には灰色に變ずる。額から眉・腮にかけて白色、胸部は黒色、以下の腹面は白色である。

はくせきれい Motacilla alba lugens Kittlitz. 眼を過ぎる黑條ある外、顏部は白色、他の點では、「せぐろせきれい」によく似てゐる。樺太から臺灣まで廣く分布する。

つめながせきれい Budytes flavus taivanus Swinhoe. 夏期、樺太及び千島・東部シベリア等で蕃殖し、琉球・臺灣・馬來地方等で越冬するので本州では甚だ稀に見るのみ。後趾の爪甚だ長い。背面は深綠色、眉部黄色眼先及び頰は黑色、下面は凡て黄色。

田雲雀（中）　犬雲雀

季題解說 鶺鴒科に屬する鳥。羽色背面は褐色に富み、一見雲雀に類す。尾は鶺鴒の如く長からず。東部西比利亞・カムチヤツカ及び千島にて蕃殖し、秋冬の間に本邦に渡來す。稻田に多く鳴く。犬雲雀ともいふ。

稻負鳥（中）

古書校註

【年浪草】古今三鳥之其の一也。○奥義抄に曰、稻負鳥古歌に樣々詠めり、或は秋の田に群れ食むとあり、或は秋立ちて來るよしあり。俊子歌に「小夜更けて稻負鳥の鳴なるを君が叩くと思ひける哉」とあり。又古歌に云ふ「逢ふことの稻負鳥のをしへずは人を戀路にまどはましやは」とあり。是につけて庭たゝきと申す人もあれども、本草和名・閣名苑など云ふ文こそは萬の物の異名形をさへ、あかしたるに、見えたる事もなし。又順が和名、庭たゝきをも鶺鴒又鶺鴒など書きて、注には日本紀私記に云、とつきをしへ鳥と書けり。又別に稻負鳥と見えたり。順が知らざらんやは。但し彼の古哥にには庭たゝきとぞ見え侍れど、順がわきまへざらん事を今の世の人定め難しと云々。八雲御說・古今榮雅抄・顯昭の說・諸家口傳の書等に說き示し給へども祕傳測るべからず。

【栞草】八月。「古今 我が門にいなおほせ鳥のなくなべにけさふく風に雁は來にけり」。眞淵翁云、稻負鳥はいたく知り難き事にてさま〳〵と論ぜしをみるに、或は鶺鴒也、田夫也、などいふはこの歌をよくも心得ず、なべ（一）てふ詞をもしらぬひがごとどもにて、皆言ふに足らず。庭たゝきのことをいふといへるは當れり。實に秋の半すぎて來鳴くものなり。［綺語抄］あふことを稻負鳥の教へずば人は戀路にまどはざらまし ○鶺鴒・稻負鳥・庭たゝき・つゝなはせ鳥・とつぎをしへ鳥等の諸名あり ［三才圖會］鶺鴒。雀のたぐひ、飛ぶときは鳴き、行く時は搖く。大さ鵐（二）の如し、脚長く尾張の下白し。頭の下黑く連錢の如し。故に杜陽の人これを連錢といふ。

註 （一）何々に伴ひての意。（二）カヤグキ、鵐の一種 ○稻負鳥につきては古來諸說あり、馬なりといふ說すらあれど、稻刈を課せ催促する意にて、鶺鴒の鳴き渡る頃、農民これに促

されて稻を刈取る故にいふ也。但し稻課せの同意なるより、收税吏にかけてよめる歌も見ゆ。

【季題解説】此鳥に就て古來いろ〳〵の説あり。鶺鴒なりと云ひ、朱鷺なりと云ひ、又雀なりとも云ふ。甚しきは馬なりとの説もあり。賀茂眞淵は、庭たゝき（鶺鴒）なりとせり。『和漢三才圖會』に「鶺鴒雀のたぐひ。飛ぶ時は鳴き、行く時は搖く。大さ鶡の如く、脚長く、尾腹の下白し。頭の下黑く連錢の如し　故に杜陽の人これを連錢と云ふ」」。『古今餘材抄』に「定家卿安藝の國にまかれけるに、宿處より立ち出でけるに、庭たゝきのをり居て鳴けるを、女のありけるが出て、いなおはせ鳥よといひけるをきゝて、など此の鳥をいなおはせ鳥とはいひけるぞと問ひければ、此鳥來り鳴く時、田より稻をおひて、家々にはこびおけばと申すなりといひけり。國々田舍の人はかやうのことをやすらかにいひ出す、をかしく聞ゆ、ひとへにおしていはむよりは、國々の土民の説用ゆべくや、但し人の心にしたがふべし、源仲正の歌に、しづの女がいなぼこなぐるからさをに打はへてくる庭たゝきかな」。

【參照】鶺鴒

【例句】

稻負鳥

雁にきけいなおほせ鳥といへるあり　春澄（七百五十韻）

春澄にとへ稻負鳥と云る有　其角（　〃　次韻）

瓦屋は稻負鳥の塒かな　三千風（類題發句集）

むら鳥や稻負鳥もあの中か　文可（新類題發句集）

聲寒し稻負鳥としておきぬ　青々（倦鳥）

鴫（しぎ）（三秋）

鴫　鷸　田鴫　山鴫　おほお鴫　大鴫　地鴫　雷鴫　青鴫　たま鴫　姥鴫　川原鴫　保登鴫　胸黑鴫　黄脚鴫　家鴫　京女鴫　猫斑鴫　杓鴫　鴫の羽搔　鴫の看經　鴫突（事人）　鴫突網　鴫網（事人）

【古書校註】

【山之井】軒にとまるかはら鴫をとがめ、姥鴫の重きたちゐを哀み、又よきしぎ・もゝ鴫などそへても。

【御傘】秋なり。物がなしき（一）の聲などゝ言ひても秋也。

【三才圖會】按、鷸、俗鴫の字を用ふ。蓋し田鳥の二字を以て製する所か。その種類甚だ多く、四十八品ありといふ。皆田澤に飛鳴き夜更けて翅を鳴らし一閑寂の趣をなす。歌人之を賞詠して鷸羽搔と稱す。古今「曉のしぎのはねがき百羽がき君が來ぬ夜は我ぞ數書く」。（二）

【栞草】兼三秋物。〔鴫突網〕職人盡　下總國荻原邊原中に鴫のおり居て動かずあるを、七八間隔てて竿羅を持ちて鴫の正面に向ひ、ねらひをつけながらくるり〳〵と廻り、最初は大輪にまはり、段々近寄るまゝに小輪に廻りて、とど六七尺に間近くなりかの竿羅を投げてとる也。六七尺の所をな

ぐるにあやまたず、羅をかぶらせてとる、手練の業也。是を鴫突といふ。山城の鳥羽邊多しときけり。「鴫の看經」［和訓栞］俗諺也、その田澤に居る時の閑默なるをもてなり。

註（一）悲しきに鴫を言ひかけたるなり。（二）同書には鴫の種類として、俣鴫・胸黒鴫・眞鴫・青鴫・黄脚鴫・京女鴫・羽斑鴫・杓鴫・山鴫（一名姥鴫）等の數種をあげたり。

季題解說　鴫は田に居る鳥の和字。涉禽類に屬す、種類頗る多けれども、概ね中形の鳥にして、多くは胸と腹白く、背部灰黑色にして、白斑を交ふ。脚四趾ありて、前方に向へる三趾は長し。嘴は細長くして、軟皮を被る。常に水邊に栖み、魚或は蟲等を食す。性敏捷にして、人を近づけしめず、肉美味なるを以て、秋期遊獵家の狙ふ所。

鴫の羽搔　は羽蟲を取らんとて、鴫のしば〳〵嘴にて、羽をしごくこと。「和訓栞」鷸の己が嘴にて羽をしごく音の高く聞ゆればいふなりその數もしげゝれば百羽搔きとも數羽がきともよみ、曉天に必ずかくものなれば直に曉の事にもいへるなり」

鴫の看經　鴫の閑默に居ること。鴫突網　鴫を網にて捕ふること。

例句

鴫

石打つて立する鴫は哀なし　言水（初心もと柏）
淋しさも二つの鴫に笑ひけり　同（言水句集）

田中の法藏寺にて

刈跡や早稻かた〳〵の鴫の聲　芭蕉（笈日記）
泥龜の鴫に追寄る夕かな　其角（五元集）
鴫立ちて淋しきものを鴫居らば　同（五元集拾遺）
牛呵る聲に鴫たつ夕かな　支考（枇杷園隨筆）
虛にて鴫立澤や眞野の浦　同（蓮二吟集）
鴫たつて日は薄墨に暮れにけり　尙白（宰陀稿本）
鴫たつや餘所の別れに暮まさり　千代尼（千代尼句集）

逸意

百とせの其日も鴫の夕あり　同（同）
鴫立て秋天ひきゝ眺め哉　蕪村（蕪村句集）

竹渓法師丹後へ下るに

たつ鴫に眠る鴫あり二夕法師　同（同）
鴫遠く鍬すゝぐ水のうねり哉　同（新五子稿）
懸浪に追れて高し鴫の尻　曉臺（曉臺句集）
夕あさり鴫の目早く鷺鈍し　同（同）
人稀に鴫啼て我夕かな　白雄（白雄句集）
夕鴫の淺瀨に立てる一羽かな　同（同）
鴫たつや凡夫家路の急がるゝ　同（同）
寄る浪やたつともしもなき鴫一ツ　太祇（太祇句選後篇）
秋も猶鴫の夕ぞ思はるゝ　闌更（半化坊發句集）

嵐山一周忌

鴫立て一年古りぬ此夕　几董（井華集）

聲暮れて又たつ鴫も無かりけり　士朗（枇杷園句集）

立つ鴫とさし向ひたる佛哉　一茶（七番日記）

小けぶりや扨又鴫の影法師　同（同）

鴫立つや人の後ろの人の顔　同（同）

けぶり立ち鴫立ち人も立ちにけり　同（同）

千古茶の中

三絃で鴫を立たする潮來哉　同（一茶句帖）

立つ鴫の今にはじめぬ夕哉　同（一茶發句集）

立鴫の顔に映るや長柄の灯　梅室（梅室家集）

大池の眞中行くや鴫一羽　同（同）

聲見ゆるほどに暮れけり小田の鴫　蒼虬（蒼虬翁發句集）

立つ鴫をほういと追ふや小百姓　虚子（虚子句集）

姥鴫

姥鴫もたつやさは／＼此湯もと　宗因（梅翁宗因發句集）

跡にたつは姥鴫と言ふ鳥なるか　龜洞（卯辰集）

保登鴫

ほと鴫の渡るも淋し清見潟　尺草（句兄弟）

鴫突

鴫突の馬やり過す鳥羽田かな　胡及（曠野）

風の鴫突外されし夕かな　乙二（松窓乙二發句集）

鴫よりも鴫突やつが夕かな　一茶（一茶句帖）

【參考】　鴫と俗に稱せられるのは、タシギの類で、イソシギの類は、眞正のチドリと共に千鳥の名の下に一括されてゐる。よつてこゝには單にタシギ類についてのみ述べる。卽ちシギ科中のタシギ亞科に屬するもののみで嘴が此等の鳥の中、最も長くて柔く、その先端の感覺極めて鋭敏である。夏期北地で蕃殖し、秋期に南地に大群をなして渡來し越冬す。

たしぎ Capella gallinago raddei (BUTURLIN). 東シベリア・カムチヤツカ等で夏期蕃殖し九月頃から南方へ渡來を始め、遠く臺灣・フイリツピンへも及ぶ。暖地で越冬した後、再び大群をなして北方へ向つて春期移動す。飛行甚だ速である。本邦で最も普通に見られる鴫は本種である。頭上は黑褐色、中央及び兩側を縱走する淡黃褐色の斑がある。

おほぢしぎ Ditelmatias hardwickii (GRAY). 「おほしき」、「ぢしき」とも云ふ。形も習性も「たしぎ」に似てゐるが、體は大である。千島から九州までの間で蕃殖し、臺灣及びその南方へ渡つて越冬する。「かみなりしぎ」とも云ふ。蕃殖時期に尾羽を開いて旋回しつゝ飛び、奇異な鳴聲を出すによる。

あをしぎ Neospilura solitaria (HODGSON). 種名は、獨居するの意で、群棲することなく、一羽づゝ濕地に棲んでゐる。東北地方には割合に多く「ぼとしぎ」とも呼ばれる。脚は暗綠色、體の上面は概ね褐色で白斑

があり、下面の地色は白色で、淡褐色の斑がある。

やましぎ Scolopax rusticola rusticola (LINNÉ) やぶしぎとも稱せられ、主として藪地に棲んでゐる。本種をも「ぼとしぎ」と云ふこともあるが、甚だ大形の鴫で、「たしぎ」の約三倍もある。主として北海道・東シベリア地方等で蕃殖し、秋期南方に渡來し、本邦では臺灣にまで到る。頭上の前半部は黄白色の地色に淡褐色の斑があり、後半部は黒色で不規則な三本の黄白色及び赤褐色の横縞がある。

たましぎ Rostratula benghalensis benghalensis (LINNÉ). 主として中部日本で蕃殖し、フイリッピン等で越冬す。水田又は原野に棲息す。雌は雄より大きく美しい。棲息數が甚だ少く、我國では寧ろ稀な種類である。

鴇（晩）　桃花鳥　朱鷺

季題解説 渉禽類に屬する鳥。形鷺に似て大なり。長嘴を有し、下方に彎曲す。頭の後部に冠羽を生ず。羽毛は淡紅を帶ぶる白色、所謂「ときいろ」なり。顔側羽毛なく、赤色の皮膚露出す。北國に産し、秋冬の交南方に來る。桃花鳥・朱鷺は其羽毛に依りての異名なり。

例句

鴇　鴇啼て雲に露ある山路哉　擧白（續虚栗）

雁（中）

鴈　かりがね　がん　二季鳥　にきどり　片絲鳥　眞雁　菱喰
鴻　沼太郎　白雁　黒雁　小雁　逆顔雁　四十雀雁　海雁　鴇
白腹雁　初雁　來る雁　雁渡る　天津雁　雁の棹　落雁　雁陣　雁
の列　雁行　雁字　代かへる雁　雁の文字　田のむの雁　雁鳴く
雁が音　雁の琴柱　雁の羽衣　雁の涙（天文）

古書校註

【山之井】雲の衣に連なるを、つけ帶と見なし、月影に光りわたるを、箔の帶と云ひ、海邊に行くを、みなれ竿と云ひ立て、聲を帆に上ぐるを、舟棹など云ひなす。彼の蘇武がことつてより、雁は玉章を結びてよみ侍れば、文月の空に飛び翔けるとも、打曇（一）にちらし書くとも云ひ、又まゆみの岡（二）飛ぶを矢文にやと疑ひ、硯の海（三）渡るを誰が手ずさびぞと怪むやうの心ばへ、雁金の連なれるを、書きたる文字にも見なしたれば、梵字・はふ字（四）なども云ひなし、天門に懸けし額かと見立て、平沙の樂書（五）にやとも云ひつゞけ侍る。

【御傘】春一、秋一、殘雁春秋の中に有るべし。誹には春秋の內、ガンと聲に讀みたる句今一入りて以上四の物とす。殘雁とは、秋越路に殘りて渡らぬをも、春歸り殘るをも云ふ也。歌の題には殘花を夏に出せども連誹に

は春になる也。殘雁も渡り殘る雁も、秋になり歸り殘る雁も春になる也。歌には冬渡る雁も有りと申侍り。皆句體により去り嫌べし。かり〳〵とは二有り、かりがね〳〵とは二無し。かりがねの聲などは重言になる故せぬ事也。雁字・雁書皆秋也。雁塔、秋にならず、尺敎也、生類にもならず。是は四つの外也。(六)雁陣、秋也、生類也。繪に書きたる雁は生類にあらず、句體によりて春秋の季をば持つなり。腹マダラ・ヒシクヒ・クヾイ・大カリガネ皆一類なれば四の內にす。(七)尤折を嫌ふ也。(八)又古歌にカルノコともカリノ子とも詠めるは雁には非ず、鴨の事と云ふ也。雁に千鳥を結びては秋なり。

【年浪草】八月〔雁〕(上略)○漢の蘇武雁の足に帛書を繫ぎ以て信を通ず。因つて雁書・雁使の稱有り。古今「秋風に初雁がねぞ聞ゆなる誰が玉章をかけて來ぬらん　友則。○和漢三才圖會に曰、今俗四種を別つ。眞雁、蒼黑にして胸腹に白黑の斑有りて、その嘴白く脚黃、その肉脂多く美也。白腹、卽ち眞雁の未だ長ぜずして腹白く斑なし故に名く。或は腹白といふ。その肉軟かに極めて美なり。雁金、大さ白腹雁の如くにして全體蒼黑、額白く眼の邊黃、嘴赤くして細く、その脚黃也。稀に之を捕る。その肉やゝ劣れり。白雁、全體白くして翅翮黑く、嘴ㇵ脚と赤色、その肉脂少し。凡そ中秋白雁先づ來りて雁金之につぐ。眞雁又之に次いで遲し。仲春眞雁先づ歸りて三四月に白雁歸る。俱に雌雄行列を爲し、もし偶を失へば則ち一羽來往するのみ。凡そ夜止宿中、更每に居を換ふ。之を打更といふ。〔鴻〕和漢三才圖會に曰、菱食、狀雁に類して大なり。背頸俱に灰色、翮深黑その尾本白く末黑し。腹白く脚黃嘴黑くして鼻の邊に黃條あり。その肉味雁に劣らず。脂も亦多し。臭香鶴肉に似たり。一種加豆羅菱といふあり、狀鴻より小くして背頸俱に灰色、頸に柹色のまだら有り。〔鴇〕和漢三才圖會に曰、按に俗にいふ野雁なり。頭頸灰白色、嘴の端黑く、その背黃赤紫の豹文あり。翮深黑、腹正白、脚掌蒼黑にして後趾及び蹼なし。〔雁書〕(略)〔雁陣〕古詞に曰、暖回つて雁翼陣勢平沙に起る。〔雁金〕和漢三才圖會に曰、所謂雁金とは雁之音なり、万葉集に多くこの三字を用ふ。然れども又雁鳴者今者來鳴沼と詠ずる時は、則ち自ら雁の名となすに似たり。遂に雁金の二字を用ひて本意を失ふ。(九)〔雁字〕山谷が詩に、雁字一行書絳宵。○淡林發句に曰、阿蘭陀の文字が橫たふあまつ鳫。(十)〔白雁〕大和本草に曰、北土及武藏・相模・坂東に多し。〔海雁〕同書に曰、海に在り。其の大さは常の雁に比せば微小なり。色灰色の如く味及び足黑く、頸に環の如き白色あり。翅短し。江戶にあり。

註　(一)短册などに用ふる紙の名　(二)大和の地名。(三)門司と下關との間の海。(四)八分字。ハツプンともいふ。漢字の書體の一。「軒近くとぶかりがねはは字哉　正式」の例句をあげたり。(五)平沙の落雁のもぢり。(六・七)一卷中四句を許されたる內の一と

なり　又はその數に加へられざるをいふ。（八）同一の懐紙中によむ事を忌むなり。（九）かりがねは元來雁の聲の義なるを、轉じて雁の事とし、又雁の一種の名とせるなり。（十）宗因の句。

季題解説　我國に渡り來る雁には、眞雁・小雁・菱喰・逆顔雁・黒雁・四十雀雁に白雁の七種あり。秋より冬にかけ渡り來り、春三月になれば東部シベリヤに去り、夏季其地方にて蕃殖す　日本にて最も多く見るは右の中、眞雁と菱喰なり。眞雁は尾羽の數十六枚乃至十八枚嘴は淡き肉色、脚は黄色にして、前額白く、體の上部は茶褐色にて、翼は蒼灰色、風切羽は眞黒にして、下方白し。次に菱喰は沼太郎ともいひ、漢名鴻雁と呼ぶ。池沼に降りて、菱の實を好み食ふより此名あり。眞雁より形稍大きく、灰褐色にて胸廣く、嘴は橙色にて美し。

實作注意　秋分に寒地より渡り來り、春分に復た歸り去るものにて、「歸る雁」は春季なり。又「雁風呂」「雁供養」も春季にあり。初雁は初めて渡り來りし雁にて、秋彼岸の後數日の頃來ると「東都逆覽年中行事」に記せり。

雁金はもと雁が音と云ひしも今は雁の事なり。落雁は池沼などに降る雁。雁字は、山谷の詩に、「雁字一行書ニ絳霄一」などあり。雁の棹と共に其正しく列をなして渡る形容なり。雁の書、雁の玉章など古歌に見ゆ。これ漢の蘇武が故事より來る。即ち、前漢の蘇武字は子卿、杜陵の人、武帝の時、節を持て匈奴に使す、單于之を降さんと欲し、武を幽し大窖の中に置く、漢武を求む、匈奴詭て言ふ、武死すと、常惠漢の使者に教ていはしむ、天子上林中に射て雁を得たり、足に帛書を係ぐ、武其澤中にありて、是に由て還ることを得たり、云々。代かへる雁とは雁の夜止宿する中、更毎に居を換るを云ふ。代とは苗代などいふ代に同じく田のことなり。二季鳥とは雁の異名にて、いづかたを古里とてか二季鳥としにふたゝび行かへるらん 忠岑（藏玉）種類の主なるものに、鴻・沼太郎・眞雁・白雁・黒雁・小雁・逆顔雁・四十雀雁・海雁・鴇等あり。〔參照〕天文―雁渡し　春―歸雁・雁風呂

例句

雁

雁に傳へむ白河一書三所の關　宗因（[illegible]）

　堅田にて

病雁の夜寒に落て旅寐かな　芭蕉（猿蓑）

白雲に鳥の遠さよ數は雁　其角（其便）

雁の腹見すかす空や船の上　同（同）

酒買ひに行くか雨夜の雁一つ　同（類柑子）

　自畫賛

片足はやつし候なり小田の雁　同（五元集）

（い）鵲の橋かけ渡せ佐渡の雁　許六（正風彦根躰）

染かけて草も雁まつ日和かな　支考（東西夜話）

日の暮や穂に飽く雁の友狂ひ　同　（そこの花）

行徳舟にて
おろすべき氣色は見えず沖に雁　桃隣　（古太白堂句選）

烏帽子着て白きもの皆小田の雁　嵐雪　（水ひらめ）

紀の路にも下りず夜を行く雁ひとつ　蕪村　（蕪村句集）

一行の雁や端山に月を印す　同　（同）

遠山や身を打つけて風の雁　曉臺　（曉臺句集）

亂雁となるや靱の雲うつり　同　（同）

やう〳〵と立上りけり小田の雁　同　（同）

仰向て先づ風情なり雁一羽　闌更　（半化坊發句集）

番雁の面に風吹く蘆間かな　白雄　（白雄句集）

あの男行かば立つべし小田の雁　同　（同）

秋既に雁の行かふ江の月夜　同　（同）

必ずよ後なる雁が先になる　同　（同）

低く飛ぶ雁あり扨は水近し　召波　（春泥發句集）

字をなせる雁既に三分雲に入る　月溪　（月溪句集）

露の家は雁と共寢や壁一重　成美　（成美家集）

日のさしてとろりとなりぬ小田の雁　乙二　（松窓乙二發句集）

酒田高野の濱にて
吹浦とこゝら離れず浪の雁　同　（同）

雁並ぶ聲に日の出る河原かな　士朗　（枇杷園句集）

暮行くや雁とけぶりと膝がしら　一茶　（七番日記）

行あたりばつたり雁の寢所哉　同　（同）

髭殿がおじやるござだまれ小田の雁　同　（同）

田の雁や里の人數は今日も減る　同　（同）

御佛の河中島ぞ下りよ雁　同　（同）

とぼ〳〵と足弱雁の一つ哉　同　（同）

今日からは日本の雁ぞ樂に寢よ　同　（同）

小梅筋
かしましや將軍樣の雁ぢや迚　同　（同）

連のない雁よ來よ〳〵宿貸さん　同　（同）

雁共も來よ〳〵そこは脇の田ぞ　同　（同）

起番よ寢番よ雁の睦まじき　同　（同）

おとなしく雁よ寢よ〳〵どこも旅　同　（同）

得手ものゝ片足立や小田の雁　同　（一茶句帖）

雁鴨や御成も知らで安堵顏　同　（同）

片足立して見せるなり杭の雁　同　（同）

あれ月や〳〵と雁の騷ぎ哉　同　（同）

夜通しに雁も泊りにはぐれたか　同　（九番日記）

雁

雁寐よ〳〵旅草臥の直る迄　一茶（一茶新集）
寛ろいで寐たり起たり門の雁　同（同）
まだ聲を聞かぬ雁なり田に並ぶ　梅室（梅室家集）
夕陽に引戻されな後(アト)の雁　蒼虬（蒼虬翁發句集）
藪越ゆる時よく見えて雁の腹　同（同）
汽車道に低く雁飛ぶ月夜哉　子規（子規句集）
薄墨の雁の夕を野に見たり　青々（倦鳥）

雁金

雁がねの跡に飛行くむら烏　鬼貫（鬼貫句選）
雁がねや翼にかけて比良横川　許六（行脚戻）

深川にて
雁がねも靜かに聞けばからびすや　越人（曠野）
雁がねの竿に成る時猶淋し　去來（渡鳥集）
雁がねの重なり落つる山邊かな　樗良（樗良發句集）
雁がねに鳥の交る堅田かな　士朗（枇杷園句集）
古屋根の芒雁がね鳴きにけり　一茶（七番日記）

眞雁

大名を相手にしたる眞雁哉　許六（末若集）

菱喰

菱喰の横平らしく畔の上　木因（麻生）

白雁

白雁や野馬を威す草の露　許六（韻塞）

初雁

初雁や思ふ田へたゞ一文字　沾徳（沾徳句集）

冠里公御秘藏祝ひに參りて
初雁や臺場は晴れて百足持　其角（五元集）

豐後國日田にて
初雁や闇の日當の彥の岑　野坡（鷲菊隨筆）
初雁や我も下り居の布羽織　同（雪の尾花）
初雁や通り過して聲ばかり　千代尼（千代尼句集）
初雁に羽織の紐を忘れけり　蕪村（新五子稿）
初雁や遊女に油さゝせけり　太祇（太祇句選後篇）
初雁や夜は目の行く物の隅　同（同）
初雁や心づもりの下り所　同（同）
南にも初雁がねの聲すなり　曉臺（曉臺句集）
初雁の信濃にかゝる夜は寒し　同（同）
初雁や高根を左右へ翻へる　同（同）
初雁の痩て餌をはむ磯田哉　闌更（半化坊發句集）
初雁や三つ四ついくら山のきれ　白雄（白雄句集）
初雁や北斗と落つる水の上　蓼太（蓼太句集）
初雁や平砂に早き月の霜　同（同）

親不知にて
初雁や月のほとりより顯はるゝ　樗良（樗良發句集）
荒磯や初雁渡る鹽煙　同（同）

初雁や日に相手なき海の月　召波（春泥發句集）
初雁も春の覺えの舟路かな　同（同）
初鴈や爪先黄なる唐辛　移竹（乙御前）
大竹も靡くや雁の渡りぞめ　成美（成美家集）
初雁の己が空問ふ夕暮や　士朗（枇杷園句集）
初雁や芒は招く人は追ふ　一茶（七番日記）
初雁が人に屁して通りけり　同（同）
初雁や當にして來る庵の畠　同（同）
初雁の三羽も竿と成にけり　同（一茶句帖）
初雁も泊るや戀の輕井澤　同（嘉永板一茶發句集）
又來たと鳥思ふや小田の雁　支考（蓮二筌）
來る雁の力ぞ那須の七構　桃隣（陸奥衡）

來る雁

加賀の千代尼存生なりしと、貞白尼より消息せしかば

來る雁に果敢なき事を聞夜哉　几董（井華集）
不揃な家を目がけて來る雁か　一茶（旅日記）
斯しては居られぬ世なり雁が來た　同（七番日記）
雁が來た國の布子はなぜ遲い　同（一茶新集）

雁渡る

雁渡る雁爪呂時の夜寒かな　許六（風俗文選犬註解）
雨暗き夜の白根を雁渡る　曉臺（曉臺句集）
きれぎれの雲や雁行く五字七字　几董（井華集）
幾行も雁過る夜となりにけり　青蘿（青蘿發句集）

上坂の便に申ける

河内屋で賤を出さばや渡る雁　巣兆（曾波可理）
雁共が夜を日について渡りけり　一茶（一茶句帖）
一つ雁夜々ばかり渡りけり　同（同）
騷がねば野になじまぬか渡雁　梅室（梅室家集）
雁低く薄の上を渡りけり　子規（子規句集）
雁渡る日にいくばくぞ庵の空　虛子（虛子句集）
人の住む上も構はず雁わたる　青々（倦鳥）

天津雁

翁に作られて來る人の侍らしゝに

落着に荷分の文や天津雁　其角（曠野）
一しほの妻もあるらん天津雁　同（陸奥衡）

芭蕉翁に文通の因に

招けども屆かぬ空や天津雁　同（龍ヶ岡）
あれほどに等しきものか天津雁　闌更（半化坊發句集）
天津雁小田に見る目は亂れけり　同（同）
鎌倉や實朝殿の天津雁　一茶（七番日記）
白川や曲り直して天津雁　同（一茶發句集）

大津雁　大津雁おれが松には下りぬなり　一茶（一茶發句集）

雁の棹　水際の松葉こぼれて大津雁　蒼虬（蒼虬翁句集）

雁一つ竿の雫と成りにけり　士朗（枇杷園句集）

竿なりも崩さず雁の旅寝かな　梅室（梅室家集）

落雁　大絃はさらす元結に落る雁　其角（類柑子）

雁落て蘆半町の戰ぎかな　逸里（卯辰集）

月ひら／＼落來る雁の翅かな　闌更（半化坊發句集）

落雁　白濱や落ざま影を月の雁　白雄（白雄句集）

落も果てず迷ひめぐるや雨の雁　樗良（樗良發句集）

雁の列　雁の行崩れかゝるや勢田の橋　北枝（[illegible]）

畑荒らす行儀ではなし雁の列　梅室（梅室家集）

雁啼く　後ろから物めさせけり雁の聲　言水（初心もと柏）

うら聲と言ふにもあらで雁の聲　鬼貫（鬼貫句選）

品川も連に珍らし雁の聲　其角（雜談集）

雁鳴や弓弛を見れば暮の月　同（五元集）

陣中の飛脚も泣くや雁の聲　同（　）

雲冷ゆる夜半に低し雁の聲　丈草（誹諧曾我）

並び行く雲井の腹や雁の聲　許六（風俗文選犬註解）

雁啼て綿よ木綿よ吉野山　同（　）

案山子して待里もあり雁の聲　也有（蘿葉集）

雁啼や舟に魚燒く琵琶湖上　蕪村（新五子稿）

我聞けば尾張田をさす雁ならし　曉臺（曉臺句集）

聞初めし夜より亂れて風の雁　同（　）

離れじと呼つぐ聲か闇の雁　闌更（半化坊發句集）

夕暮や啼過る雁小田の原　同（　）

淺茅が宿に知るべありけるに一ト度を

雁が啼く君が四阿闕屋かな　白雄（白雄句集）

溫飩焚く空や雨夜の雁の聲　樗良（樗良發句集）

雨風の夜もおりなしや雁の聲　几董（井華集）

米踏の腹寒き夜や雁の聲　同（　）

大宮や南がしらに雁の聲　召波（春泥發句集）

必ずや暮れて雁啼く門田哉　士朗（枇杷園句集）

十日程荻吹しきて雁の聲　同（　）

旅ひとりにはら／＼と雁が鳴く　巣兆（曾波可理）

夕風や指向く度に雁の鳴く　一茶（七番日記）

鳴くな雁今日から我も旅人ぞ　同（　）

雁啼や碓なく碓氷越たりと　同（一茶句帖）

御成場や人よけさせて雁の鳴く　同　（同

落付くと直に鳴きけり小田の雁　同　（一茶發句集）

雁啼くや横をりふせる夜の山　蒼虬　（蒼虬翁發句集）

雁啼や雨に市立つ八百屋物　花讃女　（萩陀羅尼）

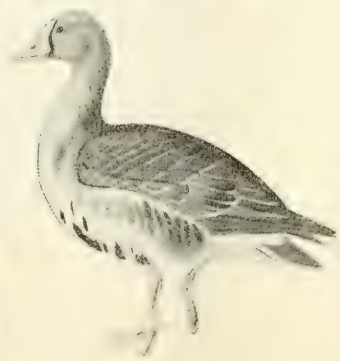
釵で行燈掻き立て雁の聲　子規　（子規句集）

象潟を雨の夜にして雁の聲　比羅夫　（うづら）

やす〳〵と寢る子もうべや雁の聲　雨丁　（漁火）

いつ濡れし袂見る灯よ雁の聲　氷壺　（懸葵）

参考　雁と稱せられるものゝ中、「のがん」を除き他は皆、雁鴨科に屬する。雁には種類も多く、分布も廣いが、我國に九月渡來するものは、主にシベリア地方で蕃殖したものである。翌年三月再び北方に飛び去ることは云ふまでもない。

まがん　Anser albifrons albifrons (Scopoli). 眞雁の意で、雁の中、最も普通なもの、頭の前部、上嘴基部の周圍に幅廣き白色部あるのを特徴とし、これに基いて、「白額」を意味する種名が與へられてゐる。背面は暗灰褐色で下面の地色は白色、胸、腹には不規則な黒斑がある。嘴は淡黄色又は肉色である。

ひしくひ　Melanonyx fabal is serrirostris Swinhoe. 前種と共に本邦内に見られる雁の主體をなしてゐる。嘴は黒く、その中央に橙黄色帶がある。前額に白色部がない。

はくがん　(Chen caerulescens caerulescens (Linné) 稀に北海道、本州、九州にて之を捕獲す。主として北米の極地方で蕃殖し、寒冷の候、メキシコに飛ぶ。全身白色、たゞ翼の一部に、黒色・灰色の部分あると、嘴及び脚が赤色を呈するに過ぎず。

初鴨（はつかも）（晩）

古書校註

【栞草】九月　貞享式「この名は全く新撰なり。或は賞翫とも加減ともいはん。今按に奉膳式にも雁鴨と並びながら、賞する所は秋冬の差別あり。されども見聞の姿情を論せば、初雁といへば風雅を思ひ、初鴨といへば風味を

思ふ。爰を天眼とも天耳ともいへり。例へば初雁と昔によぶとも風味を先に思ふべきや。鴨の冬なるは勿論にて、初の字をそへて秋となすべけん。

［季題解說］ 秋の鴨を示ふ。鴨は秋渡り來り、冬中我國に栖み、春に至て孳殖地たる北方に去る。時として我國にて蕃殖するものもあり。種類甚だ多く三十種に及ぶ。

［實作注意］ 初鴨は秋季なるも、單に鴨と云へば冬季なり。初めて渡り來し鴨を詠ずべし。［參照］尾越の鴨(秋)　冬―鴨(冬)

［例句］

初鴨　初鴨や田はふさがれて浪の上　李完（類題發句集）

初鴨や刈らぬ水田に浪を立　雲道（新類題發句集）

尾越(をごし)の鴨(かも)（晩）

［古書校註］

【篗纑輪】九月。凡そ鴨は冬季に至りて山を越え渡り來るものなり。然るに暮秋早やその氣の發するもの尾の上を越して來るを尾越の鴨といふ也。江湖へ來るもの越前境の山の尾を越えて九月渡る。風味最もすぐれて京師の茶人等之を賞味す。

【年浪草】九月○今式に曰、鴨は常盤の國に歸といふ。常盤は佐渡なり。海上近く獵船などたま〳〵彼島へ近つく夏秋の間、夥く群飛するよし。又は去年より歸らぬ鴨もあり、五月の間巢をなして中の尾先半白みさし、尾上へ越すもの也。これを尾越の鴨といふ。○馬光(一)說に曰、この頃は鴨餌に飽いて肥え脹れて身重く、高飛ぶ事ならず。それ故山の尾をこえ來るをいふと也。

註（一）長谷川馬光。

［季題解說］ 山の尾を越えて渡り來る鴨の意なり。［參照］初鴨(秋)　冬―鴨(冬)

［例句］

尾越の鴨　我庵を尾越の鴨のこしにけり　青々（妻木）

爵入(すゞめたいすゐにいつて)二大水一爲(はまぐりとなる)レ蛤（晩）

［古書校註］

【年浪草】九月○月令に曰、此記二戌月之候一、爵爲レ蛤、飛物化爲二潜物一也。九月之節云々。

［季題解說］ 七十二候の一。九月節の第二候、此候に至れば、雀海中に入りて蛤となるといふ。

［例句］

爵入大水爲蛤　蛤や昨日雀の心なし　瓢水（俳諧新選）

人は人雀蛤となりにけり　逸夢（逸夢遺稿）

秋の螢（初）　病螢　殘る螢

古書校註

【増山の井】七月。螢に霧を結びても秋也。

【篗纑輪】七月。夏遲く生じたる螢のたまノヽ七月迄も飛びかふをいふ也。殘る螢と混ずべからず。殘る螢はやはり夏なり。螢は五月暫の内のものにして、殘るといふは六月へ殘る意也。よつて夏也。句に結ぶにこの兩樣を考へてその意を得べし。

【年浪草】七月。紀事に曰、京師の兒童秋螢を病螢と稱し、敢へて之を捕らず。

季題解說

螢は夏に發生す。秋の螢は夏の螢の產卵より發生したるものなり。殘る螢は夏季とする說、秋の螢と同じとする說等あれど、夏の螢の秋に生殘れるを云ふを妥當とせん。〔參照〕夏―螢

例句

秋の螢

死ぬるとも居るとも秋を飛螢　乙州（西の雲）

埋火の手持や秋の螢籠　也有（蘿葉集）

秋の螢露より薄く光りけり　麥水（樗庵麥水發句集）

水草もそゞろに秋の螢かな　桃宴（田舟の日）

牛の尾にうたるゝ秋の螢哉　成美（成美家集）

螢減る秋を淺香の橋作り　乙二（をのゝえ草稿）

秋の螢女は夜を淋しがる　露月（露月句集）

秋の蚊（三秋）　別れ蚊　八月蚊　蚊の名殘　殘る蚊

古書校註

【年浪草】七月。○和漢三才圖會に曰、蚊は四月始めて生じ九月盡く終る。

季題解說

蚊は夏時盛んに發生す。其蚊の秋に至りて猶あるを云ふ。〔參照〕溢れ蚊　夏―蚊

例句

秋の蚊

西鶴十七回、廃れを訪ふ

秋の蚊の吸つく石や一ト昔　言水（言水句集）

身の秋や月にも舞はぬ蚊の力　史邦（芭蕉庵小文庫）

渭北奥州行餞別

青柳や抓んで捨る秋の蚊に　其角（其角三十三回）

秋の蚊の人を尋ぬる心哉　蕪村（蕪村遺稿）

秋の蚊や香の烟の前を行く　曉臺（曉臺句集）

秋の蚊や默々として喰ひ行く　召波（春泥發句集）

秋の蚊の聲細りけり夜の風　嘯山（葎亭句集）

殘る蚊

髪おろして間なきに

殘る蚊の力散り行く夕日かな　若蘇（星會集）

別れ蚊　別れ蚊のつよく刺しけり捨坊主　闌更（半化坊発句集）
八月蚊　忍び音に誰を戀ふるぞ八月蚊　話圃梶女（三河小町）
蚊の名殘　家舟の鏡つめたし蚊の名殘　呉峰（はたけせり）

溢蚊（あぶれが）（中）

季題解説　□滑稽雑談に、「八月の溢蚊肉を破るといふ世話より近來秋に許用す。」嬉遊笑覧、物類相感志、九月蚊子嘴生花、又代醉編に古諺有レ曰霜降而蟹螯枯、露下而蚊喙折、こゝにて八月のあぶれ蚊と云は喙の折る前なり、花の如きもの出ては人を刺さず。」とあり。［参照］秋の蚊　夏—蚊。

例句
溢蚊　あぶれ蚊のほめかぬ壁をたより哉　鬼貫（七車）

秋の蠅（あきのはへ）（三秋）　殘る蠅（のこるはへ）

古書校註　【菜草】七月。

季題解説　蠅は夏秋の候盛んに發生す。單に蠅といへば夏なり。秋の字を冠して之を區別す。［参照］夏—蠅。

例句
秋の蠅　病中
秋の蠅頭むや〳〵足せゝり　秋之坊（有磯海）
昇る日に場の廣がるや秋の蠅　荻人（續有磯海）
草庵の弱りはじめや秋の蠅　丈草（幻の庵）
寐ころべば書もうるさし秋の蠅　桃隣（古太白堂句選）
飯盛れば追て來るなり秋の蠅　蓼太（蓼太句集）
人中で生れたやうに秋の蠅　梅室（梅室家集）
秋の蠅中々人を弄しけり　青々（妻木）

秋の蜂（あきのはち）（三秋）

季題解説　蜂は春夏の候盛んに活動す、秋も猶あり。［参照］春—蜂。

例句
秋の蜂　靜さや梅の苔吸ふ秋の蜂　野坡（百曲）

秋の蝶（あきのてふ）（三秋）　秋の蛾（あきのが）

古書校註　【増山の井】七月。秋の胡蝶。蝶に霧を結びても。

【年浪草】七月。八雲御抄に曰、蝶は様々の花の咲くより、秋花の散るまでの物なり。

季題解説 胡蝶は春より秋まで殆んど間斷なく發生するものなるも、單に蝶と云へば春季なり、夏及び秋は各々其字を冠して區別す。秋發生する蛾も亦秋字を冠して秋季とす。〔参照〕春—蝶、夏—夏の蝶

秋の蝶

玄全寺

藥園の花に假寐や秋の蝶　支考（梟日記）
帷子の重ね着したか秋の蝶　同（射水川）
松の木に吹當られな秋の蝶　舟泉（曠野）
いろ／＼に碎けて秋の胡蝶哉　牧童（卯辰集）
草臥て土にとまるや秋の蝶　蓼太（蓼太句集）
今日見れば鱗になりぬ秋の蝶　同（同）
秋の蝶日のある内に消失せる　曉臺（曉臺句集）
しら／＼と羽に日さすや秋の蝶　青蘿（青蘿發句集）
こまがへる草の遊びや秋の蝶　素丸（素丸發句集）
小屏風や立て挾まるゝ秋の蝶　成美（成美家集）
秋の蝶途を失なひぬ鳩の中　梅室（梅室家集）
秋の蝶たてこまれけり林部屋　同（同）
黄ならぬは誠しからず秋の蝶　鳳朗（鳳朗發句集）
秋の蝶飛び行く園の廣さかな　虚子（虚子句集）
どの花の露に生きけん秋の蝶　別天樓（丙寅句鈔）
秋蝶や書の魚躍る須磨の浦　春沙（戊辰句鈔）
庭山に日影殘りて秋の蝶　耕雪（鹿笛）
ばら／＼と櫻落葉や秋の蝶　靜帆（懸葵）

秋の蟬（初）

季題解説 單に蟬と云へば夏なり。秋には其字を冠して之を區別す。〔参照〕蜩、蛁蟟、夏—蟬

例句

秋の蟬

咳氣聲夜着や蛻の秋の蟬　言水（言水句集）

[illegible]妓子の死せるを悼む

折釘に蟇や殘る秋の蟬　其角（一字幽蘭集）
ぬけ殻に並びて死ぬる秋の蟬　丈草（續猿蓑）

窓清淨の蘭若にのぼり、午時一睡清閑に入る

聲しみ／＼浮世に遠し秋の蟬　曉臺（曉臺句集）
終に身を啼破るらん秋の蟬　闌更（半化坊發句集）
秋の蟬啼盛りても淋しけれ　嘯山（葎亭句集）

太宰府天滿宮

神寂や秋蟬我にいしはりす　麥水（梅庵麥水發句集）

秋の蟬嵐の葛に聲絶えし　圖南（春秋庵）
秋の蟬つく〳〵寒し〳〵となく　一茶（七番日記）
秋の蟬ころび落ては又鳴きぬ　同（同）
仰のけに落て鳴きけり秋の蟬　同（一茶句帖）
やゝもすれば家に入けり秋の蟬　梅室（梅室家集）
懐に入らんとしけり秋の蟬　同（同）
遠近の聲と成けり秋の蟬　蒼虬（蒼虬翁發句集）
日の弱る秋につるゝや蟬の聲　多代女（曉霞句集）
啼きながら蟻にひかるゝ秋の蟬　子規（子規全集）
秋の蟬朝日にきほふあはれなり　同（同）
秋の蟬日の涼しきが見ゆるなり　青々（倦鳥）
一蟬の秋に成りけり維摩室　同（同）

蜩（ひぐらし）（初）　日暮（ひぐらし）　茅蜩（ひぐらし）　かな〳〵

古書校註【御傘】日ぐらし、秋也。一座一句の物也。文字も別に蟲のなりも聲も變りたれども、根本蟬と同類なれば、蟬とは連の如く、誹にも折を嫌ふがよき也。日ぐらしと立入れて（一）今一句連にも侍れば、誹には蟪蛄と聲に云ひて以上三句有るべし。皆折をかふる也。
【増山の井】蟬を結びても夕立を結びても秋也。
【滑稽雜談】七月（時珍が本草に云、小にして青緑なる者を茅蜩といふ。
△今按に萬葉集等の歌には、夏の部の中に日ぐらしをよむ、皆蟬の事に聞ゆ。連歌俳諧には蟬をば夏とし、蜩を秋にばかり用ふ。細かなる義也。作者意をつけて見るべし。
註（一）時刻の日暮しと言掛けて用ひたる也。

季題解説　有吻類に屬する昆蟲にして、蟬の一種、體長六分乃至一寸、擧動敏快、翅は透明にして、身體よりも長く、前翅は長楕圓形、後翅は小くして、ほゞ三角形をなす、全身褐色を帶ぶ。鳴聲カナ〳〵と聞え、又、キリンキリン〳〵と聞ゆ、つく〳〵法師の如く人家近くは來らず、多く山間の樹林に鳴く。且つ其鳴く時刻も略一定し、朝は未明の頃と、日沒より夕暮に限り鳴く、尤も夕立雲などのため、急に薄暗くなりたる場合など、夕暮と間違へて鳴き出すことあり。ひぐらしの名は之によりて起れるなるべし。
參照　秋の蟬（秋）　蜉蝣（ツクツクボウシ）　夏―蟬（せみ）

例句
蜩や鳴やむ方の石灯籠　宇白（前後園集）
野の宮にて
蜩の鳴あらしけむ草の種　小春（柞原）

蜩や山田を落つる水の音　鳳竹（駒掛）
蜩や味噌すり立る入佛事　谷吹（柿表紙）
蜩や座敷の道の山通　怒風（藪の井）
蜩にするどき杉の入日かな　傘下（三夕暮）
蜩や木に啼蟲はまだ暑し　也有（蘿葉集）
蜩の啼けば〳〵古郷を思ふ　曉臺（曉臺句集）
蜩の啼けば瓢の花落ちぬ　同（同）
蜩や明るき方へ鳴うつり　同（同）
暮の雨蜩も鳴かずなりにけり　白雄（白雄句集）
年四十蜩の聲耳に立つ　同（同）
蜩や蟬を洩れ來る秋の聲　蓼太（蓼太句集）
今日も〳〵あゝ蜩に鳴かれけり　一茶（一茶句帖）
寒いぞよ軒の蜩唐辛　同（一茶發句集）
鈴鹿山にて
蜩や終に飛こむ月の松　梅室（梅室家集）
蜩や近江の入日伊勢の月　同（同）
蜩やみの山見ゆる山の間　蒼虬（蒼虬發句集）
蜩の聲の尻より三日の月　子規（子規全集）
蜩の鳴いて机の日影かな　同（同）
蜩や夕日の窓に樫の影　同（同）
蜩や阿難の肩に日が當る　青々（倦鳥）

蛁蟟（初）

くつくつほふし　寒蟬　蟪蛄　法師蟬　つくしこひし　おしいつく〳〵

古書校註

【年浪草】七月。○時珍曰、秋月鳴いて青紫なる者を蟪蛄となす。○大和本草に曰、陶隱居云、七八月鳴く者を蛁蟟となす。蟪蛄と同物云々。○倭名抄に曰、蛁蟟、和名久豆久豆保宇之。

季題解說

有吻類に屬する昆蟲。蟬の一種にして、形小さく色黑くして黃綠の斑紋あり。鳴聲ツク〳〵ボウシと聞ゆ、立秋の頃より鳴き初む。つくしこひし、『物類稱呼』に近江國の方言なりとあり。『鶉衣』「つく〳〵ぼふしといふ蟬は筑紫こひしともいふなり、筑紫の人の旅に死して、此物になりたりと世の諺にいへりけり」〔參照〕秋の蟬　蜩

例句

蛁蟟

行秋の杉につく〳〵ぼうし哉　素丸（素丸發句集）
家をめぐりてつく〳〵ぼうし樫林　子規（子規句集）
夕飯やつく〳〵ぼうしかしましき　同（同）

蛁蟟　つく〳〵ぼうし〳〵斗りなり　子規（子規句集）
つく〳〵ぼうし来なくひとや木米かしぐ　素史（毯）
つく〳〵ぼうし鳴いてゐるやうな日暮哉　侍巾（同）

法師蟬　秋風に殖えては減るや法師蟬　虚子（虚子句集）
おのが名を鳴くらしけり法師蟬　なみえ（倦鳥）

蜻蛉（三秋）

とんぼう　ゑんば　秋津蟲　あきつば　蜻蜓　山蜻蛉
鬼蜻蜓　腰細蜻蜓　銀蜻蜓　黄蜻蜓　精靈蜻蛉　青蜻蛉　猩々蜻蛉
棉蜻蛉　赤蜻蛉　胡麻蜻蛉　鹽辛蜻蛉　麥稈蜻蛉　茜蜻蛉　秋あかね
深山あかね　眉立あかね　のしめ蜻蛉　軍配蜻蛉　蜻蛉つり（人事）

古書校註

【滑稽雜談】　七月。○桑華紀年に曰、神武天皇高きに登り、この邦の形蜻蛉に似たるを以て秋津洲と名く。△今按に秋津蟲の名尤も舊し。かげろふとはこの蟲の羽かろく、有るかと思へば飛去つて人目にもちら〳〵と陽炎の如し、故に名とす。（一）ゑんばとは東國の詞也。とんぼうとは桑華紀年に記する如く、我が國地形東國は南北へ廣くして、西國は南北狹し。この蟲の頭を艮へ向ひ、尾を伸べなしたるに似たれば、秋津島と名けらる。その東へ向ひたるによつて、又此の蟲に東方の名有り。之を訛つてとんぼうといへり（二）。

【年浪草】　七月。○和漢三才圖會に曰、蜻蛉は總名也、大にして青色なる者なり。紺蜒（クロヤンマ）は一名天雞、大にして玄紺なる者。胡黎（キヤンマ）は一名江雞、小にして黃なる者。馬大頭（オニヤンマ）は最も大にして身綠色。赤卒（アカトンボウ）は小にして赤き者なり。又志有夜牟末（シブヤンマ）・蚊蜻蛉等あり、小兒雌を繫いで雄を釣り、戯れとなす。

註　（一）今かげろふといふは異り。（二）この說附會なり。

季題解說　幼蟲は水中に棲息する水蠆（タイコムシ　ヤマメ）にして、漸く成長すれば水を出でゝ蒲管、など水草の葉の上又は石上に上り、其背部裂け羽化して蜻蛉となる、六足にして頭大く、眼大く、齒はれ、頸は細くして蠅の如し。四つの翅細長く出で、薄くして羅の如し、眼は二樣あり、一は通常見る所の眼にて、光輝を發し、形大なり、他は小き眼にて、其數三あり、頭の中央に位す、兩側の大眼は複眼にして三個の小眼は單眼なり。此蟲の生命は短くして、成蟲となりたる後、僅かに三週間乃至一ケ月にして死すといふ。卵を流水の中に遺し又水蠆となる。種類甚だ多く數十種に及ぶも、之を二に大別すれば一は不均翅類と呼ばれ體太く、靜止の際翅を水平に開展し、後翅は其基部前翅に較べ擴大し、兩翅形を異にし、眼は互に接近す。鹽辛蜻蛉・ぎんやんま・鬼やんま・赤蜻蛉の類は之に屬す。何れも性猛く盛んに他蟲を捕食し、よく飛翔す。二は均翅類といひ、體細く、前後兩翅

は共に基部狹く、且同型同大なり、兩眼は遠く離れて撞木狀をなし、靜止の際は翅を垂直面に合す。糸蜻蛉・おはぐろ蜻蛉・其他川蜻蛉の類は之に屬す。此中糸蜻蛉は芝地雜草の上を飛ぶも後者は水邊を離れず、やさしき飛び方をなす。

蜻蛉釣り　雌蜻蛉を捕へ、絲に結び、竹の先につけ囮となし、雄蜻蛉を誘ひ釣る小兒の遊戲。但し此釣る蜻蛉はぎんやんまに限れる如し。秋津蟲・あきつ・ゑんば・やんまは何れもとんぼの古名。かげろふは、今は蜉蝣の事を云ふも、古は蜻蛉をも云へり。古歌にも蜻蛉を詠めるものあり。

おはぐろ蜻蛉　一名柳女郎とも云ふ。翅黑紫色にして體細し、川蜻蛉にして水邊を離れず飛ぶ。此類に、あをはだとんぼ・みやまかはとんぼ・やなぎとんぼ・かはとんぼ等あり。

糸蜻蛉　一名燈心蜻蛉と云ふ。體細長く燈心の如し。翅は透明なり。此類に、ものさしとんぼ・ぐんばいいととんぼ・あをいととんぼ・おつねんとんぼ・きいととんぼ等あり。

赤蜻蛉　體色赤し、赤卒又は赤ゑんばの名あり。體小く、體翅共に赤きあり、翅の褐色なるあり、仲秋後に出るものに、體殊に小く、濃赤にして、群を爲して高く飛ぶあり。秋の情深し。

蝶蜻蛉　體黑色、翅黑褐色にして藍色光を放つ。八月頃池沼上を頗る緩かに飛翔す、其狀恰も蝶の如き觀あるを以て此名あり。

鬼やんま・ぎんやんま　最も大形の種類にして翅は透明なり。

鹽辛蜻蛉・麥稈蜻蛉　鹽屋とんぼとも云ふ。體やんまよりも小し、雄をしほからとんぼと云ひ、雌はむぎわらとんぼと呼ぶ。此種のものに五月頃よく出るあり。

黃やんま　古名黃ゑんば、胡黎。體小く紅黃にして、初秋に群翔す。聖靈祭の頃なれば精靈蜻蛉・佛蜻蛉の名あり。〔參照〕蜉蝣(カゲロフ)　夏―蜻蛉生る

絲蜻蛉(イトトンボ)　川蜻蛉(カハトンボ)

例句

蜻蛉

蜻蛉や取付かねし草の上　芭蕉（笈日記）
蜻蛉のあたまにとまる日向かな　支考（浮世の北）
蜻蛉と我と遊びて薄着かな　同（越の名殘）
蜻蛉の壁を抱ふる西日かな　沾荷（其袋）
蜻蛉の芒に下る夕日かな　一笑（西の雲）
蜻蛉や日は入ながら鳰の海　惟然（北の山）
蜻蛉の藻に日を暮らす流かな　凡兆（弓　）
蜻蛉のつゝとぬけたる廊下哉　斜嶺（笈日記）

旅中

蜻蛉の來ては蠅とる笠の内　丈草（鳥の道）
蜻蛉や何の味ある竿の先　探丸（續猿蓑）

蜻蛉

蜻蛉の秋をかざすや羽の上　吾仲（草苅笛）
遠山や蜻蛉つい行きつい歸る　秋之坊（東山墨直し）
蜻蛉の來て莫れなり釣灯　樗隣（古太白堂句選）
釣下手の竿に來て寐る蜻蛉哉　也有（蘿葉集）
行く水に己が影追ふ蜻蛉かな　千代尼（千代尼句集）
日は斜關屋の鎗に蜻蛉かな　蕪村（蕪村句集）
蜻蛉や村なつかしき壁の色　同（新五子稿）
靜なる水や蜻蛉の尾に打も　太祇（太祇句選）
蜘の圍に桙しぼりなる蜻蛉哉　同（同）
蜻蛉に波の蔓草亂るかな　白雄（白雄句集）
蜻蛉や飯の先までひたと來る　召波（春泥發句集）
白壁に蜻蛉過ぐる日影かな　同（同）
動く葉の日南おさへて蜻蛉哉　蓼太（蓼太句集）
亡き人のしるしの竹に蜻蛉哉　几董（井華集）
蜻蛉や聲なきものゝ騷がしく　大魯（蘆陰句選）
垣竹の中で長いに蜻蛉かな　移竹（乙御前）
蜻蛉や岩切通す水の上　大江丸（俳懺悔）
蜻蛉もちと振返れ神路山　成美（成美家集）
蜻蛉や片足あげし鷺の上　乙二（松窓乙二發句集）
蜻蛉の十ばかりつく梢かな　士朗（枇杷園句集）
蜻蛉や錢百付けし杖の先　巣兆（曾波可理）
蜻蛉や二尺飛んでは又二尺　一茶（旅日記）
蜻蛉の尻でなぶるや隅田川　同（七番日記）
三日月を白眼つめたる蜻蛉哉　同（一茶句帖）
馬の耳ちよこ／＼なぶる蜻蛉哉　同（九番日記）
蜻蛉や帆柱あてに遠く行く　梅室（梅室家集）
蜻蛉のおさへつけたり鮓の壓　同（同）
蜻蛉の羽にも透くなり三上山　同（同）
動かずに早瀨の上の蜻蛉かな　子規（子規全集）
蜻蛉の御寺見おろす日和哉　同（同）
蜻蛉や何を忘れてもとの杭　同（同）
蜻蛉とんで事なき村の日午なり　虛子（虛子句集）
いざと別るゝとき蜻蛉のおびたゞし　別天樓（戊辰句鈔）
蓼の莖と同じ紅して小蜻蛉　古泉（丁卯句鈔）
新らしき墓にしづかに蜻蛉つく　卿公（[illegible]）
立ちならぶ大日車に蜻蛉かな　巨口（倦鳥）
とんぼうの暮れて近づく我が上に　青々（同）

やんま

茜さす日にかたれたるやんま哉　扇士（蓮の實）

山の端をやんまかへすや破れ笠　其角（五元集）
染あへぬ尾のゆかしさよ赤蜻蛉　蕪村（新五子稿）
秋の季の赤蜻蛉に定りぬ　白雄（白雄句集）
うろたへな寒くなる迚赤蜻蛉　一茶（旅日記）
赤蜻蛉地藏の顏の夕日哉　子規（子規全集）
今生れしやうにむるゝや赤蜻蛉　虛明（壬申句鈔）

〔參考〕おにやんま Anotogaster sieboldii, SELYS. 腹長七十三ミリ、後翅長六十八ミリに達する最大のやんま。體は概ね黄色であるが、腹部には鮮黄色帶が、最後の二節の外には凡て存在してゐる。北は北海道から南は臺灣まで廣く分布す。

こしぼそやんま Boyeria McLachlani SELYS. 第三腹節の中央が甚しく細く縊れ居ることを特徴とす。腹部は概ね黒褐色、胸部ほゞ黒色、頭部の地色黄色。腹長五十五ミリ、後翅長五十ミリに及ぶ。本州・九州に廣く分布す。

ぎんやんま Anax parthenope SELYS. 腹長五十ミリ、後翅長五十ミリに達する大形種、樺太以外の我國に廣く分布する最も普通なやんま。腹部第一第二節の背面は雄では藍色であるが、雌では黄綠色である。銀の名は雄の第三腹節腹面に銀色斑横走するによつて出づ。

あをとんぼ Eschnophlebia longistigma SELYS. 體色概ね綠色のやんま。腹長も後翅長も共に四十五ミリ。本州及び北海道に産す。

しやうじやうとんぼ Crocothemis servilia DRURY. 胸部は濁つた橙色であるが、腹部は雌では橙色、雄では赤色で、赤蜻蛉と混同する人もあるが、胸部及び腹部が太いので容易に區別される。腹長二十八ミリ後翅長三十三ミリ。翅は透明で、基部に橙色斑がある。本州及びその以南臺灣まで廣く分布し、池邊に普通である。

はぐろとんぼ Calopteryx atrata SELYS. 頭部及び胸部は金屬様光澤ある綠色、腹部は雄にては頭部及び胸部と同様であるが、雌にては黒色。翅は概ね黒色。北海道から九州まで廣く分布す。

しほからとんぼ Orthetrum albistylum SELYS. 雄を鹽辛とんぼと云ひ、雌を麥稈とんぼと云ふ。雄は概ね灰色で、少し白い粉が體面に附いてゐるが、尾部は殆ど黒色である。雌は大體黄色で、腹部の左右には黒斑が並んでゐる。我國に廣く分布す。

赤とんぼ「あかねとんぼ」とも稱せられ、數種あり。その內、著名のもの次の如し。

あきあかね Sympetrum frequense SELYS. 八月頃現はれ、初めは體黄色であるが、次第に鮮紅色に變じ、晩秋まで生存してゐる。極めて普通な種で、我國に廣く分布す。

なつあかね Sympetrum darwinianum SELYS. 南日本に分布し、あきあ

かねに似てゐるが、肢が全體黒色でなくて、前肢腿節の内面が黄色又は紅色であることなどで區別される。

みやまあかね Sympetrum pedemontanum, ALLIONI. 我國に廣く分布してゐる。あきあかねとは、幅廣き帶狀の褐色部が、翅の先端近き所にあるを以て容易に識別される。

まゆたてあかね Sympetrum, eroticum, SELYS. 黄色の顏部に顯著な黒點が一對あつて恰も眉を立てたやうになつてゐる。胸部と腹部とは夏はほぼ黄色であるが、秋には赤くなる。北海道から九州まで分布してゐる可愛らしいとんぼ。

のしめとんぼ Sympetrum infuscatum, SELYS. 眉斑あることまゆたてあかねと同じであるが、その色が淡く、翅端は常に濃褐色を呈し、體も翅もやゝ大で、腹長二十六ミリ、後翅長三十三ミリに達する點で區別がつく。まゆたてあかねと分布區域を等しくする赤蜻蛉。

とうしんとんぼ　いととんぼともいふ。數種あり。著名のものを擧ぐれば左の如し。

おほあをいととんぼ Lestes temporalis, SELYS. 本州に最も普通な、いととんぼ、腹長三十三ミリ後翅長二十五ミリ。體は概ね金屬樣光澤ある綠色。

いととんぼ Coenagrion quadrigerum, SELYS. 腹長二十二ミリ後翅長十五ミリに過ぎぬ最小種、體は暗綠色。我國に廣く分布す。

ぐんばいとんぼ Copera marginipes, RAMBUR. 腹長三十二ミリ後翅長二十一ミリ。我國に廣く分布す。雄の中肢及び後肢が、その脛節軍配狀に廣がり、白色を呈するを以て他種と容易に識別される。

蜉蝣（初）　かぎろふ　白露蟲

季題解說　いさご蟲の羽化せるもの。長さ六七分、首はとんぼうの如くにして、甚だ小さく、翅薄くして、四肢一處に重なる。身狹く細くして淡黄なり。尾甚だ長く細くして絲の如し。幼蟲は兩三年水中に棲み、成蟲となり羽化產卵の後、數時間にして死すと云ふ。命のはかなきを陽炎の忽ち消ゆるが如きに譬へて名づけたるものなるべし。古は蜻蛉の事をも、かげろふと云ひたり。［參照］蜻蛉　夏—草蜉蝣

例句

蜉蝣　かげろふの雨をよこ切羽風哉　沾風（續虛栗）

參考　くさかげろふ Chrysopa intima MACLACHLAN. 本州及びその以北に廣く分布す。體長十ミリ、翅開張二十六乃至三十四ミリ。體は概ね綠色。

よつぼしくさかげろふ Chrysopa septempunctata cognata MACLACHLAN. 北海道より臺灣まで廣く分布し極めて普通である。體綠色で、胸部

背面に黄條縦走す。體長十三乃至十五ミリ、翅開張四十ミリに及ぶ大形種。

蟲（三秋）　蟲鳴く　蟲の聲　蟲の音　蟲籠（人事）　蟲屋（人事）　蟲賣（人事）　蟲合せ（古、人事）　蟲聞き（人事）

古書校註

【山之井】蟲を選ぶとは、うへ人たち嵯峨わたりに逍遙しつゝ、蟲を取りて籠に入れて、大内にまゐらせ侍りし事とぞ。今の世も賀茂侍など、こゝかしこより求めて奉り侍る。されば蟲ふく（一）嵐の山のべのけしき、とぼしありく行燈のかげに、小倉の里もたど〳〵しからぬ有様、又させもが露を命にてすだく心は、暮行く秋を惜みなきする野邊の哀れさ、鈴蟲は、鍋によせて聲はなまらぬとも（二）又鈴にして小萩が筒まぼり（三）かとも疑ひ、松蟲は松にたよりて前栽に變らぬ音色をめで、又人まつ蟲とそへても云へり。猶駒つなぎの轡蟲の音を聞き（四）牽牛花に機織る蟲を、めたなばたかと怪しみ、垣のしりへのぬかづき蟲を、玉蟲姫の相思はぬにやと哀み（五）壁の崩れを綴りさせと鳴く。蟋蟀の音にわび、簑蟲のおや鬼を戀ひてちゝよと呼ぶをとぶらひ（六）おほぢのふぐりがばけかはりたる、いぼじりの形をとがむる心など連ね侍るべし。

【御傘】蟲。松蟲、鈴蟲各一づゝ懐紙を替へて用ふべし。此の蟲と云ふは秋の蟲の事也、蛬、機織（はたをるむし共）此の三色の類も秋の蟲なれば、蟲・松蟲・鈴蟲・三つ蟲の内に有る也。是新式の一座に一句つゝの物に定めたる義也。然るを近年連歌に秋の蟲一の外、松蟲・鈴蟲二の内に蛬・機織の内に又せらるゝ也。蛬・機織三の蟲のうらに有りと云々。連に一句の物は誹に二有りとばかり心得たる師匠は、蟲も二、松蟲も二、鈴蟲も二、蛬・機織も二づつあるべきやうに思ふべき也。さやうに數多く同事を出さば聞きよかるべき歟、尤く片事なるさばきなるべし。心得易きやうに連歌と引きかへ、新式の如く蟲と一、松蟲一、鈴蟲一、以上三有るべし。その内に蛬・つゞりさせ・筆のむし、或は蟋蟀などの内一、機織・はた〳〵・はたおるむしと云ひかへても一、是まで連歌新式の昔の定の如し。誹諧には此の外にいとど・こうろぎ・いなご・轡蟲の如き秋の蟲の名今一、出勝にあるべし。是も三蟲の内にあるべし。又日ぐらしも秋の蟲なれ共、此の類の蟲には非ず。惣別は連にうらにある物は誹には七句去にすれども、是は連の如く面を嫌ふ（七）がよきなり、此の外の季を持たぬ玉蟲・叩蟲・簑蟲・もに棲む蟲・腹の蟲などの蟲の字、各々面を嫌ふべき也　蟲の字のかむなしには皆三句去るべし。蟲・鳥・獸の間互に誹には二句去也

【滑稽雑談】七月二　御傘の説を考ふるに、俳諧には秋の蟲いろ〳〵言ひか

蟲鳴く

一ふしはいづれの蟲もつかまつる　去來　（伊勢紀行）
生れつく草の青みや秋の蟲　文鳥　（[illegible]塞）
抑へうぞ盆があるなら愛な蟲　惟然　（とてしも）
古御所や蟲の飛つく金屏風　蕪村　（夏より）
我あみ戸篩ぬけの蟲を宿しけり　白雄　（白雄句集）
蟲どもゝ末の露なり砂糖水　蓼太　（蓼太句集）
蟲共もまめではねるか屁つたぞ　一茶　（一茶句帖）
聲々に蟲も夜なべの騷ぎ哉　同　（九番日記）
つゞれさせさせ迚蟲が叱るなり　同　（同）
なか〳〵に捨られにけりだまり蟲　同　（同）
蟲の中に寐こしまひたる小村かな　月斗　（同人）
籠の蟲つまめば腹のやはらかき　別天樓　（己巳句鈔）
蟲の夜のあけし艸木のよごれたる　素史　（穂麥）
壺に砂入れて蟲待つ便りかな　青々　（倦鳥）
蟲ぞ鳴くあの咳（シハブキ）は久隣　來山　（續今宮艸）
樽蟲の身を栗に啼く今宵かな　其角　（虚栗）

留別

蟲共の啼てや我を涅槃像　支考　（西華集）
鳴もせぬ蟲喰枯らす柳哉　北枝　（作[illegible]原）

肥後の國本地坂に遊びて

蟲啼や戸にも承塵（ナゲシ）も松の嗅　野坡　（田植諷）
秋の部に入りて鳴かばや裸蟲　琴風　（其袋）
蟲啼や河内通ひの小提灯　蕪村　（蕪村句集）
秋の誠蟲ほどに鳴く物はあらじ　曉臺　（曉臺句集）
鹿道や踏れんと斗り蟲の鳴く　白雄　（白雄句集）
蟲啼や木賊がもとの露の影　樗良　（樗良發句集）
天の川も蟲の啼く音も常になる　乙二　（松窓乙二發句集）
啼く蟲の中へさし込む馬の鼻　道彦　（蔦本集）
鳴けよ蟲腹の足しにもなるならば　一茶　（七番日記）
蟲鳴くなそこは諸人の這入口　同　（同）
籠の蟲妻戀しとも鳴くならん　同　（同）
蟲鳴くや五分の魂ほしいとて　同　（[illegible]句帖）
蟲共も泣事いふなこんな秋　同　（同）
じれ蟲が身をいす振つて鳴きにけり　同　（同）
蟲共が泣事いふぞともすれば　同　（同）
わや〳〵と蟲の上にも夜なべかな　同　（同）
蟲の外にも泣事や藪の家　同　（九番日記）
鳴くな蟲直る時には世が直る　同　（一茶新集）

蟲鳴く

イめば蟲鳴出すや笠のかげ　梅室（梅室家集）
蟲鳴くや枕に近き松柱　同（同）

[illegible]の里にて

蟲鳴くや書の戸ざしも里の端　同（同）
スイッチヨと先づ啼きそめぬ庭の蟲　虚子（虚子句集）
夜々を鳴く蟲も命の一つかな　なみえ（正中句鈔）
筵もの干すに蟲鳴く小百姓　青々（倦鳥）
蟲鳴くや七堂伽藍なにもなし　子規（全集）
蟲鳴くや梅若寺の葭簀茶屋　同（同）

奈良

蟲鳴くや金堂の跡門の跡　同（同）
行水も日まぜになりぬ蟲の聲　來山（續今宮艸）
屋根裏に蟲の音寒し辻行燈　同（同）

蟲の聲

獨聞し虫す

人呼びにやるも夜更つ蟲の聲　鬼貫（鬼貫句選）
行水の捨所なき蟲の聲　同（同）
宵はいつも秋に勝つ氣を蟲の聲　同（同）
野離れや風に吹くる蟲の聲　同（同）
盆過ぎて宵闇暗し蟲の聲　芭蕉（芭蕉庵小文庫）
元結のぬる間は悲し蟲の聲　其角（類柑子）

柴中と伊勢を語りて

故鄉も隣長屋か蟲の聲　同（五元集）
淺茅生やまくり手おろす蟲の聲　去來（西の雲）
雨水をすゝり飽きてや蟲の聲　丈草（初便）

病床

蟲の音の中に咳出す寐覺哉　同（渡鳥集）
賣家や猫も杓子も蟲の聲　支考（西華集）

琴左亭

椽に來て鳴く蟲の音や萩傳ひ　同（國の華）

秋の坊閑窓に寄りて

蟲の音に暫し細かれ丈夫心　北枝（柞原）
耳の底に一座敷あり蟲の聲　同（菊十歌仙）
皆光る雨夜の星や蟲の聲　野坡（野坡吟艸）
屋根まくる野分の中や蟲の聲　李由（韻塞）

石山寺に遊ぶ

佛像の名を啼分けよ蟲の聲　同（初蟬）
相撲場の後ろは寒し蟲の聲　同（玉まつり）
蓬生に鷄追はむ蟲の聲　玄梅（鳥の道）

聲立る中に一つの裸蟲　同　（砂川）
菜畠や二葉の中の蟲の聲　尚白　（猿蓑）
むつかしや嵯峨にも置かず蟲の聲　同　（曉山集）
蟲の音や夜更てしづむ石の中　園女　（住吉物語）
暮るゝ程芭蕉にひゞく蟲の聲　許六　（韻塞）
蟲の音や木綿所の綿車　汶村　（同）
行燈に覆ひをせばや蟲の聲　朱拙　（初蟬）
黍稗の殼も腐るや蟲の聲　壺中　（鳥の道）
火の消て胴に迷ふか蟲の聲　正秀　（續猿蓑）
借らばやと借家に入れば蟲の聲　舍羅　（荒小田）
蟲の音に挾まれて行く山路かな　風國　（初便）
別々に聲や暮なす秋の蟲　卓袋　（同）

一夜菴のほとりを見めぐりて

蟲の音に星吹こぼせ篠の中　除風　（番橙集）
何なりと思ひ出せとや蟲の聲　魯九　（國の華）
爺婆も共に白髪や蟲の聲　浪化　（春鹿集）
蟲の音も散るや灯影の松の露　荻子　（哀蟲庵小集）
聲長き蟲の往來や夜もすがら　陽和　（同）
蟲の音の掃れて遠し寺の庭　也有　（蘿葉集）
草刈の笛暮はてゝ蟲の聲　同　（同）
去年見た藏の跡なり蟲の聲　同　（同）
蟲の音に心も置かず降夜かな　千代尼　（千代尼句集）
蟲の音や野にをさまりて庭の内　同　（同）
茨野や夜は美しき蟲の聲　蕪村　（夏より）
明はなし寐た夜積りぬ蟲の聲　太祇　（太祇句選）
朝市や蟲まだ聲す物の下　同　（太祇句選後篇）
曉の籠をぬけけん蟲の聲　同　（同）

常盤塚にて

蟲の音や美人の涙生き代り　曉臺　（曉臺句集）
便りなや水押かゝる蟲の聲　同　（同）
曉や雨も頻に蟲の聲　同　（同）
夜嵐をあぶせかけたり蟲の聲　同　（同）
立出でゝ鎖せばあとは蟲の聲　同　（同）
月消て蟲は嵐の下音かな　闌更　（半化坊發句集）
折々や藻に啼く蟲の聲沈む　同　（同）
蟲の音や月は僅に書の小口　白雄　（白雄句集）
草むらも草むらも蟲の詫音哉　同　（同）
聲冴ゆる蟲は何々銅盥　同　（同）

蟲の聲

蟲の音や道ほどあけて長堤　蓼太（蓼太句集）
十ばかり耳ある夜なり蟲の聲　同（同）
眼を明けば書家なりけり蟲の聲　同（同）
日暮ても野は錦なり蟲の聲　同（同）
蟲ほろほろ草にこぼるゝ音色哉　樗良（樗良発句集）
蟲聲非二一大殿油白き迄　几董（井華集）
蟲の聲草の懐離れたり　同（同）
物知らぬ妻と選ぶや蟲の聲　同（同）
蟲の音に折々わたる嵐かな　青蘿（青蘿発句集）
明六ツをしじまの鐘か蟲の聲　田女（其雪影）
更る夜や草を離るゝ蟲の聲　樹雨（續明烏）
旅中
ほつれ笠着た僕もあり蟲の聲　巣兆（曾波可理）
吹降や家陰たよりて蟲の聲　一茶（一茶句帖）
小庭にも遠近あるや蟲の聲　梅室（梅室家集）

蟲籠

嵯峨にて
蟲の音も神慮に似たり波の上　蒼虬（蒼虬翁発句集）
蟲の聲野水に珠を流すかに　青々（倦鳥）
蟲籠を買うて裾野に向ひけり　鬼貫（鬼貫句選）
頻ずりや思はぬ人に蟲屋迄　其角（焦尾琴）
乾きたる蟲籠の草やあら無沙汰　召波（春泥発句集）
蟲籠の総角さめぬ致仕の君　同（同）

蟲賣

宵過や蟲賣通る町外れ　桃隣（古太白堂句選）
蟲賣のかごとがましき朝寝哉　蕪村（蕪村句集）

蟲合

かりそめの杯いでぬ蟲合　青々（妻木）

蟲聞く

蟲聞て立つや野人の怪しむまで　召波（春泥発句集）
蟲いろいろ草の亂れを聞く夜哉　蒼虬（蒼虬翁発句集）
蟲聞くや子規の墓ある山續き　鳴雪（鳴雪句集）

参考 江戸職人歌合に、「蟲賣、秋の蟲のあはれを月と眺むれば荷へる蟲の音にぞ恨むる」。

竈馬（秋）

竈馬（いとど）　えびこほろぎ　おかまこほろぎ　いいぎり　えんのしたこほろぎ　おさるこほろぎ　かまこ　かまどうま　かまどむし　はだかこほろぎ

古書校註

【篗纑輪】七月、いとど・かうろぎ、一物二名也。筑紫にてゐゝこと云ふ。その形蛩の如くして首尖りて鋭ど也。足髭甚だ長し、竈の邊に穴居す、依

つて竈馬の字、いとど・かうろぎと訓す。暮秋の深夜聲高くすめり。

【栞草】 七月。いとど・こほろぎ。一物一名。

季題解説 直翅類竈馬科の昆蟲、全體黄褐色にして背面は鰕の如く曲れるより、ゑびこほろぎの名あり。觸角は絲狀にして、極めて長く、肢は細長く殊に後肢は長大にて、よく跳躍す。常に濕氣ある床下などに群棲し、夜間竈の邊に來る。依て竈馬の字を充つ。

實作注意 古今の句に其の鳴くを詠じたるは、蟋蟀(コホロギ)の方言「いとぢ」又は「いとど」を云へるにて、竈馬は翅を有せず、卽ち發聲器無きを以て鳴かず。俳人はいとど、こほろぎ、きりぎりすを混同せるもの極めて多きが如し。又「いとど」に「竈馬」の字を充つる事にも異論はあれど、「竈馬」卽ちゑびこほろぎを「いとど」なりとして、異說に拘泥せず作句すべし。ただ古人の句を見る場合にはいとどは蟋蟀(コホロギ)の一種を詠めるものと心得べし。 [參照] 蟲・蟋蟀(コホロギ)

例句 竈馬

いとど鳴く猫の竈に眠るかな　鬼貫（鬼貫句選）
海士の屋は小海老に交るいとど哉　芭蕉（猿蓑）
張殘す窓に鳴き入るいとど哉　惟然（藤の實）
磯際の波に鳴き入るいとど哉　同（韻塞）
啼やいとど鹽に埃の溜る迄　越人（猿蓑）
藻焚けば灰によごるる竈馬哉　丈草（藤の實）
干鮭の目へ屈んだる竈馬かな　許六（韻塞）
精出すや月の名殘を啼くいとど　正秀（菊の香）
玉箒草の傍に經よむいとど哉　可南女（續猿蓑）
鶏塚に耳あてて聞くいとどかな　浪化（浪化上人發句集）
いとど鳴く地を吹きにけり夜の風　闌更（半化坊發句集）
蟲いろいろ鳴く夜や宿にいとど飛ぶ　白雄（白雄句集）
小家毎に竈馬も一つ相の山　蒼虬（蒼虬翁發句集）

參考 いとど・えびこほろぎ・おかまこほろぎ・いいぎり・えんのしたこほろぎ・おさるこほろぎ・かまご・かまどうま・かまどむし・はだかこほろぎ。屋内殊に竈の附近によく現はれる蟲、きりぎりす科に屬し、雄蟲と雖鳴かぬ。我國に普通なのが、まだらかまどうま Diestrammena marmorata De HAAN. と稱し、體は黄褐色で、多數の黑色斑紋がある。

蟋蟀(こほろぎ)（初）

蛬(こほろぎ)　蛼(こほろぎ)　蟰蛚(せいれつ)　いとど　いとど　ころころ　ちちろ蟲(むし)
筆津蟲(ふでつむし)　閻魔蟋蟀(えんまこほろぎ)　三角蟋蟀(みつかどこほろぎ)　おかめ蟋蟀(こほろぎ)　つづりさせ蟋蟀(こほろぎ)

古書校註

【年浪草】七月○○西陽雜俎に曰、竈馬狀促織の如く、稍大にして脚長し、好んで竈の旁に穴す、俗に言ふ竈に馬有れば食ふに足るの兆と。○和漢三才圖會に曰、蛩・蛬同じ。促織・蜻蛚・趨織、和名古保呂木。三才圖會に云、蝗に似て小さく、正黒にして光澤あり、漆の如く、翅皮角あり、善く跳ぶ、夏生じ立秋後に夜鳴く。好んで土石磚甓の下に吟ず。尤鬪を好む、勝てば翹て誇つて鳴く、其聲急に織るが如し、故に促織といひ又趨織といふ。按に蟋蟀に二種あり、[illegible]者は善く鳴く、其聲古呂々幸といふが如し。清美にして松蟲に次ぐ、[illegible]者は尻に劔刺ありて、鳴かず、古今註に云、蟋蟀秋の初に寒を得れば則ち鳴く、俚語に言へることあり、趨織鳴けば嬾婦（一）驚くと。蓋し蟋蟀・莎雞・斯螽等和漢共に辨ずる事を得ず、今略々左に解す。

詩豳風に曰、五月斯螽動股、六月莎雞振羽、七月在野、八月在宇、九月在レ戸、十月蟋蟀入我牀下。朱子の註に曰、斯螽・莎雞・蟋蟀は一物にして時に隨つて變化して其の名を異にす。陳玄が衍義に云、斯螽は蝗也、莎雞は促織也、蟋蟀は蛩也。自ら是三物、安んぞ之を時に隨ひ變化してその名を異にすといふ事を得ん。朱註この一處之を改むべし。按に陳が說是也、しかれども莎雞を以て促織とするは非也。順が和名抄に云、絡緯一名促雞、和名波太於里女、蜻蛚、和名古保呂木、斯螽、一名蚣蝑、一名螽蠜、一名春黍、和名以[illegible]豆木古萬呂、蟋蟀、一名蛩、和名木里木里須、按皆混雜して異名・和名共に錯亂せる也。後人之に據つて[illegible]誤るか。○竈馬又いとゞと訓す。大和本草に促織一名蟋蟀、又蛩。古歌に詠ずるきりぎりす是也。古歌に霜夜に詠めり、唐詩にも多く詠ず。皆其の聲を感じて也。莎雞ははたおりと訓ず、蟲螽の類也、暑月書間草中に羽を鳴らして鳴く、其の聲機織るが如し、今俗きりぎりすと云ふ、眞のきりぎりすに非ず。詩に六月莎雞振レ羽とは是也。（藻鹽草に曰、古今「秋風にほころびぬらし藤袴つゞりさせてふきりぎりす鳴く。」世俗にきりぎりすはつゞれさせ、からはひろはんと鳴くと云ふ。からはとは綱布の破れて何にもすべくもなきを云ふ云々。其の外の說皆つゞりさせてふをきりぎりすとす。殊に八雲御抄にも蟋蟀壁中在又竈化爲レ之、秋風の吹きくるなへに鳴くと云へり云々。……はや丸と云ひつゞりさせと云也云々。然れば世俗に云ふこほろぎ眞のきりぎりすにすて、世俗に云ふきりぎりすは誤り云ふ也。是はたおりなるべきか。

註 （一）嬾婦の誤。こほろぎ・きりぎりす・はたおり等の別については古來なほ諸說多し。きりぎりすの條參照。

最新昆蟲學說　直翅類蟋蟀科の昆蟲、體長六七分許、頭比較的大きく、長き觸角あり。雄は黑き翅ありて長さ身長に等しく紋脈あり。後の長脚を以て跳るのみにて、飛ぶこと能はず、後に二尾あり。雌は翅短くして鳴かず。二尾の中間に褐色の産卵管あり。人家の床下又は瓦石の間などに棲む。種類頗

る多く、初秋より鳴き初め晩秋より冬に入り霜を見て尚鳴けるもあり。

えんま蟋蟀　蟋蟀中最も大なるものコロ〱コロコロと高聲に晝夜とも鳴く。畑・草原・塵芥の下に棲む。頭大きく閻魔王の冠に似たり。

三角蟋蟀　棲處えんま蟋蟀と同じく、リ丶リと鳴く。頭極めて大きく、三個の顯著なる突起あり、顔は斜に切れ平坦なり。

おかめ蟋蟀　三角蟋蟀によく似たれども雄の頭部の突起著しからず、形も小にして鳴聲はリリリリリリリリリリッと云ふ。

つゞりさせ蟋蟀　えんま蟋蟀に似たるも形は著しく小さく、後翅は雄雌共に退化して白色小形となり、リー〱リー〱と鳴く。

(イ)雌　(ロ)雄

筆津蟲〔祕藏抄〕「ふでつむし秋も今はと淺茅生にかたおろしなる聲よわるなり。筆つむしは蛬をいふなり」。

ちゝろ蟲〔祕藏抄〕「ちちろむし夜吹く風や寒からん更くれはいとどよわる聲かな。ちちろ蟲とはきり〲すを云ふなり」

つゞりさせ　其鳴聲の恰も衣を綴り刺せといふ意の如く聞ゆるより云ふ。〔古今〕「秋風にほころびぬらしふぢばかまつづりさせてふきり〲す鳴く」

實作注意　古來、蟋蟀も蚱も蛬も蛩も皆こほろぎとも、きりぎりすともいひ、甚しきは竈馬をも混同せり。本來は其文字によりて其種類を表はせるものなれど今區別し難し。後京極攝政太政大臣の「きり〲す鳴くや霜夜のさむしろに衣かたしきひとりかもねん」芭蕉の「白髮ぬく枕の下やきり〲す」などは、今日云ふきり〲す(螽斯)にはあらで、こほろぎの一種にて大阪邊にて「いとぢ」の事を云へるなり。萬葉集には、こほろぎをこほろぎとして歌へるも、古今集以下に至りてきり〲すの歌の出現を見たり。之より歌にも俳句にも今日云ふ蟋蟀の一種をきり〲すとして詠することとはなれり。然れども現今通俗に云ふキリギリスは動物學の名稱にも、キリギリスなるものありて、こほろぎと區別を爲すに至れるを以て、單にきり〲すといへば螽斯の事とし、蛬のきり〲すはこほろぎとして作句する方まぎらはしからじ。**參照**　蟲(ムシ)　竈馬(イトド)　蛬(キリギリス)　機織蟲(ハタオリムシ)

例句

こほろぎ

猫に喰はれしを蛬の妻はすだくらん　其角　(廣　栗)

こほろぎや箸で追やる膳の上　孤屋　(炭　俵)

竈馬や顔に飛つく袋棚　北枝　(續　猿　蓑)

こほろぎやあら砥すゑたる井戸の端　遲望　(後　れ　馳)

蚱や相如が絃の切るゝ時　蕪村　(蕪村遺稿)

縣井やこほろぎこぞる風だまり　白雄　(白雄句集)

こほろぎ
蟀や一夜宿せし商衆居風　白雄（白雄句集）
蟀の鳴くやころ〳〵若い同士　一茶（七番日記）
蟀が動かして行く柱かな　同（同）
蟀が顔こそぐつに通りけり　同（同）
蟀が髭をかつぎて鳴きにけり　同（同）
蟀のとぶや唐箕の埃先　同（おらが春）
蟀の受取て鳴く竈かな　同（一茶句帖）
蟀の髭染て居る繪の具哉　同（同）
蟀やまだ冷めきらぬ風呂の下　梅室（梅室家集）
こほろぎの聲に月ひく軒端かな　蒼虬（蒼虬翁句集）
蟀は草にまぎれずつや〳〵し　白雲郷（己巳句集）

ちゝろ蟲
弱き名を誰に貰ふてちゝろ蟲　青々（倦鳥）

つゞれさせ
白露のたけもたゝぬやつゞれさせ　巣兆（曾波可理）
うち起す田はぬれがちにつゞれさせ　之嵐（倦鳥）

筆津蟲
同じ音をかへす〳〵や筆津蟲　千枝女（古今句鑑拾遺）

動物考　こほろぎ、前翅を殆ど垂直に立て、互に擦り合せて發音する。
えんまこほろぎ Gryllus mitratus BURMEISTER. 體長二十五ミリに達する最大種、前翅が油のやうな光澤ある暗褐色を呈してゐるので、あぶらこほろぎとも云ふ。コロコロコロコロコロギーと鳴く。
つゞれざせこほろぎ Gryllodes sigillatus WALKER. 單にこほろぎとも云ひ、又、ひめこほろぎ、やまとこほろぎ、とうきやうこほろぎとも云ふ。世界に普く分布す。リユーリユーリユーリユーと鳴く。體長十六ミリ。體色は概ね黄褐色。
おほみつかどこほろぎ Loxoblemmus doenitzi STEIN. 雄の頭部が三角形に突起してゐる。我國に普通な種類、鳴聲はリリーリリリーと聞える。

松蟲（初）

金琵琶（きんひば）　青松蟲（あをまつむし）　ちんちろ

古書校註
【御傘】松茸・松蟲。松の字に三句去るなり。
【年浪草】七月〔松蟲〕正字未詳。〔和漢三才圖會〕に曰、松蟲は蟋蟀（コホロギ）の類、褐色にして長き髭あり、腹黄、野草及び松杉の籬にあり、夜羽を振つて鳴く聲知呂林古呂林といふが如し。甚だ優美也。凡そ松蟲・鈴蟲皆は得難し、夜燈を照らせば則ち光を慕うて來るを捕へて蟲籠に畜ふ。竹筒を用ひて水を盛り、鴨跖草（ツユクサ）二三葉を投じ、毎日新に水及び草をかへ糞を掃ふ。その脉胡麻の如し、大暑以後始めて鳴き、九・十月止む。
【栞草】今俗に、リン〳〵と鳴くを鈴蟲といふはわろし。是松蟲也といへり、鈴蟲はチンチロリと鳴くをいふといへり。

【季題解説】 注 松蟲・鈴蟲、古今その名稱の異る事については、古來諸家の説多し。

直翅類蟋蟀科に屬する昆蟲で形苦瓜の種子に似て、體長六分位。黄褐色を呈し、腹部は黄色、長き觸角あり。チンチロリンと鳴く。叢の中の根方に近く居て鳴く。

【實作注意】 松蟲・鈴蟲は昔と今と振り替りたり。即ちリン／＼は松蟲チンチロリンは鈴蟲なりし。謠曲「松蟲」に「分て我忍ぶ松蟲の聲リン／＼リン／＼として夜の聲朗々たり」又「野の宮」には「誰まつ蟲の音はリン／＼として」などあり。和漢三才圖會の記載は此反對なり。松蟲――褐色にして長髭あり、腹黄、野草及び松杉籬の間にあり、夜羽を振つて鳴く聲ちろりころりと云ふが如し、甚だ優美なり。

金鐘蟲――俗に鈴蟲と云ふ、夜鳴く聲鈴を振るが如くリリリンリリリンと云ふ、其優美松蟲に劣らず。とありて現今の稱呼に一致せり。左に示す例句に就て見るも、嵐雪の句は古稱にして一茶の句は近稱なり。作句上深く拘泥するの要なし。

【參照】 蟲ムシ　鈴蟲スズムシ

【例句】

松蟲

まくり手に松蟲探す淺茅哉　其角（句兄弟）

野宿秋興唫

松蟲に狐を見れば友もなし　同（焦尾琴）
松蟲は通るあとより鳴きにけり　一髮（曠野）
松蟲と後先になる軒かな　車來（鳥の道）
松蟲も馴れて歌ふや手杵臼　卓袋（續有磯海）

通事の浦にて

松蟲に人なつかしや礒の家　支考（梟日記）
松蟲の啼く夜は松の匂ひかな　沙明（西華集）
松蟲や礒山陰を暮廻す　浪化（そこの花）
松蟲の待たぬ夜もなし松の露　北枝（草苅笛）
松蟲や兎の道の茂りあふ　野狂（心ひとつ）

茶碗ノ銘

松蟲のりんとも言はず黒茶碗　嵐雪（風俗文選）
松蟲の中や夜食の茶碗五器　許六（五老井發句集）
草枯て人にはくずの松蟲よ　几董（井華集）
松蟲や灯火青き西の對　卉我（續明烏）
松蟲や風の吹く夜は土の中　巣兆（曾波可理）
松蟲や素湯もちん／＼ちろりんと　一茶（一茶新集）
人は寐て籠の松蟲啼きいでぬ　子規（子規全集）

【參考】 まつむし Dionymus marmorata DE HAAN. 昔鈴蟲と稱へた

ものを今日松蟲と稱へ、昔の松蟲が今の鈴蟲となつてゐる。かやうな變遷を是認しない人もあつて、チンチロリンと鳴く蟲を飽くまで鈴蟲と呼ぶべしとの主張が尙諸書に散見する。八月頃から現はれ、叢間にて鳴く。體長十九ミリに達す。體色概ね淡褐色。その形ほど「つるれいし」の種子に似てゐる。本州より臺灣まで分布す。
あをまつむしは、まつむしに似て綠色、常に梅・櫻・桃等の樹上に棲み、その葉を食つて生活してゐる。チリリリリ、、、、と鳴き、遠くまでその聲が聞える。Madasumma hibinonis Matsumura の名が與へられたことがある。

鈴蟲（すゞむし）（初）　金鐘兒（きんしようじ）　月鈴子（げつれいし）

古書校註

【御傘】鈴蟲。秋也、誹諧には二句有るべし。

【年浪草】七月〇和漢三才圖會に曰、金鐘蟲（スヾムシ）、月鈴兒、俗に云、鈴蟲。按にこれも赤蟋蟀の類眞黑なり。松蟲に似て首小く尻大、脊窄く腹黃白色。夜鳴く聲鈴を振るが如し。里里林里里林といふ。その優美松蟲に劣らず。〇或は云、本名金鐘兒、一名月鈴兒。此の蟲鈴鐸を振るが如し、故に名く、或は云、松蟲・鈴蟲異名一蟲也と。

季題解説

直翅類蟋蟀科に屬する昆蟲、こほろぎに似て、頭小さく、尻大きく、色は赤黑色なり。一見西瓜の種子の如し。其鳴聲リン〳〵〳〵と聞ゆ。

實作注意

古は之に松蟲の名を當て、チンチロリンと鳴く今日の松蟲を鈴蟲と稱せり。
橫山博士は一その音が鈴を振ふやうなので鈴蟲と呼ばれてゐるけれど、その音の冷涼さを含むだ點から考へて涼蟲（スヾムシ）と云つてもよい」と云ひ、此蟲の習性を說て「いくら澤山飼つても少しも喧しいといふ事がない、いつもおとなしく甕の底にゐて無暗と跳ね廻る事をしない、總てが女性的に出來てゐる」と云へり。奈良春日野の鈴蟲は聲大きく、且つ六聲七聲鳴き續く由にて、每年奈良より之を獻上して大內山に放養せらるゝと聞けり。 〔參照〕蟲

例句

松蟲で

鈴蟲　更るほど鈴蟲の音や鈴の音　之道（あめ子）

夜過山

鈴蟲や松明先へ荷はせて　其角（いつを昔）

鈴蟲の啼そろひたる千草かな　桃妖（有磯海）

鈴虫に客を通すや廻り縁　兕觥（有磯海）
風さはる小松鈴蟲糸鹿山　秋之坊（草苅笛）
鈴蟲や手洗ひするも蒔繪物　曉臺（曉臺句集）
鈴蟲の鳴くやころころと露の玉　同（同）
鈴蟲や露降る宵のかゝらかけ　鷺白（春秋稿）
世がよしや蟲も鈴ふり襷を繞る　一茶（七番日記）
よい世とや蟲が鈴ふり雨が舞ふ　同（同）
あれ見よや蟲が鈴ふり神樂さす　同（同）
蟲も鈴ふるなり安内安全と　同（九番日記）
飼ひ置きし鈴蟲死で庵淋し　子規（全集）

【動物】すずむし Homoeogryllus japonicus DE HAAN. 七月頃から現はれリーンリーンと鳴く。中形の鳴蟲で、其體形、西瓜の種子に似てゐる。體色は暗褐又は黒褐色。東京から臺灣に至るまで分布す。

朝鈴（初）　やぶすゞめ　草雲雀　きんひばり

【解説】直翅類蟋蟀科に屬する昆蟲、體長二分二三厘、灰黄色にして頭上に體長の四倍程の長き觸角あり。全體華奢にして、蚊と見違ふ位なり。鳴聲ヒフリ、ヒフリと顫ひを帶びて、ながく鳴き續く。夜明けより朝間の涼しき時等によく鳴く。關東にては草雲雀、關西にては朝鈴と云ふ。「栗氏蟲品」に「秋風立て清涼の頃、朝より晝まで鳴く、羽を立て鈴蟲の如し、聲は清亮、遠くに聞え、綿々として鈴を搖撼するが如し、木の葉の枯れたる卷葉にすむ、冷氣至れば、屋中紙窓に入つて啼く」とあり。小泉八雲氏は「蟲の伶人」の中に「草雲雀は朝鈴とも[illegible]鈴とも秋風とも小鈴蟲ともいふが―晝間歌ふ蟲である。非常に小さな蟲で―ヤマトスヾを除いて、これが蟲の合唱者中最も小さなものであらう」と記せり。又横山博士は「水晶のやうなすき透つた音をたてる」と云ひ「靈魂の顫へのやうな彼の音波は空中に擴がつて家全體を音の漣の洪水にする」と評せり。【參照】蟲六

【動物】くさひばり Paratrigonidium bifasicatum SHIRAKI. 體長七ミリ、淡黄褐色。八月頃から現はれ、フキリリリ、、、と鳴く。我國に擴く分布す。きんひばりとも云ふ。

邯鄲（初）

【解説】直翅類蟋蟀科に屬する昆蟲、體長四分五厘位。色は帶綠淺黄褐色にて、觸角甚だ長く、體長の三倍近くあり。形、松蟲に似て狹小なり。鳴聲フヒヒコロ、フヒヒコロと囀るなり、終夜綿々としてやまず。此蟲近時籠に飼はるゝ事多く鳴蟲界の流行兒たるの觀あり。【參照】蟲六

【動物】かんたん Oecanthus longicauda MATSUMURA. 頭端から翅端

まで二十四ミリ。鬚は細長く、淡黄綠又は淡黄褐色。觸角甚だ長く、體長の約三倍に達す。七月頃から現はれ、叢間で、甚だ可憐な聲でフヒヨロンヒヨロ、、、、と鳴く。本州・朝鮮・北海道に廣く分布す。

鉦叩（かねたゝき）（初）

【解説】直翅類蟋蟀科に屬する昆蟲。體長三分位。鈍黄色にて細形の蟲なり。他の蟲と異なり此かねたゝきは翅の發育不完全にて雌は全然翅を缺き、雄と雖も腹部の前半を覆ふに過ぎず。此點に於て他の蟲と容易に識別し得。樹木の洞穴、落葉の中などに棲み、樹上にして鳴く。時として屋內に入り柱、天井等にとまりて、チンチンチンチンと鳴く。而も小さければ容易に發見し難し。蟲譜圖說には、「索々として聲をなし、連綿不絕、恰も鐘を叩くが如し」とあり。横山桐郎博士は氏一流の觀察をなし「チン〱と銀の延べ板を銀の小槌で叩くやうな」と形容し、其黄褐色の特に短き翅を、一寸見た恰好が水兵服でも着てゐるやうである」と評せるは實に巧に其風丰を表はせり。【參照】蟲。

【例句】

鉦叩　眞夜中に眼覺めて宜し鉦叩　耕雪（ホトトギス）

【參考】かねたゝき Liphoplus kanetataki MATSUMURA. 體長七ミリに過ぎぬ小形種、頭部及び胸部は淡褐色。腹部は銀白色。八月頃現はれ、微かな聲でチンチンと恰も鉦をたゝくが如く鳴く。

蛬（きりぎりす）（三秋）　螽蟖（きりぎりす）　ぎす

【古書考證】

【御傘】蛬（きりぎりす）、秋也、誹には二句すべし。蟋蟀（こほろぎ）と漢に云ひかへても二の內なるべし。但し、連歌に蛬一の外に、きり〱す、うたふこと神樂の名を今一句するとあれば、誹には蟋蟀と以上三句有るべし。若し又筆つ蟲・させてふ蟲など、きり〱す（きりぎりす）の異名等も三の內也。

【篗纑輪】七月「蛬」仲秋より暮秋に至り、十月迄も人家の內外に夜專ら鳴く　その聲寂し、ツヾリサセ又カタサセスソサセといふが如し。「蛬鳴くや霜夜のさむしろに」ととみ、源氏に「一壁の中の蛬さへ間遠に聞きならひ給へる御耳に」といひ、古今集に「秋風にほころびぬらし藤袴つゞりさせてふきり〱す鳴く」とよめるもの是也。唐詩に多く詠ず。皆その聲の寂しきを感じて也。その形確馬に似て頭は切りたるが如く尖りなし、正黒にし

て光澤ある小蟲也。尤も脚髭長し。蟋蟀・促織・絡緯蟲・蛩・蛬、皆きり〴〵すと訓す。然るに三才圖會に是等の文字を皆かうろぎと訓して、莎雞の二字をきり〴〵すと訓しおけり。(中略)本邦いなご・はたおり・きり〴〵すと稱するもの皆別物にして一蟲にあらず。尤も同類少異なる故に、文字の訓も書々混ず。俳諧にはそれを改むるには及ばず、文字は通俗の字を用ふべし。

註 (一)神樂歌の小前張の曲に「きり〴〵す」あり。○支那の三才圖會莎雞の條には札々(クワクワ)となきその聲紡絲を紡ぐが如しとし、大和本草にも記あり　されど最も詳かなるは、東析俳何の「俳諧多識篇」なり　その說は「蟋蟀(シツソツ)をきり〴〵す、絡緯をこうろぎ、蛬(キヤウ)をきり〴〵すと訓ず、又いとゞなどいふもの一物なりや」と「今きりぎりすといふはいにしへ何と云ひしものにや、やはりきり〴〵すと還ひても宜きや、こうろぎと混じてあしきや」といふ問とに對する答に見ゆ。今その文長くして引用し難けれども、要するに古句に「こほろぎや顔へ飛びつくふくろ麹　北枝」・「こほろぎや青に[illegible]ひやる酒の上　孤屋」・「海士が家は小海老にまじるいとゞ哉　芭蕉」・「干魚の目のかすみたるいとゞ哉　許六」・「竈の煤に巻きこめられていとゞ哉　昌房」等は、皆淨老の生つきを味めるものにて、是より考ふれば蟀(コホロギ)・いとゞといふものは漢名竈馬に當り、今こほろぎといふものに非ずとし又今のきり〴〵すは古へのはたおり蟲たりと論したり　詳しくは同書につきて見るべし。

季節解說　今日云ふきり〴〵すは螽斯にして、古は之をはたをりと云ひ、蛬(キヤウ)をきり〴〵すと稱せり　蛬はこほろぎの一種なり、馬琴の「俳諧歲時記栞草」及び他の類書には多く之を混同せるが如し。卽ち

『栞草』「蟋蟀(キリギリス)、一名蟋蟀(シツシユツ)又蛬と云ふ、立秋の後夜鳴く、イナゴに似て黑し、翅あり角あり頭は切たる如く尖りなし、俗につゞりさせと鳴くと云ふ、西土の方言クロツヾと云ふ、古歌にきり〴〵すとよめるは是なり、秋の末まで鳴く故に霜夜によめり、今俗にいふきり〴〵すは莎鷄(ハタヲリ)なり、家持集、きり〴〵すつゞりさせとは鳴なれどむらきぬもたぬ我はきゝいれず。筆つ蟲、ちゝろむし、すげの庭鳥等の異名あり」

而して此異同につき古來種々說あり、左に一二を紹介せん。

『栗氏蟲譜』　按ずるに萬葉集にこほろぎの歌ありて、古今集以後の歌にきりきりすといへる名のみ詠めるは、蟋蟀に二名ある中にきり〴〵すと云へる名のみ專らとなりしものと見ゆ。

『傍廂』　なほ古學者はこほろぎをきり〴〵すと心得、むげの俗人ははたおりむしをきり〴〵すと云へり、其聲ころ〳〵と聞ゆるがこほろぎにて、つゞりさせと聞ゆるがきり〴〵すなり、きり〴〵ちやうと聞ゆるがはたおりなり、はたおりは暑き頃のみにて、こほろぎはすこしのこりて、きりぎりすは久しく冬まであり。

傍廂の作者齋藤彥麿の說は最も當を得たるが如し。然し乍ら現今にては、きり〴〵すと云へば一般にも動物學にも螽斯(ハタヲリ)の事となれるを以て蛬のきりぎりすと混同せぬやうに心すべきなり。〔參照〕蟲の聲　蟋蟀(こほろぎ)　促織蟲(はたをり)

例句

きりぎりす　身は老ぬ指南まゐたるきり〴〵す　來山(續今宮草)

きりぎりす

有岡の昔を哀れに帶て

古城や茨くろなるきりぎりす　鬼貫（七車句選）

白髪ぬく枕の下やきりぎりす　芭蕉（あめ子）

太田神社、實盛遺品

無殘やな甲の下のきりぎりす　同（奥の細道）

床に來て鼾に入るやきりぎりす　同（木がらし）

淋しさや釘に懸けたるきりぎりす　同（草庵集）

朝な〳〵手習すゝむきりぎりす　同（[illegible]庵入日記）

猪の床にも入るやきりぎりす　同（芭蕉句選拾遺）

閑かさや繪懸る壁のきりぎりす　同（芭蕉翁消息集）

品川海晏寺にて

常[illegible]や壁あたゝかにきりぎりす　其角（小太郎）

澄む月や髭を立てたるきりぎりす　同（五元集）

[illegible]待つや味噌漉ふせてきりぎりす　同（五元集拾遺）

十牛ノ圖ノ内　騎牛

きりぎりす枕も床も草履哉　同（[illegible]）

常燈や壁あたゝかにきりぎりす　嵐雪（其袋）

[illegible]記ノ内　地獄廻り

己れさへ餓鬼に似たるきりぎりす　同（杜撰集）

送　別

悔いふ人の途切れやきりぎりす　丈草（流川集）

寒けれど穴にも住かできりぎりす　同（有磯海）

踊子の歸り來ぬ夜やきりぎりす　同（淡路島）

物かけて寐よとや裾のきりぎりす　同（[illegible]舍集）

寐返りの方になくやきりぎりす　同（青むしろ）

きりぎりす啼や出立の膳の下　同（[illegible]の道）

連のある所へ掃くそきりぎりす　同（そこの花）

宵待てよ戸に打れたかきりぎりす　同（幾人水主）

行燈に飛ぶや袂のきりぎりす　同（丈草發句集）

きりぎりす鳴くや夜寒の芋俵　許六（正風彦根躰）

[illegible]寒しきりぎりす　同（[illegible]の花）

きりぎりす鳴くやいつ迄瓜の花　同（俳諧遺響）

裂織（サキオリ）を手間と越のきりぎりす　支考（東西夜話）

きりぎりす啼せて寐たし籠枕　同（草[illegible]笛）

綿入れぬ夜寒の伴やきりぎりす　同（山琴集）

西瓜にも離れて寒しきりぎりす　北枝（干網集）

[illegible]道や零餘子煮る夜のきりぎりす　同（北枝發句集）

塚に添うて年寄る聲やきりぎりす　野坡（野坡吟艸）

[illegible]

藥研押す宿の寐時やきりぎりす　同（[illegible]）

きり〲す鳴や案山子の袖の内　智月尼（薦獅子集）
年寄れば聲はかるゝぞきり〲す　同（炭俵）
種麻を鳴て廻るやきり〲す　荻人（續有磯海）
生わたす野松の裾やきり〲す　同（そこの花）
きり〲すそれがすきなか篠の露　助然（初便）
きり〲す草に雨ふる夜明かな　同（續山彦）
きり〲す櫻の紅葉皆散りて　爲竹（あめ子）
薪部屋のつゞくり前やきり〲す　同（壽むしろ）
背戸の畑茄子黄ばみてきり〲す　旦藁（春の日）
きり〲す燈臺消て鳴にけり　素秋（曠野）
引負けて草に首ありきり〲す　乙州（あめ子）
灰汁桶の雫やみけりきり〲す　凡兆（猿蓑）
桶の輪や切れて鳴やむきり〲す　呂房（同）
露の聲に[illegible]りけりきり〲す　禧道（己が光）
きり〲す竹の瓦や普請前　車庸（同）
小割する竈の前やきり〲す　里東（同）
きり〲すさあ捕まへたはあなたんた　惟然（きれ〲）
物の葉もやゝ落つ頃ぞきり〲す　習口（同）
零余子とる袖も露けしきり〲す　四睡（東西夜話）
物足らぬ折にふれてやきり〲す　除風（西華集）
此頃は紙帳も寐よしきり〲す　牧童（柿表紙）
螢ほどな灯を鳴消すやきり〲す　如行（三河小町）
簀戸たてゝ[illegible]も啼せむきり〲す　浪化（草苅笛）
寐るかたの壁に來て鳴けきり〲す　紫白女（春鹿集）
（[illegible]）
墨付し行燈を泣くきり〲す　越人（鵲尾冠）
織物の糸ぬく音やきり〲す　りん女（北國曲）
秋も早やちよ〱と句を切るきり〲す　千那（鎌倉海道）
縫物に摑みそへけりきり〲す　紫貞女（玉藻集）
きり〲す鳴や最上の下り舟　桃隣（古太白堂句選）
夜や晝や朝寐の床のきり〲す　土芳（蓑蟲庵集）
曉や灰の中よりきり〲す　淡々（淡々句集）
よく聞けば案山子啼けりきり〲す　也有（蘿葉集）
月の夜や石に出て啼くきり〲す　千代尼（千代尼句集）
脱捨し笠盾に啼やきり〲す　同（同）
雪降れば鹿の寄る戸やきり〲す　太祇（太祇句選）
灯の届かぬ庫裏やきり〲す　同（同）
片足は踏止まるやきり〲す　同（太祇句選後篇）

鳴行くやちんば引き／＼きり／＼す　同　（同）
逃しなに足ばし折るなきり／＼す　同　（同）
今掃きし箒の中のきり／＼す　同　（同）
妻や無き嗄（シハガ）れ聲のきり／＼す　同　（同）
今日迄はまめで鳴たよきり／＼す　同　（同）
最一つの連はどうしたきり／＼す　同　（同）
我足を草と思ふかきり／＼す　同　（同）
あてがつて置くぞ其藪きり／＼す　同　（同）
飛ぶ氣かや髭をかつぎてきり／＼す　同　（同）
白露の玉ふんがきなきり／＼す　同　（同）
寐返りをするぞそこのけきり／＼す　同　（同）
下冷や臼の中にてきり／＼す　同　（同）
きり／＼す案山子の腹で鳴にけり　同　（一茶句帖）
齒ぎしみの拍子取るなりきり／＼す　同　（同）
錢箱の穴より出たりきり／＼す　同　（同）
きり／＼す身を賣られてぞ鳴にけり　同　（同）
きり／＼すきり／＼仕廻へ寒い雨　同　（九番日記）
放ちやる手を齧（カジ）りけりきり／＼す　同　（一茶新集）
藪むらや燈籠の中にきり／＼す　同　（一茶發句集）
きり／＼す聲が若いぞ／＼と　同　（同）
手をさへる草に響くやきり／＼す　梅室　（梅室家集）
隣なき夜とは成けりきり／＼す　蒼虬　（蒼虬翁發句集）
行燈に寄る隙出來てきり／＼す　同　（同）
腹撫てゝ寐る宵々やきり／＼す　同　（同）
とり出す納戸のものやきり／＼す　虚子　（虚子句集）
秋風の寒むや小さききり／＼す　青々　（[illegible]）

參考　きりぎりす Gampsocleis buergeri DE HAAN. はたおりむし、ぎす、ぎつちよ。「きりぎりす鳴くや霜夜の」云々の歌によまれた「きりぎりす」はこほろぎであつて、主として夜間鳴く今日のきりぎりすを指したものではない。翅端までの體長四十八ミリ。チヨンギースと鳴く。體色が綠色のものと褐色のものとがある。本邦に普通な種類。

やぶきり Tettigonia orientalis UVAROV. は、きりぎりすと同樣にチヨンギースと鳴き、形も似てゐるが、翅が著しく長い點で識別される。翅端までの體長は五十ミリに達する。これも我國に普通な鳴蟲。

馬追（うまおひ）（初）　すいつちよ　すいと

古書校註　【篗纑輪】七月〔くだまき〕江東の俗すいとといふ。その聲「スウイトン」と

いふが如し。いなごに似て小也。色純青、尻に鎗あるより、又無きもの有り。蟬蟬と異なり、中元の時節夜盛んに鳴く、その聲紡車を捲くが如し。關東の方言馬追といふ。是また莎鷄の種類にして、大小聲のあや少しづゝ異なるものなり。

【形態習性】直翅類螽斯科に屬する一昆蟲、形螽斯に似草色の清潔たる姿形なり。體長七分、翅は身體より遙かに長し。初めチーッと云ひ、次にスヰーンチョン、スヰーンチョンと鳴く。其高調に達したる際は高く澄み渡り、幾分顫ひを帶ぶ。其聲恰も馬子の馬を追ふに似たるを以て、其名を得たりと云ふ。夜燈火を慕ひて屋内に入り來り、窓・障子・蚊帳などにとまりて、鳴くこと珍しからず。（[illegible]蟲）

【例句】
馬追　馬追の鳴きつゝにじるつゝましさ　白雲鄉（倦鳥）

【學名】うまおひむし Hexacentrus japonicus KARNY. するとすゐつちよ。淡青色、翅端までの體長三十六ミリに達す。前翅は雄は甚だ大にして、その中央部極めて幅廣し。鳴聲はスヰッチョ。我國に廣く分布す。

轡蟲（くつわむし）（初）　絡緯（くつわむし）　聒聒兒（くわつくわつじ）　紡績娘（ばうせきぢやう）　がちやがちや

【古書校註】【年浪草】七月、絡蟲。和漢三才圖會に曰、絡蟲は俗字、正字未詳。按ずるに此蟲は莎雞の類、[illegible]青、腹黃色、前脚長く、能く走り、跳躍に穴に出入す、故に[illegible]と云、夜鳴く、聲馬の轡の音に似たり、因て以て之を名づく。蓋、松蟲・鈴蟲・[illegible]蟲等は世に之を賞す、而るに本草に之を載せず、唯羅山文集に云、一蟲有り跳す、大さ[illegible]もなし、誰か知らん螽斯是蒲萄なる事を、恰も[illegible]に附て來るに似たり、但日暉にありて尾にあらずと。

【形態習性】直翅類螽斯科に屬する昆蟲、體は蟬よりやゝ大きく、色は綠褐の二種あり。觸角は絲狀をなし甚だ長く、前翅に透明なる發音器あり。鳴き聲轡の音の如く、ガチヤ／＼と聞ゆ。

其鳴き聲の騷々しきより聒聒兒（くわつ／＼じ）紡績娘などの異名あり。淸少納言も「[illegible]はいとむつかしう秋の蟲といはゞ轡蟲などに似てうたてけぢかく聞かまほしからず」と云へり。栗氏蟲譜に「その盛に啼く時、翼を動し、薄暮より夜中索々として聲をなす事連綿として不止。極めてかまびすし、因て唐山の人聒聒兒と云ふ」と記せり。然れども筆者往年九州大隅の山中に日を暮らし、遠き里の灯を望みつゝ山麓の經を辿る時、此蟲行けども／＼路邊に鳴

き立て、旅愁を慰へしめし事あり。此時ばかりは騷々しとはつゆ思はず、しみ〴〵と靜かにきゝたり。參照 蟲(シム)

【例句】

轡蟲

我がちにいとゞはいとゞ轡蟲　　乙州（猿丸宮集）
煙草切る隣合せや轡蟲　　素覽（砂川）
逢坂で聞ばや駒の轡蟲　　支考（射水川）
御明の消て夜寒や轡蟲　　探志（芭蕉翁諧諧集）
城内に踏まぬ庭あり轡蟲　　太祇（太祇句選）
騷がしき露の栖や轡蟲　　同（太祇句選後篇）
轡蟲いつか果敢なき霜の聲　　曉臺（曉臺句集）

草庵即興

一夜々々がちや〳〵近くやかましく　　子規（子規全集）
寺跡の夜の草むらや轡蟲　　非木（懸葵）
草市の果たる門や轡蟲　　杏花（俳星）

【參考】くつわむし Mecopoda nipponensis ZAUSSURE. がちやがちや。綠色のものと褐色のものとがある。頭端から翅端までの長さ七十ミリに達する大形の昆蟲で、八月中旬から現はれる。鳴聲は强大で、それに依つてがちやがちやと稱せられる。我國に廣く分布す。

機織蟲(はたおりむし)（初）　はたおり　絡線蟲(らくせんちう)　莎鷄(しやけい)

【古書校註】

【蒹葭輪】九月（はたおり）六月の中より鳴き初めて、七月半頃まで野叢の中晝盛んに鳴く。その聲ギイイスといふが如し。一二聲の內にチヨンと音打す。俗是を蛬(キリギリス)と云ひて小籠に入れ、市に賣りて小兒の翫とす。その形いなごに似て大也。是はたおり也。ギイゝといふは機躡（一）の音、チヨンは筬(ヲサ)打つ音也。又ぎすともいへり。續猿蓑、夏の附合に「砂を[illegible]ふいばらの中のぎすの聲」（二）といふ句あり。莎雞・絡緯・絡緯の字を書き、はたおりと訓す。

【年浪草】七月○和漢三才圖會に曰、螽斯(ハタヲリ)・斯螽・蚱蜢、和名波多於里。按に螽斯長さ二寸許、靑色、尖りたる首長き脚に毛有り。露はなる眼、その間甚長くして眼の側に二の硬き髭あり。小兒戲れに兩足を捕へて曰、汝機を織る、當放去と云へば則ち股を屈めて俯し仰ぐ、狀織を織るに似たり、故に名く。

註（一）まねき 機の一部の名にて足の大指にて踏み、綜を上下せしむる具（二）芭蕉の句。

【[illegible]】直翅類螽蟖科の昆蟲。形蝗に似て稍大なり。體色綠又は褐色にて長き觸角を有す。雄は前翅に發聲器を具へ、多く原野に棲み夏季より初秋まで鳴く。其聲キイトス、チヨンと聞ゆ。卽ち其音に從ひてきり[illegible]すと云ひ略してぎすと云ふ。又機を織る如くなるを以て機織蟲とも名く。

【補註】昔はきりぎりすは蟋蟀の一種なり、即ち當夜つゞりさせよと
いひ、つゞれさせといへるが如き、然れども今日云ふ螽斯（キリギリス）
に類の園まで鳴きつゞくものにあらず。夏の土用頃より初秋にかけて、晝
間叢中に在て盛んに鳴くものなり。古來俗之を飼養すれば瘦むし（小兒
病）の呪禁なりとするも籠に入れ鳴く之を飼ひて、一種[illegible]の臺に上げ
ての響きは、その音きりともせぬ馬追と、砂を這ふ蟲の中に、[illegible]としあり。
編者は寧ろ夏季に之を入るゝを妥當なりと思惟するも、暫く古來の例に從
ひ初秋の部に入る。【例句】蟲一　蟋蟀」　蕪村

【例句】
はたおり

はたおりや壁に來て鳴く夜は月夜　鳳　[illegible]（[illegible]）
はたおりや寐ぬ宵宵を誇る時　也有（[illegible]）
はたおりや夜なべする灯を取に來る　同（同）
其窓にそれ〳〵蟲も機織るな　一茶（七番日記）

稻舂蟲（いねつきむし）

（初）米搗蟲（こめつきむし）　米搗ばつた（こめつき）　叩頭蟲（ぬかづきむし）　こめふみ

【古書校註】【篗纑輪】七月「稻つき」一名ねぎ、關東の方言ばつた。至つて青き蟲、形・脚ともに長く、首・口尖り、首の形さながら禰宜の烏帽子を着たるが如し。（一）足を持ちてさゝぐればよくぬかづく。稻をつくが如し。但し聲なし。江東の兒童之をはおりといふは非也。古く蠜蚸の字を以てねぎ、稻つきと訓す。又蟋蟀・螇蚸等の字いねつき・こまろと訓す。皆同類小異なり。

註（一）ネギの稱こゝに出づるなり。

【季題解説】螽斯の一種、體稍小く一寸許り、青色の尖りたる首、兩眼の間廣し、社人の立烏帽子を着たる狀に似たるを以て、俗に禰宜と云ふ。捕へて兩後脚を持てば或は起き、或は屈みて稻を舂く形に似たり。故に稻つきと米搗きばつたとも云ふ。【參照】蟿螽、

【參考】しやうりやうばつた Acrida pata MOTSCHULSKY. いなつきむし・こめつきばつた。翅端までの體長九十ミリに達する大形のばつた。體色は綠色のものも、灰褐色のものもある。頭部甚だ長く、圓錐狀に突出す。後肢が甚だ細く長い。日本及び支那に分布す。

蟿螽（はたはた）

（初）螇蚸（いなご）　飛蝗（ひくわう）　ばつた　はたた　ばた　きちきちばつた　と
のさまばつた　おんぶばつた　かはらばつた　いぼばつた

【古書校註】【年浪草】七月「蟿螽（ハタハタ）」螇蚸。俗に云波太波太。按に蟿螽は即ち蟲螽（イナゴ）の屬

長さ三四寸、身甚痩せて方なる首、兩額に眼あり、目の上に二髭あり、翅赤色、黒點あり。腹下白く善く跳ねて捕へ難し。

季題解説 直翅類に屬する昆蟲。蝗科中、蝗を除ける多數のものゝ總稱、我國に産するもの四十餘種をり。身は痩せて方なる首、兩額に眼あり、口は咀嚼に適し、觸角は絲狀をたして短く、前翅は狹長に後翅は幅廣けれど、縦に疊むを得。後肢は發達して跳躍に適す。幼蟲・成蟲共に植物の葉を食し、農作物の害蟲なり。
種類頗る多し、前掲傍題の他にも殿様ばつた・精靈ばつた・東ばつた・瓦ばつた・土ばつた等あり。〔參照〕稻作蟲[illegible]

例句

蝗　はた〳〵のはたと入り來る葎哉　四睡（卯辰集）
はた〳〵に若き女の細みかな　青々（倦鳥）
はた〳〵の飛びし鰯の莚かな　歩牛（懸葵）
ばつた　はつた蟲ばたり〳〵が一藪か　一茶（一茶句帖）
はたはたわぎもが肩を越え行けり　誓子（ホトトギス）

參考 ばつた・はたはた・はたた・ばた。種類甚だ多く、「しやうりやうばつた」、「いなご」等これに屬す。この外に普通のものを擧ぐれば左の如し。

きちきちばつた (Gelastorrhinus bicolor DE HAAN.)「しやうりやうばつた」に似て、體が細長いが翅端までの體長は六十ミリに達しない。東京以南に産し、飛翔する時、キチキチと發音するためこの名がある。大抵黄綠であるが、背面が紅褐色を呈するものもある。

とのさまばつた Locusta danica LINNE. 世界に廣く分布す。後肢脛節は紅色を呈し、深綠又は黒褐色の體色と著しい對照をなしてゐる。前翅は細長く、翅端までの體長六十五ミリに達す。

おんぶばつた Atractomorpha bedeli BOLIVAR. きちきちばつたに似て小形、淡綠色を呈し雌は大であるが、雄は甚だ小で、雌の背上に在ることが多いので、かやうに名づける。我國に普通である。

かはらはつた Sphingonotus japonicus DE SAUSSURE. 河原に産するはつたの意。我國に廣く分布す。とのさまばつたに似てゐるが後肢脛節が淡藍色で、幅廣い二帶の黄環があること、前肢が暗黒色で藍色を帶び、これに灰色の大横帶が走つてゐること等で區別される。

いぼばつた Trilophidia velnerata DE HAAN. 我國の草原又は道路に普通な小形のばつたで、灰褐又は黒褐色。前胸の背面に疣狀の突起がある。後翅基部は黄綠色。翅端までの體長約二十五ミリ。

そこら内言合せてや飛ぶ螽　乙二（松窓乙二發句集）
袂から稲輪の田井の螽かな　巣兆（曾波可理）
鞍壺に三つ四つ六つ螽かな　一茶（一茶句帖）
鎌の刃をくゞり巧者の螽哉　同（七番日記）
螽等が飛ぶぞ世がよい〳〵と　同（一茶句帖）
慰みに螽の泳ぐ湖水かな　同（同　）
したゝかに人を蹴てとぶ螽哉　同（九番日記）
洪水に運の強さよとぶ螽　同（一茶新集）
九月盡
あれ程の螽も一つ二つかな　同（同　）
十里行く舟に飛こむ螽かな　梅室（梅室家集）
稲刈りてにぶくなりたる螽かな　子規（子規句集）
暮の野や蝗のとびて音たつる　竹兜（穗　麥）

【参考】いなむし・いなご、稲などを食害する蟲。翅が尾端よりも長いのを、はねながいなご Oxya velox Fabricius と云ひ、尾端まで達しないのを、こばねいなご Oxya japonica Willemse と云ふ。その習性は兩者とも相同じい。我國に廣く分布し、人畜の食用に供す。

浮塵子（うんか）（三秋）

ぬかばへ　あはむし　よこばひ　せじろうんか　ひめとびうんか　とびいろうんか

【季題解説】小さき飛蟲。身黒く翅白く、首に槊あり。簷下に群り飛び、一上一下舂く狀の如く、或はめぐりて碓（からうす）をひくが如し　天陰れば殊に河邊に群る。遠く望めば雲霞の如し。口器は管狀の吻（フン）をなし、之を葉中に挿入して汁液を吸ひ、枯死せしむ。稲の大害蟲なり。【参照】人事－蟲送（ムシオクリ）

【参考】うんか・ぬかばへ。稲及び其他の禾本科植物の害蟲、體長三乃至五ミリ。籾の如き形をなす。種類が數多ある。著名のものを左に掲げる。
せじろうんか　Sogata furcifera Horváth. 翅端までの體長四ミリ半。體は概ね淡黄色又は黄白色で黒斑がある。北海道から臺灣まで廣く分布し、シベリア・南歐・印度等にも産す。稲の害蟲。
ひめとびうんか　Delphacodes striatella Fallén. 稲の縞葉枯病の媒介をする。我國に廣く分布し、シベリア・歐洲にも産す。
とびいろうんか　Nilaparvata oryzae Matsumura 翅端までの體長五ミリ。體はほゞ褐色。本州及びその以南に廣く分布し、稲の主なる害蟲の一である。

稲蟲（いなむし）（初）

稲子麿（いなごまろ）

【季題解説】稲を害する昆蟲の總稱。又稲子麿のことゝも云ふ。稲子麿は

蝗(ハタハタ)斯に似て背尖り、兩角並べ、雌は長さ一寸雄は三四寸に及べ、色は緑色なると褐色なるとあり、飛ぶ時は内羽黄にして美し、【[illegible]】蝗十八種　螽迸(ホシンタ)

例句

稻蟲　月よしと小梛(コナギ)をのぼるいなご丸　曉臺（曉臺句集）

蟷螂(カマキリ)

（三秋）鎌切　斧蟲　たうらう　いぼむしり　おほかまきり　はらびろかまきり　へとりむし　こかまきり

古書校註

【箋注倭名】七月「いぼしり」蟷螂也　いぼしりはいぼむしりの略也　その性甚だ憤怒る。胸の赤きは憤怒の猶火也。斧を以て隆車に向ふといふも則ち憤怒也。此の蟲卵生也。

【年浪草】七月○時珍が曰、其臂斧の如く轍に當りて避けず、故に當郎の名を得たり。又[illegible]眼、首を擧げ臂を奮ふ。修頸にして大腹二手四足、善く緣うて捷か也。[illegible]を以て鼻に代ふ。人の髮を食ひよく葉を翳して蟬を捕ふ。（中略）螵蛸は蟷螂の卵也。（中略）今人疣を病む者往々蟷螂を捕へて之を食はしむ。

註（一）修は長なり、頭の長き也　（二）イホムシリの名こゝに出づ

本草解說

直翅類に屬する昆蟲、身細長く、頭小く、三角にして上に觸角あり、前胸は長く、腹部は肥大し、前肢は鎌狀をなして他の昆蟲を捕ふるに適す。いぼむしり又いひぼむしり（疣毟）音便にていぼうじり、略していぼしり、いぼむし、いぼくひ、何れも蟷螂の古名にて、疣を除く意、東璧本草には此蟲疣を食ふと記せり。

おほぢがふぐり（螵蛸）　秋深き頃、樹の枝に此蟲卵の巢を作る、始め唾液を吐きかけたるが如く、後次第に堅く凝りて黑褐色となり、鉄の如き小塊となる、之をおほぢがふぐりと云ふ。

此蟲の習性として交尾の後、雌は雄を喰ふといふ。斧蟲・かまきつちよ・かまむし・かまきりちやうらい等異名頗る多し。【[illegible]】夏・蟷螂生る[illegible]

例句

[illegible]

武術修行する人に

蟷螂の鎌を立るも力味とや　鬼貫（七車）

蟷螂や露引きこぼす萩の枝　北枝（卯辰集）

蟷螂のほむらは胸の赤み哉　史邦（[illegible]談集）

蟷螂や裾はらふ手に縋りつく　十丈（續有磯海）

蟷螂が片手かけたり釣鐘に　一茶（七番日記）

蟷螂が態々罷出候　同（同　）

蟷螂よ五分の魂是見よと　同（おらが春）

共分にならぬ〳〵と蟷螂哉　　一茶（一茶發句集）
夕榮に草の蟷螂からみつく　　別天樓（雁來紅）
首曲げて後ろ見つむるいぼむしり　　涌谷（寒菊）

參考　かまきり・いぼくひ・いぼじりむし・いぼうじ・いもじり・いぼむし・はへとりむし。

かまきり　Paratenodora aridifolia Stoll. 最も普通な種、大形で、褐色又は綠色を呈す。樹枝に垂下したやうに卵塊を産みつける。最初は泡狀であるが、後になると、外被は極めて硬くなり、灰褐色である。

こかまきり　Statilia maculata Thunberg. 中形で、灰褐又は暗褐色の地色に黑褐色の不規則な斑點がある。我國に廣く分布し、卵塊を雜草の根元又は石垣などに産みつける。

はらびろかまきり　Hierodula patellifera Serville. 體長七十ミリに達するが、體幅が比較的大である。我國に普通な綠色のかまきりである。

螻蛄鳴く（三秋）　おけら　しやうらいむし

季題解說　直翅類に屬する昆蟲、常に土中に棲み、體長一寸許にして、暗褐色を呈し、硬化せる前翅と短小なる後翅とを有す。雄はよく鳴く。古來此蟲の鳴くを蚯蚓鳴くと誤まれりと云ふ。　**參照**　蚯蚓鳴く　夏―螻蛄

蚯蚓鳴く（三秋）　歌女鳴く

古書校註　【年浪草】三秋。時珍曰、東方虬の賦に云、その鳴く事長吟す、故に歌女といふ。孟夏始めて出で仲冬蟄結す。雨ふる時は先づ出で晴るゝ時は夜鳴く。或は云ふ、結ぶ時はよく化して百合となる、阜螽と穴を同うして雌雄となると。

季題解說　夜間或は雨又は曇り日などにジーッと切れ目なく、綿々として長く鳴くを古來蚯蚓の鳴くとせしが、現今の學者は蚯蚓には發聲器を有せず鳴くものに非ず。螻蛄の鳴くを誤れるものなりとせり　「嬉遊笑覽」には「みゝずは鳴くものにあらず、土中にて鳴くは螻蛄なりといへど是はおぼつかなし、鳴く處を尋ねしが螻蛄は見えず、猶みゝずなるべし」と云ひて半信半疑なるか　「梅園日記」は「或人これを驗めしゝに蚯蚓は鳴かず、螻蛄の鳴くにぞありけるとかや」と云へり。蚯蚓の鳴くと云ふは支那傳來の事なり、古今註に「善長吟於地中、江東謂之歌女」など云へり。それよりして、日本にても蚯蚓を歌女と稱し、又白拍子其他聲業を業とする者など、美聲となるとて此蟲を煎じて服用するもの今昨猶稀ならず。　**參照**　螻蛄鳴く　夏―蚯蚓出づ

まるちやたて Neopsocus unipunctatus Müller. 本州及び北海道に普通に見られる。歐洲にも分布す。體長四ミリ、雌は無翅であるが、雄には翅があり、その長さ五ミリ。

放屁蟲（へひりむし）（初）

へこき蟲（むし） 行夜（ぎやうや） 氣蟲（きむし） みゐでらはんめう

季題解説 鞘翅類に屬する昆蟲。體長八分許、腹部は長方形をなし、全身黄色にして、翅に二個の黒斑あり、觸角は長くして、絲狀を爲す。夏秋の間、陰天晩間に出でゝ、地上を行くこと速し、危難に出遇へば、肛門より刺戟性にして異臭ある黄色の瓦斯を放つ。

例句

放屁蟲

屁ひり蟲爺が垣根と知られけり　一茶（七番日記）
屁ひり蟲人になすつた面つきぞ　同（同　）
蟲の屁を指して笑ひ佛哉　同（おらが春）
おれよりは途上手よ屁ひり蟲　同（一茶句帖）
屁をひつてしやあ〳〵として垣の蟲　同（同　）

へこき蟲

此秋も鳴そこなふて屁こき蟲　乙州（俳諧勸進牒）

參考 へひりむし・へこきむし・みいでらごみむし・みいでらはんめう Pheropsophus jessoensis Morawitz. 食肉性の昆蟲、體長十九ミリに達す。黄色及び黒色の混じた體色をして居り、本州から九州まで廣く分布してゐる。敵に襲はれると、肛門の近くに開口する一對の肛門腺から、腐蝕性ある瓦斯を、爆發音と共に放出する。この瓦斯が人間の皮膚につくと、赤褐色の汚點を殘し、洗つても容易に落ちない。

菊吸蟲（きくすひむし）（初）

きくすひ　きくすひかみきり　菊虎（きくとら）　菊牛（きくうし）　菊蟷（きくまくた）

季題解説 菊の害蟲にして、大さ二分許、蟲に似て細長く、體黒色にして、頭に赤き一粒の斑點あり。菊の柔軟なる莖を切り廻し、其咬み疵の處に産卵す。菊の梢の萎み折るゝを見るは此蟲の所爲なり。

實作注意 從來此蟲を秋季に入れたるは菊が秋季なるに因りたるへけんも、實は此蟲の活動するは五月六月の頃なれば、寧ろ夏季に編入するを至當なりと思惟するも、暫く古來の例に從ひ置く。〔參照〕植物　菊

參考 きくすひむし・きくすひ・きくすひかみきり。菊吸・菊虎・菊牛。Phytoecia rufiventris Gautier. 幼蟲は菊科植物を穿孔して食害する。成蟲は體長九ミリ、概ね黒色で、體表に黒く長い毛が疎に生へてゐるが、前胸部背面中央に顯著な橙赤色の斑點がある。體は他の天牛（かみきり）と同樣に細長く、觸角は體長とほゞ同長である。本州から九州まで分布し、

蓑蟲や秋ひだるしと鳴なめり　蕪村（蕪村句集）

蓑蟲や笠置の寺の麁朶の中　同（蕪村遺稿）

亡母三回忌

蓑蟲の夏に喪籠る思ひ哉　曉臺（曉臺句集）

[illegible]

蓑蟲を撃つ事勿れ落葉掻　同（同　）

[illegible]門の[illegible]にて

簑蟲の鬼の子も見ぬ九條哉　闌更（半化坊發句集）

簑蟲よ鳴かでも秋の姿かな　白雄（白雄句集）

簑蟲よ甘露降れりと人は言ふ　成美（成美家集）

もたいなや蟲も簑着て稼ぐ世に　一茶（一茶句帖）

簑蟲の父よと鳴きて母もなし　虚子（虚子句集）

蓑蟲に日ははなやかや笠置山　素史（素十句集）

だまされても蓑蟲父を戀ひにけり　青々（[illegible]）

【動物學考】　みのむし・おにのこ・ごみむし・みなしご。樹皮を綴り合せて細長き筒を作り、この中に體を容しつゝ、樹上を移動し、木葉を食ふ。體長十五ミリ、胸部の皮膚は著しく硬化してゐる。蓑の長さは約二十五ミリ。この中で遂に蛹となり、終りに羽化して「みのむしが」又は「みのが」と稱へる蛾となる。此體も翅も暗褐色を呈す。學名 Canephora asiatica STAUDINGER 北海道から九州まで分布し、中部アジアにも産する。ちやみのが（Cryptothelea minuscula BUTLER）は分布の範圍もほゞ同樣であるが、雌は翅がなく、羽化せず終生蓑の中に生活してゐる。臺灣に産する、おほみのが（Cryptothelea formosicola STRAND）の雌も同樣である。

刺蟲（初）　蛅蟖

【季題解說】　毛蟲の一種。梅・林檎・桑等に棲みて、葉を食ふ。長さ七八分形扁く、色黃黑にして、毛處々に集りて生じ、人を刺す。其巢を「すゞめのたご」と云ふ。［參照］雀擔桶　夏―毛蟲

樵蟲（初）

【季題解說】　毛蟲の一種。蓑蟲に同じとも云ふ（古語）。「[illegible]いかなりし世々のむくいぞ木こりむし身にあふほども宿のはかなさ」［[illegible]］夏―毛蟲

芋蟲（初）　[illegible]とこよむし

【古書校註】　【[illegible]草】七月、大[illegible]、又蓁の花にも此蟲を生ず。薯蕷に生ずるは大なる拇指の如[illegible]、[illegible]四寸あり、此蟲をいふ。青色又褐色あり。後に

化して鳳蝶（アゲハ）となる。

注（一）和漢三才圖會には「[illegible]をキクヒムシ、蛹をハクヒムシ、又芋蟲とす。なほ[illegible]には「芋の葉を喰ふ、俗呼んで芋蟲とす云々」といへり。

季題解説　芋の葉に生ずる蟲、形蠶に似て大さ一二寸より三四寸に至る。色は綠・黒・褐など數種あり。後に變化して、鳳蝶（あげは）となつてとぶ[illegible]。

例句

芋蟲

芋蟲の喰ひ肥けり丸裸　乙州（西の雲）

芋蟲は芋の戰ぎに見えにけり　太祇（太祇句選後編）

芋蟲やのちの揚羽は知らなくに　靑々（倦鳥）

針金蟲（はりがねむし）（初）　線蟲（せんむし）　あしまとひ

季題解説　圓蟲類に屬する蠕形動物。絲の如く纎長、長さ一二尺淡黒色を呈す。幼蟲は蟷螂其他の昆蟲又は鳥の腸内に寄生し水中に出でゝ老成す。

參考　針金蟲・あしまとひ、針金蟲科（Gordius aquaticus LINNÉ）圓形動物門、線蟲綱に屬す。幼時昆蟲の體内に入りて、袋囊狀態となつてゐる時、かまきり其他の大形昆蟲に食はれると、その體内で成長して、長さ九十センチ、幅一ミリの、黒褐色の成蟲となる。この針金蟲が、かまきりの體から脱出せんとしつゝある時、これを「あしまとひ」と云ふ。脱出したる針金蟲は、最早寄生生活を營まず、水中にて自由生活をなす。

雀擔桶（すゞめのたご）（晩）　雀甕（すゞめのかめ）　雀の壺（つぼ）　雀の枕（まくら）

季題解説　貼蟖（いらむし）の繭なり。秋の末、樹の枝に作る。始め白色にして乳汁の如く、後凝りて卵殼の如く堅し。大さ五六分、淡黒色にして堅に白紋あり。

實作注意　雀甕・雀の壺・雀の枕とも云ふ。雀は好みて中の蛹を食ふ。古く は藥用に供す。春の末殼を破りて、褐色の蛾に化して飛去る。〔參考〕刺蟲〔[illegible]〕

蛇穴（へびあな）に入（い）る（中）　秋（あき）の蛇（へび）

古書校註

【滑稽雜話】八月ニ和俗八月の雷を蟲入と稱し、諸蟲蟄す、蛇類亦然り。多く時正を以て候とせり

【年浪草】八月〇月令に曰、仲秋之月、雷始收レ聲、蟄虫坏レ戸。〇山海經に曰、蛇蟄することを冬を以てす、又春夏を以て晝とし、秋冬を以て夜となす。〇時珍が曰、春出で冬蟄す云々、和俗に春の彼岸に出で秋の彼岸に入る。

季題解説　春の彼岸に穴を出で、秋の彼岸に穴に入り、冬籠りをなす。「月令ニ仲秋の月、雷始めて聲を收め、蟄蟲戸を坏す。注坏は其蟄穴の戸を益して通明の處をして稍小ならしめ、寒の甚しきに至て乃ち之を埋み塞ぐ。」

【實作注意】 彼岸過ぎてなほ穴に入らざる蛇を「穴まどひ」など云へる事あり。さる光景を句にするは可なれども、之を以て季題となすこと心得かたし。

【參照】 春・蛇穴を出づ（ヘビアナイヅ）

【例句】

蛇穴に入

世の中を這入かねてや蛇の穴　惟然（[illegible]）

それ〳〵に片付顏や蛇の穴　浪化（浪化上人發句集）

蛇も入る穴は持つなり鈍太郎　一茶（一茶句帖）

菩陀落や蛇も御法の穴に入る　同（同）

德本の御杖の穴や蛇も入る　同（同）

それなりに成佛いたせ穴の蛇　同（同）

蛇入るなそこは邪見の人の穴　同（同）

野良の蛇入るや鼠の明穴に　同（同）

五蛇穴に一蛇泣く夜の風悲し　子規（子規句集）

蛇穴に入る時曼珠沙華赤し　同（同）

草を打ち蛇をして穴に入らしめぬ　露月（露月句集）

其糞奇也蛇穴に入らんとす　同（同）

蛇穴に入りて女の胸やすし　青々（妻木）

藻に住む蟲の音に鳴く（三秋）　われから

【古書校註】

【御傘】 藻に住む蟲は雜也、水邊なり。

【增山の井】 七月（藻に住む蟲の鳴く）我からは雜也。なくといへば秋也。

【季題解說】 秋海中の藻に棲みて鳴くとの云傳へあり、「蜑のかる藻にすむ蟲のわれからとねをこそ鳴かめ世をばうらみじ。古今」其他古來和歌に多く詠まれしも、近時鳴く蟲にあらずとの說あり。「われから」は、割殼の義にて乾くに隨ひてその體の割るゝよりいふとぞ」四肢類に屬する節足動物、海藻の間などに棲み、體瘦せて長く、大なるも一寸內外、胸部その大部分を占め、肢は鉤狀をなし、その第四對と第五對とは極めて小なるを常とし、或は缺けることとあり。

【例句】

藻に住む蟲の音に鳴く

折々や藻になく蟲の聲沈む　蘭更（蘭五子[illegible]）

藻に蟲の啼や入江の夕日影　文泉（類題發句集）

秋の魚（三秋）

【季題解說】 秋のいろ〳〵の魚を云ふ。

【例句】

秋の魚

手の水に尾を振る秋の小魚哉　野坡（野坡吟草）

鰍（三秋）　川鰍　石伏　石斑魚　川おこぜ　ぐづ　霰魚　鰍突く（人）

【古書校註】

【篗纑輪】八月。〔かじか〕石斑魚也。種類多し。加茂川にて極小なるをごりと云ふ。京師の茶人賞翫して饗とす。○最多く甚た美味也。又一種いしぶし、是も一寸に滿たず小なり。同じく加茂川及び江東の川々に多し。江州の俗ちんことといひ、或はちゝんかぶりといふ。順の和名抄に鮎と出せるもの是なるべし。ごりよりやゝ鰓少く味輕し。又山谷に有るもの大き三四寸、斑文有りて、形はごり・石ぶしに同じ、秋に至りて夜鳴く。その聲清亮也、よつて俗河鹿と名く、炙り食す、佳品也。予（一）昔旅行に下野の山家に宿り、夜中その聲を聞くに、明朝之を炙り饗す。「かじか鳴くよべのあはれを膳の先」

【年浪草】八月〔黃顙魚〕和漢三才圖會に曰、黃鰭魚・黃鮎・鉄魟、俗に云ふ吾里、一名加之、倭名抄に崔禹錫が食經を載せていふ鮰〔和名〕古。鮰に似て頰に鉤を著くる者也。今賀州の野川多くこれあり、その聲吾里吾里といふが如し。夏秋人聚集して餌を操り、水を掬して吾里と呼べば則ち魚多く掌中に入る。その外處々の谷川にあり。○河鹿鳴く。倭名抄に曰、所々の山谷溪澗に生ず、石間に伏す小魚。一寸に過ぎず、又一種長一二寸斑文有り。その形狀河豚に似て小也。常に山谷に在り五月に至り水に隨つて流れ落つ、その大なる者は夜に至て鳴く、その聲清亮にして愛すべし、土人之を河鹿といふ。

【俳諧歳時記】八月〔鮰〕正字は黃顙魚、杜父魚の屬也。水底に在りて鳴く魚也。故に此の魚を誤りて河鹿と稱す。諸國にあり、伊豫・越前・越後・加賀・近江・山城等に多し、其の土地によりて名も變り、形も聲も大同小異也。石伏・ごり・石くらひ・石もち・又川おこぜ伏・くそなはとんこ伊豫・まる・むこ近江・あられ魚・此の外にも猶あり。近頃山海名產圖繪てふ書に、委しく之を論じたれば茲に略記す。（二）

註（一）わくかせわの操る方竟千〔？〕なり。（二）俳諧多識編にもこれらの事につき一論する所詳し。古来多く鳴く河鹿と魚のかじかと混じ來れるなり。

【動植物解説】　硬鰭類に屬する魚。鯊に似て、長さ四五寸に及び、鱗無く、頭口大きく、色淡黑、常に清流の石間に潛み、水に浮ばず。

【季題考證】　鰍科に屬する種類は甚だ多く、數十に及ぶ。異名方言にて稍著はれたるものを擧ぐれば、鮰・石伏・川おこぜ・からかご・霰魚・いかりいを、いしぐらひ・牛ぬすびと・杜父魚・かこふつ・かごほちそ等、右の內從來の歲時記に採錄されたるは、夏季に「鮰」冬季に「杜父魚」あり。仔細に觀察すれば、多少の差あるが如し。古來鰍につきては異說多し。其は

鮴科に屬する魚の種類の多数に上ることとて、從て地方によりて其呼名異り一層複雑となれること。など其内をなせり。「古、要覧稿」には黄顙魚と同類とせり。又「大和本草」及び「日東魚譜」を引用して鰍が鳴くとなせり。即ち「隨ㇾ水流落、生ㇾ大者至ㇾ夜而鳴、其聲清亮而可ㇾ愛土人謂ㇾ之ㇾ鹿、其味極美」=大和本草「河鹿魚状似ㇾ鰍有ㇾ黒點一長僅二三寸、生ㇾ溪澗川石間ㇾ且暮鳴ㇾ水中吟聲可ㇾ愛云々」=日東魚譜と云へり。魚が鳴くと云ふ事疑はしく、殊に「其聲清亮にして愛すべし」に至ては、蛙の河鹿と混同せるに非ずやと思はる。【參照】夏—鯝リュ 冬—杜父魚カクブツ

【例句】

鰍 あやまりてきぎうおさゆる鰭哉 嵐蘭（猿蓑）

【參考】鰍、鰍科に本邦の河川に廣く分布する魚。大なるは五十センチに達す。はぜ」形の魚で、上面は暗灰色の地色に、黒縞が五つ横走してゐる。下面は白色。Cottus Kazika JORDN & STARKS.

黄顙魚（三秋） ぎゞ きばち ぎばち

【季題解說】黄顙魚は鯰科に屬する魚。體形鯰に似て頭扁く、臀鰭長し。鰭骨硬く且つ鋭尖にして、よく人を刺す。全身鱗を有せず。色褐色に黒斑あり。體長大なるは尺許。淡水に産す。捕へらるゝ時ギゞと鳴く。依て其名あり。

【實作注意】秋出水の時など多く網にかゝり、又投げ釣りの鰻針にかゝりて釣らるゝ事多し。味美ならずとて食はず。地方によりて呼名を異にす。中國にてはぎゞ又はぎん、北國はあいかけ、土佐はぐゞ、丹波はぎゞ又はかけ、伊豫はうつ等。

【參考】ぎぎう・きばち・ぎばつ・ぎぎ。鮠科 Pseudobagrus aurantiacus (TEMMINCK & SCHLEGEL) 關東より九州に至るまで、河川、湖沼に棲み、鯰に似てゐるが、口鬚が四本あること、脊鰭が大きく、その次に脂鰭と稱せられる鰭があり、臀鰭は小で、且つ尾鰭と分離してゐること等で區別される。背鰭及び胸鰭の棘に毒腺があつて、害敵を刺す。

落鮎（中） 錆鮎 澁鮎 秋の鮎 下り鮎 とまり鮎

【古書校註】【御傘】鮎、夏也、若鮎は春也、さび鮎、落鮎は秋也、鮎の子は春也、干鮎、鮎の鮨等は雜也。連に二あり、けにも誹には季をかへ折をかへ三句去るべし。うるか、鮎の腸の名也、雜也。鮎と折を去る也。【滑稽雜談】八月〔澁鮎、又擣鱗〕△今一澁鱗」と稱するも秋衰へてその魚の白浪に赤みを生ず 例へば銀器の錆を發するが如し。又是を「落鮎」或は又「下り鱗」と申す也。秋月衰へて流水に引かれて下る物也。ノ夏は流に溯るものなればこ上り鱗」を以て春に用ふるならし「落鱗」・「下り鱗」

は尤も秋とすべし。

【年浪草】八月〔和漢三才圖會に曰、七・八月長も長さ尺に近し、この時鱗、芥子(カラシ)の如きもの腹に滿つ。その背淡斑の文を生ず、刀刄の鏽たるが如し。故に鏽鱗(サビアユ)といふ。八・九月満つ水草の間に子を生みて後漂消して流に隨ひ下り死す、これ落鮎也。

註 ○俳諧名謎編には鮎は鯰の俗字にてナマヅ、鰷はヤナギバヤなり。但し鮎は古くより用ひ來る文字なれば改め見けず、俳には古與の字を用ひきたりし事を論ぜり。（人事、下り簗の條參照）

季題解説 産卵したる鮎の流に隨うて下るを云ふ。

實作注意 鮎は九月十月の頃産卵す。此時に至れば甚だ衰弱し、背は黑色を加へ、腹部は赭色を帶び、鐵器の錆びたる如し、之をさび鮎とも澁鮎とも云ふ。産卵したる鮎は流れに隨ひ海に下りて多くは斃死するも或は深淵に留つて越年するものもあり。下るものを落鮎とも下り鮎とも云ひ、止りて越年するものをとまり鮎と云ふ。此ふる世は尺餘に達す。落鮎の時期に簗を構へて捕ふるを下り簗と云ふ。**參照** 人事—下り簗(クダリヤナ)　春—若鮎(ワカアユ)　夏—鮎(アユ)

例句

落鮎

石焼や落鮎則ち那須野川　　青水（青水句集）

（行脚　頃題何にて）

奥山の梢や黄ばむ鳴鹿(なるか)鮎　　句空（柞原集）

落鮎の行衞尋ぬる獵師かな　　爲有（東華集）

（山中八景の内、高瀬漁火）

落鮎や一夜高瀬の波の音　　北枝（卯辰集）

鮎落て宮木とゞまる麓かな　　蕪村（蕪村遺稿）

鮎落て焚火ゆかしき宇治の里　　同（同　）

鮎落ていよ〳〵高き尾上かな　　同（蕪村文集）

落鮎や畠も浸たす雨の暮　　几董（井華集）

落鮎や潮の闇に沈むまで　　曉臺（曉臺句集）

落鮎の哀れや一二三の簗　　白雄（白雄句集）

鮎も染まれ草の葉のさび水の澁　　素丸（素丸發句集）

腹見する鮎の弱りや逆落し　　梅室（梅室家集）

一年ぞの鮎も澁びけり鈴鹿川　　鬼貫（鬼貫句選）

哀れ且市立つ鮎の暮の澁　　杉風（[illegible]）

澁鮎

（塔の澤記の内）

水音も鮎澁びけりな山里は　　嵐雪（[illegible]撰集）

澁鮎を炙り過たる山家かな　　几董（井華集）

吉野鮎澁れば澁をはやさるゝ　　一茶（一茶句帖）

さくら葉もちらり〳〵や鮎さびる　　同（九番日記）

人ならば四十盛りぞ鮎さびる　　同（同　）

秋の鮎

見るうちに鮎のさびるや市の雨　梅室（梅室家集）
住つかぬ淀みや頼む秋の鮎　白雪（誹諧曾我）
今は身を水に任すや秋の鮎　几董（井華集）
喰て知る七玉川や鮎の秋　蓼太（蓼太句集）

下り鮎

死ぬ事と知らで下るや瀬々の鮎　去来（續有礒海）
増水や茨にさゝるゝ下り鮎　梅室（梅室家集）

參考　晩秋、鮎の産卵期となれば、雄の體面全部に、無數の微細な、粟粒狀突起を生ずるを以て、手觸りが、粗雑となり、同時に黑色々素細胞が夥しく增加するので、黑味を帶びて來る。雌に於ては主として背面に近き所に粟粒狀突起を生じ、黑色々素細胞の增加を見る。かやうに變じた鮎を、澁鮎、さび鮎などと稱へる。産卵が終れば、大抵の鮎は體力消耗して、川を流れ下つて死ぬ。これが落鮎である。但し、生活條件の好適な鹿兒島、其他の地方では、産卵後、生き延びてゐるものも相當ある。かやうなものでは、一旦生じた粟粒狀突起は脫落し、黑色々素細胞も大部分消失し、再びつやゝかな舊態に復し、最早澁鮎ではなくなる。

落鰻（おちうなぎ）（三秋）　下り鰻（くだりうなぎ）　鰻簗（うなぎやな）（人事）

古書校註【年浪草】三秋〇和漢三才圖會に曰、鰻鱺、此の物冬・春は泥穴に蟄し、五月に至りて游ぎ出づ。此時味勝り四五月子を生ず、纖々して長さ三四寸、性滑かにて利く泥中を潜る。故に捕り難し。江州勢田城州宇治名を得たり。紀事に曰、秋月鰻鱺魚流に從つて下る、是を落鰻鱺といふ。簗を以て之を捕るに、流に從つて簗の中に落入る。故に捕へ易くして魚店多く之を賣る。

季題解說　淡水に棲息せる雌鰻の生殖期（十月乃至一月）に至りて、河川より海に下るを云ふ

實際注意　鰻は其體圓長にして、長大なるものは二三尺以上に達す。皮膚厚く、頗る膠質の粘液に富み、鱗は柔軟なり。口は濶大にして其後角は眼下に達す。體色は平常棲息する場所によりて差違あれども、背部は暗綠色、蒼黑色又は茶褐色にて、體側稍淡く、腹部は純白又は微黃金色を帶ぶ。我が國各地の河川・湖沼に産す。一尾の卵量凡そ五百萬個に達すれども、微細にして且つ透明ならず。其卵巢は多量の脂肪に包まるゝを以て、顯微鏡の力を借ると雖も、之を見ること容易ならず。近年に至るまで、鰻は胎生のものなるべしと稱せられしが、伊國の動物學者グラウ氏等の研究によりて俗に「シラウヲノオバ」と稱するもの、この稚魚なる事を發見せられたり。此稚魚は多く河口に近くして、較深き海底の土中に潜伏し、偶々十二月一月頃河口に群集することあり。その體形較柳葉に似て側扁し、中央に於て高く頭尾に狹く、無色半透明なるを常とし、長二寸五六分あり。一月を經體

長漸く傾斜して倚狀をなし、全體の構造海魚に酷似するに至る。鰻は雌雄其棲息する所を異にし、淡水にあるものは常に雌にして、半鹹水にあるものは雄なり。故に生殖期に至れば、雌魚は群をなして河川等の淡水を去りて海に下る。其時期は概ね十月乃至十一月頃にして、此時期に至れば殆んど攝食せず。主として夜間に移行し、殊に暴風雨の時期に多しと云ふ。此魚は孵卵後一年にして體長三四寸となり、三四月頃雌のみ河川に沿うて溯り、水の中層を溯泳遡行し、多少の障碍あるも更に意とせず、猛進して之を超攀し、適當の場所を求めて棲息す。爾後此處に於て發育し、二年にして一尺以上となり、三年にして一尺二三寸に達す。生長三年位にして其體十分成熟する迄は、決して海に下ることなし。其生殖期に入りて、河川より下るものを落鰻と稱し、簗を構へて之を捕る、之を鰻簗と云ふ。

【例句】鰻簗

晨朝の鐘當にけり鰻簗　石江（田舍の日）

【參考】鰻は生殖腺が成熟に近づくと、河を泳ぎ下つて、深海に至り、こゝで産卵する習性があるので、この時期の鰻を落鰻といふ。日本鰻の産卵場所は、まだ何處であるか明になつてゐないが、「かにくひうなぎ」と稱せられる亞熱帶の種は、フィリッピンと濠洲との中間の深海で産卵することが知れてゐる。鰻は産卵後死するものと思はれてゐる。

紅葉鮒（もみぢぶな）（七）

【季題解説】【毛吹草】【花火草】九月。

【年浪草】九月（和漢三才圖會に曰、鮒（音付、和名布奈）江州湖中の者を第一とす、大なる者は、尺ばかり、世に源五郎鮒と稱す。深秋其の鰭紅に變ず、之を紅葉鮒といふ。時に味最も勝れり。

【參考】鮒の鰭、深秋紅色を帶ぶ、之を紅葉鮒と云ふ。

【例句】紅葉鮒

あらめ橋かゝる所や紅葉鮒　宗因（梅翁宗因發句集）
まな箸の中の間くゞれ紅葉鮒　同（同　）
鹽鮒と何れか動く紅葉鮒　鬼貫（鬼貫句選）
閼伽棚やまた活きて居る紅葉鮒　嵐竹（芭蕉庵小文庫）
杜の日を受けて遊ぶや紅葉鮒　諷水（雪の光）
紅葉鮒是にもおかし錦織寺　嘯山（葎亭句集）

紅鰷（もみぢたなご）（晩）

【季題解説】硬骨類に屬する小魚。體扁平にして、頭部小さく、長さ二寸餘、形鮒に似たり。河川に棲息するを川たなごと稱し、秋に至りて身に紅色を

帶ぶるものあり、之を紅葉鯽と云ふ。紅葉の字によりて秋季とす。

鯔(ぼら)（中）口女(くちめ)　とど　なよし　まくち　はらふと　目白鯔(めじろぼら)　ぎら　おぼこ
鯔(いな)　洲走(すばしり)　小𩸽江鮒(こさらしえぶな)　浪花江鮒(なにはえぶな)　伊勢鯉(いせごひ)　鯔釣(ぼらつり)（人事）　鯔網(ぼらあみ)（人事）

古書校註

【年浪草】三秋「小𩸽江鮒(コサランエフナ)」和漢三才圖會に曰、鯔(ボラ)の小さき者を江鮒と名く、或は名吉(ナヨシ)といひ、或は伊勢鯉といひ、或は口女(クチメ)といひ、又伊奈・洲走・小𩸽江鮒といふ。按に鯔は黑色の名、此の魚黑き故に鯔と名く。其聲誤りて子魚といふ。和名奈興之、俗に保良といふ。日本紀（曰二赤女魚一又曰二口女一）彦火々出見尊失二兄鉤一後至二海神宮一探二赤女(或云二口女一)口一而得レ之、赤女は則ち鯔也。故に鯔を所謂供御に備へざるは此の緣なり。其小さき者三四寸河中にあるを伊奈と名付け、五六寸なる者江中にあるを、畿内に江鮒、關東に洲走と稱す。俗に鮱字を用ふ。三才圖會に所謂撥尾魚是也。八九月稍長じて大さ六七寸、江海之交にあり、此時や泥味なく、脂多くして愈甘美なり。色亦黑減じて漯し洗ふが如し。故に小𩸽江鮒と稱す。冬春尺餘に至る者丹羅と名く。（俗用二鯔字一）鯉に似たるを以て伊勢鯉と稱す。其肚腹肥大なり、故に腹太と稱す。勢州の人名吉と稱す。

動植物註　硬鰭類の魚。淡水に產し、後海に入る。體長く頭大きく、背部蒼色にて腹白し。

實際知識　此魚は成長に從ひて、諸國の稱び名種々なり。初生の一寸位なるをぎら又はをぼこといひ、二寸許りなるを洲走（すばしり）頗る長じたるを鯔（いな）又小𩸽江鮒（こさらしえふな）と云ふ。河海に出で年を經て大なるは鯔（ぼら）なり。秋九月泥臭去り、脂多くなりて味最も佳し。

例句

鯔　ぼら飛べる古き西日の港かな　歩魚（天の川）

鯔釣　鯔釣に田舍祭の遊びかな　竹巴（倦鳥）
串所見

參考　ぼら、ぼら科。當歲のをスバシリ・イナッコ・オボコと云ひ、二歲魚をイナ、三歲以上のをボラといふ。本邦沿岸に普通なのを單にボラと呼び、現今 Mugil cephalus LINNÉ. の學名が當てゝあるが、この學名に當る魚は、地中海に產するもので、明に差異がある故、これに異議を唱へる人がある。長崎及び臺灣に現はれるものは、カラスミボラといひ Mugil japonicus TEMMINCK & SCHLEGEL. の學名が與へられてゐる。普通のボ

ラには成熟したものを見ぬ所からこのカラスミボラが、普通のボラの成熟したものではあるまいかとの考へが發表されてゐる。カラスミはボラの卵巢を鹽漬とし、且つ陰干したものがカラスミである。

初鮭（中）　初鱖　鮭　鮏　鱖　散子　鮭鱒（人）　鮭打（人）　鮭小屋（人）

古書校註　【年浪草】八月〔初鮭〕和漢三才圖會に曰、鮭は俗に鮏の字として魚臭也（一）正字未詳。狀鱒に似て闊く肥大なる者二三尺、背鱗青蒼、腹淺白く肉赤し、細刺あり、脂多く味厚美也。頭軟骨軟にして氷の如し、氷頭と稱す、味亦佳也。その子二胞あり、胞中數千粒連綴にして上に一黒點あり、呼んで鮞といふ、又筋子・甘子といふものあり。○唯鮭とばかりも秋とす。

注（一）鮭はなまぐさいといふ意の漢字。本草にはサケに鮏字を用ひたり。但し新撰字鏡・下學集等古くより鮭字をサケとし用ひ來れり。

季題解說　初鮭とは今年漁獲したる意にて、九月上旬より、河川に溯上し始むる時漁獲せるものを云ふ。鮭は軟鰭類に屬する硬骨魚。淡水・鹹水兩棲にして、大さ三尺位に達す。體は側扁して長く、口は大きく、上顎の後方には鮭鱒科の特徵として小さき脂鰭を有す。體色背部は暗蒼褐色、腹部は銀白なり。生殖期には雄は銀白色を失ひ體側に赤紫色の斑紋現はれ、雌は暗紫を呈す。又雄は此時期には吻端著しく鉤狀に曲るを以て、一見明かに雌雄を辨別し得べし。俗に「鼻曲り」と云ふは之なり。我國にては北海道の西岸に多く産す。九月より十二月の産卵期に至れば群をなして河川を溯る。鮞は鮭の卵にして桃紅色の大粒の球狀をなす。煮て又は鹽漬にして食用に供す。〔季題〕天文　鮭颪（三冬）　人事　鮭打（三冬）　乾鮭（三冬）

例句

初鮭

初鮭や陸にまとへる人の足　其角（菊の道）
初鮭や網代の霧の晴間より　支考（夏衣）
初鮭や湿業とりまく市の人　木導（水の音）
初鮭の荷や銀さびの夜明頃　素丸（素丸發句集）
石川やはや初鮭に水の濫　冬英（田舍の日）
初鮭や包めば戰ぐ芒の穗　乙二（をのゝえ草稿）

鮭

鮭飛んでさゞ波立る川上かな　關木（□□集）
定めなき尾つれの鮭の死所　白雄（白雄句集）
料理場の夕業や今はしり鮭　□幹（古今句集）

鮭小屋

山風や肚を鮭小屋の影法師　白雄（白雄句集）

參考　さけ、鮭科。Oncorhynchus Keta (WALBAUM). 本邦北半の河川を、初夏から初冬の間に溯上する。鰭は黒色、背部青黑色、腹は銀色であるが、生殖時期になると、雄は背部著しく黒くなり、體側に不規則な赤褐色の斑が現はれ、頭骨が彎曲す。これを鼻曲りと言ふ。雌に於ては、そ

の變化が顯著でない。側線上の鱗は百四十個、脊鰭の軟條九、臀鰭軟條十三乃至十四、幽門垂卽ち蓑腸は百四十乃至百八十五。

江鮭（あめのうを）（中）　鯇魚（くわんぎよ）　あめ　あめうを　あめます　みづさけ

古書校註

【篗纑輪】八月。琵琶湖の名産也。大きなるもの三尺、小さきは尺に滿たざるもの有り。さながら鰚魚の如し。江鮭とは卽ち江湖の鮭也。河鰚魚よりは少と鯎多し。湖水にての佳品也。秋八月雨水河々より湖中に流れ入る時多く川に上る。簗を構へ或は大攩網（スクヒアミ）を以て之を取る。

【年浪草】八月。和漢三才圖會に曰、鱏・鰀・草魚・水鮭、和名阿米。江州湖中に多し、頗る鮭に似たり。故に漢語抄に水鮭・江鮭と名く。四・五月盛んに出で、一尺三寸より大なる者二尺四五寸、小なる者五六寸・尺餘なり。土人鱒と稱す。但し眞鱒より猵なり。（按に九月大津四の宮祭、專ら江鮭を賞す、その子鮭の鮞の如し、秋月も亦盛んに出づ。（大和本草に曰、鰧魚。）

註 ○アメまた鯇字を用ふ。その正字につきては諸書雜説多く諸書にも詳あり、されど水鮭・江鮭を古くよりアメと訓じ來れり。

動植物解説　喉鰾類さけ科に屬する魚。體長四五寸、形鱒に似たり。腹面は銀白色、背面は暗蒼色にて黒色の斑點あり。清冽の溪流若くは湖川等に産す。十一月頃産卵す。

實作注意　琵琶湖の名物なり。異名に、鯇魚・あめ・あめうを・あめます・みづさけ等あり。

例句

江鮭

江鮭ありもやすらん富士の湖　芭蕉（芭蕉句選拾遺）
瀬田降て志賀の夕日や江鮭　蕪村（蕪村句集）
津守宮にて漕りて
月に漕ぐ呉人は知らじ江鮭　同（續蕪の香）
捨るほどとれて又なし江鮭　几董（井華集）
「江鮭まづ妹か目にうつくしき　青々（妻木）
江鮭來るや普請半の川堤　召波（春泥句集）

あめ

鱸（すずき）（中）　せいご　ふつこ　紫鯁魚　川鱸　海鱸　鱸釣（人事）　鱸網（人事）　鱸膾（人事）

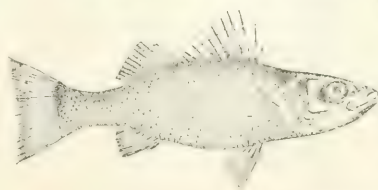
古書校註

【年浪草】三秋○和漢三才圖會に曰、四鰓魚、和名須々木、小なる者を鮬と名け、なほ小なる者を世俗古と名く、六七寸尺に近き者を波觔と名け、尺以上三尺に至る者を須々木と名く。川鱸は脂多く味美、海鱸は脂少く味淡し、諸國四時共にあり、雲州の松江最も多くして夏月之を賞す。新六「二夕なきに藤江の浦の入海に鱸釣てふあまの乙女子（衣笠内大臣）萬葉にも「荒栲の藤江之浦」と詠めり、播磨國にあり。

【本草】八月（鱸釣る）鱸 大河の中鱸魚大なる者二三尺、三月以後七月まで肥ゆ。暑月脂多くして味よし。八月より瘠する、夏秋さしみ鱠とし鮓となす。夏月腸の味の味よし、クモワタといふ腸あり、脂多く味よし。小なるをセイゴといふ、松江なるもよし、中にも松江（スヾキ）鱸はその大さ日本のセイゴの如しと云ふ。河鱸は尤よし、暑月の佳品也。海と河との間にあるものの味よし、漁人これを釣る、或は戈にて突きてとる。

圖（一）前頁六圖の鱸。

【動物學】硬鰭類に屬し、大なるものは二三尺に達す。巨口細鱗、體色背部は淡青にして、腹部は淡白なり。我國にては西海より北海まで何れの地にも多少を産す。近海魚にして深さ四十尺乃至九十尺の海底の礁地で多少海藻の繁茂する場所に棲息し、冬は河より海に下り、夏は海より河に遡く、秋冬の頃淡水鹹水の混和する河口等の藪深き處に産卵す。

【故事】支那の呉の松江産の鱸魚は天下の珍と稱せらる、晉の張翰は呉の人、秋風の起るを見て呉中の菰菜蓴羹鱸膾正に美味なるべきを思ひ、官を辭して歸郷せりといふ故事あり。以て知るべし。松江の名に因みて出雲松江の産も名高し。暑月脂多くして味良し。九月より痩す。さしみ・膾、又は洗ひとして佳品なり。鱸の小さきものをせいごと云ひ、尺許なるをふつこと云ひ更に長じたるをすゝきと云ふ。鱸を釣るには生餌（主として鰕）を用ゆ。【季】夏　洗鱸

【例句】

鱸

遠州二俣川權河原といふ所

打揚に鱸はねたり淵の色　其角（句兄弟）

さちほこに笹を噛ますする鱸哉　同（類柑子）

水主に鱸を知るや淵の色　浪化（浪化上人發句集）

百日の鯉切盡きて鱸かな　蕪村（蕪村句集）

鱸獲て後ろめたさよ浪の月　同（蕪村遺稿）

此鱸口明かせずと足んぬべし　太祇（太祇句選）

かゝる日に貫ひ鱸や生腐り　召波（春泥發句集）

入日さす鱸の口や魚の店　喜水（續明烏）

鱸釣

村雲や雨は手に來る鱸釣　野坡（野坡吟艸）

氣遣ふて渡る瀨女や鱸釣　去來（誹諧曽我）

支船に鱸釣たる闇夜かな　素行（[illegible]鳥集）

釣上ぐる鱸や闇に太刀の影　支考（山琴集）

釣上げし鱸の巨口玉や吐く　蕪村（蕪村句集）

鱸膾　風の間に鱸の膾させにけり　鬼貫（鬼貫句選）

心せよ鱸の膾病上り　北枝（越の名殘）

【解説】すずき、すずき科 Lateolabrax japonicus（CUVIER & VALENCIENNES）。小なるをセイゴ、やゝ大なるをフツコ、一尺以上のをスズキと呼ぶ。但し甚だ小なるを、ツコと稱へる地方もある。北海道から臺灣に至るまで本邦の沿岸に廣く分布する。幼魚は初夏河川を遡上することがあるが、晩秋海に下るのである。大なるは一メートル半にも達する。鱸の字が當てゝあるが、これは明に誤用で、この字は、ハゼを意味する。

鯊（はぜ）（三秋）　ふるせ　蝦虎魚（はぜ）　眞鯊（まはぜ）　鯊の秋（あき）（時）（候）　鯊日和（はぜびより）（天）（文）

【考證】【年浪草】三秋〔和漢三才圖會に、日、彈塗魚俗に云ふ波世。川の末海に近き處多く有り、常に水底に潜行す、小鰕を餌となし、綸の端鈎を去る事二三寸許の處に鉛錘を着け、鈎をして地につけしむ。微動の響をまちて竿を揚ぐ。秋月貴賤以て遊興の一となす。形色鰍に似て小、細鱗、體略滑にして口濶く、腮大に眼上に向ふ。斑點微黑を帶ぶ。尾にも亦小斑有り岐無し。虎彈魚・衲彈魚・飛強魚等の類多し

【[illegible]】淡水鹹水の間に産する硬骨類の魚。形コチに似て大なるは五六寸。口廣く腮大に、身薄黑くして斑紋あり。六月頃あぢもの中に産卵す。卵は粘着性なり。

【[illegible]】秋彼岸頃を此魚の漁期とす。殊に彼岸の中日に釣りたるものは中風の藥になるとて釣人多し。其二歳仔をふるせと云ふ。種類頗る多し。すくろはぜ・あかはぜ・とらはぜ・むつごろう・わらすぼ・めくらはぜ・すたすなはぜ・もはぜ・ごうはぜ、等數十種に及ぶ。【參照】人事　鯊釣

【例句】

鯊　川鯊や十に足さるる海老の中　野坡（菊の道）

隅田川にて

我酒の肴に乞はむ釣の鯊　友五（雪七草）

鯊を煮る小家や桃の昔顔　蕪村（月並發句帖）

一日干す鮓ばの鯊や菊の宿　青々（妻木）

【[illegible]】はぜ、まはぜ、はぜ科。Acanthogobius Flavimanus（TEMMINCK & SCHLEGEL.）はぜの中、最も普通の種、北海道から九州まで廣く分布し、河口に近き所又は河川中に棲む。體色概ね淡黃褐色で、上面やや黑色を帶び、體側に不明瞭な黑褐色の斑がある。胸鰭は、ほぼ黃色で、その基部が黑い。種名は「黃色の胸鰭を有す」の意である。

秋鰹（あきがつを）（三秋）

【[illegible]】秋季に入りて漁獲する鰹。【參照】夏　初鰹、[illegible]、鰹釣

例句

秋 鰹　はねるほど哀れなりけり秋鰹　才　麿（才麿發句拔萃）

内井戸の水にあひけり秋鰹　介　我（[illegible]）

秋鯖（三秋）

季題解説 硬鰭類に屬する海魚。背眞青にして中に蒼黒き虎斑あり。大さ五六寸より一尺四五寸に至る。尾の邊に相對して刺の如き鰭あり。

實作注意 春より秋の末まで隨時漁獲するも、九月、十月頃のもの味最も美なれば、俗に之を秋鯖として賞味す。［參照］夏—鯖　鯖釣火

秋鰺（三秋）

季題解説 硬鰭類に屬する海魚。大さ二三寸乃至一尺。形鯖に似て背部は蒼色に微紅を帶び、腹部は白色に紅色を交ふ。とげの如き鱗鰓の下より尾まで直線に連る、之を竹筴といふ。夏より秋にかけて多く漁す。

實作注意 秋季に入れば脂肪多く味美なり。依て秋鰺といふ。專ら燒肴として食す。［參照］夏—鰺

例句

秋 鰺　二三日小鰺のつづく秋小口　七　星（[illegible]）

小鰭（初）　つなし　鰶　しんこ

季題解説 喉鰾類に屬する魚、鰶の一種。大なるは六七寸、背蒼く、腹白し。肉も白くして小骨多し。全身稍扁く、頭小く睛の邊紅なり。近海の中層を游泳す。燒く時の香、人體の焦ぐるに似たりと云傳ふ。

實作注意 當歳なるを、關東にては小鰭（こはだ）關西にてはつなしと云ひ、其二歳なるを鰶（このしろ）と稱す。初秋の頃を眞味とす。其走りの三寸位の幼魚を新小鰭又は略してしんこと云ひ、鮓に作りて賞味す。

鰯（三秋）　鰮　弱魚　むらさき　眞鰯　秋鰯　鰯賣（人事）

古書校註

【年浪草】三秋　本朝食鑑に曰、一名御紫、或は紫といふ。本朝俗呼と聞の兒女鰯の賤名を忌みて御紫といふ。〇和漢三才圖會に曰、鰯は俗字、鰮和名以和之、性柔弱故に俗字弱に從ふ。與和之と訓して乃ち相通ず。（中略）群行して至る時海波稍赤し。漁人之を知して網を下し之を采る。鯨好んで鰯を呑ふ。爲めに逐はるる者數萬、群をなして浪の如し。之をとりて膾に作り、煮るべく炙るべし。又脂を取て燈油となす云々　鰯引くとは網を引くの義。

註（一）これらの字論俳諧多識篇にも詳しく見えたり。○裂膚參照。

季題解説 和名伊和之、性柔弱、以に俗字弱に從ふ。喉鰾類にしん科に屬する魚。體長尺に達するもあり。背は蒼色、腹は銀色にして光澤を有す。口は大きく、頭部の他は圓鱗を以て被はる。我國にては何れの海にも產せざる所なし。廻泳する性ありて、五・六月頃以後、暖流に乘じ、近海に來りて產卵す

實作注意 いわしは、弱しの轉なり。依て弱魚の合字を用ふ。又鰮の字をも用ふ。栞草は鰯引くを季題とし單に鰯は認めざるも、近時鰯とのみにて秋季とせり。鰯雲は鰯の寄らんとする頃出る波の如き雲、所謂うろこぐもを云ふ。むらさき・おむらは鰯の異名なり。〔本朝食鑑〕「一名御紫或は紫と云ふ、本朝宮閒の兒女、鰯の賤名を忌て御紫といふ、鰯の鹽糟、其内色紫黑故に名づくるか」とあり。〔參照〕人事―鰯の黑漬、裂膾、鰯引

例句

越中あいの浦

鰯　此浦に花も紅葉も鰯かな　支考（東西夜話）

秋鰯　聞くに聲の西南よりや秋鰯　宗因（梅翁宗因發句集）

宮の口より鰯ひかるる見て

鰯賣　水揚の聲それだけか鰯賣　蕪松（小弓誹諧集）

越後の女の哀れさを

鰯めせ〳〵とや泣子負ひながら　一茶（一茶句帖）

鰯船　飯時をねらふてくるや鰯船　呼丁（消息集）

參考 鰯、鰯科。Sardinia melanosticta (Temminck & Schlegel). 眞鰯、鰯類中の代表的のもの、關西にては「ひらご」とも云ふ。北海道から琉球に至るまで、本邦各地で、殆ど周年漁獲される。背面は濃藍色、腹面銀色で、體側に七つ星と俗稱される黑點がある。本種に類する「うるめいわし」Etrumeus micropus (Temminck & Schlegel) は南日本に產し、七つ星がなく、腹面が丸味を帶びてゐるので區別される。

鯷（ひしこ）（中）　しこ

異名 鯷鰯（ひしこいわし）　背黑鰯（せぐろいわし）　絹繒鰯（ありのんいわし）　小鰯（こいわし）　黑鰯（たれいわし）　ごまめ　田作

【年浪草】八月○本朝食鑑に曰、鯷は小鰯也。本朝古より稱す、然れども本綱及び字書を考ふるに、則ち鮎鮧の別名也。

【俳諧多識篇】問、鯷をひしこと訓す、正字にや。答、陶隱居が本艸の注に鮧魚也と見えたり。鮧魚は俗名なまづ也。されば唐の世には鮧を鯷といひしと見えたり。されば正字とはいひ難し。楊氏漢語抄に鯷、和名ヒシコイワシ、小鮎魚也とあり。今用ふる所は漢語抄の說によるなり。（略、一）

季題解説 背黑鰯（セグロイワシ）の稚魚。之を鯷鰯（ヒシコイハシ）とも略して鯷とも云ふ。

註（一）以下各地に於ける小鰯の稱呼をあげて……

【[illegible]】　鯷魚を乾製したるを鱓鯆と稱し、成魚を素乾したるをごまめ、又は田作と云ふ（新年の季題に小殿原・俵子など云ふは之なり）。（—新年—田作り　[illegible]年—鱁漬せよ）

【例句】
小鰯　小鰯に今日此頃の寒さかな　舎羅（砂川）
　　小鰯や一口茄子藤の門　其角（類柑子）

【[illegible]】　いわし　Engraulis japonicus TEMMINCK & SCHLEGEL.「かたくち」「しこいわし」とも云ふ。樺太から九州まで産する。口が甚だ大で、眼の後方まで裂けて居り、上顎は下顎よりも前に突出してゐる。背面は藍色、腹面銀色で、體側に銀白色の縦帯が走つてゐる。この幼魚を乾したものを、ごまめと云ふ。

鱰（しいら）（三秋）　九萬疋（まんびき）　まんびき

【[illegible]】【[illegible]】　しいら、鰆鯛に似て尾小にして鰤に比す。味美ならず、下品也。三四尺あるもの九州浦々にて多く之を取る、鱐として京・大阪に來り市に販ぐ。秋・冬鱐内諸国田家の飣とす。

【年浪草】　三秋。和漢三才圖會に曰、正字未詳、俗に云志比良、長崎の人呼んで比以乎といふ。按に鱰の狀鰆に類して頭圓く尾小く鱗細かに味も亦鯿に似て大なる者二三尺、九萬疋と名く。その多く有るを以ての謂か。越中鱰鯗を上となす。相傳へていふ、これ中華の魚にして四五月唐船多く入朝の時、來つて群游す。唐船歸る時九州の鯛唐人肉食の腥氣を慕つて、船に着いて入唐す。故に夏月鱰上下に多く、冬月は鯛中華の海に多しと。

【[illegible]】　硬骨魚に屬する海魚、體扁平にして長く、大なるは二尺に達す。頭方にして、體色は背部淡蒼色、腹部銀白色に微黄を帶ぶ。南海西海の諸州殊に土佐薩摩等に産す。

【[illegible]】　此魚常に數萬群を爲す、依て九萬疋（くまんびき）ともまんびきとも云ふ。多く乾魚として食す。味美と云ふに非ず。異名多し。即ち、勒金・金山・寄魚・鬼頭刀・しひら・とうやく・にんさく・ねこづら・ひいを、等なり。

太刀魚（たちうを）（中）　たちの魚（うを）　帶魚（たいぎよ）

【[illegible]】【[illegible]】　八月。是秋季とするものは泉州・播州の海濱にて、八・九月鰯と同時に多く之を取る。よつて秋とす、他州にては季に用ひ難し。（二）

【年浪草】　八月。時珍が曰、鰣魚江湖の中に生ず、魚の形物を剞裂（きりさ）く箆之刀の如し。故に鱭刀、魛魚之名あり。常に三月に始めて出づ。狀狹くして

長し、薄くして削れる木片の如し、又長く薄くして尖れる刀の形の如し。細鱗白色、吻上に二つ硬骨有り、腮の下に長鬚あり、麥芒の如し、腹下に硬き角刺あり、快利刀の如し。其後尾に近く短鬚あり。肉中細刺多し

註（一）滑稽雜談に「八月之を賞し、古來は季に用ひず、近世秋季に許す、好む所に從ふべし」といへり。

季題解説 硬鰭類に屬する魚。形太刀に似て細長く、漸く尾端に至るに從ひて愈細まり、末端は絲の如し。大なるは五尺に達す。鱗なくしてその色背部は淡青、腹部は銀白を呈す。深海魚に屬し、九州中國等の太平洋に面したる海に多く產し、北に進むに隨ひて少なし。產卵期は夏秋の交にして、此時に淺海に來ることあり。黎明薄暮には水上に浮ぶ。

例句
太刀魚　太刀魚の手もなきものぞ手操網　左栗（藁人形）
太刀魚や水もたまらずはねる音　龜文（古今句鑑）
太刀魚や打來る波を受て飛ぶ　同（古今句鑑拾遺）
魚の棚太刀魚ばかり殘りけり　白雲（丁卯句抄）
坂手港
太刀魚も干されてあるや浦の秋　紫亭（倦鳥）
太刀魚をぬたにすべくも買ひけり　青々（同　）

參考 太刀魚、太刀魚科。Trichiurus japonicus (Temminck & Schlegel). 本邦南半に普通な海魚。體扁平にして刀身狀、全面銀白色。尾鰭なく、脊鰭連續して尾端に至る。臀鰭僅に突出するのみであるが、長く連なしてある。腹鰭なく、胸鰭小。

秋刀魚（さんま）（[illegible]）　秋光魚（さんま）　青串魚（さんま）　さいら　のそざより　はんじよ　秋刀魚（さんま）　鱵（俳人）

季題解説 軟鰭類に屬する魚。形細長くして太刀魚に似、尺餘に達す。背部は青色、側部と腹部とは銀白色、兩方に眞珠色の模樣あり。鱗は細く滑かにして粗大なれども、薄くして剝落しやすし。洋海に棲息し、秋冬の頃近海に來遊す。

實際注意 我國東海、殊に房總の海にて多く漁獲す。漁場にて、あま鹽となしたるを市販す。關東方面にては秋刀魚と云ふを關西にては之をさいらと稱し、又さいり・のそざより・はんじよなどの異名あり。

例句
秋刀魚　秋刀魚荷の一番がつく殘月に　小酒（杉の實）

尾花蛸（をはなだこ）（中）

季題解説 尾花のある頃漁るゝ蛸。產卵後にて美味ならず。

植物

初紅葉（中）

古書校註

【年浪草】「初紅葉・薄紅葉」八月。○八雲御抄に曰、紅葉を詠ずる木雞冠木・槇・黄櫨・柿・櫻・柞。「滑稽雜談」に曰、漆・櫨と云（一）此の類皆秋は葉を染むるもの故、只もみぢと云へば、何れにも通ずれども、楓樹の紅葉勝れたる故花といへば櫻となるが如く、紅葉といへば楓樹のやうになれり。○初紅葉といふも亦初花・初櫻と云ふが如く、人珍重するなり。○薄紅葉は未だ濃からざる薄色のもみぢ也。

註（一）漆・櫨共に紅葉する木としてあげたるなり。

季題解説　初花・初櫻と云ふに同じく、其時を待ちて賞づることゝろあるを云ふなり。［季題］薄紅葉　紅葉

例句

初紅葉

照り立てゝ夕日存け初紅葉　野童（鶴　筆）
山ふさぐこなたおもてや初紅葉　其角（鶴　突）
霜に醉ふ鶴のかしらや初紅葉　支考（東西夜話）
竹代て日のさす寺や初紅葉　吾仲（柿　表　紙）
秋もはや背に時雨れて初紅葉　許六（しるしの竿）

冷水縣にて

出づる日の雲のはづれや初紅葉　助然（冬　紅　葉）

留別

闇からぬ空はともあれ初紅葉　千代尼（千代尼句集）
初紅葉お染といはゞ龍田山　蕪村（新五子稿）
いづちよりいづち使そ初紅葉　召波（春泥發句集）
僅なる照日の前や初紅葉　月溪（月溪句集）
鯛も噂ねば淋し初紅葉　巣兆（曾波可理）
さし出たる枝にもあらず初紅葉　梅室（梅室家集）

薄紅葉（中）

季題解説　木々の紅葉の染むる色、いまだ薄きを云ふ。初紅葉とは其意些か異れり。［季題］初紅葉　紅葉

例句

薄紅葉

錦手や伊萬里の山の薄紅葉　宗因（梅翁宗因發句集）

色付や豆腐に落て薄紅葉　芭蕉（芭蕉杉風両吟百韻）
肌寒し竹切る山の薄紅葉　片兆（猿蓑）
嵯峨杜に暮らして
夕陽や材木店も薄紅葉　乙州（黒獅子集）
かつら子の髪にさゝばや薄紅葉　可南女（藤の實）
田上木節を訪って
朝夕の竈にも見るや薄紅葉　洒堂（砂つばめ）
鐵槌に女や鬭る薄紅葉　太祇（太祇句選）
町庭の心に足るや薄紅葉　同（同）
山里や煙斜に薄紅葉　闌更（半化坊發句集）
水錆江や上は柞の薄紅葉　同（同）
差出の磯
黄昏や水に差出の薄紅葉　同（同）
薄紅葉するよと見れば散りはじめ　曉臺（曉臺句集）
夕紅葉此川下は薄かりし　白雄（白雄句集）

紅葉（晩）

黄葉　栬　もみぢ葉　妻戀草　色葉　紅葉の錦　栬の錦
入紅葉　下紅葉　中紅葉　村紅葉　紅葉の帳　紅葉の淵　紅葉の笠
紅葉かつ散る　紅葉川（地理）　紅葉山（地理）

古連俳秘註

【山之井】常盤ノ山のかつあかきを、松を時雨の染めしにやと疑ひ（一）藤の森にては紫うばふ朱かと怪み（二）又山の邊の色づけるを赤人の名に寄せ、柿の梢のほの〴〵赤きを人丸の歌に言ひなし、又梅がえの葉もみづるは（三）已が酢をさす紅かと言ひ、櫻の紅葉は又花をやる（四）など言へる心ばへをすべし、すべて万木の色あるを、其の物につきて、錦とも何とも言ひなして、あながちに紅葉と言はざれども落題にはなり侍らず。（）色葉と云ふも同じ事にて侍る。見事やとかなにいはんとも、散りぬるをわかの恨なども、手習のほんに言ひなし侍る。（）楓は色と言ひ侍らでも秋の季にて侍る、手にとりなして、散る露をつまはぢき、又色づくをつま紅なども云へり、木橘に風のえんをも言ひ（五）色をかへてなど云ひ添へもし侍る。

【御傘】〔紅葉〕たゞ一、栬・櫻などに一（六）草の紅葉、紅葉の橋は此の外なるべきか。連歌に以上三也。誹諧にはこうえふと折を替へて以上四也、紅葉の橋、連歌に三の外とあれど、誹諧には四の内なるべし。季を持つ故也。（中略）紅葉かつちるは秋也、散初むるは冬也。（中略）〔紅葉の朽る〕などしても秋也。〔紅葉の散りて物を染むる〕新式冬になる也。

【年浪草】紅葉。九月。〔かつちる〕九月。是は紅葉などの散るを云ふ。少しの心なるべし。かつ〳〵とも云ふ、少し也。

小原女や紅葉でたゝく鹿の尻　同　(類柑子)
山姫の染がら流す紅葉かな　其角　(五元集)

[illegible]坂下りて

菊紅葉鳥邊野としもなかりけり　同　(同　)
入相の瀧に散込む紅葉かな　許六　(きれ〲)
口惜しや奥の龍田は見ぬ紅葉　同　(正風彦根躰)
飛鳥の羽もこかるゝ紅葉哉　支考　(浮世の北)

[illegible]津に泊す

船頭も米搗く磯の紅葉かな　同　(梟日記)

[illegible]

城外の鐘聞ゆらん紅葉山　同　(同　)
持綱に白鷺ふるふ紅葉かな　同　(同の華)

陸奥亭

花紅葉佐渡も見えたり浦の秋　同　(越の名殘)

紅葉狩に[illegible]

仰ぬくは損なり金は散紅葉　同　(木曽八景集)
紅葉散る秋や米搗く船頭共　同　(蕉の首途)
美まし美しうなりて散る紅葉　同　(文星觀)

秋の坊に寄する

御坊そも紅葉の秋か世の秋か　同　(有の儘)
東すれ梅や櫻の七紅葉　同　(遠二吟集)
紅葉ばに禪赤し峯の猿　北枝　(雪の光)
打あける鑵の中の紅葉かな　木導　(正風彦根躰)
黑雲にくはつと日のさす紅葉哉　同　(木の音)
心あつて椽に紅葉を散らせけり　秋之坊　(卯辰集)
紅葉の庭掃く音や堺一重　旦藁　(曠野後集)
小男鹿の爪に紅さす紅葉かな　鶯有　(笈日記)
膝見せてつくばふ鹿に紅葉哉　半殘　(有磯海)

宿[illegible]

むく起や峯の紅葉の朝しめり　李由　(韻塞)
紅葉ばのおもてや谷の數千丈　千川　(續有磯海)
眠藏のあからさまなる紅葉哉　惟然　(記念題)
曉の雲入りかはる紅葉かな　素覽　(同　)
前ひらに思ふ所の紅葉かな　嵐青　(きれ〲)
此あたり紅葉備ふす藪のはた　苔蘇　([illegible]便)
紅葉見や村の用意は藁草鞋　琴風　(焦尾琴)
雨風のすかして來たる紅葉哉　使帆　(田植謳)
夕暮の少し夜に入る紅葉かな　路健　(獅子物狂)

紅葉

孤山紅葉

牛稀に茶道を隠す紅葉かな　嵐雪（玄峰集）

畠山弘氏亭

古寺や紅葉も老て幾昔　桃隣（古太白堂句選）
鹿聞に紛るゝ寺の紅葉哉　也有（蘿葉集）
木陰から出て日の暮るゝ紅葉哉　千代尼（千代尼句集）
夕暮を餘所に預けて紅葉哉　同（同）
折々は霧にもあまる紅葉哉　同（同）
寄らで過る藤澤寺の紅葉哉　蕪村（蕪村句集）
谷水の盡きてこがるゝ紅葉哉　同（同）
禮田に紅葉散かゝる夕日かな　同（同）

高雄

西行の夜具も出てある紅葉哉　同（同）
紅葉見の岩に水取る覗かな　同（蕪村遺稿）
山暮れて紅葉の朱を奪ひけり　同（同）
このもよりかのもも色よき紅葉哉　同（同）
紅葉見や用意かしこき傘二本　同（同）
紅葉して寺あるさまの梢かな　同（新五子稿）
折得たる紅葉掴しも横ならき　同（同）
川かげの一株づゝに紅葉かな　同（西海春秋）

庭の紅葉のちたるとこ、稀南行古楽たりけに

やゝあつて水に生たる紅葉哉　太祇（太祇句選後篇）
門叩く狂僧憎し夕紅葉　曉臺（曉臺句集）
何と見ても紅葉は松に極りぬ　同（同）
紅葉散るや焚かれて我今日もあり　同（同）
紅葉ばや雲の下照る高雄山　闌更（半化坊發句集）
紅葉散て竹の中なる清閑寺　同（同）
長岡や昼行く我を照る紅葉　同（同）
暮寒く紅葉に啼くや山鳥　白雄（白雄句集）
浮雲の紅葉に晴るゝ尼上かな　同（同）

代鏡が眼一ノ

秋は紅葉眼に晴れよ霧晴れよ　同（同）

正灯寺

門に入て紅葉かざゝぬ人ぞなき　同（同）
掃く音も聞えて淋し夕紅葉　蓼太（蓼太句集）
人足の歸り勝なる紅葉かな　同（同）

下つふさ銚聖寺の庭上に七色の紅葉木あり

やどり木や幹を花瓶に花紅葉　同（同）

諏訪秋宮
花よりも紅葉には濃き涙かな　同　（同）
時雨來よ花も紅葉も有磯海　樗良　（樗良發句集）
見めぐるや紅葉靜に色まさる　同　（同）
谷川や紅葉の絶間水寒し　同　（同）
箕水の橋
橋高し紅葉を埋む雨の雲　同　（同）
落葉さへ紅葉の山の高雄かな　同　（同）
花や紅葉松も常ならず嵐山　同　（同）
詩僊堂にて
交りや紅葉照そふ小盃　同　（同）
山荘
手折置し紅葉かげろふ障子哉　几董　（井華集）
さながらに紅葉は濡れて朝月夜　同　（同）
高雄山二句
一もとの一日に餘る紅葉かな　同　（同）
木曽
棧に今日も望ある紅葉かな　同　（同）
紅葉見や小雨つれなき村はづれ　召波　（春泥發句集）
山土産の紅葉投けり上り口　同　（同）
吹さます酒や紅葉の燒過し　同　（同）
かつ散て盛まだ來ぬ紅葉哉　大魯　（蘆陰句選）
高雄山哀れに深き紅葉かな　瓦全　（五車反古）
あながちに紅ならぬ紅葉かな　橘仙　（同）
谷紅葉夕日を渡る寺の犬　鳥西　（同）
見る人の唇乾く紅葉かな　成美　（成美家集）
水波むも浮世がましや夕紅葉　同　（同）
我からの鼻息見えて夕紅葉　同　（同）
底澄みて魚とれざる紅葉哉　同　（同）
鶴も來て悲しがる紅葉かな　同　（同）
住なれて魚なき國の紅葉かな　同　（同）
若一王子の田樂踊
舞人よ紅葉の頃は袖の風　同　（同）
紅葉せぬ所はあれど夕餉　乙二　（松窓乙二發句集）
酒田
熱海から來し人の言ふ紅葉哉　同　（同）
一枝折盜の戒を作せる庵なれば
腹いせに溫石あぶる紅葉哉　巣兆　（曾波可理）
歸り來れば水に散しく紅葉哉　士朗　（枇杷園句集）
小男鹿の尻にべつたり紅葉哉　一茶　（七番日記）

留別
月待てやこゝ高岡の村紅葉　支考（東西夜話）

松寸亭
柴舟に水上ゆかし村紅葉　同（國の華）

むら紅葉散るや夕日の鐘が崎　同（白鳥集）

下白山に詣て
帚木は柴でもなし村紅葉　北枝（猿丸宮集）

むら紅葉烟草干したるつゞき哉　牧童（北の山）

後ち尾の塀にすれたり村紅葉　北鯤（續猿蓑）

むら紅葉會津商人なつかしき　蕪村（蕪村句集）

梅ヶ畑といふ所にて
薪樵る山姫見たり村紅葉　几董（井華集）

下紅葉
人毎の口にあるなり下紅葉　芭蕉（千宜理記）

大山
腰押やかゝる岩根の下紅葉　其角（雜談集）

下紅葉花の費をはたく匂ひかな　同（焦尾琴）

新撰六間帯
水つかぬ塵のはじめや下紅葉　同（五元集拾遺）

蒲脚(カマハバキ)絆踏み分け行くや下紅葉　木導（正風彦根躰）

白浪やゆらつく橋の下紅葉　塵生（猿蓑）

照葉(てりは)（晩）　照紅葉(てりもみぢ)

季題解説 木の葉、草の葉の紅葉して、特に美しく照りかゞやくを云ふ。

參照 紅葉、草の紅葉。

例句

照葉
洗ひ出る道の數根の照葉哉　太祇（太祇句選）

切溜につふと見せたる照葉哉　召波（春泥發句集）

岸なだれ踏止める樹の照葉哉　嘯山（律亭句集）

下水に寄れはまばゆき照葉哉　麥水（樗庵麥水發句集）

濱畠垣して菊の照葉かな　渓泉（俊鳥）

雑木紅葉(ざふきもみぢ)（晩）

季題解説 世に「もみぢ」の稱呼、かへでを專らとして云ふものゝ如くになれるを以て、諸木の紅葉をひきくるめて、假に雑木紅葉と稱す。

參照 紅葉。

例句

雑木紅葉
桂州口宿の旅宿にて
紅葉して朝熊の面と言はれけり　其角（句兄弟）

何の木ぞ紅葉色濃き草の中　　几董（井華集）

桑柘黄ばむ平遠に日の落つるなり　　是牛（俳星）

我入るや雑木もみぢの若狭道　　青々（同　）

雞冠木（晩）

楓　かへるで　槭樹　錦草　山紅葉　かへで紅葉

季題解説　槭樹科の落葉喬木にして、幹は表面平滑、葉は稍圓形にして基脚截形、稀には廣心臟形をなすものあり。兩面平滑にして毛茸なし。通常七裂なれども、五乃至十深裂し、各片は鋭尖頭にして、鋭鋸齒又は缺刻あり。初夏の候小形にしてやゝ紫色を呈する花を開き、果實は裂開せざる乾果にして二個の翅あり。晩秋紅葉すること諸樹に秀づるを以て、俗にもみぢといへは槭樹をさすに至れり。種類多し。

實作注意　我國に云ふ「もみぢ」の樹は槭の字正し。楓は別の樹なり。但し「もみぢ」といふ詞は、「もみいづ」と云ふ義にて、草木の霜に逢ひて赤く又は黄に、色を「もみぢ」せしむるを云ふものなれば、楓も槭も共に其葉の色染るを「もみぢ」と云ふに妨け無し。「かへで」と云ふは、葉に五七尖ありて、かへるの手に似たるを以て「かへるで」と云ひ、中略して「かへで」とは云へるものなり。［參照］紅葉（秋）　夏—楓の花（夏）若楓（夏）

例句

越中富山某寺の會

楓橋は知らず眠さは詩の心　　支考（東西夜話）

紅楓深し南し西す水の隈　　几董（井華集）

參考　かへで Acer Palmatum, Thunb. 一名　もみぢ（かへで科）

山地に生ずる落葉喬木なれども、又人家に栽培せらる、幹の表面は平滑、葉は稍圓形にして、基脚は截形又は心臟形をなし、通常七裂乃至十一裂し、裂皮は鋭尖頭、鋭鋸齒又は缺刻鋸齒あり、四五月頃暗紅色の小花を開く、實は小なる雙翅果にして平滑、翅は鈍角をなして開けり、多くの變種を有し、皆觀賞用として愛せらる。

柏黄葉（晩）

柏の實

季題解説　此處にいふ柏は殼斗科の落葉喬木、一名「ははそ」「こがしは」「もちがしは」等と稱するものなり。晩秋黄變して枯葉となる。果實は團栗に似て頭部稍ゝ圓く、殼斗は淺くして平椀狀をなし外面に鱗片を密布す。果肉は食用となり、澱粉製造の原料となる。［參照］紅葉（秋）、雑木紅葉（秋）槲散る（冬）　夏—柏落葉（夏）

漆紅葉（晩）

季題解説　漆の葉は莖に互生し、長き柄に九個乃至十五個の羽狀複葉をなす、柄に短毛あり。小葉は卵狀長楕圓形にして長さ二寸ばかり、全緣にし

て鋭尖頂を具へ、其脚は歪形をなし、上面平滑、下面脈上に毛あり。短き小柄を備ふ。この葉晩秋落葉の近づくにつれ葉面紅色、背面黄色の美しき紅葉を呈す。〔参照〕紅葉[illegible]　雜木紅葉[illegible]

櫨紅葉（はぜもみぢ）（晩）

季題解說　櫨の葉は奇數羽狀複葉にして、小葉は卵狀挾針形又は長楕圓狀披針形をなす。秋日美しき紅葉を呈す。〔参照〕紅葉[illegible]　雜木紅葉[illegible]　櫨の實[illegible]　夏―櫨の花[illegible]

銀杏黃葉（いてふもみぢ）（晩）

季題解說　銀杏の黃葉、樹にあるは樹を明るくし、地に散りしきては地を明るくす。銀杏黃葉は書物に挿み置くものにて、又字を書くにもよろし。〔参照〕紅葉[illegible]　雜木紅葉[illegible]　銀杏の實[illegible]

例句

銀杏黃葉

稚子の寺なつかしむ銀杏かな　蕪村（蕪村句集）

懷古

むかし誰この堀越えし銀杏ぞも　几董（井華集）

北は黃に銀杏ぞ見ゆる大德寺　召波（春泥發句集）

山下に近く見なせる銀杏かな　嘯山（律亭句集）

銀杏散る

この銀杏散られて遊ぼ散なれば　惟然（當座拂）

鎌が岡左の古樹のもとにて

有し代の供奉の扇や散る銀杏　其角（五元集）

銀杏踏みて靜かに兒の下山かな　蕪村（蕪村遺稿）

櫻紅葉（さくらもみぢ）（晩）

季題解說　櫻は夏にもわくら葉の紅葉せるを見ることとあれども、晩秋に殘りての紅葉は殊によろし。〔参照〕紅葉[illegible]　雜木紅葉[illegible]　春―櫻[illegible]

例句

櫻紅葉

丈艸九老日一

早咲の得手を櫻の紅葉かな　丈草（誰が家）

柳士亭

紅葉して見せけり留主の絲櫻　北枝（桃盜人）

紅葉してそれも散行く櫻かな　蕪村（新五子稿）

四五枚になりたる櫻紅葉かな　鼓竹（倦鳥）

白膠木紅葉（ぬるでもみぢ）（晩）

鹽膚木（ぬるで）　ぬで　ふしの木（き）　かちの木（き）

季題解說　山地に自生する漆樹科の落葉喬木にして、高さ二丈餘に達す。葉

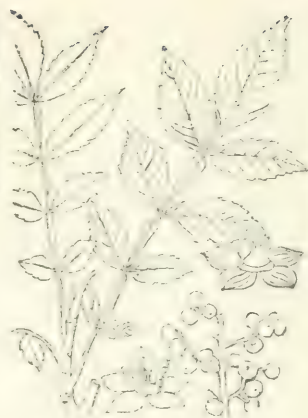
は羽狀複葉にして長さ一尺許、葉柄は小葉間に翅を有す。七八月の候、複總狀花叢をなして黄白色の小花を攅簇す。核果は闊扁にして黄褐色、表面に白色鹽の如きものを生ず。味鹹し。所謂木鹽にして漢名鹽膚木の由て來る所の物なり。此木に五倍子を生ず。紅葉特に美なり。（前項「紅葉」・雜

木紅葉」・「五倍子」）

例句

白膠木紅葉　取れば染まる白膠木の梢哉　古長（田植の日）

ちりかゝる中にぬるでの紅葉哉　左流（類題發句集）

五倍子（晩）　ふし

季題解説　漆樹科の喬木、白膠木の葉に一寸許の袋の如きものを生ず。これを五倍子と稱す。初めは綠色にして紅暈あり。後茶褐色となる。之は複葉の直葉部に一種の昆蟲の巣くひて成れるものにして、中に粉醭の如き蟲多し。五倍子に單寧の含有量多きを以て、蟲の殼を破りて出でざるうちに之を採取す。五倍子に裂あるものあり。其色綠紅相交りて美しければ「花ふし」と稱するも、單寧を含むこと薄きものなり。五倍子を生ずるを以て白膠木を一名「ふしのき」と稱す。（→白膠木紅葉）

柞（秋）　柞紅葉　椚　小楢

季題解説　「萬葉集」卷九、宇合卿歌に

山品之石田乃小野之母蘇原見乍哉公之山道越良武

とあり。其他古歌にはゝそ紅葉を詠めるもの多く、はゝその森・はゝその、など又其名の地名になれる所もあり。「ならは、なるゝ義、一物主名なり。ならは、なるゝ義へらる通音）其枝葉繁、よく人に從ひ、稍を束ぬるに堪ふるにとる。はゝそは、葉末廣くして、本ほそまるもて、ははその義にとる。（はほ通音）」とは山本溪愚翁の說なり。今、學者ははゝそを「こなら」の樹なりと云へり。「こなら」は其葉小さく、普通には小木多きものなれども、高さ三四丈にも達するものあり。山林に多き落葉喬木にして外皮蒼粗なり。葉は倒卵形にして長さ二三寸、緣邊に稍内向せる粗鋸齒あり。葉裏には帶白色の柔毛密生す。材は薪炭の料とす。又、此木に生ずる

實に非らずして、毬の如くなるものあり。其大さ梅實の如し。俗に「ならがら」と云ふ。此「ならがら」を煎じて、昔は黑色を染むるに用ひたり。

【參照】紅葉（モミヂ）　雜木紅葉（ザフキモミヂ）

【例句】

柞　　白山權現に詣

柞原我も御山の草鞋數　　春紅（柞原）

道のべや柞の宿におく火入　　青々（妻木）

柞紅葉　かゞやける柞紅葉や長者が田　　雨上（新類題發句集）

柹紅葉（かきもみぢ）（晩）

【季題解說】柹の葉は晩秋に紅葉す。その色、黃色・黃紅・眞紅相交りて明るく、甚美なり。【參照】紅葉（モミヂ）、雜木紅葉（ザフキモミヂ）、柹（カキ）

【例句】

柹紅葉　　落柹舍

やがて散る柹の紅葉も寢間の跡　　去來（芭蕉庵小文庫）

　　落柹舍主需の頃

尾根崩す鎌の尻手や柹紅葉　　可南女（初蟬）

後先に人聲遠し柹紅葉　　曉臺（曉臺句集）

柹紅葉遠く竹割るひゞきかな　　佳棠（五車反古）

鈞柹の干寐ねて染まる紅葉哉　　巢兆（曾波可理）

兒の群に我見の見えし柹紅葉　　露月（露月句集）

朧ヶ淵へ路尋ねえる柹紅葉　　華水（俳　　鳥）

梅紅葉（うめもみぢ）（晩）

【季題解說】梅の葉は、早く散るものなれども、晩秋に猶ありて紅葉せるは又別趣あり。【參照】紅葉（モミヂ）、雜木紅葉（ザフキモミヂ）、春―梅（ウメ）　夏―青梅（アヲウメ）

【例句】

梅紅葉

引直して又秋もよし梅紅葉　　洗隣（後日記）

散ればも二度の歎きや梅紅葉　　嵐雪（梅の牛）

合歡紅葉（ねむもみぢ）（晩）

【季題解說】荳科の落葉喬木。葉は互生し、二回羽狀複葉にして、多數の小葉よりなる、小葉は小形にして夜間は閉合す。晩秋落葉の前美しき紅葉を呈す。【參照】紅葉（モミヂ）、雜木紅葉（ザフキモミヂ）　夏―合歡の花（ネムノハナ）

名の木散る（なのきちる）（晩）

【古書校註】【滑稽雜談】九月　或云、名の木散るとは何々とその木の名をさし、散る、

落る等の詞を結ぶ句也。按に柞・檀・櫨なども結びてちるといふ事也。その外柳・桐・楸散るも勿論なれども、是は殊に脆きものにして、紅葉もせず初秋より散り初むるなれば一葉といへる題也。柞・檀・櫨等は紅葉して後にちる也。正しく「名の木散る」又は「色」を結ぶ「落葉」は柞・檀・櫨にても申すべきか。楓は霜に堪ふるによつて紅葉も諸木にすぐれて賞し、又散るも他木より遲し。故に押出して「紅葉散」は冬也。和歌には秋冬の別なし。紅葉かつちるは秋也。一説かつちる紅葉とは楓の葉に限るべからず、すべて諸木の紅葉の散りそむる事也。兩義好む所に隨ふべし。

【年浪草】八月。(按ずるに楓・櫨・柞等之類にて、櫨散る、柞散ると云ふべき物也。略して名の木散ると云ふなるべし。(一)然るを名の木散ると未練の俳士おしまかせて、發句にする輩あり、不レ可レ然。名の字に寄せて假り用ふるはあるべし、千梅もこの事如何の由言へり。(二)

註 (一)名の木散るは楓散る、柞散る等といふ類を總稱せしなれば、實際の句作に「名の木散る」とある筈なきなり。(二)蓮之輪の撰者。

季題解説 「名の木散る」と云ふを、季題の如くに標すれども、一箇獨立の季題にはあらず。楓・櫨・柞・楸・銀杏などの黄葉・紅葉の散るを引くるめて標するものにて、名ある木々の美しき葉の散るは皆秋なりと云へるものなり。木々の葉の散るを云へど、これは主として紅葉にかゝるが故に秋季なり。[參照] 桐一葉(初)。楸散る(仲)。柳散る(仲)。秋冬。落葉(冬)

桐一葉(きりひとは)(初)

一葉(ひとは)　一葉の舟(ひとはのふね)　桐の秋(きりのあき)(時)　一葉の秋(ひとはのあき)(時)

古書校註

【御傘】一葉ちるに、桐・柳・楸・柞など付くるは同意也。初秋に是等の木の葉落ち初むる故也。一葉衣も一葉とばかりも初秋也。(略二)

【滑稽雜談】七月「一葉」淮南子に云、一葉落而天下知レ秋。○連歌新式の心を考るに、桐・柳などの落る、紅葉かつ散る、皆落葉に一秋也。木の葉ちるに色を結びては秋也、朽葉に色を結びては冬也〔柳散・桐散〕

【年浪草】七月。一葉は桐をいひ、又和歌に柳による詞とも云へれど、桐を一葉ともいふ。一首によるか。

註 (一)以下一葉舟を一葉の身に假ひ、旅の詞とするの不可なる事を述べたれど今略す

季題解説 一葉落而天下知レ秋と云へる「淮南子」の語に據る。「一葉は桐をも柳をもいふ、句體によるべし」とは「栞草」に註せり。されど桐一葉と云ふべきを省略して、一葉と用ゐおれる事多し。水に落ちて泛べるを一葉舟と云ふ。桐の秋・一葉の秋は初秋を云ふ。[參照] 名の木散る(仲)

例句

一葉
桐の葉は落ちても下に廣がれり　鬼貫（鬼貫句選）
我宿の淋しさ思へ桐一葉　芭蕉（古歌仙）
風待ちし昨日の桐の一葉哉　其角（句兄弟）

井の柳昨日を桐の一葉哉　同（同）
けしからぬ桐の一葉や笙の聲　同（末若葉）
落かゝる桐の葉かろし單物　山川（其袋）
三葉散りてあとは枯木や桐の苗　凡兆（猿蓑）
煙草より果敢なき桐の一葉哉　支考（流川集）
されば秋桐の一葉のめげる哉　杉風（きれ〴〵）
桐の葉や落つる所を手にすゆる　苔蘇（杉丸太）
桐の葉や頼く桶の水のうけ　芙雀（千鳥掛）
鐘の聲鐘の聲桐の一葉落つ　白雄（白雄句集）
一葉二葉後は桐とも言はぬなり　同（同）
渡る瀬に嵐の桐の一葉かな　同（同）
音すなり筧の口の桐一葉　同（同）
何と見む桐の一葉に蟬の殼　白雄（白雄句集）
暦ほど音して桐の一葉かな　蓼太（蓼太句集）
褌の竿を落けり桐一葉　召波（春泥發句集）
落てから大きな桐の一葉かな　月溪（月溪句集）
桐一葉手を打返す氣色かな　成美（成美家集）
庵の戸へ拾ひ入れたり桐一葉　士朗（枇杷園句集）
桐一葉二葉三葉四葉忙しなや　一茶（七番日記）
桐一葉とてもの事に西方へ　同（同）
桐の木やてきぱき散ッてつんと立つ　同（同）
桐一葉蠅除けにして寐たりけり　同（一茶新集）
桐一葉裏も表も青かりし　蒼虬（蒼虬翁發句集）
つくねんと坐し居れば桐の一葉落つ　子規（全集）
夏瘦の骨にひゞくや桐一葉　同（同）

一葉

[illegible]庵にかへりて住化ける僧を聞て
寄るべをいつ一葉に蟲の旅寐して　芭蕉（東日記）
手拭の筏より洩る一葉かな　其角（華摘）
水の蜘一葉に近く泳ぎ寄る　同（砥並山）
春日野や風越し猿の一葉川　同（五元集拾遺）
宗祇の廟
一葉落ちいくらも落ちて月夜哉　嵐雪（住吉物語）
石塔を撫でゝは休む一葉かな　同（杜撰集）
辭世
一葉散る咄一葉散る風の上　同（風の上）
落ざまに影のある〳〵一葉哉　雪芝（初便）
足代に傳うて落る一葉かな　同（續山彦）
桜島居の寺にて
一葉散る音姦しき斗りなり　仙化（曠野）

一葉

日光宮
笠脱げば天窓撫行く一葉かな　桃隣（陸奥衛）
日のうちは今日も暑うて一葉哉　收童（續有磯海）
船作る鑿の𨦟に一葉かな　几峰（西華集）
手に來ると思へばそるゝ一葉哉　杜若（初便）
先づ一葉手もなう散るや飯時分　使帆（つばさ）
影連れて一葉散りけり月の初　野坡（六行會）
一葉散る影やしろりと蛙の目　土芳（蓑蟲庵集）
椒子立數へ當りて一葉哉　也有（蘿葉集）
轎入に莚敷かせて一葉哉　同（同）
蟲喰もなき音撰りて一葉哉　同（同）
千葉殿の庭にも今朝は一葉哉　同（同）
三日月の射て落したる一葉哉　同（同）
敏行は見外されたる一葉哉　同（同）
今朝一葉散るや暦の峠より　同（同）
門番の直に掃たる一葉哉　同（同）
文月の返しに落る一葉かな　千代尼（千代尼句集）
曙の青き中より一葉かな　蓼太（蓼太句集）
一葉さへ重なり易き日數かな　太祇（太祇句選後篇）
活過ぎし脛を叩けば一葉哉　一茶（享和句帖）
あらかんと二人寐て見る一葉哉　同（同）
ふはくとして幾日立つ一葉哉　同（同）
今朝ほどやこそりと落ちてある一葉　同（七番日記）
寐た犬にふはとかぶさる一葉哉　同（同）
狗が敷て寐まりし一葉哉　同（九番日記）
かざし來て馬驚かす一葉かな　梅室（梅室家集）
三葉の内一葉落けり今年桐　同（同）
もげやらを二階で見たる一葉哉　同（同）
置床の團扇に並ぶ一葉かな　蒼虬（蒼虬翁發句集）
大寺の屋根に落ちたる一葉かな　鳴雪（鳴雪句集）

一葉の舟
秋や來るのう〳〵それなる一葉舟　宗因（梅翁宗因發句集）
類船と見ゆるやひと葉ふた葉船　同（同）

桐の秋
懸て待つ伊豫簾も輕し桐の秋　其角（雜談集）
絲きれて琴にも知るや桐の秋　蓼太（蓼太句集）

槲散る（初）

古書校註

【栞草】〔槲散る〕七月。御傘「柏ちるは夏なり。無言抄に秋と有るは僻事

か。かやうの常盤木の散るは夏也。（中略）今此國の人の申す柏は、初秋に紅葉してちるものといへり。此註につきて無言抄などにしるされたりとみえたり。増山井夏の部に貞徳説夏なり、又一説秋也。貞享式 此柏は御傘に説ありて、論語の松柏を證文とし、畢竟は雑となせども、爰には散字と結びて決して秋と定むべき也。（下略）

季題解説 古歳時記には「柏散る」として初秋の季とせり。然るに柏は常緑樹にして、常盤木の落葉は總て夏の季と定められたるに因り諸説あり。此槲葉は菖蒲の節句の「かしは餅」に用ふるものにて、普通五六寸乃至七八寸に及ぶ。長楕圓形にして、周邊波濤狀の大鋸齒あり、側脈揚起し相並んで齒頭に達し、其葉潔きものなれば、散ると云ふに秋意あるべく、山毛欅科の槲に改めて初秋の季に存置す。参照 名の木散る 夏―柏落葉

例句 槲散る

杳音の垣にひゞくや散るかしは　歌川（文車）

神酒あけて戻る道にも槲散る　碓嶺（発句手爾葉草）

参考 かしは Quercus dentata, Thunb.（ぶな科）山地に自生すれども、亦人家に栽植する落葉喬木なり、葉は濶大なる倒卵形にして、長さ四五寸に達し、邊緣に深波狀の鈍齒を有し、下面に褐色の毛を生ず、此葉長く枝上に存し、翌年嫩芽開出するに先ちて脫落するを常とす、四五月頃葉と共に黃褐色の花を開く、雌雄花を異にすること他と同じ、雄蕋は黃褐色を呈し、實は頭部稍圓く、殼斗は淺くして平椀狀をなす、鱗片長し、葉は餅を包むに用ゆ。

柳散る（初） 散る柳

季題解説 柳の葉の散るを季物として詠ずるは、先づ到る秋風を感ずるが故なり。参照 名の木散る 春―柳 夏―葉柳 冬―枯柳

例句 柳散る

加賀全昌寺

庭掃て出るや寺に散る柳　芭蕉（奥の細道）

道々庵の留守

主待つ春の用意や散り柳　桃隣（有磯海）

一反の畑や柳の散り所　同（古太白堂句選）

散る影に猶散る影や散り柳　土芳（蓑虫庵集）

散れば出て亂れ蜻蛉や散り柳　同（同）

行馬の笑ふにも散る柳かな　李東（卯辰集）

旅せずに旅の心や散る柳　荻子（初蟬）

遊行柳のもとにて

行違ふ袖のさはりや散る柳　てう女（同）

柳散清水涸石處々　蕪村（蕪村句集）

柳散る

船衛せて見れば柳の散る日かな　太祇（太祇句選後篇）

柳散るや少し夕の日の弱り　曉臺（曉臺句集）

散にけり柳縮ぬる時なれば　闌更（半化坊發句集）

忙がしや遊び過して散る柳　蓼太（蓼太句集）

古御所の寺に成りけり散柳　召波（春泥發句集）

さゝがにの結びとめるや柳の葉　諸九尼（諸九尼句集）

楸（初）

あかめがしは　楸散る

【季題解説】楸は「きさゝげ」なりと云ふ。「きさゝけ」は紫葳科の落葉喬木にして、高さ三四丈に達す。枝を分つこと往々三椏なり。葉は廣卵形、又は圓形、三個の小裂片あり。長き葉柄によりて三個つゝ輪生す。夏至の頃、枝梢上に圓錐花序をなして唇形花を開く。胡麻の花に似て黄白色、紫點あり。花後十八寸の如き長き莢の實を結び、聚りて垂下す。故に「きさゝげ」と稱す。莢中の種子は扁平にして兩端に絲の如き突起物あり。羅願の書に室屋間有二此木一餘村皆不二復震一とあり、世にこの木を「雷電ぎり」と呼び、又「かみなりさゝげ」とも稱し、雷除になるとて往々人家に之を栽う。楸の葉は七夕乞巧奠に用ゐ、楸の板は棊盤に用ゐたり。

楸に就ては古來異說あり。「大和本草」には「あかめがしは」を楸とす。然れども「漢歌に楸線とあるは、きさゝけの長莢を見て名づくる明なり」と山本溪愚翁は云へり。

【實作用注意】「栞草」其他、「きさゝけ」を楸とするもの多けれど、楸は「あかめがしは」なり。【参照】名の木散る　人事「楸の葉を戴く」

【例句】

楸

門楸あかきより蜩をつりにけり　青々（妻木）

末枯（晩）

【古書校註】

【御傘】末枯　秋也。草葉のそと色付きて枯るゝ事也　裏枯とばかりはせず、薗・野邊・原・庭などの文字を入るゝなり。（中略）草の枯る・枯野などは冬也。（下略）。

【年浪草】九月。　萩の枝折に曰、草木の上葉の枯るゝ也、下葉に非ずと也　梁元帝纂要秋草曰二衰艸一、木曰二疎木一か如く、草木の衰へたる風情にや。（一）鏡裏み末枯をゝ秋の野に淋しく有風の音哉」。又うら枯、裏の字にあらず、末の字なるべし、上の字の心に也。又萬葉に浦乾とも見えたればうらにさして心なきにや、草の色づき枯るゝなるべし。（二）萬葉「我背兒爾吾戀居者吾屋戸之草佐倍思浦乾來　柿本人丸」。

註 (一) 專ら去嫌に關する事なれば今略す、下略の部分亦同じ。(二) らは梢なり。

季題解說 晩秋草葉の末より枯るゝをいふ。『御傘』に「草葉のそと色付てかゝる事なり」と說き、『栞草』に、「青藍云、木の梢の枯たるをも、うら枯とこゝろうる者あれどわろし。御傘の文體にて草に限れることをしるべし」と註せるを正しとすべし。又「裏枯」と書くは誤とすべく、上の字の心にて末の字を當つるがよろし。眺め淋しくして、しかも色彩のあるところ、これ亦秋の錦なり。又末枯と云ひて時候の感もあるなり

例句

末枯

末枯や馬も餅くふ宇都の山　其角（句兄弟）
（傳ニ、小坂上京ノ）
末枯に花の袂や女ぼれ　同（五元集）
末枯や茶滓こぼるゝ草の垣　北枝（草苅笛）
末枯に千疋連れや猿の色　浪化（宗之生）
末枯るゝ事の早さよ茄子賣　桃隣（古太白堂句選）
末枯や小町が歌の女郎花　也有（蘿葉集）
末枯や根からも枯るゝ蟲の聲　同（　）
末枯やからき目見つる漆の樹　蕪村（蕪村句集）
末枯の中に道ある照葉かな　同（新五子稿）
末枯や西日に向ふ鳩の胸　曉臺（曉臺句集）
何草の末枯草ぞ花一つ　同（　）
末枯や迯ぬ水には丸木橋　蓼太（蓼太句集）
末枯や坪前栽も世のごとく　白雄（白雄句集）
末枯や舟は下るぞ面白き　成美（成美家集）
末枯や撞きそこなひの鐘の聲　同（　）
草の戸や末枯知らぬ水の味　乙二（松窓乙二發句集）
末枯も一番早き庵かな　一茶（旅日記）
末枯や諸勸化入れぬ小制札　同（一茶發句集）
末枯や布施の魚買ふ小商人　鳳朗（鳳朗發句集）
末枯や竹積む馬に道ゆづる　月斗（同人）
うら枯の町中に見る畠かな　なみ女（なみ女遺稿）
末枯の中に花もつ杜若　風餐樓（同　）
末枯にながれいでたる田水かな　素史（穂麥）
洲の岬も末枯あかく雨の中　味子（庚午句鈔）
末枯の朝貞小さし葉も花も　青々（倦鳥）

竹の春（中）

古書校註 【年浪草】竹譜に曰、竹は八月を以て春となす。○筍譜に曰、竹は八月之

を小春といふ。其去らんと欲し寒來らんと欲す。氣至りて來る、故に小春といふ。

季題解説　竹譜・筍譜等に、竹は八月を以て春とすと云へるより、仲秋を竹の春とす。

實作注意　新竹生長して、盛んなるを云ふなり。竹につきて云ふ詞なり。

【對照】春—竹の秋。

例句

竹の春

八月朔日の
たつ日から梅こそ匂へ竹の春　鶯杖（伊丹發句合）

壽養の圖に
清げなる老の操や竹の春　曉臺（曉臺句集）

紅葉する木にたてあふや竹の春　素丸（素丸發句集）

冷やかな陽の戻りかな竹の春　野芙蓉（壬申句鈔）

竹の實（晩）

季題解説　禾本科の一族に稀に花をつけ秋結實することあり、鱗皮におほはれたる米の小なる如き實にして、其の熟したるものは食ふに堪ゆ。

色不變松（晩）

季題解説　晩秋に至れば諸木紅葉し、或は凋落の狀を見するにつけて、松の色變へぬ樣の、いよいよ思はるゝを云ふ。松の花は春、松の落葉は夏にて其他は四時の變化を直にうけぬが如き松の常磐なることを、他物の變るにつけて此時特に思ふ心より、色不變松と云ひて晩秋の季とはなせるものなり。【對照】春—松の花　夏—松の落葉

例句

色不變松

蝶夢庵の秋を見に至り、中に出家の[illegible]に住むといふに
色かへぬ松を土産や小倉山　芙雀（[illegible]）

色變へで空をさしけり松の針　晴山（[illegible]句集）

色かへぬ松や朝氣の露時雨　さかへ（あきの錦）

色かへぬ松にかたまる日和哉　繭昌（[illegible]）

西津な旅館
色かへぬ松や主は知らぬ人　子規（子規句集）

色かへぬ松に里わの空の藍　青々（倦鳥）

新松子（晩）

青松毬

古書校註　【年浪草】九月、時珍曰、海松子、一名新羅松子、その樹中國の松樹と同

じ、たゞ五葉一叢の者なり。毬に子を結ぶ、大さ巴豆の如くして三稜あり、一頭尖れり。松子、揆る（？）榛の字か、榛とも訓す。青榛を大坂俚語に新松子といふ。

季題解説 松杉科の常綠喬木にして、春花を開く、新松子は今年結びたる松の實をいふ。

實作注意 「松の實」「松毬」は無季なり。松子の新しきを季とするものなれば、新松子又は青松毬と云ふなり。〔參照〕春―松の花

例句

新松子

播磨舒桐松
かしこまる膝の松子ぞこぼれける　才麿（椎の葉）
松の子も吹たまりけり鵆の海　成美（隨齋句藁）
松かさよ松露よ巷の灯は細し　士朗（枇杷園句集）
松かさをもろ手にくゝる女哉　青々（妻木）
新松子にあたり炙ぐ岬の庵　同（倦鳥）

木の實（晩）

木の實降る　木の實雨　木の實時雨

古書校註

【栞草】 九月。菓物秋多し、故に名をさゝず木の實といへば秋なり。（一）

註（一）滑稽雑談の說これと同じくなほ「草の實之に同じ、作者心得べし」といへり。又「わくかせわ」に「九月。木の實（キノミ）、是諸木の實の事に非ず、榧の實也。畿内・江東の方言、榧の實を木の實といひてその名をなの様に用ふ」とあるは全く別なり。

季題解説 秋熟する木の實、即ち栗・團栗・椎の實・椋の實・橡の實等の乾菓を總括していふ。『栞草』に「菓物秋多し、故に名をさゝず、木の實といへば秋なり」と註せるに從ふべし。〔參照〕栗・團栗等各種の木の實。

例句

木の實

智水子別墅にて即興
籠り居て木の實草の實拾はゞや　芭蕉（後の旅）
女夫睦しくて年頃子なき事を歎く人に
猿の子よ果物入れな耳の穴　舍粘（曉山集）
思ふ葉は思ふ葉に添へ秋菓　其角（五元集）
書山亭にて
守人なき木の實食みけり山鳥　闌更（半化坊發句集）
命長き樹や殊更に實を結ぶ　同（同）
猪の庭踏む音や木の實降る　太祇（太祇句選後篇）
岩の笹衣の袖の木の實かな　曉臺（曉臺句集）
童のよい錢拾ふ木の實かな　素丸（素丸發句集）
柴舟の底に三ツ四ツ木の實かな　一棟（田毎の日）

木の實　一つあれば三つ四つ拾ふ木實かな　白雲郷（丁卯句鈔）
　蝸牛とまぎれ葉中の木の實かな　古泉（戊辰句鈔）

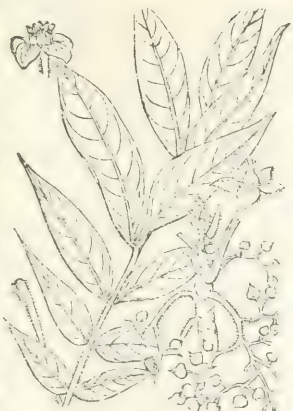
杉の實（晩）

季題解説 松杉科の常綠喬木にして、高さ數十尺、周圍丈餘に達す。葉は小形の針狀をなし、少しく彎曲す。春雌雄花を同株に生じ、雌花は小球狀をなして綠色を呈し、雄花は小球狀をなして黃粉を吐く。秋指頭大の毬果を結び、成熟すれば鱗片拆けて內に藏する種子を飛散す。此樹は觀賞用として栽培し、又生籬に作り、木材を建築、器具等の用に供し、樹皮にて屋根を葺き、葉は線香を作るに用ひらる。〔參照〕木の實（秋）春—杉の花（春）

例句 杉の實　日々好日と杉の實干してあり　露月（露月句集）
　山にて
　杉の實に用あり一束ろ小供かな　蜃樓（漁火）
　よしの人の手や杉くさき杉の毬　小酒（杉の實）

櫨の實（晩）　黃櫨木の實

古書校註【御傘】櫨。秋也、連歌には一座一句なれば誹には二句すべし。（下略）

季題解説 櫨は卽ち黃櫨木なり。漆樹科の落葉喬木にて暖地に自生する山木なれども、又果實より採蠟の目的のために栽植するものあり。秋の紅葉の早く美しきを以つて庭園にも此を植う。高さ丈餘に達し、漆樹に似たれども枝を分つこと多し。葉は奇數羽狀複葉にして長さ七八寸乃至一尺許。小葉は楕披針形、五乃至七にして對生す。總柄及小葉柄は微紅色を呈して淨毛あり。葉邊少しく下反す。花期は五六月頃。花梗多枝を分ち黃綠色の小花を圓錐花序に綴る。實は淡黃白色、小豆大にして稍扁狹なり。此木彈力あり弓材に適す。之を「はじ」と呼ぶは彈くの意にして、『古事記』神代卷に天之波自弓の事見ゆ。今專ら「はぜ」と呼ぶは「はじ」の轉訛せるものならん。又天子の御袍に黃櫨染と稱するものあり。此木の木汁深黃なり、蘇枋とを以て染む。又山黃櫨木と云ふものあり。木の若き時は葉に粗鋸齒ありて老成木には鋸齒無し。

【實作指導】 櫨紅葉の秋季たることは勿論なれども、櫨の木とばかりにては季を感じ難し。實あるを詠みて季とす。次に櫨の實を採集して外殼を去り、絞りて木蠟を製す。木蠟は蠟燭の原料となるほか、外國にては石鹼・皮革の艶出し・靴墨等に使用さる。產地は福岡縣・愛媛縣・熊本縣・佐賀縣等にして總產額は年凡そ壹千萬斤にて此半額は外國へ輸出さる。輸出先は米・英・獨・佛・印度等なり。【參照】 櫨紅葉（ハゼモミヂ） 木の實（コノミ） 夏—櫨の花（ハゼノハナ）

橡（とち）の實（み）（晩） 栃（とち）の實（み）

【古書校註】 【獲纏輪】 九月。山木にて大木あり、葉の大さ七八寸、實は栗より少く大也。餅に作り糊として、凶年の食とす。木は斑文あつて、諸の器に作り箱とす、甚だ美なり。木曾の山中に多し。是を麵とするに、その粉を熱湯にてこね調へ、温飩のごとく棒に捲いて温なる内に急にこれを伸す。冷ゆれば堅く縮つて伸びず。その手廻し甚だ急なる故に、俗諺に橡麵棒（トチメンボウ）ふるといふは是なり。

【季題解說】 山地に多き七葉樹科の喬木、幹は周圍八九尺、高さ七八丈に達するものあり。葉は掌狀複葉にして通常七箇の小葉あり、大小不等なれども皆急に鋭尖頭をなし、不等の鋸齒あり、五月頃黃褐色を呈する多數の花を密攢して大形なる圓錐花叢となす、花後蒴果を結び、中に光澤ある大種子を生ず、山人はこの種子を採つて餅、團子等を作る。【參照】 木の實（コノミ） 人事—橡餅（トチモチ） 夏—橡の花（トチノハナ）

【例句】

橡の實　木曾の橡浮世の人の土產かな　芭蕉（更科紀行）

（家龍・餞別）うらやまし君が木曾路の橡の粥　路通（薦獅子集）

橡の實や幾日ころげて麓まで　一茶（發句題叢）

榛（はし）實（はしのみ）（晩） 蓁栗（はしばみ）

【古書校註】 【滑稽雜談】 九月「榛」時珍曰、榛樹、低小荊の如し、叢生す。冬の末花を開き櫟の花の如し。條（エダ）をなして下垂す、長さ二三寸。二月葉を生ず、初生（一）の櫻桃の葉の如し、皺紋多くして細齒及び尖りあり。その實は苞をなし三五相粘く、一包に一實、實は櫟の實の如く、下壯に上銳なり。生は靑く熟すれば褐なり。その殼厚くして堅く、その仁白くして圓く。大さ杏仁の如し、また皮に尖りあり、然れども空なるもの多し。故に諺に十榛九空といふ。

【註】（一）芽生の雙葉（フタバ）。

【季題解說】 榛は二三丈にも達する落葉喬木なり。其果實、秋に熟するを以て

榛を晩秋の季と定むるものなり。はしばみの實は葉狀の總苞によりて下部を圍まれ、形圓くして尖り、晩秋に熟して褐色となる。殼皮堅く、その仁白し。生食するに栗の味あり。或は搾りて榛油を取る。はしばみは榛柴實と云ふをつゞめて稱ふるものか。【參照】木の實(秋)　春―榛の花(春)

【例句】
榛の實　榛をこぼして早し初瀬川　梅里　(類題發句集)

椋(むく)の實(み)（晩）　むくえのき　おむく　樸樹(ぼくじゆ)

【古書校註】【滑稽雜談】九月。大和本草に云、椋子樹、その葉山吹に似たり。葉にいら有り、用て木・竹・骨・角を磨く、木賊の如し。實の大さ楝子より小也。十月に熟して色黑く味甘く食ふべし。

【季題解說】各地に自生する楡科の落葉喬木、幹の高さ數丈に達し樹形けやきに似たり。本樹の樹皮は帶黃青黑にして灰色の斑點を有し、若樹は稍粗き皺あり、老樹には外皮に裂目を生じ、鱗片狀をなして剝脫す。葉は楕圓形又は卵形にて先端尖り、表面頗る粗糙にして緣邊に鋸齒あり。春日葉と共に淡綠色の雌雄花を出し、秋日大豆大の球狀果を結び、熟して暗黑色を呈し、頗る甘く生食に適す。よく此樹に菌を生ず。椋茸之なり。【參照】木の實(秋)　春―椋の花(春)

【例句】
椋の實　椋の實やむら鳥のこぼし行　淡水　(新類題發句集)

【植物解說】むくのき Aphananthe aspera, Planch. 一名 むくえのき (にれ科) 各地に自生する落葉喬木にして、幹の高さ數丈に達し、樹形ケヤキに似たり、葉は長き卵形にして先端尖り、葉面頗る粗糙にして其支脈はエノキより多く、邊緣に鋸齒を有す、春日葉と共に淡綠色の雌雄花を出す、秋日大豆大の球狀果を結び、熟して黑色を呈す、果實の味甚だ甘く、兒童之を採食す。葉は物を磨くに用ゆ。

櫟(くぬぎ)の實(み)（晩）

【古書校註】【復編輪】九月。櫧に似て花は栗の如し。實は椎より少し大也。木硬くして多く船の櫓に作る。實を以て秋とす。

【季題解說】山野に自生する落葉喬木。初夏栗に似たる穗狀の花を開き、秋やや球形の堅果を結び、淺き殼斗を具ふ。之を團栗とも云ふ。材は主に薪炭に供す。【參照】木の實(秋)　團栗(秋)　夏―櫟の花(夏)

【例句】
櫟の實　夕日出し平にこしけり櫟の實　青々　(倦鳥)

石榴の實（晩） あらゝぎ

【季題解説】石榴の雌花は壜形をなし、頂に一小孔を穿ち、中に裸胚珠を藏し、又外部を被ふに數多の小鱗片を以てせり、成熟すれば壜形の盤肥大して肉質となり、深紅色を呈して味甘し。【參照】木の實（ﾉ）、夏―石榴の花（ハナ）

團栗（晩）

【古書校註】【箋註輪】九月。槲の子也。數種あり。ドングリは槲の一種、小楢といふ木の實也。椎に似て大なり。味澁く食ふべからず。凡そ橡（トチ）・櫧（カシ）・櫟（クヌギ）・楢（ナラ）一類少異にして文字も書々混じ用ふ。栩（トチ）・樫（カシ）・椚（クヌギ）・楢（ナラ）・鉤栗（イチヒ）などの字通俗也。俳諧には俗字にても世間見覺えたる字を用ひて宜し。

【季題解説】櫟の實なりといふ説、櫧の實なりといふ説、枹の實なりといふ説、又殼斗科に屬する植物の實の總稱なりとする説もありて一定せず。つるばみは古名なり。小兒竹を貫きて獨樂とし玩ぶ。【參照】木の實（ﾉ）、夏―櫟の花（ハナ）

【例句】

團栗

團栗の落て飛けり石佛　　爲有（鳥の道）
團栗のころび合たり雀溜り　　壯年（有磯海）
團栗の落ていごかぬ黃楊の中　　杜若（鳥の道）
團栗の笠かぶりたる小鳥かな　　紫道（初便）
團栗や熊野の民の朝餉（アサガレヒ）　　凡兆（荒小田）

介甲

喰物もありや松尾の椎團栗　　惟然（三山雜集）
團栗やころり子供の言ふなりに　　一茶（一茶句帖）
團栗の落ちずなりたる嵐かな　　子規（子規句集）

楢の實（晩）

【季題解説】楢の實は楕圓形にして、鱗片細小なる殼斗内に包まれ、十月頃成熟す。果肉は食用とす。【參照】木の實（ﾉ）

【例句】

楢の實

金鎚に負けぬ實持ちて、など此東の山の村雨に濡れたる

笠敷て着る事知らず小楢の實　　乙二（松のゝえ草稿）

櫧の實（晩） 樫（かし） 團栗餅（どんぐりもち）（人事）

【古書校註】【滑稽雜談】九月。時珍曰、櫧子（カシノミ）、（中略）三四月白花を開き穗を成す、栗

の花の如し。實を結ぶ、大さ櫧の子の如し。内仁は杏仁の如く、生食すれば苦く澁し。外に小苞あり、霜の後苞裂けて子墜つ。子は圓く褐色に尖れり、大さ菩提子の如し、煮熟すれば甘みを帶ぶ、また磨粉とすべし。

【季題解説】　殻斗科の常緑樹にして、春の末穗をなして花を開く。實は小圓形にして頂尖り、熟すれば黄褐色となる。實は澱粉製造に用ひ、又餅に作る、之を團栗餅といふ。參照　木の實（秋）

【例句】

樫の實

樫の實と一つに落たる鶉かな　　金山（雪の原）

さびしさは櫪の實落る寐覺哉　　蘆夕（曠野）

樫の實のたゞにこぼれて里の山　　無山人（庚午句鈔）

檀の實（晩）　檀紅葉　山錦木

【季題解説】　檀の實は蒴果にして稍方形を呈し、秋熟すれば深く四裂して紅肉を露出す。又晩秋の紅葉美なり。一に山錦木とも云ふ。檀紅葉及檀の實を以て秋季とす。參照　木の實（秋）　夏―檀の花（夏）

栴檀の實（晩）　楝の實　金鈴子

【古書校註】【篗纑輪】九月。楝（アフチ）の子也。せんだんは俗稱也。金鈴子・川楝に並に同じ。

【季題解説】　楝の實を云ふ。實は楕圓球形の核果なり、徑五六分、晩秋熟して黄色となる、落葉の後、數千顆の離々として樹に存するも面白し。寒を經て殘れることあり。此實は煎じ用ゐて皮膚病に效ありと云ふ。漢稱、金鈴子。參照　木の實（秋）　夏―楝の花（夏）

漆の實（晩）

【季題解説】　漆樹科の落葉喬木、うるしの木の實なり。扁圓歪形にして、大さ二三分、黄褐色にして光澤あり、圓錐形の總をなし、一穗に數十を着け下垂す。十月頃成熟す。この實は乾して漆蠟を搾り、殘滓は牛馬の飼料に適し、これを與ふればよく肥大し、毛色極めて潤美となる。參照　木の實（秋）

夏—漆掻く（ウルシカク） 漆の花（ハナ）

黐（もち）の實（み）（晩）

【季題解說】 黐の實は圓形にして晩秋赤熟す。稀に黄色なるものあり。又此樹の皮より鳥黐を製す。鳥黐は此樹皮を削り、久しく水に浸したる後、湯に煮て製煉す。〔同題〕木の實（ノ）、夏—黐の花（ハナ）

柾（まさき）の實（み）（晩）　はひまゆみ　はまゆみ　杜仲（とちう）

【古書校註】 【栞草】九月、和漢三才圖會、冬青、その葉冬もまた正（マ）青く光澤あり、圓長にして尖らず。軟なる鋸齒あり。夏小白花を開き、秋實を結ぶ。生は青く熟すれば紅、自ら裂けて中に白子あり、枝をさして活き易し。藩籬（カキ）とするに堪へたり。

【季題解說】 柾の實は朔果にして、熟して自ら三四裂し、赤肉あらはれ肉中に核あり。花に勝りて美なり。

【實作注意】 「栞草」に冬青（モチ）の實を「まさきの實」と訓せるは「眞青木（マサヲキ）」の意にてせるものならんも、冬青の實（其條參照）と混交して紛らはし「まさき」は柾、若くは正木を正とすべし。〔同題〕木の實（ノ）、夏—柾の花（ハナ）

【例句】

柾の實　松笠も色は變るに柾の實　呂生（新類題發句集）

榧（かや）（晩）　榧（かや）の實（み）　新榧（しんがや）

【古書校註】 【年浪草】九月「新榧（しんかや）」（一）和漢三才圖會に曰、披子・赤果・玉榧（カヤ）・玉山果、俗にいふ加（カ）也。和州吉野の產最も佳なり。又倭名抄に柏を以て榧の異名とす、柏と栢と同字なる故に俗栢を以て榧の訓となすは誤れり。

註（一）〔山井・滑稽雜談・栞草等は「榧」の季題に出せり〕

【季題解說】 多く深山に自生する一位科の常綠喬木、高さ七十尺餘に達す。葉は扁平にして針狀をなし、先端尖り臭氣あり。花は單性にて雄花と雌花とは異株に生じ、四五月の候に開く。雄木は其枝上に向ひ、雌木は枝は横に出て下垂す。實は卵狀をなして長さ一寸弱、內に兩端の尖りたる核あり。秋末熟して淡褐灰色を呈し、中に白色の仁あり。脂肪多く食用とし、又油を搾る。實を以て秋季とす。新榧は初めて市に上るを云ふ。和州吉野の產最佳なるを以て吉野榧の名あり。〔同題〕木の實（ノ）

【例句】

榧　[illegible]の[illegible]古[illegible]の山の木の實見よ　嵐雪（其袋）

淋しさや吉野を榧に思ふ頃　桃隣（古太白堂句選）

新榧　新榧ややがて佛の細工もの　其蒼（除の駒）

季題解説　かや Torreya nucifera, Sieb. et Zucc.（いちゐ科）深山に自生多き常緑喬木なれども、又實用として庭園に栽植せらる、幹の高さ數十尺に達し、葉は濃緑色の扁平針状にしてモミに似たれども、其端尖りて後の矢筈狀をなすと等しからず、雌雄異株にして四月頃開花し秋日實を熟す、實はナツメ狀をなして長さ一寸弱、内に兩端尖れる核あり。

だもの實（晩）

たもたぶ　藪肉桂　天竺桂　しろだも

古書校註　【年浪草】九月〔[illegible]樹の實〕○和漢三才圖會に曰、樟（たぶ）、赤樟・黒樟二種あり、赤き者は實赤く赤黒き者は實赤黒し ○大和本草に曰、タブの木方土によりダマともダモとも云ふ、漢名知れず、桂の類也、葉も桂樹に似て香氣少なし、冬赤き實なり、大さ木通子よりやゝ小也、花樹をダモと謂するは誤れりと云々、ダモ樹の實と桂の類を有[illegible]く處の如し、俳書九月にダモと出て又樹油の實と出たり、然れば則ち樟の説を用ふべし。

季題解説　古来種々異説あり、一説に藪肉桂のことなりといふ。藪肉桂は樟科の常緑喬木にして暖地に生じ、高さ三四十尺に達し、樹皮は暗黒色を呈し、葉は全邊楕圓形にて、先端尖り長さ三寸許、革質にて表面は稍褐青色を呈し、裏面は稍灰青色を呈す、此葉を蒸溜して香油を採る、初夏淡黄の小花を葉腋花序に簇生し、後木黒色の果實を熟す、肉桂の帶辛甘味あると異り、樟・楠などに似たる強き香氣あり、藪肉桂は一に天竺桂とも云ふ、又一種しろだもと稱するものあり、概形藪肉桂に似て高さ二三丈、秋末褐色の小花を開き、翌年冬季に至り一二三分許りなる赤色球狀の果を成熟す。

胡桃（晩）

新胡桃　姫胡桃　鬼胡桃　澤胡桃　河胡桃　山胡桃　化香樹　野胡桃

古書校註　【滑稽雜談】九月、大和本草に云、胡桃に三種有り、鬼胡桃は圓く皮厚し、本草に山胡桃といふ、姫胡桃は扁くして皮薄し、味鬼胡桃にまされり、鬼胡桃は形醜し、姫胡桃は形美し、又朝鮮より來る者、殼薄く肉多し、最も佳品となす。

季題解説　胡桃に數品あり、核果大さ七八分、卵圓形にして極めて硬く、表面に凹凸の皺あり、核は皮のみにて肉なし、核中に彎曲せる仁あり、之を炭火に焙り、水に入れ、その稍開きたる所を小刀にて截り剝ぎ、仁を出して食用とす。新胡桃は今年はじめて市に上れるものをいふ。又「てうちぐるみ」と云ふもの、胡桃中の最大なるものにて、其殼軟く手にて割り得る

より「てらちぐるみ」と稱す。實は味美にして生食するに適し、西洋料理にては食卓上の乾果として用ひらる。胡桃の材は器具を作るに用ふ。上古蝗蟲を避くる禁厭法として、胡桃を薏子、蜀椒等と共に之を田の畔に置たる事あり、是其子殻の堅硬なるを以て蝗蟲を驚かすに足ると信ぜられしによるものならん。又胡桃の果皮及葉を以て魚を毒する事あり。

【實作注意】季題として俳句に云ふ胡桃は、必ず新胡桃の事を云ふなり。【參照】木の實(コノミ)、夏―生胡桃(ナマグルミ)

【例句】

姫胡桃　山深みそれにうき名よ姫胡桃　園女　(其袋)
山雀の思ひ砕くや姫胡桃　素丸　(素丸發句集)

鬼胡桃　夜嵐や破風を打ぬく鬼胡桃　探梅　(新類題發句集)

椎の實(しひのみ)（晩）

落椎(おちしひ)　まてばしひ　椎の葉(しひのは)　椎の秋(しひのあき)（時候）　椎拾ふ(しひひろふ)（人事）

【古書校註】【御傘】椎、紅葉せぬ木なれども、實故其名をもてあつかふ木なれば椎とばかりも秋也。實も葉も柴も秋也。

【増山井】九月「椎」椎柴　堀川百首に椎柴を冬の題に出せり。その故にや冬といふ一説有り。然れども貞徳は實につきて椎は秋季を持つからに、椎柴も秋也といへり。落椎勿論秋なり

【年浪草】「椎柴・椎葉」三秋。「椎」九月　(一)

註　(一) 栞草には椎の實・椎柴・椎の葉共に九月之部に出せり。

【季題解説】椎の果實は長卵形にて尖り、嚢狀の總苞に被包せられ、晩秋に至り熟すれば三裂して子實を墮す。椎の實是なり。此子實は焙り焦して食すべく、栗に次いで佳味あり。まてばしひあり。此果實も亦概ね椎に類似し只殼斗の椎よりは淺き椀形をなし、果實の長さは凡一寸程に達するを異る點とす。晩秋熟す。炒りて食用に供し、味稍々椎の實に劣れども煮て食すれば佳味なり。又餅に作る。俳句には實を以て秋とす

【實作注意】因に「栞艸」に椎柴・椎ノ葉を椎ノ實の條に出し、一季吟云、堀川百首に椎柴を冬の題に出せり。其故にや冬とする一説あれど、實につきて椎は秋季を持からに、椎柴も葉も實も秋といへり」とあり。椎柴は別に掲出す。椎の葉には特に季感なきやうなれど、笥に盛る飯を椎の葉に盛ると云へる歌もあり。折りにふれては秋の感を寄せて詠ずるも亦可なるべし。【參照】木の實(コノミ)、人事―椎柴漬　夏　椎の花(ハナ)

【例句】

椎の實　有明や二斗とる椎の梢より　沾徳　(沾德句集)
問來かし椎煎る里の松葉賣　其角　(東日記)
幻住菴に曉臺が旅寝せしを訪ひて
丸盆の椎に昔の音聞かむ　蕪村　(蕪村句集)

椎の實

椎拾ふ横河の兒の暇かな　蕪村（蕪村句集）
立寄れば椎は降りくる[illegible]　太祇（太祇句選後篇）
我ために椎を器に盛る田家哉　闌更（半化坊發句集）
牛の子よ椎の實噛にはさまらん　白雄（白雄句集）
椎の實の落て音せよ檜笠　几董（井華集）
所化寮や昔をこぼるゝ椎の袋　嘯山（葎亭句集）
椎拾ふ浮世を過すも易いもの　成美（成美家集）
落椎のあらまで濡れし朝日哉　一茶（一茶句帖）
城山や椎の實落ちて兒もなし　子規（全集）
椎の實を拾ひつくして見上げけり　悟青（寒菊）

榎の實（晩）

【御傘】えの木。樹也、えの實は秋也、すべてかやうの木の實は皆秋也。
【年浪草】九月〔榎實〕大和本草に曰、榎、本草に樕の類とす、今按ずるに樕の類に非ず、榎は葉桑に似て筋多し　冬落葉す、實は胡椒の大さ、秋熟して黃也。味甘く小兒好んで食す。

【解説】榎の實は小豆大の球狀果を結び、晩秋熟して黃赤色を呈す。帶澁の甘味ありて小兒之を采食し、鳥類も好んで啄む。

【季題】實を云はざれば秋季の物とならず、〔參照〕木の實、夏—榎の花

【例句】
榎の實

木にも似ず扨も小さき榎の實哉　鬼貫（鬼貫句選）
榎の實ちる椋鳥の羽音や朝嵐　芭蕉（笈日記）
つぶ／＼と榛をもるゝ榎の實哉　望翠（續猿蓑）
榎の實ちる門や罷する女馬　桃隣（古太白堂句選）
榎の實はむ鳥の中より啼く鳥　乙二（松窓乙二發句集）
散る榎の實鳥も拾ふに子も拾へ　同（同）
榎の實散る此頃うとし隣の子　子規（子規句集）
堂守や榎の實踏行く草ざうり　青々（妻木）

菩提子（晩）　菩提の實　菩提樹の實

【滑稽雜談】九月。昔洛東建仁寺の開山千光國師、宋に入り此の種を得て歸朝し、筑前の香椎報恩寺に植ゑられしよし傳にみえたり。後其種を京師の寺々に傳へてこれを植う。泉涌寺・六角堂・叡山の西塔等にあり。宇治の興聖寺にて予これを見る。一樹に葉二色あり、一つの葉は椋に似て厚く大也。

又一つの葉は木犀に似たり。其葉に莖ありて莖より嫩なる細枝を出し、それに花咲き實を結ぶ。其實淡黑く堅硬にして念珠とす。香氣芬芬たり。興聖寺の僧曰、是經に說ける菩提樹なり、天竺此の樹下に於て佛成等正覺し給ふ樹なりといふ。樹の高さ一丈ばかり、枝椏のふり百日紅に似て甚だ奇樹也。

【年浪草】九月。校量數珠功德經に曰、諸陀羅尼及び佛名を念誦すること あり。木患子は千倍なり。淨土に生ぜんことを求めば、此の珠を受けよ。水精は百萬倍なり。菩提子は無量倍也。

季題解說 我國にある菩提樹の實は、豌豆大の球果にして硬き外皮あり。取りて絲を貫き念珠とす。元亨釋書榮西傳曰、建久六年春、西分二天台山菩提樹一栽二東大寺一云々とあり。參照 木の實(秋)、夏—菩提樹の花

例句

菩提子

倚白樟

菩提樹の實や落る日をかねてより　一秀（タかほの歌）

貞佐一周忌

菩提子やつながぬとても法の玉　有林（隙の駒）

菩提樹の實は身の秋の念珠哉　壽松（俳諧新選）

菩提子を紅の絲につなぎけり　青々（妻木）

椿の實（初

古書校註

【年浪草】九月。和漢三才圖會に曰、海石榴、その實圓く無花果に似て老いて枯るれば殼四に裂け、中の子海松子の如し。皮を剝き仁をとつて搾り油を取る。たゞし千瓣の者は實を結ばず。

季題解說 椿の實は球形にして硬く光澤あり。夏より木にありて秋の末に至れば果皮裂開し、淡黑色の子二三箇を出す。皮を剝き仁を取り、搾りて油を得。參照 木の實(秋)、春—椿

例句

椿

實椿や立るに弱き蜂の針　野坡（野坡吟艸）

高野尼村にて椿の白なるを見出し主じに是を乞ければ快く與へければ

枝に切て實は捨てゝ行く椿哉　闌更（半化坊發句集）

午の雨椿の實などぬれにけり　青々（倦鳥）

棗の實（初）

古書校註

【年浪草】七月〔棗〕時珍曰、按に陸佃埤雅に云、大なるを棗といひ、小なるを棘といふ

【本草】　七月［棗の實］大和本草　夏芽を生ず、故になつめといふ

【季題解説】　棗は鼠李科の落葉喬木にして、夏の初に至つて芽を生ずるが故に、和名を「なつめ」と云ふ。此樹は地中海東部地方より、印度ペルシヤに至る地方及支那に野生あるものにして、棗の實は漢藥の主要たるものなれば、最古くより我國にも傳はりて植ゑられしと見え、［萬葉集］卷十六に長忌寸意吉麻呂　棗を詠める歌あり　その歌

　玉掃(タマハハキ)　苅來(カリコ)　鎌麻呂(カママロ)　室乃樹與(ムロノキト)　棗本(ナツメガモトト)　可吉將掃爲(カキハカムタメ)

又一種實の大なるものもありて於保奈都女と呼び、普通のものと二種ありしと云ふ。

　棗の實は楕圓形、或は卵形の小核果にして、初めは淡黄緑色なるも、成熟すれば赤褐色となる。生にて食すれば淡味あり。砂糖漬とし、又乾燥して藥用とす。

【季題注意】　棗の實と云ふを略して、只棗とばかり云ひても秋季なり。但し實あるを以つて季とするものなれば、其心得あるべし。［參照］木の實（秋）　春―棗の花(ナツメノハナ)

【例句】

棗

夜もすから鼠のかつぐ棗かな　　曉臺　（曉臺句集）

祇園の鶉悲庵の棗喰ひに來る　　子規　（子規句集）

昔しるものに殘りし棗の木　　古泉　（壬申句鈔）

ひそ〳〵と鵙きて鳴かず棗の木　　黄木　（己巳句鈔）

玉工のみがきて細き棗哉　　青々　（妻木）

枳椇(けんぽなし)（晩）　玄圃梨(けんぽなし)　てんぽうなし

【古書校註】

【俳諧歳時記】　兼三秋物［枳椇(ケンポナン)］正字は白石李。蓋し枳椇は實の名のみ。其實大さ大豆の如し。之を食へば少しく梨の味あり、小兒痘瘡鼻閉がる者之を以てその鼻を穿つ。

【季題解説】　枳椇は鼠李科の落葉喬木にして、高さ三四丈に達するものあり。樹皮鱗状をなす。葉は廣卵形鋭尖頭にして鋸齒あり。葉身の基脚より射出する三脈あり、中脈は羽狀に分岐す。六七月頃、白色五瓣の小花を開き、花梗また果實小球狀の果實を結び、晩秋に至りて成熟し、紫褐色となる。花梗また果實の熟すると共に肥大となり、肉質にして甘味あり、食することを得。

【季題注意】　實の熟するを以て季とすれば、晩秋の季物なり。漢稱「木蜜」を異名とす。［參照］木の實（秋）

【例句】

枳椇

木の葉さく〳〵窓にくるゝや枳椇　　小酒　（杉の實）

・枳椇くるゝ菓子屋の亭主哉　　青々　（寶船）

【参考】けんぽなし Hovenia dulcis, Thunb.（くろうめもどき科）山野に生ずる落葉喬木にして、高さ三四丈に達す、葉は有柄廣卵形、鋭尖頭、鋸歯あり、基脚より射出する三脈を有し、中脈は羽狀に出でたる支脈を有す、花は綠白色の小花にして、六七月頃開く、果實は初冬の候熟す、花後穗の枝は肉質にして甘味を有す。

突羽子（つくはね）（中）　胡鬼（こ）の子　はごの木（き）

【季題解説】檀香科つくばねの木の實（み）は秋熟す。此果實の鹽漬としたるものを、木曾・筑波などの山人、行人に之を賣ると云ふ。實を胡鬼子と書く。

【参照】木の實（ミ）　夏―突羽根の花（ハナ）

【例句】

胡鬼子

胡鬼の實の吸物椀にすはりけり　北枝（山中集）

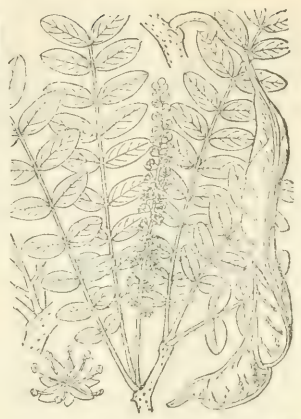
はねの實やそれを山家で四ツ葉豆　句空（干網集）

加州農奴へ

湯の匂ひ胡鬼に殘して別れけり　乙由（麥林集）

胡鬼の子や取殘されて日のあたる　柳女（はたけせり）

皁角子（さいかち）（晩）　皁莢（さいかち）　さいかし　鷄栖子（けいせいし）　かはらふぢのき

【古書校註】【篗纑輪】九月〔皁樹〕（ソウジュ）皁莢子（ソウキョウシ）は實、皁角刺（サイカクシ）は木の刺（ハリ）也　皁莢は實の莢（サヤ）にして刀豆（ナタマメ）の如し。秋熟し枯れて内の子からつく。秋季とするは實也。

【季題解説】さいかちの木の實は長さ一尺餘、幅一寸許の扁平なる莢をなし、皆ゆがみて直からず、内に扁き種子十箇許を有す。子は大豆に似て扁く、晩秋熟して頗黒色となる。實を藥用とし莢の煎汁は物を洗ふに用ふ。漢名鷄栖子、和名をかはらふぢのきと云ふ。【参照】木の實（ミ）　夏―皁角の花（ハナ）

【例句】

皁角子

皁角を萩の鳴らすや萩の中　菊芳（流川集）

さいかしや吹からびたる風の音　吳風（新類題発句集）

夕風や皁角の實を吹鳴らす　寥月（寥月句集）

【参考】さいかち Gleditschia horrida, Makino.（まめ科）山野川原

等に自生すれども又栽植せらるゝ落葉喬木なり、枝幹に枝の[illegible]より成り
に分枝せる刺多し、葉は一回又は二回羽狀複葉をなす、夏日葉腋より黃
綠色の花を穗狀につゞる、雄花雌花あり、花弁小く花後一尺餘の扁平なる
莢を結ぶ、形ゆがみて直からず、内に扁き種子十個許を有す、嫩葉は食ふ
べく莢は洗濯に用ふべし。

栗（[illegible]）

毬栗　笑栗　落栗　出落栗　一つ栗　丹波栗　大栗　山栗　柴栗　櫟栗　三度栗　虚栗　[illegible]栗　栗拾ひ（人事）　[illegible]（人事）　燒栗（人事）

[illegible]

【年浪草】九月。○紀事に曰、この月處々の山林栗を出す。丹波の大栗を名產とす。又一種鞍馬の村婦小栗を蒸して市中に賣る、これを蒸栗といひ、もも賞す。或は水煮してその皮を去りその實を粉とし、餅に和して食ふ、之を栗粉餅といふ。○出落栗、紀事に曰、土俗誤りいふ、古へ不孝の子あり、この栗を父に投じて傷く、よつて氐々宇知栗と號すと。（中略）出落栗とはこの栗自ら毬を脫して地に墜つ、故に名く。○三度栗、大朝食經に曰、上野州・下野州に山栗有り。極めて小にして一年三度栗を收む、故に號す。その味佳ならずとせず。この類の山栗諸州に在り、亦極めて小也。これ古への柧栗か。○落栗、本綱・和三（一）等にいふ、將に熟せんとし、はぢけて子その苞を出で、自らさけて地に墜つるもの是也。○毬栗、その實苞中にあつて未だ地におちざる也。○剗栗　殼を去つて仁とする者、搗栗の類なり。○燒栗、殼を連ねて燒いて仁を食ふもの。○茅栗、爾雅に曰、江東に栗を呼んで栭栗となす。（中略）多識編に云、茅栗、今案ささ久利。（二）○鎌栗、時珍曰、栗のやゝ小き者を山栗とし、山栗の圓くして末尖れる者を鎌栗とす。○熊栗棚搔、時珍曰、熊性よく木に上り好んで栗を食ふ。故に攀緣して梢に至り、枝を折つて並べ敷き居所を設く。之を熊の架といふ。

註（一）本草綱目・和漢三才圖會の略稱。（二）滑稽雜談に「按に[illegible]栗・[illegible]栗と俗にいふもの同種也」といへり。

[illegible]　栗の實は、全面に刺を密生したる囊狀總苞に包まれをり、晚秋霜降て後熟し、其苞自ら裂けて落つるもの久しく藏むべく、苞の裂けざるものは腐れ易しといへり。栗はこれを蒸し、或は燒きて食し、又栗飯に炊く。栗を食するには澁皮を去る。

▽出落栗　栗の刺毬より自ら出でゝ落ちたる栗をいふ。

▽笑栗　毬の裂開せるを、其狀笑めるが如くに思ひて、斯くは云ふなり。

▽丹波栗　大粒の實を生する栗の一種。

▽柴栗　山栗の柴木の如くなるものに、多く果實を結ぶ、これを柴栗といふ。子粒も亦小さし。

▽栭栗　小き栗を云ふ。

▽三度栗　山栗の一年に三度實るものを云ふ。其味劣れり。
▽錐栗　山栗の、くしこ尖らざるもの。[植物] 木の實(コノミ)。人事—栗飯(クリメシ)
栗の子餅(クリノコモチ)　栗羊羹(クリヤウカン)

例句

栗

古寺や栗を埋けたる椽の下　鬼貫　（鬼貫句選）

江山

機しねを綱にしたりや栗袋　同　（七車）

文も見じ鬼住む跡の栗の毬　素堂　（素堂家集）

二子山二子拾はん栗の殼　其角　（いつを昔）

御白松

生栗を握りつめたる山路かな　同　（雑談集）

山川や梢に毬毛は有ながら　同　（きれ〴〵）

簑の上の[illegible]、花、[illegible]

三ッ栗の後妻打や角被　同　（五元集）

安宅の夢に扇たらする繪に

關守の心ゆるすや栗かます　同　（同）

栗備ふ惠心の作の彌陀佛　蕪村　（蕪村句集）

料足に栗參らする忌日かた　召波　（春泥發句集）

子東三回忌

三ッ栗に中の七日を思ふ夜そ　曉臺　（曉臺句集）

榿楠落ぬ日はなし岑の栗　一茶　（一茶句帖）

妹が子にそれ讓るぞよ杓子栗　同　（同）

落る葉もちらりほらりやすがれ栗　同　（同）

人ちらり木の葉もちらりすがれ栗　同　（同）

流るゝに苦はなかりけり實なし栗　同　（同）

栗一つ取るに提灯騷ぎかな　同　（同）

籠の栗者ども來よとはねるなり　同　（七番日記）

栗拾ひねん〳〵ころり言ひながら　同　（九番日記）

藏壁に打つけるなり峠の栗　同　（同）

鈴鹿あたりに小さき栗を、串の三叉(マタ)なるに刺して有ければ

串栗も古事あらむ鈴鹿山　蒼虬　（蒼虬翁發句集）

猪喰ひに栗をくひつゝ夜語りす　青々　（倦鳥）

毬栗

毬栗に袖なき猿の思ひ哉　其角　（五元集拾遺）

毬栗に手に捧げたる法の場　嵐雪　（或時集）

毬栗の蓑にとゞまる嵐かな　白雄　（白雄句集）

毬栗に鼠の忍ぶ妻戸かな　召波　（春泥發句集）

毬栗に踏あやまちぞ老の坂　同　（同）

碧梧桐深大寺の栗を携へ來る

いがながら栗くれる人の誠かな　子規　（子規句集）

落栗 落栗や草に紐よむ留の前 召波（[illegible]）

落栗や兎の遊ぶ所なし 成美（成美家集）

小布施

拾はれぬ栗の見事よ大きさよ 一茶（七番日記）

丹波栗 毬ごてら都へ出たり丹波栗 同（一茶句帖）

大栗 大栗や鐘は穂長の地に落し 白雄（白雄句集）

柴栗 柴栗の中にも蟲の住む 一茶（七番日記）

柴栗の一人はぢけて居たりけり 同（一茶句帖）

栗拾 柴栗は毬のはしさへもみぢつゝ 青々（倦鳥）

何の木のもとともあらず栗拾ふ 虚子（ホトトギス）

[illegible]

栗實 栗實の玄關へかゝる閑居かな 其角（[illegible]集）

銀杏の實（晩） ぎんなん 銀杏仁（人事）

古書校註

【年浪草】八月（一）〔銀杏實〕一名白果、或は鴨脚子、時珍曰、銀杏その葉鴨掌に似たり。よつて鴨脚と名く。宋の初始めて入貢す、改めて銀杏と呼ぶ。その形小杏に似て核の色白きによつてなり。今白果と名く

【俳諧歳時記】八月〔銀杏子〕多く食へば瞑眩する由五雜俎に見ゆ。今の俗三つ角あるものを帶ぶれば諸毒を消すといふものは何によるにや。

註（一）滑稽雑談には九月とす。

季題解説 銀杏の實は普通「ぎんなん」と呼ぶ。銀杏の宋音「ぎんあん」を連聲にて「ぎんなん」と云ふ。樹名公孫樹、又鴨脚子、『本草綱目』に「銀杏、因下其形似二小杏一而核色白上也」とあり。實を炙り又は煮て仁を食用に供し、又銀杏餅を作る。［[illegible]］銀杏黄葉 木の實

例句

銀杏 [illegible]

ぎんなんも落るや神の旅支度 桃隣（陸奥鵆）

高坏にぎんなん白し夜手習 小酒（杉の實）

木欒子（晩） 木患子 欒樹

古書校註

【年浪草】九月、蘇恭曰、欒華、この樹葉木槿に似て薄く細し、花は黄にして槐に似てやゝ長大なり。子殻酸漿に似てその中に實あり、熟せる豌豆の如く圓く黒くして堅し、數珠とするに堪ふる者是也。五月六月花收むべし。南人以て黄を染む、甚だ鮮明なり。

季題解説 木患子科の落葉亞灌木にして、高さ丈餘、葉は羽狀複葉にして、小葉は缺刻及鋸齒あり。六月頃枝上に黄色の小花を圓錐花序に排列す、果

實の萠は膨大にして三裂し球形の種子を出す。黑くして堅硬なり。穴を穿ちて念珠を作る。又女兒の玩ぶ羽子の球とす。河內國道明寺に老樹あり。推古帝の時、初めて此寺を建て、經を埋めたる土上に此樹生ずと云へり。實を以て秋季とす。〔參照〕木の實(ノ)

【例句】

木欒子 捨るなよ手の垢つきし木欒子　朝敬（鳥の道）

合歡の實（晩）

【季題解說】 合歡の實は莢をなし、中に扁子を收む 秋熟す。〔參照〕夏—合歡の花(ネムノハナ)

水木の實（晩）　痲疹木

【古書校註】 【[illegible]（一）】 九月。高さ一二丈、葉は梅嫁に似て厚く、子細かにもちの如し。初秋に早熟し赤らむ、立花を好む者七月七日の花に之をさす。葉を悉く取去りて梅嫁に似たるを賞翫す。ミヅキ、正字なし。苧環(ヲダマキ)（一）に橙の字を用ひおけり、非也。橙はアヘタチバナ、カブス、或はダイ〳〵と訓ず。

註（一）俳諧の作法書の名。溝口竹亭著、元祿十年刊。

【季題解說】 みづきの實は球形の小核果にして、晩秋に至り紫赤色を呈す。實を賞して秋季の品題とす。一に美豆木とも書す。〔參照〕夏—水木の花(ハナ)

【參考】 みづき（Cornus controversa, Hemsl.）（みづき科）山野に多き落葉喬木にして、幹の高さ二三丈に達し、枝は略輪狀に出づ、葉は廣楕圓形にして互生し、先端稍尖り、其面滑澤にして全邊なり、初夏、枝梢上に繖房狀をなして多數の白色花を簇生す、四花瓣、四雄蕋、下位子房を有す、花後小球果を結び、秋日熟して紫黑色に變ず。

玉みづき（初）　あかみみづき

【季題解說】 山地に自生する冬青科(ソヨゴ)の落葉喬木。嫩枝は稜角を有し、葉は硬紙質にして楕圓形、平滑にして邊に細微の尖頭鋸齒あり。葉の長さ三四寸、葉柄一寸許あり。五六月の頃、葉腋に聚繖花序をなして黃綠色の多數の小花を着く。其實は小球形にして紅なること梅嫁に似たり。故に庭園にも栽培す。昔時立花を好む者、葉を去り實を殘して七夕に此を花瓶に挿す。其實のほど熟する時なれば、實を賞して秋季とす。

鬼縛の實（初）

【季題解說】 おにしばりは瑞香科(ヂンチョウゲ)の落葉灌木にして、其葉夏に至つて脫落する

を以て「夏坊主」の稱あるもの、山野海邊に自生する有毒植物なり、實は秋に熟し、楕圓形にして紅色なり。〔參照〕夏―鬼縛の花

常山木の花（初）　臭木　臭桐　海州常山

古書校註

【年浪草】七月、〔和漢三才圖會に曰、根を常山と名け葉を蜀漆と名く。和名久佐木、處々に有り、其葉甚だ臭し。高さ丈許、葉梓欅の葉に似て闊く尖り、ちと皺みて澤あらず。六月細花を開く、白紅まじり攢る。

季題解說

山林、原野の何處にても多く見ることを得る、馬鞭草科の落葉灌木なり、高さ五六尺より丈餘に達す。葉は廣卵形、短毛を密生し先端尖り、長柄によりて對生す。八月頃、枝梢上に聚繖花序をなして、五裂せる合瓣花を多數に着生す。花は白色なれども外部淡紅色を帶び、萼片は帶紅色を呈す。花冠下部は細長き筒狀をなし、雄蕊は長く花冠外に突出せり。

此花攢簇して人の目をひくと雖、莖も葉も共に惡臭あり。因つて和名を「くさぎ」と云ふ。花後、小球果を結び、晩秋に至れば其實熟して藍碧色となる。常山の蟲と云ふものの此木の心に生ず。〔參照〕常山木の實（秋）―動物―常山の蟲

例句

常山木の花　せめてもの葉は喰はれける常山木哉　嘯山（律亭句集）
　蟲とりに來れば花咲く常山木かな　左居（田每の日）

植物學者

くさぎ（Clerodendron trichotomum, Thunb.）（くまつづら科）山野に自生多き落葉の灌木にして、幹は五六尺より一丈許に達し、葉は全邊の廣卵形をなして先端尖り、短毛を密生し、長柄によりて對生し、臭氣あり、八月頃、枝梢上に多數の花より成れる聚繖花序をなす、花は白色にして淡紅彩を帶び、萼は綠赤色なり、花冠の下部は細長き筒をなし、雄蕊は五箇ありて著しく花外に突出す、果實は碧色にして、果下に紅紫色の開きたる宿存萼あり、往々嫩葉を食用とす。

常山木の實（晩）

季題解說

常山木の實は圓く、秋熟して藍碧色となる。大さ豌豆の如し。

【參照】春—常山の花ノ條

【例句】
常山木　常山の實折るにあまりに葉のすがれ　琅玕（戊辰句鈔）

枸杞の實（晩）

【季題解說】 枸杞は原野路傍に自生あれど、生垣に植込むことあり。春芽を出し、夏花を開き、花後漿果を結び、秋に至り熟して紅となる。形棗の核の如し。甘味ありて食することを得。又莖葉根皮共に藥用となる。一種鬼枸杞と稱するものあり。葉小く刺多く、果實小くして且つ長く、味苦し。

【參照】春—枸杞ノ條

【例句】
枸杞の實　砂山の枸杞の實赤くなりゐたり　桂波（戊辰句鈔）

樝子の實（晩）　くさぼけ　ぢなし　のぼけ

【季題解說】 本州・四國・九州等の淺山に自生多き薔薇科の小灌木。春日開花し花後實を結ぶ、實は直經七八分の小球形にして秋熟して黄色を呈す。果肉は强き酸味ありて汁は酢の代用となり、又酒を釀す。或は味噌漬、砂糖漬として食用に供せらる。【參照】春—櫨の花ノ條

榼藤子（晩）　もだま

【古書校註】 【年浪草】九月〇又一種（一）榼藤子、本草蔓草部に時珍曰、榼藤子、一名榼子、その榼の形に象る、故に之に名く。紫黑色微光る。大さ一二寸、圓くして褊し。人多く肉を剔去し藥瓢に作りて腰に垂る。

【註】（一）㮚樹（ヒヨンノキ）の條に出せり。即ちこれは蔓草にて又別種なる事たことわれるなり。

【季題解說】 榼藤子は琉球、臺灣等に產する荳科の植物もだまなり。上昇性灌木にして葉は偶數羽狀複葉をなして互生す。各の小葉は楕圓。花は白く、花後に長大なる莢を結ぶ。其大なるものは往々三尺餘の長さに達し、種子亦大形にして一寸六七分餘の幅あり。熟して堅硬、暗褐色となる。此種子の肉を剔き去り物を入るゝ器として人之を愛玩す。昔は印籠藥瓢としたり。

桐の實（初）

【季題解說】 桐の實は卵形、長さ一寸許のもの、一枚に梗を有し多數並列して結實し、熟すれば木質となり二つに裂開す。又別種梧桐の實は膏莢をなし、

其木だ全く成熟せざる前、既に裂開し、略舟狀をなし、兩緣に各一二個の種子を着生す。梧桐子は炙りて食用とする所もありと云ふ。[參照] 桐一葉（八）　罌子桐の實（二）　海桐の實（六）　夏―桐の花（十）

[例句]

桐の實　夜嵐に噂や桐の實椿の實　支考（國の花）

十餘とせの昔、壽梅亭に初めて宿りして

罌子桐の實（晩）　荏桐　油桐　毒荏　やまぎり　いぬぎり

[古書校註]

【栞草】九月「罌子桐實アブラギリノミ」大和本草　荏桐とも油桐とも云ふ。ダモと訓ずるは非なり。桐に似たり。其實大毒あり、食ふべからず。實に油多し、民用をたすく。此の油をぬりて青漆の如くする法あり。○時珍曰、罌子桐の實を荏桐と名づく。罌子は實の狀罌に似たるに因てなり。花は其油荏の油に似たる也。和漢三才圖會　濃州・江州多くこれを種う。油にしぼりこれをうる。其功荏の油に同じ。煉成つて漆に代ふ。桐油漆と名く。五色をぬるべし。常の漆は白色を塗る事あたはす。又松脂をくはへ、船・槽を塗るに水を漏らさず。これをチャンといふ。○年浪草に桐油、ダモ、同物といへるはわろし。

[季題解説] とゆの實は球形の果實にして、内に三四箇の種子を含む。此果實には毒ありと云へど、多量の油を含むより、之を搾取して燈料に使用す。之れ桐油にして、印刷用に「すゝ」と稱するは卽此油なり。實を以て秋とす。[參照] 桐の實（六）　夏―油桐の花（十一）

海桐の實（晩）

[季題解説] とべらの木は、その材を取りて總膀を作るにより有名なり。實は指頭大にして、晩秋熟すれば三裂し、赤き種子を出す。[參照] 桐の實（六）　夏―海桐の花（八）

梔子の實（中）

[季題解説] 果實は黃色にして長さ一寸ばかり、長楕圓形にして兩尖をなし、六七箇又は稀に八九箇の縱稜ありて、頂に永存性の細長なる萼片を附着す。外果皮は薄くして、内に紅肉と白色の小さき種子とあり。和漢共に果實を乾し貯へ、黃色の染料とす。又漢方の藥用に供す。[參照] 夏　梔子の花（八）

山椒の實（初）　山椒　蜀椒

[季題解説] 山椒の實は攢生する小球形にして初めは青く、秋に至れば熟して紅色となり、裂開して光澤ある黑色の小子を出す。香氣と辛味有り。食用

又薬用とす。

【季題注意】山椒は花の賞美する物に非らず、香氣と辛味あるを以て、春の嫩芽と實を賞美す。故に夏未だ熟さゞる實を青山椒と云ひて季物とす。秋は實の熟する時なれば、只山椒とばかりにても實を感じて秋季たるべし。又古名を「はじかみ」と云へど、今「はじかみ」は主として薑を云ふ。徒らに古名を用うるは混雜す。【參照】犬山椒(イヌザンセウ) 春―山椒の花(サンセウノハナ) 夏―青山椒(アヲザンセウ)

犬山椒(いぬさんせう)（初）　崖椒(がいせう)

【季題解説】山椒の一種にして山野に自生す。概形頗る山椒に似たれども、佳香を有せずして却つて惡臭あり。葉は山椒より細長くして稍疎に着生し、且つ葉の緣邊に細鋸齒ありて、直ちに山椒と別つことを得。實の生ずる秋を以て季とす。

又別に「からすさんせう」「ふゆさんせう」等あり。【參照】山椒の實(サンセウノミ)

南天(なんてん)の實(み)（晩）　南天燭(なんてんしよく)　實南天(みなんてん)　白南天(しろなんてん)

【古書校註】【年浪草】九月。蘊頌曰、南燭株、高さ三五尺、葉苦楝に類して小、冬を凌ぎて凋れず、紅子を生ず、穂をなす。人家多く庭には除の間に植う。俗に之を南天燭といふ。

【季題解説】南天の實、初めは青く、晩秋に至りて紅熟し、冬落ちず更に美なり。鳥類來りて之を啄む。南天は人家多く、庭除の間に植う。又籬にも作る。一種白色のものあり。【參照】夏―南天の花(ナンテンノハナ)

【例句】南天の實

南天や實はそれ程の山の奥　其角（砂つばめ）
南天の實を包めとや雁の聲　同（焦尾琴）
南天や秋を構ゆる小倉山　同（同）
南天の實はかたぶきぬ夕日影　其毛（田舍の日）
南天にかゝる木屑や寮普請　京呂（曠葉）

【參考】なんてん Nandina domestica, Thunb.（めぎ科）我邦中部以南の諸州には自生あれども、通常庭園に栽植せらるゝ常綠灌木なり、莖の高さは四五尺を常とすれども、大なるは一丈に達す、葉は披針形の小葉より成る數回羽狀複葉にして、葉柄の基脚は莖を包む、初夏の候多數の小なる白花を圓錐花序に排列す、果實は球形、熟すれば通常赤色を呈す。

あんらじ（晩）

【季題解説】大戟科の落葉喬木にして、印度地方及び支那南部に產し、我國に

ふ。よつて俗稱瓢（ひよん）の樹といへり。よく鳴る、駿州に多し、これを笛として祭禮に吹く。

[illegible] 我國諸國の山中に自生する金縷梅科の常綠喬木にして、高さ三四丈に達するものあり。春間花し後木質の蒴を結ぶ。此樹梢枝又は葉間に蟲癭を生す。これ一種の蚜蟲の巣にして、夏期囊狀にふくれたるものを生じ、中に幼蟲あり、後穴を穿ちて飛び去る。囊の大なるは桃の如く、小なるは金柑の如し、初め綠色にして秋黄褐色となる、頗る堅硬なり。これを「きひよん」と云ひ、大なるを猿瓢といふ。このもの內は空虛にして蟲の出でし穴より吹けばよく鳴る。これを猿笛といふ。「きひよん」を以て季とす。[illegible] 春―蚊母樹の花（イスノハナ）　夏―蚊子木（ブンノキ）

[illegible] いすのき Distylium racemosum, Sieb. et Zucc. 一名ゆすのき（まんさく科）暖地の山中に自生する常綠樹にして、幹の高さ三丈餘に達するものあり、葉は長楕圓形全邊にして互生し、往々小蟲のために囊狀の膨大部を生じ、後蟲飛び出でて空殼となる、蟲癭は小兒の玩具となる。新葉を生じて後、四五月頃枝梢に深紅色の花を簇生す、細花にして、花に花冠を有せず、綠色の萼、紅色の雄蕊及有毛の雌蕊を具ふ、材を以て櫛を製す。

楤（たら）の花（はな）（初）

[illegible] 楤は五加科の落葉亞喬木にして山地に自生す。葉は卵形の小葉より成れる二回羽狀複葉にして莖葉共に刺を密生す。初秋に至り淡黄綠色の小花を、複總狀花序に綴り、花後小球形の黑色果を結ぶ。此木の嫩芽は「うど」の如き香ありて食用とすることを得。材は器具を作るに用ふ。

[illegible] 楤の異名を「うどもどき」と云へど、これは楤の木の芽の味「うど」に似たるを以て云へるものなれば、此語正しくは春の芽に限りて用ゐるべきものならん。[illegible] 春―楤の芽

柊（ひひらぎ）の花（はな）（晩）

ひらぎ　枸骨（くこつ）　杠谷樹（こうこくじゅ）　黄芩（わうごん）

[illegible] 木犀科の常綠喬木、諸國の山地に産す。幹の高さ二丈に達するものあり。葉は對生し、略卵形にして葉先尖り、葉緣又鋭き鋸齒をなして人を刺す。

[illegible] ひひらぎ Osmanthus Aquifolium, Sieb. 一名ひらぎ（ひひらぎ科）山中に自生し、又庭園に栽植する常綠樹なり、莖の高さ丈餘、梢葉は全邊にして針なし、葉は對生し通常針狀質厚くして光澤を有す、秋日葉腋に白色にして、佳香を有する小花を簇生す、雌花と雄花とを異にす、花中に二雄蕊あり。翌年に至り長楕圓形の漿果を結び、熟して黑紫色を呈す。

鬼箭木（晩）　衛矛　錦木　かみそりぎ　くそまゆみ　矢筈錦木

【古書校註】

【本草】 [illegible]良安云、衛矛、和名久曽末由美、其葉秋に至りて紅葉す。四月丹の細くにして青赤相雑り錦の如し、故に俗錦木といふ。子を結ぶ、一朶二顆にして尖り小正にして紅なり。信州野州の山谷にあり。

註 （一）和漢三才図会の著者。この引用文は同書によれるなり。今此木につきて更に要を補へり。

【実地解説】 山野に自生する衛矛科の落葉灌木にして、高さ六七尺に達し、其幹枝には硬皮質の翼翼あり、葉は一寸はかりの楕円形にして、先端尖り、尖鋭の細鋸歯を有す。五六月の頃淡黄緑色の細花を聚繖花序に排列す。晩秋初冬の候、果實成熟して裂開し、黄赤色の種子を露出す。又秋の紅葉甚佳なり。紅葉を以て秋季とす。漢名を衛矛と書す。木材は小細工の材料に供し、樹皮を採つて製紙の原料とし、嫩葉は食用とする外、庭園に栽植して観賞の用に供す。

【例句】

錦木　錦木や朝日さし来る搭の陰　青々（妻木）

【類似季語】 にしきぎ Euonymus alata, var. alata, Makino.（にしきぎ科）山林に生ずる落葉灌木にして、幹の高さ六七尺、其幹枝には硬皮質の翼翼を有す、葉は楕円形にして先端尖り、細鋸歯を有す、花は淡黄緑色の細花にして六月頃花を開く、秋日に至り果實熟して開裂し黄赤色の種子を露出す、又此葉は秋日の紅葉甚た佳なり。

木犀の花（中）　桂の花　銀木犀　金木犀

【古書校註】

【年浪草】 【木犀】 八月。南方草木狀に曰、江南の桂八九月花を開く、子なし、是木犀也。 【桂花】 八月。本草綱目に菌桂・巖桂の二種あり。菌桂は葉柿の葉の如くにして、尖り狭く光澤あり、三縦の文ありて鋸歯なし、その花に黄あり、白あり、巖桂はその葉に鋸歯あり、枇杷の葉の如くにして粗しわある者、俗呼んで木犀とす。

【実地解説】 木犀科の常緑木本にして、幹の高さ一丈餘に達す。葉は楕円形にて對生し、其質硬くして縁邊に鋸歯あり、九月頃葉腋に多數の小花を簇生す。其の花冠は深く四裂し、内に二雄蕊一雌蕊を有し、特殊の芳香を發して人を酔しむ。花色の橙黄色なるを普通とし、之をきんもくせいとも稱へ、黄白色なるをぎんもくせいと云ふ。芳香稍劣る。其他「しまもくせい」「まるばまくせい」「ほそばもくせい」「ながばもくせい」「りうきうもくせい」等の品種あり。庭園樹として廣く愛養せらる。

〔例句〕

木犀　　遊弘嚴寺

木犀や六尺四人唐めかす　　其角（焦尾琴）

木犀の晝はさめたる香爐哉　　嵐雪（夢の名殘）

木犀や宵の祭の染小袖　　千舟（天上守）

　　極樂寺

有がたや寺はかつらの花の陰　　石人（和漢文操）

木犀や禪を言ふなる僧と我　　召波（春泥發句集）

　　長崎茶會

木犀や麝香鼠の通ふ聲　　鳳朗（鳳朗發句集）

木犀にをりし雀も暮れにけり　　素史（穗麥）

木犀や都往來の晴つゞき　　句佛（懸葵）

木犀の香に佇みぬ雨の中　　あふひ（ホトヽギス）

〔參考〕

もくせい Osmanthus fragrans, Lour. 一名 ぎんもくせい（ひひらぎ科）蓋し支那原產にして庭園に栽植せらるゝ觀賞用常綠樹。樹の高さ一丈餘に達し、葉は楕圓形にして對生し、其質硬くして邊緣に多數の細鋸齒を有す、十一月頃葉腋に多數の白色小花を簇生し、雌雄株を異にす、花冠は深く四裂し、二雄蕋一雌蕋を有し、特殊の芳香を發す、雌樹はひゝらぎに似たる實を結ぶ。

木槿（むくげ）（初）　もくげ　きはちす　花木槿（はなむくげ）　木槿垣（むくげがき）（人事）

〔古書校註〕

【增山の井】七月。月令には夏也。可レ隨レ所レ好。

【年浪草】七月。昨珍曰、此の花朝に開き暮に落つ、故に日及と名く。槿といひ蕣といふ、猶僅榮一瞬之義なり○和漢三才圖會に曰、總て木槿花は朝に開き日中にも亦萎まず、暮に及んで凋み落つ。翌日再び開かず。寔に槿花一日之榮也。其花僅に一瞬なる故に舜と名る說は非也。古へより相誤りて朝顏と稱す。眞の朝顏は牽牛花相當れり。○大和本草に曰、萬葉の歌に「朝顏朝露負咲雖云暮陰社咲益家禮」。此の歌を以て見れば、朝良即ち槿花也。牽牛子に非る事明かなり。牽牛子は古今集にケニゴシと訓めり。又倭名抄には牽牛子をアサガホと訓せり。然れば木槿花もアサガホと云へるなるべしと云々。一說に云、萬葉の歌を木槿の歌なりといふは歌道未練の說也。萬葉の歌、心は蕣は早く萎むものなれども、晚秋には日影も弱く物陰には夕陰まで咲殘たる淸秋の哀なる有樣を詠じたる也といへり。木槿と牽牛花とは同名異物と知るべし。

【俳諧歲時記】七月。〔木槿（ムクゲ）〕俗これをはちすといふ。

〔季題解說〕　木槿は支那・印度・小亞細亞の原產、錦葵（ニシキアフヒ）科の落葉灌木にして、人家の生籬として多く此を植ゑ。又畑垣として植ゑたる所もあり。莖の高さ

酒冷すちよろ／＼川の木槿哉　同（同　）
ぼろ／＼が妻も籠りし木槿咲く　同（同　）
七尺の栗押分けて木槿哉　同（七番日記）
搦手は木槿で隱す關屋哉　同（蔟葉集）
折れかねて哀のさめる木槿哉　梅室（梅室・家集）
吹く甲斐も菜畑の垣の木槿哉　同（同　）
なか／＼に萩に遲れて散る木槿　蒼虬（蒼虬翁發句集）
どれ程の雨にも負けぬ木槿かな　同（同　）
白木槿木立ぐもりにかゞやけり　別天樓（雁來紅）
稻のすみ木槿は花をつくしけり　之棗（倦鳥）
日の暑さ久しき末の木槿かな　青々（同　）

花木槿

賤の戸や襁褓に萎む花木槿　言水（初心もと柏）
花木槿裸童のかざし哉　芭蕉（東日記）
もとの露末の雫や花木槿　曉臺（曉臺句集）
日の照や一雨殘る花木槿　同（同　）
蚤ふるふ願人坊や花木槿　同（同　）
花木槿立つ日の早き思ひあり　白雄（白雄句集）
哀れさに折て持けり花木槿　樗良（樗良發句集）
花木槿中々人の汗疹かな　青々（倦鳥）

木槿垣

一括り雙紙やしめる木槿垣（悼少年）　惟然（已か光）
哀れなり狂ひし跡の木槿垣　同（流川集）
道心の妻萎れ來て恨む木槿垣　其角（東日記）
爾宜達は何觀ずるぞ木槿垣　闌更（半化坊發句集）

參考　むくげ　Hibiscus syriacus, L.（あふひ科）「小アジア」原產の落葉小灌木にして、多く人家に栽植して藩籬又は觀賞用となす、莖の高さ一丈許、葉は楔狀卵形にして單瓣又は三裂片をなし、邊緣に齒牙あり、夏秋の候淡紫色・淡紅色・白色等の單瓣又は重瓣の花を開く、萼片は卵狀披針形に分裂し、外に線形なる六七箇の小苞を有す、蒴は少しく毛あり、種子又毛を有す。

梅嫌（うめもどき）（晩）　梅擬（うめもどき）　落霜紅（うめもどき）　つるうめ　風鈴梅擬（ふうりんうめもどき）

古書校註
【年浪草】八月。和漢三才圖會に曰、梅嫌木（正字未詳）葉圓く尖りやゝ小き鋸齒あり。野梅の葉に似て小。冬凋み春芽生ず。五月小白花を開く、ほゞ南天花に似て子を結ぶ、初は青色なり。十月葉落ちて子紅熟す。枝幹に添うて多く美なり。一種白き者またあり、異を以て珍とすれども赤き者にしかず。

季題解說 山林中に自生する冬青科の落葉小灌木にして、又庭園に栽培せらる。莖二三尺より高さは一丈以上に達し、嫩枝及び葉柄は多少の細毛を有す。葉は卵形又は卵狀披針形にして鋭尖頭をなし、緣邊に細鋸齒ありて葉裏及び網脈凸起せり。五六月の候、淡紫色又は白質紅暈を有する小花を梢上葉腋に簇生し、花後實を結ぶ。冬に至つて紅色又は黃熟し、其殘葉を帶びて點綴する風趣愛すべく尤詩情を動かす。又一種白實のものあり。いぬうめもどき・しまうめもどき・みやまうめもどき等の品種あり、（一名）蔓梅擬　夏―梅擬花

例句

梅嫌

殘る葉も殘らず散れや梅もどき　凡兆（曠野）

十人の殿達強し梅嫌　桃隣（陸奥衛）

梅嫌いまだ樵家の煙かな　淡々（淡々句集）

折くるゝ心こぼさじ梅もどき　蕪村（蕪村句集）

梅もどき折るや念珠をかけながら　同（同）

鵯のうたゝ來鳴くや梅もどき　同（蕪村遺稿）

柿崎の小寺尊とし梅もどき　同（同）

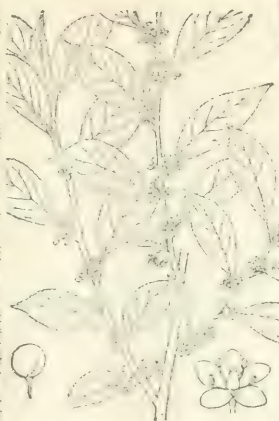
梅もどき鳥居させじと端居かな　同（同）

梅もどきある人に花を問はれけり　白雄（白雄句集）

梅もどき花屋の柳衰れなり　同（同）

城裏や小さき牛に梅嫌　同（同）

昼ばかり人來る家か梅嫌　乙二（[illegible]）

參考圖 うめもどき Ilex serrulata, Thumb. var. Sieboldii, Loesn.（モチノキ科）山林に自生する落葉灌木なれども、觀賞用として又庭園に栽培せらる、莖の高さ二三尺より一丈許に達し、嫩枝及葉柄は多少細毛を有す、葉は卵形又は卵狀披針形にして、鋭尖頭、細鋸齒あり、六月の候、淡紫色又は白質紅暈を呈せる花を葉腋に簇生す、冬に至りて果實熟すれば、赤色となり、其落葉せる枝に着ける樣甚だ美し。

蔓梅擬（つるうめもどき）（晩）　蔓落霜紅（つるうめもどき）

季題解說 蔓梅擬は實に眺めあり、晩秋の季とす。秋生ずる蒴果、初め青く

後に黄色となり、熟すれば三裂し、肉質紅色の假種皮を現はす。形檀に似たり。山野に多く自生し、葉は早く落ち、實は冬も殘りて其趣よろし。

[illegible] 一つるもどきと云ふと諸書に出せるも、意味なき省略なれば、誤れることとの傳はれるものならん歟と思はる。〔參照　梅擬　夏―蔓梅擬の花〕

木芙蓉（中）　芙蓉　拒霜　白芙蓉

古書校註 【年浪草】八月〔木芙蓉〕格物叢話に曰、芙蓉二名あり、水に出るもの之を草芙蓉といふ、荷花是也。陸に出るもの之を木芙蓉といふ。此の花是也。○時珍が曰、此の花艶にして荷花の如し。故に芙蓉木蓮の名あり。八・九月始めて開く、故に拒霜と名く。俗呼んで桃皮樹となす。（中略）冬凋み夏茂り、秋の半始めて花を着く。花は牡丹・芍藥に類す。紅なる者白き者黄なる者千葉なる者有り。最も寒に耐へて落ちず、實を結ばず。

季題解説 錦葵科の落葉灌木にして、支那を原産地とすれども、又暖國の海濱には自生するものあり。莖の高さ四五尺に達し、葉と共に短毛あり。葉は淺く三裂又は五裂し、基脚稍心臟形をなし、緣邊に鈍鋸齒あり。秋日淡紅色、鮮紅色或は白色等の美花を開き、何れも朝に咲き夕に萎む。其鮮紅色のものは醉芙蓉と稱して特に愛玩せらる。花後剛毛ありて稍球形をなせる蒴を結ぶ、種子も亦毛茸あり。種子こぼれて生じ易し。

例句

芙蓉

霧雨の空を芙蓉の天氣かな　芭蕉（[illegible]）
枝振りの日毎にかはる芙蓉かな　同（後れ馳）
千代女の許に宿りて
惜むなよ芙蓉の陰の雨舍り　支考（千代尼句集）
桐の葉は落盡すなるを木芙蓉　蕪村（蕪村遺稿）
立出でゝ芙蓉の凋む日に逢へり　白雄（白雄句集）
薏苡仁を植ゑし母なし芙蓉咲く　乙二（松窓乙二發句集）
月青々芙蓉目に〳〵に花の露　士朗（枇杷園句集）
月の出を芙蓉の花に知る夜かな　鳴雪（鳴雪句集）
風清く庭をありけば芙蓉かな　虚子（虚子句集）
青空を花の芙蓉に端居かな　青々（倦鳥）

白芙蓉

笭蘂まで貢の掃除や白芙蓉　其角（五元集拾遺）

桃の實（初）　毛桃　つばい桃　水蜜桃

古書校註 【年浪草】七月〔桃子〕時珍曰、桃の性早、花植ゑ易くして子繁し、故に

字木兆に從ふ、十億を兆といふ。その多きをいふ也。その實紅桃・緋桃・碧桃・緗桃(一)・白桃・烏桃・金桃・銀桃・胭脂桃あり、皆色を以て名づくる者也。緗桃・油桃・御桃・方桃・匾桃・偏核桃は皆形を以て名づくる者也。(一)ツバイ桃、大和本草にその實小にして實に毛なき故名づく。遲く熟す。早桃、五月熟す。冬桃十月熟す。

圖 (一) 淺黄色の桃。

【季題解説】桃の果實を略して桃と云ふ。桃の實は外面に毛を有する核果にして、熟すれば紅色を帶ぶるが普通なり。味甘酸にして生食に宜し。しかしながら桃に種類品類の多き故に果實一定せず。隨つて色彩亦一ならず。果肉の多漿なると殆ど無漿なるものと有り。形尖れる倒卵形のものと圓形のものとあり。本邦在來種の毛桃・つばい桃等は、何れも果實採收用としては佳良ならずとして、近時採果の爲めには西洋種の水蜜桃の類を多く栽培せり。

【實際作法】桃とばかり云ひて、實を現はし得と雖、春の桃花をも其實に桃の一字を用ひて現はす事多し。故に桃の實なる事の句意確かなるやうに注意ありたし。近頃桃の實をすべて夏の季に思へる者もあれど、夏に一早桃一あり。故に桃は花を春とし實を秋とする事、古人の定め置けるが如くにして宜しからん。(三圖)春─桃の花(六) 夏─早桃(十)

【例句】

桃の實　秋桃のむく毛もとれず暑さ哉　白良(猿舞師)

水蜜桃　若き人々歌話に更け水蜜桃匂ふ　小洲(□の實)

梨子(なし)(三秋)

梨(なし)　ありのみ　あをなし　紅瓶子梨(こうへいじなし)　觀音寺梨(くわんおんじなし)　松尾梨(まつをなし)

水梨(みづなし)　圓梨(まるなし)　空閑梨(こがなし)　生の浦梨　軒妻梨(つまなし)　梨賣(なしうり)(人事)

【古書校註】

【合傘】梨の花、春也。實は秋也。梨の木とばかりは雜也。

【年浪草】三秋。(一)[梨子](和漢三才圖會)に曰、北國最も多し、奥羽・津輕・秋田の産他國に倍して大なり。その大なる者は周り一尺四五寸、俗呼んで犬殺と名づく。狗子樹下に有りて梨落つれば搏たれて死す、故に名づく。(一)紅瓶 梨は瓶子の形に似て赤く、その肉白し。(一)觀音寺梨は近江の國葦浦觀音寺より出づ。微しく赤く甚大ならず、漿多し、甘味口中に消ゆるが如し。(一)松尾梨は形觀音寺梨に類して褐色、甘脆雪の如し、漿少く甘し。紀事に曰、奥州會津の中松尾の産を絶品とす。今諸處々の人家之を接ぎ得て頂妙寺梅と一双とす。(一)水梨は青梨に似て褐色。本朝食鑑に云、梨に數種あれども水梨・青梨に過ぎずと。(一)圓梨は青梨の種類にて大く皮薄く、色青くや、褐を帶ぶ、多漿にして甘美。(一)空閑梨は肥前の産、微赤色、極めて大なり。その味圓梨につぐ。(一)鹿梨、蘇頌曰、山梨・鹿梨と名づく　葉

は茶の如く、子は小拇指の如し。八月之を取る。(一)苧生の浦梨は苧生の浦、伊勢也。和歌に苧生の浦梨は片枝さすよし專らよめり(二)。(軒妻梨、つまなしとばかりもよめり。軒も屋根のつまなり。軒と同じ。

註 (一)壒山井・あたまき綱目・滑稽雑談等には九月とす。(二)古今「をふの浦に片枝さしおほひなる実のなりもならずもねてかたらはん」

季題解説 「栗草」に擧ぐる所の梨の種類は犬殺梨・苧生の浦梨・觀音寺梨・棠梨・松尾梨・圓梨・紅瓶子梨・空閑梨・水梨以上九種なり。この中にて異常なるものは犬殺梨にて、北國に産すること多く、わけて「奥羽津輕・秋田の産、他國に倍して大なり、周り一尺四五寸、俗呼んで、犬殺と名づく、狗子樹下に有とき梨落れば撲たれて死す、故に名く」とあり。其他に妻梨を擧げたるも、之は品種にあらずして、「具さには軒のつまなしといふ」とありて、軒端に生ひたるを云ふもの、又ありのみと云ふは「梨といふを忌てありのみといふなるべし」との註あり。又現今採果の目的を以て栽培せらるゝものは、多くは西洋梨の種類にて、其品類の稱呼を擧ぐれば、「眞鍮」「長十郎」「太平」「力彌」「赤龍」「初霜」「明月」「赤穂」「泡雪」「早生赤梨」「世界一」「パートレット」「キーファー」等なり。梨の名稱に、時代の變遷あるを見るべし

實作注意 梨の花は春にして、秋は果實を季とするなり。和名を「一あをなし」とも云へり。**參照** 棠梨 春・梨の花

例句

梨

物干にのび立つ梨の片枝かな　惟然　(藤の實)

梨の葉に風の渡る戰ぎかな　園女　(陸奥鵆)

苧生の浦梨と詠める所にて

有無の實にも齒のなき翁かな　闌更　(半化坊發句集)

戸隠山

梨焼て風邪平らけん丸かぶり　嘯山　(葎亭句集)

初梨の天から降ッた社壇哉　一茶　(一茶新集)

佛へと梨十ばかり貰ひけり　子規　(子規句集)

梨むくや甘き雫の刃を垂るゝ　同　(仝集)

極上々あわ雪と記す梨の札　同　(同)

梨くふは大師戻りの人ならし　同　(同)

青梨

青梨や薄刄わたせば秋の水　大江丸　(俳懺悔)

棠梨(やまなし)(晩)　いぬなし

季題解説 薔薇科の喬木にして本州中部の山地に自生す、「いぬなし」とも云ふ。葉は卵形、先端唇狀に突出し、基部は丸形・截形・心臓形等種々あり、緣邊の鋸齒は剛毛狀となりて開出す、葉柄長し。花は白色にして繖房狀をなす。果實は梨果を結び、晩秋より初冬にかけて熟す、果肉に石細胞多く食用に不適當なるも、煮て食ふべし。**參照** 梨子。

柿（三秋）　澁柿　甘柿　木淡　きざがき　こねりがき　柿の秋（人事）　柿膾（人事）　𤍠柿　さはし（人事）　樽柿（人事）　曝柿（人事）　熟柿（人事）　柿…（人事）　柿賣（人事）

古句新句

【青山の井】九月　一柿一併、木練・御所柿・木淡・熟柿・甘干・筆柿・しぶ柿・柿つき

【滑稽雜談】九月。時珍曰、柿高樹、大葉圓くして光澤あり。四月小花を開き黃白色。實を結ぶ青綠也。八九月乃ち熟す。「木練柿」大和の御所柿は木練の上品なる物也。「木淡」「鹿心柿」俗に云ふ筆柿也。その形牛・鹿の心臟に似たり、又柿の眞尖にて果長し、故に名く。「圓座柿」帶に一重ありて圓座を敷けるが如し、故に名く。「美濃柿」尤も釣柿に宜し。この種濃州より產する故名く。「安西柿」華州府志に云、傳へていふ、慈照院義政公東山東求堂に在りし時、安西氏の人之に從ふ。宅の邊に柿あり、その味甜し。今に到りて安西氏の裔淨土寺村に在り。古の柿の樹なほ存す。「澁柿」、「猿柿」時珍曰、一名模棗、大和本草云、君遷子。此の柿は丹波にあり、大さ小棗の如く、實鈴の如し。是宇治のころ柿とは別也。味甘き事常の柿の如し。今按に猿柿にも二種有りと聞ゆ。一種は味甘き果とす、一種は澁柿にて乾し合ふ也。又丁香柿は圓柿の類ならし。是等の種信州に多し、彼の地また猿猴多し。好んでこの果を食ふ。故に名くるか。又この種を人賞せざる故にや、すべて柿とは果しげく生じて枝にあるを、俗に云ふ鈴なり也。又小さき心也。「醂柿」華州府志に云、安居院の人家清水郡外より賣來る澁柿を買ひ、新しき鍋湯を以て煮ること一二沸（新鍋湯へ煎汁を灰汁といふ）然れば苦澁忽ち去りて甘味に變ず。是を醂柿といふ。灰汁を以て之を煮る故に外皮壞れず。よつて醂柿といふ。京極眞如堂每年十月十夜法事の間の賣物となす、故に之を十夜柿といふ。△醂柿等の名、植物とこれをみるべし（？）。「串柿」甘干は稱たるべし。なほ作意によるべし。是も植物にあらず。

【五湖草】三秋「烘柿」又「醂柿」、青き時器中に入れ置く。自然に紅熟す。その甘き蜜の如し。「白柿」澁柿をもって枝を連ね曝し乾かし、或は繩に繋いで晒し乾かす。初め蕎麥稈・稻藁をもつて包宿しによく霜を生ず。豫州西條の產甘美、備州のもの之に次ぐ。濃州及び尾州の產は長さ三四寸許（尾州蜂屋柿也）、「胡盧柿」一名豆柿、卽ち乾柿、大き頭指の如し、淡霜を生ず。山州宇治より出づ。「樹練柿」形鳥の卵の如き者、攝州・丹波多し。所謂雞子柿か。京師御所柿を以て木練柿といふ。「木淡」樹上熟美なる者をいふ。「似柿」御所柿に似て肥滿、圓ならざる者、味大に劣れり。

〔伽羅柿〕一名透徹柿(スキトホリ)。形長く圓く微尖(やゝ)り肉中沈香の理(二)の如くにして味脆美也。「田舎柿」形圓く諸柿より大にして味澁し。以て醂柿となす。所謂塔柿か。

註 (一) 植物の部に入らざる義。(二) 木目(モクメ)。

【季題解説】 柿樹は野生のもの有り、栽培のものありて其種類百餘に達す。柿を秋季と定むるは其果實を以て季とするものにて、柿の花は六月梅雨の頃なれば、夏の季とせり。柿の甘きものは生にて食し、澁きものは白柿・烏柿・串柿・醂柿・烘柿等になして食用とす。又良質の柿の皮を乾燥したるものゝ煎汁を、美に用ふれば美味にして、農家の用ふるところなり。柿の葉は鹽魚の臭氣を去るにも用ふ。「本草」に註するところの柿の種類、田舎柿・牛心柿・蒲菊柿・樹練柿・御所柿・圓座柿・木淡・伽羅柿・似柿等を擧げ、食用として加工したるものに、白柿・胡盧柿(コロガキ)・樽拔柿(タルヌキ)を註し、其他澁柿(カンザシ)と熟柿を擧げたり。現今栽培する柿の品種は「御所柿」「御所丸」「百目柿」「霜丸」「つるの子」「大々丸」「禪寺丸」「似たり御所柿」「蜩巣丸」「丹久鶴」「擬寶珠」「油壺」「甲州丸」「豐岡柿」「富有柿」「乾柿」等にして、これらは甘味種なり。次に澁味の種類に「蜂屋柿」「西條柿」「衣紋柿」「たねなし」「小澁」「身不知柿」「おかめ柿」等あり。柿の實に早熟のものあり、晩熟のものあり。晩熟のものには、仲秋一旦黄熟して澁味を去るも再び澁味を生じ、初冬の霜にあひて始めて完全に熟するもの有り。俗に、木にある柿の澁味は、月夜に拔けて、暗夜に戻ると云へり。澁柿の澁を如く加工法中、醂柿は澁柿を樽に入れ、上に藥灰をかけて溫湯をそゝぎ、密封して一晝夜を經たもの、樽柿は酒樽に入れて澁をぬけるもの、曝柿は柿に石灰をかけ或は蕎麥莖の灰汁に二三日浸して後干したるもの、干柿は柿の皮を去り、火にかけて干したるもの、烘柿は切藥の中へ貯へしもの等がある。

【實作注意】 柿の實の木にあり熟して美しきをきざはしと云ふ。澁柿に對して、樹に置きながら醂す意なり。之を又こねりがきとも云ふ。柿の秋は柿の熟する晩秋の時を云ふ。柿の實は其甘美にして、又柿の木は何處の里にもあり、眺むるに他物に紛れぬ趣あり。時候・地理・人事に亙りて廣く其趣致を探ぐることを得べき季題なり。柿餅は黄柿に米の粉を和して提蒸て小兒に與ふるに下痢下血を止むと云ふ。柿脯は甘柿又は干柿を刻み、大根を刻みたるもの等に和して脯とす。柿は冬に至りて熟するもあれども、柿と云へば秋季なり。但し「栗草」に註する所の君遷子(信濃柿)は別に揭ぐ。

【參照】 熟柿 信濃柿 人事 澁取 甘干 夏 柿の花 青柿

【例句】

柿

目にかれし里は柿の梢に立つ吹矢　言水(言水句集)

猿蓑の繪に

御所柿のさもあか〳〵と木の空に　同(七車)

柿

隨臣の目に隣あり吊し柿　沾德（沾德句集）
蔕落の柿の音聞く深山かな　素堂（素堂家集）
祖父親孫の榮えや柿蜜柑　芭蕉（[illegible]）
里古りて柿の木持たぬ家もなし　同（[illegible]）
白髪に柿を[illegible]
御所柿や我齒に消ゆる今朝の霜　其角（五元集拾遺）
柿ぬしや梢は近き嵐山　去來（[illegible]）
落柿舍に假住
柿買や見たば拔いたる眞桑賣　同（[illegible]）
息災の數に問はれむ嵯峨の柿　同（泉日記）
釣柿や障子に狂ふ夕日影　丈草（[illegible]）
元祿七年冬、芭蕉翁に別れを[illegible]
別るるや柿喰ひながら坂の上　惟然（續猿蓑）
野分に落すも葉もなしたくら柿　車庸（己が光）
春ゝ老木の柿を五六升　蕪村（蕪村遺稿）
殘る葉と染かはす柿や二つ三つ　太祇（太祇句選）
關越て又柿かぶる袂かな　同（同）
枝の柿鳥は逍はずさりながら　白雄（白雄句集）
物荒れて時めく柿の梢かな　蓼太（蓼太句集）
柿割て君思ふやのト問はむ　几董（井華集）
秋されや柿さまざまの物[illegible]な　召波（春泥句集）
閑室獨坐
日は過ぐる梢の柿と見あひつつ　成美（成美家集）
俳諧師梢の柿の蔕ばかり　乙二（をのゝえ草稿）
生つたりな柿の蔕落する迄に　一茶（七番日記）
庵の柿生り年持つも可笑しさよ　同（同）
婆にさと女を見て
頰ぺたに當てなどすなり赤い柿　同（一茶句帖）
柿の木であいと答へる小僧哉　同（同）
柿の實や幾日ころげて麓迄　同（嘉永版一茶發句集）
法隆寺の茶店に憩ひて
柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺　子規（子規句集）
町あれて柿の木多しくるわ　同（全集）
柿の色心靜かに實りけり　古泉（丙寅句鈔）
柿はみてつめたしと云ふ附の老　石影（己巳句鈔）
柿醂す程も田舍は暇ある　青々（倦鳥）

澁柿

澁柿や一口は喰ふ猿の面　芭蕉（芭蕉句選拾遺）
清瀧や澁柿さはす我心　其角（いつを昔）
大切な柿とて主よりもなす
泊瀨女に柿の澁さを忍びけり　同（句兄弟）

詞書略
猶石に澁柿を塗る翁かな　嵐雪（杜撰集）
一人旅澁柿喰ふた顔は誰　同（玄峰集）
澁柿やがて紙子の歸り花　蕪村（新五子稿）
かぶり缺く柿の澁さや十が十　太祇（太祇句選）
戸隠山に宿て
澁柿に忍びかねてや猿の啼く　白雄（白雄句集）
尾長啼く澁柿原の雨氣かな　同（同）
澁柿や嘴しぬぐふ山鴉　同（同）
澁柿や代々の歌にも撰殘し　蓼太（蓼太句集）
雨毎に澁や拔けなん柿の色　闌更（半化坊發句集）
澁柿を食むは鳥の繼子哉　一茶（七番日記）
澁いとこ母が喰ひけり山の柿　同（一茶句帖）
つりがねといふ柿をもらひて
つり鐘の蔕のところが澁かりき　子規（子規句集）

きざはし
椑柿や鞠のかかりの見ゆる家　酒堂（あめ子）
木のもとに圓座取卷け小練柿　去來（藤の實）

柿實
柿實の旅寐は寒し柿の側　太祇（太祇句選）

熟柿（じゆくし）（晩）　うみ柿

季題解説　木淡は樹にあるを云へど、熟柿は樹にあると否とを問はず、柿の實の爛熟して美しきをいふ。參照 柿

例句

熟柿
去來に對す
淋しさの嵯峨より出たる熟柿哉　支考（梟日記）
腹に秋のしみたる熟柿かな　同（同）
木傳ふて穴熊出づる熟柿かな　丈草（菊の香）

信濃柿（しなのがき）（晩）　さる柿　まめ柿　ふだう柿　すゞ柿　こぶし柿　君遷子（くんせんし）

季題解説　此柿多く山地に自生するものなれども、又園圃に栽培せらる。木の形態の概要は柿に似たれども、葉は稍長く、葉の面暗緑色、葉裏は灰白色、平滑にして五分ばかりの葉柄を有す。花候は六月。果實は圓く或は橢圓にして、六七分ばかりの小粒のもの枝に連り、霜至つて後黃熟す。その色琥珀の如く美し。信濃國に多く産するを以つて此名あり。「栞草」に註するところの君遷子（さるがき）蒲葡柿（ぶだうがき）はこれなり。霜を經たるものを採り、皮のまま乾して食するによろし。

實作注意　此柿の木にある風姿に特別の趣あり。柿は秋季なれども、之は冬に亙るの季物たるべし。晩秋紅葉狩の頃、山家に此柿の枝を吊るして賣れ

るを見るは、他に紛れぬ景物なり。果實寒を經て猶木に殘れるものあり。黑柹と稱して小器具を作るに用ふる材は、本種の心材なり。信濃柹。

例句

信濃柹　霜月に琥珀の色や信濃柹　螢樓（漁火）

蜜柑（晩）

たちばな　おほみかん　青蜜柑　紀州蜜柑　温州蜜柑　泉州蜜柑　八代蜜柑　鳴門蜜柑　紅蜜柑　唐蜜柑

古書校註

【年浪草】九月。○大和本草に曰、橘、タチバナと訓す。ミカンなり。その花を花たちばなと古歌によめり。南方温暖の地及び海邊沙地に宜し。故に紀州・駿州・肥後の八代皆名産也。和漢三才圖會に曰、太知波奈（和名）は橘類の總名也。今單に太知波奈と稱する者は乃ち包橘なり。專ら果となし、その皮を藥とする者は乃ち蜜柑也。その實熟する時は甜き事蜜の如し、故に名く。

【篗纑輪】（温州橘）九月。この種唐土温州より來る。温州は浙江の南にて柑橘名産の所也。本邦紀州の如しと云々。俗雲州橘の字を用ふ誤なりとぞ。

季題解說

芸香科の常緑灌木にして暖地に産す。高さ一丈餘。葉は長卵形にして互生し、六月頃白花五瓣の小花を開き、花後扁圓の漿果を結ぶ。秋大さ一二寸となり黃熟す。味甘酸にして美なり。種類頗る多し。雲州橘と稱するは温州蜜柑の事にして、昔、支那浙江省寧波府温州の種の渡りしもの、後、徳川賴宣再び温州の種を求めて、紀伊の有田郡に繁殖せしめしもの是なり。後年諸國の暖地にも移し植う。其實大きく赤くして味甘美なり。仲秋頃の實尚ほ熟せざるものを青蜜柑といふ。黃熟は十月より十一月即ち秋冬の候に亙るを普通とす。

例句

蜜柑　紀の路行く山は蜜柑の吉野哉　其角（田舍の句合）
　　　埋み置く灰に音を鳴く蜜柑哉　召波（春泥發句集）
　　　暖な國を蜜柑の林かな　嘯山（俳諧新選）
青蜜柑　根府川や石切る山の青蜜柑　子規（子規句集）

佛手柑（晩）

ぶつしゆかん　佛香璧（人事）

古書校註

【篗纑輪】九月。拘櫞・香櫞の名あり、人の指の如くなるを佛手柑といふとぞ、蜜淹とす。甚だ香氣あり。

季題解說

佛手柑は秋冬の間に熟し、外皮粗く、柚に似て長大にして本圓く、先は細く分れて稍指を並べたるが如し。佛手柑の名是より來る。香氣高

く、嫩果を糖藏して食す。『大和本草』に、昔本邦にこれなし、近世來る—とあり。佛手柑より製したる酒を佛香碧といふ。〔參照〕夏—佛手柑の花(ブシユカンノハナ)

例句

佛手柑　貞佐一周忌
佛手柑の甘ミ忘れず卓の上　道雲（陸の駒）
佛手柑や土を去る事遠からす　嘯山（律亭句集）

參考　ぶしゆかん Citrus Medica, L. var. sarcodactylus, Swingle.（へんるうだ科）主として暖國に培養せらるゝ常綠亞喬木なり、莖の高さ一丈餘に達し、葉は互生にして、橢圓形を呈し、邊緣に微鋸齒を有し、先端は鈍頭をなす、葉の全長三四寸、葉腋に針を出す、初夏白色の花を梢葉腋に出す、五瓣にしてミカンの花に似たり、果實は冬に至りて熟し、其肌黃色にしてユズに似、長形にして本は圓く、末は十餘箇に分れて恰も指を連ねたる如きを以て佛手柑の名を得、マルブシユカンの一變種にして、多くは觀賞用とす、香氣甚だ高し。

橙（だいだい）（晩）　回靑橙（くわいせいとう）　臭橙（しうとう）　橙船（人事）

古書校註　【栞草】九月。秋の部にのせたるは黃熟するをいふ也。正月の部に載せたるは嘉祝に用ふる故也。

季題解說　橙の實は圓く、晩秋熟して黃色を呈するも、樹に留る時は翌春に至りて再び綠色に變じ、新果の熟期に及びて更に黃色となる。斯くして數年落ちざるを以て、代々の意にとりこの名あり。瓤囊は九個乃至十一個にして、内に各二個づゝの種子を包み、味苦澁にして生食に適せず。果皮より香料・橙皮油を取り、又乾燥して藥用とし、果肉の酸液は橙酢とて食用に供す。

實作注意　橙は黃熟を以て秋季とすれども、新年季物にも入るゝは嘉祝の意にて用ふる故なり。そこに自ら感味詠出の相違あるべきなり。〔參照〕新年—橙飾(ダイダイカザリ)　夏—橙の花(ダイダイノハナ)

九年母（くねんぼ）（晩）　くねぼ　香橙（かうとう）　乳柑（にうかん）

古書校註　【滑稽雜談】九月。大和本草に曰、柑、俗に九年母といふ、名義未詳。木は蜜柑より長じ易く早く實のる。

季題解說　九年母は橙の一種にして、樹の概形亦似たり。果實の大さ柚に等しく、蜜柑より圓くして早く實る。香氣ありて味甘酸なり。〔參照〕夏—九年母の花(クネンボノハナ)

例句

九年母
九年母の秋を急がぬ靑みかな　孤桐（俳諧新選）

九年母　九年母やそろ〳〵甘き風の暮　杜弓（新類題発句集）
九年母の黄に好もしき見越哉　岸水（[illegible]）

朱欒（晩）

香欒　番橙　じやがたら蜜柑　内紫　文旦

季題解説　芸香科の常緑樹にして、南國に產し、原ポルトガル語の「ザムボア」より轉訛す。高さ丈餘、枝に刺あり、嫩枝に細毛を生ず。概形蜜柑に似たり。初夏五瓣の白花を開く。果實は柑橘中の最大果にして、秋冬の候熟す。大さ甜瓜の如く、本狹く末廣く、果皮は肌粗くして厚し。其外の黄色にして内肉の白きを朱欒と稱へ、褐色に熟して内肉の淡紅帶紫色のものを内紫と稱すれども、又兩者を共に「ざぼん」といひ、或は文旦といふ。酸甘くして苦味あり。砂糖を加へて生食し、又刻みて砂糖漬とす。之を文旦漬といふ。〔季題〕夏　朱欒の花（夏）

例句
朱欒　吹く風に音も番橙のあたま哉　除風（番橙集）

参考　ざぼん（Cirtus maxima, Merr.（へんるうだ科）暖地に栽培する常緑樹なり、高さ一丈餘に達し、概形略他のミカン類に似たれども、其葉濶大なり、初夏梢葉間に白色の花を開く、果實は冬月熟し、黄色を呈し、直徑五六寸に至る、外皮厚し、其味甘酸生食に適し、柑橘類中最大なるものなり、通常内部の紅紫色のものをウチムラサキと稱へ、内部の白色のものをザボンと稱す。

榲桲（晩）

まるめ　まるめる　まるめいら　おにめ　香圓　馬樹

古書校註　【篗纑輪】九月。この種蕃邦より渡りて、この訓は則ち蠻語也。今京師に多し。梨子の如く風味もまた梨子に似て少しかろし。加世伊太といふ菓子は之に砂糖及び蜜を和して製したるものなり。

季題解説　榲桲の果實は黄色の漿果にて、直徑二寸餘、外面に毛茸ありて凹凸多し。晩秋黄熟して特殊の芳香を放ち、味甘酸にして生食すべし。漢名を香圓・馬樹と云ふ。

例句
榲桲　榲桲や二つ貰うて雨の[illegible]　文誰（俳諧新選）

金柑（晩） 金橘　姫橘

古書校註
【滑稽雜談】九月。時珍曰、金橘、實を結ぶ、秋冬に黄熟す。

季題解説 金柑は秋冬の間に黄熟す。形棗に似て寸許。酸味多し。皮と共に生食す。〔參照〕夏―金柑の花（ママ）

例句
金柑　金柑に雪をおろしの膾哉　沙明（西華集）

參考・植物 きんかん Fortunella japonica, Swingle.（へんるうだ科）多く暖地に培養せらる。常綠灌木にして、概形みかんに似たり、高さ六七尺に達す、葉は長橢圓形或は卵形にして、透明の小點を具へ、葉柄の先端に關節を有し、葉柄の兩側には狹翼を有すること殆どなし、夏日葉腋に白色の花を開く、五瓣花にして、後球形をなせる指頭大の果實を生ず、秋熟して帶黄色を呈す、又長橢圓形若くは長倒卵形の果實を有するものあり、みかんの一變種なり。

柑子（晩） 柑子蜜柑　大柑子　小柑子　平柑子　日輪柑子

古書校註
【滑稽雜談】九月。本朝食鑑に曰、柑子は蜜柑の類にして小。

季題解説 古へ柑子といへるは柑橘類の總稱にして、或時は橘を指し、又は枳殼を稱したるも、茲にいふは包橘即ち「マルバ柑子」の類にして、俗に柑子蜜柑をいふ。果形圓くして蜜柑より小し、甘味あれども酸氣強し。〔參照〕夏―柑子の花（ママ）

例句
柑子　先門に入れば柑子の色に見ゆる（浦上賀隆を訪ふ）　曉臺（曉臺句集）
鬼柑子　お隣の愛宕土産や鬼柑子　羽紅女（荒小田）

柚（晩） 柚子　ゆいず

古書校註
【增山井】九月、俳。花柚・柚べし・柚みそ。
【滑稽雜談】九月の今按に柚の類ひ多し。俗にいふ花柚・餅柚・香柚也。その外柚柑・大福・朱欒、是等も同類也。和俗柚味噌を製す、尤も秋也。柚釜は作意によるべし。
註 柚味噌・柚べしの條參照

季題解説「ゆ」の實なればゆずと云ふ。帶白黄色の柑果。表面粗にして凸凹あり。之を裂けば香氣迸る。瓤嚢は淡黄色を帶び、一顆十二瓣。膜厚くして分離し難く、毎瓤に二三子を藏す　柚味噌・柚醬等になす。〔參照〕夏

柚の花（ハナ）

例句

柚　子（ミイエノ）籠の柚の葉にのりし匂ひ哉　其角（五元集拾遺）
柚の針に嘴ぬぐひけり消り鳥　石梁（上戸集）
切口もいさ白菊や柚一薫り　素丸（素丸發句集）
柚の色に心もとりぬ魚の店　多代女（晴霞句集）
樗逆日や好きよらに柚の匂ひ　梧堂（新類題發句集）
ものゆかし北の家陰の柚の黄み　道肥（同）
古家や藁々として柚子黄なり　子規（子規句集）
荒壁や柚子に梯子す武者屋敷　同（全集）

參考　ゆず citrus Aurantium L. subsp. Junos, Makino.（へんるうだ科）庭園其他に栽培せらるゝ常緑灌木にして、高さ一丈餘に達す、葉は長卵形にして、葉柄に翅を有し、上端に關節を具ふ、初夏、白色五瓣の花を開く、果實は稍扁圓の漿果にして、外皮は疣を有し、秋熟して黄色を呈す、特殊の香氣を具ふ酸味甚だ強し

橙（たちばな）の實（み）

季題解説　芸香科の常綠木にて、果實は扁球狀の漿果にして、蜜柑に似て稍々小さく、秋熟して黄色を呈す。味は酸味と苦味とを帶ぶ。〔參照〕夏―花橘（ハナタチバナ）

枳殼（きこく）の實（み）（晩）　からたちのみ　枸橘（くきつ）

古書校註　【滑稽雜談】九月。

季題解説　芸香科の木本にして、幹は通常五六尺、老木は丈餘に達するものあり。主に生垣として植ゑ、又みかん類の砧木として重用せらる、此植物は刺甚だ多く、又分岐多く、樹皮は通常綠色なり、葉は三小葉より成る複葉にて、葉柄に翼を具へ秋日落葉す、春末梢上葉腋に白色五瓣の小花を開き、花後球形の漿果を結び、晩秋熟すれば黄色を呈す。藥品として用ひらる。

實作注意　漢名を枸橘、和名をからたちといふ。單に枳殼といひても、枳殼の實として秋季となるべし。〔參照〕春―枳殼の花（キコクノハナ）

例句

枳殼の實冷たき雨の降る日かな　刺風（丙寅句鈔）

參考　からたち Poncirus trifoliata, Raf.（へんるうだ科）支那日本の原産にして、常に生籬として植ゑらるる落葉灌木なり、幹は通常五六尺、老木は丈餘に達するものあり、樹に刺甚だ多く、又分枝多し、樹皮は通常綠色を呈す、葉は三小葉より成る複葉にして葉柄に翼を具へ、秋日落葉す、

春葉に先ちて白色一花を開く、五瓣の比較的大なる花なり、後圓實を結ぶ、直徑一寸許、秋熟して黄色を呈す、食ふに耐へず。

榠樝（晩）　花櫚　花梨　唐梨　海棠木瓜　きぼけ　木木瓜　あんらん樹

古書校註

【徒然草諸抄】九月〔果子の實〕〔〕櫨也。京師に多し。花は林檎に似て子は胡瓜のやゝ短きものなり。その味しぶし。唐土より將來する櫚木をも俗クワリンといふ、紫檀の如くなる木也。それとは別物也。

【年浪草】九月蘊頌曰、榠樝の木葉花實甚だ木瓜に類し、木瓜に比すれば大にして黄色、之を辨ずるに唯蔕の間を見るに別に重蔕乳の如き者有り。これ則ち榠樝也。大和本草に曰、花は林檎又海棠に似て後れて開く、實は秋冬熟すと云々。

季題解説　庭園に栽培する薔薇科の落葉果樹。幹の高さ二三丈。樹皮は鱗狀に剝け、其痕跡雲紋をなす。葉は卵形にして尖り、緣邊に微細の鋭鋸齒あり。背に微毛あり。春日五瓣の鮮紅色花を開く。果實は楕圓形にして頭尖り、凹凸ありて正し。秋黄熟し、形稍〻甜瓜に似たり。澁味ありて生食に適せざれども砂糖漬として食す。香氣あり。漢名花櫚。〔參照〕春―榠樝の花

例句

榠樝　榠樝の木の隣に黄ばむくわりん哉　之沖（新俳題集句集）

參考　くわりん Pseudocydonia sinensis, Schneid.（いばら科）支那原産にして庭園に栽培する落葉小喬木なり、莖の高さ二丈許に達し、樹皮は鱗狀に剝げ、其痕跡雲紋をなす、葉は卵形にして尖り邊緣に微細の鋭鋸齒を有し、背に微毛あり、春日、鮮紅色五瓣花を開く、果實は巨大にして楕圓形をなし、表面滑澤にして秋末黄熟し、芳香を有すれども果肉堅くして澁味ありて生食すべからず、本邦にあんらん樹と稱するものは、本種と同一品なり。

無花果（晩）　いちじく　唐柹　白無花果

古書校註

【滑稽雜談】九月。△今按に本草の無花果は五月に熟すといへり。然れども和產の唐柹と稱する者、七・八月に熟す。又和品の一熟は九・十月に熟す。或は云、この果一月の内に熟す故に一熟といへり。和產の者いづれも秋に許用すべし。

【年浪草】九月。和漢三才圖會に曰、其實柹に似て本窄し、俗に唐柹といふ。一月にして熟す。故に一熟と名づく。その樹枇杷に似たりといへども然らず、婆娑として葉蓖麻に似て小く、背色淡く潤ふ。文理隆く明なり。

五痔を治することを識りて魚毒を治する事をしらず。

季題解説 地中海沿岸原産の桑科の落葉亜喬木にして、幹の高さ一丈餘に達す。葉は單葉大形粗糙にして三裂若くは五裂の掌狀をなす。花は單性にして倒卵形囊狀の總花托を内藏し、果肉は倒卵形にして其外側は總花托の發育せしもの、内部は多數の花の發育せしものなり。秋熟すれば青綠なる外皮は次第に暗紫色となり、裂けて淡紅の内部を露はす。生食すべく、味甘美にして蛋白質を「ペプトーン」に變化せしむる成分あり、消化作用を助く。一種果肉の白きものを「しろいちぢゆく」といふ。

例句

無花果

無花果や垣は野分に打倒れ　史邦（己が光）

無花果や落る程笑む西日受　桃從（田毎の日）

いちじゆくの實のはぜてゐる霧の中　三舍（倦鳥）

無花果の割れて心を見するかな　青々（同　）

參考 いちじく Ficus Carica L.（くは科）小亞細亞邊の原産にして普通に培養する落葉樹なり、葉は互生し、大にして三裂し、掌狀脈を有し、之を切れば乳汁を出す、春夏の候花軸よりなれる花囊を葉腋に出し、内面に無數の淡紅色の花を有す、花は雌雄の別ありて、同一囊花中に生じ、通常雄花は上邊に、雌花は下にありと雖ども、我邦に渡來のものは花囊内たゞ雌花を有するに過ぎず、夏秋の候花囊を食用とす、明治年間に新に渡來せるものにシロイチヂクあり、いちじくの變種にして其葉掌狀に深く分裂す。

石榴（中）　安石榴　實石榴

古書校註

【增山井】九月。俳。多子、サクロ也。

【年浪草】八月。時珍曰、榴は瘤也。丹實垂々として贅瘤の如し。（北史李祖收の傳に曰、元魏安德王延宗、李祖收を納れて妃となす。後に帝李宅に幸す。而して妃が母二の石榴を帝の前にすすむ。人その意を知る事なし。祖收が云、子孫多からん事を欲する也と。今本邦に於て鬼子母神を祭るの人必ず之に備ふるに榴を以てするは、多子の義にとるか。

季題解説 石榴は元來地中海沿岸の原産にして、安石榴科の落葉灌木、高さ七八尺に達す。葉は長楕圓形全邊にして光澤を有し、略〻對生す。梅雨の候、枝梢上に通常赤き筒をなせる蕚と、深紅色の花瓣とを有する美花を多數に著く。花後蕚は發育して果皮をなせる果實を結ぶ。この果實は熟するに至れば裂開して紅色の肉を以て包まれたる種子を現はす。又一種潔白雪の如きものあり、ともに其味甘酸にして、飢を禦ぎ、渴を療し、醒を解し、醉を止むるの效ありとせり。〔參照〕夏―柘榴の花（八〇

【例句】

石榴

玉と見て蜂の臺よ割石榴　　來山（續今宮艸）

けしからぬ小家にて
燕の子よ石榴こぼるる簷の上　　岩翁（雜談集）

宵闇の手にさはるもの石榴哉　　紫道（西華集）

石榴喰ふ女かしこらほどきけり　　太祇（太祇句選）

喰ずとも石榴興ある形かな　　同（同）

紅キや石榴の皮の厚きにも　　嘯山（葎亭句集）

さと割れば迸りけり石榴の實　　同（同）

折る兒に吹かけ顏の石榴かな　　素丸（素丸發句集）

花の形をとりもなほさず石榴かな　　諸九尼（諸九尼句集）

我味の石榴へ這はす虱かな　　一茶（一茶句帖）

紅キの舌を卷たる石榴かな　　同（同）

桃島にて
石榴や浦人いのち長からん　　柳外（巳巳句鈔）

山晴の町に出そめし石榴かな　　青々（倦鳥）

八朔梅（はっさくばい）（中）

【季題解説】八朔梅は諸説あれど紅梅の一種、深紅の八重小輪なるものにて、陰暦八月頃より一二輪咲きそめて、冬至にいたり最盛りに、翌春まで開花をつゞけ、春に入ては色尙美に、紅梅中の絶品なりといふ説妥當なるが如し。又一書に江戸植樹家に八九月の頃新芽を生じ、淺紅八重中輪の花まばらに咲き、初春にいたり再び花繁く咲くを八朔梅といふともあり。いづれにしても八朔頃より咲き出で、初春に亙る紅梅の一種を云ふなること疑なきが如し。【參照】春—梅。

【例句】

八朔梅

八朔やかしこき梅の品定め　　重厚（新類題發句集）

八朔や鶯のけんの梅の花　　佳膳（同）

八朔に今日か昨日か梅の花　　鳳朗（鳳朗發句集）

木瓜の子（ほけのみ）（初）　くさぼけ　樝子（しどみ）

【諸書考註】【年浪草】七月「木瓜子」和漢三才圖會に曰、世に木瓜と稱する者本草(一)の注に合はず。乃ちこれ木桃にして木瓜にあらず。武州・江州より多く之を出す。藥肆以て木瓜に充つ。近頃唐木瓜といふ者あり、人その花を愛す。乃ちこれ眞の木瓜也。

註（一）本草には「その實小瓜の如くし一鼻あり、津潤に味不木なる者木瓜とす　鼻は乃ち花脱する處、蔕蒂に非ず、云々」と見ゆ

[illegible] 木瓜と稱する物、其品類甚多く、實を結ばぬものあり、秋實を結ぶものを季題とす。實に大なるも有り、小なるもあり、共に酸味强し。木瓜子を灰に燒て池中に散じ、以て魚に毒すべしと云ひ、木瓜の醋を饅にかくれば腫大になる。故に木瓜と饅と同食す可からずと云ふ。草木瓜（樝子）の實は圓くして頭尾共に凹みて小く、「からぼけ」の實は楕圓にして凹凸多く、肉硬し。共に生食し又醋を搾り、藥用にも供す。［參照］春―木瓜の花。

［例句］

木瓜の實　木瓜の實やとられまじとて針の中　斐文（類題發句集）
木瓜の實やことぞともなく日の當る　青々（妻木）
木瓜に一ッ付きたりし實のみどりなる　同（倦鳥）

茱萸（晩） 秋茱萸 霜茱萸

[illegible] 茱萸の實は小球狀にして紅色に白星點を有す。味甘澁にして酸味を帶ぶ。茱萸の實の綴りなりたる枝を折り、軒に吊るしなどして野店に之を賣るは、また秋景の一つなり。果實霜に遇へば甘くなるより霜茱萸といふ。又茱萸の熟したるをとりて乾燥し、其汁を煮沸して冷し、桂子・砂糖・葡萄酒等を加へて醱酵せしめて茱萸酒を作る。

[illegible] 茱萸と云へば秋季の定めなり。秋の茱萸は呉茱萸なれど、呉の字は省きて、只茱萸と書けるが古來の習慣なり。［參照］人事―高きに登る・茱萸の酒。

［例句］

茱萸　むづかしや茱萸にからまる蘿蔓　曉臺（曉臺句集）
茱萸の木のしごかれて行く野問哉　同（同）
磯山や茱萸拾ふ子の袖袂　白雄（白雄句集）
堂守が茱萸迄喰ふ烏かな　乙二（松窓乙二句集）
あからみし茱萸匂ふなり岸の端　桃徒（田舍の日）
里川の舟に乘り持つ茱萸の枝　賢樓（倦鳥）

[illegible] あきぐみ Elaeagnus umbellata Thunb.（ぐみ科）山野に自生する落葉灌木にして、概形ナツグミに似たり、高さ十尺餘に達す、葉は長楕圓形にして銀色の細鱗を具ふ、若き葉には赤細鱗を有す、初夏葉腋に數花を簇生し、秋に至りて、白星點を密布する紅色球形の果實を結ぶ、花は初め白色にして後黄變す、果實はナツグミより小にして、生食に適す。

正木の蔓（晩） 蔓柾 蔓杜仲

[illegible] 【御傘】〔まさき〕柾は草也。色とも散るともなけれども、蔦と同じく、秋に

成るべし。是に草と木と兩說とり〴〵にて、冷泉殿と宗碩法師と事はれけるに、後撰の歌、又俊頼の深山落葉の題にて、「日暮るればあふ人もなし柾ちる—」とよめる上はとて、木の部に相定めらるゝと云へり。丸（一）熟々と思案するに草なるべし。右の歌も根本神樂の歌に、「太山には霰ふるらし外山なる柾のかづら色付にけり。」是を本歌にして詠めると見えたり。葛を略してまさきとばかりよめるに、何の疑か侍るべき。絡石と云ふ藥有り、石に絡ふとよめり、和名にそれをマサキノカヅラとも、定家葛とも假名を付けたり。其葉丸く枝の先々に根を生ずると本草にあるにより、それならば此の草は柾といふ木の葉に能く似たり。此の柾と云ふ木は常夏と名づけて色の變らぬもの也。それを定家とも云へり、是はかづらに非ず、只常綠木也。是に兩種あり、一種は木かと思へば太き葛にて、先々に根を生じて人家の壁に取付いて有る也。是をも定家とも柾木とも常夏とも云ふ也。右にいふ絡石是也。さりながら地下に有る故か紅葉するとは見えず、山路岩ほの上などにては紅葉するにてこそ侍らめ。但今一種は歌に詠む柾の葛は、絡石に非ずして美しく色付く葛のあるか、山家の者に尋ねたき事也。或人の云、田舎にまさ木と云に、雌木雄木あり。雌木は枝細く葛なりと云へり。然れば俊頼の落葉に詠める柾とばかりは木の事か。柾の葛といふ時は草か、又此說も右にいふ絡石の事と見えたり。藥も椿よりは小さく丸きと云へり。それなれば常夏也。紅葉するものに非ず。とかく歌によめる柾は、別に紅葉する草の有るにと見えたり。いかに大なる木なりとも、葛といふ類は草になる也。乍ㇾ去藤を木に讀みたる古歌あり、之は本草に木の部・草の部兩方に兼用故と云へり　其類多し。されば柾も藤の類に双方に苦かる可らざるか。なほ後世の君子を待つ　但木偏の文字を草と言はんも如何なれば、柾といふ時は木の類たるべし。又、葛と讀めるを木と言はんも如何なればマサキノカヅラといふ時は草にして然るべしと存ず。慥なる說未だ不ㇾ出間は、此定に誹にはし給ふべきか。

【栞草】　九月。眞淵翁の云、まさきのかづらはもと常磐なるかづらをすべていふべし。然ればいと古へ神社によりて用ひなれしはさま〴〵あるべき中に、襷とし鬘とせしは一種有りけん。古今集に「深山にはあられふるらし外山なるまさきのかつら色づきにけり—」とよみしは、すべて常盤なる草木も冬の初めには去年の古葉色づき落つるものなるが、山の岩木などにまとへる常盤かづらの葉は南天燭に似て黒みあるが、冬の始めにえもいはずもみづるあり。是ぞ山守時專ら目につきて見ゆれば、右の如くはよみつらん云々。○眞淵翁の說による時は、定家蔓に似たり。俳諧に秋季と定めたるは、古歌に色づくとよみたるによりてなるべし。

註（一）貞德のこと。

季題類似說　まさきの鬘とは、常磐なるかづらの類を、總て云へりしものなるべし。‖深山にはあられふるらし外山なるまさきのかづらいろづきにけり

例句

蔦

閑人の茅舍を訪ひて

蔦植て竹四五本の嵐かな　芭蕉（甲子吟行）

梧動く秋の終りや蔦の霜　同（芭蕉庵小文庫）

若狭の國禪寂の墓にて

苔埋む蔦のうつゝの念佛かな　同（花の市）

木の葉の食蔦を狄の錦哉　其角（東日記）

甚五左衛門に逢ひて

此風情狂言にせよ蔦の道　同（五元集）

宇都の山の繪に

笈の角梢の蔦に知られけり　同（同）

氣の詰る世や定まりて岩に蔦　同（五元集拾遺）

海をのす風の溜りや森の蔦　丈草（花かけ）

蔦の岡や木の葉重ねの床の内　同（とてしも）

逗子の浦にて

船に火を焚けば蔦這ふ家のさま　支考（東日記）

東江寺瑞光寺

門〳〵に出りや蔦の夕日や海道松　同（國の華）

碓　坊

碓も其色黯なり壁の蔦　同（山琴集）

石山の石にも蔦の裏表　乙洲（薮塞）

甲斐の身延に詣けるに、宇津の山越えにて

年寄りて牛に乘りけり蔦の路　木節（猿蓑）

野宮の鳥井に蔦も無かりけり　涼菟（皮籠摺）

馬方に見られて赤し森の蔦　北枝（そこの花）

金峨寺

藏隱す亭上の佗や竹の蔦　野坡（野坡吟艸）

片袖は足らぬ錦や松の蔦　也有（蘿葉集）

明けてから蔦となりけり石燈籠　千代尼（千代尼句集）

引けば寄る蔦や梢の笑かしこ　太祇（太祇句選）

垣の蔦滴重りぬ絲瓜の葉　曉臺（曉臺句集）

蔦垂れて千尋〳〵見る滴かな　同（同）

壁の蔦甲斐なき斗り雨悲し　白雄（白雄句集）

雨の聲淺茅の小鳥水越ゆる　同（同）

松が根の蔦に身をする猪の子哉　同（同）

美しう蔦は衰ふ人の秋　同（同）

代なしに讓らんといふ蔦の宿　召波（春泥發句集）

何人か住みて額出す窓の蔦　成美（成美家集）

心得て火を焚く蔦の宿り哉　蒼虬（蒼虬翁發句集）

葛の葉　葛の葉に優しき文の菩薩哉　支考（東西夜話）

葛の葉や蟷の身なからかゝる時　嵐雪（…時…）

葛の葉や貝殻拾ふ岩の間　臥高（有磯海）

葛の葉の水に引るゝ山邊かな　曉臺（曉臺句集）

葛紅葉　葛の葉は恐らく赤し茶屋の茶は　乙二（松窓乙二發句集）

犬吼て家に人なし葛紅葉　青水（青水句集）

葛の葉は皆めきたる紅葉哉　芭蕉（信夫摺）

色に出て竹も狂ふや葛紅葉　千代尼（千代尼句集）

枯枝に…見たり葛紅葉　蕪村（蕪村句集拾遺）

打返し見れば紅葉す葛の裏　同（新五子稿）

葛紅葉下戸を住する扉かな　曉臺（曉臺句集）

葛紅葉最一つ家をほしげなり　一茶（享和句帖）

藪疊半は葛の紅葉けり　召波（春泥發句集）

ほの見ゆる…にかゝれる葛紅葉　闌更（半化坊發句集）

色變へぬ松の晴着や葛紅葉　几董（井華集）

葛かつら　棧や命をからむ葛かつら　芭蕉（更科紀行）

しめり持つ岩のひゞれや葛かつら　夕兆（東西夜話）

賣家の値は下りけり葛かつら　也有（蘿葉集）

夜に入れば灯の漏る壁や葛かつら　太祇（太祇句集）

葛の花（初）　葛の花殘る

【本意】葛の花、なほ初秋にもあり。殊に憶良の歌もあれば、秋の心にて詠むも亦よろしからん。

【考證】葛の花は夏、秋にかゝる季の物とするが妥當なるべし。又「葛の花殘る」などと詠みても風情あるべし。以前葛と云ひて秋季たれども、それには必ずしも花を含まず。故に葛の花を更に秋の季物として掲出す。（…）

葛は秋の七草の一。

【例句】

葛の花　花葛や松ふきたふす田成畑　史邦（芭蕉庵小文庫）

もや〳〵としてしづまるや葛の花　山店（同）

雨晴や煙のこもる葛の花　嵐竹（同）

山深み敷しか潤むか葛の花　白雄（白雄句集）

葛の花咲や古井の竹の垣　桃女長（田舎の日）、

葛の花水に引ずる嵐かな　一茶（嘉永版句集）

葛花や筏ならべて飯畑　蕪川（はたけせり）

子の病の爲め幽靜の地に假居をもとめにゆきて
山中は積置柴に葛の花　古泉（庚午句鈔）

葛（くず）（三秋）　眞葛（まくず）　葛かづら　眞葛原（まくずはら）（地理）

【[illegible]】【年浪草】三秋「葛葉（クズノハ）」和漢三才圖會に曰、その葉瓠（シナ）へ薄く、微楮（カヂ）の葉に似て面青く背白し、風至れば則ちよく飜る、恰も掌を反すが如し。婆娑として聲をなす、故に歌人葛の葉の裏見と稱して人の恨みにたとふ。」「眞葛」眞葛（まくず）なり（一）と 慈鎭和尚の歌、「我戀は松を時雨の染めかねて眞葛が原に風さわぐなり」。眞葛原智恩院山門の南にあり。又叡山横川にも眞葛原あり。何れか是なるを知らず。

註（一）または異稱なり

【[illegible]】葛は秋の七草の一にして山野に生じ、蔓を引くこと二三丈にも達するものありて樹木に纏繞し、又地を掩ふ。一見草の如くにはあれど、實は藤などゝ同じき木なりと云ふ。葉は表綠に裏白く、大形にして三箇の小葉より成り、莖と共に褐色の毛あり。花は晩夏、初秋の候に、葉腋に五六寸の穗を抽でゝ藤に似たる蝶形紫赤色のものを着く。花後莢を結び房々したる實を生ず。根を藥用とし、又葛粉を製す。

葛の葉の茂れるは風情あるものにして、秋風その上を吹き渡れば、其葉忽ち裏返りて婆娑として聲をなす。葉裏白みを帶びたるもの故に日にもとまり易く、「まくず原うら吹返す秋風に」などゝ古來多くの歌に詠まれて著名なり。又その葉裏の飜りて見え易きを以って、葛の葉の裏見と云ひ、それを恨みにかけて、是亦しばしば歌に詠ずる所なり。葉は馬の飼葉とす。

【[illegible]】古來、歳時記には葛の花を晩夏の季とし、葛の根を掘るは實に三秋の季物とせり。されど實際に葛根を掘るは冬月、或は春未だ苗を生ぜざる時ならん。只葛と云ひて季物とせるは、其茂れる風致の他物に紛れざるもののあるを以ってなり。【参照】葛の花（ハナ）　人事—葛根掘る

【[illegible]】

葛の葉の赤い色紙を恨かな　其角（華摘）

葛の葉や酒天童子が二ッおもて　其角（[illegible]）

[illegible]

松原の葛と詠まれし住居かな　支考（[illegible]）

海はあれど翁参りぬ葛の宿　同（[illegible]）

茵の跡のあり葛の葉の裏表　嵐雪（[illegible]）

[illegible]

葛の葉のおもて作るに傚ふなよ　越人（猫の耳）

葛の葉の恨み顔なる細雨哉　蕪村（[illegible]）

天狗風残らず葛の裏葉かな　同（[illegible]）

人目も草もしどろに葛の枯葉哉　曉臺（曉臺句集）

葛の葉や篠田男の蠅をなみ　同（同　）

昨日今日葛葉に嵐吹くことよ　白[illegible]（[illegible]）

葛の葉も吹くや鳴子の裏表　召波（[illegible]）

葛の葉を重ねて夢の古草子　[illegible]（[illegible]）

足弱の杖にからまる眞葛哉　巣兆（曾波可理）

猿寺の長家にうつゝる眞葛哉　青々（[illegible]）

眞葛

【[illegible]】くず Pueraria triloba, Makino.（まめ科）山野に多き多年生纏繞藤本なり、莖長二三丈に達することあり、葉は大にして三箇の小葉より成り、莖と共に褐色の毛茸に富む、秋日、葉腋に五六寸の穗をなして紫赤色蝶形花を開く、花後扁たき莢を結び褐毛あり、根を取りて藥用となし又葛粉を製す、又葉は牛馬の飼料とす。

風船葛（ふうせんかづら）（中）

【[illegible]】無患樹科の一年生又は多年生草本。莖は蔓性にして、卷鬚を以て他物に攀緣し、長さ數尺、葉は互生し托葉を有せず、二回乃至三回分裂、小葉は卵形又は卵狀披針形なり、夏月花咲き、仲秋・季秋に及ぶ。花は白色にして、葉腋より抽出したる花莖上に總狀をなし、往々繖形花序様をなして攢簇す、果實は蒴果にして直徑五分乃至一寸ばかり、膨脹して風船の如く、種子は球形なり。

通草（あけび）（中）

燕覆子（あけび）　烏覆子（あけび）　山女（やまひめ）　あけぶ　おめかづら　かみかづら

三葉通草（みつばあけび）

【古書校註】

【年浪草】八月○藕恭曰、通草の子長さ三四寸、核黑く瓤白し、之を食へば甘美、南人謂つて燕覆子とす。或は烏覆子と名く。七月を過ぎて之を采る。○時珍曰、通草は莖に細き孔あり、兩頭皆通ず、故に名く。○紀事に曰、郁核、十一月朔日河州高島輿濱より郁核を禁裏に獻ず。郁核和名宇倍、

然るに今その獻ずる處の物を考ふるに、通草(アケビ)の實にして其氣味形色郁核と大に異なり。按るに土人此の獻物を以て名を稱せず、專ら御貢(オンベ)といふ。御貢(ベ)と郁核(ウベ)と和語相近し、故に通草を誤稱して宇倍といふか、枯柴を以て小籠を造り之を盛る、其體朴古を存す云々。按るに高島郡の土人郁核と稱する者、通草の別種にして、冬も葉死(カ)れず、之を常盤通草と云ふ。

季題解說 木通科の蔓性灌木にして、山野に自生多し。他物に纏絡して上昇す。莖に細孔ありて兩頭に皆通ずる故に通草の名あり。葉は五個の小葉より成れる掌狀複葉にして、各小葉は有柄楕圓形全邊なり。四月頃新葉と共に花軸を出し、多數の稍大なる雌雄花を生じ、共に暗紫色の花被三片を有す。果實は長楕圓形にして長さ二寸餘に達し、熟すれば其一方縱に裂開して白瓤を表はす。生食して味頗る甘美なり。又葉は煠熟して食ふべく、新芽は摘み蒸して煎茶に代用す。此木芽漬は京都鞍馬山の名產なり。實を以て秋季とす。〔參照〕郁子(ム) 春─通草の花(アケビ)

例句

通草　老僧に通草を貰ふ暇乞　子規（子規句集）
元光院觀月會

通草藪へ我より先に小鳥かな　露月（露月句集）

山女　鵯の行く方見れば山女かな　李園（卯辰集）

參考 あけび Akebia quinata, Decne.（あけび科）山野に自生多き蔓性落葉灌木なり、葉は五箇の小葉より成れる掌狀複葉をなし、其小葉は有柄長楕圓形にして全邊なり、四月頃新葉と共に淡紫色の花を開く、多數の小き雄花と、小數の大なる雌花とを出し、漿果は長さ二寸餘、縱に開裂し、果肉を現はす、甘くして食ふべし。

みつばあけび Akebia lobata, Decne.（あけび科）山野に多く自生する落葉灌木なり、小葉は三箇にして、卵形又は廣卵形を呈し、通常粗き齒牙を有す、四月頃總狀花叢の小梗を出し暗紫色の花を開く、單性花にして、通常同一の花軸に數箇の雄花と一箇の雌花とを着く、雌花は花被著しく大なり、果實は長楕圓形にして厚き果皮を有し、熟すれば紫色を呈し縱に開裂して白質の果肉を露はす、甘くして食ふべく、蔓は「バスケット」等を造るに用ゆ。

郁子(むべ)（初）　野木瓜(むべ)　うべ　ときはあけび　きまんぢう

季題解說 「むべ」は山野に自生あり、又庭にも植う、木通(あけび)科の常綠蔓性の草本にして、葉は通常五個の小葉より成るも、幼莖にありては三小葉より成る、其葉革質、楕圓形全邊にして平滑、葉裏は淡色、網狀美なり、暮春に白色又は淡紅色の花を着け、果實は秋に熟す。實は卵形の漿果にして長さ一二寸、初めは青く熟するに從つて紫色を呈す、形狀野趣あり、生食するに甚甘味、熟すれば縱に裂開し暗紫色の種子を露出す。

【作法注意】郁子をときはあけびとも云へど、むべの方、一般に廣く用ゐられて通す。又實を以て季とするが故に、敢て實と斷ることを要せず。然れどもむべの實と云ふも亦妨げず。山店などにて、藤棚の如くに郁子の棚を作れる所あり。〔季題〕通草花　春―郁子の花　冬　郁子の實

【例句】

郁子　山風の露をふきつけ郁子の露　谷衣（條鳥）

【参考植物】むべ Stauntonia hexaphylla, Decne. 一名、ときはあけび（あけび科）山野に自生すれども、又庭園に栽培する常綠の蔓性灌木なり、莖は甚だ長大にして、葉は通常五箇の小葉より成れども、幼莖にありては三小葉より成る、葉面は革質楕圓形全邊にして平滑、下面は淡色を呈し、細脈甚だ明かなり、五月頃開花し、白色にして淡紅紫色を帶ぶ、雌雄同株なり、果實は漿果、卵圓形にして長さ一二寸、果肉甚甘く、肉中に黑き種子多し。

南五味子（初）

さなかづら　美男葛　とろろかづら　ふのりかづら　苦露

【季題植物】山野に自生する木蘭科の常綠蔓性の木本なれども、觀賞用として庭園に植ゑ、又生籬とす。葉は厚く平滑にして光澤あり、其形長楕圓形、鋭尖頭にして疎らに小鋸齒を有す。花は夏日淡黄白色の五瓣花を葉腋に下垂す。果實は小球の集合より成り、生は青く、熟して紅色になり、後に黑味を帶ぶ。直徑一寸許。花托と共に肉質なり。蔓の嫩きものに赤味を帶ぶ。其繁茂して冬を歷ても枯れず。其五味子と稱するは實を云ふものにして、皮肉甘く酸く、核辛く苦く、都て鹹き味ありて、五味具る故に名づくとあり。又五味子に北五味子、南五味子の別ありて、本邦に產するは南五味子なりと云ふ。莖に含有する粘液を取りて糊料とし、又之を頭髮に塗れは光澤を增す。實は藥となりて用途多し。古くは「さながつら」と云へり。

【参考】さねかづら Kadsura japonica, Dun. 一名、びなんかづら（もくれん科）山野に自生すれども、又庭園に栽培せらるゝ常綠蔓性の灌木なり、葉は厚く軟く平滑にして光澤を有し、長楕圓形にして尖り、疎に低き小齒牙あり、七八月の頃、淡黄白色の花を葉腋に下垂す、果實は小球狀をなし、球形に膨大せる花托の周圍に附着し、相共に紅熟し直徑一寸許あり。古時莖の粘液を採りて頭髮用に供せり。

葡萄（中）

葡萄膸（一理）　葡萄嫌（入事）

【古書校註】

【滑稽雜談】八月。○大和本草に曰、この實よく收むれば春に至るまで敗

れず。えび染といふ色は紫黑色也　葡萄に漬けたる色也。蘡薁は京にて犬えびといひ、西土(一)にてからみといふ。蔓葉よく葡萄に似て野葡萄也、實を結ばず。又一種野葡萄といふもの有り。

【年浪草】七月(二)〔蒲萄・紫葛〕和漢三才圖會に曰、紫葛の葉蒲萄に似て

註　(一)我が國の西國地方の意　(二)栞草は八月とす

季題解説　葡萄は地中海小亞細亞、北印度、及び支那を原産地とする葡萄科の落葉蔓性植物にして、葉は心臓狀圓形にして往々三五裂し、不齊の齒牙及び毛茸を有す、其卷鬚は吸盤を具へず。初夏の候葉腋に花穗を抽き、黃綠色の細小花を圓錐花序に排列し、花瓣は五箇ありて頂上少しく結合し、開花に至らざる前に脫落する性を有す、果實は大さ二三分乃至四五分の半透明にして、一莖三四十、乃至百二三十粒鈴生りに密着す、秋日熟し、綠色、淡紫、濃紫の各種ありて味甘酸にして美に、又乾葡萄となす、且又葡萄酒製造の原料、製菓の原料として需要頗る多きを以て本邦各地に栽培せらる。

參照　蘡薁(三秋)　山葡萄(やまぶだう)　人事—葡萄酒製す(ぶだうしゆせいす)　葡萄膾(ぶだうなます)　夏　葡萄の花(ぶだうのはな)

例句

葡萄

月日の栗鼠葡萄かつらの甘露あり　其角(田舍の句合)

爽かに並べ立てたる葡萄かな　打睡(鳥の道)

雫かと鳥も危ぶむ葡萄かな　千代尼(千代尼句集)

葡萄めす水鏡盤をうたれけり　召波(春泥舍句集)

色白は江戸へ賣らるゝ葡萄哉　一茶(一茶句帖)

北海道汽車中

青葡萄熊に非ずば何通ふ　露月(露月句集)

ぶどう喰ふ手に覺ゆるよ玉ぬるゝ　青々(倦鳥)

ぶどう喰ふて見し藥師寺に彫りありし　同(同)

葡萄園

ほしいまゝに葡萄取らしむ葡萄園　子規(子規句集)

葡萄棚

酒しぼる藏のつゞきや葡萄棚　史邦(泉州師)

瓦師や物の上手な葡萄棚　嘯山(律亭句集)

月の夜はいとゞ露けし葡萄棚　故鳳(田毎の日)

參考植物　「ぶだう　Vitis vinifera, L.(ぶだう科)」蓋し、「アジア」原産にして廣く栽培せらるゝ蔓性の落葉灌木なり、莖は卷鬚によりて他物に上昇す、葉は淺く掌狀に分裂し、若き時は綿樣の毛を有す、初夏新枝の葉に對して花穗を出し、黃綠色の細小花を簇生し、圓錐花序をなす、花瓣は五箇あり、底部合し、基部より開き落つ、果實は秋に至りて熟し、褐紫色或は黑色を呈す、生食し、或は酒を釀す。

蘡薁(えび)　(初)　えびかづら

季題解説　山野に多き葡萄科の蔓性灌木樣の草木にして、莖葉共に山葡萄よ

り小し。葉は掌狀に分裂し、緣邊に鋸齒あり。葉裏に淡赤白色の細毛を密生す。七月の頃、淡黃色の花を複繖形花序に綴り、花後に紫黑色の小果實を結ぶ。果實は食用となり、葉は藥用に供す。實を以て季物とす　〔季題〕葡萄

〔參考〕　えびづる　Vitis Thunbergii, Sieb. et Zucc.（ぶだう科）山野に多き登攀緣性藤本にして雌雄異株なり、葉は通常二三寸、心臟圓形にして三五裂し不等鋸齒を有す、其表面は無毛なれども、下面は綿毛密布し淡褐色を呈す、七月頃葉に對生して複總狀花穗を出し、往々其基脚に卷鬚を有す、花は小にして淡黃綠色を呈し多數あり五瓣より成る、花冠は頂部合着せしまゝ開きて謝落し雄花には五雄蕊、雌花には一子房あり、漿果は小にして黑熟し球形にして食することを得。

山葡萄（中）　紫葛　黑葡萄

〔季題解說〕　葡萄科の蔓性草木にして、本州中部以北、北海道、樺太に產す。葉は大形心臟狀圓形をなし、掌狀脈を有し、緣邊は三乃至五の淺裂をなし、各裂片には更に不齊鋸齒を備ふ。上面稍ゝ平滑、裏面に赭色の毛あり。卷鬚にて他物に纏絡攀登す。花は小花を長き圓錐花序に排列す。果實は小球形の漿果にして秋は熟して黑色となる、生食すべく又酒を釀すことを得べし。　〔參照〕　葡萄

〔參考〕　やまぶだう　Vitis Coignetiae, Pulliat.（ぶだう科）山地に自生する大形の蔓性落葉灌木なり、葉は極めて大形をなし、七八寸に達するものあり、其形心臟狀圓形にして淺く三五裂し不等の齒牙あり、又其上面は平滑なれども、下面は褐色の綿毛を密生す、七月頃葉に對して圓錐花叢を出し、黃綠色を呈する小花を簇生す、花梗の基脚に往々卷鬚を具ふ、漿果は球形にして、熟すれば黑色を呈す、秋日の紅葉美觀なり。

川芎の花（初）　をんなかづら　をんな草　芎藭　川芎掘る（人事）

〔季題解說〕　川芎は根を藥用とせらるゝを以て有名なる草なり。繖形科に屬し、莖は高さ一二尺になり枝多し。葉は芹に似て更に細裂す。莖葉共に淺綠色にして香氣高き特性あり。秋日莖上に細小なる白色の五瓣花を複繖形花序に綴る。

〔實作注意〕　漢名は芎藭なれども、四川省の產を佳品とするが故に川芎と呼ぶ。をんなかづらは古名なり。川芎の煎藥を服すれば逆上をとゞめ、婦人の血の道の藥なりと云へば、それに據る歟。又松樹の弱りたるに此煎汁を與へて效あり。地下莖は帶黃黑色。晚秋これを掘る。　〔參照〕　藥掘る

〔例句〕
川芎の花　川芎の香に流るゝや谷の水　其角（句兄弟）

鬼目（晩）　鵯上戸　白英　蔓珊瑚

【古書校註】【篗纑輪】八月。白英、人家の垣根に自然にも生ず、蔓草也、葉朝顔に似て小白花を開き、秋實を結ぶ。秋季とするものは其の實を賞して也。暮秋その實甚だ紅也。鵯好んでこれを啄む。依つて名とす。
【年浪草】九月。「鵯上戸」○時珍曰、白英はその花色をいひ、鬼目はその子の形に象る。○大和本草に曰、白英、本草蔓草に又桃風子といふ。その實を鬼目といふ。又唐詩及び書畫に雪下紅といふ一物也。葉牽牛花に似て冬月その實紅也。和名ホロシ、今俗にヒヨドリジヤウゴといふ。ホロシは古歌に大井川によめり。

【季題解説】山野に自生する茄科の多年生蔓草にして、莖は往々木質をなす。年々蔓より枝葉を出し、他物に纏絡す、葉は概形「ひるがほ」に似て、通常羽狀五裂し、或は三裂の者を交へ、或は無裂の者も交はり、莖と共に軟毛を密布す。夏日葉柄に對して花軸を出し、多數に分岐して之れに稍々深裂したる白色の合瓣花を開き、花後南天子大の漿果を結びて晩秋に至り紅熟す。鵯好んで之を食するより鵯上戸ともいふ。

【實作注意】漢名を白英と云ふ。時珍は白英は其花をいひ、鬼目は其子實の形に象ると說けり。種類に「まるばのほろし」—(蜀羊泉)「ほそばのほろし」ありて皆有毒なり。方言に「蔓珊瑚」と云へるはよろしき名なり。【參照】夏　鵯上戸の花

【例句】
鬼目　枯竹にからみて染むるほろし哉　和海（田毎の日）
鵯上戸　野分にもさめぬ鵯上戸哉　若里（續題簽句集）
はや色にいづる鵯上戸哉　秀曉（新類題發句集）

藪からし（初）　びんぼうかづら　ごんごま　烏蘞苺

【季題解説】至る所に多く生ずる葡萄科の蔓性宿根草本にして、莖は垣を攀ぢ上り藪を覆うて夏日甚蔓延す。葉は鳥趾狀に分岐せる複葉にして五小葉より成る。夏秋の間に葉腋に花軸を出し、叉狀々は三四に分岐し、聚繖花序をなして、四裂せる帶黄赤色の小花を着生し、花後小き漿果を結ぶ。根を採り藥用とすと云ふ。

落葵（初）　むらさきばな

【季題解説】原産は熱帶地方の一年生草本なれども、本邦にては專ら園圃に栽培す。莖葉共に柔軟にして多少肉質を有し、纏繞性にして蔓は右卷なり。葉は卵形、或は圓卵形、葉柄を具へて互生す。初秋の候、葉腋に長梗を抽き、

【御傘】草花。秋也、連に三句の物也。（三）是は野花の事也。草の字いらずして野の花、又野花などありとも、誹には三句の内也。然るに歌の題に野花留火と云ふ事、春の部にも秋の部にも有レ之。依二句體一春秋の分別すべし。○草花と云句に、萩・薄・女郎花・蘭・槿・小車・桔梗・龍膽・眞葛等付くべからず、同意也。菊は秋菊ながら苦からず。

【滑稽雜談】八月（四）【草花・草實】總て諸草の類春・夏に花を開く有りと雖も、その草花秋に多き故に、無名の草花を秋にばかり用ふ。草の實また春夏結ぶ者もあれども、多くは秋に至りて結び熟する故秋といふ也。

【年浪草】【草花・野の花】三秋○平原に咲きたる草花也。

註（一）源氏物語に見ゆ。（二）鋸草即ちめどの花のこと。（三）新式に草花は一座三句のものとせり。（四）栞草には兼三秋物とす。

季題解說　「諸草のたぐひ春夏に花開くものあれど、秋多き故、無名の草花を秋とす、實もまた然り」と『栞草』に云へり。秋の野の千草八千草など云ふが故に、草の花とばかり云ひて秋の季とは定めたるなり。「古今集」卷第四に「綠なるひとつ草とぞ春はみし秋は色々の花にぞ有ける」と云ふよみ人しらずの歌あり。此歌の意にも據れるもの歟と思はる。色草とは秋の千草を云ふものなること、秋わたる小鳥のいろいろなるを「色鳥」と云ふが如し。

實作注意　無名の草と云ふとも、詮索すれば其名は有るべし。然しながら一其名を擧げて云ふときは、名に馴染無きもの、又名のよろしからぬもの等は用ゐて詮なく、却つて風情の感じ難きこともあるべし。因つて只草の花とばかり云ひて、其美感を連想に待つものなり。時によりては、たとひ名ある草なりとも、草の花とばかり云ひて、其句よろしき時あり。**參照**　草の香　草の實

例句

草の花

灯火やつれづれ草の花づくり　宗因（梅翁宗因發句集）

[illegible]

草いろいろ各々花の手柄かな　芭蕉（笈日記）

藥園に何れの花を草枕　同（泊船集）

餞別

一里は皆俳諧ぞ草の花　支考（梟日記）

八幡讚

紫に老な忘れぞ草の花　同（東西夜話）

芭蕉翁の人々に交遊はす時

野に死なば野を見て思へ草の花　同（[illegible]の名殘）

淺草觀音

手を上げて群集分けたり草の花　桃隣（陸奥衛）

野も山も聖靈くさし草の花　魯九（年居行脚）

名は知らず草毎に花哀れなり　杉風（雪七車）

草の花

花の秋草に喰飽く野馬かな　嵐雪　（玄峰集）
草の戸や手によごれたる花も咲　千代尼　（千代尼句集）
何ら見ても佗散る種や草の花　同　（同）

拔　摘

千秋を咲結びてや草の花　同　（同）

[illegible]

下冷を咲あたゝめよ道の草　同　（同）
波の上に秋の咲くなり千種貝　同　（同）
折て見たり捨たり道の草の花　闌更　（半化坊發句集）
山もとや馬沓の中に草の花　同　（同）
武藏野や雲に咲入る草の花　同　（同）
乞ければ刈てこしけり草の花　太祇　（太祇句選）
あつめれば花にもあらぬ小草哉　召波　（春泥發句集）
嬉しさに淋しく成りぬ草の花　乙二　（松窓乙二發句集）

荒谷より[illegible]より[illegible]の徑

いとせめて草花多し道下り　同　（同）
錦木をおつとりまきぬ草の花　同　（同）
蔦の啼く日の淋しさよ草の花　士朗　（枇杷園句集）
昔々妻籠りしよ草の花　一茶　（享和句帖）
露けさや石の下より草の花　同　（同）
草の花姉お頭豆は老にけり　同　（七番日記）
負けぬ氣やあんな小草も花が咲く　同　（同）
一寸の草にも五分の花咲きぬ　同　（一茶句帖）
草の花茵の散に踏まれけり　同　（九番日記）
門畠や今毫らるゝ草の花　同　（同）
入相の聞處なり草の花　同　（一茶發句集）
耳に數珠かけて折るなり草の花　同　（同）
小料理もする宿ならん草の花　梅室　（梅室家集）
門ありて國分寺はなし草の花　同　（同）
我を待つ人かあらじか草の花　別天樓　（篠鳥）
草の花のいづくはあれど西の京　鼓竹　（同）
雨晴れてでゝ蟲つきし草の花　味子　（同）
草の花莧濱菅も數ふべく　青々　（同）
みな肥えて女らつくし艸の花　同　（同）
草の花を厨の桶に日々の事　同　（同）

草花

草花や秋知り顔に持ありく　支考　（篇突）

[illegible]山

草花の名に旅寢せん禿ども　同　（[illegible]　日記）

草の穗　草花や明るく見ゆる母屋の裙　乙二（松窓乙二發句集）
息災な子や草花を餅の葉　梅室（梅室家集）
草の穗　戀や草の穗ぬけば音がずい　秋之坊（西の雲）
千草　しら波の染にあがるや千草迄　蓼太（蓼太句集）
小町あり式部ありて、女の才ある國なりければ、今も擧げて何んぞ劣るまのあらじと（マヽ）云ふ婦人に逢る
筆取て千草の花に後るゝな　闌更（半化坊發句集）
日が當り雲が浮びて千草かな　青々（倦鳥）

草の香（初）

【解說】秋のさまざまの草の匂ひを云ふ。この題は、昔和歌の題として獨立し居たりしが、後には他の題中に融合せるなり。「夫木抄」にもより出でしかど草の香かは秋風に匂ふなりけり　藤原忠房。秋の野の花わけ行けばくさぐさの香うつり致らん我衣手に　源兼昌。【參照】草の花、草の實。

【例句】
草の香　草の香をしのびし歌人なつかしき　青々（倦鳥）

草の實（三秋）

【解說】諸草の實を云ふ。實を結ぶこと早きものあり、又遲きものあり。三秋のものたるべし。

【解說】何々の草と其名をさゝずして、只「草の實」と云ひて物を廣く現はすもよろしく、又それぞれの草の名をあげ、其狀態を云ひて、それに實の字を結びても亦草の實の句となる。【參照】草の花、草の香。

【例句】
草の實　草の實や空しく土と成る斗り　闌更（半化坊發句集）
宇曾利山
山草やこれも佛の實を結ぶ　乙二（をのゝえ草稿）
ひぢ曲坂
見よかしに青き實のあり物の蔓　同（同　）
草の實を遊び心に散らしけり　別天樓（倦鳥）
草の豆法起法輪の丹土路　白雲鄉（丁卯句鈔）

草の紅葉（晩）

【類題】草紅葉　草の色　草の錦

【解說】山野の草の露霜に逢ひて紅葉せるを云ふ。【參照】紅葉、照葉。

地理　野山の錦

【例句】
草の紅葉　酒さびて餘燒く野の草紅葉　其角（東日記）
嵯峨坊の山居にて
眞先に河原ますげの紅葉かな　十丈（草庵集）

草の紅葉

影落て江は萍の紅葉かな　蓼太（蓼太句集）

魚汁のとばしる草も紅葉哉　一茶（一茶日記）

どの草も犬の役架ぞ散紅葉　同（七番日記）

樹の木の伐られしあとの帰紅葉　柳外（続 ）

身に及ぶ火けをつくして草紅葉　なみえ（庚午句鈔）

衆水の落て淺きや帰もみぢ　青々（倦鳥）

草の錦

周防國より伊州へ渡る天産僧と同行して、途中に別るとて

別れ路や草の錦を裁つ思ひ　几董（井華集）

青野太筑の庭に

横渡す柄杓の露や錦草　惜然（己か光）

秋の七草（三秋）

萩の花　尾花　葛花　撫子の花　女郎花　藤袴　朝顔の花

古書校註

【滑稽雜誌】七月。〇八雲御抄に云、秋七種、萩ノ花・尾花・葛花・藤袴・朝貌・女郎花・撫子花。△これを秋の七草と稱す。この七種の中に撫子の一種は連俳に押出しては夏也、しかれどもこのもの幾久しくて秋なほ冬迄も有るもの故に萬葉にもよまれたり（一）。連俳にても秋の物を結べば秋也。又霜なんどをむすべば冬にもなる也。作者心得べし。

註（一）萬葉卷八、山上憶良「秋の野に咲きたる花を指折りてかき數ふれば七種の花」　芽子（ハギ）の花尾花葛花撫子の花をみなへし又藤袴朝がほの花」

季題解説　秋の七草と云ふは、萬葉集卷八、秋雜歌の部に出でたる山上憶良の詠秋野花二首の歌に據りて、春の七種に對して古來云ひ馴はせるところのものなり。憶良の歌は

秋野爾咲有花乎指折可伎數者七種花
芽之花乎花葛花瞿麥之花姫部志又藤袴朝貌之花

と云ふ。後の歌は旋頭歌なり。秋の七草とは秋野の觀として代表的なる草花を擧げて稱讃せるものなり。

實作注意　秋の野の草々のうちより、特に七草を賞でしは、色とりどりのよろしさ、又其物の風姿に感を寄せしことにて、憶良の歌ありてより是等の植物にゆかしさの增すもののあるなり。然れども萩の花或は尾花など一々に詠む時は七草の句にはあらずして、只萩の花・尾花・葛花の句となるを、秋七草と云ひて、猶秋の野の千草をも思はしむるもののあるは、此季題の妙用と知るべし。

撫子の花は仲夏の季なれども、此物久しく花ありて冬迄も在るものなれば、霜に逢へるもあり、故に其季結びにすれば秋にも冬にもなるなり。又葛の花は從來晩夏の季とせるも、初秋猶其花あり。但し萩と葛は木本にして草

木に非らざれども共に草と云ひてもよろしき趣あり。又茲に云ふ朝貌に就ては古来説あり、木槿なりとも云へど、近時の學者は是を桔梗なりと云へり。〔照〕秋草

例句

秋の七草　秋の七草折るともなしに山游び　盧明（庚午句鈔）

萩（初）

鹿鳴草　鹿妻草　鹿の妻　玉見草　月見草　庭見草　古枝草　野守草　諸吐草　野守草　胡枝子　天竺花　隨軍茶　芽子花　芳宜艸　初萩　秋萩　萩の錦　萩が枝　萩の塵　もとあらの萩　萩散る　こぼれ萩　萩すら　むら萩　小萩　白萩　絲萩　亂れ萩　さざれ萩　野萩　山萩　萩野　萩原　小萩原（地理）　萩の宿（人事）　萩の主（人事）　萩見（人事）　萩の宴（人事）　萩殿（人事）　萩の戸（人事）

古書校註

【山之井】萩の花と云ひては、もち月の詠めに比べ、蜀の錦とも聯ねなす。又はぎだか・つるはぎ（　）などもそへ、萩の戸・萩原などもよせていひ、はだかに萩の花衣、つぎはぎたりやとも云ひかく。小鹿のつまと云へば、しがらみて鹿のつまづくとも、くゞるは鹿のつま戸かなともつゞけ、身をする鹿や錦草、小萩やこけるから錦など、もはら錦にも云ひなす。

【御傘】〔萩の戸・萩殿〕秋也。清涼殿の北にあり、萩を植ゑて置き給ふ所なり。

【年浪草】七月〔萩・糸萩・小萩・もとあらの萩・萩の錦・鹿鳴草・古枝艸〕胡枝花和名波岐・隨軍茶・天竺花・芽子花・芳宜艸。和名抄〇倭名抄に曰、鹿鳴草。〇和漢三才圖會に曰、天竺花は花史にいふが如し（二）。按に枝葉共く垂れ地を蔽ふ、狀糸垂櫻に似て一梗三葉、その葉紫の葉に似、又南天燭の葉に似て尖らず柔軟なり。秋小花を着く、淡紫色。俗に專ら萩の字を用ふ。（三）奥州宮城野方二三許、萩生ひ茂る。山萩あり、白花の者あり、白紫開分者有り。〇大和本草に曰、萬葉に芽子又榛の字をハギと訓す、其の莖冬枯れて春新苗を生ずるあり、是を小萩と云ふ。莖冬枯れずして春莖より葉を生ずるあり、是を木萩と云ふ。萬葉に芽子と云へり。糸萩は花紅に盛久し云々。〇もとあらの小萩。河海抄に曰、萩の古枝に咲けるをいふ也。木萩と云ひて今年生よりも枝さしすゝみてこはぐ\しき也。それが中にたゞ小あれば、小さきはもとあらの小萩とよめり。一說秋深くなりて、下葉の散過ぎたるをあら萩と云ふ也と云々。もとあらの櫻といふもこと木よりも々こはごはしき散也。又木萩とは、本あらはなる事とぞ。〇「秋萩の古枝に咲ける花見ればもとの心は忘れざりけり」（四）。此の歌の難に云、萩は一年づゝにて枯れて、わかばえより花は咲くを古枝に咲くと如何。答云、此の萩は

いろの濱に誘れて
しら露もこぼさぬ萩のうねり哉　同　（芭蕉庵小文庫）

加賀小松にて
濡れて行く人もをかしや雨の萩　同　（泊船集）

[illegible]虎子の宅
風色やしどろに植る庭の萩　同　（芭蕉翁全傳）

萩な刈ぞ西瓜に枕貸す男　其角　（虚栗）

苔とも見えず露あり庭の萩　同　（華摘）

老父病中の慰みに
萩の露蛤貝に藥かな　同　（萩の露）

三田山庄にて
日盛を御傘と申せ萩に汗　同　（類柑子）

[illegible]子亭
ねたり込は誰が内儀ぞ萩に鹿　同　（同）

曉松亭
獅子倫の胸分にすな庭の萩　同　（同）

專吟亭
萩薄結び分ばややさけ芹　同　（同）

仙石玉英公御句合に假用
萩ずりや傘すかさ昔鞍　同　（五元集）

萩もかな菩薩にて見し上童　同　（五元集拾遺）

菊虎亭
爐次下駄に雪の音あり萩の露　支考　（梟日記）

萩吹て便あたらし留人　同　（同）

秋もはや萩に芒のちらし哉　同　（東西夜話）

起されて起て物憂し萩の花　同　（笈の光）

長持は昔の家ぞ萩所　同　（蓮二吟集）

萩の花こぼれて庭の更紗かな　北枝　（射水川）

木刀やかへす袂に萩の花　同　（北枝發句集）

さりながら袖にこぼさじ萩の露　同　（同）

萩吹や間近き小野に色かさむ　同　（杉風句集）

置露に朝日加はる萩の照　同　（同）

萩植てひとり見習ふ山路かな　同　（同）

旅ぞ憂き涙色あるたをの萩　惟然　（[illegible]の道）

廣瀬氏の別墅を萩山とも又は[illegible]と言へり
萩にのぼる雲の下のは木曾山か　同　（惟然坊句集）

東[illegible]坊を送る
行先も寐やすき方ぞ萩と月　浪化　（白扇集）

雷中
雨更に風色ふ萩の寐なり哉　同　（浪化上人發句集）

萩芒月は細きが哀れなる　野坡　（野坡吟艸）

萩

片岡の萩や刈干す稻の端　猿雖（炭俵）
宮城野の萩や夏より秋の花　桃隣（同）
鬼貫に笠胘がしけり萩の花　智月尼（續有磯海）
くゞらせて色々にこそ萩の露　嵐雪（のほり鶴）
しげ／＼と目で物言ふや萩の露　丈草（星會集）
閑なる人へ
塵と見て露にも濡れぞ萩の花　千代尼（千代尼句集）
芒見つ萩や無からん此邊り　蕪村（蕪村句集）
芙老い芒瘦せ萩覺束な　同（同）
憂き旅や萩の枝末の雨を踏む　同（蕪村遺稿）
黄昏や萩に鼬の高臺寺　同（同）
岡の家に晝筵織るや萩の花　同（同）
萩咲て玉田横野へ別れ行く　同（新五子稿）
色見えて萩乘り越える燃し哉　曉臺（曉臺句集）
白蟾や水打越えし萩の上　同（同）
風なりや打返る萩のほの白し　同（同）
風なぐる萩の欽山日のかすり　同（同）
枝に葉に花の付たり雨の萩　闌更（半化坊發句集）
捨石に花うつ萩の夕かな　同（同）
散にけり咲にけり萩の動くうちに　同（同）
凭れあひて一枚動く軒の萩　白雄（白雄句集）
萩垣に萩咲添ひし庵かな　同（同）
緣先やよべにも殘す今朝の萩　樗良（樗良發句集）
萩が根に月さし入りて風細し　同（同）
風荒れて萩に嬉しき限り哉　同（同）
吹分る隙も嵐の庭の萩　同（同）
御微行の下山や萩の唐衣　几董（井華集）
或人の別墅にて
葉隠れに蟲籠見えけり庭の萩　同（同）
遊二宮海寺一
萩に遊ぶ人黃昏れて松の月　同（同）
明ぬとて萩を分行く聖かな　召波（春泥發句集）
愛かしこ小家隠して岡の萩　同（同）
萩活て置けり人のさはる迄　太祇（太祇句選）
濡るゝとも袖をかざしよ萩の花　月溪（月溪句集）
無住にて年々萩の盛り哉　子曳（明烏）
よき程によごるゝ萩の小庭哉　士朗（枇杷園句集）
覗く迄物書く萩の夕かな　同（同）
露萩や結び捨たる繩簾　同（同）

萩に凋れ芒に弱る西日かな　同　（同）

桂五亭

よき夜とて土間にも居たり萩芒　同　（同）

隣家

萩咲て夫婦の小言かくれけり　巣兆　（曾波可理）
立臼に小根が生えてや萩の花　同　（同）
悲しさのちらりと見ゆる萩の花　成美　（成美家集）
痩萩や松の陰から咲そむる　一茶　（享和句帖）
痩萩に雫見せけり萩の花　同　（同）
小男鹿は萩に糞して別れけり　同　（七番日記）
鹿の子や横に嘲へし萩の花　同　（おらが春）
萩寺や鹿の氣取に犬が寐る　同　（一茶句帖）
吹嵐どこが萩の間桔梗の間　同　（同）
玉川や臼に敷かるゝ萩の花　同　（同）
存の外谷な茶屋あり萩の花　同　（一茶新集）
心得て行けど萩踏む山路かな　梅室　（梅室家集）
萩の花一本折れば皆動く　同　（同）

送別二句

隔ればどちらも寂し萩芒　同　（同）
露の萩つかむに似たる別かな　同　（同）
薄暮は見殘すものぞ萩の花　蒼虬　（蒼虬翁發句集）
石垣のほめきを受けて萩の花　同　（同）
來た時に見た斗なり萩の花　同　（同）
咲とはや萩は日陰に成易き　同　（同）
置直す盥や萩の一ト盛り　同　（同）
今にして萩のうら花とめどなき　竹後　（倦鳥）
たち伸びし萩に庵の蟲拂　亘口　（丙寅句鈔）

朝倉佛國寺石門庵

石佛にさゝげの山や萩桔梗　來布　（巳巳句鈔）
萩の花地に枝ふせて甚の音　青々　（倦鳥）

秋萩

秋萩と今日から名付御先哉　支考　（追二吟集）

イロハの窗

秋萩のうつろひて風人を吹く　楞良　（楞良發句集）

萩の塵
萩散る

浪の間や小貝に交る萩の塵　芭蕉　（奥の細道）
萩散るや水に這ふ子の玉襷　琴風　（類柑子）
萩散りぬ祭も過ぎぬ立佛　一茶　（享和句帖）
花少し散るより萩の盛りかな　蒼虬　（蒼虬翁發句集）

こぼれ萩

一夜泊めて向ふ柱のこぼれ萩　曉臺　（曉臺句集）
ほろほろと秋風こぼす萩がもと　召波　（春泥發句集）

こぼれ萩
小男鹿の喰こぼしけり萩の花　一茶（おらが春）
庭掃が役の外なりこぼれ萩　梅室（梅室家集）
二分咲て一分こぼしぬ萩の花　同（同）

小萩
ひたお野に咲くや照天の姫小萩　宗因（梅翁宗因発句集）
いつの宿に宿はれて
小萩散れますほの小貝小盃　芭蕉（[illegible]獅子集）
かい餅も伏猪の床の小萩かな　支考（東華集）
花泉寺
錦織や麓の小萩峯の月　同（同上）
垣荒れて犬踏分る小萩かな　闌更（半化坊発句集）
里うとし小萩か上に榾木積む　白雄（白雄句集）
恨むとは小萩が申す葛のこと　乙二（松窓乙二発句集）
濃川のほとりにて
小萩咲く川上見よとさす船か　同（同）

白萩
白萩やなを夕月のうつり際　松風（續山井）
白萩やまばゆく引て雲の秋　野坡（野坡吟艸）
白萩を春分ちとる契りかな　蕪村（蕪村句集）
白萩やいざよひの闇を散得る　青蘿（青蘿発句集）

亂れ萩
戀よりも苦しき萩の亂れ哉　樗良（樗良発句集）
芥取の箕に寐る犬や亂れ萩　一茶（一茶句帖）
萩の花愛を跨げと亂れけり　同（同）

野萩
嵯峨閑山邊
蕎麦も見てけなりからせよ野良の萩　芭蕉（續寒菊）
小比丘尼の折て捨行く野萩哉　曉臺（曉臺句集）
押花となれり猪の臥す野邊の秋　闌更（半化坊発句集）

山萩
山萩の添竹はなしさりながら　言水（初心もと柏）
檜山峠に上り詣りたる所に猫を居て
山萩の散るや日のさす膝の上　乙二（松窓乙二発句集）
ゆら／＼と夕日を受けて山の萩　蒼虬（蒼虬翁句集）

木萩
咲やいな鎌目に及ぶ木萩哉　一茶（七番日記）

萩原
萩原や一夜は宿せ山の犬　芭蕉（續虚栗）
翁旅行に發て餞別
行／＼て倒れ臥とも萩の原　曾良（奥の細道）
萩原や花身に付けて分出づる　闌更（半化坊発句集）
萩原や花とよれ行く瓜上り　曉臺（曉臺句集）

小萩原
編足して椽先浪し小萩原　曲翠（鵲獅子集）
子狐の何に咽せけん小萩原　蕪村（蕪村句集）

萩見
身をよけて通る斗りの萩見哉　梅室（梅室家集）
枝越しに肴をはさむ萩見哉　蒼虬（蒼虬翁発句集）

萩の主
似合しき萩のあるじや女宮　召波（春泥発句集）

萩の戸　萩の戸やしばし遠慮の翁丸　浪化（浪化上人発句集）

[參考] はぎ Lespedeza bicolor, Turcz. var. intermedia, Maxim. 一名　やまはぎ（まめ科）山野に多く自生する多年生灌木本にして、高さ四五尺に達し、叢生して多く枝を分つ、幹は冬全く枯れず、葉は一柄三小葉、葉裏に軟細毛あり、秋日、梢頭葉ゝに葉より長き多數の穂をなして紅紫色の花を開く、花後莢を結ぶ、莢中一種子あり。

萩の實（中）

[季題解説] 萩の花は初秋なり。萩の實は仲秋なり。枯れて冬に至るも、細き枝頭に殘れり。名草の實の一つなり。[參照] 萩へ

芒（三秋）

薄　みだれぐさ　敷並草　袖振草　頻草　露咲草　鬼芒　十寸穂の芒　眞蘇宇の芒　麻苧穂の芒　篠芒　村芒　一叢芒　一本芒　芒野　切生の芒　刈生の芒　絲芒　鷹の羽芒　縞芒　姫芒　虎斑芒　（地理）芒原（地理）　芒笠（人事）

[古書校註]

【山の井】尾花が袖と言ひては、露の玉を拾ひ入れ、らにの香りをとめ、又長袖・つぼ袖なども言ひなし、糸薄ははたをり蟲のをだまきと云ひ、ず玉の房とも見なし、露の染め風のみだくけしきなどつらぬ。鷹の羽薄には渡る小鳥の膽を消し、はた薄の穂には落武者のほろ（二）を亂す心ばへ、波よるといひては月のみ舟を見渡し、はらむと云ひては通ふ稱妻を疑ひなど。

【御傘】薄。一、尾花一、すぐろ、又、穂屋作るなどの間に一、以上三也。誹諧には薄二ありて以上四也。（中略）薄ちるも秋也。枯るるは冬也。

【年浪草】三秋〔薄〕質雅に曰、薄は草の聚り生ずるを薄といふ。又芒といふ、杜榮也。（三才圖會に曰、芒、芭茅・杜榮、俗に薄字に作る。）鬼芒は快利にして人を傷る事鋒刃の如し、是也。縞芒は縱に白文有り。鷹の羽芒は白彪あり、鷹の彪に似たり。糸芒は葉細く糸線の如くにして長さ三四尺、一株枚百莖叢生す。秋莖を抽いて花穂をなす。篠芒は宗祇曰、しのすゝきとは穂に出ぬ薄をいふ。旗芒は袖中抄に曰、花薄か。夕とナと同じひゞき也。或萬葉裏書にははた薄とは穂の出でて旗をさゝげたるやうなる薄をいふとぞ能因申しけると。十寸穂の芒は無名抄に曰、穂の長くて一尺許あるをいふ。かのますかゞみを萬葉に十寸鏡と書けるにて心得べし。同抄に麻苧穂の芒、眞麻の心也。是俊頼朝臣の歌によみて侍るまそほの糸をくりかけてと侍る糸などの亂れたるやうなり。堀川百首「花すゝきまそほの糸をくりかけてたえずも人を思ほゆる哉　俊頼」。又同抄に眞蘇宇の薄、

眞の蘇枋也といふ心也、眞蘇枋（マスハウ）の薄といふべきを言葉を略したる也。色深き薄の名なるべし。

【註】ますほ・まそほ・まそうの薄について古來異説あれど、すべて眞赭（マソホ）の意にして芒の穂の赤きにつきて言ふ語なり。なほ[illegible]には芒を七月之部に出せり。

季題解説 到る處の原野に自生する禾本科の宿根草本にして、莖は叢生なるを常とし、高さ五六尺に達す。葉は甚快利にして人を傷ること刃の如く鋭きを以つて芒の字を用ふ。秋日花咲く時、莖頭に長き穂を抽でゝ甚風情あり。此を尾花と云ふ。芒は昔時、屋根を葺くに用ひしものなり。

「篠芒」とは「穂にいでぬ薄をいふ」と宗祇は云へり。「花芒」「穂芒」は「尾花」に同じ。「絲芒」は葉の細きを云ひ「鬼芒」とは其葉鋭く鋒刀の如きものなるを以つて云へるもの、「鷹の羽芒」は横に白き虎斑あるを云ひ、「縞芒」は縦に白き縞の入りたるものを云ふ。此等は觀賞用の變種なり「十寸穂の芒」は一穂の長さ一尺ばかりある」を云ひ、「眞蘇字の芒」は「眞の蘇枋なりといふ心なり。眞蘇枋の芒といふべきを、詞を略したるなり。」とは『無名抄』に云へるもの、又「摩芋穂の芒」は「まそほの糸」とも云ひて是も『無名抄』に「眞麻の心なり」と云へり。されど此等は古歌に用ゐし言葉を取りて詮義せるものにして、『栞草』には「まそほの芒とは穂の赤きをいふ、ますほ、まそう、などいへるは、みな語の轉じたるにて、もとは赤赭の意なるをわきまへずして、各別種に注せるは謬なるよし、清水濱臣の考あり」と云へるはよろし。思ふに此等は皆芒の穂の出でゝ其色の美しきを斯く種に言へるものならん。

實作注意 「篠芒」は穂の出でぬ芒を云へど、是は秋季たるべし。「青芒」と云ひては、其新葉の茂り盛んなると、青の字に清涼の意をもちて云ふものなれば夏季に屬し、「枯芒」「枯尾花」は冬の季物と定め置けるものなり。但し關西地方に多くある「ときは芒」は「ありはらすゝき」とも云ひ、其名の如く冬も枯れず。【参照】尾花（ヲバナ）　芒散る（スヽキチル）　春—末黒薄（スグロノスヽキ）　夏—青薄（アヲスヽキ）　冬—枯尾花（カレヲバナ）

例句

芒

いろはにほへの字形なる芒かな　宗因　（宗因千句集）
招くたび人になしたき芒かな　來山　（續今宮草）
茫々と取亂したる芒かな　鬼貫　（鬼貫句選）
吹からに芒の露のこぼるゝよ　同　（同）
露の玉幾つ持たる芒ぞや　同　（同）
面白さ急には見えぬ芒かな　同　（同）
此芒窓より吹や秋の風　同　（同）
　[illegible]
蘇鐵には宿らぬ月の芒かな　素堂　（素堂家集）
　武藏野の芒を手折りて、大卜の前に耳かきを拾ひし事を思ひて
宿に見るもやはり武藏野の芒哉　同　（同）

三日月を撓めて宿す芒かな　同（同）

深川艸庵の草の戸にして身ながら作る小菴にて
何事も招き果たる芒かな　芭蕉（續深川）

二軒茶屋にて
白馬の尾髮吹とる芒かな　同（雜談集）

多武峰
僧ワキの靜かに向ふ芒かな　同（句兄弟）

伊勢の拜松
蜘の闇や芒をかけて小松原　同（五元集）

花筒をさしたる社に
いそのかみ竹輪に結ぶ芒かな　同（同）

野の宮に詣て
嵯峨中の淋しさくゝる芒かな　嵐雪（杜撰集）

殺生石
穂にたゝぬ芒生けり石の隈　去來（七異跡集）

老樂の股たけ餘る芒かな　同（芭蕉翁）

一雨のしめり渡らぬ芒かな　支考（西の雲）

北人亭
親の手も殘る芒や庭の松　同（東西夜話）

西風は程なき雨の芒かな　北枝（北の山）

押分けて見れば水ある芒かな　同（花の故事）

見る人の眼も細らなる芒かな　浪化（浪化上人發句集）

丈競ぶ等覺門の芒かな　玄梅（枕屏風）

知りながら芒に明ける妻戸かな　小春（曠野）

はづれ〳〵栗にも似ざる芒哉　園女（其袋）

八瀬小原に遊行して、柴賣の文書ける序でに
招き〳〵枴の先の芒かな　凡兆（猿蓑）

蜻蛉の往來隙なき芒かな　車庸（葛の松原）

駒買に出迎ふ野べの芒かな　野明（有磯海）

秋の野を遊びほうけし芒かな　李由（韻塞）

抱き起す雨の芒の亂れかな　菩蘇（菊の香）

道中や芒の露のこけ下り　夕兆（續有磯海）

枕一つ是で日暮らす芒かな　舍羅（荒小田）

ひらつきて日を誘ひたる芒哉　野坡（木曾の谷）

蜘の園の柱に弱き芒かな　也有（蘿葉集）

塵溜の芒や下駄の穴目〳〵　同（同）

送別
日和〳〵道は芒の雫まで　千代尼（千代尼句集）

雉子の妻隱し置たる芒かな　同（同）

山は暮れて野は黄昏の芒かな　蕪村（蕪村句集）

追風に芒刈りとる翁かな　　蕪村（蕪村遺稿）
地下りに暮行く野邊の芒哉　　同（同）
嵐立つ夜頃の芒黄みけり　　曉臺（曉臺句集）
蛇の衣かけし芒の亂れ哉　　同（同）
長絹の紫かゝる芒かな　　同（同）
夕闇を靜まりかへる芒かな　　同（同）
朝あけや芒がもとの道者笠　　闌更（化坊發句集）
淋しさの都へ賣れる芒かな　　蓼太（蓼太句集）
松風の聾は根にある芒かな　　同（同）
刈とりてもとの亂るゝ芒哉　　几董（井華集）
山犬のがばと起行く芒かな　　召波（春泥發句集）

丹波なる自得へ
世に古し芒が中の泉かな　　樗良（樗良發句集）
限の限り臥行く風の芒かな　　大魯（蘆陰句集）

深川隱居
松芒その外のもの無かりけり　　成美（成美家集）
是よりして秋の日弱る芒哉　　同（同）
はらむとは芒にやすき言葉哉　　乙二（松窓乙二發句集）
山陰の野に暮急ぐ芒かな　　同（同）

古友へ
扱は留守芒結びて置れたり　　同（同）
三日月を目にこそ來たれ芒吹く　　同（たのゝえ草稿）

都にて
霧雨の里に日のさす芒かな　　士朗（枇杷園句集）
法輪の芒を詣る雨夜哉　　同（同）

美濃の國より吉野より、の際にて
翌日はく草鞋打つ家の芒かな　　巢兆（曾波可理）
寐たがらぬ隣を追こむ芒かな　　同（同）
弓取の見込も深き芒かな　　同（同）
一体が魂迎する芒かな　　同（同）
猪追ふや芒を走る夜の聲　　一茶（一茶句帖）
人並や芒も騷ぐ帚星　　同（七番日記）
油斷すな〳〵とや芒吹く　　同（同）
一念佛申すだけ芒かな　　同（おらが春）
今様の大立縞の芒哉　　同（九番日記）
釣人のわめいて通る芒かな　　梅室（梅室家集）
土橋の下にも招く芒かな　　同（同）
飛込んだ鳥も居らぬ芒かな　　蒼虬（蒼虬翁發句集）
山中で一はし戰ぐ芒かな　　同（同）

山伏の螺に静まる芒かな　同（同）

[illegible]に宿る一は、秋の雨いと静かに降りて、寂寞旅人の宿[illegible]

侘人の便りを戦ぐ芒かな　同（同）

梅室が東に行くを送りて

分行くもやすし芒も穂に出でゝ　同（同）

秋の千草のあはれなる中に

靡さすに方なきこそすゝきなれ　若山游女 ながと（攝津名所圖會大成）

吹上げて芒にふるゝちぎれ雲　別天樓（丁卯句鈔）

奈良

鹿につきて歩けば奥の芒かな　尺角（落日）

[illegible]法師[illegible]し、世を去りて二十年に成ければ

十寸穂の芒　糸芒　村芒　芒原　芒箸

秋二つ夏をますほの芒哉　蕪村（蕪村句集）

垣根清ら芒ひともと眞蘇枋なる　同（同）

芒より出でゝますをの芒哉　士朗（枇杷園句集）

穂を添へて猶名もよしや糸芒　配力（砂川）

はるばると雲のかけりや村芒　曉臺（曉臺句集）

犬の聲しばし星ありてむら芒　同（同）

闇靄の出所はあり芒原　鬼貫（鬼貫句選）

迷ひ子の親の心や芒原　羽紅女（猿蓑）

芒原果は鹽燒く匂ひかな　成美（成美家集）

搗の葉に燒味噌盛らん芒箸　宗波（續猿蓑）

參考 すすき Miscanthus sinensis, Anders 一名 かや（禾本科）山地原野に生ずる多年生草本なり、年々宿根より叢葉を生じ、高さ四五尺に達し、邊緣殊に粗糙なる大葉を生ず、秋月莖頭に長き黄褐色の穂をなし枝を分つ、尾花と稱するものこれなり、秋の七草の一なり、莖葉を以て屋根を葺くに用ふ、又觀賞用として植うることあり。

尾花（晩）

傍題　花芒　穂芒　芒の穂　初尾花　村尾花　尾花が袖　尾花の

季題解説 芒の花を云ふ。其狀獸の尾に似たるを以つて此名あり。尾花は

秋の七草の一つにして、我國の秋の野は、すゝき尾花によつて其趣を増すもの、清少納言もそれを言へり。〔一名〕芒、芒散る　冬—枯尾花

例句

尾花

武藏守の[illegible]江に下らせ給ふを見る
武藏野の尾花に入るか大白熊　才麿（才麿發句拔萃）

九月十二　黑門へ神出に招かれて
神の日と來てさへ招く尾花哉　鬼貫（七車）

箱根山にて古郷を思ひ
古郷を招くか尾花二子山　同（同）

無い袖を振つて見せたる尾花哉　許六（韻塞）

柄鮫の南鐐柔も尾花かな　同（正風彦根躰）

風しむや入日は尾花すり拂ひ　杉風（小柑子）

蜻蛉を止りつかせぬ尾花かな　同（杉丸太）

七月十二日[illegible]
面影の尾花は白し翁塚　浪化（そこの花）

秋風の言ふ儘に成る尾花かな　千代尼（千代尼句集）

晩鐘に幾つか沈む尾花かな　同（同）

空[illegible]や尾花が末の猪子雲　白雄（白雄句集）

招くとて岩角たゝく尾花かな　梅室（梅室家集）

水つきの泥の中より尾花かな　同（同）

花芒寺あればこそ鉦か鳴る　來山（續今宮草）

候べく候や小野のお通が花芒　素堂（素堂家集）

花芒

壘門野を過ぐる頃
角文字や伊勢の野飼の花芒　其角（其袋）

二見
岩の上に神風寒し花芒　同（句兄弟）

雲津にて
花芒祭主の輿を送りけり　同（同）

本多下總守殿御待宴
召ごとに馴れし子方や花芒　同（五元集）

花芒階子つれなくこけかゝり　嵐雪（陸奥衛）

品川へ二里の休や花芒　同（玄峰集）

鎮野より歸りけるに、ひみといふ山にて日もくれて
今よりは蛙もかゝらず花芒　去來（伊勢紀行）

寄レ戀ニ老ヲ
君が手を交じるなるべし花芒　同（猿蓑）

花芒婦が懐寐て行かん　支考（其便）

狐とは思はじ君を花芒　同（西華集）

松竹亭
楊弓の見渡し廣し花芒　同（東西夜話）

涼しさに招くか波の花芒　同　（山琴集）
神鳴の末野は遠し花芒　浪化（麻生）
花芒戸にはさまれし夜風かな　牧童（卯辰集）
澁笠や愛で着初めむ花芒　丈草（蘇の實）
波村一周忌
痩ながら久穗に出たり花芒　許六（風俗文選犬註解）
野分とは祈り過たり花芒　也有（蘿葉集）
辨慶賛
花芒一ト夜はなびけ武藏坊　蕪村（蕪村句集）
花芒刈殘す事はあらなくに　同（蕪村遺稿）
油斷して嵐に逢ふな花芒　同（蕪村句集拾遺）
日も寒け立ちぬ芒の花の上　曉臺（曉臺句集）
猪を荷ひ行く野や花芒　白雄（白雄句集）
雨そゝぐ岡の小家や花芒　同（同　）
伸上る富士の別れや花芒　几董（井華集）
鬼貫五十年忌
淋しさの年々高し花芒　同（同　）
秩父山崔い所や花芒　成美（成美家集）
陽炎の秋にも逢へり花芒　士朗（枇杷園句集）
手の届く松に入日や花芒　一茶（享和句帖）
見ず知らぬ野とは言はれじ花芒　蒼虬（蒼虬翁發句集）
花芒翌の哀れを吹殘す　同（同　）
刈萱はあまり艶なし花芒　花讃女（秋陀羅尼）

穗芒

二草元ノ庵にて
穗芒を束ね寄するや畑の畔　芦本（茜　集）
取付て地につく鳥や薄の穗　闌更（半化坊發句集）

村尾花

村尾花夜のはつ〳〵に鶉啼く　曉臺（曉臺句集）
村尾花夕越え行けば人呼ふ　同（同　）
一むらの尾花これ化野の有樣なり　白雄（白雄句集）

芒散る（晩）　尾花散る

季題解説 芒の穗、卽ち尾花ほゝけて飛散するを云ふ。晩秋より初冬に亙りての季物とすべし。 **參照** 芒、尾花

例句 芒散る

招くとは有るが上こそ芒散る　鬼貫（七　車）
菅笠に厭ふもをかし散る芒　桃隣（古太白堂句選）
淋しさに堪へてや野邊の芒ちる　士朗（枇杷園句集）
芒散る日や離家の壁普請　知道（田毎の日）

芒散る　ちる芒寒くなるのが目に見ゆる　一茶（[illegible]）
尾花散る　尾花散るや穂の毛を吹く風の宿　曉臺（[illegible]句集）
半ば散る尾花吹やむ月夜哉　闌更（半化坊発句集）

刈萱（かるかや）（中）　[illegible]草　めかるかや　をがるかや

【山之井】　苅萱　かやがしたおれ。苅萱の關（一）に名乘りし古事をも寄せ、道心坊の心掛かりし昔語（二）をも思ひ、又苅萱と云ふ名につきて、露の宿かるとも、かまきり蟲の名たてなども言ひなし侍りし。

【滑稽雑談】　八月。漢名未詳。○八雲御抄云、刈萱、只かやともいふ。たかかやともいふ也。大和本草に云、宿根より春苗を生じ叢生す。葉に青白の縦筋多くまじりて本末に通じ、四五月穂を生ず。中華の書にて未だ見ざる所也。草・茅の類也。かるかやともいふ。△按に八雲御抄御説には萱と一種のやう也。御傘の説には別種のやう也。但し今俗に刈萱と稱するもの、屋を葺き軒を包むものにあらず、至つて小さき茎葉にて、秋に至りて穂をなす。その穂黄褐色にて茎頭に蟲のつくが如く、たとへば茶引草の穂の大きの如し、之を刈萱といへる也。尤も萱の種類也、貞徳が雷草の説正否を決せず、

註　（一）古へ筑前の國にありし關の名　（二）俗に名高き刈萱道心　例句に「刈萱やになふ道心ぼつのさき」

かるかやは「めかるかや」を云ふ。山野に自生する禾本科の宿根草にして、春、茎葉を叢生し、茎の高さ四五尺に達し、葉は狭長にして多くの毛茸あり。秋、葉腋に穂を出して花を生ず。苞葉長く尖りて一種の總をなし、苞は褐色なり。此草叢根强韌なれば取りて「たわし」となし、又剛毛を作る。又「をがるかや」と云ふもの、穂の形小く、包の先端尖鋭ならず、小穂かるかやより小にして、赤褐色の芒を有す。其姿はめかるかやに及はず

刈萱　刈萱や露持ち顔の草のふし　牧童（[illegible]集）
刈萱は千本の哀れ一つづゝ　土芳（蓑虫庵集）
野路の雨刈萱濡りありのままに　鳴雪（鳴雪句集）

刈萱はまことに秋の花なるぞ　　蘭更（半化坊發句集）
刈萱や雨を含みて見違へる　　梅室（梅室家集）
刈萱や瀧より奥の一ト在所　　蒼虬（蒼虬翁發句集）

【參考】めがるかや Themeda triandra, Forsk. var. japonica, Makino 一名　かるかや（禾本科）山野に自生する多年生草本にして、春日宿根より莖葉を叢生し、九月頃莖の高さ四五尺に達し、葉に多くの毛茸を有す、秋日葉腋に花を生ず、穎は褐色にして長く尖りて一種の趣を呈す、此植物を觀賞用に供することあり。

茅（三秋）　白茅　淺茅　白葉草

【古書校註】【年浪草】三秋。大和本草に曰、白茅、本艸に蘇頌が云、春芽を生ず針の如し。俗にこれを茅針といふ。小兒好みて食ふ、毒なし。血を破り、血を止む、是也。

【季題解說】何處の原野路傍にも多く生ずる宿根草にして、四五月の頃より幅三分許にて長さ二尺餘の葉を生ず。春、葉に先ちて細き花芽を出す。これを「つばな」と云ふ。高さ一尺許、白毛を密生せる二寸餘の穗をなす。これは春の季物なり。夏に至り花穗延びほゝけ、白き絮を著けて叢生し、池塘に風に靡けるは野趣あり。此穗わたにて火口を作る。秋刈りて屋根を葺くに用ふ。

【實作注意】茅は禾本科の植物にて野に多くあり。古人、茅花を春の季と定め、夏に茅輪あれども、これは人事の季題にして、茅輪は菅・茅等を以て作れば其名はあれども茅を主とせず。白茅の風致、夏季にあれども取つて季物とせず、反つて秋の季と定むるは、其意すゝきなどと同じ扱ひにて、茅を刈りて用とする時を以て季と定めしものなるべし。又、ちがやの紅葉するを、淺茅色づくなど和歌に詠めり。茅も霜後鮮紅になるもの也。【參照】春—茅花　夏—茅の輪

【例句】
茅　此里は染めて一面茅の葉かな　　青々（倦鳥）

【參考】ちがや Imperata arundinacea, Cyr. var. Koenigii, Hack. 原野路傍に多く生ずる多年生草本なり、四五月頃より幅三分許にて、長さ二尺餘の葉を生ず、此植物の花は葉に先だちて早春生じ、ツバナと稱す、其高さ一尺許、白毛を密生せる二寸餘の穗をなす、莖の節に白毛あり、毛なきものをケナシチガヤと云ふ。

蘆の花（中）　蘆の穗

【季題解說】水邊に生ずる禾本科の宿根草本にして、春日舊根より生じ、高さ

一丈餘に達し、概形「すすき」の大なるものに似たり。秋日莖頭に大なる穂を抽き、圓錐花序をなして多數の花を着く、後實を結び、白毛によつて其實の散布を助く、莖は葦簾を作るに用ふ。（参照—蘆の穂架（アシノホワク）　荻（ヲギ）　春—蘆の角（アシノツノ）　夏—青蘆（アヲアシ）　冬—枯蘆（カレアシ））

例句

蘆の花

一茶筅そよや穂に出る蘆簾　宗因（梅翁宗因發句集）
猶も一夜は宿せ蘆の花　芭蕉（笈日記）
芦の穂や招く哀より散る哀れ　路通（曠野）
難波津にて
芦の穂に箸うつ方や客の膳　去來（炭俵）
芦の穂や顔撫あげる夢心　丈草（同）
筏士が寐て流るゝや芦の花　凉菟（菊の道）
芦の穂や親父と呼は渡守　嵐雪（安達太郎根）
蚕の子の肌なつかしや芦の花　園女（藁人形）
乳を出して船漕ぐ海士や芦の花　北枝（山中集）
芦の穂や蟹をやとひて折りもせん　其角（類柑子）
打つ櫂に泥をかけゝり芦の花　浪化（浪化上人發句集）
芦間から風の拾ふや捨小舟　千代尼（千代尼句集）
芦の葉にすわらぬ尻と成りにけり　同（同）
文臺の賛
よしあしの穂に顯はれて二見哉　同（同）
芦の花漁翁が宿の烟飛ぶ　蕪村（蕪村遺稿）
芦の穂に沖の早風の餘りかな　太祇（太祇句選）
さや川を下る頃
高水や芦の白穂に雲起る　白雄（白雄句集）
直江の津より黒井の間にて
玉鉾の是れ道かや芦の中　乙二（松窓乙二發句集）
[illegible]
鴫とりのかづく蓑なし芦に雨　同（をのゝえ草稿）
月となるうちも穂芦の忙しき　同（同）
芦の穂や五尺程なる難波潟　一茶（七番日記）
芦の穂やあんな所にこんな家　同（同）

日の暮や芦の花にて子を招く　一茶（七番日記）
蘆の花はじめは青き穂なりけり　蜃樓（倦鳥）
三四人の一家小舟に蘆の花　青々（同）

蘆の穂絮（あしのほわた）（晩）

古書校註

【御傘】［芦］水邊也、植物也、雜也。（中略）穂に出る・冬枯・下萌などの詞をいるれば植物・水邊に二句也。芦の穂綿は秋也。

【増山之井】［芦の穂］九月。芦の穂綿秋也。

【年浪草】［芦花・芦穂］八月。説文に曰、葦の初生を葭と名けやゝ大なるを芦とす。長成して乃ち葦となる。その花風に遇ひて吹揚ぐれば雪の如く、地に聚まれば絮の如し。［芒の穂絮］九月。

季題解說

芦の花穂は、晩秋に至り熟して白色の絮を吹き、風に從うて自ら飛ぶ。［參照］蘆の花（八・二）

例句

蘆の穂絮　干上りて吹飛ぶ芦の穂絮かな　桃從（田舟の日）

荻（をぎ）（初）

荻（をぎ）よし　海苔（うみはぎ）　風持草（かぜもちぐさ）　風聞草（かぜききぐさ）　寐覺草（ねざめぐさ）　濱荻（はまをぎ）　荻（をぎ）の風（かぜ）　荻（をぎ）の上風（うはかぜ）（文天）　荻（をぎ）の聲（こゑ）（文天）　荻原（をぎはら）（地理）

古書校註

【山之井】荻は風にこたへて聲ある物なれば、秋風の口まね（一）、定宿（ヂヤウヤド）なども云ひ（二）、ふるひ聲、そゝやき聲にも聞きなす。又かざけに荻やそゞろごと（三）、松風の地うたひなども云ひ、風やおぎのふしとぞへ（下略）

【御傘】［荻］（上略）荻の燒原・荻の下萌・荻の若葉は春也。繁るは夏也。枯るゝは冬也。しかしながら穂と云ふ字・色の字そへば秋也。伊勢の濱荻は芦の異名なれば雜也（四）。穂の字・色の字そひて秋の句なりとも、秋の荻の外に苦しからず。各別の物なれば也（下略）

【栞草】七月。荻の風　荻の聲　大和本草　荻はきよしといふ。淀川其外處々にあり。山野にも水邊にも生ず。中實也。よしのごとし。少は其中とほり、葦とまじり生じ似たるもの也。水草也。（一）荻の葉に風わたりて音する

を、荻の聲とも荻の上風ともいふ。

注（一）例句に「あき風のたまねする荻の聲」（二）例句に「秋風の定宿なれや荻の聲」（三）例句に「おかされて風にや荻のそよろ[illegible]」（四）同じく[illegible]荻の條には「[illegible]の事なれども荻といふ名につき二種[illegible]、たとへば[illegible]」と[illegible]の意見は[illegible]説のまゝにあげたれど、[illegible]の[illegible]は[illegible]とする説もよしとせり。

季題解説 荻は「をぎよし」「うみがや」と云ひ、葦に交りなどして水邊に生じ、又原野にも繁殖す。丈高きものは五六尺に及び、明瞭なる節を有し葉鞘葉を包む。葉は線狀、芒に似て濶大なれども鋸歯無し、秋は花穗を出し、其色初は淡紫色、老て白く尾花に似て長大なり。禾本科の宿根草本にして其根節を節して地中に蔓延す。

實作注意 古來荻の秋風にそよぐを賞して人の好んで詠ずるところのものなり。「荻の聲」は葉に風の吹き渡りて音あるを云ひ、又「荻の上風」などと詠めり。芒、葛の葉と共に秋景の特色を爲すもの、芒と葛は山野の秋を代表し、荻は水邊の秋を代表す。［[illegible]］［[illegible]］の花[illegible]。

例句

荻

鉢に植ゑて甲斐なき荻の戦ぎ哉　来山（續今宮草）
今朝よりは我々顔の荻芒　同（同）
なつかしき荻の荒伸や塀の上　召波（春泥発句集）
面影の似て面白や荻芒　蒼虬（蒼虬翁発句集）
暮れぬより鶺鴒釣る宿や荻芒　同（同）

濱荻

三国夜泊
濱荻や一ト夜泣たは誰が聲ぞ　北枝（北枝発句集）
[illegible]
濱荻に寄せ一は浪の筆返し　蕪村（新五子稿）

荻の風

夕暮や蚊を開かへて荻の風　也有（蘿葉集）
荻の風いとさうざうしき男哉　蕪村（蕪村遺稿）
荻吹くや燃ゆる淺間の荒殘り　太祇（太祇句選）
荻の風北より来り西よりす　几董（井華集）
飯櫃や下葉折れ込む風の荻　成美（成美家集）

荻の上風

夜舟さし荻の上風きゝにけり　青々（倦鳥）

荻の聲

路・移住
友とする夜も文章の荻の聲　鬼貫（七車）
荻の聲こや秋風の口うつし　芭蕉（續山井）
夢となりし骸骨踊る荻の聲　其角（田舎の句合）
帷子の襟にはくさし荻の音　千代尼（千代尼句集）
荻の聲舟は人なき夕かな　闌更（半化坊発句集）
波越や雫ながらに荻の聲　同（同）
一もとの荻にも秋の戦ぐ音　召波（春泥発句集）
虹の根や暮行くまゝの荻の聲　士朗（枇杷園句集）

是とても老行くものよ荻の聲　同　（同）
長風呂の客を見舞ふや荻の聲　梅室　（梅室家集）
行燈で小橋見せるや荻の聲　同　（同）
夜着借りに舟から來るや荻の聲　同　（同）
蛋が子の打盤濟んで荻の聲　蒼虬　（蒼虬句集）
門の荻よそ〳〵しくも聲すなり　同　（同）
荻の聲星は過ふに遊びなし　同　（同）

荻原　荻原に棄てゝありけり風の神　太祇　（太祇句選）

【參考】 をぎ Miscanthus saccharifloras, Hack.（禾本科）水邊及び原野に生ずる多年生草本にして、其匍匐根は地中を蔓延して、節より莖を抽き高さ四五尺に及ぶ、葉はスヽキに似て濶大なれども、彼の如き鋭歯を有せず、秋日花穗を出す、スヽキに似て芒なく之れより豐大なり。

眞菰(まこも)の花(はな)（中）

【季題解說】 古歌に詠へる「花かつみ」は、此眞菰の花なりと云ふ。然れども眞菰は禾本科の植物なれば花と云ひても美しきものには非らず、四五尺の莖上に一二尺の穗をなし、雌花先づ穗の上方に咲き、次で雄花は下方に咲く。即ち雌花實を結ぶ時、雄花下に咲くものなり。たゞし眞菰の丈長く生ひ茂り、沼澤・池畔・小川の流れなどに、穗を抽き花をつけたるは風情無きにあらず。その實熟すれば穗より離れて散り易し。食用となる「菰米」これなり。

【季題注意】 眞菰は夏茂れるを刈りて莚に織りなどするものなれば、古歲時記には「眞菰刈」を夏の季と定め、花を特に季題としては擧げざりしものなれども、水邊に此花の穗を見ること趣あれば秋季の物としてよろしかるべし。［參照］夏—眞菰刈(マコモカル)

數珠玉(ずずだま)（初）　ずゞこ　じゆずだま　川穀(せんこく)

【古書校註】 【年浪草】七月［薏苡仁(かなく)］和漢三才圖會に曰、苗は黍に類し、葉の間に枝を分ち穗を出し實を結ぶ、その梢の端に小白花を開く、凡そ草木は花落ちて實を結ぶ、これは花と實と別なり、形圓く末尖り、尖端に白絲三條を出す。略乾けば絲脫け去りて孔となり、上下通ず、小兒線を貫きて以て念珠とす。

【季題解說】 水邊に生ずるも、人家にも亦之を植うる禾本科の草本にして、高さ三四尺、莖は叢生して黍に類し、葉は線狀にして長く先端尖る。葉腋に枝を分ちて穗を出し雌雄花を開き、秋日白質にして略球形の小果實を生ず。外皮琺瑯質にして堅し。小兒之を採り數珠の如く絲に貫きて玩ぶ。藥用に

供する薏苡(ヨクイ)（はとむぎ）は別種なり。

【例句】

藪澤やつゝだま實に出る夫婦　花曉（田舎の日）
珠數玉は霜よぶ色に消當　霜宇（俳星）
月にとりおし珠數玉の青きかな　溪泉（同）
[illegible]
珠數玉酒けありし其日に似たるさま　鼓竹（同）

【参考】じゅずだま（Coix Lacryma-Jobi L.（禾本科））野外に自生する多年生草本にして、莖は通常叢生し、葉は細長くして幅廣く先端尖る、夏秋の候葉腋に雌雄花を開き、花後白質の珠形の果實を生ず、果皮は琺瑯質にして堅し。兒童は之を採りて絲に貫き、珠數の如くにして玩ぶ。

薏苡(はとむぎ)（秋）　鳩麥(はとむぎ)　たうむぎ

【季語解説】禾本科の一年生草本で、此の植物の種子を舂き、炊きて飯の代用とし、又は粉糊とし、或は炒りて香煎となす　【古書】薏珠子、

【例句】

薏苡や昔通ひし叔父が家　子規（全集）
[illegible]

【参考】一名 たうむぎ（禾本科）はとむぎ（Coix Lacryma-Jobi, L. var frumentacea, Makino.）田圃に栽培せらるゝ一年生草本にして、高さ四五尺に達す、葉は線形を呈し幅廣し、花は夏日梢上葉腋に生じ　雌花及雄花ジュズダマに酷似すれども、果實の楕圓形なると其皮の色と琺瑯質様ならざるを以て異なりとす、秋熟し、種子を食用に供す。

芭(は)蕉(せう)（秋）

【古書校注】

【御傘】芭蕉　秋也、連に一句の物なれば、誹には二句すべき道理ながら、如何にしても先き(一)なれば耳に立つべし　折を替へて奏者草(二)と今一有るべし、然らざれば心にせをはなど立入れて(三)すべし。それも秋の季をば持つべし。

【年浪草】三秋(四)(五)大和本草に曰、本草湯液に載す、軟地に植ゑて茂り易し、春葉を生じ秋に至りて止む、冬根も枯れず、年々發生す、久しきを歷て大也　黄花を開く、極めて稀也。東鑑にその花を俗優曇華といふよし記せり

註（一）耳に立つ耳に立つ[illegible]　（二）芭蕉の異名　（三）心にせよはせをとかけし也。（四）[illegible]

[illegible]

【季題解説】原産は熱帯地方なる多年生植物なるを、古來移して觀賞用とし庭園に植う。軟なる地に植ゑて茂り易し。葉の高さ一丈餘にもなり、葉は大な

る長楕圓形にして丈に及び、幅一二尺、中肋の內側に平行せる側脈を具ふ。春葉を出し、秋に至つて止むも、根莖は冬も枯れず。年を歴て增大す。花は夏に出すものなれども、我國にては其悉くには花を見ず。數年を隔てゝ開き、長き莖を生じ、頂に大なる一花を下垂す。蓮花の蕾に似て黃白色、實は五稜にして綠なり。花を生ずれば旁より小苗を出して本根は枯る。又果實も熱帶地に非らざれば熟せず。

【實作注意】其葉の淸々しきを賞して季物とす。然れども仲秋を經て自ら破れ、或は風雨の爲めに破らるゝこと多し。風吹き其葉ずれの音を聞かば懷ひの寄るものあるべし。桃青翁深川の艸庵に此を植ゑて其趣を愛し、終に芭蕉を以て雅號にも用ゐられしものなれば、殊にゆかしみあり。【參照】破芭蕉 夏 玉卷芭蕉 芭蕉の花 冬―枯芭蕉

【例句】

芭蕉

夙に起きて妻に芭蕉を縫せけり　言水（初心もと柏）
神樂歌書かん芭蕉の廣葉哉　同（言水句集）
　茅舍ノ
芭蕉野分して盥に雨を聞く夜哉　芭蕉（武藏曲）
此寺は庭一ぱいの芭蕉かな　同（誹諧曾我）
垣越しに引導覗く芭蕉かな　卜枝（曠野）
秋はたゞ眞言寺の芭蕉かな　小春（柞原）
芭蕉葉や在家の中の淨土寺　露川（浮世の北）
申酉の雨になにたる芭蕉かな　素覽（同　）
窓先に西日こぼるゝ芭蕉かな　錦江女（けふの昔）
芭蕉葉に花も角を隱しけり　其角（五元集拾遺）
順禮の落書知らぬ芭蕉かな　也有（蘿葉集）
物書くに葉裏にめづる芭蕉哉　蕪村（蕪村句集）
露はれて露の流るゝ芭蕉かな　白雄（白雄句集）
芭蕉葉や何を力に袋蜘　同（同　）
芭蕉葉に落かゝりけり鬼瓦　曉臺（曉臺句集）
淋しさの來る橋懸けて芭蕉哉　蓼太（蓼太句集）
蓑の背に芭蕉の雨の雫かな　召波（春泥發句集）
隣からともしの映る芭蕉かな　子規（子規句集）
大寺の施餓鬼過ぎたる芭蕉かな　同（同　）
黃葉つ山門深き芭蕉かな　同（全集）
主藏れ賓行く庭の芭蕉かな　露月（露月句集）

破れ芭蕉（晩）

【古書校註】【年浪草】九月。南州異物志に曰、（中略）その葉長大なるが故に風を得る

時は即ち破る。

【季題解説】芭蕉葉の破れたるを、特に賞して季題とす。

【實際作法】「芭蕉」は三秋に亘るも、「破れ芭蕉」は限りたるものなれば、舊來の如く晩秋の季物とすべし。〔三秋〕芭蕉（バセウ）。冬　枯芭蕉（カレバセウ）。

【例句】

破れ芭蕉　破芭蕉破れぬ時も芭蕉かな　鬼貫（鬼貫句選）

[illegible]

裂易き芭蕉に寒を打つ人か　太祇（太祇句選）

破芭蕉心此程ものぐさき　白雄（白雄句集）

染かねて我と引裂く芭蕉かな　蓼太（蓼太句集）

芭蕉葉や音も聞かさず破盡す　梅室（梅室家集）

檀特花（だんどくくわ）（中）　曇華（どんくわ）　蘭蕉（らんせう）

【古書校註】【年浪草】八月、谷響集に曰、寄父曰、俗に檀特花と名くる者あり、花申火の如し、これ亦芭蕉の類にや、答へて曰、是亦芭蕉の別種ならん、〇和漢三才圖會に曰、高さ三四尺、葉は芭蕉に似て小く、甚しくは柔ならず、又蘘荷に似て大く、甚しくは硬からず。長さ尺餘、濶さ三四寸、冬枯れ春生ず。七月莖を抽んで花を開く、深赤色、形穂の如く最も愛すべし。子を結ぶ、圓く黒色甚だ硬し、もつて念珠を作る。もと西南外國の草、性最も寒を畏る。

【季題解説】觀賞用として培養する多年生草本にして、冬枯れ春生ず、高さ三四尺より六七尺に達し、葉は大形の長楕圓形にして、芭蕉葉に似たるも柔かならず、夏秋に亙りて葉中一莖を抽き、燃ゆるが如き赤色の美花を總狀花序に開き、花後球形の乾果を結ぶ。性寒を畏る。種子は黒く圓くして硬し。

【例句】

檀特花　檀特の花もかたまる念佛哉　香鶴（三千化）

檀特や花を包みし葉の幾重　禹功（新類題發句集）

【參考】だんどく Canna indica, L. var. orientalis, Hook. fil.（だんどく科）東アジア原産の觀賞用として栽培する多年生草本なり、莖の高さ六七尺に達し葉は大なる楕圓形を呈し支脈多數斜めに平行す、葉中に一莖を抽き夏秋の候梢に大なる圓錐狀をなして赤色の美花を開く、三萼片、三花瓣あり、雄蕊著しく變形して大形となり花瓣様となり其一片に一葯を有し、花柱又變形して共に花瓣狀となる、子房は下位にして花後蒴果となり果皮に細粒多く、種子暗色、圓くして頗る堅し、俗間「カンナ」と稱するものは元來變種の品にして從來稱し來れるダンドクとは異れり、之れを「花カンナ」と云ふ。

萬年青の實（晩）　老母草の實

【古書校註】

【栞草】九月、三四月一莖を抽きて淡黄色を開く、穂の如し。其の莖高からず。随つて實を結ぶ。生は青く熟すれば眞紅、累々として天南星の實に似て愛すべし。【三才圖會】万年青、葉芭蕉に似て隆々として衰へず。その多壽を以て萬年青と名く。【大和本草】唐には一切祝儀に用ふるよし、花鏡にみえたり。

【季題略説】

本植物には、葉の形態其他に頗る變種多く、盆栽として愛玩する者多し　原種は暖國山地樹下に自生する百合科の多年生常緑草にして、地上莖を持たず、披針形の葉は地下莖より叢生し、厚くして光澤あり。葉の長さ一尺以上に及ぶものあり。春夏の交、葉間より短き花莖を出し、莖末に淡黄色の細花を穂狀に攢簇し、花後圓形豆粒大の果實を累々と結ぶ。熟して赤く美なり。家康公江戸城に引移られしとき、其慶賀として長島某之を献納す。長島おもと是なり。【参照】春―萬年青の花

【例句】

老母草

草の葉の岩にとりあふ老母草哉　鬼貫（鬼貫句選）

花の時は氣づかざりしが老母草の實　召波（春泥發句集）

鴨の今年も知らぬ老母草かな　移竹（乙御前）

愚を守る庵に一鉢老母草の實　青々（倦鳥）

蘭（初）　秋蘭　蘭の香　澤蘭　建蘭　玉鈗蘭　素心蘭　小蘭　蘭の秋（時）

【古書校註】

【年浪草】七月〔蘭〕冠宗奭曰、葉は麥門冬の如くして濶く、かつ靱なり、長さ一二尺、四時常に青し。花は黄緑色、中間の瓣上に紫點あり。春芳しきを春蘭とす、色深し。秋芳しきを秋蘭とす、色淡し、開く時滿室盡く香し（他花の香とはまた別なり）。○山谷曰、一幹一花にして香餘り有る者を蘭となす。一幹數花にして香足らざる者を蕙となす。大和本草に曰、是世俗に花を玩賞する蘭也、眞蘭に非ず、今の蘭は本草別に不レ出レ之。蘭草集解正誤に載すと云々。正誤の說上に見えたり。（一）時珍云、山谷が一幹一花而香有レ餘者爲レ蘭云へるを誤と云ふは蘭草の事を說くが故也。蘭草は本邦藤袴と稱する草にて、花葉共に芬芳なり。山谷が說今の蘭花の事を說く時は誤には非ず。是大葉の麥門冬に似て、その花蜂の形狀あり。薩州駿州より多く之を出す。甚だ寒を畏る。

註（一）蘭花と蘭草の別なる事をわけるなり。○蘭草の條參照

【季題略説】

蘭に品種多く、春日花開くものを春蘭と稱し、秋風先づ到つて芳香ある花を見るものを蘭と云ふ。たゞし茲にいふ蘭は、蘭と蕙とを併せて云ふものにして、蘭の清楚を賞するは、卽ち秋の爽氣を喜ぶなり。蘭の秋

の語、既に漫ろに蘭懷を動かすものあり。

▽建　蘭　葉は細長くして叢生し、長さ二尺餘に達す。秋日叢葉の間に別に花莖を抽き、その上部に數花を開く　花色淡黄色にして稍紫色を帶び、芳香あり　支那福建省に原産するを以て建蘭と云ふ　又我國にもあり、駿河より出づるを以て駿河蘭と云へり。

▽漳　蘭　建蘭に似て葉少しく廣く、且つ柔軟にして葉末垂れ易き性あり。葉に光澤あり。

▽玉魫蘭　支那より船載せる品種なり。葉の長さ尺餘、幅廣くして少しく垂るゝ性あり。葉の色深綠にして一種の光澤を有す。秋、青白色の細き花莖を抽き、純白の花を開く。香氣最高し。

▽素心蘭　前種と同じく支那より渡りし品種にして、葉は細長なり。秋、香氣を放つ純白の花を開く

▽小　蘭　葉の長さ尺餘、建蘭に似て小なり。八月頃、鳳蘭に似たる花を開く、花色白くして紅紫の條斑鮮明なり。香氣高し。一名を「しまさきらん」と云ふ。

【實作注意】蘭の花期は長く、初秋より仲秋に至る。芬芳高遠にして、山谷の清蘭を思はしむる風姿甚愛すべし。一莖一花にして香の餘り有るものを蘭と云ひ、一莖數花にして香の足らざるを蕙と云ふ。又、蘭は王者の香とも云へり。蘭英を採りて鹽漬としたる物に湯を注ぎて飲む、これを「蘭茶」と稱す。風味あり。秋蘭に次で初冬に花を開くものに鳳蘭・草蘭有り。

【參照】春—春蘭

【例句】

蘭

秀でたる詞の花はこれや蘭　宗因（梅翁宗因發句集）

蘭の香や蝶の翅に薫物す　芭蕉（甲子吟行）

守栄院

門に入れば蘇鐵に蘭の匂ひ哉　同（笈日記）

沼津和尚、隱室に參りて

香を殘す蘭帳蘭の宿り哉　同（鹿子の渡）

蘭の香や角や振廃す蝸牛　桃隣（陸奥衛）

袴着て咲たる蘭の匂ひかな　支考（越の名殘）

屈原

蘭菊に僻むや老の一トやまひ　尙白（ねなし草）

すんごりと直なる蘭が殊に月　惟然（惟然坊句集）

亂るゝは風の當りや蘭の花　也有（蘿葉集）

蘭咲きぬ鼻にも秋を驚かせ　同（同）

夜の蘭香に隱れてや花白し　蕪村（蕪村句集）

蘭夕狐のくれし奇楠を炷む　同（同）

蘭の香や菊より暗きはとりより　同（蕪村遺稿）

此蘭や茂作が庭に昨日まで　同（同）

痩たるを悲しむ蘭の莟みけり　太祇（太祇句選）

或方より蘭を贈らるゝに名香ありて

蘭の香や君がとめ奇楠に若も又　同（同）

浸るゝ香や蘭も覆の紙一重　同（太祇句選後篇）

蘭の香や雜穀積たる船の底　几董（井華集）

蘭を愛す賓主の座未だ定まらず　同（同）

蘭の香に老も若きも寐覺哉　白雄（白雄句集）

蘭の香も閑を破るに似たりけり　青蘿（青蘿發句集）

栗に飽て蘭につく鼠捕へけり　召波（春泥發句集）

蘭の香や浮世に遠き磬も鳴る　月溪（月溪句集）

蘭白し蜘の振舞憎けれど　乙二（松窓乙二發句集）

蘭の香や異國のやうな三日の月　一茶（一茶句帖）

のられんにおく蘭の香のこもり哉　青々（妻木）

朝顔（あさがほ）（初）　牽牛花（けんぎうくわ）

古書校註

【山之井】朝顔は顔にたよりて、露のたまれるを、ゑくぼと云ひなし（一）、しぼめるを額の皺とも見なせり。数のやきの名（二）によりて、あざやかならぬ花のあたりとも、又齋院の名をもよせ、牽牛花と云ふにつきて、かの星（三）の少なき契をも思ひ、夕日影を待たぬさかりに、露の玉の緒のかゝれる程をはかなみ、程なき此の世の譬にもす。

【御傘】「槿」是に朝の字、昔は不レ嫌といへども、新式に不二庶幾一（四）のよしあれば、一句嫌ふべき也。（下略）

【俳諧多識篇】（上略）朝貌は異名牽牛花、古今物の名にけにごしと詠ず。今いふあさがほの事也。萬葉集にいふ所のあさがほは別物なり。（中略）萬葉集の歌に「朝がほは朝露おうて咲くといへど夕影にこそ咲きまさりけり」といふにて今の朝顔に非る事知るべし。又山上憶良が秋野の花を詠ぜし七種の花（五）の中にも朝かほあれど是も今の朝かほには非ず。されば槿・蕣の二字を歌俳共にあさがほと訓じ用ふれども、今の牽牛子の朝顔には非ず。本艸に朝開暮落花というて木槿の事也、今は通じてもくげ・むくげといふ。

註（一）例句に、「○露にたまれる露はゑくぼかな」。（二）柴の焼を女詞に[illegible]がほといふ。（三）牽牛星（四）こひねがはず。望まぬ意。（五）秋草の條參照　○なほ木槿の條參照すべし。

季題解説　朝に早く咲き、日にあたれば萎む、故に朝顔の名あり。旋花科の一年生蔓草にして纏繞莖を有し、栽培變種頗る多けれども、通常は其葉三裂にして互生し微毛あり。花の形、漏斗狀をなせる大形の合瓣花を葉の上方葉腋上に着生す。元來支那の原産なるが、此牽牛の白色の實、即ち白牽牛子を最初は藥用として舶載し來り傳はりしものにして、古くは「けにごし」と云へり。花優に美しきを以て其後栽培して觀賞植物となれり。此物秋の七草の一なる「あさがほ」には非らずと云ふ。

【解説】朝顔の花、即ち牽牛花は初秋に咲くが自然なれば、古来初秋の季物とせり。然るに栽培の法巧みになり、又其花の大輪、變種を競ふこと流行し、これらは從つて開花期早く、因つて此を改めて夏季へ編入したる歳時記もあり、又秋季に存置せるもあれば、特に「秋の朝顔」と呼べるものあるを見る。思ふに是れ本末を誤りたるものにして「朝顔」は秋季たること、其性の自然に任せて些かも違はず。故に「朝顔」は秋季にして、今日夏季に開花せしむるものにこそ「夏の朝顔」と呼ぶを至當なりとす。【傍題】朝顔の實(アサガホノミ)　春—朝顔蒔く　夏—朝顔市　冬—朝顔引く(アサガホヒク)

【例句】

朝顔

朝顔や蟲に喰るゝ花の運　來山（今宮草）
朝顔に置とは露のつよみ哉　同（續今宮草）
朝顔や雨天にしぼむ是非もなき　同（同）
毎日の花朝顔の懲りぬかな　同（同）
朝顔よ思はじ鶴と鴨の足　素堂（素堂家集）
有明も葬の威に氣をされぬ　同（同）
去年の蔓に葬かゝる垣根かな　同（同）
[illegible]
朝顔に我は飯食ふ男かな　芭蕉（虛栗）
僧朝顔幾死かへる法の松　同（甲子吟行）
朝顔は酒盛知らぬ盛りかな　同（曠野）
[illegible]
朝顔は下手の書くさへ哀れなり　同（いつを昔）
朝顔や晝は錠おろす門の垣　同（葉の雲）
[illegible]
朝顔や是も又我友ならず　同（けふの昔）
朝顔の花に鳴き行く蚊の弱り　同（芭蕉句選拾遺）
[illegible]
朝顔は仙洞様を命かな（イサヽコ）　其角（虛栗）
殊に晴て葬菖に潔し　同（[illegible]虛栗）
市中閑居
朝顔やよし見む人は竹格子　同（華摘）
朝顔にしばし胡蝶の光り哉　同（彼此集）
[illegible]
朝顔や扇の骨を垣根哉　同（[illegible]）
[illegible]
朝顔に花なき年の夕かな　同（末若葉）
朝顔に立かへれとや水の物　同（焦尾琴）
朝顔の日陰まだあり中老女　同（五元集）
[illegible]
朝顔や穗に出づるまで道あがる　同（五元集拾遺）

朝顔にきのふの瓜の二葉かな　同　（同）
朝顔やとれ際に咲く猪口の物　同　（同）
朝顔にいつ宿出でし御使　同　（五元集拾遺）
室江亭
朝寢にはよし朝顔の北座敷　支考　（梟日記）
曉三野ニヲ
朝顔や夕の人のなき便り　同　（そこの花）
し還亭
朝顔は子に渡してよ朝寢時　同　（東西夜話）
朝顔や世をあぢきなう花の姉　同　（ながら川）
朝顔は咲並べてぞ萎みける　北枝　（卯辰集）
朝顔や夢の浮橋かけ渡し　同　（[illegible]陳二百韵）
朝顔は二人詠めてあしき哉　杉風　（續虚栗）
朝顔や梢に垣の還あまり　同　（有磯海）
朝顔や其日〳〵の花の出來　同　（そこの花）
朝顔の蔓のまとはる心かな　同　（百曲）
齋堂に葬済けて哀れかな　同　（雪七草）
朝顔や蜘の内から障子明け　同　（杉風句集）
朝顔にほのかに殘る寐酒かな　同　（同）
朝顔や貫はずやらず垣の花　桃隣　（伊達衣）
朝顔や濡て果敢なき花の藍　同　（古太白堂句選）
朝顔や夜は碁の博奕宿　去來　（荷の香）
朝顔の花や惣寢に雨の後　浪化　（續有磯海）
葉並びの花のつよさぞ葬か　惟然　（とてしも）
看經の間を朝顔の盛り哉　許六　（[illegible]人形）
朝顔の花ほど口を欠伸かな　嵐雪　（[illegible]龍賦）
朝顔や朝な〳〵の月の減　野坡　（六行會）
朝顔や開き負じと鉢坊主　也有　（蘿葉集）
朝顔や野の錦には織入れず　同　（同）
朝顔やまだ辻番の灯の光　同　（同）
朝顔の花に夕や四ツの鐘　同　（同）
傘干せと朝顔たゝむ垣根哉　同　（同）
朝顔の世にさへ紺の淺黄のと　同　（同）
朝顔もこんと咲けり明の鐘　同　（同）
朝顔や八重にも咲かば最一時　同　（同）
朝顔や團扇は緣に宵の儘　同　（同）
朝顔の垣や浴衣の干忘れ　同　（同）
朝顔やまだ灯火の影も有り　千代尼　（千代尼句集）
朝顔や鳴所替るきり〴〵す　同　（同）

朝顔

朝顔や起したものは花も見ず　千代尼（千代尼句集）
朝顔は蜘の絲にも咲にけり　同（同）
朝顔の花や木陰の恐ろしき　同（同）
朝顔は其日に逢ふて仕舞けり　同（同）
朝顔や己が蔓かと蔦に咲く　同（同）
朝顔や誠は花の人嫌ひ　同（同）
朝顔や裾は日も待つ草の花　同（同）
朝顔や草臥直る夜は持たず　同（同）
朝顔や夏の夜ならば夢の内　同（同）
朝顔に釣瓶とられて貰ひ水　同（同）
朝顔や手拭のはしの藍をかこつ　蕪村（蕪村句集）
朝顔や一輪深き淵の色　同（同）
朝顔に坦根さへなき住居かな　太祇（太祇句選）
朝顔に夜も寐ぬ嘘や番太郎　同（同）
朝顔や小詰役者のひとり起　同（太祇句選後篇）
朝顔の花はぢけたり花一つ　曉臺（曉臺句集）
　秋明を悼む
露はらはら朝顔に翌の便りなし　同（同）
芭蕉風過て朝顔の盛り哉　同（同）
朝顔の花こそ見ゆれ奥山家　同（同）
朝顔は稻妻に見る蕾かな　同（同）
　傾城蘭梅てふをみな、筑紫琴の曲あやしきまでに妙なりけり
朝顔の蔓もすくふか琴の爪　同（同）
朝顔や手拭提げし花見達　闌更（半化坊發句集）
朝顔や淋しう寐れば起安く　同（同）
土に這ふ朝顔は猶哀なり　同（同）
朝顔や同じ心の友も來ず　同（同）
凋むまでは朝顔だにも見ざりけり　同（同）
朝はものゝ朝顔の花も新らしき　白雄（白雄句集）
朝顔に簀下の魚も見て過ぬ　同（同）
朝顔や垣にしづまる犬の聲　同（同）
朝顔に蟬の落ちし内儀かな　同（同）
朝顔や猶幻の蜉一重　蓼太（蓼太句集）
朝顔や秋は朝から哀れなり　同（同）
　悼
朝顔にかはる浮世や七々日　樗良（樗良發句集）
朝顔や僅かの内を日の當る　同（同）
葉の露に朝顔の花の映りけり　同（同）
朝顔や露もこぼさす咲ならぶ　同（同）

朝顔にあぶなき棒の稽古かな　同（同）
朝顔や清き限りを咲き出づる　青蘿（青蘿發句集）
朝顔や悋氣せぬ妻美しき　几董（井華集）
朝顔や稚き足に蚤の痕　同（同）
鉢植の蕣も見ゆれ檜垣舟　同（同）
　　朝いする人を驚かして
蟵はづせ蕣の花の赤む程に　同（同）
瘧落て朝顔清し蟵の外　同（同）
明暮と朝顔守る庵かな　召波（春泥發句集）
朝顔や盥の前に新たなり　同（同）
ひともとの蕣や日に出來不出來　同（同）
朝顔や日剃の髭も薄淺黃　同（同）
朝顔や今年も這入る壁の穴　移竹（乙御前）
朝顔や二人して解く蟵の紐　月溪（月溪句集）
朝顔のはや此秋を咲へらす　成美（成美家集）
精出して咲けよ朝顔人も露　同（同）
杓子とる妹が朝顔咲にけり　同（同）
朝顔を翌も／＼と思ふ世か　同（同）
朝顔のはや萎む見る今日の秋　同（同）
朝は蕣夜は稻妻の世となりぬ　同（同）
朝顔の咲く見て今日も過すなり　同（同）
朝顔に北窓せばき住居かな　乙二（松窓乙二發句集）
　　病少し快ければ函館より松前へ移る留別
朝顔に立出づる身は木槿かな　同（同）
朝顔や今朝は八月十五日　同（同）
減り行くや月と酢瓶と朝顔と　同（同）
蟵知らぬ蚊よ朝顔の花一つ　同（同）
朝顔や白き雀を今朝も見る　同（をのゝえ草稿）
朝顔の扨も明るき寒さかな　同（同）
蟵減しに蕣見ゆる旅寐哉　士朗（枇杷園句集）
幾程の世を蕣の松の枝　同（同）
朝咲かぬ朝顔はなし朝な／＼　同（同）
ひや／＼と蕣の咲く垣根かな　同（同）
　　信州若人亭
朝顔の花に澄けり諏訪の湖　巢兆（曾波可理）
君が扇の風朝顔に屆くかな　一茶（一茶句帖）
朝顔にとゞく旅店の灯影哉　同（同）
朝顔や女車の毛唐人　同（享和句帖）
朝顔におっつぶされし庇哉　同（旅日記）

朝顔

氣に入らぬ垣道分咲にけり　一茶（旅日記）
朝顔の一番顔に濡るゝ哉　同（同）
鐘の聲垣先へ實ゞなり　同（同）
朝顔や我怠りの目に見ゆる　同（同）
取込みの門も垣咲にけり　同（同）
朝顔に名利振りたる住居哉　同（同）
朝顔や飽かるゝ頃は晝も咲く　同（同）
擂鉢の音に朝顔咲にけり　同（七番日記）
垣に出し捩れたぞ今日も亦　同（同）
朝顔の花やさら〳〵さあらさら　同（一茶句帖）
朝顔の上からとるや經山寺　同（同）
朝顔を愛相に置くや店の先　同（一茶新集）
朝顔にまくしかけたる湯霧哉　同（同）
朝顔や横たふは誰が影法師　同（花實發句集）
朝顔や人の顔にはそつがある　同（一茶發句集）
朝顔や一霜添てばつと咲く　同（嘉永板一茶發句集）
朝顔の日覆とや見ん草の軒　梅室（梅室家集）
朝顔や花に構はず戰ぐ蔓　同（同）
朝顔の蔓とゞきけり籠枕　同（同）
朝顔や蔓を力に花の蔓　同（同）
朝顔や八朔からは歸り花　同（同）
日を見ぬ日咲く朝顔も一期かな　同（同）
朝顔や人丸の宮ほの〳〵と　同（同）
朝顔や花のあたりは夜の露　蒼虬（蒼虬翁發句集）
市中や初蕣の二つ三つ　同（同）
朝顔や地にしみ殘る宵の水　同（同）
朝顔をしるしに言ふや瀬田の家　同（同）
朝顔に磯の匂ひは隱れけり　同（同）
朝顔や是ほどの世を花の瑕　同（同）
朝顔や海の淺黄を垣一重　多代女（晴霞句集）
朝顔や十和田觀し眼に淺碧り　五空（五空句集）
朝顔やよべ焚きすてし花火屑　月斗（同人）
朝顔は妻戸の口に並べけり　なみ女（なみ女遺稿）
朝顔の伸びたる上の青み空　古泉（丁卯句鈔）
朝貝を瑠璃と定めて買ひにけり　帆影（戊辰句鈔）

朝顔の實（中）　種朝顔

季題解説　秋久しく、垣根に打ちすてたるものもあれど、朝顔の實を取り收

むることなど、おろそかならぬものあるべし。名草の實の一つなり。〔參照〕

〔例句〕朝顔(アサガホ)

朝顔の實　朝顔の實をみる垣のあたゝかき　泉里（穗　麥）

鷄頭花(けいとうくわ)（三秋）　雞頭(けいとう)　雞冠(けいくわん)　からあゐ

〔古書校註〕

【年浪草】三秋〔鷄頭花(ケイトウ)〕時珍が曰、雞冠は花狀を以て名に命ず。三月苗を生じ夏に入りて高き者五六尺、短き者纔に數寸。（中略）六七月梢の間に花を開く、黃・白・紅の三色あり。（中略）花最も久しきに耐ふ。霜の後始めて焦る。

〔季題解說〕園藝植物にして、莧科の一年生草本なり。莖の高さ二三尺、長楕圓、銳尖頭の葉を互生す。秋、鷄冠狀の花序をなして無數の細花を著け、花後、細小なる實を結ぶ。花は赤きを普通し、又黃なるもの、其他種々の種類と變種あり、其紅なるものにも亦色の濃淡あり「ちやぼ」「とさか」「やり」「みだれ」「さきわけ」等、皆花序の狀態を異にす、熱帶地方の物なれども、花は久しきに耐へ、霜の至る迄有り。原産地詳ならずと云ふ。

〔實作注意〕漢名を雞冠と云ふは、花序の形態によつて付けし名なり。和名を「からゐ」又「からあゐ」と云ひ、『萬葉集』卷三、卷七、卷十一に歌あり。「あゐ」は染草の主なるものなれば、青色に限らず、絹紙を染むべきものゝ名に假用ゐをれば、雞冠草は製して紅花の如く染料に供すべきものにあらざれども、摺りて帛に移すことを得べく、故に古へ「あゐ」の名を與へたるべしと云ひ、又莧の一種に赤莧と云ふもの、葉をあへて汁を取り、物を染め得るものあり。莧と雞頭は同類のものなれば、「からあゐ」は二者の通名なるべしと云ふ說あり。〔參照〕葉雞頭(ハケイトウ)

〔例句〕

鷄頭

鷄頭や雁の來る時猶赤し　芭蕉（初蟬）

鷄頭は蚕の焚きさす煙かな　嵐雪（玄峰集）

味噌で煮て喰ふとは知らじ鷄頭花　同（同）

笠着せて見ばや月夜の鷄頭花　支考（篇突）

元春亭

暖簾の奥見て行かむ鷄頭花　同（東西夜話）

鷄頭に牛盜人の晝寐かな　同（蓮二吟集）

鷄頭のゆるぐや雁の立つ畠　浪化（續有磯海）

白菊に高き鷄頭恐ろしや　杉風（芭蕉袖草紙）

鷄頭や松に並びの淸閑寺　其角（五元集）

鷄頭や造り花には見當らず　也有（蘿葉集）

赤からに白い噓あり鷄頭花　同（同）

雞頭

鷄頭や乾きの早き雨上り　也有（蘿葉集）
葉の咲ふ方を表か鷄頭花　同（同）
鷄頭や並べて物の干してあり　千代尼（千代尼句集）
鷄頭やまことの聲は根に遊び　同（同）
錦木は吹倒されて鷄頭花　蕪村（蕪村句集）
鷄頭の花の耻するいつ迄も　同（蕪村句集拾遺）
鷄頭の根に睦ましき箒かな　同（發句題苑集）
鷄頭やすかと佛に奉る　太祇（太祇句選）
鷄頭や果敢なき秋をあたま勝　同（同）
鷄頭や一つは育つこぼれ種　同（太祇句選後篇）
鷄頭は動きもやらず臼の音　闌更（半化坊發句集）
鷄頭や種のためとて打たゝき　同（同）
鷄頭に秋の哀れは無かりけり　同（同）
鷄頭の宿や窓から答へけり　召波（春泥發句集）
一本の鷄頭ぶつゝり折にけり　一茶（享和句帖）
鷄頭やまづ朝市の口ひらき　蒼虬（蒼虬翁發句集）
参宮しける時、松野とか言へる茶店に憩ひて
鷄頭や草鞋しめして一ト詠め　同（同）
鷄頭や遊行を拜む道の端　子規（子規句集）
百舌鳥の聲野に鷄頭の捨作り　別天樓（己巳句鈔）
蓮華寺の口を去るに
鷄頭をなごりに見ればもゆるなり　素史（穗麥）

葉雞頭（はげいとう）（三秋）　かまつか　もみぢ草（ぐさ）　かる草（くさ）　雁來紅（がんらいこう）　老少年（らうせうねん）

古書校註

【増山の井】八月〔かまつかの花〕仝、〔鴈來紅〕仝。一説かまつかの花と同云々。枕草紙にかまつかの花(一)、鴈の來ると書くといへり。

【俳諧通輪】八月〔鴈來紅（かまつか）〕一名老少年といふ。葉鷄頭也。花無く九月に至つてその葉鮮紅花の如し。又一種六月に葉紅なるものあり、十樣錦と名く。

【年浪草】三秋〔葉雞頭 雁來紅 老少年〕時珍が日、雁來紅は莖・葉・穗・子並に雞冠と同じ。其葉九月鮮紅なり。之を望むに花の如し、故に名く。吳人呼んで老少年となす。

註 (一) 枕草紙にいへるかまつかは今日の所謂雁來紅と果して同一物なるや遽に決し難き點もあれ、されど古來同一物と見なされたり。

季題解説　觀賞用の爲めに園圃に多く栽培する莧科の一年生草本なり。葉は長楕圓形、葉脚尖り、葉柄長し。莖の高さ二三尺、又五六尺にも達するものあり。葉は鷄頭に似たれども、紅色及び黃色のものあり。或はそれ等の斑紋を有するものあり。梢上葉と根葉と色を異にするものあり。葉の色

彩極めて鮮麗なれば、花は微小にして彩りを缺きたるものを葉腋に簇生す。莖葉の形態と色彩とに變種多し。雁の來る頃其葉深紅なれば雁來紅と稱す。東印度の原産にして、支那には宋の時代に傳はり、それより日本に渡りしものなりと云ふ。又清少納言の「枕草子」に「かまつかのはな」と云へるもの、果して葉鷄頭なりや否や、考ふべきものなりとの說あり。此事詳かには未だ知り難し　〔參照〕鷄頭花

例句　葉鷄頭

岡崎は祭も過ぬ葉鷄頭　史邦（芭蕉庵小文庫）
草紙干す屏より高し葉鷄頭　淡々（淡々芭集）
中山寺にて
釣鐘の寄進につくや葉鷄頭　子規（子規句集）
雁來紅我門にしてかへり見る　別天樓（丙寅句鈔）
葉鷄頭や虹見て立てる女の子　子節（壬申句鈔）

コスモス（晩）　秋櫻

季題解說　こすもすは近年の舶載種なれども、既に到る處に此草を栽ゑあり。又種子の散りこぼれたるか、時には野川の邊に、恰も野生なるかの如き看をなすものあり。此草、菊科の一年生草本なれども、生長の盛んにして、其花愛すべく、又花期の長きとにより、今は各地にその分布廣がりをれり。莖は五六尺又それ以上にもなれるものあり。葉は線狀に細裂して對生、頭狀花に白あり淡紅あり、紅紫色、又、絞り等あり、秋の末、諸草もみぢして枯れんとするも、此花園圃また田家の垣根に咲き盛り、風にゆられて楚々たる景觀、人の目をひくに足れり。

實作注意　此花を、はじめ「秋櫻」と呼べり。然るにこすもすの名廢れず、耳慣るゝにつれて、秋櫻など云ふよりは反つてこすもすの名、一般稱呼にもなれるものゝ如く、俳句に詠みて其名率直にてよろし。植物學者は一おほはるゝや」と呼べるも、其語簡潔ならず、又他と紛らはしからずやと思はる。

例句　コスモス

咲きそめしよりコスモスの大和ぶり　別天樓（己巳句鈔）
コスモスの剪りあらしたるあとの花　鼓竹（倦鳥）
コスモスのかろげに夕の日ざしかな　初女（同）
コスモスのありそめて二年川在所　青々（同）

鬱金の花（初）　きぞめぐさ　鬱金畑（地理）

古書校註　【箋譜輪】七月、本艸に出せる鬱金香、本邦藥園に有り。葉麥門冬に似て

紫碧の花形芙蓉の如し。又染物に用ふるウコンといふもの、葉芭蕉に似て小也。白花をなす。葉間にあるもの、花愛すべし。

季題解説 蘘荷科の多年生草本にして、原産は亜細亜暖地なり。葉は根上に叢生し、闊披針形にして長柄あり。初秋、中心葉間に花穂を抽き、小苞鱗次し、淺綠にて白く末端微紅を帶び、一苞内に三四の黄花を漸次に開く。花形漏斗狀にして大小四裂せり。一花毎に亦各一苞を具ふ。根は掌狀の塊根にして中部深橙黄色、老根を乾燥して染料とす。根に不快の臭氣あれども乾けば去る。藥用に供す。花期は十月に及ぶ。

例句

鬱金の花

芭蕉にも思はせぶりの鬱金哉　鬼貫（鬼貫句選）

女郎花その妹やうこん花　風路（新類題發句集）

參考 うこん（Curcuma longa L.）（めうが科）熱帶地方を通じて栽培せられ、臺灣に自生するを見る多年生草本なり、根葉は黄色を呈し、長柄の四五葉を出し長橢圓形を呈す、夏秋の候花穂を葉中に抽く、形キヤウワウに同じく、只頂上の苞尖紅暈較淡く、一苞内に白色の三四花を漸次に開き、毎花又各一小苞ありて外苞より薄小なり、小花の形蘘荷の狀等は、キヤウワウと毫も異なる所なし、根を藥用とす、カレー粉原料の一なり。

仙翁花（せんをうげ）（初）　紅梅草（こうばいさう）　剪秋羅（せんしうら）　剪秋紗（せんしうさ）

古書校註 【篗纑輪】 七月。剪紅羅・剪紗花・剪秋羅とも云ふ也。花の形刻み有りて小刀或は鋏を以て剪りなせるが如し、俗にせんと云ふ也。秋深紅の花を開く。種類數品あり、松本せん・小倉せん・ふしせん・ふしくろ。眼皮は一類異種なり。がんひふしくろは三・四月、五・六月も咲く。依つて剪春羅とも云ふ也。すべて此花和種也。昔嵯峨清涼寺の北に寺あり、仙翁寺と號す、其寺絶えて其寺跡に珍花生ず。時の人仙翁花と名く。即ち剪羅紅なり。又紅梅艸とも云ふ是也。

季題解説 石竹科の多年生草本にして、多くは園圃に培養せらる。莖の高さ普通は二三尺に達す。葉莖共に多くの毛茸あり。葉は卵狀披針形、先端尖り緣邊に稠密なる齒毛あり。秋梢上に數多の花梗を抽き、深紅色の花を開く。花瓣五葉にして各瓣片刻みあり、不同に分裂す。『昔、嵯峨清涼寺の北に寺あり、仙翁寺といふ。其寺絶て跡に珍花生ず。時人仙翁花と名づく則剪紅羅なり。又紅梅草といふ』と『栞草』に載せたり。又、白井光太郎氏の『植物渡來考』には『下學集』を引用して『原産地支那小野高泉日仙翁花又剪紅羅其始僧傳外種を中國より取得て山城仙翁寺に植ゆ是今の大覺寺の舊地なり』と記されたり。

例句

仙翁花

罌麥の花や老けん仙翁花　浮生（陸奥衛）

仙翁や白いはそれと見えてよし　百壽（新類題發句集）

白粉の花（中）　白粉草　おしろい　金化粧　銀化粧　野茉莉　紫茉莉　燕脂花

古書校註

【年浪草】八月○和漢三才圖會に曰、白粉草（正字未詳）、春苗を生じ冬枯る。高さ二三尺、叢生す。葉淡青にて柔く、白雞頭の葉に似てやゝ小く圓し。その花朝以後萎み夕陽に至りて開く、深紅色、五出單葉にして蕚の長さ一寸餘。亦紅花中紅蕋を出す、細くして絲の如し。蕚の本に子を結ぶ、灰黑色、皺胡椒の如くして中に白粉を滿す。之を採つて婦人の面に塗る、光澤鉛粉に優れり。○大和本草に曰、花丁子の形の如く少し長し、深紅色、又黄花あり。夕開き朝萎む。六七月より花を開き九月末に終る。盛り久し。未だ中華の書に見えず、外國の物ならん。

季題解說　園圃、垣根の下などに培養せらるゝ一年生草本にして、原産地は熱帶亞米利加なりと云ふ。莖の高さ二尺餘に達し、多く小枝を分ちて四方に繁る。節高く、紅を帶ぶ。葉は有柄、卵形にして對生し、基脚往々心臟形をなす。花は形朝顔に似て小く、緣邊僅に五裂し、紅白相半するもの、黄にして深紅のまじれるもの等あり、梢頭毎に聚繖花序に着生し、花心より長蘂を出す。此花夕に至りて開く。花謝して小圓實を結び、黑くして硬し。皺ある厚き殼皮に包まれて中に白き粉あり。故に白粉の花と云ふ。野茉莉・紫茉莉・燕脂花などの漢名あり。

例句

白粉の花

薄闇に花白粉や蜑か門　亘弘（丁卯句鈔）

芥子のあと白粉の花咲き初めぬ　なみえ（己巳句鈔）

白粉の花に游ぶや預り子　青々（妻木）

參考　おしろいばな Mirabilis Jalapa, L.（おしろいばな科）北米原産の多年生草本にして通常庭園に培養せらると雖も亦往々野生を見る、莖の高さ三四尺餘に達し、多く枝を分ちて繁茂す、葉は有柄卵形にして、往々心臟形の基脚を有し對生す、夏秋の候梢に數花を簇生す。黄・赤・白等あり、花瓣狀合片蕚を有し、高盆形にして僅に五裂す、下に綠色の蕚狀苞あり、其果實は圓形をな

せる萼筒の下部に包まれ表面皺縮し熟して黑し、胚乳は白粉質をなす。

旋覆花（なつぐるま）（初秋）　小車（をぐるま）　のぐるま　金沸草（きんぷつさう）

古書校註

【年浪草】七月〇蘇頌が曰、二月以後苗を生じ多く水の傍に近し。長さ一二尺、以來葉柳の如く莖細し。六月開花す、菊花の如し、深黃色七八月に及ぶ。○和漢三才圖會に曰、金佛草・夏菊・金錢花・滴々金・盜庚（共に同じ）。俗に云ふ乎久留末。その花單葉重葉あり、重葉なるを水慈菫といふ。

季題解說　菊科の多年生草本にして原野又は水田の邊に自生し、莖の高さ一二尺、廣披針形、無柄の葉を互生す。葉に微毛あり。黃菊に似たる頭狀花は晩夏より開花して仲秋に及ぶ。花瓣甚細く、花の大さ錢の如し。

實作注意　旋覆花を夏季とせる書もありて、晩夏既に其花を見ることゝあり。されど花候は八月頃盛りにて、古來これを初秋の季とせり。それに從ふを妥當なりと思ふ。

例句

小車

小車や何菊と名の付くべきを　越人（彼是集）

小車や俤つけて菊の秋　支考（越の名殘）

花紫（はなむらさき）（中秋）

古書校註

【御傘】紫の花。秋也、若葉は春也。花となければども色深きなど云ふ句體も花の事ならば秋也。只紫の草は雜也。草にあらざる繪の具の紫・紫の袖・紫衣などは色深きとしても雜也。

【年浪草】八月〇花彙に曰、紫果、大和地方多く藝う。春種を下す、長じて苗の高さ一尺、以來葉は謝落金の葉に類して小なり。又俗呼の琉璃草に似たり。差互して生ず。三月花を開く、梢の葉の間にあり、形狀圓く瓣五出にして内に蘂鬚なし。又琉璃草の花に異なることなし。唯其色白し。又粉紅及び黃色の者あり、下に長蔓ありて之を承く。實を結ぶ、其形圓く尖れり。穆子に類して大なり、秋に至りて熟す、黃白色なり。按に、花紫、御傘等の俳書に秋とし、若紫春なり。然るに本草・花彙等の說、三月開花といへり。春に若紫あるが故に秋とするにや。紫草を植ゑて試みる人ありて云ふ、この草秋植うるものは春花を開き、春植うるものは秋花さくといへり。御傘に紫の花秋なりといふも亦據なきにあらず。（一）

註（一）「わくかせわ」にもこの事につきて論じ「然れども俳諧にはその詮議はいらず、花紫は秋、若紫は春、これ昔より用ひ來る所にして、春・秋の景物也」といへり。

季題解說　はなむらさきは、古代染料なる紫草の花咲けるを云ふ。花期は六七月の頃なるに、古人、春種るもの秋に花咲くとて、仲秋の季とはなせる

ものなり。紫草、苗の高さ二尺ばかり、葉は一二寸の楕圓狀披針形にして幅五六分、短き葉柄ありて互生す。多く毛茸ありて粗糙なり。花冠は漏斗狀、五裂にして白色、喉に密鱗あり。實は四個の小堅果より成り、熟して光あり。此草の根皮、深紫色なるを以て「紫根」と稱し、採りて古來染料とす。殊に徳川時代には紫色染料として重用せられ、江戸附近にて盛んに栽培し、使用したるを以て「江戸紫」の名稱今も猶殘れり。然れども化學染料の製法發達したる今日にては、昔日の如く用ゐられず、特種の物を染むるに用ゐ、染料としては殆ど標本的に使用せらるゝに過ぎず。『萬葉集』巻三、笠女郎贈大伴家持歌に

託馬野爾生流紫衣染未服而色爾出來

又巻四にも麻田連陽春の歌あり。

辛人之衣染云紫之情爾染而所念鴨

これらの歌あるを見ても、古代より紫草の染料として用ゐられし事知らるるなり。

【實作注意】仲春の季物に「若紫」あり。二三月花を開くとあれど疑はし。春の若紫は紫草の嫩苗を云ふものなるべし。尙普通「紫草」の花期は夏なれども、古來「花紫」とて秋に入れたるもの多し、依つて之に隨ふ。〔參照〕

春　若紫　夏　紫草　冬　紫根掘る

鳳仙花（初）　つまくれなゐ　つまべに　ほねぬき　染指草

【古書校註】

【滑稽雑談】八月○大和本草云、鳳仙花也、一名金鳳花。女兒この花と酢漿草の葉を交ぜ合せて爪を染む。紅色となる。六・七月に花開く也。△又魚刺の喉に滯るを治する也、俗に骨ぬきと云也。

【篗纑輪】八月（一）和名つま紅。六・七月より秋の末に至る迄花あり、或は紅、又紅白相交るもの、淡紫のもの、碧なるもの、黄なるものあり。是又小毒ありと云々。この草にも金鳳花の名あり、眞の金鳳花の鬼の田芥子也。三月の所に記す、混ずべからず。（二）

註（一）增山の井・ただまき・綱目等皆八月、年浪草・栞草等には七月とす。（二）これは毛茛なり。

【季題解説】園藝品として廣く栽培せらるゝ一年生の草にして、春彼岸に播植すれば秋に入つて開花す。花の形飛鳥に似たるを以て此名あり。莖の高さ二三尺、多肉にして圓く、中空にして脆し。葉は披針形、桃、柳の葉に似て鋸齒あり。葉腋に花梗を出す。花の色、紅・白・絞り・淡紫等多し。晩秋に至る迄開謝相續いで實を結ぶ。この實は先端尖り、熟すれば果皮裂開して種子を彈出す。原產は東印度なるも、古くより我國に渡來せり。此花の紅なるを取りて女兒の爪を染むるに用ゐたれば爪紅の名あるなり。又「ほねぬき」とも云ふは、咽に魚の骨の立ちたる時、實を碎きて水に和し、竹

筒にて齒に觸れしめずして飮めば、骨軟くなりて取ることを得と云ふ。

例句

鳳仙花

縫物の日の休まりや鳳仙花　甘雨妻（其便）
緣に出て子に乳を含む鳳仙花　桃先（菜の草子）
朝露に寺靜なり鳳仙花　振鷺（田舍の日）
紅つけて今を若さの鳳仙花　南薬（庚午句鈔）
鳳仙花に汝が爪染めよ女の子　青々（倦鳥）

薄荷の花（初）　薄荷　めぐさ　おほあららぎ　薄荷引く（人事）

古書校註

【年浪草】「敗荷」八月。和漢三才圖會に曰、薄荷・菝蕳・蕃荷菜等の諸名あり。本綱に曰、二月宿根より苗を生ず。清明の前これを分つ。方莖赤色にて其葉對生す。初め形長くして頭圓し、長ずるに及んで尖る。其莖葉花に似て尖り長し。冬を經て根枯れず。按ずるに多く山城より出づ。又一種葉やゝ厚く香甚しき者あり。今人薄荷の葉を刻み、煙草に代へて烟を吃す、咽喉口齒の藥となる。

季題解說

濕地を好みて自生する唇形科の宿根草なるも、藥草として栽培せられ、其用途廣し。春舊根より苗を生ず。嫩葉の裏は紫色を帶ぶ。莖は方にして高さ二尺許に達し、多く小枝を分ちて細點及外反せる軟細毛を生ず。葉は對生にして廣楕圓形、又は卵形にして先端尖り、周邊に淺き鋸齒あり。葉に香氣多し。秋に至り葉腋に白質の淡紫色なる唇形細花を簇生す。果實は小堅果にして頂端鈍圓なり。葉より薄荷腦及薄荷油を製す。

實作注意

薄荷は支那歐米にも産すれども、我國産のもの品質に特色ありて、商品として世界市場に獨歩の地位を占む。主産地は北海道及び中國三備地方、次で九州四國其他なり。薄荷は我國重要輸出商品の一にして年額約百萬斤金額六七百萬圓を下らず。輸出先は米・英・獨・佛・印度等にて、其用途は清涼劑、興奮劑として、飮食物醫藥等に配合せらる。此事直接作句上に必要無きに似たれども、我等現代に生活するものとして、知り置きて可なる事柄なれば煩を厭はず述る所ありたり。

酸漿（三秋）　鬼燈　かがち　あかかがち　ぬかづき

古書校註

【栞草】〔鬼灯〕三秋。「和漢三才圖會」酸漿、五月小花を開く。純白、蕚も亦白色にして蔕は青し。宿根より自ら出づ。小兒中の白子を鑿ち去り空殼として、これを舌の上に含みて壓へ吹くときは音あり。云々○今の世に女の童のほゝづき吹く事は、榮花物語　初花の卷、寬弘五年の所に、御色白くうるはしうほゝづきなどを吹きふくらめて云々。源氏物語　野分の卷、ほゝづきとかいふめるやうにふくらかにて、云々」とみえて、いとふるき事なる

べしと醍齊いへり。(一)

註 (一)山東京傳など「今の世に云々」以下はその著「用捨箱」によれるなり。

季題解説 ほゝづきの多く人家に培養せらるゝは、其實の苞と共に赤くなりて美しく、又七夕の供物にし、又兒女の吹きならす玩び物とするを以てなり　酸漿の外苞に苞まれたる赤色球狀の漿果を採り、針して小き穴を穿ち、種子を排出して空ろとなし、これを口中に入れて舌の上にふくみ、壓へ吹くときは音をなす　女兒の好んで爲すところの玩びなり。此草苦味あり根を解熱劑とす。「本草綱目」に酸漿を食して小兒に益ありと云ひ、又酸漿實丸は婦人の胎熱難產を治すとあれば、婦人小兒の酸漿を口にふくむも故ある事なり。ほゝづきを吹き鳴らす事「榮花物語」にあり、一條院の后、上東門院の事を云へる條に「たゞいまの御年はたちばかりにこそおはしませど、いとわかうぞおはしますめり。」「御色しろくうるはしう、ほゝづきなどを、ふきふくらめて、するたらんやうにぞ見えさせ給ふ」とあり。酸漿を吹き鳴らすは、古くよりする事なり。

實作注意 酸漿の實の熟して色づく時を以て古來秋季と定め、「青ほゝづき」と云ひては夏の季物とせり。酸漿の花を季題の書に入れたるは近頃の事なり。　參照 夏―青酸漿

例句

鬼　燈

長崎にて

珠は鬼灯砂糖は土の如くなり　素　童　(素堂家集)

鬼灯は實も葉も殼も紅葉かな　芭　蕉　(芭蕉庵小文庫)

　早苗が娘つーなしたるに遣はす

鬼灯のさすればつぶす歎かな　同　(杜撰集)

　十如是の心を思ひてよせて

鬼灯の殼を見つゝや蟬の殼　其　角　(いつを昔)

鬼灯や覗いて見れば門徒寺　也　有　(蘿葉集)

鬼灯や清原の女が生寫し　蕪　村　(蕪村句集)

鬼灯や摑み出したる袖の土產　太　祇　(太祇句選)

　阿房宮賦を讀む

鬼灯や三千人の秋の聲　蓼　太　(蓼太句集)

鬼灯や老ても妓女の愚かしき　召　波　(春泥發句集)

鬼灯や旅せぬ人は夢に見す　乙　二　(松窓乙二發句集)

弟子尼の鬼灯植ゑて置にけり　一　茶　(一茶句帖)

鬼灯や葎の中にそめあへず　なみ女　(なみ女遺稿)

鬼灯の赤に青きがのこりある　青　々　(倦鳥)

狗酸漿(いぬほゝづき)　(中)

こなすび　山酸漿(やまほゝづき)　黑酸漿(くろほゝづき)　潮酸漿(うしほゝづき)　龍葵(りうき)

季題解説 山野に自生する茄科の草にて、莖の高さ二三尺に達し、葉は楕圓形、葉柄ありて互生す。花は節間に細莖を抽くこと一寸許にて、夏日、白

色の合瓣花を穂狀に簇生し、花後南天の實に似たる球形の漿果を結び、熟すれば黑し。此果實は有毒なれども、催眠・鎮痛等の藥劑となる、異名多し。

秋海棠（しうかいだう）（初）

【由來傳説】

【滑稽雜談】　七月○大和本草に云、寛永年中中華より初めて長崎に來る。

【年浪草】　七月○名花譜に曰、秋海棠、一名斷腸花、嬌姿柔軟眞に美人粧を捲るが如し。性陰を好む、日を見れば卽ち瘁く。九月枝上の黑子を收めて地上に撒けば、明春枝を發す。老根冬を過ぐる者は花發きて更に茂る。

【季題解説】　庭園に培栽する多年生の草本にして陰濕の地に適す。莖は些か屈曲して大なるは高さ二尺ばかりに達し、節をなす所紅色を帶ぶ。葉は斜なる心臟形をなして鋸齒あり。倒卵形の苞を有す。初秋より枝梢上に淡紅色の美花を開き、姿態優艷愛すべし。雌雄異花にして同株に生ず。「大和本草」に「寛永年中、中華より初めて長崎に來る、その以前は本邦になし、色海棠に似たり、故に名づく」と云ふ。近來舶載の西洋種べコニヤの類は、秋海棠と同種類の物なれども、風姿は秋海棠に及ばず。

【例句】

秋海棠

秋海棠西瓜の色に咲にけり　　芭蕉（正風彥根躰）
秋海や濕氣の深き窓の下　　北枝（西の雲）
如意輪には秋海棠を奉れ　　越人（花此集）
手拭に紅の付きてや秋海棠　　支考（東西夜話）
化粧の間秋海棠の風寒し　　子規（子規句集）
疎かに秋海棠の盛り哉　　青々（妻木）

【參考】　しうかいだう Begonia Evansiana, Ardr.（しうかいだう科）

支那の原産にして庭園の濕地に栽ゑらるゝ多年生草本にして、地下莖は珠をなす、多汁なる莖は高さ二尺餘に達し綠色にして節は紅色なり、歪卵圓形の葉を互生し鋸齒あり、九月頃枝上に紅色の花を開く、雌雄同株にして雄花は束生し、雌花は三箇の翼を具する下位子房を有す、葉腋に肉芽を生じ繁殖す。

百菊（晩）

季題解説 百菊とは、数ある菊の中より、花も葉も、殊に優れてよろしく、名あるものを數へて云ふ。百は數の多きことにて、百藥・百味・百官・百草など、物全くてめでたき意あるなり。菊の條に誹せし金目貫・醉楊妃などは、昔百菊の種の中のものなりしなり。参照 菊

例句

百菊　百菊に灯を入れてよりの夜ふかき　鼓竹（倦鳥）

菊（晩）

隱君子　いなで草　花の弟　花の妹　星見草　千代見草　契草　齡草　弟草　少女草　翁草　かはらよもぎ　かはらおはぎ　かたみ草　草大般若　殘り草　草の主　山路草　鞠花　金草　秋しくの花　秋の花　女花　派和の色　百夜草　初菊　白菊　黄菊　一重菊　八重菊　大菊　中菊　小菊　狂ひ菊　料理菊　金目貫　猩々菊　蘇我菊　醉楊妃　菊紅葉　袋菊　園の菊　籬の菊　作り菊　菊の淵　菊時（候時）　菊の露（天文）　菊花壇（理増）　菊畑（理増）　菊作り（人事）　菊の宿（人事）　菊の主（人事）　菊の友（人事）　菊見（人事）　菊の宴（人事）　菊膾（人事）

古書校註

【御傘】 連に一あれば、誹には二有るべし。夏菊も此の內也。（中略）菊のきせ綿、秋なり。

【年浪草】 九月〔〕月令に曰、九月菊黄花あり、花事こゝに至りて窮まり盡く。故に之を鞠といふ。〔〕和漢三才圖會に曰、本綱に菊凡そ百種、宿根自ら生ず。其莖・葉・花の品々同じからず、千葉・單葉・有心・無心・黄・白・紫・間色・淺深・大小の別あり。其莖株蔓紫・赤・青・綠の殘あり。其葉大小・厚薄・尖禿の異あり。又夏菊・秋菊・冬菊の分あり。

註 菊には異名・種類頗る多し　滑稽雜談には所謂百菊の種名を列擧し、年浪草には百夜草・千代見草・齡（ヨハヒ）草・金（コガネ）草・星見草・霜見草・山路草・弟草・をとめ草・花の弟・菊花（マリハナ）・翁草・女花・隱君子・契草・かた見草・初見草（冬菊）・秋無草（冬菊）秋の花・いなて草・秋しくの花等の異名をあげて說き、又派和菊・派和色等に關する記事等あり　事繁ければ今すべて略す　又菊合（鬪菊）・菊の日・菊酒・菊瓶等も九月の季題として古俳書に見ゆ。

季題解説 花壇に培養して賞玩し、今日秋季に於ける觀賞植物の第一位を占む　菊の種類は、大菊にして、渡來の物なれば古來菊を字音にて呼べるものなり。大菊の栽培變種は今日數千を算すと云ふ。而して此大菊は、支那より渡りたるものにして奈良朝の末頃に渡來せしものと云へり、されど其始め菊の文獻先づ傳はり、種は後に來りしものなれば、傳來の年代確かには知り難く、されば寛平の時、菊合せの行はれし時の菊も、或は野生の菊

なりしならん歟と云ふ說あり。我國に往古より野生あるものは、「よめな」「あぶらぎく」「りうなぶぎく」「のぢぎく」にして、菊の古名を「かはらよもぎ」と云へるも、野生のものに名づけたる名なること明かなり。

大菊の栽培一般に盛んになりしは近世の事にて、元和・寛永の頃より、正德・享保年間に至りて未曾有の流行をなし、京及江戸にては菊合の會あり。天明年間には家齊將軍、父君の意を嗣ぎ、菊花の栽培を奬勵したるを以て、種種の變種も生じたりと云ふ。「栞草」に註するところの菊の種類は次の如し。

▽金目貫　百菊の內なり、黃にして萬重小りん。

▽しら菊　〔和訓栞〕菊は大要黃を貴べり、詩人の賞する所、藥用に入もまた同じ、さるに歌に多くかくよみしは新羅菊の義なりといへり、花史左編に菊品新羅、一名倭菊千葉純白とみえたり。

▽猩々菊　黃猩々は萬重大りん、亂猩々は本紅にて瓣尖れり、大りん。小猩々は猩々の如くにして小りん。

▽醉楊妃　百菊の內なり、大白入薄紅ゐにて萬重大々輪。

▽蘇我菊　黃菊をいふといへり、蘇我といふ名の說あれどたしかならず。

又、菊に異名多し、その多くは歌に云へる詞なり。

菊の異名

隱君子・いなて草・花の弟・星見草・千代見草・契草・弟草・少女草・翁草・かはらよもぎ・かたみ草・齡草・大般若・殘り草・草の上・山路草・鞠花・金草・秋しくの花・女花・承和の色・百夜草

右は「栞草」に擧ぐるところの名なり、次に著名なる栽培變種の主たるものを擧ぐれば左の如し。

一文字・黃金壽（厚物走り付）・秋月（太管）・長壽樂（細管）・紫宸殿・龍冠・錦鱗の光・華嚴の瀧（厚物走り付）・龍王殿（太管）・雪嵐・千代の光（厚物）・五城の譽（太管）・飛噴泉（細管）・大正の譽（太管）

猶園藝家の苦心栽培工夫により、年々に新種を增加しつゝあり。

菊の淵は菊の叢れるを淵に見立てた言葉、菊の露は又菊の雫ともいひ菊に宿れる露、菊の宿は菊見の家、菊の主は菊ある家の主、菊の友は菊見の仲間、菊の宴は菊見の宴をいふ。又菊膾は菊の花瓣を取りて三はい酢にしたる精進料理なり。〔季題〕百菊　殘菊　油菊　貴船菊　磯菊　濱菊　野菊　菊芋　人事　菊花の酒　菊の著綿　菊合　菊人形　觀菊御宴　春　菊苗　菊根分　菊若葉　夏　夏菊

例句

菊

添竹も無いに健氣に此菊の　來山（續今宮草）

香箸に菊の蟲とる緣でこそ　同（同）

古澤昔留を悼む、これは[illegible]入たる花好なりし

菊栽て身の手向とはよもやそも　同（同）

宿入のよしや葭垣今朝の菊　沾徳　（沾德句集）

今朝見れど引合菊や蓼の節　同　（同）

對の屋に旅人は寐こ菊と文　同　（同）

花見よと下葉悲しや菊の樣　同　（同）

久方や朝の夜から空の菊　鬼貫　（鬼貫句選）

千代ませと菊も舞ひたる姿哉　同　（七車）

金毛日待に菊を立添て、發句せよと望みし時

行馬の跡に花なし菊の空　同　（同）

幾露と朝待菊の笑顏山　同　（同）

[illegible]

寄初めて菊を幾重も重ねふぞ　同　（同）

[illegible]

さもこそも香さへ菊さへいつもさへ　同　（同）

多賀谷氏初めの九月、江府を出て伊勢へ代參せし物語を祝きて

聞に出て又もや菊の舞の袖　同　（同）

九月朔日、人の妻なとめたるに

菊に菊垣なき中のむすびかな　同　（同）

酒折の新墾の菊と歌はどや　素堂　（素堂家集）

離れじと昨日の菊を枕かな　同　（同）

盃や山路の菊と是を干す　芭蕉　（坂東太郎）

瘦ながらわりなき菊の苔かな　同　（續虛栗）

草庵ノ雨

起上る菊ほのかなり水の跡　同　（同）

山中や菊は手折らぬ湯の匂ひ　同　（奧の細道）

菊の花咲や石屋の石の間　同　（藤の實）

琴箱や古物店の背戸の菊　同　（住吉物語）

菊の香や奈良には古き佛達　同　（笈日記）

菊に出て奈良と難波は宵月夜　同　（同）

稻扱きの姥も目出度し菊の花　同　（同）

木因亭

隱れ家や月と菊とに田三反　同　（同）

早く咲け九日も近し菊の花　同　（同）

見處のあれや野分の後の菊　同　（芭蕉庵小文庫）

菊の後大根の外更になし　同　（陸奧衛）

素堂菊園之遊

菊の香や庭に切れたる履の底　同　（續猿蓑）

菊の香や奈良は幾代の男ぶり　同　（泊船集）

堅田祥瑞寺にて

影待や菊の香のする豆腐串　芭蕉　（杉丸太）

菊

朝茶飲む僧靜なり菊の花　芭蕉（笈日記）

菊賣や菊に詩人の質を賣る　其角（虛栗）

雨重し地に這ふ菊を先づ折らん　同（續虛栗）

いかで我七百の師走菊に經ん　同（同）

荷兮が室に旅寢する夜、草臥なほせとて、燭つけたる土器出されければ

土器の手際見せばや菊の花　同（曠野）

菊の香や瓶より餘る水に迄　同（其袋）

菊を切る跡疎らにもなかりけり　同（孫葉）

[illegible]

太々や小判並べて菊の花　同（句兄弟）

畫菊の贊

菊白く苔は後に書れたり　同（其便）

旅行

駕に濡れて山路の菊を三島哉　同（同）

千々の菊歌人の名字しのばしゝ　同（誹諧曾我）

翁さび菊のゝるみに任せたり　同（三河小町）

大母衣の後ろを押すや瓶の菊　同（錢龍賦）

いきぬけの庭や鎚摺菊の花　同（五元集）

笠着たる西行の圖に

菊を着て草鞋さながら芳しや　同（同）

未曉吟

鐘つきよ階子に立て見る菊は　同（同）

内藤風虎公十三回忌

手入かなよしある賤が昔菊　同（五元集拾遺）

菊の香や髩よごれぬ熊さし　同（同）

桑花餞別

友成は菊の使に播磨まで　同（同）

菊咲けり蝶來て遊べ繪の具皿　嵐雪（其袋）

書を抽る芭蕉にねぶれ菊の兒　同（同）

菊買は又碁に負けし人やらん　同（同）

鶴の聲菊七尺の詠めかな　同（同）

蒼浪に望たえけり菊の岸　同（有磯海）

斯にて己と覺ぬ菊の書　同（一の木戸）

蜂はさし蝶は咕るや菊の花　同（けふの昔）

志賀越とありし被や菊の花　同（杜撰集）

菊の香に流石山路の雪踏哉　同（桑岡集）

菊添ふや又重箱に鮭の魚　同（のぼり鶴）

一くねりくねるにてこそ菊の水　同（風の末）

菊の香に鴉も硯の水添ん　同　（俳諧職人盡後集）
綸の菊に今朝も催たる胡蝶かな　同　（雲中庵風字文集）

筑前守をにて

菊の香にもまれて寐ばや濱庇　去來　（そこの花）
菊咲て屋根のかざりや山畠　同　（去來抄）
秋は先づ目に立つ菊の蕾かな　同　（旅寐論）
山科や五荷三束に菊の花　許六　（篇突）
大名の隱者ありけり菊の花　同　（柿表子）

五老井菴偶

菊の香や食にも茶にも井戸一つ　同　（小柑子）
菊の花黃な粉の色で哀なり　同　（草苅笛）
欄干にのぼるや菊の影法師　同　（風俗文選）
白ユ湯を飲む人なつかしや菊の花　同　（正風彥根躰）
浮世には下戸の禁酒や菊の花　同　（同　）
古き名の菊や堅田の地侍　同　（風俗文選犬註解）
いつ迄か古米の飯に菊の花　同　（同　）
祝ひ日の武士の夫婦や菊の花　同　（同　）
昔めく奈良の住居や菊の花　同　（同　）
古小判出づる世もあり菊の花　同　（同　）
花色のきはつく袖や今朝の菊　同　（同　）
菊の香や嫁入夜着の置古し　同　（同　）

素牛が宿に宿して

菊の香や御器も其儘宵の鍋　支考　（藤の實）
霜置かぬ三笠の陰や神の菊　同　（笈日記）
煮木綿の雫淋しや菊の花　同　（有磯海）
我形は山路の菊の寒さかな　同　（篇突）
生て世に菜汁菊の香日に月夜　同　（同　）
唐コ土シの菊の花咲く五里の濱　同　（同　）

[illegible]

寶物の中に菊見るあるじ哉　同　（東西夜話）
息災た便りを菊の山路かな　同　（同　）
南向きて雁と語らむ濱の菊　同　（同　）
菊の香を扇に汲むも山路かな　同　（霜の光）
樽つけば菊折添へむ馬の上　同　（鳳の巣）

[illegible]白亭

忘るゝな鼓と父と菊の花　同　（同　）
菊萩の黑野と聞けば旅寢哉　同　（同　）

是[illegible]亭

菊咲て窓に山見る枕かな　同　（同　）

菊

新宅

其中に菊は忘れず鐵序　支考（國の華）

悲しかる秋を目出度ふ菊の花　同（桃盗人）

庭掃て鶴偽塞し菊の花　同（白扇集）

菊は星千體佛の光かな　同（越の名殘）

道祖神

菊に醉うて扨息災な斯哉　同（同）

菊の香に山路は嬉し病上り　同（同）

菊の陰に寐れば我髭面白や　同（同）

露の恩忘れて赤し菊の花　同（菊十歌仙）

遊ぶには樂しき秋ぞ菊と月　同（歌まくら）

月はまだ蕾ながらや三日の菊　同（三物拾遺）

親役で今日は呂めくぞ菊の杖　同（蓮二吟集）

山中入湯の頃、宿のあるじ桃妖子に乞て、翁の菊は手折らじの[illegible]を拜す

菊の香に泣くや山家の古上戸　北枝（有磯海）

なつかしや菊は手折らじ湯の匂ひ　同（草庵集）

朝霜や老てかたかる菊の花　同（同）

一手ある二上山や菊の花　同（射水川）

大根もよろしさうなり菊の花　同（柿表紙）

草履賣る隙に見事や菊の花　同（草苅笛）

遊ばする牛さへ菊の匂ひかな　同（しるしの竿）

大瓶に菊の長者と成りにけり　同（菊の塵）

菊の花咲や鮑によりかつほ　同（桃盗人）

賑かで又靜にて菊畠　杉風（木曾の谷）

こぼれかゝる空には菊の照白し　同（杉風句集）

間引菜の隣は菊の匂ひ哉　浪化（白扇集）

はれ〴〵と鷄うたひけり菊の中　同（浪化上人發句集）

菊開け八月の月の片なりに　同（同）

覗きあふ菊の蕾の底の色　同（同）

風爐釜の肩まで菊の雫かな　同（同）

菊の香に風爐すさまじき數寄屋哉　同（同）

菊の氣味深き境や藪の中　桃隣（[illegible]）

菊にかも日の短さに月夜なる　野坡（木曾の谷）

事かなと枝に傾ぶく菊の輪(リン)　同（杉丸太）

備中國に遊びける頃、田守と噺して

年古や菊の花結ふ藁の丈　同（野坡吟艸）

同じ香に菊は匂ひて色變り　卯七（砂川）

大輪やいごかせもせず菊の枝　卓袋（けふの昔）

綿の吹く日和に菊の盛りかな　素覽（記念題）
塗物にうつろふ影や菊の花　木導（韻塞）
咲分けの菊には惜しき白露ぞ　越人（春の日）
田舍間の薄緣寒し菊の宿　尙白（猿蓑）
てらてらと菊の光や濱庇　荷兮（曠野後集）
椀家具の足らぬ住居や菊の花　李由（有磯海）
菊の香や何かにうつる小盃　桃妖（續有磯海）
何魚のかざしに置かん菊の枝　曾良（續猿蓑）
　　ひろ女へ返し
客人と共にあちこち菊なやみ　田上尼（後れ馳）
北風にねぢ合ふ菊の莟かな　智月尼（砂つばめ）
栗栖野に垣も誇らず菊の花　也有（蘿葉集）
世は足袋の初霜白し菊の朝　同（同）
世に出よと蝶や使に菊の花　同（同）
鬮の香に遊ぶ日はなし菊の花　千代尼（千代尼句集）
菊咲て餘の香は草に戻りけり　同（同）
菊咲て今日迄の世話忘れけり　同（同）
朝々の露にもはげず菊の花　同（同）
子供手に叶ふ盛りや菊の花　同（同）
村百戶菊なき門も見えぬ哉　蕪村（蕪村句集）
いでさらば投壺參らせん菊の花　同（同）
長櫃にうつうつたる菊の香かな　同（蕪村遺稿）
西の京に宿もとめけり菊の時　同（新五子稿）
二本づゝ菊參らせん佛達　同（同）
菊の香や花屋が灯むせぶ程　太祇（太祇句選）
菊の香や山路の旅籠奇麗也　同（同）
菊の香や一つ葉をかく手先にも　同（同）
山風や板戶倒れて菊の上　曉臺（曉臺句集）
瘦菊やたゞ一もとの勝り顏　同（同）
亂れ箱菊折入れて參りたり　同（同）
華の色香我思ふ菊はたゞ一種　同（同）
香に觸れよ菊のあたりの忍の子草　同（同）
燭とりどり夜坐亂れけり菊十種　同（同）
千世を經し古根もあらん谷の菊　闌更（半化坊發句集）
作り倦みて今年は菊の山路哉　同（同）
貪らぬ花の價や市の菊　同（同）
一尺の菊の花見る浮世かな　同（同）
酒瓶に興じ入れけり菊の花　同（同）

菊

流るゝも酒の泉か菊の奥　闌更（半化坊發句集）

病中
菊や吹く我酒斷ちて五十日　白雄（白雄句集）

露の音菊の障子に此月夜　同（同）

本堂にて
僧が供地すりに菊を提し　同（同）

客に對す
菊提て君老を問ふ衾なり　同（同）

菊吹て花とも言はぬあるじかな　同（同）

菊の香に背むく心も出づるなり　同（同）

酒造る隣に菊の日和かな　同（同）

あの露に穿てる石か岨の菊　蓼太（蓼太句集）

荒々て露と定まるや菊の花　同（同）

蝶ひとつ菊に喰入る日和かな　同（同）

魚の名も菊色々の雫かな　同（同）

木曾路
家毎に祖父ある菊の山路かな　同（同）

露の菊さはらば花も消えぬべし　樗良（樗良發句集）

花と花さはりて菊のこぼれ哉　同（同）

夕風や盛りの菊に吹渡る　同（同）

物入や屋形作りて菊の花　同（同）

青竹にかゞやく菊の盛りかな　同（同）

菊の花心惜さに手折けり　同（同）

太刀持の背中に菊の日南かな　几董（井華集）

掛乞に八日の菊を見せにけり　同（同）

菊を見つ且後架借る女哉　同（同）

田家
今いぬる隣の客に門の菊　同（同）

此隣菊に琴彈く門徒寺　同（同）

手折捨る山路の菊の匂ひ哉　同（同）

宿の菊陶に挿して憐まん　召波（春泥發句集）

櫻井が跡に宗長菊持參　同（同）

すおりかと思はるゝ菊の聞きけり　同（同）

菊の香や花賣が身の袂にも　同（同）

うたゝねの顔に離籬や菊の花　同（同）

とく遲く菊此頃の樂しさよ　同（同）

三日月にかひわる菊の莟かな　青蘿（青蘿發句集）

盆ほどになるてふ菊の莟哉　移竹（乙御前）

菊使戻りて菊の噂かな　同（同）

菊吹くや五つは殘る唐の皿　成美（成美家集）

夕暮に今日も父成る菊の花　同（同）
菊咲て雀の米も日和かな　同（同）
菊の香に下部が桐油心せよ　同（同）
一壺の賤物なれて菊の花　同（同）
味噌焼けば小金も減りて菊の花　同（同）
菊を見て一日やりの心かな　同（同）
閨女賛
菊の香をもてしづめたる硯哉　同（同）
為に花の歳日なりとや、その心細さを寄から
名古屋郡の茶の傍に人住捨の小家あり
来年も見るとやすらん菊の花　同（同）
ある人の家にて
田の畔に荻の代りか菊の花　乙二（松窓乙二発句集）
旅するか雁の上の菊の枝　同（同）
置露の菊勧進に出ばやな　同（同）
ともすれば菊の香寒し病上り　同（同）
菊の秋白髪並べに武蔵迄　同（同）
雁などを殺す家さへ菊の花　同（同）
赤いとて淋しがりけり菊の花　同（同）
あたゝかに見ゆるものなり菊の花　同（同）
雁門が得九十の齢を賀して
翌は菊に草鞋はけとて帰りけり　同（左のゝえ草稿）
十株づゝに千代添へ菊の九畝　同（同）
白雲は遠いものなり菊の上　同（同）
秩父根の裾引はへて菊の秋　同（同）
傘干して浮世めかすな菊の花　同（同）
花叔が細に賦するなる
星の宵菊の宵にもなしにけり　同（同）
父母を見る楽しさを菊の花　士朗（枇杷園句集）
無駄事に身は老くれな菊の花　同（同）
うらやまし菊も作らぬ庵の庭　同（同）
芝草庵一
花ことに菊にもあらず八重葎　同（同）
菊咲くや驛々の酒祭　巣兆（曾波可理）
菊の花茄子序に抜かれけり　一茶（旅日記）
古郷や茶に引添へる菊の花　同（七番日記）
夕飯や醤油かけても菊の花　同（同）
髻に筆つッさして菊の花　同（同）
夕暮や馬糞の手をも菊で拭く　同（同）
どう寝よと儘の皮なり菊の花　同（同）
汁鍋にむしり込んだり菊の花　同（同）

菊

金藏を日除にしたり菊の花　一茶（七番日記）
菊咲や茂介佛も顏が利く　同（同）
我菊や形にも振にも構はずに　同（同）
我菊や向きたい方へつんむいて　同（同）
下戸庵が疵なりこんな菊の花　同（おらが春）
入道の大鉢卷で菊の花　同（同）
杖先で畫解するなり菊の花　同（同）
我やうにどつさり寐たよ菊の花　同（同）
猿の脈も見る顏付や菊の花　同（一茶句帖）
小隱居や菊の中なる茶呑道　同（同）
殿よりも少し上座や菊の花　同（同）
樂々と寐て咲にけり名なし菊　同（同）
鍬提けて神農顏や菊の花　同（同）
鍬の柄に小僧が名あり菊の花　同（同）
山の菊曲るなんどは知らぬなり　同（同）
茶代とるとてならぶ也菊の花　同（同）
此菊の直なりけらしおのづから　同（同）
今の世や菊も賣らるゝ評判記　同（同）
草庵は菊迄杖を力かな　同（同）
汁の實の足しに咲けり菊の花　同（同）
念入れて尺とる蟲や菊の花　同（同）
菊咲くや二夜泊りし下々の客　同（九番日記）
斯來よと菊の立けり這入口　同（同）
見やう見眞似に藪菊と成にけり　同（同）
門に立つ菊や下戸なら通さじと　同（一茶發句集）
酒臭き黃昏頃や菊の花　同（嘉永版一茶發句集）
雨の洩る最中菊の匂ひかな　梅室（梅室家集）
菊の香に一坐暫く默りけり　同（同）
雨風や菊の香内へ皆這入る　同（同）
薺蒿（ヨメガハギ）九月は菊に成にけり　同（同）
菊折ると威して亭主起しけり　同（同）
鎌田江渠
久しさや蓬のまゝの菊の花　同（同）
日光山中
菊の香や水音もする垣の内　同（同）
里深し藪また深し菊の花　蒼虬（蒼虬翁發句集）
夕陰と成るや一しほ菊の花　同（同）
住吉の松は暮たに背戸の菊　同（同）
菊の香や滑（スベ）り込たる隱れ里　同（同）

山里の菊も盥も日南かな　同（同）
垣越しに貰ふや菊は皆赤き　同（同）
畑菊の外に垣根の菊の花　同（同）
兩隣同じ根分の菊の花　同（同）
なまぬくき湯桶のたや菊の花　同（同）
瑠璃燈も一つは淋し菊の花　同（同）
大君のあれまし〻日や菊の花　子規（仝　集）
井戸端に一うね菊の赤きかな　同（同）
地に這ひし菊起し掃く箒かな　虚子（ホト〻ギス）
敷砂に消え込む菊の雫かな　なみ女（なみ女遺稿）

犬山丈草邸址

そのかみの香に咲く菊と親しまれ　別天樓（丙寅句鈔）
山里は薪に菊のまじりかな　玨口（庚午句鈔）
夜をいで〻菊に立ちたる寒さかな　萍浪（丙寅句鈔）
朝の箸とる手に菊の匂ひけり　忘機（鷗　島）
客に割る赤貝寒し夜の菊　琅玕（同）
包み來し土もなつかし貰ひ菊　青々（同）
螢屎にうつろふ花の妹かな　其角（頭　推　子）

花の妹

翁草
齢草
初菊
白菊

翁草阿貞月次初會

よも盡きじ草の翁を露拂　鬼貫（鬼貫句選）
露霜にめげぬや菊は齢草　杉風（杉風句集）
初菊やほじろの頬の白き程　嵐雪（分　外　集）
初菊や九日までの宵月夜　召波（春泥發句集）
塗格子半輪出たる菊白し　梅室（梅室家集）
灯ともせば只白菊の白かりし　鳴雪（鳴雪句集）
白菊や花のこぼれて葉の雫　蓼太（蓼太句集）

遊心公にて

白菊やあるじの花に暮殘り　同（同）
白菊や心餘りて嫉ましき　樗良（樗良發句集）
白菊やあたりも倶にうるはしき　同（同）
秋悲し白菊の色に染まん事　几董（井　華　集）
丸盆に白菊を解く匂ひかな　同（同）
白菊の山路忘れぬも哀れなり　士朗（枇杷園句集）
白菊や紅さいた手の恐ろしさ　千代尼（千代尼句集）
白菊や寒いといふもいへる頃　同（同）
白菊や日に吹ふとは思はれず　同（同）

菊に古笠を覆たる畫に

白菊や呉山の雪を笠の下　蕪村（蕪村句集）
白菊や庭に餘りて畠まで　同（蕪村遺稿）

白菊

白菊やかゝる目出度き色はなくて　蕪　村（新五子稿）
白菊の一もと寒し清見寺　同（几董判句帖）
白菊は露の泉と見ゆる哉　曉　臺（曉臺句集）
白菊の同じ色としも無かりけり　同（同）
白菊に北の御園は暮れにけり　白　雄（白雄句集）
白菊の目に立てゝ見る塵もなし　芭　蕉（木がらし）
白菊を貝の身にせん袖のうら　其　角（類柑子）
白菊の鎌倉や住まば扇が谷　嵐　雪（其袋）
白菊は白し昔の物語　支　考（菊の塵）
白菊や鶴の都の霜降羽　同（蓮二吟集）
白菊や朝顔よりは遅う起き　杉　風（杉風句集）
白菊や夕飯過の行どころ　同（同）
　三日月亭にて
白菊や貝を根に置く贅か宿　野　坡（百曲）

黄菊

黄菊白菊其外の名は無くも哉　嵐　雪（其袋）
手燭して色失へる黄菊哉　蕪　村（蕪村句集）
ぼきぼきと二もと手折る黄菊哉　同（蕪村遺稿）
花ひとり黄菊神妙に見ゆる哉　曉　臺（曉臺句集）
黄に咲きぬ酒卸し行く門の菊　白　雄（白雄句集）
上臈妹が黄菊は荒れにけり　召　波（春泥句集）
白露の知らでありしか黄菊哉　士　朗（枇杷園句集）

八重菊　大菊　中菊　小菊

親しみは花八重菊の重ね哉　樗　良（樗良発句集）
大菊や今度長崎よりなどゝ　一　茶（一茶句帖）
中菊や地に這ふ斗り閑かなる　太　祇（太祇句選後篇）
剪配るあとは小菊の匂ひかな　正　秀（杉丸太）
旱年伏水の小菊貰ひけり　蕪　村（蕪村句集）
わざくれに小菊買けり青薬師　几　董（井華集）
小菊なら縄目の恥は無かるべし　一　茶（おらが春）
旅日和小菊みだるゝしろみかな　華　水（倦鳥）

曾我菊　菊紅葉

曾我菊の隣に覗く朝出かな　沾　徳（沾徳句集）
湊に塵なりけり菊紅葉　其　角（[illegible]）
菊紅葉水屋はじけて流るめり　同（五元集拾遺）
　西蓮寺
極楽はかゞやくものぞ菊紅葉　支　考（越の名残）

園の菊

籠鳥のゆるすにうとし園の菊　其　角（[illegible]）
菊園や開き揃へて黄なが勝　浪　化（浪化上人発句集）
　佛家に入る
花ならぬ處はないぞ園の菊　惟　然（後れ馳）

菊園や女斗りが一床几　一茶（七番日記）
菊園や歩きながらの小盃　同（おらが春）

籬の菊

時鳥蔵菊には菊の籬かな　其角（のぼり鶴）
琴は語る菊は頷づく籬かな　嵐雪（其袋）
籬菊や花の裏道一ト通り　曉臺（曉臺句集）
菊垣にちよいとさしたり小脇差　一茶（七番日記）

作り菊

出世者の一もと床し作り菊　其角（五元集）

菊の露

朝風や菊の頷づく菊の露　鬼貫（七車）
秋を經て蝶もなめるや菊の露　芭蕉（笈日記）
菊の露凋める人や養帽子　其角（曠野）

さま〳〵になりなたる菊の由に倒れこ

白鶏の碁石に成りぬ菊の露　同（雜談集）

畫菊の讃

柚の色や起上りたる菊の露　同（續猿蓑）
手の内の鷁こぼるゝ菊の露　同（きれ〴〵）
酒飲の心に惚れぬ菊の露　北枝（そこの花）

山家の菊見にまかりけるに、あるじの翁、紙硯をとらせ、ほ句もとめければ

菊の露受て硯の命かな　蕪村（蕪村句集）

菊つけ清ト寺に出て、

雪舟が筆の走りか菊の露　曉臺（曉臺句集）
留守事に背めて見にけり菊の露　梅室（梅室家集）

菊畑

浮氣する一年好きや菊畠　許六（風俗文選犬註解）
菊畠奥ある霧の曇りかな　杉風（炭俵）
菊畑や床に久しき具足櫃　同（杉丸太）
菊畑や今日目に見ゆる足の跡　千代尼（千代尼句集）
菊畑や花の行衛は雲井まで　同（同）
菊畑や夢に彳む八日の夜　同（同）
あさましき桃の落葉よ菊畠　蕪村（蕪村句集）
酒を出す後ろの音や菊畠　几董（井華集）
雞老ぬ茄子黄みぬ菊畠　召波（春泥發句集）
一つ二つ落葉嬉しや菊畠　虚子（ホトヽギス）

菊作り

我年を花に見しけり菊作り　來山（續今宮草）

隱れ家の園人を訪ひて

大古の粥のあるじや菊作り　野坡（門司硯）
南には藏や詠めて菊作り　也有（蘿葉集）
菜は背戸の畑に痩たり菊作り　同（同）
菊作り汝は菊の奴かな　蕪村（蕪村句集）
見通しに菊作りけりな訪はれ顔　太祇（太祇句選）

菊作り　傾城の枕踏みてや菊作り　蓼太（蓼太句集）
菊作り妻に親しき振もなし　蒼虬（蒼虬句集）

菊の宿　しほらしき道具何ある菊の宿　其角（五元集）
鶏の下葉摘みけり宿の菊　同（五元集拾遺）
ねり酒に藪入せばや菊の宿　支考（□日記）
酔臥せば何の夢見ん宿の菊　白雄（白雄句集）
僕、人は持たれど、風塵中に栖々たるを
宿の菊と名乗るよしかな田三反　同（同）
不遠慮に公家の來ますや菊の宿　几董（井華集）
行燈の畫さへ見えて菊の宿　成美（成美家集）
高坏は古風でよいぞ菊の宿　蒼虬（蒼虬翁句集）
三十韻風三吟

菊の主　一頃は世に鳴瀧の菊のぬし　桃隣（花林集）
畠から出て來る菊のあるじ哉　涼菟（皮籠摺）
辻番も一もと菊の主かな　也有（蘿葉集）
鐵を杖に突々菊の主かな　一茶（一茶句帖）

菊の友　漆せぬ琴や作らぬ菊の友　素堂（素堂家集）

菊見　襟にさす僧の扇も菊見かな　野坡（野坡吟艸）

菊の宴　夜宴菊
月白し此花燭を恨むべし　暁臺（暁臺句集）

菊膾　蝶も來て酢を吸ふ菊の酢和かな　芭蕉（蕉[illegible]）
菊花の讃
折ふしは酢になる菊の肴かな　同（泊船集）
震宴の餘りもがもな菊膾　其角（分外集）
草の戸の酢徳利ふるや菊膾　召波（春泥發句集）
菊膾家は蹇れて有りけれど　青々（倦鳥）

殘菊（晩）　殘り菊　十日の菊　菊殘る

季題解説　重陽（舊九月九日）過ぎての菊を云ふ。今重陽の行事殆んど廢れたるが如くなれど、昔時、九月九日は節日にて菊の宴行はれ、祝の日なりしなり。其日の後の菊を惜しみて殘菊とは云ふ。

實作注意　殘菊と音讀するが本來のものなるべし。但し「菊殘る」などゝ用ゐてもよろしきも、秋季の菊たることを心得べし。
猶現今に於ては、昔日の如き重陽の感薄くもなり、單に菊の衰殘を云ふ事に用ゐ居れるやうなり、これは時代の推移による季題感想の變遷と云ふ可し。然れば晩秋より冬に亙りての季物たるべし。〔參照〕菊。人事―小重陽。

例句
殘菊　十六夜のいづれか今朝に殘る菊　芭蕉（笈日記）

九僊坊に住を移して

月の殘り菊の殘りや乞食せん　支考（戊午天寶記）

紅葉ばを散らしかけてや殘る菊　北枝（東西夜話）

見る時は殘菊としもなかりけり　召波（春泥發句集）

殘菊や昨日迯にし酒の禮　太祇（太祇句選）

綿とれば菊となりたる且かな　闌更（半化坊發句集）

滑堤の福(?)亭に東行の離(?)をおくりて

十日の菊

殘菊にさめじと契る離金香　几董（井華集）

十日の菊

菊はかへて同じ女郎ぞ目出度けれ　來山（今宮草）

嘉堂亭

此客を十日の菊の亭主あり　其角（花日記）

昨日は綾雪亭の亭主振に草臥れ、今日は寄(?)客

振に高ぶる

觀世殿十日の菊をかねてより　同（五元集）

市中や十日の菊の客賣らふ　支考（越の名殘）

九月十日素堂の亭にて

隱家や嫁菜の中に殘る菊　嵐雪（曠野）

三井寺や十日の菊に小盃　許六（風俗文選犬註解）

菊の香や十日の朝の飯の前　召波（春泥發句集）

給はれと言ひよくなりぬ十日菊　梅室（梅室家集）

油菊（中）　いはやぎく

季題解説 我國固有の野生菊の一にして、莖も葉も細小、花も色は黄なり。此菊の花を乾かし「菊の枕」を作れば香氣ありて爽なりとし、又昔此花を油に漬け、その菊油を藥用とし、種々の痛み、諸の瘡につけたり。此菊油を作るに用ゐしゆゑに油菊とは云ふなるよし。

參考 あぶらぎく　Chrysanthemum lavandulaefolium, Makino.（きく科）山野に自生する多年生草本にして、多くの枝を生じ、高さ二三尺に達す、葉は互生し、きくの葉に類し、廣卵形にして深き缺刻を有す、秋日枝梢上に多數の小頭狀花を生ず、黄花にして其外圍のものは舌狀を有し、中心は管狀花なり。果實に冠毛なし。 參照 菊。

貴船菊（晩）　秋明菊　秋牡丹　草牡丹

古書校註 【滑稽雜談】 九月、遵生八牋曰、秋牡丹、葉は牡丹に似、花は淺紫にして黄心なり。苗舊根より生ず。○大和本草云、一品秋牡丹、農圃六書に、之を嗅げばやゝ臭しと云ふ、今試みるに然り。春分移栽し九月中菊に先ちて開く。花は紫菊に似たり。初め深紅にして後淺紅なり。近年異國より來るに

や。されども有馬・貴船・[illegible]州諸面、又西州諸山に有り。本邦昔よりある草なるべし。今按に京都の俗きぶね菊と云て賞す、所説の如し。今の萬菊といふ物是ならし。

季題解説 山野に自生する毛茛科の宿根草にして、莖の高さ二尺餘、葉は三出して牡丹の葉に似たり。其小葉は卵圓形、又は心臓形をなし、三裂又は數裂す。秋日莖上に小枝を分ち、淡紅紫色を帶び、大さ一寸餘の形菊花に似たる花を開く。[illegible]菊。

例句
貴船菊
露霜にしられき深し貴舟菊　我黑　（類題發句集）

磯菊（中）

季題解説 海濱等に自生する菊科の多年生草本にして、莖は一二尺ばかり、葉は長倒卵形、又は披針形、葉裏白く、緣邊小缺刻、鋸齒あり。秋日梢上葉腋に黄色の小頭狀花を簇生す。磯菊の名稱花よりもよろし。又別に「しほ菊＝（千年艾）あり、別名「しほかぜ菊」とも云ふ。これ亦海濱に自生す。[illegible]菊

濱菊（中）

季題解説 菊科の宿根草、我國の海濱に自生し、亦庭園にも培養せらる。莖は年を經て枯れず、木質をなし、高さ二尺餘。葉は長楕圓形、上面は綠色にして光澤を有し、下面は淡綠色なり。秋、莖枝の先端に頭狀花を着く。周緣なる舌狀花は白色にして一列又は二列をなし、中央なる管狀花は黄色なり。庭園に栽培し又は鉢植となし、花は觀賞す。[illegible]菊。

野菊（晩）　紺菊　野路菊

古書校註
【[illegible]】八月。（一）野原に自然と生ずる菊をいふ也。花葉ともに菊に似て小なり。褐・紫の花多し、稀に黄花のものありとぞ、是上古より本邦に有る菊也。小毒あり、食ふべからずといへり。今人家に植ゑて翫ぶものは唐土より來る。上古は野菊の外なし。

註（一）增山の井・をだまき綱目・季寄草等すべて八月、滑稽雜談のみ九月に出せり。

季題解説 野菊は野路菊を云ふ、菊の小なるものなり。我國に往古より野生せる菊の一ツにして、觀賞用に栽培して種々に變化せる菊も、元は此種に出づるものなりと云ふ。野菊の花は帶黄にして瓣は白く、全體纖細なる感あり。油菊は花の色黄にして野菊は花の色白し。共に原始的菊花なり。昔より今に至るまで、嫁菜の花をも野菊と呼ぶ者多し。畫にも野菊とて嫁菜の花を描けるものを多く見る。故に野菊の稱呼甚混雜せり。よつてこゝに擧ぐる野菊の句も亦嫁菜の花を野菊として詠めるものあるべしと思は

る。今は明かに區別せる稱呼なるも、野菊と云ふは野生の菊花の類の總稱たりし時代久しかりしことなり。参照 菊

例句

野菊

名も知らぬ小草花咲く野菊かな　素堂（素堂家集）

宗祇法師の言葉によりて

野菊まで疲れて蝶の悪童哉　芭蕉（文蓮葉）

世を背く野菊や百の名に入らず　桃隣（陸奥鵆）

綿仲間はづれて戰ぐ野菊かな　同（荀の塵）

此花の名になぜしと言れて

重箱に花なき時の野菊かな　其角（句兄弟）

朝見えて痩たる岸の野菊哉　支考（其便）

酸の過た嫁菜の果は野菊哉　許六（風俗文選犬註解）

草刈の悪童は寒き野菊かな　也有（羅葉集）

掃ための山を南に野菊かな　同（同）

なつかしき紫苑がもとの野菊哉　蕪村（蕪村句集）

子狐の隠れ顔なる野菊かな　同（新五子稿）

古畑の疇ありながら野菊かな　太祇（太祇句選）

紫に似ずて床しき野菊かな　几董（井華集）

傍に南瓜花咲く野菊かな　召波（春泥発句集）

菊芋（中）

季題解説 菊科の多年生草本にして、アメリカ合衆國及カナダの原産なり。今は觀賞用又食用として廣く栽培せらる。莖は高さ五尺乃至一丈、毛あり、上部に於て枝を分つ。葉は卵狀長楕圓形にして、長さ三寸乃至七寸、質剛く鋭尖頭にして緣邊に鋸齒あり。九、十月の頃梢頭に數多の頭狀花序を攢簇して黃花を開き、後實を結ぶ。根莖は馬鈴薯の如く、食用に供す、又家畜の飼料、アルコール澱粉の原料となる。菊芋は一種の炭水化物イヌリンを多く含有し、糖尿病者の藥となる。参照 菊

紫菀（中）　しをに　のし　鬼のしこ草

古書校註

【年浪草】八月○蘇頌曰、紫菀三月の內地に布いて苗を生ず　その葉二四相連り、五月・六月の內黃白紫花を開く、黑き子を結ぶ。○萬葉「萱草吾下紐爾著有跡鬼乃志許草事仁之安利家里　家持」○袖中抄に曰、鬼のしこ草とは別の草の異名に非ず。忘れ草は愁を忘るゝ草なれば、戀しき人を忘れん料に下紐に着けたれど更に忘るゝことなし。萱草と云ふ名は只ことにぞ有りけん、猶戀しければ鬼のしこ草也けりと云ふ也。心は誠の鬼にはあらず、わろしと云ふ詞也。日本紀第一に不順也因日汚穢之所云々。されば シコとは惡き心なりと。因の字を訓めり。○俊賴の抄に曰、昔人の親、子

を二人持たりける、此兄弟孝行にしける、親うせて後歎き、塚に詣で丶在すか如く有りける。年經りぬれど兄弟打つれて行きぬ　其の兄公に仕へて私を顧るに堪へず、思ひけるやう　只に止む時なし、萱草は思を忘らかすもの也と、塚に之を植ゑける。弟は之をいたく恨みて、紫菀は忘れぬ草也と植うる。兄はいつの程よりか忘れて行かず、世に萱草をわすれぐさと云ふことしるしあり。弟は父絶えず詣でぬ。或日親の塚に聲あり、恐る可らず我はこれ君が親の塚を守る鬼神也、兄は忘草を植ゑて公に仕うまつる心怠らず、されどその家を思ふ心實也。其許は思ひ草を植ゑて益々怠らず、至孝也、天帝愍み給ひて我に言はしむるは、今より豊有らんことを夢に知らすべしと云ひて止みぬ。弟不思議に思ひ歸りぬ。それより書有ることは夢に見るに違はず、德を得たりとかや、此の紫菀草は嬉しきことあらん人は、植ゑて見るべきか、嘆くことあらん人は植うべからざる草也

季題解説　菊科の草本にして、多く園圃に栽培せらる。春、宿根より鋸齒を有する長楕圓形にして粗糙なる葉を叢生し、後莖を出し、通常葉を互生す。莖の高さ五六尺に達し、上部多數の小枝に分岐し、秋日、淡紫色、單瓣の頭狀花を簇生す。花の形「よめなの花」に似たり。

例句

紫　菀

丈六の御髮に近き紫菀かな　梅人（田舍の日）
麻冷せし宿や紫菀の片靡き　乙二（松窓乙二句集）
大風の紫菀見て居る垣根かな　同（同）
捨人の飯は冷たし紫菀咲く　同（あのゝえの集）
壁塗りの隣へ廻る紫菀かな　巣兆（曾波可理）
夕空や紫菀にかゝる山の影　闌齋（物見塚記）
はきはきと筑波は見えて紫菀咲く　曲阿（旅道行）
佐渡山の日和を見せる紫菀哉　太笻（蕉翁子集）
床の間や紫菀を活けて弓靫　子規（子規句集）

鬼の醜草　此段に今昔物語（中陣の傳）ならんと思はれるもの也して

醜草の鬼も敷かるゝ陣屋かな　鬼貫（七車）

参考　しをん　Aster tataricus L.（きく科）大形の多年生草本にして通常庭園に培養すれども九州方面に野生あり、根葉叢生し長楕圓形にして葉柄を有し、莖葉は粗糙なる莖に互生す、秋日其莖直立して五六尺、稍上

に淡紫色の花を開き多數の頭狀花を繖房狀に着く。

貝細工草（初）　貝殼草　ヘリクリサム

季題解說 菊科の一年生又は二年生草本、オーストラリヤの原産なり。莖は直立し、一尺五寸乃至三尺、枝を分ち白色の毛を密生す。葉は根生葉と莖生葉とあり、花は五月より九月迄、枝毎に其の頂に頭狀花序を着け、數多の管狀花を攢簇す、周圍に總苞ありて銀白色の光澤ある苞片よりなる。花色に黃色・又赤・白等の品種あり。此の花濕氣を受くればつぼみ、乾けば又開く性あり

たむら草（初）　たまばうき

季題解說 菊科の多年生草本にして、山地又原野に自生多し。此草、早春既に分裂缺刻、殆ど羽狀複葉の形狀を具備せる根葉を叢生す。後、簇葉間に三四尺の花莖を抽出し、初秋より、葉腋上更に小枝を出して、淡紅紫色にして薊に似たる頭狀花を着生す、又一名をたまばうきと云ふ。

參考 たむらさう Serratula coronata, L.（きく科）山地に生ずる多年生草本にして、葉は互生し、羽狀深裂にして、裂片に粗齒あり、其間に莖を抽くこと三五尺なり、八九月頃梢葉腋に枝を分ち、每梢花をつく、淡紅紫色を呈することアザミ類の如く、花形亦相似たり

朝霧草（中）　はくさんよもぎ

季題解說 一名「はくさんよもぎ」と稱するものにて菊科の宿根草なり。草の丈一二尺、葉は多數に分裂して絲の如く、全體白綠色にして光澤あり。秋穗をなして黃色の小花を攢簇す。北地に自生多きものなれども觀賞用に栽培せらる。此草の一種「ちしまあさぎり草」と稱するものあり。形態朝霧草よりも小し。

參考 あさぎりさう Artemisia Schmidtiana, Maxim（きく科）北國に自生すれども、又觀賞用として培養する多年生草本なり。莖の高さ一二尺に達す、葉は多數に分裂して絲狀をなし、全草殆んど白色を呈し異彩あり、秋日梢上に穗狀をなして黃色にして小なる花を攢簇す。

三七の花（中）　三七草　さんしち

古書校註 【滑稽雜談】七月（一つ）時珍が本草に云、その葉左三右四、故に三七と名く。春苗を生じ、夏高さ三四尺、葉菊艾に似て勁く厚し、岐尖有り。莖赤稜あり、夏秋黃花を開く、蘂金絲の盤紐の如し、愛すべし。氣香しからず、

花咲けば則ち絮を吐く。

㊥（一）類聚には八月之部に出せり。

季題解説 菊科の多年生草本にして、莖は高さ二三尺に達す。葉は大形にて羽狀に分裂し、各裂片に鋸齒あり。莖葉共に軟質なり。秋、莖上に小枝を出し、各小枝上に一箇宛の頭狀花を着生す。この花は、全部黃褐色を呈する筒狀花の集合より成れるものなり。此草の葉の汁は、毒蟲に刺されたる痛みを治すといふ。

参考 さんしちさう（Gynura japonica, Makino.（きく科））庭園に培養せらるゝ多年生草本にして、莖の高さ凡三尺、葉は大形にして羽狀に分裂し、莖葉共に軟質にして紫色を帯ぶ。秋日梢頭に花を生ず、色は深黃色にして、頭狀花序は皆管狀花冠より成る。此葉の汁液を毒蟲に刺されたる部に塗れば、毒を消すの效あり。

田五加（たうこぎ）（中）　しらみ草　狼把草（らうはさう）

季題解説 多く田畔、水邊等に自生する、菊科の多年生草本にして、莖高さ二三尺許に達す。葉は卵狀披針形にして、粗鋸齒を有する三小葉より成り、梢上に至りては單一葉となり、何れも對生す。春日新苗を生じ、秋季に至り枝梢毎に黃色の筒狀花より成る頭狀花を着生す。此頭狀花は總苞の外に有柄の細葉十數箇を有す。花後刺ある果實を結び、他物に附着し種子を散布す。此植物の莖葉は肺病に特效ありといふ。一種葉の狹くして柳葉の如きを「やなぎたうこぎ」と稱す。

豨薟（めなもみ）（中）　豨薟草　もちなもみ

季題解説 原野に自生する菊科の多年生草本にして、莖は稍方形をなし、高さ三四尺に達し、枝葉共に對生す。葉は卵圓形にして先尖り、緣邊に缺刻狀鋸齒あり。秋日枝梢毎に二三の黃花を著く。花下に狹長なる匙狀の苞あり、粘液を出して人衣に附着し易し。花後黑色にして硬刺ある四五分大の果實を着生す。葉を採みたる汁は蜂の毒を消す。

めはじき（初）　益母草（やくもさう）　にがよもぎ　茺蔚（じゆうつゐ）

古書校註 【滑稽雑談】七月、時珍が本草云、（略）四五月間穗の内に小花を開く、紅紫色、又微白色なる者有り、（略）和產說の如し、俳士秋の部に入る。凡そ草木は花時を以て賞す、この草庭門花ありといへども小花穗に生じて見るに足らず。秋に至り實を採つて目はじきとす。本草に目を明かにする能ある故にや。兒女秋に至りて之をとつて目際に挿んで弄ぶ。仍つて秋の實を季に用ふ。

【篗纑輪】七月。猪麻(ヤブマヲ)、俗目はじきと云ふ。莖は胡麻に似て葉は麻の如し。其葉兩々相對して一層は東西、一層は南北と更に十文字也。七月紅紫の小花を開く。又微白のものあり、本艸には花四五月と記す。土地の違ひなるべし。又夏至の後卽ち枯る、故に夏枯艸と云ふと記したれども、夏枯れず。土地の變か、種の異か。漢和一ならざること是に限らずまゝあり。

季題解説 路傍にも自生する脣形科の二年生草本にして、莖は稜ある方形、直立すること麻の如し、高さ四五尺に達す。根生葉は略圓形をなせども、莖葉は三箇乃至五箇に分裂して細き羽狀をなし、葉質薄く柔にして對生す。初秋の候、葉腋に稍「くるまばな」に似て淡紅色なる脣形花を輪生す。此花、乾して藥となり、莖も葉も前藥に用ゐ、其效婦人に宜しき故に益母草と云ふ。根も亦藥用とす。

例句

めはじき　めはじきや夜たゞ物見る窓の前　清　洪　(類題發句集)

狗尾草(ゑのころぐさ)　(三秋)　ゑのこ草(ぐさ)　犬子草(ゑのこぐさ)　紫狗尾草(むらさきゑのころぐさ)　金狗尾草(きんゑのころぐさ)

古書校註

【篗纑輪】七月〔狗尾艸(エノコクサ)〕秋穗をなす、卽ち狗子の尾に似たり、粟の穗の如し。「えのこ草已れと種の有るものをあはの鳴門はたれか言ひけむ」俗傳ふ、阿波國鳴門の沖例ならず鳴動して止まず、和泉式部この歌を詠じてとゞむと云々。

【年浪草】三秋〔犬子草(エノコグサ)〕本草綱目に狗尾草(クワウビサウ)。〇時珍が曰、穗の象狗尾、故に俗狗尾と名く。原野垣墻多く之を生ず。苗葉に似て穗亦粟に似たり。黃白色にして實なし。〇和漢三才圖會に曰、狗尾草、原野に多く有り。小兒之を用て蛙を釣りて戯る

季題解説 原野路傍に自生する禾本科の一年生草本にして、雜草なれども、此草粟に似て小さく、其穗の形狀狗尾に似たり、因つて「ゑのころぐさ」と云ふ。小兒この穗を取りて遊ぶ。莖の高さ一二尺、葉は細く下部は鞘狀をなして莖を包む。穗の長さ二三寸許、綠色の長芒あり。又異種あり、芒の紫褐色なるを紫狗尾草と云ひ、芒の黃なるを金狗尾草と呼ぶ。〔參照〕粟

例句

ゑのこ草　粟の實の有るにや任すゑのこ草　乙州　(西の雲)
秋の野に花やら實やらゑのこ草　楚常　(卯辰集)
飯野ヶ野寺のかへるさ
えのこ草道より下になりにけり　乙二　(松窓乙二發句集)

參考 えのころぐさ Setaria viridis, Beauv.(禾本科) 原野に多く自生する一年生草本なり、莖の高さ一二尺に達して枝を分ち、葉は細長くして下部は鞘狀をなし莖を包む、夏日、穗をぬき、綠色の花をつく、花後小

粒の實を生じ、綠色の芒を有す、其形アハに似て小し。

刈安（中）　青茅　黃草　かきな　かいな　そめしば　苅刈安

古書校註

【蔓纖輪】八月。一名黃蜱、和名抄に加木奈といへり。葉すゝきに似て秋穗をなす。苅つて染草に用ふ。越前多く之を出す。

【年浪草】〔新藎草〕八月。蘇頌曰、藎草は葉竹に似て細く薄し、また圓小也。荊襄の人煮て黃色を染む。極めて鮮好也　和漢三才圖會に曰、多く越前より出す。以て染家必用の物とす、按ずるに倭の藎草竹の葉に似ず、芒の類也。江湖大浦の邊山中最も多し。

季題解說　山地に自生する宿根草なり。根上より分蘖し直立す。葉は披針形、疎に毛茸あり。莖の高さ三四尺許、概形「すゝき」に似たれども、一體に細く、秋日穗を抽く。穗は三岐するを常とし、多きも五六本に過ぎず、長き總梗の頭に着く。淡綠色、又紫色を呈す。花候八月。仲秋之を刈り取り、乾し貯て黃色の染料となす。又此刈安を以て黃色を染むる事は支那に起原し、我國に傳はりしものにて、天平の頃より既に染法も傳習せられしことなるべし。此草の古き名稱には「かきな」「かいな」「そめしば」など呼べり。又「やまかりやす」一名「近江刈安」と云ふものあり。同じく黃色染料に使用す。刈安は藥用として、一切の惡瘡を洗ひて效ありと云ふ。

參照　藎草（ ）

參考　かりやす　Miscanthus tinctorius, Hack.（禾本科）山地に自生する多年生草本なり、莖の高さ三尺許、全形及穗の形も、概略ススキに似たれども、穗は三岐するを常とし、多きも五六岐に過ぎず、秋日、穗を抽きて小花をつく、刈り取りて乾し貯へ、黃色の染料となす。

藎草（中）　八丈刈安

季題解說　山野に自生する禾本科の越年性草本。大體刈安に似て莖の長さ一二尺、叢生し、葉は卵狀狹針形にして長さ一寸五六分、形刈安よりもまるし。基底部に毛茸あり、秋枝梢毎に簇狀に束生せる帶紫色の花穗を抽く、長さ一寸乃至五六分、山穗は狹長なる披針形をなし、銳尖なる頭端を有し、長さ一分五厘內外なり。

實作注意　此の草古へは刈安と稱せられ、黃色の染料とせられしも、今日にては八丈島にて黃八丈の染料に用ゐられるのみなり。〔參照〕刈安

參考　こぶなぐさ　Arthraxon hispidus, Makino.（禾本科）隨所に自生する一年生草本なり、細莖地に敷き長さ一二尺、其末立ちて數箇に分岐す、九月頃枝毎に花穗を抽く、其の長さ一寸許にして數箇に分れ　褐紫色を呈するを常とす、古は「かりやす」と稱し此草を以て黃色の染料となせども、今は只八丈島に於て之を使用し、八丈絹の染料として用ふるのみ。

藤袴（初）　らに　蘭草　紫蘭

古書校註

【山之井】〔蘭〕ふぢばかまは袴にいひなして薄殿のかげなるを指貫かといひ、女郎花に咲きそふ芝蘭を緋の袴かと疑ひ、まち・ももだちの詞をも結び、かをりを愛づるには尾花が袖香爐、蚊帳草の掛香などもいひ、蘭麝待（一）をもそへていひ侍る。又狐蘭菊の草村に隱れし心ばへ（二）まふくた丸（三）が修行に出し藤袴をもいひなし侍る。

【年浪草】七月〇和漢三才圖會に曰、藤袴三三尺、葉女郎花の葉に似て切又（四）なし。六七月細白花を開く。〇倭名抄に曰、蘭（和名本草云蘭草和名布知波加萬新撰字鏡用二藤袴二字一）〇古歌にラニとよめり。大和本草に曰、眞蘭和名藤袴。又アララギといふ。古歌にラニとよめり。八雲御抄にも蘭をフヂバカマといふと書き給ふ。葉は麻に似て兩岐あり、香よし。乾して彌香ばし。是眞蘭なり。野にあり、秋紫白花を開く。古歌に藤袴多くよめり、國信の歌に、「秋の野にむらむら立てる藤袴紫深く誰か染めけん」。若葉は湯びきて食すべし。其の芳香美味凡菜に勝れたり。詩經・楚詞などに詠ぜし蘭是也。今蘭といふものは、葉は大葉の麥門冬の如し、花の香良き物也。延喜式三十二卷園韓神ノ祭・春日ノ祭・雜給料蘭十把とあり、本朝古も此の眞蘭を用ひしなるべし。

註（一）例句に「きりし跡もいへつけ花の蘭麝待　正章」（二）白氏文集「梟鳴松桂枝、狐蔵蘭菊叢」（三）まふくたは山伏の類といふ。夫木集「まふくたが修行に出でしかた袴我こそ着れしかこのかた袴」（四）切り込み（〇蘭の條を參照すべし）

季題解説　藤袴は觀賞用として栽培せらるることも多きものにして、我國の原野の何處にても是を見ることを得るものに非らず。大河の流るる邊りに野生あるもの、菊科の草本にて莖は圓形強直、高さ三四尺に達し、葉は通常三裂して稍三出複葉の觀を呈すれども、梢上葉に至れば無裂なるを普通とす。莖葉共に稍紅色を帶び佳香を有す。故に漢名に蘭と云ひ、又蘭草と云ふ。我國にて古くは「らに」と呼べり。花は紫紅色の頭狀花を繖形に着生す。その藤と云ふは花の色によつて云ひ、袴と云ふは帶びることより云ひしものにて、此草の佳香は邪氣を拂ふが故に、これを身に著けしより起りて藤袴とは呼ぶと云ふ說あり。秋の七草の中にてよき香あるものは此草なり。

實作注意　藤袴に最も形狀の似たるものに「さはひよどり」と云ふ草あり。これは野生多くあり。藤袴と紛らはしく、誤り易きものなれども、「さはひよどり」は花に白きものも有り、香は藤袴に劣る。〔參照〕蘭　鵯花　秋の七草

例句

藤袴

何と世を捨てても果ずや藤袴　路通（西の雲）

白銀の目貫やさしや藤袴　珍碩（同）

藤袴此夕暮のしめり哉　園女（柏原集）

藤袴　うつろへる程似た色や藤袴　北枝（猿丸宮集）

宿直に侍りて

寢用意も夜寒に成りて藤袴　千川（續有磯海）

弓固とる頃なれや藤袴　支浪（續猿蓑）

十德を着た花はなし藤袴　支考（三物拾遺）

香は古く花は新らし藤袴　素覽（素覽句集）

九月十四日石動をたちて倶利伽羅を越て

旅ゆる〱倶利伽羅に折る藤袴　素史（壬申句錄）

參考　ふぢばかま Eupatorium stoechadosmum, Hance.（きく科）秋の七草の一なり、河畔の地に野生する多年生草本にして往々庭園に栽培せらる。圓莖の高さ三四尺、葉は對生し、通常三裂し葉面多少光澤あり、梢葉は無裂なるを常とす、葉緣に鋸齒あり、乾けば佳香を發す。秋日梢頭に花を繖房狀につづる、色は淡紫色にして頭狀花は小數の管狀花よりなる。

鵯花（ひよどりばな）（初）　山蘭（さんらん）　みやうらん

季題解說　山野に自生する菊科の宿根草にして、形狀「ふぢばかま」に酷似せるものなり。然れども此草香氣を有せず。又葉は廣披針形、鋸齒ある單葉にして、通常は三裂せず。花を着くる梢上の分岐「ふぢばかま」の如く多からず。以て撿すべし。花は白色なれども時に紫色を呈する變種あり。

實作注意　普通山野に多くあるものは、此「ひよどり花」にして「ふぢばかま」は稀なり。　**參照**　藤袴フヂバカマ

藪虱（やぶじらみ）（初）　のにんじん　草じらみ　竊衣（せつい）

季題解說　原野路傍等に生ずる繖形科の草本。莖の高さ一二尺、疎らに枝を分つ。葉は「やぶにんじん」に似たるも、其裂片は細小なり。夏日白色の小花を繖形狀に着け、花後に生ずる實は楕圓形扁平にして、熟すれば毛刺甚剛く、これに觸るるものには直ちに附着す。これ此草の種子の散布を計る自然の妙なれども、衣袂に附けば拂ひても容易に落ち難し。故に人これを忌みて藪虱とは云ふ。又竊衣の名ある所以なり。

實作注意　此草の花期は夏なれども、寡聞にして未だ花を詠じたるものを知らず。俳句の季は竊衣と云ひ藪虱と云ふ所に在るものにして、茲には實を以て秋季とす。卽ち秋の「草の實」の一つなり。此草至る所にあり、又其實の附着して拂ひ難きに親しみし者多かるべく、藪虱の名を云はゞ先づ其實を連想するならん。故に若し此草の花を詠ずる時には、特に「藪虱の花」と云はざれば聞え難かるべし。但し「藪虱の花」は夏の季物なり。似たるものに「やぶにんじん」あり、この實は細長く二尖を有し、人衣に動物に附着することは藪虱に同じ。　**參照**　夏—藪虱ヤブジラミ

例句 藪虱

藪虱はなれ〴〵に實の枯るゝ　洲明（俳島）

麝香草（初）　鈴子香

季題解説 唇形科の多年生草本。諸國の山地に産す、木質の根莖あり、莖は長さ二三尺に及ぶ。葉は對生し、卵狀披針形又は長楕圓形等種々の形狀をなし、先端尖り、邊緣に粗鋸齒あり。莖・葉共に微毛を生じ、麝香の如き香氣あり。秋、葉腋毎に二筒乃至五筒ばかりの短梗花を攢簇して開く、白色にして紅暈あり。花冠の內面は淡紅紫色をなす。又白花のものあり。花冠脫して萼內に細堅果を結ぶ。各々四粒あり。

參考 じやかうさう（Chelonopsis moschata, Miq.）（唇形科）山中樹陰に生ずる多年生草本にして、莖の高さ三四尺、葉は楕圓狀長楕圓形にして尖り、粗鋸齒あり、莖葉共に微毛あり、秋日葉腋に淡紅紫色の短梗花を二三出す。萼は闊く花冠は大にして筒をなし、邊緣唇形を呈す、香氣あり。

大薊（初）　山薊　鬼薊

季題解説 山野に生ずる菊科の多年生草本にして、山薊、又鬼薊ともいふ。莖は直立して高さ三尺乃至四尺、上部に分枝す。葉は楕圓形にして鋭尖頭をなし邊緣に羽狀の深缺刻あり、葉脚は膨大して莖を抱く。莖葉共に鋭き刺毛を備ふ。八九月の頃、一枝に數筒の頭狀花序を着けて淡紅紫色の花を開く。

參照 富士薊　夏―夏薊

參考 やまあざみ（Cirsium spicatum, Matsum.）（きく科）山野に生ずる多年生草本なり、高さ三四尺にして、多く枝を分ち、莖に稜あり、葉は互生し、羽裂して邊緣に刺多し、脚葉は往々脈間白色を呈す。秋時、紫色の頭狀花を開く、花は數多く、枝の頂と側方に生じ、側者は花梗極めて短し、總苞の鱗片は普通に反曲す、管狀花は總苞より高く出づ。

富士薊（初）　富士牛蒡　須走牛蒡　薊牛蒡

季題解説 富士、日光其の他我國中部の山地に産する菊科の多年生草本なり。莖葉は大薊に似て更に肥大す。八九月の頃大なる花を開く、總苞は櫛齒狀に分裂せる帶紫色の鱗片よりなる。此の薊富士山麓に殊に多く、此の名あり。根は食用に供せられ、須走に多く産する故須走牛蒡の名あり。

參照 大薊　夏―夏薊

曼珠沙華（中）　彼岸花　天蓋花　幽靈花　死人花　三昧花　捨子花

古書校註

【栞草】七月〔曼珠沙華〕大和本草。金燈花・鐵色箭とも云ふ。月令廣義

に曰、冬春葉茂り、夏月花を生じて葉死る、花葉相衛らず云々。此の花下品也。其葉石蒜に似たり、一類也。此の花を國俗曼珠沙華と云ふ。翻譯名義に曰、曼珠沙は此に（一）柔軟又赤華といふ。酉陽雑俎に曰、金燈草、俗人家にこれを種うることを悪ふ。一名無義草と云ふ、花あるときは葉なし、葉ある時は花なし。○俳書には曼珠沙華・石蒜同物とすといへども、篤信翁の説に從ひ、石蒜はしの部にはかちて注す。「石蒜」大和本草 老鴉蒜也、しびとばなといふ。四月或は八・九月赤き花さく、下品也。此の時葉なくて花さく故に筑紫にて捨子の花といふ。○彼岸花ともいふ。

註 （一）我が國にての意

季題解説 山麓、池堤、野径などに自生する宿根草本にして、地下に鱗莖を有し、秋日一尺許の花軸を出し、其頂端に紅花を輪状に開く、花蓋六片にして反曲し、蕊は長く花外に突出す。花過ぎ初冬に至りて線状の葉を簇生し、此葉翌春に枯るゝを以て葉と花とは互に其時期を異にす。有毒植物なり。此花の方言種々ありと雖も句には用ゐ難きもの多し。

例句

曼珠沙華

悲しとや見猿の爲に曼珠沙華　其角（類柑子）
辨柄の毒々しさよ曼珠沙華　許六（篦の日）
曼珠沙華蘭に類ひて狐啼く　蕪村（蕪村遺稿）
曼珠沙華遊ぶ鳥さへ持たぬなり　乙二（松窓乙二発句集）
是とても盛ありけり曼珠沙華　同（同）

參考 ひがんばな Lycoris radiata, Herb. 一名 まんじゆしやげ（ひがんばな科）山麓。堤塘丼に墓地などに多く生ずる多年生草本にして、地下に水仙に似たる襲重鱗莖を有し、外皮黒し、葉なき時鱗莖より一尺内外の一莖を抽きて秋日其頂端に有梗の赤色數花を輪状に開く、花蓋は六片にして外反し、雌雄蕊は長く花外に突出す、子房は下位にして花後成熟せず花後冬の初め頃より線状をなせる葉を簇生し、此葉は翌年三月頃枯死す有毒植物の一なれども其鱗莖を晒し食用に供することあり。

桔梗（初）　きちかう　ありのひふきぐさ　一重草　梗草

古書校註

【山之井】桔梗笠といふあれば、花の顔隠せとも、人目忍ぶの草隠れなる心をも云ひなし、瓶に生けては亀甲と云ひ、首途を祝ふ挨拶に、歸京なども云へり。又ききやうさら（一）をもつらねなす。

【年浪草】七月○時珍が曰、桔は結也。その草の根結實して梗直す、故に名く。○和漢三才圖會に曰、山野及び人家に多く之を種う。凡そ紫碧なるを以て桔梗の正色とす。又白花の者あり、紫白相まじはる者あり、單葉あり、八重有り。

圖（一）桔梗頁　桔梗の花の平面圖の如き形の圖。

季題解説 桔梗は山野に自生あるも、人家に多くこれを植う。古くは一ありのひふき」と云ひしもの、古名廢れて漢名の傳はれるものなり。桔梗科の宿根草にて、莖の質は硬く、直立する性を有し、其高さ二三尺、長楕圓形叉は披針形の葉を、根際より莖頂に通じて散生すれども、時として輪生することあり。花は紫碧の鐘狀花にして、雄蘂の成熟するに至れば先端五裂して反曲す。花の色は紫碧を正色とすれども、叉白花あり、紫白の相交るものあり。秋の七草の朝貌は此花なりと云ふ。

實作指導 栽培のものを挿花にして眺むるも興あり。されど其趣あるは野生に如ず。是れ其環境の物の交錯して、吾人に作用するが爲めなり。總て草木を其物單獨に仔細に檢するは、植物學者の仕事にして、我等の作句は檢するに非ずして感ずる所にあるものなる事を忘るべからず。種類に一ふたへ桔梗、別種に雛桔梗」あり。〔二圖〕澤桔梗等。

例句

桔梗

草知らず吹て目立つる桔梗哉　杉風（杉風句集）
山深し藥に漏れて咲く桔梗　浪化（浪化上人發句集）
桔梗の花咲時ほんと言ひそうな　千代尼（千代尼句集）
修行者の徑にめづる桔梗哉　蕪村（蕪村遺稿）
桔梗なら女郎花なら露に濡れこ　几董（井華集）
傍妓中村雪天の句
紫に見よとや桔梗を手向卿　同（同）
卜谷上人のきのふ着きし、宗師の留守に二ふの草あり
南無藥師藥の事きさく桔梗　太祇（太祇句選）
桔梗咲て何れも花のいそぎ哉　曉臺（曉臺句集）
阿良山叢にて
花の香や桔梗に映る人通り　闌更（半化坊發句集）
花桔梗名のみの色を咲にけり　樗良（樗良發句集）
きり〳〵しやんとして咲く桔梗哉　一茶（七番日記）
叢中に剪て活たる桔梗かな　蒼虬（蒼虬翁句集）
紫のふつとふくらむ桔梗かな　子規（子規句集）
女は十桔梗の花に似たるあり　青々（倦鳥）

きちかう

きちかうも見ゆる花屋が持佛堂　蕪村（蕪村句集）
きちかうの露にも濡れよ鞠袴　几董（井華集）

澤桔梗（さはぎきやう）（初）　ちやうじな

古書校註 【年浪草】七月〇大和本草に曰、澤桔梗莖大にして葉繁く卷丹（オニユリ）の葉の莖に付けるが如し。花は桔梗に似て淡碧色、桔梗より小也。水邊に生ず。秋花

を開く。根又桔梗の如し。又浮薔の花をも澤桔梗といふ、同名異物也。○按ずるに雨說澤桔梗葉は山丹の如くにして水傍に生ずと、是同物也。只花の夏と秋と同じからず。凡そ草花は種子に播時によつて、その花夜となり、夏となり、又秋となる。近世夏菊種類甚だ多し、是皆秋菊の苗を以て花終りて後苗を分け霜雪を防ぎ、春又養ふ法ありて、夏時花を開く事珍しからず。蘭蕙の春夏秋花絕えさるが如し。野生のものも亦種子の生ずる先後に隨つて花の遲速あり。强ひて先後を論ずべからざるか。

季題解說 山林原野の陰濕の地に生ずる桔梗科の草本にして、莖の高さ三四尺、葉は披針形にして細鋸齒を有し、秋日梢上に穗狀をなして紫色の不整齊花を開く。【參照】桔梗ごき

例句

澤桔梗　村雨や見る〳〵沈む澤桔梗　幾葉（卯辰集）
　竹一把樹と成けり澤桔梗　種文（蘿舞師）

千屈菜（初）　聖靈花　水懸草　溝萩

古書校註

【御傘】水かけ草　秋也。天河に多くよめり。雨說あり、一には水影草、一には水懸草なり　是は稻なりと云々、

【增山の井】七月―水かけ草―說々有り、貞德云、水影草は多くは七夕によめり、水懸草は稻の事也　又或說にみそはき也、聖靈の水むくる心也云々。

【滑稽雜談】七月　水かけ草―鼠尾草也　一名烏草、俗水かけ草と云へりと草史に出せり。按ずるに孟蘭盆聖靈棚に之を用ひて水をそゝぐ、故に名とす。別意なし。其花穗長くして以て水をそゝぐに便あり。又稻にも水かけ草の名あれども、此に盆會の所に出せるものはみそはぎに究る。

【年浪草】七月―鼠尾草―時珍曰、鼠尾穗の形を以て命名す。○倭名抄に曰、鼠尾草、（藻鹽草に曰、水掛草、是はミソハキの異名也）七月十五日の忌水の儀也。藏玉にあり、よつて水掛草と云ふ。

季題解說 山野水邊の濕地に生ずる宿根草本にして、莖は三尺許になり、葉は殆ど無柄の廣披針形にして對生し、葉腋より小枝を出す。秋日梢上葉腋に花瓣卵圓の淡紅紫色、六瓣の花を三五花簇生して穗狀をなす。魂祭に此草花を用う。聖靈に水むくる心よりして水懸草と云ふと雖も異說あり。【參照】宗教―盂蘭盆會

釣鐘人參（中）　とどき　沙參

季題解說 山野に自生多き桔梗科の多年生草本にして、莖高さ二三尺に達す。葉は其形種々あり。多くは長楕圓形、或は線狀披針形にて、緣邊に鋸

繖ありて輪生す。秋日梢上に小枝を分ち、淡紫紅色の鐘狀花を綴る。此花の有する萼は線形の如き長き裂片を有す。「たちしやじん」「しろばなたちしやじん」「ほそばたちしやじん」等品種多し。

女郎花（をみなへし）（初）

をみなめし　血目草（ちのめぐさ）　龍牙黃花（りようげくわうくわ）　女郎花合（をみなへしあはせ）（人事）

古書校註

【山之井】女郎花は、美人草・姫ゆりのなつかしさにも超えて、たはれたるかたに言ひなして、露霜をむすびては、玉の簪、薄化粧など見なし、武藏野に立てるを、誰が盗みこしと言ひかけ、大江山にしほるゝを、鬼や奪ひしととぶらひ、頼風の古事（一）を寄せてくねるは女氣かとも（二）、散りなば男やまめ哉とも言ひ（三）、人に語るなとよめる遍昭の昔（四）、名を聞て偕老を契ると作れる、順の古（五）を思ひつゞけて、俗はよばひ出家や墮つるなども言へり（六）。

【御傘】女郎花、只一。誹諧には女ラウクワと聲にいひて折をかへ、今一句有るべし。何れも女の字には折を嫌ふべきか。又男ナヘシと云ふ草花あり、之も女郎花二句の内なるべし。

【年浪草】七月「女郎花・茶花（ヲヽチノハナ）」（上略）○大和本草に曰、敗醬（ヲミナヘシ）、本草に載する所蘓恭が說は花黃なり。時珍が說は花白しと云ふ。其形狀は倭俗の所謂女郎花なり。本邦にも黃白二色あり。醫學入門に花黃也。古歌によみ國朝の詩人の詠ぜしは黃花なり。宗砌法師が薬鹽草に白花なるを俗にヲトコヘシといふ。又オホトチは女郎花に似て花白き也。ヲトコヲミナノ花とも云へり。敗醬（ハイシヤウ）と名けしは此の花葉の臭（か）醬の損（ソン）じたるが如しと本草に云へり。今試むるに然り。

註（一）平城天皇の時小野頼風といふ者男山に住めり。契をこめし京の女頼風の無情を恨みて八幡の放生川に身を投ぐ、その衣朽ちて女郎花生ひ出でたりといふ物語。謠曲女郎花に見ゆ。（二）例句に「ひと時をくねるは女氣か女郎花」古今集の序によれる作意。（三）例句に「女郎花ちりなば男やまめ哉」。（四）古今「名にめでてをれるばかりぞ女郎花われ落ちにきと人に語るな」（五）本朝文粹「花色如蒸粟、俗呼爲女郎、聞名戲欲契偕老」。（六）例句に「俗はよばひ出家やおつるをみなへし」。○文字については「わくかせわ」・「俳諧多識篇」等に說あり「ただまき」にお保曾（トチ）の花とあてたるは妄なり。

季題解說　秋の七草の一なり。敗醬科の草本にして山野に生じ、我國には其分布する所廣し。莖の高さ三尺ばかりになり、葉は對生にして下部のものは羽狀複葉をなし、上部のものは細長き小單葉にして或は二裂す。花は黃色の最小花を複聚繖花序に着生して粟の如し。故に方言に粟花と云ふ所ありと聞く。源順の詩にも「如蒸粟」と云へり。女郎花合は古昔禁中にて女郎花の詩歌を合せたること。

實作注意　此草を採るに匂ひよろしからず。所謂敗醬の如し。されど花の風姿は、女子の艷姿にたとへて女郎花の名あるもの、うべなりと思はしむるもの有り。花と其境地にゆかしみを感じて詠出すべし。　**參照**　秋の七草

〔例句〕 女郎花（ヲミナヘシ） 男郎花（ヲトコヘシ）

まうし／＼六歳か中女郎花　宗因（梅翁宗因発句集）
女郎花打ては扇の匂ひかな　言水（初心もと柏）
[illegible]
笑へとの我へや折て女郎花　同（同）
雨風の中に立けり女郎花　来山（今宮草）
ゆがんだよ雨の後の女郎花　鬼貫（鬼貫句選）
女郎花猿にも馴るゝ山路かな　同（七車）
見るに我も折れる斗ぞ女郎花　芭蕉（續連珠）
ひよろ／＼と猶露けしや女郎花　同（曠野）
米の無き時は瓢に女郎花　同（七柏）
一夜自我と云事を
牛に乗る嫁御落すな女郎花　其角（句兄弟）
[illegible]の賛
御城へは何に入やら女郎花　同（五元集）
僧正よ鞍か覆つて女郎花　同（五元集拾遺）
途中吟
立山と誰か岩瀬野の女郎花　支考（東西夜話）
粟飯を喰せむ馬に女郎花　同（草苅笛）
野にも寐よ宿刈萱に女郎花　同（國の華）
女郎花八重も一重も無くてから　同（蝶姿）
薹の色花の形見や女郎花　同（雪七草）
身の上をたゞ萎れけり女郎花　涼菟（白陀羅尼）
男はねの草になる野や女郎花　許六（[illegible]の花）
[illegible]
戸かな桔梗刈萱女郎花　嵐雪（玄峰集）
女郎花野守か妻に睨まれん　也有（蘿葉集）
落たる人拾ひ鶉あり女郎花　同（同）
引袖は尾花にありて女郎花　同（同）
猪の露折かけて女郎花　蕪村（蕪村句集）
里人はさとも思はじ女郎花　同（同）
女郎花そも莖ながら花ながら　同（同）
兎角して一把に折りぬ女郎花　同（蕪村遺稿）
其葉さへ細き心や女郎花　太祇（太祇句選）
餓てだに痩んとすらむ女郎花　同（同）
[illegible]下り同宿に泊る
手折ては甚長し女郎花　同（太祇句選後篇）
川風の移りも行くか女郎花　曉臺（曉臺句集）
秋風を被ぎてふせり女郎花　同（同）

女郎花危うき岸の額かな　同（同）
荒牧の中に痩けり女郎花　蓼太（蓼太句集）
姨捨によろぼひ立てり女郎花　同（同）
我ものに手折れば淋し女郎花　同（同）
面影の幾日戀らで女郎花　几董（井華集）
生添ふや小松が中の女郎花　同（同）
雨の野や人もてさめぬ女郎花　闌更（半化坊發句集）
あるが中に野川流るる女郎花　白雄（白雄句集）
見るうちや風の吹折る女郎花　樗良（樗良發句集）
牛捨る野にも立るや女郎花　成美（成美家集）
秋風を待つとこ立つや女郎花　同（同）
反りかへる程哀れなり女郎花　同（同）
初めから吹折られけり女郎花　同（同）
我丈けに餘りて淋し女郎花　乙二（松窓乙二發句集）
女郎花都離れぬ名なりけり　士朗（枇杷園句集）
こまごまと垣根結びて女郎花　巣兆（曾波可理）
何事のかぶりかぶりぞ女郎花　一茶（七番日記）
墓原や一人くねりの女郎花　同（同）
じやらつくも今日埜ばかり女郎花　同（同）
世の中はくねり法度ぞ女郎花　同（同）
女郎花からみ付けり皺足に　同（同）
蜘の圍の執着深し女郎花　梅室（梅室家集）
折り力なくて又折る女郎花　同（同）
夕暮や見捨てゝ戻る女郎花　蒼虬（蒼虬翁發句集）
手折人に露をかけゝり女郎花　同（同）
井戸の名も野の名も知らず女郎花　同（同）
おろおろと立つや嵐の女郎花　鳳朗（鳳朗發句集）
歌の國の野に男郎花女郎花　青々（倦鳥）

男郎花（をとこへし）（初）

季題解説　をとこめし　おほどち　敗醬（はいしやう）

女郎花に似て花白きもの、莖葉共に太く、高さ四五尺にも達す。

〔參照〕女郎花（をみなへし）

例句

男郎花

露を持つ節は尊し男郎花　りん女（西國曲）
男郎花や流石に是も物弱し　路通（俳僊通選）
澤は田と成りて昔の男郎花　蓼水（塚庵蓼水發句集）
一人居やさす女郎花男郎花　青々（妻木）

殘り撫子（晩）　撫子殘る　秋撫子

季題解説 撫子の花の久しくありて、晩秋の諸草枯れ〳〵なる山野に、其花の紅を點ずる風情よろし　撫子殘るなどと云ひて季題たるべし。

實作注意 殘るといふに感じをもちて詠むべし。　〔參照〕夏―撫子

例句

殘り撫子　撫子や尾花が袖に咲殘り　家足（續明烏）

秋撫子　乙吹や秋の撫子會下の笠　言水（言水句集）

撫子に秋や通ひて白みがち　牧童（北の山）

吾亦紅（晩）　吾木香　地楡　玉鼓　あやめたむ　えびすね

出典校註 【年浪草】九月○陶弘景曰、地楡、其の花子紫黑色鼓の如し、故に又玉鼓と名く云々。是花彙に云ワレモカウ、本名玉鼓、一名地楡。比叡山・鞍馬及び近道に生ず、宿根二月苗を生じ、初生地にしく。獨莖直上高さ三四尺、對し分ちて葉を出す。楡の葉に似て稍狹く、細長にして鋸の齒の狀にて青色、七月花を開く。椹の子の如くして紫黑色云々。○又一種鈴子香夢溪補筆談に出づ。京北山中に生ず。高さ三四尺方莖葉節に對して生ず、形不老草の梢葉に類し稍細腰にして疎齒あり。莖葉を取り遠く拂へば暗に香氣馥郁たり、宛も當門子の如し。親しく捼挼すれば草氣。四五月淡紫花を開く、一朶二三蕚、葉間に垂り綴す。形鐵樹花に似て小にして寸許、圓蕚鈴狀に類す。○立花時勢粧に曰、ワレモカウ・カルカヤ、此の二草は花も咲かず、色もなけれど、たをやかに齒美にして名高き草と云々。芒に類するを眞の吾亦紅と云。

季題解説 山邊に多き薔薇科の多年生草本にして、仲春苗を生じ、莖高さ三四尺、葉は奇數羽狀複葉にして互生す。小葉は細長橢圓形にして緣邊に鋸齒あり。莖の上部に長く枝を分ち、各の枝頭に暗紫紅色の花を着く。四箇の蕚片ありて花瓣なき小花多數集り、桑の實に似て長さ七八分許の橢圓球穗狀をなすにより「團子戴き」の稱あり。又稀には白色のものあり。此花鄙びたるものなれども、桔梗・かるかやと並稱せられて歌にも詠まれ、花

穂亦一特色ありて野趣の愛すべきものあり。根を煎じたるものを傷薬に用ふ。漢名地楡、又玉豉といひ、一に吾木香とも書す。古名、あやめたむ・えびすね。

【例句】

吾亦紅　山城に見苦し野あり吾亦紅　言水（初心もと柏）

白雄五十歌仙に
しやんとして千草の中や吾亦紅　路通（そこの花）

此秋も吾亦紅よと見て過ぬ　白雄（白雄句集）

木のもとや雨の蹴上げの吾亦紅　五峰（はたけせり）

吾亦紅は霜を待つらん細みかな　巨口（已巳句鈔）

絲の莖に淋しさよろし吾亦紅　青々（倦鳥）

嫁菜の花（中）　鶏兒腸

【季題解説】到る處の原野に多く生ずる菊科の宿根草本にして、春舊根より新芽を出し、莖の高さ一二尺に達す。葉は互生、長楕圓披針形にして二三の疎鋸齒あり。秋多くの小枝を分岐し、紫色の舌狀花と中央に黄色の筒狀花を有する頭狀花を開く。花の色濃きものあり。淡きものあり。秋日の野徑を飾る。

【作句注意】嫁菜と呼ぶは、春新芽を摘みて浸物とするを以てなり。又此花を「のぎく」と稱することあるも「のぢきく」の野菊と混同すべからず。漢名は鶏兒腸なり。又句に「花よめな」など云ふはよろしからず思はるゝを以てよめなの花と詠むべし。【參照】野菊（秋）、嫁菜（春）

【例句】

嫁菜の花　野の菊と老にけらしなよめがはぎ　羽紅女（荒小田）

水引の花（中）　金線草

【古書校註】【栞草】八月 和漢三才圖會 水引草、高さ二三尺、葉楊櫨に似て皺まず、秋長穂を出し小き花つく。紅色、その莖圓く纖く紙撚及び水引の如し。故に名く。

【季題解説】山野に自生する蓼科の宿根草なれども、人亦これを取りて垣根に植う。莖の高さ一二尺、葉は倒卵形にして毛あり。先端鋭頭をなす。花は莖上に細長き花莖を抽き、赤色にして胡麻粒ほどの細花を疎穂狀に着く。この細花、上の面赤く、下の面白し。其花莖の穂の紙撚の如くにして長く伸びたるなど、水引草の名に背かず。此草山蔭の木の間に露を帶びなどせるは風姿あるものなり。

【例句】

水引の花　勝尾寺
水引を帶にむしるや勝尾山　子葉（二つの竹）

水引の花　かひなしや水引草の花ざかり　子規（全集）

釣船草（中）　野鳳仙花　鰒貝草　紫釣船

季題解説　山野の陰濕地に自生し、鳳仙花に似たり、莖は多汁にして節々膨起し、高さ二三尺、葉は卵狀、菱形にして鋸齒を有す。仲秋の頃、毛茸ある花梗を出し、淡紫色の美花を開く、この花の有する距は長く且つ尖端卷回する特性有り。

參考事項　つりふねさう Impatiens Textori, Miq.（ほうせんくわ科）山麓の濕地等に生ずる一年生草本なり、高さ一二尺、莖は多汁にして滑澤、節々膨起し有柄葉を互生す、秋日梢上に腺毛ある花莖を分ち下垂せる淡紅紫色の數花をつく、左右の兩瓣大にして距は膨れ後方に長く出でて其尖端卷回す。

龍膽（中）　笹龍膽　龍膽草　えやみ草　思ひ草

古書校註

【御傘】りうたん。りんだうの事也。秋也。思ひ草、説々多けれど定家の御説にりんだうとあれば折を嫌ふべし。

【滑稽雜談】しり（一）「龍膽」〔藻汐草云、龍膽、えやみ草・おもひ草、但し一説に撫子をもいふ。「おもひ草」〔定家卿の云、小花にまじり咲く花は龍膽の花の稍稍に殘れるをいふ。宗祇云、定家卿の説を以て本とす。御傘云、おもひ草は暮秋のものなり。「苦丹」△かやうの説（二）は苦丹と別物か。

【栞草】八月「思ひ草」八雲御抄　龍膽をいふ、又露草をいふ。○くたに、眞淵翁云、こは木丹をはぶきて云ふ。字書に木丹は梔子の花也と出る是也。源氏乙女の卷に、四季をいへるその夏の方に、花橘・撫子・さうび・くたになどやうの花くさ〴〵うゑてとあり。是皆夏也。くたにはくちなしなること明らけし。此花かもとの思ひ草は龍膽と定家卿の御説なれば暫くおく。くたにを龍膽といへるは誤としるべし。

註（一）年浪草・栞草は八月之部に出せり。（二）苦丹を葛の類・岩菊・龍膽等となす諸説を前にあげたり。

季題解説　山野に生ずる宿根草にして、莖の高さ一二尺に達し、莖直立して通常分岐せず。葉は三縱脈ある披針形にして葉柄なく、莖を抱いて對生す。仲秋の頃、莖上の葉腋に、藍色の筒狀花を數花簇生す。花冠五裂し、毎裂片間に小突起あり、内に五箇の雄蘂を有す。萼は鐘狀、先端五裂、針様をなす。根は鬚狀なり、開花の時採取し藥用とす。苦味質にして健胃劑に用ゐらる。又葉を藥として瘧を治すと云ふ。高山に龍膽の異種多し。

參考事項　漢名を龍膽と云ふは、苦味なるにより膽を以て名とするものなり。和名を「えやみぐさ」と云ふは、此草瘧を治すと云ふによりての名な

るべく、彼の千振を富藥と稱するが如きものならん。

【例句】

龍膽

龍膽に幸あるぞいざ折らん　惟然（猿・舞師）
羽黒山にて信仰の塚を拜みて

龍膽や岩のへげ目の日に疎ウトき　曉臺（曉臺句集）
信夫の里にて

水早し龍膽なんど流れ來る　乙二（松窓乙二發句集）

龍膽のかくれ貞なる細みかな　青々（倦鳥）

笹龍膽

天高し笹龍膽のたまり水　木導（正風彥根躰）

相撲草すまふぐさ（三秋）　角力取草すまふとりぐさ　ちからぐさ　をひじは

【古書校註】

【徒然輪】七月、花なり穗也。その穗の所を錢さしの如く結びて、その結び目へ雨草を相かけ引いて勝負し、兒童是を翫とす。その穗は賞する所なし。相撲の名につきて秋季とするものならん。

【年浪草】三秋〔角觝草ニマフトリグサ テカニグサ〕和漢三才圖會に曰、角觝草、力草本。名未詳 原野濕地に有り、葉地に布いて叢生す。忍ミ(?)淺に似てや〻扁く、石菖に似て淺し。秋莖を起て頂に穗をなす、青白色。細子有るべくして見えず。○大和本艸に古歌に菫と讀みしもの是也。小兒其の花に鎰ある所を兩花相交へかけて引いて戲とす。相撲の形に似たりと云々。是は菫にて春の戲也。秋の相撲取草は前說を用ふべし。夫木集には白惡草を讀めるにや、「けふにあふ雲井の庭のすまひ草とかてもあたにうつるものかは　雅經」。

註　○毛吹草に秋に出し「春ともいへも不審」とし、又滑稽雜談に「今按にすまふ取草多くは長生す、しかれば中の說も相當る。併し古來より秋に許用す　只すまひといふ名にて秋にするか、又秋生する種も侍るにや」といへり。

【季題解説】禾本科の「ちからぐさ」と云ふ草にて、自生多し。莖葉ともに强靱、細莖地に布きて叢生し、每節、根ありて乾ける地にも蔓延す。草莖の高さ六七寸より尺許に達し、夏より淡綠色の穗を抽く、穗は數箇に分岐し、小穗を併列す。此草の莖最强し、よつて小兒之を取て穗を縮ね結び、二箇を用ゐて一箇を其結び目に挿しはさみ、兩人莖を持ちて引き合ふに、切れたる方を負とす。或は又兩方穗を立て〻、互に吹き倒して勝負を爭ふ。

【實作注意】人事の角力を秋季とするにより、それに因み、相撲草と云ふにて秋季なり。「ちからぐさ」「をひじは」など云はゞ、其意些か變るべし。

【例句】

相撲草

道ほそし相撲とり草の花の露　芭蕉（笈・日記）

十八といつも思ふな相撲草　諷竹（淡路島）

角力取草

門先や相撲取草のひとり立　一茶（九番日記）

神風や草も相撲取る男山　同（一茶新集）

辨慶草 （三秋）　いきくさ　血止草　根無草　葉酸漿　はちまん草　ふくれ草　はまれんげ　景天

古書校註

【年浪草】 三秋（和漢三才圖會に曰、景天、和名以岐久佐　俗にいふ辨慶草。本綱に景天。極めて種ゑ易し、枝を折りて土中に置き澆漑（一）旬日にして便ち生ず。二月苗を生じ、脆莖やゝ赤黄色を帶ぶ。高さ一二尺、之を折れば汁あり、葉淡綠色光澤あり、柔に厚く、狀長匙の頭及び胡豆の葉に似て尖らず。夏小白花を開く、實を結ぶ、連翹の如くして小く、中に黑子あり粟粒の如し。人皆盆に盛つて屋上に養ふといふ。火を避くべし、故に愼火草の名あり。按に景天は佛甲草に似て大なる者なり。之を折取りて倒に檐間にかくるに日を經て凋まず、後地に栽うるによく活く。馬齒莧にまされり。蓋し辨慶は源義經の家臣にして女童相傳へて强勢の士とす。故に相比して之に名く。以岐久佐も亦活きるの字訓か。

註　（一）水を灌ぐなり

季題解說　高山に生ずる常綠草なれども、觀賞用として培養せらる。春宿根より苗を生じ高さ一二尺許、莖は圓く、葉は厚くして白綠色を呈し、橢圓形にして緣邊に鋸齒あり、葉柄無く互生すれども時に三個づゝ輪生するものあるを見る。花は梢上に小枝を分ち白色にして紅暈ある五瓣五蕚の小花を攢簇す。又淡綠色のものあり。和名をいきくさと云ふは、此草地より拔きて數日を經るも枯れず、後地に栽るに亦生くを以て名づく。辨慶草の名あるも强きを以ての故なり。漢名を景天と稱す。

石蓮華 （初）　瓜蓮華　ほとけのつめ　佛指草

古書校註

【滑稽雜談】 九月。大和本草云、岩蓮花、倭俗の名也。その草の形狀葉めぐり連りて恰も蓮花の開けるが如し。異草也。或は云、佛甲草これなりといふは非也。云或人の說には佛甲草はその葉の形指爪に似たり。故に佛甲草又は佛指甲の名侍り。

季題解說　景天科の多年生草本にして、山中の岩壁等に生じ、又山家の古屋上にも生ずることあり。葉質肥厚、淡綠色にして根莖より層々相重り、其形狀蓮花に似たり。中心に莖を抽くこと四五寸乃至一尺餘、梢上に至るに隨つて漸次葉は小く密に鱗片狀を並す。時に分岐して梢上葉腋に白色の花を着け、穗狀花序をなす。〔參照〕佛甲草 晩夏

例句

岩蓮華

優婆塞が泊りの軒の岩蓮花　　青々（倭鳥）

參考

いはれんげ（Cotyledon Iwarenge, Makino.）（べんけいさう科）

岩上に生ずる多年生草本にして往々屋上に繁茂す、葉質ベンケイサウなど

の如く肥厚して、平滑粉白色の多葉相重りて、其形蓮華狀を呈す、中心莖を抽くこと一尺餘、之れに生ずる葉は小さく鱗狀の苞をなす。時に下部に分枝することあり。花穗には五瓣花密に着く、秋日開花し、白色を呈す。

佛甲草（晩）　こまのつめ　雌のまんねん草

季題解說　佛甲草につきて『栞草』には『大和本草』と『滑稽雜談』を引用せり。『大和本草』には「一夏草」と云、『滑稽雜談』は「岩蓮花」と云ふも、「篤信は非なりとす」と附記せるを「岩蓮花にあらずとせば佛甲草雜物にや」とあり。今、植物學者は佛甲草を「めのまんねんぐさ」なりと云ふ。景天科の多年生草本なる「たかのつめ」に似て小なるものにて、「たかのつめ」を、雄のまんねんぐさ」と云ふに對する稱呼なり。又これを「こまのつめ」と云ひ一名を「雌のまんねんぐさ」と云ふなり。葉は線狀多肉にして散生し、平扁なる圓柱形をなし、先端鈍頭なすものにして、花は小なる五瓣の黃花を夏秋の候に着生するを以て、『栞草』は晩秋に入るゝも、花候違へり。〔參照〕石蓮華イハレンゲ

夏解草（初）　吉祥草　觀音草

古書校註

【隻纏輪】　七月〔觀音艸〕草花肆にあるもの葉菊に似て少し狹く短し。石菖に似てしのぎなし。六・七月莖を抽て小花をあらはし、穗を成す、淡紫。その薔さき愛すべし。然るに大和本艸には觀音草、無花無穗といへり。京師の俗中元の日この莖を以て蓮の飯を縛る、觀音草の名義によるかと云ふ。〔夏解草〕夏中を行ひ果す僧、何にても栞草を絲にて結び、且越へ送るをいふ也。をだまき（一）に水葵をつかねて送るといへる出所いぶかし。

【年浪草】　七月〔解夏草〕（上略、二）〇大和本艸に曰、一夏草、葉麥門冬の大なるものなり。〔觀音草〕用藥須知に云、吉祥蘭、吉祥草也。六・七月莖を抽て小淡紫花を開き穗をなす、葉は大葉麥門冬に似て薄し。

註　（一）俳諧の作法書の名。（二）解夏・夏書納の條參照。

季題解說　夏解草の事は『栞草』に『釋氏要覽』を引用して「僧尼解夏の日絲を以て茆を束ねて檀越に遺る、これを夏解草といふ、今この草を詳にするに、已に五分法身の座とす、故に吉祥草と名づく」とあり、又『漳州府志』を引て「家に吉事あれば、おのづから花開く、故に吉祥草と名づく」とあり、

今、吉祥草と云ふもの百合科の多年生草本にして、稍陰濕の地を好み暖地に自生するもの少からず。又庭園にも之を植うるは、名のめでたきと、四時翠にして枯れざるとを以てなり。此草の莖は地下及地表を匍匐して葉を叢生し、其下部に根を下す。葉は狹長にして尖り長さ一尺餘に達し、やぶ

らんに似たり。秋日叢間に花軸を抽きて淡紫色の花を穂狀に着け、花後赤色の漿果を結ぶ。「京師の俗中元の日、此莖を以て蓮の飯を縛る、觀音草の名義によるか」と「栞草」に云へり。〔參照〕宗教—解夏（夏）夏花（夏）

星草（初）　穀精草　白玉草　たいこ草

〔季題解説〕沼澤其他の水邊に生ずる草にして、葉は細長く、一株に數十葉を叢生す。秋叢葉の間に數莖を抽き、其莖上に圓尖の一小球を結ぶ。綠白色なり。之を星に見立てゝ名とす。此球は、多數の鱗片の集合するものにして、それに一花つゞを藏す。「しらたまほしくさ」「くろほしくさ」等あり。

時鳥草（初）　油點草

〔出典及考證〕【栞草】九月　大和本草　葉は紫亭に似て短く小也。筋多し、又篠の葉に似たり。莟は筆の如し。花秋開く、六出あり、中より蘂出て又花の形をなせり。葉ごとに小紫の點あり、杜鵑の羽の形に似たり。しぼり染の如し、莖の高さ一二尺にすぎず。

〔季題解説〕山間陰濕地に生ずる百合科の多年生草本なれども、又觀賞用としても栽培せらる。莖の高さ一二尺に達し、長楕圓形の抱莖葉を有し、葉莖共に毛あり。又葉に斑紋あるを常とす。秋、葉腋に形狀百合花に似たる六片の花を開く、花は白質にして暗紫色の斑點あり、ほとゝぎすの羽の斑に似たるを以て此名あり。

〔實作注意〕「きばなほとゝぎす」「たまかはほとゝぎす」「やまほとゝぎす」等の種類ありて、其花變すべしと雖、此草の名は鳥の名に紛らはしければ、句には草の花なることの確かなるやうにありたし。

草牡丹（初）

〔季題解説〕山野に生ずる有毒植物なり。毛茛科の多年生草本にして、稍木質をなせる直立莖は二三尺に達す。此草全體に毛茸多し。下につける葉は三出複葉にして三乃至數裂片をなし、上部の葉は單葉なるも往々裂片をなす。夏秋の候、莖頭及葉腋に密繖花序をなし、帶紫青色の長き萼片ある花を開く。此萼片の上部は少しく反曲す。實は長き鞭狀の嘴を有する瘦果にして毛茸あり。風吹けば飛散す。

〔實作注意〕草牡丹を夏とするもの有り、又秋とするもの有り。總て斯くの如くに二季に亘り、其物の風姿の感じ何れの季とも定め難く、何れの季とするも宜しきものは、暫らく二季に亘る季物として取扱ふべし。將來詠出する者多きに至らば、季は自からに定まる可しと思ふ。

松蟲草（初）　山蘿蔔　輪鋒菊

季題解說　山蘿蔔科の宿根草本にして山野に生ず。莖の高さ約二尺に達す。葉は羽狀に細裂したる複葉にして互生す。八九月の頃、稍菊に似たる多數の合瓣花を頭狀に着生し、外圍の花瓣は大形、不齊にして淡紫色、內部のものは整齊したる小形にして花の色甚淡し。

賞作注意　一名を輪鋒菊と云へるは、其花の形によつて名づけし物なり。高山には異品有り。

參照參考　まつむしさう Scabiosa japonica, Miq. 一名　りんぼうぎく（まつむしさう科）　山野に生ずる二年生草本にして、莖の高さ二三尺にして枝を分ち、葉は對生して羽狀に分裂す、花は頭狀をなして、長き莖の頂につき、其外圍のものは大形不齊にして、內部のものは稍整齊にして小形なり、下に總苞を有す、雌雄蕊ありて分立し、花下に子房あり、秋日開花し、青紫色を呈す。

露草（中）　月草　かまつか　かま草　うつし花　ほたる草　あを花　ばうし花　鴨跖草　鴨頭草　碧蟬花

古書校註　【年浪草】八月。〇時珍曰、鴨跖草は花を碧蟬花といふ。三四月苗を生ず、紫莖にして竹葉、嫩なる時食ふべし。四五月花を開く、蛾形の如し。兩葉翅の如し。碧色愛すべし。巧匠その花を採り汁をとりて畫色を作る。青碧にして黛の如し。〇倭名抄に曰、鴨跖草。楊氏漢語抄云和名都岐久佐、〇仙覺抄に曰、鴨跖草・つき草と稱す。月草は露草也。蕣の花は朝日影にこそ咲くを、此の花は月影に咲けば月草と云ふなり。

季題解說　路傍・濕地・畑など至る所に生ずる宿根草にして、莖の高さ尺餘に達すれども、地に臥す傾あり。葉は互生にして莖の節毎に生じ、長卵形或は廣披針形、縱脈多く、基脚鞘狀をなして莖を包み、莖頭に花苞を生ず、その形烏帽子に似たり。苞少しく開きて花を出す。萼四葉にして三葉は前、一葉は後にあり。花は三瓣の藍色なり。子房麥粒狀にして一柱頭卷回し、雄蕊長く出づ。此草近江にて栽培し、花汁を絞りて「青花」（はなだ紙）を作る。その液を以て染物の模樣の下繪をかくに用ふ

るなり。往古は此露草を以て衣を染めたりと云ふ、又青き色を花色といふは、此露草の花色より起れるなりとは本居宣長の説なり。

實作注意 此草の名も亦異名多し。「かまつか」「かまぐさ」「うつしばな」「ほたるぐさ」「あをばな」「ばうしばな」等にて其他にも猶あるべし。漢名は鴨跖草、また碧蟬花、鴨頭草とも書けり。

例句類句

露草　露草に月荷ひ込む馬屋かな　ノ松（浮世の北）
　露草や家中の兒の剃こかし　儿董（井華集）
　露草や月影持て明わたり　呂暁（芭蕉袖草紙）
月草　月草の野上とや言はんよしもあれば　曉臺（曉臺句集）
　月草は露もて花をくゝるかな　同（同）
　月草の色見え初めて雨寒し　同（同）

參考　つゆくさ Commelina communis, L.（つゆくさ科）路傍畑地に自生する一年生草本にして、莖の長さ二尺餘に及ぶ、基部平臥上部上昇す、葉は互生し、基部鞘をなす、夏日、大なる苞の間に花を開く、花蓋三片大にして藍色を呈す。

翁草（おきなぐさ）（初）

古書校注

【滑稽雜談】七月。大和本草に云。麥門冬の一種にて、葉は大葉麥門に同じ。葉、春及び夏の初め純白也、故に翁草といふ。後漸く青くなる。○按に順の和名抄など、白頭翁を翁草と和せり。然れども本草綱目（一）を考ふるに別物なり。白頭翁は俗にいふ猫草にほゞ似たり。今いふ翁草には非ず、翁草は初生の葉純白也、秋月紫花を開く、穗の如し、なほ考ふべし。

【篗纑輪】七月。二種あり、一種は是界草、一種は大葉の麥門冬也　とも に白頭翁と名く。爰に記せしものは則ち大葉の麥門冬也。春苗を生ずる時其葉白髮の如し、依つて名とす。其葉にかゝらば春季なるべきもの也。其葉長ずるに至つて青色と成る、夏秋淡紫の小花を開く、愛すべきほどの花にあらず。

註（一）菊の異名をも翁草といふ（二）本草綱目「白頭翁、其苗似now葉而大、抽一莖莖頭一花紫色似木槿花云々」。

季題解說　麥門冬（ヤブラン）の一種にして、初生の葉純白、後に綠色となるもの、これを翁草と云ふ。但し白頭翁には非らず。毛茛科（キンポウゲ）の翁草は春なり。又菊の異名を翁草とも云ひて紛らはしければ混ずべからず。

茴香の實（うゐきやうのみ）（中）　くれのおも

季題解說　茴香は古名を「くれのおも」と云ひ、香氣ある藥草なり。實は二分ばかりにして細く、稜あり。熟して散り易し。「猿蓑」の連句に「湯殿は

笹の簀子侘しき」とある芭蕉の句に「茴香の實を吹落す夕嵐」と云へる凡兆の附句あり。〔季題〕夏―茴香の花(ウヰキャウ)

〔例句〕

茴香　茴香に浮世を思ふ山路かな　浪化（浪化上人發句集）

實のおぼろ葉の朝露やくれのおも　桐雨（其袋）

弟切草（初）　おとぎりす　藥師草　青藥　小蓮翹

〔古書校註〕

【後纏輪】七月、葉は箒木に似て兩々相對す、尤枝椏あり、葉をもんで其汁を暫く置けば紫色となる。繪の具の生臙脂と云ふもの此の草の汁を綿に浸せるもの也。唐より來る是也と云ふこと、本邦にて漸く近年知るとぞ。七月小黃花を開く。單にして五瓣也。活法の書に是を藥師草とも云へり。大和本草其外の草史に藥師草の名目はみえず。弟切草と云ふは相傳ふ、昔花山院の朝に鷹飼晴賴と云ふ者、其業に精しきこと神の如し。鷹傷を蒙ることあれば、草をもみて之を貼くるに、忽ち癒ゆ。時の鷹匠これを乞ひ問へども堅く祕して云はず。家弟あり、竊かに之を洩らす。晴賴怒にたへず、其弟を忽ち切殺す。是より其名ありとぞ。且つ此の草金瘡折傷一切の無名腫に葉をもんで貼くるに神效ありと云ふ也。

〔季題解說〕おとぎりさう科の多年生の草本にして、山野路傍に自生す。莖の高さ一二尺、葉は無柄にして黑色の斑點を有し、卵狀披針形にして基脚莖を抱いて對生す。晩夏より初秋に至りて莖上又葉腋に小枝を分ち、黃色の五瓣花を簇生す。此草は金創及打傷、又蛇毒等を治するに效あり。因って藥師草と云ひ青藥とも云ふ。

〔例句〕

藥師草　うたかたの哀と見るや藥師草　湖山（木の友）

正秀評

瑠璃色に咲かせてしかな藥師草　李渓（類題發句集）

鞆繪草（初）　くさびやう　ぴやうおとぎり

〔季題解說〕山野に自生するおとぎり草科の多年生草本にして、莖の高さ二三尺に達す、葉はオトギリサウに似て大きく薄く對生し、葉底相接す、秋日梢に分枝し聚花穗をなす。花は黃色を呈し、大にして斜形の五花瓣巴狀をなす、多雄蕊三體をなし中央に大なる一子房あり。別名をくさびやう、ぴやうおとぎりともいふ。

錦草（初）　地錦　乳草　いちびゝさ

〔季題解說〕大戟科に屬する一年生草本。莖・葉を切れば白汁を出すにより、

乳草の一名あり。田野庭園に生ずる草本にして、莖は根際より多くに分岐し、纖細にして地に敷きて平臥す。葉は楕圓形にして對生す。夏秋の候葉腋より枝を分ち、花を着く。果實は三稜形にして、表面平滑無毛なり。

千振（せんぶり）（中）　當藥（たうやく）

季題解説 千振は山林中に自生多き、龍膽科の藥草なり。莖は方形にして暗紫色を帶び、高さ七八寸。葉は披針形、狹長にして寸餘、對生す。秋、莖上に枝を分ち、又葉間に長柄を出し、五片に全裂したる小花を開く。花は白質にして紫脈あり。此の草頗る苦味あり。根は殊に苦味甚し。花咲ける時、採りて陰乾にしたるものを煎藥とす。煎じて屢振り出すも猶苦味あり。因つて千振の名あり。又當藥と稱す。病に當りて卓效あるを以てなり。健胃劑又驅蟲劑として用ふ。此草の山林中に花咲ける風姿また愛すべきものあり。**參照** 人事—藥掘（クスリホリ）

車前子（おほばこ）（中）　おんばこ

古書校註 【栞草】八月〔車前子（オホバコ）〕蘇頌圖經　春の初め苗を生ず。葉地に布く、匙の面の如し。年を累ねし者長さ尺餘、中に數莖を抽きて長き穗を作す。鼠の尾のごとし。花甚だ細密也。青色微赤き實を結ぶ。葶藶（テイレキ）のごとし。今人五月苗を採りて七八月實を採る。滑稽雜談　此の者苗或は花をいはず、古來より實を以て八月の部にせり。故實に准ずべき也。

季題解説 車前草は至る處に多く野生する宿根草にして、春苗を生じ、其葉は地につきて叢生す。夏日二三の花莖を抽き、多數の小花を穗狀花序に排列す。その種子は蒴にありて扁平の小粒なり。仲秋熟して黑色となる。

實作注意 此草を又おんばことも云ふ。種子は藥用として利尿に效あり。又車前子を主劑としたる藥物を久しく服すれば、身を輕くし、能く岸谷を跳り越ゆることを得、長生にして老衰せずと仙經にありと云ふ。今は車前草の花を夏の季として註すれども、古人は實を云ひて花を云はざりしものなり。**參照** 夏—車前草の花（オホバコノハナ）

烏頭（とりかぶと）（中）　かぶとばな　かぶとぎく　やまかぶと　おう　草烏頭（さうう づ）　附子（ふし）

古書校註 【年浪草】八月。○蘇頌曰、附子、其の苗高さ三四尺、莖四稜を作す、葉艾に似て其の花紫碧色穗を作す。其の實細小桑椹（クハノミ）の如し。黑色、本只附子一物を種う、成熟に至る後乃ち四物有り。天雄、烏頭、側子、附子、是也。

○顯昭袖中抄に曰、奥の夷は鳥の羽の莖に附子と云ふ毒を塗りて鎧のあき間をはかりて射ると云へり、附子矢といふは此の事也。

註 (一)大和本草によれば草烏頭とは川烏頭の野生なりと　烏頭は烏中の根をいふ、即ち附子にて劇毒あり

季題解説 烏頭は根に猛烈なる毒を有する植物にして、附子(ブス)と稱するは此草の古き根塊を云ふ。アイヌ人の熊を射る時、矢の先に塗りつくる毒は、此附子を用ふと云ふ。かゝる有毒植物なれども、其花の美しきを以て園圃に多く栽培せらる。此草は毛茛科の宿根草にして山地に自生せり。莖の丈二三尺、葉は掌狀にして深く分裂し、殆ど其基部に達す。仲秋、梢上に總狀花序をなし、烏帽子狀をなせる紫碧色の花を開く。烏頭の根は丁幾に製劑して「リウマチス」に塗布してよろしく、其他神經系統の諸病に效果ありと云ふ。烏頭に種類多し。

例句
鳥かぶと
紫の花の亂れや鳥かぶと　惟然(鵜獅子集)
立ながら露にくねるや鳥かぶと　大江丸(遊子行)

苦參(くらら)(中)　苦識(くらら)　くさゑんじゆ　きつねささげ　苦參引(くららひ)く

古書校註 【年浪草】八月。時珍曰、苦は味を以て名く、參は功を以て名く。○和漢三才圖會に曰、その花葉梢に穗を成す、七八月開く。莖根葉共に藥用とす、故に根を連ねて之を採る。

季題解説 苦參は荳科の宿根草にして山野に自生する有毒植物なれども、藥用として效あり、苦は味を以て名づけ、參は功を以て名つくと云ふ。此草の莖、高さ四五尺に達し、多數の小葉よりなれる羽狀複葉を互生す。花候は六、七月の頃、梢上に總狀花序をなし、淡黄色の蝶形花を穗狀に綴る。此穗の長きものは七八寸に及ぶ。花過ぎて細長き莢を結ぶ。

實作注意 苦參の花候は晩夏なり。然るに古來これを夏の季とせず。『栞草』には仲秋の季として苦參引く、を擧ぐるのみにして花を顧みざるが如し。思ふにこれ有毒植物なれども藥用として效あり。因つて藥として採取する時期を以て季と定めたるものならん。此例他にも多し。古人の季を定めたる意を知るべきなり。苦參もし花を云はゞ晩夏の季なり。苦參引に關連して秋季なり。**參照** 人事—苦參引(クララヒク)

木賊(とくさ)(中)　砥草(とくさ)

季題解説 木賊は木賊科の多年生植物。山野に自生す。莖は緑色中空にして管狀をなし、節あり。草丈け二尺許。葉は小形鱗狀にして輪生し、鞘狀をなす。此の植物は觀賞用として栽培し、又莖は表面堅きを以て、木材・角等を砥ぐ

に用ふ、故に砥草といふ。仲秋之を收めて貯ふ、[illegible]人事―木賊刈る（仲秋）

思草（おもひぐさ）（中）　きせる草（さう）　オランダぎせる　なんばんぎせる

季題解説　列當科（ハマウツボ）の寄生植物。萬葉集十に、「みちのべの尾花が下のおもひぐさ、今さらなにのものかおもはむ」とあるは、此の「おもひぐさ」なるべしとも云へり。此の植物の開花せる狀、稍〻煙管に似たるを以て「きせるさう」「オランダぎせる」「なんばんぎせる」等の別名あり。

實作注意　尙「おもひぐさ」の別名を有するものに、樓・芝・紫苑・茅萱・鴨跖草・瞿麥・煙草・龍膽・女郎花等あり、「おもひぐさ」とのみにては何れの種類なるや明かならず、句作には心すべし。

參考[illegible]　なんばんぎせる Aeginetia indica, L. 一名　おもひぐさ（はまうつぼ科）山野に生ずる一年生草本にして、ス、キ、サタウキビ或はミヤウガの根に寄生し、普通高さ五六寸基部より數莖を直立す、黃色を呈し葉綠を有せず、花期は秋日にして、淡紫色を呈する大花を各〻一簡莖頂に着き側に向うて開く、萼は一片にして船形をなし黃條あり、花冠は長き筒をなし邊緣五裂す、中に二強雄蕋一雌蕋あり、花後蒴を結ぶ中に小種子多し。

忍草（しのぶぐさ）（三秋）　やつめらん　軒（のき）しのぶ　苔（こけ）しのぶ

古書校註

【御傘】（わすれ草）（上略）忍ぶ草を忘草といふ說もあり。さるによりて忘草と忍草とは一草二名と心得たる古人も有り、又別々といふ說もあり。（下略）（しのぶ摺）新式にも忍草、秋也とこそ侍れ。

【滑稽雜談】九月。弘景が本草に曰、石長生、一名丹蜙、又丹沙蜙　是細々蜙、葉花紫色。南中多く石巖の下に生ず、葉は蕨に似て龍鬚の如く、黑くして光漆の如し。高さ尺餘、餘草とまじはらず。○時珍曰、石長生、四時凋まず、故に長生といふ。△是世俗の賞する忍草とは是也。○玄旨闕疑抄に曰、忍草の事無栽閑書に、惣じて昔より忍草・忘蜙問答也。檜の木の葉に似たるを忍蜙と云ひ、一ッ葉に似たるを忘蜙と云ふ常也。されども、さのみ草の形なんどを尋ねて詮なし、只一蜙二名也。此の分にて置くべき也とあり「忘るゝもしのぶも同し古鄕の軒端の草の名こそつらけれ」この歌一草二名と聞えたり。（中略）（二）△今按にしのぶ草といふ物、歌によめるはたしかに決し難し。和俗のしのぶとて小器に植ゑ、軒下に釣って賞するは石長生の事也。（中略）又秋紅葉するといへるもの石長生には不都合なり。しかれども連俳の秋に用ひ來るは、このものの秋に成ずる色によりてなるべし。（下略）

註　（一）八雲御抄・藻鹽草・御傘等の說をあげたり。今略す

季題解説　こゝに云ふ忍草とは、夏軒端に吊りかくる忍にはあらず。山中の

樹皮、又は岩石の面、山家の古き軒端などに生る、一名「やつめらん」の事にて、一種の羊歯の類なり。根莖横臥して暗褐色の毛茸あり、葉は全邊革質の線形にして、互に接近して生じ、葉の面に小黒點を分散し、葉裏には、二列に並びて顯著なる黄褐色を呈する子嚢群を生ず。

【實作注意】此草を今「のきしのぶ」と呼べど、夏の「吊忍」に紛はしければ、俳句には專ら忍草と用ゐるがよろしからん「のきしのぶ」の種類多し。「和名抄」に「垣衣」を「しのぶ」と訓みたりと云へど、此名、優に過ぎて句には用ゐ難かるべし。【參照】夏―吊忍（ツリシノブ） 冬―枯忍（カレシノブ）

【例句】

忍草

御廟年經て忍ぶは何をしのぶ草　芭蕉（甲子吟行）
荵草宙にぶらりの姿かな　浪化（浪化上人發句集）
夕雨や奥野の里の荵草　闌更（半化坊發句集）

眞間寺にて
眞間の井や道を千尋に荵草　蓼太（蓼太句集）
花持たば忍ばしからじ荵草　素檗（素檗句集）

はなわらび（中）

おほはなわらび　ひかげわらび　かげわらび

【季題解説】山野、林中の陰濕地に自生する羊歯植物にして、秋日宿根より出づる一葉は、大なる數回羽狀複葉にして、全體稍「のだけ」に似たれども、裂片は小く、又各小裂片の邊緣は截狀鋸齒をなす。莖は葉柄に抱かれて出で、其上端分岐し、魚卵の子嚢を攢簇す、具さには「おほはなわらび」と云ふ。別に「ふゆのはなわらび」と云ふものあり。「なつのはなわらび」等、同じく瓶爾小草（ハナヤスリ）科の植物なり。

蓼の花（たでのはな）（中）

蓼紅葉（たでもみぢ）　蓼の穗（たでのほ）　穗蓼（ほたで）　穗蓼原（ほたではら）（増補）

【古書校註】

【滑稽雜談】七月（一）〔穗蓼〕按に先に穗を出して後に花となる也、本草に穗の說なし。「花」は尤も秋也。〔毛蓼花〕七月・八月の間花を發す、馬蓼の花に同じ。

【篗纑輪】八月「毛蓼の花」高きもの七八尺、花といふは穗也。淡赤し、葉甚だ大きく毛あるものをいふ。原野村はづれの濕地に多し。

註（一）他書は多く八月とす。

【季題解説】蓼の種類甚多く、初夏より花梗を出すものあれども、蓼の花を見ること最多きは秋なれば、蓼の花は秋の季の定めなり。又其葉の紅葉して水邊野徑の眺あるも秋に限る景なり。蓼の花穗長きものあり、短きものあり。花の色の紅なるもの、白きもの、花穗の密なるものあり、疎なるものあり。又その葉披針形のもの卵形のもの等あり。或は又山中の水流に從ひて長く水底に莖を引きて根を下し、水淺き所に至り擡頭して花穗を出すも

のあり。[illegible]大毛蓼[illegible]夏蓼

【例句】

蓼の花

醬油汲む小屋の境や蓼の花　其角（末若葉）
花も憂し佐野の渡の蓼屋敷　同（焦尾琴）
酢を乞ふあり隣の蓼の花盛　同（[illegible]光集）
衣食住三津の浦なり蓼の花　支考（草二吟集）
挿溜の錦や蓼の花盛　也有（羅葉集）
三徑の十歩に盡きて蓼の花　蕪村（蕪村句集）
下露の小萩がもとや蓼の花　同（蕪村遺稿）
黄に咲くは何の花ぞも蓼の中　同（同　）
山河の野路に成行くや蓼の花　几董（井華集）
花か穂か紅葉か蓼の紅は　同（同　）
蓼の花嵐の後を盛りかな　蓼太（蓼太句集）
花を見て蓼の多さよ此邊　召波（春泥發句集）
門前に舟繋ぎけり蓼の花　子規（全集）
竹瓮つむ江の築き畑の蓼の花　白雲郷（倦鳥）
白蓼の花村口に今年もぞ　青々（同　）

蓼の穂

道缺けし土をかぶりて蓼の花　松濱（寒菊）
蓼の穂を眞壺に藏す法師かな　蕪村（蕪村遺稿）
こまごと穂にこそ出づれ川原蓼　乙二（松窓乙二發句集）

穂蓼

鮓賣を垣から招く穂蓼かな　也有（羅葉集）
甲斐が根や穂蓼の上を鹽車　蕪村（蕪村句集）
町に入る小川濁れたり穂蓼咲く　柳翠（懸葵）

大毛蓼（中）　紅草　おほたで　おにたで

【季題解説】蓼科に屬する一年生の大草本。草の高さ五六尺に達す。葉は濶くして卵形をなし、先端尖り、長柄を有す。莖葉共に大形且つ毛を密生するを以て此名あり。秋、莖頭枝梢より花穂を垂れ、多花を攢簇して紅色を呈す。此植物は觀賞用及藥用に供せらる。【參照】蓼の花

藍の花（中）　たであゐ　藍　蓼藍

【季題解説】支那原産の蓼科一年生の草本にして、暖地に栽培す。莖の高さ二三尺に達し、葉は濶楕圓形にして互生す。葉柄の基脚に膜質の托葉ありて莖を包むこと、他の蓼科の植物に略異ること無し。九月頃梢葉間に花穂を生じ五瓣の細紅花を綴る。花後赭褐色にして光澤ある三稜形の小果を結び、實熟して黑色となる。葉を以て藍玉を製す。藍は本邦古代より用ひし染料

なりしも、明治の末頃より印度藍輸入の壓迫を受け、次で獨逸國より人造染料の輸入ありて、經濟的に藍栽培を不可能ならしめ、主産地たりし德島縣に於ても、今は一畝の藍畑さへ見る事無くなりたり。

〔實作注意〕 藍の染料として有效なるは其葉なるも、莖の下部の葉には少く、上部の葉に多し。蓼藍の他に木藍あり。『和名抄』に木藍を「都波岐阿井」と訓ずれども、當時木藍は移植せられずと云ふ。木藍は印度藍にして「つばきあゐ」に非らず。然れども昔椿の生葉を揩り碎きて、萠黃色染をせしことあり。又蓼藍の葉汁及藍澱は諸毒を解すと云ふ。〔參照〕春―藍蒔く(アキマク) 夏―藍刈る(アキカル)

〔例句〕

藍の花　　紅に移り心や藍の花　　德布(田毎の日)

〔參考〕 あゐ Polygonum tinctorium, Lour.(たで科) 蓋し安南地方の原産にして、園圃に栽培せらるゝ一年生草本なり、莖の高さ二尺内外、葉は長楕圓形にして互生し、葉柄の基に膜質の鞘狀托葉ありて莖を包む、秋日莖頭葉腋に長梗を抽き、紅色の小花を穗狀様につゞる、花後赭褐色にして光澤ある痩果を結ぶ、葉を染料となすべし。

茜(あか)草(ね)（初）　あかねかづら

〔古書參照〕 【年浪草】八月(二)保昇曰、その根紫赤、八月采る。○和漢三才圖會に曰、茜は赤根也。河州石川郡山田の茜を上となす、以て絳(アカイロ)を染むべし。近世蘇方木を用て茜に代ふ。

〔季題解說〕 茜は山野路傍にも自生する宿根草にて、莖は粗糙にして稜角、刺毛ありて中空蔓性なり。又稀には刺毛無きものあり。葉は四個輪生し長柄あり。長卵形、先端尖り、細毛を密生す。八月の頃、莖上に四若しくは五裂せる白色の合瓣花を綴り、梗は三叉をなし分岐す。花後生ずる漿果は紅色又は黑色なり。茜に八葉輪生のものもあり、又細長葉のものなど異種あり。根は紅色を染むるに用ひ、野生染料としては主要なる物なり。『萬葉集』に「茜根刺」の枕詞見ゆれども、其頃既に染色に用ゐしや否やは確かならず。和名抄及延喜式には茜草を染色に用ゐたる事を記せり。〔參照〕人事―茜掘る(アカネホル)

〔參考〕 あかね Rubia cordifolia L. var. Mungista, Miq.(あかね科) 山野に生ずる蔓性の多年生草本にして、根は太き髯狀をなし、黃赤色を呈す、莖は方形にして逆刺あり、葉は長柄ありて、四箇輪生し、(實は二片正

葉、二片托葉）心臟形或は長卵形を呈し、又逆刺あり、秋黄色の花穗狀に集りつく、花冠五裂し、五雄蕋あり、花後黑色球狀の實を結ぶ、根は細條多く簇り、黃赤色を呈し、往時はこれを染料とす。

煙草(たばこ)の花(はな)（初）　花煙草(はなたばこ)

古書校註【年浪草】八月○花鏡に曰、烟花、一名淡把姑。初め海外に出で後種を漳泉に傳ふ。今地に隨つて有り。木は春不老（一）に似て葉は菜より大なり。紫白の細花を開く。葉老いて曝し乾し、細切すれば糸の如く後美なり。その名を金糸烟といふ。○和漢三才圖會に曰、八九月莖の頭に朶椏(エダマタ)を出して小白花を開く、赤色を帶ぶ。ほゞ紫苑花に似たり。子を結ぶ、内に細子あり、黃褐色。

註（一）からしの一種、大がらし。

季題解說　煙草は茄科の一年生草本にて暖地に栽培す。葉は大なる楕圓形にして稍尖頭をなし、莖と葉とに共に粘質の毛茸あり。花は漏斗狀をなせる合瓣花にして、莖頭に短穗狀に排列し、其色淡紅紫色にして美なり。今畑に栽培せるものを見るに、主として葉を採取するが目的のものなれば、花梗を出せば速に心を摘み、又腋芽も力めて除去し、花は悉く咲かしめず。種子を取るものに花を殘せり。果實は蒴をなして内に細子を藏す。

實作注意　『栞草』には花候を八九月として仲秋の季に出せるも、今實際に就てこれを見るに晚夏既に其花の開けるを見る、因つて初秋の季に移す。

〔參照〕若煙草（春）

例句
煙草の花

煙草咲く窓や麻卷の紅鹿子　箕十（早　春　集）
半ば葉はかゝれて咲ける煙草哉　一七（田毎の日）
煙艸大葉に思ひもかけず花さきぬ　青々（倦　鳥）

參考　たばこ Nicotiana Tabacum, L.（なす科）南米の原産にして栽培せる一年草本なり、莖の高さ五六尺許に及ぶ、葉は大きく楕圓形にして、稍尖り、全邊にして、莖葉共に腺毛を有す、花は淡紅色にして先端濃く、夏日梢頭に集り枝を分ちて短總狀をなす、花形漏斗狀にして長さ一寸許あり、尖端は五裂す、花中に五雄蕋あり、果實は蒴をなし宿存蕚を伴ひ、内に細子あり、葉は喫煙料として需用多し。

草棉(わた)（晚）　棉畑(わたばたけ)（地理）

季題解說　草棉は東印度の原產にして、我國へは延曆十八年七月、三河國に漂着せし蠻人より傳へられしが、播種宜しきを得ざりしにや、その種、中頃世に絕果てたりと覺しく、『夫木集』に『敷島のやまとにはあらぬから人

のゐてし棉の種は絶にき‖といへる衣笠大臣の歌あり。其後に再び渡来せし年代詳ならざれども、永祿・天正の頃ならんと云へり。〔参照〕桃吹く 夏―棉の花

桃吹く（三秋）

古書校註

【年浪草】〔木綿取る・桃吹く ― 三秋〕和漢三才圖會に云、木綿は蠶綿を眞綿といふ故に、之を木綿と稱す これ斑枝花に非ず、草綿是れ木綿也。實を結ぶ、大さ桃の如し。中に白綿有り、往昔蠶綿の外穀木を以て衣服とし、之を木綿といふ。中古の草綿の始め也。その實桃の如し。四つに裂けて中より白綿を吹出す、之を桃吹といふ。攪車を以て中の子を繰り去り、竹を以て小弓をつくり、弦を牽いて綿を彈きそれをとゝのへしむ。

季題解説

木綿の實は、桃の實の形に似たれば「もも」と呼ぶ。晴天に自ら裂開し、中なる白き「わた」を吹き出す。これを桃吹くとは云ふなり。

〔参照〕草棉 人事―木綿取 夏―棉の花

麻の實（初） 麻蕡 種麻

季題解説

雌麻即ち實麻の種子をいふ。即ち雌麻の花後結べる微細扁平の瘦果にして、これを「あさのみ」又「をのみ」といふ。種子も亦微小にして扁平、胚乳は肉質、胚は屈曲す。之を煎りて調味料とし、或は生のまゝ小鳥の飼料とす。又これより香料を採り、麻子油をとる。〔参照〕夏―麻

蓖麻（初） 唐胡麻 からえ

古書校註

【後須輪】七月。和名唐荏、又からがしは。葉は大麻の如く甚だ大なり。夏冬の間花穗を抽で白黄也。高さ丈餘に及ぶ。實は大毒ありとぞ。

季題解説

亞弗利加原産の大戟科の一年生草本にして、古くより我國にて園圃に栽培せらる。莖の高さ六七尺、圓くして空洞竹の如し。葉は大にして掌狀に深く分裂し、各裂片には粗なる鋸齒を有す。秋日梢上、或は節間より花莖を抽くこと五六寸にして、總狀花序をなして淡黄色の小花を綴る。花は單性にして雄花は上部に雌花は下部につく。蓖麻子油は此種子より得るものにして用途多し。「本草」には毒草中に入れたれども、油は食用として害無く、實も亦食用となる。但し牛馬は此草を喰はず。

実作注意

花を詠ずるを主とすれども、又其實に及ぶもよろし。

例句

蓖麻　悼嵐蘭
蓖麻の實をしぼり出す涙かな　山店（芭蕉庵小文庫）

獨活の實（中）

季題解説　五加科の草本、花後黑紫色の小漿果を結ぶ。〔參照〕春―獨活　夏―獨活の花咲く

紫蘇の實（中）

季題解説　紫蘇の實は長き穗に、花萼の後殘る。實も香氣あり。子粒微小にして芥子粒の如し。穗のまゝに摘み取り、生にて食用とし、又鹽漬として貯ふ。〔參照〕夏―紫蘇

例句

紫蘇　紫蘇の實をしごける指のかをりかな　兵衛（倦鳥）

唐辛（三秋）

蕃椒　なんばん　南蠻辛　南蠻胡椒　天井守　高麗胡椒　さかり　唐辛　天竺まもり　獅子唐辛

古書摘要

【栞草】三秋。天井守、和漢三才圖會、番椒は南蠻の種なり。俗に云南蠻胡椒、今唐芥子。二月種を下し、葉柳の如くにして小、亦胡椒の木の葉に似て和く、五月小白花を開き實を結ぶ。數品大小長短尖りたると圓きとの種あり。初め青く熟すれば紅なり。秀吉公朝鮮を伐つとき彼國より渡る、故に俗又高麗胡椒といふ。（）天井守、番椒の一種、ことごとく上をむく故に名くとぞ。〔猿蓑〕附句　てんじやうまもりいつか色つく　去來。

季題解説　たうがらしの實の成熟する時を以て、古來季物と定む。番椒の漿果、初めは綠色、秋に至れば熟して紅となる。種類多く、果形また大小、長短あり。色紅なるが普通なれども、黄なるがあり、又黑紫色等のものあり。味極めて辛きも、食に添へて味を助く。主として香辛料に供せらるるも、藥用にも亦用ひらるゝことあり。唐辛を乾燥し貯ふるに天井に吊り下げ置く。因つて一名を天井守と云ふ。〔栞草〕には「天井守　番椒の一種、ことごとく上をむく故に名くとぞ」とあり。〔參照〕夏―青蕃椒

例句

唐辛

播子木も紅葉しにけり唐辛　宗因（梅翁宗因發句集）

唐辛茄子に朱も奪はれず　來山（今宮草）

鬼貫に角振舞へよ唐辛　同（續今宮草）

青くてもあるべきものを唐辛　芭蕉（深川）

草の戸を知れや穗蓼に唐辛　同（笈日記）

隱さぬぞ宿は菜汁に唐辛　同（猫の耳）

李由が母年回

唐辛菜摘水汲む法の人　許六（韻塞）

間引菜に入れぬ人あり唐辛　同　（正風彦根躰）
擂鉢や蚊遣を捨てゝ唐辛　同　（風俗文選犬註解）
刻まれて果迄赤し唐辛　同　（同）
鑓持の秋や更け行く唐辛　支考　（梟日記）
南蠻やからくれなゐに唐辛　同　（射水川）
唐辛痩て小枝の遲れ生　惟然　（初蟬）
尼心是をも撰りぬ唐辛　野坡　（天上守）
鬼灯を妻に持ちてや唐辛　也有　（蘿葉集）
餉に辛き淚や唐辛　蕪村　（蕪村句集）
俵して藏め蓄へぬ唐辛　同　（同）
錦木を立てぬ垣根や唐辛　同　（同）
美しや野分のあとの唐辛　同　（蕪村遺稿）
御園もる翁が庭や唐辛　同　（同）
氣短かに秋を見せけり唐辛　同　（新五子稿）
唐辛疊の上へ曩りけり　太祇　（太祇句選）
白き花のこぼれてもあり唐辛　同　（太祇句選後篇）
憂き旅や酒に擲つ唐辛　几董　（井華集）
唐辛賣る白頭の翁かな　同　（同）
賭にして唐辛喰ふ淚かな　同　（同）
年寄の居卑し唐辛　召波　（春泥發句集）
唐辛常世か鉢にちぎりけり　同　（同）
傾城の樂屋恐ろし唐辛　蓼太　（蓼太句集）
是さへも減り行く秋よ唐辛　成美　（成美家集）
秋はたゞ淚もろくも唐辛　同　（同）
居酒屋や愛相に植し唐辛　一茶　（一茶句帖）
山陰や山伏村の唐辛　同　（九番日記）
醍醐のあたりを過ぎて
唐辛笠にさすべき色香かな　梅室　（梅室家集）
いつ懲りて鷄もつゝかず唐辛　同　（同）
唐辛箸いたはりて撮み喰　同　（同）
是のみの小野の小家か唐辛　蒼虬　（蒼虬翁發句集）
草むらに染ても淋し唐辛　同　（同）
つぶ／＼と秋の染めたる唐辛子　古泉　（丁卯句鈔）
丹波山邊しろき小花の唐がらし　青々　（倦鳥）

參考　たうがらし　Capsicum annuum, L.（なす科）熱帶地方の原産にして畑に栽培せらるゝ一年生草木、莖の高さ二尺内外に達し、葉は通常卵狀披針形にして先端尖り長葉柄を有す、夏時葉腋に白色合瓣花を開き、花冠五裂す、花後通常細長くして紅熟する果實を生じ、甚しき辛味を有す、

品種甚だ多し、果實を食用とす。

秋茄子（中）　木むしり茄子　名殘茄子　種茄子　茄子引く（人事）

古書校註　【東草】「種茄子」八月。時珍曰、茄中に瓤あり、瓤の中に子あり、諸茄老に至つて皆黄なり。

季題解説　茄子は夏の季なれども、秋になりて猶結實するもの亦多し。又種をとる爲めに殘せる茄子の、ひねたるなど侘しき風情あり。秋茄子と稱して夏の季の茄子と別つ。茄子を引く時、小粒のもの猶木にあり、これを木むしり茄子と云ふ。採りて鹽漬しにし、辛漬とするに、風味格別のものなり。「秋茄子を嫁に食はすな」と云ふ諺あり。

實作注意　夏　茄子で心に秋を感ぜざれば、只茄子の句と選ばぬものになるべし。（一轉）

例句

秋茄子

片畑の秋の焦れや茄子畑　猿雖（旅日記）
内畑や千年の秋の種茄子　去來（有磯集）
種茄子北斗をねらふ光かな　其角（五元集拾遺）
見つゝ行けば茄子腐れて昔道　曉臺（曉臺句集）
秋茄子葉に燒くぞあぢきなき　成美（成美家集）
[illegible]巷に在りて木みしり茄子哉　青々（[illegible]）

茗荷の花（初）　秋茗荷　茗荷の子　茗荷竹

古書校註　【滑稽雜談】七月。○時珍が本草云、崔豹古今註に云、蘘荷、その子花、根の中に生ず、花未だ敗れざる時食ふべし。久しき時は則ち消爛す。○和産説の如し。子始めて出でその子綻び出でて花となる也。その花開かざる時とりて食す。子は夏也、花は秋也、蘘荷竹は春也。

季題解説　蘘荷科の宿根草本にして、山谷、竹林等陰濕の地に自生すれども往々人家の園圃、垣根などにも植ゑらる。形態生薑に似たるも地下の根莖は圓柱狀にして生薑の如く肥大ならず。春、宿根より嫩苗を生じ、夏日生長して二三尺に達す。一種の香氣あり。茗荷竹とも稱す。花苞は卽ち茗荷の子と呼ぶ物にして、地中より直ちに生じ、筍の形に似て些か扁平なり。花の未だ着かざる時取つて食用とす。この花苞上に帶黄白色の花を出す。

實作注意　茗荷の花苞は初夏に出づることあり。又秋の彼岸頃にも出づる所あり。七夕祭に茗荷の子を以て鷄の形に作りなどすることあり。〔[illegible]〕

夏—夏茗荷

例句

茗荷

片陰や茗荷の花の薄汚れ　梅餌（癸日記）

手の甲や茗荷の花のむつくらと　白雪（きれ〳〵）

庭草をくゞる嵐や茗荷の子　露月（露月句集）

とりのこす茗荷や夜の雨に咲く　なみ女（なみ女遺稿）

生姜（三秋）

しやうが　薑　新生姜　葉生姜　生姜掘る（人事）

古書校註

【年浪草】「薑」三秋、和漢三才圖會に曰、生薑、昔蓑、今俗多く姜字を用ふ。剰へ我の音とす　未だ其の據をしらず。倭名抄に生薑久禮之波、之加美、蜀椒奈留波之加美、吳茱萸加波波之加美、此等を以て考ふるに、往昔波之加美といふものは辛果の總名也。

季題解説

薑は南方亞細亞の原産なりと云ふ。神武天皇、陣中の兵士に諭はせ給ひし御歌に「みづ〳〵し、くめのこらがかきもとに、うゑしはじかみくちひゞく。われはわすれじ、うちてしやまむ」とあり。然るに山椒の古名も「はじかみ」と云へり。因つて神武天皇の御歌の「はじかみ」は薑に非らずして山椒の「はじかみ」なりと云ふ說もあり。要するに「はじかみ」とは辛き物の總稱なりしならん歟。

薑は蘘荷科の多年生草本にして莖の高さ二尺ばかり、葉は披針形をなし茗荷に似たり、根莖は屈指の如く、其味辛く香深し、多く畑に栽培して食用とし、又藥用とす。夏生ずる嫩芽亦食用に供してよろし、新根（土しやうが）を以て秋季とす。

例句

はじかみ

はじかみを賣勝つ秋の祭かな　梅長（田舍の日）

はじかみや秋のものとて薄紅葉　漁童（新類題句集）

はじかみの薄紅見ゆる厨かな　青々（倦鳥）

葉生姜

葉生姜や手に取るからに酒の事　白雄（白雄句集）

葉生姜に市のうら枯見る日哉　楓子（新類題句集）

薑

朝川の薑を洗ふ匂かな　子規（子規句集）

稻（三秋）

しね　いな　たのみ　みづかけ草　富草　秋作　稻の穗　稻穗　初穗　八束穗　稻莖　粳　うるしね　糯　陸稻　をかしね　稻筵　稻葉の雲　稻の秋（時候）　稻の露（天文）　稻日和（天文）　稻田（地理）

古書校註

【御傘】〔稻筵〕植物也。筵をしきたるやうに、稻の面の平々と有るを申

す。さるによりて夜分居所に非す、誹には三句のむしろの内也。又和歌には田舍をさして、稻莚とよめる歌もあり　稻莚川そひ柳（一）とよめるも有り。柳のなびきたるが、稻莚のやうなると云ふ事也。それならば秋にならず春なるべし。田舍をさして云ふならば、秋にはなりて植物には三句嫌ふべし。和歌には稻莚は秋になる也。連誹には左様の差引いらさる故か、新式に稻莚植物也とばかり載せたる上は、秋に成ると心得らるべし。

【年浪草】「稻葉の雲」詩に曰、多稼如雲。○中院通茂公歌に、秋風は田面に冬をさそふかと稻葉の雲に露ぞしぐるゝ。○稻の出でとゝのほりたる景色也。稻莚などいふも稻の出とゝのほりたるをいふよし與儀抄にあり。「稻の花・富草の花」夫木「夕ぐれは深山おろしに我が宿の門田の稻の花の浪よる　後久我内大臣」（愚按、稻の花とは穗をいふにや、稻花の題に花の事なく穗をよみたる多し。（二）富草とは稻をいふ。富草の花と富める心にかけてよめるにや。「早稻・室のはや早稻」七月。時珍が曰、粳稻六七月收むる者を早粳とす、たゞ食に充つべし。○室のはや早稻とは、式に曰、五幾內にて苗代の床を室といふ。早稻を田にうつす時苗の室に引殘したる苗ははやくみのるとなり。是室のはやわせならんと老圃いへりと云々。貞德もしれぬ事なれば老圃にとへといへり（三）。されども和歌八重垣に云、むろといふは稻の名也、他稻より早く熟する稻也。讀方早稻にもよめり。早苗の內にも室の苗は早く植うるよし也。又苗代にも室のたねとよめり。○堀川百首、田子のとるさ苗を見れば老いにけりもろてに急げ室のはや早稻」。これらの心得にてさのみ深き穿鑿にも及ぶべからず。千梅が宜稻輪・春耕が糸切歯（四）にかれこれ論あり。穿鑿ければ混らしつ。「稻」三秋。禹錫食經に曰、衛雅に云、稌（五）は稻也。○稻刈とは字彙に曰、刈は穫也、取也。（中略）凡そ七月刈り收むる者を早粳となす。○稻干とは刈り干す也。稻扦、俗に稻城といふ。禾を掛くる具也。竹の長短相等しき者三莖をとりて、上に篼（六）を用て之を縛り、田中に於て禾を上げかけて之を乾す。○稻扱とは古へは麥・稻の穗を扱くに二小管を以て縄を通し繋ぎ、之を握り持ちて穗を挾み扱くなり。近年稻扱を製す、その形狹き牀机の如し。竹の大釘數十を植ゑ、ほゞ馬齒把に似たり。○稻舟とは最上川によめり。出羽國にあり。古今「最上河のぼればくだる稻舟のいなにはあらず此月ばかり」。此河水早くして舟を引きのぼすに、舟の頭のふるか、人の物を否と云ひて、かぶりふるに似れば云ふ。又說、稻を積みたる舟と云ふ。讀方物をいやと云ふ心を、稻舟に寄せて多く讀みなれたりと、藻鹽草等に見えたり。○稻莚とは稻のむしろ也、常の莚を云ふなるべし。又岸の柳の稻莚と云ふは、柳の水にうつりて、なびくを莚を織るに見立てゝ云ふよし、八重垣に見えたり。藻鹽草に、袖中抄を引きて、稻莚は田舍は自ら稻を敷く事あれば、ゐなかを稻敷とも云ふ也。萬葉に「玉鉾の道行きつかれ稻莚しき

ても君を見んよしもがな」。又公實の歌「これにしく思ひはなきを草枕旅にかへすは稻筵とや」。萬葉の歌は道に敷くと云ひ、今のは旅にしく心也。田舍を稻敷と云ふ心に違はず。「稻筵川そひ柳水ゆけばなびきおきふしその根はうせず」。之は河の底に藻と云ふ草のひまなく生ひたるをば、稻を筵に敷きたるに似たれば古くより水の下の草をも稻筵と云ふと云々、奧義抄の說も大體右に同じ、事繁ければ略す。〔中稻〕八月。時珍曰、粳稻に早・中・晚の三收あり。六七月收むる者を早粳とし、八九月收むる者を遲粳とす云々。是れ中稻也。○和漢三才圖會に曰、凡そ八九月刈り收むる者を中稻となし、これより早きを早稻とす。〔落穗〕八月。〔稻束〕八月。和漢三才圖會に曰、稻を刈りて束ねて一把二把とす、是なり。又稻塚あり、刈稻を束ねて後、積みて堆くす。恰も塚の如し、是を稻塚と云ふ。〔穗掛〕八月。同書に曰、麥笐、今云稻乾笐。三才圖會に云、笐は架也。竹竿也。竹木を以て構へて屋狀の如くし、麥稻等のごとき穫りて之を束ね、悉くその穗を倒まにし、その上にかくれば久雨の際も鬱浥する能はず。〔八束穗〕八月。八雲御抄に曰、やつかほの稻とは大きなる稻の八穗あるなり。〔遲稻・晚稻〕九月。○晚稻、時珍が曰、十月收むる者を晚粳とす云々。是晚稻也。

註 （一）紀の歌に「稻むしろ川添柳水行けば靡き起き立ちその根は失せず」。（二）淸輔の歌「旣見稻花　夕日さす秋の田の面を見渡せば穗波ぞ風の行方なりけり」を引けり。（三）御傘に室の早わせは知れぬ事なりと說き「田夫にくはしくたづぬべき事なり」といへり。（四）蒦纑輪の說を反駁せる書なり　（五）菩卜　もち稻なり、（六）竹の皮。

季題解說 稻は東　度諸國及濠洲熱帶部に野生あるも、我國にはこれが自生を見ざるを以て、日本の歷史には神代より旣に存在せしものたること、『古事記』『日本書紀』に記事あれども、原と太古に海外より傳はり來りたること疑なしと云ふ。和名を「しね」と云ひ又「いな」「たのみ」「みづかけぐさ」「とみぐさ」などと歌に詠めり。夏日苗を分ち水田に移し植ゑて作る。實は卽ち日常食用の米にして、我國は印度・支那に次での產地なり。稻に粳・糯の別あり。品種多し。古代支那にて稻と呼びしは糯のことなりと云ふ。「初穗」は、稻の穗の初めて結實したるもの、又それを採りて先づ神に奉るを云ふ。「八束穗」は、豐年の稻の稔り穗のふさふさと長きを云ふ。「稻筵」とは「筵をしきたるやうに、稻の面の平々とあるを申す」と『御傘』に云へり。

實作注意 掛稻又は籾を干せる筵などを「稻筵」と註したる書もあれど、それは誤りにて『御傘』に貞德の「稻の面の平々とあるを申す」と云へるに從ふべし。卽ち稻の田の面の廣き眺めなりと心得べきものなり。〔參照〕稻の花事――毛見・早稻　中稻　晚稻　落穗　穭　地理――刈田　穭田　人事――毛見・豐年　稻刈　新米　籾摺　春――苗代　苗代搔く　種浸　夏――植田　青田　田植　田草取　冬――冬田

例句

稻

賤屋まで秋はいな葉や出來分限　宗因（梅翁宗因發句集）

稻葉もる里や泉州萬町樂　同（同　）

稲

犬連れて稲見に出れば露の玉　鬼貫（鬼貫句選）
吹風や稲の香匂ふ具足櫃　同（同）

留別 二句

稲々と戰ぐはつらし門の秋　支考（東西夜話）
稲ならば去なばや美濃の鮎膾　同（同）

岩鼻に遊ぶ

城見えて朝日に嬉し稲の中　同（越の名殘）

手取川を渡る

海にそふ北に山なし稲百里　北枝（草庵集）

伏木の浦

穂隠れや鳥追舟の棹の先　同（射水川）

正秀亭にて

引廻す襖の外も稲屏風　同（きれ〴〵）
だゝつかふ此穂の上の見事さぞ　惟然（二葉集）

隅田川橋之記

稲葉見に女待そへ隅田川　其角（五元集）

八幡宮奉納

守りめも稲に際立つ里の神　野坡（野坡吟艸）
道暮れて稲の盛りぞ力なる　曉臺（曉臺句集）
稲の香の寐覺て近し五位の聲　同（同）
川稲の香取をさして潮來船　同（同）

湖のほとりにて

植たしや稲葉に寄するさゞれ浪　闌更（半化坊發句集）
穂並よき秋に鶴聞く宮居かな　同（同）
同じながら稲葉の露ぞ潔き　白雄（白雄句集）
稲ぶさや誰結び置く宮柱　召波（春泥發句集）
四五本の稲もそよ〳〵穂に出ぬ　一茶（七番日記）
稲の浪はる〴〵と來て枕元　梅室（梅室家集）

八幡宮奉納

稲を啄む鳥はゆるさじ弓矢神　同（同）
晴て行く雨や隣の稲の上　蒼虬（蒼虬翁發句集）
大寺の朝寐も見たり稲の露　同（同）
こけ稲の田をそのまゝに山家かな　青々（倦鳥）

稲の穂

稲一穂門田に涼む日當哉　沾德（沾德句集）

翁塚の記

草枕あり其稲穂手向かな　杉風（そこの花）

湖北餞別

穂に出でて世の中は田も疇もなし　嵐雪（其角三十三回）
美はしき稲の穂並の朝日かな　路通（芭蕉翁俳諧集）

風行くや濱田にしらむ穂の靡き　曉臺（曉臺句集）
天皇の袖に一房稲穂哉　一茶（七番日記）
旅人の藪に挿みし稲穂哉　同（九番日記）
草花と握り添へたる稲穂哉　同（同　）
ぶら下る鵙にたわみし稲穂かな　雪府（倦　鳥）

初穂

酒折神社
小墾田のをはりの初穂かくもあれ　曉臺（曉臺句集）

八束穂

八束穂や化粧の料の田五反　なみ女（なみ女遺稿）

稲筵

稲筵近江の國の廣さかな　浪化（名月集）
齋宮へ詣づ
として又命は續り稲筵　曉臺（曉臺句集）
夕風や鶴も動かず稲筵　蓼太（蓼太句集）

参考　いね Oryza sativa, L.（禾本科）印度方面熱帶地の原産なるが今は廣く水田に養はるゝ一年生草本なり、莖の高さ三四尺に達し、葉は狹長にして、葉舌長く尖れり、大略ムギ類に似たり　八九月の頃莖頂に穂を抽き、圓錐花序に排列す、花は小形にして二枚の稃片内に六雄蕋と一雌蕋とを有し、果實は二枚の稃に包まれ、穎は微小なり、果實卽ち米を食用とし、藁は種々の用途あり。

稲の花（いねのはな）（三秋）　富草の花（とみくさのはな）

季題解説　稲には、早稲・中稲・晩稲の三種ある故に、稲の花は三秋にわたる季物なり。北國は主として早稲を作る。

實作注意　異名を「富草の花」といふと云へど、俳句に用ゐて效果ありとも覺えず。只「稲の花」と普通にいふがよろし。〔参照〕稲[1]

例句

稲の花

稲の花吸はぬを蝶の艶（ミヤビ）かな　言水（言水句集）
稲の花これを佛の土産かな　智月尼（猿　蓑）
買て行く塗長持や稲の花　露川（流川集）
芭蕉翁の伊賀へ越し給ふを洛外に送りて
先づ入るや山家の秋を早稲の花　惟然（有磯海）
風流も先づ是からぞ稲の花　闌更（半化坊發句集）
見ぬ人の爲にもなるや稲の花　同（同　）
稲の花嵐の旬も早や過ぎし　白雄（白雄句集）
川稲の花收まりし月夜かな　乙二（松窓乙二發句集）
湖の水の低さよ稲の花　士朗（枇杷園句集）
先祝へ小糠に似たる稲の花　巣兆（曾波可理）
幾ばくの人の膏（アブラ）よ稲の花　一茶（一茶句帖）
稲の花大の男の隱れけり　同（同　）

稲の花

箒星にいで披露せん稲の花　一茶（一茶發句集）

賀　此上に年を積むべし稲の花　梅室（梅室家集）

うぶすなに幟立てたり稲の花　子規（子規句集）

稲の花朝日涼しくなりにけり　月斗（同　人）

早稲（わせ）（初）

早稲の香　行合の早稲　室のはや早稲　早稲田　わさ田（理）

早稲刈る（人事）

季題解説　稲の成熟期の早きものを早稲と云ふ。元來暖地の作物なれば、北國寒氣の早く來る地方にては、主として早稲を作るなり。「行合の早稲」は晩夏・初秋の行合ひに熟する稲。「室のはや早稲」は、紀伊の國に牟婁郡あり、其地暖國なれば、稲の熟することも早きを以て、室の早わせとは歌に詠みたるもの歟。［同種］稲（イ）

例句

早稲

賀　松風の賦をさゞ波や早稲遲稲　青水（青水句集）

早稲遲稲皆こなからの仕向けなり　來山（今宮草）

那古ノ浦　加賀の國に入る

早稲の香や分入る右は有磯海　芭蕉（奥の細道）

早稲の香や田中を行けば弓と弦　支考（有磯海）

早稲の香や蟹踏つくる礒の道　同（梟日記）

早稲の香や伊勢の朝日は二見より　同（同）

早稲の香もゆかしや伊勢の花柑子　同（越の名殘）

京土産紙や捻りて早稲二三穗　令精（二番鶏）

早稲の香や雇ひ出さるゝ庵の舟　丈草（有磯海）

芭蕉翁當國の行脚も知らず、やゝ程を經て其句をなうけ其人を慕ふ

早稲の香や有磯めぐりの杖の跡　浪化（有磯海）

行く人や門田の早稲の籾づもり　諷竹（同）

早稲の香や田中の庵の人出入　曲翠（同）

蟬の音の通ふや早稲の本はらみ　句空（東西夜話）

早稲の穗や打かたぶきて風ゆるき　杉風（賀之満多知）

歸り來れば淺田の早稲田穗に見ゆる　曉臺（曉臺句集）

早稲の香や藪を一重の書談議　同（同）

早稲の香やむく起ながら遠歩行　蒼虬（蒼虬翁發句集）

早稲の香や水打てある床几先　同（同）

家めぐり早稲にさす日の朝な〳〵　青々（倦鳥）

中稲（なかて）（中）

季題解説 早稲と晩稲との間に熟する稲を云ふ。参照 稲（ネイ）

例句 中稲

出揃うて中稲に月のすわりけり　塵生（夜話狂）

晩稲（おくて）（晩）　遅稲（おくて）　おく　おしね　晩稲刈る（おくてかる）（事人）

季題解説 晩秋に至りて收穫する稲をいふ。因に『年浪草』九月の條に、遅稲・晩稲と出し、「時珍曰、粳稲有二早中晩三收一、六七月收者爲二早粳一、八九月收者爲二遅粳一云々。是遅稲也。訓二遅稲一。〇晩稲。時珍曰、十月收者爲二晩粳一云々。是晩稲也」とあり。然れば遅稲は中稲の事にて、晩稲とは意義異るを知るべし。参照 早稲（セツ） 中稲（ナカ） 人事—稲刈（イネカリ）

例句 晩稲

狼の此頃はやる晩稲かな　支考（有磯海）

まだ〱と赤らみたばふ晩稲哉　路健（旅袋）

老て神職かうむりたる人を祝して

田隣を憎み〱て晩稲かな　千川（同）

花も實も晩稲に多し神の秋　去来（去来發句集）

落穂（おちぼ）（中）　落穂拾ふ（おちぼひろふ）（事人）

季題解説 稲を刈りたる跡に落ちこぼれある稲穂をいふ。「詩經」に「此有二滯穂一伊寡婦之利」とあり。滯穂は落穂なり。参照 稲（ネイ） 人事—稲刈（イネカリ）

例句 落穂

賀

言の葉の落穂拾ふも頼みかな　鬼貫（鬼貫句選）

鶏の卵（かし）産み捨てし落穂かな　其角（雑談集）

禪門の珠數持そふる落穂かな　木導（韻塞）

油買うて戻る家路の落穂哉　蕪村（蕪句題苑集）

足跡のそこら數ある落穂かな　召波（春泥發句集）

日出度さよ稲穂落散る路の傍　同（同）

痩臑に落穂よけ行く聖かな　几董（井華集）

拾ひあげて扇にはさむ落穂哉　まさ女（五車反古）

御駕より御聲のかゝる落穂哉　一茶（九番日記）

米穀下直にて下々難儀なるべしとは、異國の人談はしからん

日本の外が濱まで落穂哉　同（一茶發句集）

ゆかしさよ落穂はさみし網の帯　月村（同人）

落穂　冬来るか土にも見ゆる落穂かな　素史（俳島）
　御難を早等に知らせて落穂揚つ　青々（同）
　落穂手につまめば携む三五寸　同（同）
落穂拾ふ　落穂拾ひ鶏に嚢に捨てにけり　鬼貫（鬼貫句選）
　晴太の落穂を拾ふ田面かな　支五（草七書）
　落穂拾ひ日當る方へ歩み行く　蕪村（蕪村句集）
　中々に落穂拾はずや園と姥　同（蕪村遺稿）
　身の程や落穂拾ふも小歌節　曉臺（曉臺句集）

穭（ひつぢ）（秋）　穭孫（ひつぢ）　穭穂（ひつぢほ）

【古書校註】
【□浪草】九月。〔稲孫田〕○穭、廣雅に曰、稲已に刈て復抽るを稲孫といふ。○字彙に曰、稲刈再び生ずる稲也。

【季題解説】稲の刈株より、再び生ひ出でゝ穂をなす稲あり。之を穭と云ふは乾土より生ふるによりて、斯くは云ふものなりと〔□□〕に理一稲田に稲

【例句】
穭　青き穂に千鳥啼なり穭稲　史邦（□□小文庫）
穭穂　早嵐に物恥かしや穭生　嵐竹（菊の塵）
　何をあてに山田の穭穂に出づる　一茶（九番日記）

稗（ひえ）（中）　稗の穂（ひえのほ）　畑稗（はたびえ）　田稗（たびえ）　稗田（ひえだ）（地理）　稗引く（ひえひき）（人事）

【古書校註】
【本草】「綱目」八月。時珍曰、稗、苗葉は黍の如し。八九月莖を抽んづ。三稜あり、細花を開く、簇りて粟の穂の如し。

【季題解説】禾本科の一年生草本にして其形、粟、黍に似たり。莖の高さ二三尺乃至三四尺、葉は細長くして上端尖り、二縦列に平行脈あり。花は小形にして小穂状は少しく彎曲し小穂の花叢を圓錐花序に排列す。夏開花し秋に至りて小粒状の種子を結ぶ。仲秋の頃收穫す。

【例句】
稗　（後注とて富山に退くすがら）
　稗にも雲の粟田や稗の秋　支考（東西夜話）
　稗も實世に中よかれ最上川　惟然（三山雅集）
稗の穂　稗の穂の馬逃したる氣色哉　越人（曠野）
　稗の穂や塀掛渡す岨畠　野徑（藤の實）
稗田　相作の早稲に刈らるゝ稗田かな　浪化（白扇集）

【参考】ひえ Panicum Crus-galli, L. var. frumentaceum, Hook fil.（禾本科）一年生の作物にして、陸田に栽培す、禾穀類中最も強健の種類

にして、莖の高さ三四尺に達す、八九月の頃、穗を抽き、淡緑色の小花を總狀に着く、實は芒なし、子粒を食用に供し、又飼料となす。一品種に水田に作るものあり、穗に芒を有す。

玉蜀黍（中）　南蠻黍　高麗黍

【季題解說】玉蜀黍は農家の周邊又畑に多く栽植す。原、熱帶亞米利加原産にして、我國には天正の初、葡萄牙人持來ると云ふ。玉蜀黍の稈は太く、高さ五六尺に達し、圓柱狀にして處々に節ありて葉を互生す。葉は大なる線狀披針形にして並行脈を有し、無柄にして葉鞘稈を擁せり。雄花は二箇づゝ相集りて穗花をなし、穗花は稈の頂端に於て圓錐花序に排列し、雌花より成れる小穗狀花序は、葉腋より生じたる多肉の花軸に密生して肉穗花序をなし、大形の苞につゝまれ、長き毛狀の花柱をふさふさと苞の外に出すこと此黍の風致なり。大小豆の如き黄色の果實、累々として花軸上に縱に並びて集り著く。この實のつきたる花軸を火に炙りて食す。又加工利用の途種々ありて、此玉蜀黍にて「ウイスキー」酒を造る。【參照】唐黍

【參考】たうもろこし *Zea Mays*, L.（禾本科）中米及南米原産にして畑に培養する一年生草本なり。莖は太くして高さ七八尺に達し、莖葉の模樣稍モロコシに似たり、七八月の頃莖頂及葉腋に花を生ず、花は單性にして雄花は梢上に抽きて、稍スヽキの穗に類して大きく、雌色は葉腋に生じて穗狀花序に排列し、大形の苞に包まれ、長き赤色毛狀の花柱を出す。果實を食用に供す。

黍（中）　黍の穗　黍畑（準一）　黍引く、黍刈る（人事）

【古書校註】【年浪草】〔極引〕八月。稷、古へは飯として每に食ふ。今はたゞ磨きて團子餅として、賤民の用ふる所。三月種を下し五六月收むべし。また七八月引き收むる者あり。

【季題解說】禾本科の草本にして、莖葉共に粟に似、丈け低く小くして粗毛あり。小花は穗狀となり、小穗は一個の花より成り、淡黄白色の頴果を結ぶ。糯黍、粳黍は其主なるものにして、共に食用とす。【參照】唐黍

【例句】

黍　村端や黍がら折れて風騷ぐ　闌更（半化坊發句集）

　　雨の日は黍のもたるゝ庇かな　是牛（倦鳥）

黍の穗　風かろく張あふ黍の穗先かな　荻子（旅裳）

【參考】きび *Panicum miliaceum*, L.（禾本科）畑に栽培する禾穀類の一種にして、一年生草本なり、莖の高さ三四尺に達し、葉は幅廣くして尖り、粗毛を有す、秋日細き多數の枝に分れたる花穗を散生して、稍垂下

し、其小穂は一花より成り、三箇の雄蕊を有す、穎果は淡黄白色を呈し、アハに比すれば稍大粒にして光澤を有す、ウルチキビは炊きて食ふべく、モチキビは主に餅として食す。

唐黍（中）

蜀黍　高黍　もろこし　高粱　もろこし團子（人事）

古書校註

【栞草】八月　江戸の俗たうもろこしといふ。春の日　待戀　こぬ殿を唐黍たかしみおろさん。荷兮。

季題解説　禾本科の一年生草本にして、廣く畑に栽培せらる。高さ七八尺餘に達し、節高し。莖は大形なる披針形、長さ二尺餘、莖と葉、共に往々赤褐色を帶ぶ。花は夏日梢上に小穂集りて、大なる圓錐花序に密集し、秋赤褐色の小穎果を結ぶ。種子の粉末を餅、又は團子になして食用とす。

【別名】玉蜀黍（タウモロコシ）　黍（キビ）

例句

唐黍
伏見人唐黍殼を束ねけり　鬼貫（鬼貫句選）
唐黍や軒端の荻の取違へ　芭蕉（江戸廣小路）
荷兮
來ぬ殿を唐黍高し見下ろさん　荷兮（春の日）
三日亭
唐黍の葉に通ひてや市の秋　支考（東西夜話）
吉田氏倬
唐黍も絲を垂れたる手向かな　其角（五元集）
古寺に唐黍を焚く暮日哉　蕪村（蕪村遺稿）
唐黍の砂地にぎすの鳴き殘る　青々（倦鳥）

參考　もろこし　一名　たかきび Andropogon Sorghum, Brot. var. vulgaris Hack.（禾本科）畑に栽培する一年生の作物にして、稈は太くして高さ六七尺に達し、中實し、葉は潤大にして幅二寸、長さ二尺餘に達し、莖と共に稍綠色を呈し時々赤褐色を帶ぶ、夏日梢頭に大なる圓錐花序を成して密集し、後赤褐色の實を結ぶ、果實を食用に供す。

粟（初）

粟の穗　鶉草　小粟　大粟　粟畑（地理）　粟引く　粟刈る（人事）
粟飯（人事）

古書校註

【滑稽雜談】鶉草。八月△私按云、この名の草普く討ぬれども所見なし。案するに粟をさして俗にうづら草といへるにや、博覽の人に尋ねて究むべし。

【年浪草】（粟の穗）七月○（）和漢三才圖會に曰、種類凡て數十、青・赤・黃・白・黑の諸色有り、早・中・晚有り、大抵早粟は米實、晚粟は皮厚く米少し。○秫、時珍曰、秫の字篆文その禾體柔弱の形に象る。俗に糯粟と呼ぶ

是也。

【[illegible]】粟は我國五穀の一にして畑に栽培する禾本科の一年生草本なり。穗葉は唐黍に似て狹長なる線狀をなし、一根一莖に一穗を出して下垂す。穗に剛毛あり。粟に大粟、小粟あり、又早、中、晩の別と、粳、糯の品有る事稻に同じ。大粟は「おにあは」「しゝくはず」「さるあは」等稱し、穗は長大なり。小粟は大粟よりは全體の形小く、穗も亦短し。大粟の一變種なりと云ふ。「粟草」に「狼尾草」と云ふ物是なり。二種共に炊ぎて飯とするも、今多くは餠、菓子、燒酎等を造る料とす。又小鳥の餌とす。採取は九月下旬頃なり。

【[illegible]】「粟草」に「狼尾草」を「ゑのころあは」と訓み、又それを「守田翁」と云へり、されど「ゑのころあは」は小粟にして「守田翁」にあらず。守田と云ふは莠草の事なり。因つて「ゑのころあは」は粟の條に註し、「ゑのころぐさ」は「狗尾草」として別に註することゝしたり。【參照】狗尾草 秋 黑奴 夏 人事 粟刈 秋 夏―粟蒔 春

【例句】

粟

彩野竹堂軒といふ草庵を尋ねて

粟稗に貧しくもなし草の庵　芭蕉（笈日記）
面扶持をへづるか粟の鼠共　去来（華摘）
凪の名の有るべき物ぞ粟の上　惟然（旣望）

信濃の國吹颪と云ふ處にて

粟少し是れや鳴子の吹く嵐　巣兆（曾波可理）

石手寺

通夜堂の前に粟干す日向かな　子規（子規句集）

丹波春日部村より大嘗祭の粟を獻ぜしに

供御の粟搗ける氷上の郡かな　青々（倦鳥）
そゞろ寒の日にあてゝある粟の束　同（同）

粟穗

脇差の柄うたれ行く粟穗哉　曉臺（曉臺句集）
鳴子きれて粟の穗垂るゝみのりかな　子規（子規句集）
粟一穗をつみたるあとも眺めかな　青々（倦鳥）

粟畑

粟畑の奥まで赤き入日かな　空芽（有磯海）
猪の靜かな年や粟畠　丈草（初便）
村雨や半分出来の粟畠　たね女（田植[illegible]）
べんがらにそめ盡したり粟畠　青々（倦鳥）

【參考】あは Setaria italica, Kunth.（禾本科）畑地に培養せらるゝ一年生草本にして、稈の高さ三四尺に至り、タウモロコシに似たる狹少なる葉を互生す、九月頃莖頂に大なる穗を傾出し、穗は多數の小花を密集したる圓筒形をなし、果粒は小粒狀にして黃色を帶ぶ。粟にウルチアハ及モチアハの二種あり。共に食用に供す。

粟奴（初）　粟の黒穂

季題解説　粟奴は粟の黒穂を云ふ。粟の穂をなす時、黴を生じて黒きもの有り、その黒穂と云ふを音便にて「くろんほう」と云ふ。彼の麦の黒穂を麦奴と云ふに同じ。

季節季感　粟の黒穂、粟奴など、粟の字を用ゐざれば、麦奴と混じ易からん。

蕎麦の花（中）　蕎麦畑（連）

[三秋] 栗ノ

季題解説　蓼科の一年生草本にして、立秋前後に下種す。高さ一二尺に達し、茎柔軟にして直立し、折曲し易し。葉は三角状心臓形をなし、長柄を有す。初秋小白花を複穂状に排列し、花後三稜形の黒色の實を結ぶ。此種子を挽きて蕎麦粉とし食用とす。［連想］人事―新蕎麦ガハ　冬　蕎麦刈カリ

例句

蕎麦の花

やがて見よ棒くらはせむ蕎麦の花　宗因（梅翁宗因発句集）

棚橋や夢路を辿る蕎麦の花　素堂（素堂家集）

月九分あれ野の蕎麦よ花一つ　同（同　）

伊賀の山家に山家を訪ひて

蕎麦はまだ花でもてなす山路哉　芭蕉（續猿蓑）

蕎麦の花待ちてや立てる岡の松　支考（笈日記）

影照院

蕎麦に又染めかはりけん山畠　同（梟日記）

花蕎麦や薄紅の後墨衣　同（そこの花）

やれそこな大根よ蕎麦は花散りぬ　同（柿表紙）

雪明亭

木曾近し蕎麦は眞白の山續　同（國の華）

汐風に揉ても蕎麦の白さ哉　浪化（射水川）

蕎麦の花奈良茶の花はなかりけり　同（草苅笛）

伴峯亭

横雲や離れ〳〵の蕎麦畠　其角（焦尾琴［illegible］集）

豊前の国小倉を出て、黒崎近きあたりにて

歩行よりぞ赴く峯に蕎麦の花　惟然（初蟬）

周防の徳山を過る

綿も吹く蕎麦白妙に徳の山　去來（白扇集）

門の畑夜の枝折や蕎麦の花　杉風（杉風句集）

波に倒て打つ目も近し蕎麦の花　也有（［illegible］葉集）

白川

黒谷の隣は白し蕎麦の花　蕪村（蕪村句集）

落日の潜りて染る蕎麦の莖　同（同　）

故郷や酒はあしくと蕎麥の花　同（同）
宮城野の萩更科の蕎麥にいづれ　同（同）
道のべや手よりこぼれて蕎麥の花　同（同）
水かれ〲蓼かあらぬか蕎麥か否か　同（同）
秋はものゝ蕎麥の不作もなつかしき　同（同）
一つ家のかしこ顔なり蕎麥の花　同（發句題苑集）

[illegible]路を過るに

駕舁は畠主なり蕎麥の花　几董（井華集）
花蕎麥や立出でゝ見れば眞白なる　同（同）
大根も葱もそこらや蕎麥の花　太祇（太祇句選）
蕎麥の花眞晝に暮れぬ不破の雨　曉臺（曉臺句集）
蝶鳥の目にも幾段や蕎麥の花　蓼太（蓼太句集）
蕎麥の花畠の秋も後段かな　召波（春泥發句集）
痩山に僅咲きけり蕎麥の花　一茶（旅日記）
德本の腹を肥せよ蕎麥の花　同（七番日記）
山畠や蕎麥の白さもぞつとする　同（九番日記）
根に歸る花や吉野の蕎麥畠　蕪村（蕪村遺稿）
柿の葉の遠く散り來ぬ蕎麥畠　同（同）
二三升蕎麥粉得まほし我畠　几董（井華集）

蕎麥畠

【參考】そば Fagopyrum esculentum, Moench.（たで科）中央亞細亞の原産にして園圃に培養せらるる一年生草本にして、高さ一二尺、柔軟にして、莖の直立す、葉は三角狀心臟形にして、長き葉柄を有す、夏日（なつそば）又は秋日（あきそば）、白色の花を短總狀に着く、梗本に小苞あり、花後三稜形の黒色果を結ぶ、蕎麥粉を製し食用に供す。

大豆（だいづ）（初）　まめ　秋大豆（あきだいづ）　枝豆（えだまめ）　枝豆賣（えだまめうり）（人事）

【季題解說】荳科の一年生草本。莖は二尺餘の高さに達す。葉は三箇の小葉より成れる羽狀複葉。莖も葉も共に毛を密生す。花は小形にして白色或は淡紫色の蝶形花冠を有す。花後、有毛の莢果を生ず。大豆は晩春より初夏の間に播き、秋に收穫するを常とすれど、又初春に播きて晩夏收穫することあり。これを夏大豆といふ。いづれも種類甚だ多し。種子は煮又は炒り

て食用となし、又、味噌・醬油・湯葉・納豆・菓子・豆腐・豆粉等となす。【季題】人事―豆引く　夏―夏大豆・　豆植う　豆の花

畦豆（あぜまめ）（晩）　田畔豆（たのくろまめ）

【季題解說】水田の畦に植えたる大豆を「畦豆」と云ふ。其葉茂りて秋の田の面の風致をなすものなり。翻豆とは莢よりちぎり取りたるを云ふ

【實作注意】「畦豆」は只眺めなり。

小豆（あづき）（初）　せうづ　赤小豆（あかあづき）

【季題解說】荳科の培養植物。種子には赤白の二變種あれども、赤色を上品とす。又、其實の熟する時季によりて、夏秋の二變種あり。餡を製し、赤飯を炊き、汁粉を造るに用ふ。

【參考】あづき Phaseolus angularis Wight.（まめ科）畑地に栽培する一年生草本にして、莖の高さ一二尺餘に達す、葉は三箇の小葉より成れる複葉にして、小葉は往々淺く三裂す、夏日葉腋に黃色の蝶形花を生ず、花後細長き莢果を結び毛なし、中に赤色の種子を含む、食用とす。

綠豆（ぶんどう）（初）　やへなり　綠豆引く（ぶんどうひく）（人事）

【季題解說】小豆の一變種。畑地に栽培せらるゝ一年生草本。種子は小豆に似て稍小なる綠色を呈す。餡・皮餘子或は萠芽となし、食用に供す。

藤豆（ふぢまめ）（初）　蘭豆　鵲豆　あぢまめ　かきまめ　千石豆　たうまめ　てうせんさゝげ　てんぢくまめ　ひらまめ

【季題解說】荳科の一年生草本。莖は蔓生にして甚だ長く他物に纏繞す。葉は互生にして、三小葉より成る複葉なり。葛の葉に稍似す。夏、白色又は淡紫色の蝶形花を開く、花後扁平無毛の莢を結ぶ、形鎌狀をなす。若き果實を食用に供す。此の植物は食用の爲め諸國に栽培せらる。異名頗る多し

【例句】藤豆の趣を見ん今朝の雨　八十里女（雪七草）

籬豆（かきまめ）（中）　沿籬豆（えんりまめ）　破墻豆（はしやうまめ）

【古書抄錄】【栞草】八月、本草を考ふるに、人家の籬垣の側に三月種を下す。蔓生して延ひ纏ひて籬を蔽ふ、故に沿籬豆（エンリトウ）と名く　又俗に破墻豆（ハシヤウヅ）といふ。此豆一粒を植うれば、豆八升を得ると。破墻と八升と音近し、故にいふ。

【季題解說】人家の籬垣の側に春種を下し置けば　蔓蔓延して籬を蔽ふ故に

沿籬豆と名づく。又俗に破墻豆といふは、一粒を植ゑれば豆八升を得るを以、破墻と八升と音近き故に云ふと『栞草』にあり。菜豆を八升豆とも云へば、さる類ならん。

隱元豆（いんげんまめ）（初）　ふぢまめ　あぢ豆（まめ）　藊豆（へんとう）

古書校註

【栞草】七月。［大和本草］近年中華より渡る。春子（み）を植ゑ、秋の末に實多く、花紫也。蔓生す。嫩（わか）きとき莢ともに煮食ふ。京都にて隱元豆と云ふ。筑紫にて南京豆といふ。此種黄檗隱元禪師來朝して諸種を持來れる其一種也。故に隱元豆と名く。

季題解說　承應三年、黄檗隱元禪師來朝歸化したる時、始めて是を齎すが故に隱元豆と稱すと云ふ。葉は三つの小葉より成り、蔓甚長く、夏日紫色或は白色の花を開き、紫白相交りて風致を爲す。花後に生ずる莢は短く、扁平にして長さ約二寸、幅四五分許り、數莢梗上に排列して横に向ふ。嫩莢を食用とす。又此豆の渡來に就ては、古より有つて用ゐられず。隱元來朝以後、處々に多くこれを植うるに至れるかと云ふ說もあり。

例句

隱元豆　堺内や一つの垣の隱元豆　青々（妻木）

參考　いんげんまめ Phaseolus vulgaris,L.（まめ科）廣く栽培せらるゝ一年生の纏繞草本にして、葉は三箇の小葉を有し、花は葉腋より生ずる花軸に數個づつ生じ、白色又は淡紅色の蝶形をなし、花後長き莢を結び、中に白色、茶褐色、黑色等の豆を藏す。此品は通常今人の誤稱するいんげんまめなれども、彼の隱元禪師の持ち來りし隱元まめの本物は、右とは全然別の品にて、是れ昔よりのいんげんなり、關西方面にては主として之れを其名にて呼べり。卽ち學名は Dolichos Lablab, L. なり。

刀豆（なたまめ）（初）　鉈豆（なたまめ）　たちはき

古書校註

【年浪草】七月。時珍曰、莢の形を以て命名する也　案ずるに段成式が酉陽雜俎に云、樂浪に挾劍豆あり、莢横斜にして人の劍を挾めるが如し。卽

ちこの豆也。三月種を下す、蔓生じ引くこと一二丈、葉豇豆(エンドウ)の葉の如くしてやゝ長大、五六七月紫花を開く、蛾の形の如し。莢を結ぶ、長き者尺に近し、ほゞ皂莢に似て扁く、劒脊の稜宛然たり。

季題解説 刀豆は夏日開花し、花後秋に至りて長大扁平にして甚特色ある莢を成す。其形状、莢横に斜にして人の劒を挾めるが如し。又鉈に似たるを以つて名とす。長きもの尺餘に達し、幅二寸許。畑に栽培する豆類中最大なるものならん。嫩莢を食用とす。

例句

刀豆　刀豆やのたりと下(サガ)る花まじり　太祇（太祇句選後篇）

刀豆の肌も錆行く垣根かな　嘯山（葎亭句集）

刀豆の珠數も淋しゝ秋の數　寥和（俳諧職人盡後集）

刀豆や葉裏を見する風の跡　卜重（田植の日）

參考 なたまめ (Canavallia ensiformis, DC.)（まめ科）外來の一年生纏繞性草本にして畑に作らる、蔓莖甚だ長し、葉は卵狀の三小葉より成る、花は淡紅紫色或は白色を呈し、稍大形にして夏開き、花後長大扁平なる莢を生ず、其長さ尺餘幅二寸許、莢内に紅色又は白色の種子を生す、嫩莢を食用に供す。

藤(ふぢ)の實(み)（晩）

季題解説 荳科の纏繞性木本、果實は長さ三四寸鉈豆より稍々小さき莢をなし、内に四五個の種子を藏む。種子は扁圓にして斑紋を有し形碁石の如し。晩秋熟したるは炙りて食ふべく、又腐敗酒に入るれはその味を直すといへり。

[參照] 春――藤(フヂノ)

落花生(らくくわせい)（晩）

南京豆(なんきんまめ)　からまめ　唐人豆(たうじんまめ)　そこまめ

季題解説 落花生は、明治の初年に米國より輸入してより以來、我國にて栽培せらるゝものにて、莖の高さ五六寸乃至二尺許、稍蔓狀に匍匐し、葉は四個の小葉より成れる羽狀複葉なり。夏秋の候、黃色の小花を開く。此花受精の後、其花梗延びて地面に向ひ、遂に地を穿ちて入ること一二寸、玆に繭の如き實を結ぶ。よつて落花生といふ。秋の末、種子を收めて食用とす。この新しき落花生を季物とす。

西(すゐ)瓜(くわ)（初）

水瓜(すゐくわ)

古書校註

【年浪草】七月。和漢三才圖會に曰、慶安中黃檗隱元入朝の時、西瓜・扁(インゲン)豆等の種を携へ來り、始めて長崎に種う。○大和本草に曰、三月種を

下す、蔓延して地に布く。四五月黄花を開く、甜瓜の花の如し。その葉掌の如く、刻叙指の如し、六七月熟す。甜瓜既に終り殘暑未た退かざる時、この物盛んに出で、世人之を食ひて暑を消す。

季題解説 西瓜は南亞弗利加の原産なる葫蘆科の蔓草にして畑に栽培す。我國にては應永年間既にありしと云ふ説あり。支那本部にては宋の時、金より持ち還りしが始なりと云ふ。

此瓜秋の初に熟す。大さ冬瓜の如く、直徑一尺以上に達するものあり。表皮は深綠色又は淺綠にて堅に淺き襞あり。肉赤く種子黑し。生にて食するに漿多く味甘美なり。渴を止むるに宜し。又藥用として腎臟の病に效あり。支那にては種子を炒りて食用とす。西瓜は春の半に種を下して作る。花葉共に眞桑瓜に似たり。花は黄なる合瓣花にして先端五裂す。葉は深綠、三乃至七裂し、長き葉柄によりて互生す。又果實の外皮白く肉淡黄にして種子の赤きものあり。形楕圓のもの有り。近時は西瓜の栽培各地に盛んなり。

實作注意 古歳時記及季寄せの類は、西瓜の季を定めて初秋の部に入れたり。よつて古人の句は皆その意を以て作るものなり。然るに現今の實際は晩夏盛んに市に出でゝ人是を賞美し、秋に至つて其味の劣るは、世人の要求に應ずる栽培の方法變化せるに基づくものにして、今の實際に卽すれば西瓜は夏季に移すも宜しからんも、今遽に秋季より是を除けば、或は古人の句意の汲み難きものあるやもしれずと思ひ、急に削除するに忍びず、本歳時記に暫らく慣例に從ひて秋季に存置することゝしたり。但し西瓜の季は晩夏、初秋に亙る季物とするが穩當ならん。**參照** 夏 西瓜(一一四一クワ)

例句

西瓜

空井戸は西瓜に逢はず月のみか　鬼貫　（七車）
西瓜喰ふ奴の髭の流れけり　其角　（華摘）
山城がまだ鑄ぬ形や鈷西瓜　同　（五元集）
西瓜喰ふ跡は安達が原なれや　同　（五元集拾遺）
こけさまにほうと抱ゆる西瓜哉　去來　（初蟬）
手討した下から笑ふ西瓜かな　同　（小弓誹諧集）
七夕の鞠の手前で西瓜哉　許六　（白陀羅尼）
世に住めば扣かれくらす西瓜哉　同　（正風彥根躰）
身一つを持てあつかへる西瓜哉　嵐雪　（或時集）
湯涌谷の奥、子か淵
試に西瓜落さん山の淵　北枝　（草庵集）
出女の口紅惜しむ西瓜かな　支考　（東華集）
骨折や西瓜の下の土龍　素人　（枕かけ）
源平は割らねば知れぬ西瓜哉　也有　（蘿葉集）
畠から西瓜くれたる庵かな　太祇　（太祇句選）

西瓜
夏と秋と二つに割りし西瓜哉　成美（成美家集）
寺入の子の名書たる西瓜かな　梅室（梅室家集）
庖丁に赤みのうつる西瓜かな　同（同）
君來ばと西瓜抱へて待つ夜かな　子規（子規句集）
ころころころころと西瓜數へきれず　別天樓（壬申句鈔）
西瓜ごろ〳〵ほの〴〵とよき月夜なり　文木（丁卯句鈔）

南瓜（中）　唐茄　なんきん　ぼうぶら　南京ぼうぶら

古書校註　【年浪草】三秋。時珍曰、南瓜の種、南蠻より出づ。三月種を下す。沙沃の地に宜し、四月苗を生じ蔓を引くこと甚だ繁し。一蔓十餘丈に延ぶべく、節々に根あり。地に近けば卽ち着く、其莖中空、其葉の狀蜀葵の如く、大さ荷の葉の如し。八九月黃花を開き瓜を結ぶ。正圓にして大さ西瓜の如し。皮の上に稜あり、甜瓜の如し。一本に數十顆を結ぶべし。其色或は綠或は黃、或は紅、霜を經て收む。暖處に置けば留めて春に至るべし。）一種南京瓜、一名東埔寨瓜、一名唐茄子。本草南瓜の下に所謂陰瓜是也。

季題解說　葫蘆科の蔓性一年生草本にして、畑に栽培す。莖葉共に粗剛にして刺毛あり、長さ數間に及び、地に這ひ、又葉腋より卷鬚を出して他物にからむ。葉はほゞ圓形乃至心臟形にして缺刻あり。花は夏日、葉腋に大形の合瓣花を開く、その黃花は瓜類中の最大なるものなり。果實の形種々あれども普通は扁圓、橫徑七八寸、果皮に縱溝あり。綠色にして黃斑ありてひろがる。專ら食用に供す。栽培品種に縮緬、菊座、西京など稱するものあり。

實作注意　ぼうぶらは正しき名なり。其他たうなす、なんきん等異名あれど、關西にては主として「なんきん」の稱呼通用せり。ぼうぶらの一種に南京ぼうぶら」と云ふものの、是今日の南瓜なりと云ふ說あれば、關西にての稱呼はこれに據るもの歟。我國への渡來は「慶長元和年中なるべし、西瓜より早く來る、京都には延寶年中に初て種を植う、其前は無之」と貝原益軒は云へり。南瓜は漢名なり。

例句

南瓜
南瓜やずつしり落て暮淋し　素堂（素堂家集）
時なれや南瓜の煮入淚なる　忠度の塚にて　樗良（樗良發句集）
ころげじと裾廣がりに南瓜哉　素丸（素丸發句集）
安んじて動かじとする南瓜哉　露月（露月句集）

ぼうぶら
ぼうぶらや斯も荒にし志賀の里　二柳（俳諧新選）
ぼうぶらの這てくぼむや藁の軒　亀計（新類題發句集）

【参考】ぼうぶら（Cucurbita moschata. Duch. var. meloniformis. Mak.（うり科）熱帶原産にして、邦内廣く栽培せらるゝ一年生草本なり、莖は蔓をなし卷鬚を有す、葉は圓き心臓形にして、淺く五裂し互生して葉柄あり、夏日葉腋に黃色にして大形の合瓣花を出す、雌花雄花あり、雄花は長柄を有し、雌花は梗短く、花下に子房あり、萼片は上部多少葉狀を呈す、果實は大にして平くして、縱に溝ありて、菊座形を呈す、果實を食用とす、ぼうぶらは元葡萄牙語なり。

冬瓜（とうぐわ）（晩） とうがん　かも瓜（うり）　冬瓜汁（とうぐわじる）（人事）

【古書校註】

【滑稽雜談】八月(一)。時珍曰、冬瓜其の冬熟するを以て也。又賈思勰云、十月種うる者は瓜を結ぶこと肥好にして春種うるに勝る。則ち冬瓜の名或はこれを以てなり。

註 (一) 增山之井・ただまき綱目等にも八月之部に出せり。

【季題解説】冬瓜は葫蘆科の一年生草本にして、莖は蔓狀をなし、葉は心臓形にして、先端尖り掌狀に淺裂す。夏日黃花を開く。果實は楕圓形にして直徑一尺餘、外皮に毛を密生し、晩秋熟すれば蠟質の白粉を帶ぶ。煮食し又は膾として食す。風味頗淡なるものなり。

【實作注意】とうぐわと音讀するも、かもうりと訓むも、各其處の慣はしに隨ひて云ふがよろし。季は晩秋、初冬の物なり。冬の字によりて初冬の季物とするも、中古は總て秋季なりしが如し。

【例句】

冬瓜

冬瓜や互に變る顏の形　芭蕉（西華集）

冬瓜や殊に江湖の寺の背戶　句空（柞原）

冬瓜を譽める醫者こそ藪（ヤブ）の中　支考（柿表紙）

よきものと冬瓜勸むる醫師哉　召波（春泥發句集）

朝市の舟にも多き冬瓜かな　吳仙（田毎の日）

かも瓜

かも瓜の方にかたがる庵哉　盧水（卯辰集）

冬瓜汁

冬瓜汁空也の痩を願ひけり　白雄（白雄句集）

絲瓜（へちま）（三秋） 蠻瓜（へちま）　布瓜（へちま）　いとうり　ながうり　とうり　絲瓜棚（へちまだな）（人事）

【古書校註】

【年浪草】〔布瓜（ヘチマ）〕三秋。時珍曰、六七月黃花をひらく、五出微胡瓜に似たり。蕊・瓣共に黃なり。其の瓜大さ寸ばかり、長さ一二尺、甚しきは三四尺。深綠色、皺の點あり、瓜頭鼈の首の如し。嫩なる時皮を去り、蔬に充つ。老ゆるときは大さ杵のごとし。

【季題解説】絲瓜は、亜細亜熱帶地方原産の一年生蔓性草本なり、莖に稜あ

り、卷鬚を出して他物に絡みて上昇す。葉は大形の心臟形にして尖り、掌狀に分裂す。毛茸あり。夏より黄色の五瓣花を開く、雌雄異花を同株に著け、朝に開き夕に至りて落つると雖も、花相つぎて開くを以て秋に至るも花を見る時期長し。果實は卽ち絲瓜にして細く、長さ一二尺より長きものは三四尺なるあり。別種にして六七尺に及ぶものあり。縱に四條數本あり。果皮薄く、果實は多數の網狀纖維より成り、西瓜に似たる種子を藏す。嫩果は食用とすることを得るも風味淡なり。此果實、仲秋以後に至つて老熟乾燥すれば、種子は黑色となり、果實内にあつて網狀纖維を離脫し、風吹けば果實ゆれて内なる種子の觸れて音す。絲瓜の水は藥用となり、又香料を配合して化粧用として珍重せられ、果實の網狀纖維も亦用途多し。

【實用】　絲瓜は漢名なり。『本草綱目』に「唐宋以前無聞」とあり。日本にては「多識篇」に和名「倍知麻」とあるを始めとす。絲瓜の網狀纖維は、普通單に絲瓜と稱し、種々の用途あり。足袋・靴の底敷き・たはし、など主なるもの。又外國（歐洲）へ輸出するもの頗る多量なり。年により差あるも凡そ四五百萬本金額三四十萬圓に及ぶ。主産地は靜岡縣濱松地方なり。【參照】人事—絲瓜の水を取る（ヘチマノミヅ）

【例句】

有守とて別傳和尚相見の詩所望

絲　瓜　佛にも是には馴るゝ絲瓜かな　鬼　貫（七　車）

小坊主に名付る說

秋風に吹かれ次第の絲瓜かな　浪　化（浪化上人發句集）

汁菜にならでうき世を絲瓜哉　召　波（春泥發句集）

ふらめけど絲瓜は晋もなかりけり　嘯　山（葎亭句集）

たまく柴扉を叩ける隱士に對して

恥かしや絲瓜にかゝる夕けぶり　成　美（成美家集）

關の戸にほのぐ見ゆる絲瓜哉　巢　兆（曾波可理）

さぼてんにどうだと下る絲瓜哉　一　茶（七番日記）

踏込や絲瓜の皮のだんだん袋　同（一茶句帖）

二本目の桶はおまんが絲瓜哉　同（同　）

我絲瓜大き杵の如き哉　青　々（妻　木）

【參考】　へちま Luffa cylindrica, Roem（うり科）熱帶の原産にして庭園に栽培せらるる攀緣草本なり、卷鬚を有し葉は互生し、掌狀に分裂し、裂片は尖れり、夏秋の候黄色の雌雄花同株に生ず、雄花は總狀をなし、雌花は獨在す、果實は長大にして往々二尺に至り、多數の網狀纖維を有す、嫩果は食用に供し、莖の切口より出づるへちまの水は、古來藥用又は化粧料に供せらる、果實の網狀纖維は海綿の如く種々の用に供せらる、此品トウリと呼ぶ處あり、トはイロハニホヘトチリヌルの中へとチとの間に在るゆゑへチ間の意なりと謂へり。

夕顏の實（初）

古書校註

【年浪草】「夕顏の實」七月。蘇恭曰、瓠瓠、形狀大小一に非ず。夏の末始めて實る、秋の中は方に熟して取る。「青瓢簞」七月。和漢三才圖會に曰、苦瓠、俗に云瓢簞　壺盧と一類にして別種なる者明かなり。葉・花小く、壺盧に似て瓠の味苦くして食ふに堪へず。圓大なる者多く炭斗に作る。長くして細腰なる者酒樽に作るべし。長さ五七寸の者あり、俗に百生と稱す。二三寸の者あり、千生と稱す。細腰本末相均しき者俗呼んで闇夜といひて珍となす云々。凡そ瓠の類初生は青色、俗に之を青瓢簞といふ。「種瓢（タネフクベ）」八月。凡そ瓢の種子とすべきものは採り收めて之を檐下に釣り　或は火爐の上に釣つて水氣を去り、乾き過して褐色と成る時、種子を取出し蓄へ置く也。

季題解説　夕顏の實は圓く長き物にして、首尾は略同じく、其長きものは二三尺にも達するものあり。果肉は白し。それを細く紐の如くに削り剝きて竹竿に掛け干し、日に乾かして乾瓢を作る。又丸形のものあり。中子を取り去り、その中を空にして、炭取などにすることあり。

實作注意　夕顏の實は初秋の季にして、其實あるを詠む。乾瓢をつくるは別の季題なり。〔同題〕青匏（アヲフクベ）　夏　夕顏の花（ユフガホノハナ）　干瓢剝く（カンペウムク）

例句

夕　顏
夕顏や我葉を敷てころび寐を　來山（來山句集）
夕顏や秋はいろ〳〵の瓢かな　芭蕉（曠野）
夕顏に片尻懸ぬさん俵　北枝（卯辰集）
夕顏の身は持にくし秋の風　千代尼（千代尼句集）

青匏（初）

苦匏　蒲蘆　葫蘆　種瓢　瓢　瓠　匏　ひさご　瓢簞　青瓢簞　百生り　千生り

季題解説　青匏は瓢簞の未だ青きを云ふ。初秋の季なり。瓢簞は夕顏・西瓜・糸瓜等同じき葫蘆科の物にして、蔓性の一年生草本なり。園圃に培養せらるゝと雖、果肉は苦くして食すること能はず。仲秋其實の成熟したる頃に取り、口を切り水に浸し、中子の果肉を腐敗せしめて中空となし、酒を入るゝ器とす。この瓢壺は古來人の愛玩する所の物なり。此果實は中間縊れたるものなれば、酒樽として紐に括りて携帶するに便なり。因つて昔時は甚流行したるも、今此事殆ど廢れて只愛瓢家の玩賞する物となれり。瓢簞の花期は夏なり。花は白く、葉は圓き心臟形にして往々淺く掌狀に缺刻することあり。葉腋より卷鬚を出し他物に絡みて上昇す。こゝに季物とするは、匏瓜の果皮の未だ青きを云ふ。種匏は種を採るため完熟せしめし

もの。

【季作注意】匏の生れるもの又採取したるもの、其時を季とす。ふくべと云へば可なるも、瓢簞と云ひては酒壺に紛らはしく、且又其音の響きに過ぎて句の言葉落着あしかるべし。百生・千生は五六寸乃至二三寸の小きもの數多く生るを以て云ふ。「青」と云ふにて殊に季感あり。【參照】夕顔の實(八月)　種瓢(九月)　夏—瓢の花(六月)

【例句】

青匏

種竹三竿
竹の聲許由がひさご未だ青し　其角（五元集）

瓢

朝叟一周忌
青ふくべひとり廻つて一周忌　嵐雪（玄峰集）
針立の撫々這入るふくべ哉　許六（正風彦根躰）
身代のぶらりと下がる瓢かな　同（同）
雷と一度に落つるふくべかな　同（風俗文選犬註解）
覗くには及ばぬ垣のふくべかな　支考（歌まくら）
於濃州行脚にて
市中にふくべを植ゑし住居かな　越人（初蟬）
日の影の石にこぼるゝ瓢かな　巴人（夜半亭發句帖）
一瓢庵にて
九十九を餘所に持たる瓢かな　千代尼（千代尼句集）
花や葉に恥かしい程長瓢　同（同）
行秋の聲も出るや瓢から　同（同）
順禮の目鼻書行くふくべかな　蕪村（蕪村句集）
人の世に尻を居ゑたるふくべ哉　同（同）
此あたり書出し人もふくべ哉　太祇（太祇句選）
口を切る瓢や禪のかの刀　同（同）
夕風やしぶ／＼動く長ふくべ　几董（井華集）
後苑
獨り生えて一つ生りたる瓢かな　同（同）
鋭き物のかくは有まじ長瓢　曉臺（曉臺句集）
蔓ながら瓢を叩く童かな　闌更（半化坊發句集）
うか／＼と未だ花のあるふくべ哉　蓼太（蓼太句集）
末枯の表へ出たるふくべかな　月溪（月溪句集）
片扉閉て久しきひさごかな　士朗（枇杷園句集）
老たりな瓢と我が影法師　一茶（七番日記）
莪叟の祝
撫るほど齡の長き瓢かな　梅室（梅室家集）

ひさご

酒飲に許嫁あり生りひさご　支考（風俗文選犬註解）

瓢簞

鳴蟲をゆすりかねたり小瓢簞　乙州（とてしも）

百生り　百生りて中に一つのひさご哉　尙白（忘梅）

三界唯心
百生(なり)や蔓一筋の心より　千代尼（千代尼句集）

千生り　約束や千生り瓢(ひさご)千人に　一茶（一茶句帖）

瓢汁　茶の湯には未だとらぬなり瓢汁　其角（類柑子）

種瓢(たねふくべ)（中）

【季題解説】瓢の種子とすべきものは、十分成熟せしめたるものを採り收て、これを檐の下に釣り、或は火爐の上に釣て水氣を去り、乾き過して褐色となる時、種子を取出して貯へ置く。［參照］青瓠(あをふくべ)

【例句】

種瓢　米入るゝ我器なり種瓢　桃隣（古太白堂句選）

約束を何々持や種ふくべ　千代尼（千代尼句集）

腹の中へ齒は拔けけらし種ふくべ　蕪村（蕪村句集）

四十に滿たずして死なんこそめやすけれ
あだ花にかゝる恥なし種ふくべ　同（同）

葉に蔓に厭はれ顔や種ふくべ　同（蕪村遺稿）

いつしかにうとろなものよ種瓢　召波（春泥發句集）

種瓢斑な面を見はやさん　同（同）

身一つを寄せる籬や種ふくべ　太祇（太祇句選）

今朝からは土に付けり種ふくべ　闌更（半化坊發句集）

吾ふくべ種なる迄に秋を見し　成美（成美家集）

紅南瓜(きんとうぐわ)（初）　阿古陀瓜(あこだうり)

【季題解説】葫蘆(へウタン)科の蔓草。一名阿古陀瓜。又「あこだ」「あかだうり」などの名あり。莖も花も葉まで南瓜に類し、果實は長楕圓形にして小さく六寸ばかり、初秋熟すれば赤褐色となり、表面圓滑にして光澤あり、頗る美觀を呈するを以て、多く果物屋・八百屋等の店頭裝飾用に供せらる。美味ならず。

烏瓜(からすうり)（中）　王瓜(わうり)　玉章(たまづさ)　ひさごうり

【季題古解】【年浪草】「一天瓜」八月。時珍曰、王瓜、一名土瓜、その根土氣を作しその實瓜に似たり、故に土瓜と名く。王の字何の義なるかを知らず。瓜蔕子に似て熟すれば色赤し、鴉喜んで之を食ふ故に俗に赤雹老鴉瓜と名く。

【季題新解】竹藪の間、樹林中に自生し攀登する草にして、春宿根より新芽を生じ、蔓は長く二三稜を有し、高さ十數尺に延び、葉と共に濃綠にして黑

味を帯ぶ。葉は互生、形闊く且つ厚く、周縁淺く三五裂して鋸齒あり。全面毛茸を生じて粗穢なり。葉叢毎に卷鬚を出して他物に絡る。夏日葉間に白花を開く。此花の基部は筒状をなし、末は五出にして先端絲の如くに分裂し亂絲狀を呈し、雌雄株を異にす。花後卵形の瓜を生ず。初は綠色、後黄色となり、全く熟して朱紅色となる。此實は鳥の好みて食するにより此名あり。異名を「玉章」と稱するは、此瓜の種子、結へる文の如きによりて云ふ。果汁は胼胝に效あり。地下の塊根より澱粉を製す。

例句

烏瓜
市人の聲にも逢はず烏瓜　樵雪（卯辰集）
竹藪に人音しけり烏瓜　惟然（惟然坊句集）
雛も知らぬ玉章持ちて烏瓜　也有（蘿葉集）
紅もかくては淋し烏瓜　蓼太（蓼太句集）
秋もやゝ黑みに入りぬ烏瓜　成美（成美家集）
烏瓜そも／＼赤きいはれなし　乙二（松窓乙二發句集）
蔓引けば青きが出でぬ烏瓜　露月（露月句集）

黄烏瓜（きからすうり）（中）　天瓜（てんくわ）　うしのしひ

季題解說　葫蘆科の多年生蔓草、からすうりの一種。花は白色にして烏瓜の花に似たれども、瓣末細く分れて亂絲の如し。果實は烏瓜よりも大にして、卵圓形をなし、冬月熟して黄色となり、烏瓜の形小さくして熟すれば赤色となるに異なり。種子は藥用に供せられ、藥舗にて「かきのさねて」又は「ひら括樓」と呼ばる。根よりは澱粉を製す。天花粉と呼ばれ、漢法の藥品とす。〔一四〕烏瓜（うりス）

蔓茘枝（つるれいし）（中）　錦茘枝（きんれいし）　れいし　苦瓜（にがうり）　かつたいかづら

季題解說　葫蘆科の一年生蔓草にして、莖細長く卷鬚によりて他物に卷纏す。葉葡萄の如くにして小なり。夏日小黄花を開く、五瓣にして梅の形の如し。花後實を結ぶ。長きもの四五寸。短きもの二三寸。青色皮の上に疿癗（ブツブツ）あり。果は末端より次第に黄變し、秋熟すれば自ら裂開し、直紅の肉を以て被はれたる種子を露はす。瓤の味甘くして食ふべし。

甘藷（さつまいも）（初）　琉球藷（りうきういも）　唐いも（から）　島いも（しま）　かんしよ　蕃藷（ばんしよ）　紅藷（こうしよ）

季題解說　甘藷は暖地の畑に栽培する物にして寒地に適せず。旋花（ヒルガホ）科の多年生草本なり。莖は細長くして地上を匍匐す。葉は通常、心臟形、莖と共に稍紫褐色を呈す。通常開花せずして其年を經過するものなれども、偶ま淡紫色、或は白色の漏斗狀の花を開く。花筒短くして濶し。花底より筒內

に向ひて淡紫暈あり。地下に多肉根を有す。これ「いも」にして、其稱呼關東にては琉球いもと云ひ、關西にては薩摩いもと呼べり。

【實作注意】甘藷には大別して赤と白の二種あり。武藏川越、最多く產し、琉球・鹿兒島・和泉・臺灣等に產出す。初め支那より琉球に渡りてからいもの名あり、又琉球より薩摩に渡りて琉球いもと呼び、後又薩摩より關東、其他諸國に傳へて薩摩いもと云ふ。此藷の秋初めて出づるを季とす。【參照】夏―新藷（シンイモ）

馬鈴薯（じやがいも）（初）　じやがたらいも　ばれいしよ　八升芋（はつしようしも）　洋芋（やうう）

【季題解說】茄科（なすか）の草本にして、葉は大小二種の小葉より成れる羽狀複葉なり。六月頃、莖上に白色或は靑紫色の合瓣花を開く、花の形、茄子の花に似たり。花後、小球形の漿果を結び、熟して黑くなる。地下に莖塊數個あり、其形馬鈴の如し、これ卽ち馬鈴薯なるが、これは根にあらずして地下莖なり。塊に芽と稱するところ多くあり、切りて植うるに其一つ〳〵發芽す。莖塊の外皮は薄く、黃白色のものと微赤色のものと有り。澱粉を製し、燒酎及酒精の原料となり、其他用途多し。

【實作注意】原產地は南亞米利加にしてアンデス山に野生ありと云ふ。我國には天正四年長崎に渡る。「八升芋と云ふは栽培して頗る增殖するが故に名づく。其他「淸太夫いも」「松露いも」等稱呼多し。【參照】夏―馬鈴薯の花（ジヤガイモノハナ）

芋（いも）（三秋）　いへついも　親芋（おやいも）　芋魁（いもがしら）　子芋（こいも）　芋の子（いものこ）　芋の葉（いものは）　はかり芋（いも）　里芋（さといも）　八頭（やつがしら）　芋の秋（いものあき）（時候）　芋の風（いものかぜ）（天文）　芋の露（いものつゆ）（天文）　芋畑（いもばたけ）（地理）　芋掘（いもほ）り（人事）　芋圍ふ（いもかこふ）（人事）　芋洗ふ（いもあらふ）（人事）　芋俵（いもだはら）（人事）

【古書校註】【年浪草】三秋。時珍曰、芋花を開かず、時に或は七八月の間開く者あり、莖を抽んで花を生ず、黃色、旁に一の長き蔓有りて之を護る、半邊の蓮花の狀の如し。○芋魁（イモガシラ）とは本草に芋魁又芋頭に作る。庖廚本草に云、蹲鴟の如くなる者を芋魁といふ。芋の子とは宗奭曰、心に當りて苗を出す者を芋頭とし、四邊之に附いて生ずる者を芋の子となす。○粒芋とはその莖に紫の理（スヂ）あり、子小さく圓くして味美なり。○唐の芋とは連禪紫芋といふ。時珍曰、連禪芋魁大にして子少し云々。莖紫色を帶ぶ。味美にして栗の如し。○靑芋（アヲイモ）とは多識篇に云、（今按豆至有古）或は俗に云　蘞芋（エグイモ）、これ亦二種あり、一種はその子常の如くにし細長く、一種は薑の如くにして魁に附生す。○蓮芋（ハスイモ）とはその葉荷葉に似て圓く、その根栗の如し。味美なり。或は呼んで栗芋とす。按に水中に種うる者を蓮芋といひ、園圃に種うる者を栗芋とい

ふか。○蟀芋とは形狀法螺に似て大なり。

解説　芋は東印度及馬來半島の原産なるが、我國至る所の畑に汎く栽培せらるゝ天南星科の多年生草本なり。高さ四五尺に達し、葉は大形の箭狀にして長く太き葉柄を有して一根より叢生す。根に側子を生ず。これを「子芋」と呼ぶ。田園の秋色は芋畑ありて特異の趣を感ぜしむるものなり。「粒芋」は「其莖に紫の理あり、子小く圓くして味美なり」「蟀芋」は「形螺に似て大なり故に名づく」と『栞草』に註せり。其他、里芋(青芋)、やつがしら、唐芋、ゑぐ芋、蓮芋等あり。芋を掘り採る頃を「芋の秋」といふ。**参照** 黄獨　粒芋　芋莖　自然薯　佛掌薯　薯蕷　春―種芋　夏―芋植う

例句

芋

仙風が悼
手向げり芋は蓮に似たるとて　芭蕉(續深川)
芋を植ゑて雨を聞く風の宿り哉　其角(田舍の句合)
芋は〳〵凡僧都の二百貫　同(五元集)
洛の惟然が宅より古郷に歸る時
鼠ども出立の芋をこかしけり　丈草(續猿蓑)
文の名の月まだ若し芋魁　支考(芋がしら)
猶月に知るや美濃路の芋の味　惟然(泊船集)
めでたくも作り出けり芋の丈　太祇(太祇句選後篇)
芋の露野守の鏡何ならん　同(同)
恭箭程の芋持ちて候草の宿　乙二(松窓乙二發句集)
古響居の一周
芋燒る畑につれて去れしな　同(同)
仁利寺盛親僧
芋好きを隱逸傳に繪像かな　青々(倦鳥)

芋の子

嵐戎が孤獨を憐れむ
芋の子も芭蕉の秋を力かな　其角(末若葉)
いつの秋にか、李由子新藁菴を儲けたる時の賀に
芋の子の名月を待つ心かな　許六(風俗文選犬註解)

芋畠

蛸追へば蟹も走るや芋畠　太祇(太祇句選)
浦風に蟹も來にけり芋畠　同(太祇句選後篇)
村雨を面白さうに芋畠　曉臺(曉臺句集)

芋の葉

芋の葉に月待つ花もなかりけり　丈草(柳表紙)
佛骨表
芋の葉に小便すればお舍利哉　支考(同)
芋の葉や蓮かと問へばかぶり振る　也有(蘿葉集)
尻べたの蚊を打つ芋の葉風哉　巢兆(曾波可理)

芋掘り

山畑の芋掘るあとに臥す猪哉　其角(句兄弟)

芋洗ふ　芋掘りに行けば雉鹿に出あひけり　子規（子規句集）

芋洗ふ女西行ならば歌よまむ　芭蕉（甲子吟行）

芋洗ふ人より先に垢離とらん　去來（伊勢紀行）

【参考】さといも（Colocasia antiquorum, Schott. var. esculenta, Schott.（てんなんしやう科）熱帯地の原産にして畑に作る宿根草なり、地下に多肉肥厚の球莖を有し、葉は長柄を具へたる大形の筒形にして葉柄の本は鞘をなして相抱けり、時に夏時葉中より莖を抽て肉穂花を開く、佛焔苞は大にして黄色を呈し、苞内の花軸には上部に雄花を着け下部に緑色の雌花を着く、然し未だ果實を結びしを見ず、園藝品種甚だ多く、やつがしらいも、とうのいも等あり、根莖及び葉柄を食用に供す。

黄獨（三秋）　何首烏芋　苦何首烏　赭魁

【季題考證】【平浪草】三秋、鎭江府志に曰、黄獨蔓花實絶だ山藥に類す、葉大にしてやや圓く、根は芋の如くして鬚有り、味やや苦し云々。是今世俗に誤りて何首烏と稱する者也。

【参考】けいもはかしういもの一名にして「にがかしう」の栽培品種なり。莖は蔓性にして他物に纏繞し、葉腋に肉芽を生ずること、花の雌雄異種に生ずること等「にがかしう」に似たれども、花は淡黄緑色なると、地下莖の苦味を有せざるとを異なる點なりとす　地下の塊莖は球狀にして、その全體に鬚根あり、食用となる。【参照】芋

粒芋（三秋）

【季題解說】芋の一種。其莖に紫の理あり。子小さく圓くして味美なり。

【参照】芋

芋莖（中）　芋幹　いもし　芋の莖　芋蔕貫（人事）

【季題解說】芋の莖の生なるを「ずゐき」と云ふ。煠て三杯酢をかけて食し、又和物とし、或ば煮て食用とす、軟かにして美味なり。【参照】芋

【例句】

芋莖　牛の子に二タ株付けし芋莖かな　一笑（西の雲）

芋莖さく門賑はしや人の妻　太祇（太祇句選）

自然薯（三秋）　自然生　やまついも　山のいも　山芋　薯蕷掘（人事）

【参考】山地に自生する多年生蔓性草本にして、莖は細く左卷をなして他物に纏絡す、葉は長心臟形にして先端尖り、長柄ありて對生し、葉腋に肉

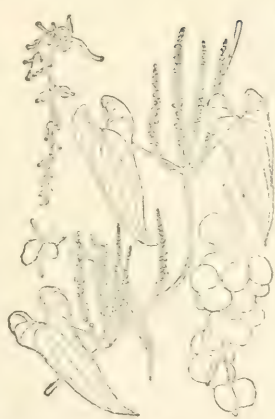
芽生ず、夏日葉腋に穗狀をなし、淡黃色の單性花を別株に生ず。果實は裂果にして三個の翅を有す。根は自然生の薯にして、山の芋と云ふは里芋に對する名なり。其味淡泊にして宜し。藥用とし又澱粉を取る。[illegible] 芋、零餘子、薯蕷

【例句】

山の芋　鰻にも成らずや去年の山の芋　支考（己か光）

ほり崩すいもが垣根や山のいも　葉二（新類題發句集）

薯掘　薯掘に酒を强ひけり山遊　露月（露月句集）

[illegible] やまのいも　一名じねんじやう Dioscorea japonica, Thunb.（やまのいも科）山野に自生する多年生の蔓草にして莖は細く他物に卷絡す、葉は長心臟形にして尖り、長柄を有して對生す、莖と共に紫色を帶びず、夏日葉腋に穗狀をなして白色花を生ず、別株に單性花を生じ、果實は裂果にして三個の翅を有す、葉腋にムカゴを生ず、從來、薯蕷をヤマノイモとするは非なり、是れは當にナガイモの漢名とせざるべからず。

零餘子（ぬかご）（三秋）　むかご　いもご

【古書校註】

【年浪草】三秋。陳藏器が曰、零餘子は薯蕷（ヤマノイモ）の子也。按ずるに諸說野山藥（ヤマノイモ）と萆薢と蔓葉の形狀混雜して分別しがたし。萆薢も亦零餘子ありて山藥子のごとし。故に諸說萆薢を以て山藥とす。山藥は其蔓紫色を帶び、其葉圓く尖あり。其花白色穗をなして下り垂る。萆薢は其葉圓くして尖りかつ稜あり、其蔓青色、淡黃の小花をひらく。隨つて莢を結ぶ、三稜あり。山藥もまた莢をむすぶ。故に見易からず。

【季題解説】零餘子は、一ながいも一やまのいも一等の葉腋に生ずる肉芽を云ふ。大さ四五分許にして大小一定せず。形の圓長も亦等しからず、外皮青褐色にして斑點あり、肉は白し。炒り又は茹て食用とし、或は零餘子飯に焚く。零餘子の異名甚多し。根も亦掘りて食用とす。【参照】自然薯（ジネンジヨ）薯蕷（トロ）

【例句】

ぬかご　菊の露落て拾へばぬかごかな　芭蕉（芭蕉庵小文庫）

長閒に歸り來て猫が巻に入る、明れば父の忌日に當りぬ

ぬかご燒て我庵ぶりに奉る　乙二（松窓乙二發句集）

重箱をあてゝゆさぶる零餘子哉　一茶（九番日記）

秋風の藪も畠も零餘子かな　露月（露月句集）

ほろ〳〵とぬかごこぼるゝ垣根哉　子規（仝集）

ぬかご飯去來の外に二三人　青々（妻木）

むかご

うれしさの箕にあまりたるむかご哉　蕪村（蕪村句集）

佛掌薯（つくねいも）（三秋）　つくいも　つくね　こぶしいも　いてふいも　ひめどころ

古書校註　【年浪草】〔甘藷(ツクネイモ)〕（一）三秋。和漢三才圖會に曰、佛掌薯(ツクネイモ)、葉薯蕷の葉に比すれば圓く頗る黄獨(ケイモ)の葉に似て略(チト)小さし、その根の狀佛手柑に似て肥大、摶(ツクネ)搜る者の如し、故に名く。

註（一）滑稽雜談には、「甘藷をつくね芋と訓ずる非也。なほ識者に決すべし」といへり。又佛諧歳時記に、薯蕷にツクネイモと訓したるも非なるべし。

季題解説　東部亞細亞の原產種にして、我國の各地に栽培す。莖は細長く延びて他物に纏繞し、葉は長心臟形にして基部兩側に擴大して稍三角形をなし、長さ葉柄によりて對生し、葉腋に肉芽を生ず。夏日白色小形の單性花を球穗狀に着生し、花後翅を有する蒴果を結ぶ。地下に扁平多肉の塊莖あり。其形生姜の如く、或は拳の如く、又銀杏形等になれる肥大なるものあり。佛掌薯は此の塊莖の形によりて名づけられたるものなり。參照　芋(イモ)

薯蕷（ながいも）（三秋）　長薯（ながいも）　駱駝薯（らくだいも）

古書校註　【年浪草】三秋。和漢三才圖會に曰、和名夜萬都伊毛、俗に云夜萬乃伊毛、今云長芋。その根の長さ尺ばかり、周二三寸、灰黄色肉白し、煮て食ふべし。○この者薯蕷といひ山藥といふ、初の唐の代宗諱を預といふ、よつてさけて薯藥と改む。又宋の英宗諱を署といふによつて山藥と改む。

季題解説　薯蕷は家山藥なり。これは園圃に栽培するを以て、山野自生の物を山藥と云ふに對しての名なり。初め唐の太宗諱を蕷といふ、因て遂て薯藥と改む、又宋の英宗の諱を薯といふに因て山藥と改むと云ふ。薯蕷の莖は細くして他物に纏絡し、葉は長心臟形にして先端尖り、花は單性にして雌雄異株につく、夏日穗狀をなして腋生花を生じ、淡黄綠色なり。根は即ち薯蕷にして長さ三四尺に達し、自然薯と同しく食用に供す。形狀肥大にして稍堅し。味は自然薯に及ばず。栽培品種多し。野生亦有り。

[illegible]　『菜草』に薯蕷を「やまのいも」と訓ず。されど其註に引用せる

「和漢三才圖會」に「今云長芋」と云へり。此說正しきが如し。「やまのいも」に漢名無しと云ふ。【[illegible]】芋は自然薯なり。（薯蕷）

間引菜（中）

拔菜　[illegible]菜　中拔菜　虛拔菜　貝割菜　摘み菜　小菜　二葉菜

【古書校註】

【年浪草】「小菜・摘菜・間引菜・中拔大根—八月。」○和漢三才圖會に曰、凡そ蕪菁・蘿服の類、大抵八月種を下し彼岸中に苗を生ず。その繁きを拔いて煮食ふ、摘菜・間引菜是也。やゝ長じて根の鼠尾の如き者を中拔大根と稱す。苗の後根肥大す云々。又曰蕪菁種を下し苗を出して地を出ること一二寸、漸く萌えて二葉なるを蔬とす、是を貝割菜と號す。

【季題解說】蕪・大根の類、二百十日までに種を下す。其苗を生じて繁きを拔き、市に賣る。これ間引菜なり。萌え出て二葉ばかりなれば貝割菜と云ふ。殼わりの義なり。仲秋の頃暫らくの季物なり。

【[illegible]】一葉草に間引菜の題下に、「摘菜」「小菜」と小註にせるも、摘菜と云ひ、小菜と云ふは、必しも秋の貝割菜の意に定めかぬるものあり。たゞし、一句の扱ひやうによりては、「摘菜」は間引菜、「小菜」は貝割菜に思はるゝならばよろし。【[illegible]】中拔大根

【例句】

貝割菜
白露も一粒づゝや貝割菜　諸九尼（諸九尼句集）
味噌汁にきのふもけふも貝割菜　別天樓（倦鳥）

間引菜
間引菜やそゝぎ上たる加茂の水　嘯山（葎亭句集）
貧しきは士の常にして間引汁　青々（倦鳥）

拔菜
鍋はありて拔菜は餘所の畠哉　支考（東西夜話）　養花軒

摘菜
つまみ菜に十日みじかき齡かな　角上（夕がほの歌）　省白啅

小菜
尼一人摘みに見えけり小菜畠　桃寒（田舍の日）

中拔大根（中）

疎拔大根　虛拔大根

【季題解說】初秋に種を下し、彼岸の中に苗を生ず。稍長じて之を拔くを中拔大根と云ふ。苗の簇生したるを間引くなり。根は未だ細し。【參照】間引菜

水葱（初）

鴨舌草　さきなぎ　みづなぎ　椈草

【季題解說】水田沼澤に生ずる雨久花科の一年生草本にして、概形水葵に似て小く、長柄を有する葉を叢生す。葉は卵形にして銳尖頭をなし、葉柄の本

は瞑質の鞘を成す。秋枝梢上に紫碧色の花を著生し、葉鞘其基部を包み且つ一の鞘苞を具ふ。古は水葱を水田に作り、其嫩根葱白の如くなるところを羹に用ゐしものと見えて、初春の季物に「水葱摘」といふが有り。又「萬葉集」卷十四、及卷十六に「こなぎ」の歌あれば左に抄出す。

可美都氣努伊可保乃奴麻爾宇惠古奈宜可久古非
牟等夜多禰物得米家武

醬酢爾蒜都伎合而鯛願吾爾勿所見水葱乃煮物

但し秋季に出せるは、花を賞するものと知るべし。〔参照〕春―水葱摘

例句

水葱
水葱の葉の乾と成けり朝の風　二波（田植讃）
色深し田尻の水葱かくてあれ　曉臺（曉臺句集）
母の里へ辿る稲田のこなぎかな　青々（倦鳥）

菌（中）

蕈　茸　たけ　くさびら　木茸　羊肚菜　兎口蕈　黄蕈　石茸
蕈　岩蕈　榎蕈　革蕈　豬蕈　椎蕈　濕地茸　標茅　茅蕈　月夜茸
土菌　天狗茸　滑煤蓮　鼯孤蕈　口蕈　帚蕈　ねずみて　ねずみ
あし　初茸　青初蕈　赤初蕈　針蕈　平蕈　菰蕈　紅蕈　蛇蕈　舞茸
蕈　麻比茸　椋茸　楓菌　栃茸　櫻茸　椎茸　香茸　蔵茸　菌囊
（人事）　菌汁（人事）　菌飯（人事）

古書校註

【年浪草】〔茸・菌〕八月（一）。〔松蕈〕和漢三才圖會に曰、凡そ松蕈は山城の北山の產最も佳也。赤松の陰處、秋雨濕に釀されて生ず、初め落葉を戴きて見難し、漸く長ずる者二三寸、頭圓く柄有り、鼓の槌の如し。其の大なる者は尺に近し。日を經て傘を開く、外の色黄白にして紫を帶ぶ。内白く細く深き刻みあり。その柄太き者柔かにして味ひ良し。八九月の交を盛りとなす。〔椎茸〕一本香蕈に作る。同書（二）に曰、椎木より生ず、大なる者三寸ばかり、大小叢生す。外褐色裏白く刻み有り。未だ傘を張らざる者を粒椎茸といふ。晒し乾せば黑色にして裏黄に、味甘く香氣ありて最も美なり。〔鼯孤蕈〕和三（三）に曰、俗に云、鼠茸。朽木及び老樹の根の上に生ず、九十月盛に出で、一根座をなし數十叢生す。纖圓く狀泡頭釘に似て長さ一二寸、莖細く柔軟なり。總の内外灰白色、凡て灰白色なる者を呼んで鼠色とす、此の物淺鼠色なり、故に鼠茸と稱す〔針蕈〕和三に曰、鼠茸に似て纖無し。長さ二寸ばかり灰白色、平地に叢生す。〔榎蕈〕同書に曰、榎の根上に叢生す。纖一二寸灰黑色、裏白く、細刻有り、微香有って味美也。

「椋蕈」同書に曰、椋の木の上に生ず、形状榎茸に異る事なし。「滑樸蕈」同書に曰、其赤色なるは榎樹より生ず。大なるは傘寸ばかり、小なるは三四分大小叢生す、淺褐色を帶ぶ、内に刻有り甚だ滑かなり。その莖樸黑色。奈女は滑也、須々は樸色也、木は葦の上略也。「平蕈」和三に曰、平茸は山林の濕地に生ず。其榎樹に多く之を出す。十月盛りなり、その形松茸に似て痩せ、傘薄く闊し、故に名く。大さ三四寸、また至つて大なる者あり。灰白色裏白く細刻有り、性柔脆。その柄多くは正中ならず、略偏りて生ず。大小叢生す。味淺く甘し。「下菌」和三に曰、土中より生ず。「羊肚菜」和三に曰、羊肚菜。今云兎口蕈か。八月中濕地に多く生ず。その繖の表褐色、端曲り捲く、裏は黄白色、細刻無く滑かにして孔有り、蜂の巣の如し。有毒。「紅蕈」同書に曰、陰處に生ず。その繖紅色、裏白く細刻有り。有毒。「栗茸」和三に曰、山原に生ず。高さ寸に過ぎず、繖四五分、圓く卷き正白色、剝きたる栗の内の如し。故に栗茸といふ。「鬼蕈・鬼筆・雁菌・竹蓐（三）」「石蕈」同書に曰、其木耳の如し、繖の柄無く黑色、裏灰白色。峯巓巖上に在りて甚だ得難し。「初蕈」一本紫茸に作る。○和三に曰、淺山松樹の陰處に生ず、狀松茸に似て小く、初生より傘を張る、内に細刻あり、内外赤黄色、立秋に初めて之を出す。柔にして味甘く、その出るや諸茸に先んず、故に初茸と稱す。「麥蕈」和三に曰、麥蕈、俗に云松露。沙地の松樹有る陰處に生ず。乃ち松の津液と秋濕と相感じて菌となる。繖の柄無く、狀零餘子に似て圓大、外褐色内白く柔かに脆し、淡く甘し、香有り。「濕地茸」和三に曰、原野濕地に生ず、故に濕地蕈と名く。狀松茸に似て小く、寸ばかりに過ぎず、繖の内灰白色、裏の柄白色にして柔脆破れ易し。八九月盛に出づ、又繖の外黄色の者有り、並に食ふべし。「革蕈」和三に曰、山麓落葉を戴いて生ず、狀松茸に似て繖の外黑く粒皺有り。曬し乾かせば正黑にして染革の如し。裏は黄赤にて毛絲の如き者あり。柄に鱗甲あり。味やゝ苦し。「猪蕈」同書に曰、革茸に似て黑く、繖脂潤にしてその裏に穴あり、蜂の巣の如し。有毒。「楓菌」同書に曰、之を食へば笑ひて止まず「舞蕈」和三に曰、濕處或は朽木に生ず。繖の柄なし。一株片々と叢生す、火炎茸の如くして上黑く元白く、味脆甘なり。「蛇蕈・天狗蕈・月夜茸」此等大毒有りて、人敢へて近寄らず。

註 （一）以下の諸茸すべて八月の部に出せり。（二・三）和漢三才圖會をさせり。（四）和漢三才圖會について見るべしとし、その引用を省略せり。

季題解説 きのこは木の子の義にて古名「木茸」「くさびら」と稱したり。山中の地上、又朽木などに生ずるものにして、其形普通は小さき傘の如きものなれども、形態種々に變化せるものあり。食ふべきもの多く、また食ふべからざる大毒のものも多し。左に主なる蕈類を列擧す。

▽しひたけ　蓋は徑一二寸、表面黑褐色、襴は白色にして莖に彎生す、椎・栗・楢等の幹に生じ、人工的に培養す。食用。

▽はらたけ　蓋は茶褐色を呈し、襴は初め白く、後赤褐或は黑褐色に變ず。馬糞藁等の堆肥に生じ、人工培養す。食用。

▽はつたけ　蓋は漏斗狀をなし表面に數個の同心環紋を表はす、稍々粘性あり。此の蕈は他蕈に先だちて發生する故此名を得たり、久傷つけば綠青色に變ずる故あゐたけの別名あり。食用。

▽しめぢ　蓋は比較的小にして莖太し。乾燥せる山地に叢生す。食用。

▽しりたけ・ならたけ・ひらたけ、共に樹幹朽木に叢生す。食用。

▽まひたけ　分岐せる多數の扁平なる蕈體相重り其の姿舞へるが如し。朽木に生ず。食用。

▽うすたけ　漏斗狀をなし、蓋の表面は赤褐色、襴は厚くして莖に向つて長く垂生す。山野に生じ食用となる。

▽くろかは　蓋大にして直徑二三寸より五六寸、表面黑色、裏面は襴無く管孔面をなす。食用。

▽はうきたけ　下部は一個の太き莖をなし上部は珊瑚の如く分岐す、紫・白・黃等種々あり。形鼠の手の如きより鼠蕈の名あり。食用

▽きくらげ　形人耳の如く、內面暗褐色、外面は淡褐色にして柔軟なる短毛を密生す。質水母に似たるより此の名あり。食用。

▽からたけ　蓋は漏斗狀をなし、上面鱗皮あり。裏面は針狀突起を密生す山地に生じ、食用とす。

▽毒蕈　有毒菌類を總稱していふ。これに屬するものに、つきよたけ・べにてんぐたけ・たまごてんぐたけ・きつねのたいまつ等あり。

實作注意　句に菌の名稱を出さず、只菌と云ひても秋の季物なり。〔參照〕松茸（マツタケ）　松露（シヨウロ）　岩蕈（イハタケ）　人事—茸狩（タケガリ）

例句

菌

冷泉の珠數に繋げる菌かな　其角（五元集拾遺）

東山鳳來寺の山の麓を過る時

落栗に思ひがけなき菌かな　桃隣（古太白堂句選）

君見よや拾遺の茸の露五本　蕪村（蕪村文集）

打杖に毒ある菌さくきかな　白雄（白雄句集）

伐株や米かし水を茸作り　同（同）

なつかしや楓菌吹く菌山　同（同）

後れ馳に魚提げ行かむ菌山　曉臺（曉臺句集）

茸山や殻鐵砲の一けぶり　召波（春泥發句集）

唐櫃の北山房る菌かな　同（同）

御子達よ赤い菌に化されな　一茶（七番日記）

美しや人とる菌とは見えぬ　同（同）

菌

鷄の搔き出したる菌かな　一茶（九番日記）

大菌馬糞も時を得たりけり　同（發句題叢）

人をとる菌果して美しき　同（同）

雜茸や蝸牛ぬれてすきとほり　白雲鄕（倦鳥）

白雲に人家三三の菌山　青々（同）

羊肚菜

馬の沓持越したる黄蕈（イグチ）かな　探志（白馬集）

榎茸

源兵衞の勢にかはるものや榎茸　沾德（沾德句集）

山路經る心地や菊に榎茸　嵐雪（三山雅集）

西行房

朽木となおぼしめされぞ榎茸　同（玄峰集）

濕地茸

標茸

林間に煮燒する日をたゞ賴め　同（のぼり鶴）

初茸

柏崎にて

御佛も茅蕈（シメヂ）賣る子や侍給ふ　乙二（をのゝえ草稿）

初茸やまだ日數經ぬ秋の露　芭蕉（芭蕉庵小文庫）

松蔭や初茸かけて貝拾ひ　支考（東西夜話）

初茸に紛るゝ庵や松の中　同（國の華）

初茸を挾みて燒や茶辨當　許六（正風彥根躰）

初茸や踏みつぶしたを繕ぎて見る　一茶（一茶句帖）

初茸や二人見つけてまあ〱と　同（同）

初茸の無疵に出るや袂から　同（同）

初茸やそつと並べる盆の上　蒼虬（蒼虬翁發句集）

平蕈

不淨說法したる僧にはあらで

市に出る菰蕈（ヒラタケ）賣は法師かな　几董（井華集）

紅茸

紅茸に指や拭ひて龍田姫　也有（蘿葉集）

紅茸に山口しるしき芝生かな　白雄（白雄句集）

紅茸や美しきものと見て過る　几董（井華集）

舞茸

塵比茸

茸（クサビラ）や御幸のあとの眉作り　其角（のぼり鶴）

柿茸

義仲寺

柿茸や木曾が精進ごゝしにて　鬼貫（鬼貫句選）

櫻茸

松の香は花と吹くなり櫻茸　其角（虛栗）

松茸（まつたけ）（中）

茸山（たけやま）（地理）　茸番（たけばん）（人事）　松茸市（まつたけいち）（人事）

季題解說　松茸は菌類の一種なれども、香氣、風味の清新他に優れてよろしく、最著名なるものにして、茸狩は主として此茸を採る。松茸は赤松の林中、殊に落葉土を掩ひ、爲めに濕潤なる腐植土に生ずるものにして、傘は通常徑四五寸、表面は灰褐乃至淡黑褐色にして纖維狀の鱗をなす。傘の未

だ開かざる間は、明瞭なる纖維質の膜にて被はるれども、開きたる後は周邊に總の如くに殘存す。菌褶は白く、莖は直立し、稍彎生の觀をなす。莖短かけれども、傘の徑と相等しきを常とす。肉は白質、胞子は球狀をなす。元來松茸は黑松の多き土地に生ずること少く、赤松多き土地に多く產す。菌類中の絕品なり。

【實作注意】松茸の出づる山を茸山と稱して秋は季の物とするも、常に云ふは季無し。【參照】菌(キノコ) 夏―早松茸(サマツタケ) 人事―茸狩(タケガリ)

【例句】

松茸

松茸に相生の名あり嵯峨吉野　宗因（梅翁宗因發句集）
松茸や一つ見付けし闇の星　素堂（素堂家集）
松茸や知らぬ木の葉のへばりつく　芭蕉（續猿蓑）
松茸やかぶれた程は松の形　同（俳諧曾我）
松茸に八日の宿は菊もなし　許六（射水川）
松茸やあつたら鼻に愛宕山　同（正風彥根躰）
治れる代に松茸の嫁ひ哉　同（同）
松茸や都に近き山の形　惟然（笈日記）
鮠ならば松茸ならば噺や〳〵　同（當座拂）
松茸や畚をおろして額競べ　爲有（有磯海）
松茸や人にとらるゝ鼻の先　去來（けふの昔）
松の葉に其火先づ焚け薄醬油　其角（焦尾琴）
松茸の山かきわくる匂ひかな　支考（つばさ）
松茸や笠に立つたる松の針　浪化（同）
松茸や峯は是非なし足の下　杉風（杉風句集）
雨早し松茸山の捨篝　曉臺（曉臺句集）
松茸の灰燒寒し小野の奧　同（同）
松茸や小法師共が朝はやり　同（同）

茸山

心憎き茸山越ゆる旅路哉　蕪村（新五子稿）

【參考】まつたけ Cortinellus edodes, P. Henn.（擔子菌類）赤松林に多く發生するも時として栂林にも生ず。蓋は初め半球狀にして次第に開き突圓形となり、終に扁平に展開す。裯は白色にして莖に接す、蓋は充分開かざる間は蓋膜に被はる、蓋の開きたる後は蓋膜不明瞭なる鍔となる。時季は普通秋季なれども、時として、夏季發生す、これを夏松茸と云ひ、俗に早松茸とも云ふ、別種に早松茸と云ふものあり。まつたけは味の美なると、芳香を有するを以て食菌の王たり。

松露(しようろ)（中）　麥蕈(むぎたけ)

【季題解說】松林樹下の沙中に多く生ず。形「むかご」に似て圓く大きく、大小種々あれども、通常直徑七八分、外は暗褐色にして肉は白し。肉の純白

にして軟かなるを上品とす。春も出づれども秋殊に多く生ず。採りて食用に供す。

例句

松露　袖の香や昨日遺ひし松の露　素堂（素堂家集）
茯苓は伏かくれ松露はあらはれぬ　蕪村（蕪村句集）
行つゝも松露採りけり杖の先　嘯山（葎亭句集）
見らるゝや松露かく子のぼんのくぼ　布席（芭蕉葉ぶね）

岩茸（いはたけ）（中）　石蕈（いはたけ）　岩蕈取る（いはたけとり）（人事）

季題解説　地衣類の一種。石茸科に屬す。高山の濕潤なる岩面等に密着して簇生す。全體圓形又は楕圓形にして葉狀をなし、扁平なり。裏面の一點に黑色の索狀部ありて岩石に固着す。葉狀體の上面は暗褐色又は帶綠色、裏面は黑色にして毛茸を密生す。山村の民採り乾かして市に鬻ぐ。食用に供せらる。**参照**　菌（キノコ）

敗荷（やれはす）（中）　破れ蓮（やれはす）

季題解説　蓮の葉の破るゝを云ふ。

實作注意　「破れ蓮」は秋の季物にして「枯蓮」は冬の季物なり。**参照**　蓮の實飛ぶ（ハスノミトブ）　夏　蓮の花（ハスノハナ）　蓮の浮葉（ハスノウキハ）　冬―枯蓮（カレハス）

例句

敗荷　さればこそ賢者は富まず敗荷　蕪村（蕪村遺稿）
敗荷や雨は靜かに降りつゞく　淡蕩（丁卯句鈔）

蓮の實飛ぶ（はすのみとぶ）（初）　蓮（はす）の實（み）

古書校註

【御傘】「蓮（ハチス）」（上略）蓮の實の飛ぶは秋也。（下略）

【年浪草】「蓮子飛ぶ（ハスノミトブ）」七月。蘇頌曰、その菂（一）秋に至つて黑くして水に沈むを石蓮子とす云々。これその菂秋に至りて飛んで水中に入る者也。

註（一）蓮の實のこと。房中に在つて點々として的の如きよりいふ。

季題解説　秋に至り、熟したる蓮の實の、其房中より脱け出づるを云ふ。

實作注意　只「蓮の實」と云ひても秋季なり。**参照**　敗荷（ヤレハス）　夏―蓮の花（ハスノハナ）

例句

蓮の實　蓮の實の脱け盡したる蓮の實か　越人（曠野）
尋室へ詣りて
蓮の實や脱けて腐して秋の水　路通（珠洲の海）
朝皃を弔ふ
蓮の實の飛びは飛びしがそもされば　嵐雪（玄峰集）

蓮の實　蓮の實飛ぶ　靜さや蓮の實の飛ぶあまたゝび　麥水（樗庵麥水發句集）
蓮の實とぶ十八賢の袂かな　青々（倦鳥）

龍舌草（たつのした）（初）　水葵（みづあふひ）　みづほこり

古書校註

【栞草】八月。［多識篇］龍舌草今按多豆乃之多　○［大和本草］水中に生ず、葉は車前（オホバコ）の如し。水中に花を生ず、花白く菱の如くにして大なり。處々にこれあり、本草水草の類に之を載す。西土（一）の方言にミツホコリといふ。水乾けば葉枯る。又水葵（ミヅアフヒ）といふ、葵の葉にも似たり。花は三出なり。八月に咲く。實は三角あり、細也。參照　夏―水葵（ミヅアフヒ）

註（一）西國地方の意。○花期は夏秋の候にして、太歲時記には「夏之部」に採用したれど、古書に「秋之部」に編入せるものあれば、此處に出す。

菱の實（ひしのみ）（中）　茹菱（ゆでびし）（人事）

古書校註

【年浪草】〔菱取る〕八月。時珍曰、芰實（キジツ）、一名薐（リヤウ）、或は沙角。その角稜峭たり、故に薐といふ。俗呼んで凌角となす。その實數種有り、或は三角四角或は兩角無用。（中略）その色嫩き者は青く老いたるは黑し。嫩き時剝き食ふ、甘美なり。老いたる時は蒸し食ふ。（下略）○大和本草に八月九月之を採る。

季題解說　菱の實は稜形にして硬く、左右二箇の突起を有す。之れ四箇の萼片の內、二箇の退化によりて生じたるものなり。種子を採り煠でゝ食すれば味美なり。之を茹菱（ユデビシ）と云ふ。參照　夏―菱の花（ヒシノハナ）

例句

菱の實

葛葉の里の雨に逢うて
菱盛るやいづれ田貝の蓋と見え　北枝（柞原）
菱取の岸ばかり漕ぐ小舟かな　夕雨（田毎の日）
野店
菱とりにひかるゝ菱の寄邊なき　古泉（倦鳥）

茹菱

鄙なれば賣る茹菱や水に雁　青々（妻木）

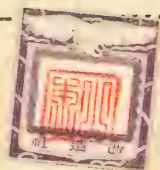
（雨角製本）

昭和八年九月九日印刷
昭和八年九月十三日發行

俳諧歳時記（秋の部）

編者　山本三生

發行者　山本三生
東京市芝區新橋七丁目十二番地

印刷者　村尾一雄
東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二

東京市芝區新橋七丁目十二番地

發兌　改造社
振替東京八四〇二番
電話芝(43)一一二一—一二四

（株式會社秀英舍印刷）